

熊本県文化財調査報告 第 320 集

# 新南部遺跡群

(10 次・11 次)

# 吉原遺跡

白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

2016. 3

熊本県教育委員会



# 新南部遺跡群

(10次・11次)

## 吉原遺跡

白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告



2016.3

熊本県教育委員会





空撮 1. 白川全景航空写真（金峰山を望む）



空撮 2. 白川全景航空写真（阿蘇山を望む）



空撮 3. 新南部遺跡群 10 次・11 次遠景



空撮 4. 吉原遺跡遠景



新南部遺跡群 10 次近景



新南部遺跡群 10 次出土遺物





新南部遺跡群 11 次近景



新南部遺跡群 11 次出土甕棺



吉原遺跡近景



吉原遺跡出土甕棺

## 序 文

熊本県教育委員会では、白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、熊本市東区新南部・吉原に所在する新南部遺跡群（10次・11次）吉原遺跡の発掘調査を実施しました。

今回報告する新南部遺跡群（10次・11次）吉原遺跡は、平成25年度に調査実施した報告書で、多くの出土品から縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代へと連綿とつづく白川河川流域に立地する遺跡解明の手がかりをつかむことができました。特に新南部遺跡群11次で検出された弥生時代の標石をもつ甕棺墓は、弥生時代の甕棺葬の様相を垣間見ることができるものです。

この報告書が、広く県民の皆様の埋蔵文化財保護に対する認識と理解を深め、さらには学術研究の進展にいささかでも寄与できれば、誠に喜びに堪えません。

なお、本調査を実施するにあたり、文化財保護の観点から多大な御協力をいただいた県土木部河川課、県央広域本部土木事務所土木部、熊本市埋蔵文化財調査室及び地元関係者の皆様、また御指導、御助言をいただきました諸先生方に深く感謝申し上げます。

平成28年3月25日

熊本県教育長 田崎 龍一



## 例 言

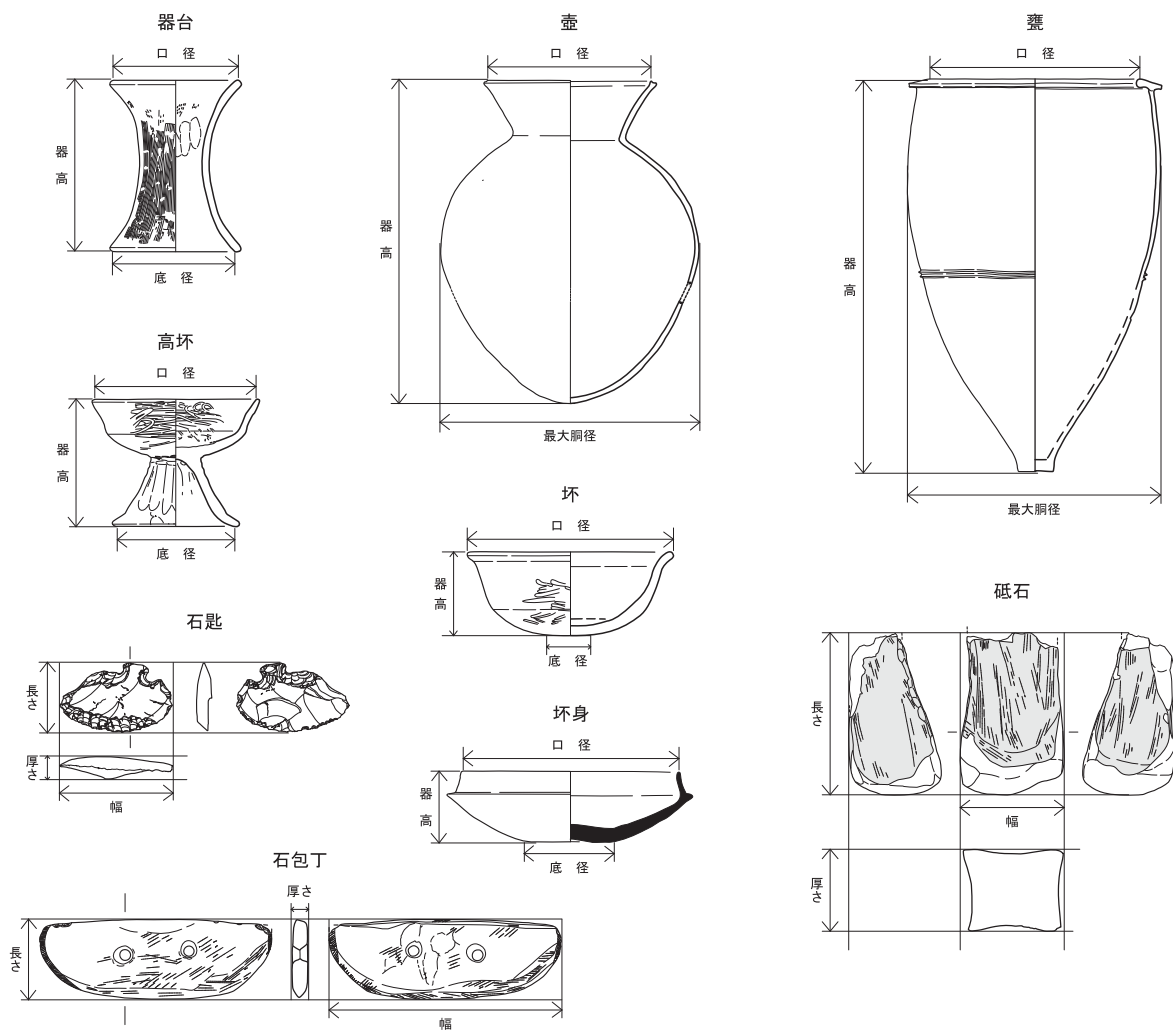
1. 本書は、白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴い実施した白川河川地域に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、熊本県土木部の依頼を受け、平成 25 年から 26 年にかけて熊本県教育庁文化課が実施した。
3. 新南部遺跡群は調査時、6 次・7 次としたが、精査したところ下図の様に変更した。
4. 各調査区の 4 級基準点測量及びメッシュ杭設置作業は、(株)有明測量開発社、(株)ワールドコンサルタント、(株)十八測量、(株)ダイチプランに委託した。
5. 遺構実測は、新南部 10 次(6 次)は福田匡朗、横田光智、菰田博隆、稲葉洋一、木下勇が担当し、一部は有明測量開発社に委託した。新南部 11 次(7 次)は宮本大、土野雄貴、川俣幸次が担当し、一部(株)九州文化財研究所に委託した。吉原遺跡は尾崎潔久、多賀晴司、大坂亜矢子が担当した。
6. 遺物実測は、多賀の指導のもと、井上秀子、隈田香織、松本裕子、府内博子、丸山勉、稲本奈津紀、嵐英隆、菰田、大坂、出家麻里、柴田拓実が担当した。11 次の甕棺の実測を九州文化財研究所に、吉原の甕棺と、10 次の一部土器と石器、吉原の石器を有明測量開発社に委託した。
7. 遺構及び遺物の製図は、土野、師富成香、作田祐希、府内、平岡賢、橋口冬美、佐藤淳子、佐々木舞、島川千秋、白木はる乃が担当した。
8. 遺構等の現場撮影は、福田、菰田、横田、稲葉、木下、土野、川俣、多賀、大坂が担当した。遺跡の空中写真撮影は、九州航空株式会社熊本営業所に委託した。
9. 遺物の撮影は、村田百合子、松本智子、蓮池千恵、佐藤典子、松本裕子が担当した。
10. 金属器の透過 X 線撮影には福岡市埋蔵文化財センターの協力を得た。
11. 金属器の保存処理は大塚トシ子、小野美香、花田美佳が担当した。
12. 11 次の自然科学分析は、熊本工学会とパリノ・サーヴェイに、吉原の自然科学分析は、パリノ・サーヴェイと人類学研究機構に委託した。
13. 本文の執筆は、第 I 章は古城史雄が、第 II 章・第 III 章・第 VIII 章は廣田静学、第 IV 章は宮本大(弥生)、土野(弥生以降)、第 V 章は尾崎潔久と師富が担当した。
14. 第 VII 章は常松幹雄氏(福岡市埋蔵文化財調査課)に執筆いただいた。
15. 本書の編集は、廣田、宮本、尾崎を中心に行い佐藤、師富、橋口、松本、平岡、府内、井上が補助した。
16. 本書に掲載した資料は、熊本県文化財資料室で保管している。

新 南 部 遺 跡 群 の 調 査 履 歴

遺跡名	事業名	調査年度	次
新南部遺跡群(西谷遺跡)	一般国道3号北バイパス建設事業	昭和59年2月～4月	1次
		昭和60年12月～3月	2次
新南部遺跡群(上西原遺跡)	一般国道3号北バイパス建設事業	昭和60年5月～9月	3次
新南部遺跡群	白川河川改修事業	平成16年6月～12月	4次
		平成22年11月～12月	5次
新南部遺跡群	一般県道瀬田熊本線道路改良事業	平成11年7月～平成12年3月	6次
		平成13年1月～3月	7次
		平成13年6月～7月	8次
		平成16年6月～7月	9次
新南部遺跡群(6次)	白川河川激甚災害対策特別緊急事業	平成25年7月～平成26年3月	10次
新南部遺跡群(7次)	白川河川激甚災害対策特別緊急事業	平成25年7月～平成26年3月	11次

## 凡 例

1. 遺跡の座標については、世界測地系を使用している。方位については、座標軸を基準とした座標北を指している。
2. 現地での遺構の実測は、原則 10 分の 1 又は、20 分の 1 の縮尺で行った。  
掲載した実測図の主な縮尺は以下の通りで、その他は個別に表記している。  
新南部遺跡群 10 次 竪穴建物、土坑 1/60  
新南部遺跡群 11 次 甕棺墓・集石 1/20、木棺墓・標石をもつ甕棺墓 1/40、溝状遺構 1/100 等  
吉原遺跡 甕棺墓 1/20、竪穴建物 1/60、土坑 1/40、溝 1/100・120 等
3. 遺構図中の硬化面・焼土・粘土等はアミかけや斜線で凡例を表記している。
4. 遺物の実測は原寸で行い、掲載した実測図及び拓本の縮尺は挿図中に示している。
5. 石器類の磨痕や使用痕はアミかけで、ガジリは黒塗りで表現している。
6. 遺物写真図版中の(写)は、写真図版のみの掲載である。
7. 色調については遺構・遺物ともに『新版 標準土色帖』(1967年 農林水産省農林水産技術会議事務局監修)に従った。



出土遺物計測部位模式図

# 本文目次

巻頭カラー  
序文  
例言・凡例  
目次

第Ⅰ章	調査の契機と経過	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査組織	3
第3節	調査の経過	5
第Ⅱ章	遺跡の地理的・歴史的環境	
第1節	地理的環境	10
第2節	歴史的環境	10
第Ⅲ章	新南部遺跡群10次の調査	
第1節	調査の概要	19
第2節	基本層序	19
第3節	調査の成果	23
第4節	まとめ	120
	観察表	124
第Ⅳ章	新南部遺跡群11次の調査	
第1節	調査の概要	139
第2節	層序	139
第3節	調査の成果	143
第4節	まとめ	190
	観察表	197
第Ⅴ章	吉原遺跡の調査	
第1節	調査の概要	203
第2節	層序	203
第3節	1区の調査成果	207
第4節	2区の調査成果	247
第5節	3区の調査成果	298
第6節	まとめ	308
	観察表	311
第Ⅵ章	自然科学分析	
第1節	新南部遺跡群(11次)に係る地中レーダー探査	(熊本工学会) 331
第2節	新南部遺跡群11次及び吉原遺跡の胎土分析	(パリノ・サーヴェイ) 371
第3節	熊本市吉原遺跡1区・3区出土の弥生人骨	(松下真実・松下孝幸) 387
第Ⅶ章	各論 北部九州からみた新南部遺跡群(11次)の墓制	常松幹雄 399
第Ⅷ章	総括	411
写真図版	(新南部遺跡群10次・11次・吉原遺跡)	
附論	熊本県における弥生時代埋葬遺構集成 白川流域編Ⅰ(第1. 1稿)	土野雄貴
報告書抄録		

## 挿 図 目 次

第 1 図 白川河川激甚災害工事計画図……………7	第 28 図 22・23・25・26 号竪穴建物 (S92・101・94・
第 2 図 新南部遺跡群 10 次調査位置図……………8	93) 実測図……………49
第 3 図 新南部遺跡群 11 次調査位置図……………8	第 29 図 25・27 号竪穴建物 (S94・372) 実測図……………49
第 4 図 吉原遺跡調査位置図……………9	第 30 図 22・23・25・26 号竪穴建物出土遺物実測図……………51
第 5 図 熊本市周辺の地質図……………11	第 31 図 26 号竪穴建物出土遺物実測図……………52
第 6 図 白川関連遺跡周辺遺跡分布図……………13	第 32 図 29～32 号竪穴建物 (S303・325・304・305) 実測図……………53
<b>新南部遺跡群 10 次</b>	
第 1 図 調査区基本土層模式図及び南壁土層断面図……………19	第 33 図 29 号竪穴建物出土遺物実測図……………54
第 2 図 新南部遺跡群 10 次遺構配置図	第 34 図 33 号竪穴建物 (S374) 実測図……………55
及びグリッド図 (1/800)……………20	第 35 図 34・35 号竪穴建物 (S298・297) 実測図……………56
第 3 図 新南部遺跡群 10 次遺構配置図 北東部……………21	第 36 図 34・35 号竪穴建物出土遺物実測図……………57
第 4 図 新南部遺跡群 10 次遺構配置図 南西部……………22	第 37 図 35 号竪穴建物出土遺物実測図……………58
第 5 図 1 号竪穴建物 (S351) 実測図……………24	第 38 図 36～38 号竪穴建物 (S105・104・346) 実測図……………59
第 6 図 1 号竪穴建物出土遺物実測図……………25	第 39 図 36～38 号竪穴建物出土遺物実測図……………60
第 7 図 2・3 号竪穴建物 (S319・320) 実測図……………26	第 40 図 38 号竪穴建物出土遺物実測図……………61
第 8 図 2・3 号竪穴建物出土遺物実測図……………27	第 41 図 39～41 号竪穴建物 (306・307・347) 実測図……………63
第 9 図 4 号竪穴建物 (S379) 及び出土遺物実測図……………28	第 42 図 39・41 号竪穴建物出土遺物実測図……………64
第 10 図 5 号竪穴建物 (S312) 実測図……………29	第 43 図 42～44 号竪穴建物 (S102・228・316) 実測図……………65
第 11 図 5 号竪穴建物出土遺物実測図 (1)……………30	第 44 図 42・44 号竪穴建物出土遺物実測図……………66
第 12 図 5 号竪穴建物出土遺物実測図 (2)……………31	第 45 図 45・46 号竪穴建物 (S70・146)
第 13 図 6 号竪穴建物 (S340) 及び出土遺物実測図……………32	及び出土遺物実測図……………67
第 14 図 7 号竪穴建物 (S299) 及び出土遺物実測図……………33	第 46 図 47～49 号竪穴建物 (S68・315・341) 実測図……………68
第 15 図 8～11 号竪穴建物 (S97～100) 実測図……………35	第 47 図 47 号竪穴建物出土遺物実測図……………69
第 16 図 8～11 号竪穴建物及び出土遺物実測図……………36	第 48 図 48・49 号竪穴建物出土遺物実測図……………70
第 17 図 12・13 号竪穴建物 (S322・350)	第 49 図 49 号竪穴建物出土遺物実測図……………71
及び出土遺物実測図……………38	第 50 図 50～52 号竪穴建物 (S66・67・65) 実測図……………73
第 18 図 14・15 号竪穴建物 (S323・324)	第 51 図 53・54 号竪穴建物 (S157・203) 実測図……………74
及び出土遺物実測図……………39	第 52 図 55～57 号竪穴建物 (S64・63・172) 実測図……………76
第 19 図 16・17 号竪穴建物 (S376・377) 実測図……………41	第 53 図 55・56 号竪穴建物出土遺物実測図……………77
第 20 図 16 号竪穴建物出土遺物実測図……………42	第 54 図 57 号竪穴建物 (S172) 実測図……………78
第 21 図 16・17 号竪穴建物出土遺物実測図……………43	第 55 図 57 号竪穴建物出土遺物実測図……………79
第 22 図 18 号竪穴建物 (S375) 実測図……………44	第 56 図 58・59 号竪穴建物 (S62・61) 及び出土遺物実測図……………80
第 23 図 19 号竪穴建物 (S318) 実測図……………44	第 57 図 60～66 号竪穴建物
第 24 図 19 号竪穴建物出土遺物実測図……………45	(S10・57・158・58・183・227・60) 配置図……………82
第 25 図 20 号竪穴建物 (S321) 及び出土遺物実測図……………46	第 58 図 60・61 号竪穴建物 (S10・57) 実測図……………83
第 26 図 21 号竪穴建物 (S355) 実測図……………47	第 59 図 60・61 号竪穴建物 (S10・57) 及び出土遺物実測図……………84
第 27 図 22～28 号竪穴建物 (S92・101・95・94・93・	第 60 図 62・64～66 号竪穴建物 (S158・183・227・60) 実測図……………86
372・381) 実測図……………48	第 61 図 63 号竪穴建物 (S58) 実測図……………87
	第 62 図 62・63 号竪穴建物出土遺物実測図……………88
	第 63 図 63・64 号竪穴建物出土遺物実測図……………89
	第 64 図 65・66 号竪穴建物出土遺物実測図……………90



第 65 図	67・68 号竪穴建物 (S01・02) 及び出土遺物実測図	92	第 12 図	2 号甕棺墓 (S175) 下甕及び出土遺物実測図	151
第 66 図	69・70 号竪穴建物 (S54・55) 及び出土遺物実測図	93	第 13 図	3 号・4 号甕棺墓 (S185・108) 実測図	152
第 67 図	71 号竪穴建物 (S85) 実測図	94	第 14 図	3 号・4 号甕棺墓 (S185・108) 断面図	153
第 68 図	72・73 号竪穴建物 (S50・182) 及び出土遺物実測図	95	第 15 図	3 号甕棺墓 (S185) 実測図及び断面図	154
第 69 図	74 号竪穴建物 (S309) 及び出土遺物実測図	96	第 16 図	3 号甕棺墓 (S185) 実測図	155
第 70 図	75～77 号竪穴建物 (S04・87・88) 実測図	98	第 17 図	3 号甕棺墓 (S185) 甕棺実測図	156
第 71 図	75 号竪穴建物 (S04 カマド) 実測図	99	第 18 図	4 号甕棺墓 (S108) 実測図及び断面図	157
第 72 図	75～77 号竪穴建物出土遺物実測図	100	第 19 図	4 号甕棺墓 (S108) 甕棺及び出土遺物実測図	158
第 73 図	78 号竪穴建物 (S03) 実測図	101	第 20 図	5 号甕棺墓 (S174) 実測図及び断面図	159
第 74 図	78 号竪穴建物出土遺物実測図	102	第 21 図	5 号甕棺墓 (S174) 甕棺実測図	160
第 75 図	79 号竪穴建物 (S90) 及び出土遺物実測図	103	第 22 図	1 号標石をもつ甕棺墓 (S104) 実測図 及び出土遺物実測図	162
第 76 図	80 号竪穴建物 (S156) 及び出土遺物実測図	104	第 23 図	2 号標石をもつ甕棺墓 (S203) 実測図 及び出土遺物実測図	163
第 77 図	81 号竪穴建物 (S47) 及び出土遺物実測図	105	第 24 図	1 号集石 (S110) 実測図	164
第 78 図	1～7 号土坑 (S06・22・40・42・72・80・109) 実測図	107	第 25 図	2 号集石 (S107) 実測図 及び出土遺物実測図	165
第 79 図	8～12 号土坑 (S127・175・200・43・56) 及び出土遺物実測図	108	第 26 図	3 号集石 (S106) 実測図	166
第 80 図	その他の出土遺物実測図 (1)	111	第 27 図	1 号木棺墓 (S105) 実測図及び出土遺物実測図	168
第 81 図	その他の出土遺物実測図 (2)	112	第 28 図	2 号・3 号木棺墓 (S180・177) 実測図 及び土層断面図	169
第 82 図	その他の出土遺物実測図 (3)	113	第 29 図	2 号・3 号木棺墓出土遺物実測図	170
第 83 図	その他の出土遺物実測図 (4)	114	第 30 図	1 号道路状遺構 (S151) 平面図及び断面図	171
第 84 図	その他の出土遺物実測図 (5)	115	第 31 図	1 号溝状遺構 (S183)・2 号道路状遺構 (S1101) 平面図及び断面図	172
第 85 図	その他の出土遺物実測図 (6)	116	第 32 図	1 号溝状遺構出土遺物実測図	173
第 86 図	その他の出土遺物実測図 (7)	117	第 33 図	不明遺構 (S1100) 実測図及び断面図	174
第 87 図	その他の出土遺物実測図 (8)	118	第 34 図	グリッド出土遺物実測図 (1)	175
第 88 図	その他の出土遺物実測図 (9)	119	第 35 図	グリッド出土遺物実測図 (2)	176
第 89 図	縄文～古墳時代の遺構配置図	122	第 36 図	グリッド出土遺物実測図 (3)	177
			第 37 図	弥生時代以外の遺構配置図 (1/200)	178
			第 38 図	1 号掘立柱建物 (S181) 実測図	180
			第 39 図	2 号掘立柱建物 (S182) 実測図	181
			第 40 図	1・2 号掘立柱建物出土遺物実測図	182
			第 41 図	1 号柱穴群 (S184) 実測図	182
			第 42 図	1 号土塁 (S101・201) 平面図	183
			第 43 図	1 号土塁 (S101・201)・4 号道路状遺構 (S204) 断面図	184
			第 44 図	1 号土坑 (S176) 実測図及び出土遺物実測図	185
			第 45 図	2 号土坑 (S178)・2 号溝状遺構 (S179) 実測図 及び出土遺物実測図	186
			第 46 図	3 号道路状遺構 (S102) 平面図・断面図 及び出土遺物実測図	188
<b>新南部遺跡群 11 次</b>					
第 1 図	調査区基本土層及び主要遺構概念図	139			
第 2 図	新南部遺跡群 11 次遺構配置図 及びグリッド図 (1/200)	140			
第 3 図	調査区北壁土層断面図	141			
第 4 図	1 区北壁及び南壁土層断面図	142			
第 5 図	弥生時代遺構配置図 (1/200)	144			
第 6 図	1 号甕棺墓 (S109) 実測図及び出土遺物実測図	145			
第 7 図	1 号甕棺墓 (S109) 断面図	146			
第 8 図	1 号甕棺墓 (S109) 甕棺実測図	147			
第 9 図	2 号甕棺墓 (S175) 実測図	148			
第 10 図	2 号甕棺墓 (S175) 断面図	149			
第 11 図	2 号甕棺墓 (S175) 上甕実測図	150			

第 47 図	グリッド出土遺物実測図	189
第 48 図	甕棺墓埋納深度比較図	194
第 49 図	調査区遺物出土状況図	195

## 吉原遺跡

第 1 図	吉原遺跡遺構配置図 (1/900)	204
第 2 図	吉原遺跡調査区基本土層	205
第 3 図	吉原遺跡 1 区遺構配置図 (1/450)	206
第 4 図	吉原 1 区東壁土層断面図	207
第 5 図	吉原 1 区西壁土層断面図	208
第 6 図	1・2 号甕棺墓 (S15・16) 及び 1・2 号土壙墓 (S4・6) 配置図	210
第 7 図	1 号甕棺墓 (S15) 実測図	210
第 8 図	1 号甕棺墓 (S15) 甕棺実測図	211
第 9 図	2 号甕棺墓 (S16) 実測図	212
第 10 図	2 号甕棺 (S16) 実測図	213
第 11 図	1・2 号土壙墓 (S4・6) 及び 2 号土壙墓出土遺物実測図	214
第 12 図	1 号竪穴建物 (S14) 及び出土遺物実測図 (1)	216
第 13 図	1 号竪穴建物出土遺物実測図 (2)	217
第 14 図	2・3 号竪穴建物 (S22・23) 実測図	218
第 15 図	2・3 号竪穴建物出土遺物実測図	219
第 16 図	4・5 号竪穴建物 (S20・24) 及び出土遺物実測図	220
第 17 図	6 号竪穴建物 (S25) 及び出土遺物実測図	221
第 18 図	7 号竪穴建物 (S28) 及び出土遺物実測図	222
第 19 図	8・9・10 号竪穴建物 (S8・9・10) 実測図	223
第 20 図	8 号竪穴建物出土遺物実測図	225
第 21 図	9 号・10 号竪穴建物出土遺物実測図	226
第 22 図	11 号竪穴建物 (S13) 実測図	227
第 23 図	11 号竪穴建物出土遺物実測図 (1)	228
第 24 図	11 号竪穴建物出土遺物実測図 (2)	229
第 25 図	11 号竪穴建物出土遺物実測図 (3)	230
第 26 図	12・13 号竪穴建物 (S31・7) 及び 12 号竪穴建物出土遺物実測図	232
第 27 図	14 号竪穴建物 (S12)・不明遺構 (S17) 及び出土遺物実測図	233
第 28 図	15・16 号竪穴建物 (S34・27) 実測図	234
第 29 図	1 号柵列 (S33) 実測図	235
第 30 図	2 号柵列 (S21) 実測図	236
第 31 図	1・2 号土坑 (S18・26) 及び出土遺物実測図	238
第 32 図	3・4 号土坑 (S19・11) 及び 3 号土坑出土遺物実測図	239

第 33 図	1 号溝 (S1)・5 号土坑 (S29) 及び 5 号土坑出土遺物実測図	241
第 34 図	1 区グリッド出土遺物実測図 (1)	242
第 35 図	1 区グリッド出土遺物実測図 (2)	243
第 36 図	1 区グリッド出土遺物実測図 (3)	244
第 37 図	1 区グリッド出土遺物実測図 (4)	245
第 38 図	1 区グリッド出土遺物実測図 (5)	246
第 39 図	吉原遺跡 2 区遺構配置図 (1/300)	248
第 40 図	吉原 2 区東壁土層断面図	249
第 41 図	3 号甕棺墓 (S13) 及び出土遺物実測図	250
第 42 図	3 号甕棺墓 (S13) 甕棺実測図	251
第 43 図	17 号竪穴建物 (S2) 及び出土遺物実測図	252
第 44 図	18 号竪穴建物 (S1) 及び出土遺物実測図	253
第 45 図	19・20 号竪穴建物 (S28・29) 及び 19 号出土遺物実測図	255
第 46 図	20 号竪穴建物出土遺物実測図	256
第 47 図	21・22・23・24 号竪穴建物 (S5・6・7・18) 及び 21 号出土遺物実測図	257
第 48 図	22・23・24 号竪穴建物出土遺物実測図	258
第 49 図	24 号竪穴建物出土遺物実測図	259
第 50 図	25・26・27・28 号竪穴建物 (S10・14・15・16) 実測図	260
第 51 図	25・26 号竪穴建物出土遺物実測図	261
第 52 図	26・27・28 号竪穴建物出土遺物実測図	262
第 53 図	29・30・31・32・33 号竪穴建物 (S23・25・34・35・27) 実測図	264
第 54 図	29 号竪穴建物出土遺物実測図	265
第 55 図	29・30 号竪穴建物出土遺物実測図	266
第 56 図	31・32・33 号竪穴建物出土遺物実測図	267
第 57 図	33 号竪穴建物出土遺物実測図	268
第 58 図	34・35・36・37 号竪穴建物 (S22・24・26・45) 実測図	269
第 59 図	34・35 号竪穴建物出土遺物実測図	270
第 60 図	36・37 号竪穴建物出土遺物実測図	271
第 61 図	38・39 号竪穴建物 (S9・12) 及び 38 号出土遺物実測図	273
第 62 図	39 号竪穴建物出土遺物実測図	274
第 63 図	40 号竪穴建物 (S42) 及び出土遺物実測図 (1)	275
第 64 図	40 号竪穴建物出土遺物実測図 (2)	276
第 65 図	41 号竪穴建物 (S20) 実測図	277
第 66 図	41 号竪穴建物出土遺物実測図	278
第 67 図	42・43 号竪穴建物 (S31・32) 及び出土遺物実測図	279

第 68 図	42 号竪穴建物出土遺物実測図 (1)	280	第 83 図	2 区グリッド出土遺物実測図 (6)	295
第 69 図	42 号竪穴建物出土遺物実測図 (2)	281	第 84 図	2 区グリッド出土遺物実測図 (7)	296
第 70 図	44 号竪穴建物 (S21) 及び出土遺物実測図	281	第 85 図	2 区グリッド出土遺物実測図 (8)	297
第 71 図	6 号土坑 (S8) 及び出土遺物実測図 (1)	282	第 86 図	吉原遺跡 3 区遺構配置図 (1/400)	298
第 72 図	6 号土坑出土遺物実測図 (2)	283	第 87 図	吉原 3 区南壁土層断面図	299
第 73 図	7・8・9・10 号土坑 (S36・39・17・19) 実測図	285	第 88 図	4 号甕棺墓 (S6) 実測図	300
第 74 図	11・12・13 号土坑 (S37・38・41) 実測図	286	第 89 図	4 号甕棺墓 (S6) 甕棺実測図	301
第 75 図	7・8・9・10・13 号土坑出土遺物実測図	287	第 90 図	45 号竪穴建物 (S2) 及び出土遺物実測図	302
第 76 図	14 号土坑 (S30) 実測図	288	第 91 図	46 号竪穴建物 (S7) 実測図	303
第 77 図	2 号溝 (S4) 及び出土遺物実測図	289	第 92 図	15 号土坑 (S5) 実測図	303
第 78 図	2 区グリッド出土遺物実測図 (1)	290	第 93 図	16・17・18 号土坑 (S1・4・8) 及び出土遺物実測図	305
第 79 図	2 区グリッド出土遺物実測図 (2)	291	第 94 図	3 号溝跡 (S3) 実測図	306
第 80 図	2 区グリッド出土遺物実測図 (3)	292	第 95 図	3 区グリッド出土遺物実測図	307
第 81 図	2 区グリッド出土遺物実測図 (4)	293			
第 82 図	2 区グリッド出土遺物実測図 (5)	294			

## 表 目 次

表 1	白川関連遺跡周辺遺跡一覧 (1)	14	<b>吉原遺跡</b>		
表 2	白川関連遺跡周辺遺跡一覧 (2)	15	表 1	吉原 1 区 1 号柵列計測表	235
表 3	白川関連遺跡周辺遺跡一覧 (3)	16	表 2	吉原 1 区 2 号柵列計測表	236
表 4	白川関連遺跡周辺遺跡一覧 (4)	17	表 3	甕棺墓及び甕棺一覧表	310
			表 4	吉原遺跡 1 区出土土器観察表 (1)	311
			～		
			表 8	吉原遺跡 1 区出土土器観察表 (5)	315
<b>新南部遺跡群 10 次</b>			表 9	吉原遺跡 1 区出土土器観察表 (1)	316
表 1	新南部遺跡群 10 次出土土器観察表 (1)	124	表 10	吉原遺跡 1 区出土土器観察表 (2)	317
～			表 11	吉原遺跡 1 区出土鉄器観察表	317
表 10	新南部遺跡群 10 次出土土器観察表 (10)	133	表 12	吉原遺跡 2 区出土土器観察表 (1)	318
表 11	新南部遺跡群 10 次出土土製品観察表	133	～		
表 12	新南部遺跡群 10 次出土土器観察表 (1)	134	表 20	吉原遺跡 2 区出土土器観察表 (9)	326
～			表 21	吉原遺跡 2 区出土土器観察表 (10)	327
表 15	新南部遺跡群 10 次出土土器観察表 (4)	137	表 22	吉原遺跡 2 区出土土器観察表 (1)	327
			表 23	吉原遺跡 2 区出土土器観察表 (2)	328
<b>新南部遺跡群 11 次</b>			表 24	吉原遺跡 2 区出土土器観察表 (3)	329
表 1	甕棺墓及び甕棺一覧表	194	表 25	吉原遺跡 2 区出土土製品観察表	329
表 2	新南部遺跡群 11 次出土土器観察表 (1)	197	表 26	吉原遺跡 2 区出土鉄器観察表	329
～			表 27	吉原遺跡 3 区出土土器観察表	330
表 5	新南部遺跡群 11 次出土土器観察表 (4)	200	表 28	吉原遺跡 3 区出土土器観察表	330
表 6	新南部遺跡群 11 次出土土製品観察表	201			
表 7	新南部遺跡群 11 次出土土器観察表	201			

# 図 版 目 次

空撮 1	白川全景航空写真(金峰山を望む)	巻頭	新南部遺跡群 10 次近景
空撮 2	白川全景航空写真(阿蘇山を望む)		新南部遺跡群 10 次出土遺物
空撮 3	新南部遺跡群 10 次・11 次遠景	巻頭	新南部遺跡群 11 次近景
空撮 4	吉原遺跡遠景		新南部遺跡群 11 次出土甕棺
		巻頭	吉原遺跡近景
			吉原遺跡出土甕棺

## 新南部遺跡群 10 次

図版 1	調査区遠景 (北から)	22・24 号竪穴建物(S92・95)完掘状況 (北から)
	1 号竪穴建物(S351)完掘状況 (西から)	図版 5
	2 号竪穴建物(S319)完掘状況 (東から)	22・25・26 号竪穴建物(S92・94・93)
	3 号竪穴建物(S320)遺物出土状況 (南東から)	土層断面 (西から)
	3 号竪穴建物(S320)完掘状況 (北東から)	26 号竪穴建物(S93)完掘状況 (北から)
	4 号竪穴建物(S379)完掘状況 (北から)	27 号竪穴建物(S372)完掘状況 (南から)
	5 号竪穴建物(S312)土層断面 (東から)	28 号竪穴建物(S381)土層断面 (南から)
	6 号竪穴建物(S340)完掘状況 (北から)	29 号竪穴建物(S303)完掘状況 (南から)
図版 2	7 号竪穴建物(S299)完掘状況 (北から)	30 号竪穴建物(S325)土層断面 (西から)
	8 号竪穴建物(S97)土層断面 (東から)	31 号竪穴建物(S304)完掘状況 (西から)
	8 号竪穴建物(S97)完掘状況 (西から)	32 号竪穴建物(S305)土層断面 (北から)
	9 号竪穴建物(S98)土層断面 (東から)	図版 6
	11 号竪穴建物(S100)土層断面 (南から)	32 号竪穴建物(S305)完掘状況 (北から)
	9・10・11 号竪穴建物(S98・99・100)	33 号竪穴建物(S374)完掘状況 (南から)
	完掘状況 (北西から)	34 号竪穴建物(S298)土層断面 (北から)
	12 号竪穴建物(S322)土層断面 (東から)	34 号竪穴建物(S298)完掘状況 (北から)
	13 号竪穴建物(S350)土層断面 (南から)	35 号竪穴建物(S297)土層断面 (東から)
図版 3	12・13 号竪穴建物(S322・350)完掘状況 (北西から)	35 号竪穴建物(S297)完掘状況 (北から)
	14 号竪穴建物(S323)土層断面 (北東から)	36 号竪穴建物(S105)土層断面 (南から)
	15 号竪穴建物(S324)完掘状況 (東から)	36 号竪穴建物(S105)完掘状況 (北から)
	16 号竪穴建物(S376)遺物出土状況 (東から)	図版 7
	16 号竪穴建物(S376)完掘状況 (南東から)	37 号竪穴建物(S104)土層断面 (西から)
	17 号竪穴建物(S377)完掘状況 (西から)	37 号竪穴建物(S104)完掘状況 (南西から)
	18 号竪穴建物(S375)完掘状況 (北から)	38 号竪穴建物(S346)遺物出土状況 (西から)
	19 号竪穴建物(S318)土層断面 (東から)	38 号竪穴建物(S346)完掘状況 (西から)
図版 4	19 号竪穴建物(S318)完掘状況 (北から)	39 号竪穴建物(S306)土層断面 (西から)
	20 号竪穴建物(S321)遺物出土状況 (西から)	39 号竪穴建物(S306)完掘状況 (西から)
	20 号竪穴建物(S321)完掘状況 (南から)	40 号竪穴建物(S307)土層断面 (南東から)
	21 号竪穴建物(S355)完掘状況 (北から)	40 号竪穴建物(S307)完掘状況 (東から)
	22 号竪穴建物(S92)土層断面 (南から)	図版 8
	23 号竪穴建物(S101)完掘状況 (西から)	41 号竪穴建物(S347)土層断面 (北から)
	24 号竪穴建物(S95)土層断面 (西から)	41 号竪穴建物(S347)完掘状況 (北東から)
		42 号竪穴建物(S102)土層断面 (南から)
		42 号竪穴建物(S102)完掘状況 (東から)
		43 号竪穴建物(S228)土層断面 (西から)
		43 号竪穴建物(S228)完掘状況 (西から)

	44 号竪穴建物(S316)土層断面 (北東から)		72 号竪穴建物(S50)検出状況 (西から)
	44 号竪穴建物(S316)完掘状況 (東から)		72 号竪穴建物(S50)完掘状況 (南西から)
図版 9	45 号竪穴建物(S70)土層断面 (南から)		73 号竪穴建物(S182)完掘状況 (南東から)
	45 号竪穴建物(S70)完掘状況 (東から)		74 号竪穴建物(S309)完掘状況 (北から)
	46 号竪穴建物(S146)土層断面 (南から)		75 号竪穴建物(S04)カマド内遺物出土状況 (東から)
	46 号竪穴建物(S146)完掘状況 (南東から)		75 号竪穴建物(S04)完掘状況 (南東から)
	47 号竪穴建物(S68)土層断面 (北から)		76 号竪穴建物(S87)カマド検出状況 (北から)
	47 号竪穴建物(S68)完掘状況 (西から)	図版 15	76 号竪穴建物(S87)完掘状況 (北東から)
	49 号竪穴建物(S341)土層断面 (東から)		77 号竪穴建物(S88)土層断面 (北西から)
	49 号竪穴建物(S341)完掘状況 (西から)		77 号竪穴建物(S88)完掘状況 (東から)
図版 10	50・51 号竪穴建物(S66・67)土層断面 (東から)		78 号竪穴建物(S03)カマド内
	50 号竪穴建物(S66)完掘状況 (南から)		遺物出土状況 (南西から)
	51 号竪穴建物(S67)炉土層断面 (北から)		78 号竪穴建物(S03)検出状況 (南から)
	51 号竪穴建物(S67)完掘状況 (北から)		78 号竪穴建物(S03)完掘状況 (南から)
	52 号竪穴建物(S65)完掘状況 (西から)		79 号竪穴建物(S90)完掘状況 (東から)
	53 号竪穴建物(S157)完掘状況 (東から)		80 号竪穴建物(S156)土層断面 (東から)
	54 号竪穴建物(S203)完掘状況 (西から)	図版 16	80 号竪穴建物(S156)完掘状況 (東から)
	55 号竪穴建物(S64)土層断面 (東から)		81 号竪穴建物(S47)完掘状況 (東から)
図版 11	55 号竪穴建物(S64)完掘状況 (東から)		1 号土坑完掘状況 (南東から)
	56 号竪穴建物(S63)完掘状況 (東から)		2 号土坑土層断面 (北から)
	57 号竪穴建物(S172)遺物出土状況 (西から)		3 号土坑完掘状況 (南から)
	57 号竪穴建物(S172)完掘状況 (北から)		4 号土坑完掘状況 (北から)
	58 号竪穴建物(S62)完掘状況 (西から)		5 号土坑完掘状況 (東から)
	59 号竪穴建物(S61)完掘状況 (北から)		6 号土坑完掘状況 (南から)
	60 号竪穴建物(S10)検出状況 (南東から)	図版 17	7 号土坑完掘状況 (北から)
	60 号竪穴建物(S10)完掘状況 (北から)		8 号土坑土層断面 (北から)
図版 12	61 号竪穴建物(S57)土層断面 (東から)		9 号土坑土層断面 (東から)
	61 号竪穴建物(S57)完掘状況 (北東から)		10 号土坑完掘状況 (東から)
	62 号竪穴建物(S158)遺物出土状況 (南から)		11 号土坑完掘状況 (東から)
	62 号竪穴建物(S158)完掘状況 (西から)		21 号土坑完掘状況 (北から)
	63 号竪穴建物(S58)土層断面 (北から)		体験学習の様子 (西から)
	63 号竪穴建物(S58)完掘状況 (東から)		現地説明会の様子 (北から)
	64 号竪穴建物(S183)完掘状況 (西から)	図版 18	1 号竪穴建物 2 号竪穴建物 3 号竪穴建物
	65 号竪穴建物(S227)遺物出土状況 (北から)	図版 19	4 号竪穴建物 5 号竪穴建物
図版 13	66 号竪穴建物(S60)石包丁出土状況 (東から)		6 号竪穴建物 7 号竪穴建物
	66 号竪穴建物(S60)土層断面 (西から)	図版 20	8 号竪穴建物 9 号竪穴建物 10 号竪穴建物
	66 号竪穴建物(S60)完掘状況 (東から)		11 号竪穴建物 12 号竪穴建物
	67 号竪穴建物(S01)検出状況 (南西から)		13 号竪穴建物 14 号竪穴建物
	67・68 号竪穴建物(S01・02)完掘状況 (南西から)	図版 21	16 号竪穴建物 17 号竪穴建物 19 号竪穴建物
	69 号竪穴建物(S54)検出状況 (北から)	図版 22	20 号竪穴建物 22 号竪穴建物 23 号竪穴建物
	69 号竪穴建物(S54)完掘状況 (東から)		25 号竪穴建物 26 号竪穴建物
	70 号竪穴建物(S55)土層断面 (西から)	図版 23	29 号竪穴建物 34 号竪穴建物 35 号竪穴建物
図版 14	71 号竪穴建物(S85)完掘状況 (北から)	図版 24	36 号竪穴建物 37 号竪穴建物 38 号竪穴建物

図版 25 38 号竪穴建物 39 号竪穴建物 41 号竪穴建物  
42 号竪穴建物 44 号竪穴建物 46 号竪穴建物  
47 号竪穴建物  
図版 26 47 号竪穴建物 48 号竪穴建物 49 号竪穴建物  
図版 27 49 号竪穴建物 55 号竪穴建物 56 号竪穴建物  
57 号竪穴建物  
図版 28 59 号竪穴建物 60 号竪穴建物 61 号竪穴建物  
62 号竪穴建物 63 号竪穴建物  
図版 29 64 号竪穴建物 65 号竪穴建物 66 号竪穴建物  
67 号竪穴建物 69 号竪穴建物 73 号竪穴建物  
74 号竪穴建物  
図版 30 74 号竪穴建物 75 号竪穴建物 76 号竪穴建物  
77 号竪穴建物  
図版 31 78 号竪穴建物 79 号竪穴建物 80 号竪穴建物  
81 号竪穴建物 11 号土坑  
図版 32 その他の出土遺物 (1)  
図版 33 その他の出土遺物 (2)  
図版 34 その他の出土遺物 (3)

#### 新南部遺跡群 11 次

図版 1 調査区遠景 (空撮)  
1 号甕棺墓 (S109) 土層断面 (北から)  
1 号甕棺墓 (S109) 甕棺出土状況 (北から)  
1 号甕棺墓 (S109) 下甕棺出土状況 (北から)  
1 号甕棺墓 (S109) 完掘状況 (西から)  
1 号甕棺目張り粘土確認状況 (東から)  
2 号甕棺墓 (S175) 甕棺出土状況 (南から)  
図版 2 2 号甕棺出土状況 (南から)  
2 号甕棺墓 (S175) 完掘状況 (南から)  
3 号甕棺墓 (S185) 甕棺出土状況 (南から)  
3 号甕棺墓 (S185) 土層断面 (南から)  
3 号甕棺墓 (S185) 完掘状況 (西から)  
4 号甕棺墓 (S108) 甕棺検出状況 (北から)  
4 号甕棺墓 (S108) 甕棺出土状況 (南から)  
4 号甕棺墓 (S108) 完掘状況 (南から)  
図版 3 5 号甕棺墓 (S174) 甕棺出土状況 (南から)  
5 号甕棺半裁状況 (南から)  
5 号甕棺墓 (S174) 完掘状況 (東から)  
1 号標石をもつ甕棺墓 (S104) 検出状況 (北から)  
1 号標石甕棺墓 (S104) 半裁状況 (北から)  
2 区 2 号標石をもつ甕棺墓 (S203)  
検出状況 (西から)

2 区 2 号標石をもつ甕棺検出状況 (西南から)  
1 号集石 (S110) 検出状況 (南から)

図版 4 2 号集石 (S107) 検出状況 (南から)  
3 号集石 (S106) 検出状況 (東から)  
1 号木棺墓 (S105) 土層断面 (東から)  
2 号木棺墓 (S180) 土層断面 (東から)  
2・3 号木棺墓 (S180・177) 完掘状況 (北東から)  
1 号道路状遺構 (S151) 検出状況 (北から)  
1 号溝状遺構 (S183) 検出状況 (東から)  
1 号溝状遺構 (S183) 土層断面 B B' (南から)

図版 5 1 号溝状遺構 (S183) 土層断面 A A' (南から)  
不明遺構 (S1100) 完掘状況 (西から)  
1 号掘立柱建物 (S181) 完掘状況 (東から)  
2 号掘立柱建物 (S182) 完掘状況 (西から)  
1 号柱穴群 (S184) 検出状況 (東から)  
1 号柱穴群 (S184) 検出状況 (南から)  
1 号土塁 (S101) 検出状況 (東から)  
2 区 1 号土塁 (S201) 検出状況 (東から)

図版 6 1 号土坑 (S176) 検出状況 (南から)  
1 号土坑 (S176) 完掘状況 (南から)  
2 号溝状遺構 (S179) 土層断面 (北から)  
2 号溝状遺構 (S179) 完掘状況 (南から)  
2 号土坑 (S178) 検出状況 (南から)  
3 号道路状遺構 (S102) 完掘状況 (東から)  
3 号道路状遺構 (S102) 完掘状況 (西から)  
1 区北壁土層断面 A 側 (東から)

図版 7 1 区北壁土層断面 B 側 (南東から)  
1 区南壁土層断面 C D (北から)  
1 区南壁土層断面 C D (北東から)  
甕棺搬出 (日本通運)  
地中レーダー探査の様子①  
地中レーダー探査の様子②  
現地説明会の様子①  
現地説明会の様子②

図版 8 1 号甕棺墓甕棺

図版 9 2 号甕棺墓甕棺

図版 10 3 号甕棺墓甕棺

図版 11 4 号甕棺墓甕棺

図版 12 5 号甕棺墓甕棺

図版 13 1 号甕棺墓 2 号甕棺墓 4 号甕棺墓

1 号標石をもつ甕棺墓 2 号標石をもつ甕棺墓

図版 14 2 号集石 1 号木棺墓 2 号木棺墓

3 号木棺墓 1 号溝状遺構

- 図版 15 1号溝状遺構 グリッド出土 (1)  
 図版 16 グリッド出土 (2)  
 図版 17 グリッド出土 (3) 弥生時代以外の遺構  
 グリッド出土 (4)  
 図版 18 グリッド出土 (5)

### 吉原遺跡

- 図版 1 1区 調査区全景 (南西から)  
 1号甕棺墓出土状況 (北東から)  
 1号甕棺内人骨出土状況 (北西から)  
 2号甕棺墓検出状況 (南から)  
 2号甕棺墓甕棺出土状況 (南から)  
 1・2号甕棺墓甕棺目張り状況 (東から)  
 2号甕棺内人骨出土状況 (南から)  
 1・2号甕棺墓完掘状況 (北東から)  
 図版 2 1区 2号土壇墓骨出土状況 (南東から)  
 1・2号土壇墓、1・2号甕棺墓完掘状況 (東から)  
 1号竪穴建物検出状況 (南東から)  
 1号竪穴建物完掘状況 (南東から)  
 2・3号竪穴建物完掘状況 (南から)  
 3号竪穴建物土層断面 (南東から)  
 3号竪穴建物完掘状況 (北西から)  
 4号竪穴建物完掘状況 (西から)  
 図版 3 1区 5号竪穴建物完掘状況 (南東から)  
 6号竪穴建物検出状況 (西から)  
 6号竪穴建物完掘状況 (南から)  
 7号竪穴建物土層断面 (東から)  
 8号竪穴建物カマド検出状況 (南東から)  
 8号竪穴建物完掘状況 (南から)  
 9号竪穴建物完掘状況 (西から)  
 10号竪穴建物検出状況 (西から)  
 図版 4 1区 10号竪穴建物完掘状況 (南西から)  
 11号竪穴建物検出状況 (南から)  
 11号竪穴建物遺物出土状況 (北から)  
 11号竪穴建物カマド検出状況 (南から)  
 11号竪穴建物完掘状況 (南から)  
 12号竪穴建物検出状況 (北西から)  
 14号竪穴建物検出状況 (南から)  
 14号竪穴建物完掘状況 (南から)  
 図版 5 1区 不明遺構検出状況 (北西から)  
 不明遺構完掘状況 (南から)  
 15号竪穴建物検出状況 (北西から)  
 16号竪穴建物土層断面 (西から)

- 2号柵列完掘状況 (南から)  
 1号土坑土層断面 (東から)  
 2号土坑完掘状況 (西から)  
 3号土坑土層断面 (西から)  
 図版 6 1区 4号土坑完掘状況 (西から)  
 5号土坑完掘状況 (南東から)  
 完掘状況① (北西から)  
 完掘状況② (北西から)  
 完掘状況③ (東から)  
 完掘状況④ (南から)  
 完掘状況⑤ (東から)  
 完掘状況⑥ (北西から)  
 図版 7 2区 調査区全景 (北東から)  
 3号甕棺墓甕棺出土状況 (北から)  
 3号甕棺墓下甕検出状況① (北から)  
 3号甕棺墓下甕検出状況② (北から)  
 3号甕棺墓下甕検出状況③ (東から)  
 3号甕棺墓下甕検出状況④ (西から)  
 3号甕棺墓下甕断ち割り状況 (北から)  
 3号甕棺墓完掘状況 (西から)  
 図版 8 2区 17号竪穴建物土層断面 (東から)  
 17号竪穴建物完掘状況 (西から)  
 18号竪穴建物土層断面 (南東から)  
 18号竪穴建物検出状況 (南から)  
 19号竪穴建物検出状況 (北西から)  
 19号竪穴建物完掘状況 (西から)  
 20号竪穴建物土層断面 (西から)  
 20号竪穴建物完掘状況 (西から)  
 図版 9 2区 21号竪穴建物土層断面 (東から)  
 21号竪穴建物完掘状況 (南から)  
 22号竪穴建物土層断面 (東から)  
 22号竪穴建物検出状況 (南から)  
 23号竪穴建物完掘状況 (東から)  
 24号竪穴建物完掘状況 (西から)  
 25号竪穴建物土層断面 (東から)  
 25号竪穴建物炉跡 (北から)  
 図版 10 2区 26号竪穴建物遺物出土状況 (南から)  
 26号竪穴建物完掘状況 (北から)  
 27号竪穴建物完掘状況 (北から)  
 28号竪穴建物完掘状況 (南から)  
 29号竪穴建物遺物出土状況 (西から)  
 30号竪穴建物検出状況 (南から)  
 30号竪穴建物完掘状況 (南から)

- 31 号竪穴建物完掘状況（西から）
- 図版 11 2 区 32 号竪穴建物完掘状況（南から）
- 33 号竪穴建物完掘状況（北から）
- 34 号竪穴建物完掘状況（東から）
- 35 号竪穴建物カマド検出状況（南から）
- 35 号竪穴建物カマド完掘状況（南から）
- 36 号竪穴建物完掘状況（北から）
- 30・34・35・36・37 号竪穴建物完掘状況（南から）
- 38 号竪穴建物土層断面（北から）
- 図版 12 2 区 39 号竪穴建物検出状況①（東から）
- 39 号竪穴建物検出状況②（北から）
- 40 号竪穴建物検出状況（南から）
- 40 号竪穴建物カマド検出状況（南から）
- 40 号竪穴建物遺物出土状況（南から）
- 40 号竪穴建物完掘状況（西から）
- 41 号竪穴建物カマド検出状況（南から）
- 41 号竪穴建物完掘状況（南から）
- 図版 13 2 区 42・43 号竪穴建物検出状況（北から）
- 42 号竪穴建物土層断面（南から）
- 42 号竪穴建物カマド検出状況（西から）
- 42 号竪穴建物完掘状況（北から）
- 43 号竪穴建物完掘状況（北から）
- 44 号竪穴建物完掘状況（西から）
- 6 号土坑土層断面（北から）
- 6 号土坑遺物出土状況（北から）
- 図版 14 2 区 6 号土坑完掘状況（北から）
- 7 号土坑土層断面（南から）
- 8 号土坑完掘状況（西から）
- 9 号土坑完掘状況（北から）
- 10 号土坑土層断面（南から）
- 11 号土坑土層断面（西から）
- 7・11 号土坑完掘状況（南東から）
- 12 号土坑土層断面（南西から）
- 図版 15 2 区 13 号土坑完掘状況（東から）
- 14 号土坑完掘状況（東から）
- 2 号溝状遺構完掘状況（西から）
- 完掘状況①（西から）
- 完掘状況②（南東から）
- 完掘状況③（東から）
- 完掘状況④（北西から）
- 完掘状況⑤（北東から）
- 図版 16 3 区 調査区全景（北東から）
- 4 号甕棺墓断面（南東から）
- 4 号甕棺墓目張り状況（東から）
- 4 号甕棺墓上甕重なり状況（南東から）
- 4 号甕棺墓出土状況（東から）
- 4 号甕棺墓完掘状況（東から）
- 15 号土坑断面（東から）
- 4 号甕棺墓、15 号土坑完掘状況（東から）
- 図版 17 3 区 45 号竪穴建物完掘状況（東から）
- 16 号土坑完掘状況（南東から）
- 17 号土坑完掘状況（東から）
- 18 号土坑完掘状況（東から）
- 調査区全景①（南東から）
- 調査区全景②（南から）
- 調査区全景③（北から）
- 調査区全景④（北東から）
- 図版 18 試掘 1・2・3 号甕棺
- 1 区 1 号甕棺 2 号甕棺
- 図版 19 1 区 2 号土壇墓 1 号竪穴建物 2・3 号竪穴建物
- 図版 20 1 区 4 号竪穴建物 5 号竪穴建物 6 号竪穴建物
- 7 号竪穴建物 8・9・10 号竪穴建物 1
- 図版 21 1 区 8・9 号竪穴建物 2 11 号竪穴建物 1
- 図版 22 1 区 11 号竪穴建物 2 12 号竪穴建物 14 号竪穴建物
- 不明遺構 1 号土坑 2 号土坑 3 号土坑 5 号土坑
- 図版 23 1 区 グリッド出土 (1)
- 図版 24 1 区 グリッド出土 (2) 2 区 17 号竪穴建物
- 図版 25 2 区 3 号甕棺 18 号竪穴建物 19・20 号竪穴建物
- 21・22・23 号竪穴建物 1
- 図版 26 2 区 21・22・23・24 号竪穴建物 2
- 25・26・27・28 号竪穴建物
- 図版 27 2 区 29・30・31・32・33 号竪穴建物 1
- 図版 28 2 区 31・32 号竪穴建物 2
- 30・34・35・36・37 号竪穴建物 1
- 図版 29 2 区 34・35・36・37 号竪穴建物 2
- 38・39 号竪穴建物
- 図版 30 2 区 40 号竪穴建物 41 号竪穴建物
- 図版 31 2 区 42・43 号竪穴建物 44 号竪穴建物
- 図版 32 2 区 6 号土坑 7・8・9・10 号土坑
- 13 号土坑 2 号溝 1
- 図版 33 2 区 2 号溝 2 グリッド出土 (1)
- 図版 34 2 区 グリッド出土 (2)
- 図版 35 2 区 グリッド出土 (3) 3 区 4 号甕棺
- 図版 36 3 区 45 号竪穴建物 17・18 号土坑
- グリッド出土



## 第Ⅰ章 調査の契機と経過

### 第1節 調査にいたる経緯

平成24年7月12日に発生した熊本広域大水害は、白川流域を中心とした地域で甚大な被害をもたらした。その結果河川の拡幅や河床掘削など様々な復旧事業が期間を限って行われることとなった。事業の種類及び事業期間は次のとおりである。

河川激甚災害対策特別緊急事業（平成24年～平成28年）

災害対策等緊急事業推進（平成24年）

河川災害復旧等関連緊急事業（平成24年～平成26年）

砂防激甚災害対策特別緊急事業（平成24年～平成27年）

災害関連緊急砂防事業

いずれの事業も、住民の生命財産を守る重要な施策として行われるものであり、その遂行は可能な限り優先させる必要がある。一方で事業により影響を受ける文化財の保護を図ることも必要なことである。そこで災害復興事業の遂行と文化財の保護を両立させるため以下のような取組みをおこなった。

#### 1 予備調査の実施（事業照会・遺跡地図照合・踏査・試掘確認調査）

まず復旧事業を担当する熊本県土木部河川課及び砂防課に対してどのような工事箇所があるかについてヒアリングを行い、施工箇所のわかる地図を入手した。その結果大小含めて400か所以上の工事施工箇所があることがわかった。

次に入手した工事施工箇所の地図と熊本県遺跡地図との照合を行った。1つの工事箇所に複数の遺跡がある場合や、1つの遺跡が複数の工事箇所にもまたがっている場合もあるので、工事箇所と遺跡数は一致しないが、遺跡数は、河川関連事業では、熊本市13遺跡・菊陽町5遺跡・大津町3遺跡・南阿蘇村2遺跡・阿蘇市14遺跡、菊地市6遺跡・産山村1遺跡の計45遺跡が、砂防関係では、阿蘇市の24遺跡が工事施工範囲内に含まれていることがわかった。その後本来であれば現地踏査に入るのだが、土石流や倒木のためしばらくは立ち入ることが出来なかった。特に砂防関連事業については10月になりやっと足を踏み入れることが可能となった。しかし実際に現地を訪れると、河川関連事業では、施工範囲である河岸の大部分が削り取られているところも多数あった。また砂防関連事業についても、地滑り等ですでに遺跡が消滅していると想定できる箇所もあった。踏査の結果、特に白川水系の菊陽町から大津町の区間では、施工38か所のうち、踏査により試掘・確認調査の対象地を5か所に絞り込むことができた。

一方熊本市内の白川河川の試掘・確認調査については、水害以前から河川改修が計画されており、すでに下流域から順次行われていた。熊本市の上流域においても部分的に用地買収が終了したところがあったので、平成24年12月13日の新南部遺跡群の確認調査を皮切りに順次行っていった。平成25年度当初からすぐに新南部遺跡群や吉原遺跡の発掘調査に取り組めたのは、事前に用地買収が終了していたことが大きく関連している。

#### 2 発掘調査の迅速化への取組

発掘調査の迅速化を図るため以下の3つの取組をおこなった。

一つ目は熊本広域大水害に伴う埋蔵文化財調査基準の設定である。災害復興事業の遂行と文化財保護を両立させることを目的として、熊本広域大水害復興事業のみに限定して対象地域の埋蔵文化財の調査基準を設

けることとした。このことについては、「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等の通知」（平成10年9月29日付け庁保記第75号）、九州地区埋蔵文化財発掘調査基準（平成18年9月）を参考に後述する調査検討協議会や文化庁の指導を仰ぎながら策定した。

概要を述べると、例え遺構を壊さない場合でも、九州地区埋蔵文化財発掘調査基準では、遺構確認面からおおむね2mを超える盛土、道路の場合は発掘調査の対象とされているが、熊本広域大洪水に伴う埋蔵文化財調査基準では、遺構が壊されない場合は調査の対象としないとした。これは激甚災害に指定され期限が限られているということもあるが、近年の異常気象ではいつ同規模の洪水が起こっても不思議ではなく、人命優先の観点からも早急に堤防等を完成させるためであるのが一番の目的であった。このことについては、調査検討協議会でも審議をして頂き、試掘確認調査をより詳細に実施することを条件に了承された。

二つ目は、調査検討協議会の設置である（構成メンバーは調査の組織に掲載）。調査検討協議会の目的は、前述の調査基準について検討してもらうことも大きな目的であったが、今後調査中におこった問題を迅速に解決するため、また検出した遺構の適切な評価をしてもらうためでもあった。実際、新南部遺跡群11次調査で検出された標石をもつ甕棺墓については、現地で協議会を開催し、保存が望ましいとの意見を元に設計変更により保存されることとなった。

三つ目は民間発掘調査組織の活用である。激甚災害の指定をうけているためおおむね5か年で広範囲な面積を終了させるため民間発掘調査組織の導入を積極的に図ることとした。

### 3 今後の取組

今回の調査では、調査基準を変更しているため、調査を実施しない箇所がある。それは盛土の築堤部分や管理用道路部分である。その他本来は調査が必要であるが、掘削幅が1mにも満たないため工事立会いとした箇所もある。その他新南部遺跡群の11次調査部分の標石をもつ甕棺墓については、保存されることにはなったが、将来より大規模な河川改修が行われる場合は、消滅は避けられない。その際は前述の築堤・管理用道路・調査面積が狭すぎるため工事立会いとした箇所の隣接地も調査の実施が必要となる。この大規模な工事が何十年先になるか不明ではあるが、将来に備え調査報告書の中でその箇所を明示しておく必要がある。現時点でも試掘確認調査は継続中であることから、最終報告書で一括して報告したい。

その他河川に隣接して道路があり、現在も利用されていることや堤防の役割を果たしていることから、その箇所について調査は実施していない。25年度調査は該当していないが、26年度調査の中江遺跡、託麻弓削遺跡の1区・2区が該当する。この取扱いは、調査を実施する中で道路側まで遺跡がひろがるかどうかは判断できるので、調査をまってその後の対応を決定することとした。遺跡が広がると判断した場合は、工事に立ち会い、遺構についての写真撮影、簡易な実測をすることとした。

### 4 25年度の調査に至る経緯

平成24年7月12日の熊本広域大洪水により、甚大な浸水被害が発生した。そのため土木部では、その浸水被害の軽減を図るため早急な河川改修が計画された。それにより、平成24年9月21日付け河第534号で熊本県土木部河川課長より埋蔵文化財調査依頼文が提出され、熊本県教育庁文化課では、工事施工箇所の地図と熊本県遺跡地図との照合を行い、並行して現地踏査を実施した。その結果、工事施工箇所に埋蔵文化財が存在する可能性が高いことがわかり、埋蔵文化財確認調査の実施協力を要請した。ただし、工事施工箇所はそのほとんどが民地で建物が建っている状態であり、思うように事前調査は進まなかった。そこで、熊本市の上流域においても部分的に用地買収が終了していた箇所から確認調査を開始していった。

新南部遺跡群10次（熊本市東区新南部5丁目地内）は平成24年12月13日から12月17日に実施、

新南部遺跡群11次（熊本市東区新南部1丁目地内）は平成24年12月13日から12月14日に実施、竜田口遺跡（熊本市中央区黒髪7丁目地内）は平成24年12月13日から12月17日に実施、下南部遺跡（熊本市東区下南部地内）は平成25年1月17日から1月18日に実施、吉原遺跡（熊本市東区吉原町）は平成25年1月17日に実施した。その結果、複数の遺跡から縄文時代～弥生時代の土器や石器、古墳時代から中世の土師器が確認され、遺跡の存在が判明した。

そこで確認調査の結果を基に熊本県県央広域本部熊本県土木事務所と平成25年度に本調査を実施する遺跡の選定と遺跡の保存のための工法変更等の協議を行い、やむをえず破壊を受ける3遺跡（新南部遺跡群10次約4,783㎡・新南部遺跡群11次約705㎡・吉原遺跡2,630㎡）について埋蔵文化財本調査を実施することになった。その後、熊本県知事より、遺跡ごとに文化財保護法第94条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘届が県教育長あて通知の提出があった（平成25年5月9日付け熊土災対第6号「新南部遺跡群」・平成25年5月9日付け熊土災対第6-3号「吉原遺跡」）。通知を受け、熊本県教育長から熊本県知事あて発掘調査が必要と通知した（平成25年6月3日付け教文第493号「新南部遺跡群」・平成25年5月28日付け教文第387号「吉原遺跡」）。

本調査期間は、新南部遺跡群10次が平成25年7月22日から平成26年3月18日まで、新南部遺跡群11次が平成25年7月30日から平成26年3月24日まで、吉原遺跡が平成25年7月29日から平成26年3月19日である。

## 第2節 調査組織

### 【調査】（平成25年度）

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	小田信也（文化課長）
調査総括	西住欣一郎（課長補佐） 岡本真也（文化財調査第二係長）
調査事務局	馬場一也（課長補佐）、廣石啓哉（主幹兼総務・文化係長）、松尾康延（参事） 有馬綾子（参事）、天草英子（主任主事）

### 調査担当 新南部遺跡群（10次）

福田匡朗	（学芸員）
横田光智	（非常勤職員）
菰田博隆	（非常勤職員）
稲葉洋一	（非常勤職員）
木下 勇	（非常勤職員）

### 新南部遺跡群（11次）

宮本 大	（文化財保護主事）
土野雄貴	（非常勤職員）
川俣幸次	（非常勤職員）

### 吉原遺跡

尾崎潔久	（文化財保護主事）
多賀晴司	（非常勤職員）

大坂亜矢子 (非常勤職員)

【整理作業】 (平成26・27年度)

整理主体	熊本県教育委員会	
整理責任者	手島伸介 (文化課長)	
整理総括	西住欣一郎 (課長補佐)	平成26年度
	村崎孝宏 (課長補佐)	平成27年度
	岡本真也 (文化財調査第二係長)	平成26・27年度
整理事務局	松永隆則 (課長補佐)、廣石啓哉 (主幹兼総務・文化係長)、有馬綾子 (参事) 天草英子 (主任主事)	
整理担当	廣田静学 (主幹)	平成26・27年度
	宮本 大 (文化財保護主事)	平成26・27年度
	尾崎潔久 (文化財保護主事)	平成26・27年度
	佐藤淳子 (非常勤職員・臨時整理補助員)	平成26・27年度
	橋口冬美 (臨時整理補助員)	平成27年度
	作田祐希 (非常勤職員)	平成26年度
	師富成香 (非常勤職員)	平成26年度
	出家麻里 (非常勤職員)	平成26年度

【調査検討協議会】 (順不同、敬称略、協議会当時の肩書)

- 甲元眞之 (考古学:熊本大学文学部附属永青文庫研究センター)
- 北野 隆 (日本建築史:熊本大学文学部附属永青文庫研究センター)
- 松本寿三郎 (日本歴史:元熊本大学文学部教授)
- 山尾敏孝 (土木遺産:熊本大学大学院自然科学研究科教授)
- 小畑弘己 (考古学:熊本大学文学部教授)
- 稲葉継陽 (日本歴史:熊本大学文学部教授)

【調査指導及び協力者】 (順不同、敬称略)

常松幹雄 (福岡市埋蔵文化財調査課)、尾原祐三 (熊本大学工学部教授)、吉永徹 (熊本大学工学部技術部)、網田龍生・美野口雅朗 (熊本市埋蔵文化財調査室)、武末純一 (福岡大学文学部教授)、馬田弘稔 (元福岡県教育委員会)、清田純一 (塚原歴史民俗資料館)、藤本貴仁 (宇土市職員)、高木正文 (元県文化課)、師富国博 (熊本市職員)、岡本真也・山下義満・古城史雄・坂田和弘・亀田学・馬場正弘 (熊本県教育庁教育総務局文化課)

【調査・整理作業員】

髷纏調査 (敬称略、五十音順)

(10次) 石渕 忠、井手春代、今村明美、浦部福次、緒方範子、岡本敬裕、川元恵子、木林忠司、笹木 薫、柴田とみえ、柴田道子、関根龍子、園田輝雄、田中哲郎、田中鳴美、田上文男、中村 保、西村和幸、早田咲百合、平野浩治、藤井勇二、松下義章、松本和徳、松本晋治、松本直美、村田雅俊、森川征子、森本清子、山下民生、渡邊捷紀

(11次) 伊藤憲二、稲本敏行、岡野 学、奥村信博、白石美智子、高瀬正志、鶴本雄司、中村洋三、西山雅廣、林田恵子、春野宗敏、福田秀喜、藤本龍三、藤原秀敏、松崎仁美、三島多恵子、水本泰之、森本紀代子、山下 巧、吉永孝夫

(吉原) 麻生昭子、石川幸彦、石倉武夫、石村義則、井出美幸、稲本佳子、牛丸数政、大塚健二、神谷 守、河原良江、神崎 博、木村 崇、木村忠行、後藤まや、佐藤健治、椎葉仁美、関 律子、関永光成、関根 登、高本勝美、谷口実知子、塚本 勇、中村孝昭、早田豊次、福田 了、松井昭子、松山誠一、右田正範、宮田義則、山中康彦

#### 整理作業 (敬称略、順不同)

内田孝子、近藤広子、立花真利子、富田知子、西田法子、原口美和子、松本直枝、田中洋子、西野佳子、内村尚美、本田頼子、福島典子、石田敦子、古森信哉、溜渕俊子、土持友子、中尾規子、府内博子、松本裕子、丸山 勉、嵐 英隆、井上秀子、稲本奈津紀、隈田香織、白木はる乃、島川千秋、佐々木 舞、濱崎清子、園田智子、渡邊いわ子、山本邦子、平岡 賢

## 第3節 調査の経過

### 1. 発掘調査

調査日誌より抜粋して以下に記す。

#### 新南部 10 次

平成 25 年	7 月 22 日	表土剥ぎ
	7 月 24 日	現場開始
	8 月 7 日	調査区北東部基準点測量及びメッシュ杭設置 (柵有明測量)
	8 月 24 日	夏休み現場公開
	9 月 6 日	調査区南西部基準点測量及びメッシュ杭設置
	9 月 9 日	遺構掘削開始
	10 月 1 日	カマド付き竪穴建物等の掘削開始
	10 月 18 日	弥生時代の竪穴建物等の掘削開始
	11 月 7 日	2 次遺構作業員勤務開始、ベルトコンベア設置
	11 月 12 日	縄文時代の竪穴建物等の掘削開始
	11 月 16 日	秋の現場公開 (78 名の参加)
	12 月 12 日	完掘状況写真撮影
	12 月 27 日	現場冬季休業
平成 26 年	1 月 6 日	発掘調査再開
	1 月 20 日	調査区北側遺構検出
	2 月 3 日	ベルトコンベア返却
	2 月 6 日	悪天候により作業中止
	2 月 25 日	高木正文氏 (元県文化課) 来跡
	2 月 27 日	清田純一氏 (塚原歴史民俗資料館) 来跡
	3 月 5 日	(故) 田中良之氏 (九州大学) 来跡
	3 月 12 日	空中写真撮影 (柵九州航空)
	3 月 17 日	発掘調査終了

### 新南部 11 次

平成 25 年	7 月 30 日	表土剥ぎ
	8 月 5 日	現場開始
	8 月 7 日	基準点測量及びメッシュ杭設置 (㈱ワールドコンサルタント)
	8 月 8 日	遺構確認作業
	8 月 23 日	木棺墓 (S108) 検出により調査区を拡張
	～27 日	甕棺墓 (S109)・集石 (S110) 検出
	9 月 6 日	拡張区表土剥ぎ
	9 月 9 日	作業員公募
	9 月 26 日	作業員試験
	10 月 3 日	現場再開 (作業員初日)
	10 月 4 日	拡張区基準点測量及びメッシュ杭設置
	10 月 7 日	甕棺 (S109) を確認
	10 月 9 日	甕棺墓 (S174・175) 検出
	10 月 28 日	空中写真撮影 (㈱九州航空)
	10 月 29 日	標石をもつ甕棺墓 (S203) 甕を確認
	11 月 5 日	溝状遺構 (S183) 掘削開始
	11 月 6 日	溝状遺構 (S183) 検出
	11 月 7 日	甲元真之氏 (熊本大学)・西住・岡本 (県文化課) 来跡
	11 月 25 日	検討委員会開催
	12 月 9 日	<b>禰宜</b> 田調査官 (文化庁)・甲元氏・網田龍生氏・美野口雅朗氏 (熊本市) 視察
	12 月 9 日	高木氏視察
	12 月 10 日	報道機関 (NHK・朝日・KKT・毎日・西日本) 来訪
	12 月 16 日	常松幹雄氏 (福岡市) 来跡
	12 月 24 日	現場休業

平成 26 年	1 月 7 日	現場開始
	1 月 10 日	河川課職員 (6 名) 来訪
	1 月 11 日	現場説明会
	1 月 29 日	松下孝幸氏 (人類学研究機構) による古人骨処理
	2 月 3 日	調査区地中レーダー探査 (熊本工学会)
	2 月 12 日	武末氏 (以下 3 名学生) 来訪
	2 月 18 日	藤本貴仁氏 (宇土市) 来訪
	2 月 20 日	甕棺墓 (S109) より下甕搬出 (日通)
	2 月 24 日	馬田氏 (元福岡県職) 来訪
	3 月 4 日	調査区地中レーダー探査
	3 月 11 日	文化庁水ノ江和同氏来訪
	3 月 24 日	調査区山砂で埋戻し保存

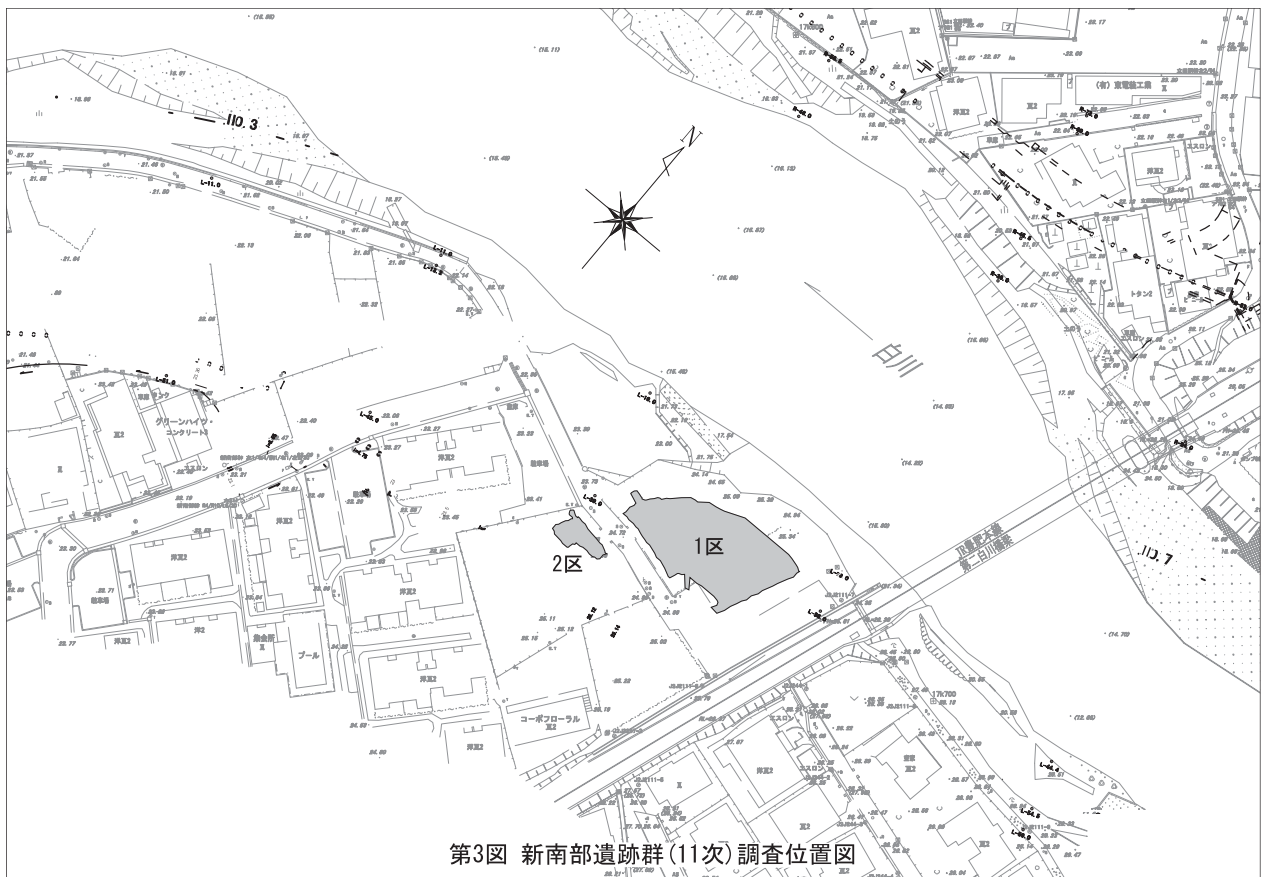
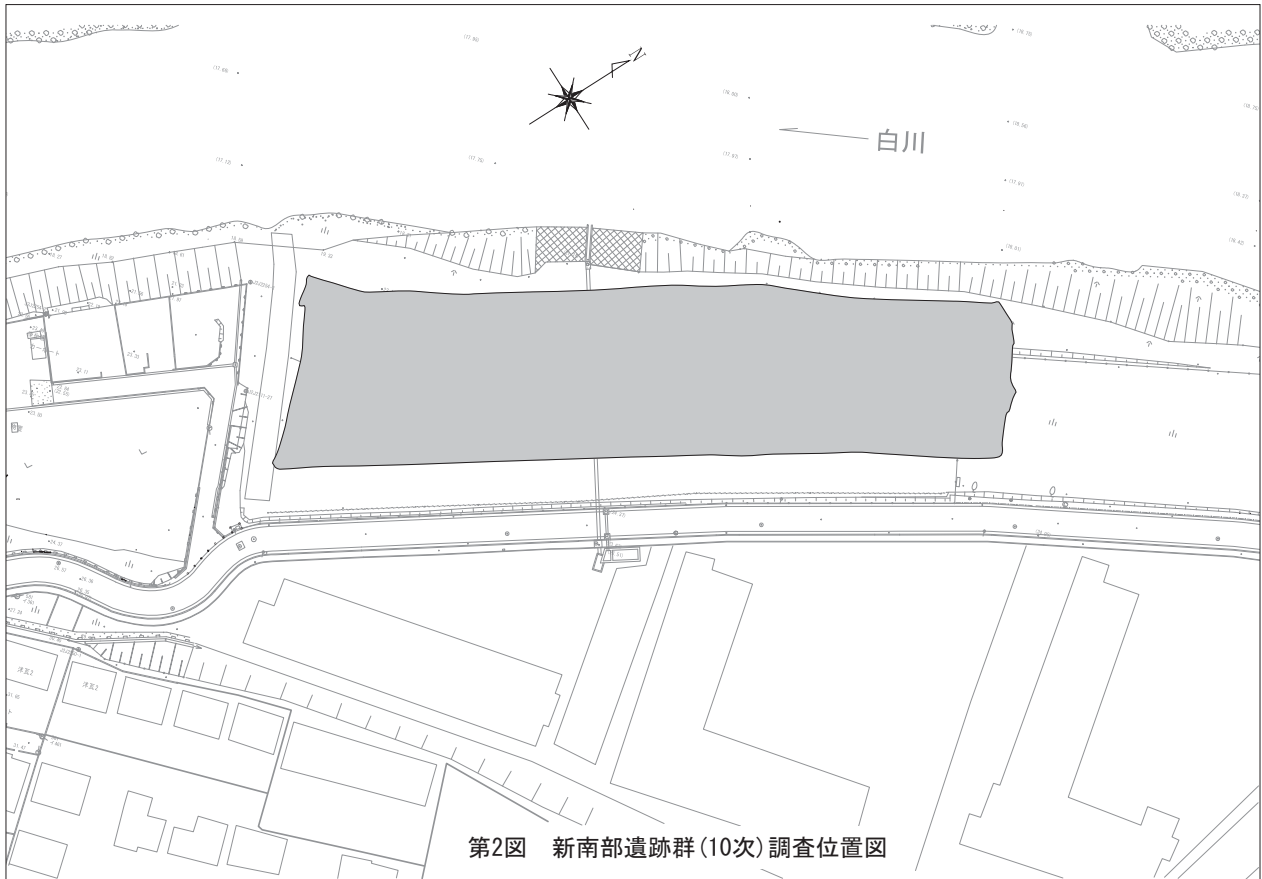
### 吉原遺跡

平成 25 年	7 月 29 日	1 区表土剥ぎ
	8 月 1 日	現場開始
	8 月 16 日	1 区基準点測量及びメッシュ杭設置 (㈱十八測量)
	8 月 25 日	夏休み発掘体験
	8 月 28 日	甕棺墓 (S16) 確認
	9 月 2 日	竪穴建物確認

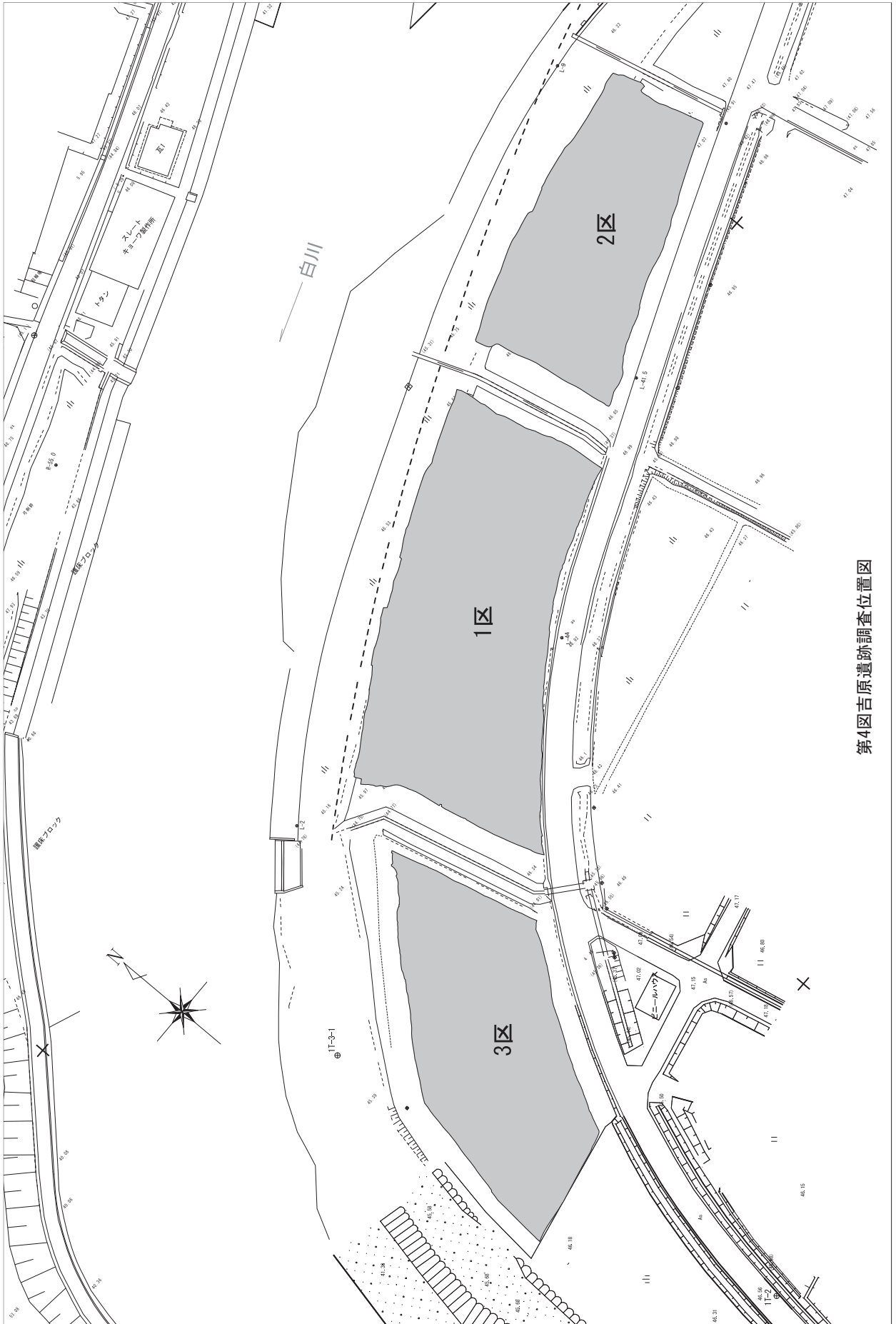
- 9月5日 東側メッシュ杭設置
- 9月25日 甕棺墓 (S15) 確認
- 10月22日 松下孝幸氏 (人類学研究機構) による古人骨処理
- 10月28日 空中写真撮影 (㈱九州航空)
- 11月11日 2区表土剥ぎ
- 11月13日 1区北側遺構検出開始
- 11月24日 秋の見学会
- 11月29日 現場休場
- 12月2日 現場作業員再任用開始
- 12月5日 2区基準点測量及びメッシュ杭設置  
(㈱ダイチプラン)
- 12月5日 3区表土剥ぎ、2区調査開始、1区調査終了
- 12月13日 2区遺構掘削
- 12月27日 現場冬季休業
- 平成26年 1月7日 2区発掘調査再開
- 1月17日 2区甕棺墓 (S13) 上甕取上げ
- 1月31日 2区北側遺構検出
- 2月4日 3区基準点測量及びメッシュ杭設置
- 2月5日 3区発掘調査再開
- 2月20日 3区西側検出作業
- 2月27日 甕棺墓 (S6) 検出、北半分完掘
- 3月3日 2区8層掘削、甕棺墓 (S6) 甕棺取上げ
- 3月12日 空中写真撮影 (㈱九州航空)
- 3月13日 2区8層掘削
- 3月19日 発掘調査最終日
- 3月25日 現場撤収作業



第1図 白川河川激甚災害工事計画図







第4図 吉原遺跡調査位置図

## 第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

九州のほぼ中央に位置している熊本県は、北、南、東を山地に囲まれ、西は有明海（島原湾）、八代海、天草灘といった海に面している。山地と有明海、八代海の間には平野が広がっており、そのうち有明海の東側に広がる熊本平野を中心とした熊本中央部に熊本市が位置している。

白川は、阿蘇中央火口丘の一つである根子岳を源として阿蘇カルデラの南の谷（南郷谷）を流下し、同じく阿蘇カルデラの北の谷（阿蘇谷）を流れる黒川と立野で合流した後、溶岩台地を西に向かって小刻みに蛇行を繰り返して有明海に注ぐ、流域面積480km<sup>2</sup>、幹川流路74kmの一級河川である。上流域には、現在も噴火を繰り返し、大量の火山灰を噴出して、流域に甚大な被害を及ぼしてきた阿蘇活火山が位置している。流域の80%を占める上流域の阿蘇カルデラは、外輪山と中央火口丘群及び火口原を形成して草原や田畑が多く見られる。また、細長い中流域は河岸段丘及び火砕流台地上に田畑が多く、下流域は扇状地及び沖積平野で熊本市街地が広がり、水田地帯となっている。

流域の地質は、上流域では阿蘇の火山活動によって形成された成阿蘇溶岩を基盤とし、地表にはヨナと呼ばれる火山灰が厚く堆積している。中流域一帯には、ASO-4火砕流堆積物が広く堆積している。この堆積物は、その後、白川をはじめ、坪井川、井芹川などの諸河川によって浸食され、その結果、各地に火砕流台地や河成段丘（河岸段丘）が形成された。火砕流台地や河成段丘の生成時期以降、現在に至るまで、白川、緑川など諸河川によって上流から運ばれてきた土砂がおもに下流の沿岸部に堆積して、低平な沖積平野が形成された。

### 第2節 歴史的環境

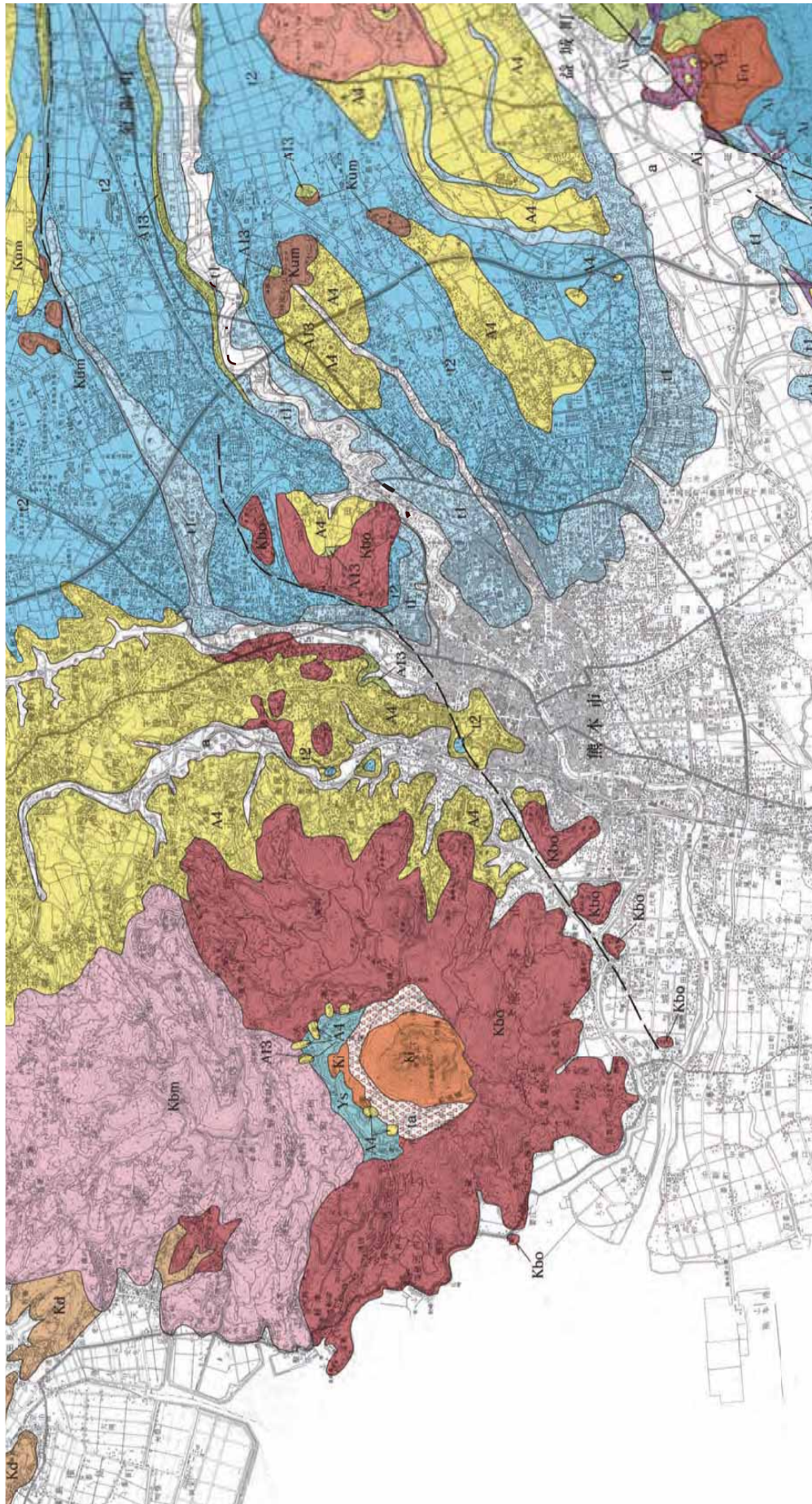
白川流域における歴史的環境は、白川中流域を中心に取りまとめた。

#### 旧石器時代

白川中流域は、旧石器時代から人間が活動した痕跡が認められる地域の1つである。しかし、それらの多くは表面採集や他の時代の発掘調査に伴って発見されることが多く、文化層を伴う資料でない。注目される遺跡は、小山の東麓に位置する県内最古級の遺跡である平山石ノ本遺跡である。ここでは良好な層位の中から後期旧石器時代の遺物が豊富に出土し、礫群も確認されている。また、少し離れた新南部遺跡群でもナイフ形石器や細石刃核が出土している。さらに、立田山山地の北東端に位置する庵の前遺跡からは、三稜尖頭器や台形様石器が出土している。

#### 縄文時代

白川中流域周辺には縄文時代の遺跡が多いが、時期によって粗密がある。縄文早期の遺跡は、県内で最初の住居跡の報告となった庵ノ前遺跡をはじめ、集石遺構、炉穴を検出した平山石の本遺跡、大型配石遺構、炉穴を検出した菊池郡大津瀬田裏遺跡、多くの研究者によって表採されたカブト山遺跡などが知られている。縄文時代前期・中期になると、平山石の本遺跡、託麻弓削遺跡群、龍田陣内遺跡、上南部遺跡、などの遺跡が知られているが、遺構の検出はなく、遺物が出土したに過ぎない。縄文後期・晩期になると、その遺跡数は数多くなる。特に白川中流域の段丘上に立地している上南部遺跡は、5軒の竪穴建物跡と7軒の疑似建物



凡例

- A4 阿蘇-4火砕流堆積物 Kbo 金峰火山古期噴出物 A13 阿蘇-1~3火砕流堆積物 t1 低位段丘堆積物 t2 中位段丘堆積物 Ki 金峰火山新期堆積物 Ys 芳野層
- ta 崖錐堆積物 Kbm 金峰火山中期噴出物 Kum 熊本層群 A1 赤井火山(砥川溶岩) Mu 御船層群上部層 PH 御船層群下部層 vg 苦鉄質火山岩類
- cc 結晶質チャート um 超苦鉄質岩類 Gks 雁回山層 O11 大岳古期輝石安山岩溶岩 O13 大岳新期角閃石安山岩溶岩 O14 大岳新期輝石安山岩溶岩
- Op1 大岳新期角閃石安山岩火砕岩 Op2 大岳新期輝石安山岩火砕岩
- の範囲は調査地

第5図 熊本市周辺の地質図 熊本県地質図(10万分の1)説明書(2008)より引用

跡、埋設土器 16 基が検出されている。また大量の土偶も出土しており、西日本有数の規模である。平山石の本遺跡群は白川右岸に東から西に広がる河川段丘上に位置しており堅穴建物跡 67 軒、埋設土器 32 基が検出されており、大規模な集落の存在が知られている。その他に白川流域には、龍田陣内遺跡、託麻弓削遺跡群、中江町遺跡、吉原遺跡、新南部遺跡群等の遺跡が知られている。ところが、晩期後半の刻目突帯文の時期には遺跡数が激減し、それまで台地上にあった集落の立地が変化したものと考えられる。

### 弥生時代

白川流域には弥生時代の遺跡は、熊本市の山尻遺跡群や対岸には菊陽町の梅ノ木遺跡や六地藏遺跡等の大規模な集落遺跡が見つまっている。山尻遺跡群は弥生時代中期から後期にかけての集落跡で多数の堅穴住居址が検出されている。梅ノ木遺跡や六地藏遺跡や法王鶴遺跡では、堅穴住居址のほかにも甕棺も検出されている。また、長峰遺跡群や王田遺跡群、竹ノ後・芭蕉遺跡群など、甕棺を主として墓域が多く検出されている。

### 古墳時代

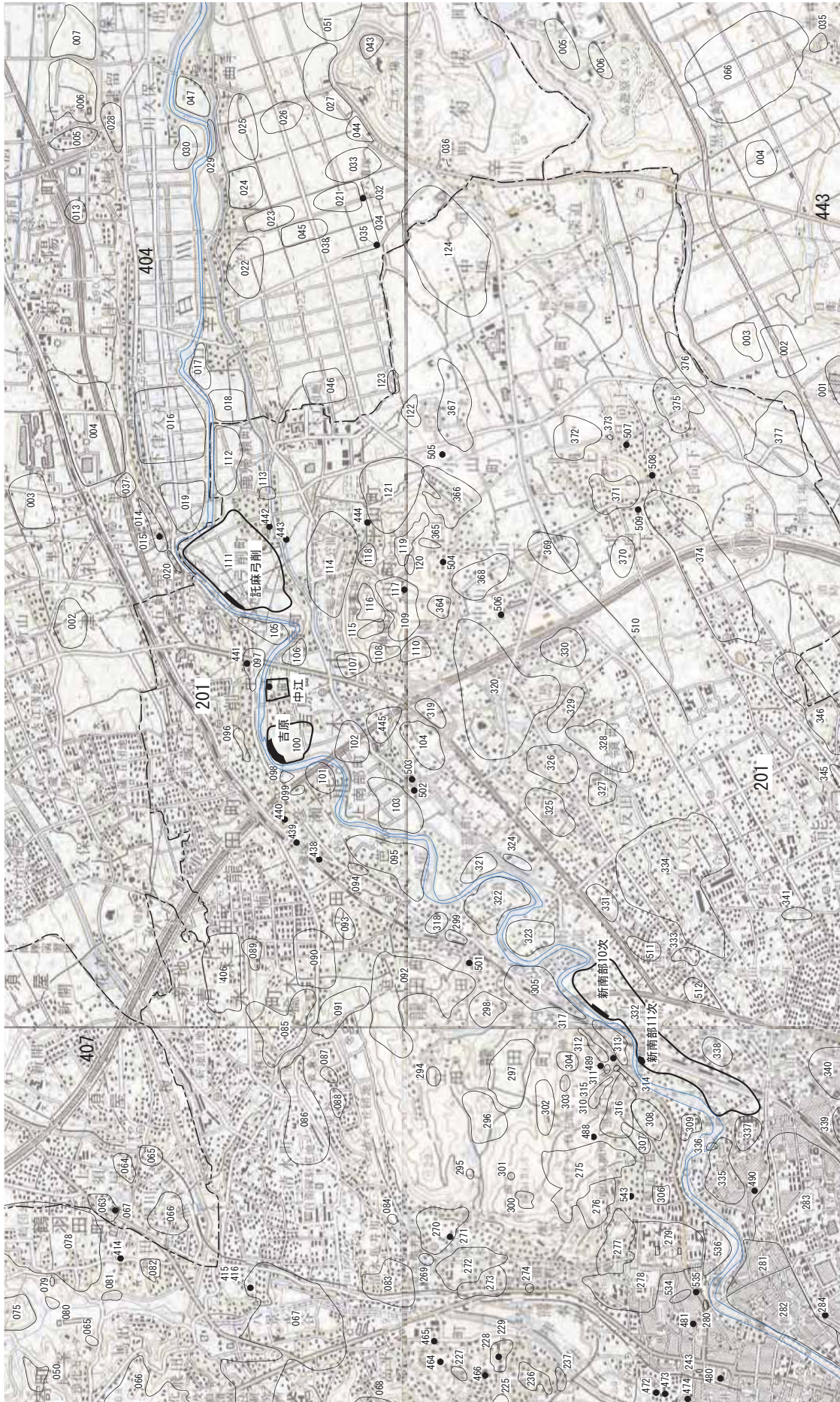
白川中流域は古墳時代の遺跡は多い。下南部遺跡、平山石ノ本遺跡、新南部遺跡群、龍田陣内遺跡からは古墳時代の堅穴建物址が検出されている。白川右岸の崖面には多くの横穴墓が見られる。託麻弓削遺跡群の対岸には、今石横穴群があり、吉原遺跡、中江町遺跡の対岸には、弓削小坂横穴群が存在する。弓削小坂横穴群からは須恵器の台付鳥形瓶が出土している。立田山東南麓の丘陵斜面には、女瀬平横穴群、長薫寺横穴群、浦山第1・第2横穴群、つつじヶ丘横穴群、小碓橋際横穴群などの他に、長薫寺古墳や宇溜毛神社古墳、立田山南麓古墳といった円墳も作られている。

### 歴史時代

古代では小高山、神園山周辺で確認されている神園山遺跡群の瓦窯跡が注目される。瓦は国分寺や渡鹿廃寺に供給されていたことが判明している。集落は、新南部遺跡群、下南部遺跡、神園田刈屋敷遺跡、吉原遺跡等で確認されている。また、楠の木遺跡では掘立柱建物群が検出されており、倉庫や官衙等の可能性が指摘されている。

### 中世・近世

小山城跡や神園山城跡や今石城跡といった中世城が知られている。また、小山山西麓の諏訪神社境内には「正平塔」と呼ばれる南北朝期の石塔がある。



第6図 白川閼連遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/50000)

表1 白川関連遺跡周辺遺跡一覧(1)

熊本県(43)熊本市(201)

現番号	新番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
050	364	城ヶ辻城跡	四方寄町城ヶ辻	中世	城			貝塚あり、城主は西牟田常陸守
065	365	辻横穴群	四方寄町辻	古墳	古墳		飛田塔の木遺跡・飛田上ノ原遺跡・飛田葉山塚古墳	
066	358	飛田遺跡群	飛田町塔の木など	縄文～古墳	包蔵地		榎山A～C遺跡・山室A遺跡・山室打出(山室地頭)屋敷遺跡山・八景水谷遺跡・八景水谷藜棺群・山室東屋敷阿弥陀堂墓碑	葉山古墳調査報告書あり
067	407	清水町遺跡群	清水町山室など	縄文～古墳	包蔵地			榎山藜棺群、山室藜棺・土師器、八景水谷縄文前後晩・藜棺
075	335	梶尾遺跡群	梶尾町中尾原	弥生	包蔵地		甲佐大明神遺跡	弥生中期～後期の土器、大明神藜棺群
078	368	鶴羽田(鶴/原・垣/外)	鶴羽田町	縄文～古墳	包蔵地			縄文後晩期土器、先端を失った銅戈工事出土
079	367	鶴羽田かぶと塚古墳	鶴羽田町かぶと塚	古墳	古墳			円墳
080	366	竹の下横穴群	鶴羽田町竹の下	古墳	古墳			
081	369	山際畑	鶴羽田町	縄～中世	包蔵地			
082	370	羽田	鶴羽田町	古代・中世	包蔵地		飛田眼鏡橋	
083	409	亀井遺跡群	清水町亀井	縄文～中世	包蔵地		亀井遺跡・亀井城跡・亀井金剛院跡・亀井松山墓地・亀井薬師堂前板碑	城は現光照寺内、板碑天文2年銘
084	401	万石昭和団地前	清水町万石	縄～中世	包蔵地			
085	380	楡木	清水町楡の木	縄文・弥生	包蔵地			縄文早・前・後・晩、藜棺群
086	384	岩倉山中腹	清水町兎谷	縄～中世	包蔵地			
087	385	岩倉山山頂	清水町兎谷	縄～中世	包蔵地			
088	386	岩倉山	清水町兎谷	旧～中世	包蔵地			
089	379	楠	龍田町	縄～中世	包蔵地			
090	381	堂ノ前遺跡群	清水町楡木・堂の前	旧～中世	包蔵地		堂の前遺跡・一丁霍遺跡	
091	383	庵ノ前	清水町兎谷・上龍田	旧石器・弥生	包蔵地			早期住居跡2基・藜棺墓群、県報告書あり
092	389	迫ノ上遺跡群	龍田町陣内など	縄文～平安	包蔵地		迫ノ上藜棺群・緑が丘遺跡・緑ヶ山ノ神遺跡・堂ノ前屋敷窯跡・長蓮寺窯跡	堂の前窯跡は平安期か?
093	382	壺町鶴	清水町楡木一町鶴	縄～中世	包蔵地			
094	387	吉ノ平	龍田町上立田	縄～中世	包蔵地			
095	388	竹ノ後・芭蕉遺跡群	竜田町上立田竹の後	縄文～平安	包蔵地		竹ノ後遺跡・竹ノ後藜棺群・芭蕉遺跡	竹の後縄文後期土器・合口藜棺・土偶
096	375	弓削小坂横穴群	龍田町弓削小坂屋敷	古墳	古墳			50基以上
097	374	弓削前畑	龍田町弓削小坂屋敷	縄～中世	包蔵地			
098	376	弓削平ノ下A	龍田町弓削平の下	縄～中世	包蔵地			
099	377	弓削平ノ下B	龍田町弓削平の下	縄～中世	包蔵地			
100	680	吉原	吉原町殿田	縄文～平安	包蔵地			縄文後晩期(南福寺・中津)、弥生後期、奈良平安在銘土器
101	378	片彦瀬	龍田町弓削片彦瀬	縄文	包蔵地			
102	684	北上遺跡群	石原町平	縄文・古代	包蔵地		北上遺跡・北上B遺跡	縄文晩期土器、布目瓦
103	685	上南部	上南部町村下	縄文	包蔵地			縄文前期・後期・晩期・後晩期集落発掘調査、市報告書あり
104	686	供合松ノ上	上南部町	縄～中世	包蔵地			
105	373	法王鶴	龍田町	縄文・弥生	包蔵地			
106	681	石原町	石原町	縄～中世	包蔵地			
107	693	石原瀬々井	石原町瀬々井	縄文	包蔵地			縄文晩期
108	688	神園桜井	長嶺町	縄～中世	包蔵地			
109	695	神園山遺跡群	長嶺町、小山町	奈良・平安	包蔵地		神園山窯跡群・中山窯跡群・西福寺跡・西福寺墓地・花園元禄(14年)板碑	
110	694	神園田淵屋敷	小山町、長嶺町	平安・中世	包蔵地		大神宮碑・?田川親世音寺跡	
111	677	託麻弓削遺跡群	弓削町	縄文	包蔵地		弓削上古閑遺跡・弓削宮原遺跡	縄文前期・後期・晩期
112	678	鹿帰瀬	鹿帰瀬町西原	縄文・弥生	包蔵地		鹿帰瀬河原遺跡	県調査あり
113	679	弓削庵寺跡	龍田町弓削	中世	寺社			
114	682	山尻遺跡群	龍田町弓削山尻	弥生	包蔵地		山尻遺跡・石原亀ノ甲遺跡・下南部地蔵墓碑	弥生時代を中心とした大集落
115	689	神園山西麓	長嶺町下の山	古代	包蔵地			
116	690	神園山城跡	長嶺町下の山	中世	城			
117	696	正平塔(石燈籠)	小山町	中世	石造物	市		諏訪神社、正平12年銘、凝灰岩製、石工藤原助次
118	691	平山居屋敷	平山町	古代・中世	包蔵地			
119	697	小山城跡	小山町	中世	城			
120	698	小山上の山	小山町	縄～中世	包蔵地			
121	692	平山石ノ本	平山町	旧石器～縄文	集落			国体会場、県調査報告書あり
122	699	御船塚山	平山町	縄～古代	包蔵地			
123	693	御船塚東	平山町	縄文～古代	包蔵地			
124	700	中原道明	小山町	縄文	包蔵地			縄文早期、後晩期
225	433	池田山伏塚遺跡群	池田2丁目、清水町高平・津浦	弥生・古墳	包蔵地		山伏塚A～C遺跡・長迫古墳・電通学園石棺・長迫遺跡	電通石棺箱式珠文鏡、長迫横穴式石室
227	434	高平箱式石棺	清水町高平	古墳	埋葬		名義尾塚	

表2 白川関連遺跡周辺遺跡一覧(2)

熊本県(43)熊本市(201)

現番号	新番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
228	435	永浦遺跡群	清水町打越、永浦	古墳・中世	包蔵地		稲荷山古墳・白川学園石棺・永浦城跡・天福寺	
229	436	稲荷山古墳	清水町打越	古墳	古墳	県		円墳、裝飾古墳、横穴式小口積石室
236	437	打越遺跡群	清水町打越	弥生・中世	包蔵地		打越城跡・打越甕棺遺跡	
237	441	打越貝塚	清水町打越	縄文	貝塚			北久根山式
243	617	安元元年笠塔婆塔身	坪井4丁目	古代	石造物	県		県重要文化財、本光寺
	618	安元元年笠塔婆	坪井4丁目	古代	石造物			市指定建造物
269	406	古閑前	清水町亀井	縄文～中世	包蔵地			旧石器
270	402	清水町谷口	清水町万石	旧石器～平安	包蔵地		万石遺跡	県調査あり
271	402	万石塚坊主古墳群	清水町大字万石	古墳	古墳			2基円墳
272	442	松崎遺跡群	清水町松崎	弥生～平安	包蔵地		松崎甕棺遺跡・松崎中世遺跡・松崎葉山天神跡	
273	443	松崎八幡箱式石棺	清水町松崎字上屋敷	古墳	埋葬		松崎石棺	
274	444	室園	清水町室園	縄文～中世	包蔵地			
275	592	黒髪町下立田遺跡群	黒髪町	古墳～江戸	包蔵地		白石古墳・白石遺跡・立田南中腹遺跡・城床古墳群・豊国廟跡	
276	593	泰勝寺細川家墓所・庭園	黒髪4丁目	江戸	寺社	国	泰勝寺墓地古塔碑群・六地藏	細川家霊廟は国指定の史跡、寺跡を含む庭園は県指定
277	595	小峰	黒髪町小峰	縄文～平安	包蔵地		金光山無相寺跡	
278	597	黒髪町遺跡群	黒髪町坪井	縄文～中世	包蔵地		黒髪町遺跡(済々覺高校敷地)・九州女学院遺跡・坪井古屋敷出土の甕棺	一帯に甕棺墓群
279	598	旧第五高等学校本館・化学実験場・表門	黒髪2丁目	明治	建造物	国		国指定重要文化財、イギリスのフィーン・アン様式
280	603	子飼	子飼町	縄文～中世	包蔵地			
281	646	大江白川	大江1丁目	縄文～平安	包蔵地		旧往生院跡・善行寺の板碑・放牛地藏	甕棺
282	647	新屋敷	新屋敷町	弥生～中世	包蔵地			弥生環濠、弥生前期土器、輸入陶磁器
283	648	大江遺跡群	大江3丁目	縄文～明治	包蔵地		大江遺跡・大江青葉遺跡・大江東原遺跡・白川中学校校庭遺跡・渡鹿旧電電波高校遺跡・熊高敷地遺跡・熊高通り遺跡・杉ノ本遺跡・託麻郡家推定地・渡鹿廃寺・熊本英学校跡・建設会館遺跡地	
284	649	大江義塾跡(旧徳富邸)	大江4丁目	明治	建造物	県		大江義塾・県指定史跡、徳富旧邸・市指定史跡
294	395	天祥山	清水町楡木	旧石器～弥生	包蔵地			石槍、須玖式甕棺群
295	403	万石乗越	清水町万石	縄～古代	包蔵地			
296	404	万石茶山	清水町万石	縄文・弥生	包蔵地			夜臼式土器
297	397	秣野	龍田町上立田	縄文～平安	包蔵地			
298	393	陳内上ノ園遺跡群	龍田町上立田	縄文～古墳	包蔵地		上ノ園A・B遺跡・竜田陳内館跡	御手洗A式、押型文、須玖式甕棺、方形周溝墓
299	391	三の宮(牧鶴宮脇)	龍田町上立田	縄文	包蔵地			
300	405	立田山山頂	黒髪町	古墳～平安	包蔵地			
301	396	万石茶山古墳	清水町万石(通称)茶山	古墳	古墳			横穴式石室
302	588	立田山東中腹	黒髪町	古代・中世	包蔵地			
303	589	宇留毛浦山市営墓地	黒髪町7丁目	縄文～平安	墓地			
304	398	九女グラウンド	黒髪町		包蔵地			
305	394	竜田陳内遺跡群	龍田町陳内	旧石器～中世	包蔵地		竜田陳内遺跡・陳内宮の前遺跡	曾畑式土器、県報告あり
306	604	桜山中学校校庭	黒髪町5丁目	古墳～平安	包蔵地		下立田一里木	
307	609	カプト山	黒髪町宇留毛字甲山	縄文	包蔵地			早期、轟B、北久根山、黒川、山の寺
308	610	宇留毛A	黒髪町6丁目	縄文	包蔵地			
309	611	宇留毛B	黒髪町6丁目	縄文～平安	包蔵地			
310	590	浦山第2横穴群	黒髪7丁目浦山	古墳	古墳	県		
311	591	浦山第1横穴群	黒髪7丁目浦山	古墳	古墳	県		18基
312	399	女瀬平横穴群	竜田町陳内女瀬平	古墳	古墳		長薫寺横穴群を含む	
313	605	長薫寺古墳	黒髪町7丁目	古墳	古墳			円墳横穴式石室
314	606	宇留毛小橋橋際横穴群	黒髪町7丁目	古墳	古墳			
315	607	つつじヶ丘横穴群	黒髪町7丁目	古墳	古墳	県		
316	608	宇留毛神社周辺遺跡群	黒髪町6・8丁目	古墳・中世	包蔵地		宇留毛神社境内古墳群・立田山南古墳(上・下)・宇留毛浦山火葬墓・立田山城跡	立田山南麓古墳円墳2基横穴式石室
317	400	竜田口	龍田町女瀬、黒髪7丁目	縄文～平安	包蔵地			
318	390	堂前畠	龍田町	縄文～平安	包蔵地			
319	687	神園	長嶺町上西原	縄文～平安	包蔵地			
320	706	長嶺遺跡群	長嶺町	縄文～平安	包蔵地		長嶺遺跡・中山叶遺跡・中山五輪塔遺跡(若殿塚遺跡)・馬場居屋敷遺跡・長嶺南遺跡・坂田長者屋敷跡・長嶺石神碑・坂田家墓地	石神碑天文18年銘
321	707	王田	上南部町王田	縄文～平安	包蔵地			黒髪式合口甕棺
322	392	牧鶴遺跡群	龍田町上立田	古墳	包蔵地		牧鶴古墳・西牧鶴箱式石棺群・中牧鶴箱式石棺群	
323	709	下南部	下南部町下山	縄文～古墳	包蔵地			須玖式甕棺
324	708	平ノ山	上南部町		包蔵地			
325	710	北小迫	御領町		包蔵地			
326	711	南小迫	御領町	縄文～平安	包蔵地			
327	724	八反田居屋敷	長嶺町		包蔵地			
328	723	八反田遺跡群	長嶺町八反田	縄文・中世	包蔵地		殿山古墳参考地	縄文後晩期、土偶

表3 白川関連遺跡周辺遺跡一覧(3)

熊本県(43)熊本市(201)

現番号	新番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
329	712	長嶺南	長嶺町南居屋敷	弥生・中世	包蔵地		長嶺広福寺跡・長嶺南遺跡・長嶺共有墓地	須玖式甕棺・寛文・延宝・元禄・正徳の記念碑銘
330	713	長嶺油出	長嶺町		包蔵地			
331	725	松の窪			包蔵地			
332	726	新南部遺跡群	新南部町	旧石器～平安	包蔵地		新南部A～D遺跡・北久根山遺跡・西谷遺跡・小関原遺跡・小関小松山墓棺遺跡・新南部三石遺跡	県北バイパス調査、市マンション調査、田辺昭三調査などあり
333	929	南原			包蔵地			
334	728	乾原・迎八反田	長嶺町乾原・迎八反田	縄文～平安	包蔵地		乾原迎・八反田遺跡・田の迎遺跡	乾原縄文後晩期中心、迎八反田縄文早期中心
335	643	渡鹿遺跡群	渡鹿5丁目	縄文・弥生	包蔵地		渡鹿貝塚・北原墓棺遺跡	渡鹿貝塚阿高・鐘ヶ崎式、北原須玖式甕棺、板碑釈迦像天文16年銘
336	644	渡鹿菅原神社境内	渡鹿6丁目		神社	市		市指定史跡
337	645	辻	渡鹿7丁目	縄文～平安	包蔵地			縄文後晩期、へら描き土器・墨書土器
338	731	新南部西原	新南部町	縄文～平安	集落		保田窪地蔵碑	
339	657	南平上	新大江3丁目南平上	奈良・平安	包蔵地			
340	656	帯山遺跡群	帯山1丁目	縄文～平安	包蔵地		帯山遺跡・保田窪遺跡	布目瓦、曾畑、阿高、竹崎
341	654	保田窪東一本松		縄文～平安	包蔵地			
342	655	三郎塚	健軍町	縄文～平安	包蔵地			
345	734	新外B	健軍町小峰	縄文～平安	包蔵地			
346	733	小嶺	健軍町小峰	縄文～平安	包蔵地			
364	704	中山	小山町	縄文～平安	包蔵地			
365	703	椋(梅)谷寺瓦窯跡群	小山町	奈良・平安	生産		小山瓦窯跡群	パイコクジ
366	702	小山上	小山町	弥生	包蔵地			
367	701	御船塚	小山町御船塚	縄文・中世	包蔵地			
368	705	小山中伏塚	小山町	弥生	墳墓		馬場氏裏山板碑	甕棺墓、銅剣出土
369	714	上黒迫	戸島町	縄文・中世	包蔵地			二岡中学校校庭
370	718	戸島京塚	戸島町	縄文～中世	包蔵地			
371	717	戸島北向(戸島西)	戸島町	縄文・中世	包蔵地		礼の辻遺跡・戸島香福寺跡・戸島神社境内古塔碑群	
372	715	戸島東	戸島町日向	縄文	包蔵地			
373	716	戸島経塚跡	戸島町日向	縄文・中世	包蔵地			経塚一字一石埋納
374	721	葉山遺跡群	戸島町葉山	旧石器・縄文	包蔵地		葉山遺跡・葉山B遺跡・日向下六地蔵	
375	719	戸島桑鶴	戸島町	縄文～平安	包蔵地			
376	720	下佐土原	戸島町	縄文～平安	包蔵地			
377	732	日向棧敷尾	戸島町日向	縄文	包蔵地		日向遺跡	
406	372	麻生田	麻生田町	縄文～平安	包蔵地			
414	-	古代官道	鶴羽田町上の原	古代	包蔵地			
415	-	須屋園観音堂板碑	清水町八景水谷	中世	石造物			
416	-	八景水谷塔の本五輪残欠	清水町八景水谷	中世	石造物			
420	-	硝酸蔵	徳王町才道	近代	建造物			
438	-	二里木跡	龍田町上立田	近世	交通			
439	-	武蔵塚	龍田町弓削	近世	墓			宮本武蔵墓正保2年
440	-	セボンサン	龍田町弓削	中世	墳墓			経文ある小石出土
441	-	弓削寺跡	龍田町弓削	中世	神社			五輪塔
442	-	弓削薬師堂板碑	弓削町	中世	石造物			大永6年銘線刻仏像
443	-	弓削山伏塚板碑	弓削町	中世	石造物			天文17年銘人骨出土
444	-	菊池家墓地	平山町	中世	墓地			宝篋印塔、元亀2年銘
464	-	永福寺跡	清水町高平	中世	神社			臨濟宗天文21年
465	-	浄国禅寺古塔碑	清水町高平	中世	石造物	県		塑像巡礼姿観音立像、松本喜三郎の作
466	-	天福寺跡	清水町打越	中世	神社			天台、布目瓦出土
472	-	採釣園跡	坪井4丁目	近世	園池			
473	-	長岡監物屋敷跡	坪井4丁目	近世	包蔵地			
474	-	成就院大喜山覚勝寺跡	中坪井町	中世	神社			
475	-	浄国寺跡	壺川1丁目	中世	神社			
480	-	報恩禅寺境内石造物	坪井3丁目	中世	石造物			豪潮宝篋印塔・坪井の跡
481	-	お薬園跡	薬園町	近世	包蔵地			藩主重賢開園
488	-	狐穴古墳参考地	黒髪町下立田	古墳	古墳			
489	-	宇留毛城床古墳	黒髪町宇留毛城床	古墳	古墳			石材各所に散乱
490	-	渡鹿板碑	大江渡鹿	中世	石造物			釈迦座像、天文16年
491	-	八丁馬場板碑群	神水本町	中世	石造物			3基
501	-	伝立田将監墓・古塔碑群	龍田町上立田	中世	石造物			五輪塔
502	-	乙姫宮	上南部町	中世	神社			
503	-	上南部板碑	上南部町	中世	石造物			元亀2年供奉
504	-	椋園寺境内古塔碑群	小山町	中世	石造物			宝篋印塔、一字一石、五輪塔
505	-	御船塚墓地群	小山町	中世	墓地			
506	-	中山畜犬管理所五輪塔	小山町	中世	石造物			同所出土
507	793	円通寺跡	戸島町	中世	神社			地藏堂、観音堂、塔碑
508	-	戸島神社入口古塔碑群	戸島町	中世	石造物			宝篋印塔、五輪塔



表4 白川関連遺跡周辺遺跡一覧(4)

熊本県(43)熊本市(201)

現番号	新番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
510	-	南郷往還跡	長嶺町、戸島町	近世	交通			
511	727	市営託麻団地	新南部託麻団地	縄文	包蔵地			押型文、御領式
512	730	西原	新南部	縄文	包蔵地			押型文
513	655	三郎塚古墳	健軍町三郎	古墳	古墳			
534	602	七軒町	七軒町	縄文~中世	包蔵地			
535	-	一夜塘	小幡町	近世	建造物			
536	-	上河原	黒髪町	縄文~古代	包蔵地			
543	-	常楽寺	黒髪町 下立田・小峰	中世	寺社			
	924	中江	中江町		包蔵地			

熊本県(43)益城町(443)

現番号	新番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
001		小久保	上小久保 下小久保	縄文~中世	包蔵地			
002		宮園B	木山 遠見塚ほか	縄文・弥生	包蔵地			縄文~、弥生中期土器
003		遠見塚	木山 遠見塚	縄文~古代	包蔵地			
004		八久保	八久保	古墳・古代	包蔵地			
005		上面ノ原	田原 上面ノ原	縄文~中世	包蔵地			
006		上石岸原	田原 上石岸原	縄文~中世	包蔵地			
035		迫田横穴群	寺中 上陣内	古墳	古墳			益城町史に名称あり
066		寺中	寺中	縄文~平安	包蔵地			

熊本県(43)西合志町(407)

現番号	新番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
063		宿の山(須屋)	須屋 宿の山	弥生	埋葬			弥生合口甕棺・土師器片一括
064		梨の木	須屋 梨の木	縄文	包蔵地			
065		向島	須屋 向島	縄文	包蔵地			
066		須屋城跡	須屋 城跡	中世	城			中世城跡
067		妙泉寺跡	須屋	中世	寺社			

熊本県(43)菊陽町(404)

現番号	新番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
002		新山	津久礼 新山	弥生~古代	包蔵地			
003		上沖野	原水 上沖野	縄文	包蔵地			
004		駄飼代	津久礼 駄飼代	縄文	包蔵地			
005		久保田下原	久保田 下原	弥生~平安	包蔵地			
006		久保田中原	久保田 中原	縄文・弥生	包蔵地			
007		久保田出分上原	久保田 上原	古墳	包蔵地			土師器
013		原水南上原	原水 上原	縄文~中世	包蔵地			
014		今石	津久礼 今石	縄文~中世	包蔵地			
015		津久礼今石城跡	津久礼 今石	中世	城	町		
016		津久礼六地藏	津久礼 梅木	縄文・弥生	石造物	町		
017		井口下鶴	辛川 下鶴	縄文・弥生	包蔵地			
018		久保	辛川 久保	縄文・弥生	包蔵地			
019		梅ノ木	津久礼 梅の木	弥生	包蔵地			
020		今石横穴群	津久礼 今石	古墳	古墳	町		9基
021		上山立窪	辛川 上山立窪	縄文	包蔵地			
022		中屋敷	辛川 中屋敷	縄文	包蔵地			
023		東弁指	辛川 東弁指	縄文	包蔵地			
024		池ノ窪	辛川 池ノ窪	縄文	包蔵地			
025		辛川東原	辛川 東原ほか	縄文・古墳	包蔵地			
026		曲手中原	曲手 中原	縄文~古代	包蔵地			
027		狸坂ABC	曲手 部田	縄文	包蔵地			縄文後期遺物散布
028		津留	久保田 津留	古代	包蔵地			段丘湧泉地、土師器・須恵器
029		馬場楠井手の鼻線り	曲手 西鶴	近世	建造物	町		
030		川久保	久保田 川久保	弥生	包蔵地			
032		六道塚古墳	辛川 塚原	古墳	古墳	町		畑中石材露出する、墳形不明
033		塚原	辛川 塚原	縄文~古墳	包蔵地			
034		南郷往還跡	辛川 桃尾	近世	交通	町		
035		お茶屋の井戸	辛川 下中原	近世	井泉			
036		道明の石畳道路	道明	近世	建造物			
037		広街道	津久礼	縄文早期	包蔵地			
038		上地寄進の記念碑	辛川		石造物			
043		山ノ上	戸次	縄文	包蔵地			
044		部田	曲手 部田	縄文	包蔵地			縄文後期
045		上中原	辛川	縄文	包蔵地			縄文後期
046		下石ヶ迫	辛川	旧石器	包蔵地			
047		西鶴	曲手	縄文・弥生	包蔵地			
051		金福	戸次	弥生	包蔵地			



## 第三章 新南部遺跡群10次の調査

### 第1節 調査の概要 (第1図)

白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う新南部遺跡群10次は、確認調査の結果を受け事業地内に調査箇所を設定した。総面積4652㎡である。

調査対象地は重機による表土掘削を行った。その後、調査区の基準点及びメッシュ杭の設置を(株)有明測量開発社に業務委託し、世界測地系の国土座標軸を使用、5m×5mの区画でグリッドを設定した。西から東へアルファベット(A～T)、南から北へアラビア数字(1～26)をふり、両者を組み合わせてグリッド名をつけた。

表土掘削後、調査地で清掃し遺構検出を行った。遺構は土層断面図作成及び遺構の検証のためベルトを残し、図面を取った後に完掘、平面図を作成した。遺構実測図については、一部を(株)有明測量開発社に業務委託したが、各調査員が補足部分等の修正を行い、精度の高い図面に仕上がるように努めた。又、それぞれの調査段階においてモノクロとリバーサルの2種類を用いて写真撮影(35mm又は中判)を行い、空中写真は計2回実施した。いずれも九州航空株式会社に業務委託を行い、広大な調査地全体を明らかにすることができた。

発掘調査は平成25年7月より開始し、平成27年3月に終了した。

### 第2節 基本層序 (第2図)

当遺跡で確認された層序は基本土層柱状図にまとめる。調査地によって各層位が削平・再堆積・水成堆積が認められる場合、その都度層位比較をおこない細分している。但し、調査区内で同一層がうまく続かなかつたり、若干性質が異なったりすることが見られるが、これは河川沿いの堆積の特性と考えられる。

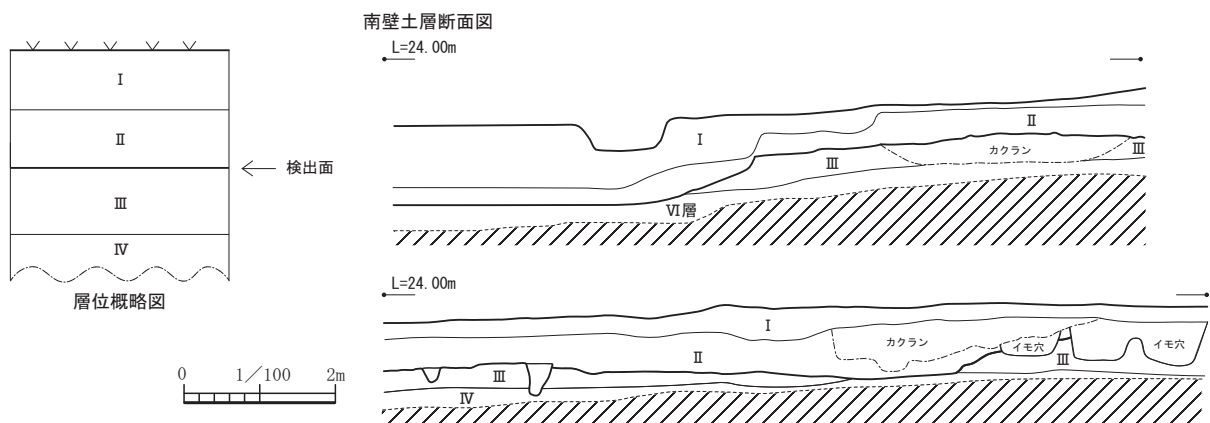
I層 褐灰色砂質土(7.5YR4/1) 白川の洪水層。しまり非常に弱い。地点によって20cm～100cmを測る。

II層 暗褐土(10YR3/3) 旧耕作土。砂質土であるがしまりは強い。地点によって20cm～50cmを測る。

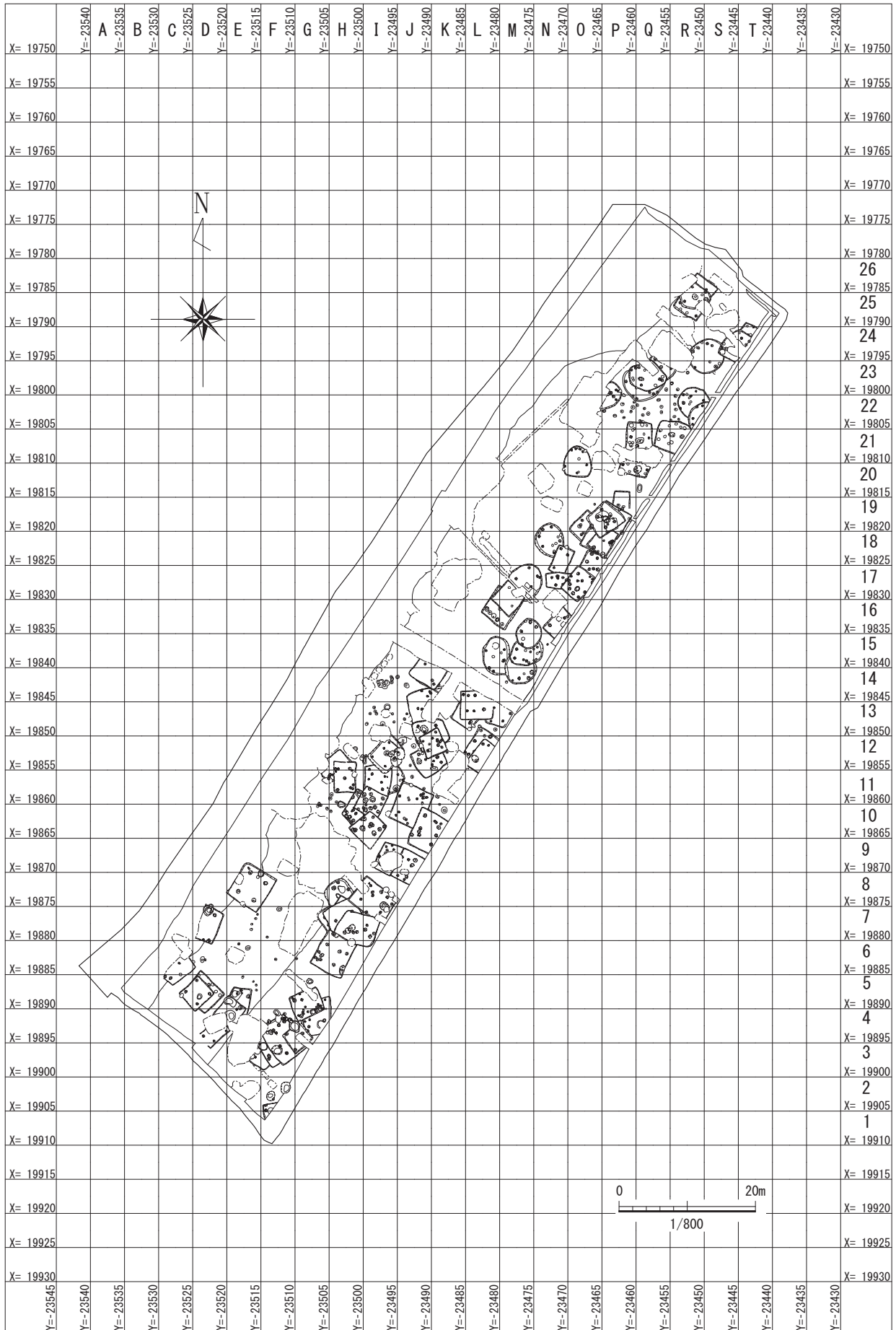
III層 暗褐砂質土(10YR3/4) 土色はIIに近いが、土質は粒子が細かくサラサラした砂質土である。主に弥生時代の遺物が含まれる。地点によっては20cm～30cmを測る。

IV層 黄褐色土(10YR5/8) 粘質が弱く乾燥するサラサラした土質である。この層には縄文時代の遺物が含まれる。

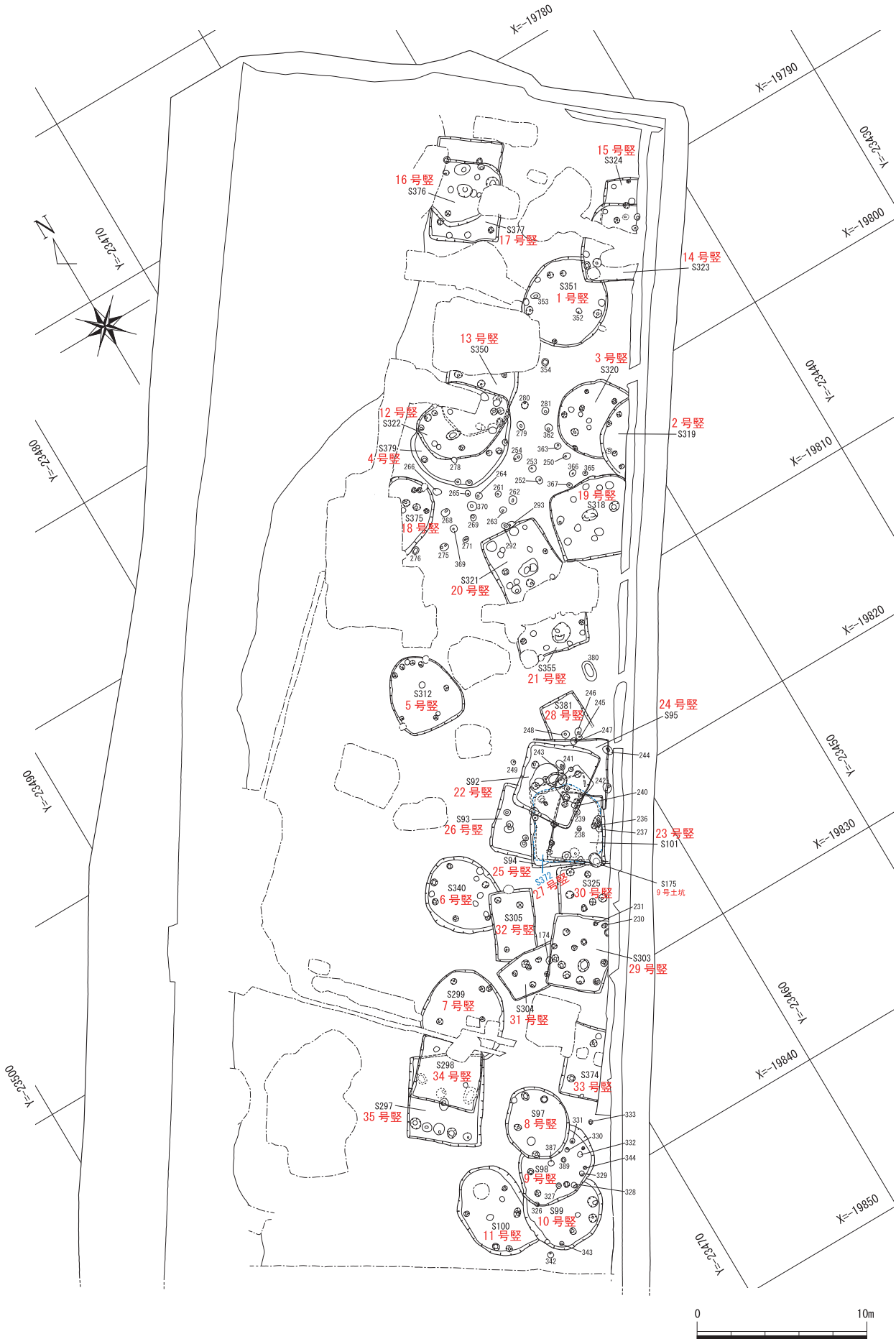
当遺跡の調査方法は、基本土層のI層からII層までを重機で除去した後、III層以下の土層観察用のベルトを残しながら人力で掘り下げる方法をとった。遺構確認面をIII層に設定し調査を進めた。



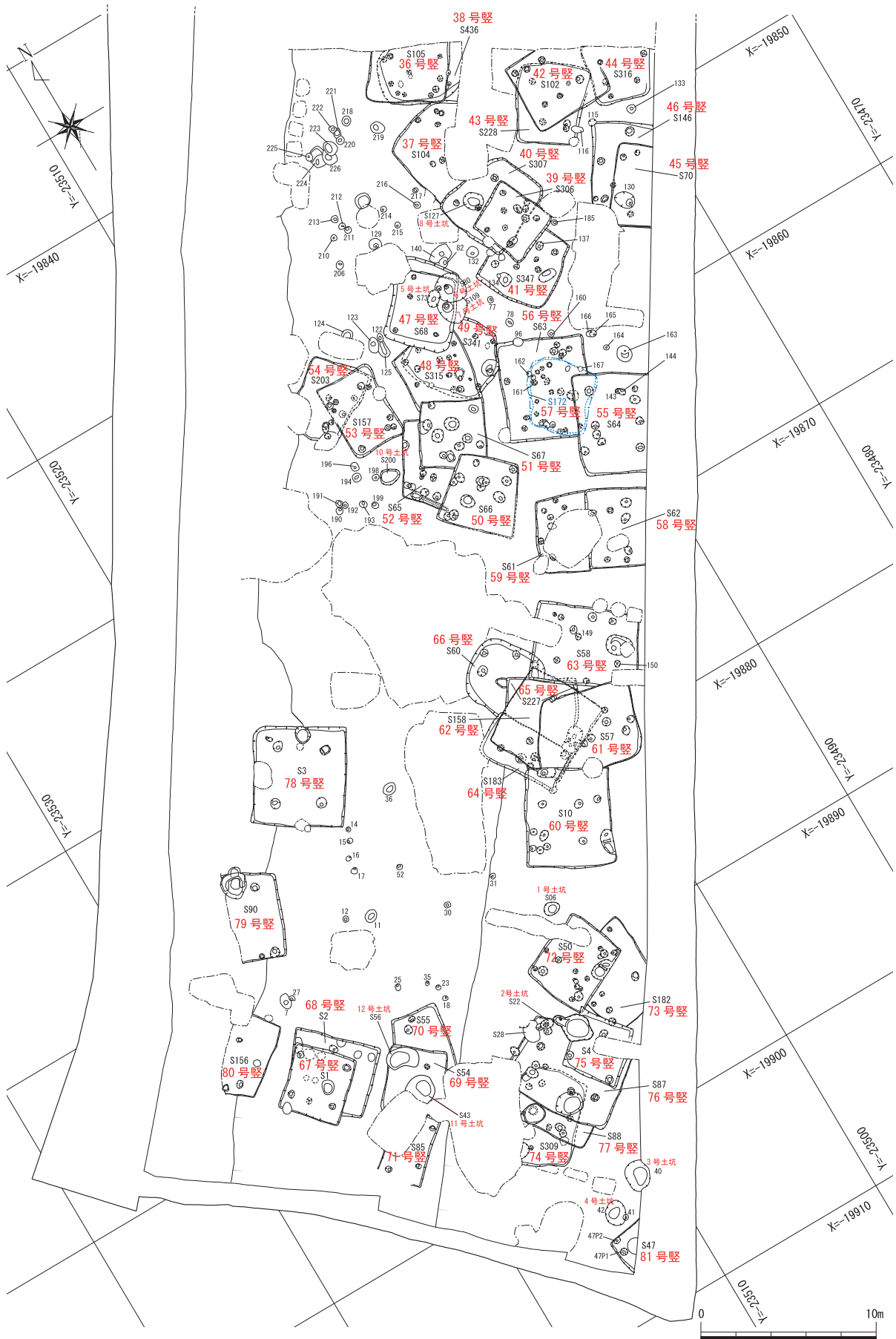
第1図 調査区基本土層模式図及び南壁土層断面図



第2図 新南部遺跡群10次全体遺構配置図及びグリッド図(S=1/800)



第3図 新南部遺跡群10次遺構配置図 北東部(S=1/320)



第4図 新南部遺跡群10次遺構配置図 南西部(S=1/320)

## 第3節 調査の成果

### 1. 遺構の分布（第3・4図）

新南部遺跡群 10次は北東から南西方向に約143m×北西から南東方向に約33mの調査区を設定した。広さは4652㎡である。検出した遺構は縄文時代の竪穴建物11軒、弥生時代の竪穴建物63軒、古墳時代の竪穴建物7軒、土坑12基である。なお、遺構に伴わないピットは番号のみ全体図に記載している。

遺構の分布状況を見ると、調査区の中心部から北東側に縄文時代の竪穴建物の分布が見られ、弥生時代の竪穴建物はほぼ調査区全域にわたって分布する。古墳時代の竪穴建物は南西側に集約できる。

調査区の北西側は、遺構密度が低い分布を示すが、これは、河川際のため低いのか、洪水によって削られ低くなったのかは不明である。

### 2. 遺構・遺物

各遺構・遺物の詳細は第5図から第88図のとおりである。以下は各遺構・遺物を概観する。

#### (1) 竪穴建物

#### 縄文時代

##### 1号竪穴建物【S351】（第5・6図、図版1・18）

R・S-23・24グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ5.19m、幅5.27m、深さ0.32mである。14号竪穴建物に東側の一部を切られる。プランは円形である。壁際に柱穴と思われるピットを11ヶ所確認した。大きさは変わらないが、深さは異なる。炉及び硬化面は確認されず、埋土は2層からなる。

（出土遺物1～15）

1は浅鉢である。内外面とも丁寧にミガキが施されている。口縁部の外面には、2条の沈線をもち内傾する。2は深鉢である。頸部から口縁部まで直行するが、口縁端部で若干内傾する。3は浅鉢である。全体に丁寧にミガキを施している。口縁部には沈線をもたない。4は深鉢である。頸部から口縁部まで直行する。5は高坏形土器である。脚部は幅が狭く、しかも開かず、坏部との境まで上げ底になっている。6・7・8は深鉢の上げ底である。9は紡錘車である。縄文土器片を転用したものと考えられる。10・11・12・13は打製石鏃である。14は磨製石斧である。先端部が欠損している。15は打製石斧である。形状は長方形に近く短冊形と呼ばれるものである。

##### 2号竪穴建物【S319】（第7・8図、図版1・18）

R・S-22グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ4.63m以上、幅1.57m以上、深さ0.20mで調査区外へとのびる。3号竪穴建物を切り、19号竪穴建物に切られる。プランは円形と考えられる。壁際に柱穴と思われるピットを4ヶ所確認した。大きさは変わらないが、深さはP1、P2は深く、P3、P4は浅い。炉及び硬化面は確認されず、埋土は1層からなる。

（出土遺物16～17）

16は深鉢の口縁部の小破片である。文様帯は口縁端部に帯状に粘土を貼り付け、斜めに刻み目が入る。17は縄文土器の底部である。立ち上がりは欠損部より急激に立ち上がっており、形態的には碗の様相を示す。

##### 3号竪穴建物【S320】（第7・8図、図版1・18）

R・S-22・23グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ4.69m、幅2.81m以上、深さ0.22mで、2号竪穴建物におよそ東側半分を切られるが円形のプランと考えられる。壁際に柱穴と思われるピットを数ヶ所確認した。大きさは変わらないが、深さは異なる。炉及び硬化面は確認されず、埋土

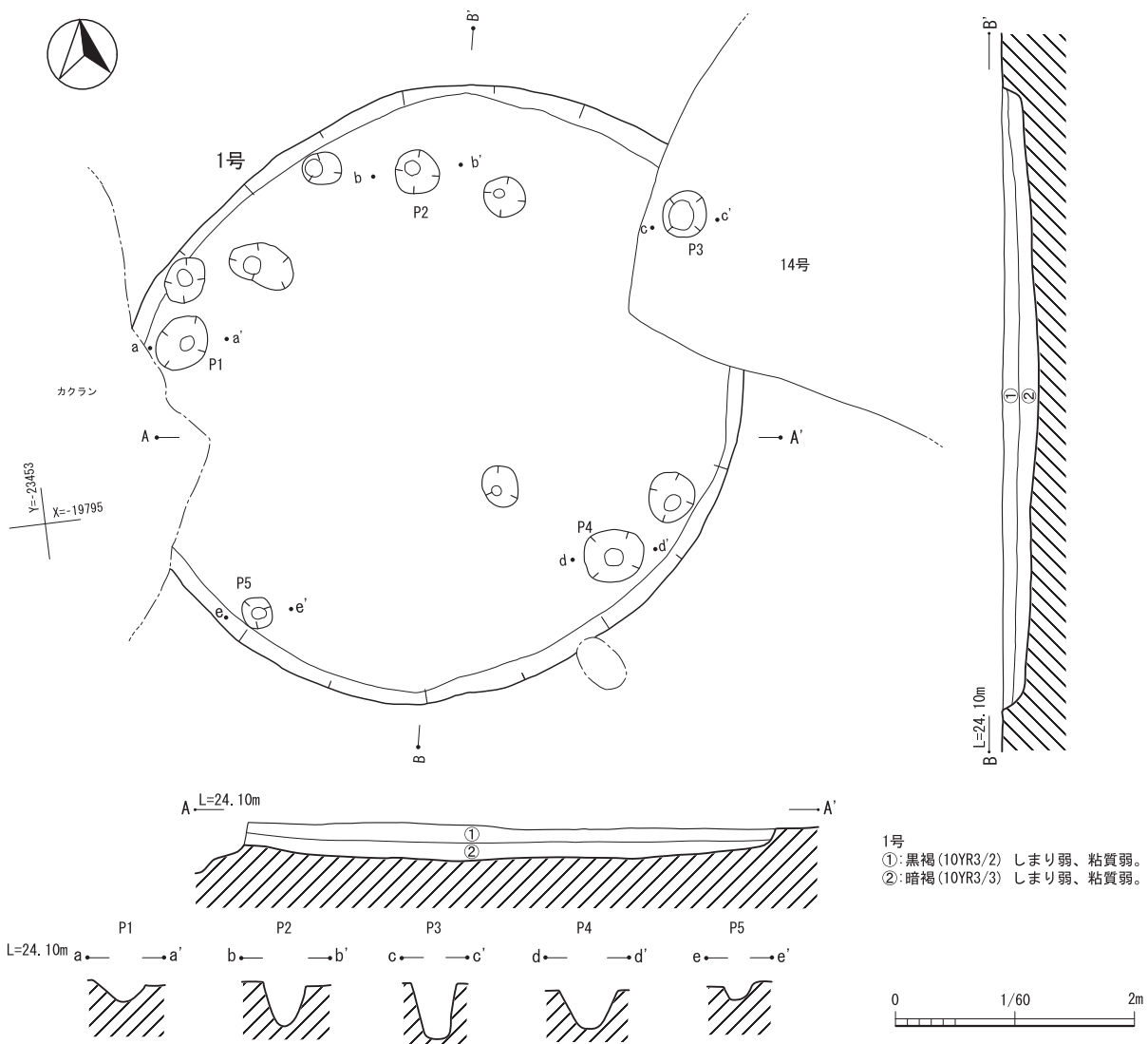
は1層からなる。

(出土遺物 18~25)

18は鉢と考えられる。口縁部が外側にやや開く形状を示し、内面に1条の沈線が入る。19は浅鉢である。口縁部の文様は無文で、くの字を描くように内側に屈曲している。20・21・22・23は深鉢である。20は波状口縁部であるが、文様は無文である。21は波状口縁部で波状頂部の凹点がない。文様は口縁部の外面に2条の沈線はいるが、非常に弱々しいものである。22・23は21同様に波状口縁部で波状頂部の凹点がない。文様は口縁部内面に1条の沈線を巡らせる。胴部の文様帯は無文である。24は深鉢である。器形は、頸部内傾せずほぼ直立している。25は深鉢の胴部片である。内面・外面とも丁寧に磨かれている。内面には使用によるものと思われる焦げ付きがみられる。

4号竪穴建物【S379】(第9図、図版1・19)

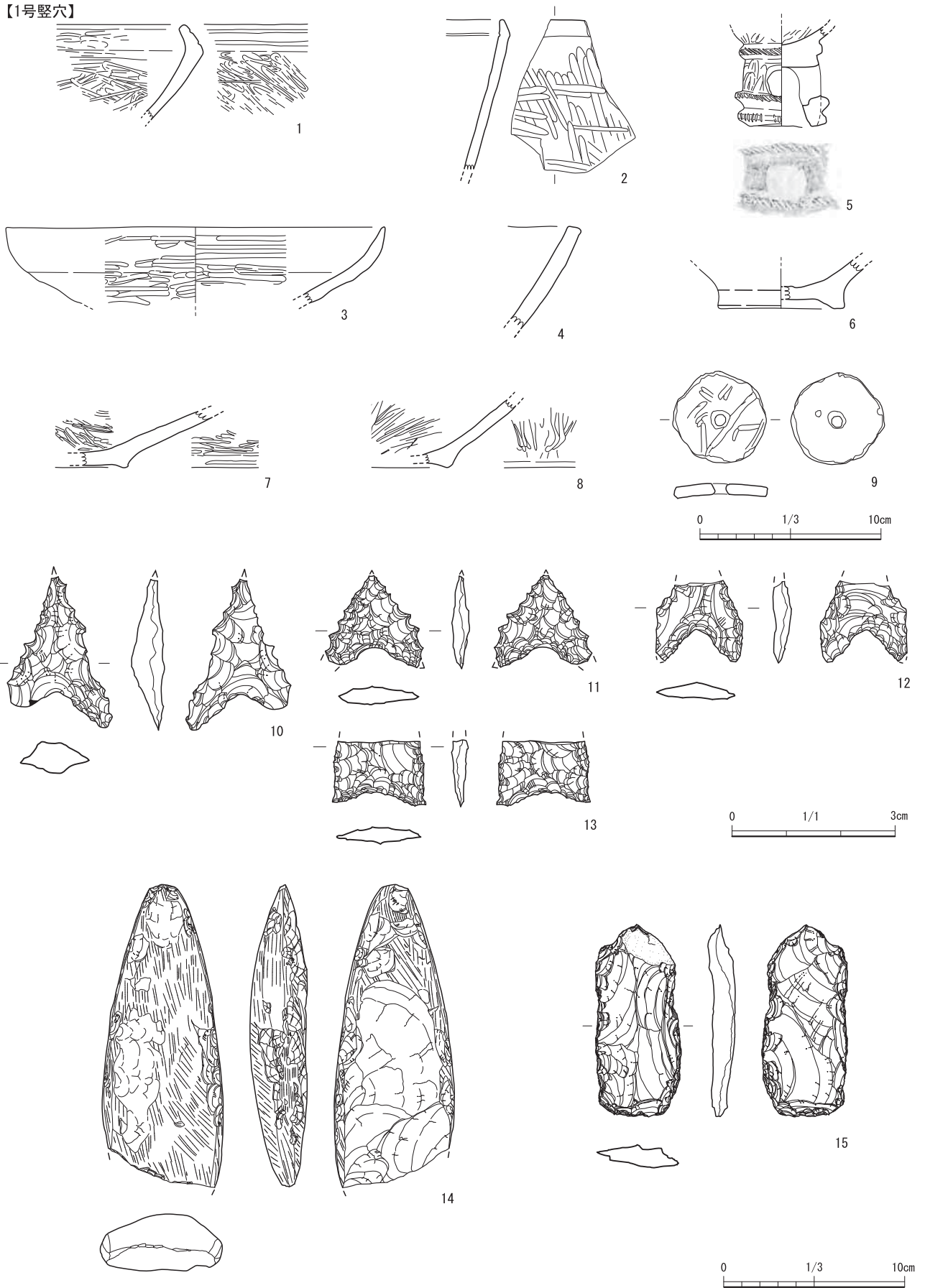
P・Q-22・23グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ5.75m以上、幅4.03m以上、深さ0.25mと大きい。12号竪穴建物に大半を切られる円形のプランと考えられる。壁際に柱穴と思われるピットを数ヶ所確認した。大きさは変わらないが、深さは異なる。硬化面は確認されず、埋土は2層から



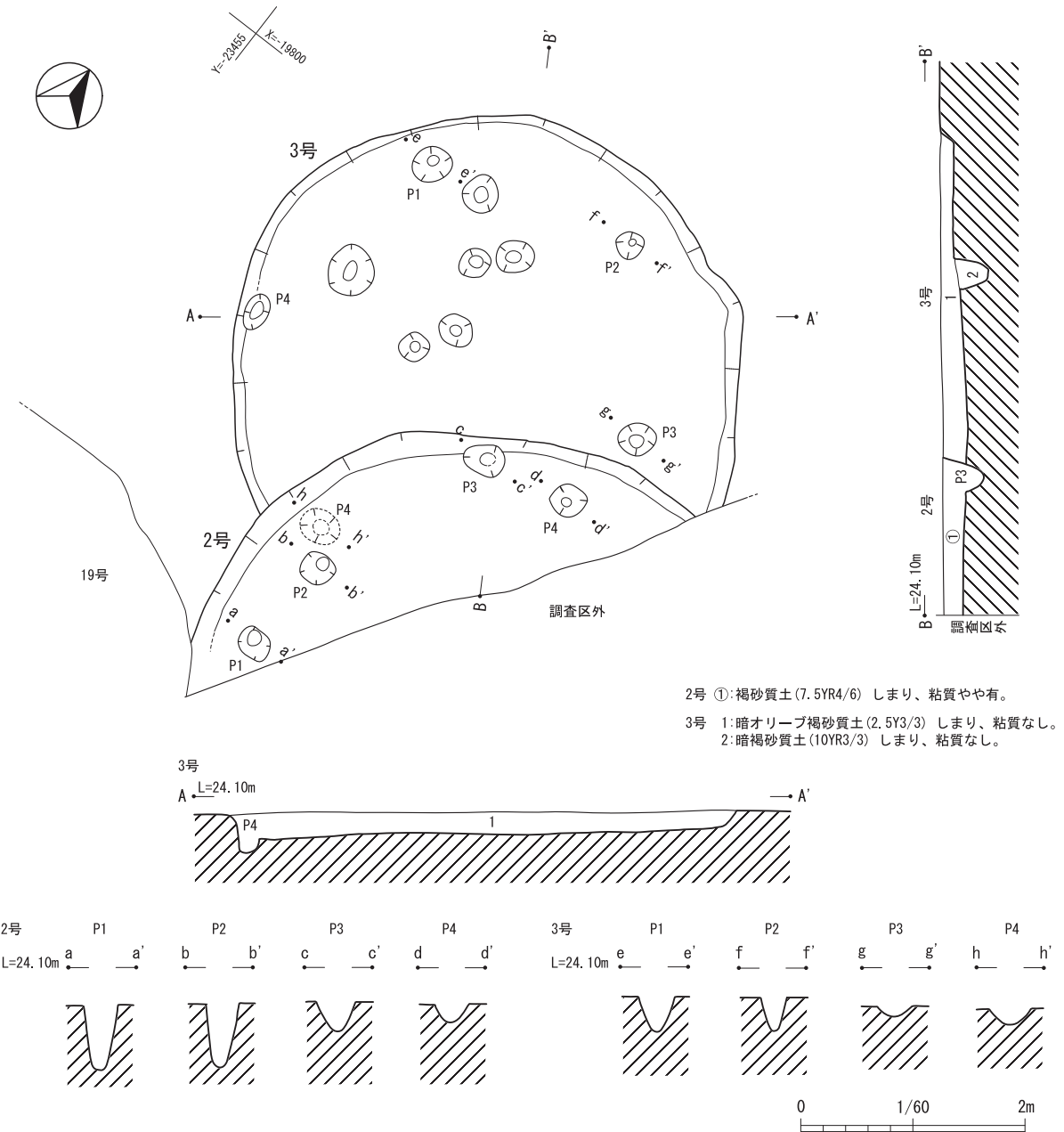
第5図 1号竪穴建物(S351)実測図



【1号竖穴】



第6図 1号竖穴建物(S351)出土遺物実測図



第7図 2・3号竪穴建物(S319・320)実測図

なる。炉は竪穴建物のほぼ中央に位置し、長軸 0.77m、短軸 0.58m、深さ 0.33mを測る。断面は逆台形状を呈する。

(出土遺物 26)

26は深鉢である。口唇部には、小さな山形突起がみられ、波状口縁が退化したものと考えられる。

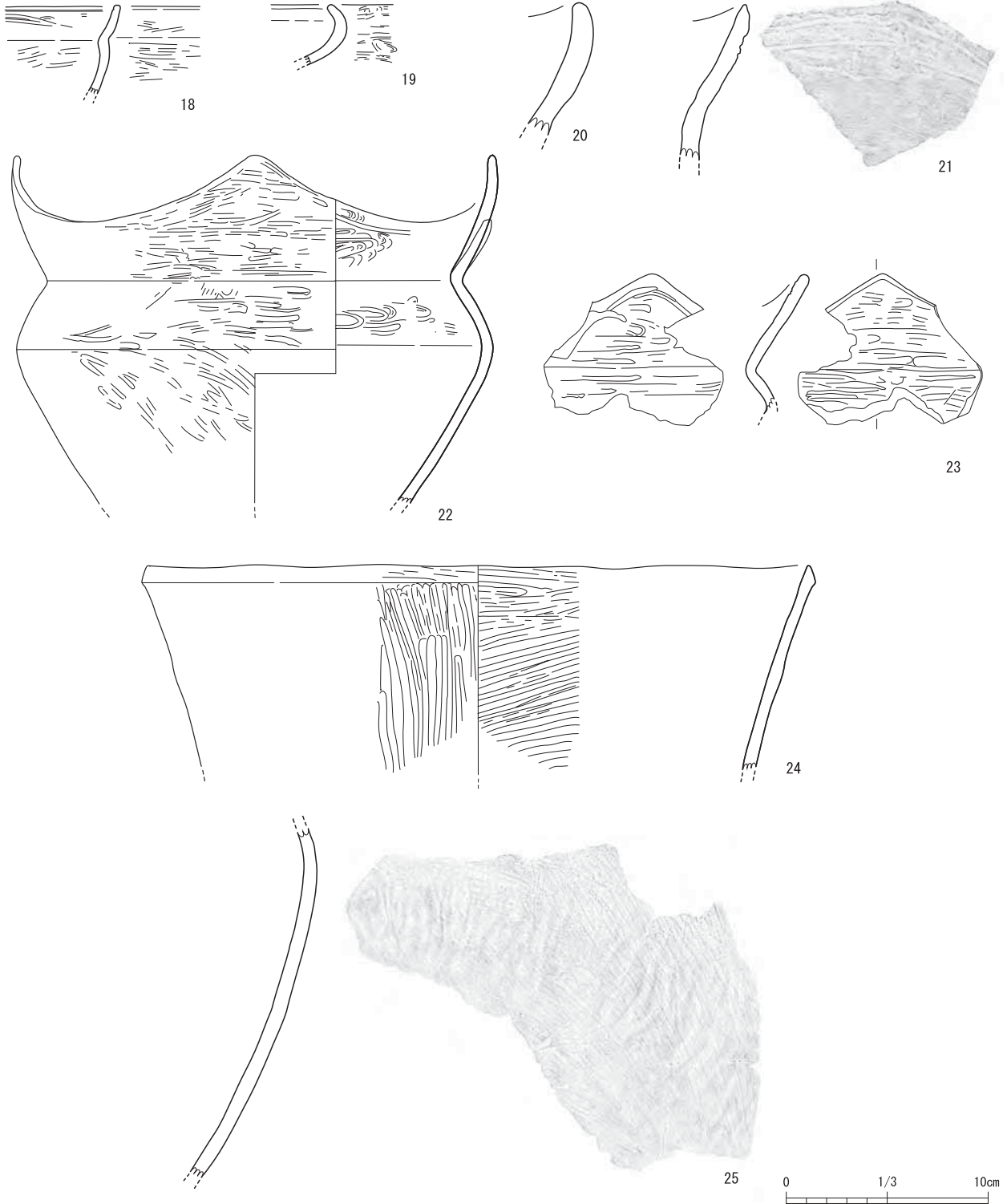
5号竪穴建物【S312】(第10・11・12図、図版1・19)

N・0-20・21グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 4.56m、幅 4.05m、深さ 0.25m、床面積が 15.21㎡である。プランはやや歪で、南側は直線的だが北側は弧を描く。壁際に柱穴と思われるピットを数ヶ所確認した。大きさは変わらないが、深さは異なる。炉及び硬化面は確認されず、埋土は2層からなる。

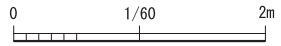
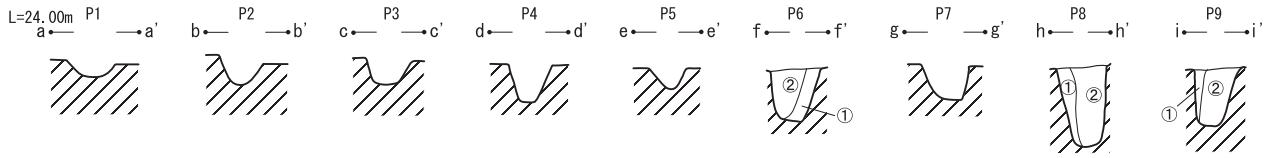
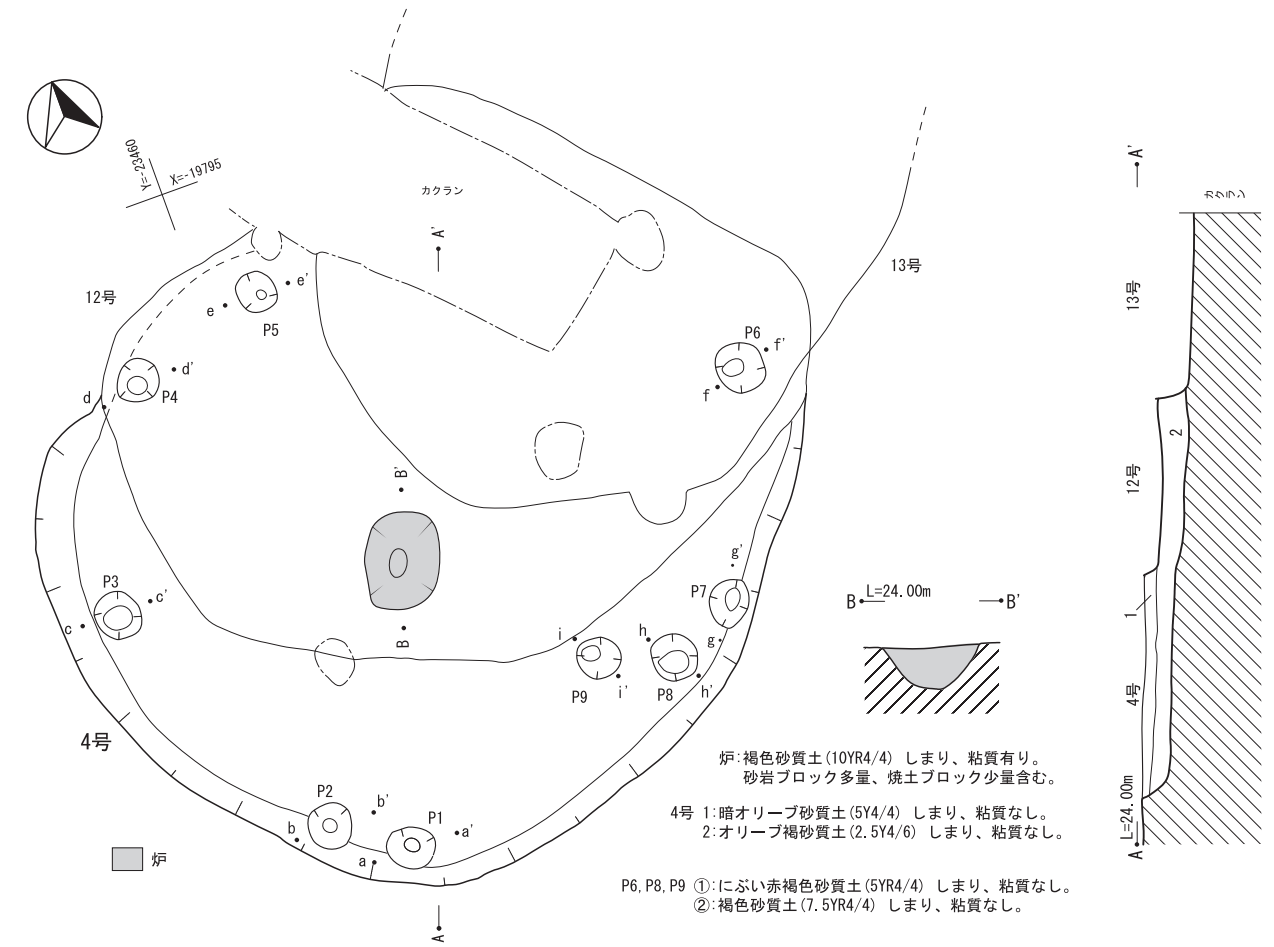
【2号竖穴】



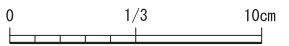
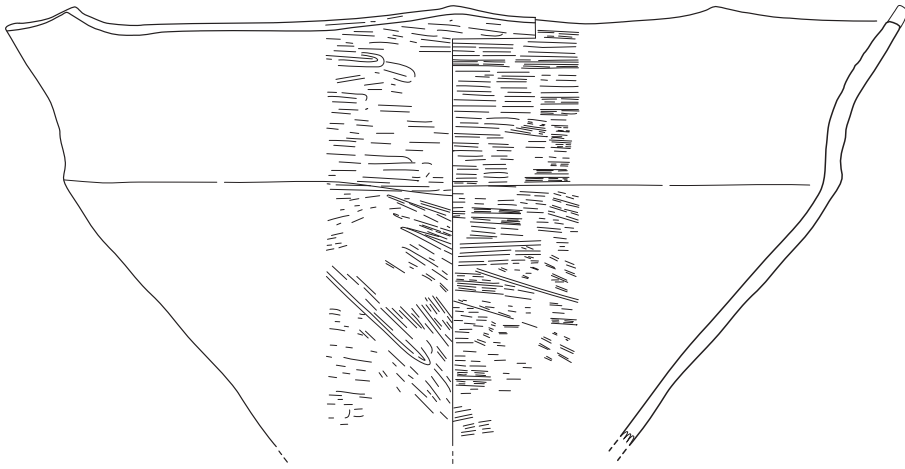
【3号竖穴】



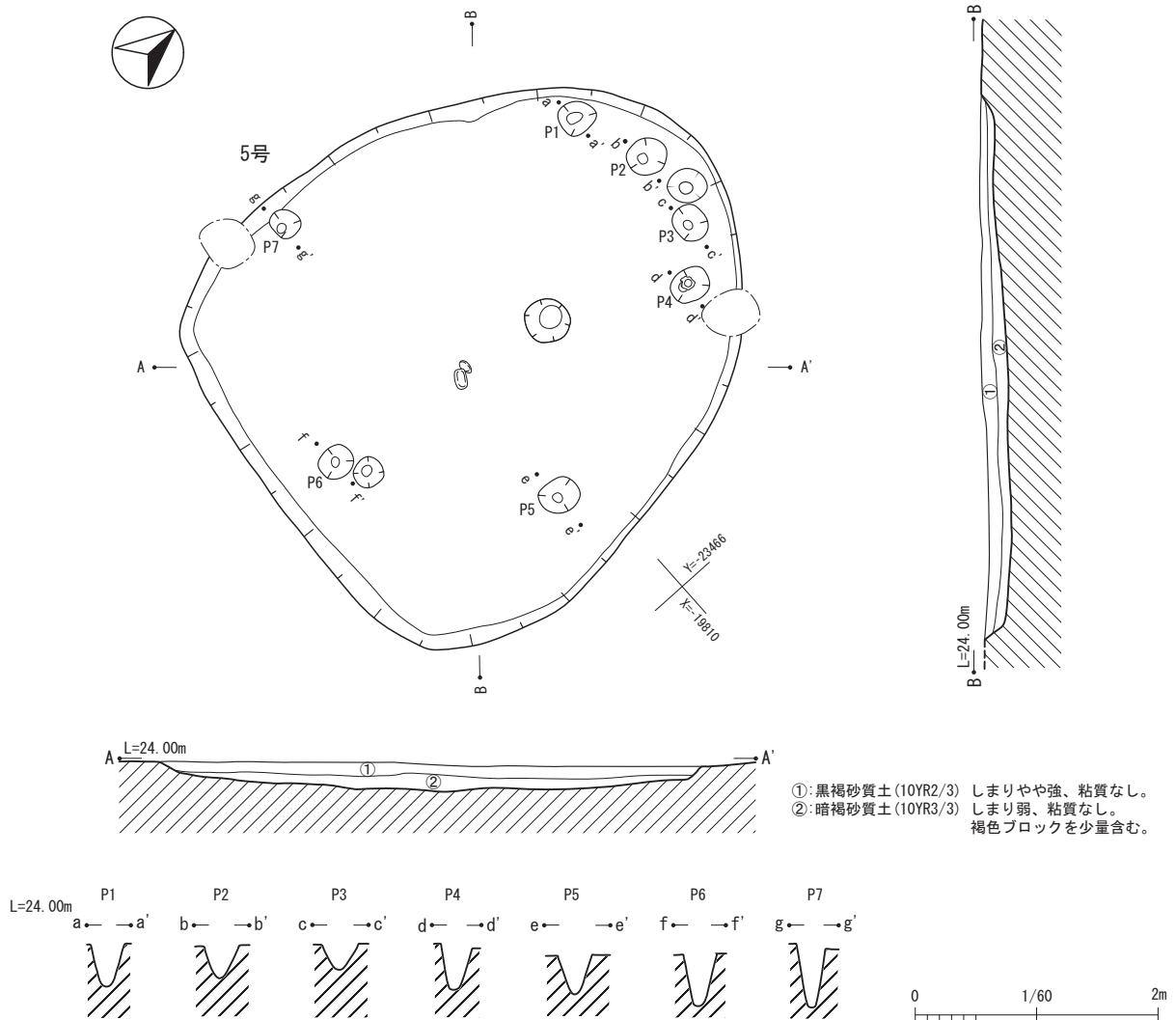
第8図 2・3号竖穴建物(S319・320)出土遺物実測図



【4号竪穴】



第9図 4号竪穴建物 (S379) 及び出土遺物実測図



第10図 5号竪穴建物(S312)実測図

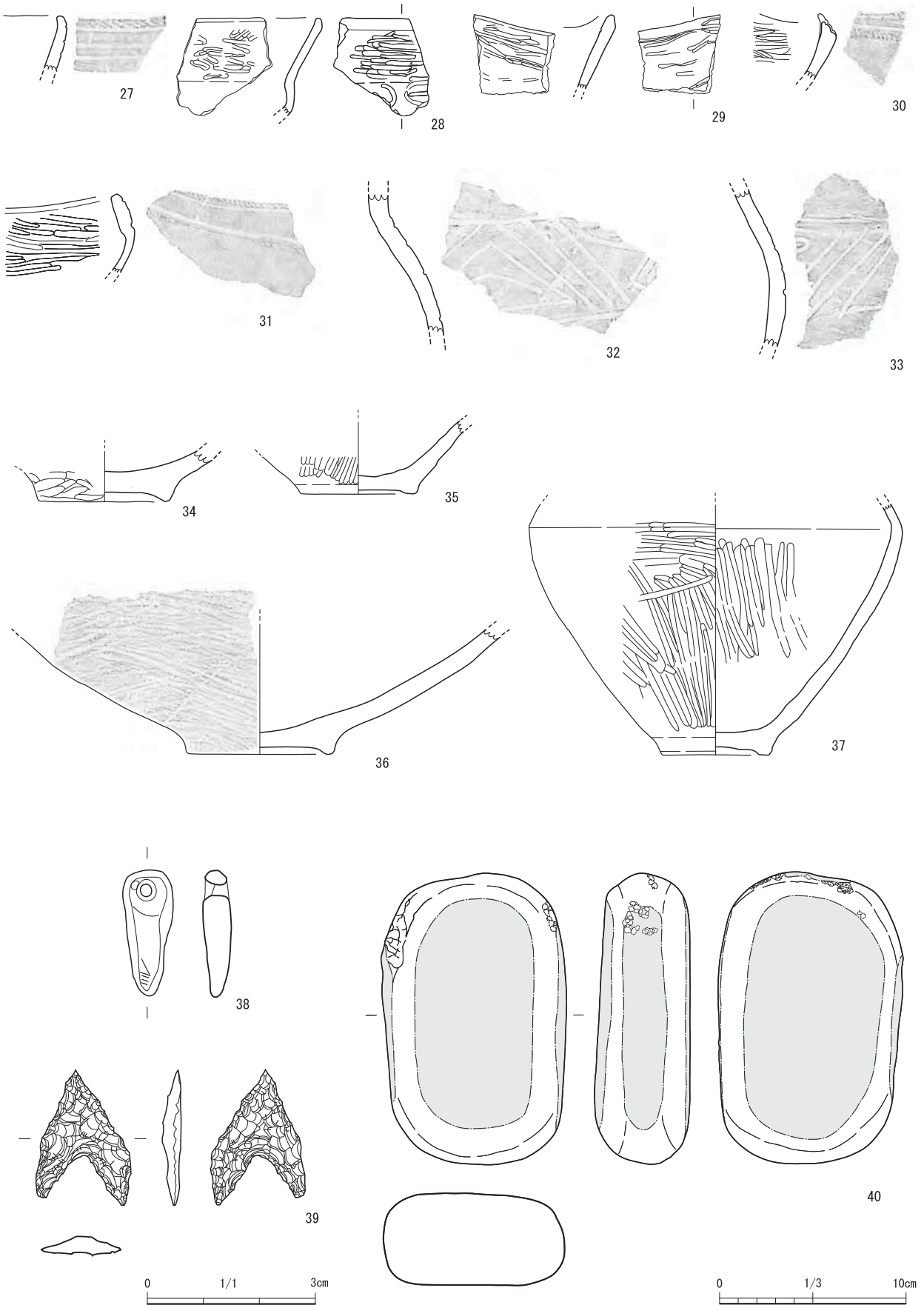
(出土遺物 27~42)

27 は深鉢の口縁部片と思われる。文様は外面に 4 条の沈線とその上下の外側に磨り消し縄文が入る。28 は小型の深鉢である。口縁部は頸部境から直線状に屈折し外傾する。胴部文様は部分的に横走沈線が見られ、X 字状の反転文が見られる。29 は深鉢で波状口縁である。文様は内面に 1 条の沈線が入る。30 は浅鉢の波状口縁部片と思われる。文様は外面に 2 条の沈線とその上下の外側に磨り消し縄文が入る。31 は深鉢で波状口縁である。文様は外面に 2 条の沈線とその上下の外側に磨り消し縄文が入る。32・33 は深鉢の胴部片である。胴部文様は多条沈線でひし形の連続文と沈線で囲まれた部分には磨り消し縄文はいる。34・35・36 は深鉢の底部片で、すべて上げ底であるが、全体形は不明である。37 は深鉢である。胴部と頸部の境には明瞭な段や張り出しは認められず、その境が稜線状になる。底部は 34 同様上げ底である。38 は石製装身具で、形状から垂玉と考えられる。39 は打製石鏃で、形状は二等辺三角形をしている凹基式の石鏃である。40 は磨石である。磨面は 4 面の平面に確認できる。41 は台石である。中央に凹みを持つ。42 は敲石である。形状は楕円形で先端部に若干の使用痕が残る。

6号竪穴建物【S340】(第13図、図版1・19)

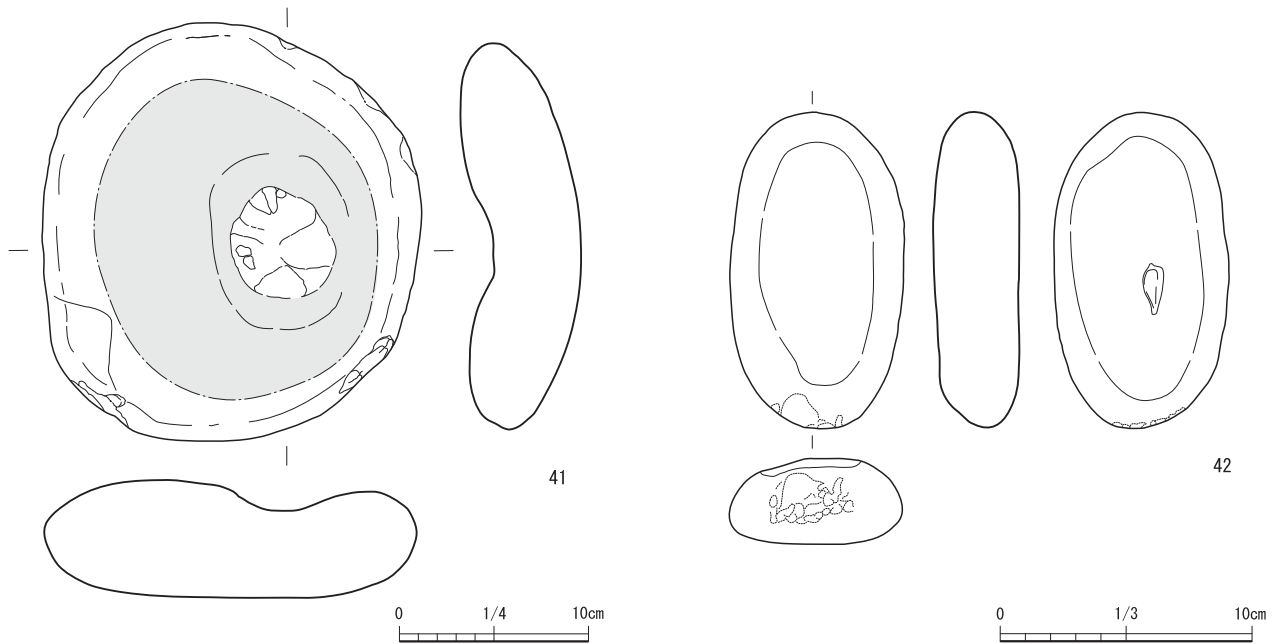
N-18・19 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は長さ 5.09m、幅 4.24m、深さ 0.20m

【5号竪穴】



第11図 5号竪穴建物(S312)出土遺物実測図(1)

## 【5号竪穴】



第12図 5号竪穴建物(S312)出土遺物実測図(2)

である。西側を32号竪穴建物に切られる。プランはやや楕円形である。壁際に柱穴と思われピットを数ヶ所確認した。大きさは変わらないが、深さは異なる。炉及び硬化面は確認されず、埋土は2層からなる(出土遺物43～48)

43・44・45は深鉢の波状口縁部片である。口縁部の文様は、沈線2条とその外側に縄文を部分的に残した磨り消し縄文で構成されている。46は深鉢の波状口縁部片である。文様は外面に1条の沈線がめぐる。47は小破片のため器形は不明である。胴部文様は横走沈線を主とし6条の沈線を施している。沈線と沈線の間にはX字状の反転文があり上部には刺突列点が見られる。48は横型の石匙である。

## 7号竪穴建物【S299】(第14図、図版2・19)

M・N-17グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ4.91m以上、幅4.02m、深さ0.20mである。西側を34号竪穴建物に切られる。やや楕円形のプランで北側の立ち上がりは緩やかに立ち上がる。遺構の南側は攪乱に壊されている部分が多く、遺構の性格をつかみきれなかった。遺構内でいくつかのピットを確認したが柱穴と断定できるものはなかった。埋土は2層からなる。

(出土遺物49・50)

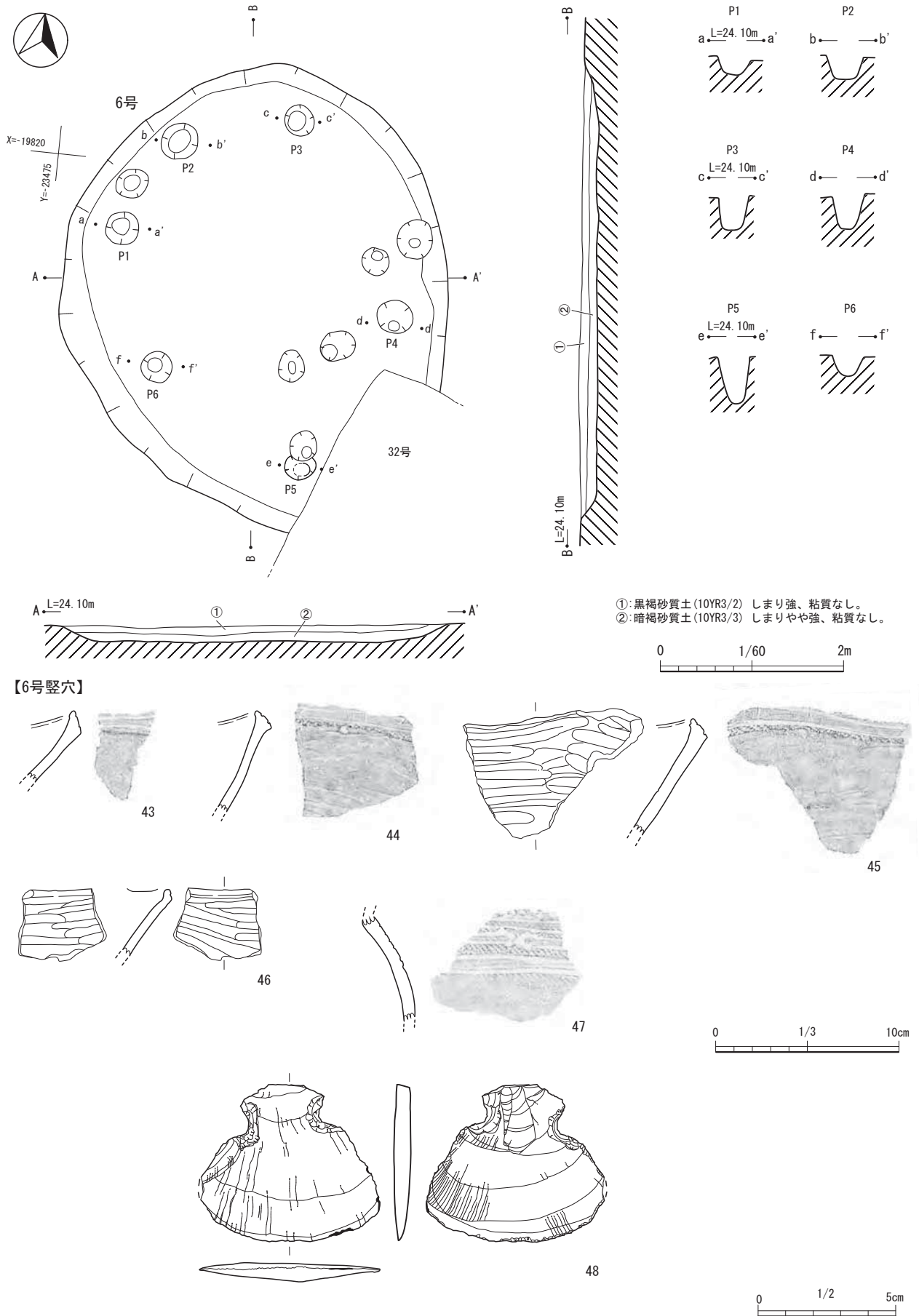
49・50は深鉢の小破片と考えられる。

## 8号～11号竪穴建物

L-14・15、M・N-14・15・16グリッドで確認された遺構で4軒の竪穴建物の切り合いがある。切り合いは(古)11号→10号→9号→8号(新)の順で、少しずつ横にずれながら確認できた。

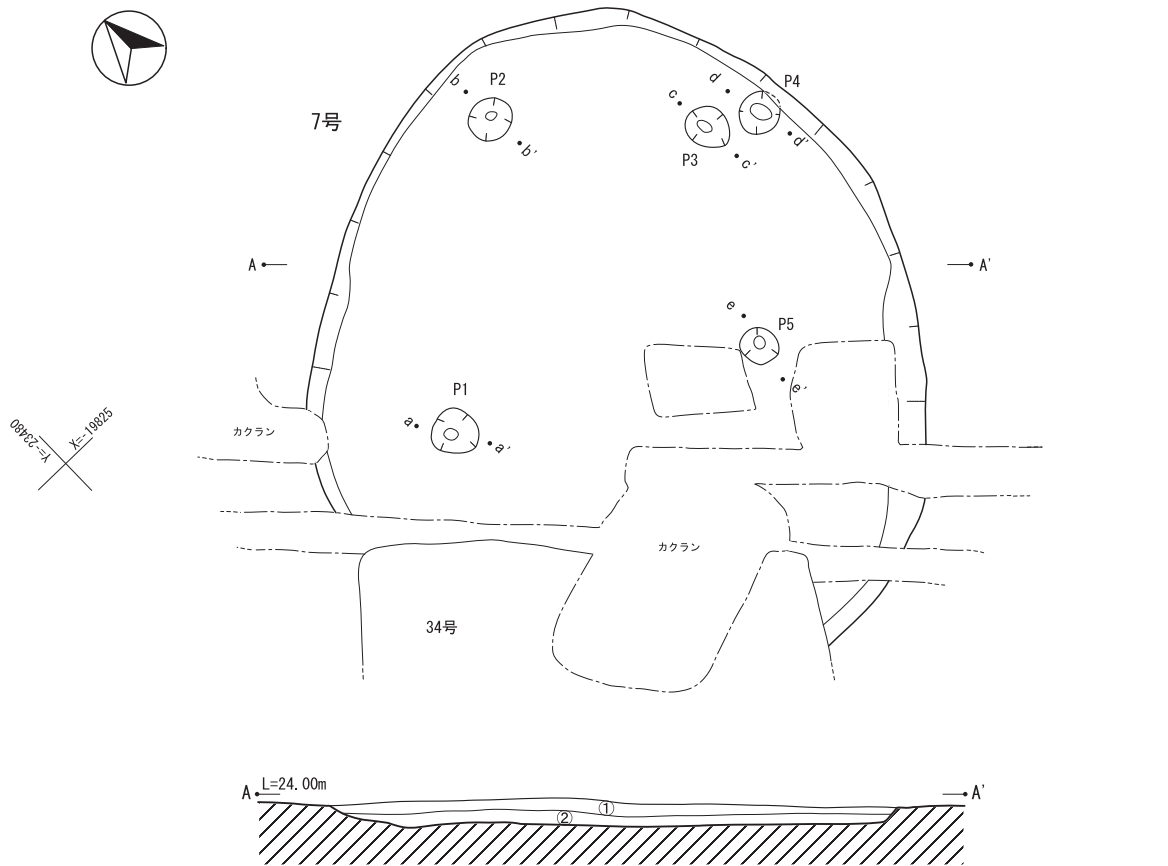
## 8号竪穴建物【S97】(第15・16図、図版2・20)

M・N-15・16グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ4.45m、幅3.82m、深さ0.30

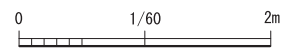
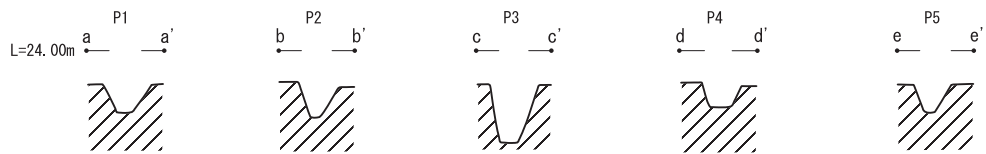


第13図 6号竪穴建物(S340)及び出土遺物実測図

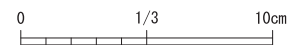
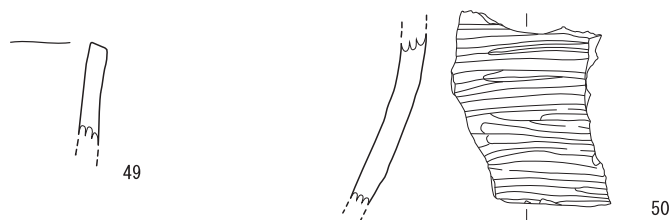




- ①:暗褐色砂質土(10YR3/3) しまり弱、粘質なし。
- ②:暗褐色砂質土(10YR3/3) しまり弱、粘質なし。砂岩ブロック(5mm~1cm大)を多く含む。



【7号竪穴】



第14図 7号竪穴建物(S299)及び出土遺物実測図

m、床面積が 12.71 m<sup>2</sup>である。4 軒の建物の切り合い関係の中で一番新しい遺構となる。プランは円形、建物の立ち上がりは緩やかで、壁際に柱穴と思われるピットを 6ヶ所確認した。これらの柱穴は、大きさは変わらないが、建物の西側にある P1・P4 はやや深く、北側にある P2・P3 は浅くなる傾向がみられる。断面で確認しても西側がやや深く、北側、東側が浅くなる。遺構が掘り込まれた時点で傾斜があり、柱穴の深さに差が生じたと思われる。炉及び硬化面は確認されず、埋土は 2層からなる。

(出土遺物は 51・52)

51 は深鉢の底部で平底である。52 は打製石斧である。片面に自然面を残し刃部のみ二次加工を加えている。その他、器種不明の輝緑凝灰岩の石片を写真図版のみで掲載している。

#### 9 号堅穴建物【S98】(第 15・16 図、図版 2・20)

M・N-15 グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ 3.75m 以上、幅 4.83m、深さ 0.22 m である。8 号堅穴建物に切られ 10 号堅穴建物を切る。プランは円形である。壁際に柱穴と思われるピットを 4ヶ所確認した。P3 は小さなピットであるが、P1・2・4 は同じ位の大きさである。炉及び硬化面は確認されず、埋土は 2層からなる。

(出土遺物 53)

53 は深鉢の底部で、上げ底である。

#### 10 号堅穴建物【S99】(第 15・16 図、図版 2・20)

M・N-14・15 グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ 2.80m 以上、幅 4.66m、深さ 0.31m である。9 号堅穴建物に切られ、11 号堅穴建物を切る。プランは円形で、壁際に柱穴と思われるピットを数ヶ所確認した。それぞれの柱穴の大きさは様々で深さも異なる。炉及び硬化面は確認されず、埋土は 2層からなる。

(出土遺物 54～57)

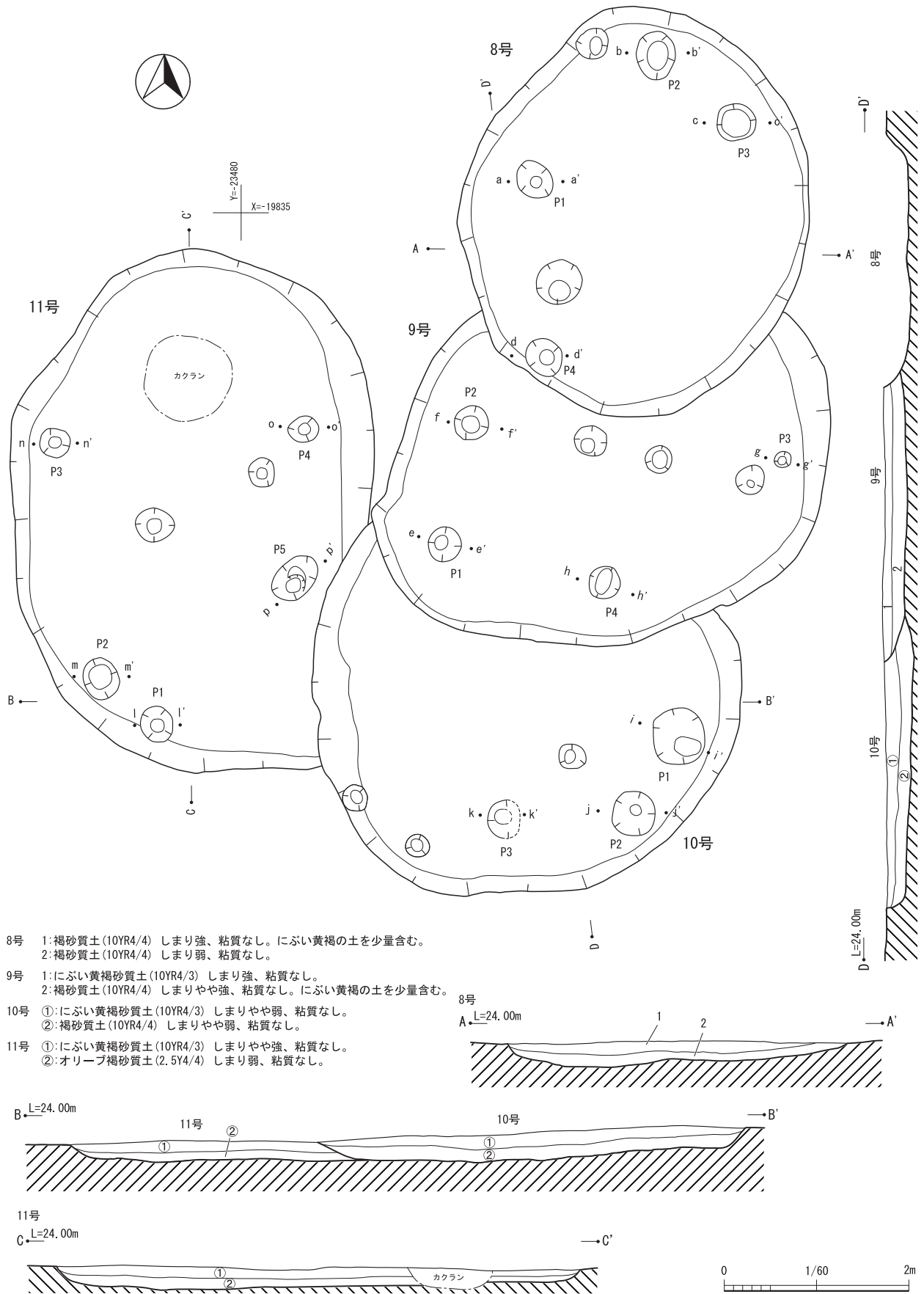
54・55 は口縁部片で器形は鉢である。文様は外面に 2 条の沈線とその上下の外側に磨り消し縄文が入る。56 は深鉢の胴部片である。胴部文様は頸部との境に刺突列点文を巡らせ、その下位に 3～4 条の沈線が入る。また、沈線で挟まれた空間に磨り消し縄文が入る。57 は打製石斧である。形状は、長方形に近く最大幅が石斧のほぼ中央にくる短冊形と呼ばれるものである。

#### 11 号堅穴建物【S100】(第 15・16 図、図版 2・20)

L・M-14・15 グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ 5.68m、幅 3.94m、深さ 0.25 m である。10 号堅穴建物に切られている。小判型のプランで南北に長くなる。壁際に柱穴と思われるピットを数ヶ所確認した。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。炉及び硬化面は確認されず、埋土は 2層からなる。

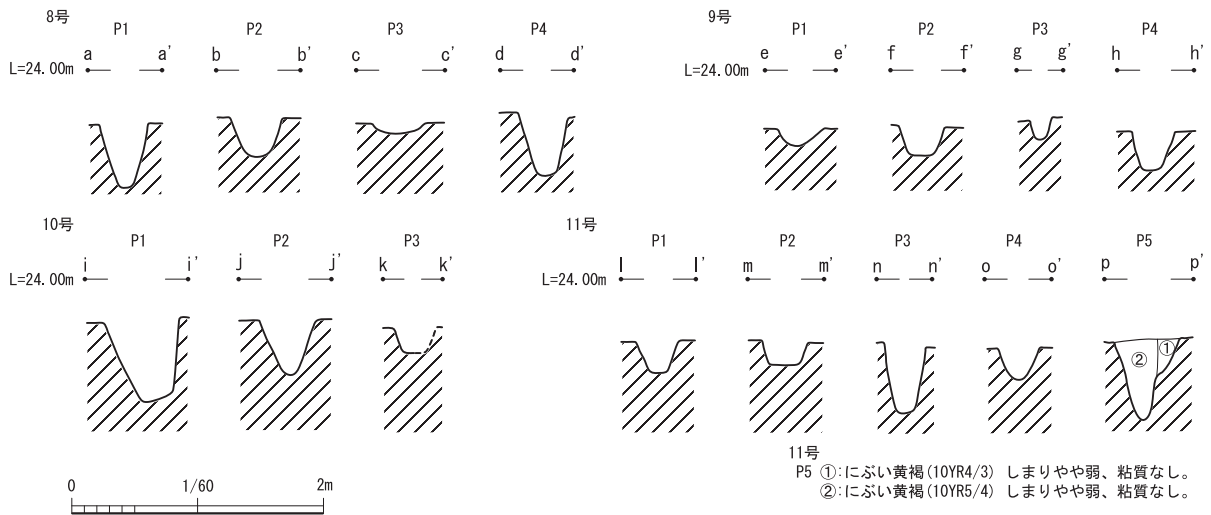
(出土遺物 58～60)

58 は深鉢の波状口縁部で、その高まりの頂点に凹点を施す。口縁部文様は 2 条の沈線とその上下に磨り消し縄文で構成している。59 は口縁部片で器形は鉢である。文様は無文である。60 は深鉢の胴部片である。胴部文様は 5 条以上の沈線とその間の鋸歯文で構成している。

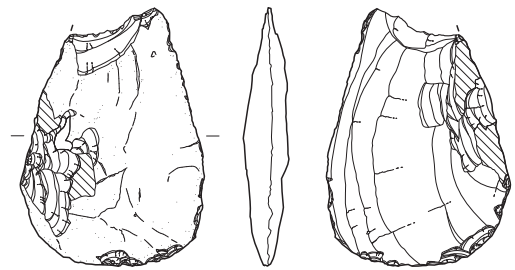
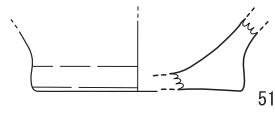


- 8号 1: 褐砂質土(10YR4/4) しまり強、粘質なし。にぶい黄褐の土を少量含む。  
2: 褐砂質土(10YR4/4) しまり弱、粘質なし。
- 9号 1: にぶい黄褐砂質土(10YR4/3) しまり強、粘質なし。  
2: 褐砂質土(10YR4/4) しまりやや強、粘質なし。にぶい黄褐の土を少量含む。
- 10号 ①: にぶい黄褐砂質土(10YR4/3) しまりやや弱、粘質なし。  
②: 褐砂質土(10YR4/4) しまりやや弱、粘質なし。
- 11号 ①: にぶい黄褐砂質土(10YR4/3) しまりやや強、粘質なし。  
②: オリーブ褐砂質土(2.5Y4/4) しまり弱、粘質なし。

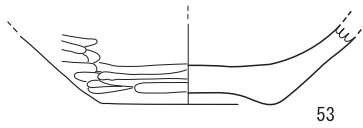
第15図 8・9・10・11号竪穴建物(S97・98・99・100)実測図



【8号竪穴】

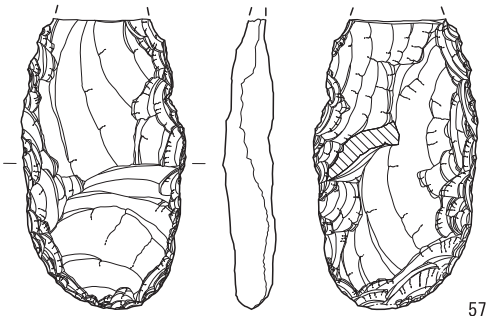
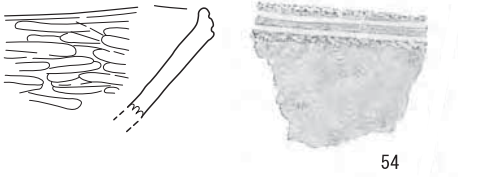


【9号竪穴】

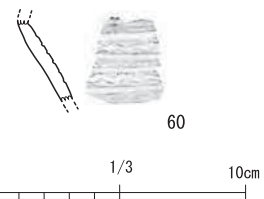
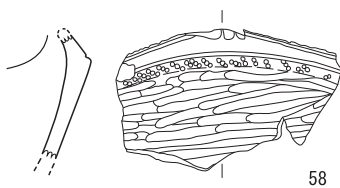


筋理面

【10号竪穴】



【11号竪穴】



第16図 8・9・10・11号竪穴建物(S97・98・99・100)及び出土遺物実測図

### 弥生時代

#### 12号竪穴建物【S322】(第17図、図版2・3・20)

P・Q-23 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 4.64m、幅 5.57m、深さ 0.17m、床面積 18.02 m<sup>2</sup>である。4号竪穴建物と13号竪穴建物を切り、歪な方形プランで東西に長くなる。柱穴と思われるピットを3ヶ所確認できたが、本来は4本柱であったと考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面は認められず、埋土は1層からなる。炉は建物の南東側に位置し長軸 0.86m、短軸 0.49m、深さ 0.14mを測る。断面は皿状を呈する。

(出土遺物 61～64)

竪穴建物の埋土からは甕形土器口縁部片・脚部片が出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

#### 13号竪穴建物【S350】(第17図、図版2・3・20)

Q・R-23・24 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 4.25m以上、幅 3.73m、深さ 0.28mである。12号竪穴建物に切られ、東側は攪乱に壊されている部分が多く、遺構の性格をつかみきれなかった。楕円形のプランで東西に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。炉及び硬化面は確認されず、埋土は1層からなる。

(出土遺物 65～68)

竪穴建物の埋土から、甕形土器口縁部片・脚部片が出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

#### 14号竪穴建物【S323】(第18図、図版3・20)

S・T-23・24 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 4.68m、幅 3.35m以上、深さ 0.20mで調査区外へのびる。1号竪穴建物と15号竪穴建物を切る。方形のプランで東西に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認。本来は4本柱と考えられるが攪乱によって詳細は不明である。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。炉及び硬化面は確認されず、埋土は1層からなる。

(出土遺物 69～70)

竪穴建物の埋土からは、底部片、打製石鏃が出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

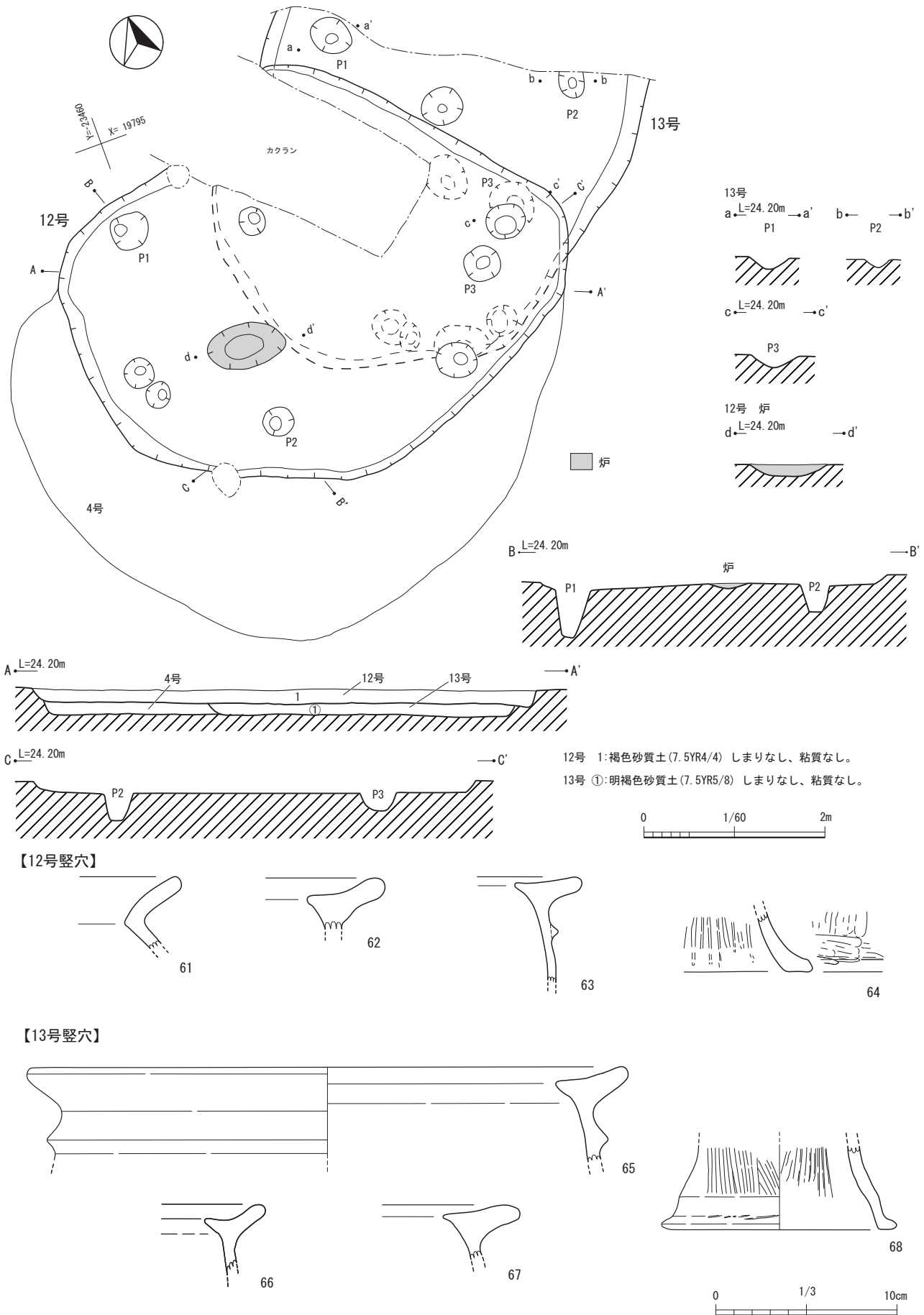
#### 15号竪穴建物【S324】(第18図、図版3)

T-24・25 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 3.16m以上、幅 1.96m以上、深さ 0.27mで調査区外へのびる。15号竪穴建物から切られている。方形プランで東西に長くなると考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来の建物に伴う柱穴は不明である。炉及び硬化面は確認されず、埋土は1層からなる。

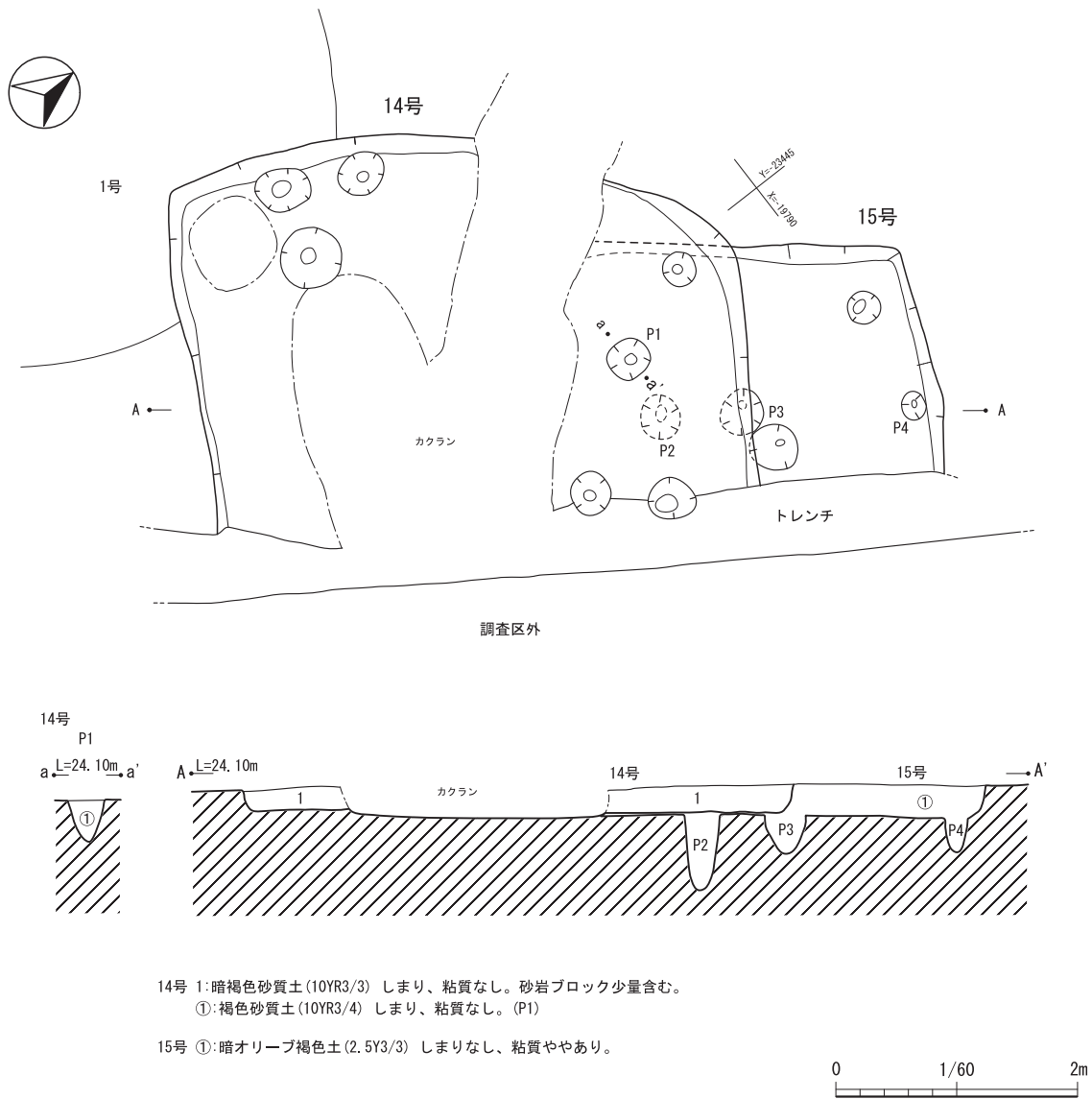
竪穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

#### 16号竪穴建物【S376】(第19・20・21図、図版3・21)

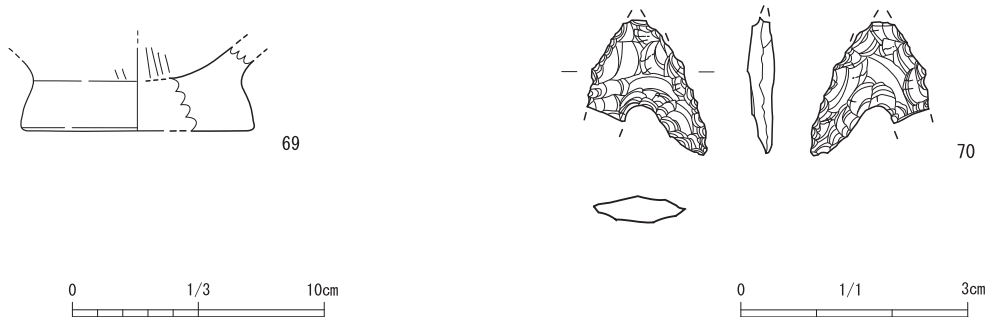
R・S-25・26 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 4.50m以上、幅 3.20m以上、深さ 0.30mである。17号竪穴建物を切る。歪な楕円形のプランで東西に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面は、竪穴建物のほぼ中央部に確認できた。埋土は2層からなる。炉は竪穴建物のほぼ中央部に位置し、長軸 0.90m、短軸 0.74m、深さ 0.30mを測る。断面は皿状を呈する。



第17図 12・13号竪穴建物 (S322・350) 及び出土遺物実測図



【14号竪穴】



第18図 14・15号竪穴建物 (S323・324) 及び出土遺物実測図

(出土遺物No.71～76)

竪穴建物の埋土からは、72 壺形土器のほぼ完形に近い資料が出土している。口縁部は、くの字に屈曲する。外・内面ともハケ目調整を施している。外面には一部にミガキ痕が残り、2 条の刻目突帯が巡る。最大径は胴部・中心部に位置する。その他の出土遺物は、甕形土器口縁部片、甕形土器脚部片、敲石である。

17 号竪穴建物【S377】(第 19・20・21 図、図版 3・21)

R・S-25・26 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 6.08m、幅 3.86m 以上、深さ 0.26m である。方形のプランで東西に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は 4 本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面は認められず、埋土は 2 層からなる。炉は建物の北東に位置し、長軸 0.95m、短軸 0.65m、深さ 0.37m を測る。断面は逆台形状を呈する。

(出土遺物 77～80)

竪穴建物の埋土からは、壺形土器胴部片、甕形土器口縁部片、土錘、スクレイパーが出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

18 号竪穴建物【S375】(第 22 図、図版 3)

O-22、P-22・23 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 4.60m 以上、幅 1.94m 以上、深さ 0.23m である。楕円形のプランで東西に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来の建物に伴う柱穴は不明である。炉及び硬化面は確認されず、埋土は 2 層からなる。

竪穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

19 号竪穴建物【S318】(第 23・24 図、図版 3・4・21)

Q・R-21・22 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 4.81m、幅 4.25m 以上、深さ 0.27m で調査区外へのびる。方形プランで東西に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は 2 本柱と考えられる。ピットの大きさ、深さは変わらない。建物の硬化面は竪穴建物のほぼ中央部に確認できた。埋土は 3 層からなる。炉は竪穴建物のほぼ中央部に位置し、長軸 0.93m、短軸 0.62m、深さ 0.21m を測る。断面は皿状を呈する。

(出土遺物 81～93)

竪穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片、甕形土器胴部片、甕形土器脚部片、打製石鏃が出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。小破片に関しては、写真図版のみで掲載している。

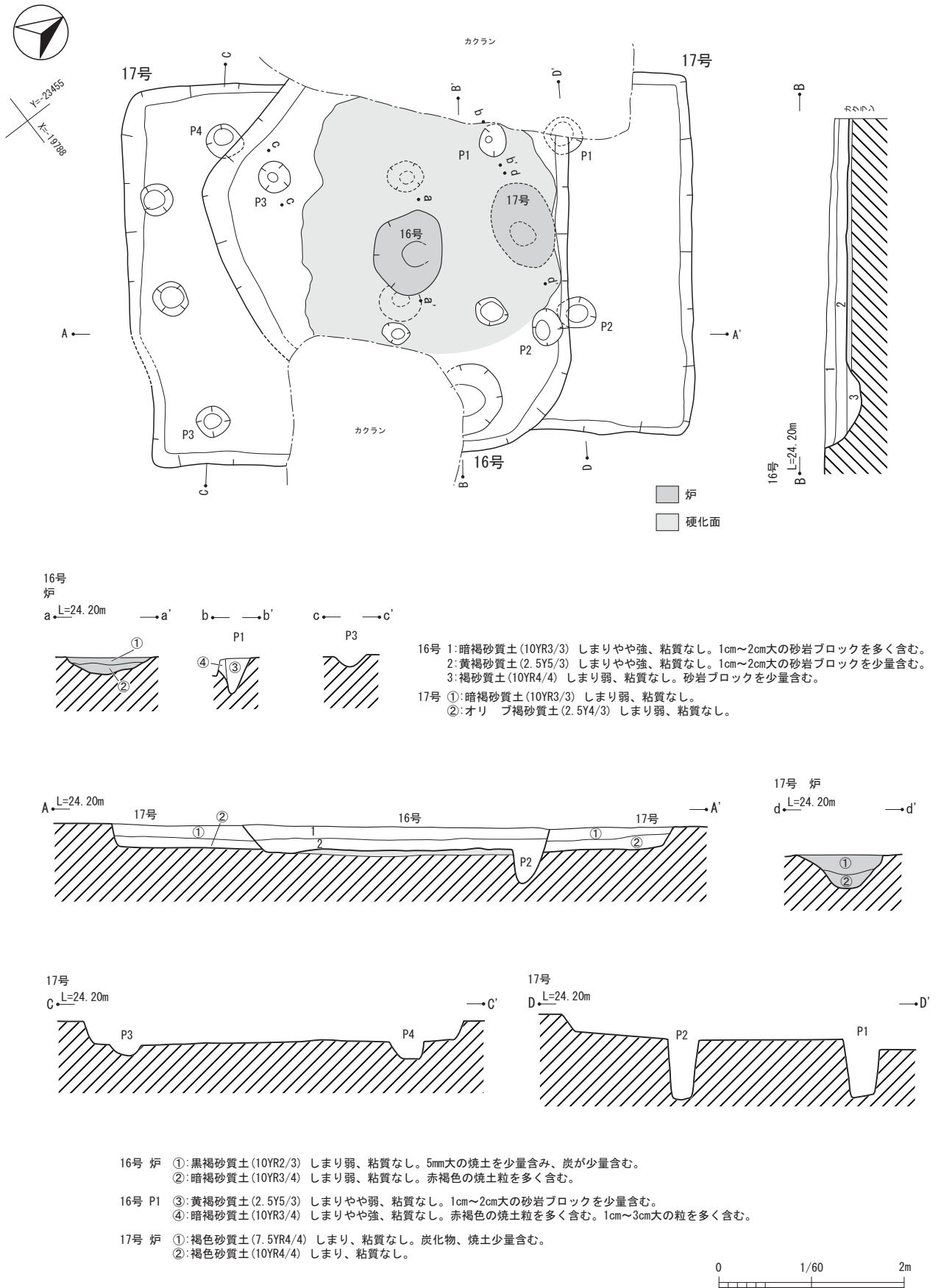
20 号竪穴建物【S321】(第 25 図、図版 4・22)

P・Q-22・21 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 3.81m、幅 3.83m 以上、深さ 0.24m である。攪乱によって切られているため全体形は不明だが、残存部分から判断して方形プランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は 2～4 本柱と考えられる。ピットの大きさ、深さは変わらない。竪穴建物の硬化面は建物のほぼ全域に確認できた。埋土は 2 層からなる。炉は建物のほぼ中央部に位置し、長軸 1.23m、短軸 0.81m、深さ 0.15m を測る。断面は不定形の皿状を呈する。

(出土遺物 94～100)

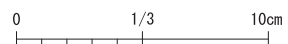
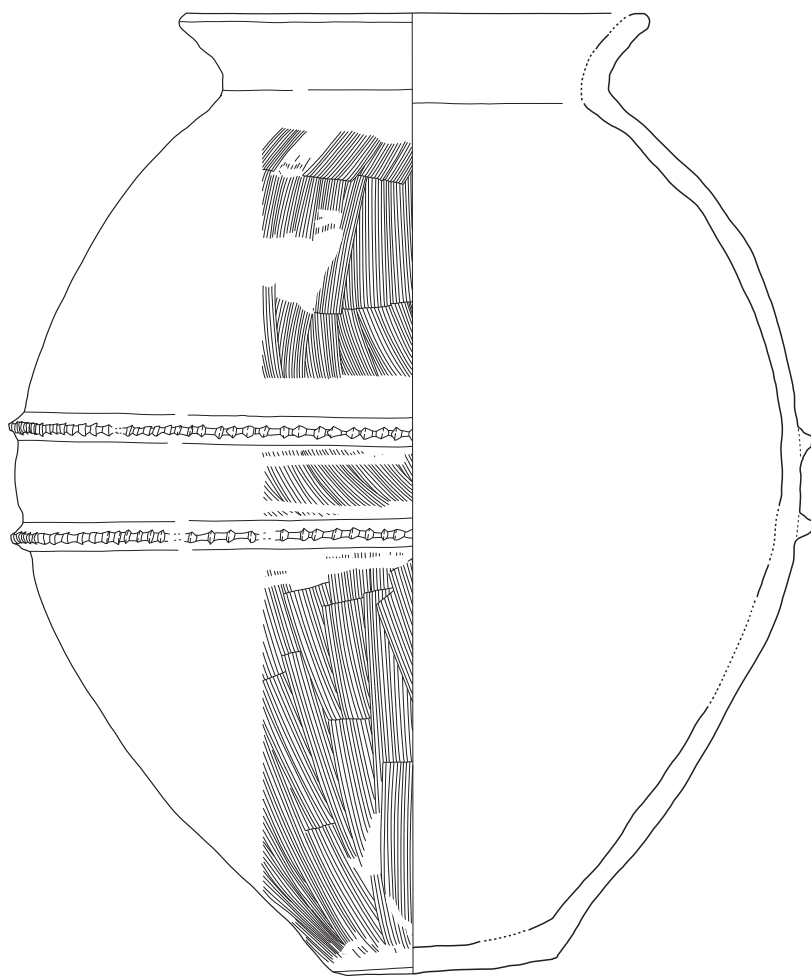
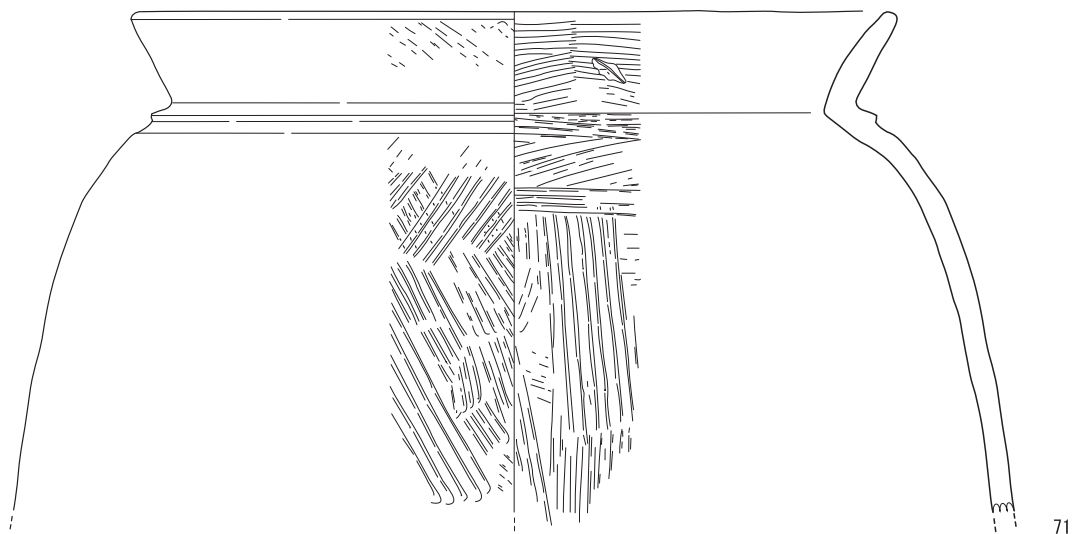
竪穴建物の埋土からは、96 丹塗りの壺形土器が出土している。口縁部は故意に打ち欠損させている。外面にはハケ目調整後にミガキが見られ、その後丹塗りを施している。胴部の中心部よりやや上部に 2 条の突帯が巡る。内面にはハケ目調整が施してある。出土状況は不明であるが、小児用甕棺の可能性もある。94 小型





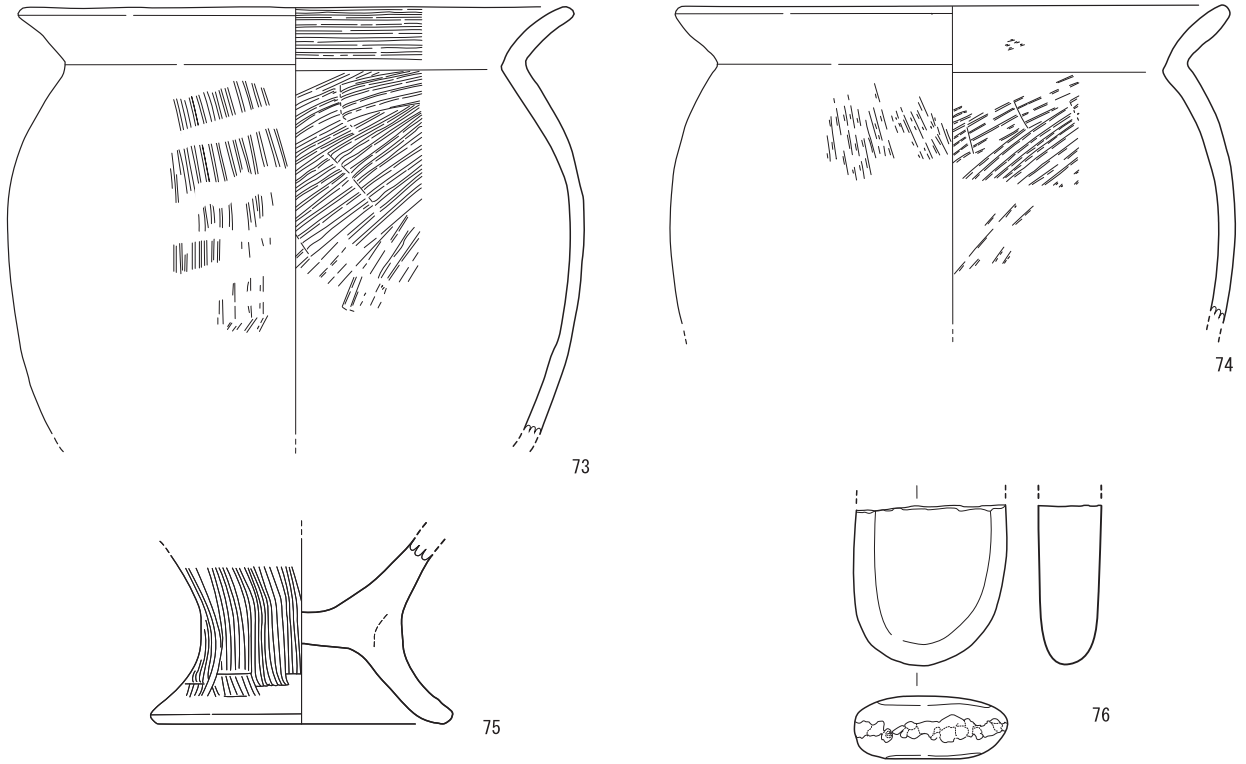
第19図 16・17号竪穴建物(S376・377)実測図

【16号竪穴】

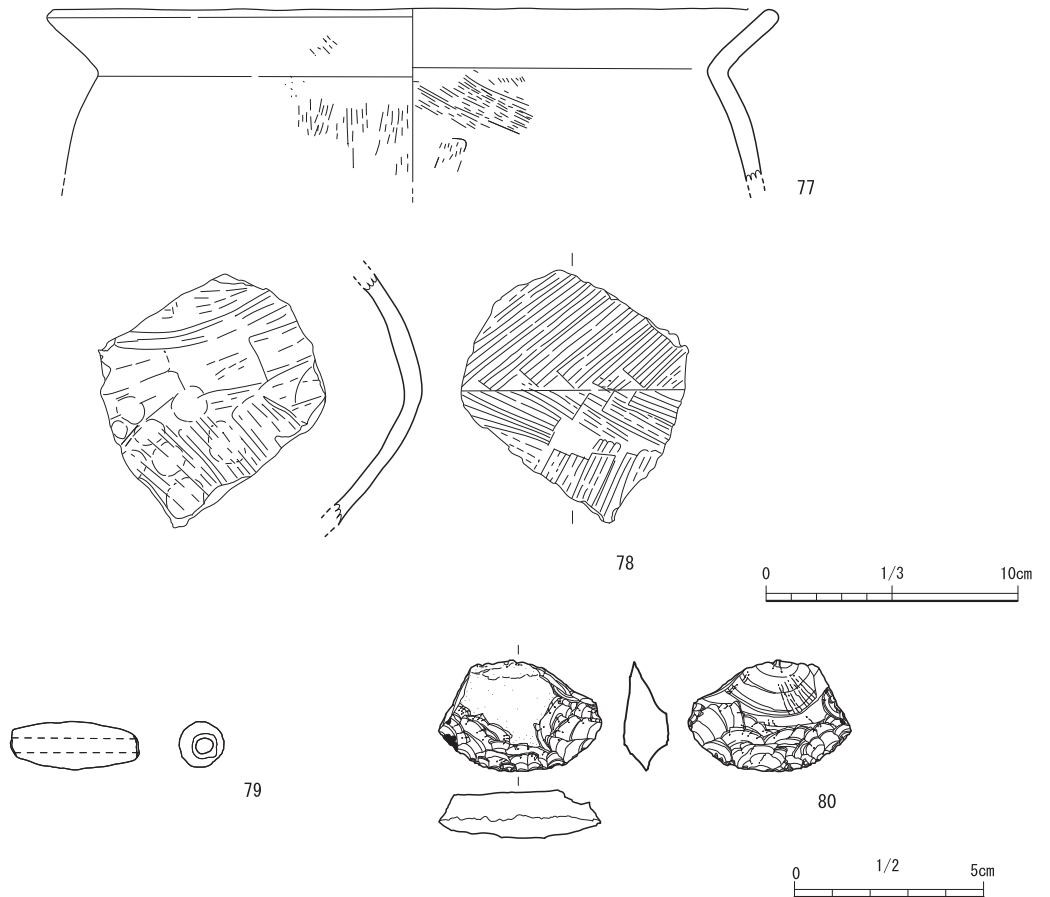


第20図 16号竪穴建物(S376)出土遺物実測図

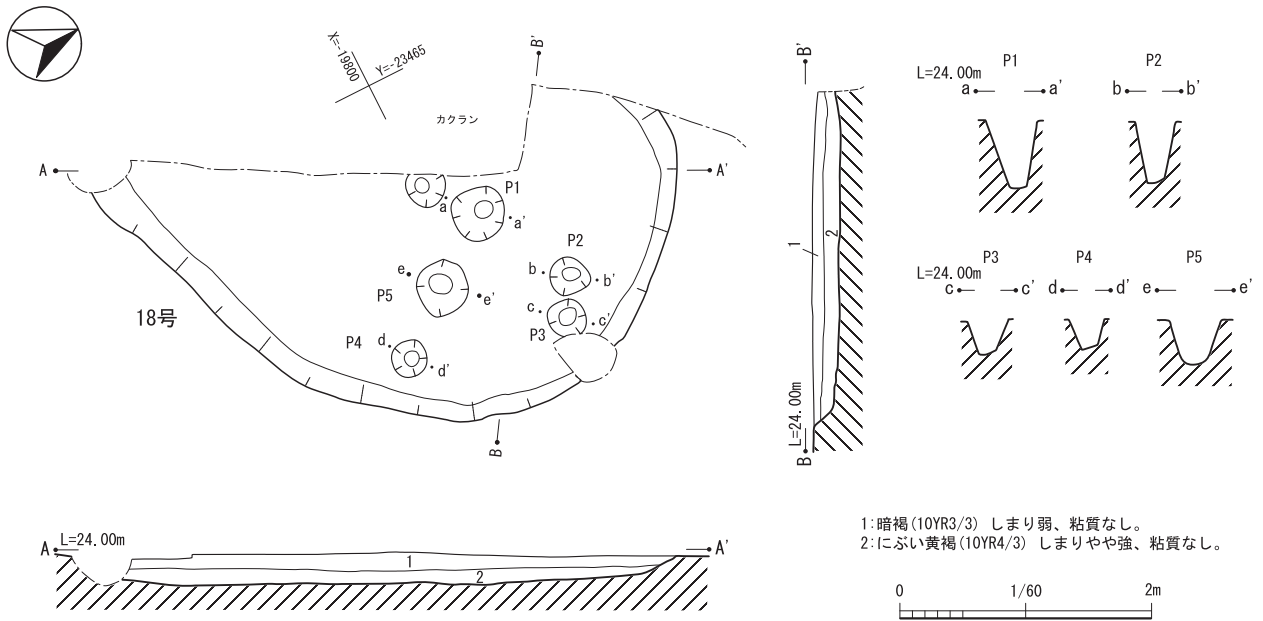
【16号竖穴】



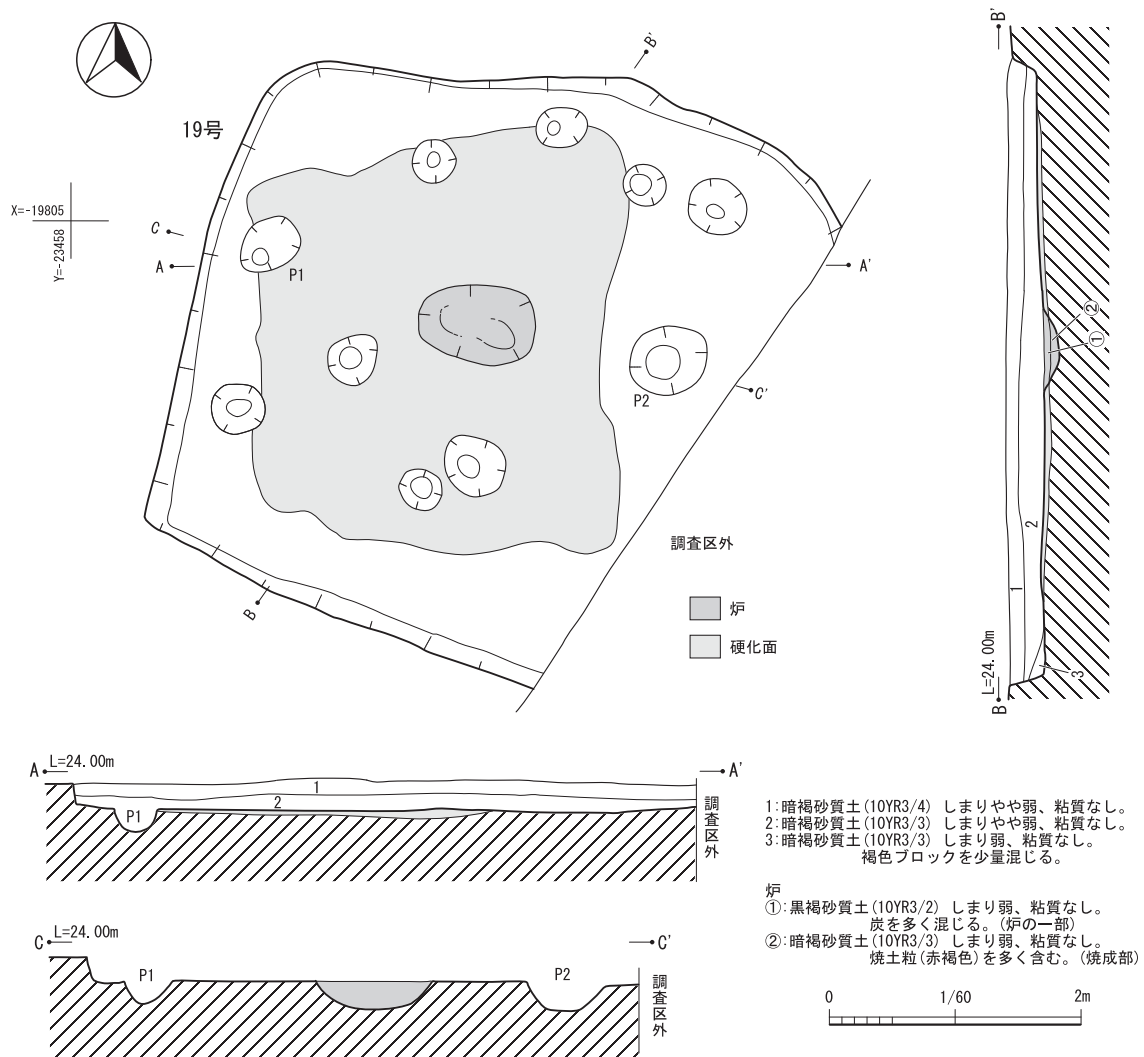
【17号竖穴】



第21図 16・17号竖穴建物(S376・377)出土遺物実測図

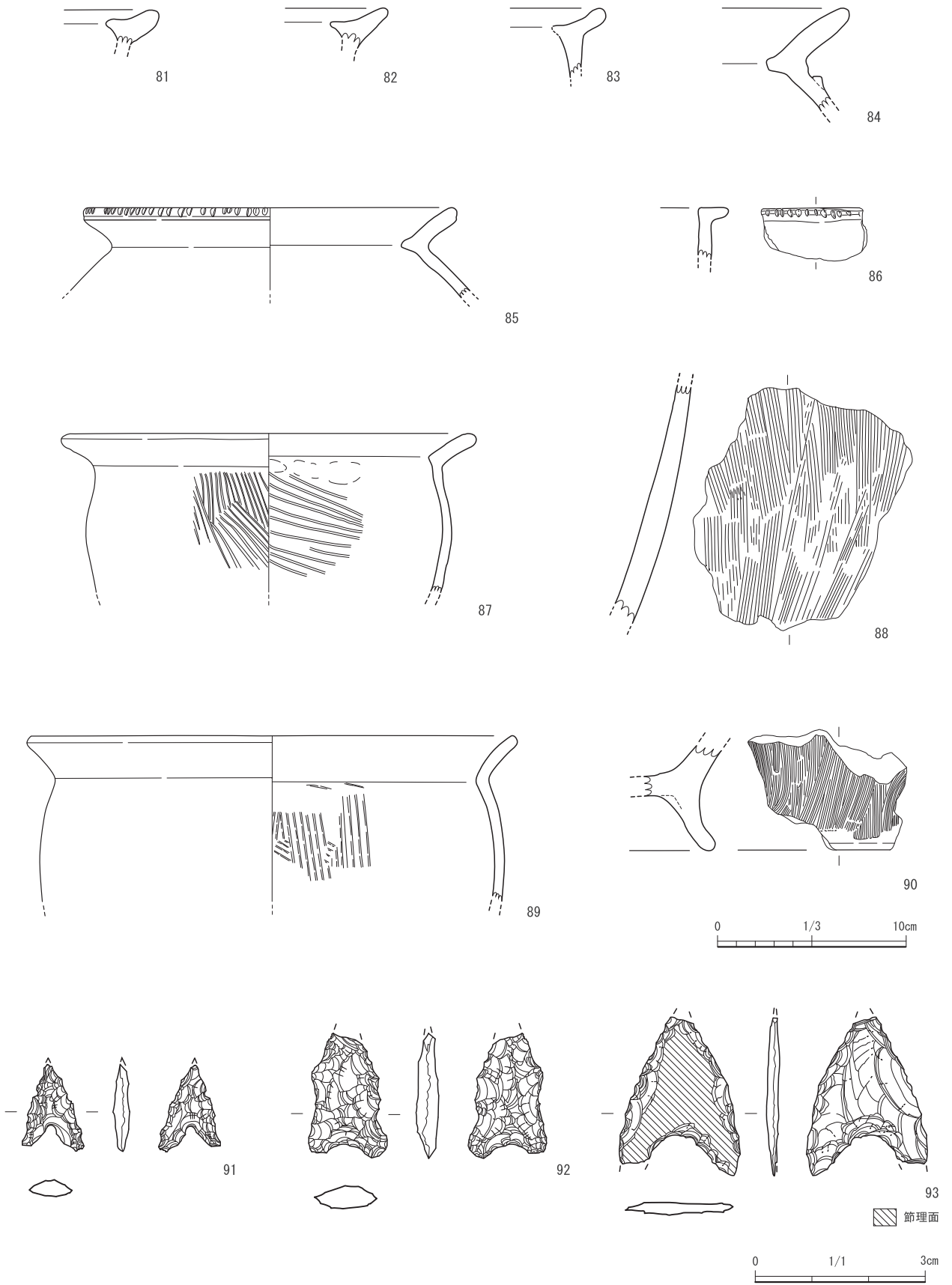


第22図 18号竪穴建物(S375)実測図

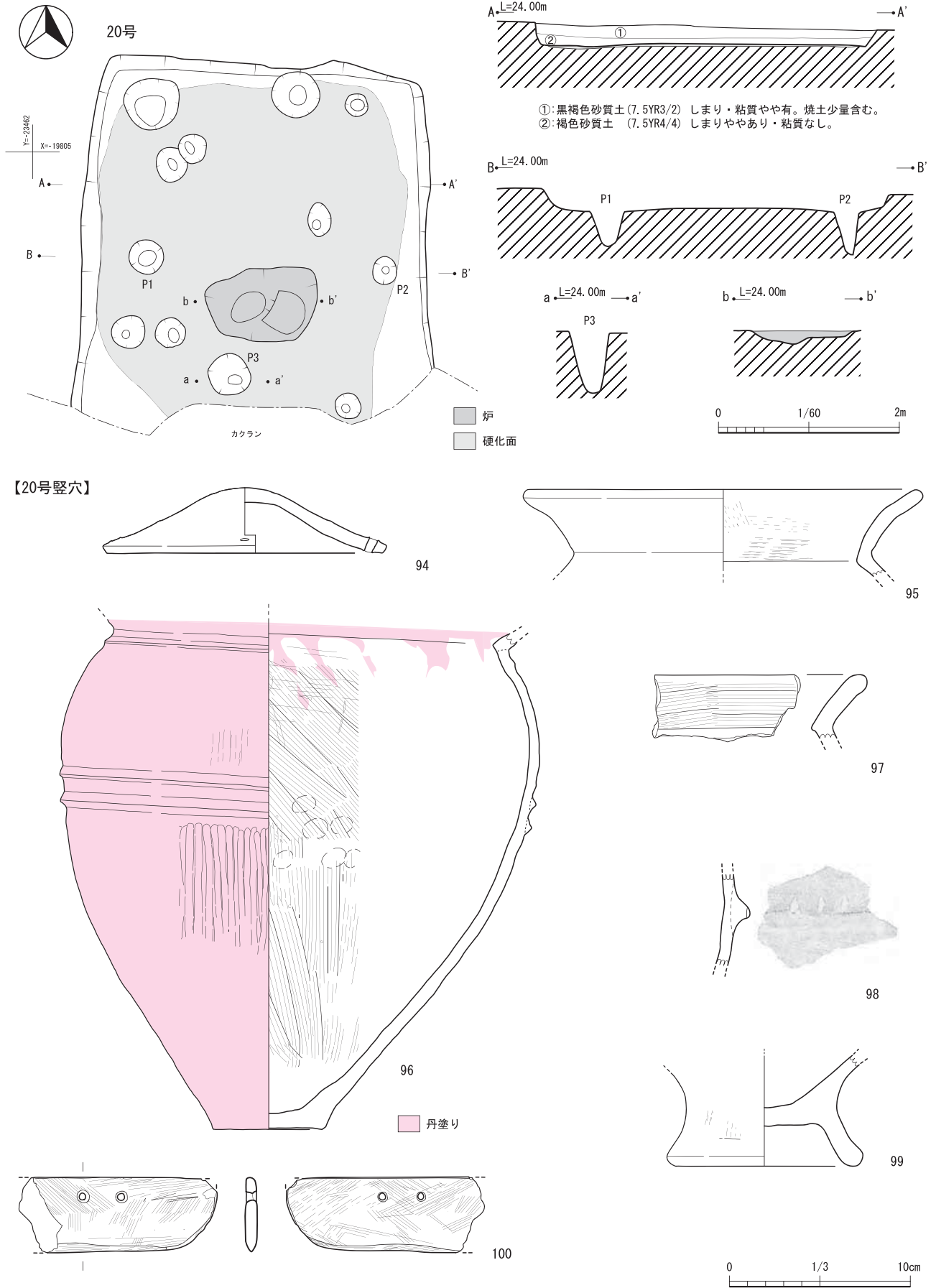


第23図 19号竪穴建物(S318)実測図

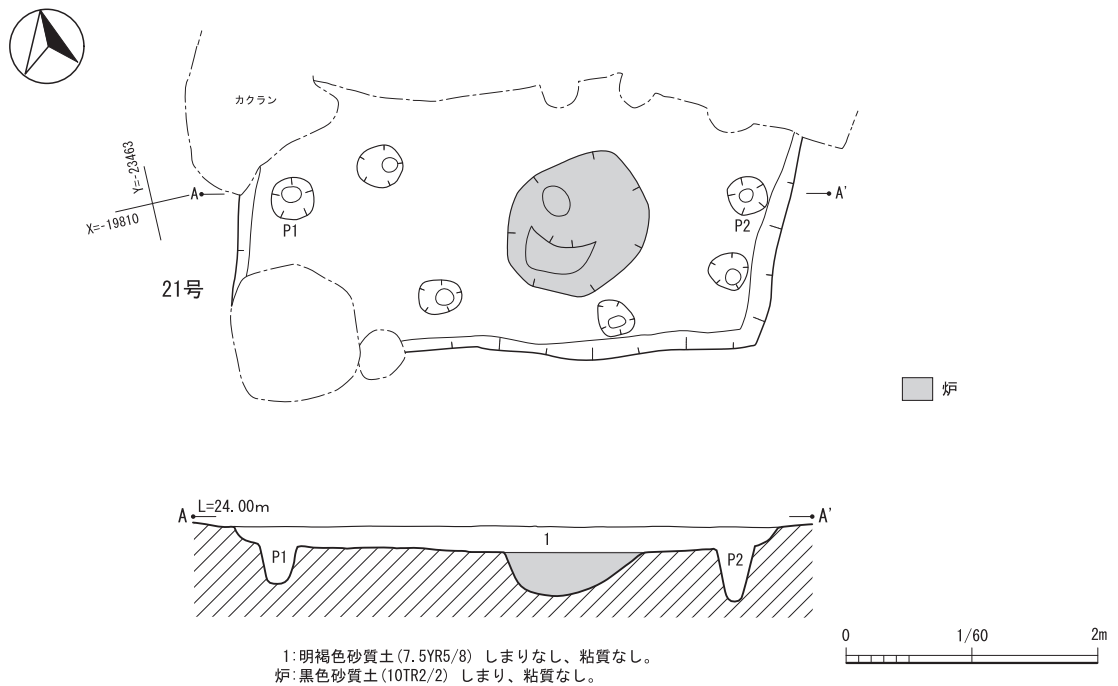
【19号竖穴】



第24図 19号竖穴建物(S318)出土遺物実測図



第25図 20号竪穴建物(S321)及び出土遺物実測図



第26図 21号竪穴建物(S355)実測図

無頸壺の蓋である。外面はミガキを施し、内面はハケ目調整後、指ナデ痕が残る。

その他の遺物は、甕形土器口縁部片、甕形土器胴部片、石包丁等が出土している。

#### 21号竪穴建物【S355】(第26図、図版4)

P-20、Q-20 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 4.36m、幅 2.24m以上、深さ 0.20mである。攪乱によって切られているため全体形は不明だが、残存部分から見て方形プランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は 2~4 本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。竪穴建物の硬化面は確認できなかった。埋土は1層からなる。炉は建物の北側に位置し、長軸 1.20m、短軸 1.06m、深さ 0.35mを測る。断面は逆台形状を呈する。

竪穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

#### 22号~28号竪穴建物

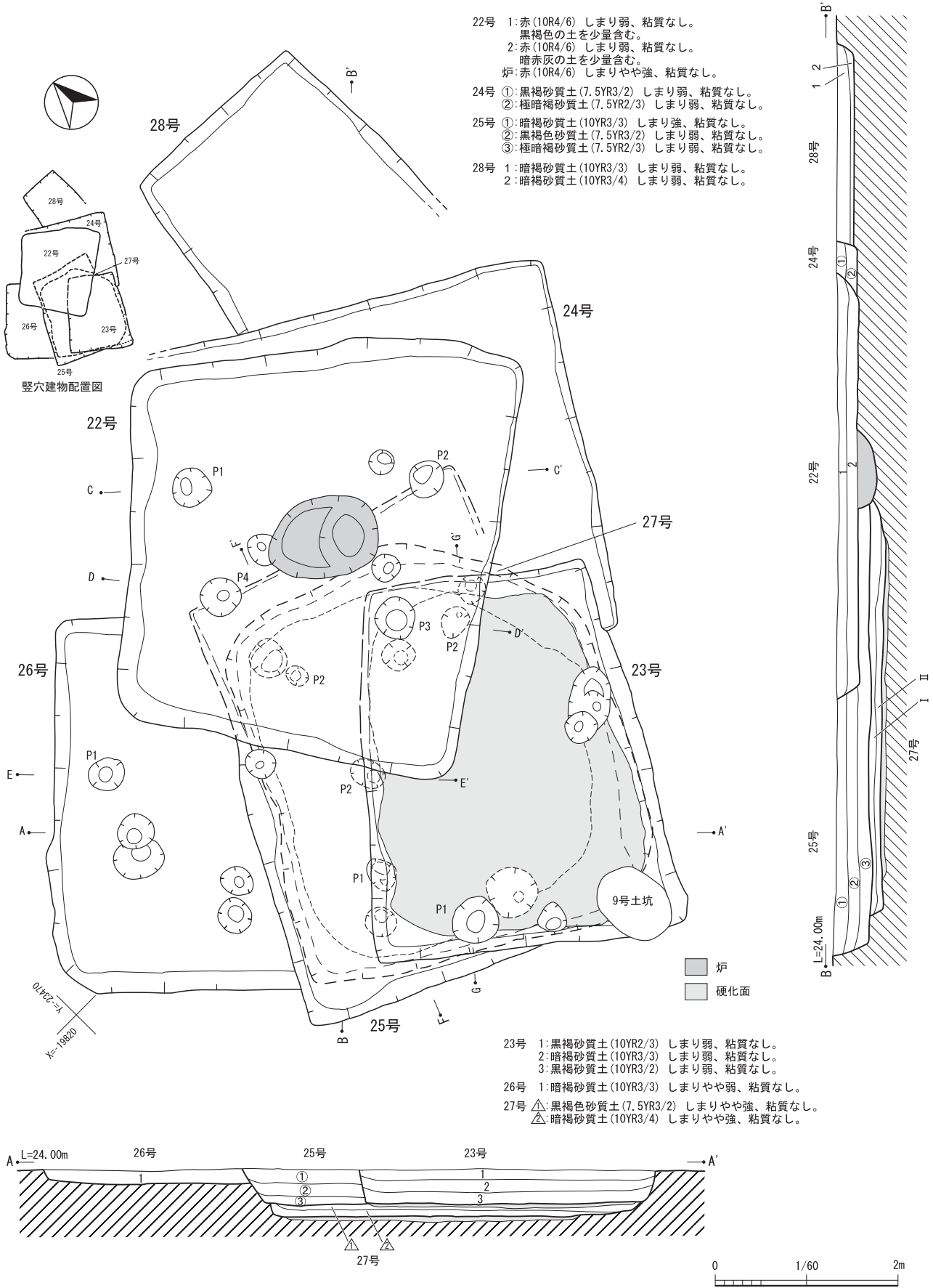
0・P-18・19、P-20 グリッドで確認された遺構で、7軒の竪穴建物が(古)28号→24号→23号→22号(新)と(古)26号→27号→25号→23号→22号(新)の順で切り合っていると考えられるが、26号と28号の接点が無いのでどちらが古いのかは不明である。

#### 22号竪穴建物【S92】(第27・28・29・30図、図版4・5・22)

0・P-18・19 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 4.59m、幅 4.02m、深さ 0.29m、床面積 17.37 m<sup>2</sup>である。23号竪穴建物を切る。方形のプランで若干東西に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は 4 本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。竪穴建物の硬化面は認められず、埋土は2層からなる。炉は竪穴建物のほぼ中央に位置し、長軸 1.23m、短軸 0.88m、深さ 0.21mを測る。断面は皿状を呈する。

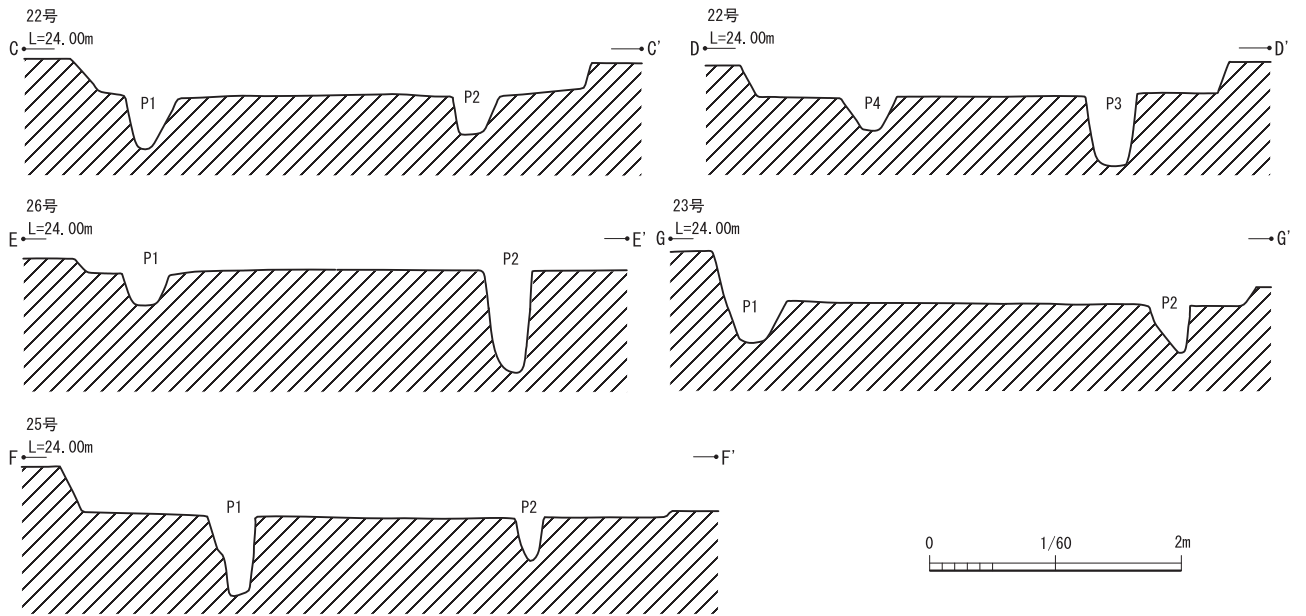
(出土遺物 101~104)

竪穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片等が出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

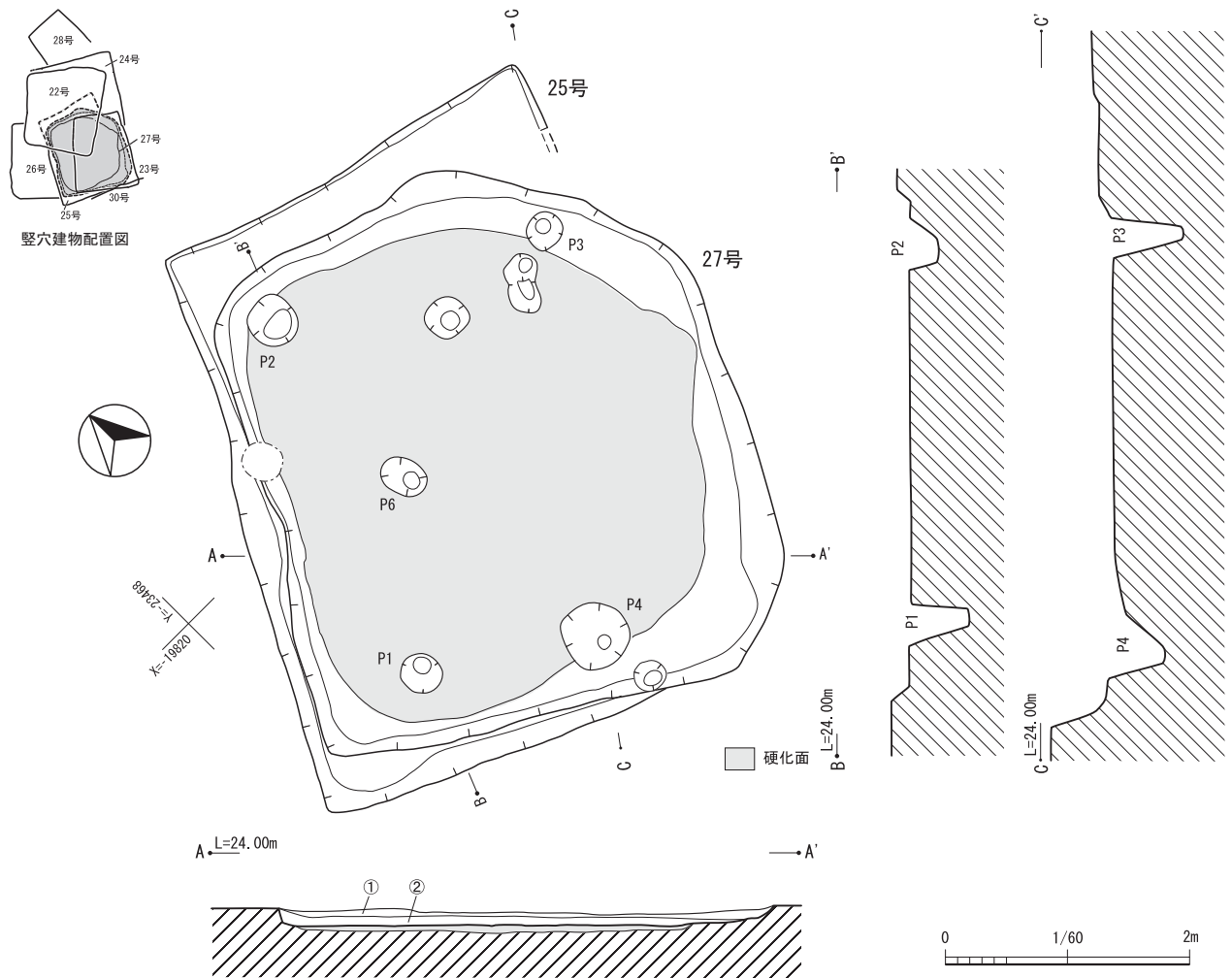


第27図 22・23・24・25・26・27・28号竪穴建物(S92・101・95・94・93・372・381)実測図





第28図 22・23・25・26号竖穴建物(S92・101・94・93)実測図



27号 ①: 黒褐色砂質土(7.5YR3/2) しまりやや強、粘質なし。  
 ②: 暗褐色砂質土(10YR3/4) しまりやや強、粘質なし。

第29図 25・27号竖穴建物(S94・372)実測図

23号竪穴建物【S101】(第27・28・30図、図版4・22)

0・P-18・19グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ4.06m、幅3.20m、深さ0.39m、床面積12.37㎡である。24号竪穴建物を切る。不定形の方形プランで南北に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は2～4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。竪穴建物の硬化面はほぼ床面全域に広がる。埋土は3層からなる。竪穴建物の炉は確認できなかった。(出土遺物105・106)

竪穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片等が出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

24号竪穴建物【S95】(第27図、図版4)

P-18・19グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ4.44m以上、幅4.11m以上、深さ0.22mである。28号竪穴建物を切る。ほかの竪穴建物によって切られているため全体形は不明だが、残存部分から判断して方形プランと考えられる。ただし、残存が悪く柱穴、炉については不明である。埋土は2層からなる。竪穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

25号竪穴建物【S94】(第27・29・30図、図版5・22)

0-18・19グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ4.86m以上、幅3.33m以上、深さ0.38mである。26・27号竪穴建物を切る。ほかの竪穴建物によって切られているため全体形は不明だが、残存部分から判断して方形のプランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は2～4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面、炉は確認できなかった。埋土は3層からなる。

(出土遺物107～109)

竪穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片等が出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

26号竪穴建物【S93】(第27・28・30・31図、図版5・22)

0-18・19グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ4.11m以上、幅2.48m以上、深さ0.16mである。ほかの竪穴建物によって切られているため全体形は不明だが、残存部分から判断して方形のプランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は2本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面、炉は確認できなかった。埋土は1層からなる。

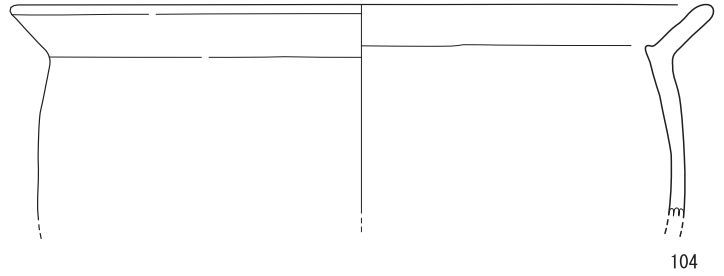
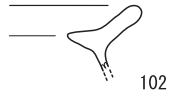
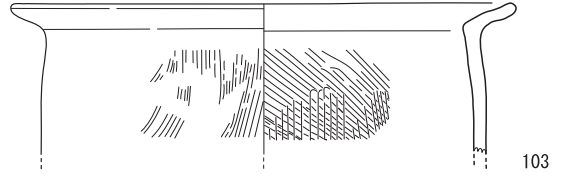
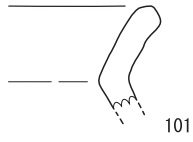
(出土遺物110～113)

竪穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片、甕形土器胴部片、打製石鏃、使用痕剥片が出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

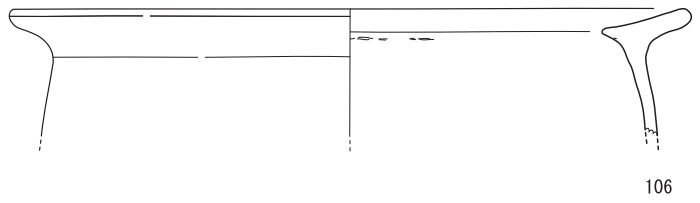
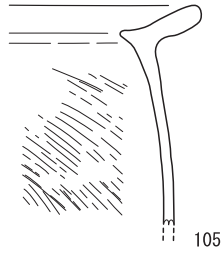
27号竪穴建物【S372】(第27・29図、図版5)

0-18・19グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ4.55m、幅4.05m、深さ0.17mである。他の竪穴建物によって切られている為全体形は不明だが、残存部分からみて歪な方形のプランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面はほぼ床面全域に広がる。埋土は2層からなる。炉は確認できなかった。竪穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

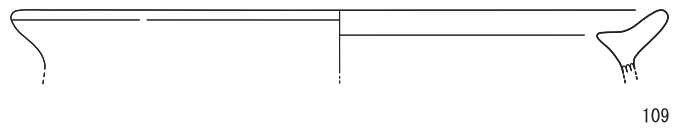
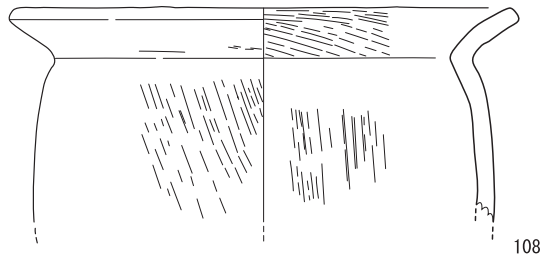
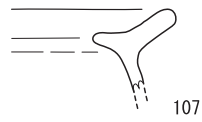
【22号竖穴】



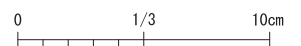
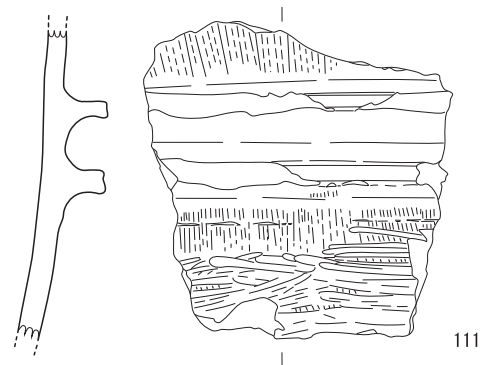
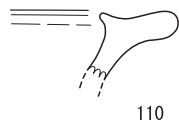
【23号竖穴】



【25号竖穴】

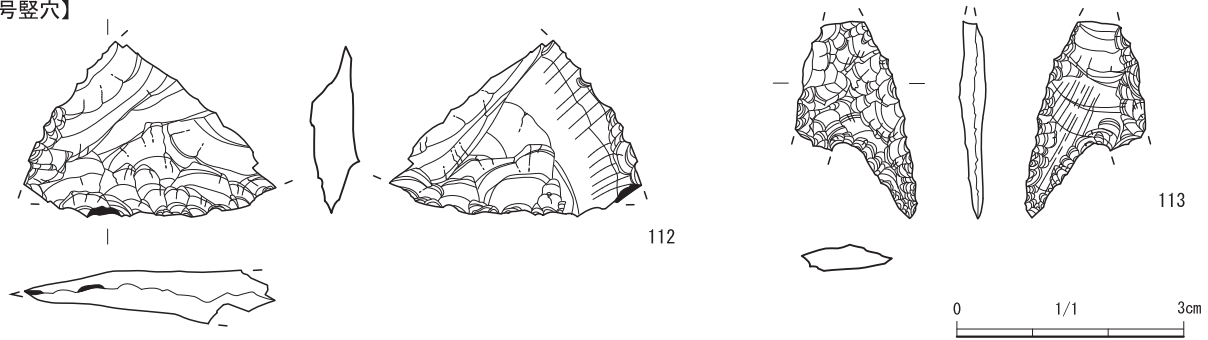


【26号竖穴】



第30図 22・23・25・26号竖穴建物(S92・101・94・93)出土遺物実測図

【26号竪穴】



第31図 26号竪穴建物(S93)出土遺物実測図

28号竪穴建物【S381】(第27図、図版5)

P-19・20 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 2.71m以上、幅 2.52m以上、深さ 0.20mである。ほかの竪穴建物によって切られているため全体形は不明だが、残存部分から判断して方形のプランと考えられる。埋土は2層からなる。炉・柱穴は確認できず竪穴建物かは不明である。

竪穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

29号～32号竪穴建物

N・0-17・18・0-16グリッドで確認された遺構で、4軒の竪穴建物が(古)32・30→31→29(新)の順で切り合っている。

29号竪穴建物【S303】(第32・33図、図版5・23)

N-17、0-16・17 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 4.42m、幅 3.46m以上、深さ 0.19mである。30号竪穴建物と31号竪穴建物を切る。方形プランで南北に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面は認められず、埋土は2層からなる。炉は竪穴建物の北東側に位置し、長軸 0.77m、短軸 0.64m、深さ 0.13mを測る。断面は皿状を呈する。

(出土遺物 114)

竪穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片が出土している。

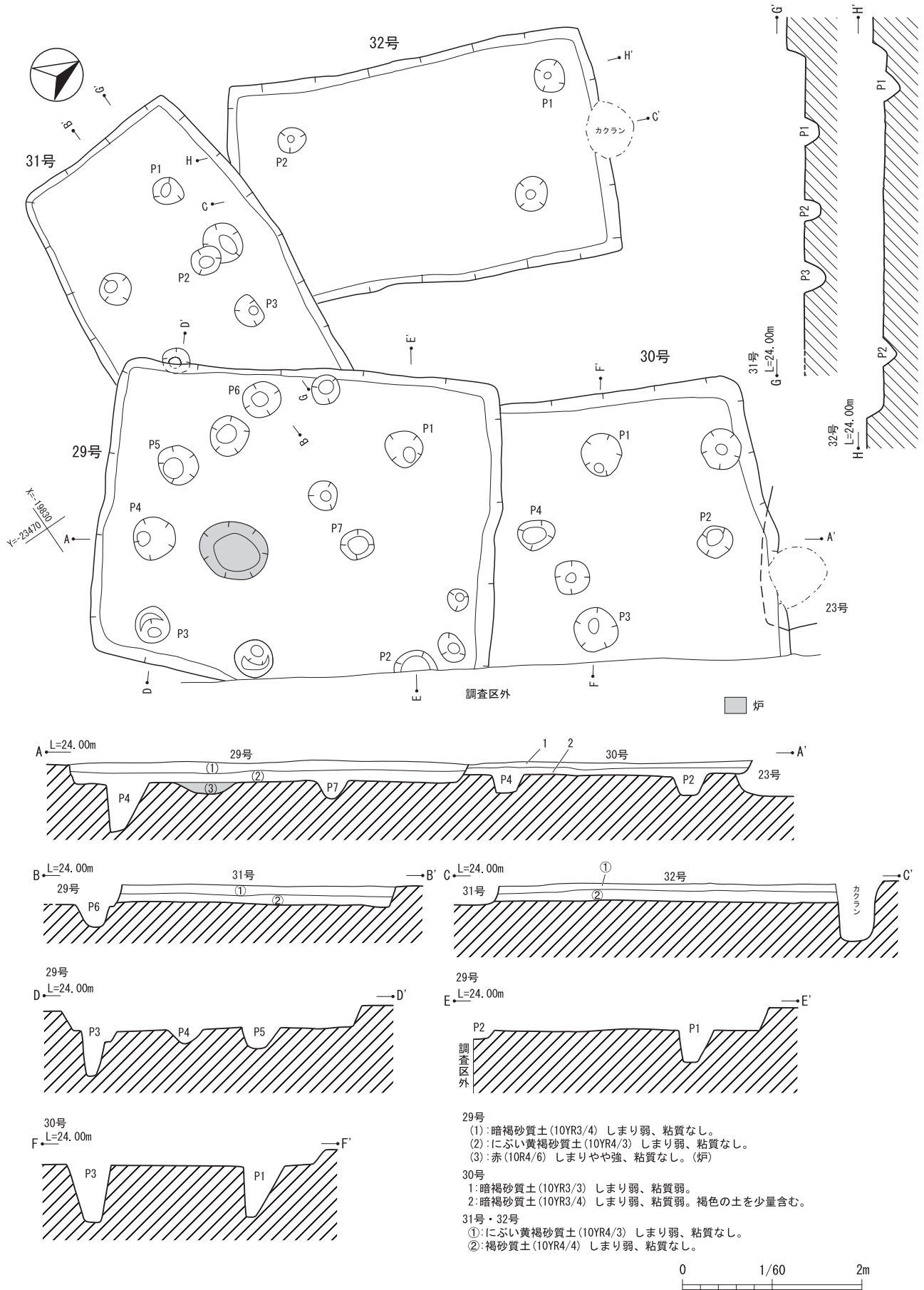
30号竪穴建物【S325】(第32図、図版5)

0-17・18 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 3.16m以上、幅 2.97m以上、深さ 0.15mである。23号竪穴建物を切る。他の竪穴建物によって切られている為全体形は不明だが、残存部分から判断して方形プランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は2～4本柱と考えられる。ピットの大きさ、深さとも同じである。建物の硬化面、炉は認められず、埋土は2層からなる。

竪穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

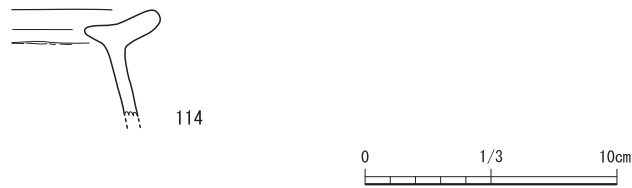
31号竪穴建物【S304】(第32図、図版5)

N・0-17 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 3.14m以上、幅 2.44m、深さ 0.22mである。32号竪穴建物を切る。ほかの竪穴建物によって切られているため全体形は不明だが、残存部分から判断して方形プランと考えられ、東西に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は



第32図 29・30・31・32号竪穴建物(S303・S325・S304・S305)実測図

【29号竪穴】



第33図 29号竪穴建物(S303)出土遺物実測図

2～4本柱と考えられる。ピットの大きさ、深さは変わらないが浅い。建物の硬化面、炉は認められず、埋土は2層からなる。竪穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

32号竪穴建物【S305】(第32図、図版5・6)

N-17・18、O-18グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ4.12m、幅2.51m以上、深さ0.21mである。方形プランで南北に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は2～4本柱と考えられる。ピットの大きさ、深さは変わらないが浅い。竪穴建物の硬化面、炉は確認できなかった。埋土は2層からなる。

竪穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

33号竪穴建物【S374】(第34図、図版6)

N-15・16、O-16グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ4.28m、幅2.25m以上、深さ0.25mである。攪乱によって切られているため全体形は不明だが、残存部分から見て方形プランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来のピットは不明である。竪穴建物の硬化面、炉は認められず、埋土は3層からなる。

竪穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

34号竪穴建物【S298】(第35・36図、図版6・23)

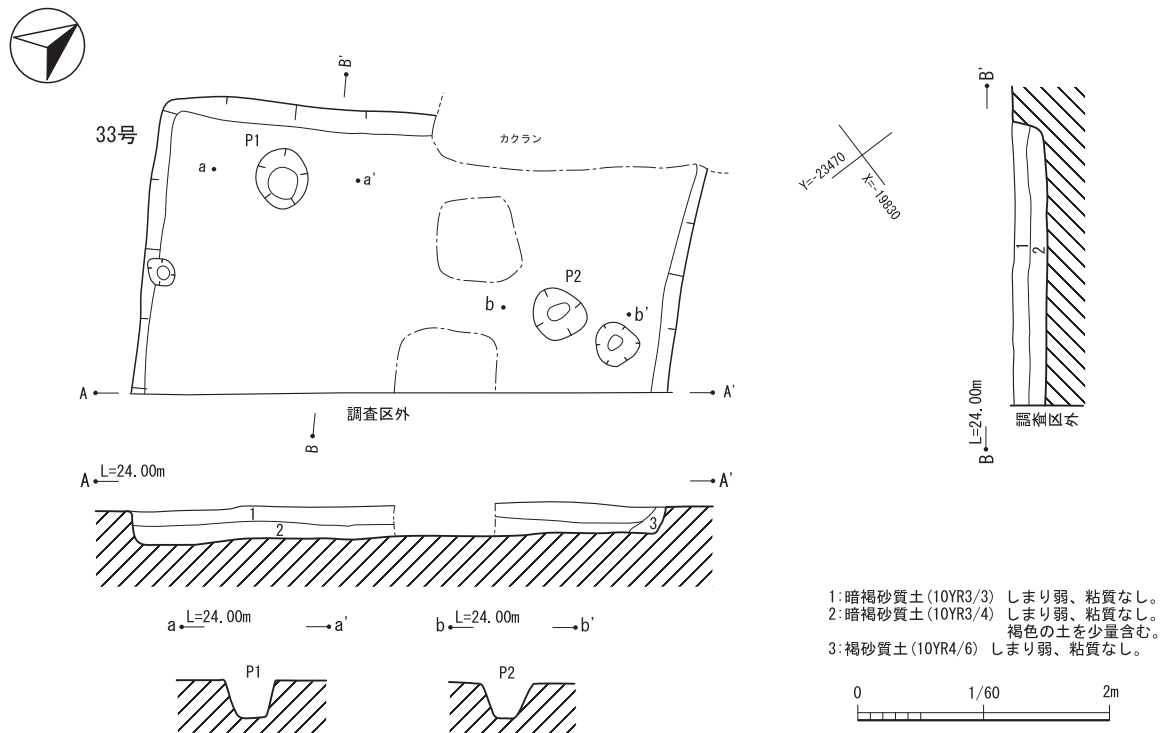
L・M-16・17グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ3.83m、幅3.68m、深さ0.27m、床面積13.98㎡である。7号竪穴建物と35号竪穴建物を切る。方形プランで東西に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認する。本来は2～4本柱と考えられるが不明である。竪穴建物の硬化面、炉は認められず。埋土は2層からなる。

(出土遺物№.115・116)

竪穴建物の埋土からは、高坏土器口縁部片、甕形土器脚部片等が出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

35号竪穴建物【S297】(第35・36・37図、図版6・23)

L・N-16・17グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ5.26m、幅4.44m、深さ0.39m、床面積22.77㎡である。方形プランで南北に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は2～4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面は竪穴建物のほぼ全域で確認できた。埋土は3層からなる。炉は竪穴建物のほぼ中央部に位置し長軸0.73m、短軸0.54m、深さ0.09mを測り、断面は皿状を呈する。貯蔵穴は竪穴建物の南東側壁際に位置する。



第34図 33号竪穴建物 (S374) 実測図

(出土遺物 117～129)

竪穴建物の埋土からは、122・123 壺形土器は床面近くから出土した。接合するとほぼ完形に復元できた。特に 123 壺形土器には、胴の中程に径 3 cm の穿孔が認められる。その他、埋土から出土した遺物は、甕形土器口縁部片、甕形土器胴部片、壺形土器底部片、石包丁、磨製石鏃等がある。大部分の遺物は廃棄又は流れ込みの遺物と推定できる。

36 号竪穴建物【S105】(第 38・39 図、図版 6・24)

J-13・14、K-14 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 4.46m 以上、幅 4.46m 以上、深さ 0.21m である。38 号竪穴建物を切る。攪乱等によって切られているため全体形は不明であるが、残存部分から判断して方形プランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認する。本来は 2～4 本柱と考えられるが不明である。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面、炉は認められず、埋土は 1 層からなる。

(出土遺物 130～136)

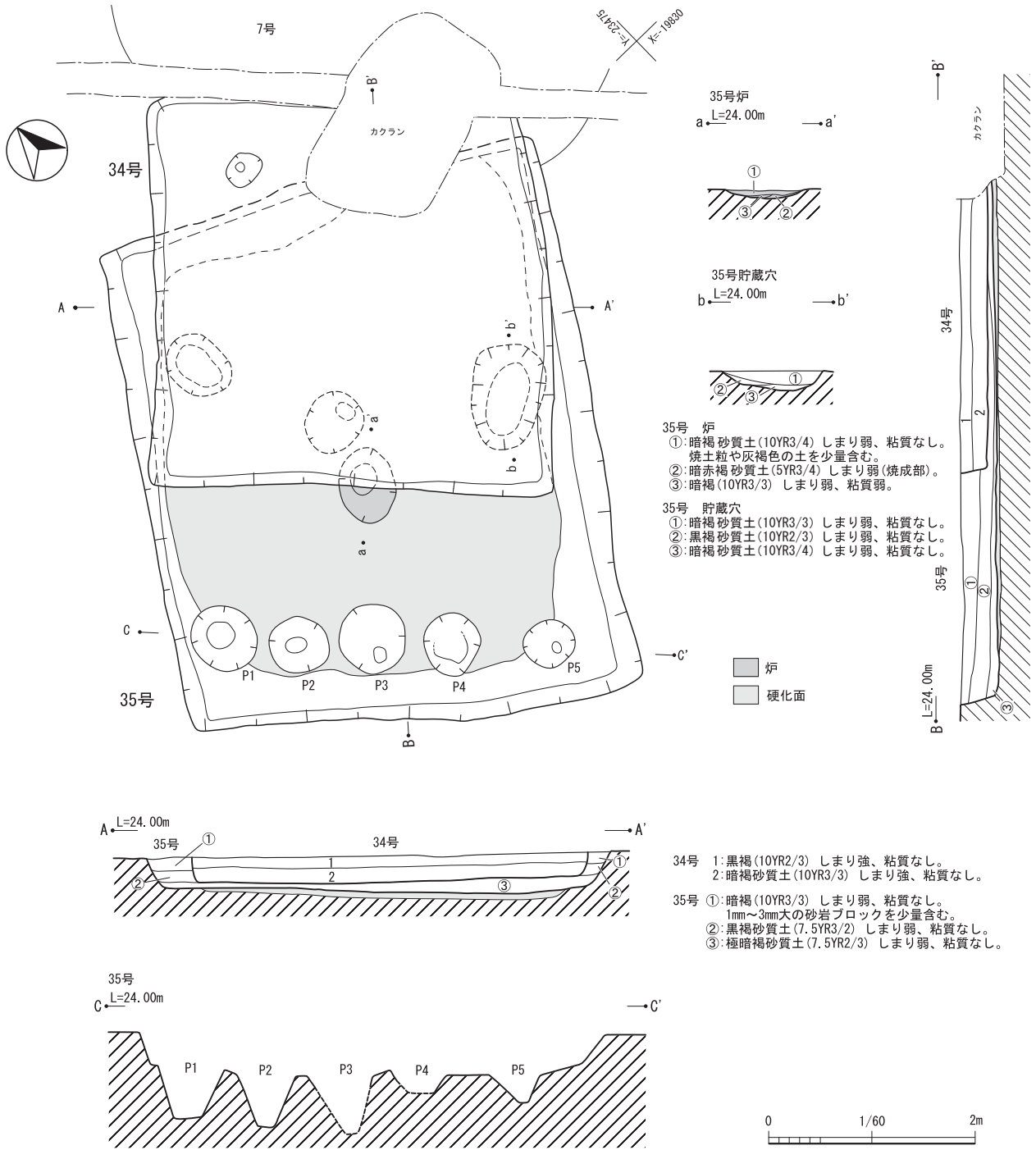
竪穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片、壺形土器底部片、砥石等が出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

37 号竪穴建物【S104】(第 38・39 図、図版 6・24)

J・K-14・15 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 4.52m、幅 3.23m 以上、深さ 0.14m で方形プランである。37・38 号竪穴建物を切る。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認。本来は 2～4 本柱と考えられるが不明である。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面、炉は認められず、埋土は 3 層からなる。

(出土遺物 137)

竪穴建物の埋土からは、甕形土器脚部片等が出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。



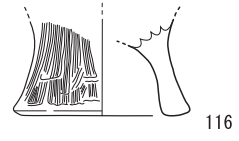
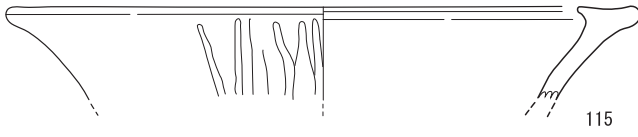
第35図 34・35号竪穴建物(S298・297)実測図

38号竪穴建物【S346】(第38・39・40図、図版7・24・25)

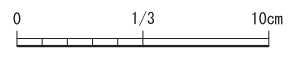
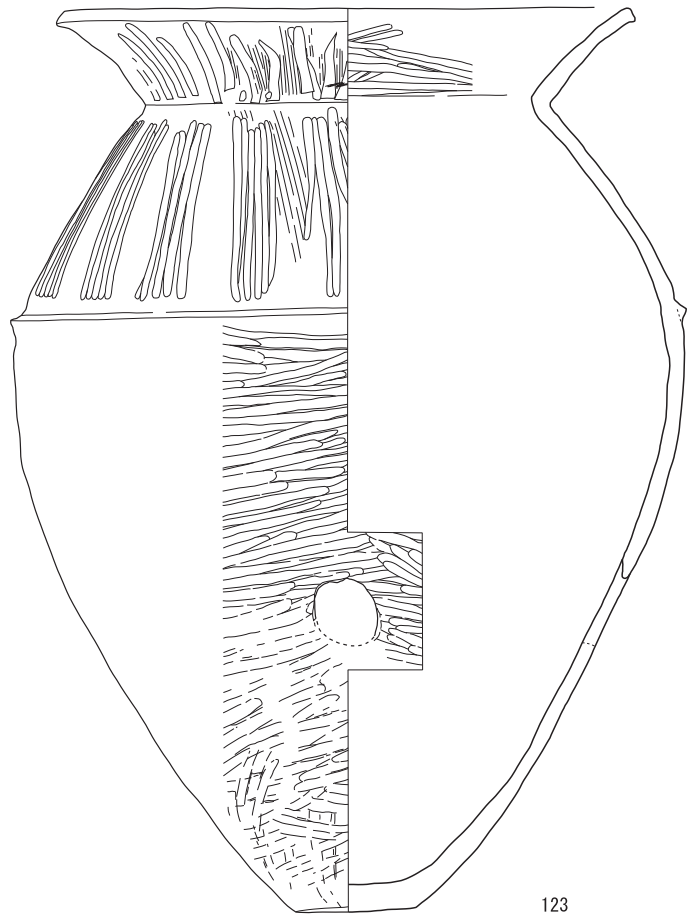
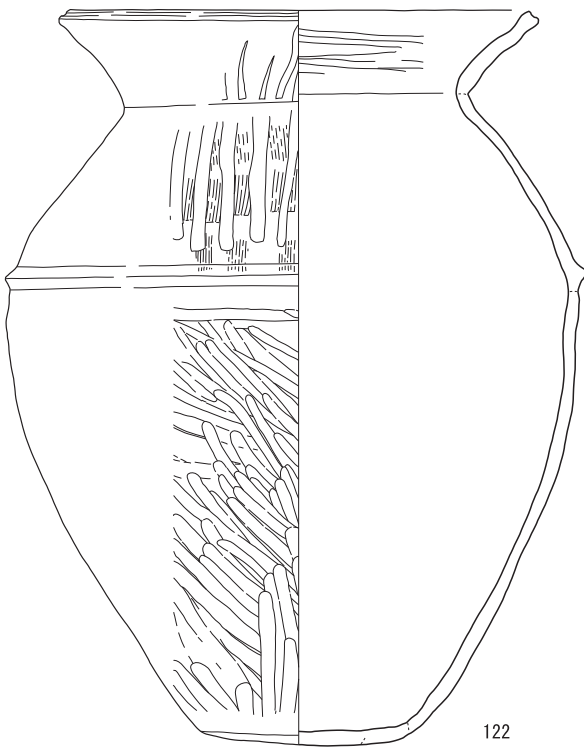
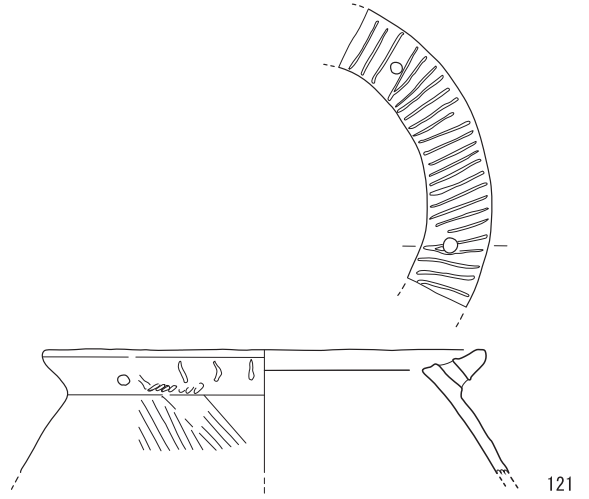
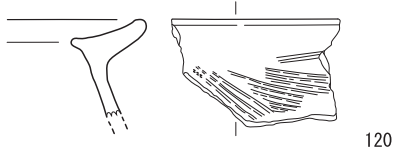
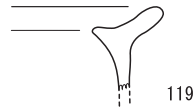
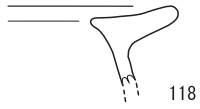
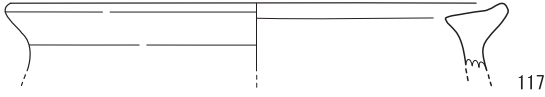
J・K-14・15グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ4.83m以上、幅3.40m以上深さ0.35mである。攪乱等によって切られているため全体形は不明であるが、残存部分から判断して方形プランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認。本来は4本柱と考えられるが不明である。ピットの大きさは変わらないが深さは浅い。建物の硬化面は竪穴建物のほぼ全域で確認できた。炉は認められず、埋土は2層からなる。



【34号竪穴】

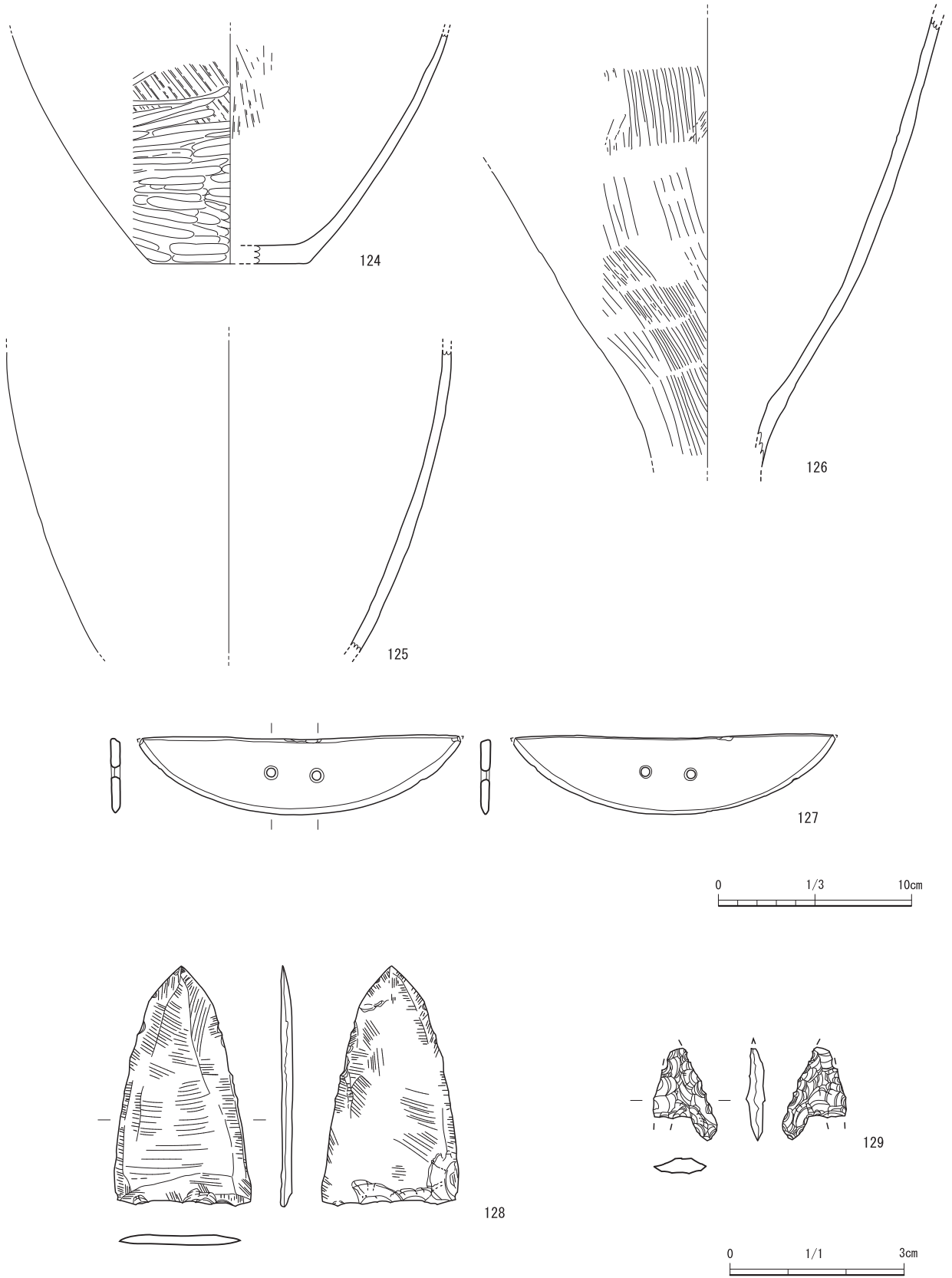


【35号竪穴】

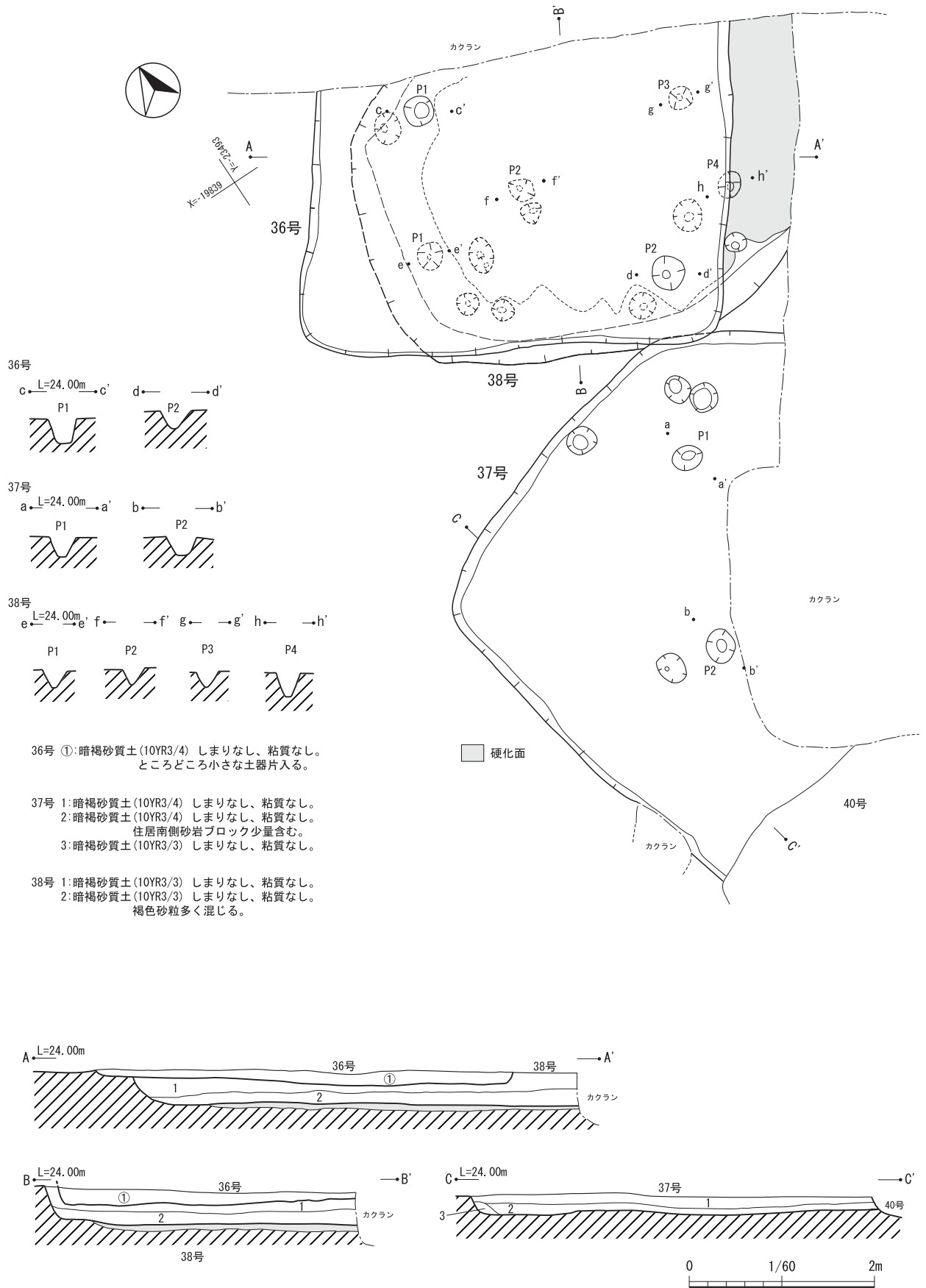


第36図 34・35号竪穴建物(S298・297)出土遺物実測図

【35号竖穴】

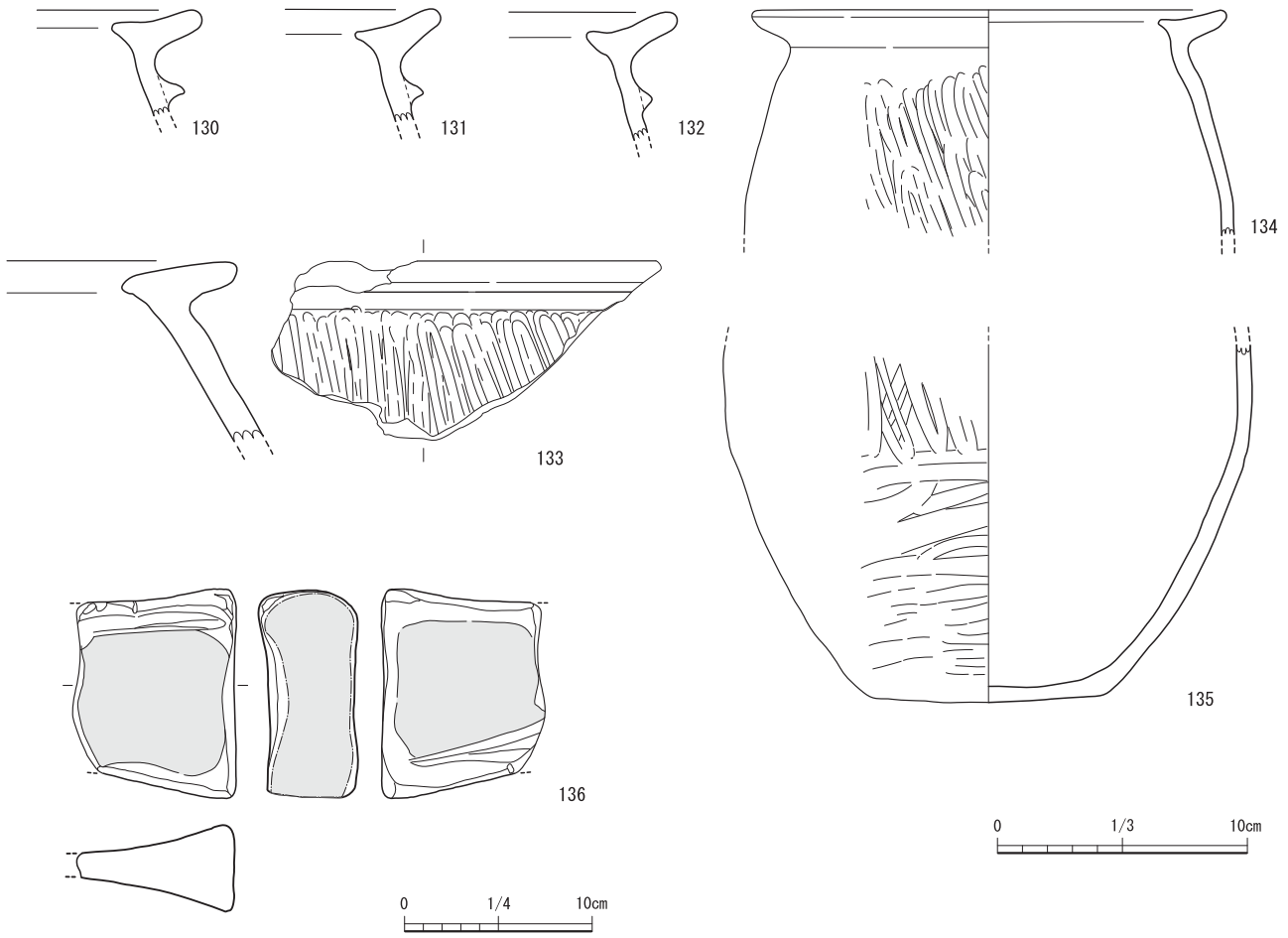


第37図 35号竖穴建物(S297)出土遺物実測図

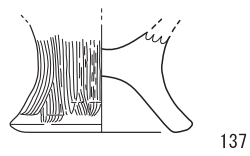


第38図 36・37・38号竪穴建物(S105・104・346) 実測図

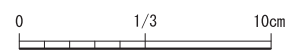
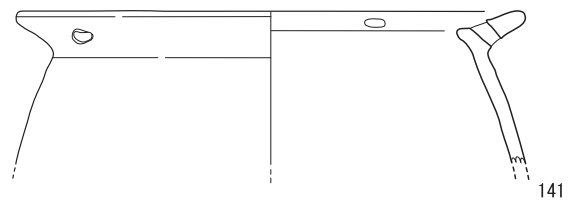
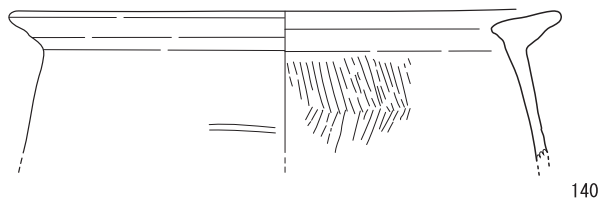
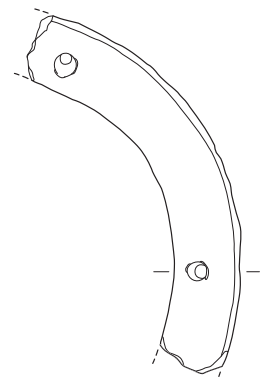
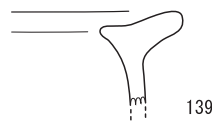
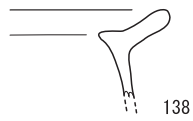
【36号竪穴】



【37号竪穴】

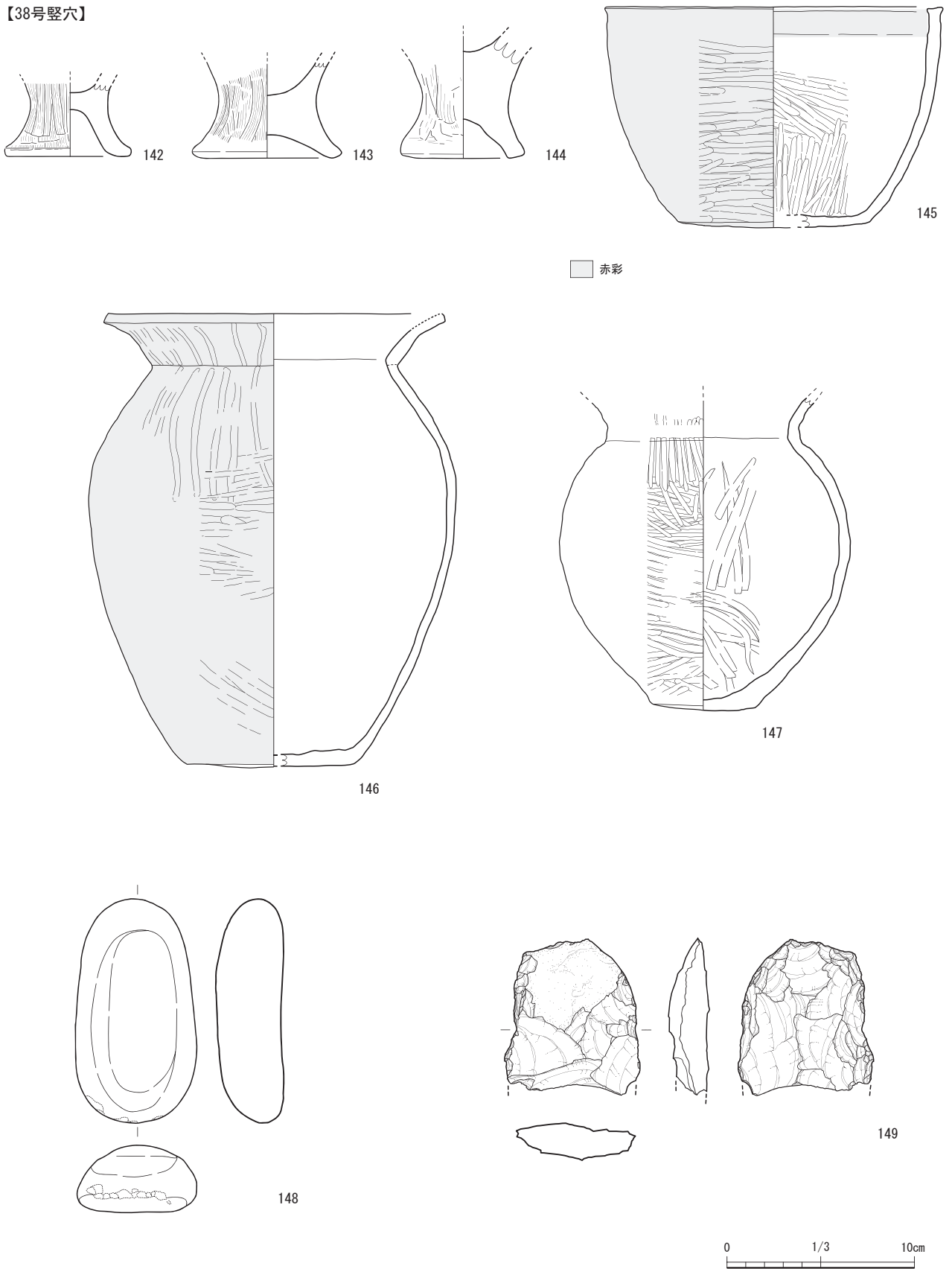


【38号竪穴】



第39図 36・37・38号竪穴建物(S105・104・346)出土遺物実測図

【38号竪穴】



第40図 38号竪穴建物(S346)出土遺物実測図

(出土遺物 138～149)

堅穴建物の埋土から、145 鉢形土器は、反転復元した資料である。器形は半球形の丸味をもつ胴部で、口縁部は素口縁である。底部は平底を呈する。調整は外面を横方向にヘラミガキ、内面下位を縦方向に上位を横方向にヘラミガキを施している。外面には赤彩が見られる。146 壺形土器は、ほぼ完形の資料が出土している。口縁部は、くの字型に屈曲し、やや外反するが口唇部は内傾する。外・内面ともハケ目調整を施している。最大径は胴部中心部よりやや上位に位置する。底部は平底を呈する。外面に赤彩が施され、内面の口縁部にも赤彩が見られる。口縁部外面から胴部にかけて暗文が確認される。147 壺形土器は、反転復元した資料である。口縁部は、くの字型に屈曲し、胴部最大径は中心部に位置する。調整は外面胴部を横ミガキ、胴部から頸部にかけては縦のミガキである。内面の上位には縦方向の調整が施されている。底部は平底を呈する。以上の遺物は、残りもよく堅穴建物に伴うものと思われるが、出土状況は不明である。その他、甕形土器口縁部片、甕形土器脚部片、敲石、打製石斧などで、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

39 号堅穴建物【S306】(第 41・42 図、図版 7・25)

J・K-12・13 グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ 3.58m、幅 3.21m、深さ 0.20m、床面積 11.47 m<sup>2</sup>である。40、41 号堅穴建物を切る。方形プランで南北に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は 4 本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面、炉は認められず、埋土は 3 層からなる。

(出土遺物 150)

堅穴建物の埋土からは、高坏形土器口縁部片が出土している。

40 号堅穴建物【S307】(第 41 図、図版 7)

J・K-12・13 グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ 4.26m、幅 4.81m、深さ 0.24m、床面積 19.10 m<sup>2</sup>である。41、37 号堅穴建物を切る。方形プランで東西に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は 4 本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面、炉は認められず、埋土は 2 層からなる。

堅穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

41 号堅穴建物【S347】(第 41・42 図、図版 8・25)

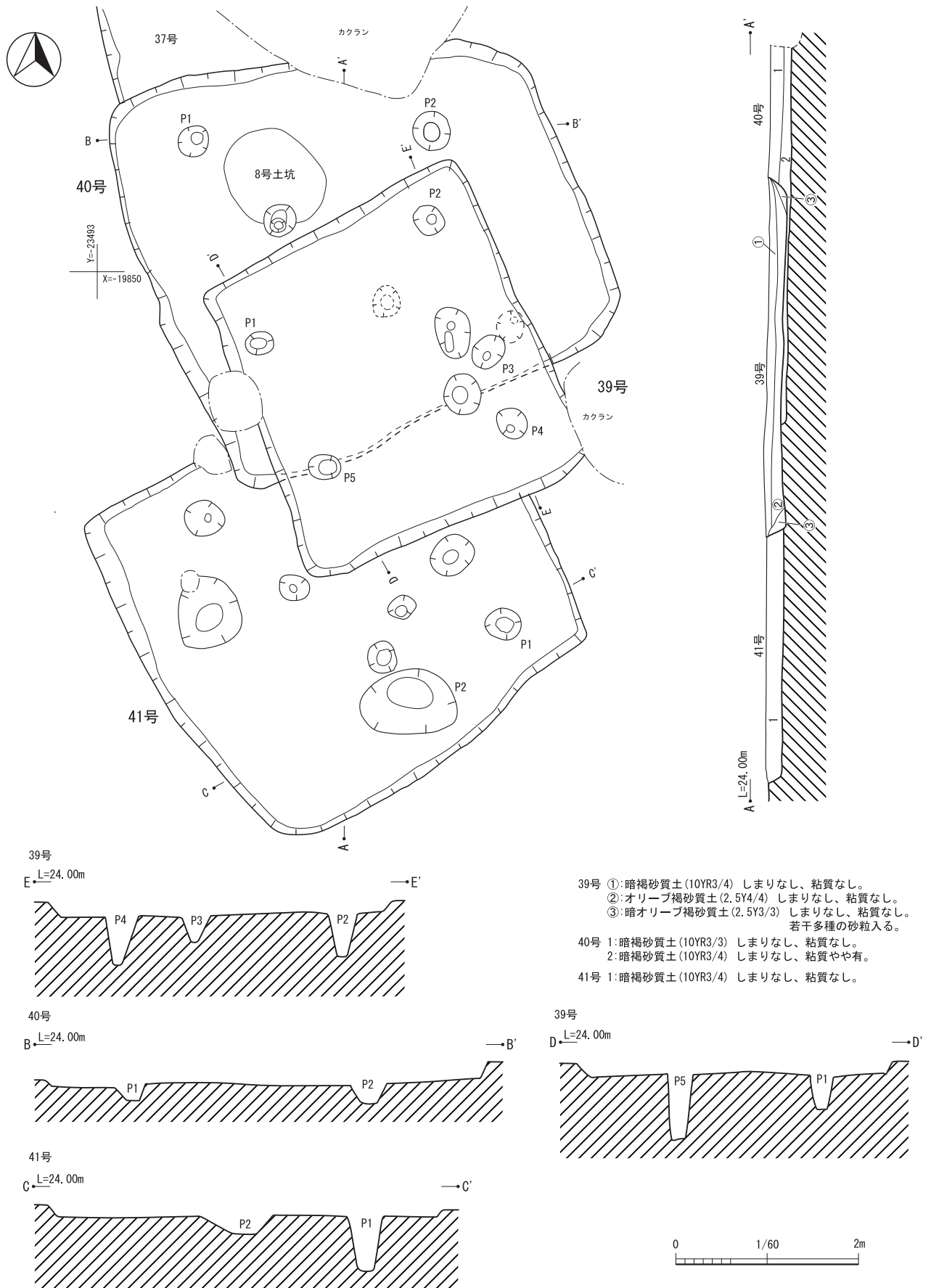
J・K-11・12 グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ 4.57m、幅 4.22m、深さ 0.19mである。39、40 号堅穴建物から切られる。方形のプランで若干東西に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は 4 本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。堅穴建物の硬化面、炉は認められず、埋土は 1 層からなる。

(出土遺物 151・152)

堅穴建物の埋土からは、壺形土器口縁部片、磨石などが出土している。

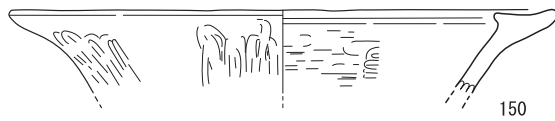
42 号堅穴建物【S102】(第 43・44 図、図版 8・25)

K・L-13・14 グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ 4.87m、幅 4.19m以上、深さ 0.16mである。43、44 号堅穴建物を切る。方形プランで東西に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は 4 本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面、炉は認められず、埋土は 1 層からなる。

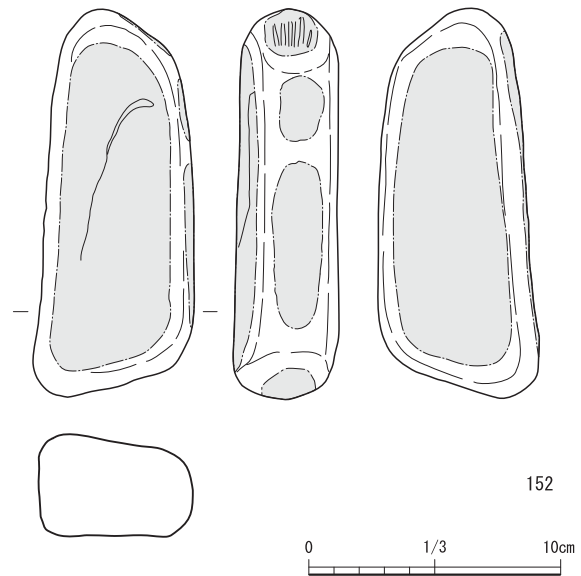
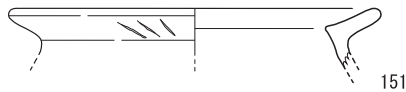


第41図 39・40・41号竪穴建物(S306・307・347)実測図

【39号竪穴】



【41号竪穴】



第42図 39・41号竪穴建物(S306・347)出土遺物実測図

(出土遺物 153・154)

竪穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片、砂岩製の砥石などが出土している。

43号竪穴建物【S228】(第43図、図版8)

K-13・14、L-13グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ4.66m、幅3.74m、深さ0.22m、床面積17.10㎡である。44号竪穴建物を切る。方形プランで南北に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面、炉は認められず、埋土は2層からなる。

竪穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

44号竪穴建物【S316】(第43・44図、図版8・25)

L・M-13グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ3.56m以上、幅3.02m以上、深さ0.27mである。42・43号竪穴建物、攪乱等によって切られているため全体形は不明であるが、残存部分から判断して方形プランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面、炉は認められない。

(出土遺物 155～158)

竪穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片、甕形土器脚部片、打製石斧など出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

45号竪穴建物【S70】(第45図、図版9)

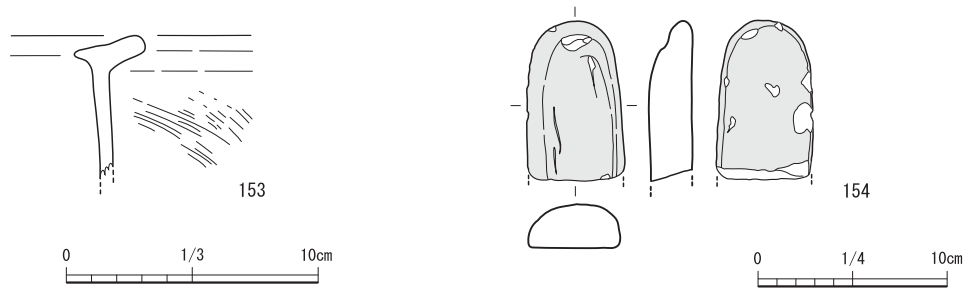
L-12グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ4.73m、幅2.18m以上、深さ0.11mである。46号竪穴建物を切る。攪乱等によって切られているため全体形は不明であるが、残存部分から判断して方形プランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面、炉は認められず、埋土は1層からなる。

竪穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

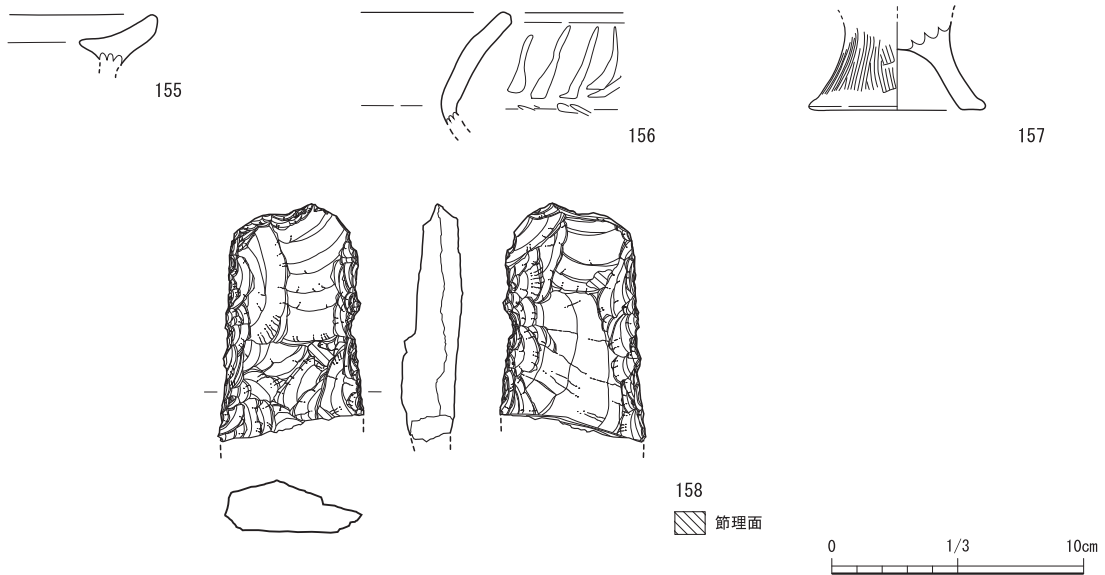




【42号竖穴】



【44号竖穴】



第44図 42・44号竖穴建物(S102・316)出土遺物実測図

46号竖穴建物【S146】(第45図、図版9・25)

L-12 グリッドで確認された竖穴建物である。確認時での規模は、長さ 5.91m以上、幅 3.34m以上、深さ 0.21mである。45号竖穴建物、攪乱等によって切られているため全体形は不明であるが、残存部分から判断して方形プランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面、炉は認められず、埋土は2層からなる。

(出土遺物 159~160)

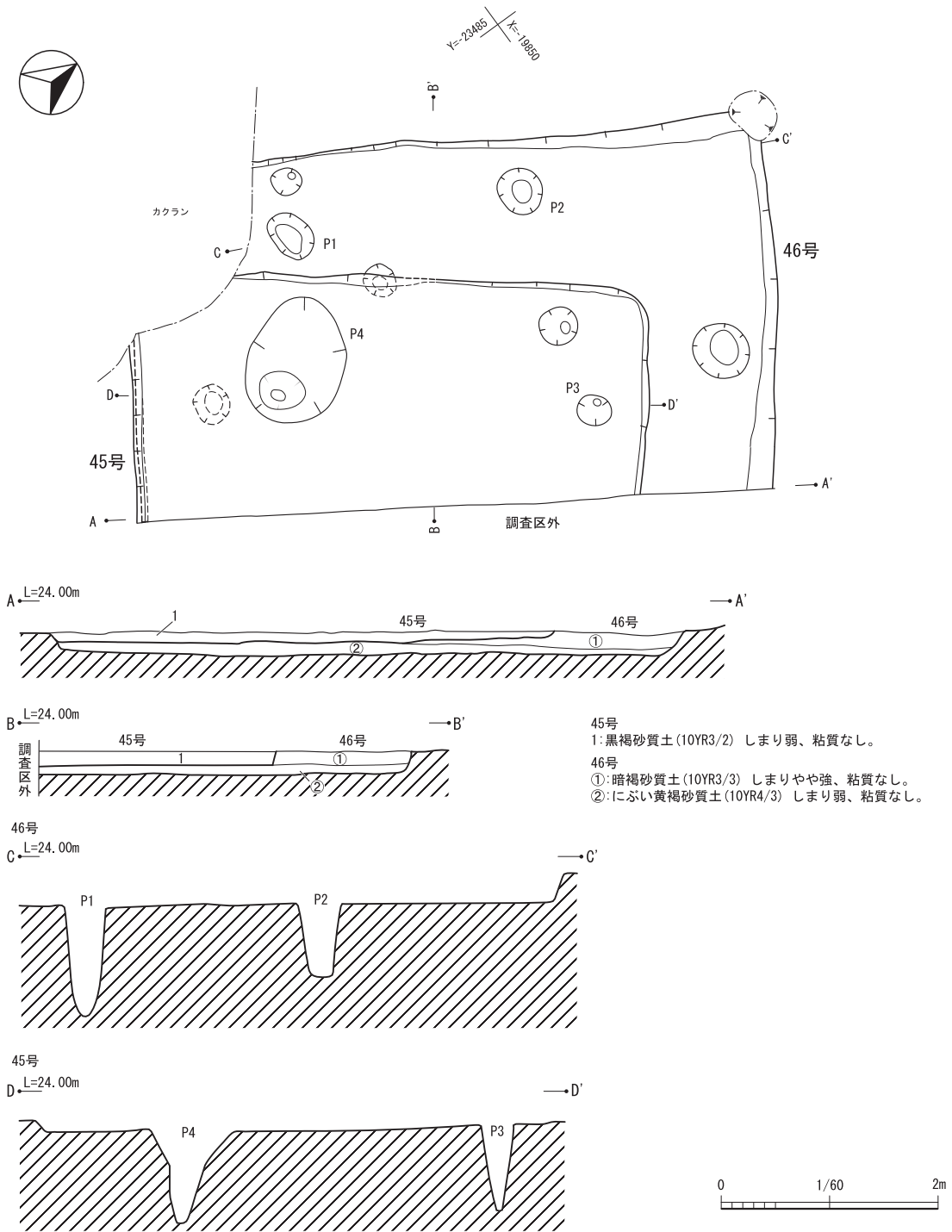
竖穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片、打製石鏃など出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

47号竖穴建物【S68】(第46・47図、図版9・25・26)

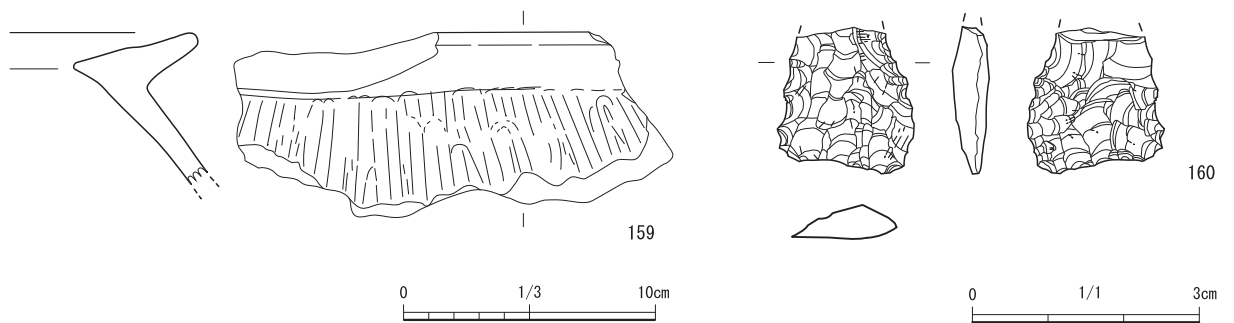
I-12・13、J-12 グリッドで確認された竖穴建物である。確認時での規模は、長さ 4.92m、幅 3.72m、深さ 0.37m、床面積 17.50 m<sup>2</sup>である。48・49号竖穴建物を切る。方形プランで南北に長くなる。竖穴建物の北側壁際にベッド状の段を持つ。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは浅い。建物の硬化面は建物の中心に確認できた。炉は認められず、埋土は3層からなる。

(出土遺物 161~175)

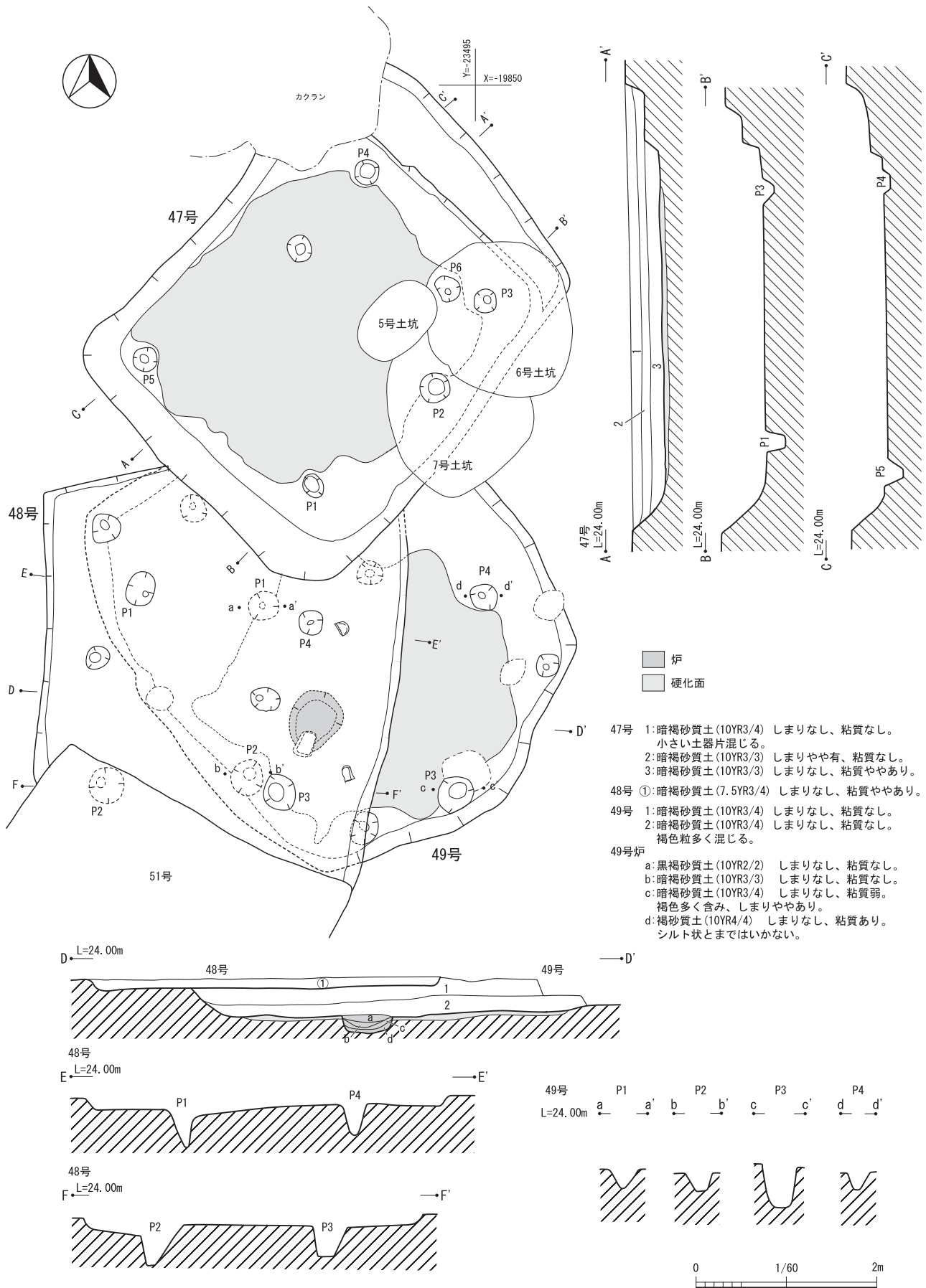
竖穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片、甕形土器脚部片、壺形土器口縁部片、磨石、砥石など出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。



【46号竪穴】

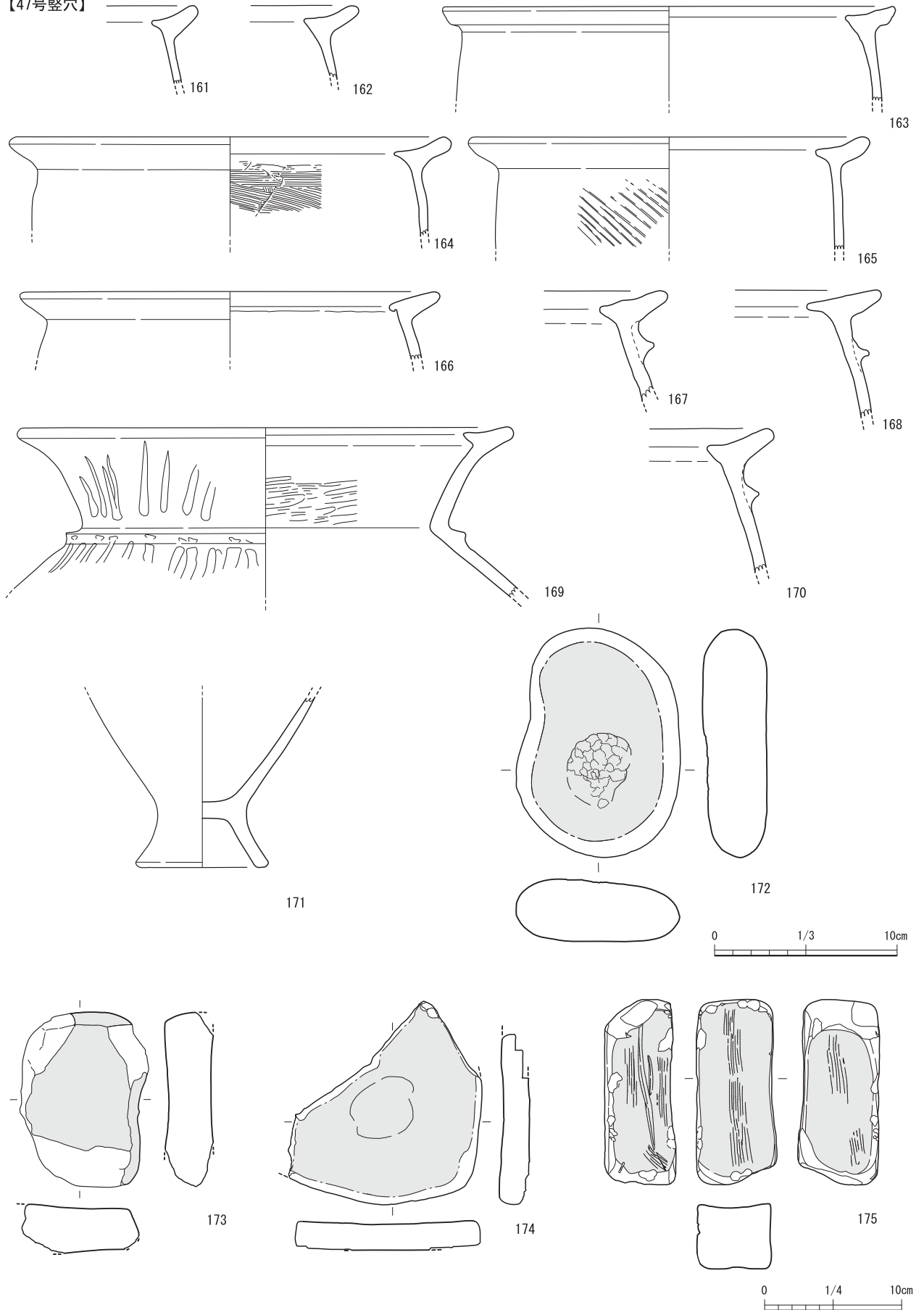


第45図 45・46号竪穴建物(S70・146)及び出土遺物実測図



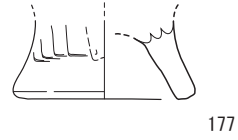
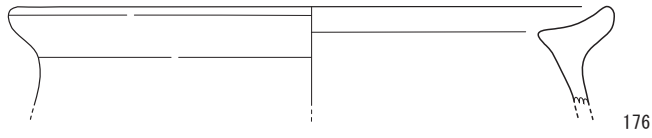
第46図 47・48・49号竪穴建物(S68・315・341)実測図

【47号竪穴】

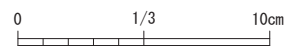
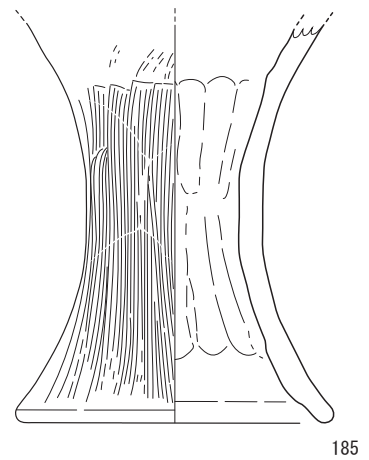
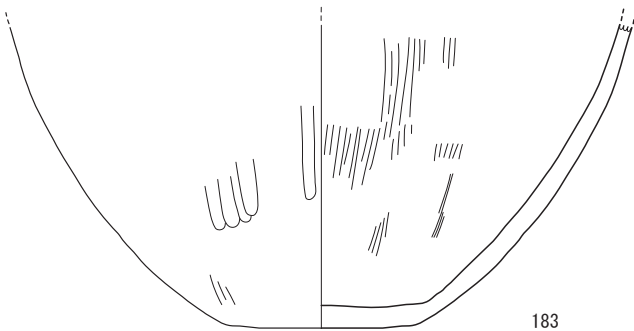
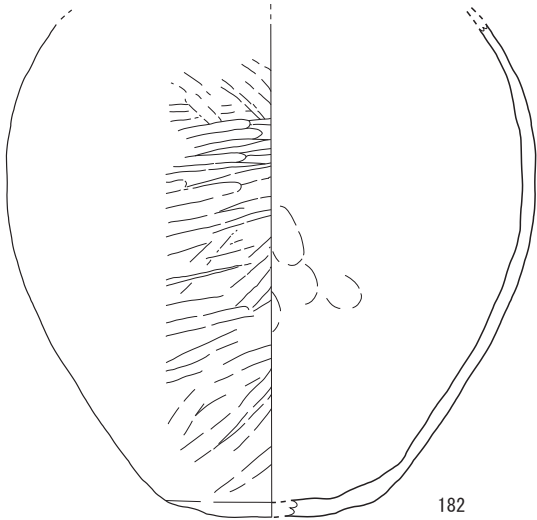
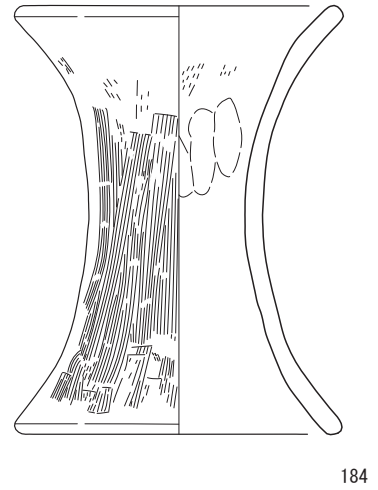
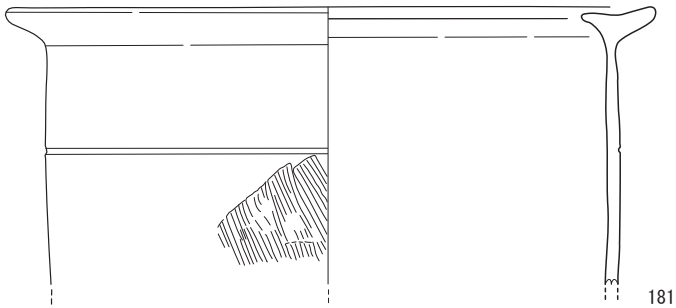
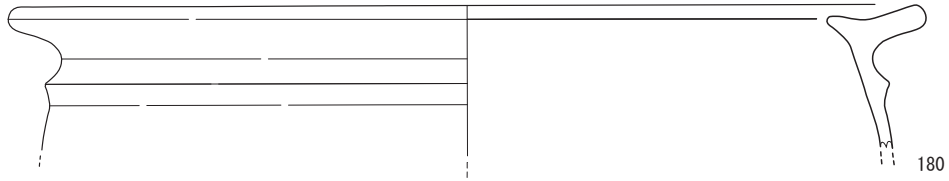
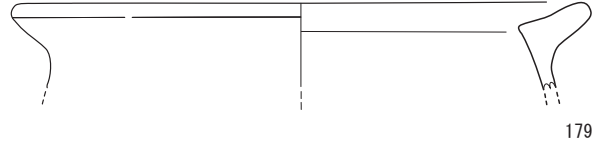
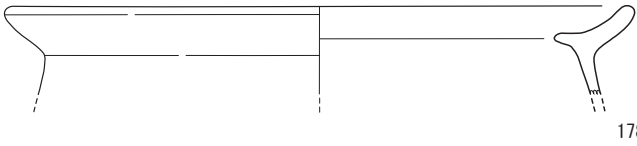


第47図 47号竪穴建物(S68)出土遺物実測図

【48号竪穴】

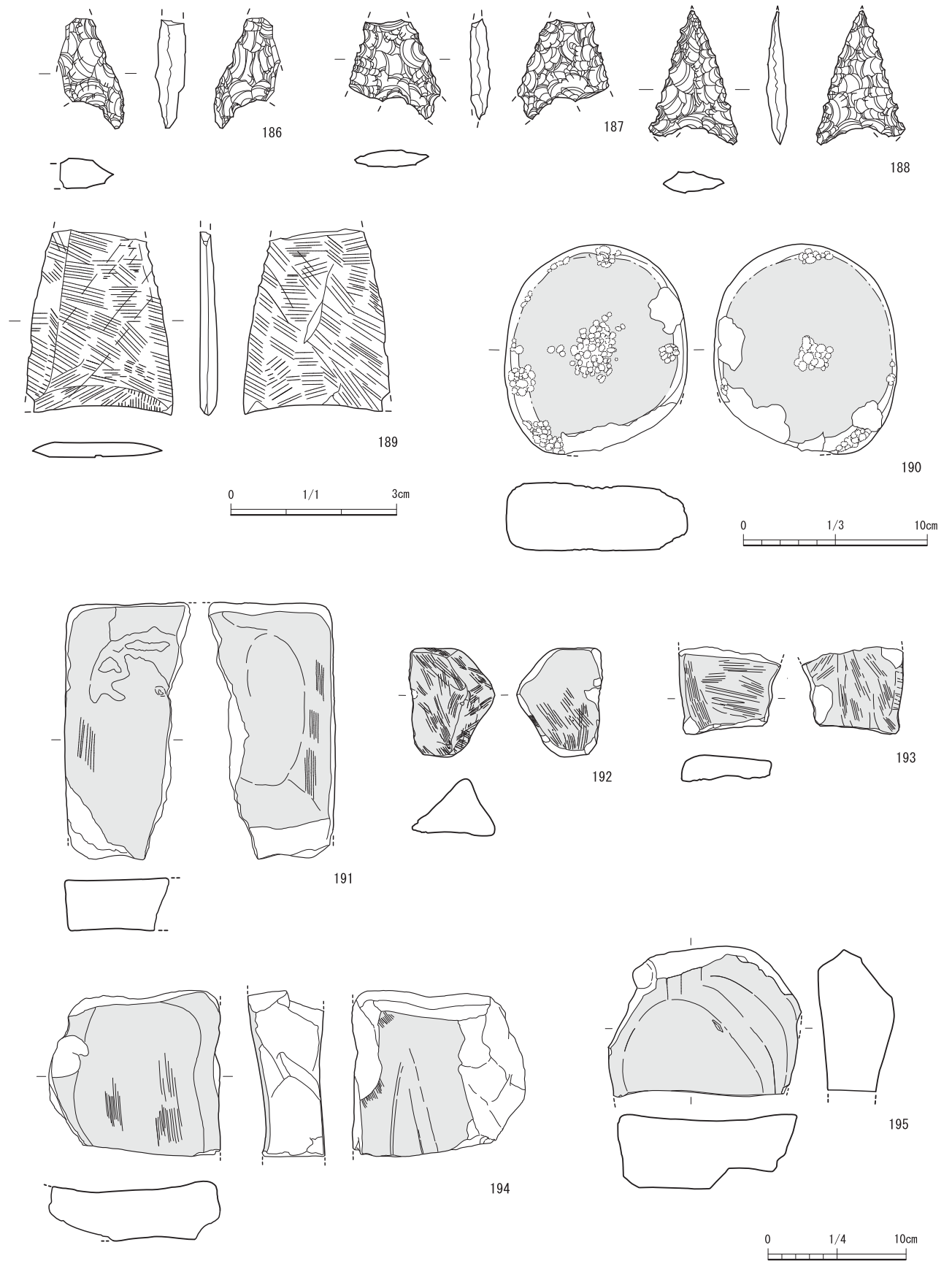


【49号竪穴】



第48図 48・49号竪穴建物(S315・341)出土遺物実測図

【49号竖穴】



第49図 49号竖穴建物(S341)出土遺物実測図

48号竪穴建物【S315】(第46・48図、図版26)

I-12・13グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ3.93m以上、幅3.68m以上、深さ0.11mである。47号竪穴建物によって切られ、49号竪穴建物を切る。建物等によって切られている為全体形は不明であるが、残存部分から判断して方形プランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面、炉は認められず、埋土は1層からなる。

(出土遺物176・177)

竪穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片、甕形土器脚部片が出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

49号竪穴建物【S341】(第46・48・49図、図版9・26・27)

I・J-11・12グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ5.21m以上、幅4.49m、深さ0.41mである。47・48号竪穴建物から切られるが、残存部分から判断して方形プランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面は竪穴建物の東南側で広く確認できた。埋土は2層からなる。炉は竪穴建物の中心から南西方向にずれた場所に位置し長軸0.68m、短軸0.54m、深さ0.20mを測る。断面は皿状を呈する。

(出土遺物178～195)

竪穴建物の埋土からは、182・183壺形土器、184・185器台が建物の床面近くから出土している。182は壺形土器の胴部から底部である。外面には、横方向にミガキ痕が残り、内面には、ハケ目後指頭圧痕が残る。最大径は胴部中心部よりやや上位に位置する。底部は平底を呈する。183は壺形土器の胴部から底部である。外面には、縦方向にミガキ痕が残り、内面には、ハケ目が残る。底部は平底を呈する。184・185は器台で、外面にハケ目が残る、内面にはナデ痕が残る。その他の出土遺物は、甕形土器口縁部片、打製石鏃、磨製石鏃、磨石、砥石など出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

50号竪穴建物【S66】(第50図、図版10)

H・I-9・10グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ4.25m、幅4.11m、深さ0.12m、床面積16.59㎡である。51・52号竪穴建物を切る。方形プランで東西に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は2～4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは浅くなる。建物の硬化面、炉は認められず、埋土は1層からなる。

竪穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

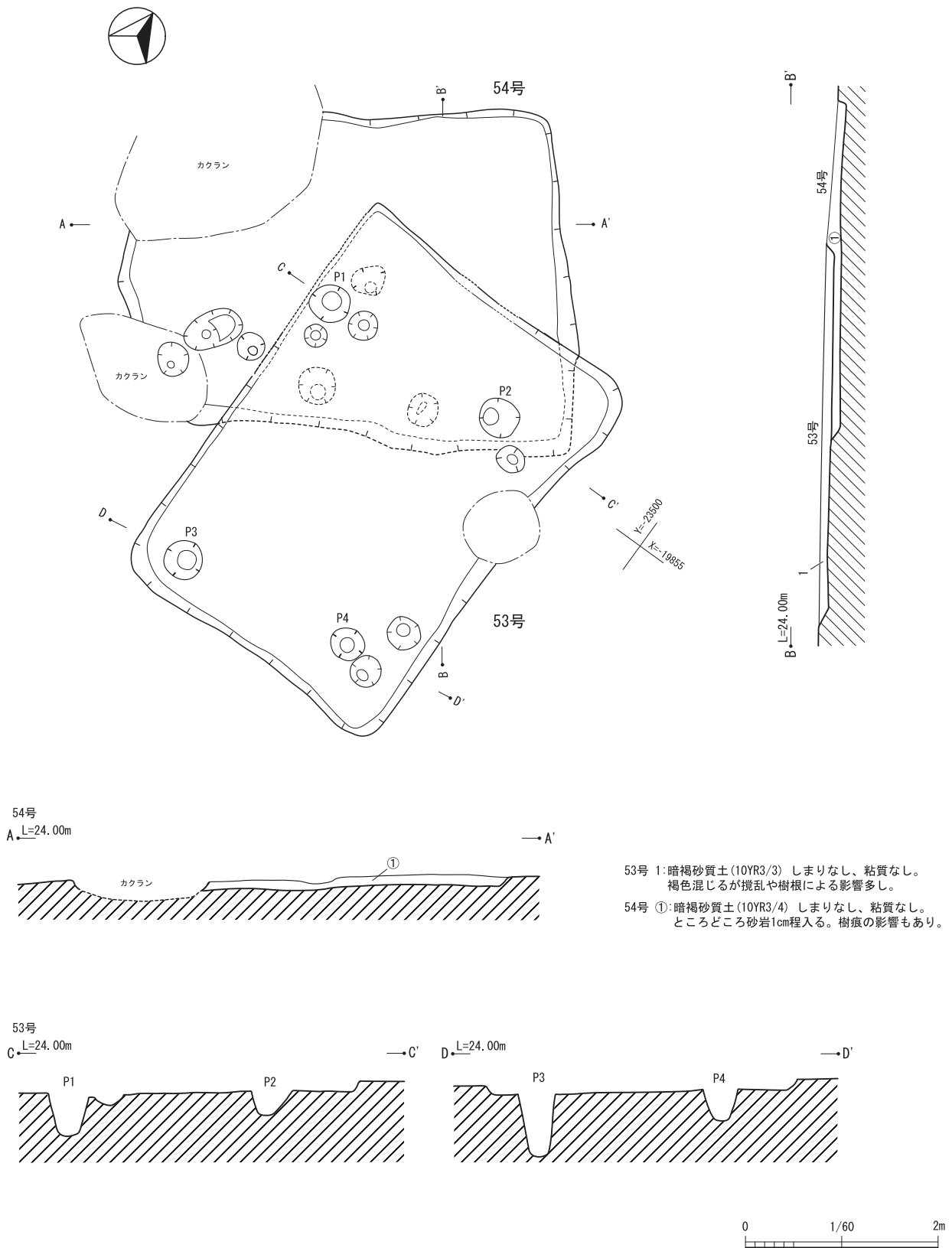
51号竪穴建物【S67】(第50図、図版10)

H・I-10・11グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ3.87m、幅3.82m、深さ0.17mである。52号竪穴建物を切り、50号竪穴建物から切られる。方形プランで東西に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面は確認できず、埋土は1層からなる。炉は竪穴建物のほぼ中心に位置し、長軸0.84m、短軸0.73m、深さ0.15mを測る。断面は皿状を呈する。

竪穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。







第51図 53・54号竪穴建物(S157・203)実測図

## 52号堅穴建物【S65】(第50図、図版10)

H-10・11グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ4.67m以上、幅3.56m以上、深さ0.20mである。50・51号堅穴建物によって切られているため全体形は不明であるが、残存部分から判断して方形プランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは浅い。建物の硬化面、炉は確認できず、埋土は1層からなる。

堅穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

## 53号堅穴建物【S157】(第51図、図版10)

H-11・12グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ4.46m、幅3.18m、深さ0.11m、床面積14.52㎡である。54号堅穴建物を切る。方形プランで南北に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面、炉は認められず、埋土は1層からなる。

堅穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

## 54号堅穴建物【S203】(第51図、図版10)

G・h-11・12グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ4.69m、幅3.42m、深さ0.13mである。53号堅穴建物から切られる方形プランで東西に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認する。本来は4本柱と考えられるが不明である。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面、炉は認められず、埋土は1層からなる。

堅穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

## 55号堅穴建物【S64】(第52・53図、図版10・11・27)

J-9・10、K-10グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ5.82m、幅3.89m以上、深さ0.46mである。調査区外に伸びているため全体形は不明であるが、残存部分から判断して方形プランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは浅い。建物の硬化面、炉は認められず、埋土は1層からなる。

(出土遺物196)

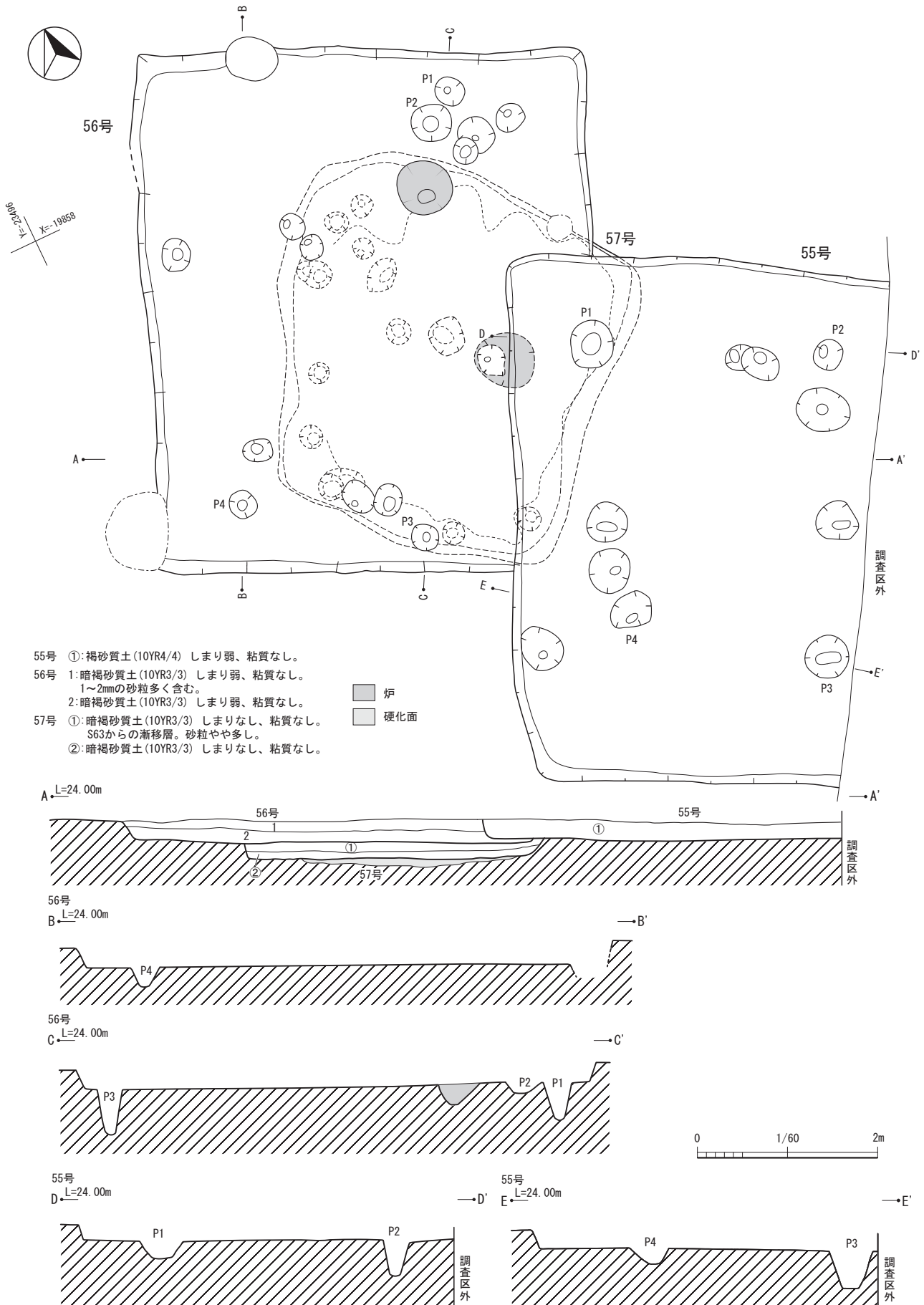
堅穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片等が出土している。

## 56号堅穴建物【S63】(第52・53図、図版11・27)

I・J-10・11グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ5.85m、幅5.01m、深さ0.25mである。57号堅穴建物を切り、55号堅穴建物から切られる方形プランで、北東方向に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面は確認できず、埋土は2層からなる。炉は堅穴建物の東側に位置し、長軸0.61m、短軸0.59m、深さ0.22mを測る。断面は皿状を呈する。

(出土遺物197～204)

堅穴建物の埋土からは、壺形土器口縁部片、壺形土器胴部から底部片、甕形土器口縁部片・脚部片、石器など出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

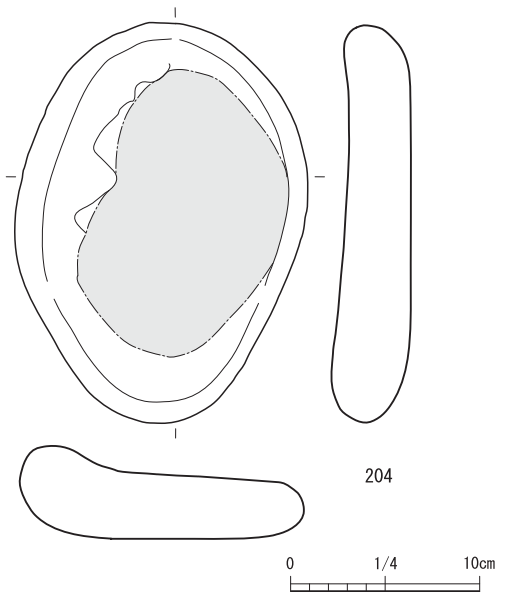
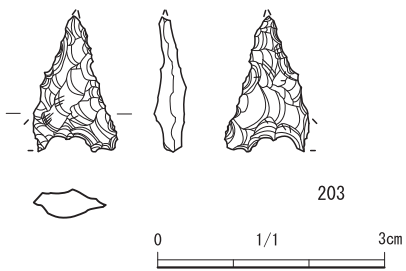
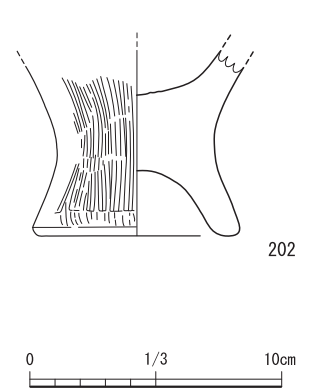
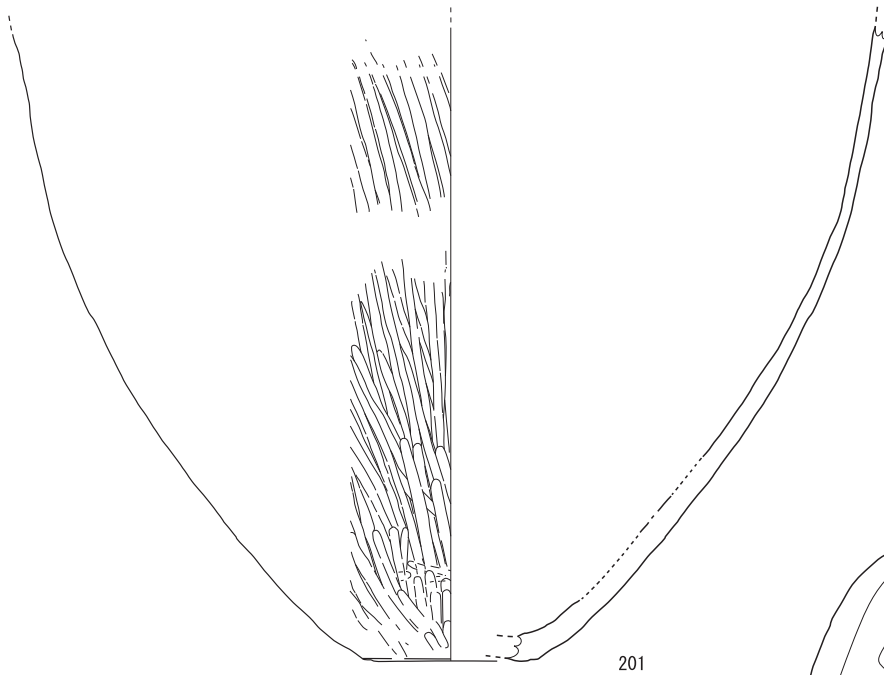
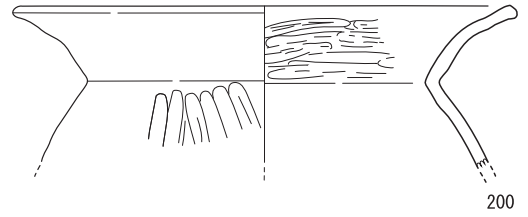
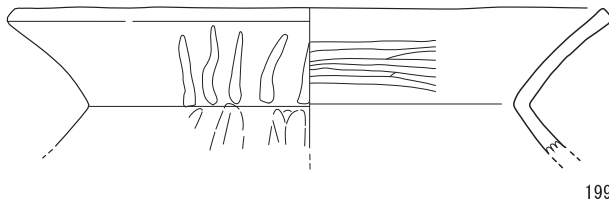
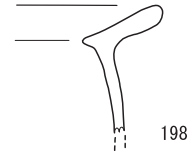
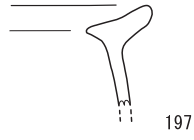


第52図 55・56・57号竪穴建物(S64・63・172)実測図

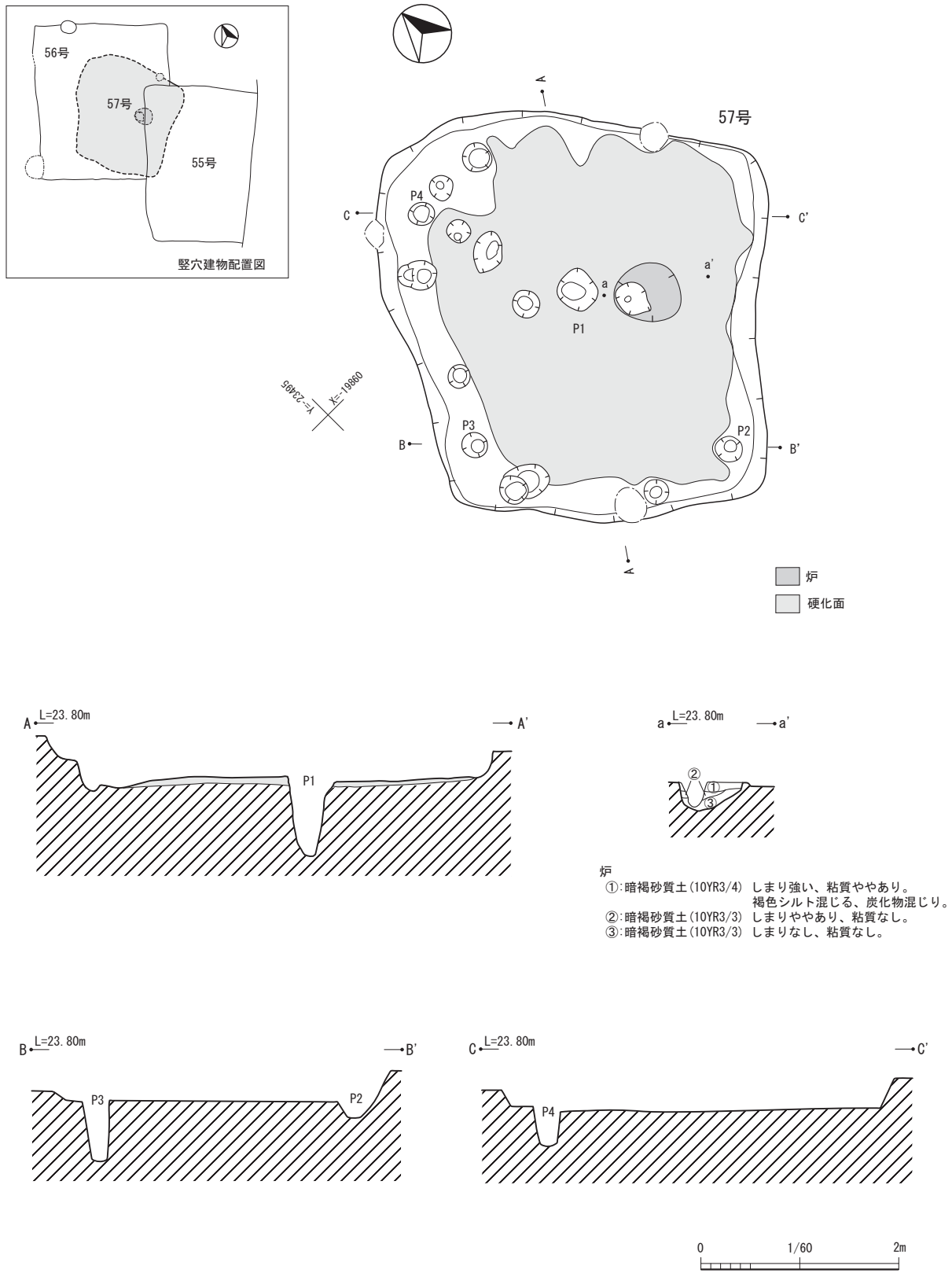
【55号竖穴】



【56号竖穴】

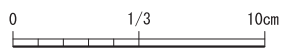
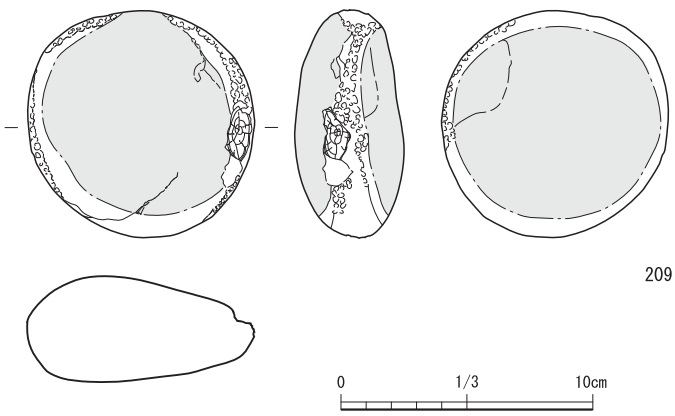
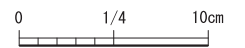
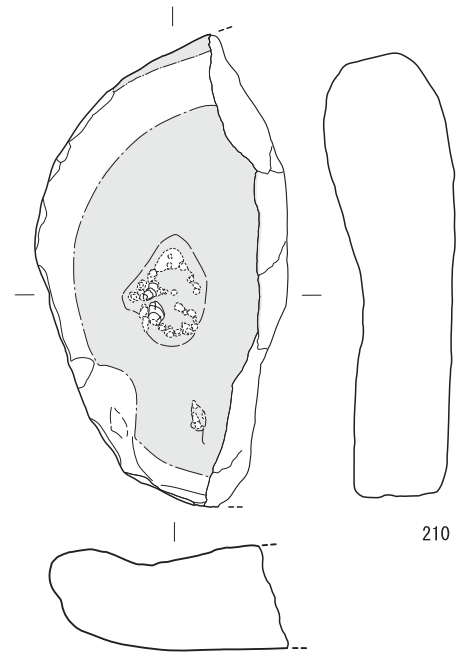
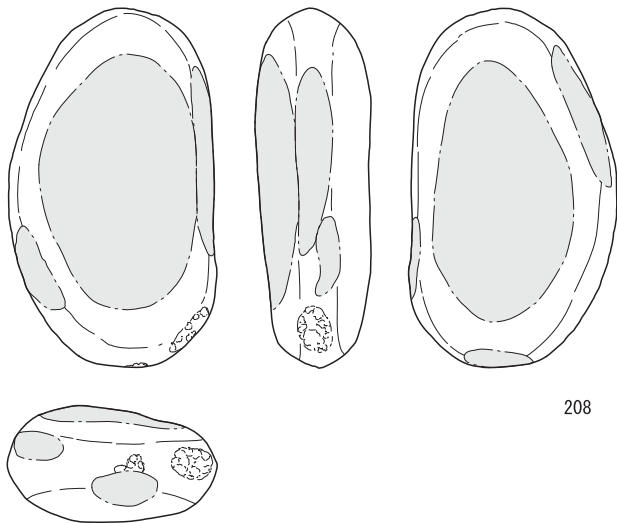
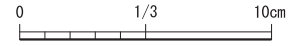
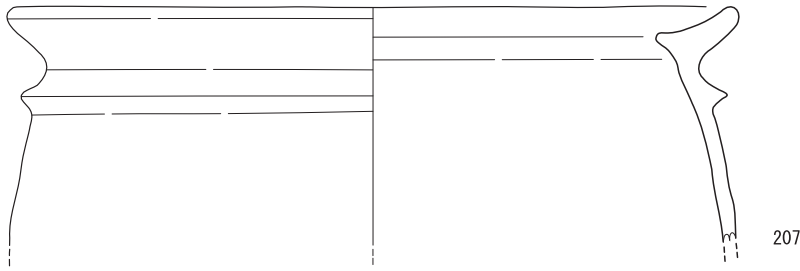
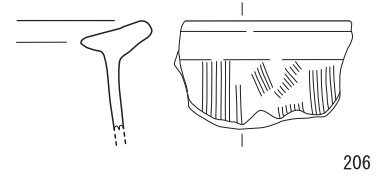
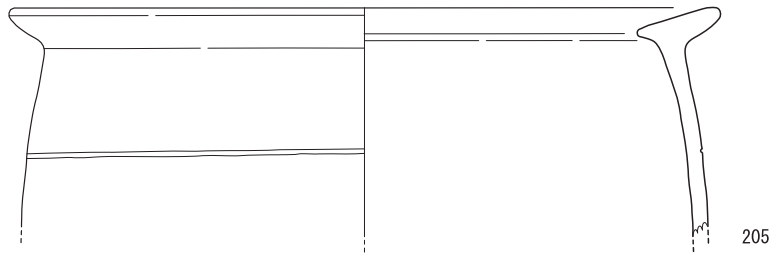


第53図 55・56号竖穴建物(S64・63)出土遺物実測図

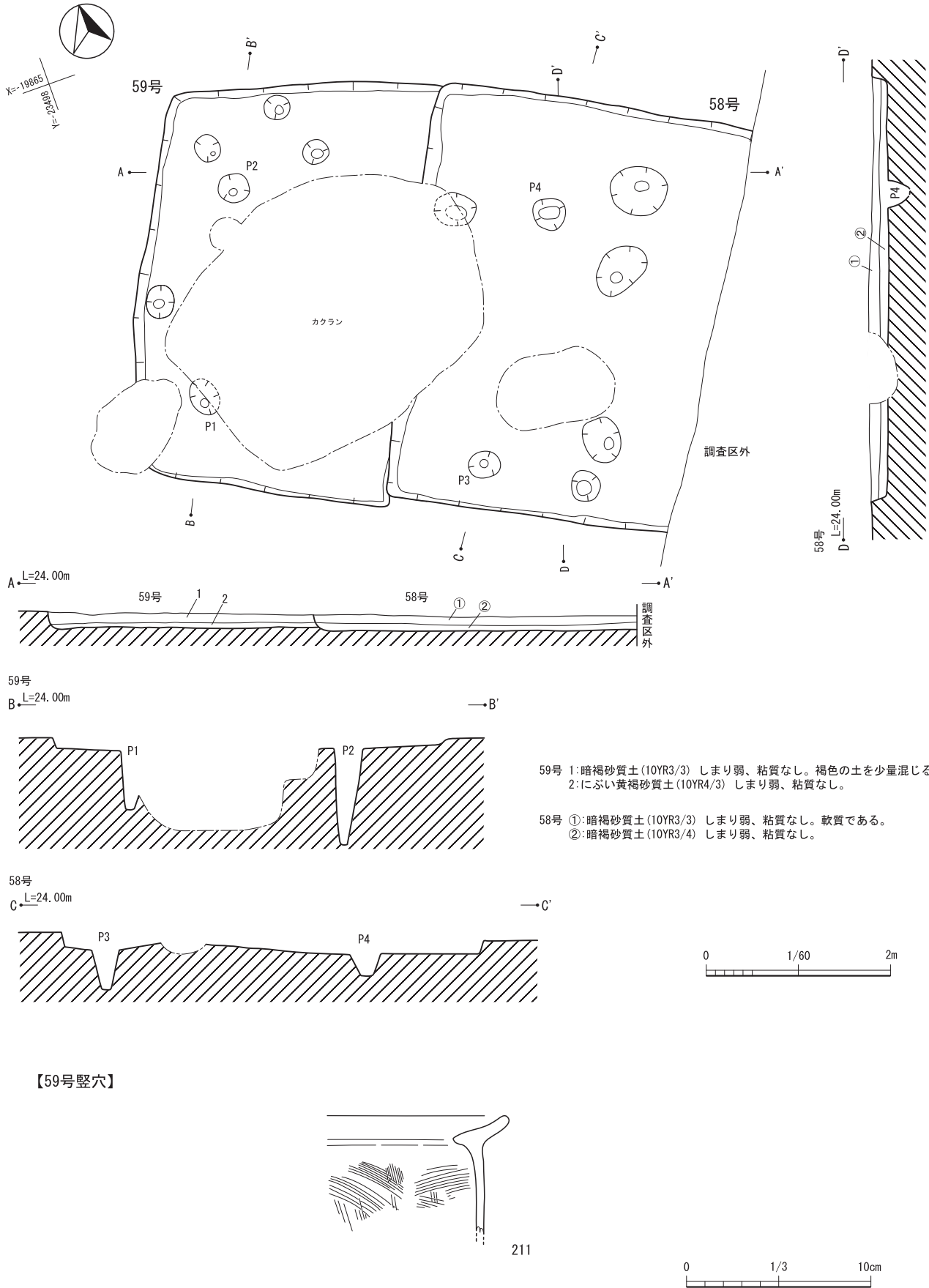


第54図 57号竪穴建物 (S172) 実測図

【57号竪穴】



第55図 57号竪穴建物(S172)出土遺物実測図



第56図 58・59号竪穴建物 (S62・61) 及び出土遺物実測図



## 57号堅穴建物【S172】(第52・54・55図、図版11・27)

J・10・11グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ4.10m、幅3.90m、深さ0.48m、床面積13.86㎡である。55・56号堅穴建物に切られる方形プランで南北方向に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面はほぼ建物の全域で確認でき、埋土は2層からなる。炉は堅穴建物の東南側に位置し長軸0.66m、短軸0.60m、深さ0.28mを測る。断面は皿状を呈する。

(出土遺物205～210)

堅穴建物の埋土からは甕形土器口縁部片、石器など出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

## 58号堅穴建物【S62】(第56図、図版11)

I・J-8・9グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ4.53m、幅2.49m以上、深さ0.18mである。59号堅穴建物を切っている。全体形は調査区外に広がっているため不明であるが、残存部分から判断して方形プランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面、炉は確認できず、埋土は2層からなる。

堅穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

## 59号堅穴建物【S61】(第56図、図版11・28)

I・J-8・9グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ4.51m、幅2.87m、深さ0.23mである。58号堅穴建物から切られている。残存部から判断して方形プランで南北方向に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面、炉は確認できず、埋土は2層からなる。

(出土遺物211)

堅穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片が出土している。

## 60号～66号堅穴建物

G・H・I-6・7・8グリッドで確認された遺構で、7軒の堅穴建物が(古)66号→65号→64号・62号→63号→61号→60号(新)の順で切り合っていると考えられる。

## 60号堅穴建物【S10】(第57・58・59図、図版12・28)

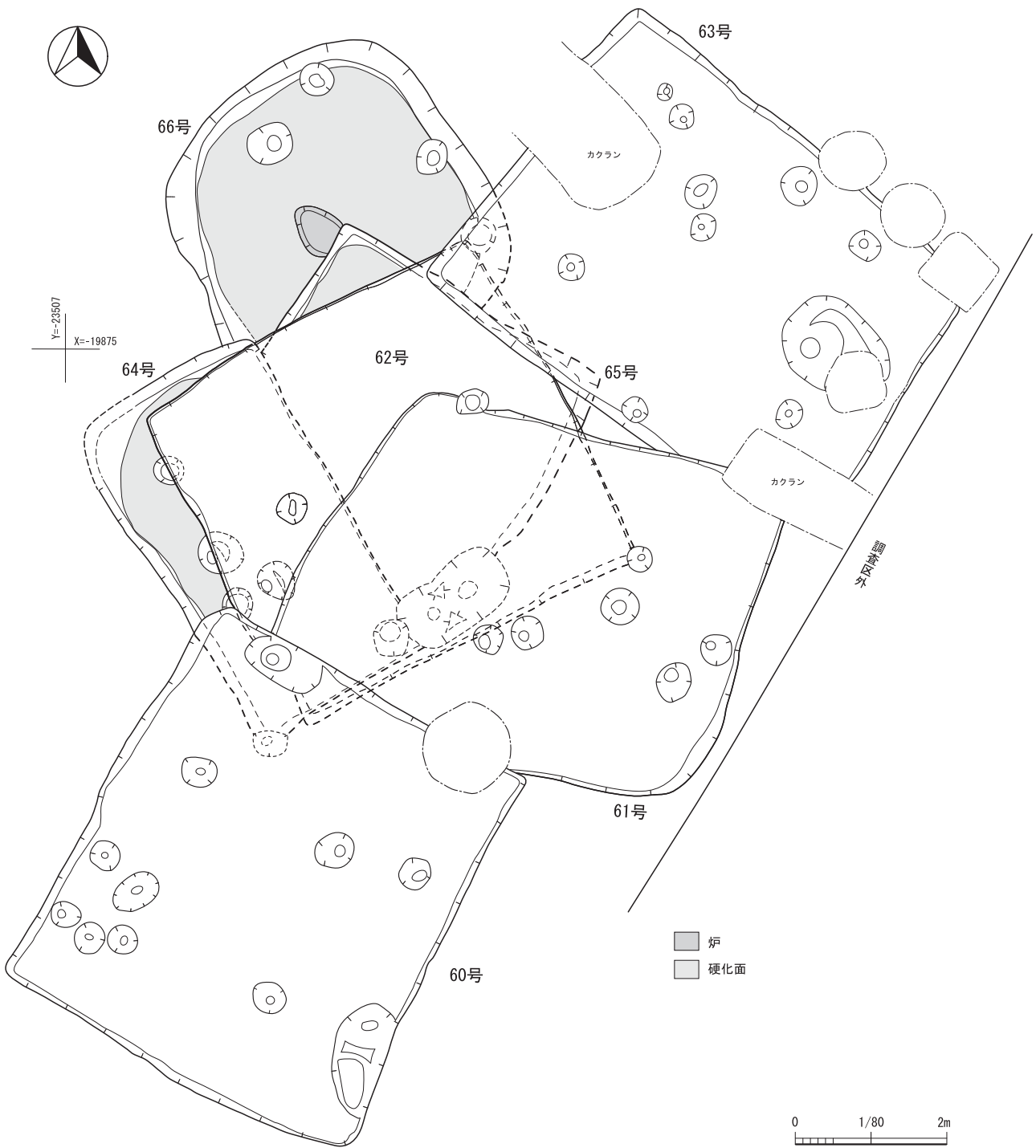
G・H-6・7グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ5.76m、幅4.91m、深さ0.23m、床面積27.61㎡である。7軒の建物の切り合い関係の中で一番新しい遺構となる。プランは方形で南北方向に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは浅い。建物の硬化面、炉は確認できず、埋土は2層からなる。貯蔵穴と考えられる土坑状の落ちが建物の南壁際と北壁際の2ヶ所で確認できた。

(出土遺物212)

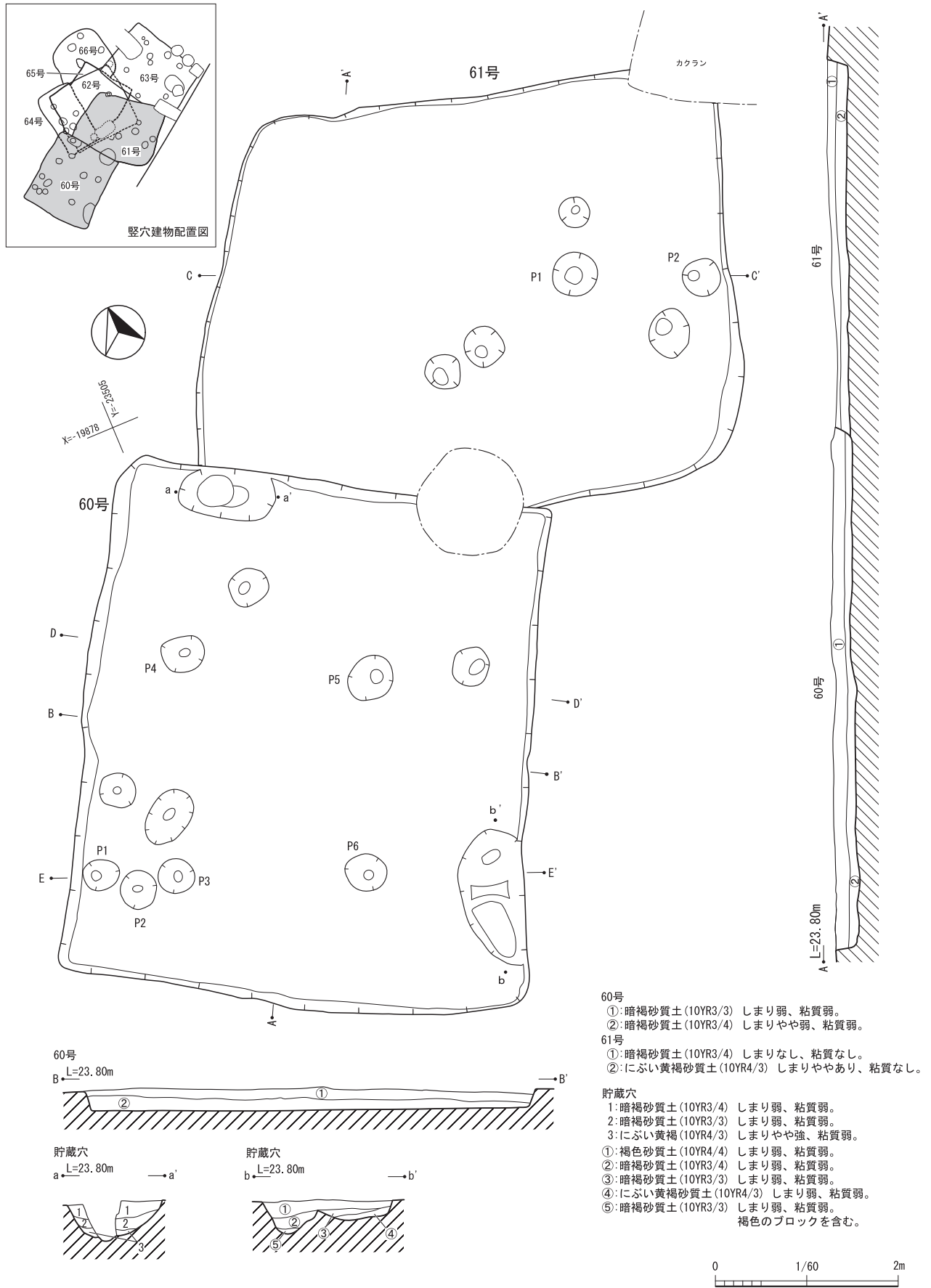
堅穴建物の埋土からは、台石が出土している。

## 61号堅穴建物【S57】(第57・58・59図、図版12・28)

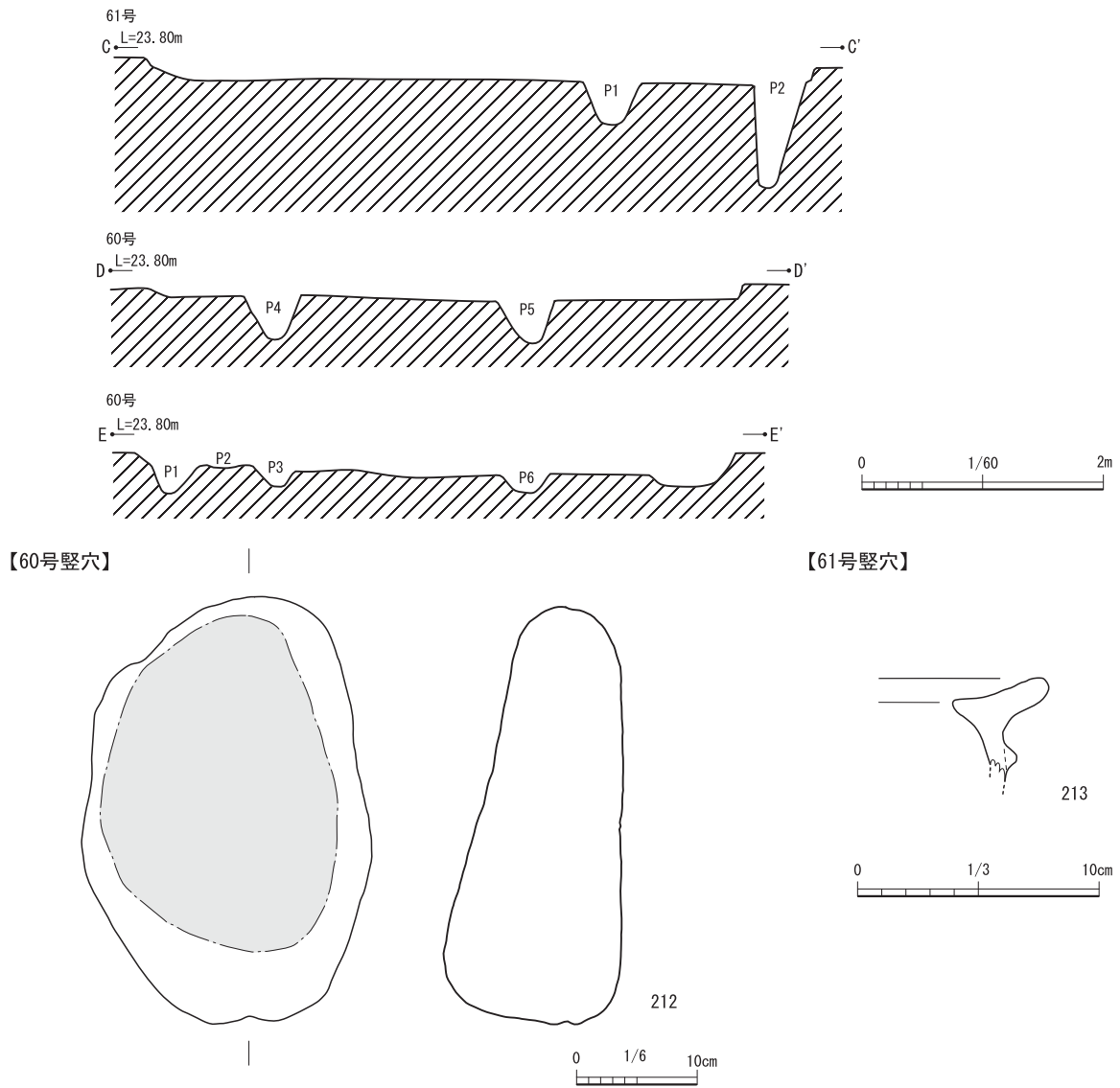
H・I-6・7グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ5.78m、幅4.62m、深さ0.22



第57図 60・61・62・63・64・65・66号竪穴建物(S10・57・158・58・183・227・60)配置図



第58図 60・61号竪穴建物(S10・57)実測図



第59図 60・61号竪穴建物(S10・57)及び出土遺物実測図

mである。63号竪穴建物を切る。方形プランで東西方向に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが建物に伴うかは不明である。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面、炉は確認できず、埋土は2層からなる。

(出土遺物 213)

竪穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片が出土している。

62号竪穴建物【S158】(第57・62図、図版12・28)

H・I-7・8グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ5.93m、幅4.43m、深さ0.20mである。64・65号竪穴建物を切る。方形プランで西北方向に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は2本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらず深さは浅い。建物の硬化面、炉は確認できず、埋土は3層からなる。貯蔵穴と考えられる落ちが確認されているが詳細については不明である。

(出土遺物 214~220)

竪穴建物の埋土からは、壺形土器が出土している。217は壺形土器の口縁部から胴部である。外面にはハケ目後丁寧なミガキを施してある。口縁部には暗文を施し、更に連続三角文が入る。内面にはハケ目が残り、口縁部にはミガキを施す。その他の出土遺物は、甕形土器口縁部片、甕形土器脚部片、石包丁である。

## 63号竪穴建物【S58】(第57・60・62・63図、図版 12・28)

G-7、H-7・8 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 5.10m、幅 4.99m、深さ 0.39m、床面積 23.74 m<sup>2</sup>である。62号・65号・66号竪穴建物を切る。プランは方形で北東方向に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は2本柱と考えられる。ピットの大きさ、深さは変わらない。建物の硬化面、炉は確認できず、埋土は2層からなる。貯蔵穴は建物の東南壁際で確認できた。

(出土遺物 221～229)

竪穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片・脚部片、壺形土器口縁部片、石器等が出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

## 64号竪穴建物【S183】(第57・60・63図、図版 12・29)

G・H-7 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 4.81m、幅 2.56m、深さ 0.22m、床面積 12.62 m<sup>2</sup>である。65・66号竪穴建物を切る。プランは方形で西北方向に細長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は2本柱と考えられるが不明である。建物の硬化面は建物のほぼ全域で確認できた。埋土は4層からなる。炉は確認できなかった。

(出土遺物 230～233)

竪穴建物の埋土からは甕形土器口縁部片、鉢形土器口縁部片、石器等が出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

## 65号竪穴建物【S227】(第57・60・64図、図版 12・29)

H-7・8 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 4.13m、幅 3.26m以上、深さ 0.28mである。66号竪穴建物を切る。建物等によって切られているため全体形は不明であるが、残存部分から判断して方形プランと考えられる。柱穴と思われるピットは確認できなかった。建物の硬化面は建物のほぼ全域で確認できた。埋土は2層からなる。炉は確認できなかった。

(出土遺物 234～238)

竪穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片、鉢形土器口縁部片が出土している。

## 66号竪穴建物【S60】(第57・60・64図、図版 13・29)

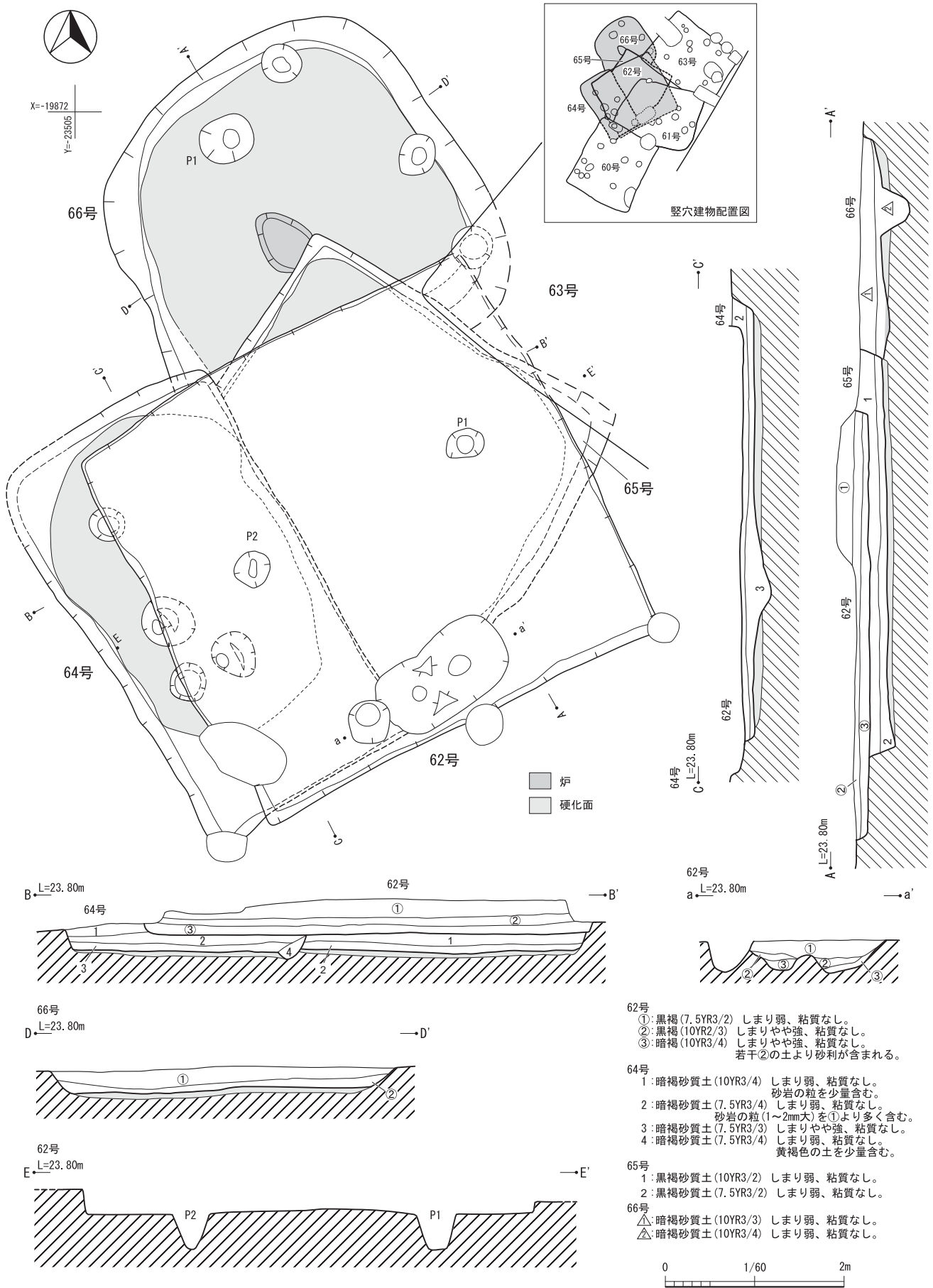
G・H-7 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 4.10m、幅 3.92m以上、深さ 0.25mである。7軒の建物切り合い関係の中で最も古い遺構となる。プランは方形で北西から南東方向に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は2～4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面は竪穴建物のほぼ全域で確認できた。埋土は2層からなる。炉は竪穴建物のほぼ中央部に位置し長軸 0.66m、短軸 0.57m、深さ 0.06mを測る。断面は皿状を呈する。

(出土遺物 239～245)

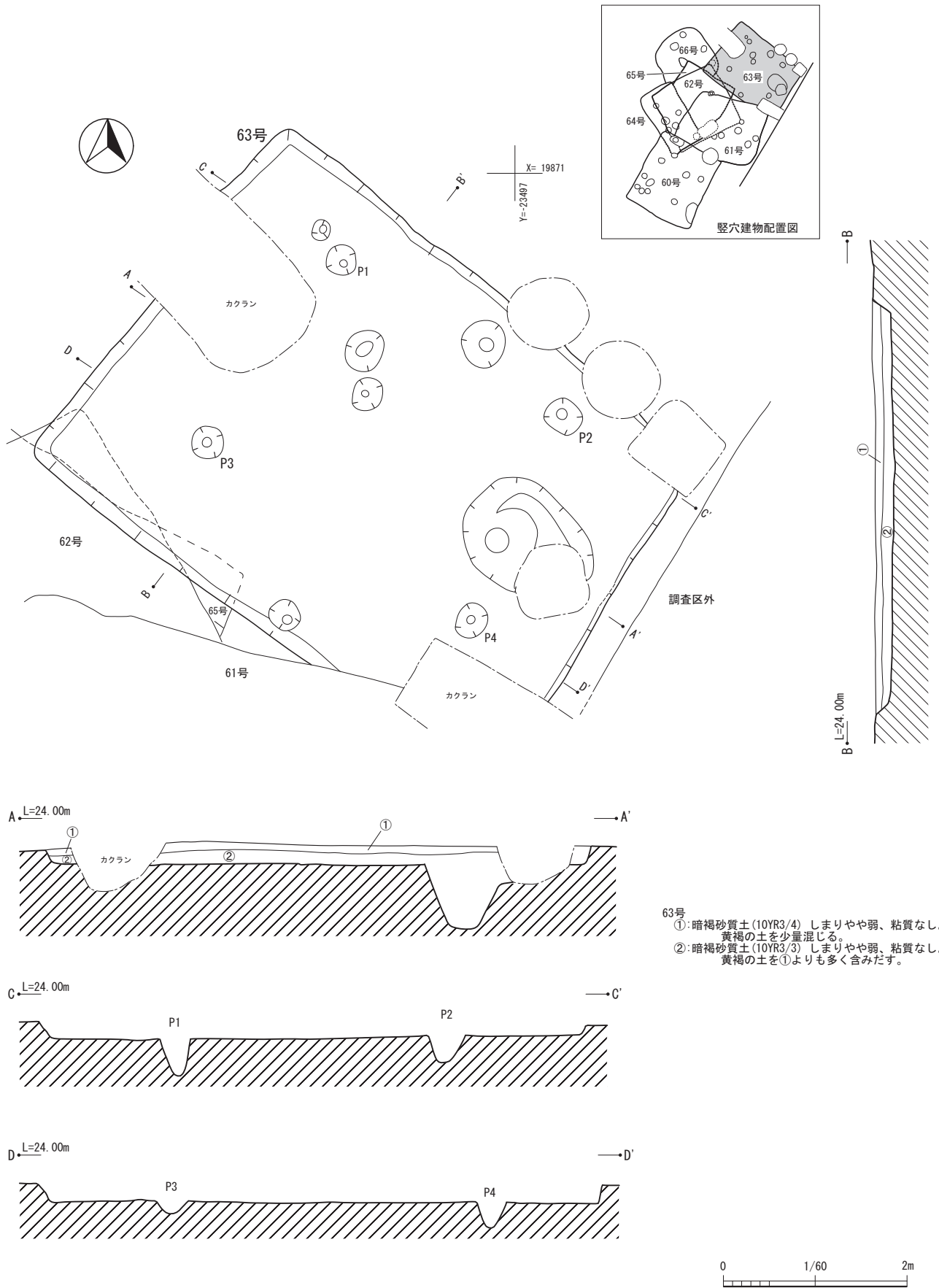
竪穴建物の埋土からは甕形土器口縁部片、壺形土器口縁部片、鉢形土器口縁部片、甕形土器脚部片、石包丁が出土している。

## 67号竪穴建物【S01】(第65図、図版 13・29)

C・D-5 グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ 3.96m、幅 3.55m、深さ 0.20m、床面積 13.98 m<sup>2</sup>である。68号竪穴建物を切る。プランは方形で東西方向に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の床は

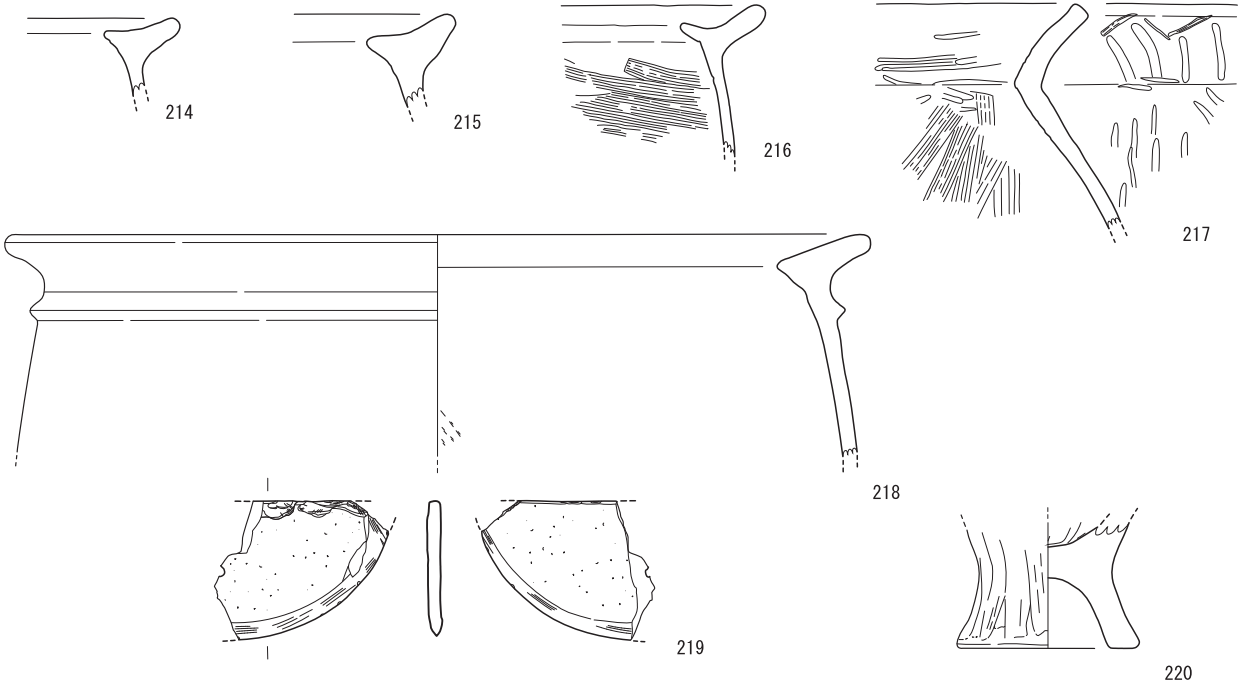


第60図 62・64・65・66号竪穴建物(S158・183・227・60)実測図

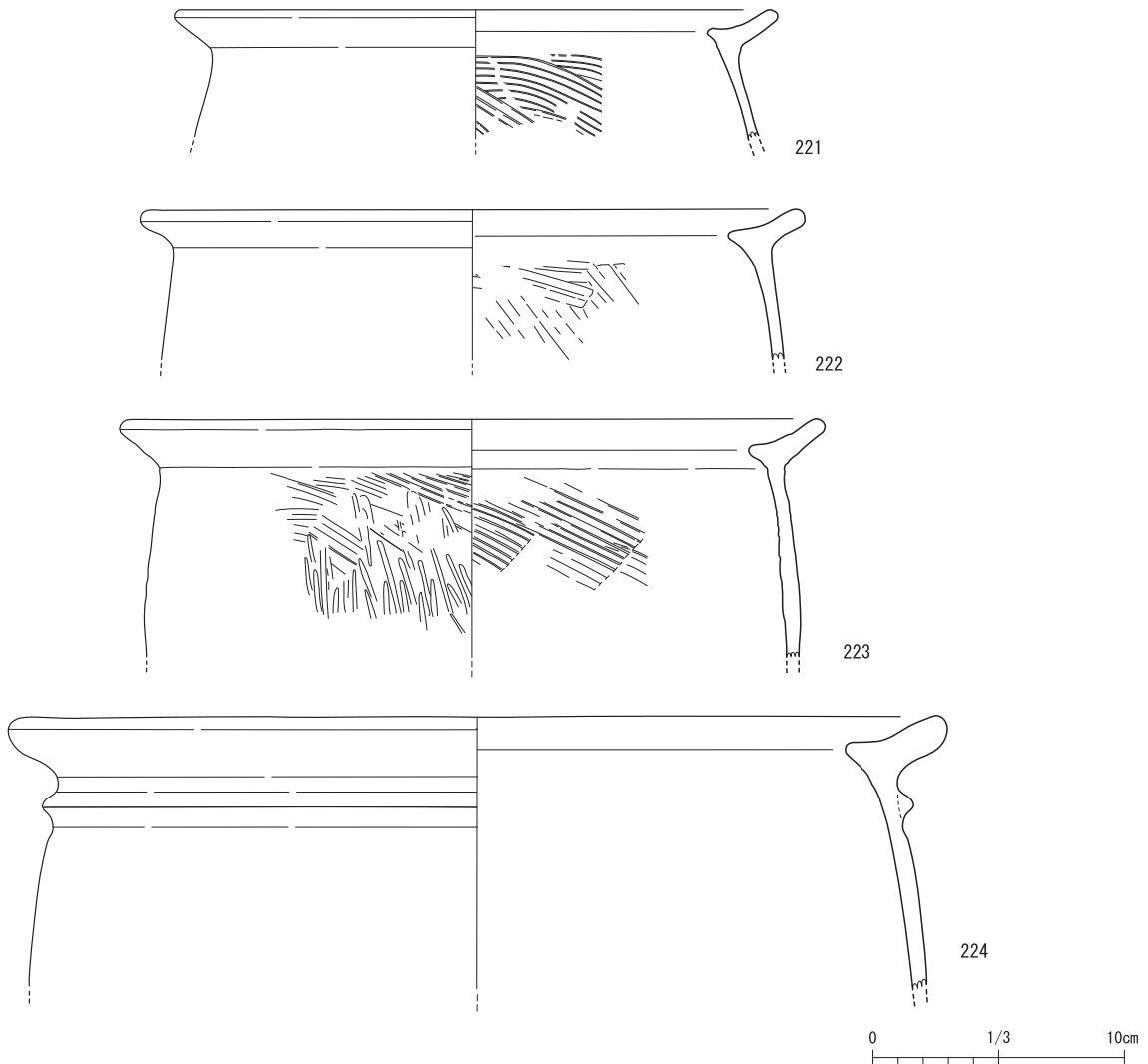


第61図 63号縦穴建物(S58)実測図

【62号竪穴】



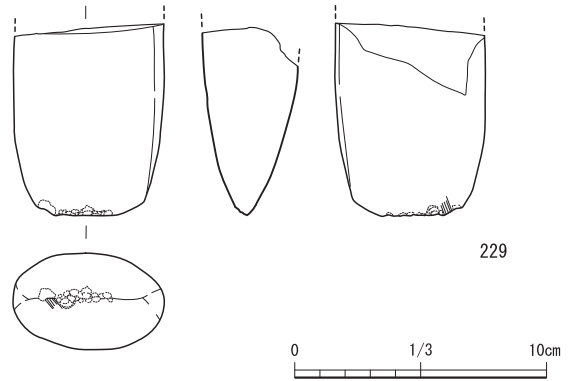
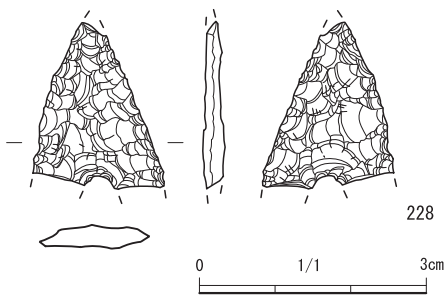
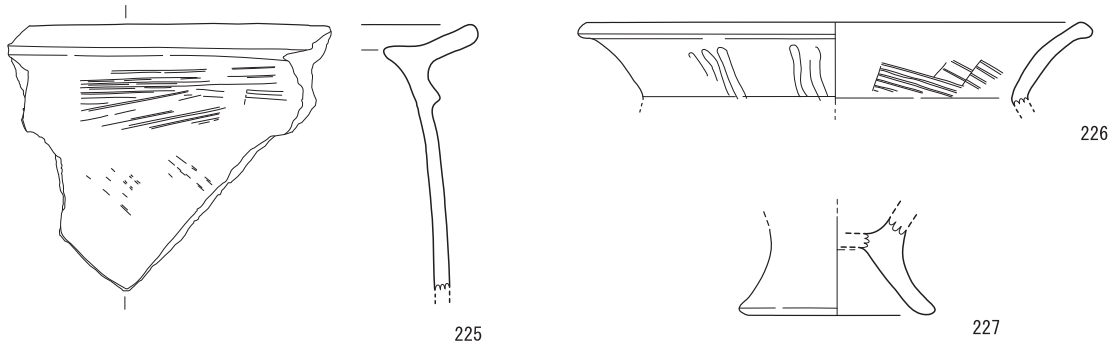
【63号竪穴】



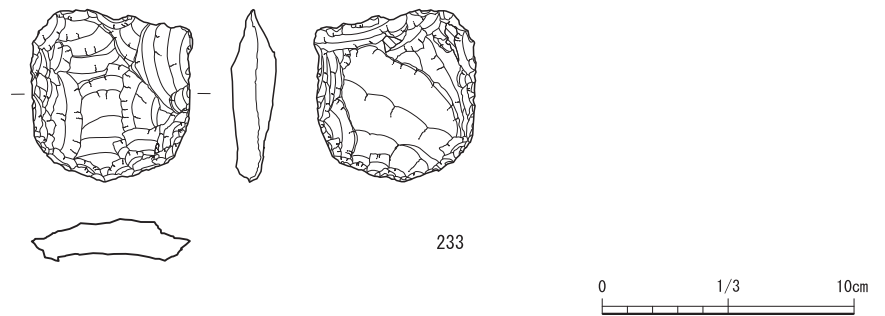
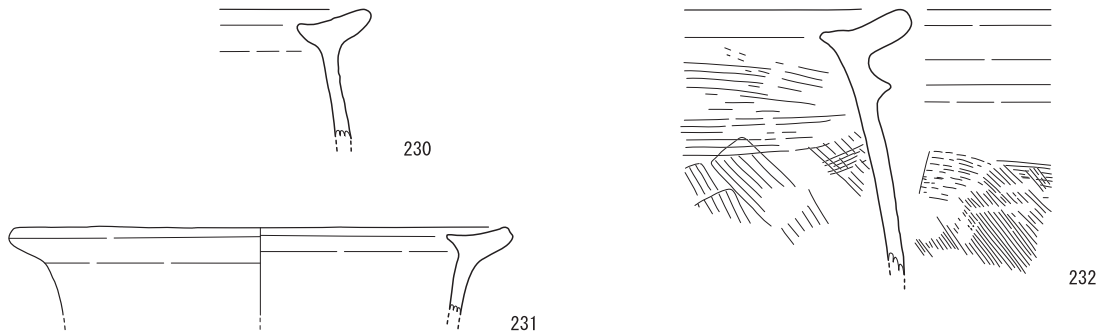
第62図 62・63号竪穴建物(S158・58)出土遺物実測図



【63号竖穴】

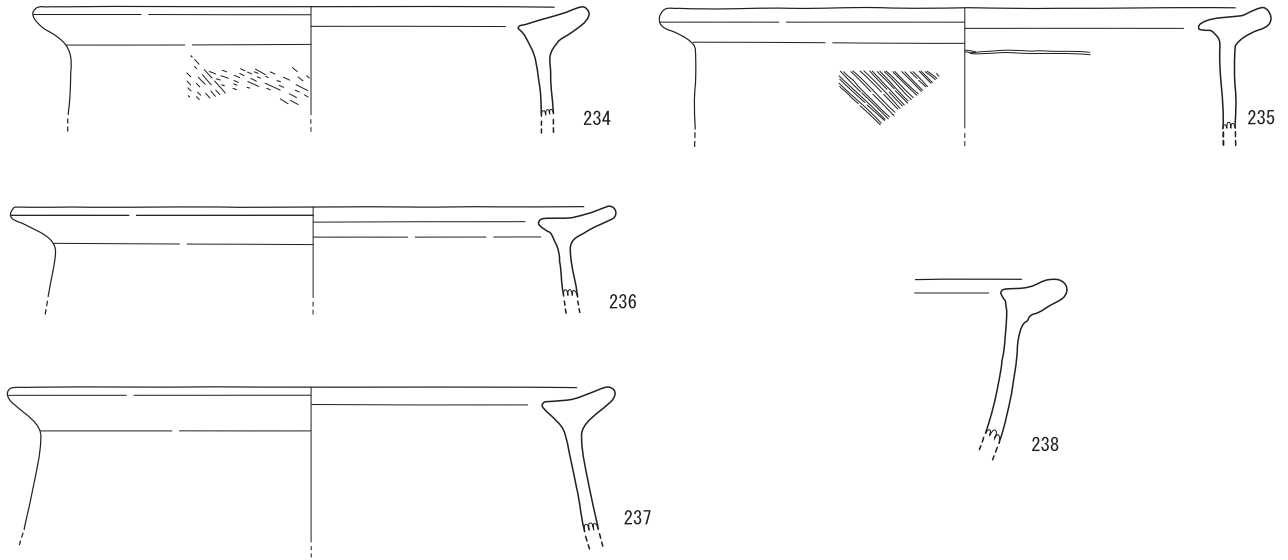


【64号竖穴】

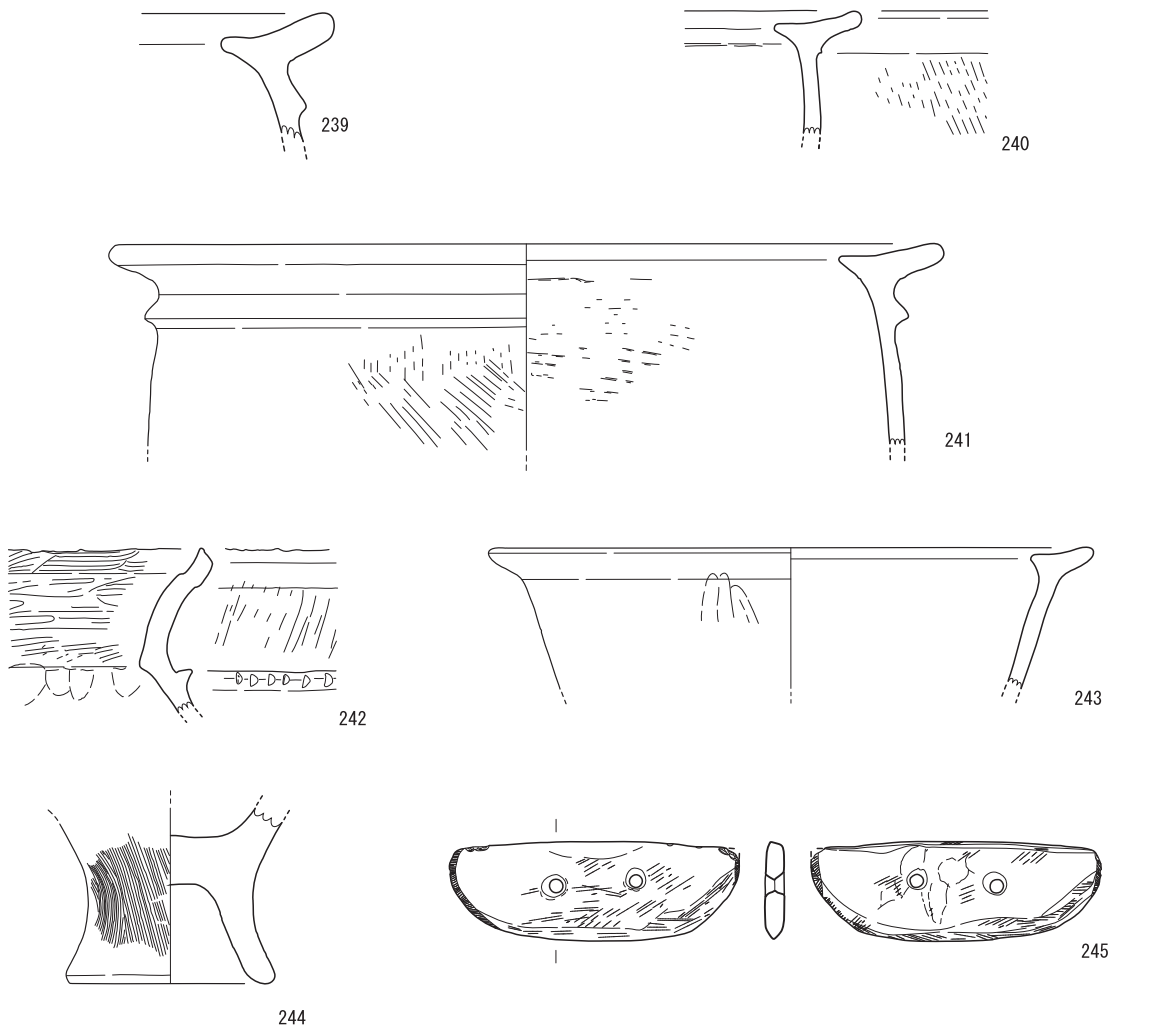


第63図 63・64号竖穴建物(S58・183)出土遺物実測図

【65号竪穴】



【66号竪穴】



第64図 65・66号竪穴建物(S227・60)出土遺物実測図

貼床であり、硬化面は堅穴建物のほぼ全域で確認できた。埋土は3層からなる。炉は堅穴建物のほぼ南東に位置し、長軸0.84m、短軸0.70m、深さ0.06mを測る。断面は皿状を呈する。

(出土遺物 246)

堅穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片が出土している。

68号堅穴建物【S02】(第66図、図版13)

D・4・5グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ4.95m以上、幅4.29m以上、深さ0.16mである。67号堅穴建物から切られているが、残存部から方形プランで東西方向に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来の柱穴は不明である。建物の硬化、炉は確認できず、埋土は1層からなる。

堅穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

69号堅穴建物【S54】(第66図、図版13・29)

D・E-4、・グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ3.37m以上、幅2.79m以上、深さ0.28mである。プランは方形で南北方向に長くなる。柱穴と思われるピットを1ヶ所のみ確認したが、本来は2本柱と考えられる。建物の硬化面は建物の中央で確認できた。炉は確認できず、埋土は2層からなる。

(出土遺物 247～249)

堅穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片、鉢形土器口縁部片が出土している。

70号堅穴建物【S55】(第66図、図版13)

E-4・5グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ3.09m以上、幅2.32m以上、深さ0.33mである。方形プランで南北方向に長くなる。柱穴と思われるピットを2ヶ所確認したが本来の柱穴は不明である。建物の硬化面は中央で確認できた。炉は確認できず、埋土は2層からなる。

堅穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

71号堅穴建物【S85】(第67図、図版14)

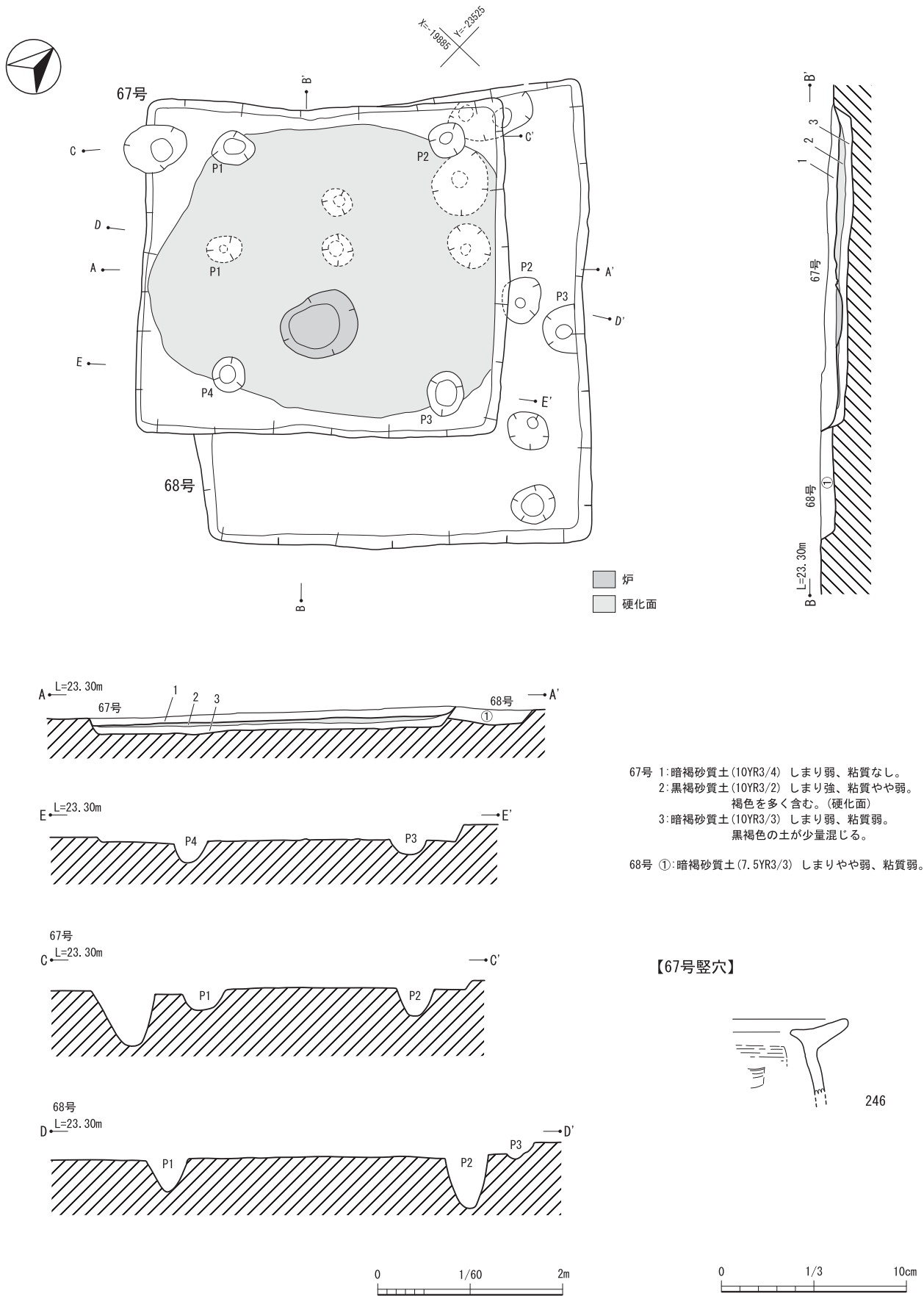
D-3・4グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ4.10m以上、幅2.57m以上、深さ0.22mである。プランは方形で東西方向に長くなると考えられる。柱穴と思われるピットを3ヶ所確認したが本来の柱穴は不明である。建物の硬化面、炉は確認できず、埋土は3層からなる。

堅穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。

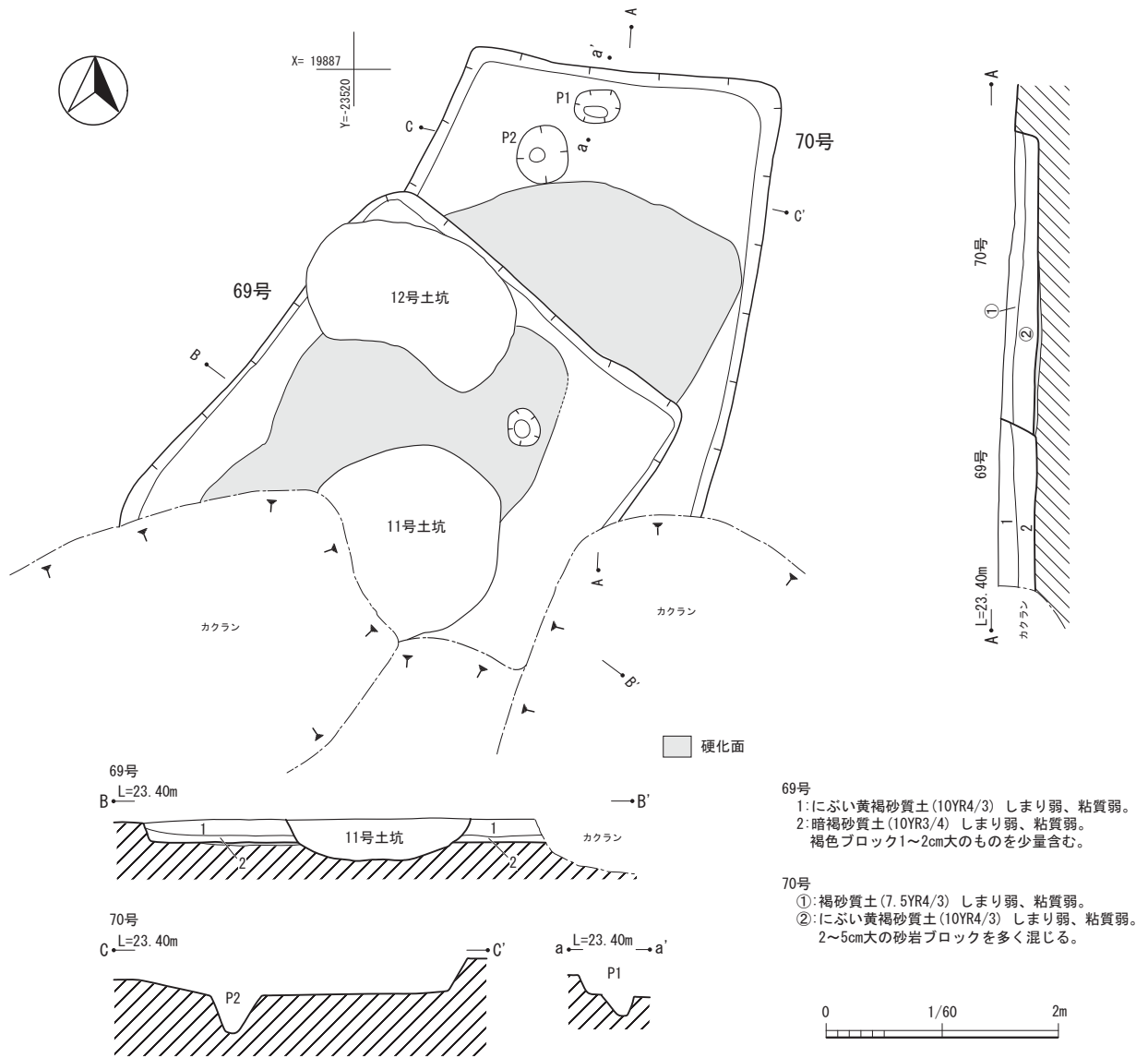
72号堅穴建物【S50】(第68図、図版14)

F・G-4・5グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ4.60m、幅3.85m、深さ0.28m、床面積16.76㎡である。73号堅穴建物を切る。75号堅穴建物から切られる。プランは方形で東西方向に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面、炉は確認できず、埋土は3層からなる。貯蔵穴は、建物の南壁際で確認できた。

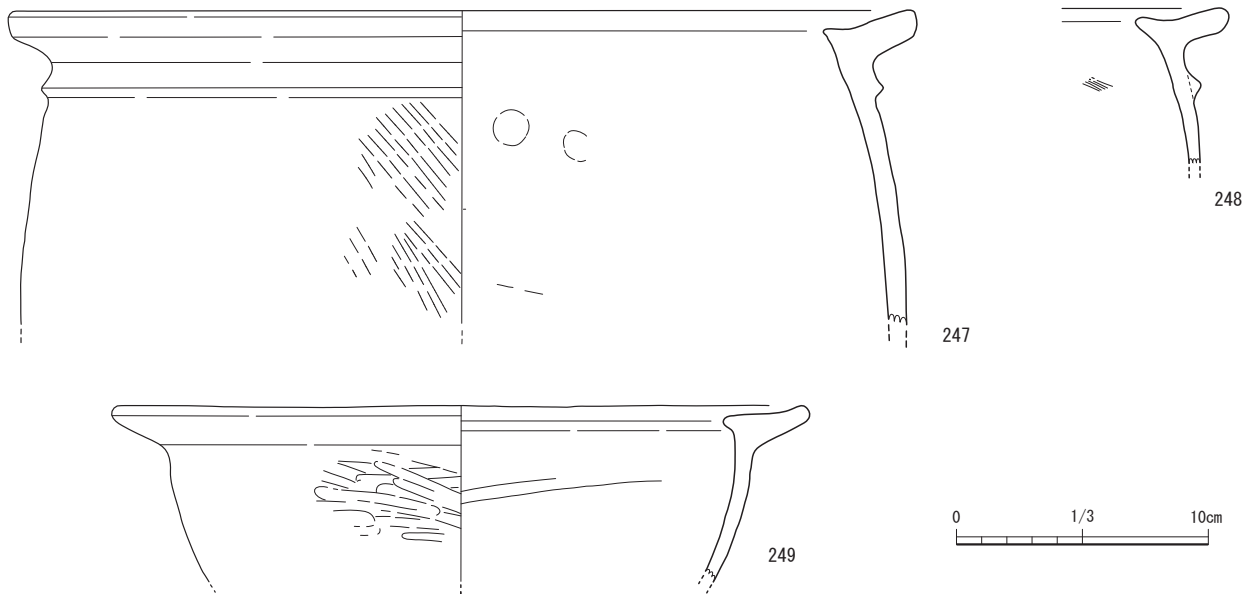
堅穴建物の埋土から出土した遺物は、小破片のため図化していない。



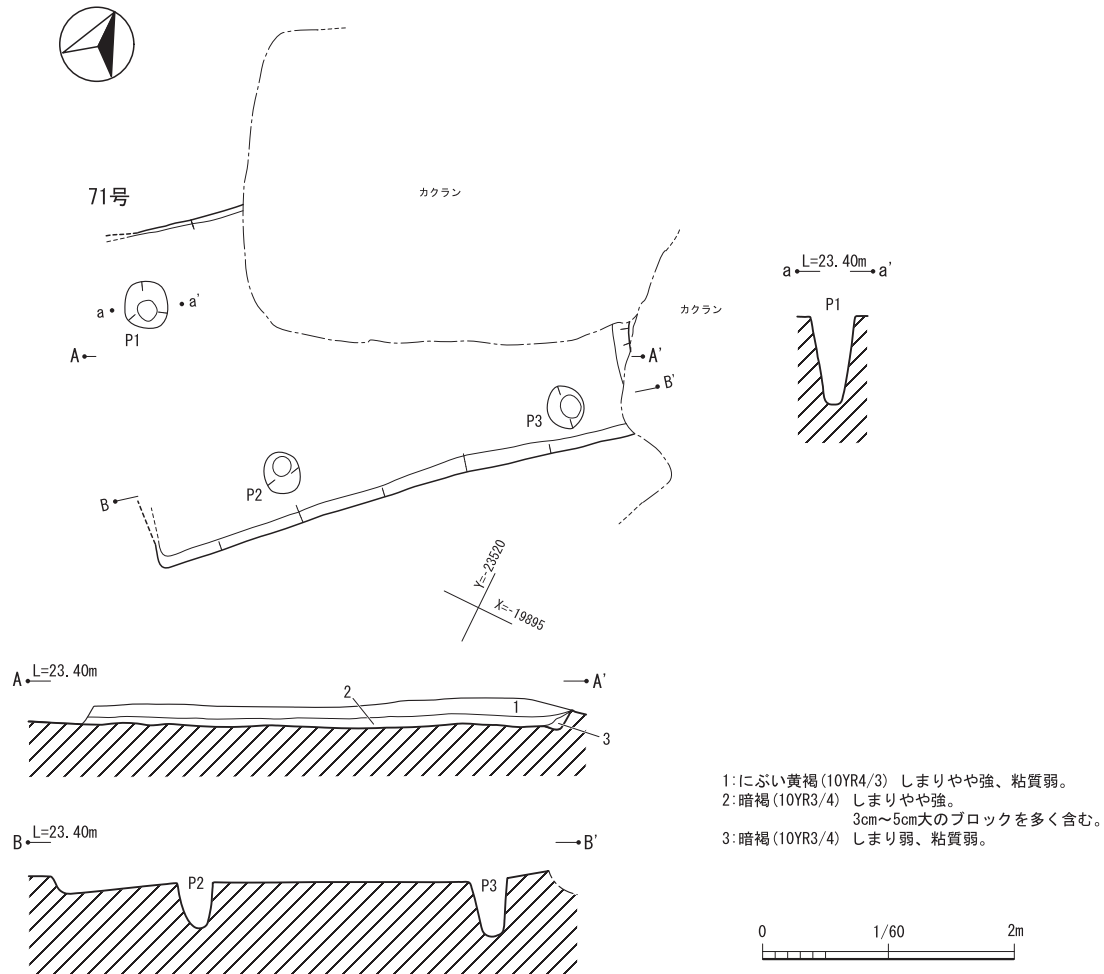
第65図 67・68号竪穴建物(S01・02)及び出土遺物実測図



【69号竪穴】



第66図 69・70号竪穴建物(S54・55)及び出土遺物実測図



第67図 71号竪穴建物(S85)実測図

73号竪穴建物【S182】(第68図、図版14・29)

G・h-4・5グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ4.32m以上、幅3.06m以上、深さ0.14mである。72号竪穴建物に切られ、調査区外に広がっている為全体形は不明であるが、残存部分から判断してプランは方形と考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面、炉は確認できず、埋土は1層からなる。

(出土遺物 250・251)

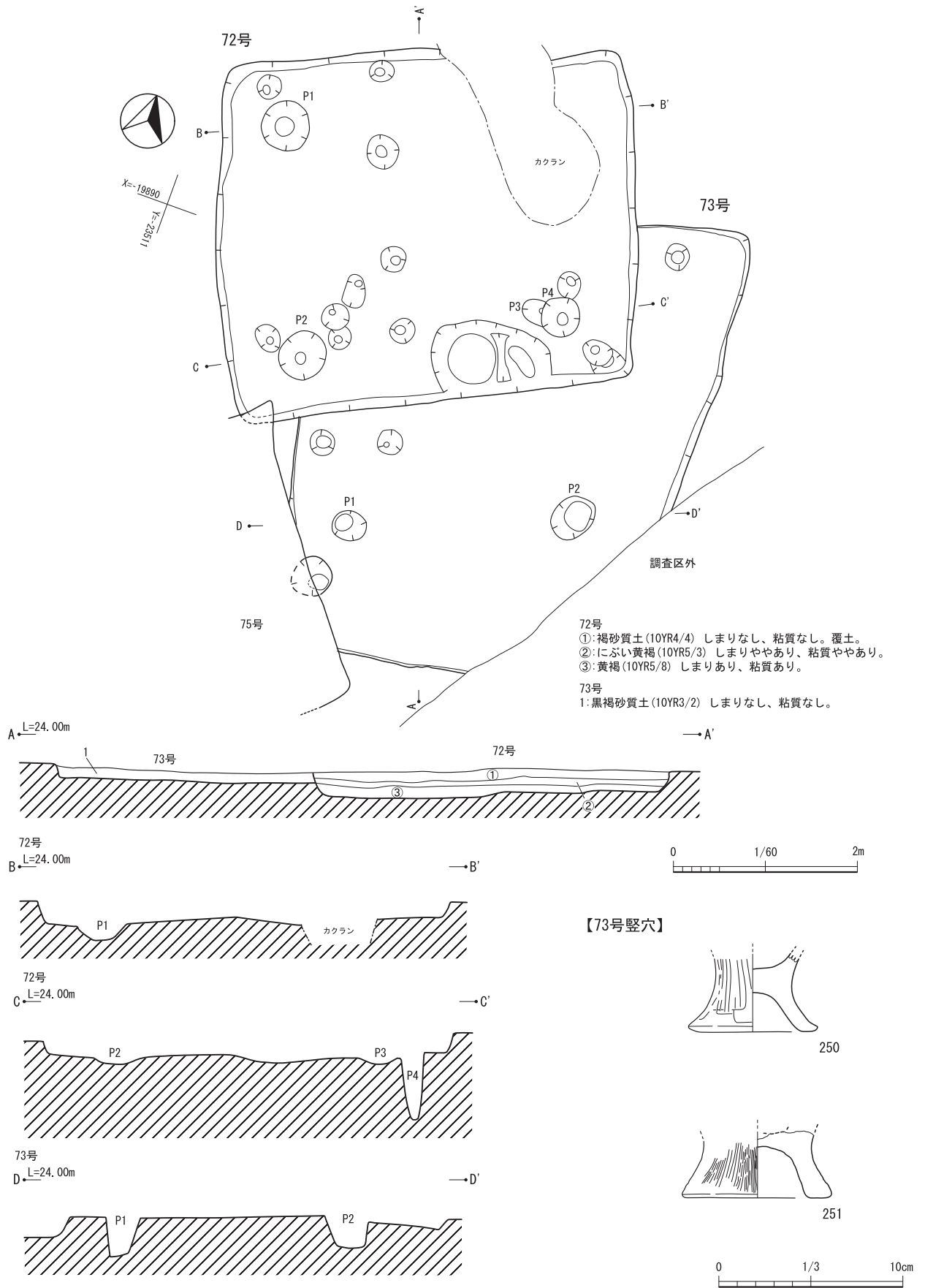
竪穴建物の埋土からは、甕形土器脚部片が出土している。

74号竪穴建物【S309】(第69図、図版14・29・30)

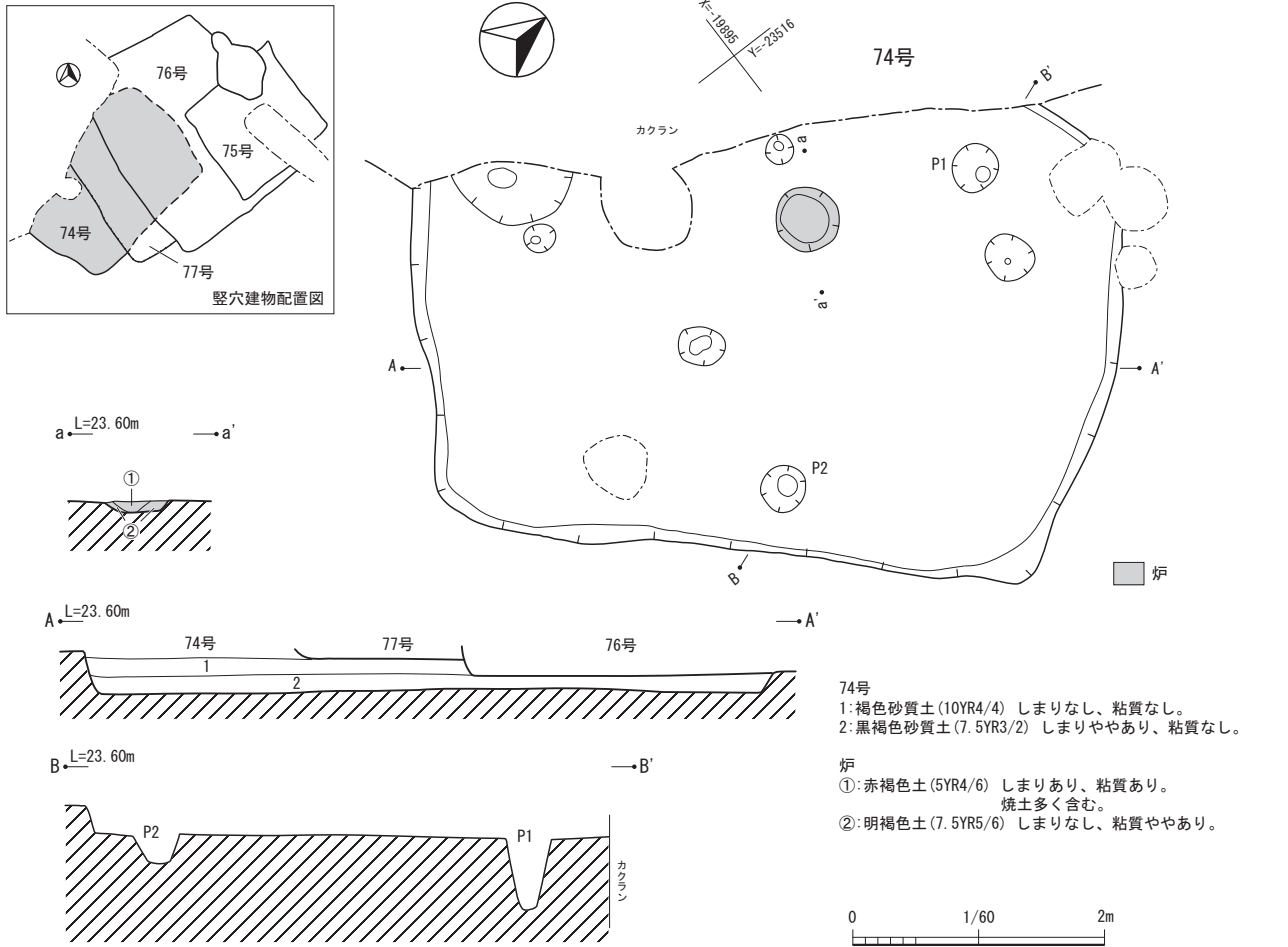
E・F-3グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ5.61m、幅3.36m以上、深さ0.16mである。建物によって切られているため全体形は不明であるが、残存部分から判断して方形プランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。炉は確認できたが、建物の硬化面は確認できない。埋土は2層からなる。

(出土遺物 252~257)

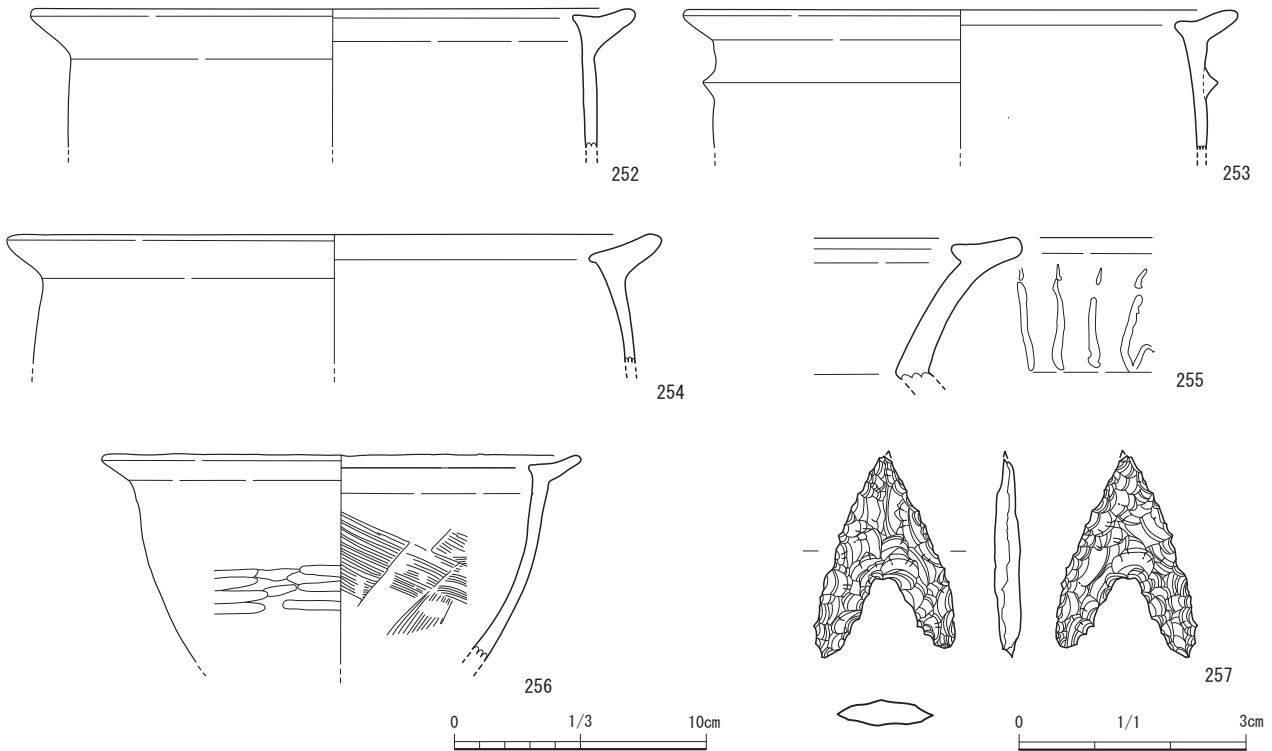
竪穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片、壺形土器口縁部片、鉢形土器口縁部、石器等が出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。



第68図 72・73号竪穴建物(S50・182)及び出土遺物実測図



【74号竪穴】



第69図 74号竪穴建物(S309)及び出土遺物実測図



## 古墳時代

75号竪穴建物【S04】(第70・71・72図、図版14・30)

F・G-3・4グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ3.45m、幅3.35m、深さ0.22m、面積11.52㎡である。76号竪穴建物を切る。方形プランで北西から南東方向に長くなる。柱穴と思われるピットを3ヶ所確認したが本来は4本柱と考えられる。建物の硬化面はほぼ建物全域に広がっている。カマドは建物の北西壁沿いで確認でき、70cm程度の焼土の広がりがあり、中心部には火床も認められた。また焼土内には、260の土師器高坏が伏せた状態で出土しており、建物廃絶に伴うある種の儀礼行為の可能性はある。埋土は2層からなる。

(出土遺物258～260)

竪穴建物の埋土からは、土師器の壺、高坏の他に模倣坏が出土した。

76号竪穴建物【S87】(第70・72図、図版14・15・30)

F-3・4グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ6.50m、幅4.62m、深さ0.27mである。77号竪穴建物を切る。方形プランで南から北方向に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は4本柱と考えられる。建物の硬化面はほぼ建物全域に広がっている。カマドは建物の南壁沿いで確認できたが、明瞭な焼土でなく焼土混じりの建物理土である。果たしてカマドと呼称してよいか疑問が残る。埋土は2層からなる。

(出土遺物261～267)

竪穴建物の埋土からは、土師器の甕、高坏、坏の他に模倣坏が出土した。

77号竪穴建物【S88】(第70・72図、図版15・30)

E-3、F-3・4グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ4.56m以上、幅1.34m以上、深さ0.17mである。方形プランで南から北方向に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来の建物に伴う柱穴は不明である。建物の硬化面は確認できるが建物によって切られているため広がり不明である。カマドは建物の南壁沿いで確認できたが、明瞭な焼土でなく焼土混じりの建物理土であり、果たしてカマドと呼称してよいか疑問が残る。

(出土遺物268)

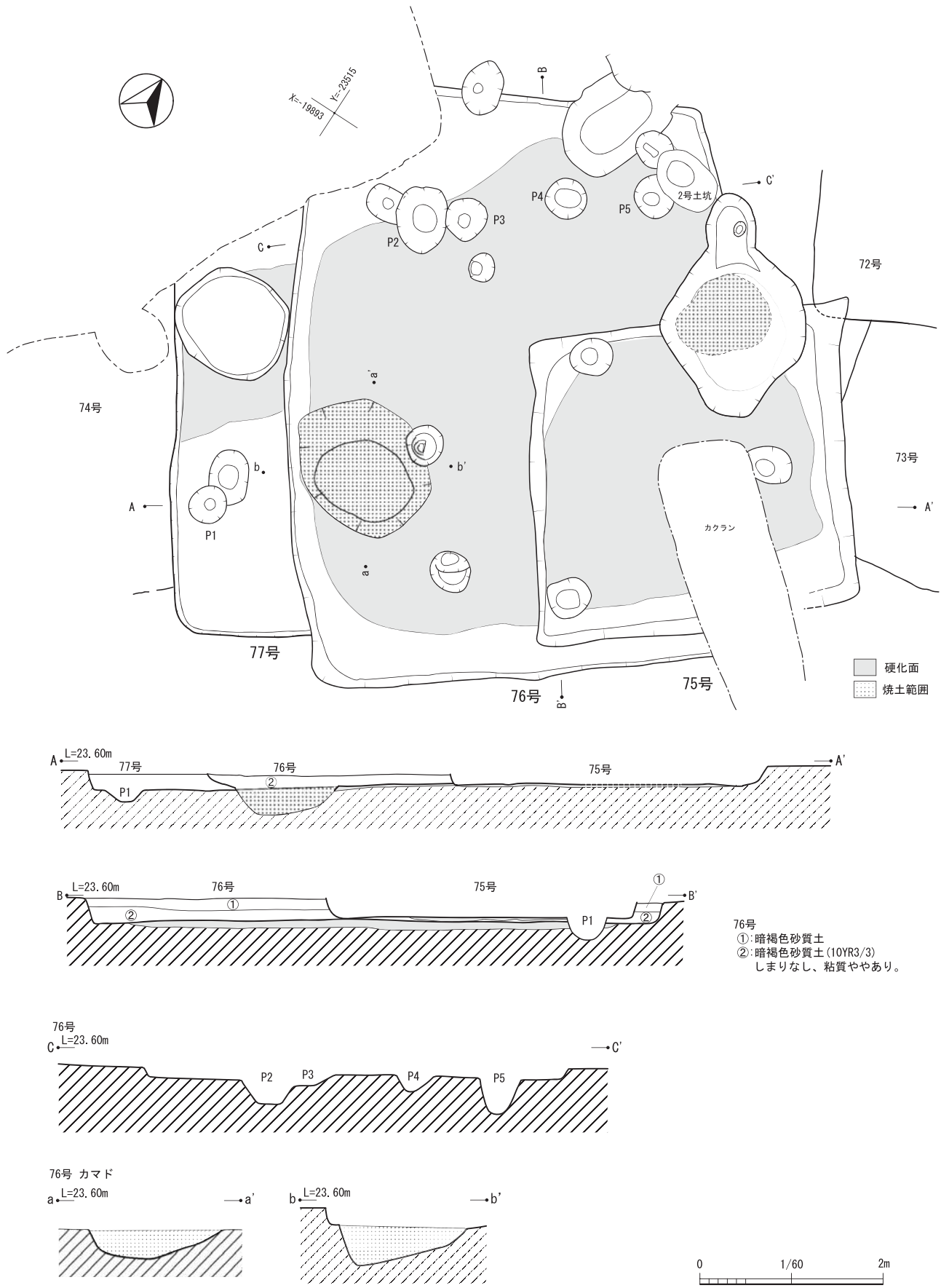
竪穴建物の埋土からは、甕形土器口縁部片が出土しているが、廃棄及び流れ込みの遺物と考えられる。

78号竪穴建物【S03】(第73・74図、図版15・31)

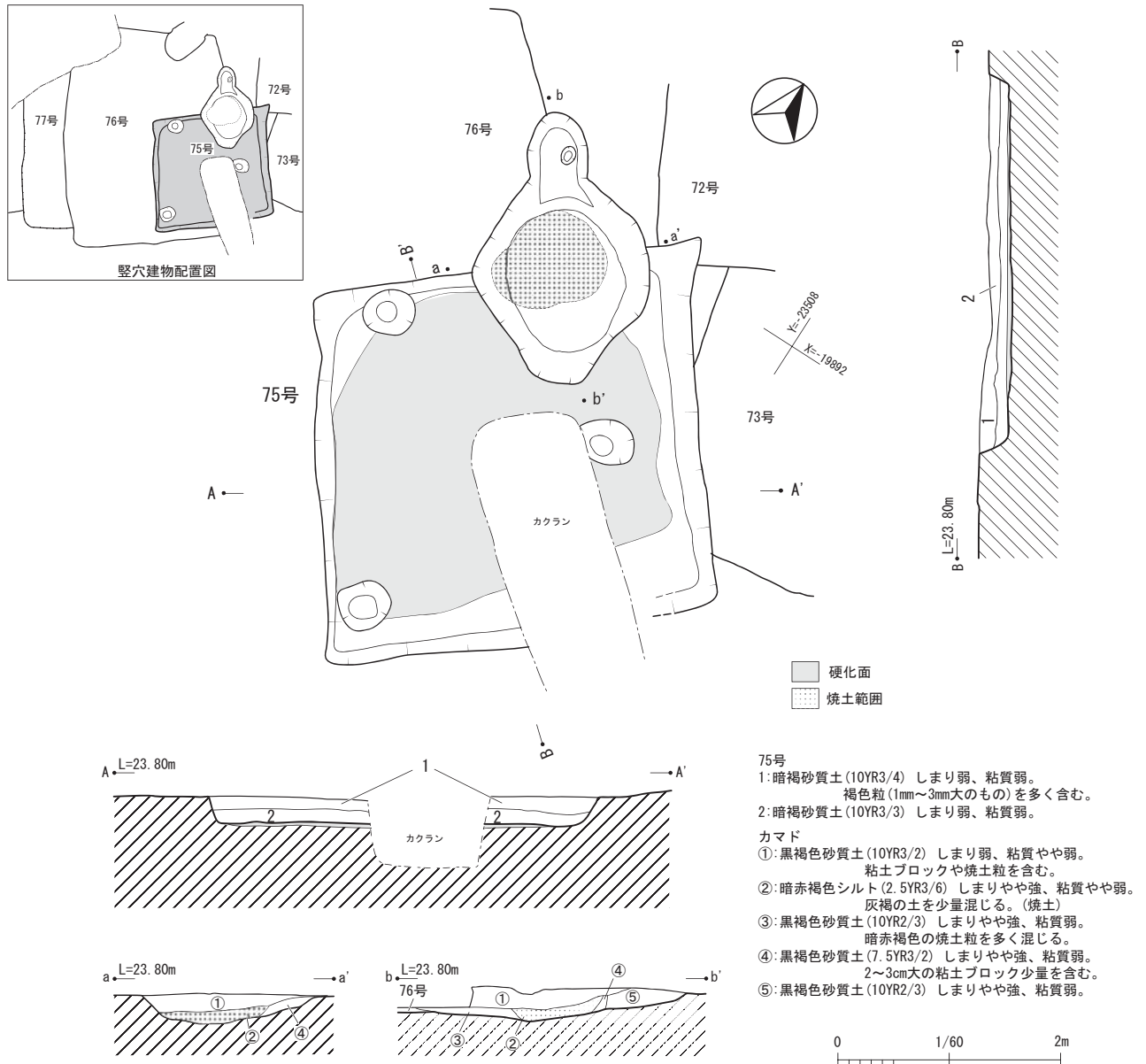
E・F-7・8・9グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ5.73m、幅5.30m、深さ0.37m、床面積29.78㎡である。方形プランで北東から南西方向に長くなる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は4本柱と考えられる。建物の硬化面はほぼ建物の全域に広がりが確認できた。カマドは建物の北東壁沿いで確認できた。明瞭な焼土でなく焼土混じりの建物理土であり、果たしてカマドと呼称してよいか疑問が残る。埋土は1層からなる。

(出土遺物269～276)

竪穴建物の埋土からは、土師器の甕口縁部片、甗、須恵器の蓋、土製支脚が出土している。その他土製支脚の小破片を写真図版のみで掲載している。



第70図 75・76・77号竪穴建物(S04-87-88)実測図



第71図 75号堅穴建物 (S04カマド) 実測図

79号堅穴建物【S90】(第75図、図版15・31)

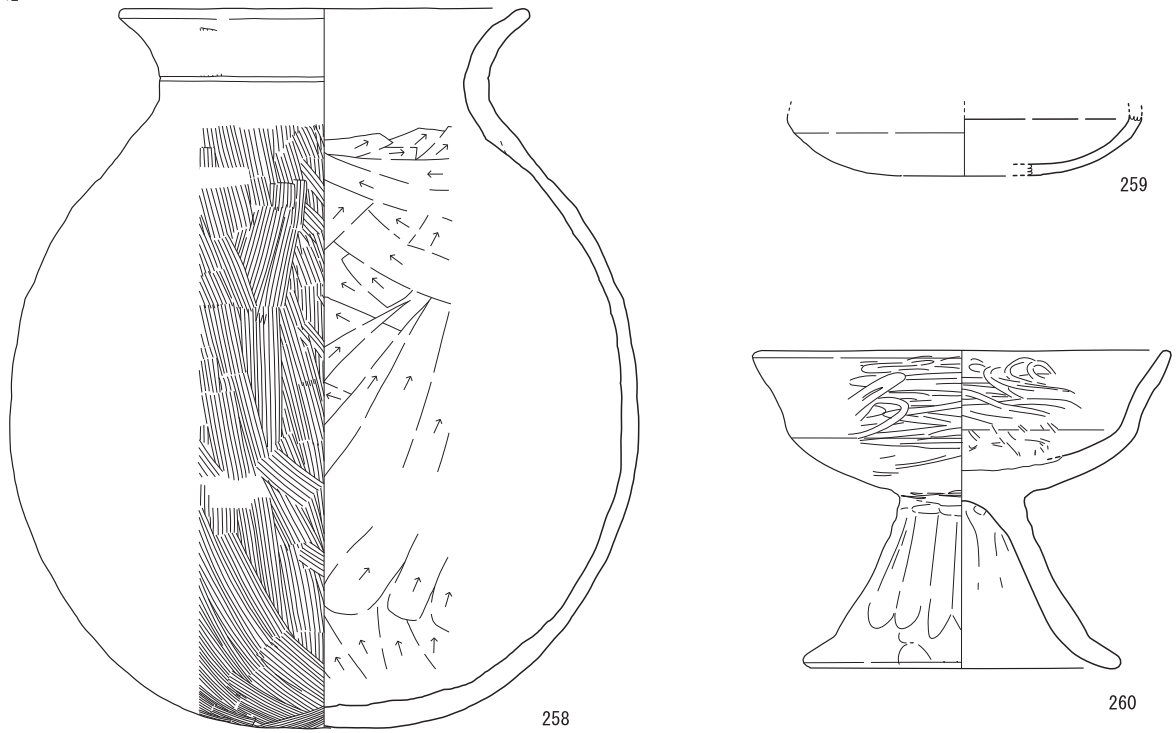
F-6・7・8グリッドで確認された堅穴建物である。確認時での規模は、長さ4.96m、幅3.02m以上、深さ0.44mある。攪乱によって切られているため全体形は不明であるが、残存部分から判断して方形プランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが本来は4本柱と考えられる。ピットの大きさは変わらないが深さは異なる。建物の硬化面は攪乱により広がり確認できなかった。カマドは建物の北東壁沿いで確認できた。130cm程度の範囲に、焼土に混じって地山に類似した土を確認するも、やや散在気味であった。

その内側には火床と思われる焼土を確認できた。埋土は2層からなる。

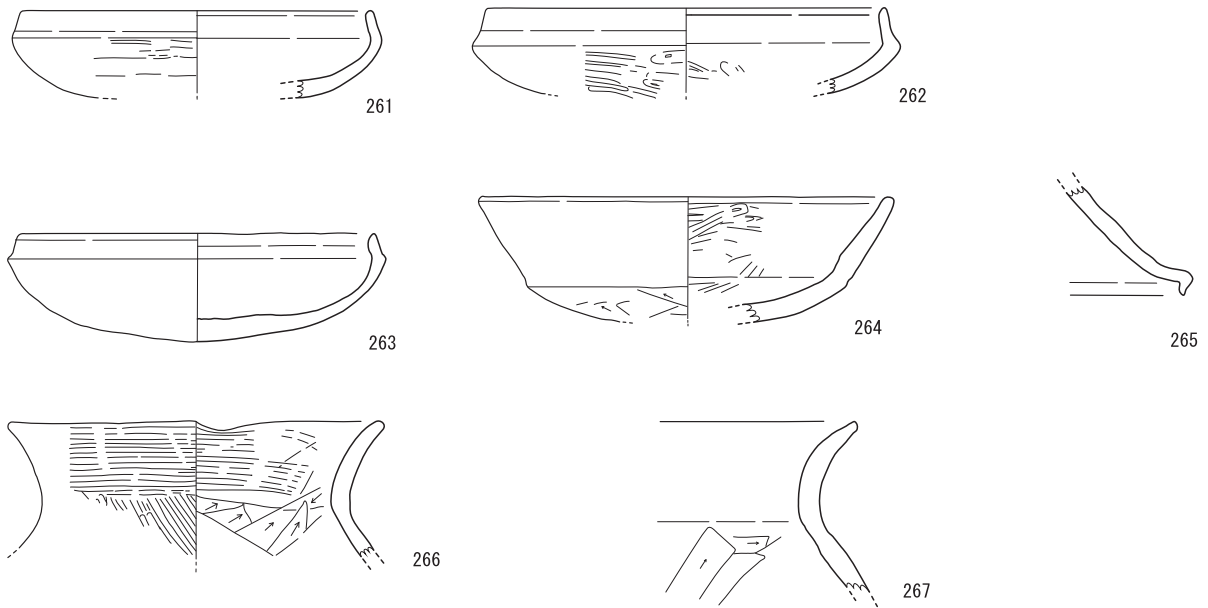
(出土遺物 277~279)

堅穴建物の埋土からは、土師器の高坏片、坏、甑が出土している。又、器種不明の小破片を写真図版のみで掲載している。

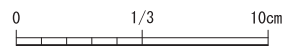
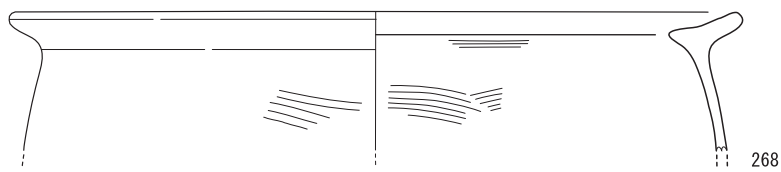
【75号竪穴】



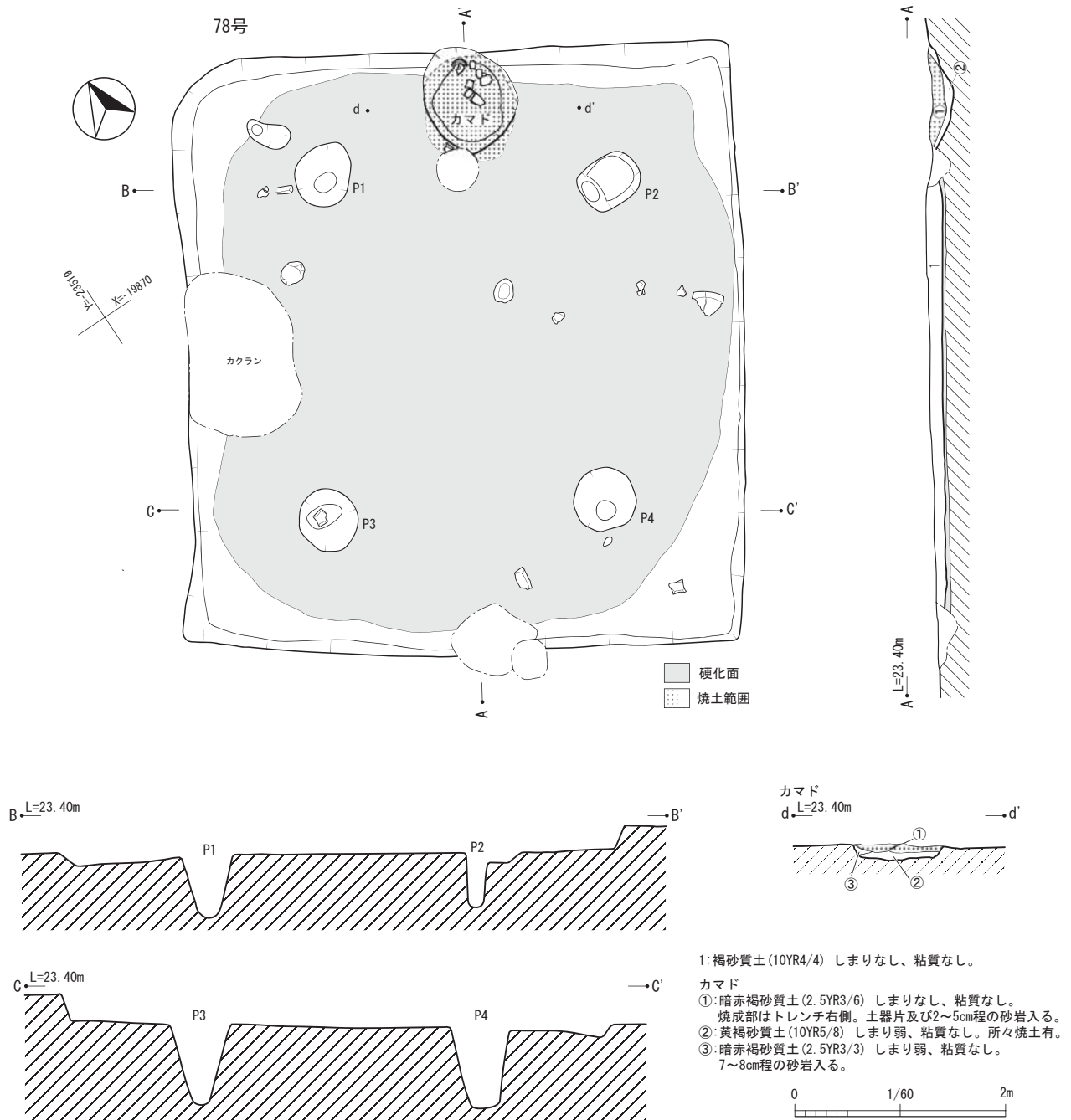
【76号竪穴】



【77号竪穴】



第72図 75・76・77号竪穴建物(S04・87・88)出土遺物実測図



第73図 78号竪穴建物(S03)実測図

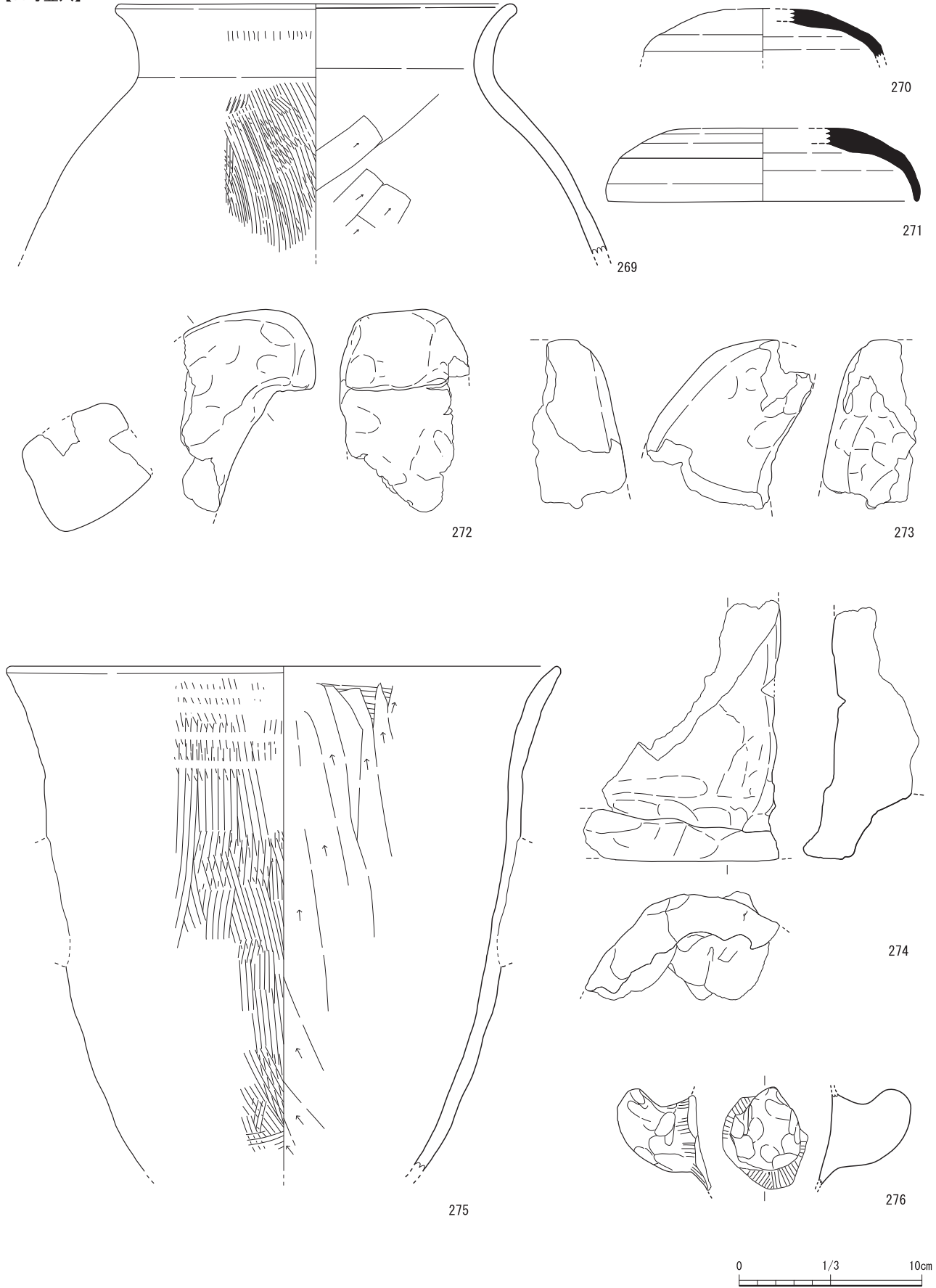
80号竪穴建物【S156】(第76図、図版15・16・31)

C・D-5・6グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ4.65m以上、幅2.59m、深さ0.23mある。攪乱によって切られているため全体形は不明であるが、残存部分から判断して方形プランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来は4本柱と考えられる。建物の硬化面は攪乱により広がり確認できなかった。また、北東側で若干の焼土の広がりを確認することができたが、攪乱によって切られているため、これがカマドかは不明である。埋土は2層からなる。

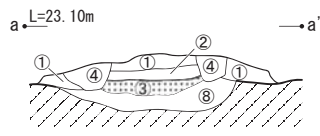
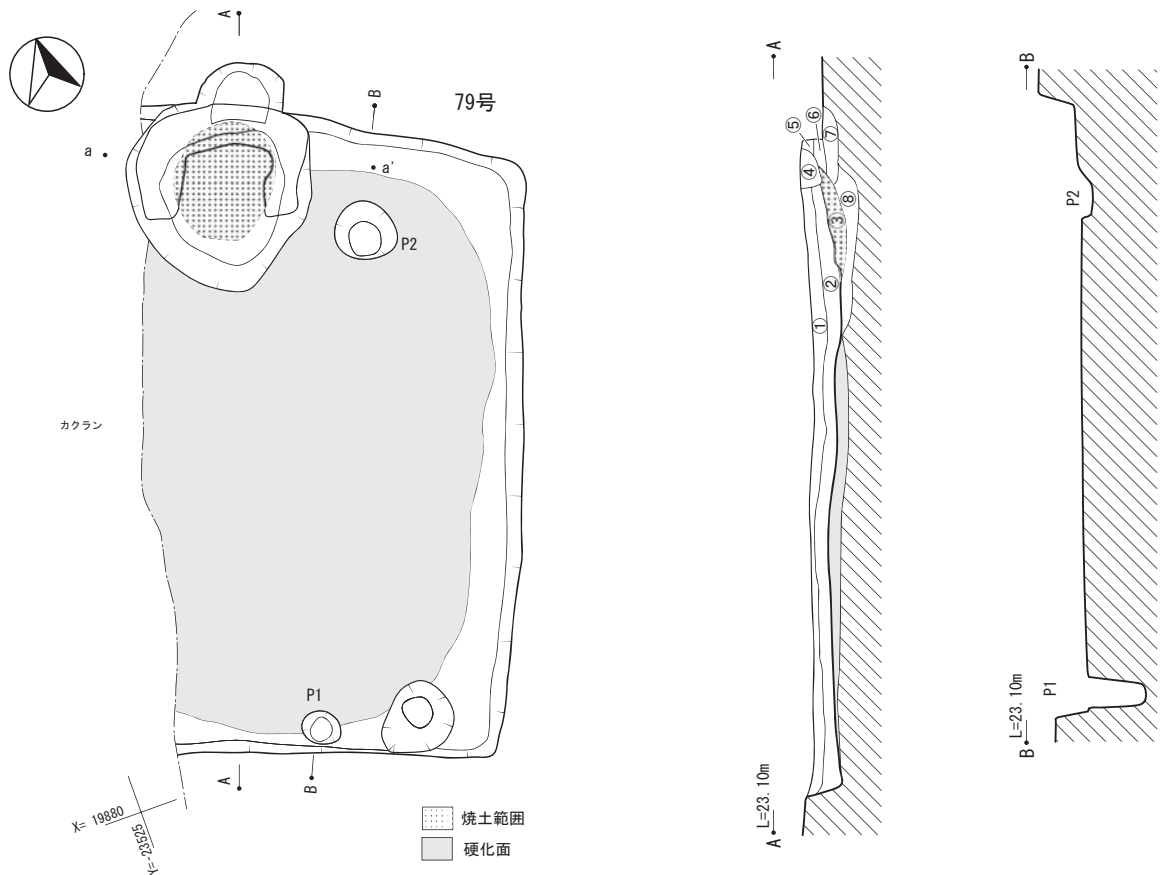
(出土遺物 280~281)

竪穴建物の埋土からは、土師器の甕片、移動式カマド片が出土している。

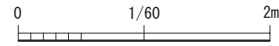
【78号竪穴】



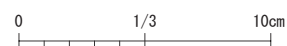
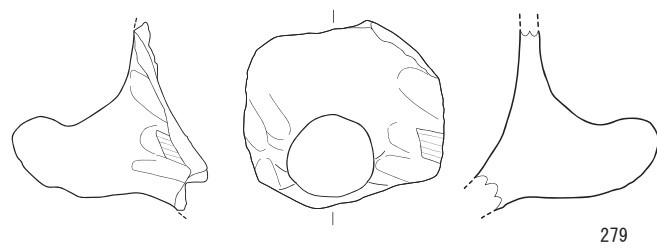
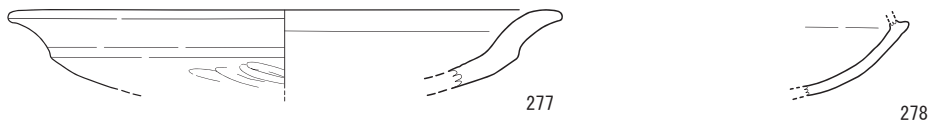
第74図 78号竪穴建物(S03)出土遺物実測図



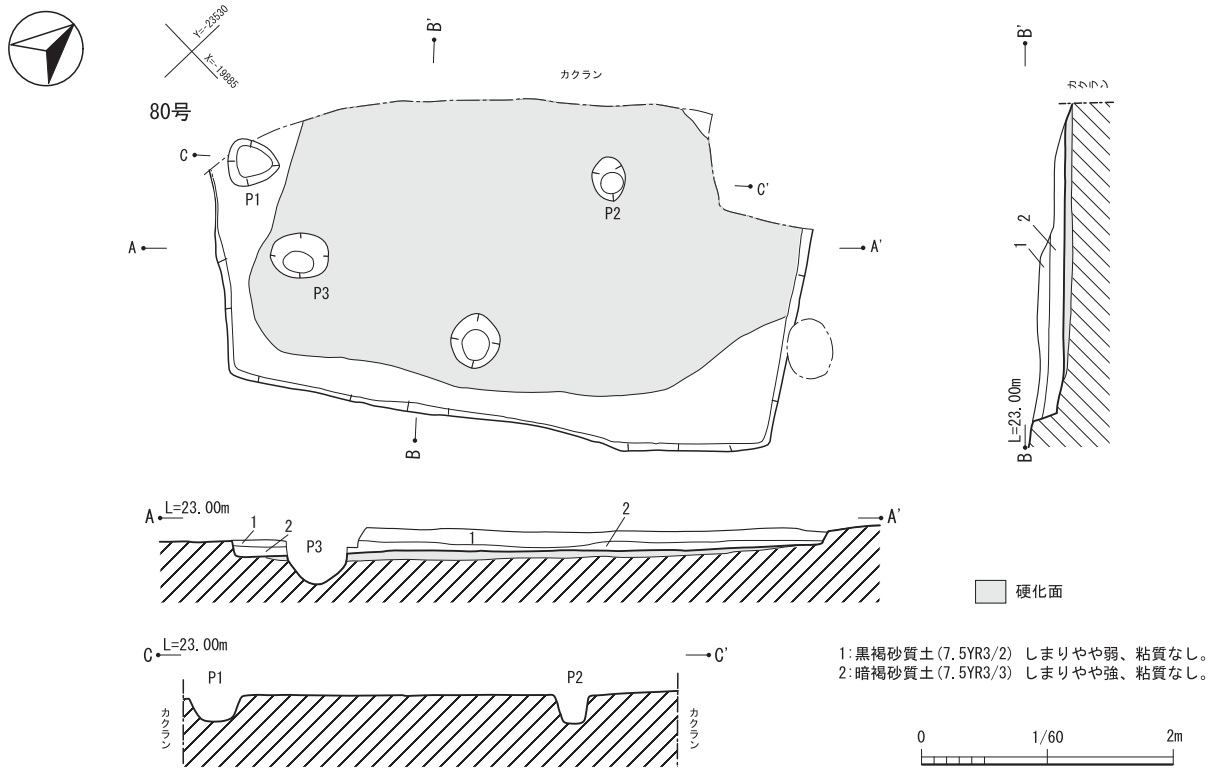
- ①: 褐砂質土(10YR4/4) しまり弱、粘質若干あり。粘土ブロック(1cm大)、粘土粒を多く含む。
- ②: 暗褐砂質土(10YR3/3) しまり弱、粘質若干あり。粘土ブロック(1cm大)、粘土粒を多く含む。
- ③: 褐砂質土(10YR4/6) しまり弱、粘質なし。黒褐色ブロックを少量含む。
- ④: にぶい黄褐(7.5YR5/4) しまりやや強、粘質強。(袖部分)
- ⑤: 暗褐(10YR3/3) しまり弱、粘質若干あり。粘土ブロックを多く含む。
- ⑥: 極暗褐砂質土(7.5YR2/3) しまり弱、粘質なし。焼土粒を少量含む。
- ⑦: 極暗褐砂質土(7.5YR2/3) しまり弱、粘質なし。
- ⑧: 暗褐砂質土(7.5YR3/3) しまり弱、粘質なし。



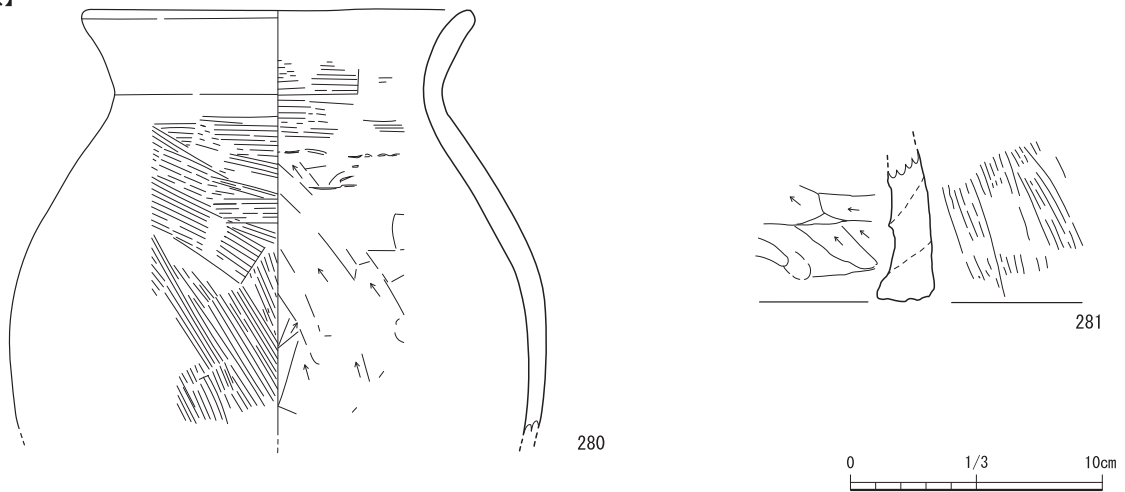
【79号竪穴】



第75図 79号竪穴建物(S90)及び出土遺物実測図



【80号竪穴】



第76図 80号竪穴建物(S156)及び出土遺物実測図

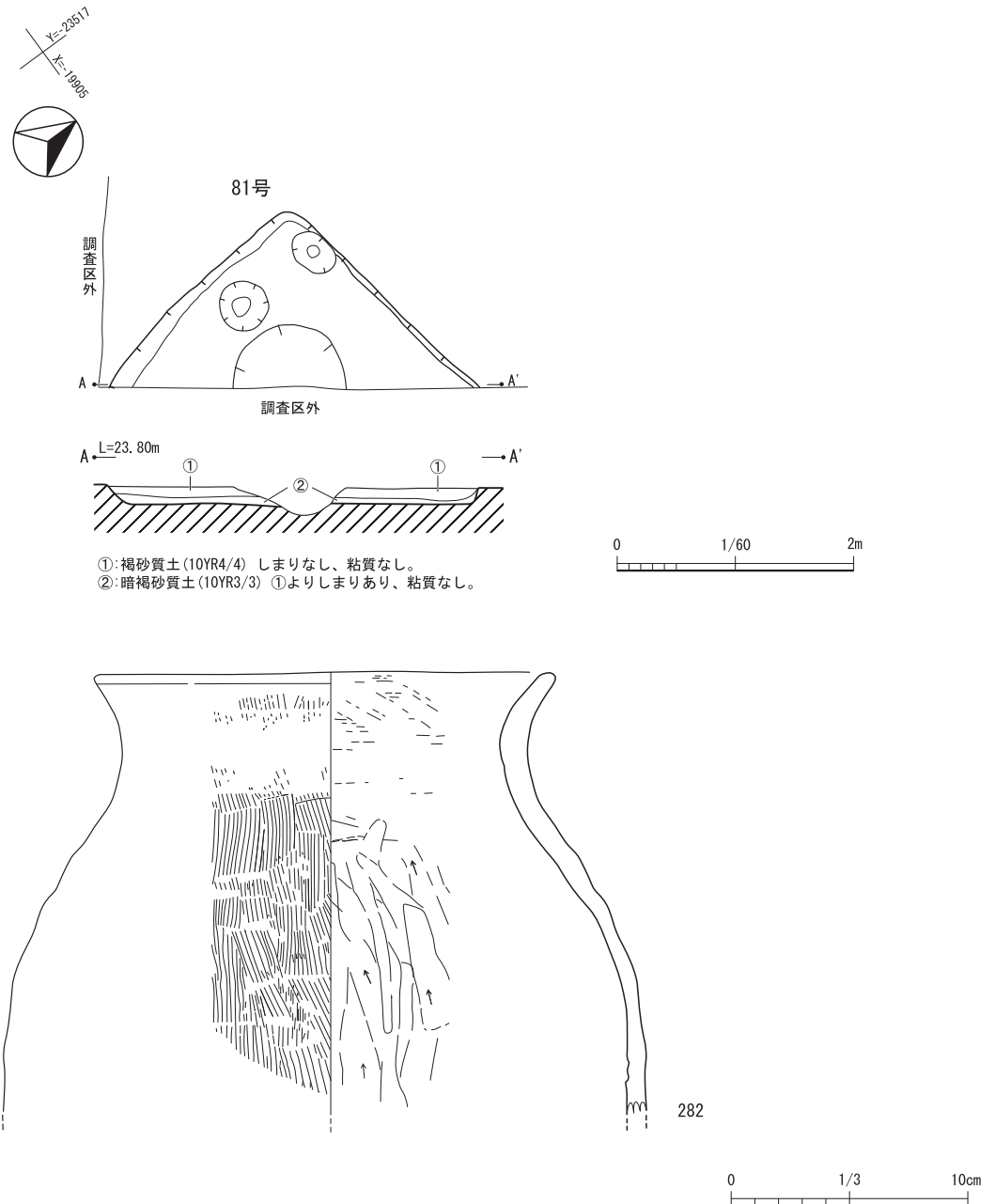
81号竪穴建物【S47】(第77図、図版16・31)

F-1・2グリッドで確認された竪穴建物である。確認時での規模は、長さ1.97m以上、幅1.73m以上、深さ0.14mである。攪乱によって切られているため全体形は不明であるが、残存部分から判断して方形プランと考えられる。柱穴と思われるピットを数ヶ所確認したが、本来の柱穴は不明である。建物の硬化面、カマドは確認できない。埋土は2層からなる。

(出土遺物282)

竪穴建物の埋土からは、土師器の甕片が出土している。





【81号竖穴】

第77図 81号竖穴建物(S47)及び出土遺物実測図

(2) 土坑

調査区内で確認された土坑は、総数50基あったが、精査の結果12基を遺構と認定し図化した。

1号土坑【S06】(第78図、図版16)

G-5グリッドで確認された土坑である。確認時での規模は、長さ0.94m、幅0.75m、深さ0.32mである。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈している。埋土は3層からなる。

2号土坑【S22】(第78図、図版16)

G-4グリッドで確認された土坑である。確認時での規模は、長さ0.78m、幅0.51m、深さ0.27mである。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈している。埋土は3層からなる。76号竖穴建物の柱穴の可能性があるが

浅く、性格不明な土坑としておく。

3号土坑【S40】(第78図、図版16)

F-2グリッドで確認された土坑である。確認時での規模は、長さ1.81m、幅1.41m、深さ0.33mである。平面形は不整の楕円形、断面形は皿状を呈している。埋土は3層からなる。

4号土坑【S42】(第78図、図版16)

F-2グリッドで確認された土坑である。確認時での規模は、長さ1.42m、幅1.16m、深さ0.29mである。平面形は円形、断面形は皿状を呈している。埋土は2層からなる。

5号土坑【S72】(第78図、図版16)

I-12グリッドで確認された土坑である。確認時での規模は、長さ0.99m、幅0.67m、深さ0.27mである。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈している。埋土は3層からなる。また、5号～7号土坑は、(古)5号→6号→7号(新)の順で切り合っている。

6号土坑【S80】(第78図、図版16)

I・J-2グリッドで確認された土坑である。確認時での規模は、長さ1.84m、幅1.62m、深さ0.31mである。平面形は不整の円形、断面形は皿状を呈している。埋土は3層からなる。

7号土坑【S109】(第78図、図版17)

I・J-2グリッドで確認された土坑である。確認時での規模は、長さ1.84m、幅1.60m、深さ0.35mである。平面形は不整の楕円形、断面形は皿状を呈している。埋土は4層からなる。

8号土坑【S127】(第79図、図版17)

J-13グリッドで確認された土坑である。確認時での規模は、長さ1.17m、幅0.98m、深さ0.60mである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈している。埋土は2層からなる。

9号土坑【S175】(第79図、図版17)

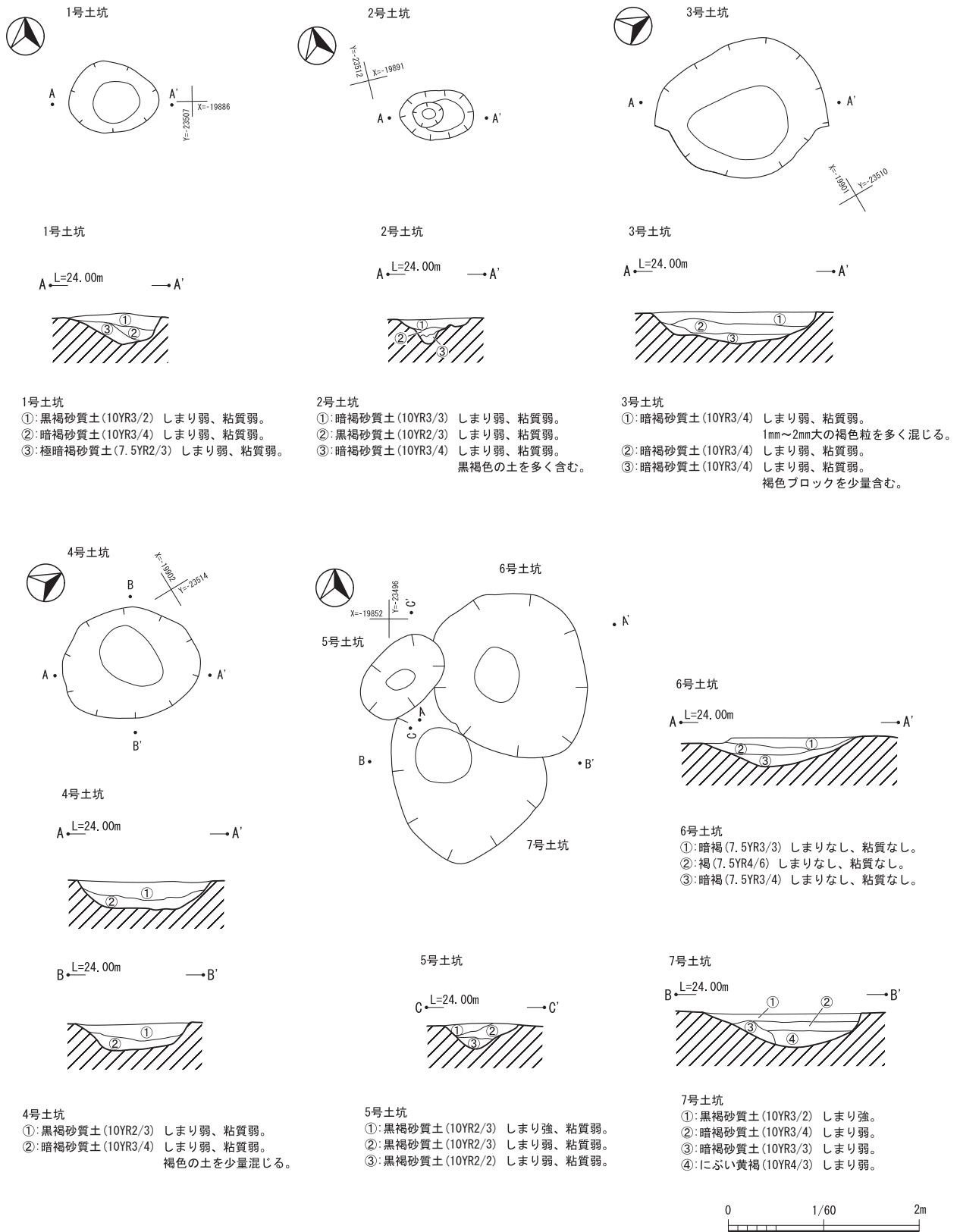
P-18グリッドで確認された土坑である。確認時での規模は、長さ0.89m、幅0.67m、深さ0.21mである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈している。埋土は3層からなる。

10号土坑【S200】(第79図、図版17)

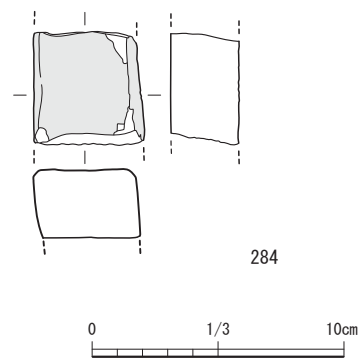
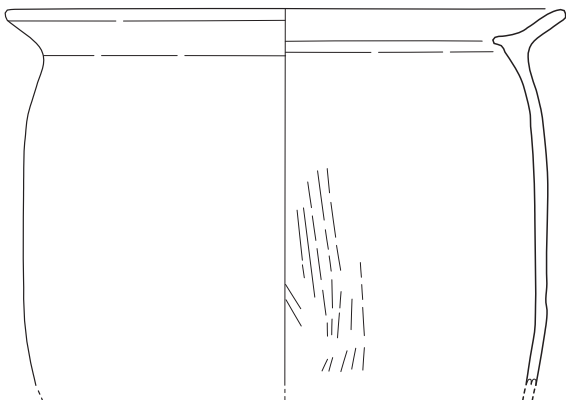
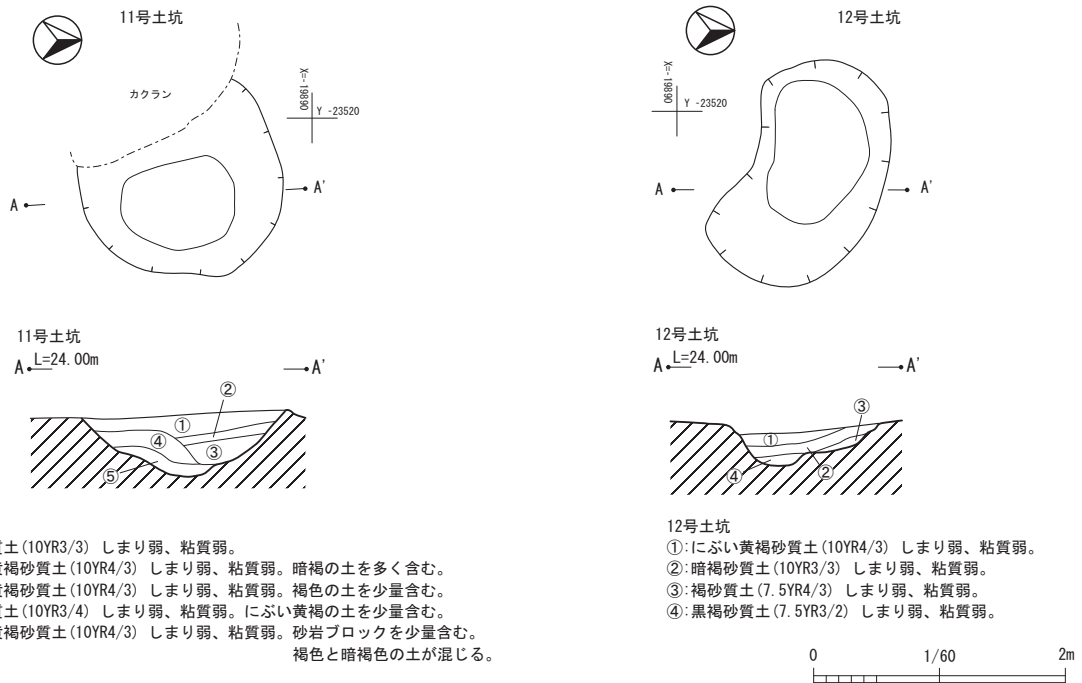
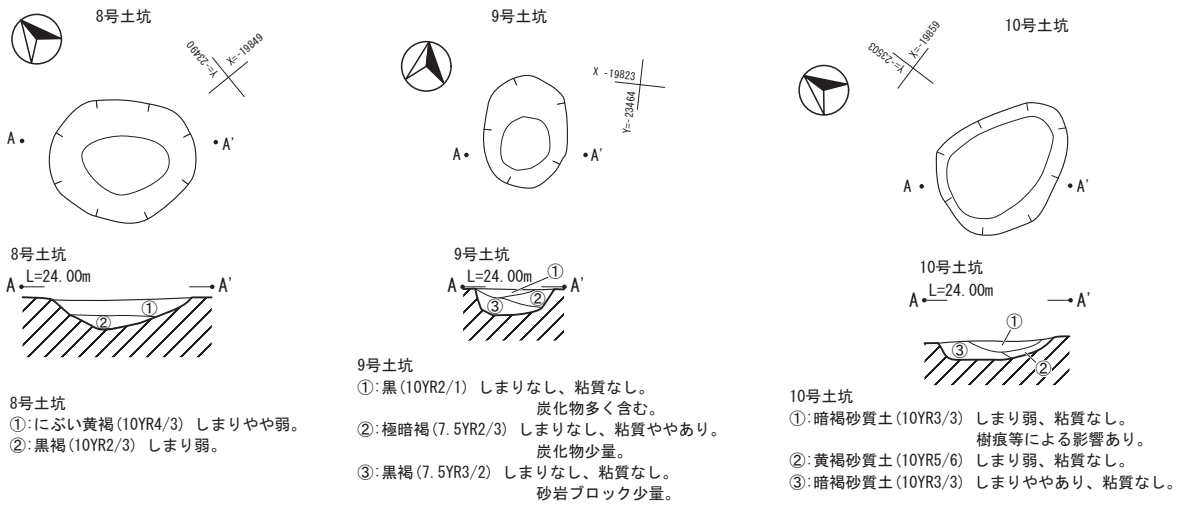
H-10グリッドで確認された土坑である。確認時での規模は、長さ1.19m、幅0.95m、深さ0.15mである。平面形は不整の楕円形、断面形は皿状を呈している。埋土は3層からなる。

11号土坑【S43】(第79図、図版17・31)

F-4グリッドで確認された土坑である。確認時での規模は、長さ1.62m以上、幅1.38m、深さ0.54mである。平面形は攪乱によって切られているため全体形は不明であるが、残存部分から判断して楕円形と考えられる。断面形は皿状を呈している。埋土は5層からなる。



第78図 1・2・3・4・5・6・7号土坑(S06・22・40・42・72・80・109)実測図



第79図 8・9・10・11・12号土坑(S127・175・200・43・56)及び出土遺物実測図

(出土遺物 283・284)

土坑の埋土からは、283 甕口縁部片と 284 の砂岩製の砥石が出土している。

12号土坑【S56】(第79図、図版17)

F-5グリッドで確認された土坑である。確認時での規模は、長さ1.84m、幅1.04m、深さ0.34mである。平面形は不整の楕円形、断面形は皿状を呈している。埋土は4層からなる。

(3) その他の遺物(第80～88図、図版32～34)

出土地点、法量、調整、色調、胎土等の詳細については、観察表のとおりである。

285・286・287・288・289は深鉢で、肩部から口縁部に向かってやや外反する。明確な口縁部を持たない。調整は、外面に貝殻条痕を残すが、内面は貝殻条痕をナデ消している。289は内外面とも貝殻条痕をナデ消している。

290・291は深鉢の口縁部片である。調整は、外面は貝殻条痕をナデ消している。内面には荒い研磨を施す。

292・293・294は深鉢である。293は、外面に1条の沈線文を持ち波状口縁部の頂部に凹点が施されている。調整は、内外面とも丁寧な研磨が施されている。294・296は内面に1条の沈線文を持つ波状口縁部である。

295は深鉢である。胴部上位の屈曲部から内湾しながら頸部が立ち上がる。明瞭な口縁部を持たない。調整は、内外面とも丁寧に研磨が施されている。

296は波状口縁部の浅鉢である。短く内傾した肩部に極短い口頸を乗せたもので内面に段を有する。

297は鉢である。胴部と口縁部との境が明瞭ではなくゆるやかに屈曲している。文様は3条の平行沈線文が引かれている。

298・299・300・301は深鉢の口縁部片である。298・299・300は、波状口縁部で、文様は平行にめぐる沈線文とその上下に残された磨り消し縄文で構成されている。301は、頸部から若干内湾しながら立ち上がる口縁部である。文様は平行にめぐる沈線文とその上下に残された磨り消し縄文で構成されている。

302・303は深鉢の胴部片である。文様帯は、横走沈線を主とし6条の沈線を施している。沈線と沈線の間にはX字状の反転文があり上部には刺突列点文が見られる。

304・305・306は鉢の口縁部片である。304は波状口縁で沈線と細線羽状文で構成している。305・306の口縁部は素口縁で胴部に文様帯を持つ、施文は沈線と細線羽状文で構成している。

307・308は鉢の胴部片である。施文は沈線と細線羽状文で構成している。

309は鉢の胴部片である。施文は複数の横走沈線によって構成している。

310・311は深鉢である。310は口縁部に刻目突帯を巡らす。311は胴部に刻目突帯を巡らす。

312・313は鉢で船元式と考えられる。縄文土器の地文をもち、口縁部に沿って連続した爪形文を施したミズ状の突帯が3条巡る。内面にはナデ調整が見られる。

314・315・316・317・318・319・320は縄文土器の底部片である。319は浅鉢の底部と考えられるが、その他は深鉢か鉢の底部である。形態はすべて上げ底である。

321・323は高坏形土器の脚部である。321は脚部が太く短く、平底になっている。323は脚部が大きく開き、上げ底になっている。脚部の側面には渦巻文が4ヶ所施されている。内外面とも丁寧に研磨を施してある。

322は縄文土器の脚片と考えられる。

324は注口土器の注口部である。丁寧に研磨を施してある。

325・326・327・328・329・330・331は甕形土器の口縁部片である。

332・333は甕形土器の口縁部片で、頸部下に1条の突帯が巡る。

334は甕形土器の脚部である。外面にはハケ目が残る。

335・336は壺形土器である。335は頸部下に1条の刻目突帯が巡る。336は胴部に1条の突帯が巡る。外面には丁寧なミガキが横方向に施されている。頸部下には暗文状のミガキが縦方向に見られる。

337は壺形土器である。外面にはハケ目残り、内面にはヘラケズリが残る。包含層出土の遺物である。

338・339は土師器の蓋である。内外面ともヘラミガキが施され、黒色顔料が塗布されている。

340・341は須恵器の受部を持つ坏である。

342は土錘である。

343・344・345・346・347・348・349・350・351は打製石鏃である。345はチャート製で、350は安山岩製であり、残りは全て黒曜石製である。347・351は未成品である。

352は安山岩製の石錐である。つまみ状の頭部と細長い錐部で構成されている。

353・354・355・356・358は安山岩製のスクレイパーである。一側縁のみに急角度に調整された刃部をもつ。

357・359は安山岩製の使用痕剥片である。

360は尖頭器と考えられる。断面が三角形を呈する安山岩の剥片が素材である。両側縁に調整剥離を行ない、先端を尖らせている。出土地点は不明で流れ込みの遺物と考えられる。

361・362・363・364は磨製石斧である。363は打製石斧の刃部のみに研磨を施した石器である。

365・366・367・368・369・370・371・372・373は打製石斧である。365・367・368・369・370・372・373は短冊形と呼ばれてきたもので、全体の形状は長方形に近い。366はバチ形と呼ばれてきたもので、全体形状は二等辺三角形に近い。

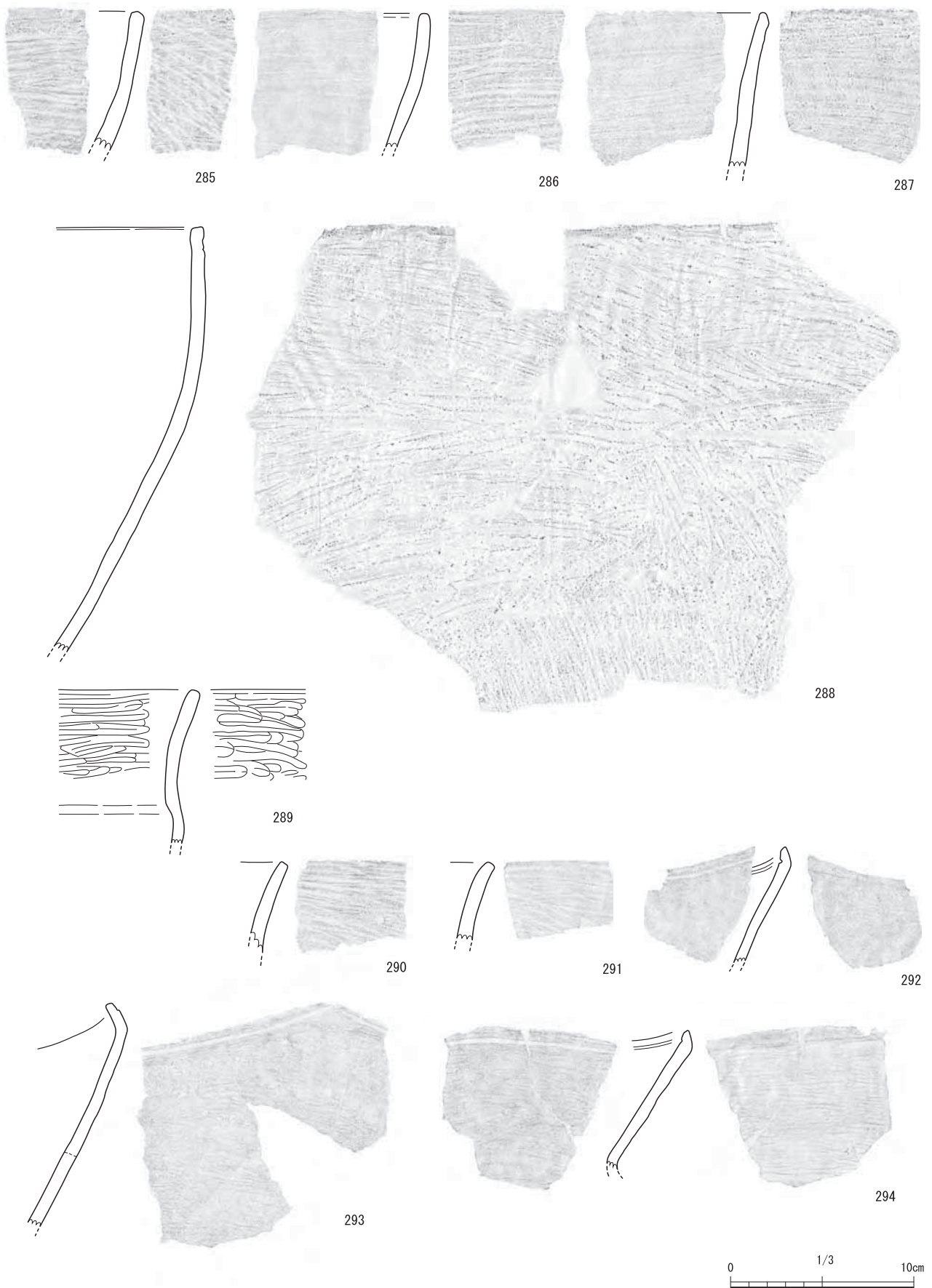
374・375・376は従来から円盤状石器と呼ばれてきたもので全周に刃部がまわる。

377・378は磨石である。377は断面形が三角形をしており、それぞれの面に磨面がある。378は表裏面に磨面が発達したものでほぼ円形を示す。

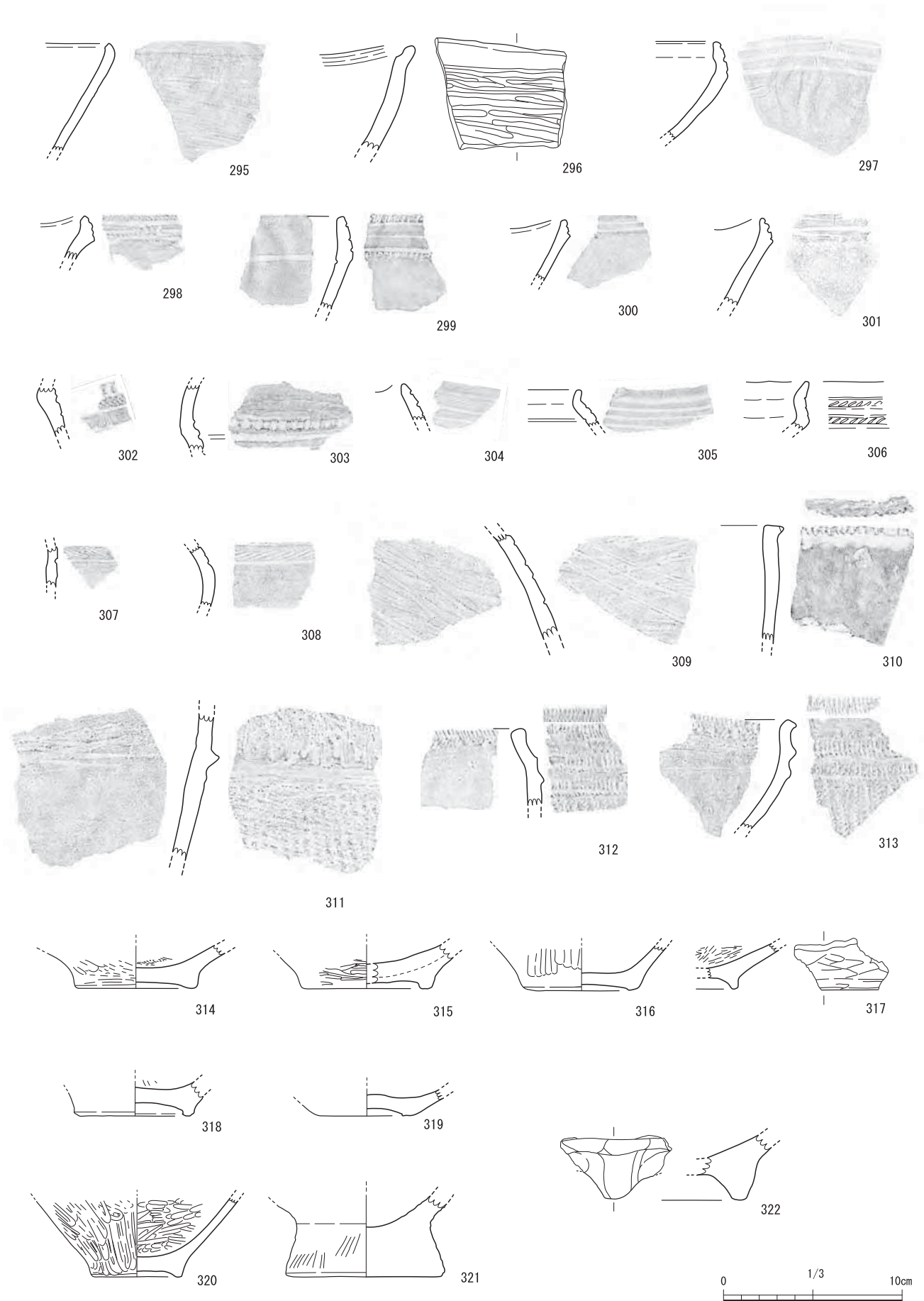
379・380・381は石皿である。379はそう大きくない円礫を利用し、片面に凹みが見られる。381は平坦な安山岩製の石皿である。碎片のため全体の様相は不明であるが、平坦面の一部に若干の打撃痕が観察される。380はかなり大きな砂岩製の石皿で、表裏両面に磨面が見られるものである。

382・383・384は砥石である。382は無斑晶流紋岩製、384は泥岩製の砥石で表裏両面・側面に顕著な擦痕が見られる。383は砂岩製の砥石で表裏両面・側面に顕著な擦痕と有溝が見られる。

その他、器種不明の小破片に関しては、写真図版のみで掲載している。

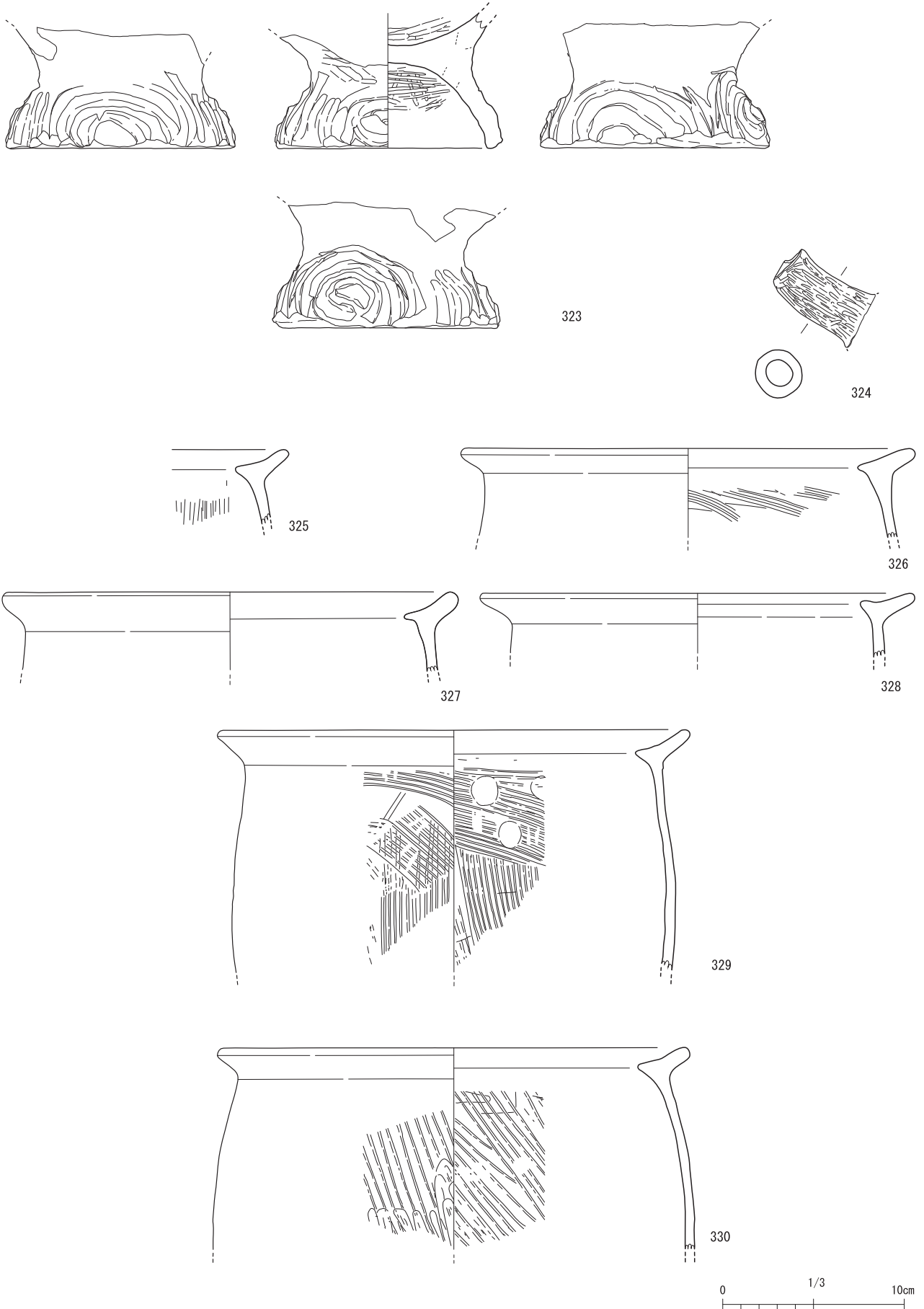


第80図 その他の出土遺物実測図(1)

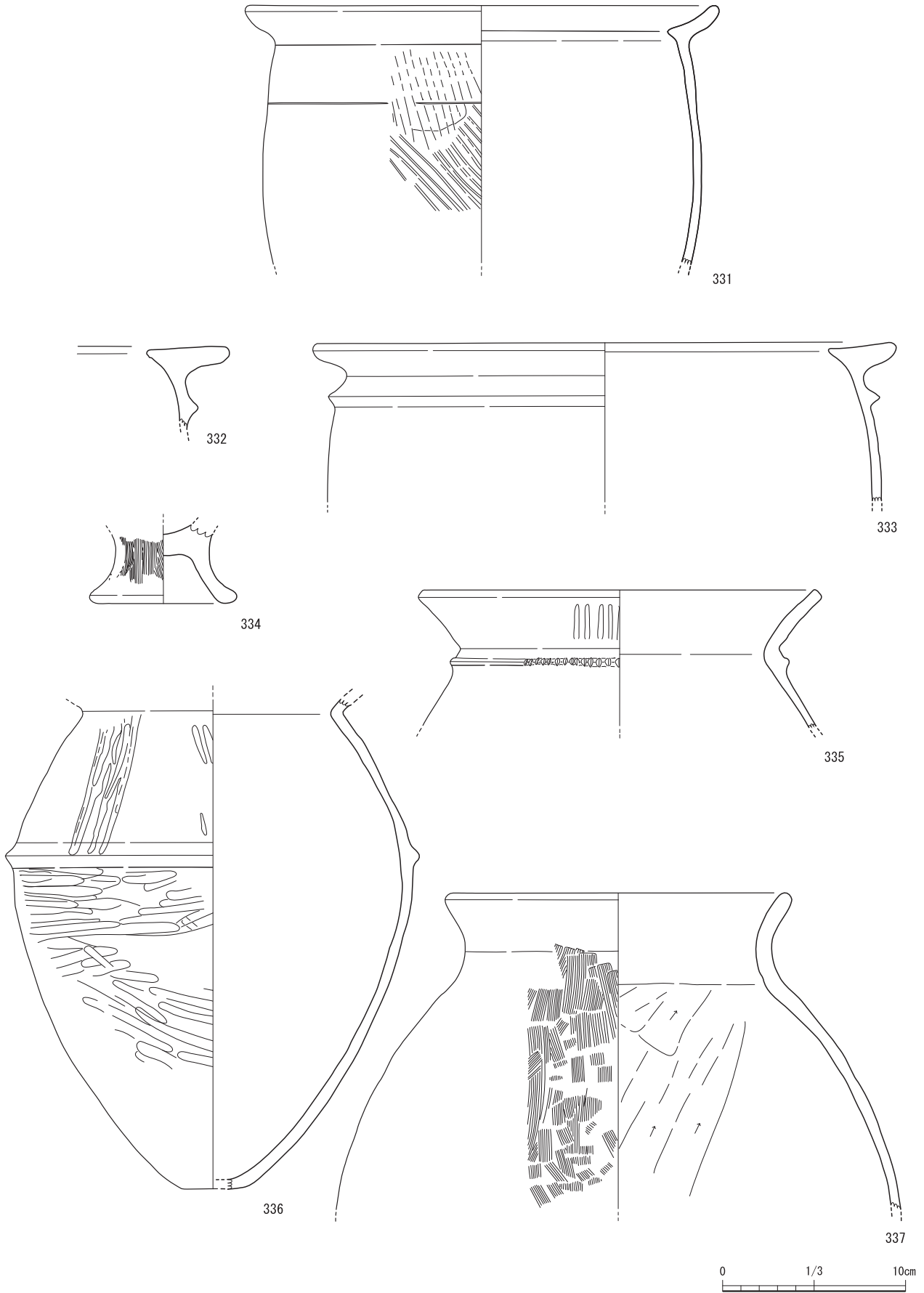


第81図 その他の出土遺物実測図(2)

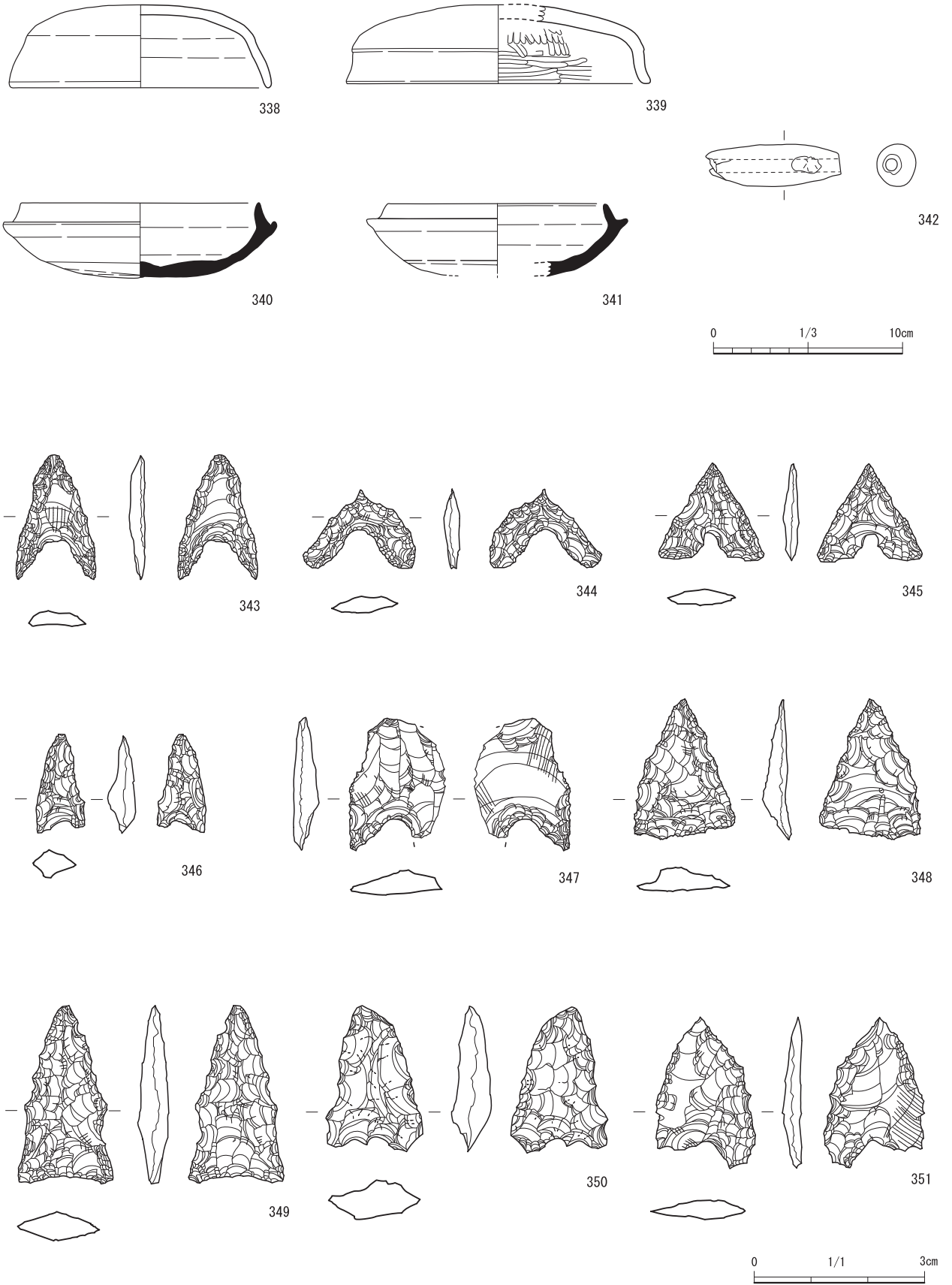




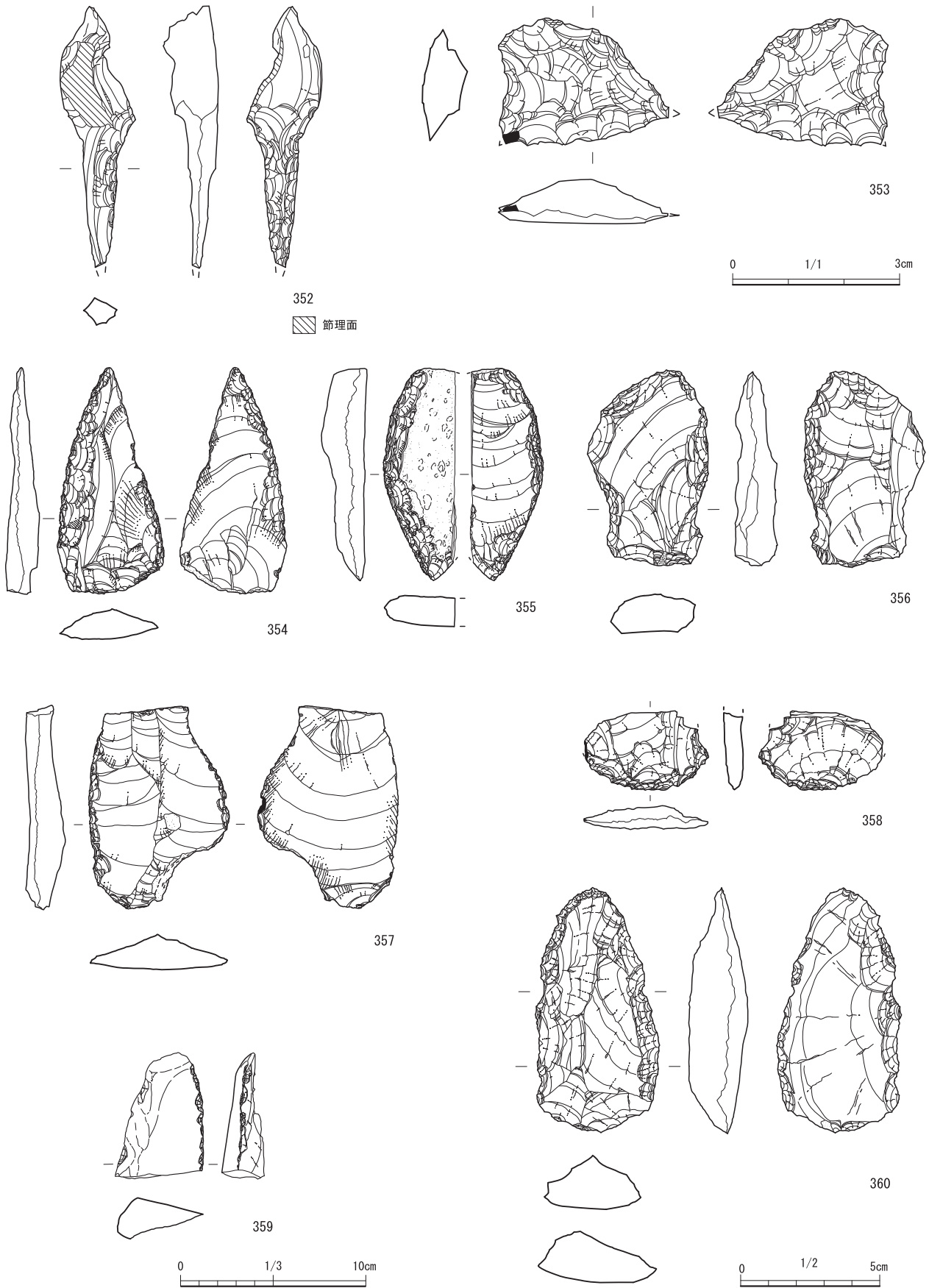
第82図 その他の出土遺物実測図(3)



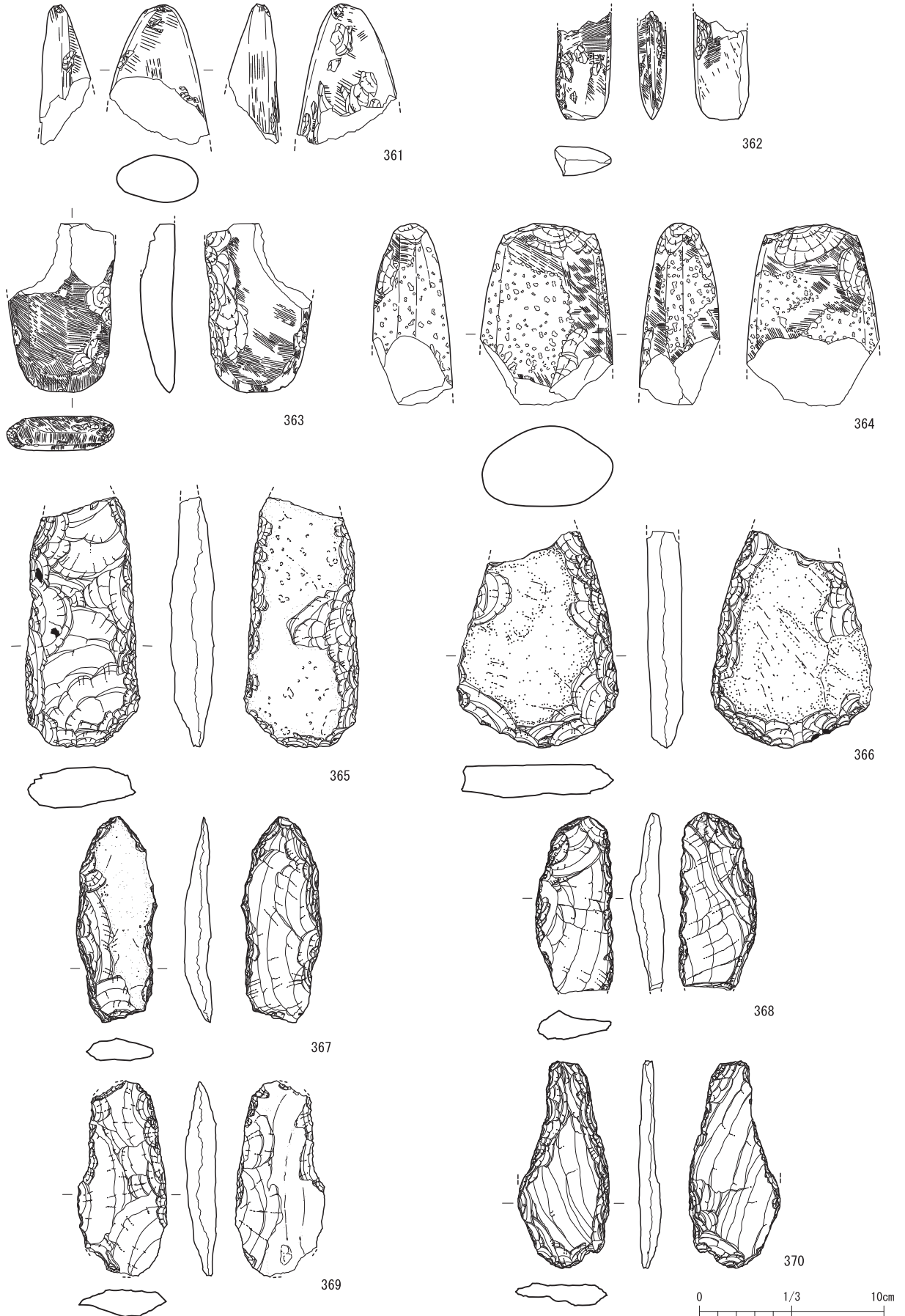
第83図 その他の出土遺物実測図(4)



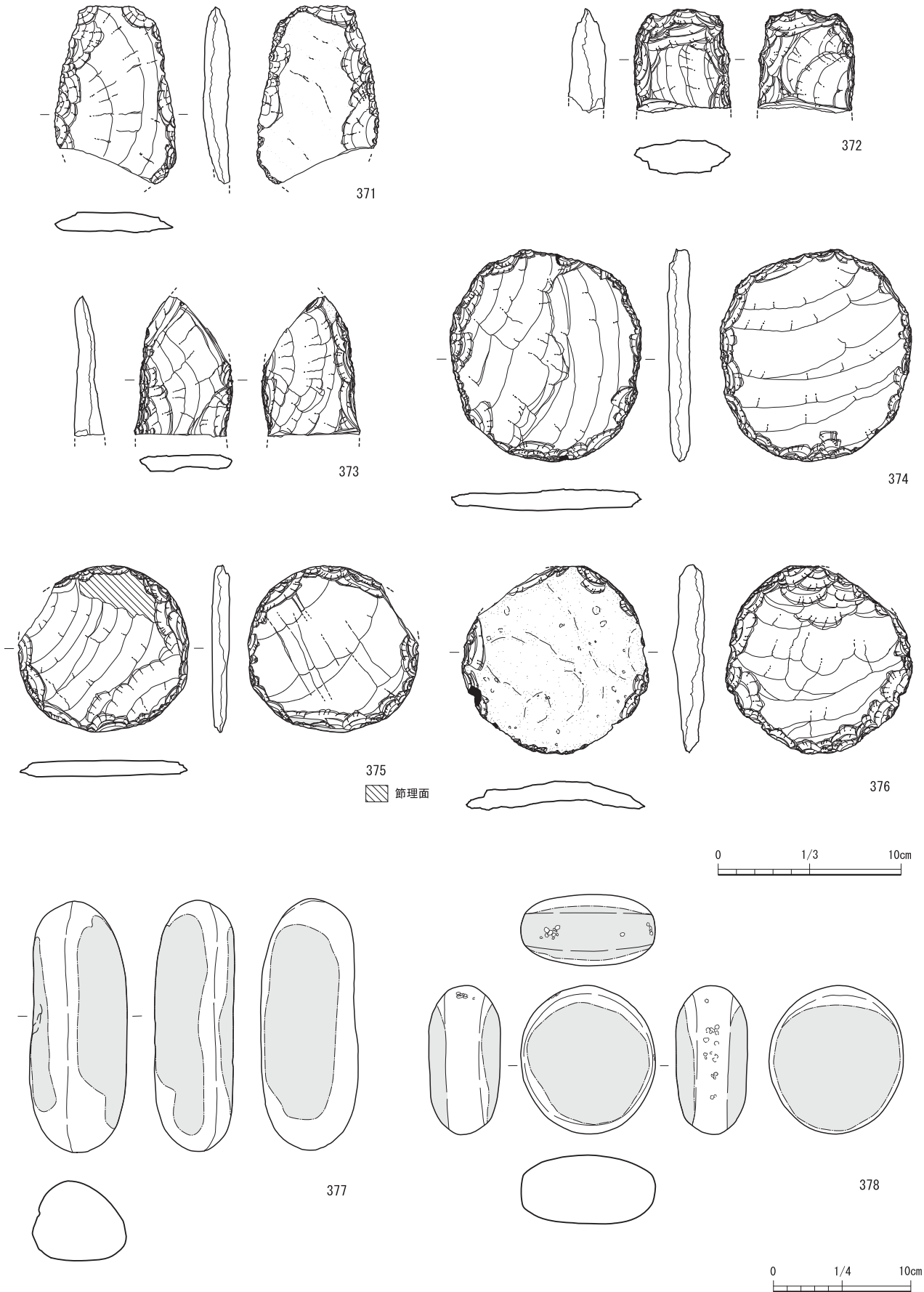
第84図 その他の出土遺物実測図(5)



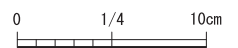
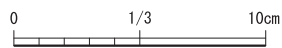
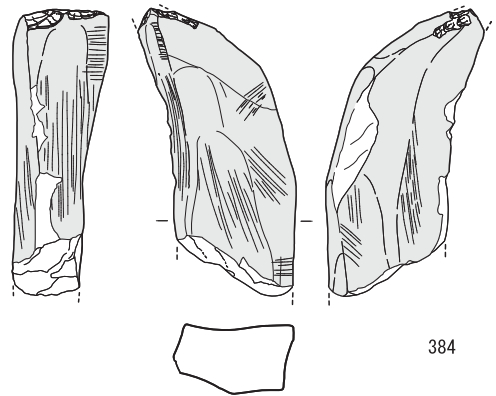
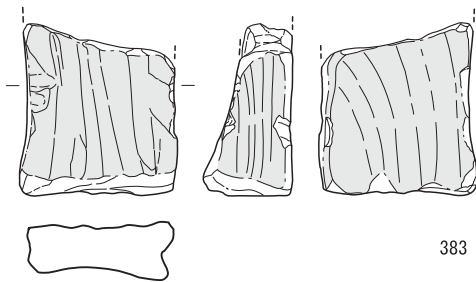
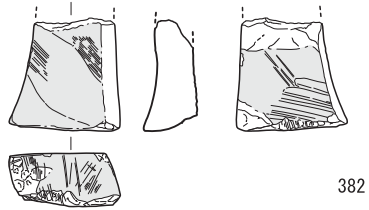
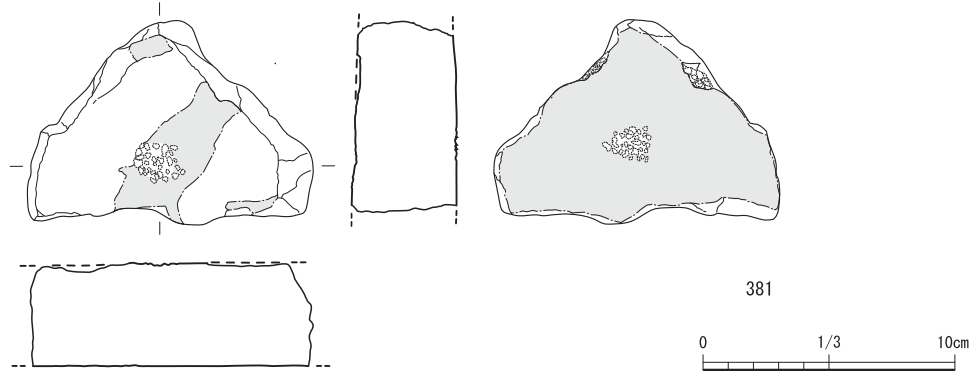
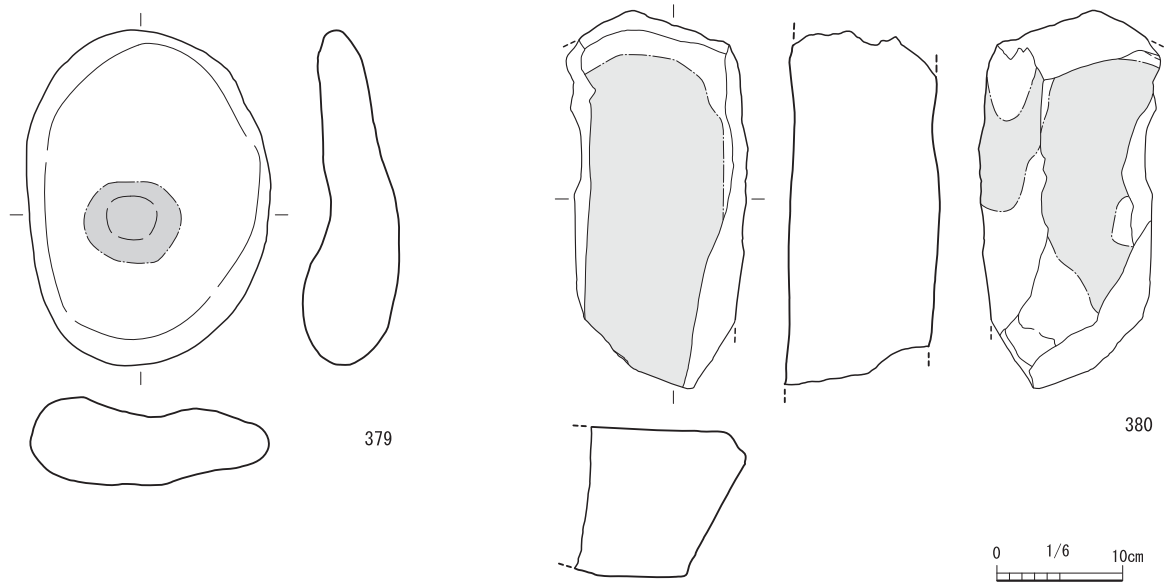
第85図 その他の出土遺物実測図(6)



第86図 その他の土遺物実測図(7)



第87図 その他の出土遺物実測図(8)



第88図 その他の出土遺物実測図(9)

## 第4節 まとめ

### 1. 発掘調査の成果

白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う新南部遺跡群 10 次における調査成果は、第3節で示されたように多岐に渡る。当遺跡では縄文時代後期の生活の営みから現代に続く人々の痕跡が確認され、白川流域における各時代の集落の広がりの変化するさまが推測された。特に、これまで白川河岸段丘下位面では確認されてなかった縄文時代後期の建物群、60 軒を超える弥生時代の集落から、白川流域の利用法が明らかになったことは大きな成果といえよう。

ここでは、本調査の総括として各時代の様相について一定の見解を示し、報告者として責任を果たしたい。

### 2. 新南部遺跡群 10 次の時代的考察

#### (1) 縄文時代

縄文時代の遺構は、調査区の中央から北東側にかけて堅穴建物が検出された。調査開始時には既に削平を受けていることを配慮すると、当時ある一定の期間内に少なくとも 11 軒以上の堅穴建物を建て、集落を形成していたことが想像される。また、当遺跡の上流部では縄文時代の集落として知られている上南部遺跡が位置しているなど白川流域には縄文時代の遺跡が点在する。これらを含め縄文時代のまとめを行いたい。

今回の調査では、11 軒の堅穴建物(1 号～11 号)が検出された。白川流域の河岸段丘下位面における当該時期の集落の動向を考える上で重要なことと考えられる。現時点では周辺に同時期の集落は確認されていない。

堅穴建物の配置は調査区の北東側に比較的集中した状態で確認された。当調査区の北側に隣接する西谷遺跡では同時代の建物は確認されていない。このことから集落の広がり、調査区の北東側から東に向かっていたと考えられる。

堅穴建物は後世の削平によってかなり保存状態が悪く、確認面から床面までの深さが 20～30 cm 程度で、そこから得られる情報は非常に限られたものである。ただ、堅穴建物の周辺から出土した土器を敢えて当てはめるなら、断片的な資料しかないため確実性に欠けるものの、縄文時代後期の太郎迫式土器に比定することができる。

堅穴建物の平面形態はそのほとんどが歪な円形で最大 4 軒の切り合いが確認できた。柱穴の大きさは 20～60 cm で、深さは 10～60 cm である。柱穴の配置は堅穴建物の壁際に円形を描くように確認できたが、どの柱が主柱になるのかは、不明である。建物に伴う炉及び硬化面は、検出されていない。このことから、これらの建物群は短期的に使われていたことが窺える。

調査区内の包含層及び造成土より出土した遺物は、深鉢、浅鉢を中心に注口土器、高坏形土器等が確認された。船元式土器から古閑式土器まで幅広く確認されている。

石器については、主に磨石・敲石・台石などの調理具、打製石斧の土堀具、採取具の磨製石斧・鏃等が出土し、当時の生活の一端を窺い知ることのできる遺物である。

#### (2) 弥生時代

弥生時代の遺構は、調査区のほぼ全域にわたって 63 軒(12 号～74 号)の堅穴建物が検出された。もちろんこれらのすべてが同時期に存在したわけでないが、削平を受けていることを配慮しても、当時ある一定の期間内に少なくとも 10 数軒以上の堅穴建物を建て、集落を形成していたことが想像される。また、当遺跡の下流域からは、標石を持つ甕棺墓が検出された新南部遺跡群 11 次が位置するなど、興味深い事例も確認されている。



今回の調査では、竪穴建物が比較的集中した状態で検出された。白川流域の河岸段丘下位面で、集落が確認されたのは当遺跡と菊陽町にある梅ノ木遺跡、六地藏遺跡等がある。白川流域における当該時期の集落の動向を考える上で重要である。

弥生時代の主な遺構の時期は、検出された竪穴建物は遺物が少ないものも多く、また後世に流れ込んだ遺物もあり、時期の判断が困難である。しかし、遺物が出土した建物や包含層出土の遺物は中期から後期のものがほとんどであることから、遺物の少ない、もしくは出土していない建物も基本的には中期から後期のものと考えられる。

竪穴建物の広がり、ほぼ調査区の全域に渡っている。当調査区の北東側に隣接する西谷遺跡では同時期の建物群が確認されている。また、調査地の南東側では、民間開発に伴って熊本市教育委員会により平成4・5年に3度、発掘調査がおこなわれており、調査の結果、弥生時代中期から後期の建物群の存在が判明している。これらの結果から、今回の調査で明らかになった集落の範囲は、新南部5丁目に位置する白川流域の河岸段丘下位面部の北バイパスより南西方向に向かって広がりを持つと考えられる。

竪穴建物は、切り合いが激しく平面形状を復元することは困難を極めた。そのほとんどが方形であるが、(12号・13号・18号)竪穴建物は、歪な楕円形を呈する。また、方形の竪穴建物群の中でも正方形に近い(39号・51号・56号)竪穴建物と、長方形に近い(31号・32号・28号)竪穴建物に分けられる。正方形の建物は、比較的一辺が5mを超える大型のものが多く、また長方形の建物は比較的小型のものが多く、柱穴が明確でなく、さらに硬化面も明瞭でないものがある。炉の存在も明らかでなく、納屋的な性格が考えられる。

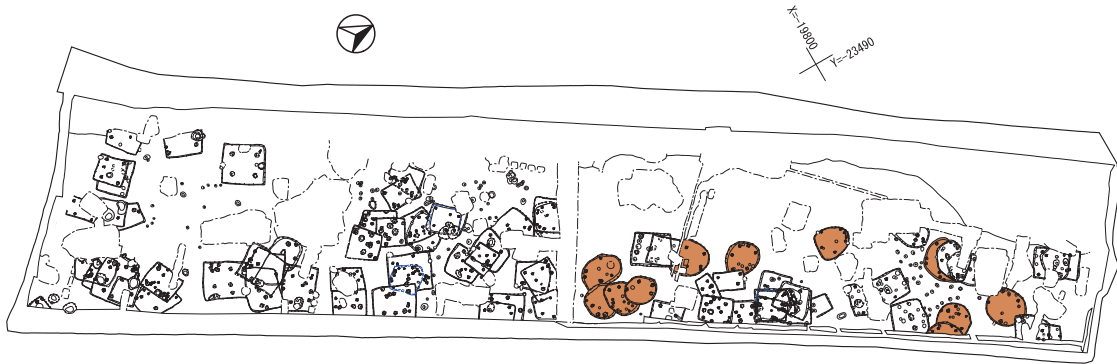
### (3) 古墳時代

古墳時代の遺構は、調査区の東側で7軒(75号～81号)の竪穴建物が検出された。調査区外の東側に広がり想像できるが、河川段丘の平場がほとんど見られず、崖面が白川河川まで迫っている状況から考えて大きな広がりには考えにくい。また当調査区の下流の河川段丘上の平場では同時期の集落跡が確認されており、当遺跡と同様に小規模の集落を形成している。白川流域における当該時期の集落の動向を考える上で重要である。

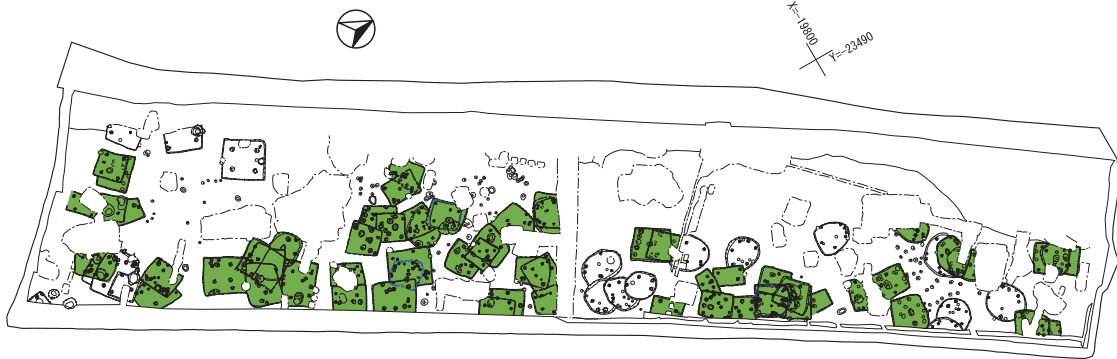
古墳時代の主な遺物は、土師器・須恵器が出土した。特にその中心となるものが、古墳時代後期のものである。器種としては、高坏、坏、模倣坏、甕、甗、土製支脚など多岐に渡っている。特に75号から出土した高坏は、造り付けカマドの焼成部に伏せた状態で確認され、カマドの廃棄儀礼の可能性を示すものと考えられる。

以上、白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う新南部遺跡群10次の調査成果について報告した。今回の調査では、約9ヶ月間におよぶ長期の調査期間で、白川流域の河岸段丘下位面における先史時代の様相を明らかにする様々な成果があった。縄文時代後期以降、現代にいたるまで連綿と人々の生活が営まれていたことが判明したことは大きな意義がある。近年、白川河川改修に伴って行われた発掘調査でも注目すべき発見が相次いでいる。河川改修が進めば、白川流域の開発が加速的に進んでいくものと推測できる。今後、付近の発掘調査が進む中で、新たな事実関係により新南部遺跡群が解明されることを望むものである。

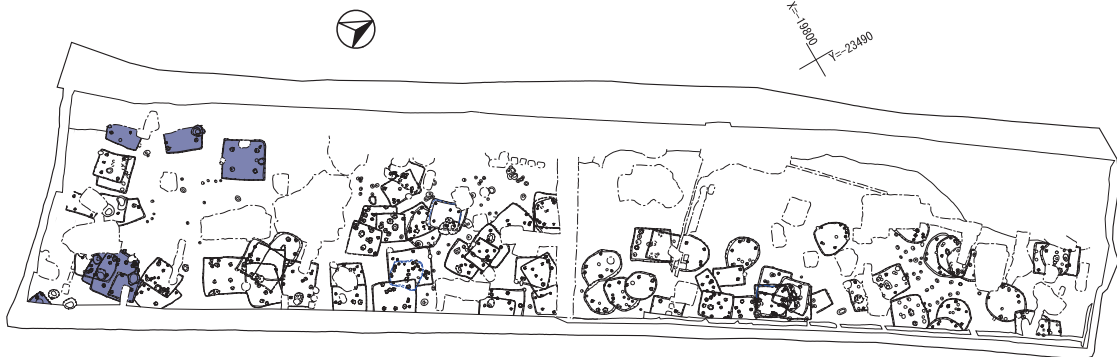
【縄文時代】



【弥生時代】



【古墳時代】



第89図 縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺構配置図

《引用・参考文献》

- 熊本県教育委員会 1985 『西谷遺跡』 熊本県文化財調査報告書第 76 集
- 熊本県教育委員会 1986 『熊本県旧石器時代 調査報告書』 熊本県文化財調査報告書第 81 集 熊本県文化財保護協会
- 熊本県教育委員会 1994 『ワクト石遺跡－熊本県菊池台地における縄文時代後期集落の調査』 熊本県文化財調査報告書第 144 集
- 熊本県教育委員会 1996 『沖松遺跡』 熊本県文化財調査報告書第 154 集
- 熊本県教育委員会 1999 『石の本遺跡群Ⅰ』 熊本県文化財調査報告書第 177 集
- 熊本県教育委員会 2001 『梅ノ木遺跡Ⅱ』上巻 熊本県文化財調査報告書第 199 集
- 熊本県教育委員会 2001 『梅ノ木遺跡Ⅱ』下巻 熊本県文化財調査報告書第 199 集
- 熊本県教育委員会 2002 『石の本遺跡群Ⅴ』 熊本県文化財調査報告書第 205 集
- 熊本県教育委員会 2004 『地蔵原遺跡』 熊本県文化財調査報告書第 220 集
- 熊本県教育委員会 2005 『前田遺跡』 熊本県文化財調査報告書 225 集
- 熊本県教育委員会 2010 『上小田宮の前・養寺遺跡』 熊本県文化財調査報告書第 255 集
- 熊本県教育委員会 2014 『滝川石田遺跡 辺田見中道遺跡』 熊本県文化財調査報告書第 301 集
- 宇土市教育委員会 1985 『西岡台貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第 12 集
- 熊本市教育委員会 2014 『法王鶴遺跡Ⅰ』熊本市の文化財第 33 集
- 熊本市教育委員会 1983 『吉原遺跡発掘調査報告書(昭和 56・57 年度)』
- 熊本市教育委員会 1975 『下南部遺跡発掘調査報告書』
- 肥後考古学会 1998 『肥後考古』 第 11 号
- 金関 恕、佐原 眞 1986 『弥生文化の研究』3 弥生土器Ⅰ 雄山閣
- 金関 恕、佐原 眞 1986 『弥生文化の研究』4 弥生土器Ⅱ 雄山閣
- 金関 恕、佐原 眞 1986 『弥生文化の研究』5 道具と技術Ⅰ 雄山閣
- 大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館 2005 『水辺と森と縄文人』 便利堂
- 日本考古学協会 2002 20 日本考古学 第 13 号 吉川弘文館
- 橋口達也 2005 『甕棺と弥生時代年代論』雄山閣
- 鹿児島県立埋蔵文化センター 2007 『前原遺跡(鹿児島市福山町) XX－(鹿児島西 IC～伊集院 IC)』  
第Ⅱ分冊

表1 新南部遺跡群10次 出土土器観察表(1)

掘削 番号	報告	出土地点	出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)			色 調		調 整		胎土	備考		
								口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
6	1	1号竪穴建物	S351	埋1	-	縄文土器	浅鉢	口縁一部	-	5.3+	-	黒褐(10YR3/1)	黒褐(10YR3/1)	シカキ	シカキ	良好	角閃石、雲母、石英	
6	2	1号竪穴建物	S351	埋1	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	8.3+	-	灰黄褐(10YR6/2)	にぶ黄橙(10YR6/3)	ナテ、沈線、シカキ	ナテ、沈線、シカキ	良好	長石、雲母、黒色粒、褐色粒	
6	3	1号竪穴建物	S351	埋1	-	縄文土器	浅鉢	口縁一部	(20.8)	4.2+	-	灰黄褐(10YR4/2)	褐灰(10YR4/1)	シカキ	シカキ	良	白・黒色砂粒、角閃石	
6	4	1号竪穴建物	S351	埋1	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	6.1+	-	黒褐(10YR3/4)	褐灰(10YR4/1)	ハラカキ	ハラカキ	良	白・黒色砂粒	
6	5	1号竪穴建物	S351	埋1-2	-	縄文土器	高坏	脚部	-	5.5+	3.8	にぶい褐(7.5YR6/3)	黒(10YR2/1)	シカキ、刻目突帯、ナテ	ハラシカキ	良	白色砂、灰色砂、角閃石	内面黒色処理。
6	6	1号竪穴建物	S351	埋1	-	縄文土器	深鉢	底部一部	-	2.2+	(6.8)	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナテ	ナテ	良	白・黒色砂粒、角閃石	
6	7	1号竪穴建物	S351	埋1	-	縄文土器	深鉢	底部	-	3.1+	-	明黄褐(10YR7/6)	浅黄(2.5Y7/4)	シカキ	シカキ	良好	角閃石、長石	
6	8	1号竪穴建物	S351	埋1	-	縄文土器	深鉢	底部	-	3.7+	-	にぶい橙(5YR7/4)	灰黄褐(10YR5/2)	シカキ	シカキ	良好	角閃石、石英	
8	16	2号竪穴建物	S319	埋土	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	4.4+	-	にぶい黄褐(10YR5/3)	灰黄褐(10YR5/2)	ナテ、刻目	ナテ	良	白色砂粒	
8	17	2号竪穴建物	S319	埋土	-	縄文土器	鉢?	底部	-	3.4+	4.2	にぶい黄橙(10YR6/4)	浅黄(2.5YR7/4)	ハラカキ	ハラシカキ	良好	1mm大の雲母	
8	18	3号竪穴建物	S320	埋土	No.1	縄文土器	鉢	口縁一部	-	3.9+	-	にぶい黄(2.5Y6/4)	にぶい黄(2.5Y6/4)	ハラカキ	ハラシカキ	良好	角閃石、長石	
8	19	3号竪穴建物	S320	埋土	No.1	縄文土器	浅鉢	口縁一部	-	3.0+	-	黒褐(10YR3/1)	にぶい黄(2.5Y6/3)	シカキ	ナテ	良好	角閃石、白色粒	
8	20	3号竪穴建物	S320	埋土	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	6.6+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	明黄褐(10YR6/6)	ナテ	条痕文?ナテ?	良好	角閃石、雲母	波状口縁。
8	21	3号竪穴建物	S320	埋土	No.1	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	7.7+	-	黒褐(10YR3/2)	明黄褐(10YR7/6)	ハラカキ、沈線	ナテ、シカキ	良好	角閃石、雲母	波状口縁。
8	22	3号竪穴建物	S320	埋土	No.1	縄文土器	深鉢	1/4	23.6	17.2+	-	明黄褐(10YR6/6)	にぶ黄橙(10YR4/3)	ナテ、シカキ	ナテ、沈線、シカキ	良好	黒色粒、角閃石、雲母、長石	波状口縁。
8	23	3号竪穴建物	S320	埋土	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	6.6+	-	黒褐(2.5Y3/2)	黒(2.5Y2/1)	ハラカキ	ハラシカキ	良	角閃石	波状口縁。
8	24	3号竪穴建物	S320	埋土	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	(32.6)	10.2+	-	黒褐(5YR2/1)	にぶい褐(7.5YR5/3)	シカキ	シカキ	良	白・黒色砂粒、角閃石	ハラミガキ非常に密。
8	25	3号竪穴建物	S320	埋土	No.1	縄文土器	深鉢	胴部一部	-	16.2+	-	にぶい黄橙(10YR5/4)	灰黄褐(10YR5/2)	ハラカキ	ナテ	良	雲母、角閃石	
9	26	4号竪穴建物	S379	埋土	-	縄文土器	深鉢	1/4	(34.8)	17.5+	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	黒褐(2.5Y3/2)	条痕後シカキ	条痕	良	白・黒色砂粒	波状口縁。
11	27	5号竪穴建物	S312	埋1-2	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	2.9+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	ハラカキ、斜格子文、沈線	ハラシカキ	良	角閃石	
11	28	5号竪穴建物	S312	埋1	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	5.2+	-	暗灰黄(2.5Y5/2)	暗灰黄(2.5Y5/2)	ハラカキ、X文	ハラシカキ	良好	角閃石、雲母、石英	外面に黒色処理?
11	29	5号竪穴建物	S312	埋2	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	4.5+	-	黒褐(2.5Y3/2)	黒褐(2.5Y3/2)	シカキ	シカキ、沈線	良好	角閃石、雲母	波状口縁。
11	30	5号竪穴建物	S312	埋1	-	縄文土器	浅鉢	口縁一部	-	3.2+	-	褐(7.5YR4/6)	黒褐(7.5YR3/1)	斜格子文、沈線、刺突文、ハラカキ	ハラシカキ	良	白色砂粒	波状口縁。
11	31	5号竪穴建物	S312	埋土	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	3.8+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/2)	刺突文、沈線、ミカキ	シカキ	良	白・黒色砂粒、角閃石	波状口縁。
11	32	5号竪穴建物	S312	埋1-2	-	縄文土器	深鉢	胴部一部	-	7.5+	-	橙(5YR6/6)	にぶ黄橙(10YR6/4)	ナテ、沈線	ハラシカキ	良好	1mm大の雲母、白色粒	
11	33	5号竪穴建物	S312	埋2	-	縄文土器	深鉢	胴部一部	-	8.4+	-	灰(5Y4/1)	にぶい黄(2.5Y6/4)	ハラシカキ、沈線	ハラシカキ	良好	1mm大の角閃石	
11	34	5号竪穴建物	S312	埋土	No.2	縄文土器	深鉢	底部	-	2.2+	7.0	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/3)	ハラカキ、ナテ	ナテ	良	角閃石、雲母	
11	35	5号竪穴建物	S312	埋土	No.6	縄文土器	深鉢	底部	-	3.8+	6.0	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ハラカキ、ナテ	ナテ	良	角閃石、輝石、石英	
11	36	5号竪穴建物	S312	埋土	No.7	縄文土器	深鉢	底部一部	-	6.7+	(7.4)	明黄褐(10YR7/6)	浅黄(2.5Y7/3)	条痕文、ナテ	ナテ	良好	1mm大の長石、角閃石	
11	37	5号竪穴建物	S312	埋1-2	-	縄文土器	深鉢	胴部~底部	-	13.4+	5.8	橙(7.5YR7/6)	黄灰(2.5YR4/1)	シカキ	シカキ	良	白・黒色砂粒	
13	43	6号竪穴建物	S340	埋1	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	3.9+	-	灰黄褐(10YR5/2)	にぶ黄橙(10YR6/3)	ハラカキ、沈線、細文	ハラシカキ	良	黒色砂粒、角閃石	波状口縁。

表2 新南都遺跡群10次 出土土器観察表(2)

挿図 番号	報番	出土地点 報告	出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)			色 調		調 整		焼成	胎土	備考	
								口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
13	44	6号竪穴建物	S340	埋1	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	5.5+	-	黒褐(10YR3/2)	にぶ黄褐(10YR5/3)	ハブ込キ、沈線、縄文	ハブ込キ	角閃石、石英	波状口縁。	
13	45	6号竪穴建物	S340	埋2	-	縄文土器	深鉢	1/8	-	6.4+	-	褐灰(7.5YR4/1)	灰褐(7.5YR5/2)	条痕文、込キ	込キ	白・黒色砂粒、角閃石	波状口縁。	
13	46	6号竪穴建物	S340	埋土	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	3.6+	-	褐灰(10YR4/1)	にぶ黄褐(10YR7/4)	込キ	込キ	良好	角閃石、石英、雲母	波状口縁。
13	47	6号竪穴建物	S340	埋土	-	縄文土器	鉢	胴部一部	-	5.5+	-	暗灰黄(2.5Y4/2)	浅黄(2.5Y7/4)	列点文、藤沢文、X文、縄文、ハブ込キ	ナナ	良好	角閃石、石英	
14	49	7号竪穴建物	S299	埋1	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	4.1+	-	浅黄褐(10YR8/4)	浅黄(2.5Y7/4)	ナナ	ナナ	良好	3mm大の角閃石	
14	50	7号竪穴建物	S299	埋土	-	縄文土器	深鉢	胴部一部	-	6.8+	-	黒褐(10YR3/1)	暗灰黄(2.5Y4/2)	込キ	ナナ	良	白色砂粒	
16	51	8号竪穴建物	S97	埋2	-	縄文土器	深鉢	底部一部	-	2.7+	(8.1)	にぶい黄褐(10YR7/4)	にぶ黄褐(10YR6/4)	オサエ後ナナ	ナナ	良	白・黒色砂粒、角閃石	
16	53	9号竪穴建物	S98	埋土	-	縄文土器	深鉢	底部	-	2.7+	6.9	にぶい黄褐(10YR6/4)	褐灰(10YR6/1)	込キ、ナナ	オサエ後ナナ	良	白・黒色砂粒、角閃石	
16	54	10号竪穴建物	S99	埋2	-	縄文土器	鉢	口縁一部	-	4.8+	-	黒褐(10YR3/2)	灰黄褐(10YR6/2)	沈線、込キ	込キ	良	白・黒色砂粒、角閃石	
16	55	10号竪穴建物	S99	埋土	-	縄文土器	鉢	口縁一部	-	4.2+	-	にぶい黄褐(10YR6/4)	にぶ黄褐(10YR6/4)	2条沈線、ミカキ	ハブ込キ	良	黒色砂粒、角閃石	
16	56	10号竪穴建物	S99	埋2	-	縄文土器	深鉢	胴部一部	-	3.4+	-	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶ黄褐(10YR5/4)	込キ、刺突文、沈線	ハブ込キ	良	角閃石	
16	58	11号竪穴建物	S100	埋土	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	5.1+	-	褐灰(7.5YR4/1)	褐灰(7.5YR4/1)	刺突文、沈線、ミカキ	込キ	良好	1mm大の角閃石、長石	波状口縁。
16	59	11号竪穴建物	S100	埋土	-	縄文土器	鉢	口縁一部	-	4.0+	-	黒褐(2.5Y3/1)	黒褐(2.5Y3/1)	ナナ	ナナ	良好	1mm大の褐・白色粒、角閃石	
16	60	11号竪穴建物	S100	埋土	-	縄文土器	深鉢	胴部一部	-	3.6+	-	にぶい黄褐(10YR6/4)	にぶい黄(2.5Y6/3)	沈線、波状文	ナナ	良好	角閃石、石英	
17	61	12号竪穴建物	S322	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.0+	-	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	ナナ	ナナ	良好	1~2mm大の白色粒	外面一部にスス付着か？
17	62	12号竪穴建物	S322	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.8+	-	橙(5YR7/6)	浅黄(2.5Y7/3)	ナナ	ナナ	良好	角閃石、1~2mmの白色粒	
17	63	12号竪穴建物	S322	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.7+	-	にぶい橙(5YR7/4)	にぶ黄褐(10YR7/4)	ナナ、突帯	ナナ	良好	角閃石	
17	64	12号竪穴建物	S322	埋土	-	弥生土器	壺	脚部一部	-	3.3+	-	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	ナナ、ハブ込キ	ナナ、ハブ込キ	良好	黒・褐色粒	
17	65	13号竪穴建物	S350	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	(32.2)	5.1+	-	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナナ、突帯	ナナ	良	角閃石、黒色砂粒	
17	66	13号竪穴建物	S350	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.9+	-	にぶい黄褐(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナナ	ナナ	良	黒・白色砂粒	
17	67	13号竪穴建物	S350	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.0+	-	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	ナナ	ナナ	良	黒・灰色砂粒	
17	68	13号竪穴建物	S350	埋土	-	弥生土器	甕	脚部一部	-	4.6+	(13.0)	にぶい黄褐(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	ハブ込キ、ナナ	ハブ込キ、ナナ	良	黒色砂粒	
18	69	14号竪穴建物	S323	埋土	-	弥生土器	甕	底部一部	-	3.3+	(8.8)	橙(5YR6/6)	にぶい黄(2.5Y6/3)	ナナ	オサエ後ナナ	良好	1mm大の長石、角閃石	
20	71	16号竪穴建物	S376	埋1	-	弥生土器	甕	口縁~胴部	(29.6)	19.8+	-	橙(2.5YR6/6)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナナ、ハブ込キ	ナナ、ハブ込キ	良	白・黒色砂粒	外面スス付着。口縁歪みあり。
20	72	16号竪穴建物	S376	埋土	No.1	弥生土器	壺	ほぼ完形	18.8	38.5+	9.0	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/3)	ヨコナナ、ナナ、ハブ込キ	ヨコナナ	良	1mm以下の砂粒、石英、角閃石	内面は剥落著しい。受熱？胴径:32.5。
21	73	16号竪穴建物	S376	埋2	No.1	弥生土器	甕	1/3	(21.4)	17.0+	-	黒褐(10YR3/2)	黒褐(10YR3/2)	ナナ、ハブ込キ	ナナ、ハブ込キ	良	白・黒色砂粒	
21	74	16号竪穴建物	S376	埋土	No.1	弥生土器	甕	口縁~胴部	21.5	12.7+	-	明黄褐(10YR7/6)	黄褐(2.5Y5/4)	ハブ込キ、ナナ	ハブ後ナナ	良好	1mm大の白色砂粒	胴径(22.4)
21	75	16号竪穴建物	S376	埋土	-	弥生土器	甕	脚部一部	-	7.4+	(11.4)	明黄褐(10YR7/6)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ハブ込キ、ナナ	ナナ	良	白色砂粒、2~3mmの石	内面底部黒斑か？
21	77	17号竪穴建物	S377	埋2	-	弥生土器	甕	口縁一部	(28.5)	6.5+	-	にぶい褐(7.5YR6/4)	にぶい褐(10YR5/4)	ナナ、ハブ込キ	ナナ、ハブ込キ	良	白色砂粒、角閃石、4~6mmの白色石	
21	78	17号竪穴建物	S377	埋2	-	弥生土器	壺	胴部一部	-	10.1+	-	明黄褐(10YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	ハブ込キ	ハブ込キ	良	白・黒色砂粒	

表3 新南部遺跡群10次 出土土器観察表(3)

挿図 番号	報告	出土地点	調査時 層位	出土 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)		色調		調整		焼成	胎土	備考
								口径	器高	底径	外面	内面	外面			
24	81	19号竪穴建物	S318	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	18+	-	にぶい黄橙(10YR5/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナテ	黒色砂粒		
24	82	19号竪穴建物	S318	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	22+	-	灰黄(2.5Y7/2)	ナテ	ナテ	黒色砂粒		
24	83	19号竪穴建物	S318	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	37+	-	にぶい黄(2.5Y6/3)	ナテ	ナテ	1mm大の角閃石		
24	84	19号竪穴建物	S318	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	54+	-	灰黄褐(10YR4/2)	ナテ	ナテ	2mm大の白色粒		
24	85	19号竪穴建物	S318	-	弥生土器	甕	口縁一部	19.3	48+	-	にぶい黄(2.5Y7/3)	ナテ	ナテ	5mm大の白色粒		
24	86	19号竪穴建物	S318	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	28+	-	浅黄橙(10YR8/4)	ナテ	ナテ	2mm大の白色粒		
24	87	19号竪穴建物	S318	-	弥生土器	甕	口縁~胴部	(21.4)	94+	-	暗褐(10YR3/4)	ナテ	ナテ	黒色砂粒		
24	88	19号竪穴建物	S318	-	弥生土器	甕	胴部一部	-	126+	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナテ	ナテ	1~2mm大の石英		
24	89	19号竪穴建物	S318	-	土師器	甕	口縁~胴部	(25.5)	88+	-	にぶい橙(5YR7/4)	ナテ	ナテ	1mm大の白・黒色砂粒		外面スス付着。
24	90	19号竪穴建物	S318	-	弥生土器	甕	脚部一部	-	56+	(9.0)	にぶい橙(7.5YR7/4)	ナテ	ナテ	2mm大の白色粒		脚内面に接合痕か？
25	94	20号竪穴建物	S321	-	弥生土器	蓋	3/4	15.3	3.6	-	橙(5YR6/6)	ナテ	ナテ	黒色砂粒、石英、雲母		磨滅の為調整不明瞭。
25	95	20号竪穴建物	S321	-	土師器	壺	口縁一部	(21.5)	46+	-	にぶい黄橙(10YR7/2)	ナテ	ナテ	白・黒色砂粒、長石		歪みあり、径・傾き精度低い。
25	96	20号竪穴建物	S321	-	弥生土器	壺	胴部~底部	-	284+	6.2	赤(10R4/8) 浅黄(2.5Y7/3)	ナテ	ナテ	1~1.5mmの砂粒、石英、雲母、赤色粒		丹塗り、外面のヘラカキは不鮮明。胴径(26.6)。
25	97	20号竪穴建物	S321	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	34+	-	橙(7.5YR7/6)	ナテ	ナテ	白・黒色砂粒		
25	98	20号竪穴建物	S321	-	弥生土器	甕	胴部一部	-	50+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナテ	ナテ	角閃石、石英、黒・白色粒		
25	99	20号竪穴建物	S321	-	弥生土器	甕	脚部	-	61+	9.8	浅黄(2.5Y7/4)	ナテ	ナテ	3mm大の長石		内面底部に焼成時のひびあり。
30	101	22号竪穴建物	S92	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	41+	-	橙(7.5YR6/6)	ナテ	ナテ	1mm大の長石、角閃石		
30	102	22号竪穴建物	S92	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	28+	-	明黄褐(2.5Y6/6)	ナテ	ナテ	褐色粒、角閃石		
30	103	22号竪穴建物	S92	-	弥生土器	甕	口縁一部	(19.7)	58+	-	灰黄褐(10YR4/2)	ナテ	ナテ	黒色砂粒、2mm大の白色粒		器面薄く剥離している。
30	104	22号竪穴建物	S92	-	弥生土器	甕	口縁~胴部	(27.2)	84+	-	にぶい黄橙(10YR6/3)	ナテ	ナテ	金・白色砂粒		
30	105	23号竪穴建物	S101	-	弥生土器	甕	口縁~胴部	-	87+	-	浅黄橙(7.5YR8/4)	ナテ	ナテ	角閃石、褐・明赤褐・白色粒		
30	106	23号竪穴建物	S101	-	弥生土器	甕	口縁一部	(26.6)	48+	-	灰褐(7.5YR5/2)	ナテ	ナテ	黒色砂粒		継ぎ目あり。
30	107	25号竪穴建物	S94	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	33+	-	浅黄橙(10YR8/4)	ナテ	ナテ	1~2mm大の長石		
30	108	25号竪穴建物	S94	-	土師器	甕	口縁~胴部	(19.6)	84+	-	褐灰(7.5YR4/1)	ナテ	ナテ	黒色砂粒		
30	109	25号竪穴建物	S94	-	弥生土器	甕	口縁一部	(25.6)	23+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナテ	ナテ	黒色砂粒		
30	110	26号竪穴建物	S93	-	弥生土器	鉢	口縁一部	-	24+	-	にぶい黄(2.5Y6/4)	ナテ	ナテ	白・黒色砂粒		
30	111	26号竪穴建物	S93	-	弥生土器	甕	胴部一部	-	10.9+	-	橙(2.5YR6/6)	ナテ	ナテ	白・黒色砂粒		
33	114	29号竪穴建物	S303	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.2+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	ナテ	ナテ	角閃石		継ぎ目あり。
36	115	34号竪穴建物	S298	-	弥生土器	高坏?	口縁一部	(24.6)	37+	-	にぶい橙(7.5YR5/4)	ナテ	ナテ	角閃石		
36	116	34号竪穴建物	S298	-	弥生土器	甕	脚部一部	-	38+	(6.2)	にぶい褐(7.5YR6/3)	ナテ	ナテ	角閃石		
36	117	35号竪穴建物	S297	-	弥生土器	甕	口縁一部	(19.5)	27+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナテ	ナテ	黒色砂粒、角閃石		若干歪みあり。

表4 新南都遺跡群10次 出土土器観察表(4)

補図 番号	報告 出土地点	出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)			色 調		調 整		胎土	備考
							口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面		
36	118 35号竪穴建物	S297	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.0+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナ	ナ	良	2~3mm大の白色粒
36	119 35号竪穴建物	S297	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.3+	-	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	ナ	ナ	良好	1mm大の雲母
36	120 35号竪穴建物	S297	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.8+	-	にぶい橙(7.5YR7/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	ナ	ナ	良	黒色砂粒
36	121 35号竪穴建物	S297	-	弥生土器	甕	口縁~胴部	(17.4)	4.9+	-	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	ナ	ナ	良	白・黒色砂粒
36	122 35号竪穴建物	S297	No.12	弥生土器	壺	胴部一部	(19.2)	29.4	8.1	橙(5YR6/6.7.5YR7/6)	橙(5YR7/6)	ナ	ナ	良	1~1.5mmの砂粒、雲母、角閃石
36	123 35号竪穴建物	S297	-	弥生土器	壺	ほぼ完形	23.2	38.2	4.9	浅黄橙(10YR8/3)	明黄褐(10YR7/6)	ナ	ナ	良	1mm以下の砂粒、雲母、角閃石
37	124 35号竪穴建物	S297	No.13・18	弥生土器	壺	底部~胴部	-	12.0+	8.0	浅黄(2.5YR7/4)	浅黄(2.5Y7/3)	ナ	ナ	良好	1mm大の砂粒、雲母、角閃石、石英
37	125 35号竪穴建物	S297	-	弥生土器	甕?	胴部	-	15.6+	-	黒(7.5YR2/1)	オリープ褐(2.5Y4/3)	ナ	ナ	良好	角閃石、石英
37	126 35号竪穴建物	S297	No.9	弥生土器	甕	3/4	-	21.8+	-	明黄褐(10YR6/6)	黒褐(2.5Y3/1)	ナ	ナ	良	白・黒色砂粒
39	130 36号竪穴建物	S105	No.7	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.2+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	明黄褐(10YR7/6)	ナ	ナ	良好	長石、石英、雲母
39	131 36号竪穴建物	S105	No.4	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.5+	-	浅黄(2.5Y7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナ	ナ	良好	長石、石英、角閃石
39	132 36号竪穴建物	S105	No.8	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.1+	-	浅黄橙(10YR8/4)	淡黄(2.5Y8/3)	ナ	ナ	良好	長石、石英、雲母
39	133 36号竪穴建物	S105	No.3	弥生土器	甕	口縁~胴部	-	7.2+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナ	ナ	良	2mm大の白色粒
39	134 36号竪穴建物	S105	-	弥生土器	甕	口縁~胴部	(9.5)	9.6+	-	にぶい黄褐(10YR5/4)	にぶ黄褐(10YR5/4)	ナ	ナ	良	細かい黒・茶色砂粒
39	135 36号竪穴建物	S105	No.1	弥生土器	壺	底部~胴部	-	14.9+	9.2	にぶい褐(7.5YR5/3)	にぶい褐(7.5YR6/3)	ナ	ナ	良	黒色砂粒、褐色粒
39	137 37号竪穴建物	S104	-	弥生土器	甕	脚部	-	3.8+	5.8	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶ黄橙(10YR6/3)	ナ	ナ	良	黒・白色砂粒
39	138 38号竪穴建物	S346	No.5	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.5+	-	浅黄(2.5Y7/3)	浅黄(2.5Y7/3)	ナ	ナ	良好	黒・褐色粒、角閃石、石英
39	139 38号竪穴建物	S346	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.7+	-	浅黄(2.5Y7/4)	にぶい黄(2.5Y6/4)	ナ	ナ	良好	角閃石、石英
39	140 38号竪穴建物	S346	-	弥生土器	甕	口縁一部	(21.5)	5.6+	-	灰(5Y5/1)	にぶい黄(2.5Y6/3)	ナ	ナ	良	石英、角閃石、白色粒
39	141 38号竪穴建物	S346	-	弥生土器	甕	1/4	(19.6)	6.1+	-	明黄褐(10YR7/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	ナ	ナ	良	黒色砂粒、褐色の石、角閃石
40	142 38号竪穴建物	S346	No.6	弥生土器	甕	脚部一部	-	3.8+	(6.3)	黄褐(2.5Y5/3)	にぶ黄褐(10YR5/4)	ナ	ナ	良	白色砂粒
40	143 38号竪穴建物	S346	No.1	弥生土器	甕	脚部一部	-	5.1+	7.0	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄(2.5Y7/4)	ナ	ナ	良好	1mm大の角閃石
40	144 38号竪穴建物	S346	No.7	弥生土器	甕	脚部	-	6.5+	5.0	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナ	ナ	良好	1~3mm大の白色粒
40	145 38号竪穴建物	S346	-	弥生土器	鉢	1/3	(18.2)	11.9	(10.4)	赤橙(10R6/6)	赤橙(10R6/6)	ナ	ナ	良好	1mm大の白色砂粒、角閃石、雲母
40	146 38号竪穴建物	S346	-	弥生土器	壺	口縁~底部	(18.4)	24.4	9.0	浅黄橙(7.5YR8/4)	にぶい橙(7.5YR8/4)	ナ	ナ	良	1mm以下の砂粒、角閃石、雲母
40	147 38号竪穴建物	S346	No.3	弥生土器	壺	胴部~底部	-	16.9+	5.6	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	ナ	ナ	良	1mm以下の砂粒、雲母
42	150 39号竪穴建物	S306	-	弥生土器	高杯	口縁一部	(21.4)	3.4+	-	橙(5YR6/6)	赤(10R5/6)	ナ	ナ	良	黒色砂粒、角閃石
42	151 41号竪穴建物	S347	-	弥生土器	壺?	口縁一部	(14.4)	2.4+	-	橙(7.5YR7/6)	明黄褐(10YR6/6)	ナ	ナ	良	黒色砂粒
44	153 42号竪穴建物	S102	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.7+	-	灰黄褐(10YR6/2)	灰黄褐(10YR5/2)	ナ	ナ	良好	外面にキズあり。

表5 新南部遺跡群10次 出土土器観察表(5)

挿図 番号	報告	出土地点	出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)		色 調		調 整		焼成	胎土	備考
								口径	器高	底径	外面	内面	外面			
44	155	44号竪穴建物	S316	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	-	にぶい、黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/3)	ナナ	良	黒色砂粒、角閃石	
44	156	44号竪穴建物	S316	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	-	にぶい、黄橙(10YR6/3)	にぶ黄橙(10YR6/3)	ナナ、暗文	良	黒色砂粒、石英	
44	157	44号竪穴建物	S316	埋土	-	弥生土器	甕	脚部一部	-	(6.7)	にぶい、黄橙(10YR7/4)	にぶい、黄(2.5Y6/3)	ハナメ、ナナ	良好	1mm大の雲母	
45	159	46号竪穴建物	S146	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	-	橙(7.5YR6/6)	明黄褐(10YR7/6)	ナナ、ハナカキ	良	1~2mmの白色砂粒	
47	161	47号竪穴建物	S68	埋土	No.3	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.4+	にぶい、黄橙(10YR5/3)	にぶ黄橙(10YR7/3)	ナナ	良	黒色砂粒	
47	162	47号竪穴建物	S68	埋土	No.3	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.9+	浅黄橙(10YR8/3.8/9)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナナ	良	黒色砂粒、角閃石	
47	163	47号竪穴建物	S68	埋土	No.1	弥生土器	甕	口縁~胴部	(24.5)	5.2+	浅黄橙(10YR8/3)	にぶ黄橙(10YR7/2)	ナナ	良	白、黒、褐色砂粒、白色	
47	164	47号竪穴建物	S68	埋土	No.11	弥生土器	甕	口縁一部	(23.4)	5.5+	浅黄橙(10YR8/3.8/8)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナナ、ハナメ	良	白色砂粒、角閃石	
47	165	47号竪穴建物	S68	埋1	-	弥生土器	甕	1/6	(21.4)	6.1+	にぶい、橙(7.5YR6/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	ナナ、ハナメ	良	白、黒色砂粒、石	
47	166	47号竪穴建物	S68	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	(22.5)	3.6+	黒褐(10YR3/2)	にぶ黄橙(10YR6/3)	ナナ	良	黒色砂粒	外面一部にスス付着か?
47	167	47号竪穴建物	S68	埋土	No.10	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.4+	浅黄橙(10YR8/3.8/10)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナナ、突帯	良	角閃石	
47	168	47号竪穴建物	S68	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	7.0+	にぶい、黄橙(10YR6/4)	明黄褐(2.5Y7/6)	ナナ	良好	1mm大の長石、角閃石、雲母、石英	
47	169	47号竪穴建物	S68	埋土	No.7・15	弥生土器	壺	口縁一部	(26.6)	8.8+	浅黄橙(10YR8/3.8/6)	橙(7.5YR7/6)	ナナ、ハナカキ	良	黒色砂粒、角閃石	
47	170	47号竪穴建物	S68	埋土	No.16	弥生土器	甕	口縁一部	-	7.6+	浅黄橙(10YR8/3)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナナ	良	黒色砂粒、角閃石	
47	171	47号竪穴建物	S68	埋1	-	弥生土器	甕	脚部	-	9.2+	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	ナナ、ハナメ	良	2mm大の長石	内面スス付着。
48	176	48号竪穴建物	S315	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	(23.5)	3.8+	灰白(10YR8/2)	にぶい、黄橙(10YR7/4)	ヨコナナ	良	黒色砂粒、角閃石	
48	177	48号竪穴建物	S315	埋土	-	弥生土器	甕	脚部	-	3.1+	にぶい、黄橙(10YR7/4)	-	工具ナナ、ナナ	良好	1mm大の長石	
48	178	49号竪穴建物	S341	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	(24.4)	3.5+	にぶい、橙(7.5YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナナ	良好	1mm大の黒色粒	
48	179	49号竪穴建物	S341	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	(22.2)	3.3+	浅黄橙(7.5YR8/6)	橙(7.5YR7/6)	ナナ	良	白、黒色砂粒	
48	180	49号竪穴建物	S341	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	(35.7)	5.7+	にぶい、黄橙(10YR7/3)	にぶ黄橙(10YR7/2)	ナナ	良	黒色砂粒	
48	181	49号竪穴建物	S341	埋1-2	No.9	弥生土器	甕	口縁一部	25.2	11.0+	暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	にぶい、黄(2.5YR6/3)	ナナ	良	雲母	S68,S315と接合。
48	182	49号竪穴建物	S341	埋1	-	弥生土器	壺	胴部~底部	-	14.7+	にぶい、黄橙(10YR7/3) 灰白(10YR7/1)	灰(N4/)、暗灰(N3/)	ナナ、ハナカキ?、工具ナナ	良	角閃石、雲母、微細な砂粒	S68,S315と接合。胴径(21.2)。
48	183	49号竪穴建物	S341	埋土	-	弥生土器	壺	胴部~底部	-	12.0+	浅黄橙(10YR8/3.8/12)	黒褐(10YR8/1)	ナナ	良好	角閃石、石英、黒色粒	S68,S315と接合。
48	184	49号竪穴建物	S341	埋土	No.31	弥生土器	器台	ほぼ完形	12.4	17.0	浅黄橙(10YR8/3)	橙(7.5YR7/6)	ナナ、ハナメ	良	1mm大の長石	S341と接合。
48	185	49号竪穴建物	S341	埋1	-	弥生土器	器台	1/2	-	15.6+	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	ナナ、強いナナ	良	黒色砂粒	S68,S315と接合。
53	196	55号竪穴建物	S64	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.8+	浅黄橙(10YR8/3)	灰オリーブ(5Y5/2)	ナナ、ハナメ	良	長石、角閃石、雲母、黒色粒	
53	197	56号竪穴建物	S63	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.0+	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	ナナ	良	黒、茶色砂粒	
53	198	56号竪穴建物	S63	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.0+	にぶい、黄橙(10YR6/3)	にぶ黄橙(10YR7/3)	ナナ	良	白、黒色砂粒	
53	199	56号竪穴建物	S63	埋1	-	弥生土器	壺	口縁一部	(23.2)	5.6+	にぶい、橙(5YR7/4)	橙(7.5YR6/6)	ナナ、ハナカキ、ナナ	良	黒色砂粒、石	
53	200	56号竪穴建物	S63	埋1	-	弥生土器	甕	口縁~胴部	(19.2)	6.7+	黄橙(7.5YR7/8)	橙(7.5YR6/6)	ナナ、ハナカキ、ナナ	良	黒色砂粒	



表6 新南部遺跡群10次 出土土器観察表(6)

掘削 番号	報告 出土地点	出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)		色 調		調 整		焼成	胎土	備考
							口径	器高	底径	外面	内面	外面			
53	56号竪穴建物	S63	-	弥生土器	壺	胸部~底部	-	31.7+	(8.6)	浅黄橙(10YR8/3.8/4)	浅黄橙(10YR8/3)	ナ	ナ	石黄砂、0.5~1.5mm程度の砂粒、雲母、角閃石	スス?黒斑?
53	56号竪穴建物	S63	-	弥生土器	甕	脚部一部	-	7.9+	8.2	灰黄(2.5Y6/2)	-	-	-	1mm大の白・黒色粒	内面汚れが多く付着している。
55	57号竪穴建物	S172	No.4	弥生土器	甕	口縁一部	(27.6)	9.1+	-	浅黄(2.5Y7/4)	にぶい黄(2.5Y6/4)	ナ	ナ	1~2mm大の長石、白色粒、角閃石	胴径(27.2)。
55	57号竪穴建物	S172	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.4+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄(2.5Y6/3)	ナ	ナ	1mm大の雲母	
55	57号竪穴建物	S172	No.4・5・6	弥生土器	甕	1/2	(28.4)	9.2+	-	明黄褐(2.5Y7/6)	明黄褐(2.5Y7/6)	ナ	ナ	石英、長石	
56	59号竪穴建物	S61	-	弥生土器	甕	口縁~胴部	-	6.4+	-	にぶい橙(5YR7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	ヨコナ	ヨコナ	角閃石、石英	
59	61号竪穴建物	S57	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.3+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/3)	ナ	ナ	長石、角閃石、雲母、褐・黒色粒	
62	62号竪穴建物	S158	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.1+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	浅黄(2.5Y7/3)	ナ	ナ	長石、角閃石、黒色粒、褐色粒	内面指でかき出しか? 脚内面均整ではない。
62	62号竪穴建物	S158	No.38	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.7+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶ黄橙(10YR8/4)	ヨコナ	ナ	角閃石、長石、雲母、褐・黒色粒	
62	62号竪穴建物	S158	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	6.0+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナ	ナ	長石、角閃石、雲母、黒色粒	
62	62号竪穴建物	S158	No.1	弥生土器	壺	口縁~胴部	-	9.0+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナ	ナ	角閃石、長石、雲母、褐・黒色粒	
62	62号竪穴建物	S158	-	弥生土器	甕	口縁一部	(34.0)	8.7+	-	明黄褐(10YR6/6)	明黄褐(2.5Y6/6)	ナ	ナ	1mm大の白色粒、雲母	
62	62号竪穴建物	S158	-	弥生土器	甕	脚部	-	5.0+	6.8	明黄褐(10YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	ナ	ナ	角閃石、石英、1mm大の白色粒	
62	63号竪穴建物	S58	-	弥生土器	甕	口縁一部	(24.0)	5.2+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナ	ナ	灰・黒色砂粒	
62	63号竪穴建物	S58	-	弥生土器	甕	口縁~胴部	(25.7)	6.0+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶ黄橙(10YR7/3)	ナ	ナ	2mm大の黒色粒	内面黒斑か?
62	63号竪穴建物	S58	-	弥生土器	甕	口縁一部	(27.3)	9.5+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナ	ナ	長石、角閃石、雲母、黒色粒	
62	63号竪穴建物	S58	No.1	弥生土器	甕	口縁一部	(36.4)	10.7+	-	明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(2.5Y6/6)	ナ	ナ	灰色の鉱物、角閃石	外面にスス付着。
63	63号竪穴建物	S58	-	弥生土器	甕?	口縁~胴部	-	10.5+	-	黄褐(2.5Y5/3)	にぶい橙(7.5YR7/4)	ナ	ナ	角閃石、石英	
63	63号竪穴建物	S58	-	弥生土器	壺	口縁一部	(19.6)	3.3+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナ	ナ	角閃石、黒色粒	
63	63号竪穴建物	S58	-	弥生土器	甕	脚部	-	3.9+	7.2	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナ	ナ	黒色砂粒	
63	64号竪穴建物	S183	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.2+	-	にぶい黄(2.5Y6/3)	浅黄(2.5Y7/3)	ナ	ナ	長石、雲母、黒色粒、白色粒	
63	64号竪穴建物	S183	No.5	弥生土器	鉢	口縁一部	(19.4)	3.5+	-	黄灰(2.5Y4/1)	明黄褐(10YR6/6)	ナ	ナ	白・黒色砂粒	
63	64号竪穴建物	S183	No.4	弥生土器	甕	口縁~胴部	-	10.6+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/3)	ナ	ナ	長石、角閃石、雲母、黒・褐色粒	
64	65号竪穴建物	S227	No.4	弥生土器	甕	口縁一部	(21.6)	4.4+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR7/3)	ナ	ナ	白・黒色砂粒、角閃石	
64	65号竪穴建物	S227	No.6	弥生土器	甕	口縁一部	(23.6)	4.8+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	ナ	ナ	白・黒色砂粒、褐色の石	
64	65号竪穴建物	S227	No.7	弥生土器	甕	口縁一部	(23.6)	3.6+	-	浅黄(2.5Y7/4)	にぶい黄(2.5Y6/4)	ナ	ナ	白・黒色砂粒、角閃石	
64	65号竪穴建物	S227	No.1	弥生土器	甕	口縁一部	(23.4)	5.7+	-	にぶい橙(7.5YR7/4)	橙(7.5YR6/6)	ナ	ナ	白・黒色砂粒、長石、雲母	
64	65号竪穴建物	S227	No.15	弥生土器	鉢	口縁一部	-	6.5+	-	明黄褐(10YR7/6)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナ	ナ	角閃石、石英	
64	66号竪穴建物	S60	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.2+	-	灰黄褐(10YR6/2)	にぶ黄橙(10YR6/3)	ナ	ナ	黒・白色砂粒、角閃石	

表7 新南部遺跡群10次 出土土器観察表(7)

挿図番号	報告	出土地点	出土層位	取上番号	器種	器形	残存度	法量(cm)		色調		調整		焼成	胎土	備考	
								口径	器高	底径	外面	内面	外面				内面
64	240	66号竪穴建物	S60	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.9+	-	灰黄褐(10YR4/2)	にぶい橙(7.5YR7/4)	ナ、ハケ	ナ	黒色砂粒、角閃石、雲母	S227と接合。
64	241	66号竪穴建物	S60	埋1	(32.4)	弥生土器	甕	口縁一部	-	8.0+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	浅黄(2.5Y7/3)	ナ、ハケ	ナ	長石、雲母、角閃石、黒・褐色粒	継ぎ目あり。
64	242	66号竪穴建物	S60	埋1	-	弥生土器	壺	口縁～頸部	-	6.5+	-	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナ、工具ナ、刻目	ハケ、シカキ、指頭	石英、角閃石、黒・褐色粒	
64	243	66号竪穴建物	S60	埋1	(23.4)	弥生土器	鉢	口縁一部	-	5.6+	-	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	ナ、暗文?	ナ	1mm大の角閃石、雲母	継ぎ目あり。
64	244	66号竪穴建物	S60	埋3	-	弥生土器	甕	脚部	(7.8)	7.0+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	ハケ、ナ	ナ	2mm大の長石、角閃石	
65	246	67号竪穴建物	S1	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.1+	-	橙(7.5YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	ナ	ナ	長石	
66	247	69号竪穴建物	S54	埋1	(35.4)	弥生土器	甕	口縁～胴部	-	12.5+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ナ、ハケ	ナ	白・黒色砂粒、石、角閃石	
66	248	69号竪穴建物	S54	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	6.2+	-	浅黄(2.5Y7/4)	にぶい黄(2.5Y6/4)	ナ、突帯	ハケ後ナ	良好 黒色粒	
66	249	69号竪穴建物	S54	埋1	(27.0)	弥生土器	鉢	口縁一部	-	7.0+	-	明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	ナ、シカキ	ハケ後ナ、シカキ?	良好 角閃石、雲母、石英	
68	250	73号竪穴建物	S182	埋土	-	弥生土器	甕	脚部	7.0	4.3+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ハケ、ナ	ナ	黒色砂粒	
68	251	73号竪穴建物	S182	埋土	-	弥生土器	甕	脚部	7.8	3.7+	-	明黄褐(10YR6/6)	にぶ黄橙(10YR6/4)	ハケ、ナ、黒斑	ナ	長石、石英、雲母、黒色粒	
69	252	74号竪穴建物	S309	埋2	(23.6)	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.5+	-	灰褐(7.5YR5/2)	灰褐(7.5YR5/2)	ナ	ナ	黒色砂粒、角閃石	
69	253	74号竪穴建物	S309	埋土	(21.4)	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.5+	-	にぶい橙(7.5YR7/3)	淡橙(5YR8/4)	ナ、突帯	ナ	良好 1mm大の雲母	全体的に磨滅しており調整不明瞭。
69	254	74号竪穴建物	S309	埋土	(25.0)	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.1+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	ナ	ナ	白・黒色砂粒	
69	255	74号竪穴建物	S309	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	5.9+	-	橙(5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	ナ、ナ後シカキ	ナ、シカキ?	良好 褐色粒、角閃石	
69	256	74号竪穴建物	S309	埋1	(18.6)	弥生土器	鉢	1/4	-	8.3+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ハケ、ナ	ハケ、ナ	白・黒色砂粒、角閃石	
72	258	75号竪穴建物	S4	カマド	(16.4)	土師器	壺	口縁～底部	-	28.8	-	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/3)	ハケ、ヨナ	ハケ、ヨナ	1~2mmの砂粒、茶褐色粒、雲母、石英	スス付着。胴径:(25.2)。
72	259	75号竪穴建物	S4	埋1	-	土師器	坏	胴部一部	-	2.4+	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	摩滅の為不明	ナ	良好 灰色粒	模倣坏。
72	260	75号竪穴建物	S4	埋土	16.2	土師器	高坏	4/5	(12.0)	12.7	-	黒褐(7.5YR3/2)	黒褐(7.5YR3/2)	シカキ、ケスリ、ナ	シカキ、ナ	黒色砂粒	黒色処理。
72	261	76号竪穴建物	S87	埋土	(13.8)	土師器	坏	口縁一部	-	3.5+	-	褐灰(7.5YR4/1)	褐灰(7.5YR5/1)	ナ後ハケ、ナ	ナ後ハケ	黒色粒、赤褐色粒、気泡	模倣坏。
72	262	76号竪穴建物	S87	埋1	(15.8)	土師器	坏	口縁～底部	-	3.4+	-	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	ナ、ハケ	ナ、ハケ	白・茶・黒色砂粒	模倣坏、磨滅で調整不明瞭。
72	263	76号竪穴建物	S87	埋1	(14.2)	土師器	坏	1/2	-	4.3	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナ、シカキ	ナ、シカキ	黒色粒、黒色粒、白色粒	
72	264	76号竪穴建物	S87	埋土	16.2	土師器	高坏?	3/4	-	5.0+	-	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	ナ、ケスリ後ナ	ハシカキ	黒色粒、赤褐色粒、白色粒	
72	265	76号竪穴建物	S87	埋土	-	土師器	高坏	脚部一部	-	3.8+	-	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)	ナ	ナ	白色粒	
72	266	76号竪穴建物	S87	埋土	(14.6)	土師器	甕	1/3	-	6.1+	-	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	ハケ、ナ	ハケ、ナ、条痕	白・黒色砂粒	
72	267	76号竪穴建物	S87	埋土	-	土師器	甕	口縁一部	-	7.0+	-	橙(7.5YR6/6)	橙(5YR6/6)	ナ、指頭	ナ、指頭	白色粒	
72	268	77号竪穴建物	S88	埋2	(28.4)	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.5+	-	にぶい橙(7.5YR7/4)	橙(7.5YR7/6)	ナ、ハケ	ナ、ハケ	良好 1~3mm大の雲母	
74	269	78号竪穴建物	S3	埋2	(21.6)	土師器	甕	口縁～胴部	-	13.5+	-	にぶい黄橙(10YR5/3)	にぶい黄(7.5YR5/4)	ハケ、ナ	ハケ	白色砂粒	
74	270	78号竪穴建物	S3	埋1	-	須臾器	蓋	天井部～口縁	-	2.7+	-	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	回転ナ	回転ナ	良好 黒色粒、砂粒	天井部に粘土の付着あり。

表8 新南部遺跡群10次 出土土器観察表(8)

捕図 番号	報告 出土地点	出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)		色 調		調 整		焼成	胎土	備考
							口径	器高	底径	外面	内面	外面			
74	78号竪穴建物	S3	-	須恵器	蓋	口縁一部	40+	-	にぶい黄橙(10YR5/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	回転ナデ、回転ハ ケスリ	良	茶色砂粒、白色砂粒		
74	78号竪穴建物	S3	No.1	土師器	甔	口縁~胴部	28.9+	-	橙(5YR7/6)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ハケム、ヨナデ	良	赤褐色粒、砂粒、雲母	スス付着?	
74	78号竪穴建物	S3	-	弥生土器	甔	把手	5.6+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	灰黄褐(10YR6/2)	指頭圧痕、ハケム	良好	1mm大の長石、角閃石		
75	79号竪穴建物	S90	-	土師器	高坏	口縁一部	3.1+	-	にぶい黄橙(7.5YR5/3)	にぶい褐(7.5YR6/3)	ナデ、ハラシキ	良	黒色砂粒、褐色粒	黒色処理。	
75	79号竪穴建物	S90	-	土師器	坏	口縁~胴部	3.0+	-	橙(7.5YR7/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	シキ	良好	精良。極少量の石英	横做坏。	
75	79号竪穴建物	S90	-	土師器	甔	把手	6.4+	-	橙(7.5YR7/6)	灰黄褐(10YR6/2)	オチエ後ナデ	良	2~6mm大の石		
76	80号竪穴建物	S156	-	土師器	甔	1/3	16.6+	-	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナデ、ハケム	良	白・黒色砂粒	継ぎ目あり。胴径:21.6。	
76	80号竪穴建物	S156	No.1	土師器	移動式 カマド	脚部一部	6.1+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	ハケム、ナデ	良	長石、雲母、褐色粒、黒 色粒	スス付着?成形後ついたと 思われるへこみあり。	
77	81号竪穴建物	S47	-	土師器	甔	1/3	18.8+	-	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	にぶい褐(7.5YR5/3)	ナデ、ハラケスリ	良	白・黒色砂粒	接合痕あり。胴径:(26.7)。	
79	11号土坑	E-4	-	弥生土器	甔	口縁~胴部	15.0+	-	黒褐(10YR3/2)	にぶ黄褐(10YR5/4)	ナデ、ススにより 不明	良	黒色砂粒	外面スス付着。胴径:(20.8)。	
80	O-P-20 埋1		-	縄文土器	深鉢	口縁一部	7.6+	-	にぶい黄橙(7.5YR6/3)	灰黄褐(10YR5/2)	ナデ、タタキ	良好	白色粒、褐色粒、角閃 石		
80	H-10 4層		-	縄文土器	深鉢	口縁一部	7.3+	-	灰黄褐(10YR5/2)	にぶ黄橙(10YR6/4)	条痕文	良	角閃石		
80	R-23 5層		-	縄文土器	深鉢	口縁一部	8.4+	-	灰褐(7.5YR6/2)	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	条痕文	良	白・黒色砂粒		
80	J-K-12-13 埋1		-	縄文土器	深鉢	口縁~胴部	23.2+	-	にぶい黄橙(10YR4/3)	褐灰(10YR4/1)	条痕文	良	角閃石	継ぎ目あり。	
80	O-P-20 埋1		-	縄文土器	深鉢	口縁~胴部	8.4+	-	黒褐(10YR3/2)	灰黄褐(10YR5/2)	ハラシキ	良	石英、金雲母、角閃石		
80	O-19 5層		-	縄文土器	深鉢	口縁一部	2.4+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	灰黄(2.5Y6/2)	条痕文	良	0.5mm大の白・黒色砂粒		
80	N-18 5層		-	縄文土器	深鉢	口縁一部	4.2+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	黒褐(10YR3/1)	条痕文	良	白色砂粒		
80	R-23 5層		-	縄文土器	深鉢	口縁一部	6.2+	-	赤黒(10R2/1)	黒(10YR2/1)	ハラシキ	良	黒・白色砂粒、角閃石	波状口縁。	
80	N-19 5層		-	縄文土器	深鉢	口縁~胴部	8.2+	-	黒褐(10YR3/2)	黒褐(10YR3/2)	沈線、ハラシキ	良	白色砂粒、角閃石	波状口縁。	
80	N-19 5層		-	縄文土器	深鉢	口縁~胴部	7.7+	-	黒褐(10YR3/2)	黒褐(10YR3/2)	ハラシキ	良	白色砂粒、角閃石	波状口縁。	
81	O-P-20 埋1		-	縄文土器	深鉢	口縁一部	5.9+	-	黒褐(10YR3/1)	灰黄褐(10YR4/2)	ハラシキ	良	角閃石		
81	O-P-20 埋1		-	縄文土器	浅鉢	口縁一部	6.0+	-	にぶい黄橙(10YR6/3)	褐灰(10YR4/1)	シキ	良	白・黒色砂粒、角閃石	波状口縁。	
81	R-23 5層		-	縄文土器	鉢	口縁一部	5.0+	-	灰黄褐(10YR5/2)	にぶ黄橙(10YR6/3)	ハラシキ	良	白・黒・褐色砂粒		
81	I-8 5層		-	縄文土器	深鉢	口縁一部	2.9+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	擬縄文、沈線、ミ カキ	良	黒色砂粒、角閃石	波状口縁か?	
81	R-T-24		-	縄文土器	深鉢	口縁一部	5.0+	-	橙(7.5YR6/6)	褐(7.5YR4/6)	押点文?、ハラシ キ	良	角閃石		
81	R-23 5層		-	縄文土器	深鉢	口縁一部	2.7+	-	黒褐(2.5Y3/1)	黒褐(2.5Y3/2)	沈線、ハラシキ	良	黒・白色砂粒、角閃石	波状口縁か?	
81	H-6 4層		-	縄文土器	深鉢	口縁一部	4.9+	-	褐灰(10YR4/1)	黒褐(10YR3/1)	シキ	良	白・黒色砂粒、長石	波状口縁か?	
81	H-6 4層		-	縄文土器	深鉢	胴部一部	2.1+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	ハラシキ、凝縄文	良	黒色砂粒、長石		
81	H-6 4層		-	縄文土器	深鉢	頭部一部	3.6+	-	黒褐(10YR3/2)	にぶ黄褐(10YR5/3)	シキ、条痕文後ナ デ	良	白・黒色砂粒、長石、角 閃石		
81	R-23 5層		-	縄文土器	鉢	口縁一部	2.4+	-	にぶい黄橙(10YR4/3)	にぶ黄褐(10YR5/4)	シキ、沈線文、凝 縄文	良	白・黒色砂粒	波状口縁。	

表9 新南部遺跡群10次 出土土器観察表(9)

挿図 番号	報告 出土地点	出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)		色 調		調 整		焼成	胎土	備考
							口径	底径	外面	内面	外面	内面			
81	R-23 5層		-	縄文土器	鉢	口縁一部	-	1.9+	-	暗赤灰(2.5YR3/1)	赤黒(2.5YR2/1)	刃先、沈線、凝縄 跡、沈線	良	黒・白色砂粒、角閃石	
81	EF-8-9		-	縄文土器	鉢	口縁一部	-	2.7+	-	にぶい黄褐色(10YR6/4)	にぶ黄褐色(10YR6/4)	跡、列点文、沈 線	良	角閃石	
81	H-6 4層		-	縄文土器	鉢	胴部一部	-	2.3+	-	黄灰(2.5Y4/1)	暗灰黄(2.5Y4/2)	跡、凝縄文	良	白・黒色砂粒、長石、角 閃石	
81	O-P-20 埋1		-	縄文土器	鉢	胴部一部	-	3.4+	-	浅黄(2.5Y7/4)	にぶ黄褐色(10YR7/4)	跡	良	白・黒色砂粒、角閃石	
81	E-5 5層		-	縄文土器	鉢	胴部一部	-	6.9+	-	にぶい黄褐色(10YR5/3)	にぶ黄褐色(10YR6/3)	条痕文、跡	良	石英、白色粒、角閃石	
81	G-11-12		-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	6.4+	-	にぶい黄褐色(10YR6/4)	にぶ黄褐色(10YR5/3)	列目、指頭圧痕、 跡	良	角閃石	
81	N-18-19 埋2		-	縄文土器	深鉢	胴部一部	-	8.1+	-	にぶい黄褐色(10YR5/3)	にぶ黄褐色(10YR6/3)	条痕文、突帯	良	白・黒色砂粒、角閃石	
81	DE-8 埋1		-	縄文土器	鉢	口縁一部	-	4.5+	-	黒褐(10YR3/1)	にぶい黄(10YR5/4)	条痕文	良	黒色砂粒	縄文突帯、端部にC字瓜形 文。
81	E-8		-	縄文土器	鉢	口縁一部	-	6.0+	-	にぶい黄褐色(10YR7/4)	暗灰黄(2.5YR4/2)	縄文、突帯、瓜形 文	良	白・黒色砂粒	
81	O-19 5層		-	縄文土器	鉢	底部	-	2.4+	6.4	にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶい黄(2.5Y6/3)	へろカキ	良好	1mm大の白・黒色粒、角 閃石	
81	O-P-20 埋1		-	縄文土器	鉢	底部一部	-	2.5+	(6.8)	にぶい橙(7.5YR6/4)	灰黄褐(7.5YR5/2)	跡、カキ	良好	角閃石、石英	底部にへろカキあり。
81	O-P-20 埋1		-	縄文土器	鉢	底部一部	-	2.4+	5.4	にぶい黄褐色(10YR5/3)	灰黄褐(10YR5/2)	跡、カキ	良	石英、雲母、赤褐色粒	
81	N-18 5層		-	縄文土器	鉢	底部一部	-	2.5+	-	にぶい黄褐色(10YR6/4)	黒褐(10YR3/1)	へろカキ、跡	良	黒色砂粒、角閃石	
81	R-T-24		-	縄文土器	鉢	底部	-	1.8+	6.2	にぶい橙(5YR6/4)	灰黄褐(10YR5/2)	へろカキ	良	黒色砂粒、角閃石	
81	Q-23		-	縄文土器	浅鉢	底部	-	2.0+	(5.2)	にぶい橙(7.5YR6/4)	黒褐(7.5YR3/1)	跡	良	雲母、石英、長石、角閃 石	
81	O-19 5層		-	縄文土器	鉢	底部一部	-	4.4+	4.9	にぶい黄褐色(10YR7/4)	灰黄(2.5Y6/2)	へろカキ	良	1mm大の白・黒色粒、輝 石?	全体的に黒斑状。
81	G-5-4		No.1	縄文土器	高坏	底部	-	4.6+	8.4	にぶい黄褐色(10YR7/4)	灰黄(2.5Y6/2)	条痕文	良	長石、角閃石、雲母、 黒・褐色粒	外面は粗い。底部は跡、施 しの様に滑らかである。
81	Q-R-23		-	縄文土器	鉢?	底部一部	-	3.7+	-	にぶい橙(7.5YR5/4)	明赤褐(5YR5/6)	跡、後カキ	良	雲母、石英、黒色粒、角 閃石	底部が5角形の可能性あり。
82	K-L-13-14		-	縄文土器	高坏	底部	-	7.5+	-	にぶい黄褐色(10YR6/4)	黒褐(7.5YR3/1)	跡、へろカキ	良	雲母、1mmの砂粒、角閃 石	
82	K-12 埋1		-	縄文土器	注口 土器	注口部	-	5.4+	-	褐灰(10YR4/1)	-	カキ、跡	良好	長石、角閃石、黒色粒、 褐色粒	
82	R-S-23-34		-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.1+	-	浅黄(2.5Y7/4)	にぶ黄褐色(7.5Y7/5/4)	跡	良好	角閃石、2mm大白色粒、 褐色粒	
82	I-J-8 埋2		-	弥生土器	甕	口縁一部	(24.4)	4.9+	-	にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶ黄褐色(10YR7/4)	跡	良好	角閃石、雲母、石英	
82	P-19,Q-R-21 埋1		-	弥生土器	甕	口縁一部	(24.3)	4.4+	-	にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶ黄褐色(10YR6/4)	跡	良	黒色砂粒	
82	I-J-8 埋2		-	弥生土器	甕	口縁一部	(23.4)	3.5+	-	にぶい黄褐色(10YR7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	跡	良好	雲母?、長石	
82	I-8		-	弥生土器	甕	1/4	(25.4)	13.3+	-	にぶい黄褐色(10YR6/4)	にぶ黄褐色(10YR7/3)	跡、へろカキ、工具 跡	良	黒・褐色砂粒、石英	
82	I-J-8 埋2		-	弥生土器	甕	口縁~胴部	(25.4)	11.1+	-	明黄褐(10YR7/6)	橙(7.5YR6/6)	跡、へろカキ	良	白・黒色砂粒、角閃石	
83	H-7-I-12		No.8	弥生土器	甕	口縁~胴部	(25.4)	14.1+	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶ黄褐色(10YR6/3)	跡、沈線文、へろ カキ	良	黒色砂粒	
83	I-J-8 埋2		-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.6+	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	跡、突帯	良	黒・白色砂粒、角閃石、 雲母	

表10 新南部遺跡群10次 出土土器観察表(10)

挿図 番号	報告	出土地点	出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)			色 調		調 整		焼成	胎土	備考
								口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
83	333	G・H-7-8J-12J-10・11	-	-	弥生土器	甕	口縁一部	31.2	8.7+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	ナデ	ナデ	良	雲母	胴径(30.2)。
83	334	D-4埋1	-	-	弥生土器	甕	脚部	-	4.3+	6.9	明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	ナデ、ナデ	不明	良好	角閃石、石英	
83	335	H・I-8J-11埋1	-	-	弥生土器	壺	口縁一部	(21.3)	7.4+	-	黄橙(2.5Y6/4)	にぶい黄(2.5Y6/4)	ナデ、暗文、刻目	ナデ	良好	1mm大の雲母	
83	336	L・M-16.O・P-18・19	-	-	弥生土器	壺	2/5	-	26.0+	(3.4)	橙(7.5YR7/6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナデ、暗文、ミカキ	ナデ	良	白・黒色砂粒、角閃石	胴径(21.8)。
83	337	C・D-7.G-7	-	-	弥生土器	壺	口縁～胴部	(18.2)	17.2+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	橙(5YR6/6)	ナデ、ナデ	ナデ、ナデ	良好	5mm大の長石	
84	338	D-7	-	-	土師器	蓋	1/3	(13.5)	4.4+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	ミカキ	ミカキ	良好	角閃石	黒色処理。
84	339	C-7	-	-	土師器	蓋	1/3	(16.0)	4.1+	-	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	にぶい黄(7.5YR5/4)	ミカキ	ミカキ	良	雲母	模倣蓋か？
84	340	F・G-5.4	-	-	須恵器	坏身	口縁一部	12.5	4.0	-	灰(5Y6/1)	灰黄(2.5Y6/2)	回転ナデ、回転ナデ	回転ナデ	良	1mm大の黒色粒	
84	341	E-8	-	-	須恵器	坏身	口縁一部	11.5	3.8+	-	灰オリーブ(5Y5/2)	灰オリーブ(5Y5/2)	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	良	1mm大の白色粒、黒色粒	

※カッコ書きは復元値、数値の後に+付くものは残存値

表11 新南部遺跡群10次 出土土製品観察表

挿図 番号	報告	出土地点	出土 層位	取上 番号	器種	残存度	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	径 cm	色 調		調 整	焼成	胎土	備考
											調整	調整				
6	9	1号竪穴建物	S351	-	紡錘車	ほぼ完形	5.1	5.2	-	-	表:黒褐(2.5Y3/1) 裏:明黄褐(2.5Y7/6)	表:赤キ 裏:ナデ	良好	良好	角閃石、長石	孔径:1.0cm。土器の転用。
21	79	17号竪穴建物	S377	-	土錘	3/4	3.4	1.3	1.2	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	ナデ	良	良	黒色粒、褐色粒、白色粒	
74	272	78号竪穴建物	S3	-	土製支脚	-	-	11.1+	-	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	赤キ	良好	良好	角閃石、気泡	
74	273	78号竪穴建物	S3	-	土製支脚	-	9.3+	-	-	-	外面:橙(5YR6/6) 内面:にぶい橙(7.5YR6/4)	外面:ナデ、赤キ 内面:赤キ	良	良	灰・白色砂粒、5mm程の礫	
74	274	78号竪穴建物	S3	-	土製支脚	-	-	14.4+	-	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	工具痕	良	良	白色砂粒、黒色砂粒、角閃石	
84	342	Q-20G 4層	-	-	土錘	ほぼ完形	7.1	-	-	2.05~ 2.2	にぶい黄橙(10YR6/4)	ナデ	良好	良好	精良	孔径:0.7cm。左端欠け。

※カッコ書きは復元値、数値の後に+付くものは残存値

表12 新南部遺跡群10次 出土石器観察表 (1)

捕回 番号	報番	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	長さ		幅	厚さ		重量	材質	備考
		報告	調査時				cm	cm		cm	g			
6	10	1号竪穴建物	S351	埋1	-	打製石鏃	2.80	1.95+	0.60	1.65		安山岩		
6	11	1号竪穴建物	S351	埋2	-	打製石鏃	1.75	1.85	0.35	0.70		黒曜石		
6	12	1号竪穴建物	S351	埋2	-	打製石鏃	1.50+	1.60	0.35	0.60		黒曜石	姫島産。	
6	13	1号竪穴建物	S351	埋2	-	打製石鏃	1.20+	1.70	0.30+	0.61		黒曜石		
6	14	1号竪穴建物	S351	埋土	-	磨製石斧	13.80	6.70	3.20	434.41		硬質砂岩		
6	15	1号竪穴建物	S351	埋1	-	打製石斧	10.55	4.75	1.50	69.89		輝石安山岩		
11	38	5号竪穴建物	S312	埋1	-	垂玉	2.25	0.90	0.50	1.41		蛇紋岩	孔径約0.2cm。	
11	39	5号竪穴建物	S312	埋1	No.2	打製石鏃	2.45	1.70	0.35	0.82		黒曜石	完形。	
11	40	5号竪穴建物	S312	埋土	No.4	磨石	15.60	9.90	5.10	1437.50		安山岩		
12	41	5号竪穴建物	S312	埋土	No.3	台石	20.10	20.20	6.20	4179.80		安山岩		
12	42	5号竪穴建物	S312	埋土	No.5	敲石	12.60	6.90	3.40	459.46		安山岩		
13	48	6号竪穴建物	S340	埋土	No.19	石匙	5.70	6.55	0.70	24.15		安山岩		
16	52	8号竪穴建物	S97	埋1	-	打製石斧	10.25	7.25	1.80	116.68		角閃石安山岩		
16	57	10号竪穴建物	S99	埋土	No.1	打製石斧	11.60+	6.50	2.20	149.85		流紋岩質安山岩		
18	70	14号竪穴建物	S323	埋土	-	打製石鏃	1.80+	1.60+	0.35	0.72		安山岩		
21	76	16号竪穴建物	S376	埋土	No.2	敲石?	6.4+	6.10	2.50	164.18		安山岩		
21	80	17号竪穴建物	S377	P4	-	スクレイパー	2.95	4.30	1.30	15.50		安山岩		
24	91	19号竪穴建物	S318	埋2	-	打製石鏃	1.55	1.10	0.30	0.34		黒曜石		
24	92	19号竪穴建物	S318	埋3	-	打製石鏃	2.25+	1.40	0.40	1.19		黒曜石		
24	93	19号竪穴建物	S318	埋1	-	打製石鏃	2.80+	2.10+	0.20	1.32		綠色片岩		
25	100	20号竪穴建物	S321	埋土	No.1	石包丁	4.20	11.00+	0.70	45.30		粘板岩		
31	112	26号竪穴建物	S93	埋1	-	使用痕剥片	2.25+	3.25+	0.75	3.75		安山岩		
31	113	26号竪穴建物	S93	埋1	-	打製石鏃	2.65+	1.60	0.35	0.96		黒曜石		
37	127	35号竪穴建物	S297	埋土	-	石包丁	16.60	3.90	0.4~0.5	53.50		安山岩	孔径:0.4~0.5cm。	
37	128	35号竪穴建物	S297	埋土	P-1	磨製石鏃	4.15	2.35	0.20	2.77		蛇紋岩?	完形。	
37	129	35号竪穴建物	S297	埋土	P-18	打製石鏃	1.60+	1.10	0.30	0.32		黒曜石	針尾産。	
39	136	36号竪穴建物	S105	埋1	No.2	砥石	11.20	8.80	1.4~5.3	598.80		砂岩		

表13 新南部遺跡群10次 出土石器観察表(2)

插图 番号	報番	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	長さ			厚さ	重量	材質	備考
		報告	調査時				cm	cm	cm				
40	148	38号竪穴建物	S346	埋土	No.2	敲石	12.00	6.50	3.60	401.51	安山岩		
40	149	38号竪穴建物	S346	埋土	No.8	打製石斧	8.35+	7.20+	2.20	137.21	輝石安山岩		
42	152	41号竪穴建物	S347	埋土	-	磨石	15.20	6.00	4.20	680.50	安山岩		
44	154	42号竪穴建物	S102	埋1	-	砥石	8.50	5.10	2.30	151.90	砂岩		
44	158	44号竪穴建物	S316	埋1	-	打製石斧	9.50+	5.75+	2.40	125.99	輝石安山岩		
45	160	46号竪穴建物	S146	埋1	-	打製石鏃	1.95+	1.80	0.50	1.66	黒曜石		
47	172	47号竪穴建物	S68	埋土	-	磨石	12.60	8.70	2.90	649.90	安山岩	敲打痕あり。	
47	173	47号竪穴建物	S68	埋土	No.33	砥石	12.80	9.30	3.70	578.30	砂岩		
47	174	47号竪穴建物	S68	埋土	No.32	砥石	15.30	13.80	2.00	558.40	砂岩		
47	175	47号竪穴建物	S68	埋土	No.35	砥石	14.60	6.00	4.70	737.00	砂岩		
49	186	49号竪穴建物	S341	炉	-	打製石鏃	2.00+	1.20+	0.55	1.04	黒曜石		
49	187	49号竪穴建物	S341	埋2	-	打製石鏃	1.85+	1.65+	0.35	0.95	黒曜石		
49	188	49号竪穴建物	S341	東西Tr	-	打製石鏃	2.45	1.65	0.40	0.97	黒曜石	針尾産	
49	189	49号竪穴建物	S341	埋2	-	打製石鏃	3.30+	2.70	0.30	3.71	粘板岩		
49	190	49号竪穴建物	S341	埋2	-	磨石	11.40	9.90	3.70	776.50	輝石安山岩	側面・中央部、敲打痕あり。	
49	191	49号竪穴建物	S341	埋土	No.1	砥石	18.70	7.50	4.00	1103.90	砂岩		
49	192	49号竪穴建物	S341	埋1	-	砥石	7.90	6.30	4.10	178.60	砂岩		
49	193	49号竪穴建物	S341	埋土	No.4	砥石	6.40+	7.30+	1.90	116.72	砂岩		
49	194	49号竪穴建物	S341	埋土	No.2	砥石	12.00	12.40	4.50	1030.00	砂岩		
49	195	49号竪穴建物	S341	埋1	-	砥石	11.00	13.70	5.20	1120.40	砂岩		
53	203	56号竪穴建物	S63	東西ベルト 西側	-	打製石鏃	1.80+	1.15+	0.40	0.59	黒曜石		
53	204	56号竪穴建物	S63	埋土	No.5	石皿	21.20	15.50	4.00	2134.80	安山岩		
55	208	57号竪穴建物	S172	埋土	No.2	磨石	14.40	8.40	4.60	816.20	安山岩		
55	209	57号竪穴建物	S172	埋土	No.3	磨石	9.00	9.00	4.30	481.10	安山岩		
55	210	57号竪穴建物	S172	埋土	No.18	石皿	24.90	13.40	6.70	2852.00	安山岩		
58	212	60号竪穴建物	S10	埋土	No.1	台石	35.20	24.10	15.80	16050.00	安山岩		
62	219	62号竪穴建物	S158	埋土	-	石包丁	5.50	6.90+	0.60	31.99	砂岩		
63	228	63号竪穴建物	S58	埋1	-	打製石鏃	2.20+	1.75	0.30	0.84	黒曜石		

表14 新南部遺跡群10次 出土石器観察表 (3)

捕図 番号	報番	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	材質	備考
		報告	調査時									
63	229	63号竪穴建物	S58	埋土	-	磨製石斧	7.60+	6.00	3.80	238.76	砂岩	
63	233	64号竪穴建物	S183	埋土	No.1	打製石斧	6.85	6.40	1.80	77.17	輝石安山岩	
64	245	66号竪穴建物	S60	埋1	-	石包丁	3.90	11.60	0.80	60.10	粘板岩	
69	257	74号竪穴建物	S309	埋2	-	打製石鏃	2.65+	1.85	0.35	1.22	チャート	
79	284	11号土坑	E-4	埋1	-	砥石	4.50	4.00	2.70	106.11	石岩	携帯用。
84	343	R-24	5層		-	打製石鏃	2.20	1.45	0.35	0.65	黒曜石	
84	344	F-2	5層		-	打製石鏃	1.35	1.95	0.30	0.49	黒曜石	
84	345	F-4	4層		-	打製石鏃	1.75	1.85	0.30	0.65	チャート	
84	346	O-19			-	打製石鏃	1.75	0.85	0.50	0.48	黒曜石	姫島産。
84	347	T-25			-	打製石鏃	2.30	1.70	0.45	1.31	黒曜石	針尾産。
84	348	R-22			-	打製石鏃	2.45	1.80	0.50	1.13	黒曜石	
84	349	H-6	4層		-	打製石鏃	3.15	1.65	0.55	1.96	黒曜石	
84	350	O-P-19	埋4		-	打製石鏃	2.55	1.70	0.70	2.20	安山岩	
84	351	M・N-15	埋1		-	打製石鏃	2.70	1.75	0.35	1.21	黒曜石	
85	352	P-19	4層		-	石鏃	4.75	1.35	1.00	3.43	安山岩	
85	353	O-P-20	埋1		-	スクレイパー	2.10	2.30	0.85	5.19	安山岩	
85	354	M-18	5層		-	スクレイパー	8.10	3.85	1.25	29.39	安山岩	
85	355	J-9	4層		-	スクレイパー	7.60	2.65	1.65	33.14	安山岩	
85	356	-			-	スクレイパー	7.10	4.30	1.30	46.31	安山岩	
85	357	E-5	埋5		-	使用痕剥片	7.25+	5.05	1.45	40.19	安山岩	
85	358	I-8	埋1		-	スクレイパー	2.85	4.45	0.85	10.92	安山岩	
85	359	K-10			-	使用痕剥片	6.80	4.70	2.10	54.02	安山岩	
85	360		5層		-	尖頭器	8.90	4.40	2.10	78.77	安山岩	
86	361	O-20	5層		-	磨製石斧	7.60+	5.40+	2.70	10.8.30	蛇紋岩	
86	362	O-20	5層		-	磨製石斧	5.80+	3.00+	1.60	40.41	蛇紋岩?	再利用品?
86	363	J-13	5層		-	(局部)磨製石斧	9.20+	5.80+	1.80	117.60	輝石安山岩	
86	364	P-21	5層		-	磨製石斧	9.80+	7.10+	4.30	422.06	安山岩	
86	365	F-2	5層		-	打製石斧	13.60+	6.25	2.45	234.53	輝石安山岩	



表15 新南部遺跡群10次 出土石器観察表(4)

挿図 番号	報番	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	材質	備考
		報告	調査時									
86	366		E-5		-	打製石斧	11.80+	8.70	2.00	265.20	輝石安山岩	
86	367		O-19		-	打製石斧	11.10	4.40	1.60	64.65	輝石安山岩	
86	368		O-20 4層		-	打製石斧	9.65	4.20	1.85	67.08	輝石安山岩	
86	369		カケソ		-	打製石斧 (未製品)	10.60	4.90	1.50	86.89	安山岩	
86	370		P-22・23 埋1		-	打製石斧	11.15	4.95	1.30	62.19	綠色片岩	再利用品。
87	371		L-14		-	打製石斧	9.6+	6.60	1.40	110.73	安山岩	
87	372		T-25		-	打製石斧	5.60+	5.30+	2.10	76.08	輝石安山岩	
87	373		J-9 4層		-	打製石斧	7.70+	5.40+	1.60	54.23	輝石安山岩	
87	374		O-20 5層		-	円盤状石器	11.60	10.45	1.25	201.27	角閃石安山岩	
87	375		O-20 5層		-	円盤状石器	9.10	9.25	0.95	95.12	砂岩	
87	376		O-21 5層		-	円盤状石器	10.30	10.15	1.70	169.58	輝石安山岩	
87	377		D-6		-	磨石	18.30	7.10	5.80	1239.50	輝石安山岩	
87	378		O-P-20 埋1		-	磨石	10.80	9.80	5.00	821.90	輝石安山岩	
88	379		J-9 4層		-	石皿	13.30	9.60	3.60	642.70	安山岩	
88	380		J-12		No.1	石皿	30.10+	14.40+	12.00	7100.00	砂岩	
88	381		I-J-8 埋2		-	石皿	8.10	11.20	4.10	535.30	安山岩	
88	382		D-8G		-	砥石	4.50	4.40	2.10	49.62	無斑晶流紋岩	天草陶石。
88	383		I-8 埋1		-	砥石	6.90+	6.25+	3.60	167.20	砂岩	
88	384		R-22		-	砥石	17.20	8.30	5.00	553.80	泥岩	

※カッコ書きは復元値、数値の後に十付くものは残存値



## 第IV章 新南部遺跡群 11 次の調査

### 第1節 調査の概要 (第2図)

発掘調査区は、試掘調査で遺構・遺物が確認された敷地内に設定し、1区、2区とした。調査を進める中で、遺構の広がり調査区外に及ぶと判断し、1区の調査区を広げた。調査面積は、約430㎡(1区)、43㎡(2区)である。

調査対象地のI、II層(表土層)は重機(バックホー)を用いて除去し、調査区内に5m×5mのグリッドを設定した。西から東へアルファベット(A~I)、北から南へアラビア数字(1~6)をふり、両者を組み合わせることでグリッド名をつけた。人力による掘削作業は、遺物包含層の掘削後、遺構の検出作業を行った。

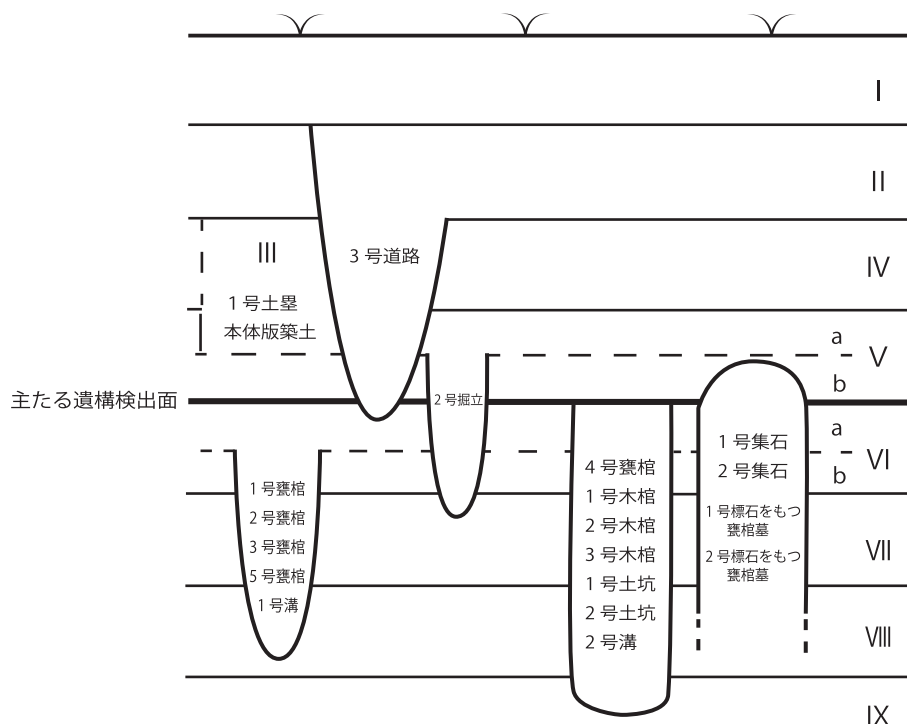
次に、検出した各遺構について、その性格を把握するため観察作業、断面図・平面図等の遺構実測図作成作業、写真撮影作業などの各記録作業を実施した。調査区全体を含む高所から遺構完掘状況及び遺跡周辺地形の写真撮影作業は、ヘリコプター機を用い実施した。

なお、4級基準点設置及びグリッド杭設置作業については、外部委託を行うことで、作業の効率化・迅速化を図った。平面直角座標は、世界測地系を使用した。調査区グリッド設計図は第2図に示す。

### 第2節 層序(第1図)

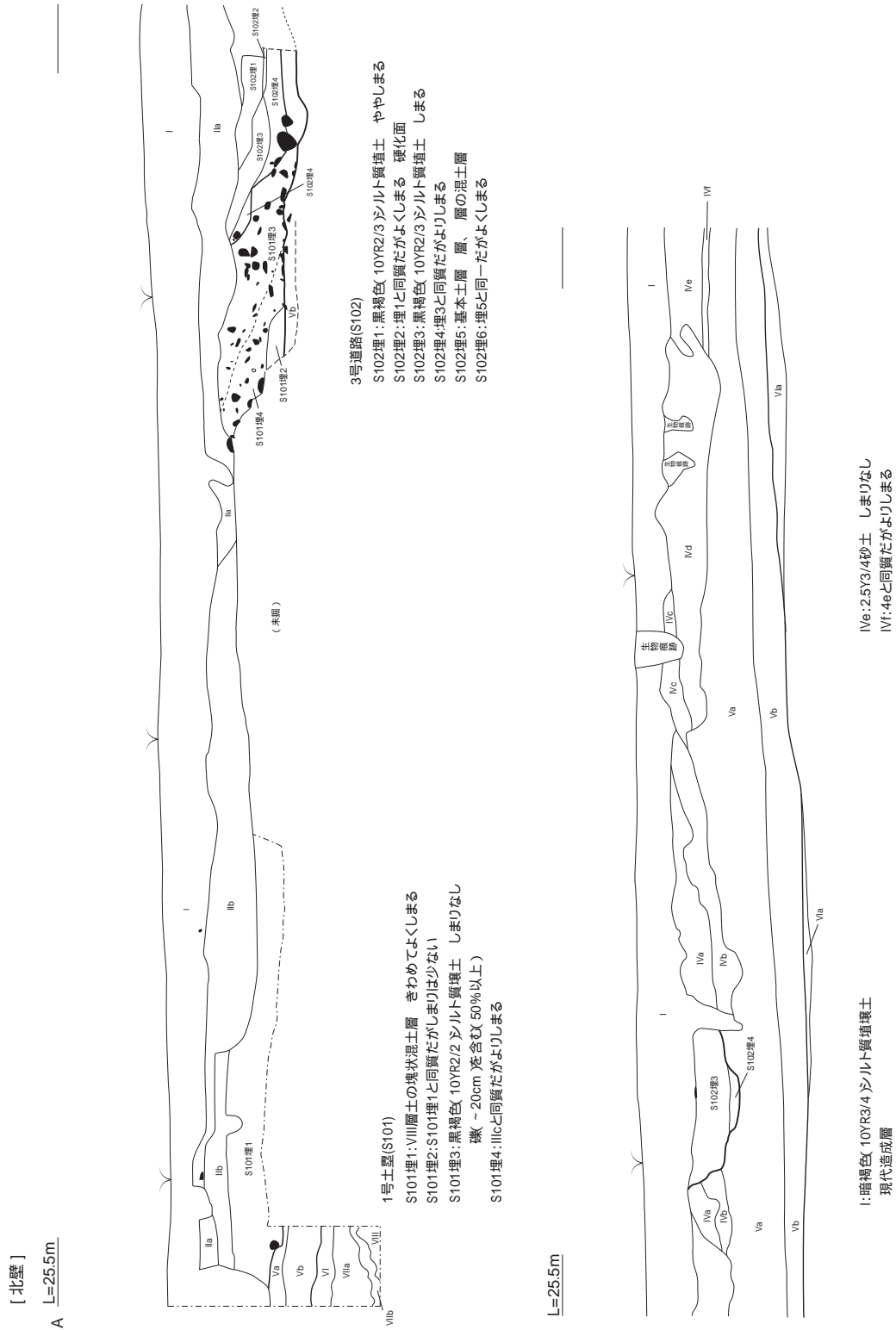
本遺跡の層序は第1図のとおりである。1区の調査区北壁と西壁の土層断面を、第3・4図に掲載している。なお、土色及び土性区分は標準土色帖に準ずる。断面図中の石類は、黒塗りで表記した。

- |                                   |  |
|-----------------------------------|--|
| I: 暗褐色(10YR3/4)シルト質埴土 現代造成土       | VIa: 暗褐色(10YR3/3)シルト質埴土 いわゆるアカホヤ2次堆積層  |
| II: 黒褐色(10YR2/3)シルト質埴土 近世~近代期包含層  | VIb: 暗褐色(10YR3/3)シルト質埴土 縄文早期および晩期遺物包含層 |
| IV: 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)河川堆積層(遺物伴わない) | VII: 黒褐色(10YR2/3)シルト質埴土 無遺物層           |
| Va: 黒褐色(10YR2/2)シルト質埴土            | VIII: 褐色(10YR4/4)重埴土 無遺物層              |
| Vb: 黒褐色(10YR2/3)シルト質埴土 V層とVI層の漸移層 | IX: オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質埴土 無遺物層           |

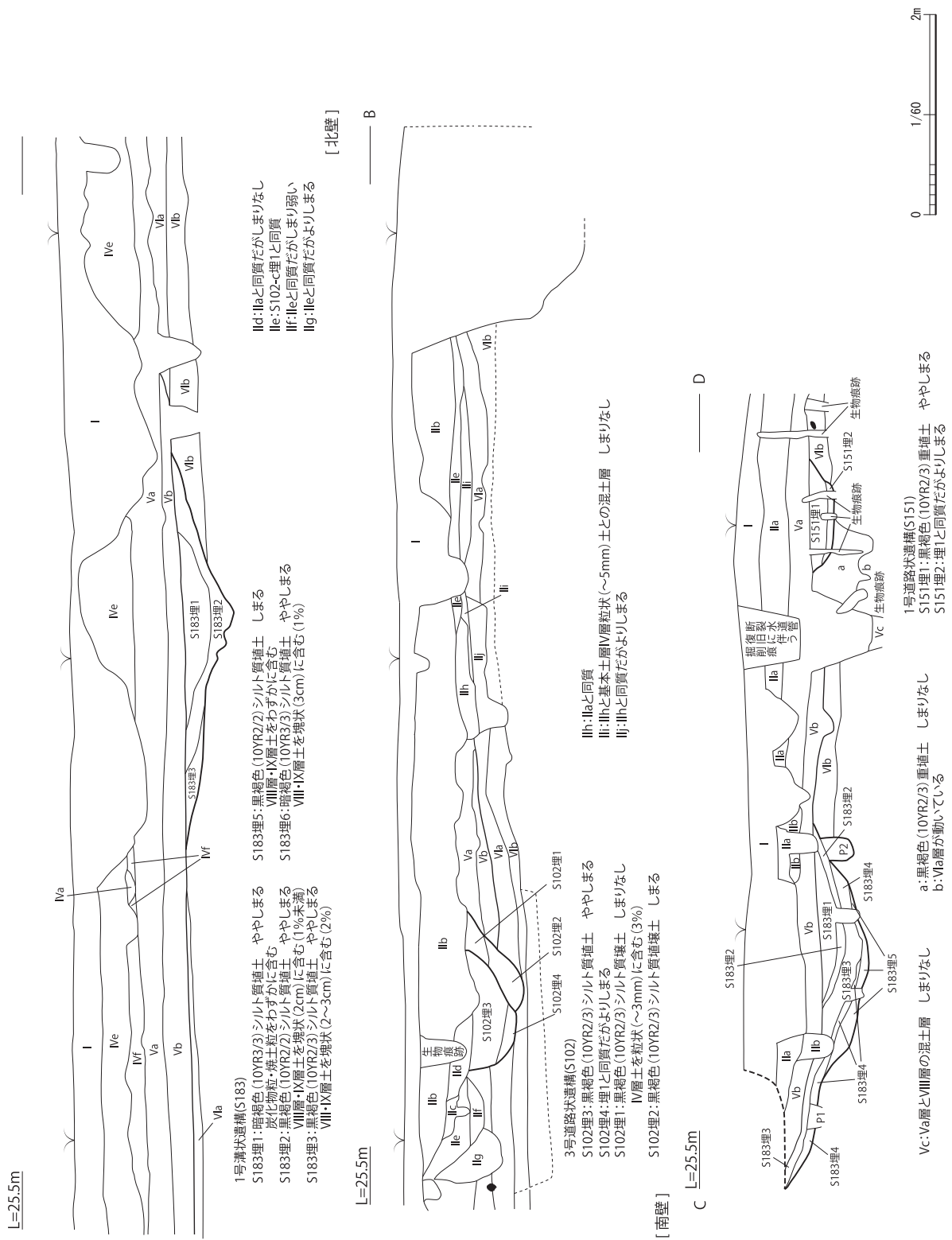


第1図 調査区基本土層及び主要遺構概念図





第3図 調査区北壁土層断面図



第4図 1区北壁及び南壁土層断面図

### 第3節 調査の成果

#### -弥生時代の遺構-(第5図)

今回の調査では、甕棺墓5基、木棺墓3基、標石をもつ甕棺墓2基、集石3基、溝状遺構1条、道路状遺構2条を検出した。

#### 甕棺墓

##### 1号甕棺墓【S109】(第6~8図、図版1・8・13)

1号甕棺墓は大型の合口甕棺墓で、E-3グリッドで確認された。長軸2.30m、短軸2.09mの楕円形のプランである。2段墓坑で西側の壁を斜めに掘り込み、甕棺を埋納している。検出面から墓坑床面まで深さは1.20mである。埋設軸はN-84°-Eで、埋納角度は約34度である。合口部には粘土で目張りがしてある。ほぼ完形の状態で出土し、甕棺内部は8割程度土が詰まっていた。内部からは骨粉を検出したが、ごくわずかなため部位等の判別はできなかった。

上甕4は汲田式の鉢形土器である。底部は平底で、口縁は内側に大きく張り出し、外傾する。口縁下に1条の三角突帯を貼付する。外面は全面ナデ調整である。下甕5は汲田式の甕形土器である。底部は平底で、口縁は内側に大きく張り出し、外傾する。胴部に三角突帯2条を貼付する。胴部は口縁下がややすぼまり、最大径は75.7cmで胴部上半にある。外面は全面ナデ調整である。

遺物は甕棺埋戻しの際の埋土から3点出土した。1~3は甕形土器の口縁部であり、口縁外側の断面が分厚い三角形で内側に張り出しを持たない。

##### 2号甕棺墓【S175】(第9~12図、図版1・2・9・13)

2号甕棺墓は大型の合口甕棺墓で、G-3、H-3グリッドで確認された。長軸3.47m、短軸2.90mで少しいびつであるが楕円形のプランを呈する。2段墓坑で東側の壁を斜めに掘り込み、甕棺を埋納している。埋設軸はN-113°-Wで、埋納角度は約36度である。出土状況は、土圧によって甕棺がややつぶれた状態で出土した。合口部は粘土で目張りがしてあり、甕の裏側にもめぐる。甕棺の内部は、ほぼ土が詰まった状態で何も検出なかった。

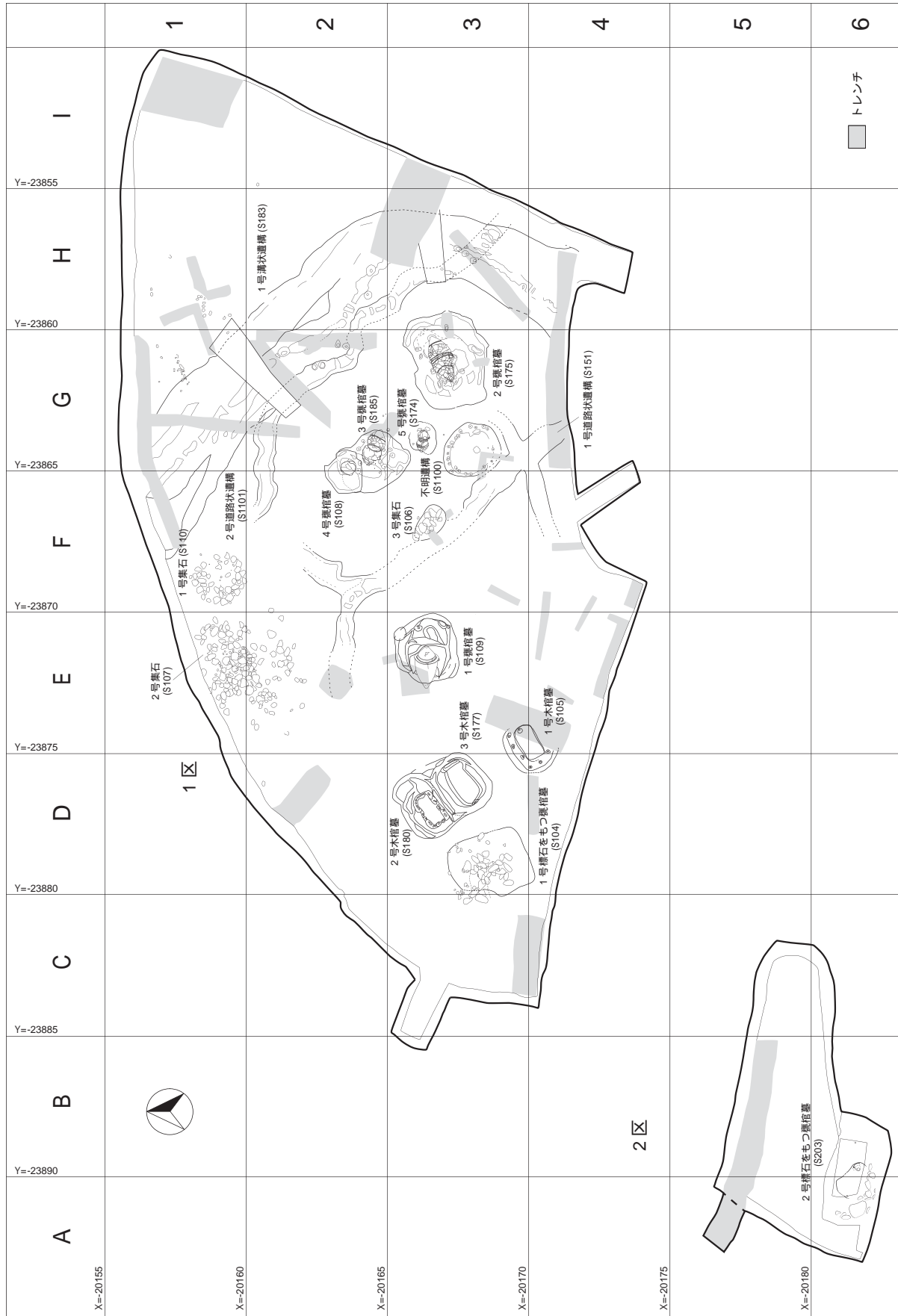
上甕6は汲田式の甕形土器である。底部は平底で、口縁は内側に大きく張り出し、外傾する。口縁下に2条、胴部に2条の三角突帯をめぐらす。外面は全面ナデ調整である。下甕7は汲田式の甕形土器である。底部は平底で、口縁は内側に大きく張り出し、外傾する。胴部に2条の三角突帯を貼付する。最大径は73.1cmで胴部上半にある。外面は全面ナデ調整である。

遺物は甕棺埋戻しの際の埋土から出土した。8は甕形土器の口縁部で口縁外側断面が分厚い三角形で、内側の張り出しはない。9は使用痕のある先端と基部に微細剥離が見られるチャート製の縦長剥片である。10は輝緑凝灰岩製の石核で上、下端を欠損する。

##### 3号甕棺墓【S185】(第13~17図、図版2・10)

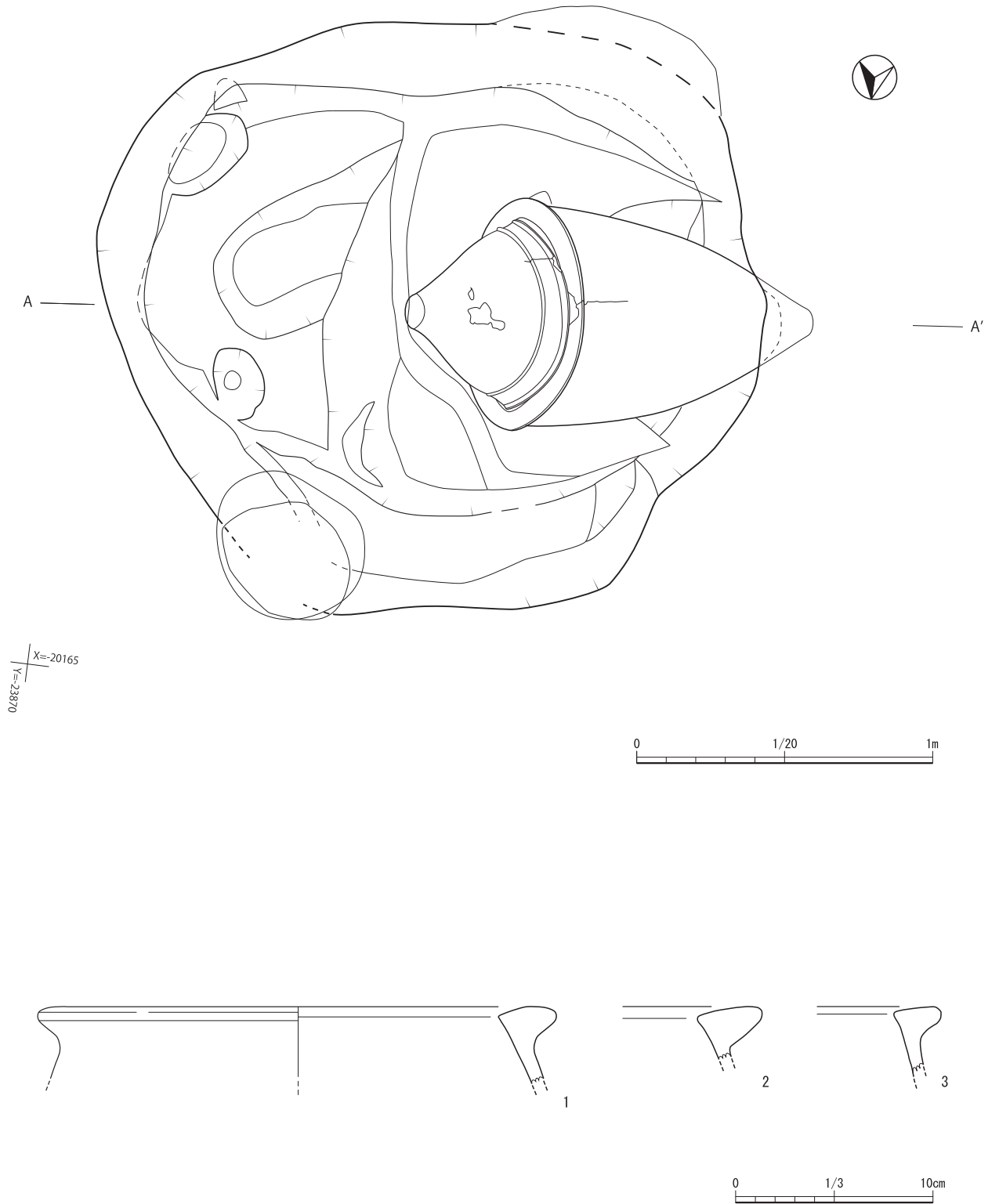
3号甕棺墓は中型の合口甕棺墓で、F-2・3、G-2・3グリッドで確認された。北西部分が4号甕棺墓(S108)に切られ、少しいびつであるが2.40m×2.35mの長方形のプランを呈する。2段墓坑で東側を斜めに掘り込み、甕棺を埋納している。埋設軸はN-71°-Wで、埋納角度は約30度である。合口部には粘土で目張りがしてある。後世に削平を受け遺構の上半分は破壊されている状況での検出であった。削平部の攪乱から出土した破片と接合することができた。攪乱は現代に近い段階での削平であろう。

上甕11は上半分が破壊されていたが、接合できた。口縁下の頸部で打ち欠いてあり、調査区内出土の破片

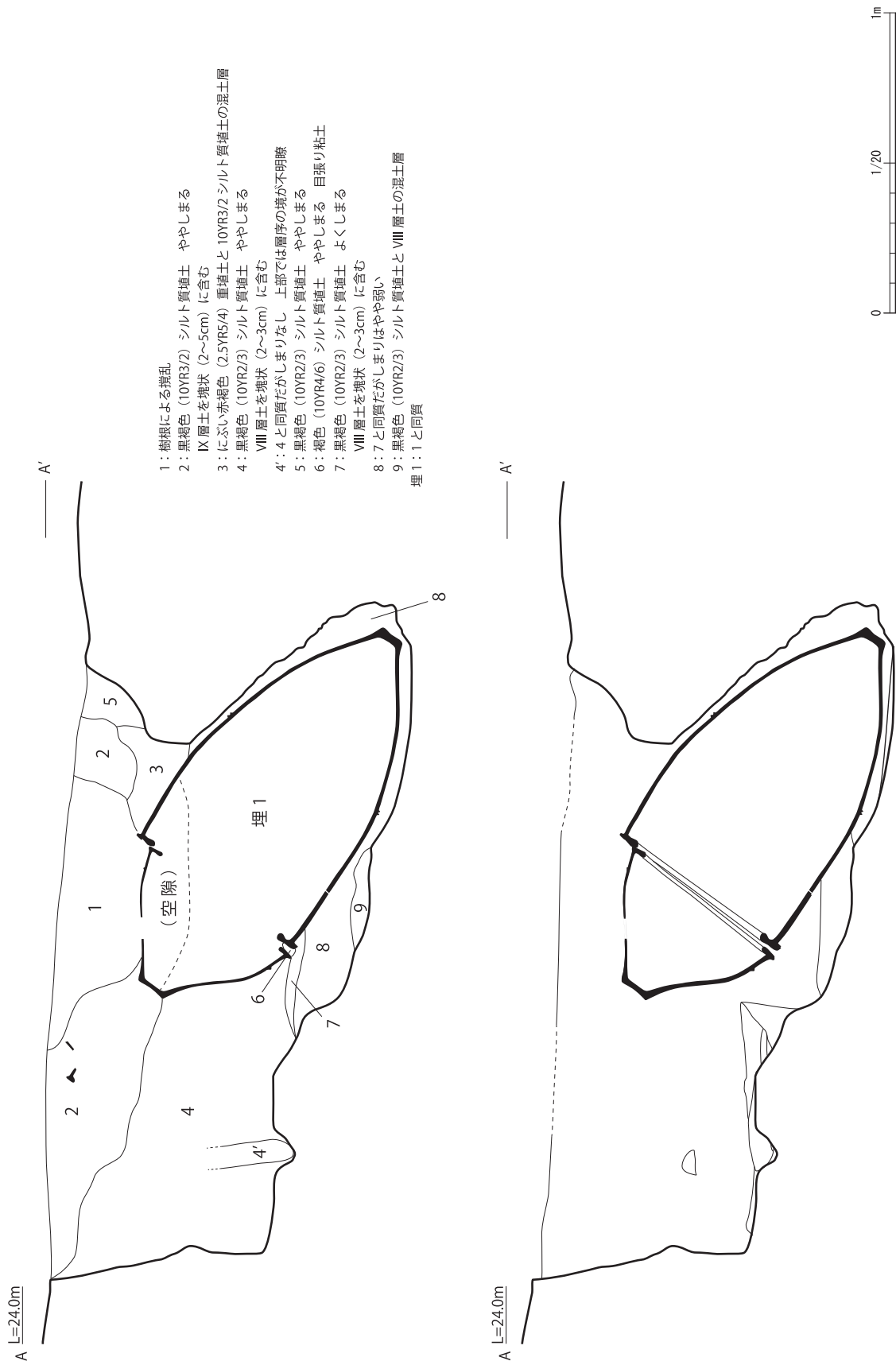


第5図 弥生時代遺構配置図 (S=1/200)

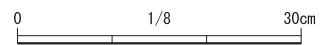
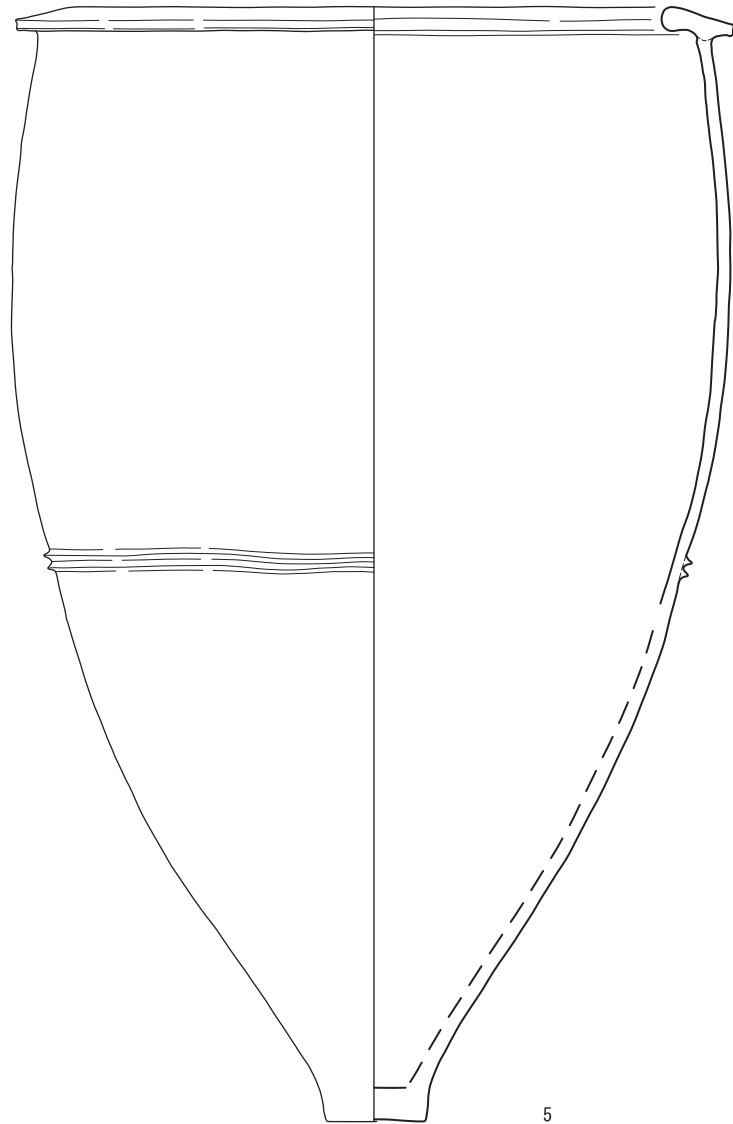
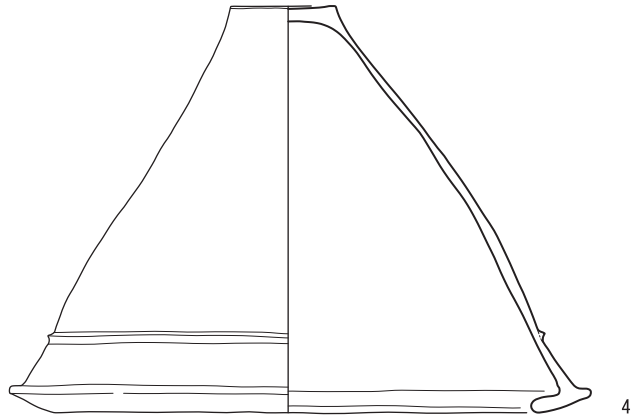




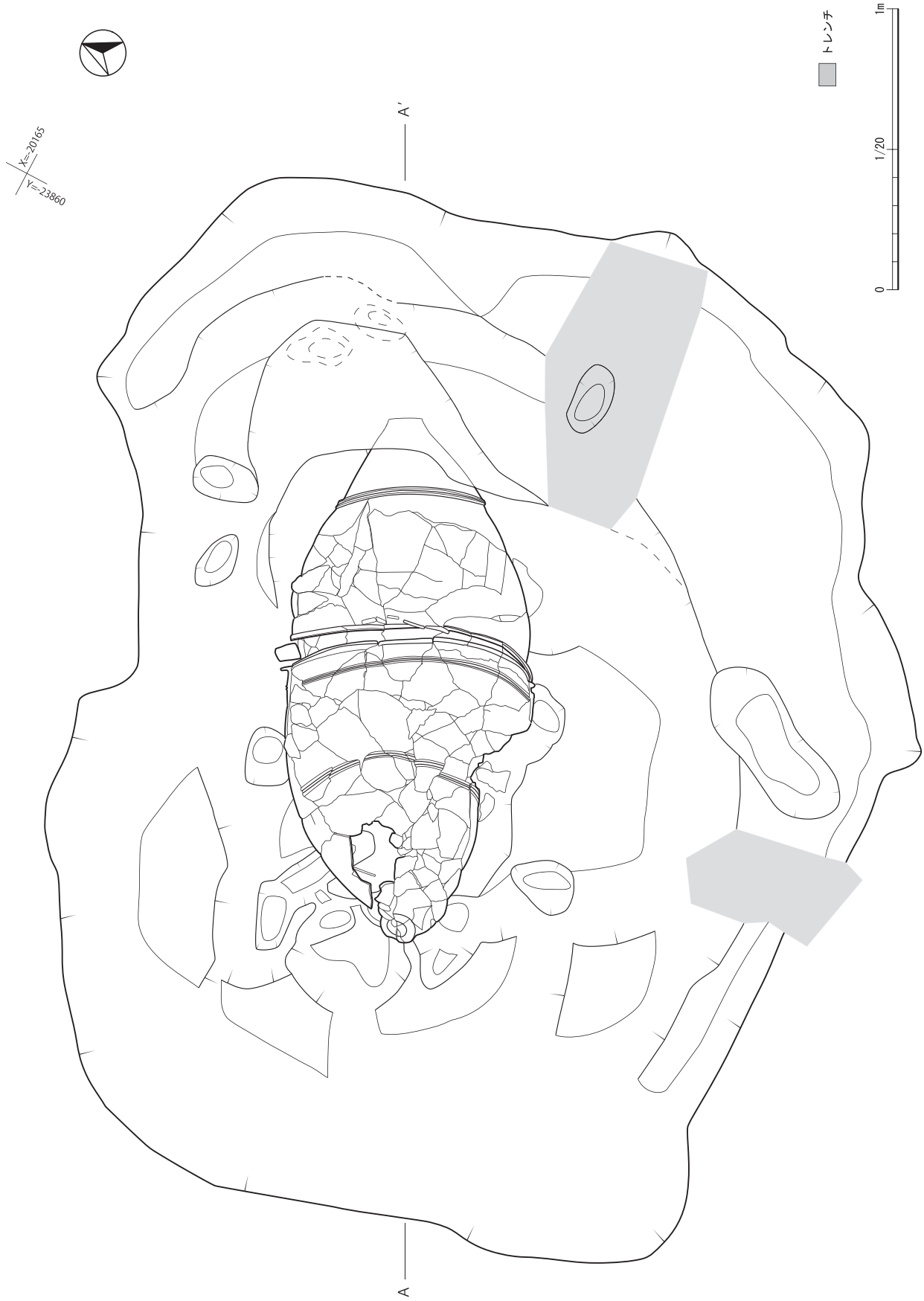
第6図 1号壘棺墓 (S109) 実測図及び出土遺物実測図



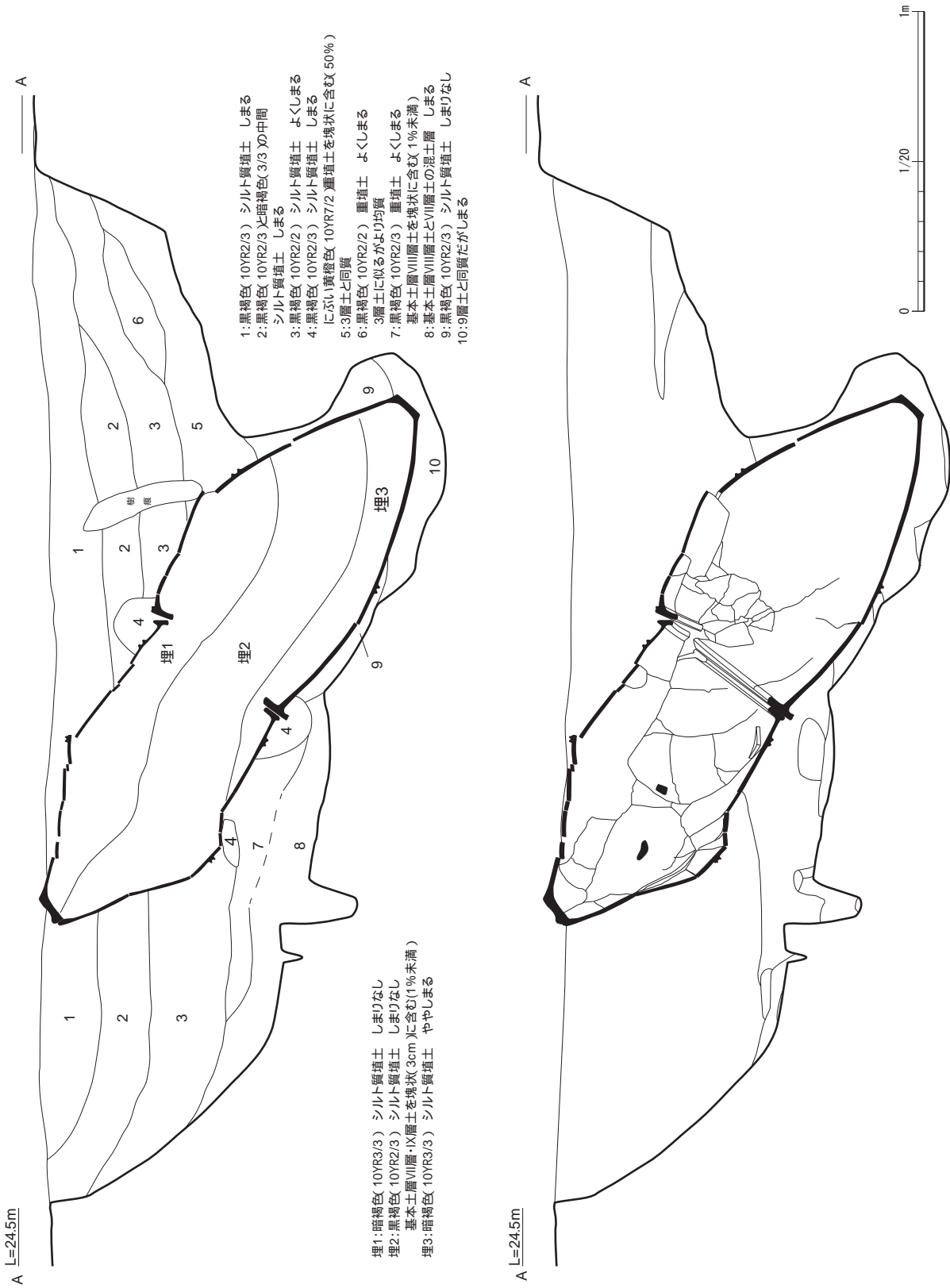
第7図 1号縄文墓 (S109) 断面図



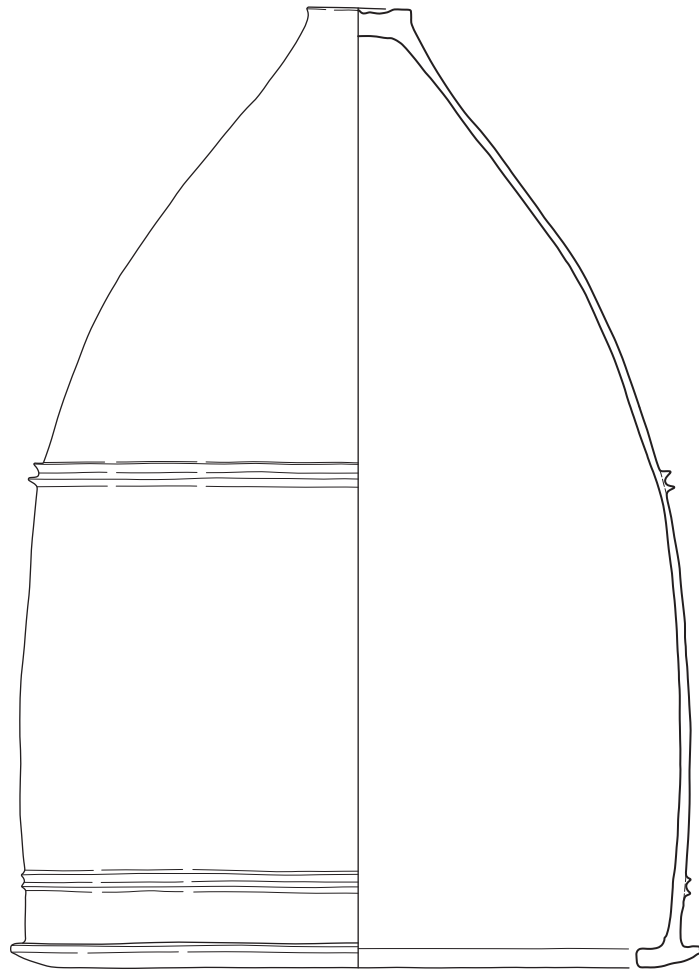
第8図 1号甕棺墓 (S109) 甕棺実測図



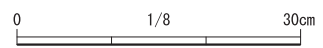
第9図 2号甕棺墓 (S175) 実測図



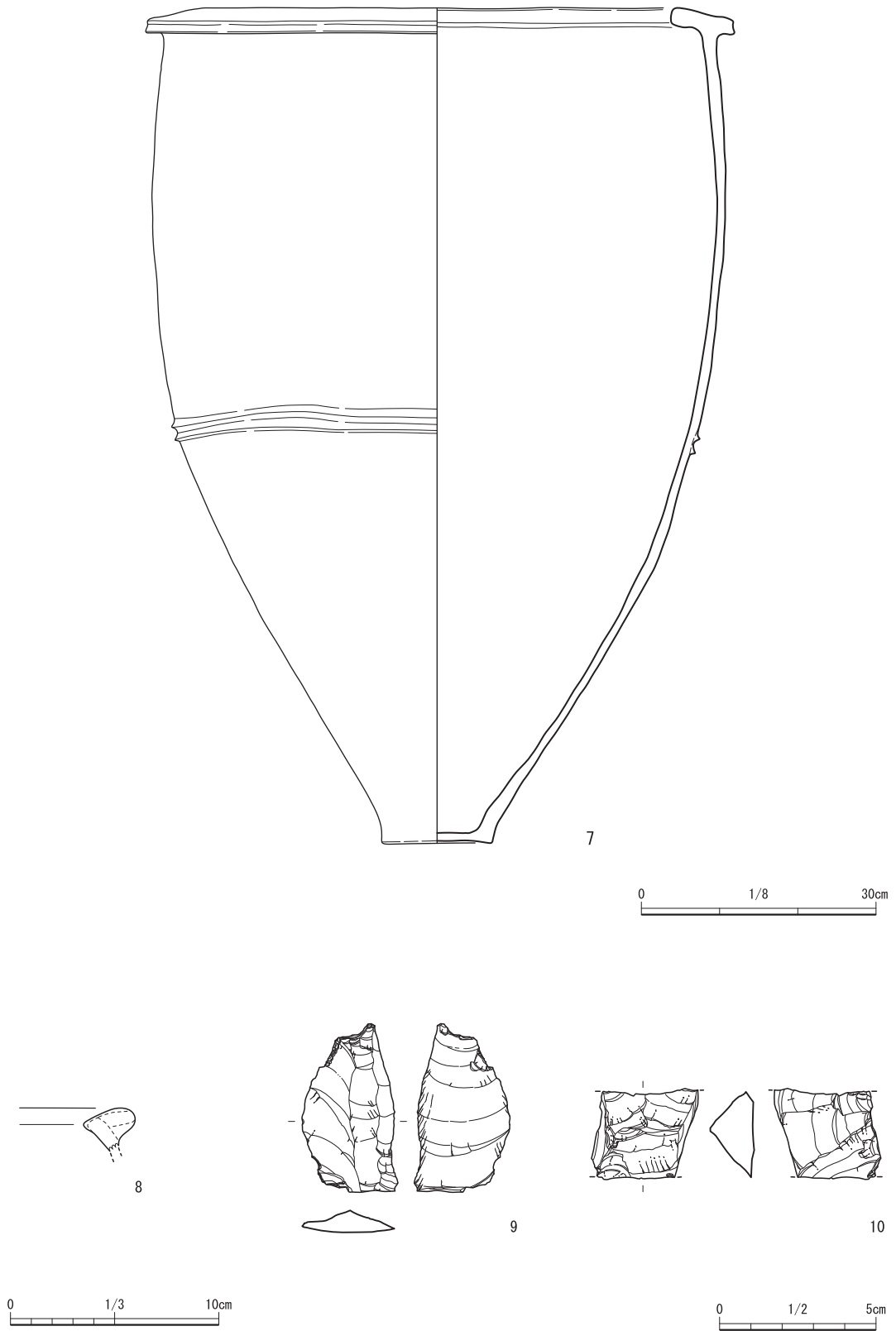
第10図 2号葬棺墓 (S175) 断面図



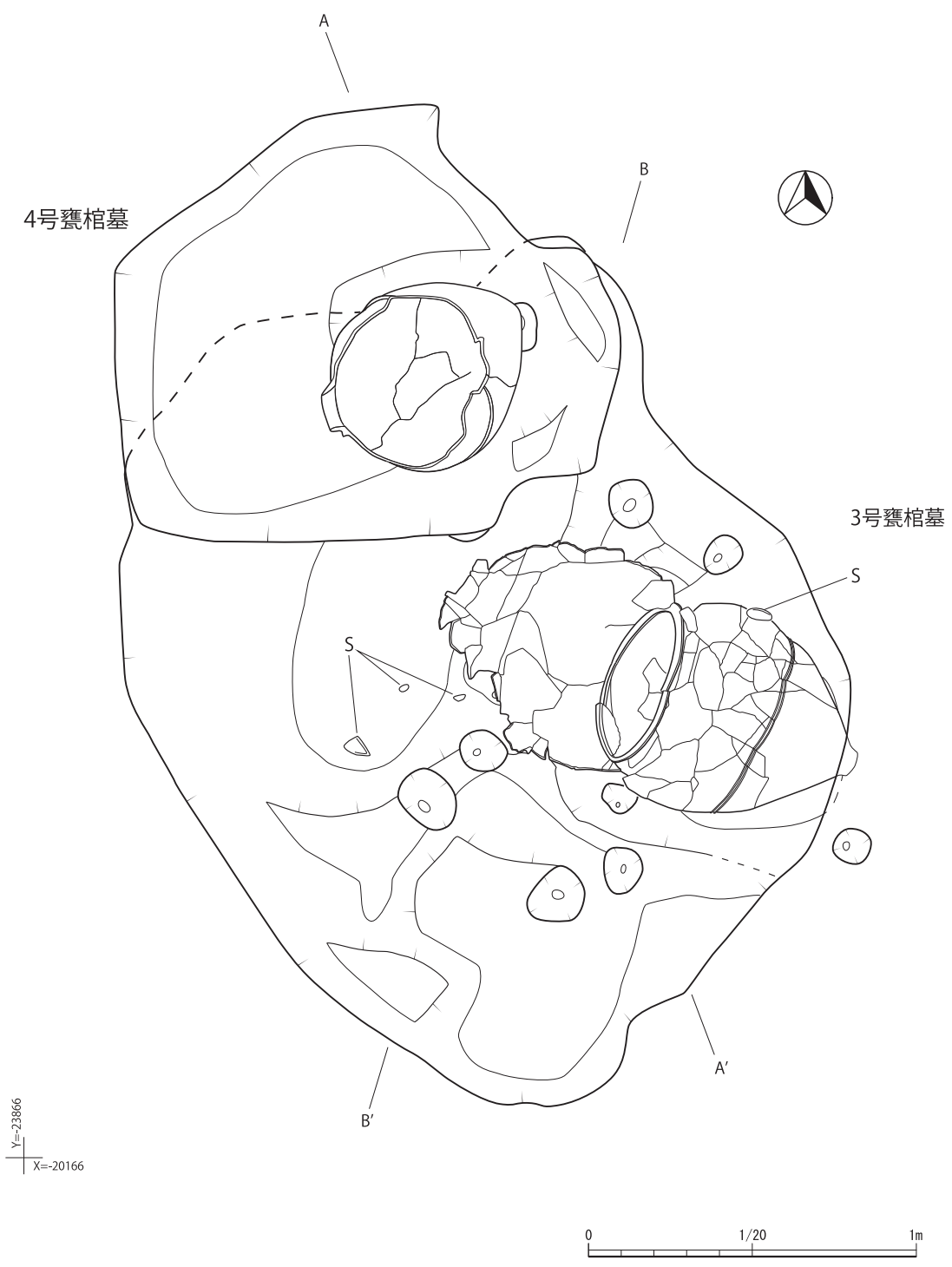
6



第11図 2号甕棺墓(S175)上甕実測図



第12図 2号甕棺墓(S175)下甕及び出土遺物実測図



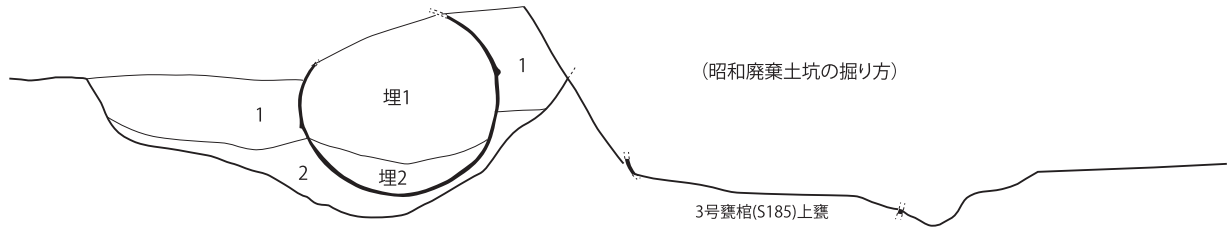
第13図 3号・4号甕棺墓(S185・108)実測図



[4号甕棺墓]

A L=24.7m

—— A'



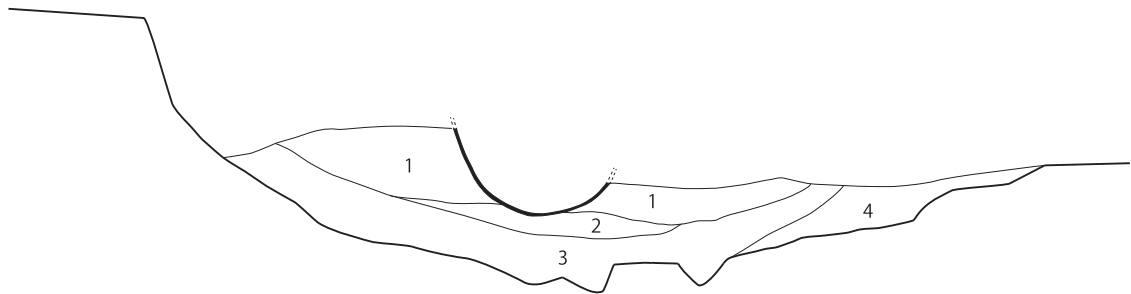
埋1: 黒褐色(10YR2/3)シルト質埴土 しまりなし  
粗砂粒を僅かに含む  
埋2: 暗褐色(10YR3/3)シルト質埴土 ややしまる  
灰白色粒(～6mm)を僅かに含む

1: 暗褐色(10YR3/3)シルト質埴土 よくしまる  
基本土層VIII層土を塊状に含む(2%)  
2: 1と同質だがさらにしまる

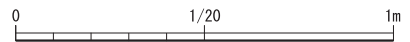
[3号甕棺墓]

B L=24.4m

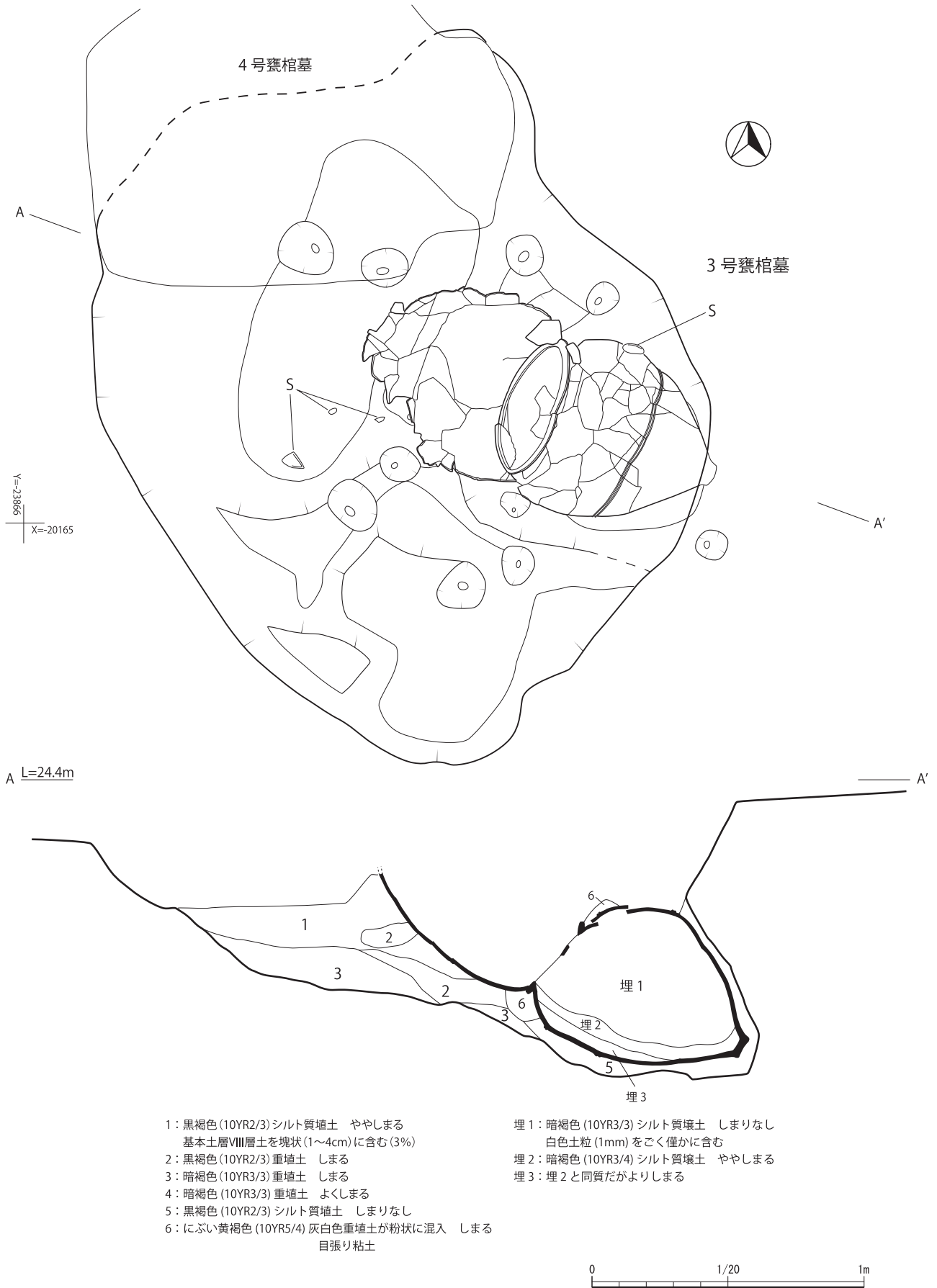
—— B'



1: 黒褐色(10YR2/3)シルト質埴土 ややしまる  
基本土層VIII層土を塊状(1～4cm)に含む(3%)  
2: 黒褐色(10YR2/3)重埴土 しまる  
3: 暗褐色(10YR3/3)重埴土 しまる  
4: 暗褐色(10YR3/3)重埴土 よくしまる



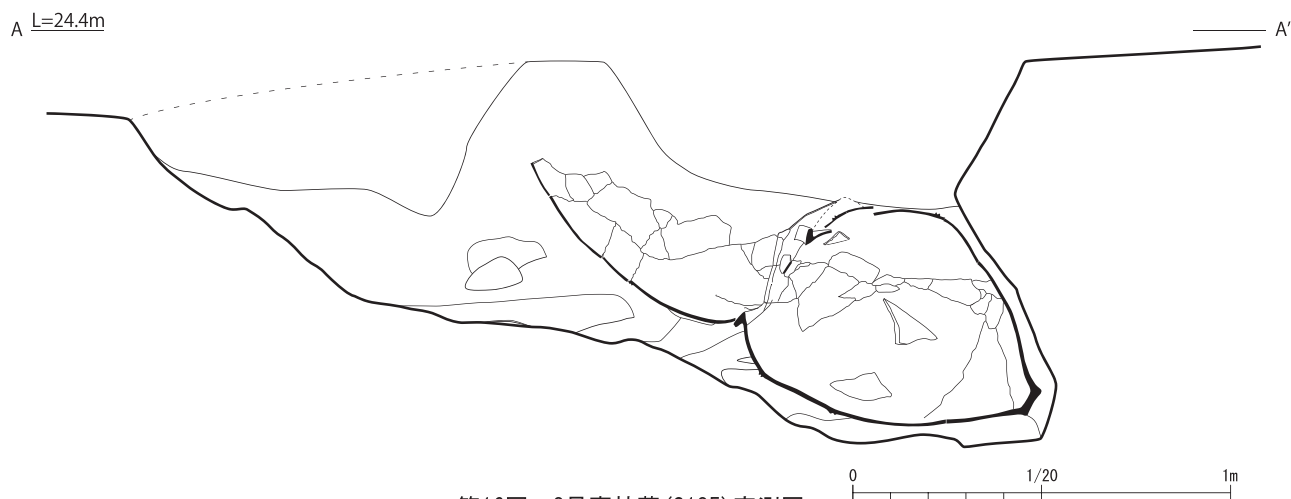
第14図 3号・4号甕棺墓(S185・108)断面図



- 1: 黒褐色(10YR2/3)シルト質埴土 ややしまる  
基本土層VIII層土を塊状(1~4cm)に含む(3%)
- 2: 黒褐色(10YR2/3)重埴土 しまる
- 3: 暗褐色(10YR3/3)重埴土 しまる
- 4: 暗褐色(10YR3/3)重埴土 よくしまる
- 5: 黒褐色(10YR2/3)シルト質埴土 しまりなし
- 6: にぶい黄褐色(10YR5/4)灰白色重埴土が粉状に混入 しまる  
目張り粘土

- 埋1: 暗褐色(10YR3/3)シルト質埴土 しまりなし  
白色土粒(1mm)をごく僅かに含む
- 埋2: 暗褐色(10YR3/4)シルト質埴土 ややしまる
- 埋3: 埋2と同質だがよりしまる

第15図 3号甕棺墓(S185)実測図及び断面図



第16図 3号甕棺墓 (S185) 実測図

を接合したところ打ち欠いた口縁部の 1/5 程度が復元できた。復元した口縁部は上面が平坦で、内側の突起部分が打ち欠いてある。胴部の張った形状をしており、胴部に 2 条の三角突帯をめぐらす。最大径は胴部上半にあり、外面は全面ナデ消し調整である。甕棺墓内部からは何も出土しなかった。下甕 12 は上甕と同じく胴部の張った形状の甕形土器である。口縁の上面は平坦で、内側の突起部分が打ち欠いてある。口縁下に一条の突帯を貼付するが、M字突帯としては角が弱く、溝も浅い。胴部中央に三角突帯 2 条を貼付する。最大径は胴部上面にあり、外面は全面ナデ調整である。

#### 4号甕棺墓【S108】(第13・14・18・19図、図版2・11・13)

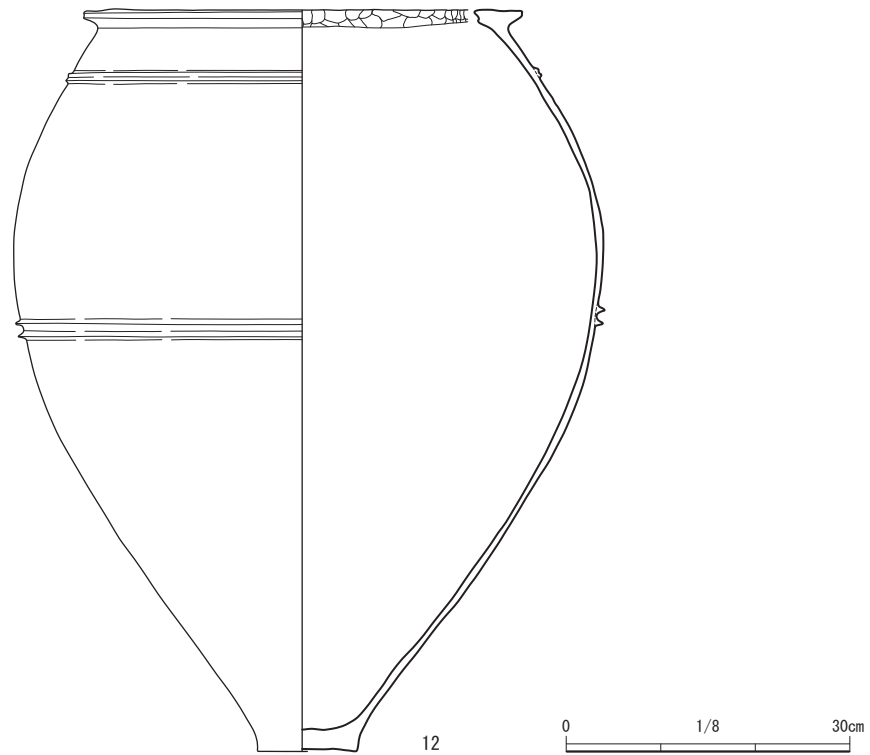
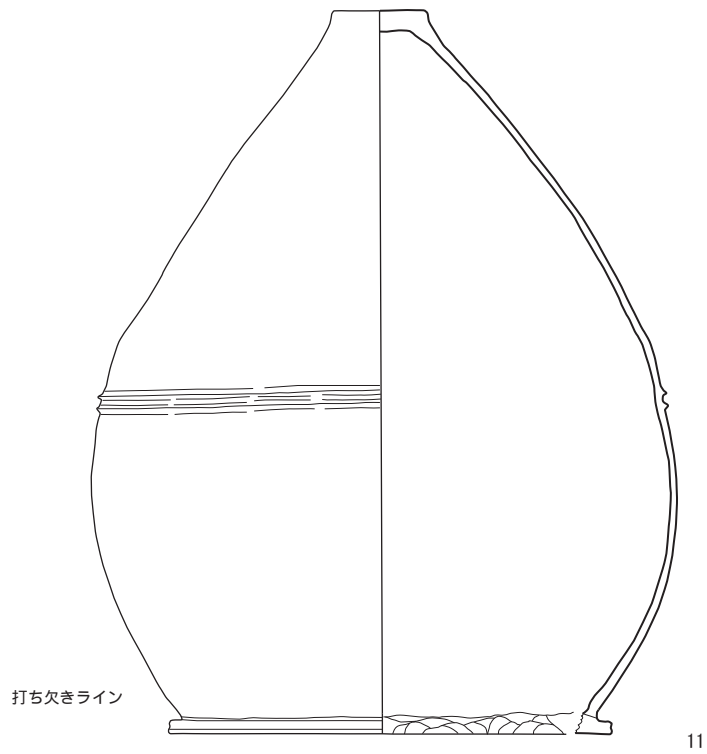
4号甕棺墓は中型の合口甕棺墓でF-2、G-2グリッドで確認された。墓坑は3号甕棺墓(S185)を切り、4号甕棺墓(S108)の方が新しい。長軸1.60m、短軸1.30mの長方形のプランである。一边を斜めに掘り込み、甕棺を埋納している。埋設軸はN-113°-Wで、埋納角度は約44度であるが、非常に残りが悪く、後世に遺構の約2/3は削平を受けている。下甕13は甕形土器である。平縁で、内傾した口縁を持ち、底部は平底である。突帯は胴部に三角突帯1条を貼付する。外面の胴部上半はナデ調整で、下半はハケ目調整である。黒塗りの可能性あり。

出土遺物 14 は鉢形土器の口縁部で口縁下に三角突帯を1条貼付する。下甕内部の埋土から口縁の約1/2を検出した。上甕の可能性はある。15は安山岩製の二次加工剥片で先端部を欠損する。

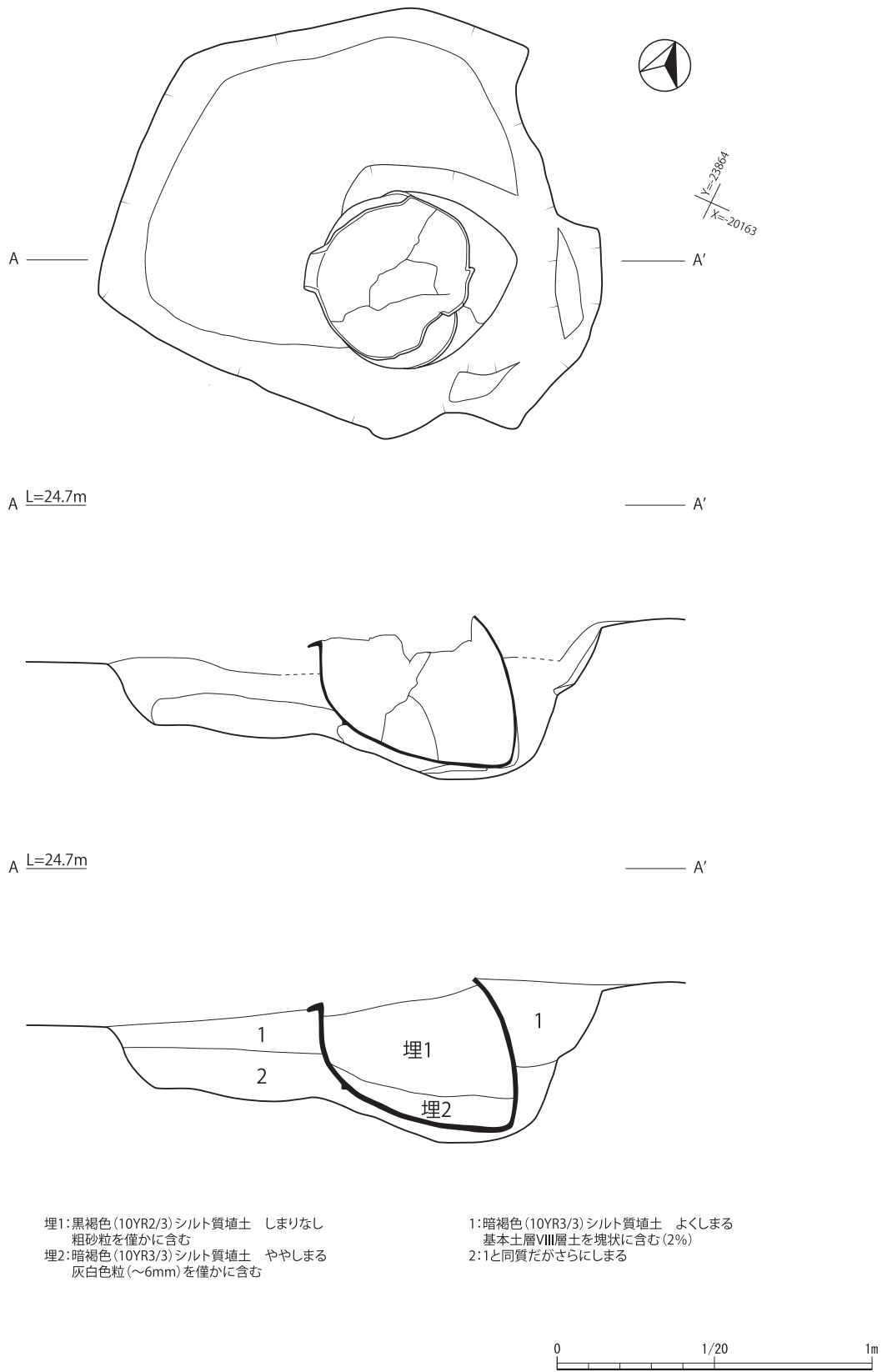
#### 5号甕棺墓【S174】(第20・21図、図版3・12)

5号甕棺墓は小型の合口甕棺墓でG-3グリッドで確認された。長軸1.21m、短軸0.91mの楕円形のプランを呈し、西側を斜めに掘り込み、甕棺を埋納している。埋設軸はN-87°-Eで、埋納角度は約35度である。合口部には粘土で目張りがしてあり、ほぼ完形で出土した。内部は、ほぼ土が詰まっている状態で、何も出土しなかった。

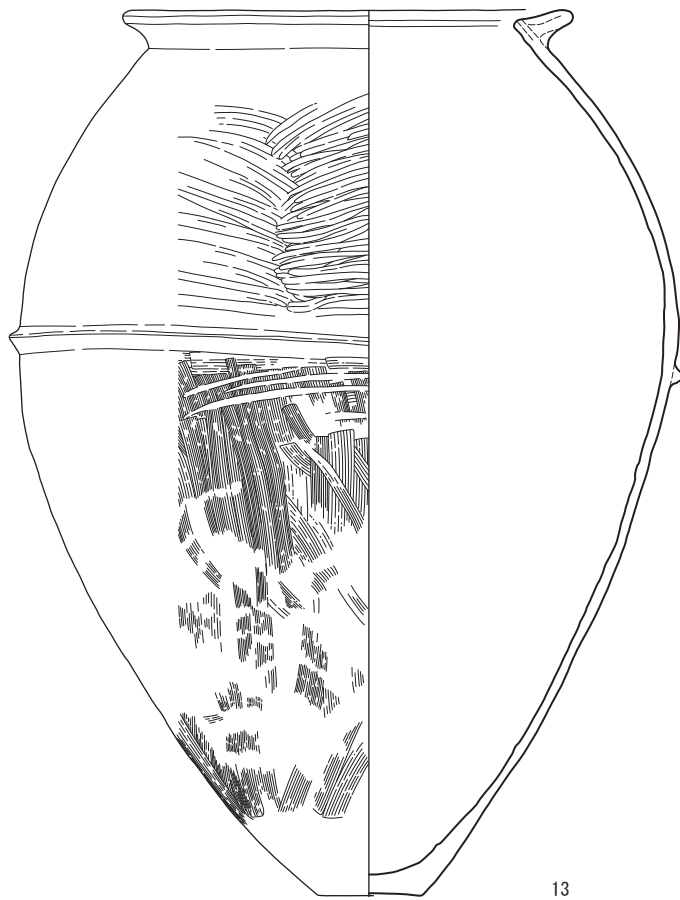
上甕16は壺形土器である。口縁は平縁で内側に張り出しをもつ。口縁直下に1条の沈線が入り、胴部に1条の三角突帯を貼付する。全面にミガキが入る。胴部最大径は胴部上半にあり、38.7cmである。下甕17も壺形土器であり、口縁は平縁で内側に張り出しをもつ。頸部は暗文が巡り、頸部と胴部との接点に1条の三角突帯と胴部に2条の三角突帯を貼付する。外面の全面にミガキが入る。胴部最大径は胴部上半にあり、41.0cmである。



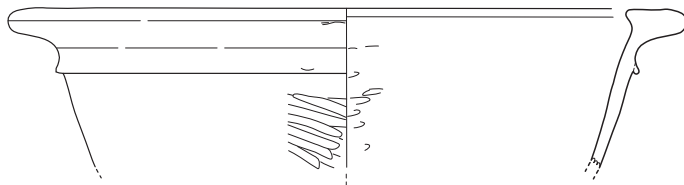
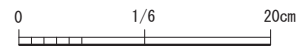
第17図 3号甕棺墓 (S185) 甕棺実測図



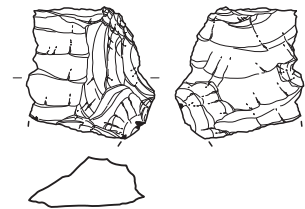
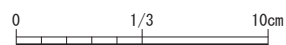
第18図 4号甕棺墓(S108)実測図及び断面図



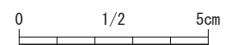
13



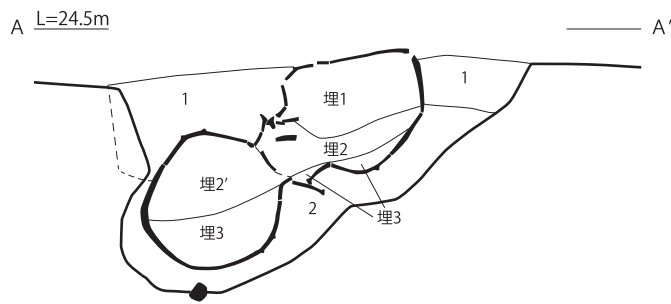
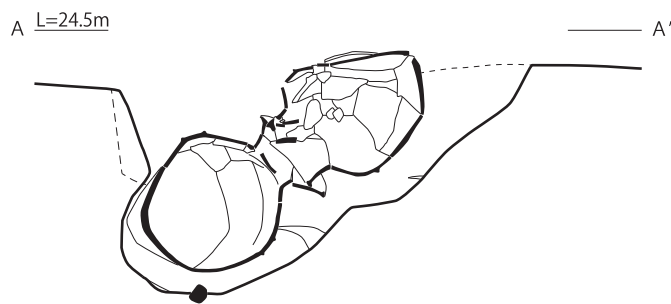
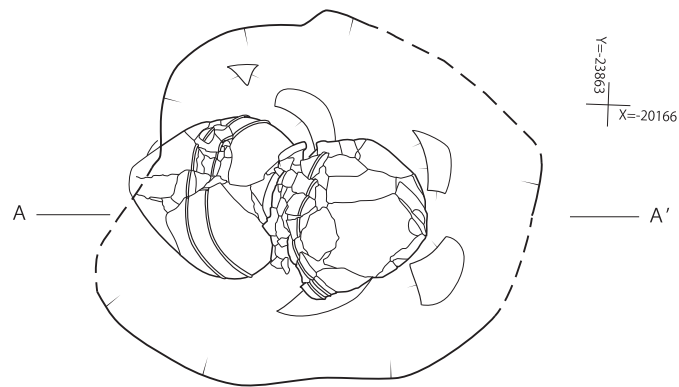
14



15

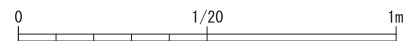


第19図 4号甕棺墓 (S108) 甕棺及び出土遺物実測図

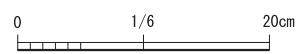
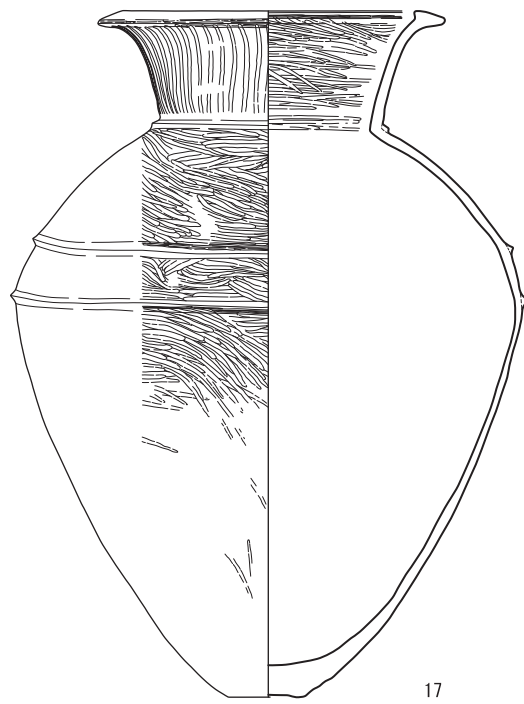
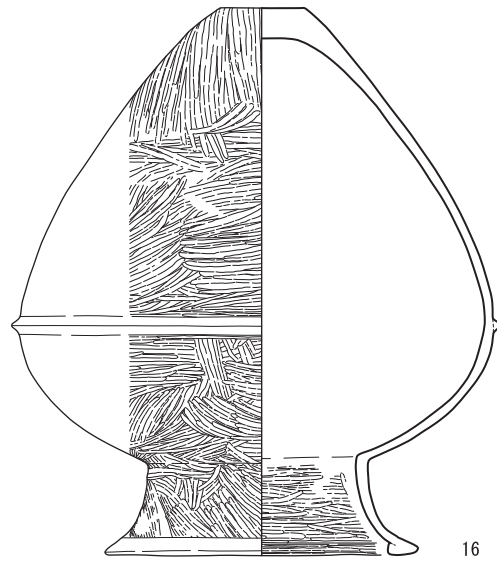


- 1:黒褐色(10YR2/3) シルト質埴土 ややしまる  
黄褐色微粒子土が入る
- 2:黒褐色(10YR2/3) シルト質埴土 しまる

- 埋1:黒褐色(10YR2/3) シルト質埴土 しまりなし
- 埋2:埋1と同質だが僅かにしまる
- 埋2':埋2層の下窆内埴土
- 埋3:埋1と同質だがややしまる



第20図 5号甕棺墓 (S174) 実測図及び断面図



第21図 5号甕棺墓(S174)甕棺実測図



### 標石をもつ甕棺墓

#### 1号標石をもつ甕棺墓【S104】(第22図、図版3・13)

1号標石をもつ甕棺墓は、C-3、D-3・4グリッドで確認された。当初、2号標石をもつ甕棺墓から先に甕棺を確認した。甕棺を検出する前は、集石として扱っていたが、熊本広域大洪水に伴う埋蔵文化財調査に係る協議会（以下協議会）で遺跡の価値を検討する必要性から、その時点で、集石としていた遺構の下に、甕棺が存在するかを確認するために半裁することとなった。その結果、集石の下に、0.5m×0.5mほどの範囲で甕棺の一部を確認した。確認部分は、甕棺墓の合口部で上甕、下甕とも甕形土器と思われる。また、2段墓坑となる可能性がある掘り込みを確認できた。協議会では、標石をもつ甕棺を含めた新南部遺跡群11次の遺跡の価値を検討し、土木部との協議の結果、現状保存となった。その後の記録は、遺物の保存と安全を優先しとどめおいた。

確認したプランは、長軸2.73m、短軸2.24mの方形のプランを呈し、標石から甕棺確認面まで約1.3mである。標石は人頭大の大きさで、およそコの字状に並んでいる。墓坑は2段墓坑で、西側の壁を掘り込み、埋納角度はおよそ水平に甕棺を埋納していると思われる。合口部には目張り用と思われる粘土を確認した。

出土遺物18～20は甕形土器の口縁部である。18は口縁外側の断面が分厚い三角形で内側の張り出しはない。19は口縁外側の断面が分厚い三角形で内側の張り出しがある。20は最下層から出土し、口縁上面に若干のくぼみを持ち、内側に張り出しを持つ。21は壺形土器の胴部の一部であり、沈線が入る。22は縄文時代の深鉢形土器の口唇部で連続刺突文が上面に入る。23は標石を覆う土から出土した蛇紋岩製の磨製石斧で一部欠損している。

#### 2号標石をもつ甕棺墓【S203】(第23図、図版3・13)

2号標石をもつ甕棺墓は、A-6、B-6グリッドで試掘調査時に標石のみ確認された。試掘調査時は人為的に運搬されたと考えられる巨礫の集中はあったが正体は不明で、それを確認すべく本調査を開始した。試掘トレンチは、遺構を半裁する形で安全上の限界まで掘削し、正体不明のまま現状を記録し終えようとしていたが、甕棺の上甕の一部を発見したことで可能な範囲で精査を行った。協議会の結果、1号標石をもつ甕棺墓と同じく遺跡の保存に伴い現状保存となり、その後の記録は、遺物の保存と安全を優先してとどめおいた。

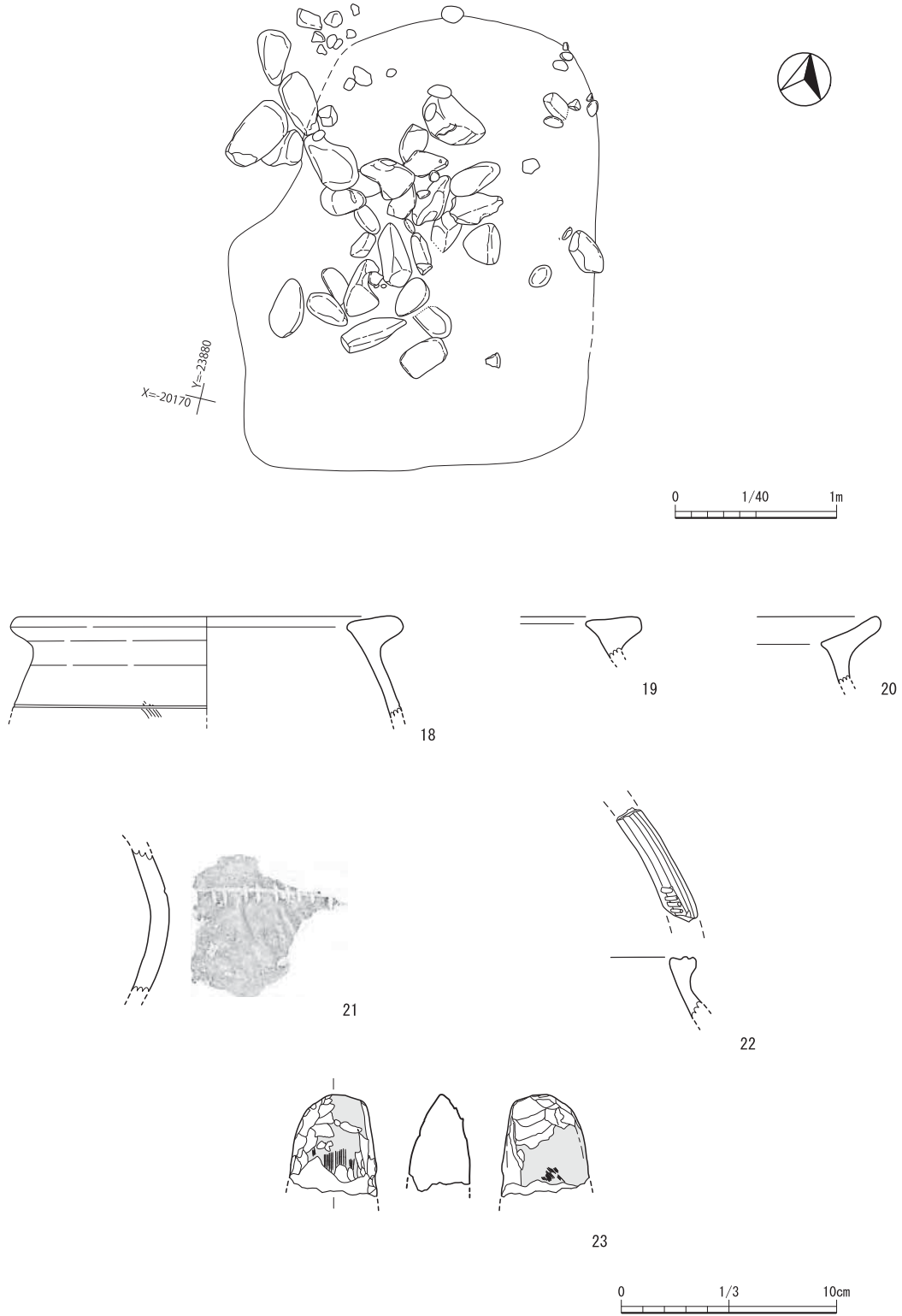
規模は、長軸は1.9m、短軸は1.34m、標石から上甕上面までの深さは1.68mである。標石は大ぶりの自然礫が積み上げられ、2号標石をもつ甕棺墓以外の標石や集石より大きい。墓坑は、2段墓坑である可能性が高い。合口部には目張り用と思われる粘土を確認した。甕棺の全容は不明であるが、上甕は鉢形土器で平底の底部になる印象がある。底径は約10cm、高さ約15cmであると思われる。口縁部の詳細は不明である。

出土遺物24～26は甕形土器の口縁部である。口縁内側に張り出しがあり、上面にくぼみをもつ。25・26は標石を覆う土から出土した。

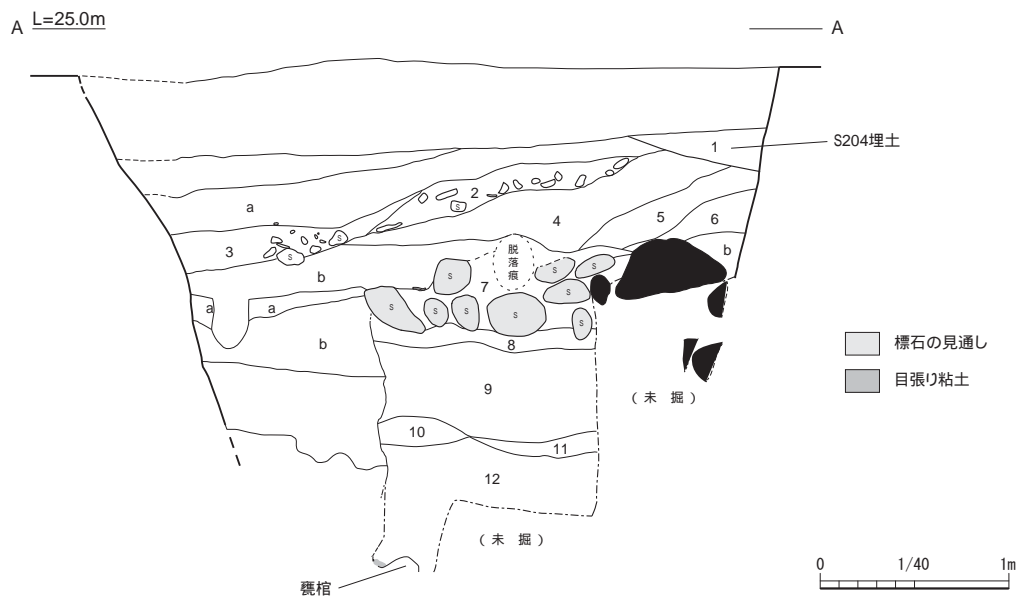
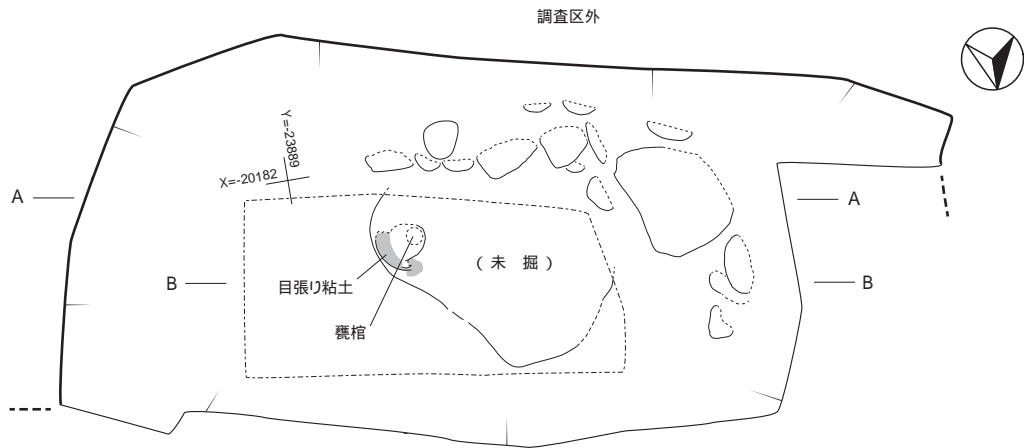
### 集石

#### 1号集石【S110】(第24図、図版3)

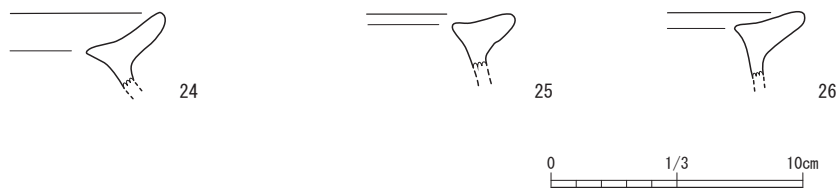
1号集石はF-1グリッドで確認された。現状保存となったので掘削を伴う精査は行っていない。礫は直径約2mの円形状に意図的に配置されている。礫は円礫で人頭大の大きさ、石材は白川水系で見られる安山岩である。地中レーダー探査の結果では、集石周辺に甕棺らしき反応があるため標石をもつ甕棺墓になる可能性はある。



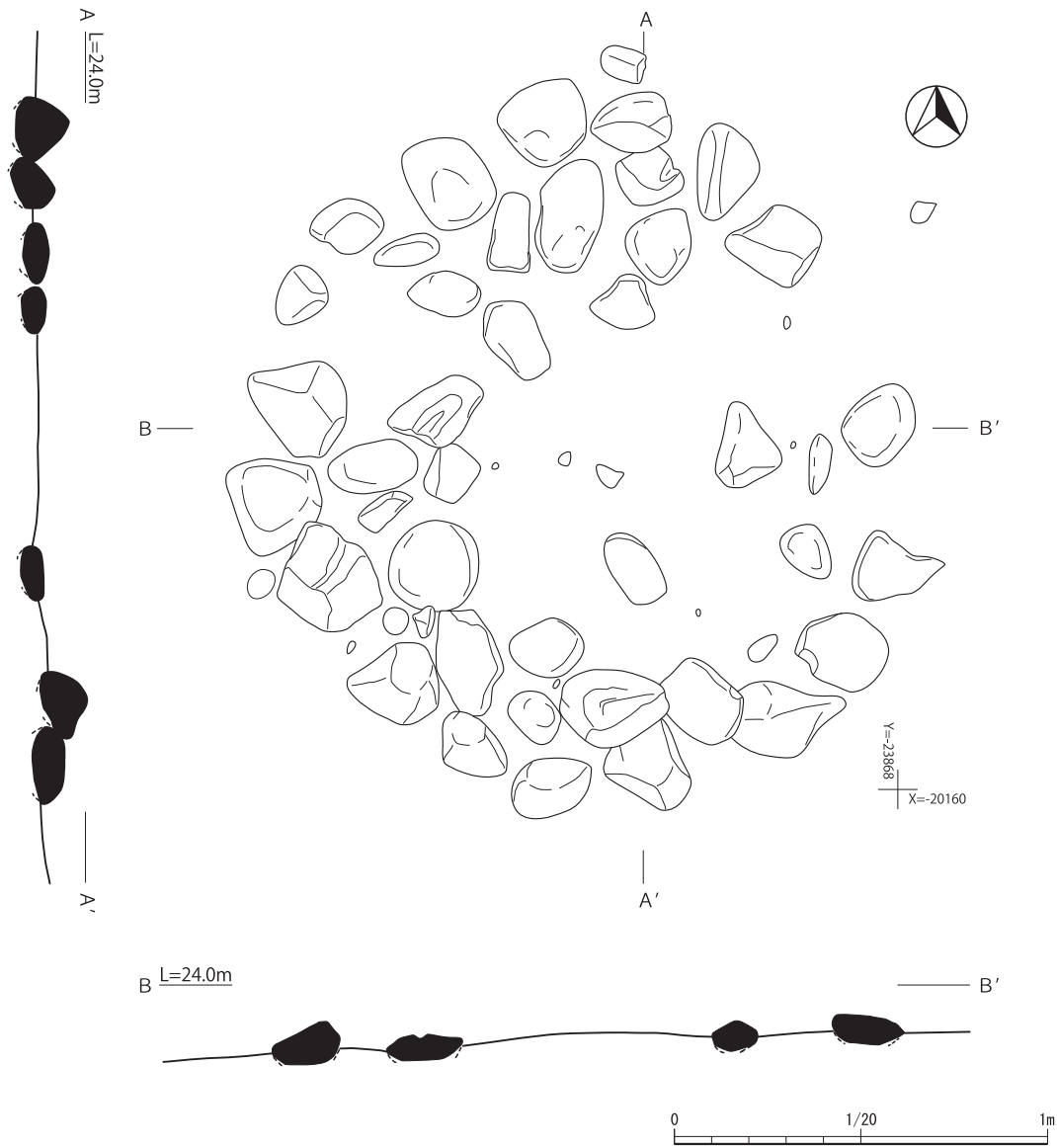
第22図 1号標石をもつ甕棺墓(S104) 実測図及び出土遺物実測図



- |   |   |
|---|---|
| <p>1: 褐色(10YR4/4)シルト質埴土 しまりなし<br/>粗砂・礫を含む(20%) 4号道路状遺構S204埋土</p> <p>2: 褐色(10YR4/4)重埴土 しまりなし<br/>互いにかみ合う礫を含む(20%)</p> <p>3: 褐色(10YR4/4)シルト質埴土 しまりなし<br/>互いにかみ合わない礫を含む(30%)</p> <p>4: 褐色(10YR4/4)重埴土 きわめてよくしまる<br/>VIII層・IX層土、褐色粒を含む(30%)</p> <p>5: 暗褐色(10YR3/4)シルト質埴土 ややしまる</p> <p>6: 黒褐色(10YR2/2)シルト質埴土 しまる</p> | <p>7: 黒褐色(10YR2/2)シルト質埴土 しまりなし<br/>標石上面では上層との境不明瞭</p> <p>8: 黒褐色(10YR2/3)シルト質埴土 よくしまる<br/>VIII層土を塊状に含む(2%)</p> <p>9: 黒褐色(10YR2/3)シルト質埴土 しまる 不均質<br/>VIII層土を塊状に含む(5%)</p> <p>10: 黒褐色(10YR3/2)重埴土 よくしまる 不均質<br/>VIII層土を塊状に含む(3%)</p> <p>11: 黒褐色(10YR3/2)重埴土 よくしまる<br/>VIII層土を塊状に含む(25%)</p> <p>12: 9層と同質</p> |
|---|---|



第23図 2号標石をもつ甕棺墓(S203)実測図及び出土遺物実測図



第24図 1号集石 (S110) 実測図

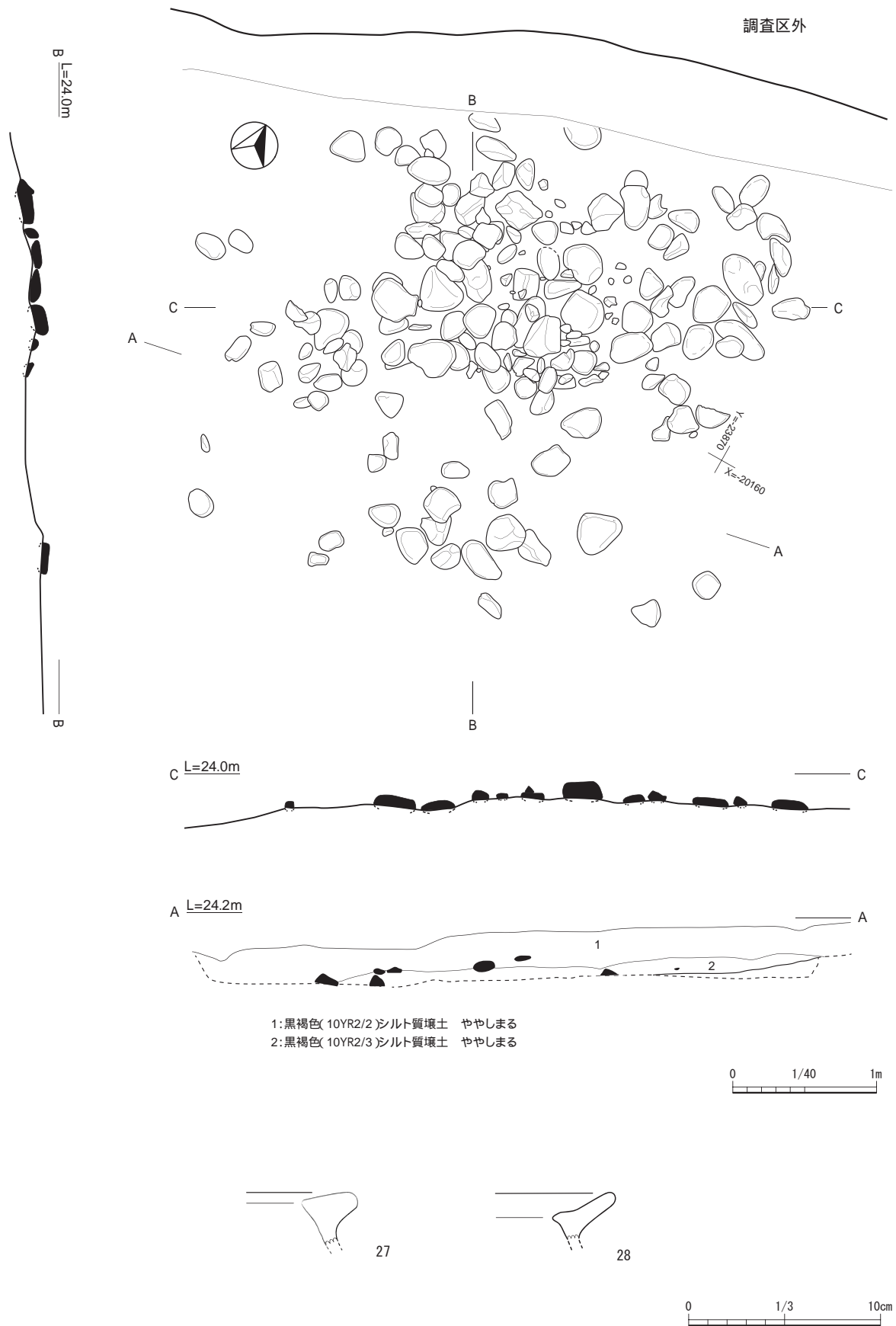
2号集石【S107】(第25図、図版4・14)

2号集石はE-1・2グリッドで確認された。1号集石と同じく、現状保存となり、掘削しての精査は行っていない。集石は、約4m四方に収まり、いくつかの群にまとまる。礫は円礫で人頭大の大きさ、石材は白川水系で見られる安山岩である。地中レーダー探査の結果から甕棺らしき反応が数か所出ているため標石を持つ甕棺墓になる可能性が高い。

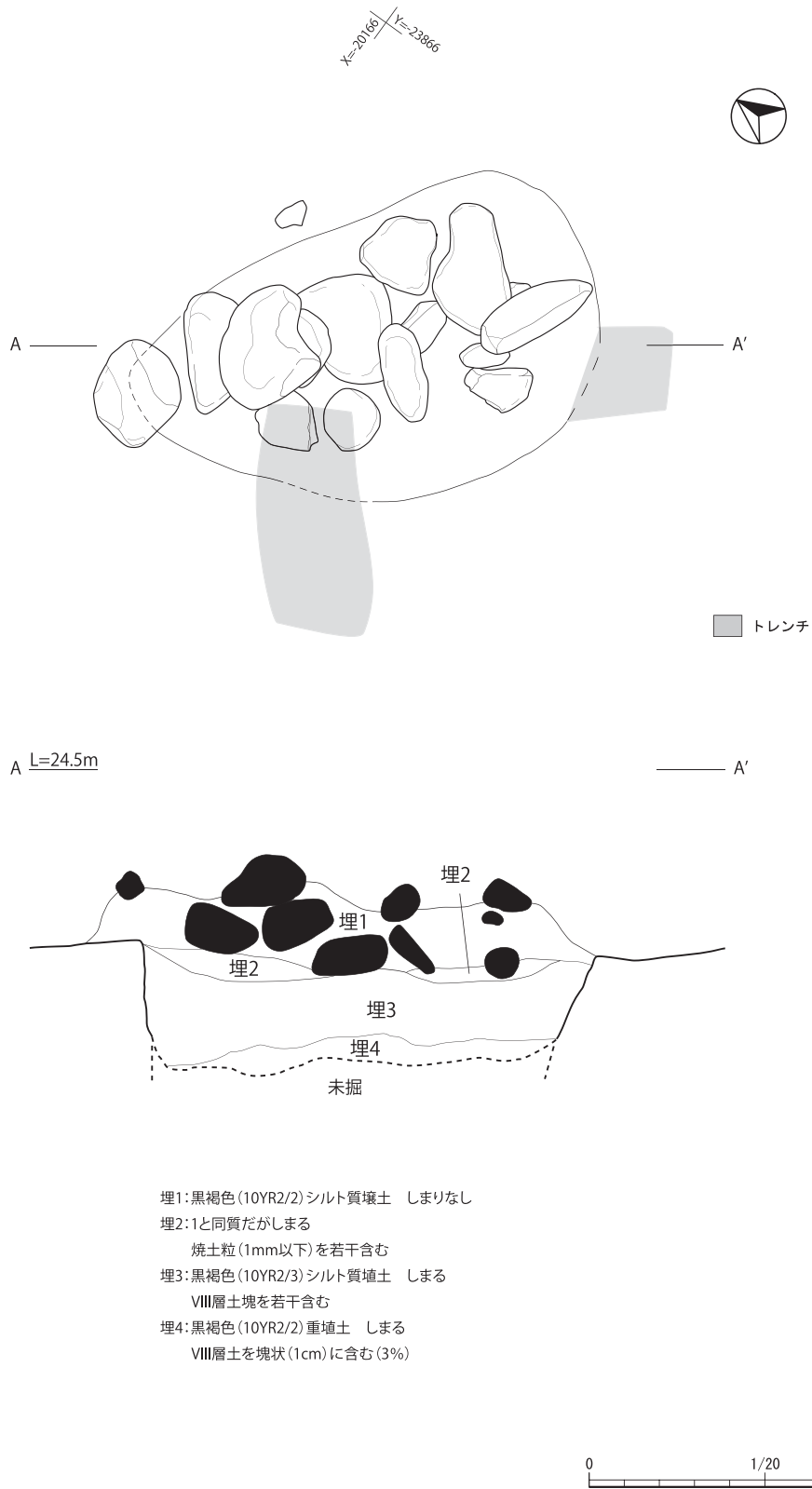
集石を覆う土から甕形土器の口縁が2点出土した。27は口縁断面が分厚い三角形で内側に張り出しはない。28は内側に張り出しがあり、上面にくぼみをもつ。

3号集石【S106】(第26図、図版4)

3号集石はF-3グリッドで確認された。半裁の状態、保存となった。集石下には土坑らしき掘り込みを持つ。礫は円礫で人頭大の大きさ、石材は白川水系で見られる安山岩である。



第25図 2号集石(S107)実測図及び出土遺物実測図



- 埋1: 黒褐色(10YR2/2)シルト質壤土 しまりなし
- 埋2: 1と同質だがしまる
- 焼土粒(1mm以下)を若干含む
- 埋3: 黒褐色(10YR2/3)シルト質壤土 しまる
- VIII層土塊を若干含む
- 埋4: 黒褐色(10YR2/2)重埴土 しまる
- VIII層土を塊状(1cm)に含む(3%)

第26図 3号集石(S106)実測図

## 木棺墓

### 1号木棺墓【S105】(第27図、図版4・14)

1号木棺墓はD-3・4、E-3・4グリッドで確認された。長軸1.64m、短軸1.4mの長方形のプランを呈し、深さは1.12mである。2段墓坑の中央に主体部が掘り込まれており長軸1.32m、短軸0.74m、深さ0.38mである。掘り方内の堆積状況から木棺墓とした。1段目墓坑の底部に小穴がめぐる。埋置方位は不明である。出土遺物29は甕形土器の口縁部で内側に張り出しをもつ。

### 2号木棺墓【S180】(第28・29図、図版4・14)

2号木棺墓はD-3グリッドで確認された。遺構の南側を3号木棺墓(S177)に切られる。長軸2.5m、短軸1.44mの長方形のプランを呈し、深さは1mである。主体部の長軸1.36m、短軸0.72m、深さ0.36mであり、埋置方位はN-55° -Eである。掘り込みの中央部に方形に小溝がめぐる。これは、板状の木棺の差し込み痕跡と推定される。プランの東側にはステップ状の段差がある。2号木棺墓(S180)に先行する遺構の一部を掘削した可能性もあるが、保存の為にとどめおいた。

出土遺物30は甕形土器の口縁部で内側に張り出しをもち、断面が分厚い三角形である。

### 3号木棺墓【S177】(第28・29図、図版4・14)

3号木棺墓は、D-3グリッドで確認された。長軸2.2m、短軸1.8mの長方形のプランを呈し、深さは1.2mである。掘り込みが短軸と平行に2本あり、長方形に組み合わせた木棺を据えたと考えられる。掘り込みの溝の幅は明瞭に異なっており、幅の広い方を被葬者の頭位と想定した。埋置方位はN-56° -Eである。

出土遺物38は主体部中央の床面直上から出土した、粘板岩製の磨製石鏃である。使用による欠損部と考えられることから被葬者の死因となった可能性も推定される。31～36は甕形土器の口縁部である。31～34は口縁部内側に張り出しをもち、断面が分厚い三角形である。35、36は口縁部内側に張り出しをもち、口縁上面がくぼむ。37は縄文時代の深鉢形土器の口縁部である。39は黒曜石製の打製石鏃で、先端部が欠損する。

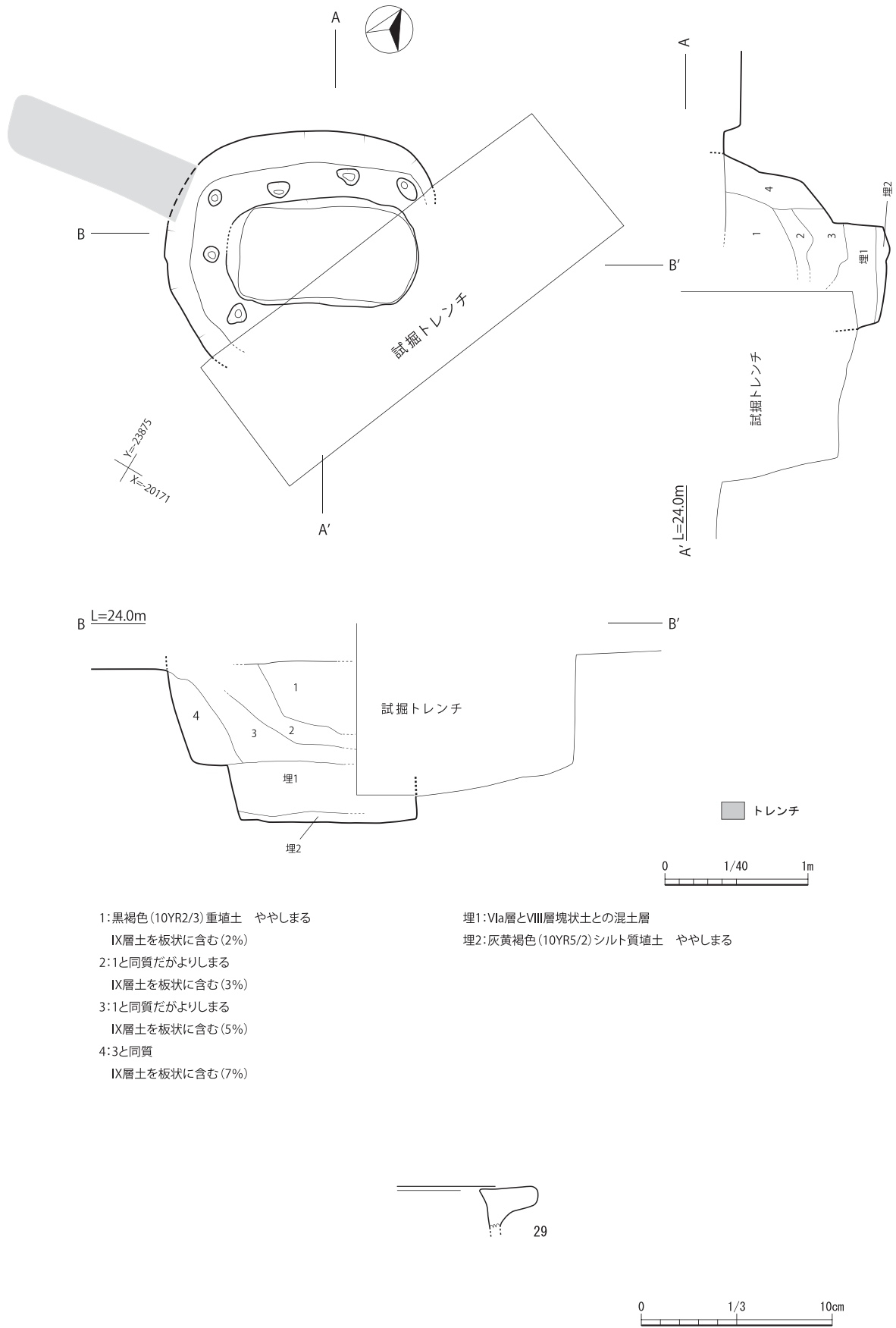
## 道路状遺構

### 1号道路状遺構【S151】(第30図、図版4)

1号道路状遺構はE-2、F-2・3・4、G-3・4グリッドで確認された。道路状遺構は川に向かって、北西へ延びる。途中階段状の段差があったり、削平によってプランが消失していたりする。分岐点が2ヶ所あり、G-3グリッドでは十字路状に、E-2、F-2グリッドではT字路状に分かれており、東側の延長上には2号甕棺墓(S175)がある。調査時の不手際により実測は行っていない。硬化面は若干形成されていた。検出できたもので全長約15.5m、幅は約0.8mであり、調査区外の南東に延びる可能性もある。

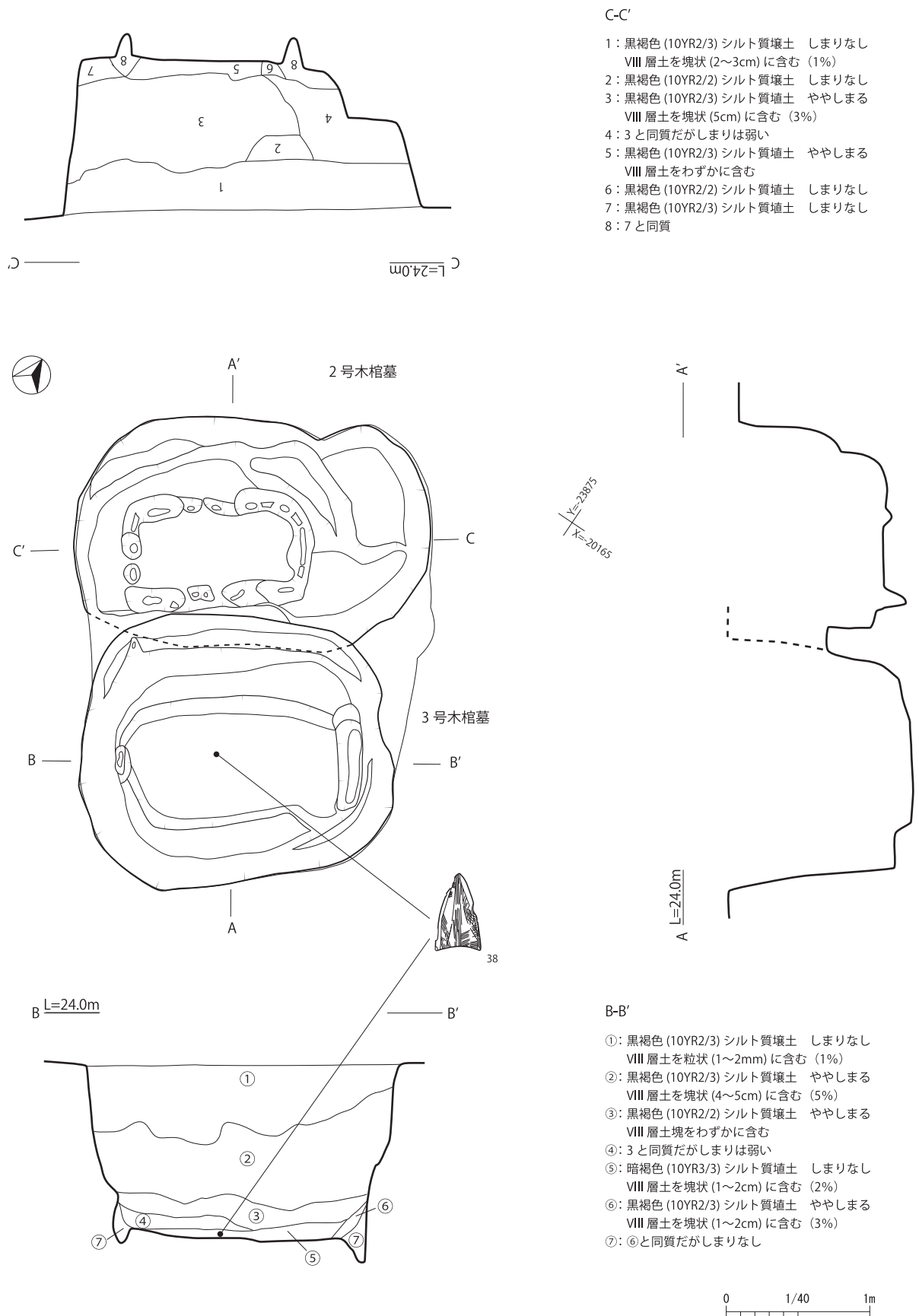
### 2号道路状遺構【S1101】(第31図)

2号道路状遺構はF-2、G-2、H-2・3グリッドで確認された。1号集石(S110)から東に進み、1号溝状遺構(S183)及び2号甕棺墓(S175)に沿うように延びる。1号溝状遺構(S183)を切る。全長約15m、幅は0.8mであり、調査区外に南東に延びる可能性がある。法面には階段状になっている箇所も認められた。調査区の東側では溝状遺構を横断して調査区の東壁に至っている。横断部分の法面は階段状の平坦面が認められるほか、H-3グリッドで溝の底部には柱穴が2基並んで検出された。この柱穴を挟んで対になる形で2基の小柱穴のプランが認められ(保存の為に検出してない)、溝を渡るために板材等を置き、橋として使用した可能性も考えられる。



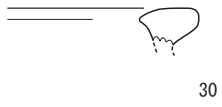
第27図 1号木棺墓 (S105) 実測図及び出土遺物実測図



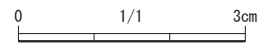
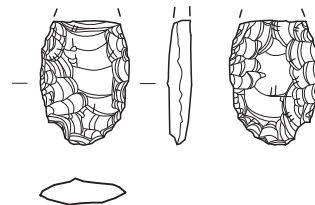
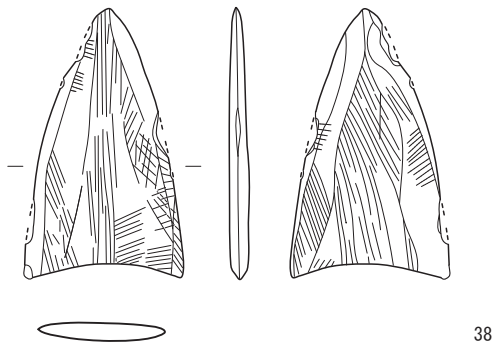
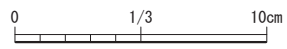
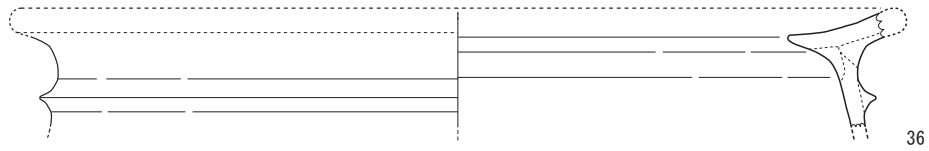
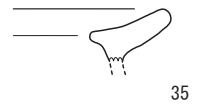
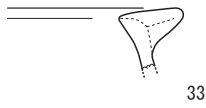
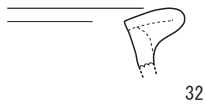
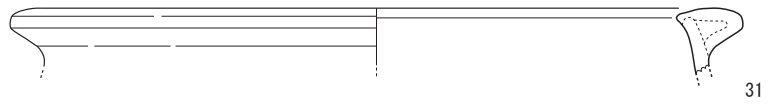


第28図 2号・3号木棺墓 (S180・177) 実測図及び土層断面図

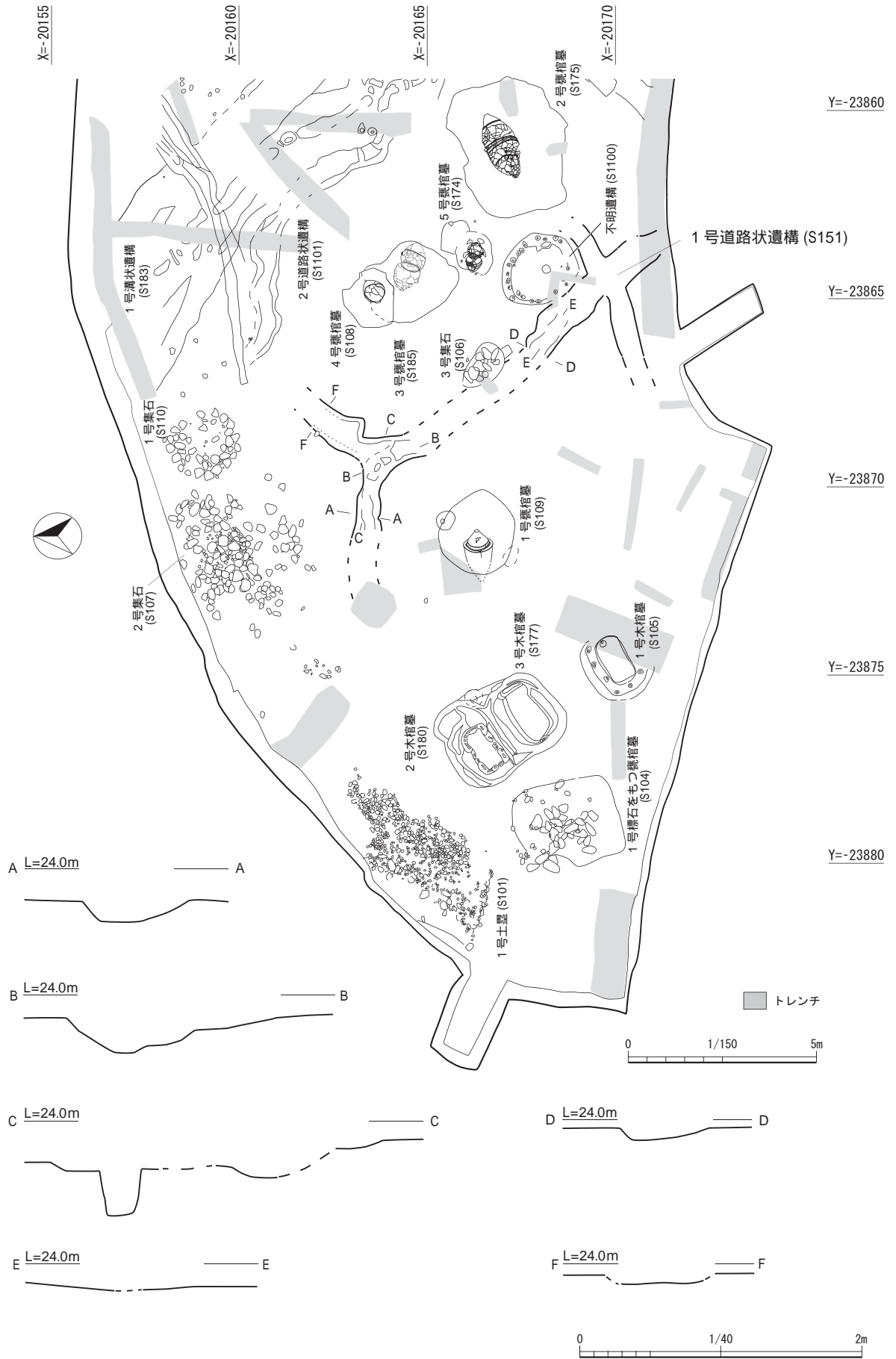
[2号木棺墓]



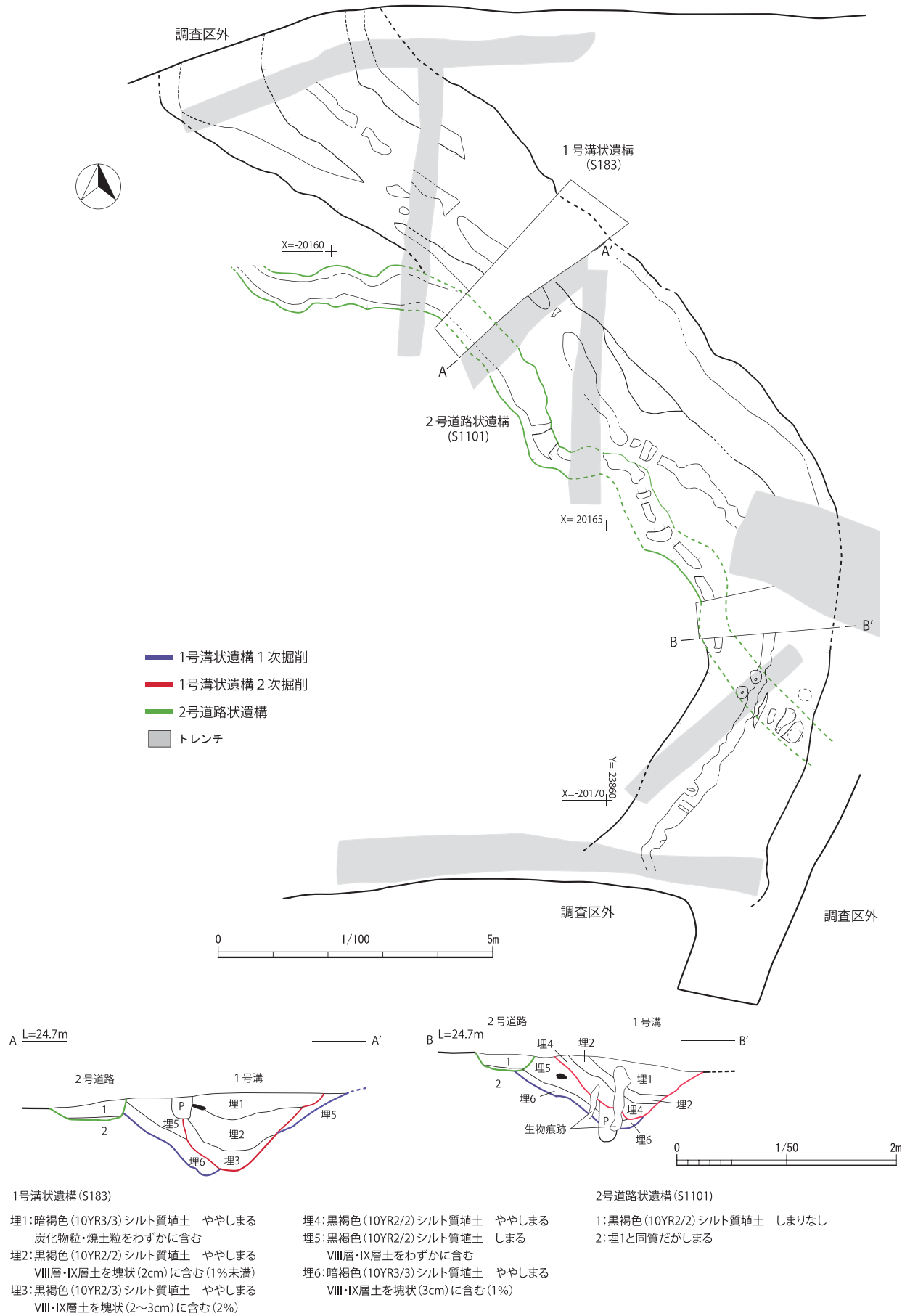
[3号木棺墓]



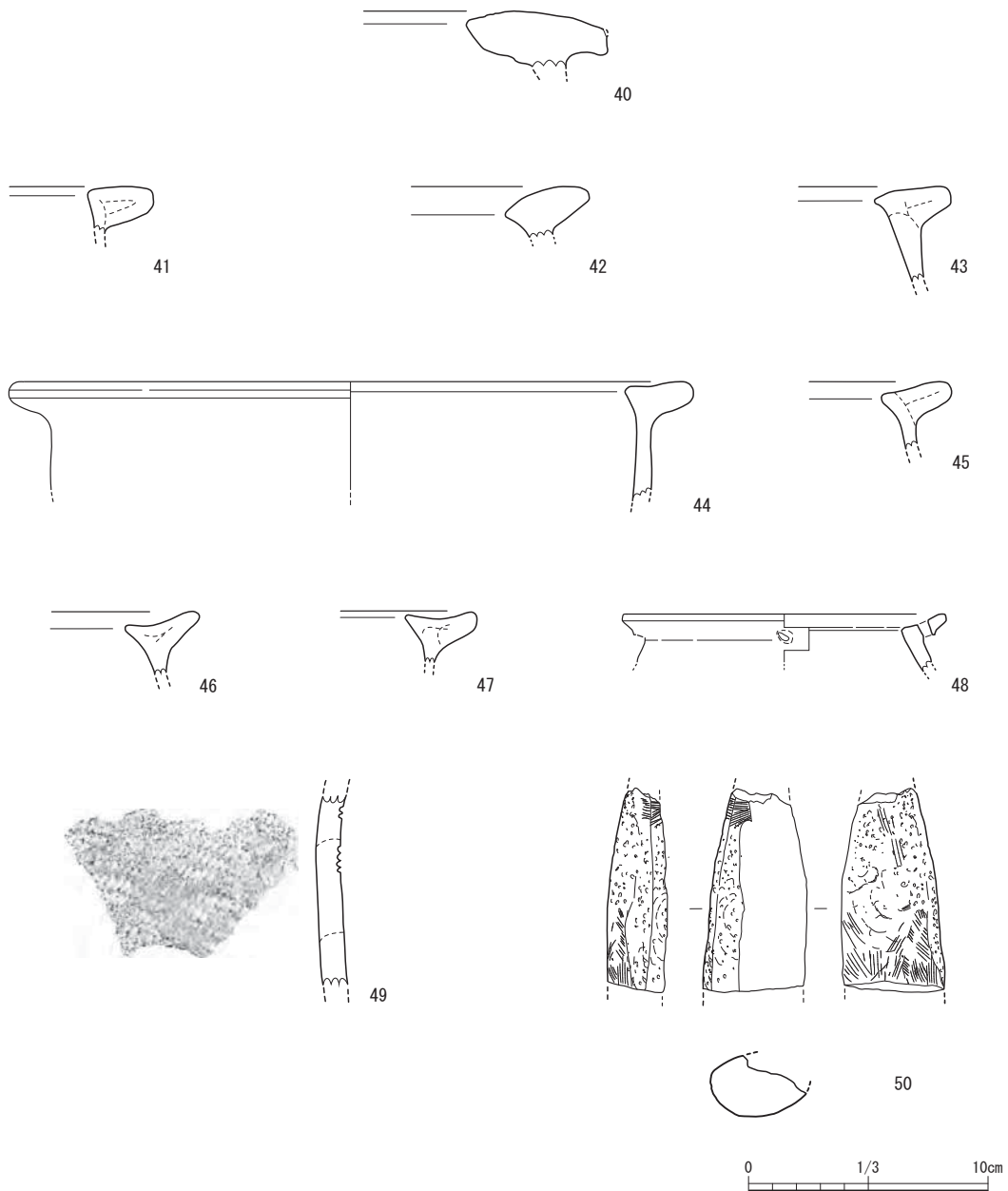
第29図 2号・3号木棺墓出土遺物実測図



第30図 1号道路状遺構 (S151) 平面図及び断面図



第31図 1号溝状遺構 (S183)・2号道路状遺構 (S1101) 平面図及び断面図



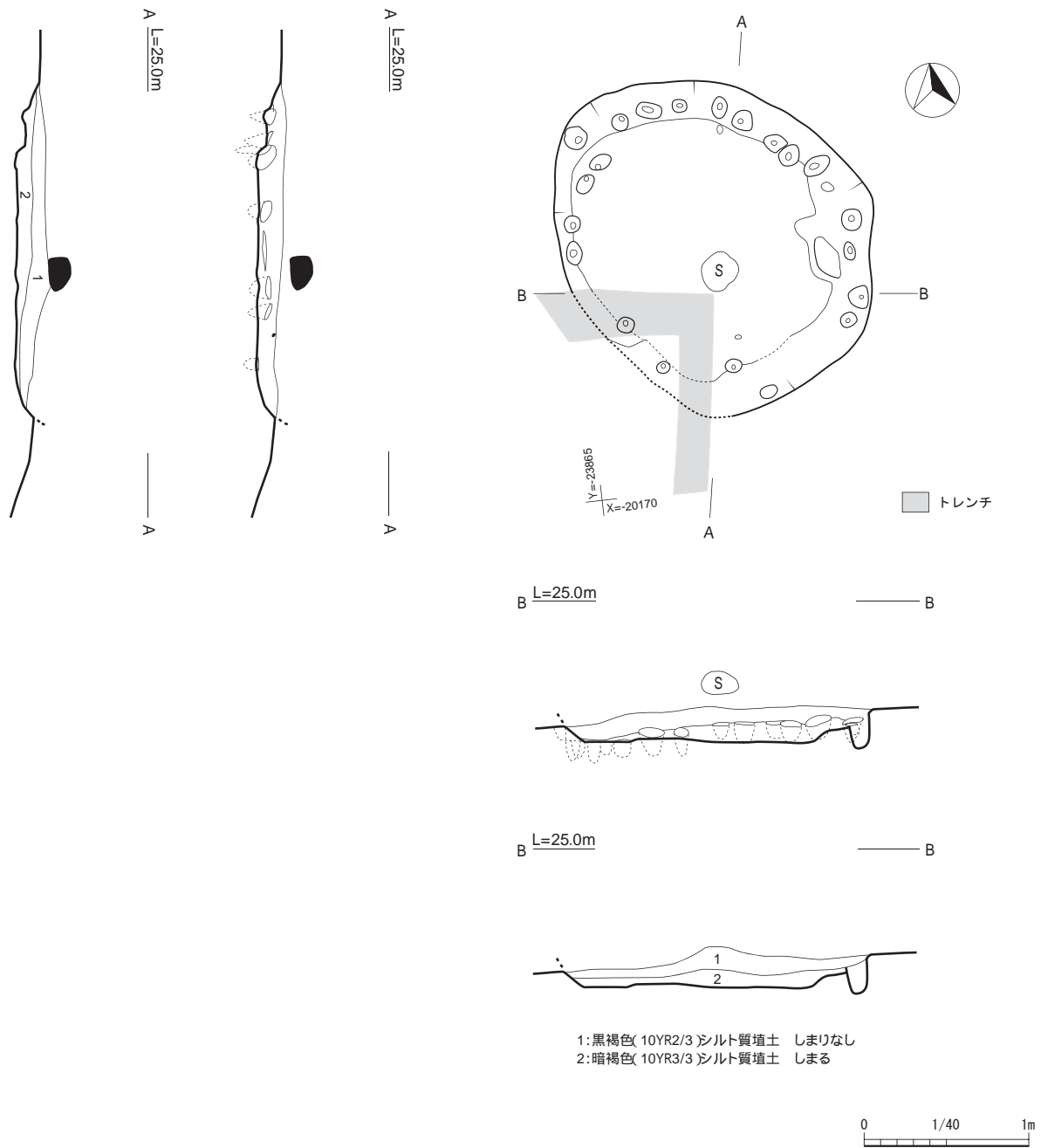
第32図 1号溝状遺構出土遺物実測図

**溝状遺構**

1号溝状遺構【S183】(第31・32図、図版4・5・14・15)

1号溝状遺構はF-1、G-1・2、H-2～4グリッドで確認された。この溝によって墓域を区画したと考えられ、この溝を境として、溝の東側には弥生時代の遺構はなくなる。埋土の状況から①1回目の溝を作る時期(青線)②自然堆積の後に道路状遺構(緑線)と溝状遺構(赤線)を作る時期の2度溝を作る時期が見られる。断面は、上端が大きく開くならかなV字状断面をなす。検出できたもので全長約19m、幅約3.1m、深さ0.84mで、調査区外に北西及び南西に延びる可能性がある。

出土遺物は、弥生土器が中心である。40～48は甕形土器の口縁部である。40は口縁断面がT字状の形状を呈する。41は口縁断面が分厚い三角形で内側に張り出しをもたない。48は口縁に穿孔が入る。49は縄文時代後期の深鉢形土器の胴部と考えられる。50は砂岩製の磨製石斧である。



第 33 図 不明遺構 (S1100) 実測図及び断面図

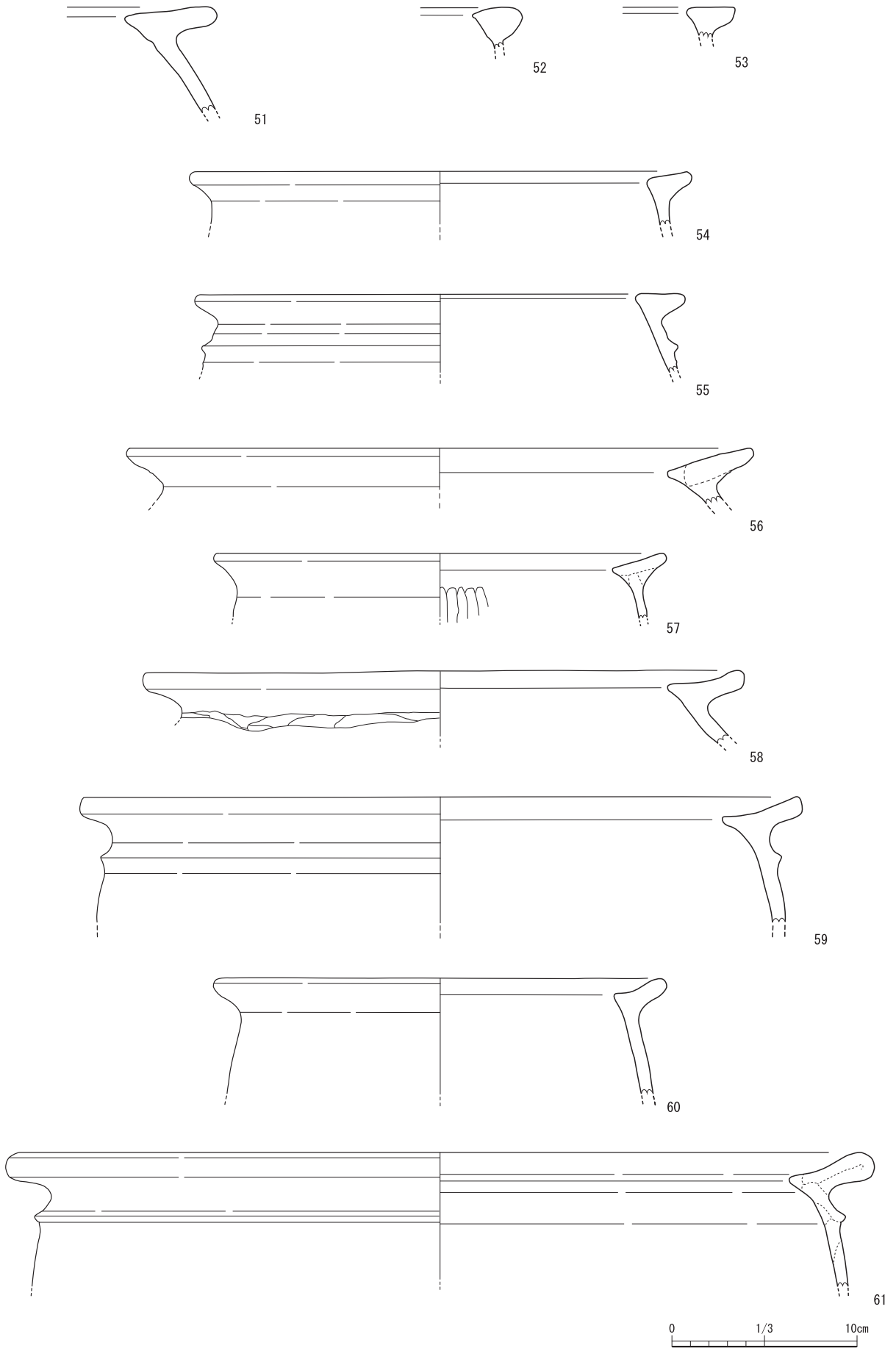
### 不明遺構

1号不明遺構【S1100】(第33図、図版5)

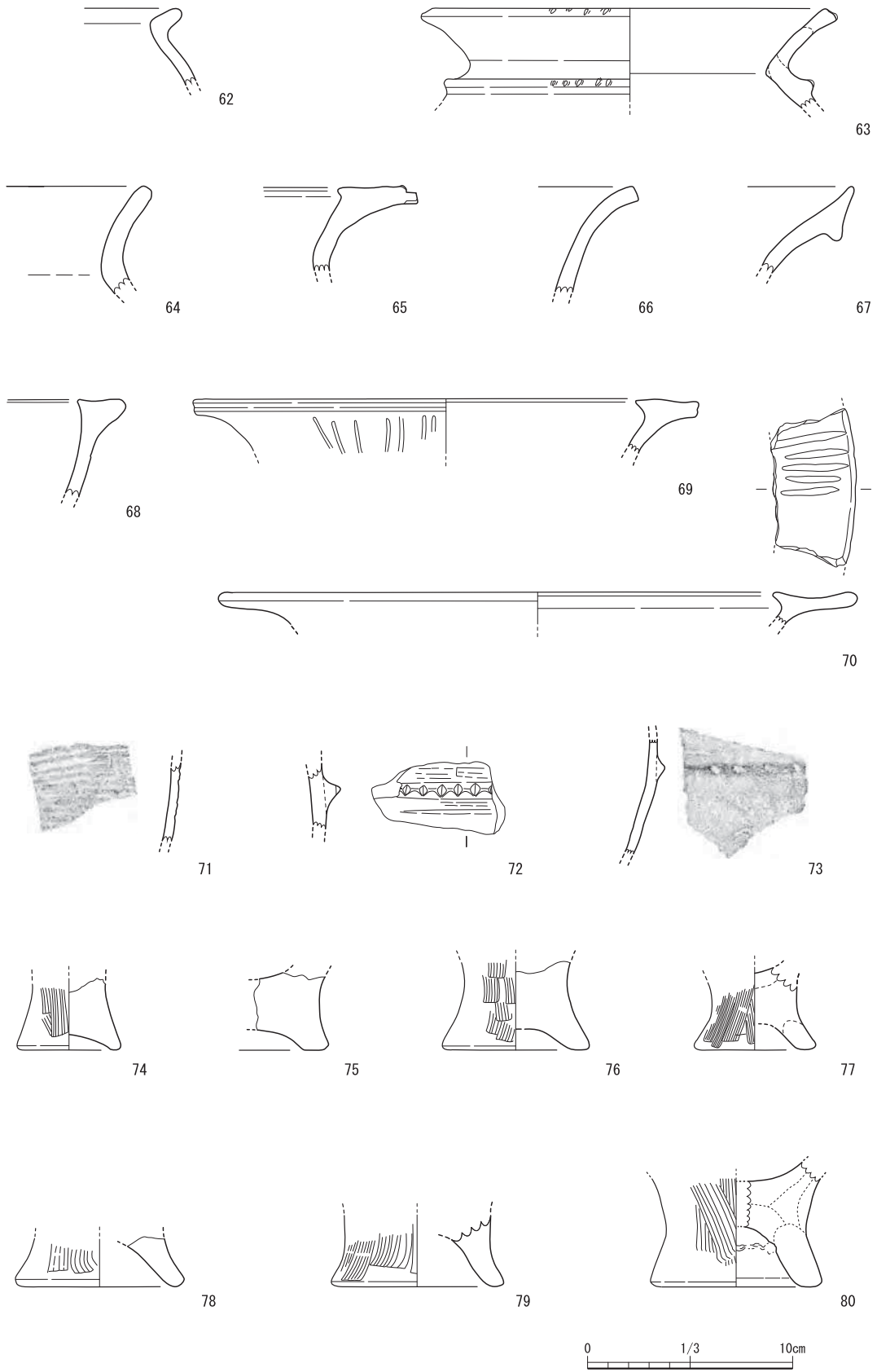
不明遺構は、G 3 グリッドで確認された直径 2m 程の円形状のプランを呈する。円形の中央に人頭大の礫が出土し、遺構の際に沿って、柱穴が廻る。埋土から弥生時代の遺構と考えた。遺跡の保存により、数ヶ所の柱穴は、完掘せずにとどめおいた。

### グリッド出土遺物 (第 34～36 図、図版 15～17)

出土遺物 51～61 は甕形土器の口縁部である。53 は口縁外側に突起部をこしらえている。内器面は赤彩の可能性ある。62 は壺形土器か甕形土器の口縁部、63、65、66、67 は壺形土器の口縁部、64 は甕形土器

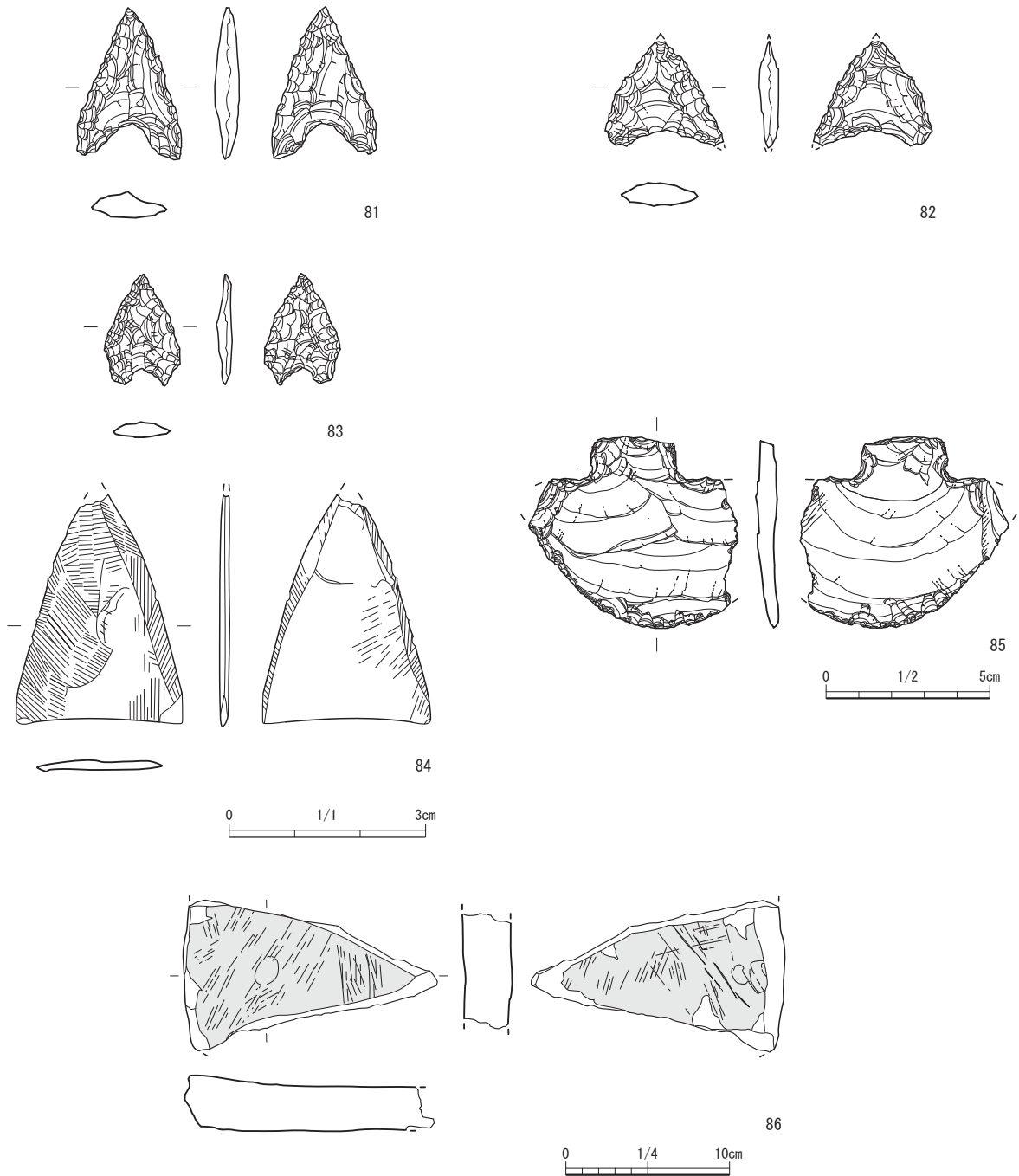


第34図 グリッド出土遺物実測図(1)



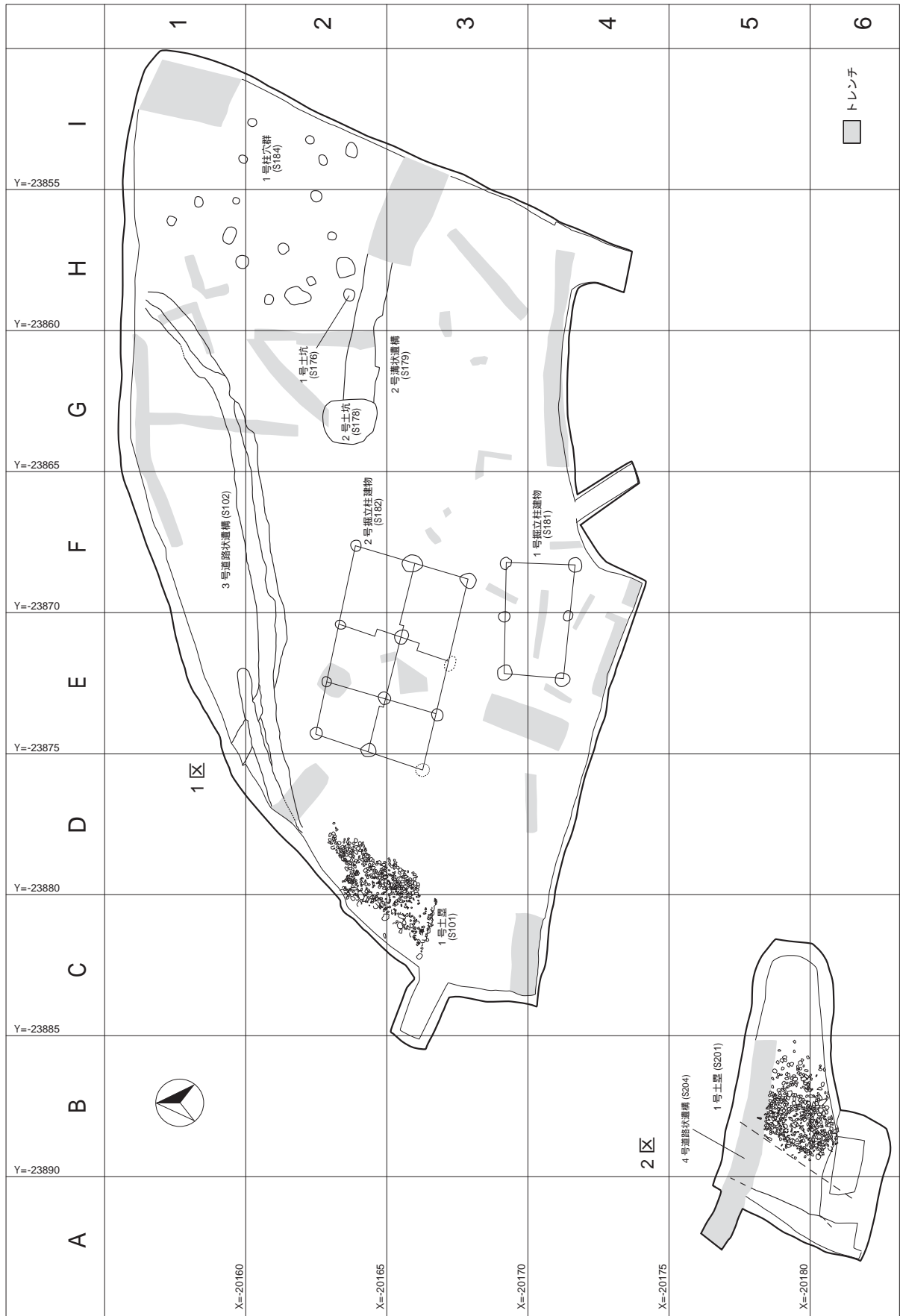
第 35 図 グリッド出土遺物実測図 (2)





第36図 グリッド出土遺物実測図(3)

の口縁部、68は鉢形土器か壺形土器の口縁部と考えられる。69、70は高坏形土器の口縁部で、69は口縁外器面、70は口縁上面に暗文が施されている。71～73は甕形土器あるいは壺形土器の胴部の一部である。74～80は甕形土器の脚部である。81、83は黒曜石製の打製石鏃である。82は安山岩製の打製石鏃である。片側脚部を若干欠損する。先端部は使用による槌状剥離の可能性もある。84は粘版岩製の磨製石鏃で先端部を欠損する。85は安山岩製の石匙で両端部を欠損する。86は砂岩製の砥石の一部である。両面に磨痕がみられる。



第 37 図 弥生時代以外の遺構配置図 (S=1/200)

## -弥生時代以外の遺構-(第37図)

**掘立柱建物**

1号掘立柱建物【S181】(第38・40図、図版5・17)

1号掘立柱建物は、E・F-3・4グリッドに位置する。2間×1間の建物であるが、後述の2号掘立柱建物(S182)とは異なる長軸線を有している点、複数回の柱の立て替えが想定される点、弥生時代の各遺構との重複が見られない点、などの差異があった。この点から、調査中は1号掘立柱建物を弥生期の所産と想定していたのだが、1号と2号とでは遺物の出土状況に差異がなく、年代特定まで至らなかった。

出土遺物87は甕形土器の口縁の一部である。

2号掘立柱建物【S182】(第39・40図、図版5・17)

2号掘立柱建物は、D・E・F-2・3グリッドに位置する。調査過程の不手際で柱穴の一部を消失させてしまったが、3間×2間の総柱建物である。弥生期の1号甕形墓(S109)を切っている。Va層に由来する埋土で、一部には柱痕とみられる埋土の差異も確認できた。短軸側の柱列は長軸側のそれに対して直行せず、平行四辺形状に並んでいる。

出土遺物88は甕形土器の口縁の一部であり、流れ込みと考える。

**柱穴群**

1号柱穴群【S184】(第41図、図版5)

調査区東側のH・I-1・2グリッドで検出された柱穴群もVa層に由来する埋土を有し、一棟分の組み合わせを抽出することは出来なかったが、柱列の軸線は長短ともに2号掘立柱建物(S182)と、同一規格に基づく建物が複数存在していた可能性が高い。柱穴の断面のみを記載した。

**土塁**

1号土塁【S101・S201】(第42・43図、図版5)

1号土塁(S101・S201)は、1区西側C・D-2・3グリッドと2区A・B-5・6グリッドに位置する。版築工法による本体と葺石から構成される。本体を構成する土はいずれも調査区内で確認できるものであり、調査区周辺の土を用いているとみられる。葺石外側と内側でしまり方に差異が認められ、外側の礫群は上位からの崩落による可能性がある。本体土中から時期を特定しうる遺物は見られなかったが、本体がVb層上面に構築されている。

**土坑**

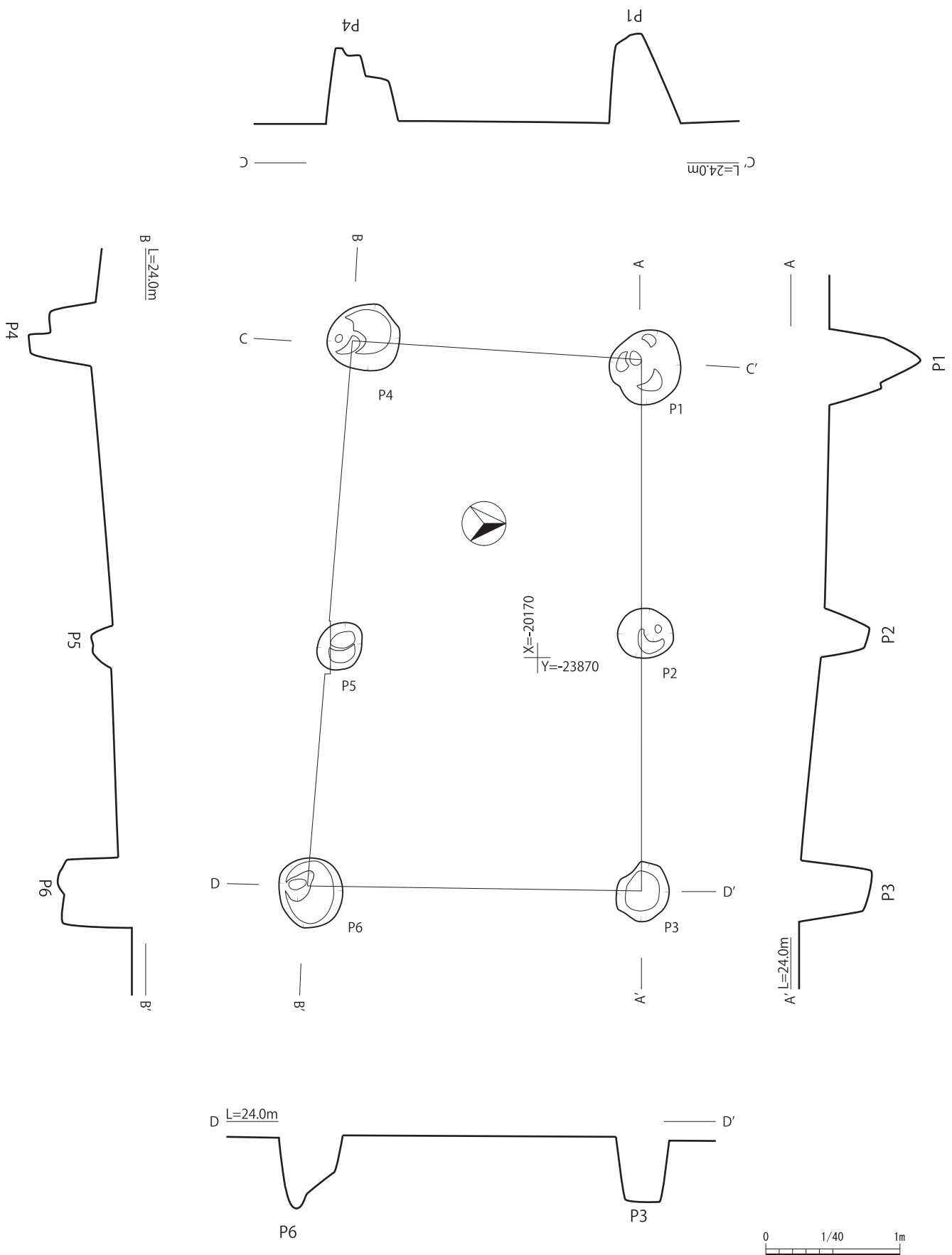
1号土坑【S176】(第44図、図版6・17)

1号土坑はH-2グリッドで検出され、土器を埋設した小土坑である。古墳時代前期後半の所産とみられる高坏89の脚部を折り、坏部を2つに割り重ねて埋納してあった。脚部は出土しておらず、当初から埋納されなかったとみられる。

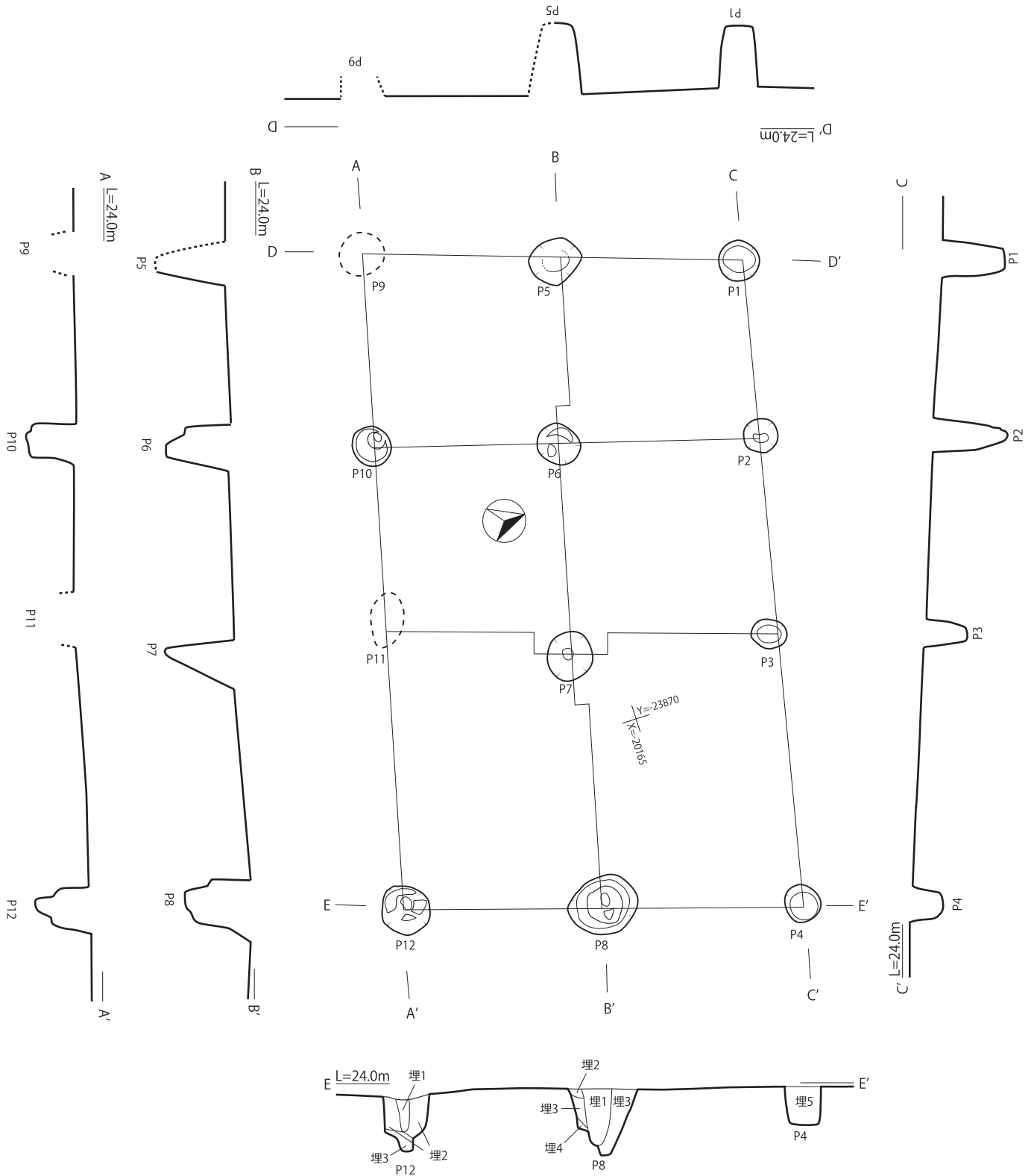
2号土坑【S178】(第45図、図版6・17)

2号土坑は、G-2グリッドで検出された円形プランである。2号溝状遺構(S179)を切っている。V層に由来する埋土を有する。

出土遺物90は瓦質土器片である。火舎とみられるが、細片であるため断定できない。退化した菊花文もしくは梅花文が突帯に沿って施されている。



第38図 1号掘立柱建物 (S181) 実測図



埋1: 黒褐色(10YR2/3) 1mm以下の焼土粒を微量含み、しまり・粘性はない。  
柱痕跡か?

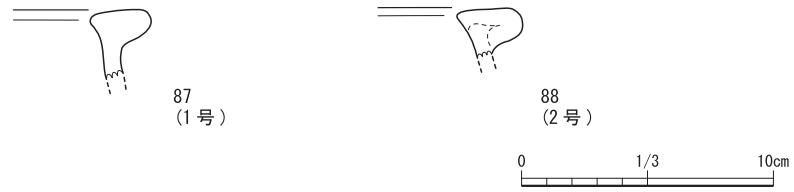
埋2: 黒褐色(10YR2/3) 5mm前後の褐色土粒を若干含み、ややしまり、粘性がある。

埋3: 黒褐色(10YR2/3) 黒褐色土ベースに、褐色土ブロック(1mm)を多く含む。  
ややたたくしまり、粘性がある。

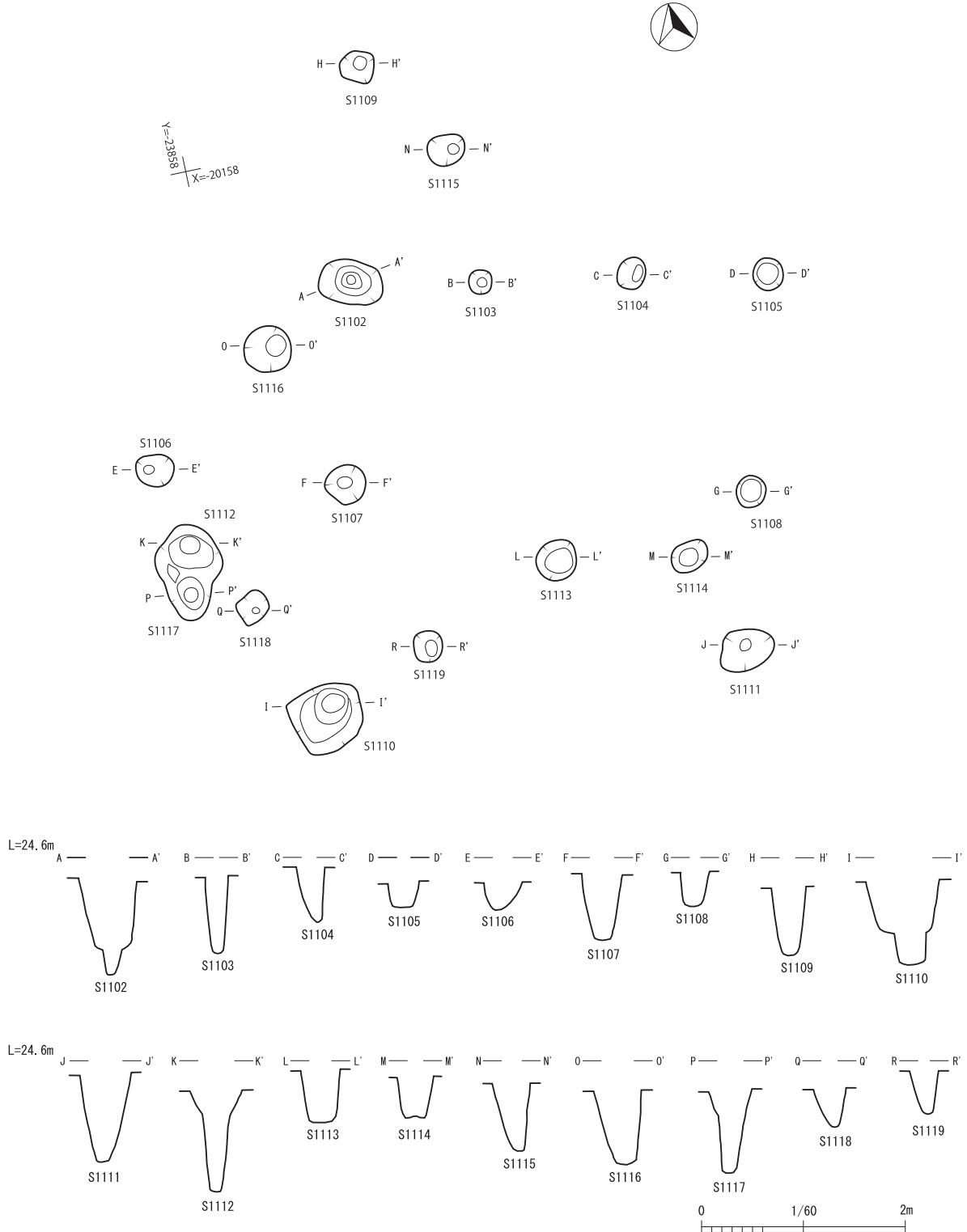
埋4: 暗褐色(10YR3/3) 褐色土粒混在。

埋5: 黒褐色(10YR2/3) 混入物少ない。しまりが強く、やや粘性がある。

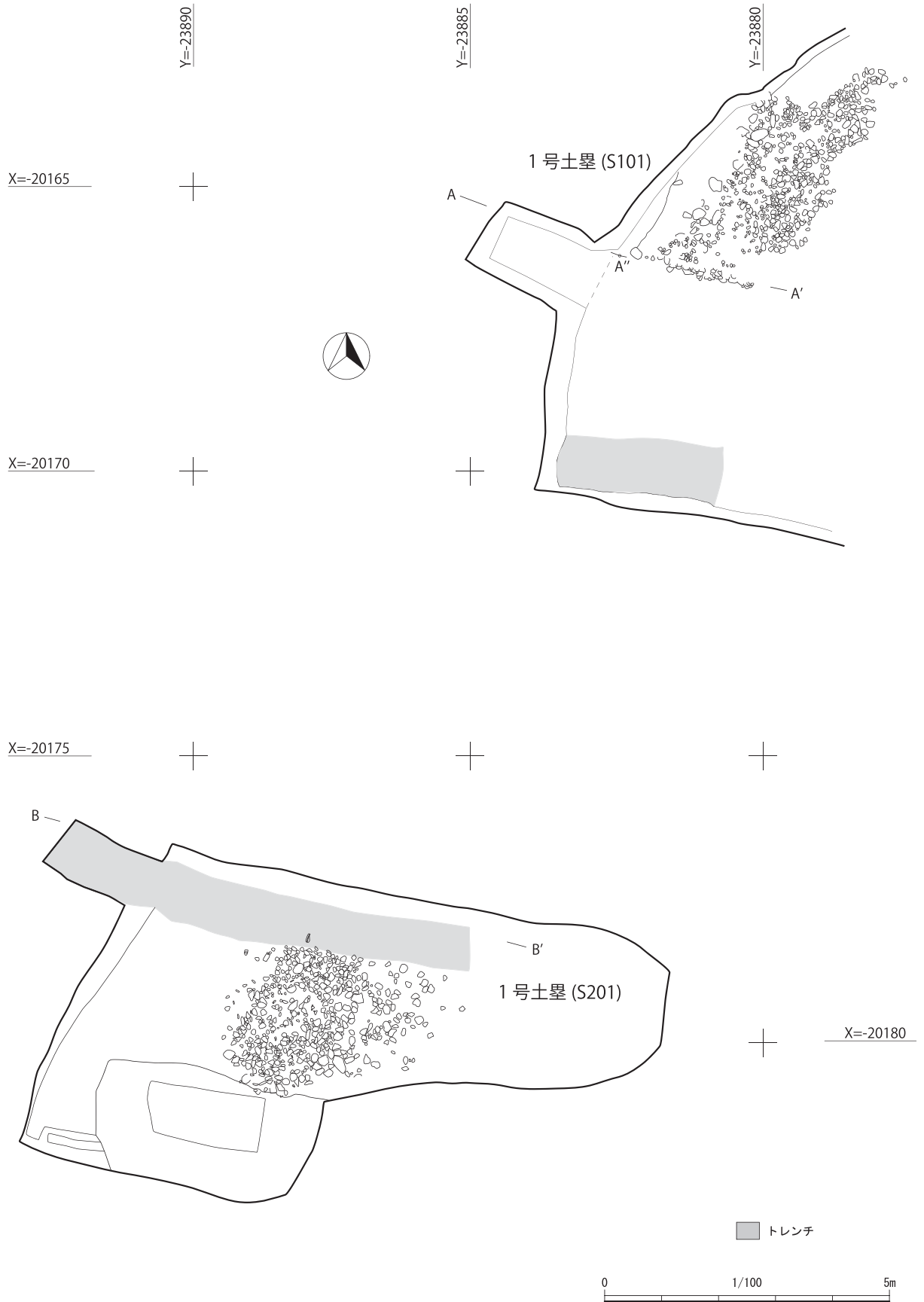
第39図 2号掘立柱建物(S182) 実測図



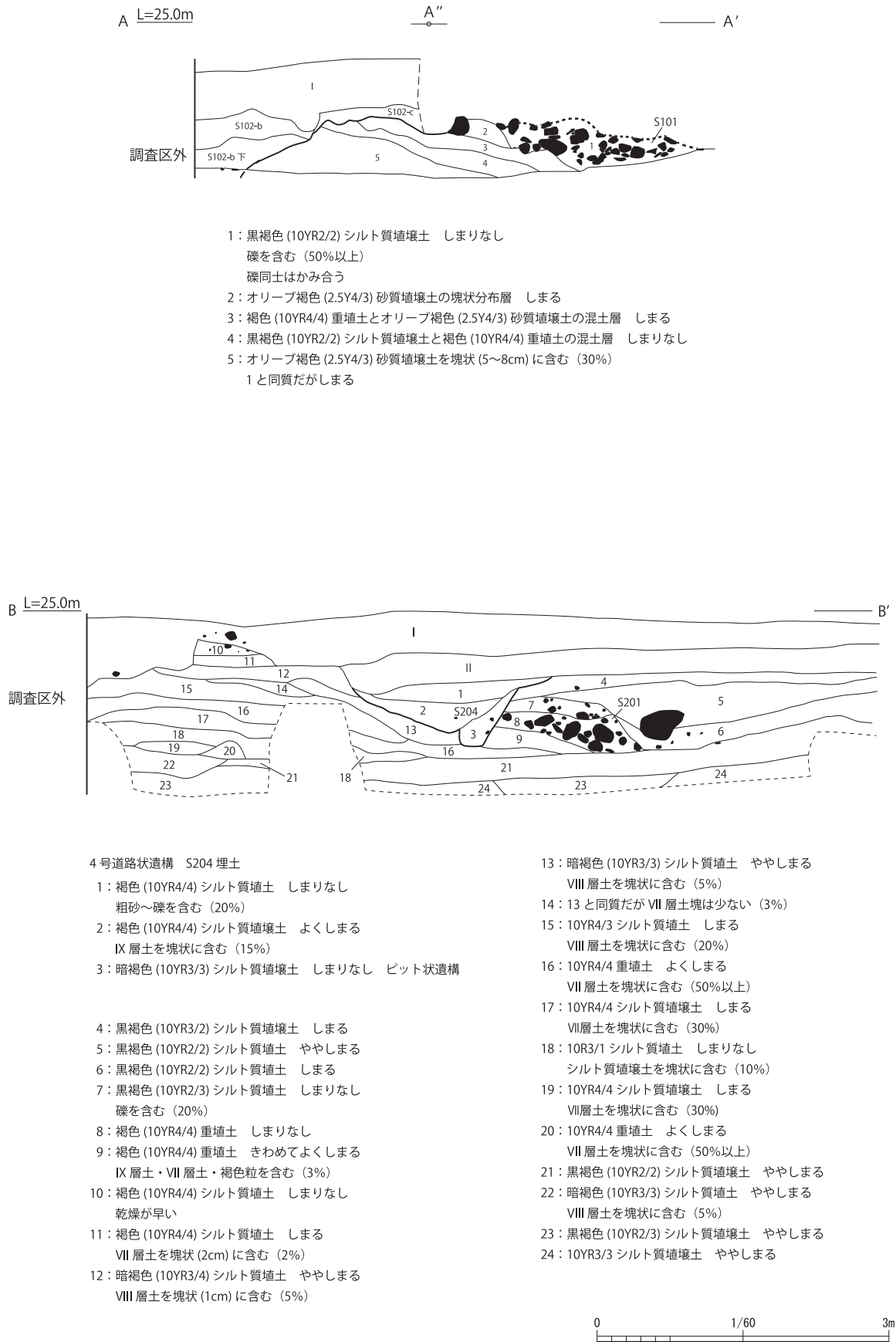
第40図 1・2号掘立柱建物出土遺物実測図



第41図 1号柱穴群(S184)実測図

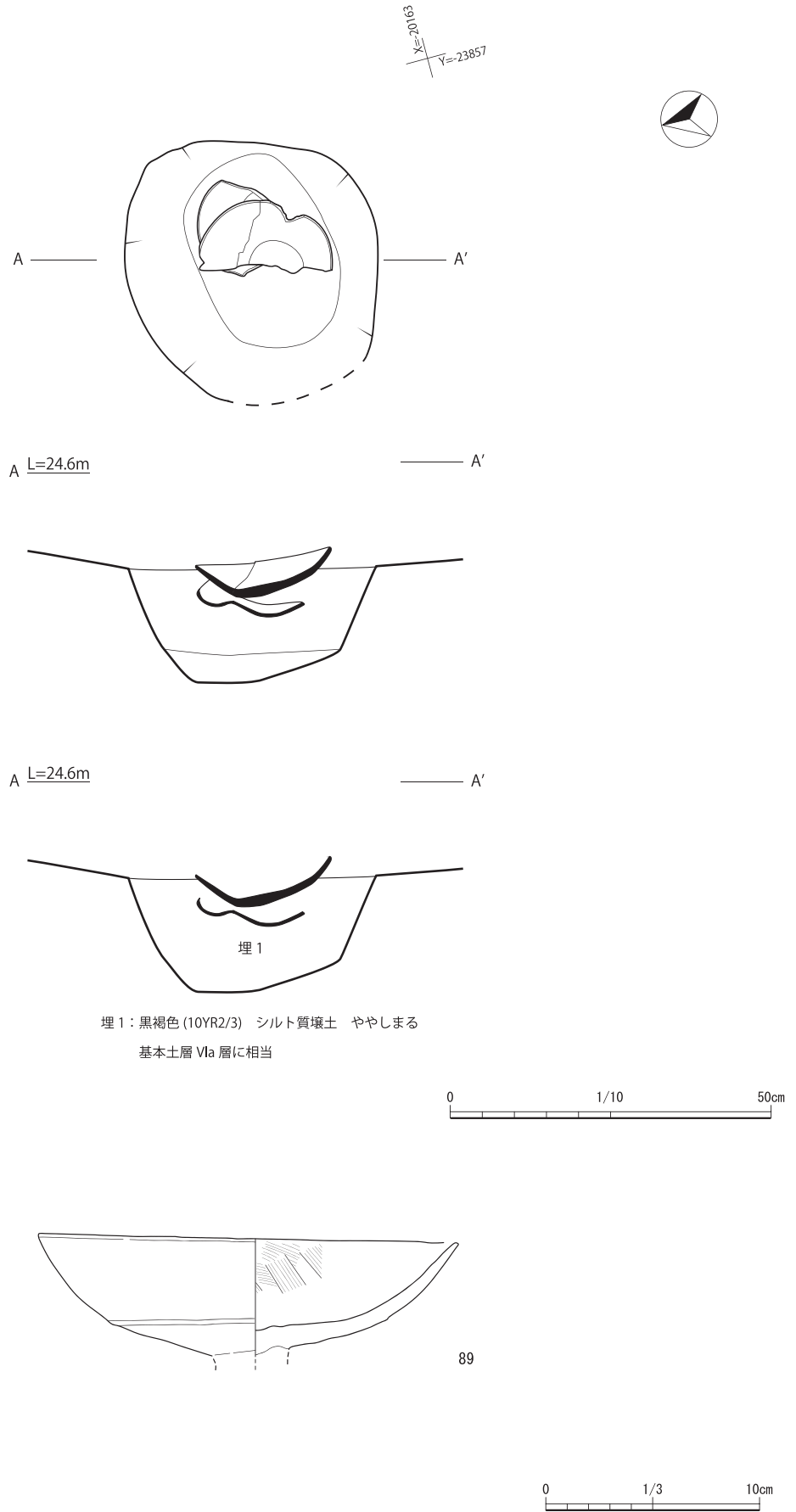


第42図 1号土塁 (S101・201) 平面図

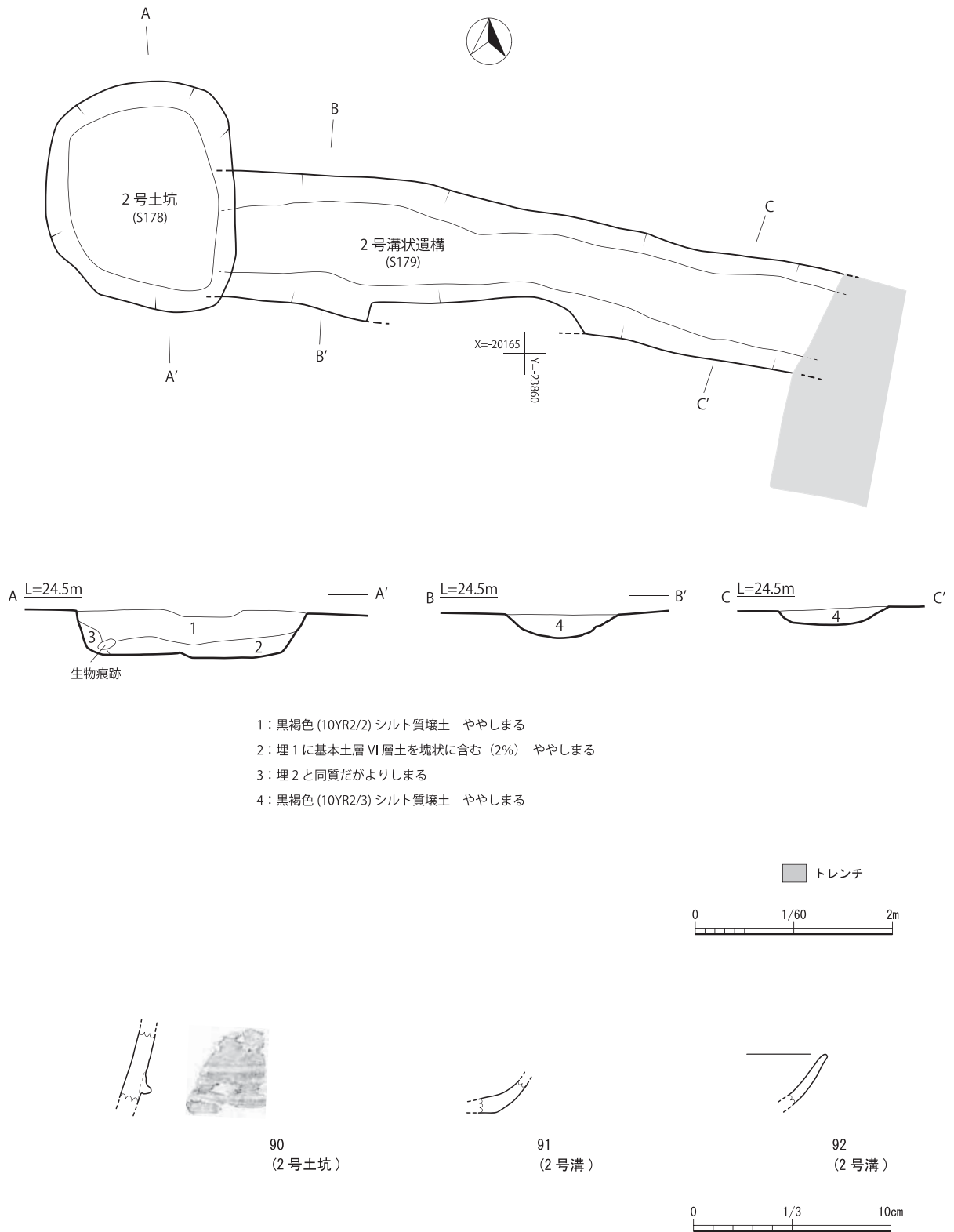


第43図 1号土壘 (S101・201)・4号道路状遺構 (S204) 断面図





第 44 図 1 号土坑 (S176) 実測図及び出土遺物実測図



第45図 2号土坑 (S178)・2号溝状遺構 (S179) 実測図及び出土遺物実測図

**溝状遺構**

2号溝状遺構【S179】（第45図、図版6・17）

2号溝状遺構は、G・H-2グリッドで検出され東西方向に延びる。西端を2号土坑(S178)に切られ、東端は調査区外方向へ延びるため全容は判らない。Vb層に由来する埋土である。

出土遺物91は土師器の小皿で底部に糸切り痕が認められ、中世と考えられる。92は土師器で坏の口縁の一部である。

**道路状遺構**

3号道路状遺構【S102】（第46図、図版6・17）

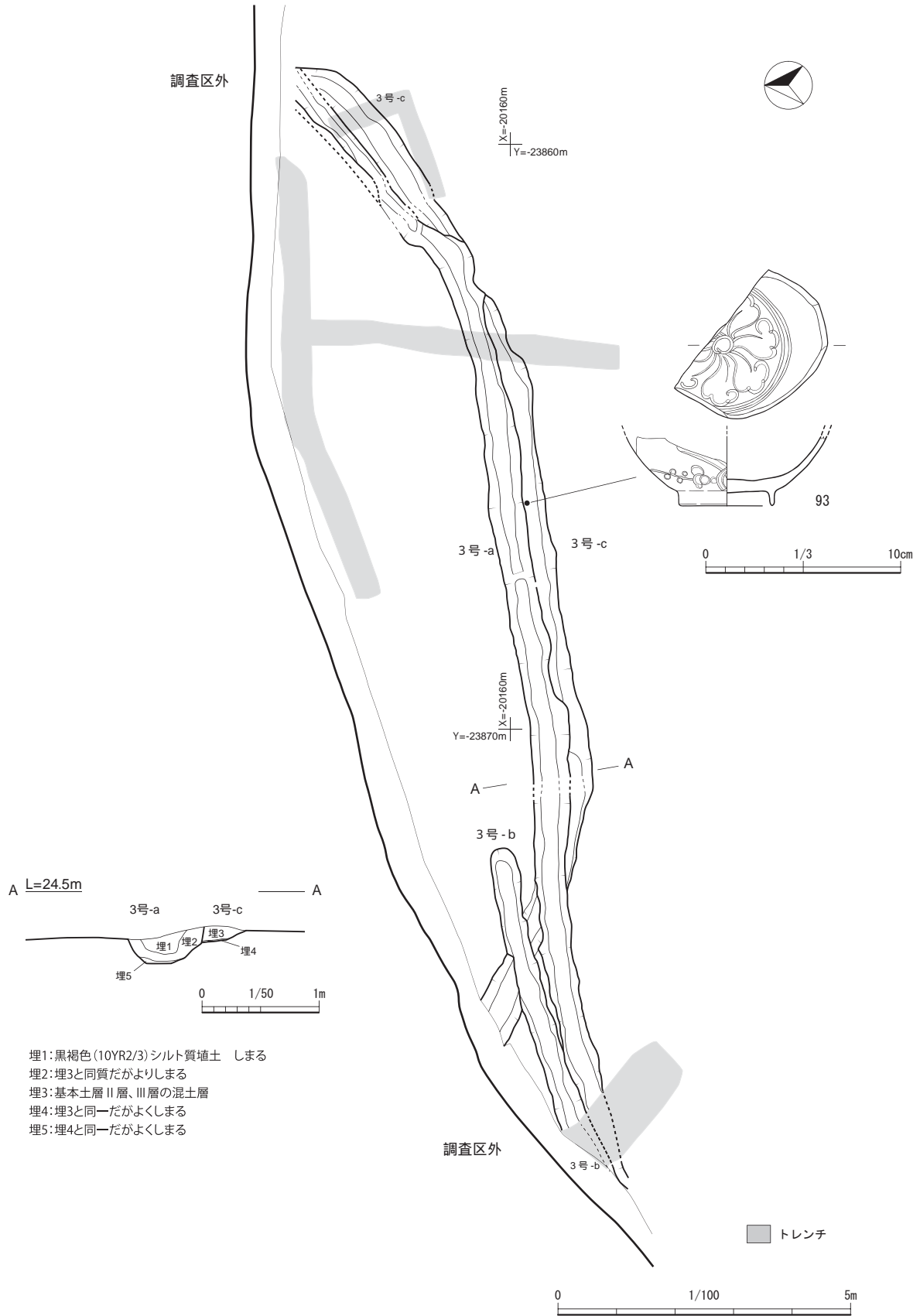
3号道路状遺構は、検出時は1条とみなしていたが、精査の結果3条の重複が確認された。明治35年製地図に記載のある道路とみられるが、最も先行するプランである3号-cからは江戸時代後期とみられる出土遺物93の染付碗が出土しており、道路としての使用は江戸時代後期までさかのぼる可能性がある。同遺構は前述の1号土塁(S101)を切っているが、3号-a・3号-bが1号土塁本体を斜行するよう跨いでいくのに対し、3号-cは葺石と平行するよう土塁本体上面に重なっていることから、3号-cの時点では1号土塁(S101およびS201)の存在、もしくはその痕跡を意識していた可能性がある。

4号道路状遺構【S204】（第43図）

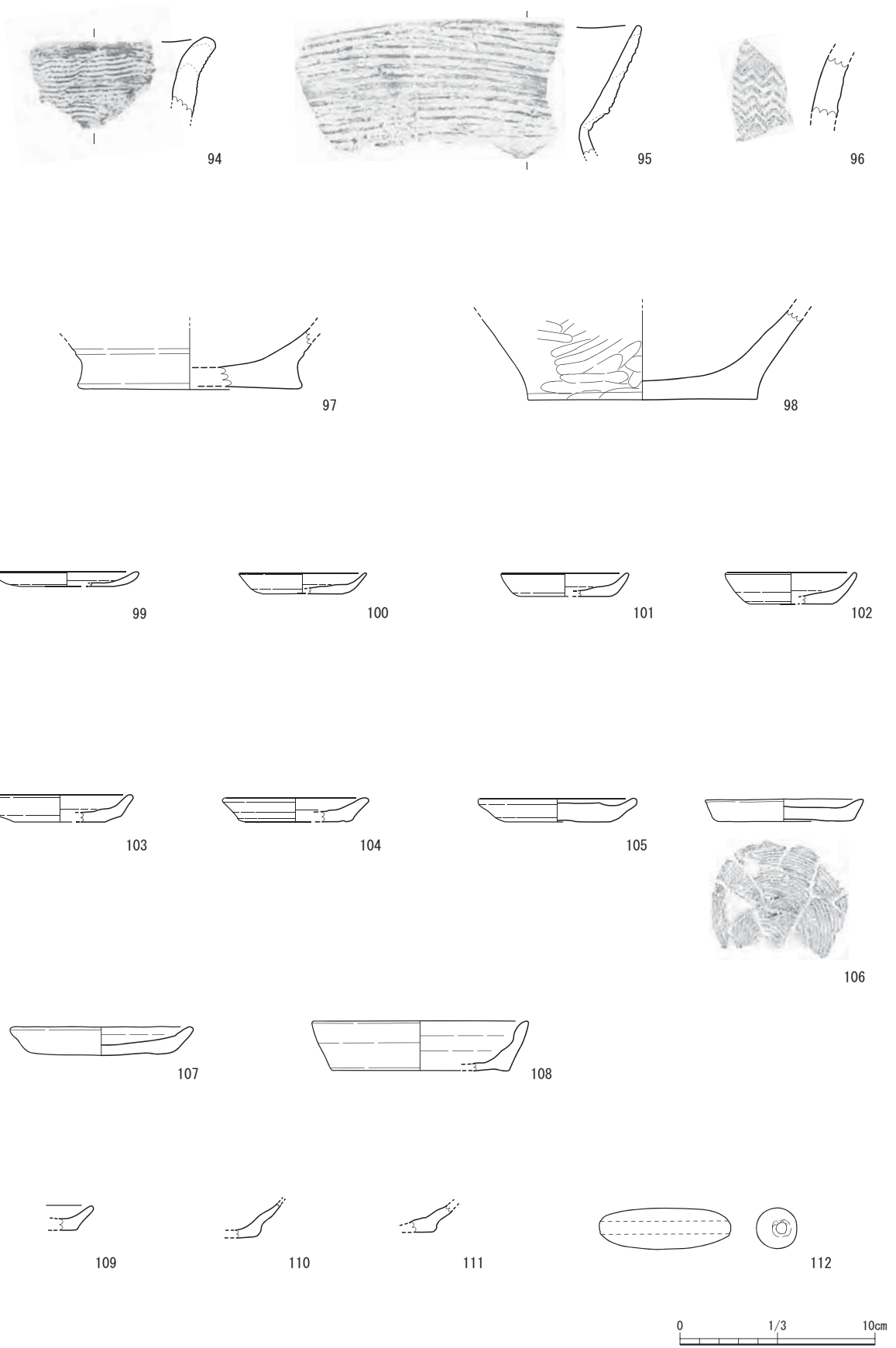
4号道路状遺構は、3号道路状遺構と同一遺構とみられる。

**グリッド出土遺物**（第47図、図版17・18）

出土遺物は、94～96は縄文時代早期の深鉢形土器の口縁部と胴部の一部である。94・95は深鉢形土器の口縁部の一部で条痕文が施されている。96は押型文土器で胴部に押型（山形）文が施されている。97・98は縄文時代の深鉢形土器の底部である。99～107・109は土師器小皿、108は土師器坏で糸切り痕が認められ、中世と推定される。110・111は古代の土師器小皿である。106の体部は短く、立ち上がりは外側へ開き、底部には糸切り痕が認められた。99・107は底部にヘラ切り痕がある。112は土錘である。



第46図 3号道路状遺構(S102)平面図・断面図及び出土遺物実測図



第47図 グリッド出土遺物実測図

## 第4節 まとめ

新南部遺跡群 11 次は、熊本広域大洪水に伴う埋蔵文化財調査に係る協議会より「大変重要な遺跡」との意見をいただいた遺跡である。甕棺墓の上部構造である標石から下部構造まで良好に残存しており、木棺墓などとともに墓域が構成されたことがその理由であった。そこで、土木部河川課との協議の結果、現状で残すことが可能となった。標石をもつ甕棺墓が 2 基、集石 3 基など熊本広域大洪水に伴う埋蔵文化財調査に係る協議会の開催以降の発掘調査は、その時点で掘削を行わず、現状保存にすることとした。そのため、保存した遺構については、そこまでの記録を基に推測して述べることにする。

## 弥生時代

新南部遺跡群 11 次の弥生時代の遺構は、甕棺墓 7 基、うち 2 基は標石をもつ甕棺墓、集石 3 基（下部構造は甕棺の可能性はある）、木棺墓 3 基、溝状遺構 1 条、道路状遺構 2 条が確認され、弥生時代中期の墓域であったと考えられる。当時、墓域の北側は現在と同じ位置に白川が流れていたと想定し、調査区の東側から西側に向かって緩く傾斜していたと推定される。

墓域は段階的に広がりを見せたと考え、最初の段階は、1 号甕棺墓(S109)、2 号甕棺墓(S175)、3 号甕棺墓(S185)の甕棺墓を築造し、区画を意識しながら墓域を形成する。その後、2 号甕棺墓(S175)を意識しながら 4 号甕棺墓(S108)と 5 号甕棺墓(S174)を築造する。木棺墓は 4・5 号甕棺と併行か少し遅れる時期に甕棺墓より川側の方向へ築造し、最後の段階として川際に標石をもつ甕棺墓を築造している。標石をもつ甕棺墓と中世の土塁が川際に存在することから白川の地形はほとんど変化していないと考える。また、1 号道路状遺構(S151)、2 号道路状遺構(S1101)ともに調査区の北西を向くので、当時の墓域の集落は南東方向にあったと推定される。

なお、1 号集石(S110)、2 号集石(S107)は、地中レーダー探査による結果から、甕棺が存在する可能性が高いと考えられる。

### 1. 甕棺墓について

甕棺墓は 7 基検出し、うち 2 基は標石をもつ甕棺墓である。標石をもつ甕棺墓はそれぞれ検出途中で現状保存した。棺内からは副葬品など出土しなかったが、1 号甕棺墓(S109)から骨粉を唯一検出した。検出した 5 基の甕棺墓は、その土器の型式から橋口氏編年の KII c ~KIII a、常松氏編年の中期前葉~中葉に位置づけることができる。

#### (1) 甕棺墓の築造順序

一番古い時期の甕棺墓は、1 号甕棺墓(S109)、2 号甕棺墓(S175)、3 号甕棺墓(S185)と想定する。その中でも、1 号甕棺墓(S109)、2 号甕棺墓(S175)が甕の大きさ及び規模から墓域の中心とし、同じ時期に 3 号甕棺墓(S185)も埋葬された。次の時期に 4 号甕棺墓(S108)、5 号甕棺墓(S174)が埋葬される。4 号甕棺墓(S108)は 3 号甕棺墓(S185)を切っている。5 号甕棺墓(S174)は、2 号甕棺墓(S175)を意識して配置している。

#### (7) 甕棺の時期について

北部九州地方の甕棺の編年については、橋口達也氏、常松幹雄氏が詳細な分類を行っている。また、中九州地方の弥生中期甕棺の編年については、西健一郎氏の論考によって見通しが示されている。ここでは、主にこの 3 つの論文及び調査指導と甕棺の編年に対しご助言をいただいた常松幹雄氏の見解を踏まえ、出土時期の設定を行った。新南部遺跡群 11 次の主な甕棺墓は、その土器の型式から橋口氏編年の KII c ~KIII a、常松氏編年の中期前葉~中葉に位置づけることができる。

・新南部遺跡群 11次Ⅰ期甕棺墓

Ⅰ期甕棺墓は、1号甕棺墓(S109)、2号甕棺墓(S175)、3号甕棺墓(S185)と想定する。1号甕棺墓(S109)の上甕・下甕、2号甕棺墓(S175)の上甕・下甕は、口縁が内側に大きく張り出し、外側への発達はありません、外側に低く傾斜する橋口氏編年のKⅡc式の特徴に該当する。1号甕棺墓(S109)の上甕には口縁下に三角突帯が1条入り、上半部が内湾する鉢形土器である。3号甕棺墓(S185)は胴部に丸みをもつ甕形土器である。3号甕棺墓(S185)の上甕は、口縁部を打ち欠いてあり、その口縁部は調査区内出土の遺物と接合し、復元できた。復元した口縁の上面は平坦で、内側に発達している部分が打ち欠いてあった。突帯は口縁下になく、胴部に2条めぐることから、橋口氏編年のKⅡc式の特徴に該当する。3号甕棺墓(S185)の下甕は、上甕の口縁と同じように、口縁上面が平坦で、内側に発達していると思われる部分が打ち欠いてある。突帯は口縁下に華奢なM字突帯が1条、胴部に三角突帯が2条めぐる。Ⅰ期甕棺墓は橋口氏編年では中期前半、常松氏編年では中期前葉に位置付けられる。

・新南部遺跡群 11次Ⅱ期甕棺墓

Ⅱ期甕棺墓は4号甕棺墓(S108)、5号甕棺墓(S174)を想定する。4号甕棺墓(S108)の下甕は、胴丸の甕形土器で、平縁の内傾した口縁を持つ。突帯は胴部に三角突帯1条を貼付する。梅ノ木遺跡Ⅱの甕形土器の編年から4Aと4Bの間の時期と似た器形をしている。5号甕棺墓(S174)は、壺形土器である。内側に張り出しを持つ口縁で、直線的な頸部が外傾し、肩部はごくわずかに丸みを有する。

Ⅱ期甕棺墓は、総合的に考えると、弥生時代中期前葉～中葉に位置すると思われる。

(イ) 甕棺墓の築造を埋納深度からの検証（標石をもつ甕棺墓を除く）

1号甕棺墓(S109)と2号甕棺墓(S175)、3号甕棺墓(S185)の埋納深度を比較すると1号甕棺(S109)に比べ2・3号甕棺墓(S175)が40cm～60cm程浅い位置に埋設してあるが、弥生時代の地形及び現在の地形も東側から西側に緩やかに傾斜しているため、この差異は自然地形と考えることができる。

1号～5号の甕棺墓の墓坑底部の標高の比較を行った結果（自然地形を加味する）1・2・3号甕棺墓に比べ、4・5号甕棺墓はおよそ50cm～70cm程高くなる（第48図）。

このことから、4・5号甕棺墓はより高い位置から墓坑の掘り込みが行われたと考えられ、盛土の形成後に築造された可能性が想定される。

以上のことと、1号溝状遺構（区画溝）を築造する際の排土を考慮すると、次の順で墓域を形成したと想定した。

- ① 1・2・3号甕棺墓は弥生時代の当初の地面から墓坑を掘る。
- ② 1号溝状遺構（区画溝）の掘削と同時に2号甕棺墓(S175)の周辺に盛土をする。  
※盛土の土は、1号溝状遺構から出た排土を使用したと考える。
- ③ 4号甕棺墓(S108)と5号甕棺墓(S174)を盛土した地面から墓坑を掘る。



1号標石をもつ甕棺墓

(2) 標石をもつ甕棺墓と集石について

標石をもつ甕棺墓は、2基検出している。当遺跡の標石をもつ甕棺墓の特徴は、標石が礫群になること、標石から底のレベルまでが深いこと（1号標石をもつ甕棺墓・2号標石をもつ甕棺墓とも甕棺墓の上面のみの検出であるが標石から甕棺上面までの深さが1号標石を持つ甕棺墓が約1.3m、2号標石を持つ甕棺墓が1.68mあるので基底部までは2m～2.5m程になる可能性が高い）。また、標石を含め、上部構造から下部構造まで保存状態よく現在まで残っていることが挙げられる。九州での標石の類例はあるが、標石が礫群になる類例は管見で、福岡市吉武高木遺跡、下関市梶栗浜遺跡がある。

1号標石をもつ甕棺墓（S104）は、保存されたことで、写真の通り甕棺の口縁部の合わせ口の周辺を確認するにとどめた。標石はコの字形に並ぶように見える。甕棺は上甕、下甕ともに甕の組み合わせで2段墓坑になる可能性が高い。口縁の合口部付近には目張り粘土が残っていた。上甕、下甕ともにほぼ水平に据えてあると思われる。口縁部の大きさから推定すると大型の甕棺墓になる可能性が高い。下甕の口縁下には突帯がめぐる。

2号標石をもつ甕棺墓（S203）も、現状保存のため、甕棺の上甕を確認するにとどめた。本調査区内の標石及び集石と比較しても標石の大部分の礫が大きい。標石から甕棺墓の上甕上面までの深さは、1.68mでこの調査区の甕棺墓で一番深くなる。甕棺墓の実測は、安全確保の為実施できなかった。上甕は底広の鉢形土器で、下甕は口縁の口唇部のみの確認であるが、壺形土器か甕形土器であると考えられる。底径は約10cmと思われる。

集石は3基出土した。1号集石（S110）、2号集石（S107）は集石の平面ラインを確認するにとどめた。3号集石（S106）は半裁した状態で保存となった。

1号集石（S110）は円形状に並び、2号集石（S107）はいくつかのまとまりがある様に見える。地中レーダー探査の結果、川際にある1号集石（S110）、2号集石（S107）の周辺から、他の甕棺と同様の深さで湾曲する可能性のある対象物の反応を確認できたことから、1号集石（S110）、2号集石（S107）は標石をもつ甕棺墓になる可能性が高い。3号集石（S106）は地中レーダー探査を行っていない。

2. その他の遺構について

木棺墓は3基検出した。甕棺との切り合いがないので新旧を考えるのは難しいが、埋土遺物からしても新南部遺跡群11次I期甕棺墓より後出する。1・2・3号木棺墓、それぞれが違う作りの木棺墓である。2号木棺墓（S180）は、3号木棺墓（S177）に切られ、2・3号木棺墓の頭位は、共に同じ方位を向く。3号木棺墓（S177）の主体部中央の底部より磨製石鎌が一点出土した。刃部に使用痕があるため、被葬者の死因となった可能性が考えられる。

道路状遺構は2条検出した。1号道路状遺構（S151）は、遺構内から遺物が出土せず、築造時期は不明であるが、甕棺墓と切り合うことがなく、十字路状及びT字路状に分岐している箇所があり、1号甕棺墓（S109）、2号甕棺墓（S175）、3号甕棺墓（S185）の甕棺墓を意識しながら形成したと考える。2号道路状遺構（S1101）は、2号甕棺墓（S175）を意識しながら1号溝状遺構（S183）の際を墓域中央に向かって延びる。1号道路状遺



2号標石をもつ甕棺墓



構と2号道路状遺構がつながっていたかどうか、今調査では検出できなかったがつながっていた可能性はある。

1号溝状遺構（S183）は墓域とそれ以外の区域を分ける区画溝と想定し、区画溝は2区で確認できなかったが、南西方向に伸びる可能性が高く、川際をめぐる可能性もある。築造時期は新南部遺跡群11次甕棺墓Ⅰ期と新南部遺跡群11次Ⅱ期甕棺墓の間の時期と想定する。墓域の範囲は、新南部遺跡群11次の調査区よりも広くなることは確かであろう。

### 3. その他

#### (1) 出土遺物について

調査区内から出土した弥生土器は、器形の特徴などからそのほとんどが北部九州及び中九州の弥生時代中期にあたる土器と考えられる。木棺墓、集石遺構、溝状遺構、道路状遺構については埋土の特徴や共伴する遺物などから甕棺墓の時期とほぼ同時期と考えることができる。

#### (2) 3号甕棺墓(S185)の口縁について（第49図）

調査区内で3号甕棺墓(S185)の上甕の頸部で打ち欠かれた口縁部の破片を第49図で示した1号甕棺墓(S109)周辺で検出し、それらの破片は1/5程度接合できた。また、その口縁部は口縁内側の突起部分が打ち欠いてあった。このことから、口縁部を打ち欠く行為が墓域内で行われたと想定でき、これらの打ち欠く行為が祭祀行為であった可能性も考えられる。

他にも甕の口縁の破片が1号集石（S110）、2号集石（S107）周辺からも検出し、口縁は1/2程度を接合した。現時点で確認している甕棺とは接合しないが、3号甕棺墓(S185)の口縁と同様に、現状保存となり検出していない甕棺の一部の可能性もある。

## 中世

1号土塁（S101・S201）を最初に覆ったVa層に伴う遺物群と、2号土坑（S178）出土資料との間には約400年の時間差を設定できるが、今調査においては両者の間に属する資料が確認されておらず、時間的連続性はきわめて希薄であると判断できる。資料数は前者が圧倒的に多く、同遺構の使用期間は前者を主とした短いものであった可能性が高い。

2号掘立柱建物（S182）・柱穴群（S184）からは年代を特定しうる資料を確認できていないが、各建物を構成する柱穴の埋没後に遺物群が持ちこまれたと仮定することは可能であり、遺物群と非常に近接した年代を想定しうる。調査区の存在する地名が字三ツ石居屋敷である点を考慮すれば、当該時期の調査区が土塁に囲まれた居館的な性格を帯びていた可能性が高い。

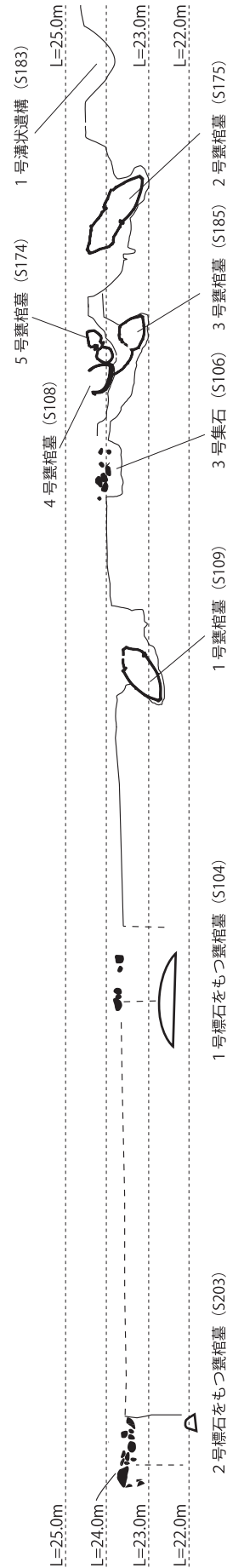
白川を隔てた対岸に中世城跡（立田城）の存在が伝えられているが、同城は調査区周辺を領していたとされる立田氏の居城であったとみられており、今調査において確認されたこれらの遺構群は同氏に関わる施設であった可能性も考えられる。

## 近世以降

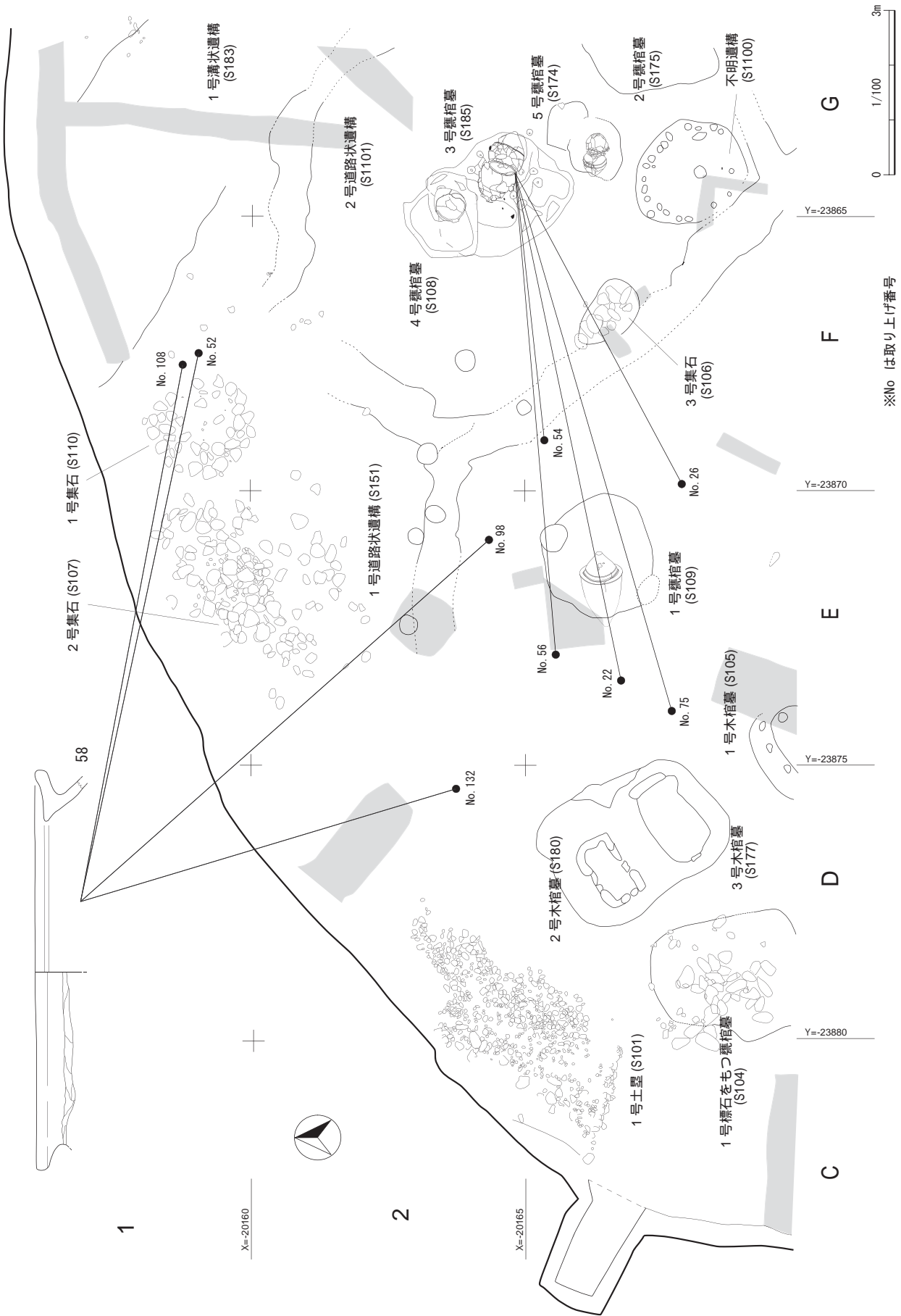
3号道路（S102-c）はIV層を切り込みつつ掘削されている。IV層を構成するシルト質砂土は水性堆積土である可能性が高く、白川水位の一時的上昇に伴う土砂の沈殿作用によって形成されたとみられる。遺物の出土を見なかったため具体的に年代を絞り込むことは困難であるが、IV層の形成時期が中世後期～近世後期の範疇であると想定することは可能であろう。今次調査においてV層以下の層序からこのシルト質砂土は確認されておらず、同土の混入をもって中世期以前と近世期以降とについて年代判別の手がかりにすることが出来た。このIV層土を伴う埋土を有する遺構は上記3号道路（S102）以外には確認されていないが、Ⅱ層土はよく攪拌

表1 甕棺墓及び甕棺一覽表

挿図番号	遺構名	遺構規模(m)		埋設軸	埋納角度	挿図番号	報番	器形	甕法量(cm)			
		長軸	短軸						高さ	口径	最大径	底径
7	1号甕棺墓 S109	2.30	2.09	N-84° -E	34	8	4	鉢	51.3	61.6	11.1	42.9
							5	甕	62.5	75.7	10.2	118.0
9	2号甕棺墓 S175	3.47	2.90	N-113° -W	36	11	6	甕	62.4	70.6	10.8	99.5
						12	7	甕	60.1	73.1	13.5	106.8
15	3号甕棺墓 S185	2.40	2.35	N-71° -W	30	17	11	甕	(45.6)	61.6	9.2	(78.9)
							12	甕	45.7	62.3	10.5	78.5
18	4号甕棺墓 S108	1.60	1.30	N-113° -W	44	19	13	甕	44.8	52.8	8.1	69.9
20	5号甕棺墓 S174	1.21	0.91	N-87° -E	35	21	16	壺	22.5	38.7	6.6	43.3
							17	壺	23.1	41.0	5.6	54.5



第48図 甕棺墓埋納深度比較図



第49図 調査区遺物出土状況図

された土質であるにも関わらず比較的平滑な堆積状況を呈していたことから、当該時期における調査区は耕地、それも畑作としての利用を想定することが可能であろう。その性格は近代期を通じて継承され、昭和後半期の居住空間造成を経て現在へと至っている。

## その他の時代

縄文時代、古代の遺物がわずかに出土している。いずれも細片で少量であるため詳細な年代を特定する根拠に乏しい。

### 《引用・参考文献》

- 常松幹雄 2013 「墓と副葬品から見た北部九州の弥生社会」『新修福岡市史特別編』福岡市
- 常松幹雄 2008 最古の王墓—吉武高木遺跡（シリーズ「遺跡を学ぶ」）新泉社
- 常松幹雄 2007 「北部九州における 弥生時代の区画墓と標石」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』  
島根県古代センター
- 橋口達也 2005 『甕棺と弥生時代年代論』雄山閣
- 西健一郎 1982 「熊本県における弥生中期甕棺編年の予察」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』  
森貞次郎博士古希記念論文集刊行会
- 西健一郎 1983 「黒髪式土器の基礎的研究」『古文化談叢第12集』別刷 九州古文化研究会
- 藤尾慎一郎 1989 「九州の甕棺—弥生時代甕棺墓の分布とその変遷」『国立歴史民俗博物館研究報告第21集』  
国立歴史民俗博物館
- 緒方勉 1978 「黒髪式土器雑考」谷頭遺跡 谷頭遺跡調査団
- 横山邦継 2008 「吉武遺跡群XX」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第1018集』福岡市教育委員会
- 横山邦継・力武卓治 1996 「吉武遺跡群VIII」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第437集』福岡市教育委員会
- 溝口孝司 1998 「甕棺墓地の移り変わり」『弥生人のタイムカプセル』福岡市博物館
- 井上裕弘 1998 「甕棺を黒く塗る習慣」『弥生人のタイムカプセル』福岡市博物館
- 金関恕・佐原真 1986 『弥生文化の研究』3 弥生土器Ⅰ 雄山閣
- 金関恕・佐原真 1986 『弥生文化の研究』4 弥生土器Ⅱ 雄山閣
- 新熊本市史編纂委員会 1993 『新熊本市史第1巻自然・原始・古代』 弥生時代
- 新熊本市史編纂委員会 1993 『新熊本市史 別編第1巻』 絵図・地図下 近代・現代
- 熊本市教育委員会 1999 『熊本市埋蔵文化財発掘調査年報2—平成4年度～8年度—』
- 玉名郡三加和町教育委員会 1997 『田中城跡XⅠ・XⅡ』 三加和町文化財調査報告 第11・12集
- 日本中世土器研究会 1994 『中近世土器の基礎研究X 回転台土師器の諸様相』
- 熊本県教育委員会 2001 『梅ノ木遺跡Ⅱ上・下』熊本県文化財調査報告書第199集
- 熊本県教育委員会 1978 『熊本県の中世城跡』熊本県文化財調査報告書第30集
- 地図資料編纂会 2001 『正式二万分一地形図集成 九州』 柏書房

表2 新南都遺跡群11次 出土土器観察表(1)

挿図 番号	調査 番号	調査 区	出土地点 報告	出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)			色調			調整		焼成	胎土	備考
									口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	外面			
6	1	1区	1号壺棺墓	S109	No.1	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.8+	-	にぶい、黄橙(10YR7/3)	にぶい、黄橙(10YR7/4)	ナナ	ナナ	ナナ	良好	石英、白色粒	
6	2	1区	1号壺棺墓	S109	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.7+	-	浅黄橙(10YR8/3)	灰白(10YR8/2)	ナナ	ナナ	ナナ	良好	石英	口唇部に赤色顔料あり。
6	3	1区	1号壺棺墓	S109	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.4+	-	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/3)	ナナ	ナナ	ナナ	不良	石英、褐色粒	
12	8	1区	2号壺棺墓	S175	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.0+	-	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	ナナ	ナナ	ナナ	やや 不良	白色粒	口唇外縁以下に煤あり。
19	14	1区	4号壺棺墓	S108	-	弥生土器	鉢	口縁一部	-	6.3+	-	にぶい、黄橙(7.5YR6/4)	にぶい、黄橙(10YR5/3)	ナナ、ミカキ	ナナ、ミカキ	ナナ	良好	石英、長石、角閃石	突帯。
22	18	1区	1号標石壺棺墓	S104	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.6+	-	黒褐(10YR3/1)	にぶい、黄橙(10YR7/3)	ナナ	ナナ	ナナ	良好	石英、長石、角閃石	煤あり。
22	19	1区	1号標石壺棺墓	S104	No.9	弥生土器	甕	口縁一部	-	1.9+	-	にぶい、黄橙(10YR7/3)	浅黄橙(10YR8/4)	ナナ	ナナ	ナナ	良好	石英、長石	外面に煤あり。
22	20	1区	1号標石壺棺墓	S104	No.16	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.1+	-	にぶい、黄橙(10YR7/4)	灰白(10YR8/3)	ナナ	ナナ	ナナ	良好	長石、石英、角閃石	
22	21	1区	1号標石壺棺墓	S104	No.1	弥生土器	壺	胴部一部	-	6.6+	-	にぶい、黄褐(10YR5/3)	褐灰(10YR6/1)	沈線、刻目、ミカキ	ナナ	ナナ	良好	長石微粒子、石英、雲 母、角閃石微粒子	
22	22	1区	1号標石壺棺墓	S104	No.17	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	3.0+	-	黒褐(7.5YR2/2)	褐(7.5YR4/6)	連続刺突文、ミカ キ	ナナ	ナナ	良好	長石	
23	24	2区	2号標石壺棺墓	S203	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.8+	-	灰黄褐(10YR6/2)	灰白(10YR8/2)	ナナ	ナナ	ナナ	良好	白色	外面一部に煤あり。
23	25	2区	2号標石壺棺墓	S203	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	1.8+	-	褐灰(10Y4/1)	にぶい、黄橙(10YR6/4)	ナナ	ナナ	ナナ	良好	長石、白色粒	外面煤あり。
23	26	2区	2号標石壺棺墓	S203	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.5+	-	黄橙(10YR8/8)	明黄褐(10YR7/6)	ナナ	ナナ	ナナ	良好	極微細な砂粒	
25	27	1区	2号集石	S107	No.2	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.7+	-	黒塗りのため不明	にぶい、黄橙(10YR7/3)	ナナ	ナナ、ハナ?	ナナ	良好	石英、長石	黒塗りか。
25	28	1区	2号集石	S107	No.3	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.4+	-	にぶい、黄橙(10YR7/3)	にぶい、黄橙(10YR7/3)	ナナ	ナナ	ナナ	やや 不良	白色粒	磨滅が目立つ。
27	29	1区	1号木棺墓	S105	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.2+	-	淡赤橙(2.5Y7/3)	淡黄(2.5Y8/3)	ナナ	ナナ	ナナ	良好	長石、石英	
29	30	1区	2号木棺墓	S180	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	1.5+	-	にぶい、黄橙(10YR7/3)	橙(7.5YR6/6)	ナナ	ナナ	ナナ	良好	長石、石英	口唇部に赤彩痕跡か。
29	31	1区	3号木棺墓	S177	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.6+	-	にぶい、黄橙(7.5YR7/3)	にぶい、橙(7.5YR7/4)	ナナ	ナナ	ナナ	良好	石英、褐色粒	一部黒変、煤か。
29	32	1区	3号木棺墓	S177	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.4+	-	黒褐(10YR3/1)	にぶい、黄橙(10YR6/4)	ナナ	ナナ	ナナ	良好	石英、長石	赤色顔料あり。外面煤あり。
29	33	1区	3号木棺墓	S177	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.4+	-	灰白(10YR8/2)	灰白(10YR8/2)	ナナ	ナナ	ナナ	良好	石英	
29	34	1区	3号木棺墓	S177	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.0+	-	にぶい、黄橙(10YR7/3)	にぶい、橙(7.5YR6/4)	ナナ	ナナ	コハナ	良好	長石、石英	外面に煤付着、黒塗りか。
29	35	1区	3号木棺墓	S177	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.1+	-	橙(5YR6/6)	浅黄橙(7.5YR8/4)	ナナ	ナナ	ナナ	良好	砂粒、褐色粒	
29	36	1区	3号木棺墓	S177	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.5+	-	淡黄(2.5Y8/4)	淡黄(2.5Y8/4)	ナナ	ナナ	ナナ	良好	石英	内面に指頭圧痕。 突帯。
29	37	1区	3号木棺墓	S177	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	5.5+	-	灰(5Y4/1)	にぶい、黄橙(10YR6/4)	ナナ、 後ハナ、ミカ キ、ハナ	ナナ	ナナ	良好	長石、角閃石、雲母、黒 色粒、褐色粒	
32	40	1区	1号溝状遺構	S183	No.17	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.2+	-	明黄橙(10YR7/6)	灰白(10YR8/2)	ナナ	ナナ	ナナ	不良	石英、長石、雲母	口唇内側に煤あり。 壺帯。

表3 新南部遺跡群11次 出土土器観察表(2)

挿入 番号	調査 報番	調査 区	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	量量(cm)		色 調		調 整		焼成	胎土	備考	
			報告	調査時						口径	器高	底径	外面	内面	外面				内面
32	41	1区	1号溝状遺構	S183	1層	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	1.9+	-	橙(7.5YR7/6)	黄橙(10YR8/6)	ナナ	ナナ	良好	1~2mmの長石、石英	
32	42	1区	1号溝状遺構	S183	-	No.106	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.0+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナナ	ナナ	良好	石英、長石、暗褐色粒	
32	43	1区	1号溝状遺構	S183	1層	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.9+	-	黒褐(2.5Y3/1)	オリヅ褐(2.5Y4/3)	ナナ、シキ?	ナナ	良好	長石、角閃石、5mm次の黒石粒	
32	44	1区	1号溝状遺構	S183	2層	No.16	弥生土器	甕	口縁一部	(27.2)	4.8+	-	浅黄橙(10YR8/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナナ	ナナ	良好	石英	煤あり。
32	45	1区	1号溝状遺構	S183	1層	No.9	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.7+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	ナナ	ナナ	良好	1mm以下の角閃石、雲母、長石	
32	46	1区	1号溝状遺構	S183	サツレ	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.6+	-	浅黄橙(10YR8/3)	灰黄(2.5Y7/2)	ナナ	ナナ	良好	白色粒	
32	47	1区	1号溝状遺構	S183	1層	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	1.9+	-	浅黄(2.5Y7/4)	灰黄(2.5Y7/2)	ナナ	ナナ	良好	砂粒、石英	
32	48	1区	1号溝状遺構	S183	1層	No.33	弥生土器	甕	口縁一部	(13.0)	2.5+	-	にぶい黄橙(10YR7/2)	にぶい黄橙(10YR6/3)	ナナ、穿孔	ナナ	良好	精錬された胎土 白色粒、角閃石?	
32	49	1区	1号溝状遺構	S183	下層	-	縄文土器	深鉢	胴部一部	-	7.8+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	褐(10YR4/4)	燃紋	ナナ	良好	微細な砂粒、1mm~ 2mm次の長石	
34	51	1区	E-2 5b~6a層			-	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.6+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナナ	ナナ	良好	角閃石、雲母、長石、褐 色粒、黒色粒	
34	52	1区	E-4 5b層			-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.0+	-	にぶい黄橙(10YR7/2)	にぶい黄橙(10YR6/3)	ナナ	ナナ	良好	石英、灰色粒、角閃石	
34	53	1区	D-3 5層			No.4	弥生土器	甕	口縁一部	-	1.6+	-	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	ナナ	ナナ	良好	石英、長石、角閃石	
34	54	2区	北壁サツレ			-	弥生土器	甕	口縁一部	(26.0)	2.7+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	ナナ	ナナ	良好	長石、角閃石	
34	55	1区	F-3			No.26	弥生土器	甕	口縁一部	(25.3)	4.1+	-	灰黄(2.5Y7/2)	にぶい黄(2.5Y6/3)	ナナ	ナナ	良好	長石微粒子、褐色粒、雲 母? 微粒子	外面一部に赤色顔料あり。 突帯。
34	56	1区	C-3			No.120	弥生土器	甕	口縁一部	(33.6)	2.5+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナナ	ナナ	良好	石英、長石	
34	57	1区 拡張	表土			-	弥生土器	甕	口縁一部	(23.2)	3.5+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナナ	ナナ、シキ?	良好	長石、石英、角閃石	
34	58	1区	D-2			No.52- 98、 108、 132	弥生土器	甕	口縁1/2	31.2	3.9+	-	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/3)	ナナ、ハケ?	ナナ	良好	石英、白色粒、褐色粒、 角閃石	
34	59	1区	東サツレ			-	弥生土器	甕	口縁一部	(37.6)	6.6+	-	橙(7.5YR7/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナナ	ナナ	良好	長石、角閃石、輝石、褐 色粒	突帯。
34	60	1区	D-3			No.108	弥生土器	甕	口縁1/4	(24.0)	6.1+	-	黒褐(10YR3/1)	にぶい黄褐(10YR5/4)	ナナ	ナナ	良好	角閃石、石英、白色粒	
34	61	2区	北壁際サツレ			No.1	弥生土器	甕	口縁~頸部	(44.6)	7.1+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナナ	ナナ、ハケ?	良好	石英、赤褐色粒、灰白色 粒、角閃石	突帯。
35	62	1区	E-3			No.76	弥生土器	壺? 甕?	口縁一部	-	3.7+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナナ、シキ	ナナ	良好	褐色粒、角閃石、黒色 粒、礫	内面に指頭圧痕。
35	63	1区	F-2 5b~6a層			-	弥生土器	壺	口縁一部	(18.9)	4.7+	-	浅黄(2.5Y6/3)	浅黄(2.5Y7/3)	ナナ	ナナ	良好	角閃石、黒色粒	器部下に工具痕か。 刻目突帯
35	64	1区	E-2			No.114	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.1+	-	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	ナナ、ハケ?	ナナ	良好	石英、長石、角閃石、赤 褐色粒	
35	65	1区	E-3			No.25	弥生土器	壺	口縁一部	-	4.1+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	ナナ	ナナ	良好	白色微粒子	刻みが互い違いに入る。 外面に指頭圧痕。
35	66	1区	F-3			No.27	弥生土器	壺	口縁一部	-	5.0+	-	灰白(10YR8/2)	褐灰(10YR5/1)	ハケ、ナナ	シキ	良好	長石、角閃石、雲母?	外面に煤あり。

表4 新南都遺跡群11次 出土土器観察表(3)

挿図 番号	調査 番号	調査 区	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	量量(cm)		色調		調整		焼成	胎土	備考	
			報告	調査時						口径	器高	底径	外面	内面	外面				内面
35	67	1区	表土		-	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	4.1+	-	明黄褐(10YR7/6)	橙(7.5YR6/6)	ナ	ナ	長石、石英、角閃石	内面は磨滅の為不明瞭。	
35	68	1区	E-3		No.78	-	弥生土器	鉢？ 壺？	口縁一部	-	4.7+	-	灰黄(2.5Y6/2)	褐灰(10YR4/1)	ナ、ハケム、洗線	ナ	長石、石英	外面一部に煤あり。	
35	69	1区	E-3		No.24	-	弥生土器	高坏	口縁一部	(24.0)	2.6+	-	橙(7.5YR6/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	ナ	ナ	石英、雲母微粒子	暗文。	
35	70	1区	E-2		No.101	-	弥生土器	高坏	口縁一部	(30.0)	1.9+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナ	ナ	黒色粒、角閃石	暗文。	
35	71	1区	G-1 5b~6a層		-	-	弥生土器	甕？ 壺？	胴部一部	-	3.8+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(7.5YR7/4)	ナ	ナ	角閃石		
35	72	1区	D-3		No.100	-	弥生土器	甕？ 壺？	胴部一部	-	3.2+	-	黄灰(2.5Y4/1)	にぶい黄橙(10YR6/3)	ナ	ナ	1mm次の角閃石	刻目突帯。	
35	73	1区	C-3		No.121	-	弥生土器	甕？ 壺？	胴部一部	-	5.5+	-	橙(5YR6/6)	明黄褐(10YR6/6)	-	-	白、黒色砂粒を含む	外面内面共に磨滅の為不明瞭。	
35	74	1区	F-2		No.16	-	弥生土器	甕	脚部1/3	-	3.5+	(5.1)	明褐(7.5YR6/6)	-	ナ	ナ	角閃石、石英、雲母	内面は破損の為不明。	
35	75	1区	D-3		No.61	-	弥生土器	甕	脚部	-	3.7+	(6.6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	褐灰(7.5YR6/1)	-	ナ	ナ	石英、角閃石、褐色砂粒	内面は磨滅の為不明瞭。
35	76	1区	G-3		No.102	-	弥生土器	甕	脚部1/2	-	4.2+	(6.6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	ナ	ナ	1mm次の長石、雲母		
35	77	1区	D-4 5層		No.11	-	弥生土器	甕	脚部	-	4.0+	(5.4)	にぶい黄(2.5Y6/3)	にぶい黄(2.5Y6/3)	ナ	ナ	長石、角閃石、雲母、黒色粒、石英		
35	78	1区	F-1		No.49	-	弥生土器	甕	脚部	-	2.3+	(7.2)	浅黄橙(7.5YR8/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナ	ナ	石英、角閃石、褐色粒		
35	79	1区	F-2		No.15	-	弥生土器	甕	脚部	-	3.5+	(8.0)	にぶい黄橙(10YR6/4)	-	ナ	ナ	長石、石英、角閃石、黒曜石、褐色粒、黒色粒		
35	80	2区	北壁際ナ7ト		-	-	弥生土器	甕	脚部	-	5.8+	(7.8)	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	ナ	ナ	石英、灰白色粒、角閃石		
41	87	1区	1号掘立柱建物		S181	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.8+	-	黒褐(10YR3/2)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナ	ナ	石英	黒塗あり。	
41	88	1区	2号掘立柱建物		S182	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.0+	-	浅黄(2.5Y7/4)	灰黄(2.5Y6/2)	ナ	ナ	1mm以下の砂粒	外面煤付着。	
44	89	1区	1号土坑		S176 H-2	No.1- 2-66	土師器	高坏	坏部	19.0	5.5+	-	橙(7.5YR6/6)	橙(5YR6/6)	ナ	ナ	石英、長石、黒色粒(角閃石?)、茶褐色粒		
45	90	1区	2号土坑		S178	-	瓦質土器	火倉	胴部一部	-	3.5+	-	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい黄褐(10YR5/4)	ナ	ナ	長石、雲母、黒色粒、白色粒	外面に退化した菊花文か。	
45	91	1区	2号溝状遺構		S179	-	土師器	小皿	底部	-	1.6+	-	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	ナ	ナ	褐色粒		
45	92	1区	2号溝状遺構		S179	-	土師器	坏	口縁一部	-	2.5+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	ナ	ナ	褐色粒		
46	93	1区	3号道路状遺構		S102	No.1	磁器染付	碗	底部	-	3.5+	(4.8)	灰白(10Y8/1)	灰白(10Y8/1)	施釉	施釉	褐色粒	内外面に染付。	
47	94	1区 孤張	表土		-	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	4.0+	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナ	ナ	石英、長石、角閃石、褐色粒		
47	95	1区	F-2		No.17	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	6.6+	-	黒(10YR2/1)	にぶい橙(10YR6/3)	ナ	ナ	石英、角閃石、褐色粒		
47	96	1区	H-2 6b~7層		-	-	縄文土器	深鉢	胴部一部	-	3.2+	-	褐灰(10YR5/1)	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	ナ	ナ	角閃石、白色粒		

表5 新南部遺跡群11次 出土土器観察表(4)

挿図 番号	調査 区	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)		色 調		調 整		焼成	胎土	備考
		報告	調査時						口径	器高	外面	内面	外面	内面			
47 97	1区	E-3			No23	縄文土器	深鉢	底部1/3	-	3.1+	(11.0)	にぶい黄橙(10YR6/4)		ナデ	良好	長石、角閃石、褐色粒、石英、白色粒	
47 98	1区	H-4 南壁サト			-	縄文土器	深鉢	底部1/2	-	4.5+	(11.4)	にぶい黄橙(10YR7/4)		ナデ	良好	1mm大の長石	
47 99	1区	F-2			-	土師器	小皿	口縁~底部	(7.2)	0.8	(4.7)	橙(7.5YR7/6)		ナデ	良好	精錬された胎土	
47 100	1区	F-2			-	土師器	小皿	口縁~底部	(6.4)	1.1	(4.0)	橙(5YR7/8)		ナデ、ナデ	良好	精錬された粘土	
47 101	1区	G-1			-	土師器	小皿	口縁~底部	(6.6)	1.6	(4.1)	橙(7.5YR7/6)		ナデ	不良	精錬された胎土	
47 102	1区	G-1			-	土師器	小皿	口縁~底部	(6.4)	1.2	(4.6)	浅黄橙(10YR8/4)		ナデ、ナデ	良好	精錬された胎土	
47 103	1区	F-2			-	土師器	小皿	口縁~底部	(7.4)	1.4	(4.5)	浅黄橙(7.5YR8/4)		ナデ、ナデ	良好	角閃石?微粒子	
47 104	1区	F-1			-	土師器	小皿	口縁~底部	(7.4)	1.2	(5.0)	浅黄橙(10YR8/4)		ナデ	良	精錬された胎土	
47 105	1区	F-1			-	土師器	小皿	3/4	8.1	1.2	5.6	にぶい橙(7.5YR7/4)		ナデ、ナデ	不良	灰白色粒、赤褐色粒	
47 106	1区	F-1			-	土師器	小皿	3/4	(8.0)	1.1+	7.0	にぶい黄橙(10YR7/4)		ナデ、ナデ	良	黒色粒	
47 107	1区	E-1 5層			-	土師器	小皿	1/3	(8.8)	1.4	(7.2)	にぶい橙(7.5YR6/4)		ナデ、ナデ	良	角閃石、雲母	
47 108	1区	D-2			-	土師器	坏	口縁~底部	(10.8)	2.5+	(9.0)	にぶい黄橙(10YR7/4)		ナデ	良好	赤褐色粒	
47 109	1区	D-2			-	土師器	小皿	口縁~底部	-	1.2+	-	にぶい黄(2.5Y6/3)		ナデ	良好	精錬された胎土	
47 110	1区	D-2			-	土師器	小皿	底部	-	1.7+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)		ナデ	良好	褐色粒	
47 111	1区	D-2			-	土師器	小皿	底部	-	1.3+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)		ナデ	良好	精錬された胎土	

※カッコ書きは復元値、数値の後に+が付くものは残存値



表6 新南部遺跡群11次 出土土製品観察表

挿図 番号	報告 番号	調査区	出土地点		出土層位	取上 番号	器種 器形	残存度	長さ		厚さ		穿孔径 cm	色 調	調整	焼成	胎土	備考
			報告	調査時					cm	cm	cm	cm						
47	112	1区	F-1 5b-6a層		-	-	土錘	ほぼ完形	6.5	2.1	0.65	0.65	にぶい、黄褐(10YR5/4)	ナ	良好	1~2mmの長石、砂粒		

表7 新南部遺跡群11次 出土石器観察表

挿図 番号	調査 区	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	法量(cm)			重量 (g)	材質	備考
		報告	調査時				長さ	幅	厚さ			
12	9	1区	2号甕棺墓	S175	-	剥片	5.45	3.10	1.05	11.3	チャート	
12	10	1区	2号甕棺墓	S175	-	石核	2.10+	2.30+	1.50+	15.5	輝緑凝灰岩	
19	15	1区	4号甕棺墓	S108	-	二次加工剥片	3.50+	3.40+	1.60+	17.8	安山岩	阿蘇周辺
22	23	1区	1号礮石甕棺墓	S104	-	磨製石斧	4.80+	4.10	2.80	66.7	蛇紋岩	
29	38	1区	3号木棺墓	S177	-	磨製石鏃	3.60	2.15	0.25	2.4	粘板岩	
29	39	1区	3号木棺墓	S177	-	打製石鏃	1.65+	1.20	0.35	0.9	黒曜石	針尾産
32	50	1区	1号溝状遺構	S183	-	磨製石斧	8.50+	4.30	2.50	115.9	砂岩	
36	81	1区	D-3 6a層		No.88	打製石鏃	2.30	1.60	0.40	1.0	黒曜石	
36	82	1区	F-3 6a層		-	打製石鏃	1.60+	1.80+	0.35	0.8	安山岩	
36	83	1区	F-2 6a層		-	打製石鏃	1.70	1.15	0.25	0.4	黒曜石	
36	84	1区	G-1 6a層		No.89	磨製石鏃	3.50+	2.60	0.20	1.8	粘板岩	
36	85	1区	H-2 6a層		No.92	石匙	5.85	6.45+	0.85	21.7	安山岩	
36	86	1区	D-3 5b層		-	砥石	15.60	9.20+	3.10	543.0	砂岩	

※カッコ書きは復元値、数値の後に+が付くものは残存値



## 第V章 吉原遺跡の調査

### 第1節 調査の概要 (第1図)

今回調査した吉原遺跡は、蛇行する白川中流域の左岸にできた河岸段丘上に広がる遺跡である。調査区の総面積は5180 m<sup>2</sup>、北から2区 (1334 m<sup>2</sup>)、1区 (2293 m<sup>2</sup>)、3区 (1553 m<sup>2</sup>) と3調査区に分け調査を行った。3調査区とも表土層から8層 (古墳時代及び弥生時代の遺物を含む包含層) まで重機で除去し、1回目の遺構検出を行った。1回目の遺構検出面の調査終了後、白川に向かって傾斜している部分には下層となる8-2層から8-3層下層 (弥生時代の遺物を含む包含層) が存在していた。1区は重機、2・3区は人力で8-2層から8-3層下層までを掘削し、2回目の遺構検出を行った。3区は1・2区よりも白川から離れているためか、調査区内に傾斜地はほとんどなかった。それぞれの調査区での遺構確認数は2区>1区>3区の順で少なくなっていく。ちょうど調査範囲の北側から多く遺構が確認でき、南に行くにつれ減少した形になる。

グリッドの設定は、世界測地系をもとに5m四方のグリッド法を採用した。さらに、3調査区を通して北から南へアルファベット (C~c)、西から東へアラビア数字 (91~127) をふり両者を組み合わせることでグリッド名をつけた。グリッドの配置は第1図のようになる。

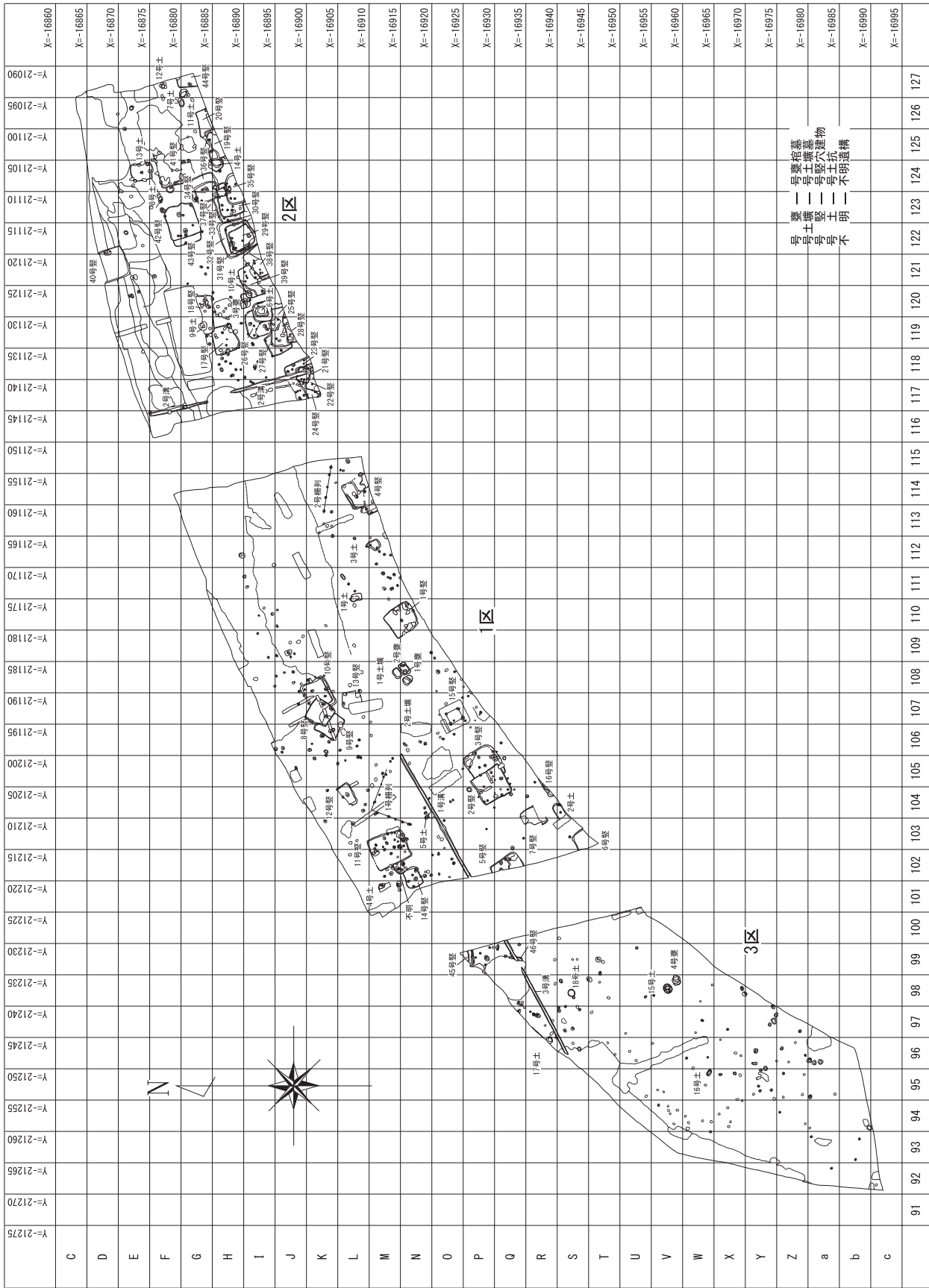
出土した遺物は、必要に応じて一括取り上げまたは、出土位置および高さを記入して取り上げていった。なお、遺構に伴わないピットは番号のみ全体図に記載している。

### 第2節 層序 (第2図)

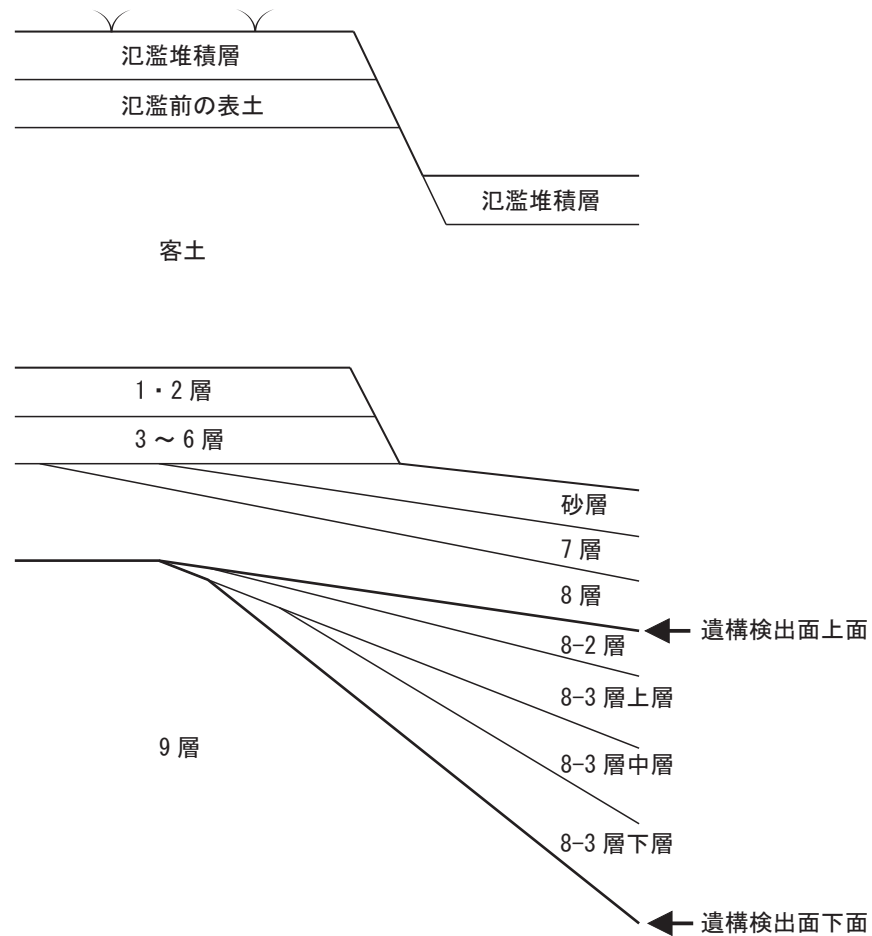
吉原遺跡の基本土層は、3調査区でおおむね共通するものと解釈した。

基本土層の客土より上層は、2012年の水害時の堆積物やそれ以前の表土である。その下の客土から3~6層までは、水害前の圃場整備や旧耕作土のようである。1・2層は3区では確認できなかったが、確認できた1・2区からは近代の遺物が出土している。また、3~6層は2区のみで確認された。砂層、7層は2区では確認されなかった。8層はいわゆる包含層で、古墳時代 (後期~終末期) と弥生時代中期の遺物を含む。この8層より下層になると、土壌化層と氾濫堆積物と思われる砂層が交互に重なる。8-2層は氾濫堆積層で砂を多く含むが、この上面で最初の遺構検出を行っている。8-3層上層は遺物を多く含む層で、弥生時代中期のものが多い。その下の8-3層中層ではほとんど遺物は見られなかった。8-3層下層では、弥生中期の遺物に加えて縄文後晩期の遺物も含んでいた。この層の除去後、9層上面でもう一度遺構検出を行っている。基本土層の上層では、調査区により確認できるものとそうでないものがあるが、1度目の遺構確認面より下になると、ほぼどの調査区でも確認できた。ただ、確認はできたものの堆積状況には差があり、厚く堆積する部分と確認するのがやっとという部分があった。

そのため、各調査区の調査結果の最初に、調査区の土層断面を掲載している。

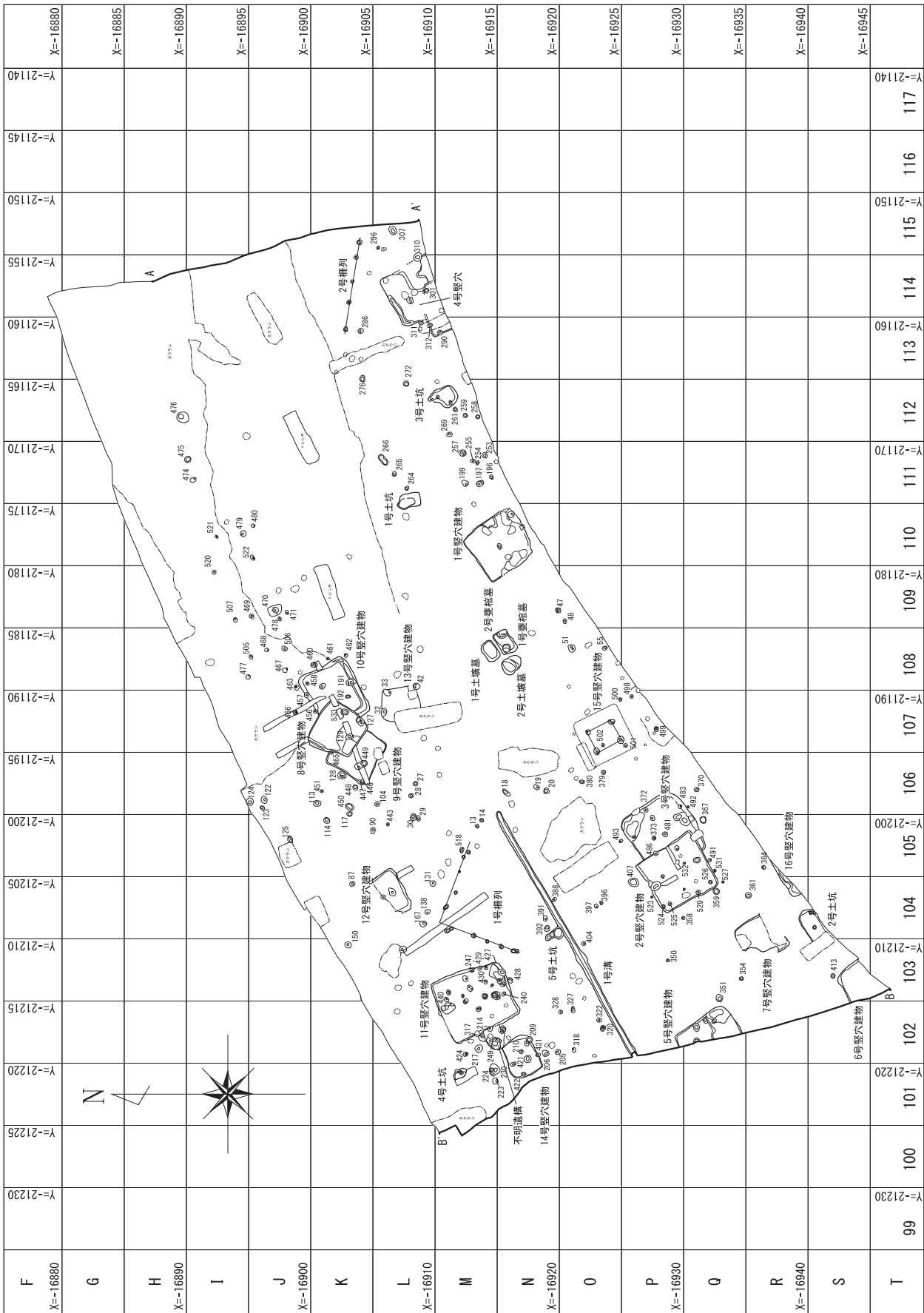


第1図 吉原遺跡遺構配置及びグリッド図(S=1/900)



氾濫堆積層		2012年の水害による堆積 3区では除去されていた
氾濫前の表土		水害以前の表土
客土		
1・2層	灰色土 (7.5Y4/1)	圃場整備前の旧耕作土 1区東・西半、2区に残り3区にはない
3～6層	灰色土 (5Y4/1)	作土 2区でのみ確認された
砂層		氾濫堆積物 1区北西端、3区北端のみに残っていた
7層	黒褐色土 (2.5Y3/1～4/1)	土壌化している 8層に近いが砂質が強くと体的によく混じる
8層	黒褐色土 (2.5Y3/1～4/1)	弥生時代及び古墳時代の包含層 土壌化している
8-2層	黄褐色砂質土 (2.5Y5/3)	1・2・3区とも調査区の一部に残る
8-3層上層	黄灰色砂質土 (2.5Y4/1～4/2)	氾濫堆積物 粗砂層
8-3層中層	黄灰色砂質土 (2.5Y4/1～4/2)	土壌化している 傾斜部のみで確認している
8-3層下層	黄灰色砂質土 (2.5Y4/1～4/2)	氾濫堆積物 1区川沿の傾斜最下層部で確認された
9層	灰オリ ブ色土 (5Y5/2)	弥生時代の包含層 土壌化している
		段丘内堆積物

第2図 吉原遺跡 調査区基本土層



第3図 吉原遺跡1区遺構配置図(S=1/450)

第3節 1区の調査成果 (第3図、図版1)

1区は、今回の調査範囲全体の真ん中に位置する。調査面積は約2293㎡で、東西に広い長方形になる。確認できた遺構数はそれほど多くなく、甕棺墓2基、土壙墓2基、竪穴建物16軒、土坑5基、柵列2条、溝1条であった。遺構は調査区の西側で多く確認でき、調査区北東側ではほとんど確認できなかった。遺構に伴う遺物が少なかったため明確な時期を特定できるものは少なかったが、弥生時代中期及び古墳時代後期～終末期を主体とするものがほとんどであった。時期のわかった遺構の分布をみると弥生時代の遺構は調査区の南側で多く、北側には古墳時代の遺構が多く分布する傾向があるようだ。

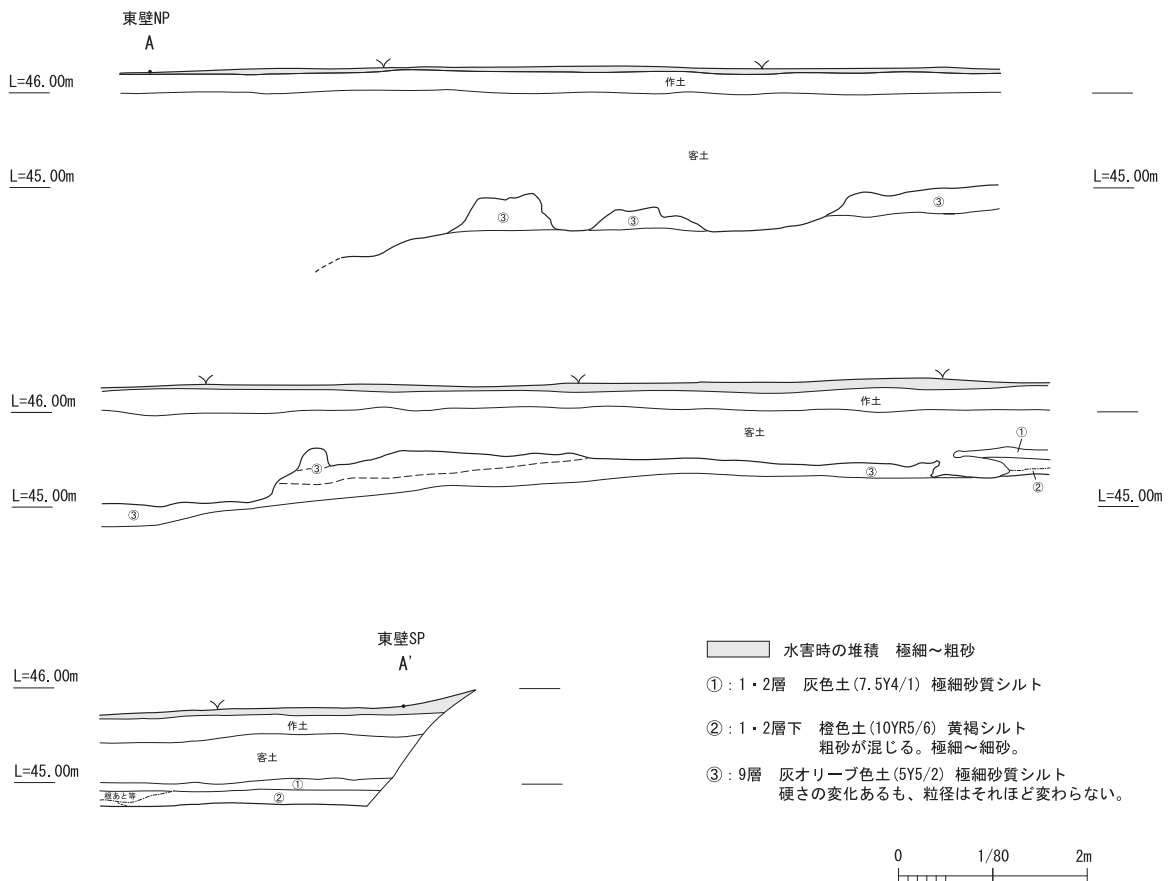
本調査区の東壁と西壁の土層断面を第4・5図に掲載している。東壁ではすぐに9層が確認されたが、西壁では調査区を中心となる層がしっかりと確認できた。

検出できた遺構を甕棺墓・土壙墓、竪穴建物、柵列、土坑、溝、グリッド出土遺物の順に説明をしていく。

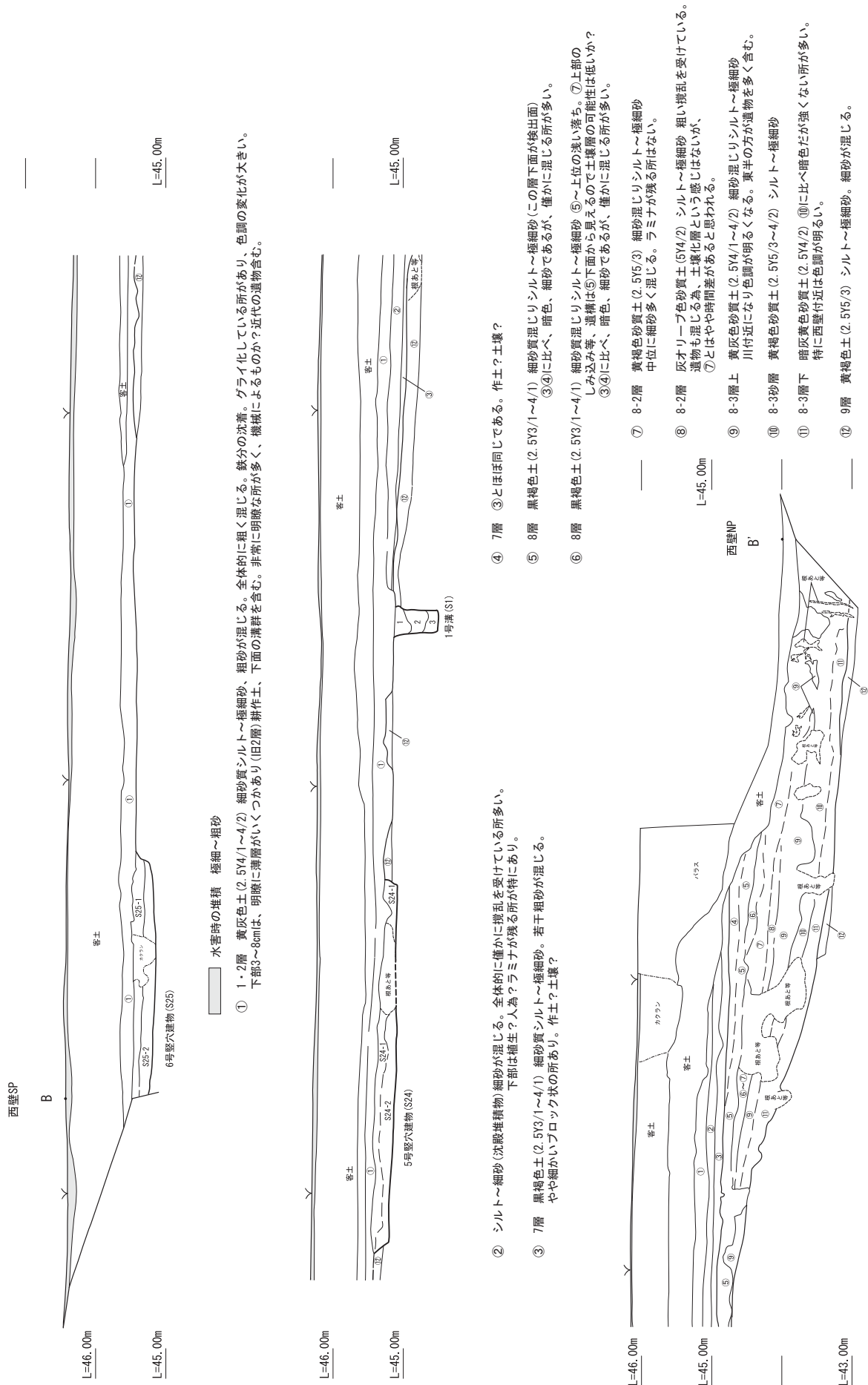
甕棺墓・土壙墓

1・2号甕棺墓(S15・16)と1・2号土壙墓(S4・6)は、M・N-108グリッドで確認された遺構である。1・2号甕棺墓の掘り方は、長軸1.92m、短軸1.28mの方形プランで、北西角に1号甕棺墓(S15)、南東角に2号甕棺墓(S16)が掘りこまれていた。1・2号甕棺墓の掘り方は1つの土抗と想定して掘削を始め、掘削途中にも明確な埋土の違いは認められなかったため、1号甕棺墓と2号甕棺墓に切り合いがあるのか掘り方を共有するのか不明である。

これら1・2号甕棺墓と1・2号土壙墓はひとつの墓群を形成していると考えられる。



第4図 吉原1区東壁土層断面図



第5図 吉原I区西壁土層断面図



## 1号甕棺墓【S15】(第6・7・8図、図版1・2・18)

N-108グリッドで確認された甕棺墓である。埋設方位はN-63° -Wで、埋納角度は49度である。掘り方の北西角より斜めに掘りこまれて埋納されていた。組み合わせは、甕×甕でどちらも小型である。

上甕と下甕の接合部には目張りに粘土がめぐらされ、上甕はやや破損していたが、下甕にはほとんど破損等はなかった。下甕の中には骨片が残っていたが、保存状態はよくはなかった。

1は上甕で口径29.2cm、底径7cm、器高43.7cm、胴部最大径27.8cmで、口縁下に三角突帯が1条めぐるスリムな胴部の甕である。上甕の口縁形態は、内側にやや張りだし、内側に傾向する。底部は上げ底となっている。外面はきれいな縦方向のハケ目がめぐっている。2は下甕で口径30.2cm、底径8cm、器高45.7cm、胴部最大径41.4cmと胴部の張るタイプの甕で胴部中央に三角突帯が1条めぐる。下甕の口縁形態は、内側に張りだし、ほぼ水平の口唇部となる。底部は平らで、外面は突帯より下に縦方向のハケ目がみられる。これらの特徴からいずれも弥生時代中期のものと考えられる。

## 2号甕棺墓【S16】(第6・9・10図、図版1・2・18)

M・N-108グリッドで確認された甕棺墓である。埋設方位はN-85° -Eで、埋納角度は32度である。掘り方の南東角より斜めに掘りこまれ埋納されていた。組み合わせは、鉢×甕である。上甕と下甕の境から下甕の肩部までの広い範囲に粘土が目張りしてあった。上甕には大きな破損等はなかったが、下甕は原形を維持していたものの破損は大きかった。下甕の内部には小児の頭蓋骨が残っていたが、保存状態はよくなかった。(第VI章の自然科学分析の報告を参照)

3は上甕で口径36.9cm、底径12.9cm、器高18.6cmの鉢で、平坦な口縁を持ち、口唇部に暗文が施されていた。底部は平らで非常に薄いつくりになっている。口唇部のみならず外面にも暗文がほどこされ、その下方は丁寧なナデで仕上げられている。4は下甕で口径34.5cm、底径約6.7cm、器高83.5cm、胴部最大径60.1cmと胴部の張りが強く、口縁下に1条の刻目突帯が入り、M字突帯にも刻み目が入り、胴部中央やや上方にある。2条の突帯の間にも縦方向の暗文が入り、全体にミガキが入るとも丁寧な仕上げである。これらの特徴からいずれも弥生時代中期のものと考えられる。

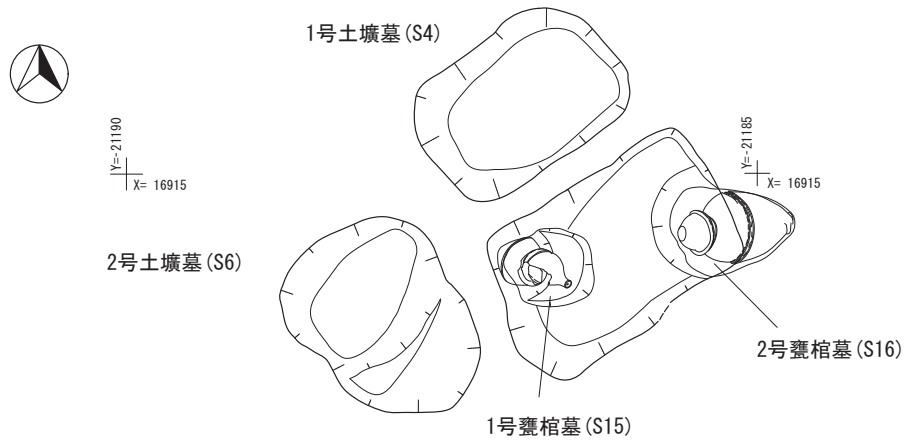
## 1号土壇墓【S4】(第6・11図、図版2)

M・N-108グリッドで確認された土壇墓である。南側に位置する1号・2号甕棺墓(S15・16)の掘り方と並行する。規模は、長軸1.54m、短軸1.10m、深さ0.52mの長方形で、底部分はほぼフラットである。規模や位置などほかの遺構に比べて1号・2号甕棺墓(S15・16)、2号土壇墓(S6)に近似し、グループを形成していることから土壇墓と考えられる。

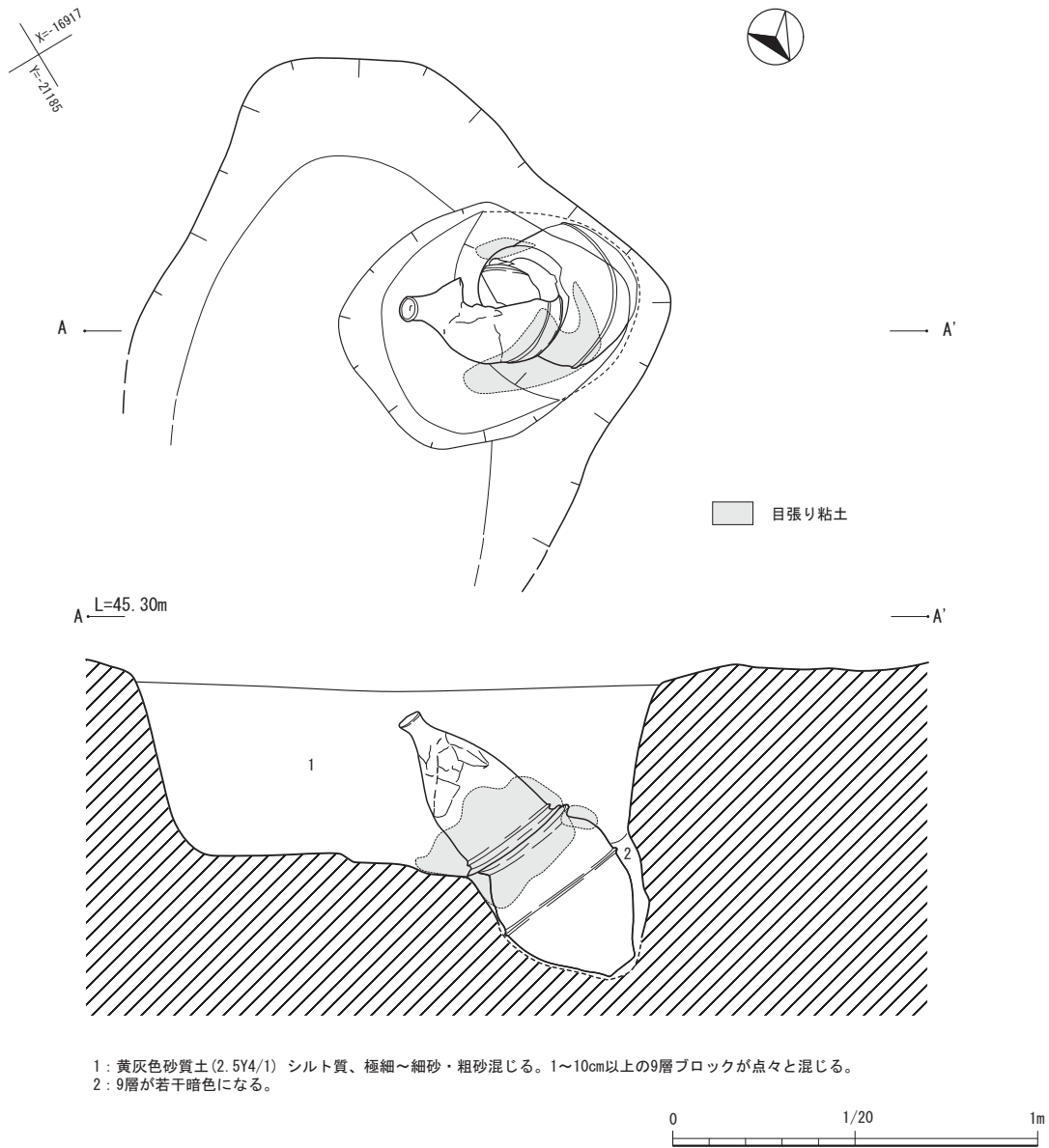
## 2号土壇墓【S6】(第6・11図、図版2)

N-108グリッドで確認された土壇墓である。この遺構は、甕棺墓に対してやや北に傾く。規模は、長軸1.67m、短軸1.31m、深さ0.54mで1号土壇墓と変わらない大きさであるが、底部の形態は異なり、短軸方向はほぼフラットになるが長軸方向には弱い段がある。テラス状というより緩やかに傾斜していると言える。僅かながら骨片が出土していること、1号・2号甕棺墓から見ても土壇墓と考えられる。

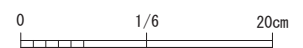
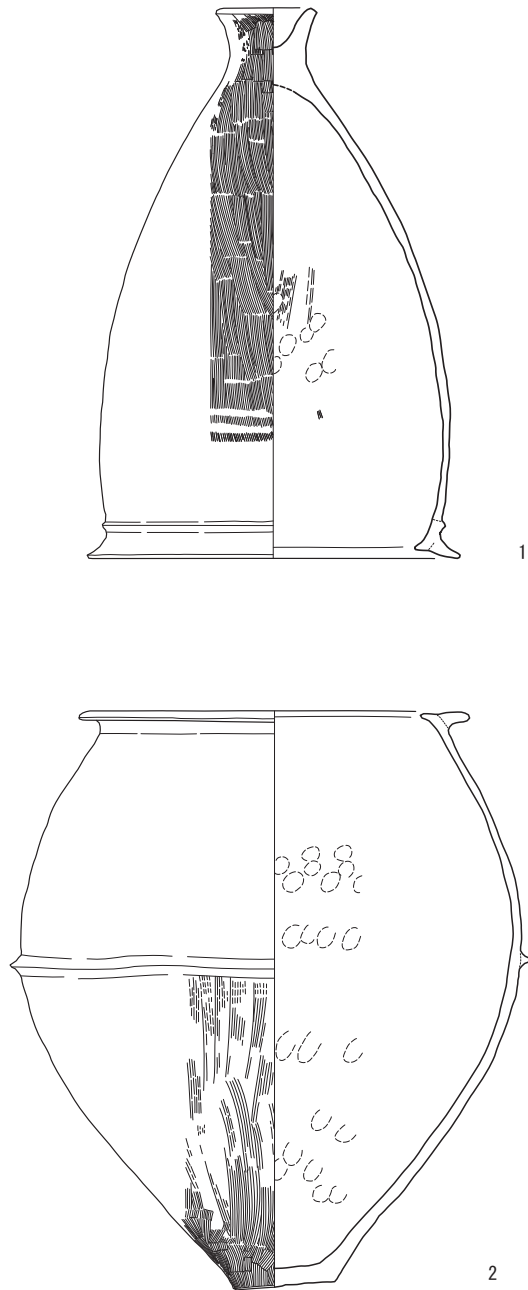
出土遺物5・6は、埋土1層から出た弥生時代中期の甕の口縁部である。



第6図 1・2号甕棺墓 (S15・16) 及び1・2号土墳墓 (S4・6) 配置図

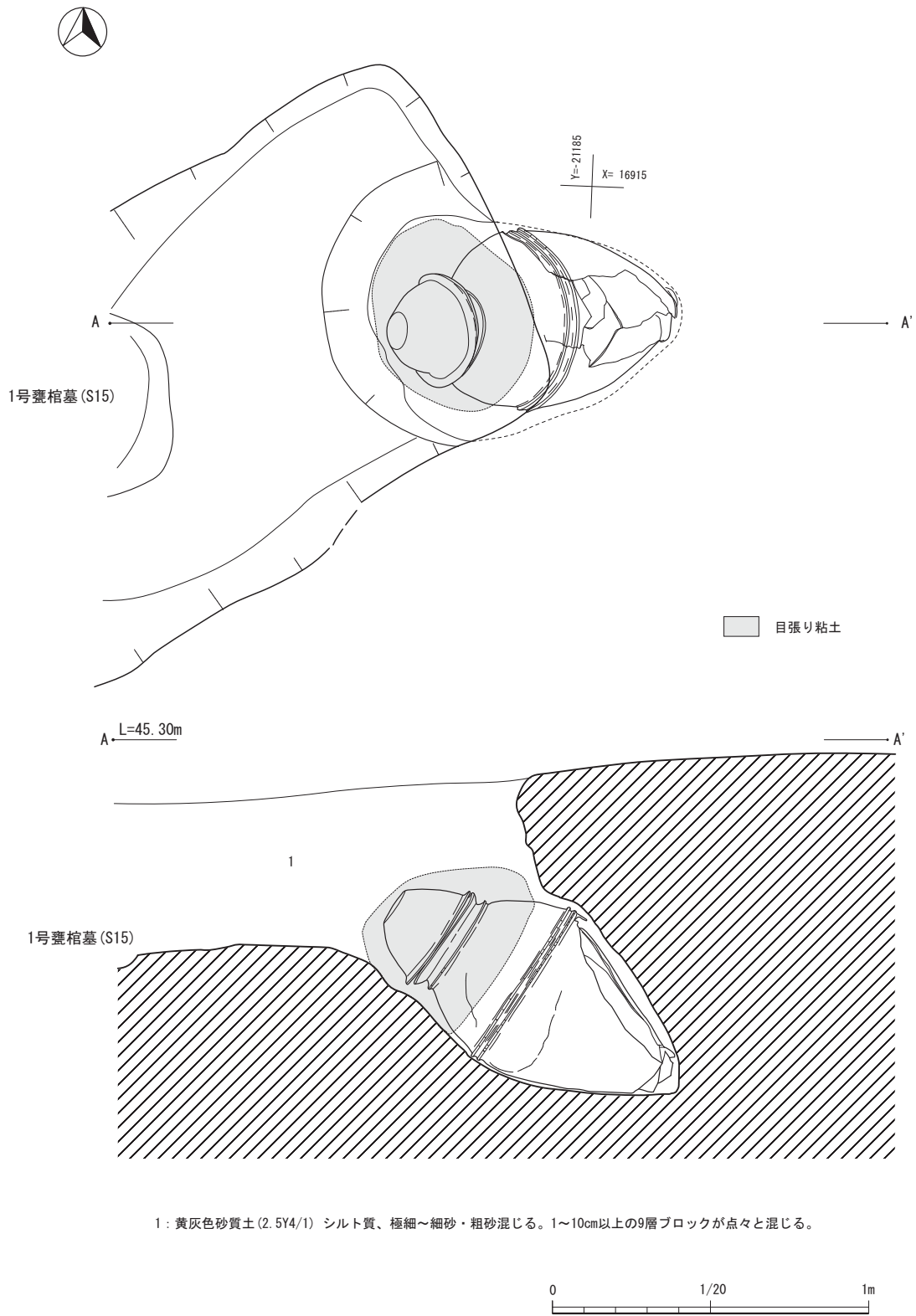


第7図 1号甕棺墓 (S15) 実測図

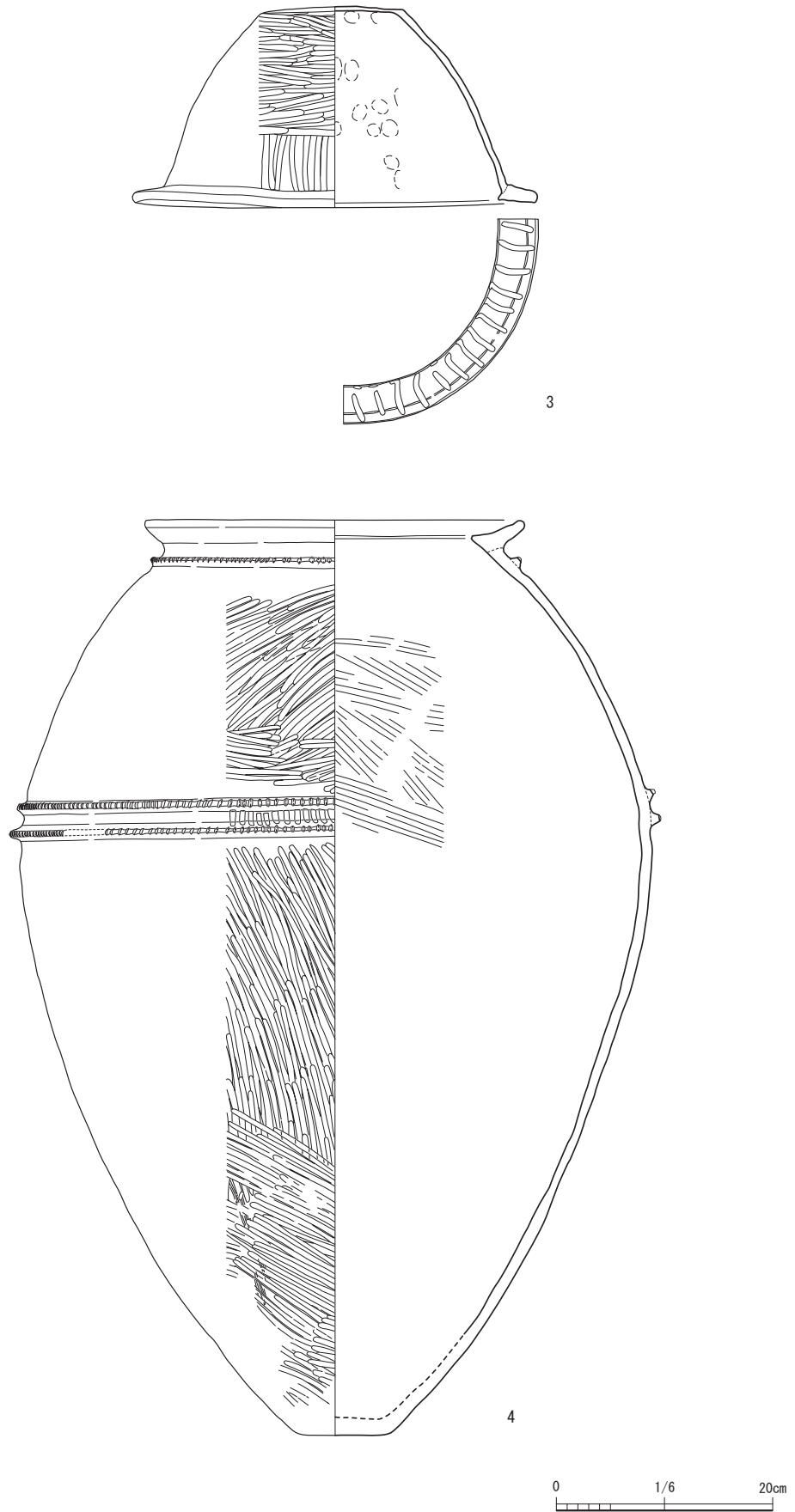


第8図 1号甕棺墓(S15)甕棺実測図

2号甕棺墓 (S16)

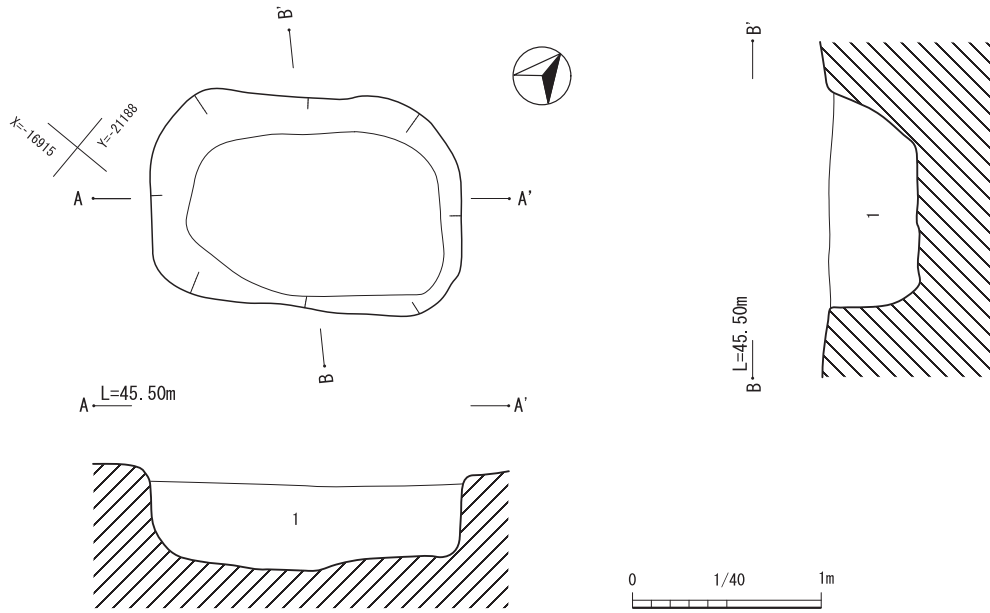


第9図 2号甕棺墓 (S16) 実測図



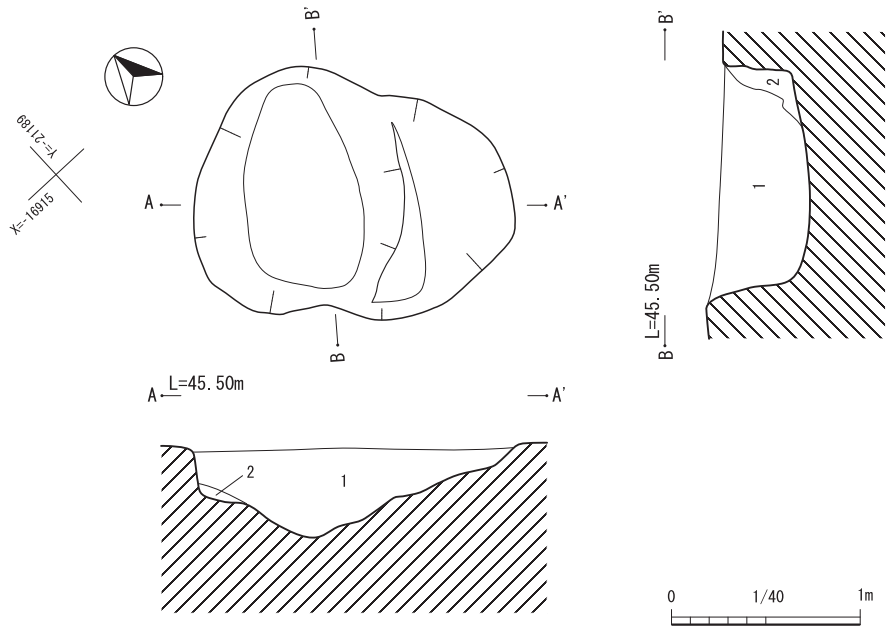
第10図 2号甕棺墓(S16)甕棺実測図

1号土墳墓(S4)

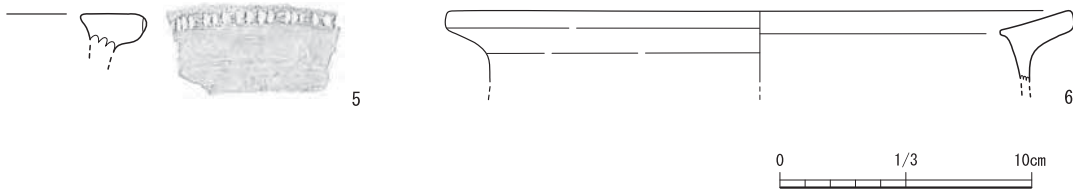


1: 暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2) シルト~細砂、粗砂混じる。  
9層が暗くなった感じ。

2号土墳墓(S6)



1: 黄灰色砂質土(2.5Y4/1) シルト質、極細~粗砂。よく混じる。  
2: 黄灰色砂質土(2.5Y5/1~4/1) シルト混じり、極細~粗砂。9層が暗くなった感じ、よく混じる。



第11図 1・2号土墳墓(S4・6)及び2号土墳墓出土遺物実測図

## 竪穴建物

### 1号竪穴建物【S14】（第12・13図、図版2・19）

M・N-109・110グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸4.60m、短軸4.45m、深さ0.32mでほぼ方形プランである。遺構の北側床面はほぼフラットだが、南側はやや凹凸がある。遺物の出土状況からこの北側の高さが建物使用時の床面ではないかと考えられる。建物内でピットが2ヶ所確認され、どちらもこの遺構に伴うものと考えられる。しかし、遺構内での2つのピットのバランスを考えると柱穴の可能性は低い。また、それら以外に柱穴のようなピットは確認されなかった。この遺構では、石の出土が他の遺構に比べて多く、床面付近で安定して出土する傾向が見られた。また、柱穴も炉も硬化面も確認されなかったが、周囲に同じ形状の住居が複数あり、この遺構がカクランを受けて残りがよくないことから住居の可能性は高い。住居の形態や出土遺物から、弥生時代中期の竪穴建物と考えられる。

出土遺物7～23は、弥生時代中期の土器片である。甕の口縁部7～10は、外側にあまり発達せずに断面形が三角形に丸みを帯び、11～21は外側に発達し内側に傾斜する。22は暗文のある壺の頸部、23は甕の脚部である。24は安山岩製の磨石で、黒色の付着物があり、表裏面と側面に敲打痕がみられる。25は砂岩製の磨製石斧で、部分的に製作段階の敲打痕や研磨痕が残っている。26は砂岩製の砥石であるが、上下端が欠損している。また27の穿孔のある鉄鏃の鏃身部と28の刃部を欠損した袋状鉄斧の一部が出土している。他に土器片と打製石斧2点も出土しており、写真図版のみで掲載している。

### 2号竪穴建物【S22】（第14・15図、図版2・19）

P・Q-104・105グリッドで確認された竪穴建物で、規模は、長軸5.03m、短軸4.68m、深さ0.19mで方形プランである。3号竪穴建物（S23）を切る。掘削の際に北東隅部分に角をつけすぎてしまいややいびつな印象を受ける。P1・2はこの遺構に伴うピットの可能性があり、検出位置からして柱穴の可能性もある。

出土遺物29～35は弥生時代の甕の口縁部である。30は弥生時代前期の甕の口縁部であるが、中期が主体なので流れ込みの可能性が高い。36は基部が欠損した鉄鏃である。

### 3号竪穴建物【S23】（第14・15図、図版2・19）

P・Q-105・106グリッドで確認された竪穴建物である。規模は、長軸5.48m、短軸5.27m、深さ0.15mで方形プランである。2号竪穴建物に北西側を切られる。また、2号竪穴建物に比べるとひと回り大きくしたような形である。この建物内では多くのピットが確認できたが、ほとんどが上位からの掘りこみでこの遺構に伴うピットは少なかった。P1・2・3は建物に伴うピットで一列に並ぶ。建物の壁とのバランスを考えるとP1とP3が柱穴と考えられる。

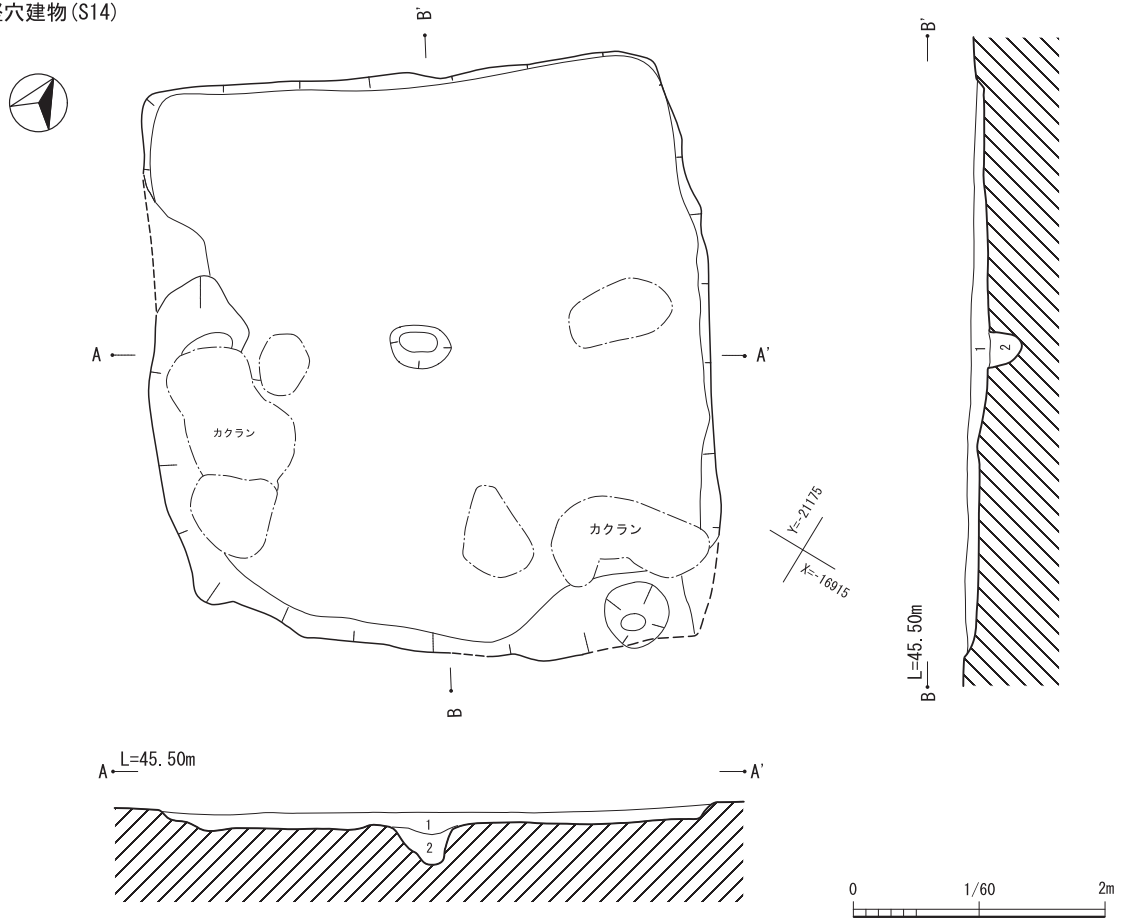
出土遺物37・38は、弥生時代の甕の口縁部で、38は刻目突帯を持つ。南側の落ち込みからは39の砂岩製の砥石が出土している。

### 4号竪穴建物【S20】（第16図、図版2・20）

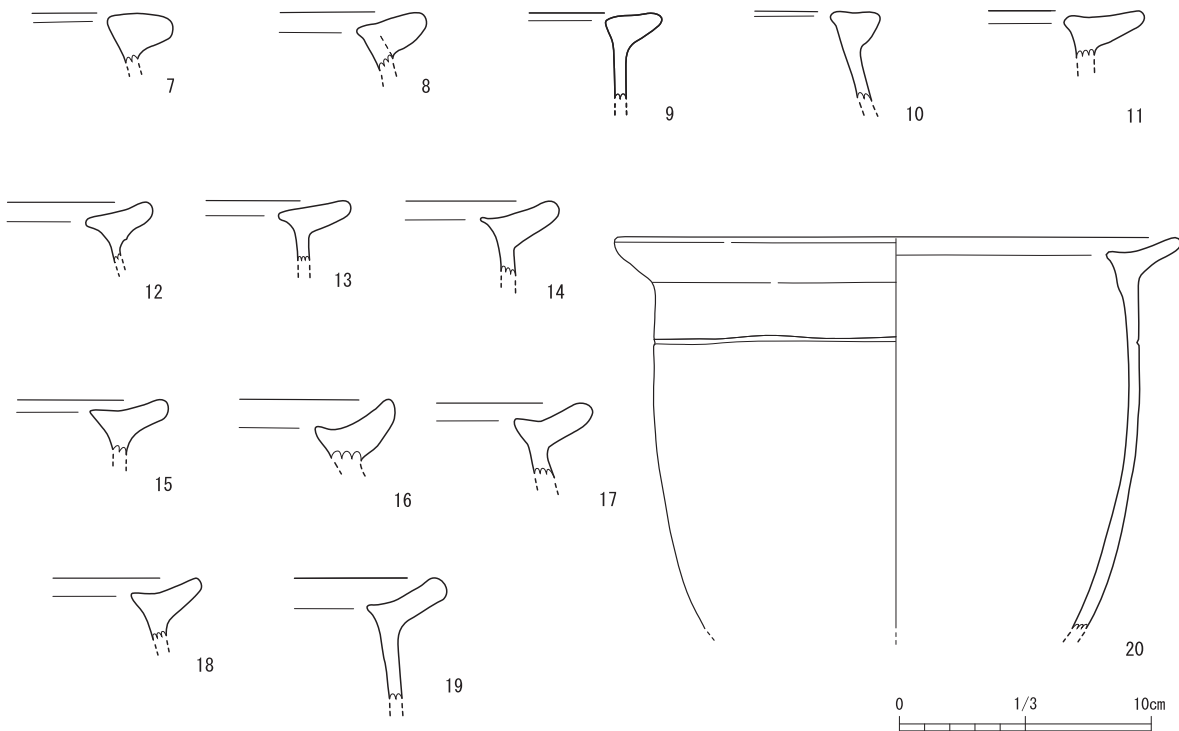
L・M-113・114グリッドで確認された竪穴建物である。残りが悪く、掘り下げの段階で埋土がほとんどなくなったため完掘した状況での図化になってしまった。また、1軒の建物として掘り始めたが、掘り方から2軒分の建物であった可能性もある。カクランにより切り合いの関係は不明である。規模は4号-1竪穴建物が長軸4.3m、短軸4.1m以上、深さ0.11m、4号-2竪穴建物が長軸1.6m以上、短軸1.6m以上、深さ0.11mでそれぞれ方形竪穴建物の一部を検出したと考えられる。

出土遺物40は、弥生時代の壺の口縁部である。

1号竪穴建物(S14)

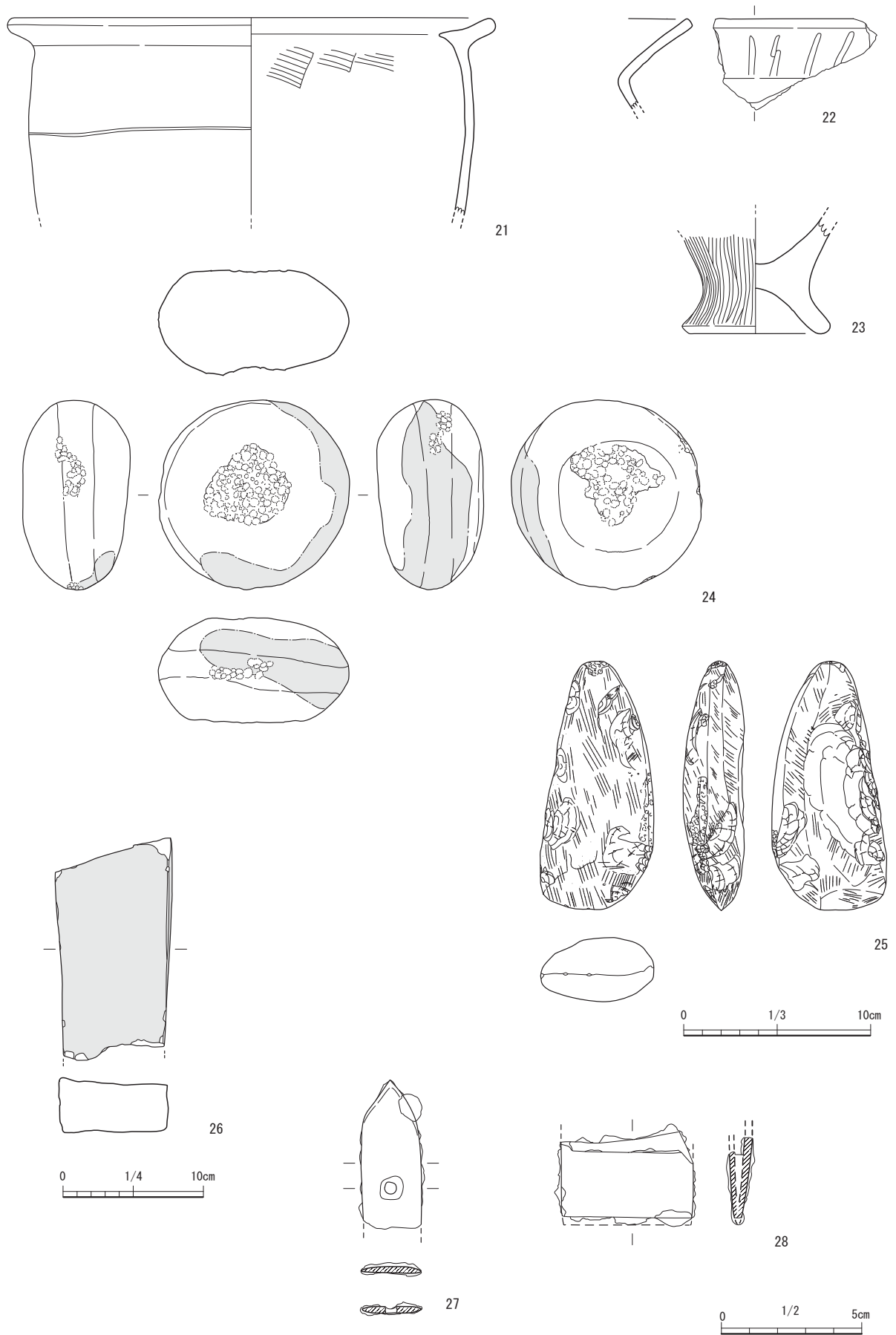


- 1: 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2) シルト混じり。極細～細砂、若干粗砂混じる。  
中央付近は黄灰色砂質土 (2.5Y4/1) で暗色がやや強くなり、炭化物が点々と混じる。若干9層ブロックが混じる。
- 2: 黄灰色砂質土 (2.5Y5/1) シルト混じり。極細～細砂、僅かに粗砂混じる。  
9層ブロックが大きく多い。また9層と混じり合う部分も多い。

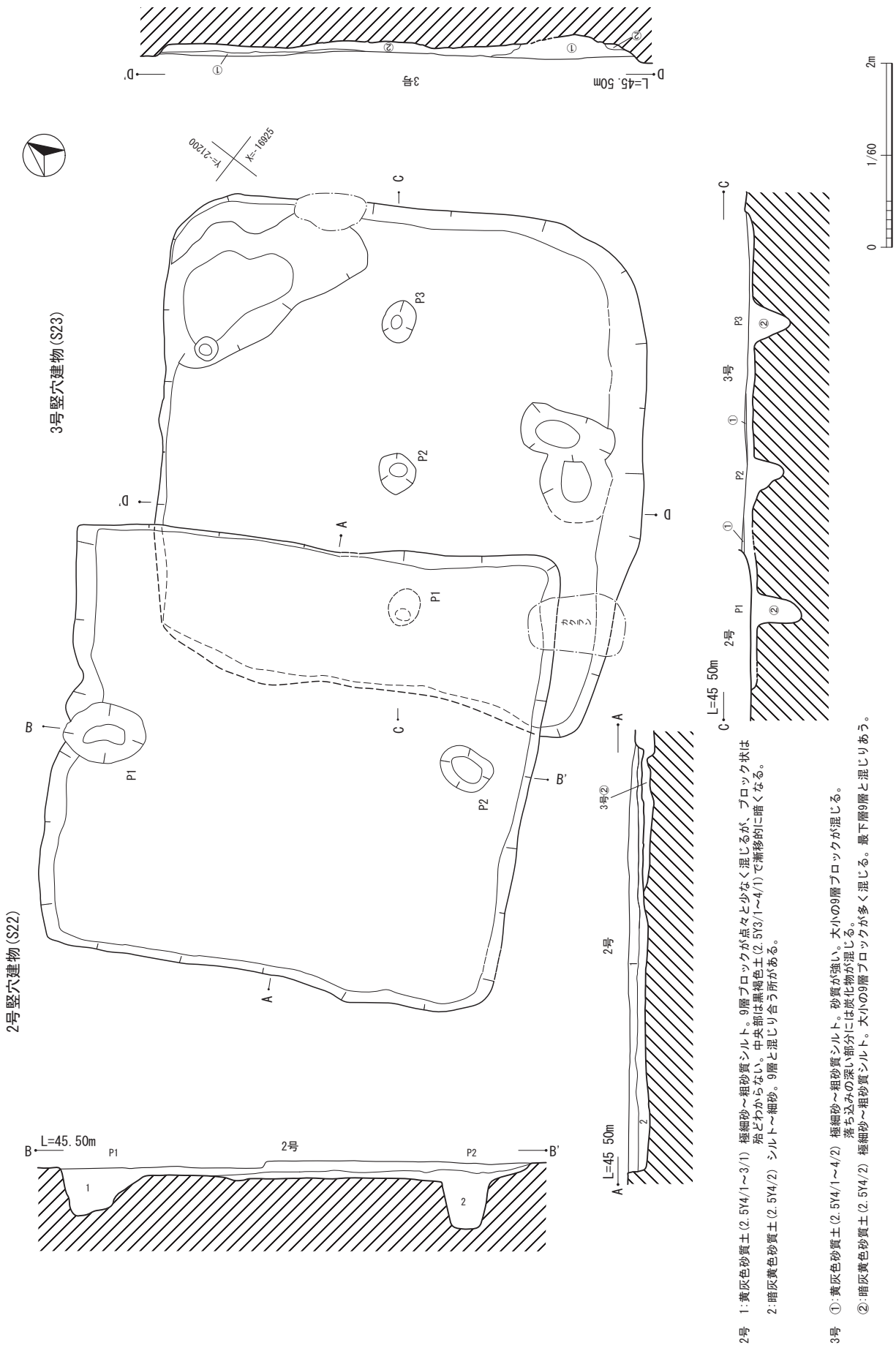


第12図 1号竪穴建物(S14)及び出土遺物実測図(1)



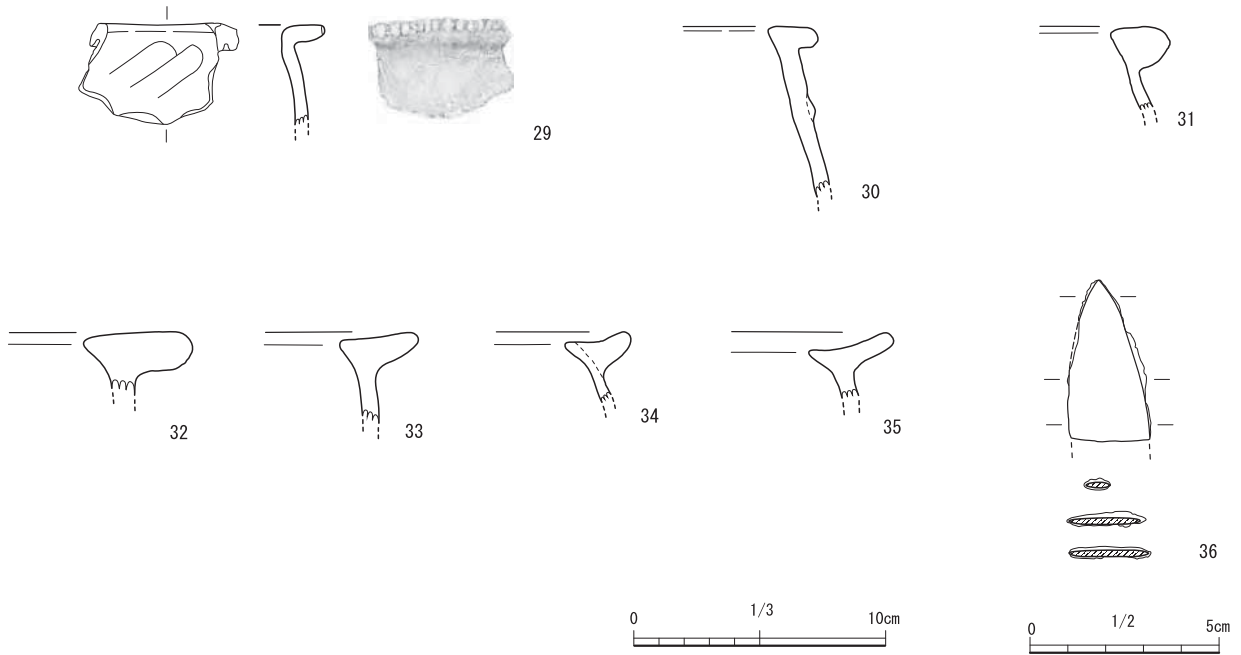


第13図 1号竪穴建物(S14)出土遺物実測図(2)

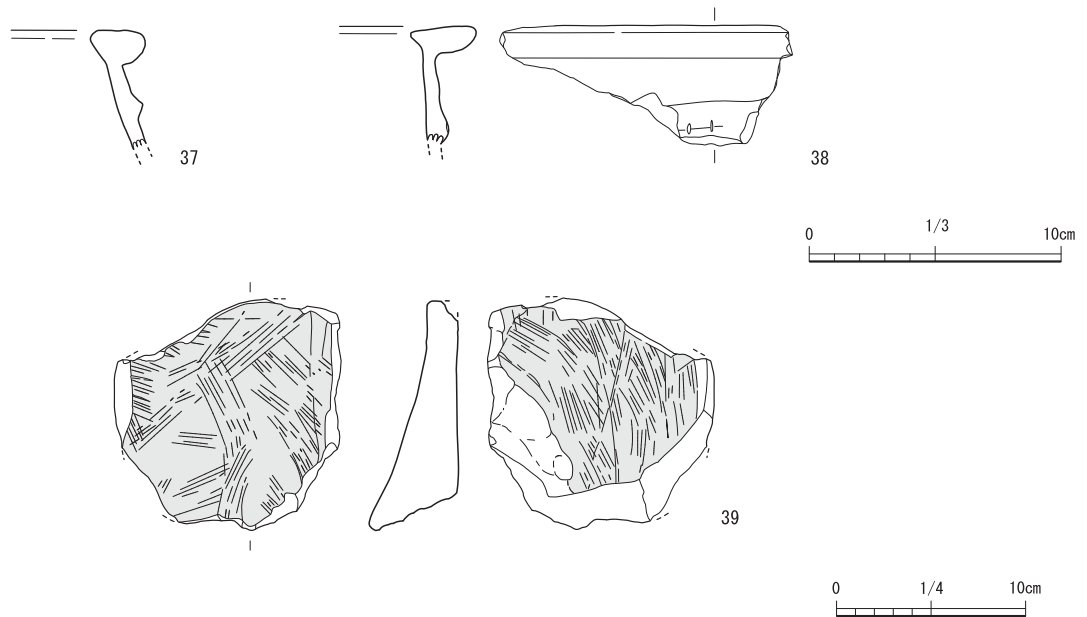


第14図 2・3号竖穴建物 (S22・23) 実測図

【2号竖穴】



【3号竖穴】



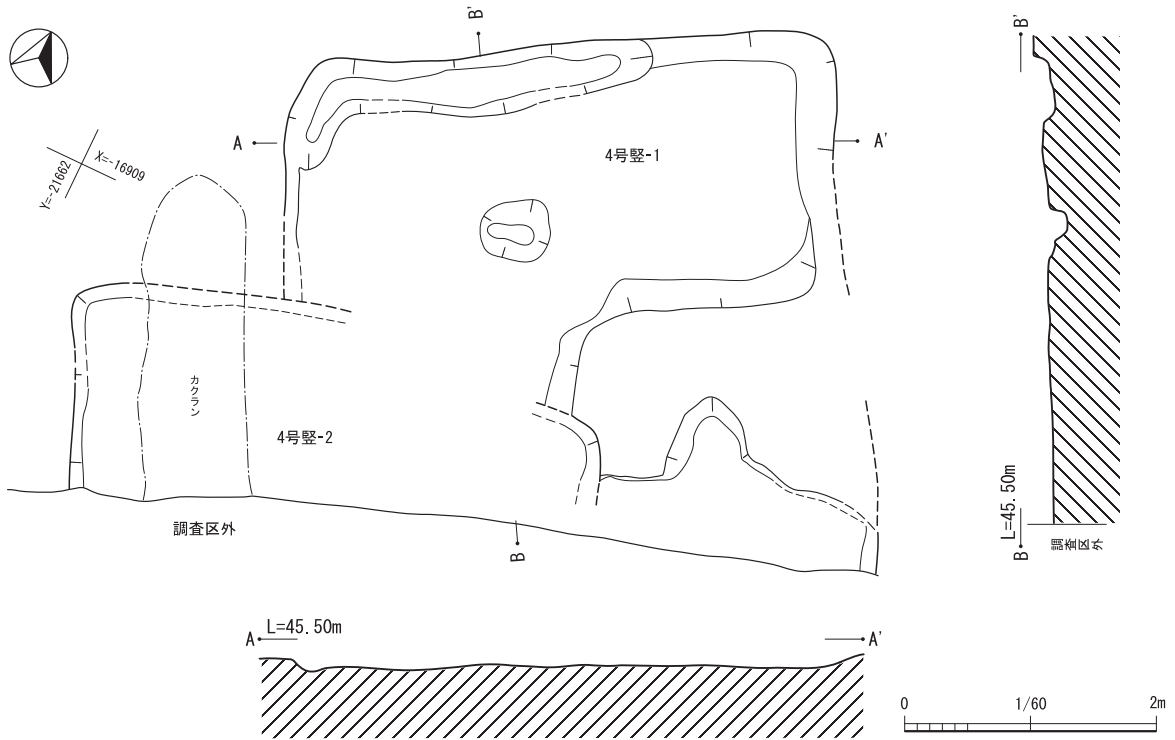
第15図 2・3号竖穴建物出土遺物実測図

5号竖穴建物【S24】(第16図、図版3・20)

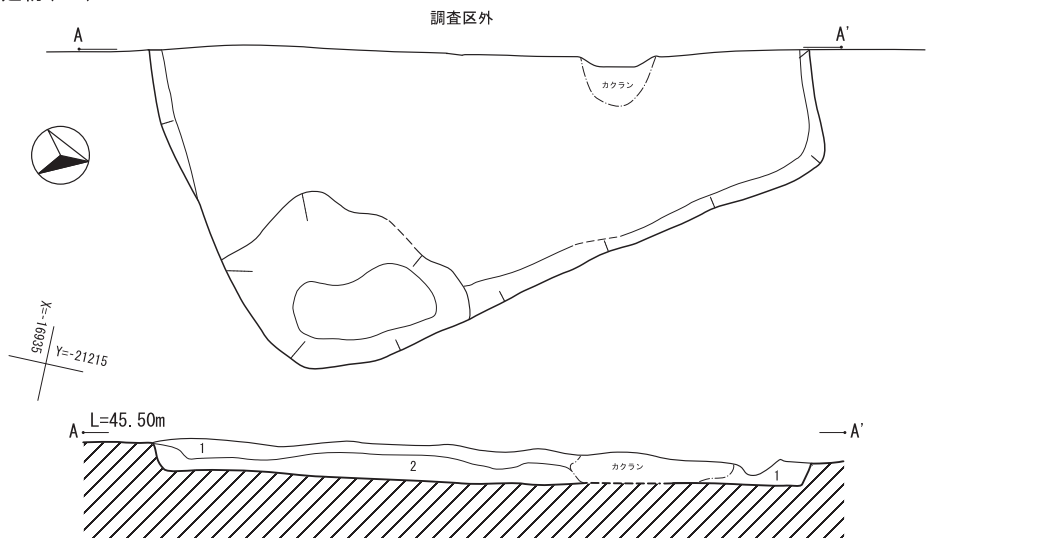
P・Q-102 グリッドで確認された竖穴建物である。規模は長軸 4.86m、短軸 3.00m以上、深さ 0.12m で短軸方向は調査区外にのびる。遺構全体の 3分の1程度を検出したがプランははっきりしていた。

出土遺物 41 は、口縁部に刻み目を持つ弥生時代の甕の一部である。

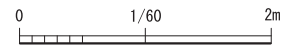
4号竪穴建物(S20)



5号竪穴建物(S24)

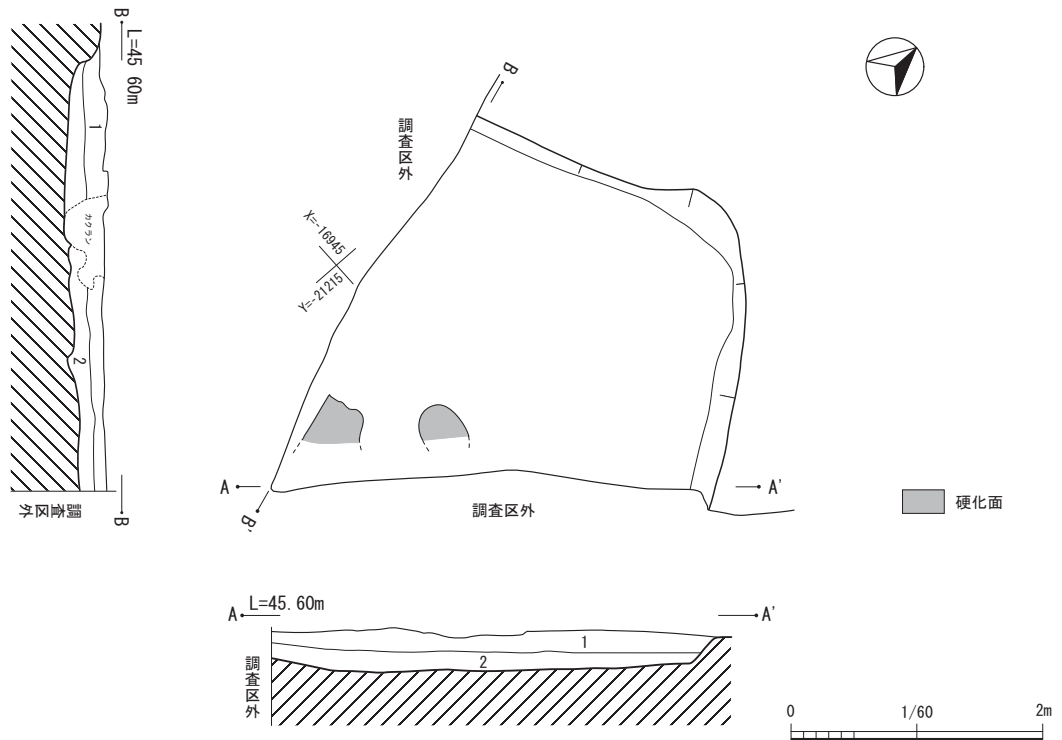


- 1: 黒褐色砂質土(2.5Y3/1~4/1) 細砂混じりシルト~極細砂。  
 全体的にやや細めのブロック状。9層ブロックも少ない。
- 2: 1と近似するが層境は非常にわかりづらい。  
 9層ブロックを点々と含み下部3~5cmは9層が混じる。

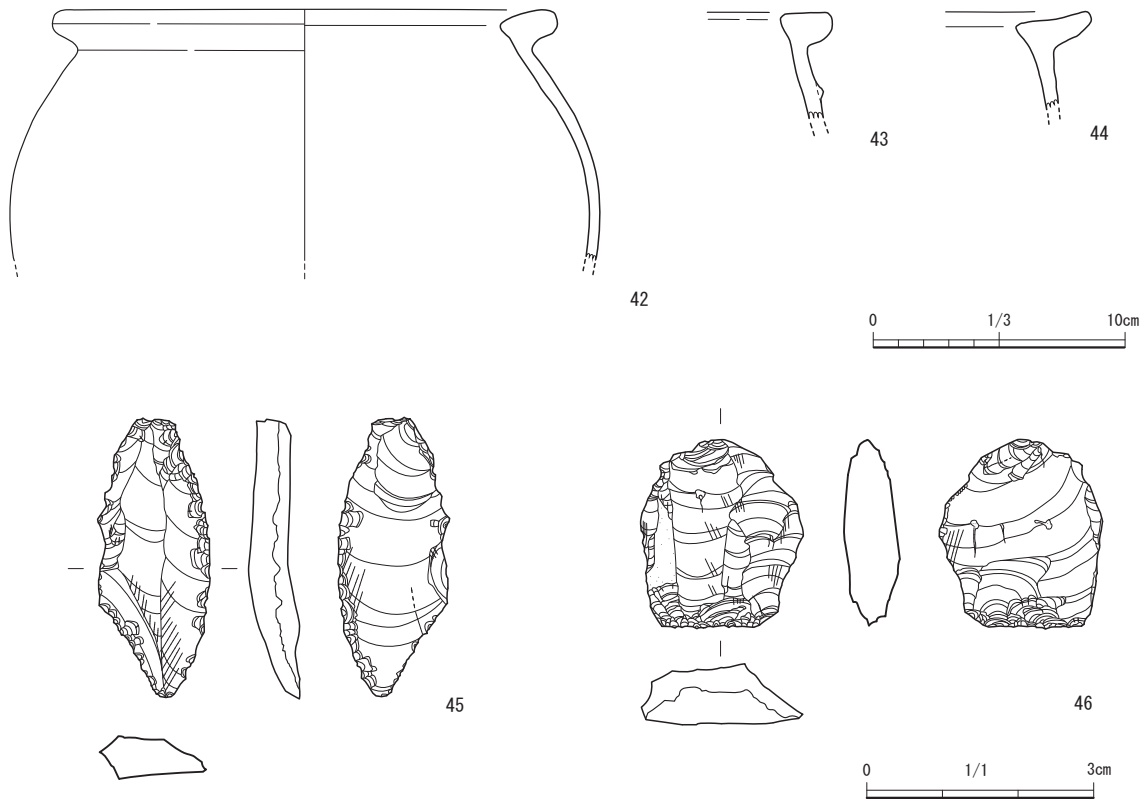


第16図 4・5号竪穴建物(S20・24)及び出土遺物実測図

6号竖穴建物(S25)

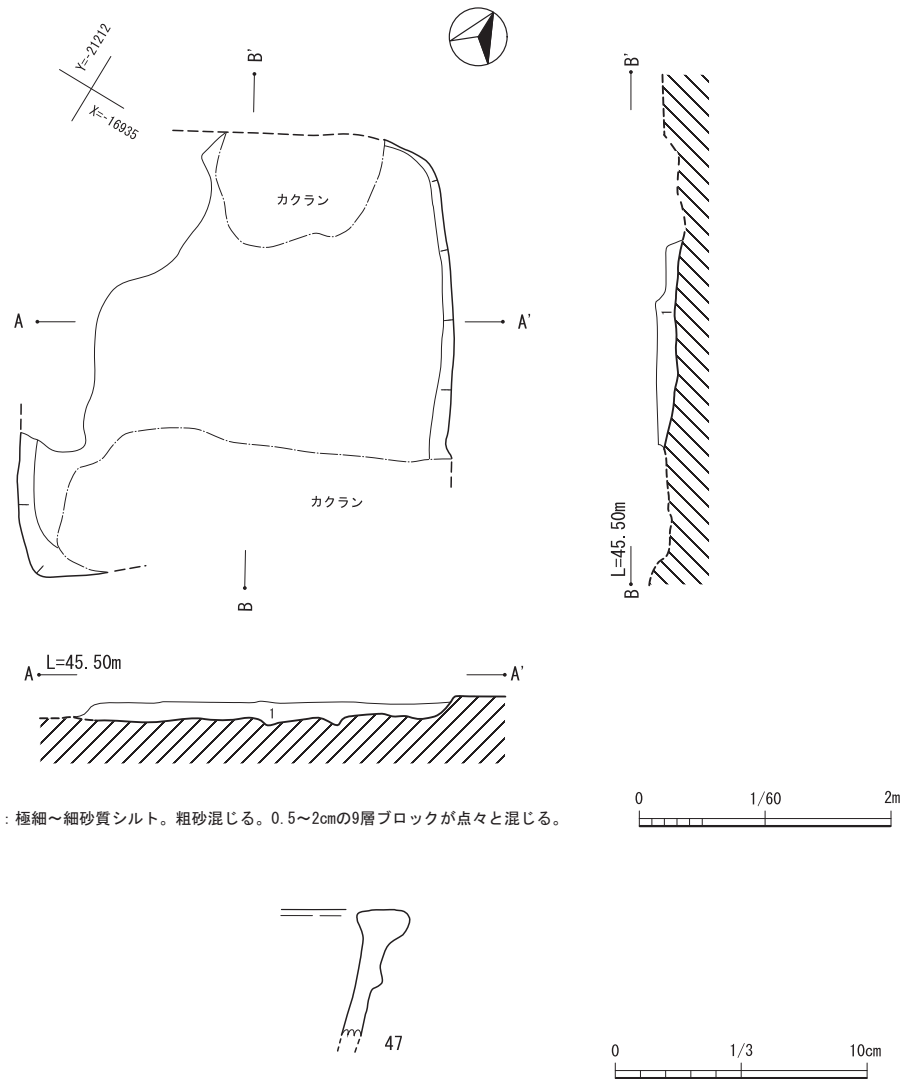


- 1: 黄灰色砂質土(2.5Y4/1~4/2) 極細~細砂質シルト。粗砂が混じる。0.3~2cmくらいの9層ブロックが多く混じる。やや全体的にブロック状。人為による埋め戻し層と思われる。
- 2: 黒褐色砂質土(2.5Y3/1~4/1) 極細~細砂質シルト。粗砂が混じる。9層が多く混じる部分と大きなブロックになって入る部分がある。上部3cm程度は9層が少なめで、下部は9層と混じり合う部分が多い。



第17図 6号竖穴建物(S25)及び出土遺物実測図

7号竪穴建物 (S28)



第18図 7号竪穴建物 (S28) 及び出土遺物実測図

6号竪穴建物【S25】(第17図、図版3・20)

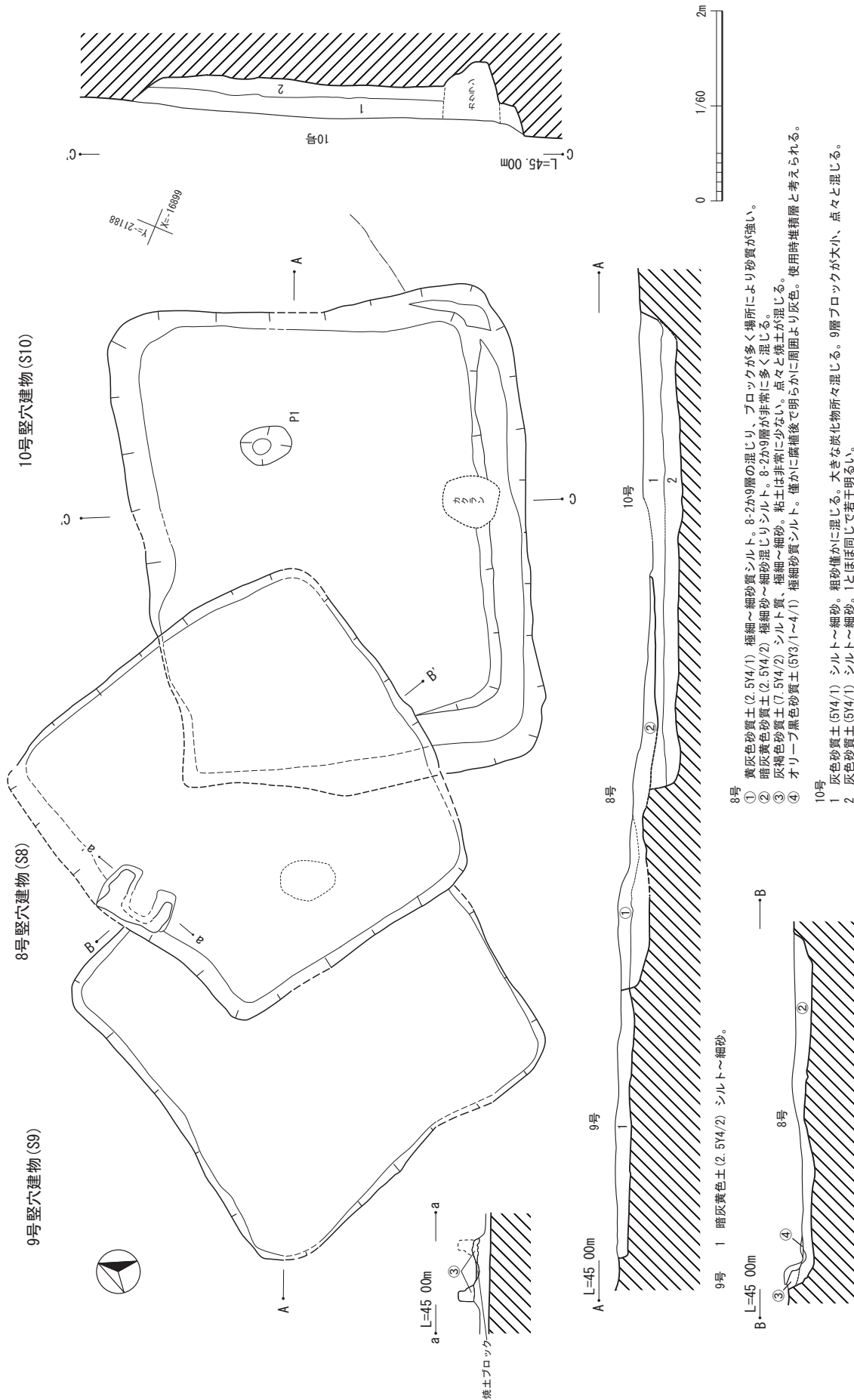
S・T-103 グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸 3.2m 以上、短軸 3.19m 以上、深さ 0.30m、調査区南西角でコーナーの一つを検出したのみであとは調査区外へと続く。確認した面積は少ないが深さや規模から竪穴建物の可能性が高い。わずかに硬化部があるが面的には広がらない。南壁と西壁断面でやや土層が異なり、他の遺構の可能性も考えたが、切り合っていたという状況もないため一つの遺構と判断した。

出土遺物 42～44 は、弥生時代中期の甕の口縁部である。石器 45・46 はともに黒曜石製で、二次加工剥片と楔形石器の完形である。また、写真図版のみで黒曜石製の剥片も掲載している。

7号竪穴建物【S28】(第18図、図版3・20)

Q・R-103・104 グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸 3.41m、短軸 3.51m、深さ 0.19m で方形プランと思われる。しかし、南北をカクランに壊され、西隅は浸食により削られており、残りはよくない。

出土遺物 47 は、弥生時代の鉢の口縁部である。



第19図 8・9・10号竪穴建物 (S8・9・10) 実測図

8号竪穴建物【S8】(第19・20図、図版3・20・21)

J・K-106・107グリッドで確認されたカマド付竪穴建物で、規模は長軸3.86m、短軸3.85m、深さは0.31mの方形に近いプランである。9号・10号竪穴建物(S9・10)との切り合いは8号竪穴建物が一番新しいと考えられる。時期は、カマドを持つこと、出土遺物より古墳時代後期～終末期と考えられる。カマドは、左右の袖部が確認できた。しかし、柱穴、硬化面は確認できなかった。

出土遺物49～54・56は土師器で、49～53は甕の口縁部、54・56は坏である。57は須恵器の甕の破片である。その他流れ込み遺物として48、55の弥生時代の甕の口縁部と鉢の底部が出土している。

9号竪穴建物【S9】(第19・21図、図版3・20・21)

K・Lグリッドで確認された竪穴建物で、規模は長軸3.83m、短軸3.81m、深さは0.15mの方形プランと思われる。8号竪穴建物(S8)に切られており、10号竪穴建物(S10)との切り合いは確認できなかった。8号竪穴建物と軸方向も近く時期も変わらないと思われるが、カマドや炉は確認されなかった。この遺構に関しても柱穴、硬化面は確認されていない。時期を断定するのは難しいが、埋土は8号竪穴建物に似ていることや出土遺物から古墳時代後期～終末期と考えられる。

出土遺物59～63は土師器で、60は、ほぼ完形に近い高坏、61・62は甕の口縁部、59は鉢、63は小ぶりの甕である。その他流れ込み遺物として58の弥生時代の壺の底部も出土している。

10号竪穴建物【S10】(第19・21図、図版3・4・20)

J・K-102・103グリッドで確認された竪穴建物で、規模は長軸5.10m、短軸4.19m、深さは0.63mのやや東西に広がる方形プランとなる。8号・9号竪穴建物(S8・S9)と比べるとやや大きくなる。8号竪穴建物(S8)に切られている。この住居に伴うと考えられるピットはP1であるが、それに対応するピットが見当たらない。また、南壁から西壁にかけてテラス状の高まりがみられる。この遺構では、カマドや炉は確認されなかった。時期を断定するのは難しいが、古墳時代の8号・9号竪穴建物の形状が異なることと出土遺物も古墳時代のものはなく弥生時代中期が中心であることからこの時代の竪穴建物と考えられる。

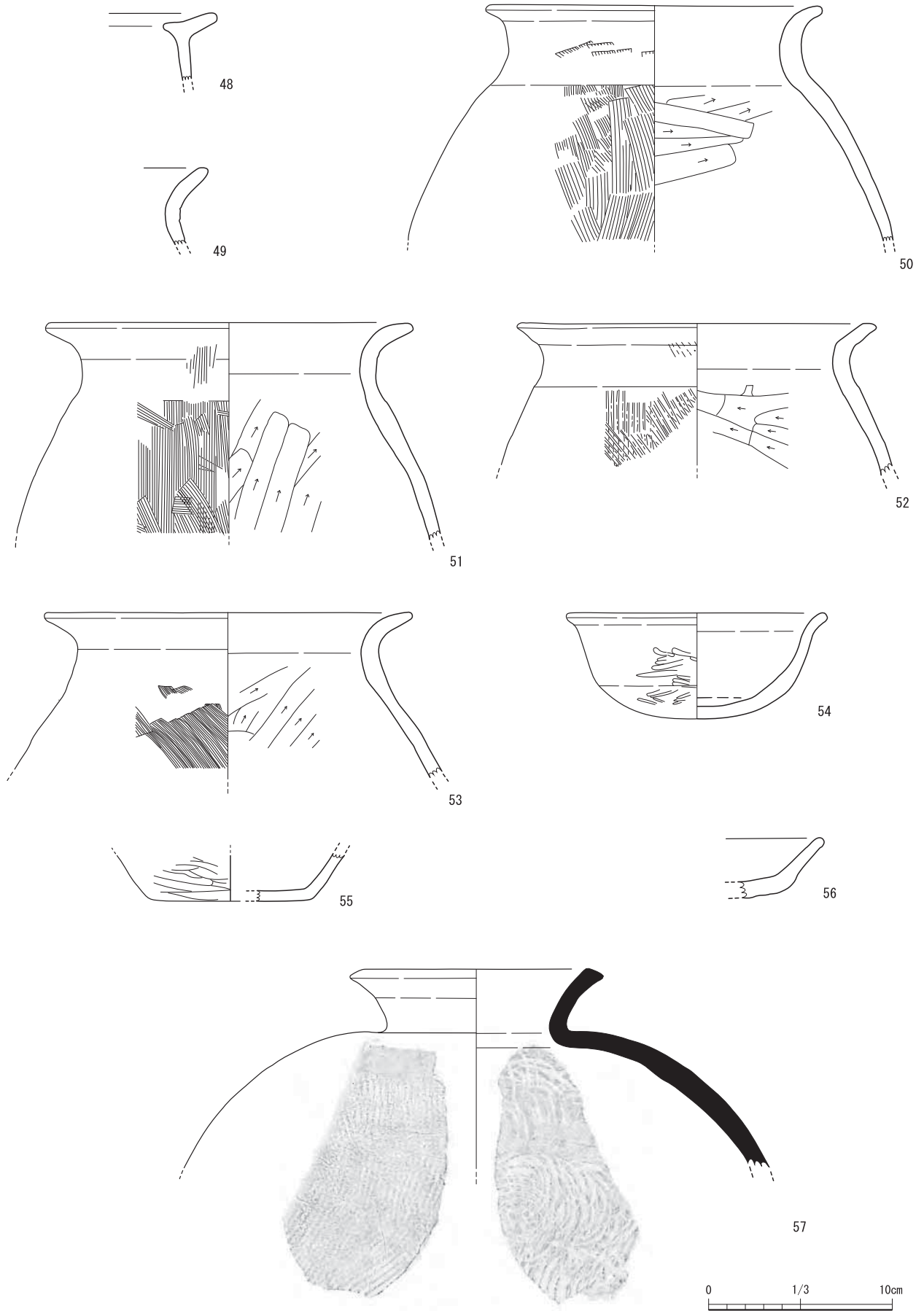
出土遺物64～66は、弥生時代中期の甕の口縁部である。

11号竪穴建物【S13】(第22～25図、図版4・21・22)

L・M・N-102・103グリッドで確認された竪穴建物で、規模は長軸6.17m、短軸5.76m、深さは0.26mと南北に長い方形プランである。8号・9号竪穴建物と比べるとやや大きく、出土遺物から時期は古墳時代後期～終末期と推定される。この調査区で確認された竪穴建物の中では最も大型である。カマドと硬化面は確認されている。この住居に伴うと考えられるピットはP1・P2である。4本柱と想定されるが、もう2つのピットは確認できなかった。カマドの残りはよくなく、粘土塊が確認できたが使用時の袖の状態は維持していないようである。また、カマドと反対側に土坑が確認されている。貯蔵穴のような印象を受け、建物に伴うものと判断した。

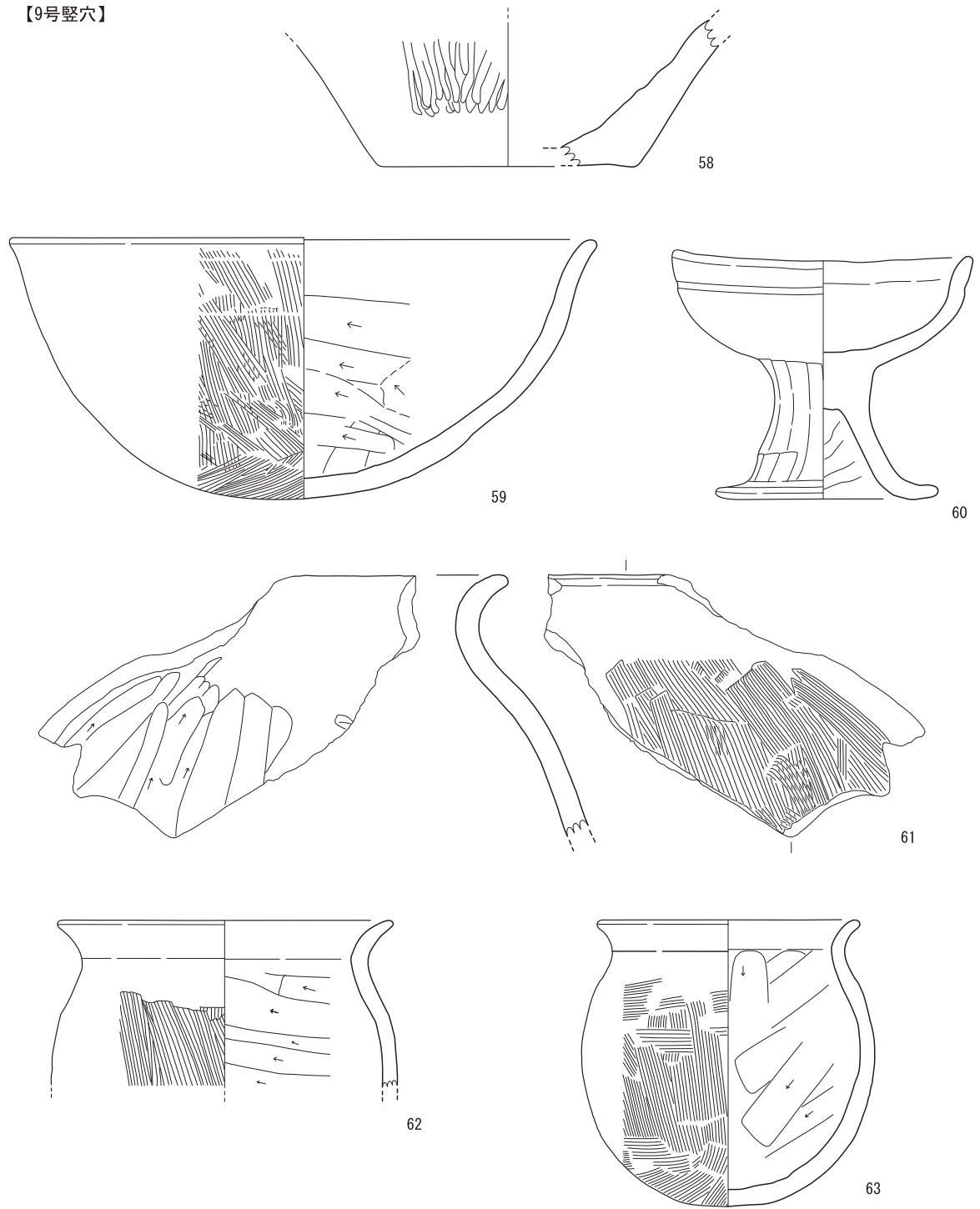
出土遺物は、68～83は土師器である。多くは甕の口縁部の破片だが、80～83は甗の破片と把手である。須恵器も数点出土しており、84はほぼ完形の坏蓋で、86・87は坏身である。85は提瓶の口縁と思われる。また、流れ込みであろう67の弥生土器の甕の口縁部も出土している。88は安山岩製の石錐である。先端に擦痕があり丸みを帯びている。元々は石槍状の尖頭状石器だったものを転用したものと考えられる。89の打製石鏃は残念ながら先端部を欠損する。90は頁岩のスクレイパーと考えられる。表裏面とも全面に二次加工が施してある。91・92は砂岩製の砥石の破片である。93は基部を欠損した鉄鏃で中央に、2個の穿孔を有する。



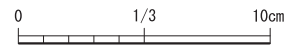
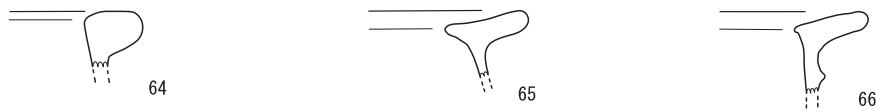


第20図 8号竪穴建物出土遺物実測図

【9号竪穴】

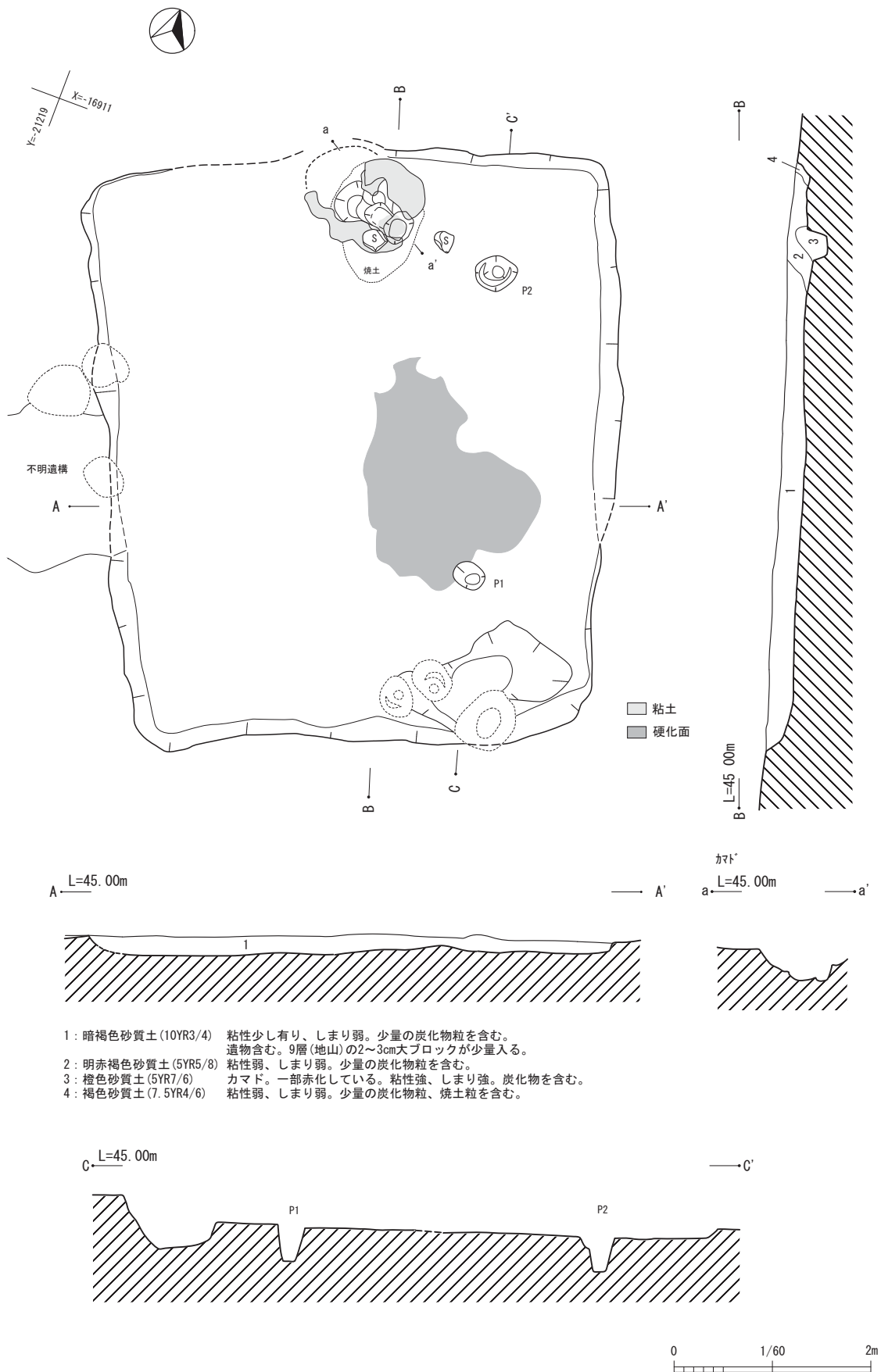


【10号竪穴】



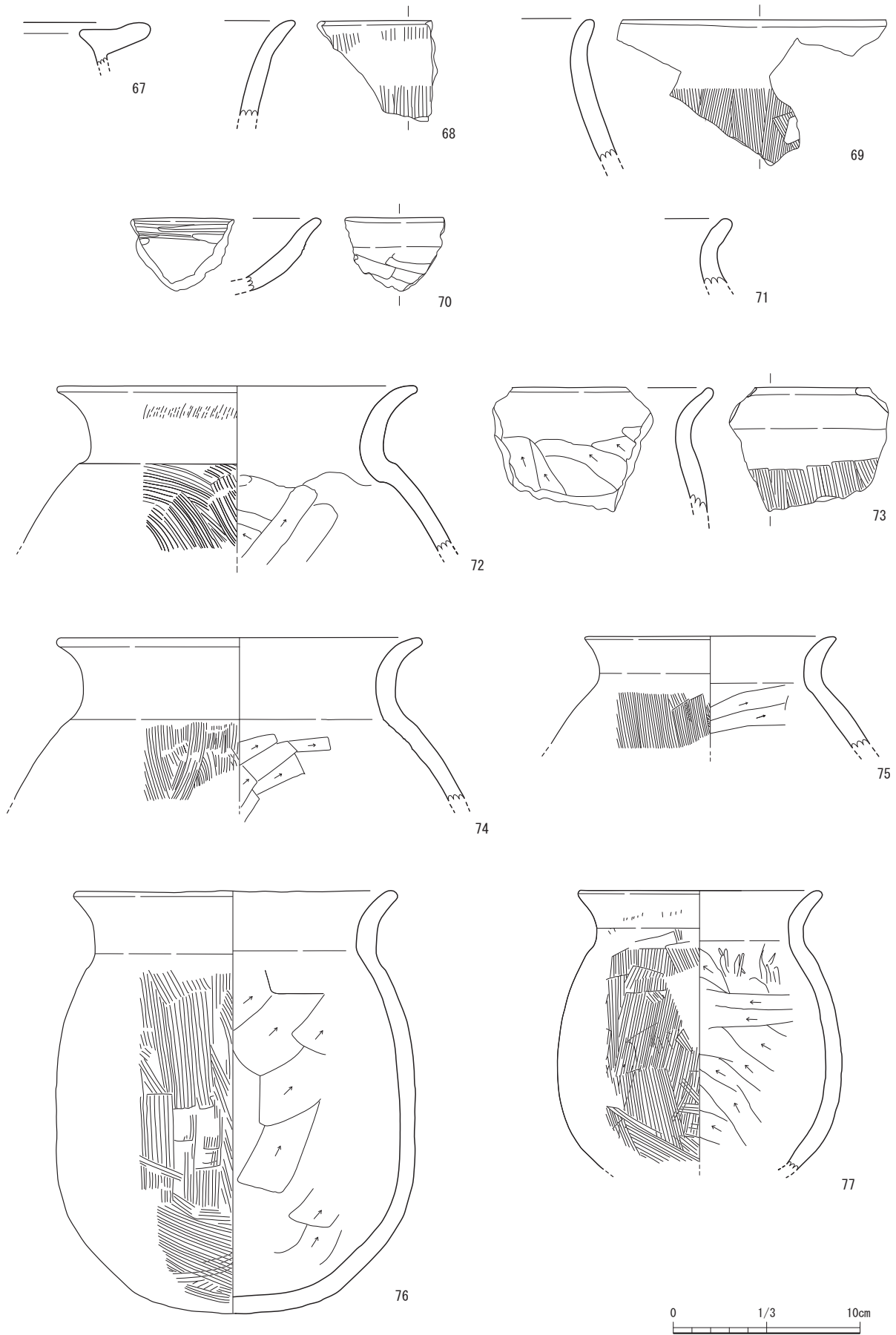
第21図 9号・10号竪穴建物出土遺物実測図

11号竪穴建物(S13)

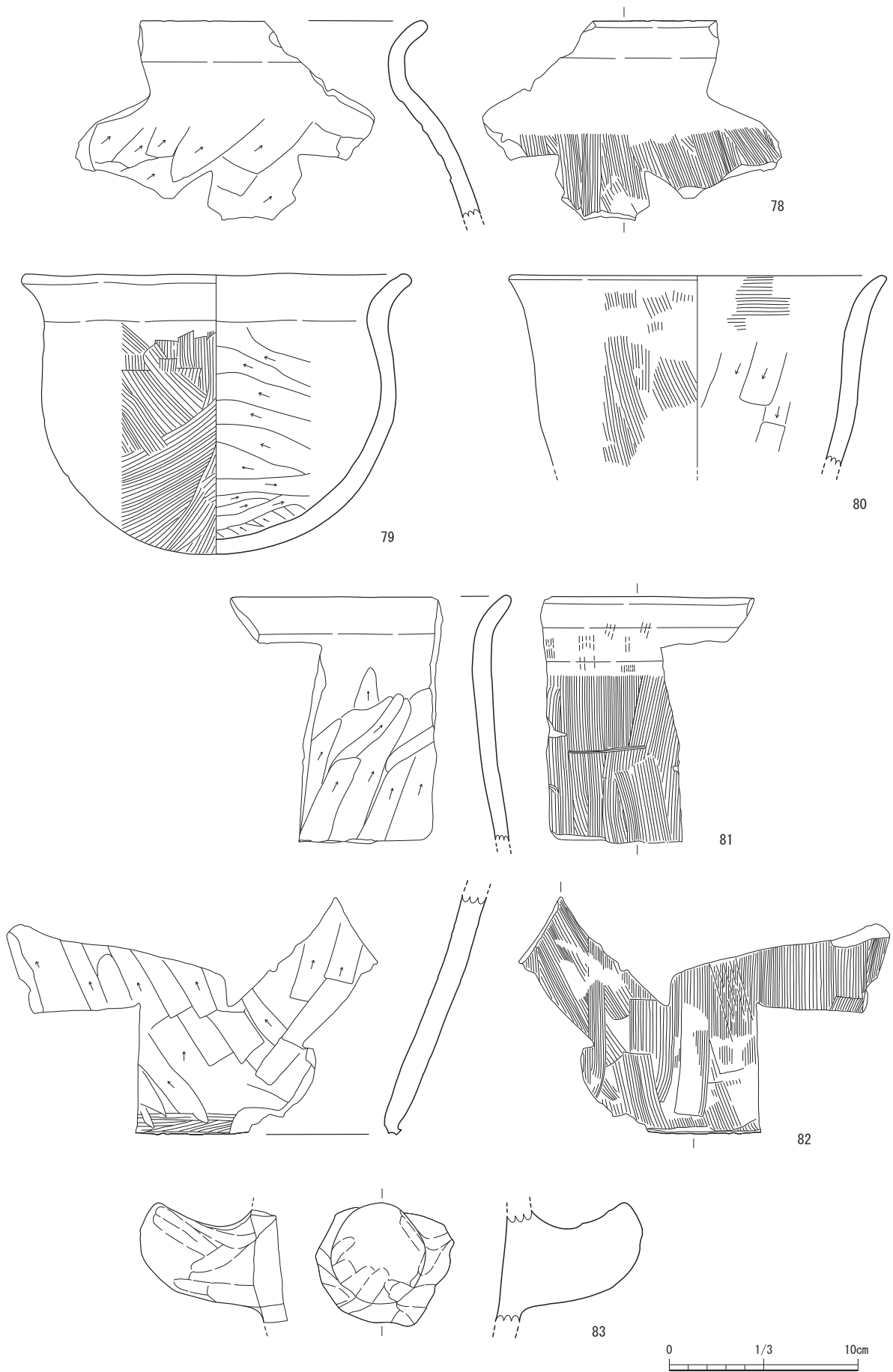


- 1: 暗褐色砂質土(10YR3/4) 粘性少し有り、しまり弱。少量の炭化物粒を含む。遺物含む。9層(地山)の2~3cm大ブロックが少量入る。
- 2: 明赤褐色砂質土(5YR5/8) 粘性弱、しまり弱。少量の炭化物粒を含む。
- 3: 橙色砂質土(5YR7/6) カマド。一部赤化している。粘性強、しまり強。炭化物を含む。
- 4: 褐色砂質土(7.5YR4/6) 粘性弱、しまり弱。少量の炭化物粒、焼土粒を含む。

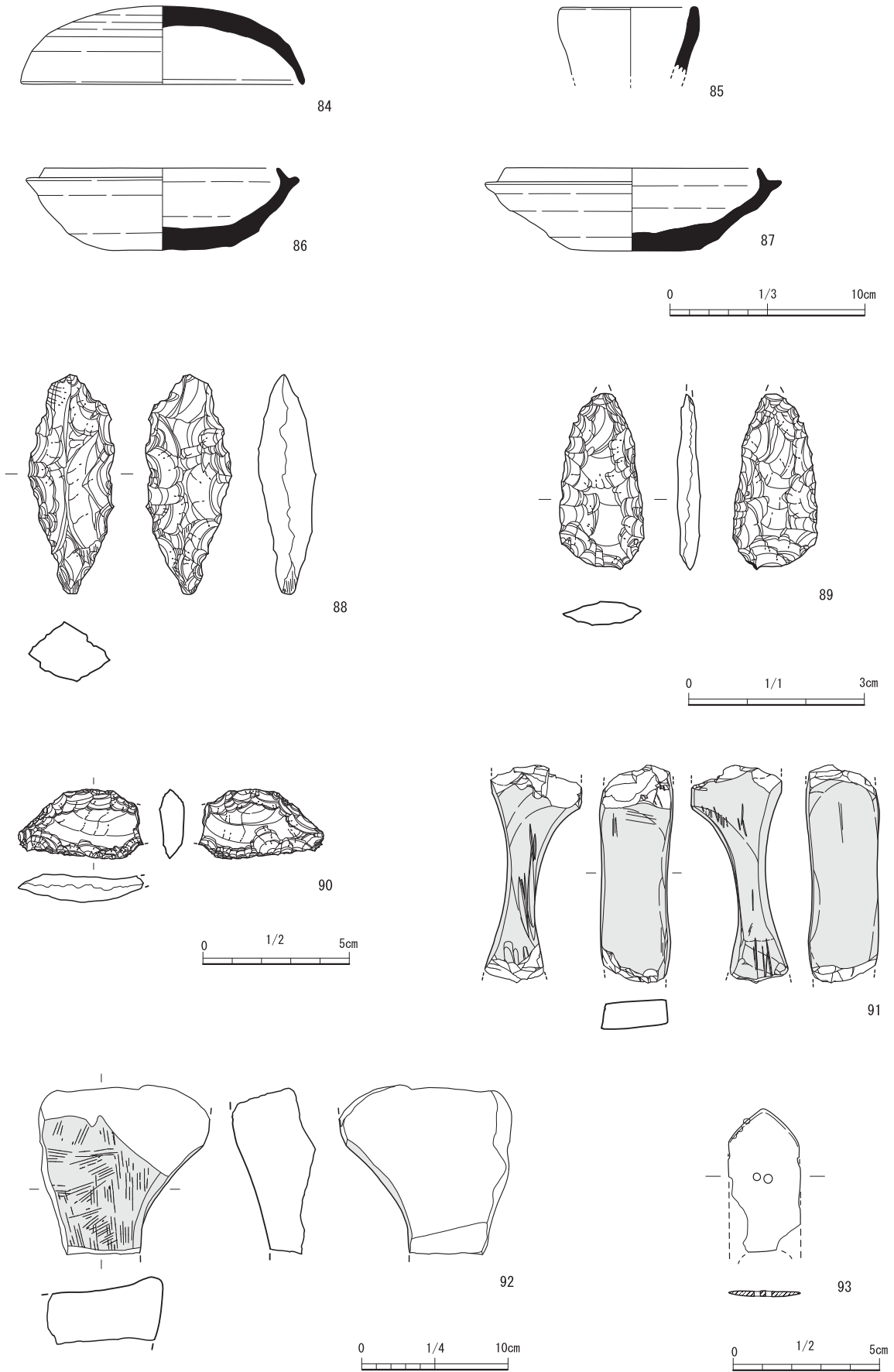
第22図 11号竪穴建物(S13)実測図



第23図 11号竖穴建物出土遺物実測図(1)



第24図 11号竖穴建物出土遺物実測図(2)



第25図 11号竪穴建物出土遺物実測図(3)

また、図化していないが、3点の打製石鏃と打製石斧も写真図版のみで掲載している。

#### 12号竪穴建物【S31】(第26図、図版4・22)

L-104・105グリッドで確認された竪穴建物だが北側のプランは確認できず、規模は長軸3.67m、南側の短軸1.86mをかりうじて確認することができた。深さは0.43mと浅く、残りの良い状態とは言えない。住居の壁際まで広がる硬化面と、この建物に伴うと思われるピットを確認した。

出土遺物94・95は、弥生時代の壺・甕の口縁部である。

#### 13号竪穴建物【S7】(第26図)

L-107・108グリッドで確認された竪穴建物で、規模は長軸3.09m、短軸2.60m、深さ0.03mである。遺構西側はカクランに切られている。3ヶ所のピットはこの遺構を切っており、この遺構に伴うものではないと判断している。

#### 14号竪穴建物【S12】(第27図、図版4・5・22)

N-101・102グリッドで確認された遺構で、規模は長軸3.19m、短軸2.44m、深さ0.28mである。竪穴建物とするにはやや規模が小さい感があり、柱穴、硬化面、炉すべて確認されていないので方形プランの遺構という状態である。しかし、そばで11号竪穴建物(S13)が検出されていること、方形であることから竪穴建物の可能性はあると思う。

出土遺物は数が少なく、遺構の時期を断定するのは難しい。96・97は弥生時代中期の甕・鉢の口縁部、98は黒曜石製の打製石鏃で先端部を若干、片側脚部も欠損する。99は袋状鉄斧の先端部である。また、図化していないが、3点の打製石鏃と打製石斧の基部も出土し、写真図版のみで掲載している。

#### 不明遺構【S17】(第27図、図版5・22)

M・N-102グリッドで確認された遺構で、規模は長軸1.87m、短軸1.61m、深さ0.58mである。この遺構を確認した当初は、炭化物と焼土ブロックを埋土に含むことから14号竪穴建物(S12)の屋外炉と想定したが、位置的關係などから不明遺構とした。

出土遺物100・101は、弥生時代の甕の口縁部、102は甕の脚部である。

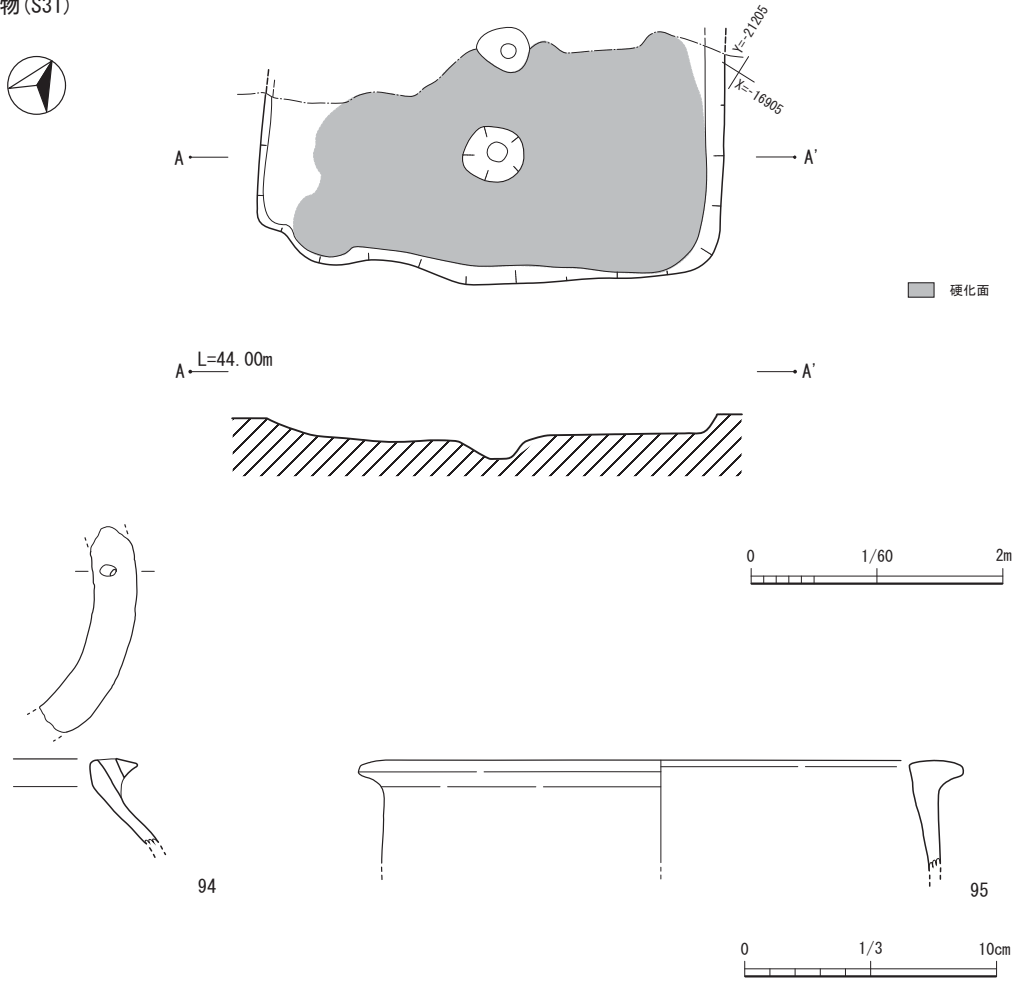
#### 15号竪穴建物【S34】(第28図、図版5)

O・P-106・107グリッドで確認されたピット群で、ピットの間隔は1.7～2.1mである。ピットの大きさは、径0.35～0.59m、深さ0.38～0.59mである。ピットの並び方と他に4本柱の竪穴建物と思われる住居もあることから、竪穴建物の柱穴だけが残った状態ではないかと考えられる。時代により規模は異なるが一辺が4m前後になるのではと推定される。

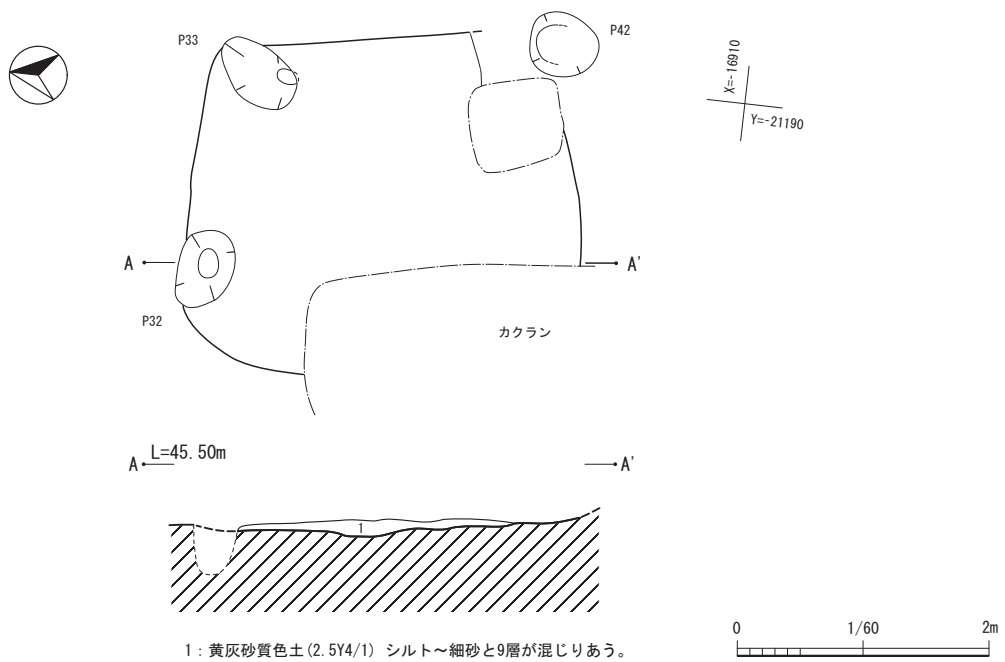
#### 16号竪穴建物【S27】(第28図、図版5)

R-104・105グリッドで確認された遺構で、方形プランの住居の北側一部分のみで、大部分は南側の調査区外に広がるのではないかとと思われる。規模は、長軸3.64m以上、短軸0.79m以上、深さ0.21mである。確認できた一辺が3m以上もあり、土層断面でも1層の下は平らで遺構底部は凹凸があるが、竪穴建物の掘り方として考えれば許容範囲と考えられるので、竪穴建物の可能性がある。ただ、2区13号土坑(S41)は規模が3.6m×2.8mと大きめなのでこの遺構も住居とは言いきれないところもある。

12号竪穴建物 (S31)



13号竪穴建物 (S7)

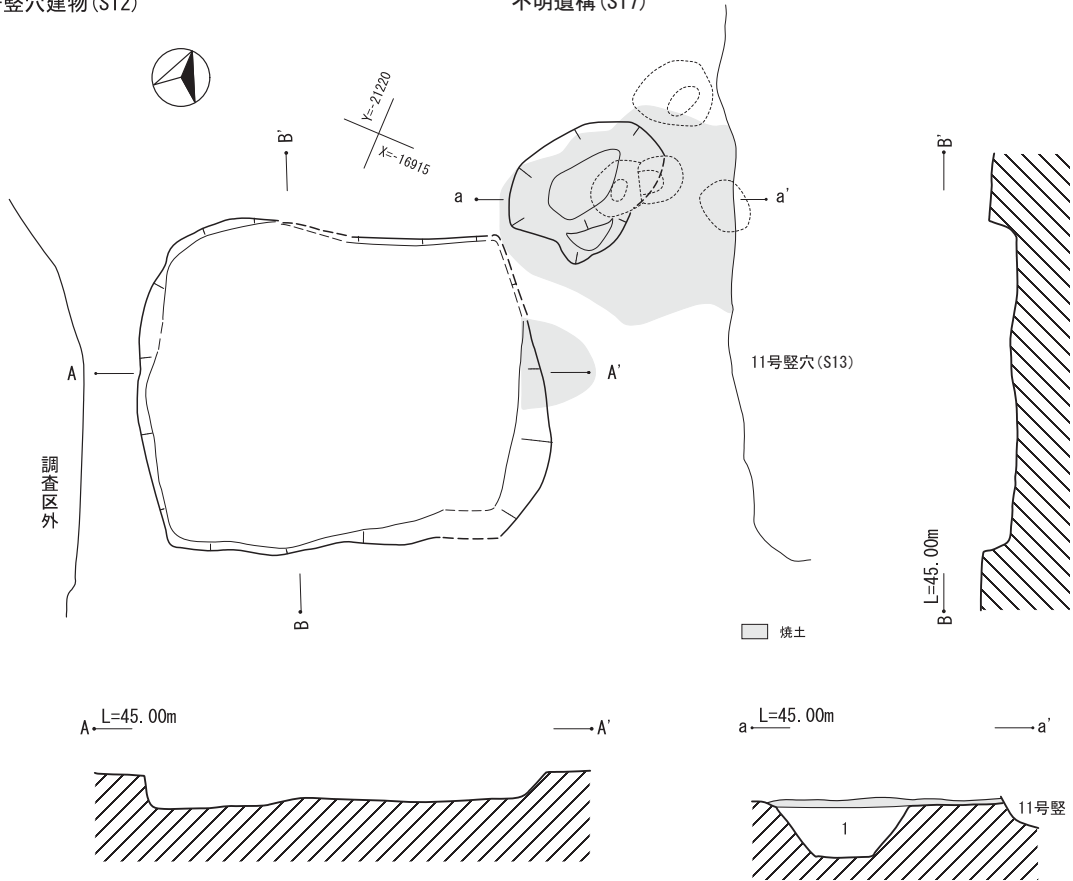


第26図 12・13号竪穴建物 (S31・7) 及び12号竪穴建物出土遺物実測図



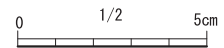
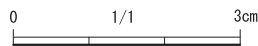
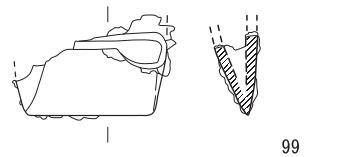
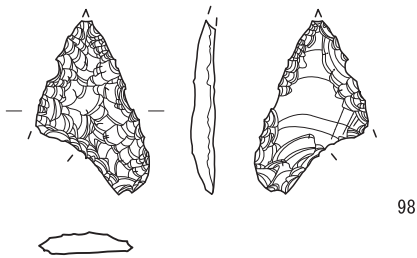
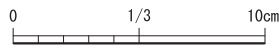
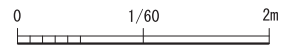
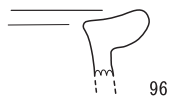
14号竪穴建物(S12)

不明遺構(S17)

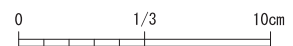
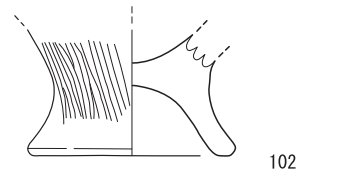
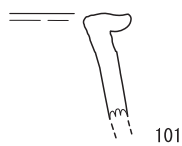
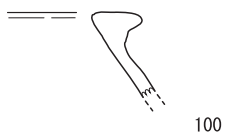


1: 橙色砂質土(5YR7/8) 粘性弱、しまり弱い。

【14号竪穴】

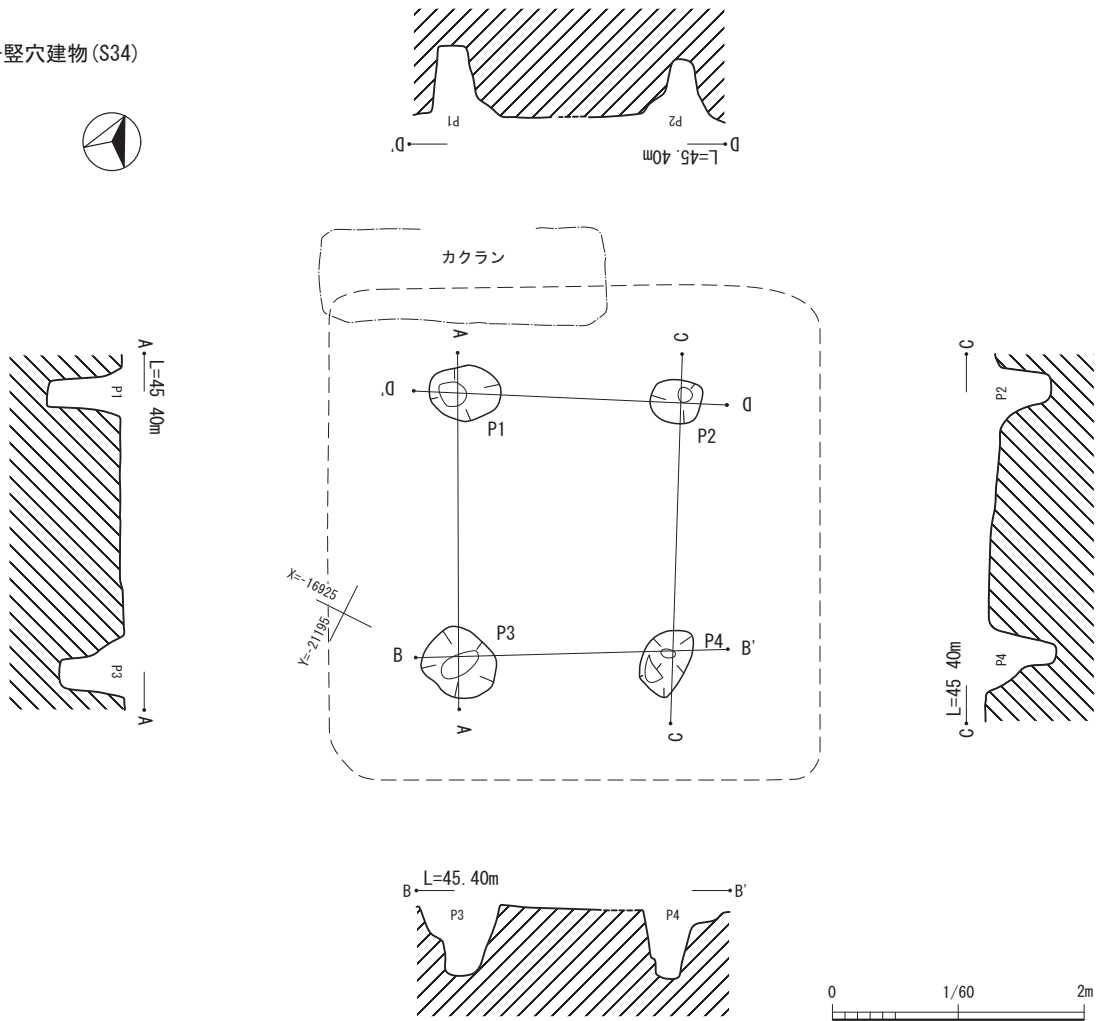


【不明遺構】

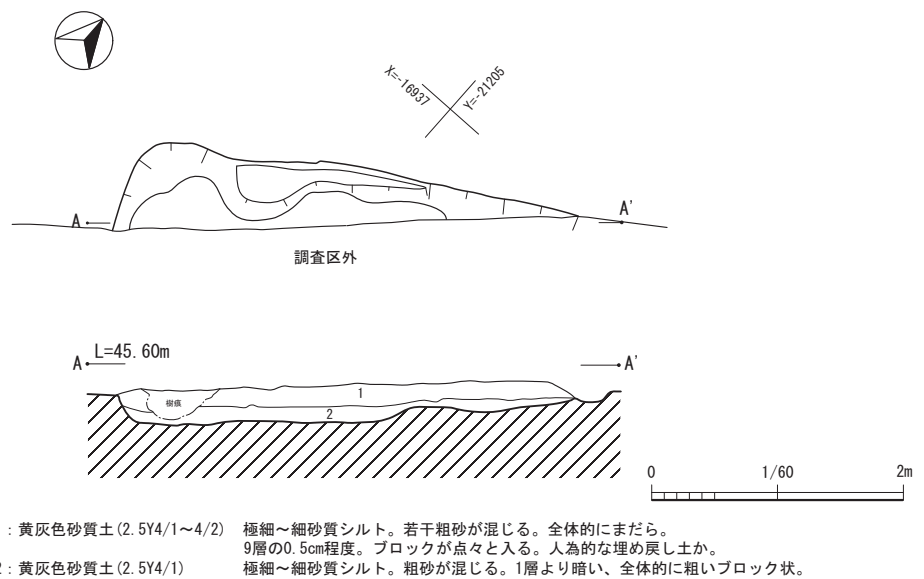


第27図 14号竪穴建物(S12)・不明遺構(S17)及び出土遺物実測図

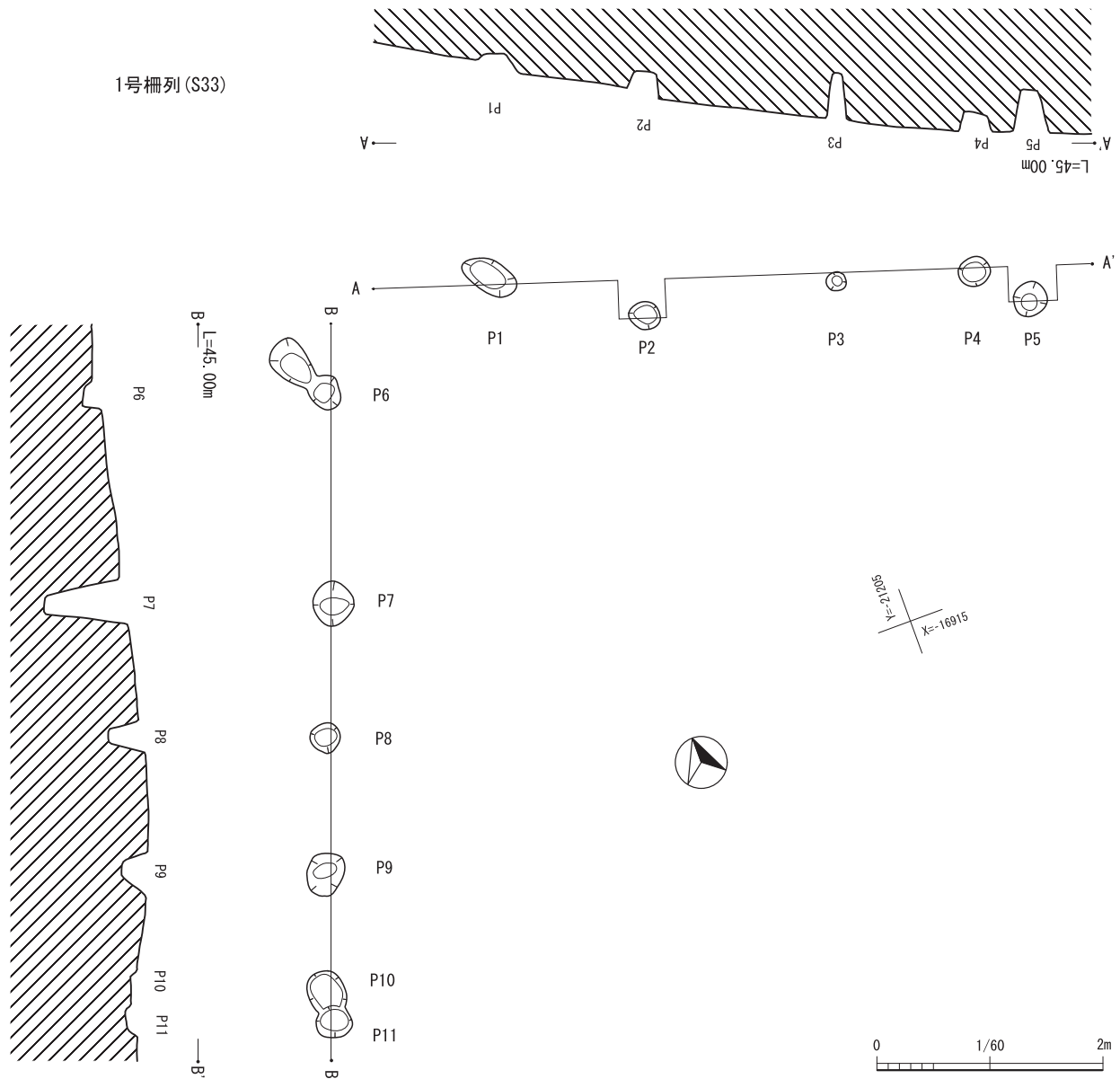
15号竪穴建物 (S34)



16号竪穴建物 (S27)



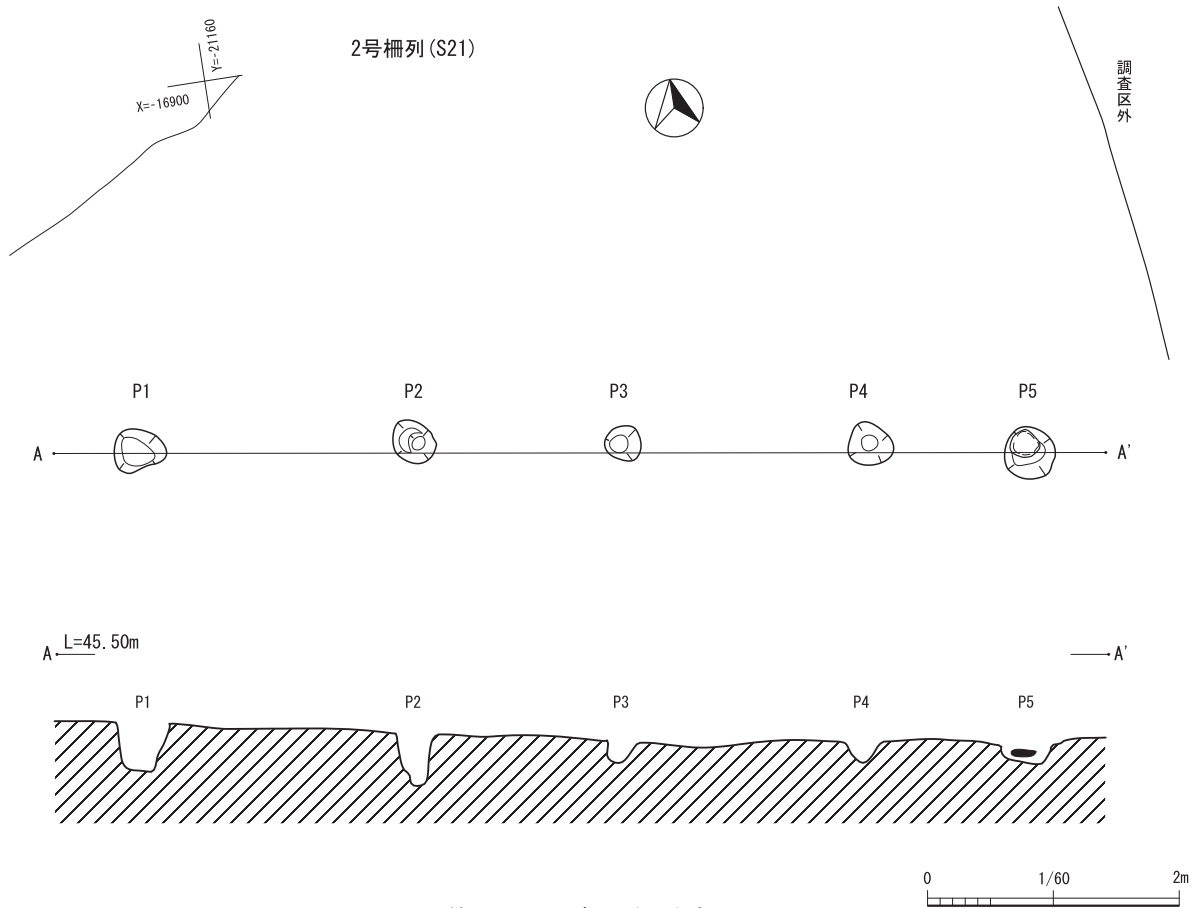
第28図 15・16号竪穴建物 (S34・27) 実測図



第29図 1号柵列 (S33) 実測図

表1 1号柵列計測表

調査区	遺構名		検出層	規模(m)		
	(報告)	(調査時)		長軸	短軸	深さ
1区	1号柵列 P1	S33 P514	9層	0.47	0.27	0.12
1区	1号柵列 P2	S33 P515	9層	0.30	0.25	0.22
1区	1号柵列 P3	S33 P516	9層	0.18	0.17	0.40
1区	1号柵列 P4	S33 P517	9層	0.33	0.31	0.13
1区	1号柵列 P5	S33 P519	9層	0.33	0.31	0.41
1区	1号柵列 P6	S33 P512	9層	0.31	0.27	0.15
1区	1号柵列 P7	S33 P153	9層	0.49	0.36	0.75
1区	1号柵列 P8	S33 P511	9層	0.28	0.25	0.23
1区	1号柵列 P9	S33 P510	9層	0.37	0.31	0.23
1区	1号柵列 P10	S33 P509	9層	0.40	0.37	0.25
1区	1号柵列 P11	S33 P508	9層	0.37	0.33	0.32



第30図 2号柵列 (S21) 実測図

表 2 2号柵列計測表

調査区	遺構名			検出層	規模 (m)		
	(報告)	(調査時)			長軸	短軸	深さ
1区	2号柵列 P1	S21	P285	9層	0.41	0.35	0.27
1区	2号柵列 P2	S21	P292	9層	0.32	0.32	0.44
1区	2号柵列 P3	S21	P293	9層	0.27	0.27	0.19
1区	2号柵列 P4	S21	P294	9層	0.36	0.35	0.20
1区	2号柵列 P5	S21	P295	9層	0.41	0.41	0.13

## 柵列

### 1号柵列【S33】(第29図)

M・N-103・104、M-105グリッドで確認された柵列である。南北に4間、東西に4間で柱間隔は0.5~1.5mである。ピットの規模は、長軸が0.18~0.49m、短軸0.17~0.37m、深さは0.12~0.75mと疎らだが検出面がかなり傾斜しているため西から東へ、南から北へと深さは深くなる。東西方向の東端の1間は特に間隔が狭い。出土遺物もなく時期は不明である。

### 2号柵列【S21】(第30図、図版5)

K-113~115グリッドで確認された柵列である。柱の間隔は0.8~2.3mでややばらつきがあるが東西方向に

直線的に並ぶ。P5では礎石と思われる平石が出土した。その他のピットでも石が単独、または複数入るものもあったが、礎石や根石とは言いきれなかった。1号柵列と同様で、出土遺物もなく時期の特定は困難である。

## 土坑

### 1号土坑【S18】(第31図、図版5・22)

L-110・111グリッドで確認された土坑で、規模は長軸1.91m、短軸1.12m、深さ0.32mである。南側は方形になるが北側はいびつである。また、南側は遺構の輪郭が非常にはっきりしていたが、掘り上げると深さはほとんどなく、断面で見ると南側から階段状に北側に落ちていく形になった。

出土遺物は、103の先端部を僅かに欠損した黒曜石製の打製石鏃が1点である。

### 2号土坑【S26】(第31図、図版5・22)

R・S-103・104グリッドで確認された土坑である。規模は、長軸2.46m以上、短軸1.43m、深さ0.12mである。調査区南壁際で確認された。西側はカクランで切られており、残りはよくない。そのため、土坑としているが、調査区外南側に広がる竪穴建物の一部、または西側に延びる溝状遺構となる可能性もある。

出土遺物は、弥生時代のもので104は甕の口縁部、105は鉢の底部である。

### 3号土坑【S19】(第32図、図版5・22)

L・M-112グリッドで確認された土坑である。規模は、長軸2.15m、短軸1.57m、深さ0.20mである。形状は方形プランに近い形になるが、北側はかなりいびつである。

出土遺物106は、弥生時代の甕の口縁部である。

### 4号土坑【S11】(第32図、図版6)

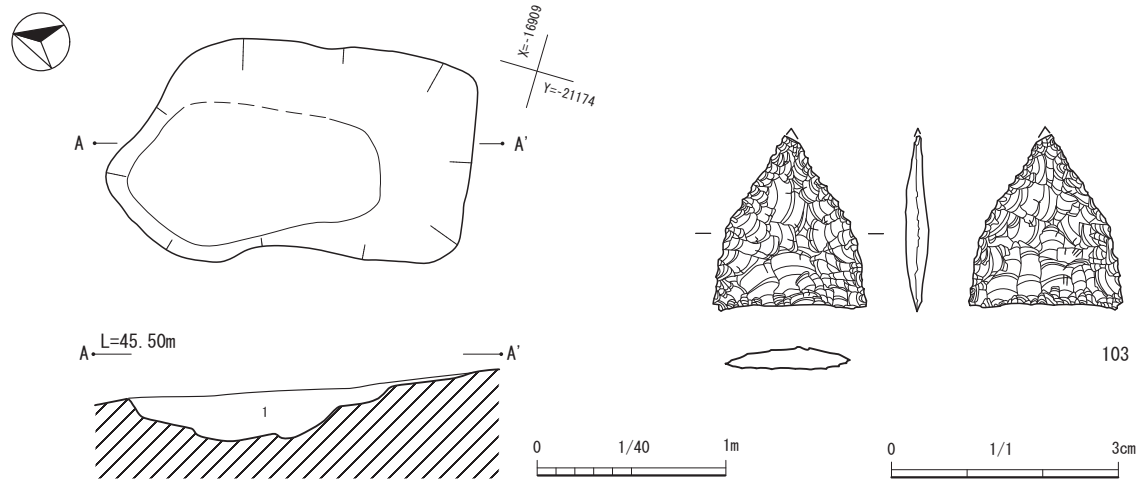
M-101グリッドで確認された土坑である。検出できた規模は、長軸1.25m以上、短軸0.68m以上、深さ0.17mで、南西側を大きくトレンチに切られており残りはよくない。上層から20cm大の石が2点出土しているが、自然に入ったのではないかと思われる。また、図化していないが産地の異なる黒曜石製の剥片も出土している。

### 5号土坑【S29】(第33図、図版6・22)

N・O-103・104グリッドで確認された土坑である。検出した規模は、長軸0.50m以上、短軸0.45m、深さ0.94mで南側は根あと等によって切られる。周囲に根あと等が多かったため、遺構を想定していなかったが、掘削途中で掘り方断面や埋土の様子から遺構と判断した。完掘状況のみ記載している。

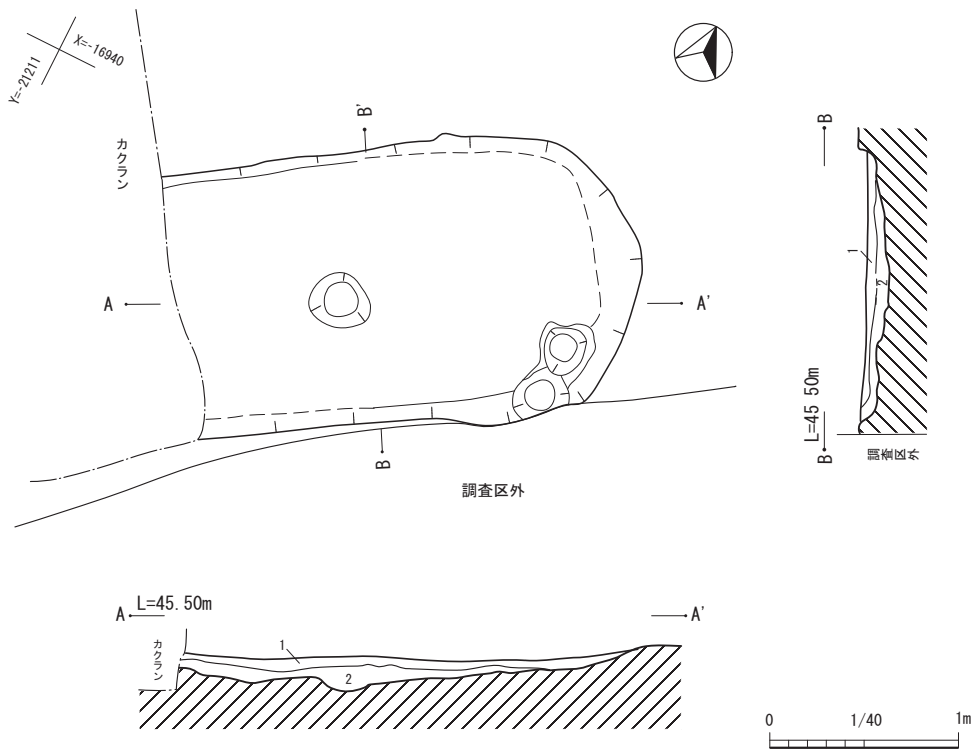
出土遺物107・108は、弥生時代の甕の口縁部である。

1号土坑 (S18)

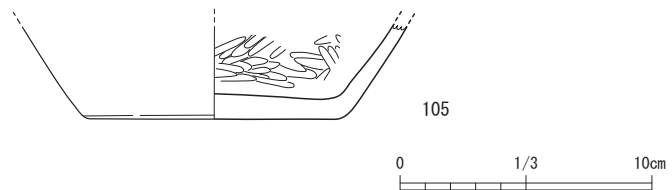
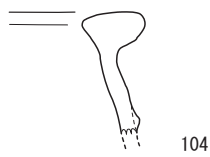


1: 灰オリ ブ色砂質土 (5Y4/2) 極細～細砂質シルト。9層ブロック、炭化物が少なく混じる。  
全体的に粗いブロック状。古めのカクランか？

2号土坑 (S26)

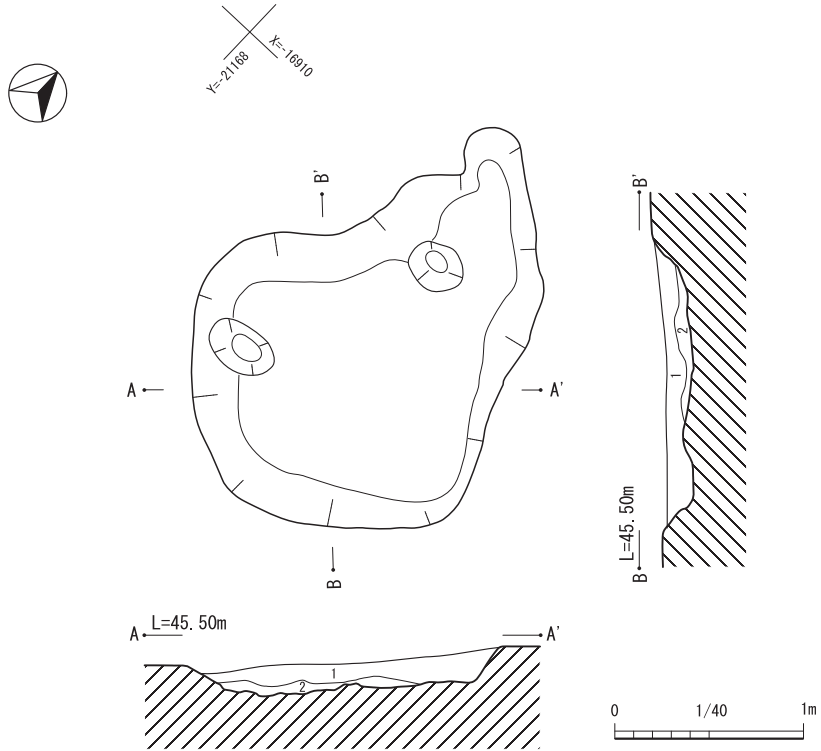


1: 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2～3/2) 極細～細砂質シルト。粗砂が混じる。やや暗め。  
2: 1と9層が混じり合う。

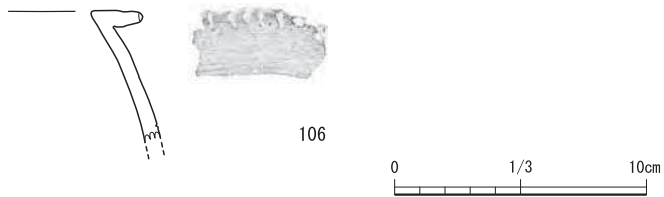


第31図 1・2号土坑 (S18・26) 及び出土遺物実測図

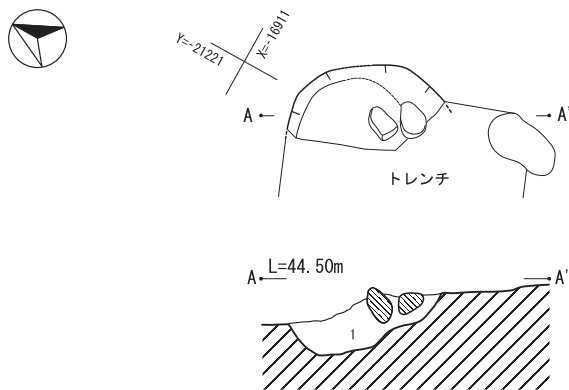
3号土坑 (S19)



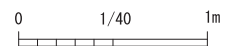
1 : 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2) 極細～細砂質シルト。全体的に根あと等の入りが著しい。1cm程の9層ブロックが点々と入る。  
 2 : 1に9層が混じる。



4号土坑 (S11)



1 : 暗褐色砂質土 (7.5YR3/4) 粘性弱、しまり弱。微量の炭化物を含む。遺構埋土。



第32図 3・4号土坑 (S19・11) 及び3号土坑出土遺物実測図

## 溝

### 1号溝【S1】(第33図、図版6)

P-102、Q-102~104、N-104・105 グリッドで確認された溝状の遺構である。検出された規模は、長さ 22.8 m、幅 0.45m、深さ 0.45mで調査区外の西側にのびる。調査区の西壁中央から南北壁に平行する。軸方位、埋土からすると、3区の3号溝(S3)と同一と考えられる。断面形態は、溝状遺構によく見られるかまぼこ型ではなくバケツ型を呈し、左右の壁は急激に立ち上がる形になる。

出土遺物は、弥生時代の土器片も含むが、形状、埋土からすると新しい時代、近世以降の溝ではないかと考えられる。

### グリッド出土遺物(第34~38図、図版6・23・24)

調査区全体としては、時期も幅広く、縄文時代から近世のものまで数多く出土している。

縄文時代の遺構は確認できなかったが、主に縄文時代晩期の鉢類の口縁部や底部が出土している。特に 109~112 は貝殻条痕文の深鉢形土器の口縁部、113~120 は黒色磨研土器であり 113 と 115 以外は浅鉢形土器である。118 はリボン状突起の付く浅鉢、121・122 は深鉢形土器の底部と考えられる。

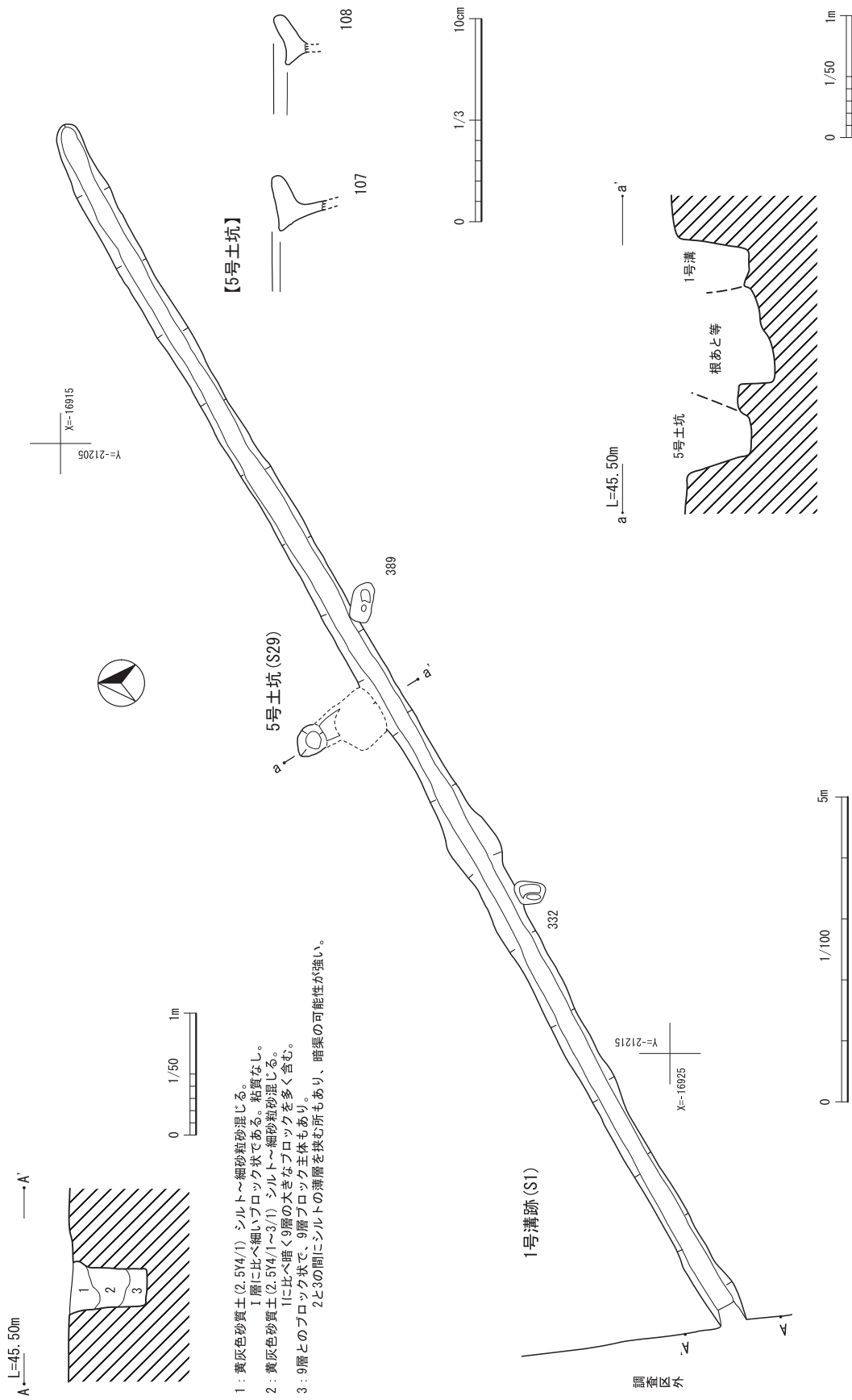
弥生時代の遺物は、123~139 の甕の口縁部が中心で時期は中期の範疇で収まる。139 は大きさ、形状から甕棺の口縁部の可能性がある。暗文の施された 140~142 の壺の口縁部も出土している。甕の脚部も多く、底が平らな 143 のようなものから上げ底の 144~146 のようなものもある。147 は高坏の口縁部の一部である。

土師器では、148 は甕の口縁から胴部、149・150 のような甕の把手と底部なども出土している。

石器も多く出土しており、151 は頁岩製のほぼ完形で、152 は流紋岩製の下側縁部を欠損した磨製石鎌である。153・154・156 は安山岩製の打製石鎌で先端部を若干欠損している。155 はチャート製の打製石鎌である。特に 153 は両側縁に突起状の出っ張りがあり、特異な五角形を呈する。157 は黒曜石製の二次加工のある剥片の一部と考えられ、基部と先端部を欠損する。158 は粘板岩製の石包丁の破片、159 は安山岩製の石匙である。160・161 は輝石安山岩製、162 は安山岩製の打製石鎌で、先端部や基部を欠損する。163 は流紋岩質安山岩製、164・165 は安山岩製の打製石斧で基部のみである。166 は抉入柱状片刃石斧で両端に打痕がみられ、故意に打ち抜いた可能性もある。167・168 は砂岩製で大きさや形状より携帯用の砥石ではないかと思われる。169・170 も砂岩製の砥石である。

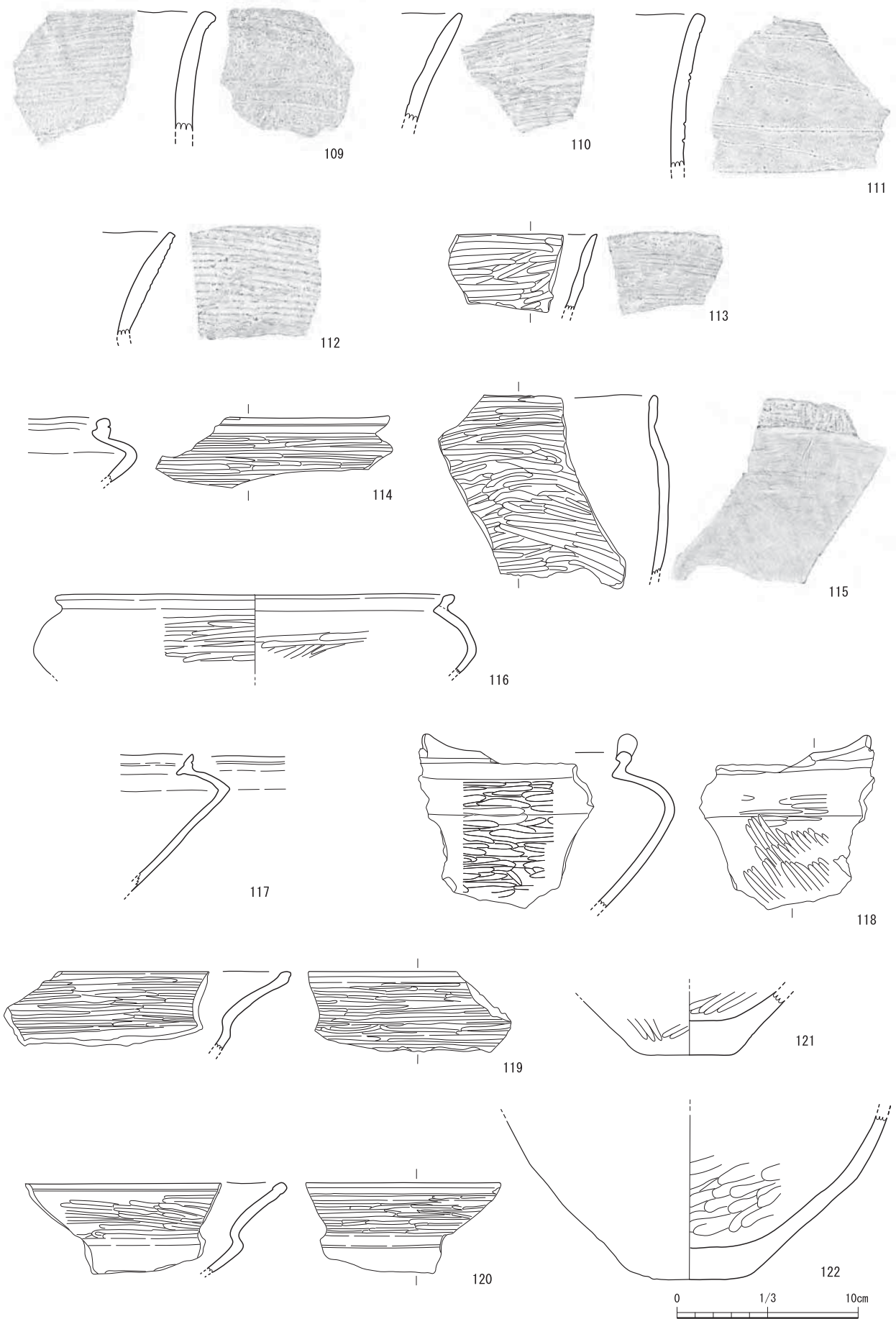
171~173 は鉄器である。171 は鉄鎌の鎌身部で、172 は袋状鉄斧の刃部と考えられ、173 は鉄鎌の茎部の一部と推定される。その他に、器種不明の鉄製品、台石、粘土塊等を写真図版のみで掲載している。



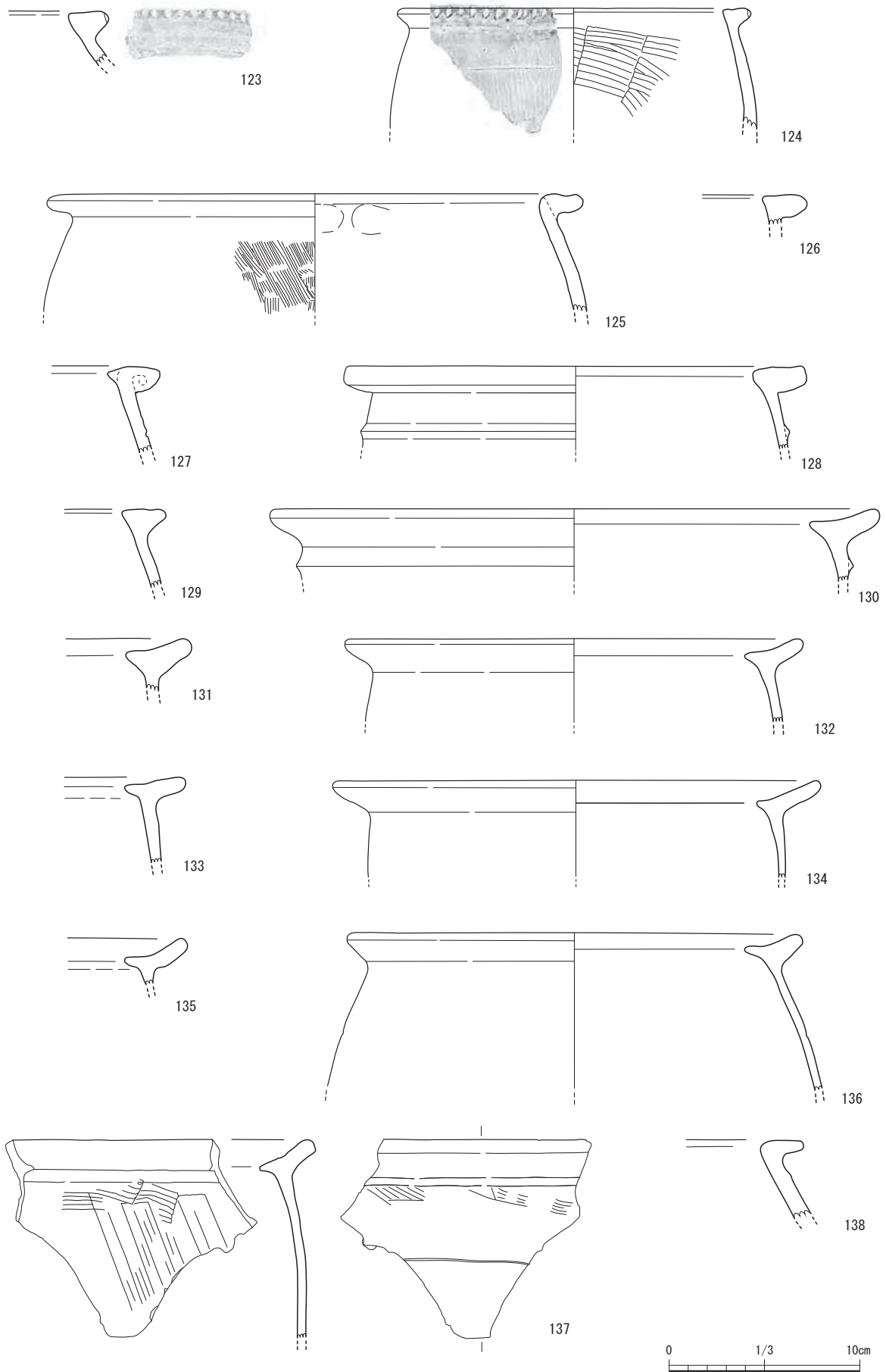


- 1 : 黄灰色砂質土 (2.5Y4/1) シルト～細砂粒砂混じる。  
 1層に比べ細いブロック状である。粘質なし。  
 2 : 黄灰色砂質土 (2.5Y4/1～3/1) シルト～細砂粒砂混じる。  
 1に比べ暗く9層の大きなブロックを多く含む。  
 3 : 9層とのブロック状で、9層ブロック主体もあり。  
 2と3の間はシルトの薄層を挟む所もあり、暗渠の可能性が強い。

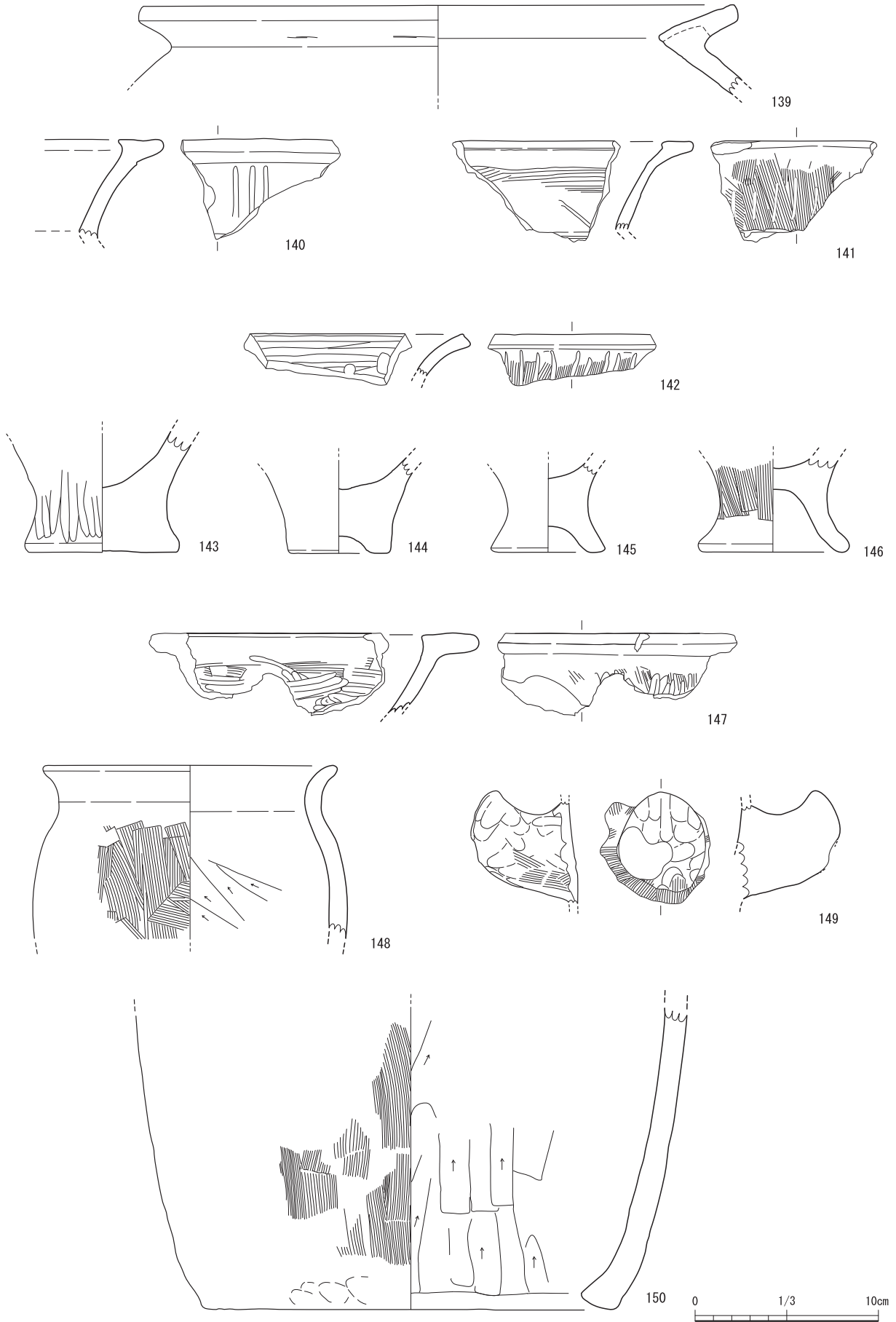
第33図 1号溝跡 (S1) ・ 5号土坑 (S29) 及び5号土坑出土遺物実測図



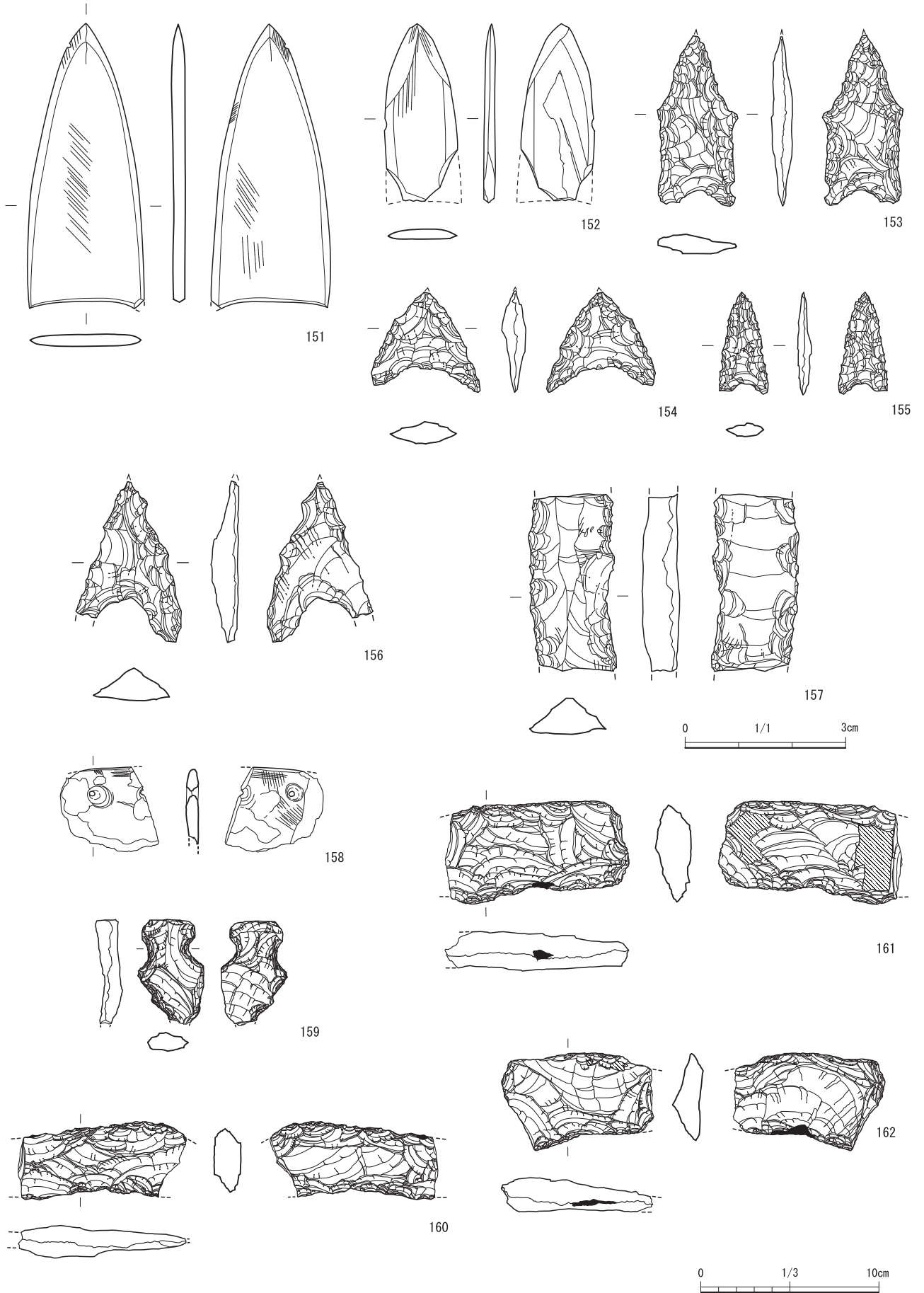
第34図 1区グリッド出土遺物実測図(1)



第35図 1区グリッド出土遺物実測図(2)



第36図 1区グリッド出土遺物実測図(3)



第37図 1区グリッド出土遺物実測図(4)



第38図 1区グリッド出土遺物実測図(5)

## 第4節 2区の調査成果 (第39図、図版7)

2区は、調査区全体の一番北側に位置する。総面積は約1334㎡で東西に長い長方形になる。調査区の面積としては3調査区の中で一番狭いが、確認された遺構数は、今回の調査区の中で一番多く、甕棺墓1基、竪穴建物28軒、土坑9基、溝1条となる。特に、竪穴建物の数が多くそのほとんどが、調査区の南側に集中し激しく切り合っている。また、切り合いは、横に切り合う場合はまだわかりやすいが、上下での切り合いになると判断に困ることが多くあった。さらに、遺構の残りが全体的に悪く、掘りこみが浅いうえに硬化面、柱穴も確認できないものが多かった。そのため、形的には住居のようだが、住居だと断定する根拠の乏しいものがあり土坑としたものの中にはある。出土遺物は、弥生時代中期に属するものがほとんどであった。特に目についたのは、暗文の施された土器の破片の割合が高かったことである。

本調査区の東壁の土層断面図を第40図に掲載している。

### 甕棺墓

#### 3号甕棺墓【S13】(第41・42図、図版7・25)

H・I-120グリッドで確認された甕棺墓である。埋設方位はN-75° -Eで、埋納角度は34度で、組み合わせは鉢×甕である。掘り方の規模は長軸2.0m、短軸1.1m、深さ0.8mで、甕棺は掘り方の北西角で埋納されていた。当初、プランが方形だったこともあり竪穴建物と想定して掘り下げていたが甕棺を検出した。この遺構は、10号土坑(S19)に切られ、39号竪穴建物(S12)に隣接する。周囲では竪穴建物が多く確認された。甕棺の埋葬された穴は、甕棺に合わせて狭まるようになり、9層を甕の形ピッタリに掘り込んである。目張り粘土は確認できなかった。上甕は土圧によりひずみ、破損し棺内に土が満ちていた。下甕は土圧による影響もほとんど見られず、口縁部以外割れていなかった。それでも下甕内に土は入り込んでおり、埋土からは上甕の破片が出土した。

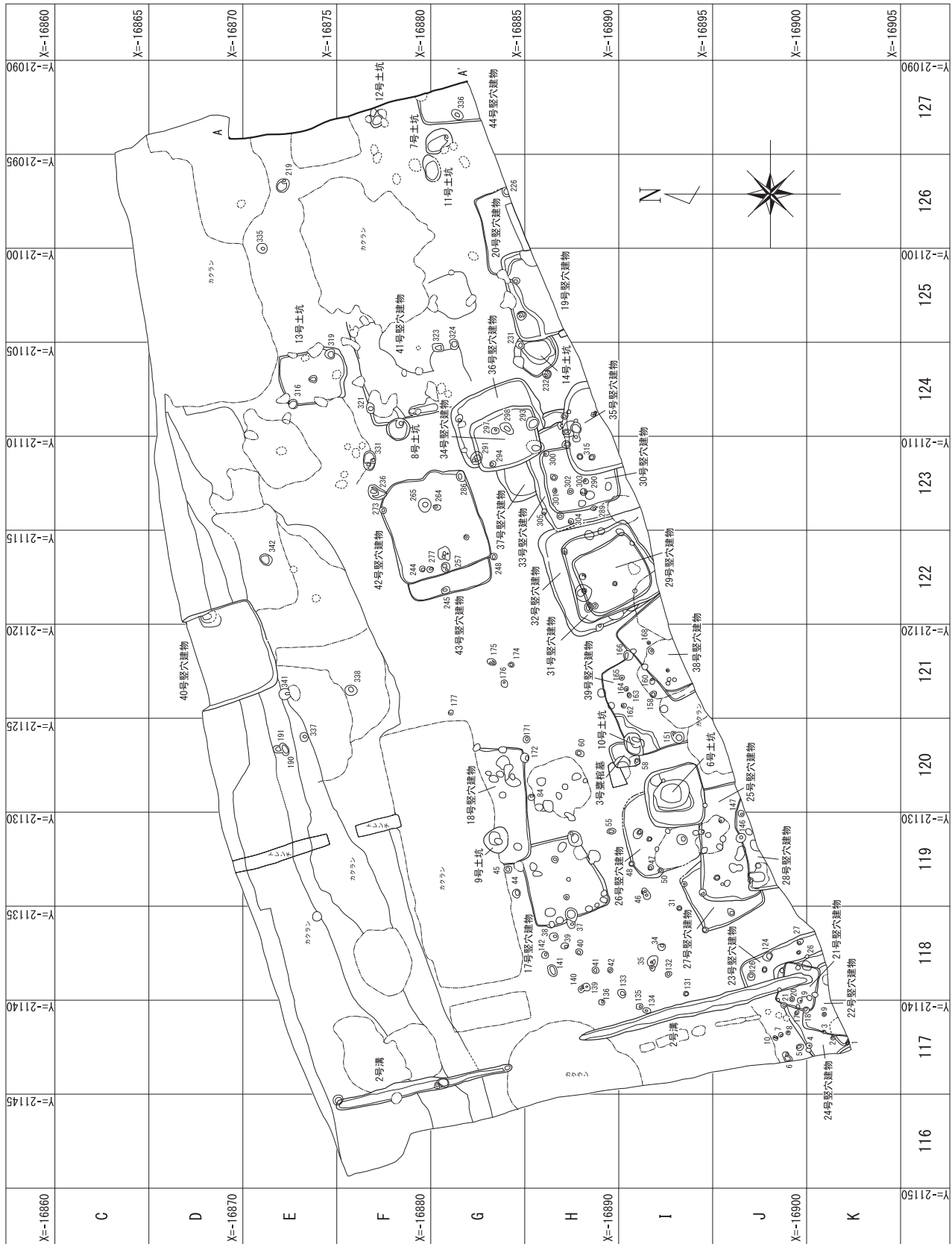
175は上甕で、口径37.0cm、底径11.7cm、器高28.6cmの鉢である。口唇部中央がややへこみ、口縁下に突帯が1条めぐる。底部は平らである。176は下甕で、口径33.9cm、底径8.3cm、器高75.4cm、胴部最大径52.3cmを測るやや胴部のふくらんだ甕である。下甕は、口縁は内側にやや傾斜するが、内側へのせりだしは弱い。突帯は最大胴部付近に刻目突帯が1条めぐる。底部は平らである。上甕、下甕ともにミガキがありとてもきれいである。特に下甕の突帯より下には、ミガキの上に更に縦方向の暗文が見られる。甕棺の残りはよかったが、棺内からの骨等の出土はなかった。

下甕内からは174の黒曜石製の打製石鏃が1点出土したが、埋葬後に外部から混入した土の中にあっただと思われる。上記の特徴から甕棺の時期は、弥生時代中期後半と推定される。

### 竪穴建物

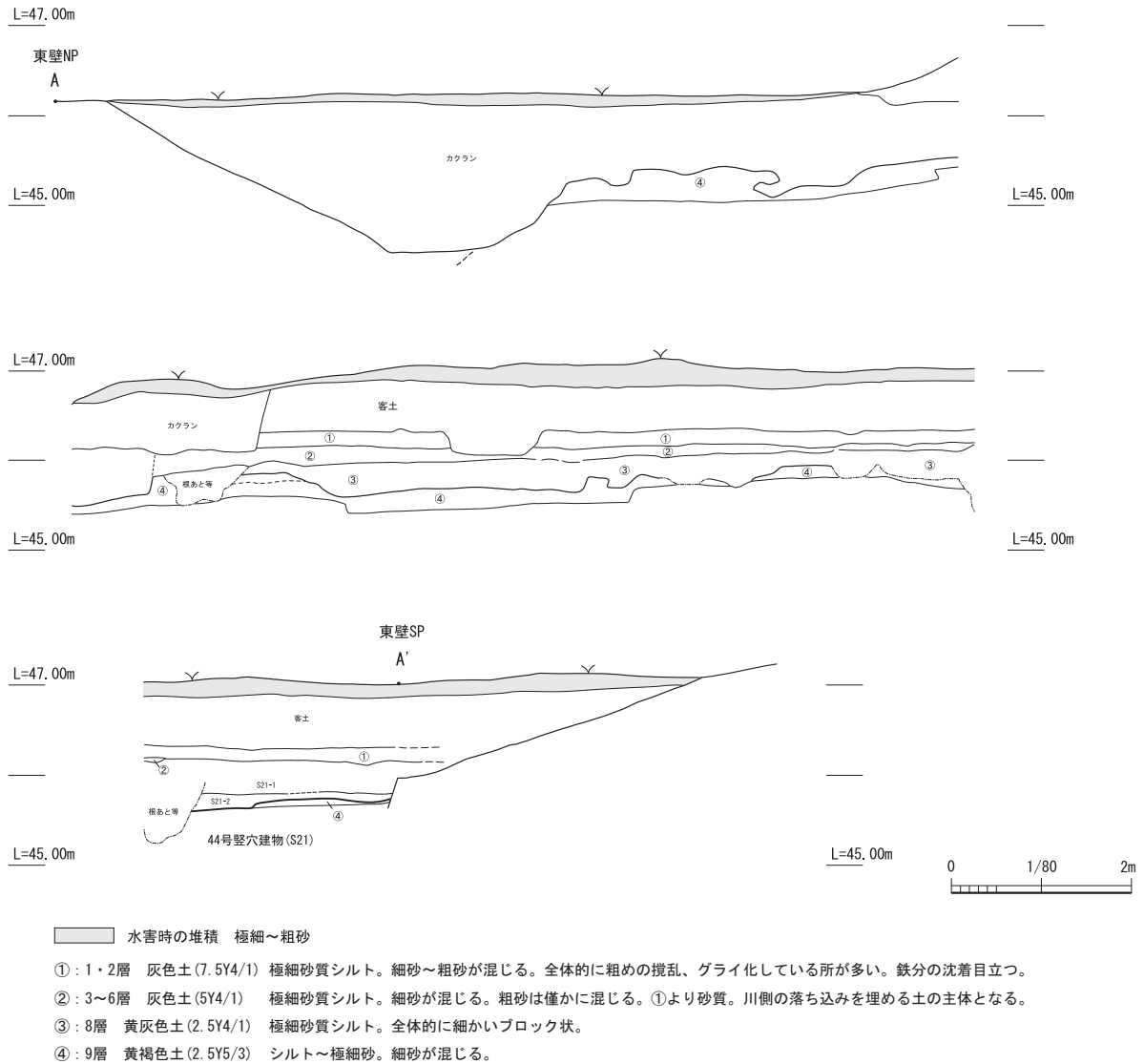
#### 17号竪穴建物【S2】(第43図、図版8・24)

H-118・119グリッドで確認された竪穴建物である。規模は、長軸4.3m、短軸3.8m、深さ0.2mで南東側内側に入る台形型になる。北東角を18号竪穴建物(S1)に切られる。全体的に樹痕と思われるピットが多数あるため、遺構の機能上の性質を捉えることは難しい。中央部から東側にかけて長さ60cm大の範囲の土は炭化物を多く含む。東側には壁が被熱により赤化したと思われる窪みがあったが、人為的なものではなく、炉ではないと判断した。図化することが難しかったため、焼土範囲のみを記録した。この遺構に伴うと思われるピットが2ヶ所あり、位置的に2本柱の柱穴ではないかと思われる。硬化面は確認できなかった。



第39図 吉原遺跡2区遺構配置図(1/300)





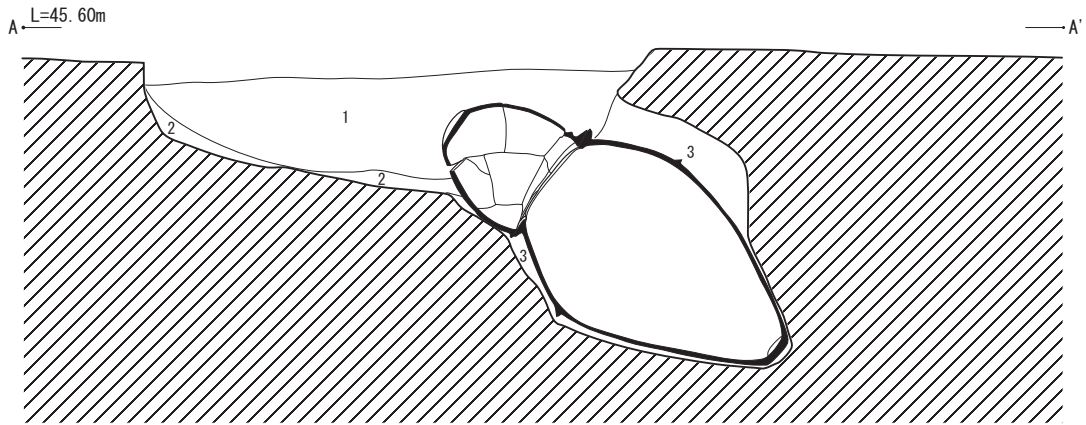
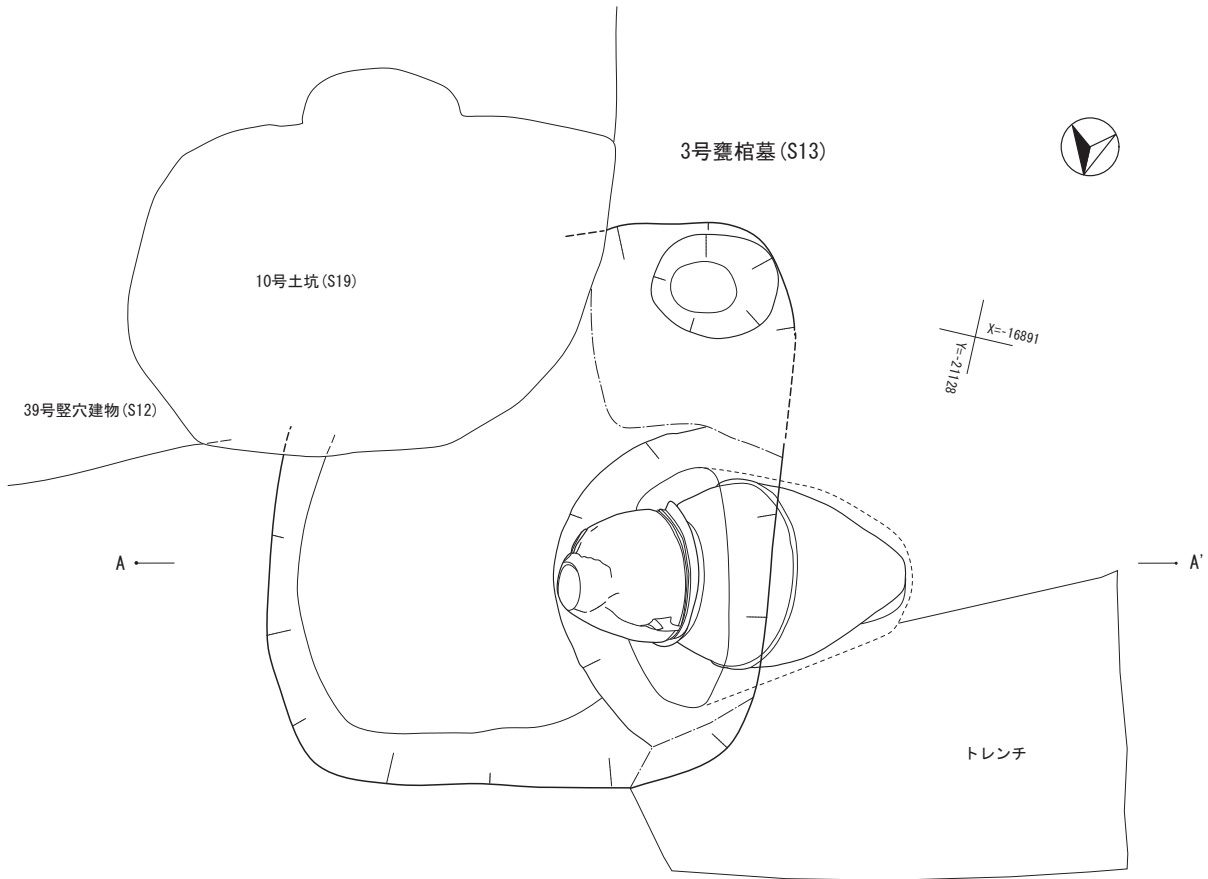
第40図 吉原2区東壁土層断面図

また、遺構南東側と西側に土坑があるが、南東側の土坑の最下層からは186・187の甕の脚部が2点出土している。また、177～183は甕の口縁部、184は壺の口縁部、185は甕の脚部であり、いずれも弥生時代中期の範疇で収まるものである。石器は188の安山岩製の石匙が1点出土しているが、縄文時代のもので流れ込みと思われる。

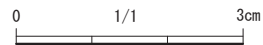
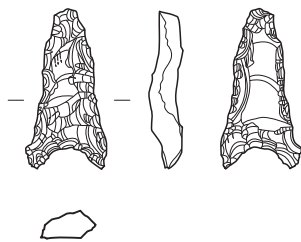
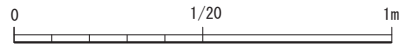
18号竪穴建物【S1】(第44図、図版8・25)

G-119・120グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸6.2m、短軸2.6m以上、深さ0.2mで、北側の約半分以上をカクランに切られており、南側の3分の1程度を検出したと思われる。南西側の角は17号竪穴建物を切る。また、北東側は9号土坑(S17)に切られている。大きなピットが遺構内やこの遺構を切る状態でいくつか確認できたが、樹痕とみられる。この遺構に伴うと考えられる柱穴のようなピットは確認できなかった。遺構の東側に炭化物を伴う埋土が確認できたが、全体像が不明のためこの遺構に伴う炉等の施設とは想定しづらい。確認できた深さも浅く、硬化面等は確認できなかったが、形から竪穴建物と判断した。

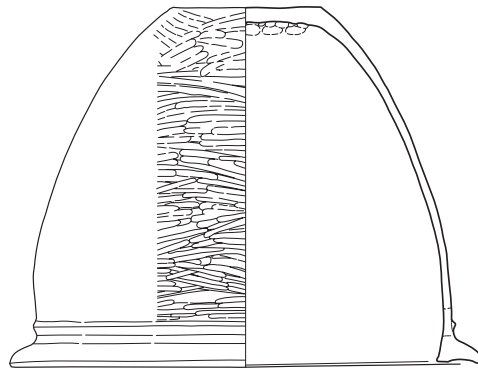
出土遺物189～193は弥生時代中期の甕の口縁部で、194は暗文を施した壺の口縁部である。195は土師器



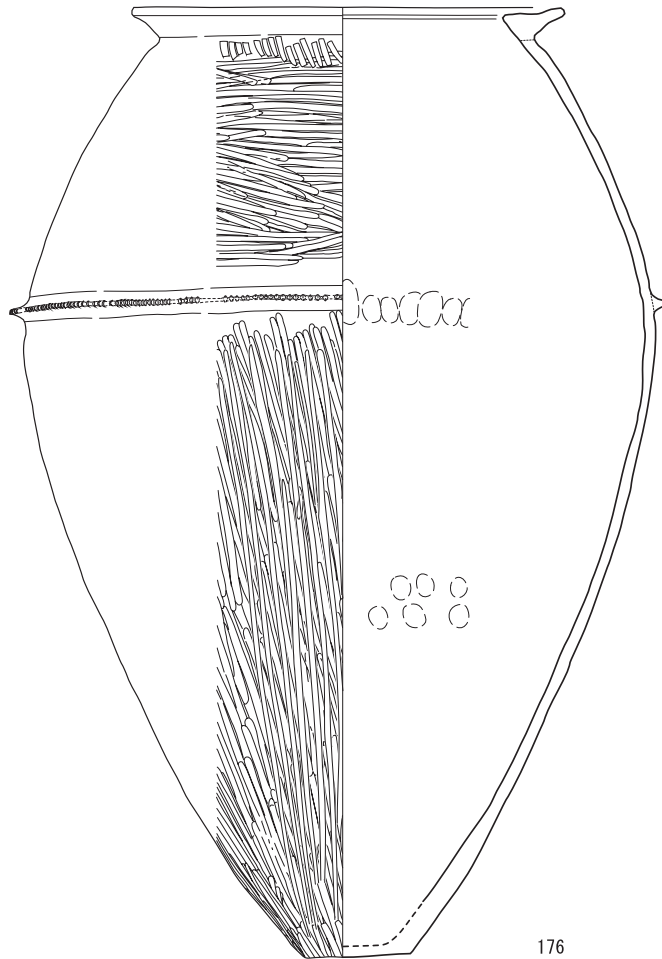
- 1: 暗褐色砂質土 (7.5YR3/3) 粘性弱、しまり弱。9層ブロック1~3cm大を含む。
- 2: 褐色砂質土 (7.5YR4/4) 粘性弱、しまり弱。9層ブロック1cm大を含む。炭化物を少量含む。
- 3: 暗褐色砂質土 (7.5YR3/1) 粘性弱、しまり弱。9層ブロック0.5cm大を含む。



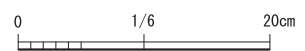
第41図 3号甕棺墓 (S13) 及び出土遺物実測図



175

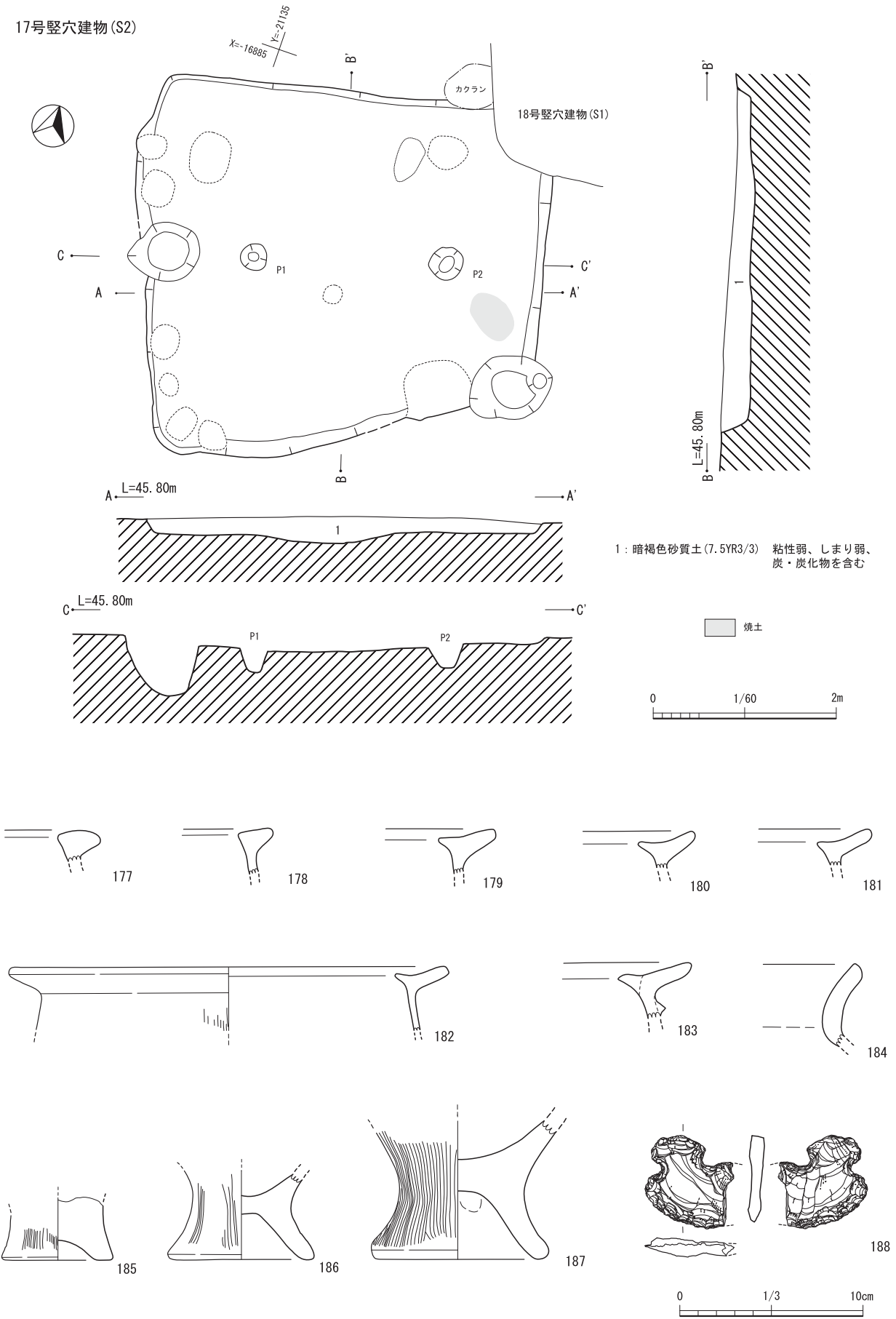


176

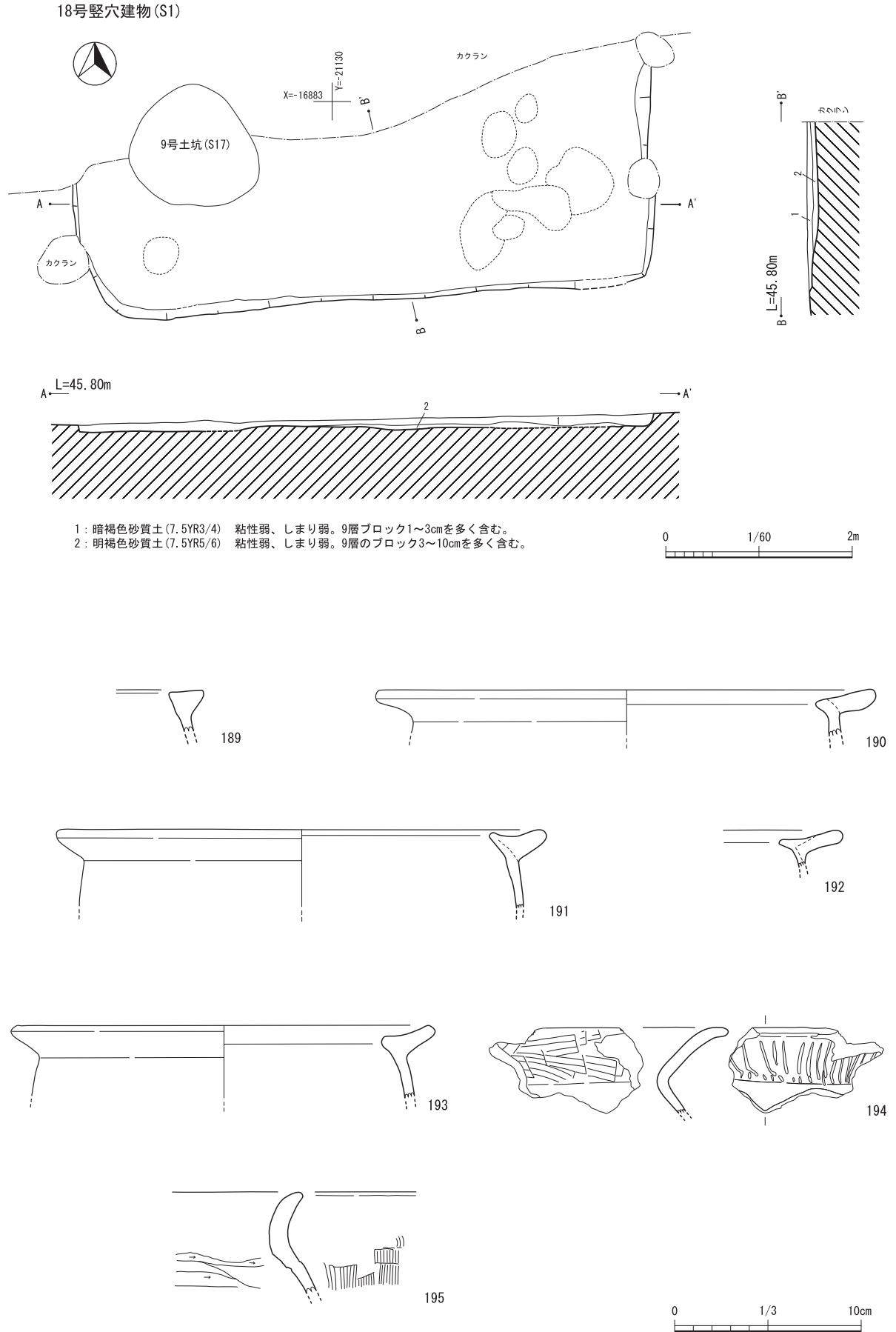


第42図 3号甕棺墓(S13)甕棺実測図

17号竪穴建物(S2)



第43図 17号竪穴建物(S2)及び出土遺物実測図



第44図 18号竪穴建物(S1)及び出土遺物実測図

の甕の口縁部で流れ込みの遺物であろう。

19号竪穴建物【S28】(第45図、図版8・25)

G・H-125グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸4.8m、短軸幅2.4m以上、深さ0.17mで、南側は調査区外へと伸びる。西側で14号土坑(S30)、東側では20号竪穴建物(S29)を切る。北側は、一段高くなりベッド状遺構のようになっているので弥生時代の可能性がある。P1・P2はこの遺構に伴うものだが、位置的に壁によりすぎ、柱穴とするにはバランスが悪い。そのため柱穴ではないと考えられる。

出土遺物196は輝石安山岩製の打製石斧であるが縄文時代のもので流れ込みの遺物であろう。弥生時代と思われる土器片も出土しているが、小片のため図化していない。

20号竪穴建物【S29】(第45・46図、図版8・25)

G-125・126グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸4.2m、短軸2.0m以上、深さ0.2mで南側は調査区外へと伸びる。西側は19号竪穴建物(S28)に切られる。P226は、この遺構に伴う遺構の可能性が高いが、ピット内に根あと等が入り断面で確認することができなかった。それ以外にも遺構内にくぼみが確認できたが、すべて上位からの掘りこみでこの遺構に伴うものではない。

出土遺物197～199は甕の口縁部であり、200は甕の胴部～脚部である。いずれも弥生時代中期前半のものと考えられる。

21号～24号竪穴建物

21号～24号竪穴建物は調査区の南西隅で確認された竪穴建物4件と溝跡1条の切り合ったところである。切り合い上位の21号と、22号竪穴建物は軸方向が同じで、切り合い下位の23号と24号竪穴建物が軸方向を同じとする。21号竪穴建物(S5)以外は調査区外へと広がり、確認できた範囲は少ない。切り合い関係は、(古)23号→24号→22号→21号→2号溝(新)となる。

21号竪穴建物【S5】(第47図、図版9・25・26)

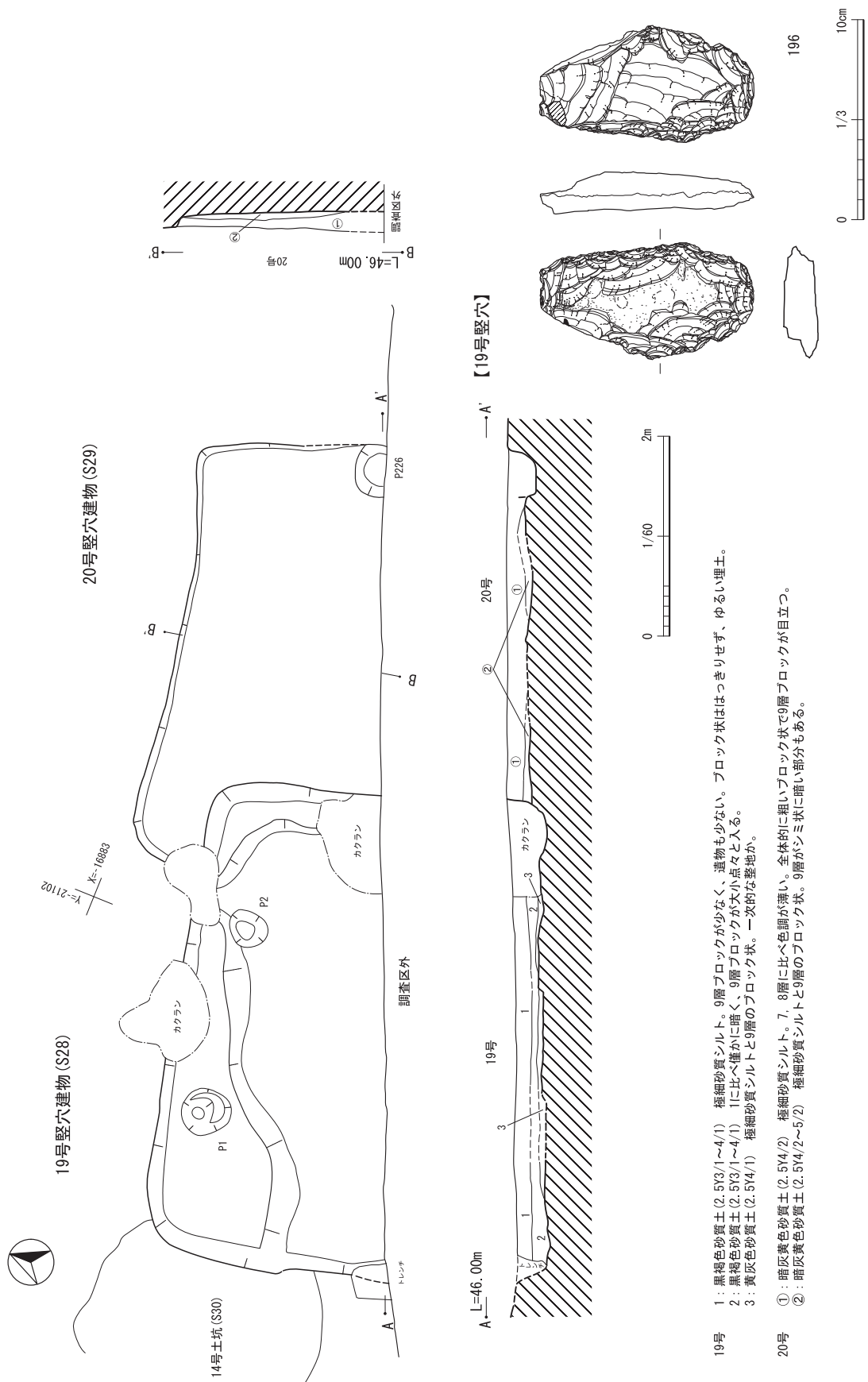
J・K-117・118グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸1.7m、短軸2.4m、深さは0.2mで小型の建物である。2号溝(S4)に切られる。建物4軒の切り合いの最上面にある遺構である。埋土は黒く、遺物も多く出土する。2号溝を先行して掘り下げた際に、埋土を確認し検出を行った。樹痕等によるカクランで不明瞭ではあるが小型の方形プランを持つ遺構として認識した。

出土遺物201は弥生時代中期の甕の口縁部である。202は安山岩製の打製石鏃である。

22号竪穴建物【S6】(第47・48図、図版9・25・26)

J・K-117・118で確認された竪穴建物である。規模は長軸5.5m、短軸2.3m以上、深さ0.3mで南側に調査区外へのびる。24号竪穴建物(S18)を切り、21号竪穴建物(S5)に切られる。21号竪穴建物(S5)と軸をほぼ同じにする遺構である。遺物を多く含み、竪穴建物と想定するが上層からの根あと等によりカクランを受けており全体像は把握できなかった。

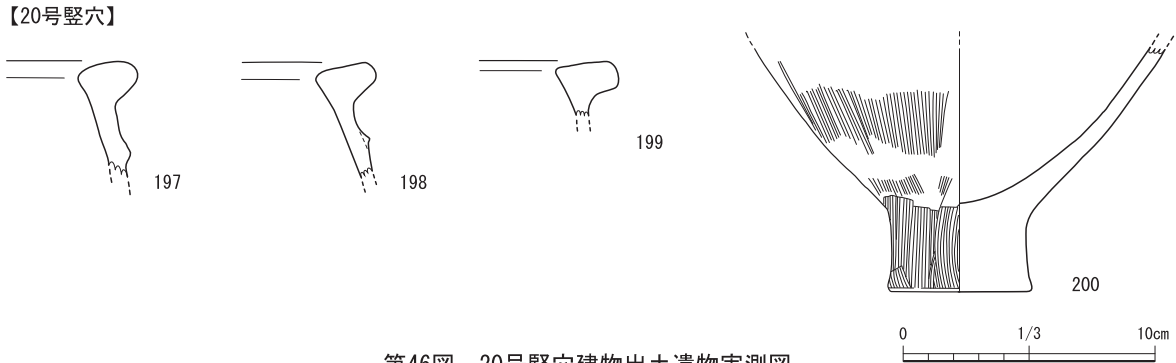
出土遺物203～208は甕の口縁部、209は暗文を施した壺の口縁部、210・211は弥生時代の甕の脚部である。いずれも弥生時代中期の範疇で収まるものである。



19号 1: 黒褐色砂質土 (2.5Y3/1~4/1) 極細砂質シルト。9層ブロックが少なく、遺物も少ない。ブロック状ははまりせず、ゆるい埋土。  
 2: 黒褐色砂質土 (2.5Y3/1~4/1) 1に比べ僅かに暗く、9層ブロックが大小点々とする。  
 3: 黄灰色砂質土 (2.5Y4/1) 極細砂質シルトと9層のブロック状。一次的な整地か。

20号 ①: 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2) 極細砂質シルト。7、8層に比べ色調が薄い。全体的に粗いブロック状で9層ブロックが目立つ。  
 ②: 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2~5/2) 極細砂質シルトと9層のブロック状。9層がシミ状に暗い部分もある。

第45図 19号・20号竪穴建物 (S28・29) 及び19号出土遺物実測図



第46図 20号竪穴建物出土遺物実測図

23号竪穴建物【S7】(第47・48図、図版9・25・26)

J・K 117・118 グリッドで確認された竪穴建物である。規模は検出できたのが長軸 4.9m以上、短軸 4.2m以上、深さは 0.15mで南側は調査区外にのびる。2号溝(S4)・21号竪穴建物(S5)・22号竪穴建物(S6)・24号竪穴建物(S18)に切られる。このグリッドでの4軒の切り合いの中で一番古い遺構で、多くの遺構および根あとに切られ残りは悪い。上面で確認した24号竪穴建物(S18)のプランに重なる部分も多く、軸も同じである。P1・P2は建物に伴うピットと思われる。やや東壁によりすぎてはいるが、4本柱のうちの2本と思われる。

出土遺物 212・213は甕の口縁部、214は甕の脚部で、いずれも時期は弥生時代中期後半である。215は外面に刻目突帯と暗文が施された弥生時代中期後半の壺の頸部である。216は黒曜石製の打製石鏃である。

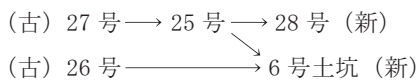
24号竪穴建物【S18】(第47・48・49図、図版9・26)

J 117・118 グリッドで確認された竪穴建物である。規模は検出できたのが長軸 3.7m以上、短軸 3.4m以上、深さは 0.2mで南も西も調査区外にのびる。21・22号竪穴建物(S5・6)に切られ23号竪穴建物(S7)を切る。無数の根あとと他の遺構に切られるため明確なプランは不明である。

出土遺物 217～222は弥生時代中期の甕の口縁部である。223は口縁部に暗文、肩部に刻目突帯を施す壺の口縁部である。224は壺の口縁部で、225は甕の脚部である。いずれも同じく弥生時代中期のものと思われる。また石器では打製石鏃が多数出土し、226・227・230は安山岩製、228・229は黒曜石製である。

25号～28号竪穴建物

25号～28号竪穴建物が確認されたのは調査区の南西部で竪穴建物4軒と土坑1基の切り合ったところである。切り合い上位の25号竪穴建物(S10)と28号竪穴建物(S16)は軸を同じとし、下位の26号竪穴建物(S14)と27号竪穴建物(S15)は軸を同じとする。切り合いの関係は以下のように考えられる。



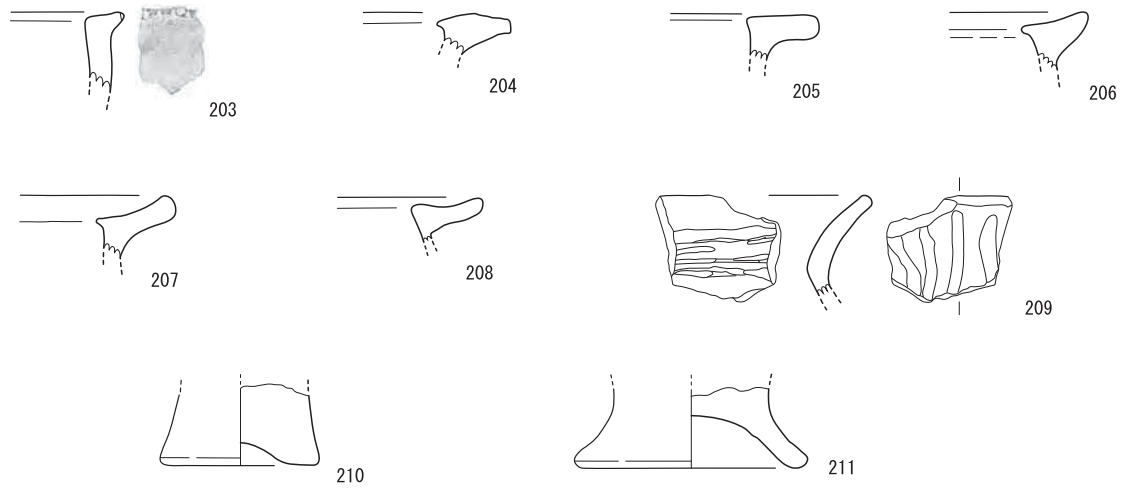
25号竪穴建物【S10】(第50・51図、図版9・26)

I・J 119・120 グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸 6.4m、短軸 4.3m以上、深さ 0.2mで調査区外にのびる。近接する遺構4軒と切り合っており、28号竪穴建物(S16)と6号土坑(S8)に切られ、27号竪穴建物(S15)を切る。26号竪穴建物(S14)との切り合いは不明である。東側は樹痕によるカクラン

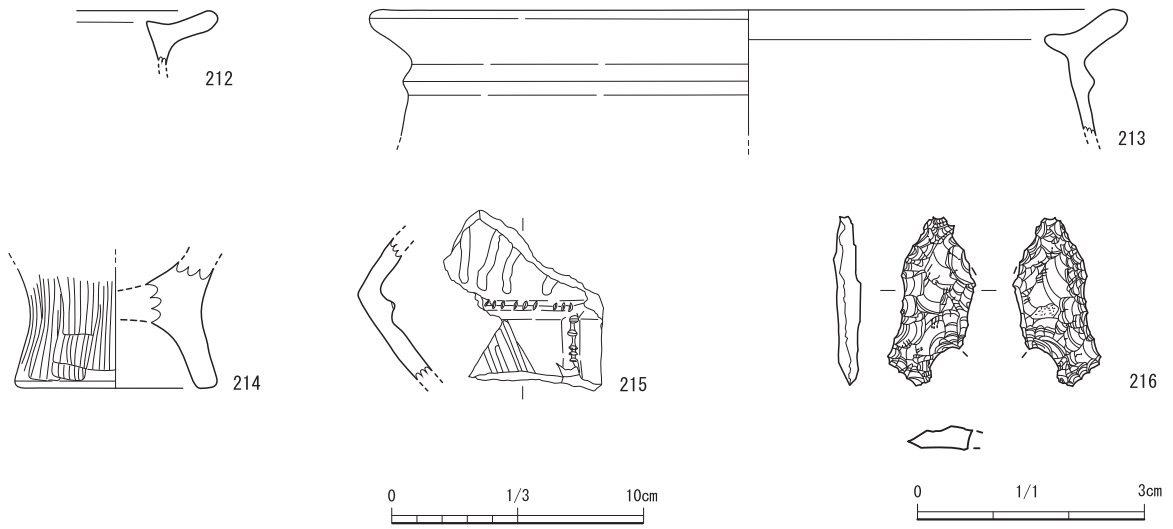




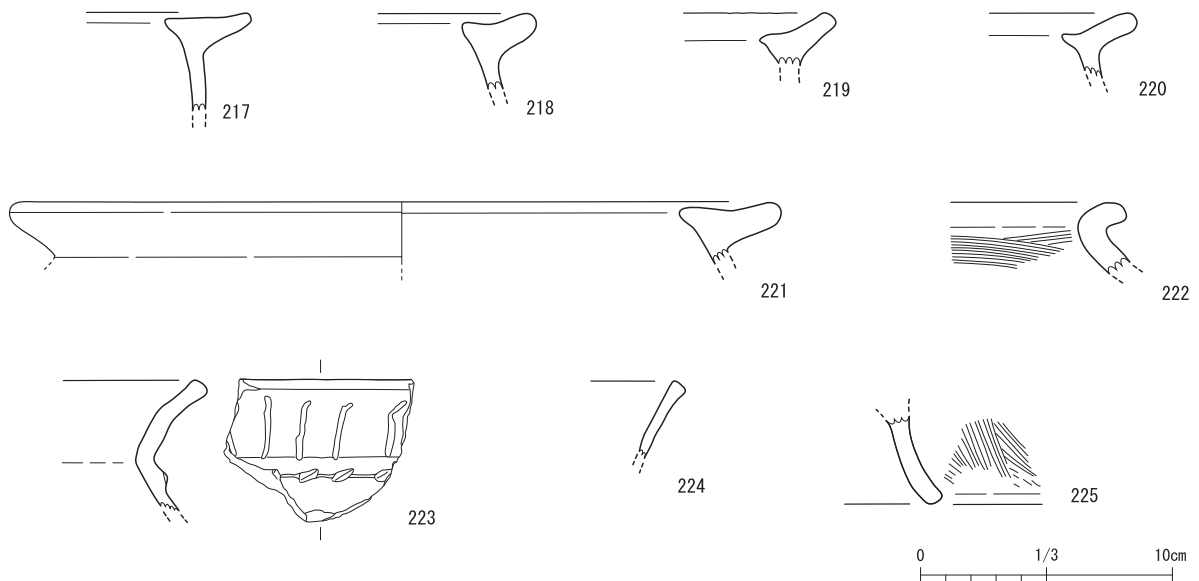
【22号竪穴】



【23号竪穴】

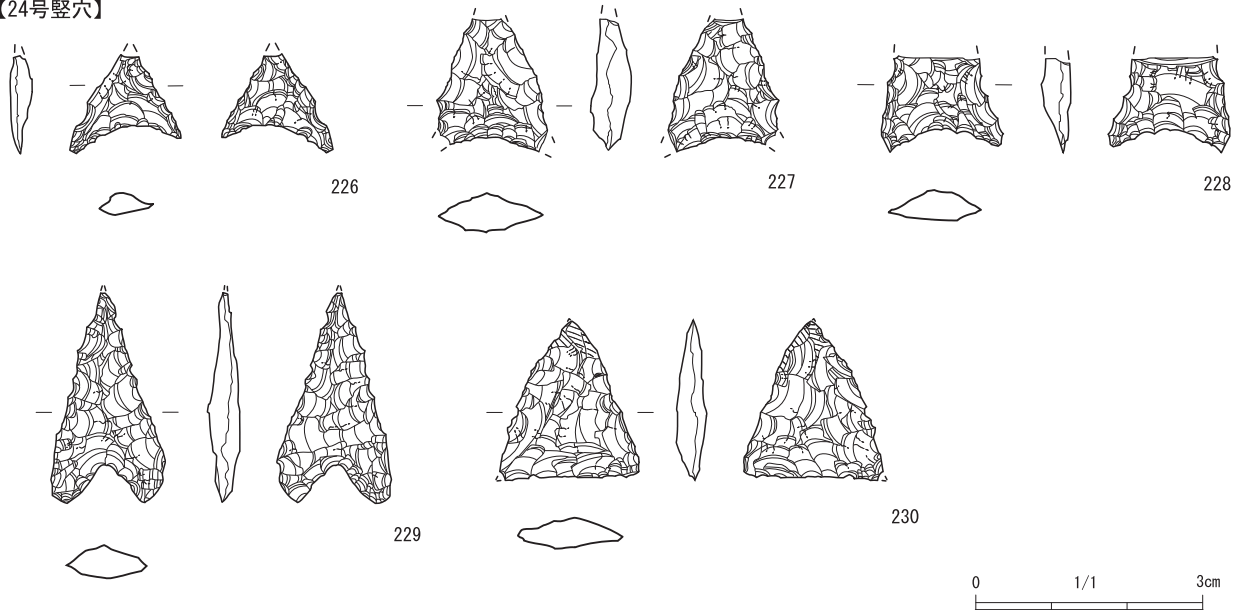


【24号竪穴】



第48図 22・23・24号竪穴建物出土遺物実測図

## 【24号竪穴】



第49図 24号竪穴建物出土遺物実測図

もあいまってプランは確実ではない。遺構のほぼ中心には炉跡とみられる炭化物が堆積し、赤化した状態のピットが見られた。それ以外にも、遺構内に大きな礫の置石もあり建物として機能していたと想定した。P1・P2はこの遺構に伴うものと考えられ、4本柱を想定すると、少し建物の西側による印象になるが炉跡とのバランスからすると柱穴の可能性はある。

出土遺物 231～237は弥生時代の甕の口縁部であり、238は口縁内面にミガキと外面に暗文が施されている壺の口縁部である。239は甕の脚部である。いずれも弥生時代中期後半のものである。240・241は安山岩製の打製石鏃、242は阿蘇周辺産で上半分を欠損した打製石斧である。また、打製石鏃2点と鉄製品1点を写真図版のみで掲載している。

## 26号竪穴建物【S14】(第50・51・52図、図版10・26)

H・I-119・120で確認された竪穴建物である。規模は検出されたのが長軸4.2m以上、短軸4.0m、深さ0.2mである。遺構の中心は大きく樹痕によりカクランを受けている。6号土坑(S8)に切られ、25号竪穴建物との切り合いは不明である。周囲の遺構は、9層を掘りこむ形で存在し、26号竪穴建物は砂質の土が多く堆積している状態であった。遺構の北東側は、炭化物と土器を多く含んでおり、最下層には甕の口縁部など多くの土器が散らばった状態で出土していたため、竪穴建物だろうと判断した。

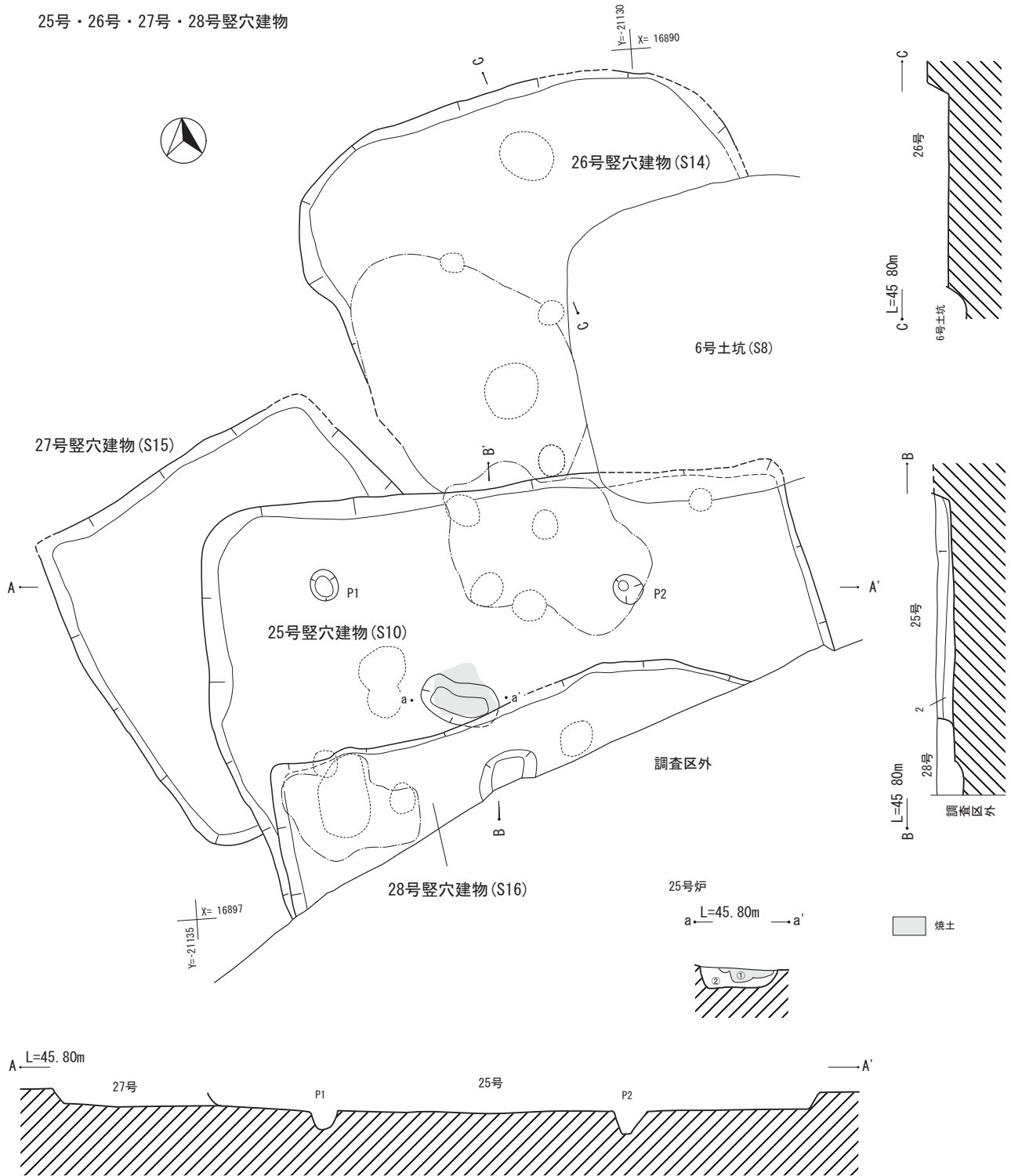
出土遺物 243～246は弥生時代中期後半の甕の口縁部、247は粘板岩製の磨製石鏃、248・249は砂岩製の砥石である。

## 27号竪穴建物【S15】(第50・52図、図版10・26)

I・J-118・119グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸3.7m、短軸3.4m、深さは0.2mである。25号竪穴建物(S10)に遺構の半分以上が切られており全体像は不明である。方形のプランは確認できたが、炉跡や柱穴、硬化面などは確認できなかった。遺構の形、周囲の遺構の状況から考えて竪穴建物だろうと判断した。

出土遺物は少なく、250は弥生時代中期前半の甕の口縁部であり、251は安山岩製の打製石鏃である。器種不明の鉄製品1点を写真図版のみで掲載している。

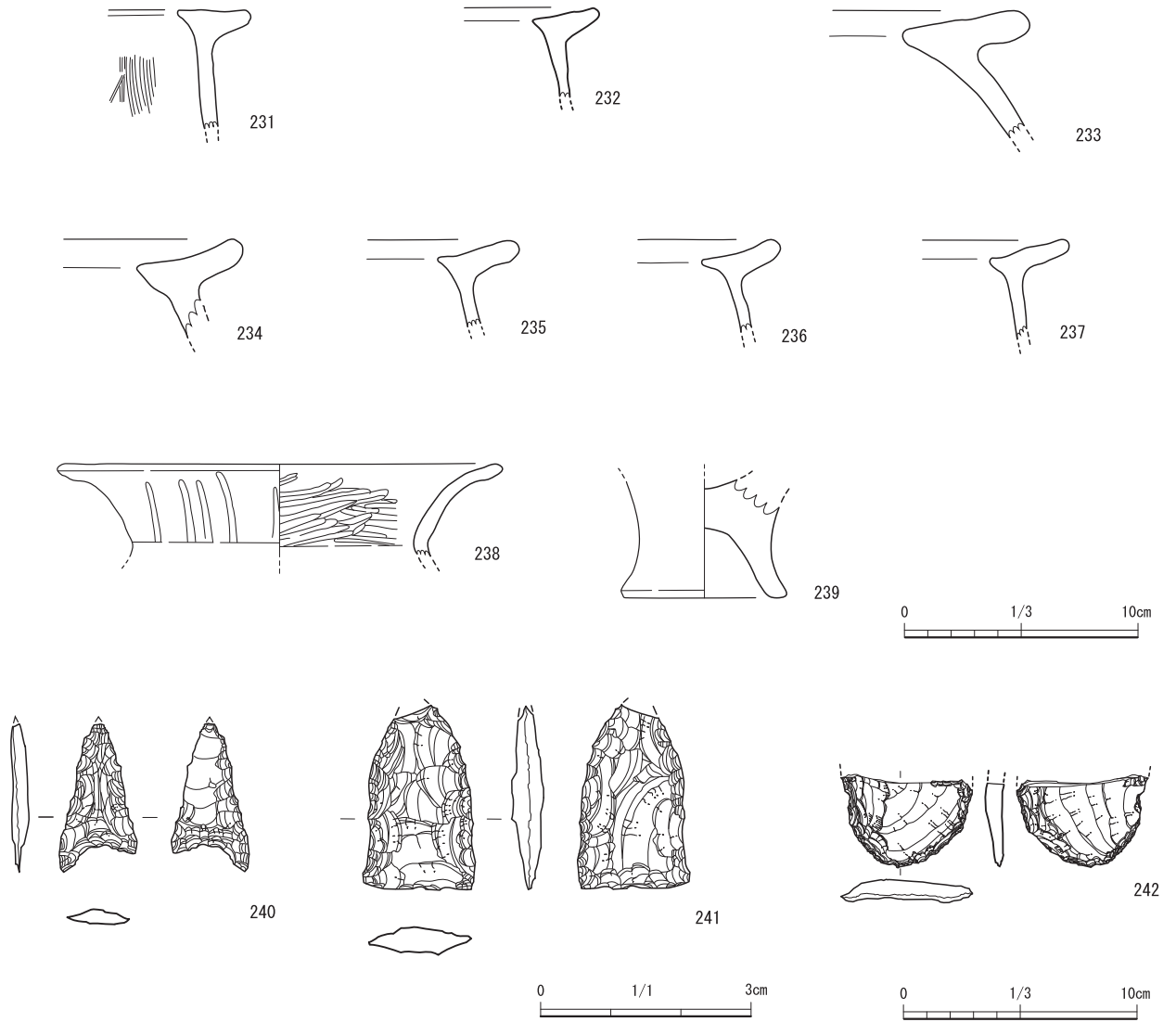
25号・26号・27号・28号竪穴建物



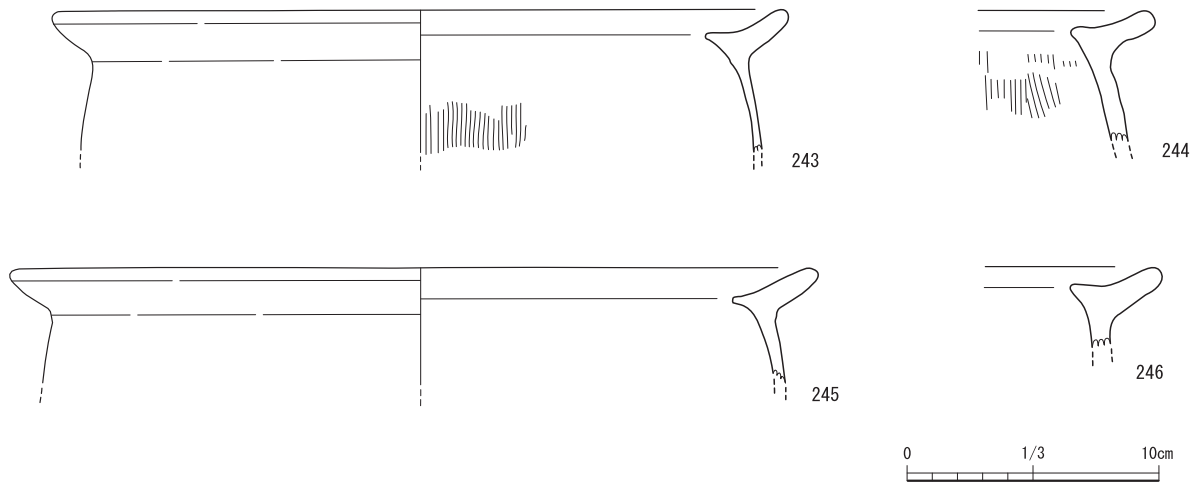
- 25号
- 1: 明褐色砂質土 (7.5YR5/6) 9層ブロック1~2cm大を含む。炭化物粒・焼土粒微量に含む。
  - 2: 褐色砂質土 (7.5YR4/6) 9層ブロック2~10cm大を含む。炭化物粒を含む。
- 25号炉
- ①: 橙色砂質土 (2.5YR6/6) ~ 暗赤灰 (2.5YR3/1) 粘性弱、しまり弱。赤化している。
  - ②: 褐色砂質土 (7.5YR4/6) 粘性弱、しまり弱。9層ブロック2~3cmを含む。炭化物を多く含む。

第50図 25・26・27・28号竪穴建物 (S10・14・15・16) 実測図

【25号竖穴】

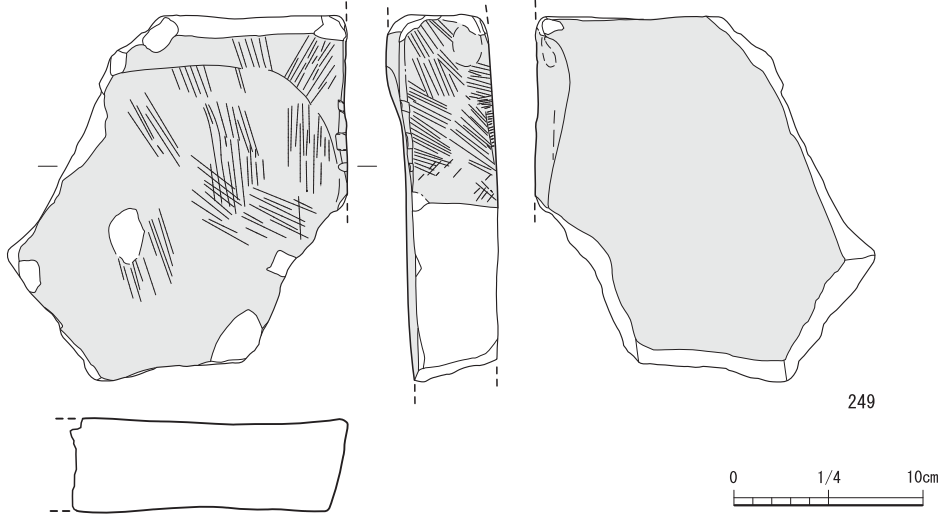
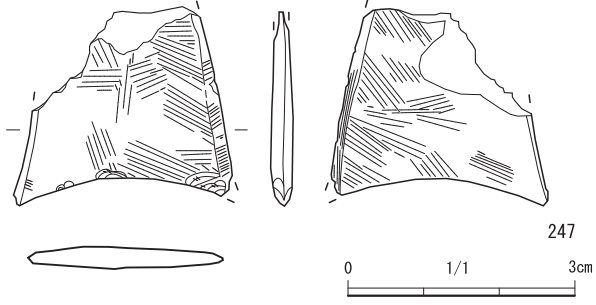


【26号竖穴】

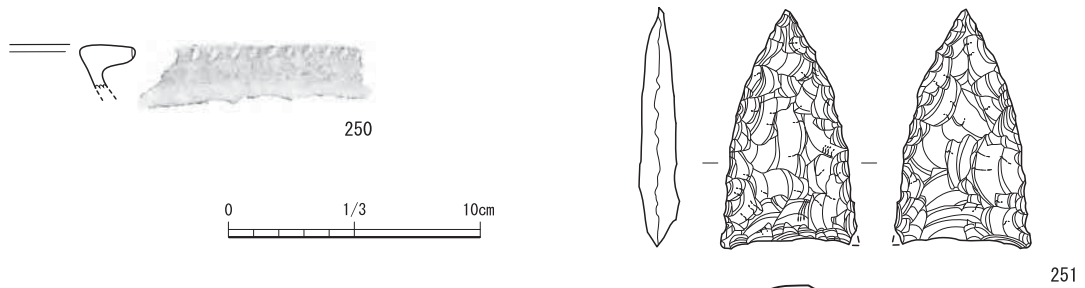


第51図 25・26号竖穴建物出土遺物実測図

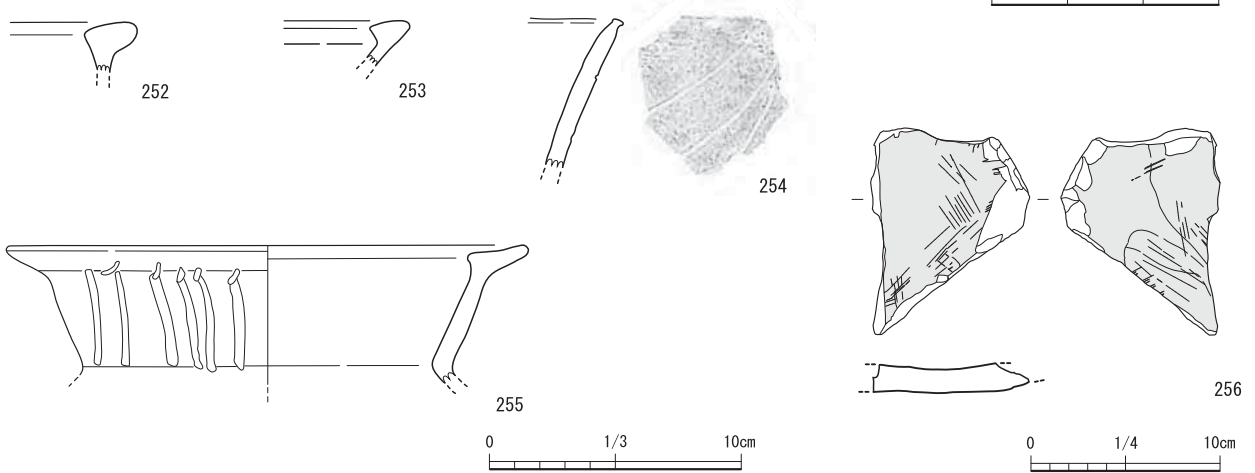
【26号竪穴】



【27号竪穴】



【28号竪穴】



第52図 26・27・28号竪穴建物出土遺物実測図

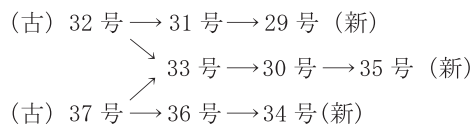
## 28号竪穴建物【S16】(第50・52図、図版10・26)

J 119・120 グリッドで確認された竪穴建物である。規模は検出できたのが長軸 4.9m以上、短軸 0.9m以上、深さは 0.2mで調査区外にのびる。25号竪穴建物(S10)を切る。9層を掘るプランで、小さなピットを多く含む遺構である。明確なプランは西壁のみ確認できた。樹痕の可能性もあるが、周囲の遺構との関係、遺構の形状から竪穴建物だろうと判断した。

出土遺物 252・253 は弥生時代中期の甕・壺の口縁部である。255 は暗文が施されている壺の口縁部で弥生時代中期のものである。256 は砂岩製の砥石片である。254 は流れ込みであろう縄文時代の鉢の口縁部である。

## 29号～37号竪穴建物

29号～37号竪穴建物は調査区の南側の中央部で確認された切り合いの激しい部分にある。竪穴建物9軒の切り合いである。29・31・32号建物は縦の切り合いで、30・33号建物も縦の切り合いである。それ以外は少しずつ横にずれながら切り合っている。切り合いの関係は以下のように考えられる。



## 29号竪穴建物【S23】(第53・54・55図、図版10・27)

H・I 122 グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸 3.7m、短軸 3.4m、深さは 0.16mである。竪穴建物が最も集中する部分で検出された1軒である。31号竪穴建物(S34)・32号竪穴建物(S35)を切る。検出の際には、31号竪穴建物(S34)の中にきれいに納まるのでこの遺構の埋土の一つかとも考えたが、断面で確認すると切り合いが確認できたので別の遺構だと判断した。周囲の竪穴建物と比べると規模がやや小さめである。

出土遺物は弥生時代中期の土器が多い。257～260・261・263・265 は甕の口縁部、262 は鉢、267・268 は甕の脚部である。264 は刻目突帯や暗文が施された壺、266 は口唇部に暗文の施された高坏である。いずれも丁寧なつくりの土器である。

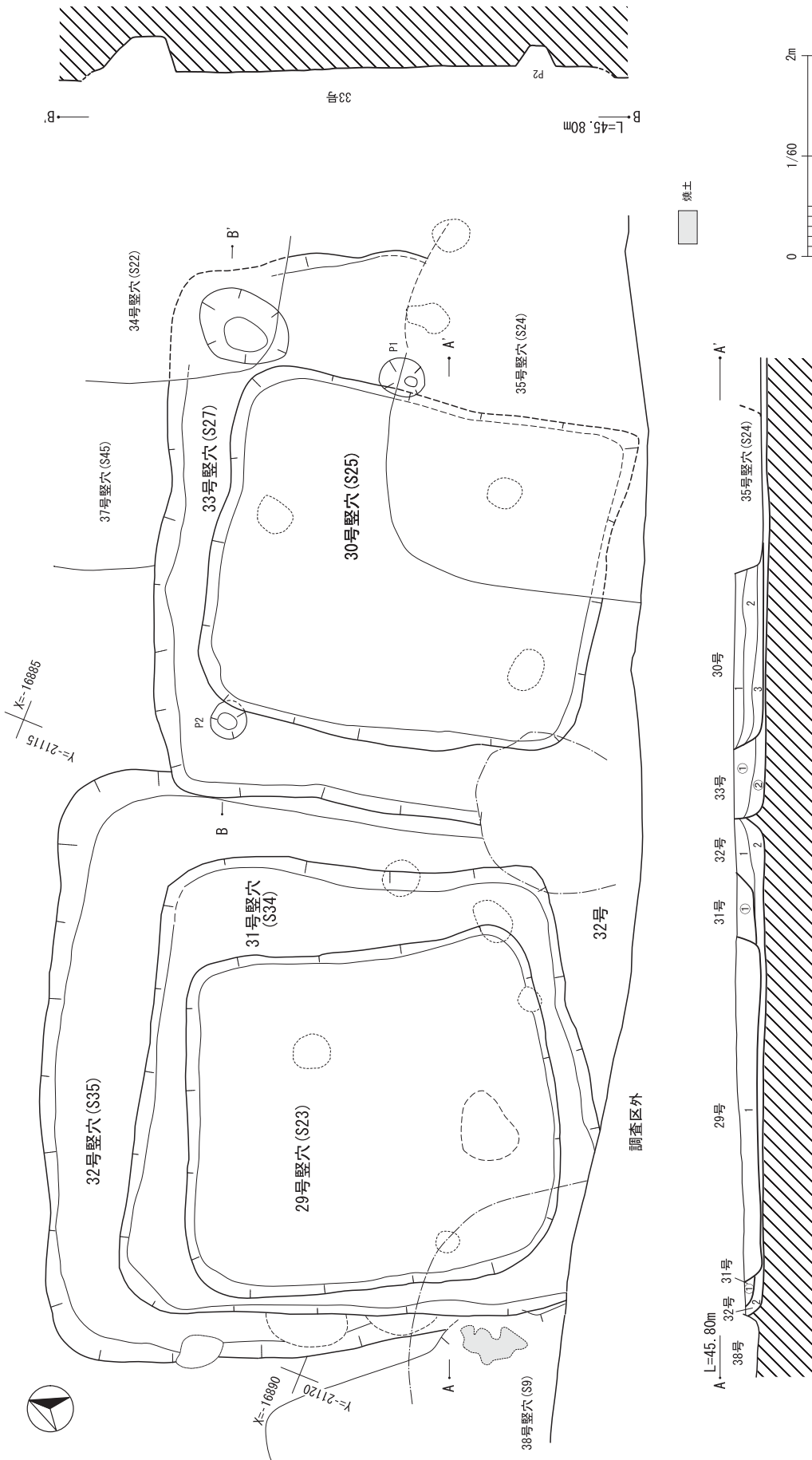
## 30号竪穴建物【S25】(第53・55図、図版10・27・28)

H 123 グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸 4.0m、短軸 3.5m、深さ 0.5mである。竪穴建物が最も集中する部分での検出である。33号竪穴建物(S27)を切り、35号竪穴建物(S24)との切り合いは明確ではないが35号竪穴建物(S24)が30号竪穴建物(S25)を切ると想定している。また、床面ではピットも多く確認できたがこの遺構に伴うものではなく上位からの掘り込みである。

出土遺物は弥生時代中期の土器が多い。269～272 は弥生時代の甕の口縁部、273 は暗文のある壺の口縁部、274 は甕の脚部である。275 は黒曜石製、276 が安山岩製の打製石鏃である。

## 31号竪穴建物【S34】(第53・56図、図版10・27・28)

H 122・123、I 122・123 グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸 4.5m、短軸 4.4m、深さは 0.14mで南隅が調査区外にのびる。29号竪穴建物(S23)の外側に広がる遺構である。南側に焼土と炭化物の広がる部分が確認された。しかし、半裁すると深さはほとんどなく、上面に焼土がたまっているような状態であった。そのため、炉跡とは断定できなかった。北西部は樹痕で壊されている。

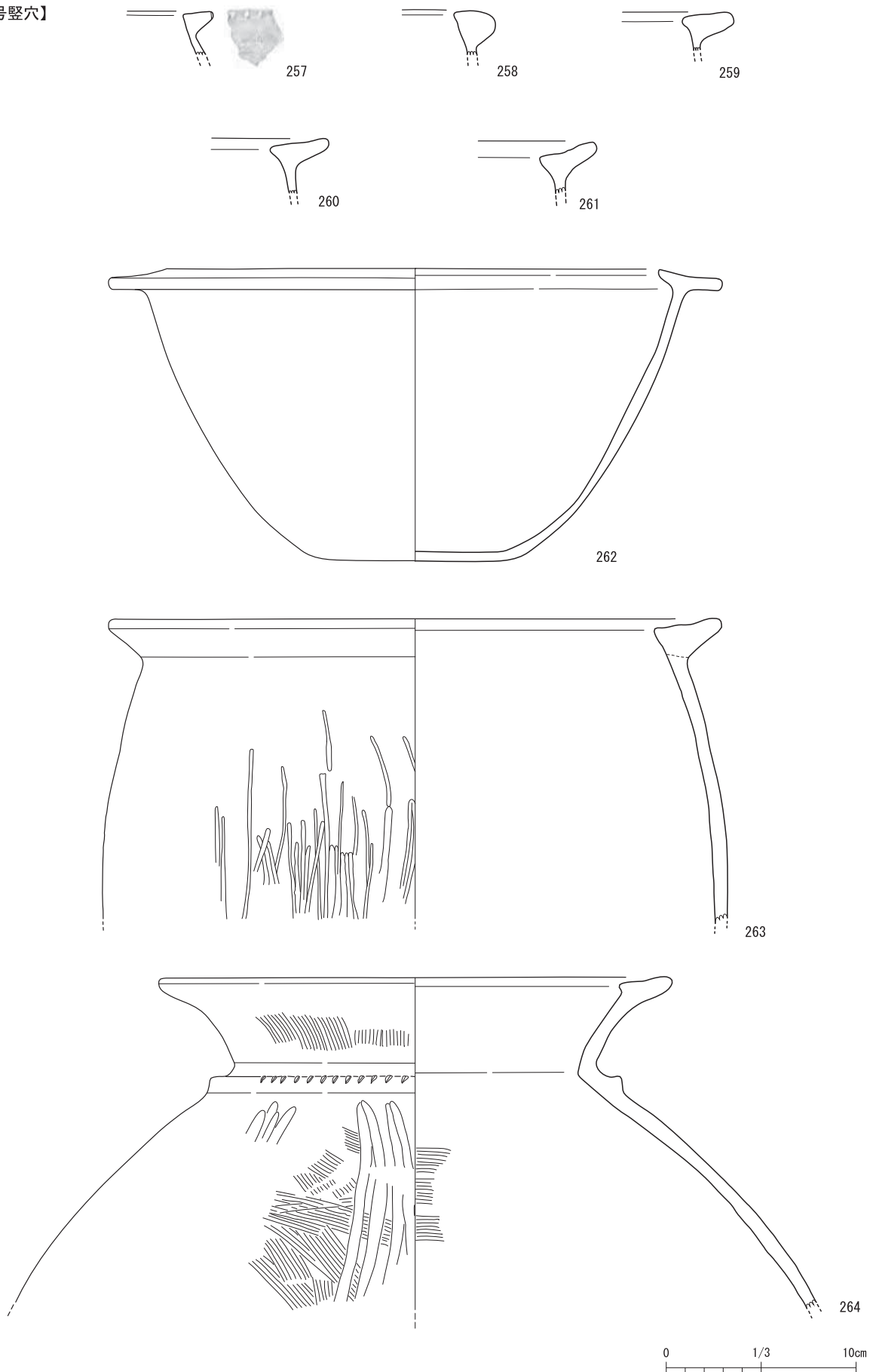


- 29号 1: 黒褐色砂質土 (7.5YR3/2) 粘性無、しまり弱。9層ブロックを含む。炭化物を少量含む。遺物を多く含む。  
 31号 ①: 明褐色砂質土 (7.5YR5/6) 粘性無、しまり弱。9層ブロック1~2cm大を含む。炭化物を少量含む。  
 32号 1: 褐色砂質土 (7.5YR4/3) 粘性無、しまり弱。炭化物・焼土粒を含む。  
 2: 暗褐色砂質土 (7.5YR3/4) 粘性無、しまり弱。9層ブロックを少量含む。炭化物を多く含む。
- 30号 1: 暗褐色砂質土 (7.5YR3/4) 粘性無、しまり弱。9層ブロック2cm大を少量含む。炭化物・焼土粒を少量含む。  
 2: 黒褐色砂質土 (7.5YR3/2) 粘性無、しまり弱。9層ブロック2cm大を少量含む。炭化物・焼土粒を少量含む。  
 3: 褐色砂質土 (7.5YR4/4) 粘性無、しまり弱。9層ブロックを多く含む。炭化物・焼土粒を多く含む。
- 33号 ①: 褐色砂質土 (7.5YR4/3) 粘性無、しまり弱。9層ブロックを少量含む。炭化物を少量含む。  
 ②: 褐色砂質土 (7.5YR4/4) 粘性無、しまり弱。9層ブロックを多く含む。

第53図 29・30・31・32・33号竪穴建物跡 (S23・25・34・35・27) 実測図

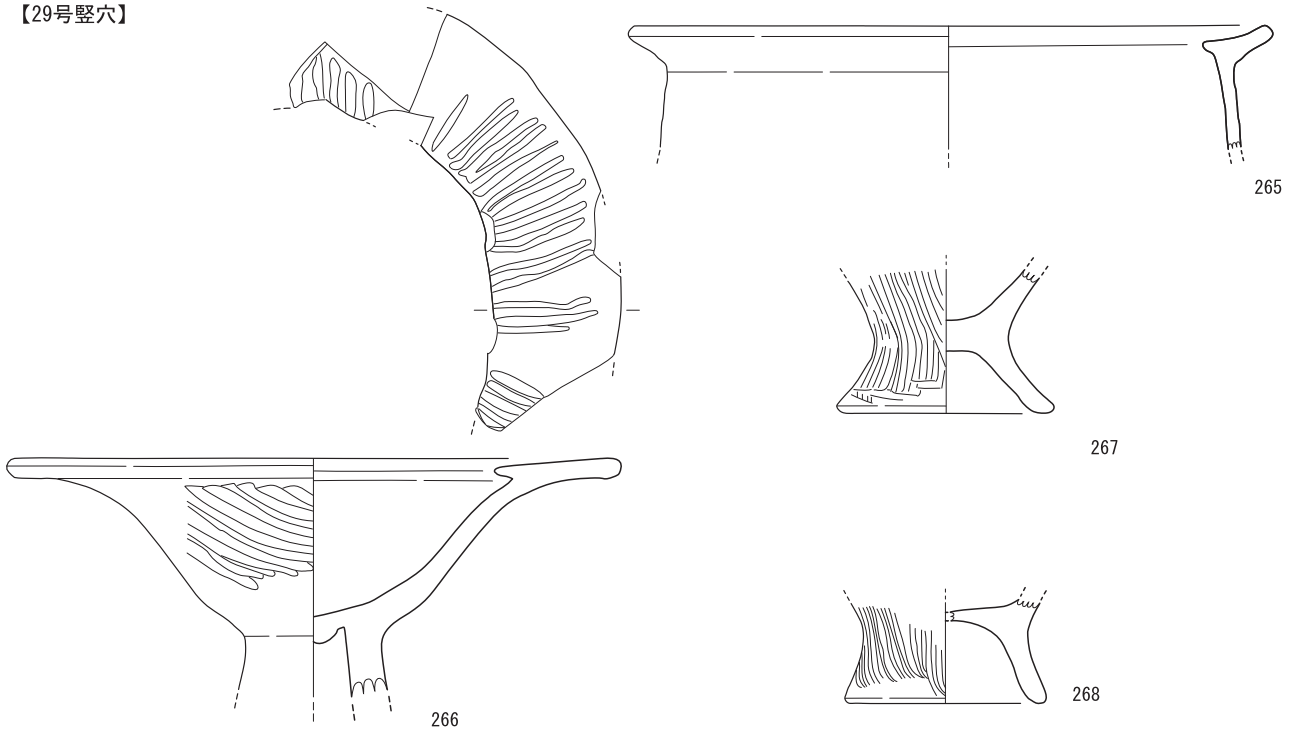


【29号竖穴】

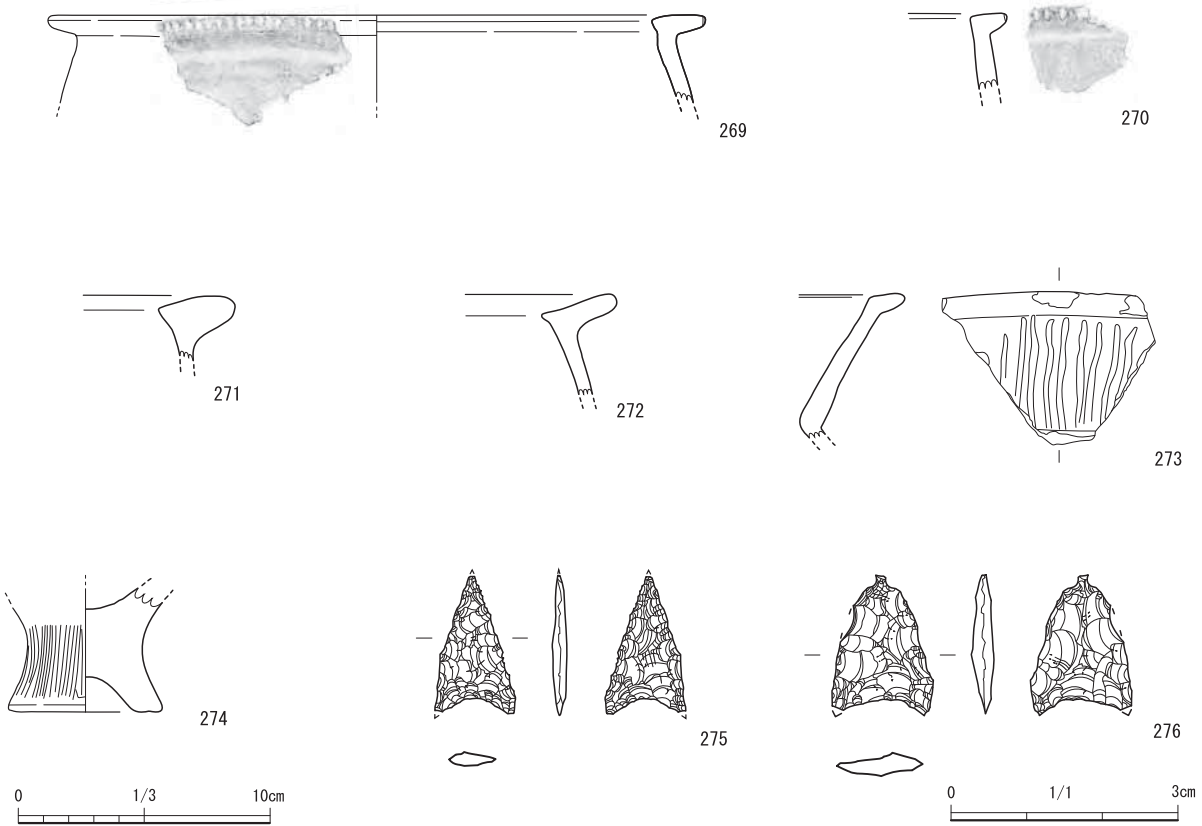


第54図 29号竖穴建物出土遺物実測図

【29号竪穴】

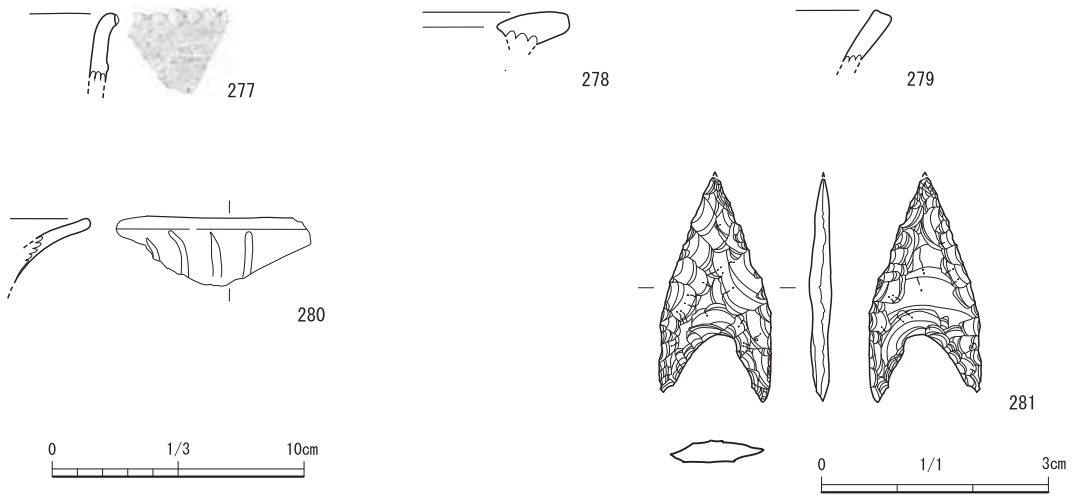


【30号竪穴】

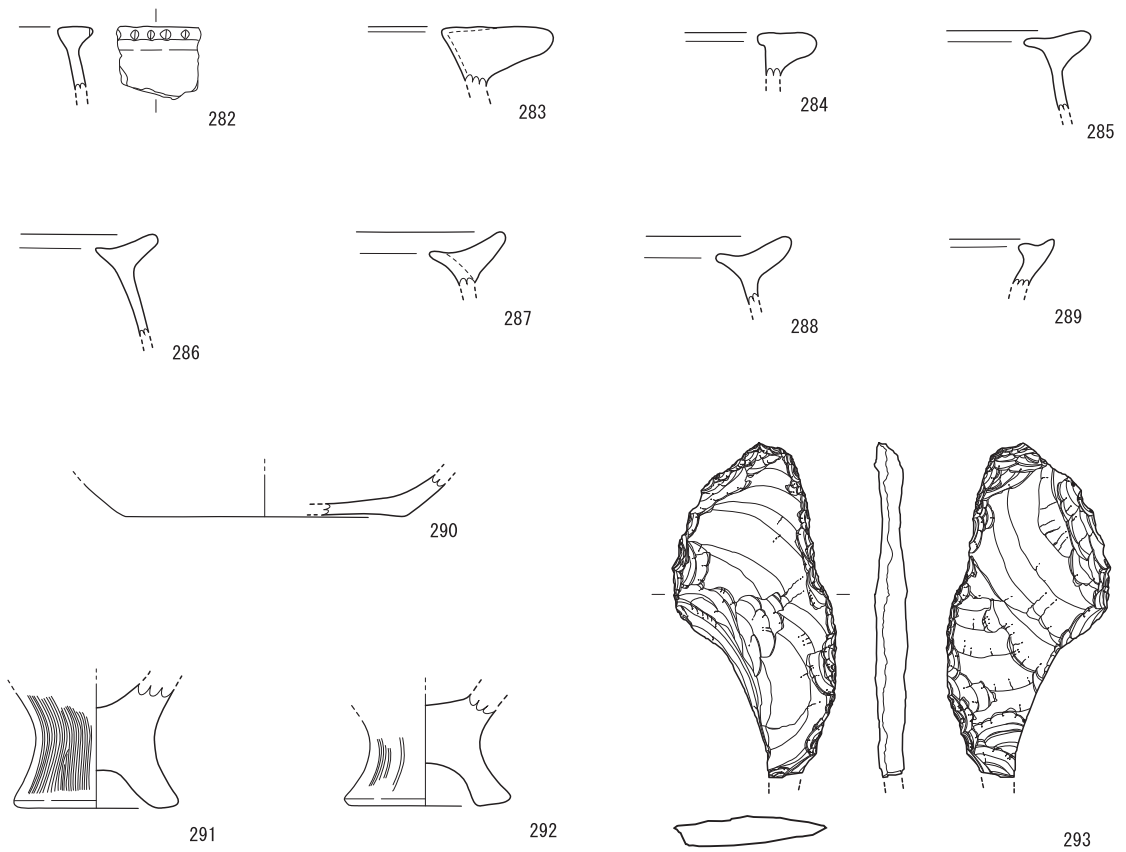


第55図 29・30号竪穴建物出土遺物実測図

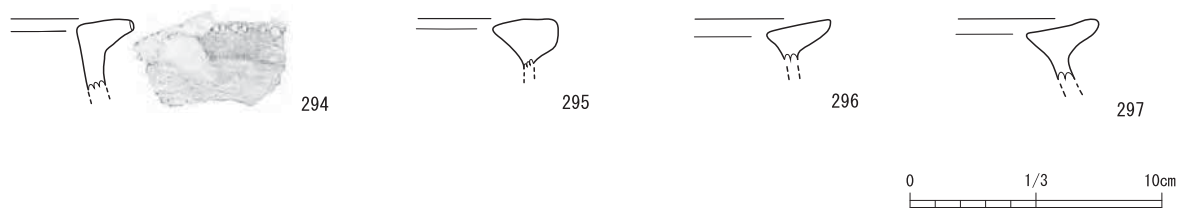
【31号竖穴】



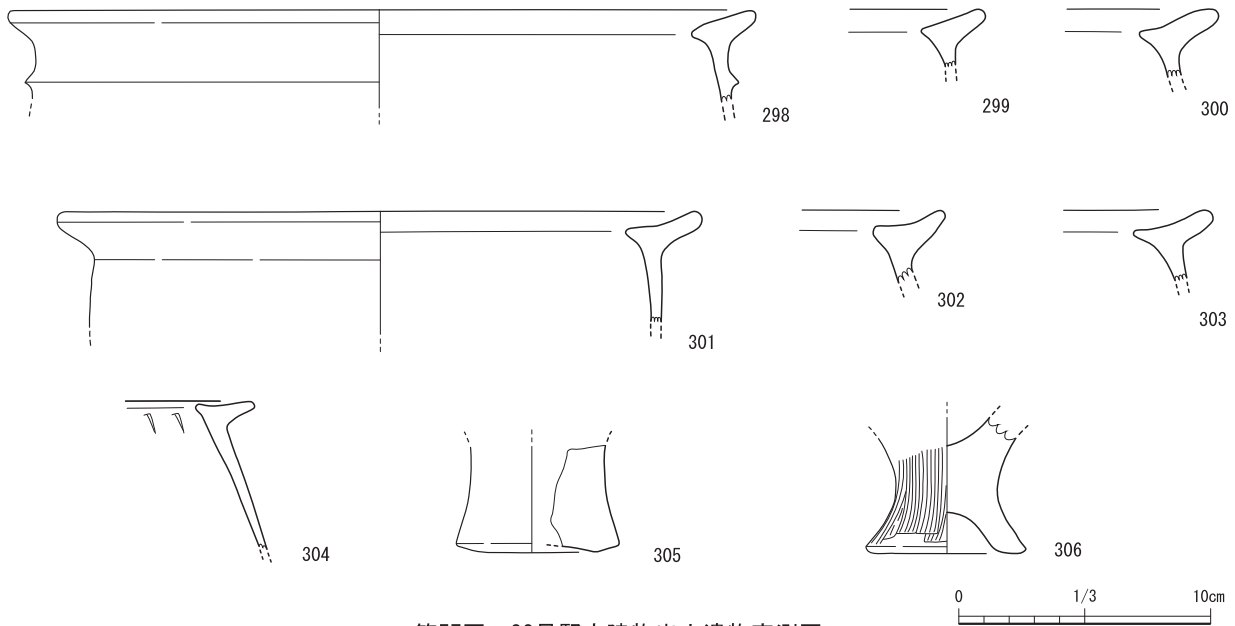
【32号竖穴】



【33号竖穴】



第56図 31・32・33号竖穴建物出土遺物実測図



第57図 33号竪穴建物出土遺物実測図

出土遺物は弥生時代中期の土器で 277・278 は甕の口縁部、279・280 は壺の口縁部、281 は周縁部を丁寧に仕上げた安山岩製の打製石鏃である。また、打製石鏃 1 点を写真図版のみで掲載している。

32 号竪穴建物【S35】(第 53・56 図、図版 11・27・28)

H-121～123、I-122・123 グリッドで確認された竪穴建物である。規模は検出できたのが長軸 5.6m、短軸 5.3m、深さ 0.3m で南側は調査区外へのびる。この切り合いの一群の中で一番大きな建物である。きれいな方形というわけではなく、南側がややすぼまるような形になる。33 号竪穴建物 (S27)・29 号竪穴建物 (S23)・31 号竪穴建物 (S34) に切られる。32 号が最も古いようである。

出土遺物は弥生時代中期の土器が多い。282～288 は甕の口縁部、289 は壺の口縁部、290～292 は甕の底部である。293 は先端部と片側縁を欠損した打製石斧である。また、打製石鏃 1 点を写真図版のみで掲載している。

33 号竪穴建物【S27】(第 53・56 図、図版 11・27)

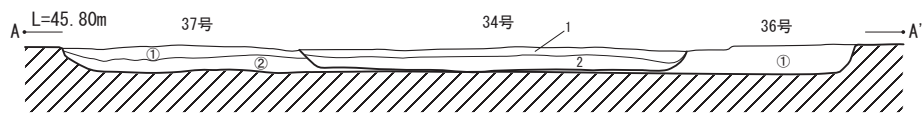
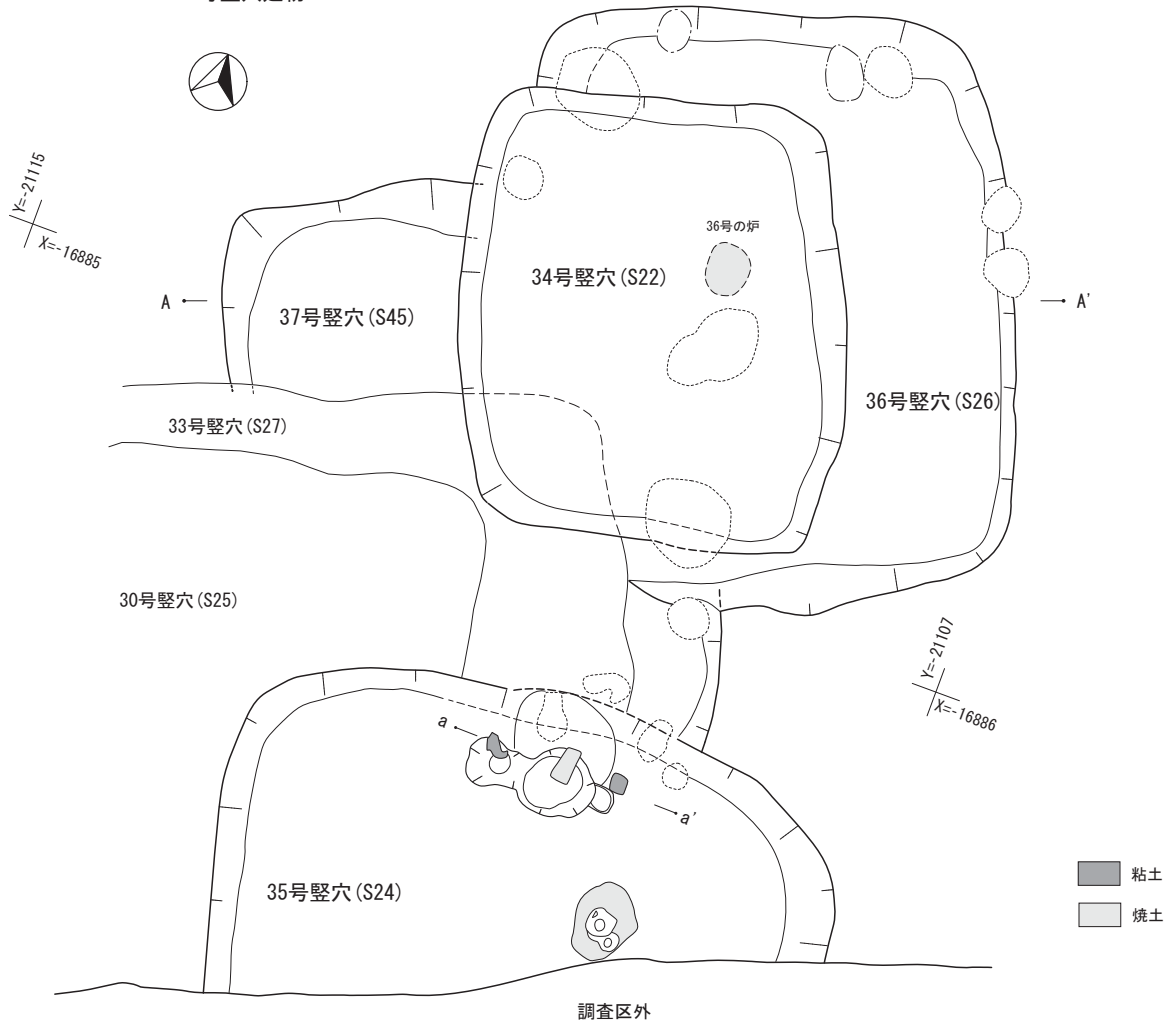
G-123・H-122～124・I-123 グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸 5.6m、短軸 4.5m 以上、深さ 0.3m で調査区外へのびる。34 号竪穴建物 (S22)・35 号竪穴建物 (S24)・30 号竪穴建物 (S25) に切られ、32 号竪穴建物 (S35)・37 号竪穴建物 (S45) を切る。中央部で炭化物の塊が確認され炉跡を想定したが、明確な掘り込みは確認できず断定することはできなかった。南西側は樹痕によりカクランされている。P1 と P2 はこの遺構に伴うものであるが、位置的にも柱穴とは言い難い。

出土遺物は弥生時代中期の土器が多い。294～304 は甕の口縁部、305・306 は甕の脚部である。

34 号竪穴建物【S22】(第 58・59 図、図版 11・28・29)

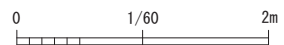
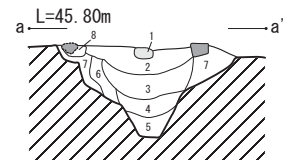
G・H-123・124 グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸 2.9m、短軸 2.7m、深さ 0.25m で小型の建物である。33 号竪穴建物 (S27)・36 号竪穴建物 (S26)・37 号竪穴建物 (S45) を切る。遺構内にいくつかのピットが確認されたが、この遺構に伴うものではないと判断した。

34・35・36・37号竪穴建物



- 37号 ①: 褐色砂質土 (7.5YR4/3) 粘性無、しまり弱。9層ブロックを少量含む。
- ②: 褐色砂質土 (7.5YR4/4) 粘性無、しまり弱。9層ブロックを多量に含む。
- 34号 1: 黒褐色砂質土(7.5YR3/2) 粘性無、しまり弱。炭化物粒を少量含む。
- 2: 暗褐色砂質土(7.5YR3/4) 粘性無、しまり弱。9層ブロック1cm大を含む。炭化物粒・赤色粒を少量含む。
- 36号 ①: 暗褐色砂質土(7.5YR3/4) 粘性弱、しまり弱。9層ブロックを少量含む。炭化物粒を少量含む。

35号カマド

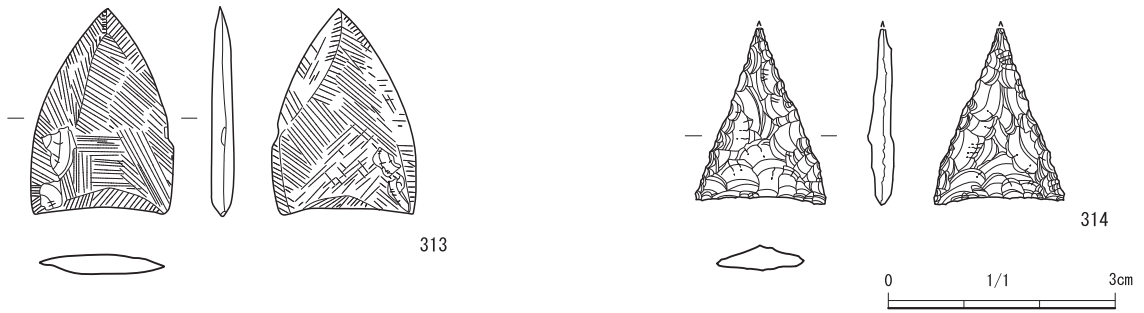
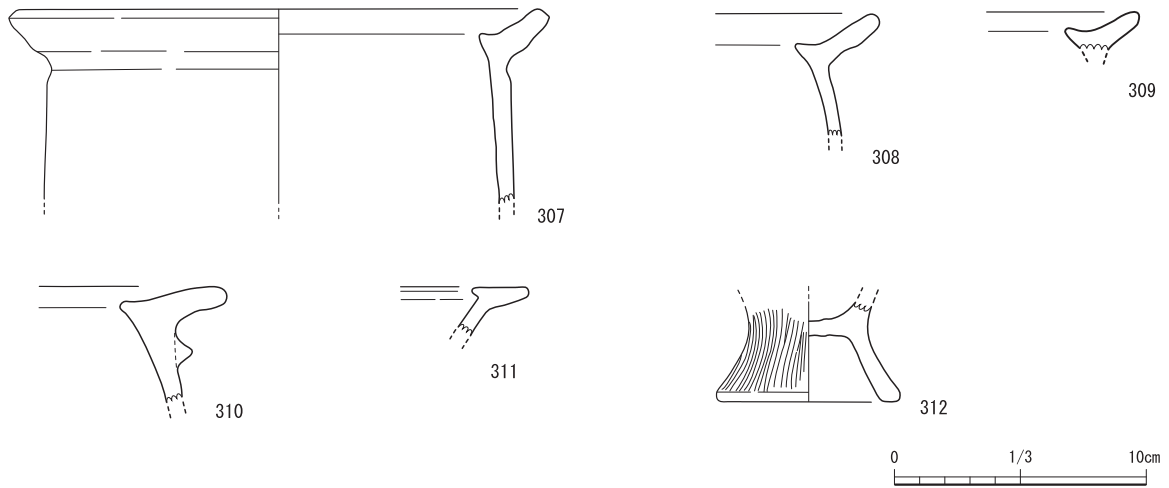


35号カマド

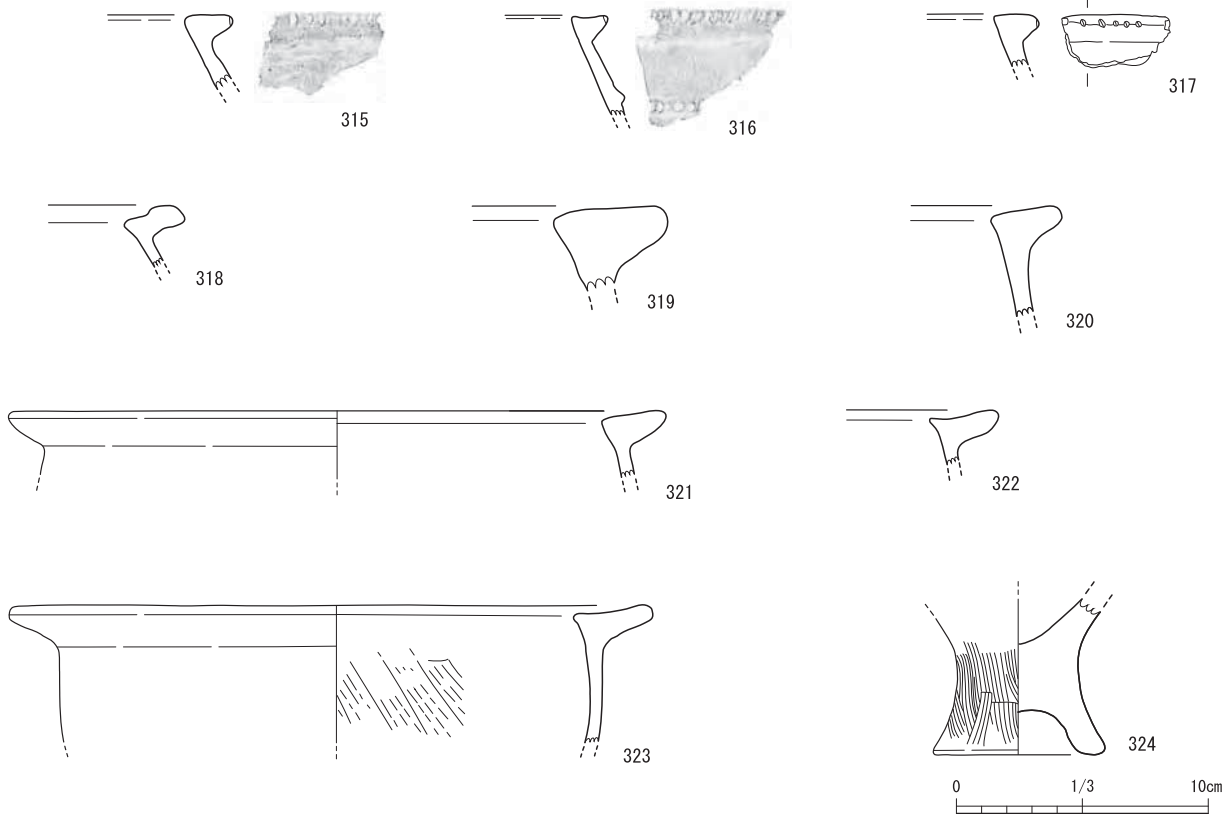
- 1: 橙色砂質土 (5YR7/8) 粘性なし、しまりなし。
- 2: 褐色砂質土 (7.5YR4/3) 粘性弱、しまりなし。大粒の焼土粒(Hue2.5YR7/6 橙 粘性なし しまり有り)、炭化物を多く含む。
- 3: 明褐色砂質土(7.5YR5/8) 粘性なし、しまりなし。焼土粒・炭化物粒を少量含む。
- 4: 褐色砂質土 (7.5YR4/4) 粘性なし、しまりなし。9層ブロック0.5cmを少量含む。焼土粒・炭化物粒を多く含む。
- 5: 暗褐色砂質土(7.5YR3/4) 粘性なし、しまりなし。9層ブロック1~5cm大を少量含む。焼土粒・炭化物粒を多く含む。
- 6: 褐色砂質土 (7.5YR3/4) 粘性なし、しまり有り。9層ブロックを少量含む。焼土粒・炭化物粒を多く含む。
- 7: 褐色砂質土 (7.5YR4/3) 粘性なし、しまりなし。9層ブロックを少量含む。焼土粒を多く含む。
- 8: 褐灰色粘質土(7.5YR4/1) 粘性有り、しまり有り。西側袖石を構成する。

第58図 34・35・36・37号竪穴建物(S22・24・26・45) 実測図

【34号竪穴】

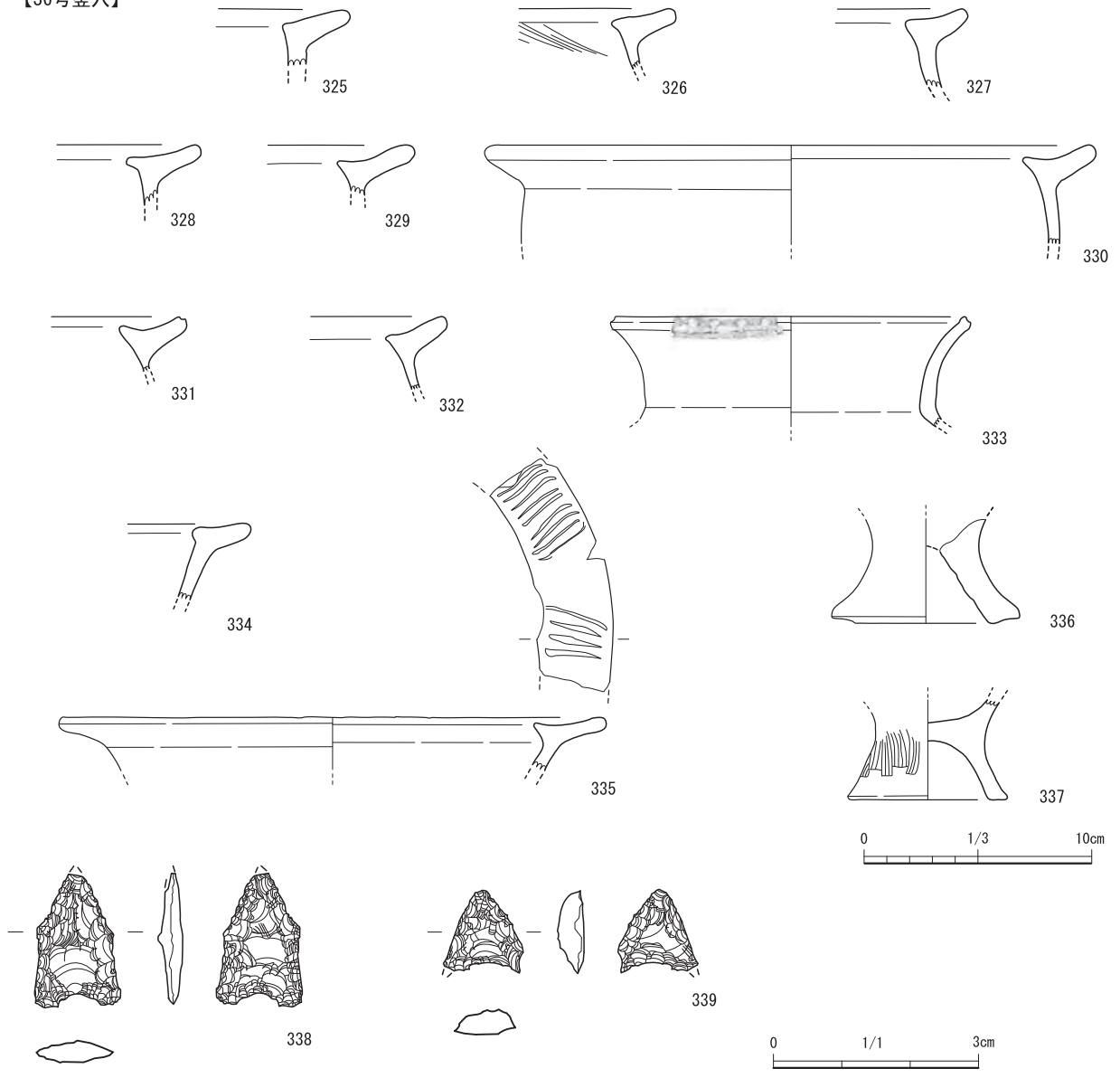


【35号竪穴】

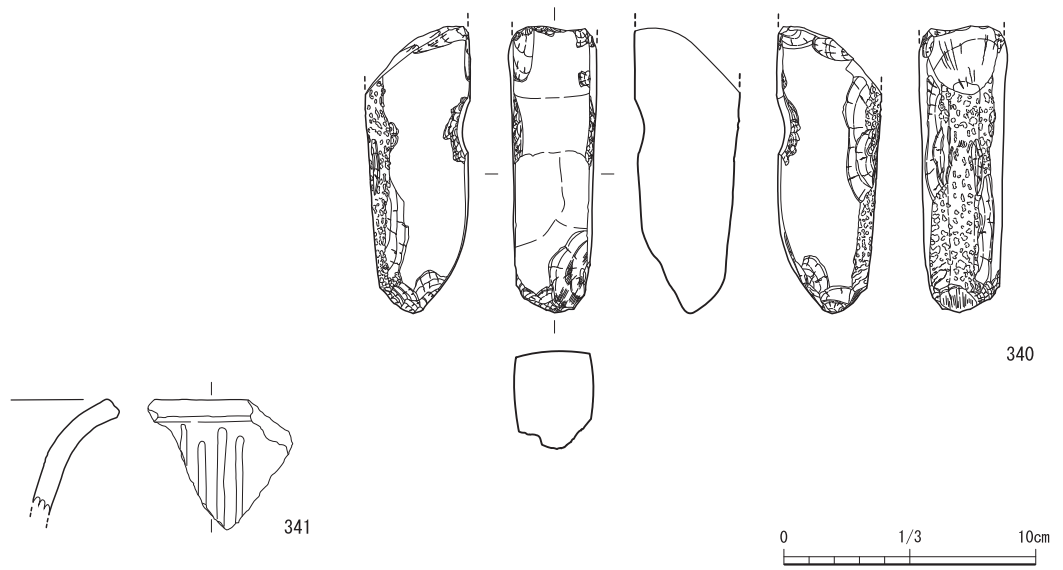


第59図 34・35号竪穴建物出土遺物実測図

【36号竖穴】



【37号竖穴】



第60図 36・37号竖穴建物出土遺物実測図

出土遺物は、弥生時代中期後半の土器が多い。307～310 は甕の口縁部、311 は壺の口縁部、312 は甕の脚部である。また、石器は 313 の粘板岩製の磨製石鏃と、314 の安山岩製の打製石鏃がいずれも完形で出土している。

35 号竪穴建物【S24】(第 58・59 図、図版 11・28・29)

H 123・124、I 123 グリッドで確認された竪穴建物である。規模は検出できたのが長軸 3.4m、短軸 2.4m 以上、深さは 0.3m で遺構の南側の大半は調査区外へと伸びる。30 号・33 号・37 号竪穴建物を切る。遺構北側にカマドが作られていたが、北側は樹痕によるカクランが激しく、カマドの範囲も建物のプランも明確に確認できなかった。カマドは、左右に袖の一部が粘土塊として残っており、右側はきれいな長方形を保っていた。その中央部に焼土塊が確認できた。その下は、深く掘り込まれており深さは 0.6m を超え、炭化物が多量に出土した。また、カマドの南側 1m ほどのところでもう一か所、焼土の広がる範囲を確認した。当初、もう一か所カマドが存在すると想定したが、掘り下げていくと深くはなく上層にのみ焼土があり、下層には焼土の混じりもなく床で火をたいたような跡も見られなかった。そのため、樹痕にカマドの残骸がたまっていたと考えられる。

出土遺物は、土師器も僅かに出ているが、図化するには残りが悪く、ここでは弥生土器を掲載する形となった。315～323 は弥生時代中期の甕の口縁部で、324 は甕の脚部である。周囲に弥生時代の遺構が多いため、流れ込みと思われる。また、打製石鏃 1 点を写真図版のみで掲載している。

36 号竪穴建物【S26】(第 58・60 図、図版 11・28・29)

G・H 123・124 グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸 4.8m、短軸 3.5m 以上、深さ 0.48m である。34 号竪穴建物 (S22) に切られ、37 号竪穴建物 (S45) を切る。9 層を深く掘りこんだ遺構である。遺構の中央部に炉とみられるピットを確認した。埋土には炭化物と焼土を多く含むため炉跡と判断した。また、遺構内のピットも他の住居に比べ大きく深いピットが多く検出されている。しかし、遺構とのバランス、組み合わせなどを考慮すると柱穴と断定できるものはなかった。

出土遺物は、弥生時代中期後半の土器が多い。325～332 は甕の口縁部、333 は口唇部に刻み目を有する壺、334 は壺の口縁部、335 は口縁上面に暗文を施した高坏と、336・337 は甕の脚部である。石器は、338・339 とともに黒曜石製の打製石鏃である。340 は上部が欠損した安山岩製の抉入柱状片刃石斧である。

37 号竪穴建物【S45】(第 58・60 図、図版 11・28・29)

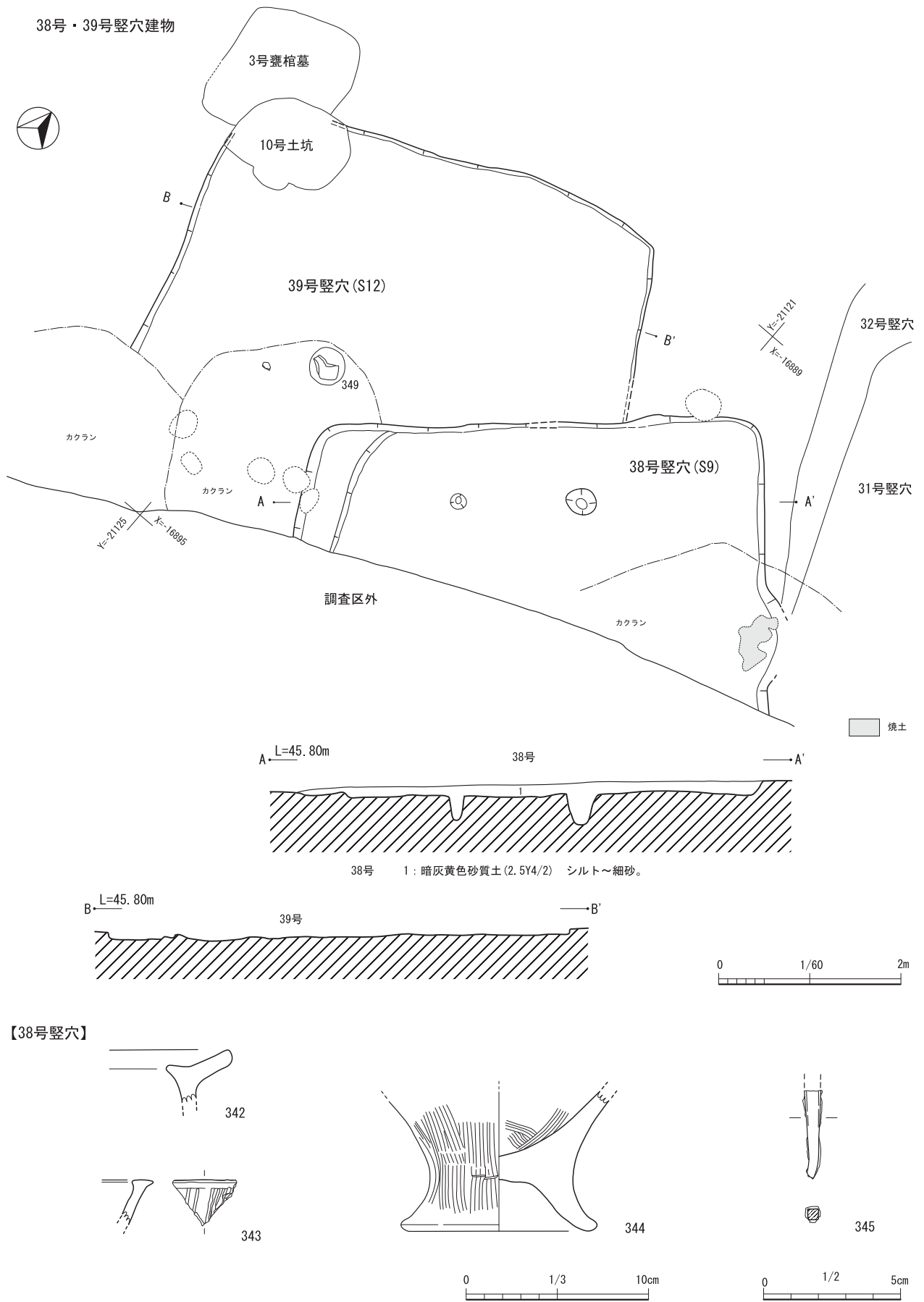
G・H 123・124 グリッドで確認された竪穴建物である。規模は推定で長軸 5.0m 以上、短軸 4.0m 以上、深さ 0.24m である。多くを他の遺構に切られておりプランを断片的にしか確認できなかったため、それらをつなぎ合わせ遺構の推定範囲を出すところのぐらいになる。深さは 0.24m である。33 号竪穴建物 (S27)・34 号竪穴建物 (S22)・36 号竪穴建物 (S26)・35 号竪穴建物 (S24) に切られる。この切り合いの一群の中で最も古い建物である。

出土遺物 341 は、弥生時代中期の暗文を施した丁寧な作りの壺の口縁部である。他に打製石鏃 1 点を写真図版のみで掲載している。

38 号竪穴建物【S9】(第 61 図、図版 11・29)

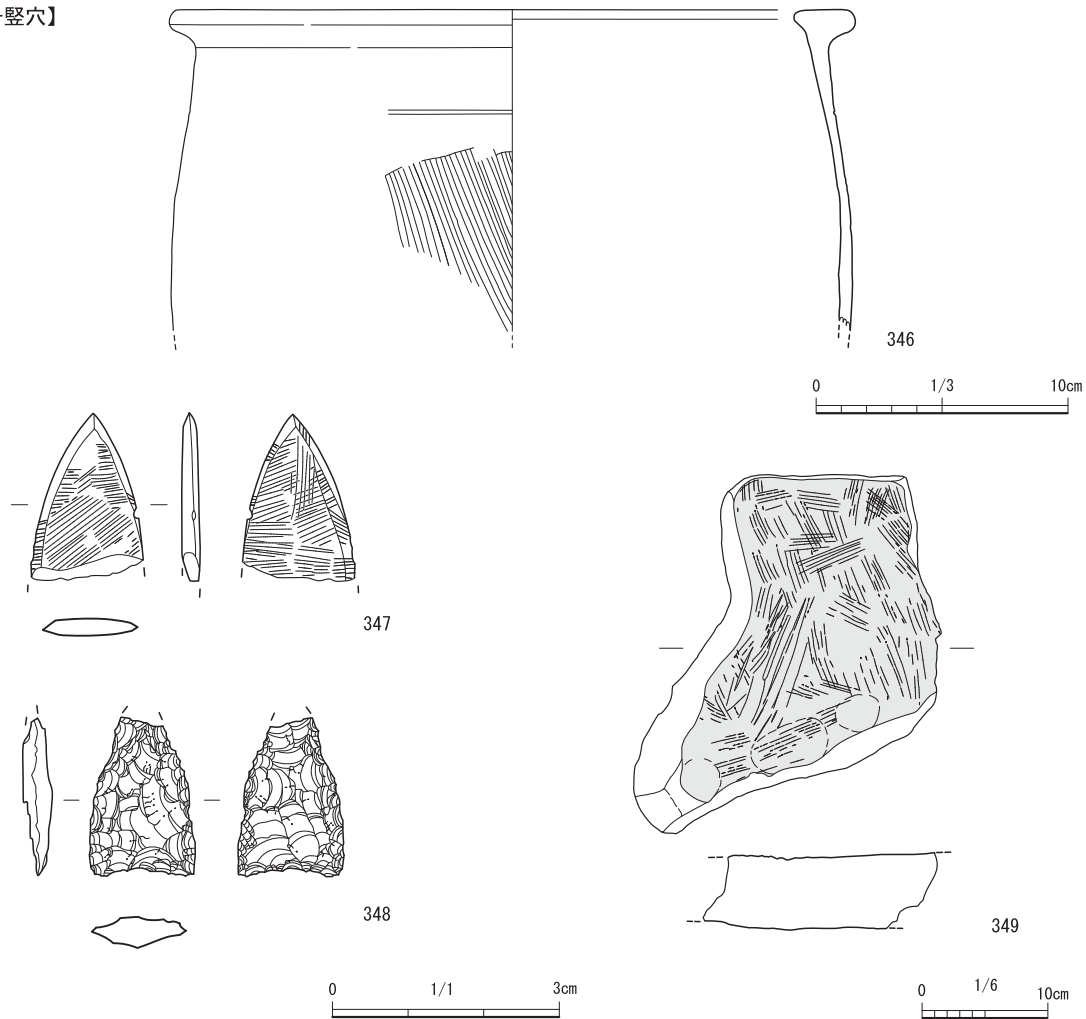
I 121 グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸 5.2m、短軸 2.0m 以上、深さ 0.13m で南側の調査区外に伸びる。39 号竪穴建物 (S12) を切り、東側は 32 号竪穴建物 (S35) と近接する。9 層を掘り込む方形のプランとなったが、西側は樹痕等に切られ明確なプランを検出できなかった。東側の 32 号竪穴建物 (S35)





第61図 38・39号竪穴建物(S9・12)及び38号出土遺物実測図

【39号竪穴】



第62図 39号竪穴建物出土遺物実測図

に接する箇所では赤化した土の塊があり、カマドと想定して掘り下げた。しかし、明確にカマドだと言えるような施設や出土遺物がなかったため、ここにカマドのような火を扱う施設があったか、可能性だけを指摘する。柱穴として掘り下げた穴はいずれも細く浅いものであったため柱穴との想定は難しい。

出土遺物は、弥生時代中期の土器で342は甕の口縁部、343は頸部に暗文のある壺、344は甕の脚部である。また345の鍬身部がなく基部のみの鉄鍬が出土している。他に、台石も写真図版のみで掲載している。

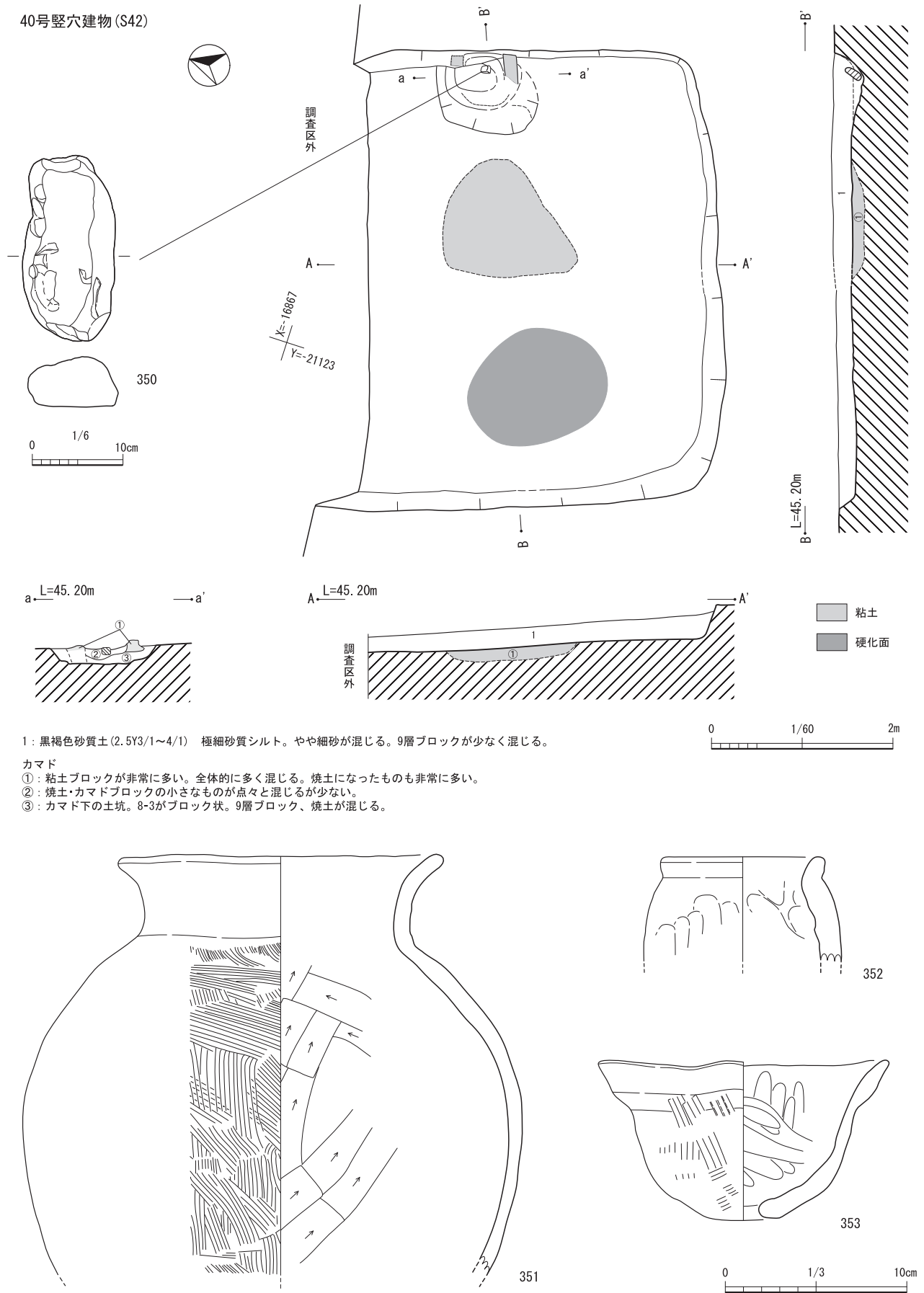
39号竪穴建物【S12】(第61・62図、図版12・29)

H・I-120・121グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸5.1m、短軸3.0m以上、深さ0.25mである。38号竪穴建物(S9)・10号土坑(S19)、樹痕等に切られ、3号甕棺墓(S13)と近接する遺構である。浅く広がる遺構だが、方形であることと周囲の遺構との関係から竪穴建物と想定した。調査区南壁に向かって緩やかに落ちるため、落ち込みに8層が堆積した部分の可能性もある。

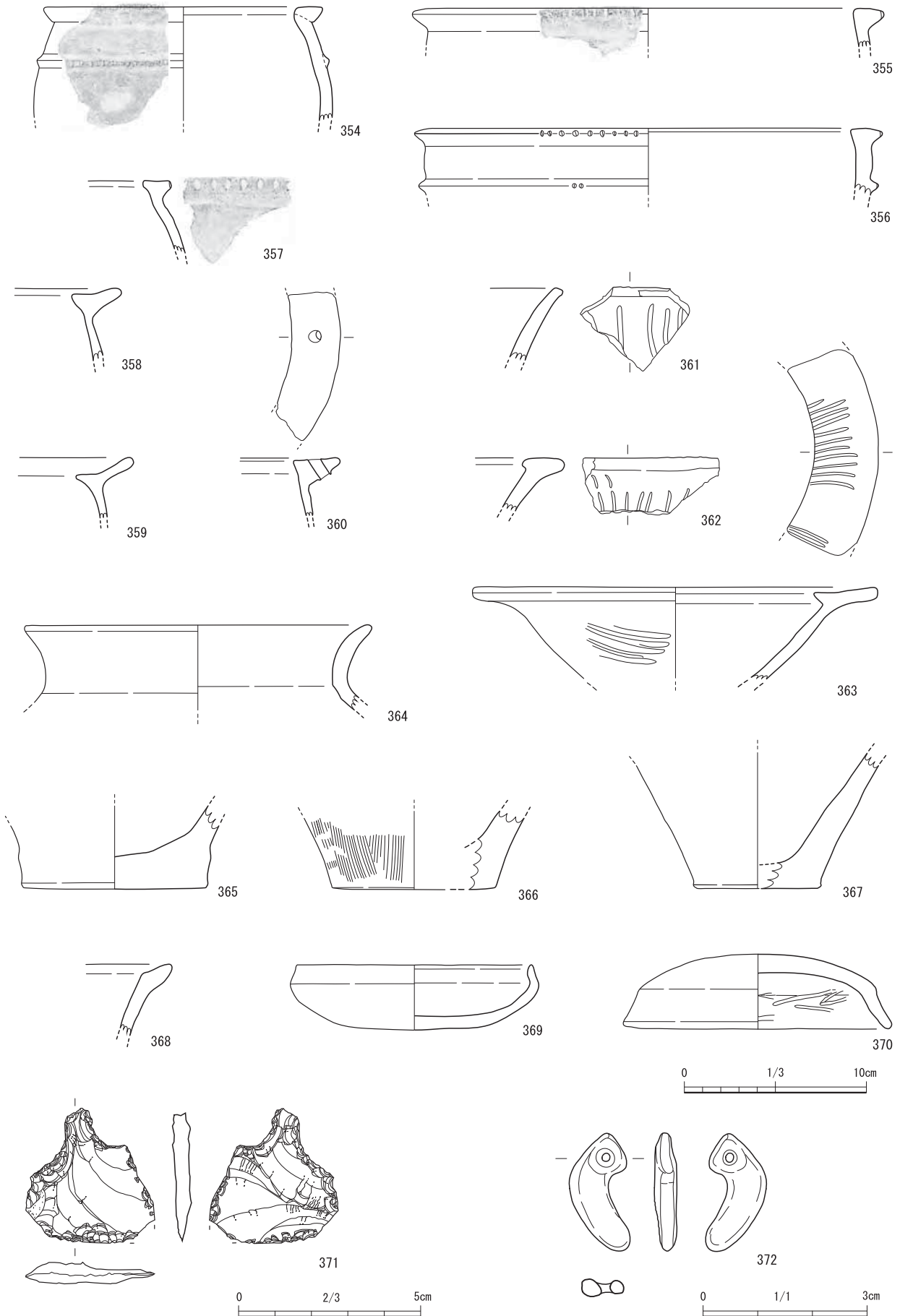
出土遺物346は弥生時代中期前半の甕の口縁～胴部である。石器では347の粘板岩製の磨製石鍬と348の安山岩製の打製石鍬、349の砂岩製の砥石が出土している。

40号竪穴建物【S42】(第63・64図、図版12・30)

D・F-121・122グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸5.0m、短軸4.5m以上、深さ0.6mで

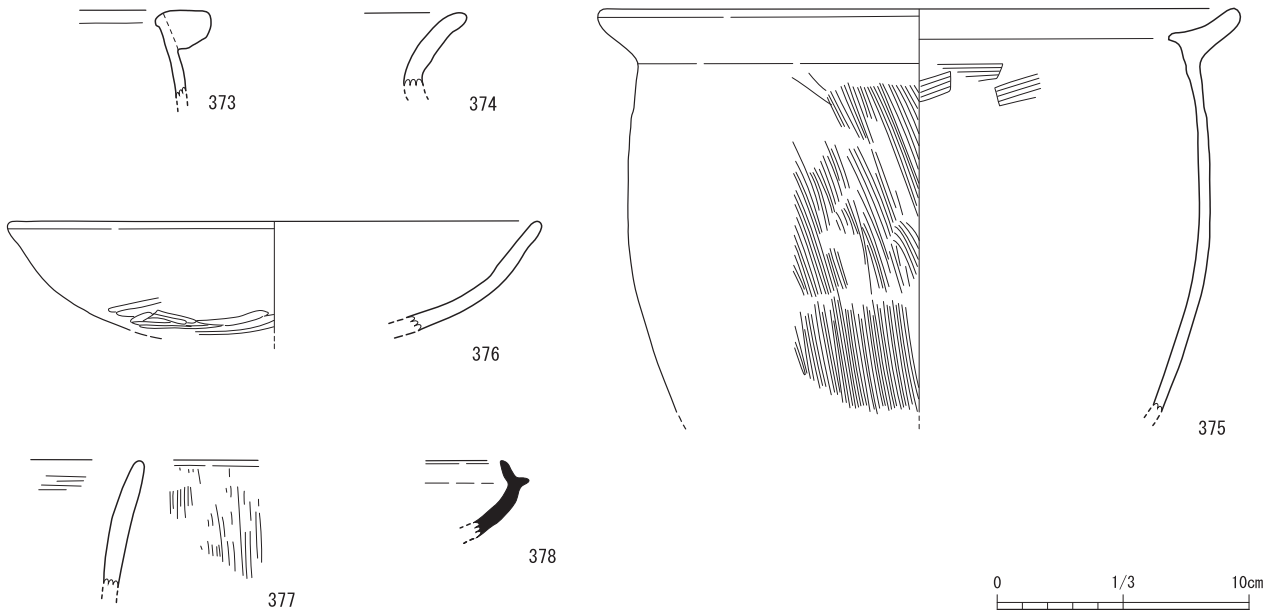


第63図 40号竪穴建物 (S42) 及び出土遺物実測図 (1)



第64図 40号竪穴建物出土遺物実測図(2)





第66図 41号竪穴建物出土遺物実測図

遺構の壁際のやや落ちた部分には埋土が堆積していたが高い部分には埋土が残っていなかった。そのため、埋土の残っていた部分をつなぎ合わせて推定範囲とする。残りはかなり悪いが、建物北壁にカマドが備え付けられていたのは確認できた。カマドも残りは悪いが、左右の袖部は確認でき、その左右の粘土の先端に同じような大きさの軽石が置かれていた。カマドの中央は掘りすぎてしまったが、内部の残りは比較的良好、土層断面の②層と③層の境がカマド使用面となる。カマドとの関係より建物の埋土は掘り方の埋土を確認したと思われる。出土遺物とカマドが確認できたことから古墳時代後期～終末期ぐらいの建物と考えられる。

出土遺物 376 は土師器の高杯、378 は須恵器の坏身である。流れ込みであろうか弥生時代中期の土器も出土している。また、甕の胴部を写真図版のみで掲載している。

42号竪穴建物【S31】(第67～69図、図版12・13・31)

F・G-122・123グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸5.5m、短軸4.9m、深さ0.2mである。

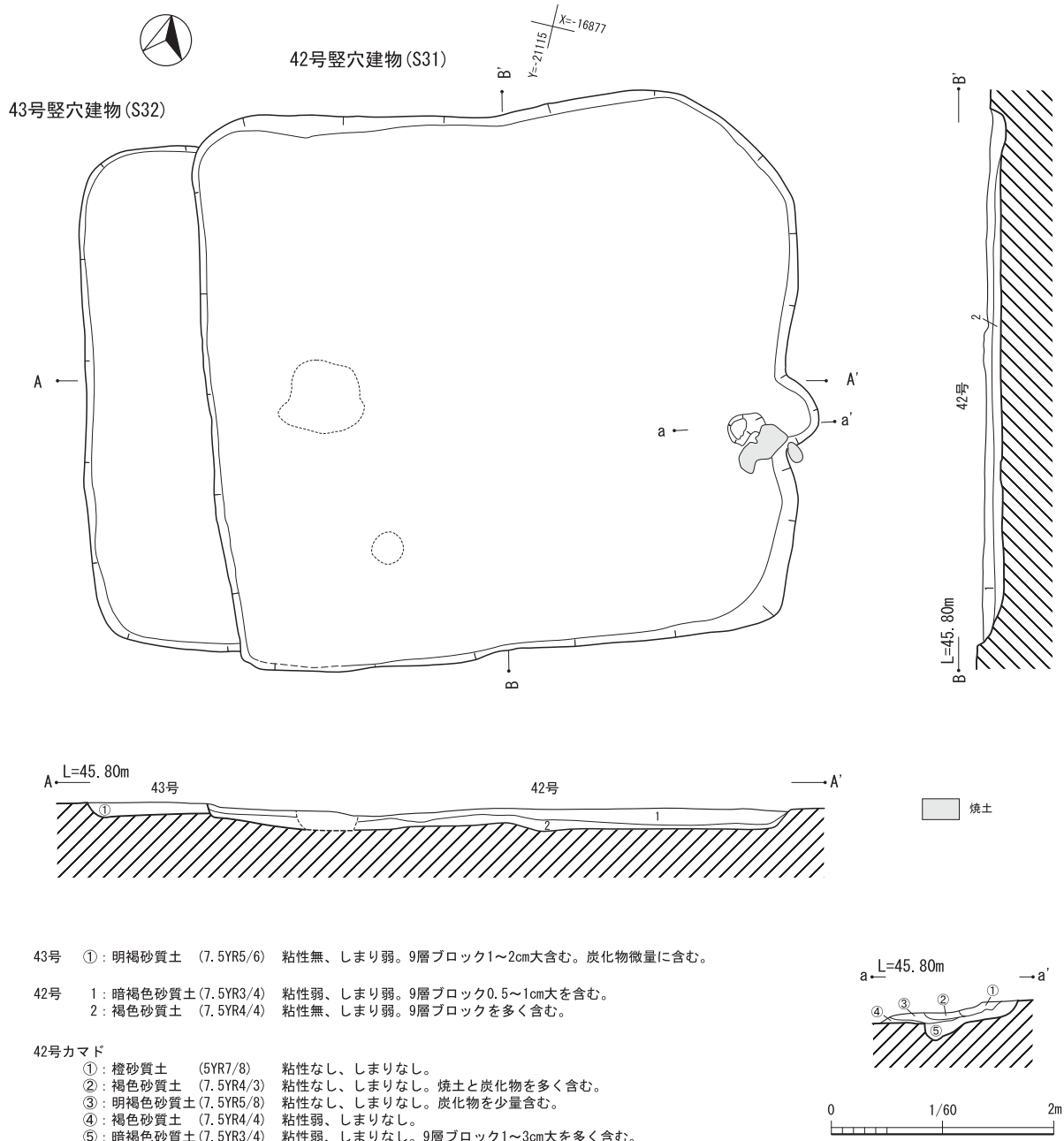
43号竪穴建物(S32)を切る。東側壁に備え付けのカマドが確認された。残りは非常に悪く、浅い掘り込みと焼土の広がり確認できたが袖やカマドの粘土などは確認できなかった。しかし、カマド床面は赤変し、その場で火を使用していた痕跡があるため古墳時代の遺構と考えられる。

出土遺物 398 は土師器の甕の口縁である。流れ込みであろうか弥生土器が多く出土している。その他、399 は黒曜石製の打製石鏃、400 は砂岩製の打製石鎌、401・402 は砂岩製の砥石が出土している。

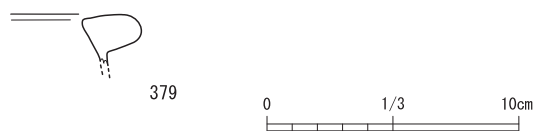
43号竪穴建物【S32】(第67図、図版13・31)

F・G-122グリッドで確認された竪穴建物である。規模は長軸4.6m、短軸1.0m以上、深さ0.14mと東側を42号竪穴建物(S31)に大きく切られ、非常に浅いため全体像も性格もよくわからないが、検出した部分の形などから竪穴建物と思われる。

出土遺物は数が少なく、遺構の時期を断定するのは難しい。379 は弥生時代中期前半の甕の口縁部である。



【43号竪穴】



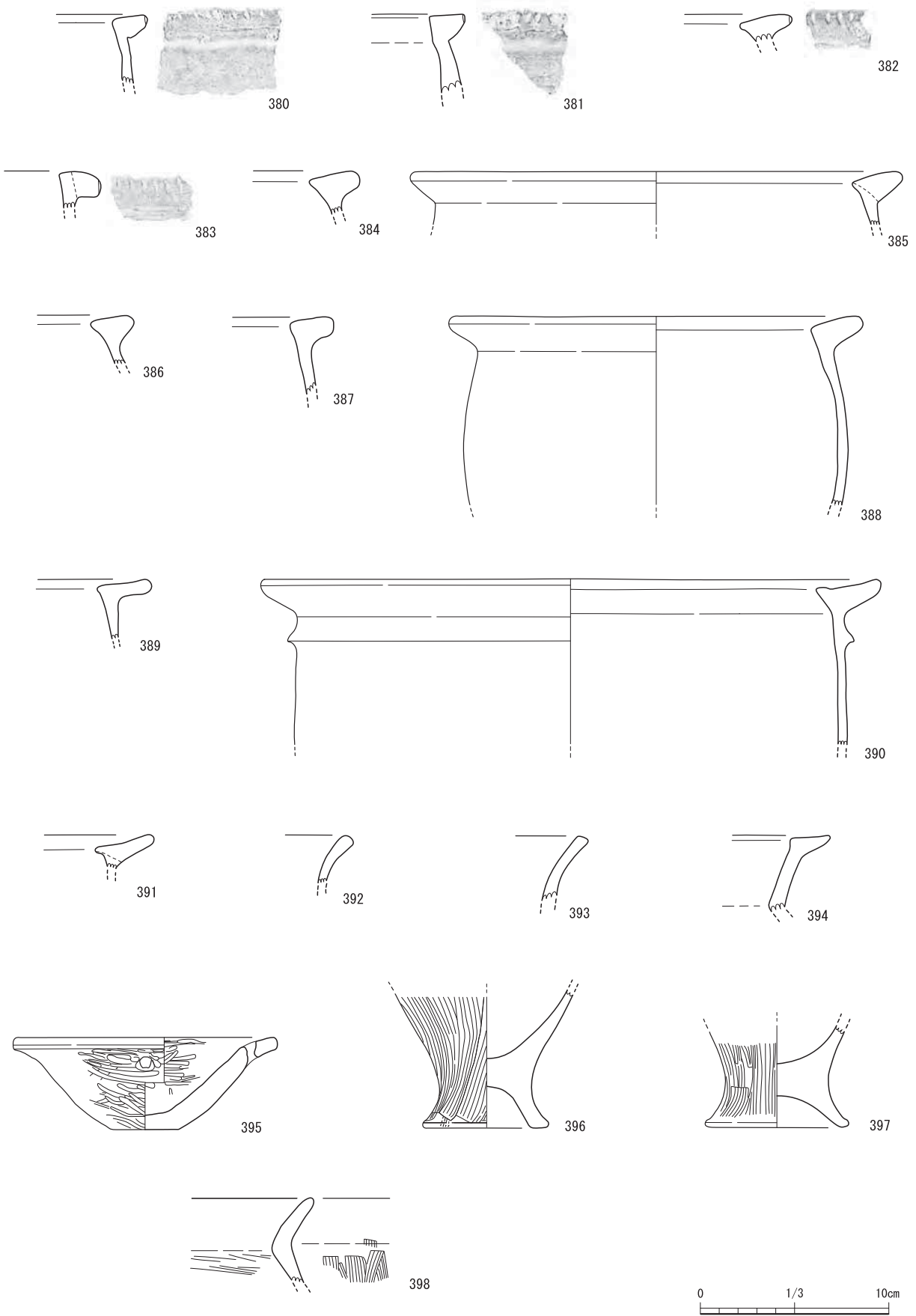
第67図 42・43号竪穴建物 (S31・32) 及び43号竪穴出土遺物実測図

44号竪穴建物【S21】(第70図、図版13・31)

F・G-127グリッドで確認された遺構である。長軸3.1m以上、短軸2.0m以上、深さ0.2mである。底部は平たく、検出した形状から竪穴建物の可能性が高いが、大きめの土坑の可能性もある。

出土遺物403は刻目突帯をもつ甕の胴部の一部である。また、打製石鏃1点を写真図版のみで掲載している。

【42号竪穴】

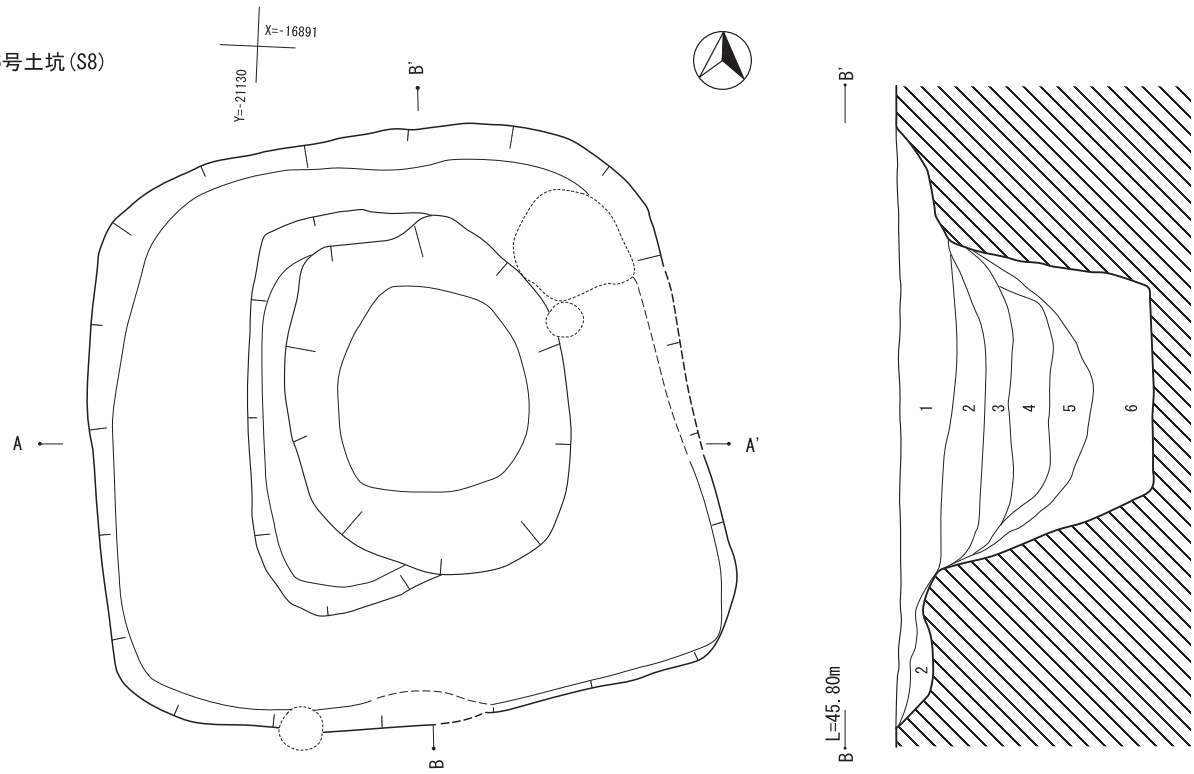


第68図 42号竪穴建物出土遺物実測図(1)

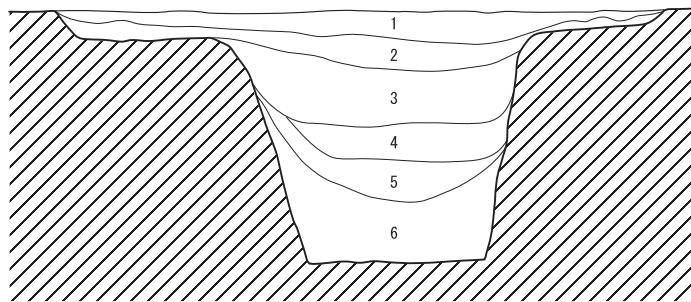




6号土坑(S8)

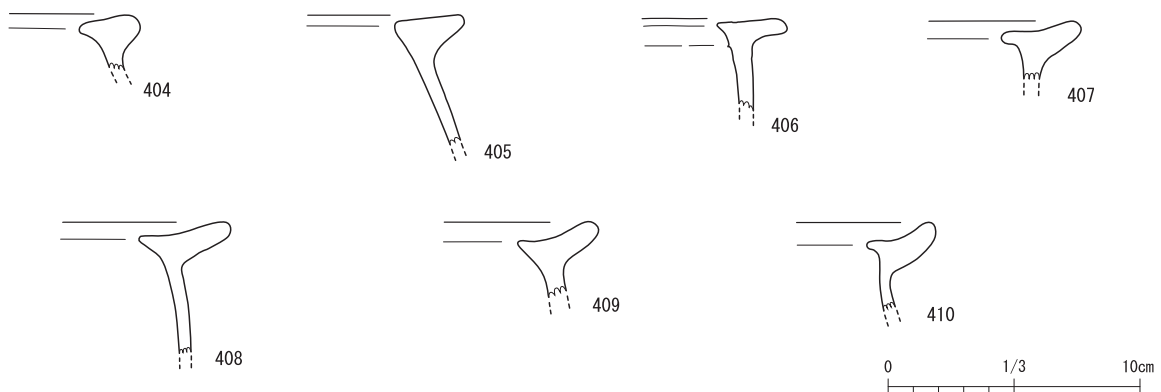


A L=45.80m

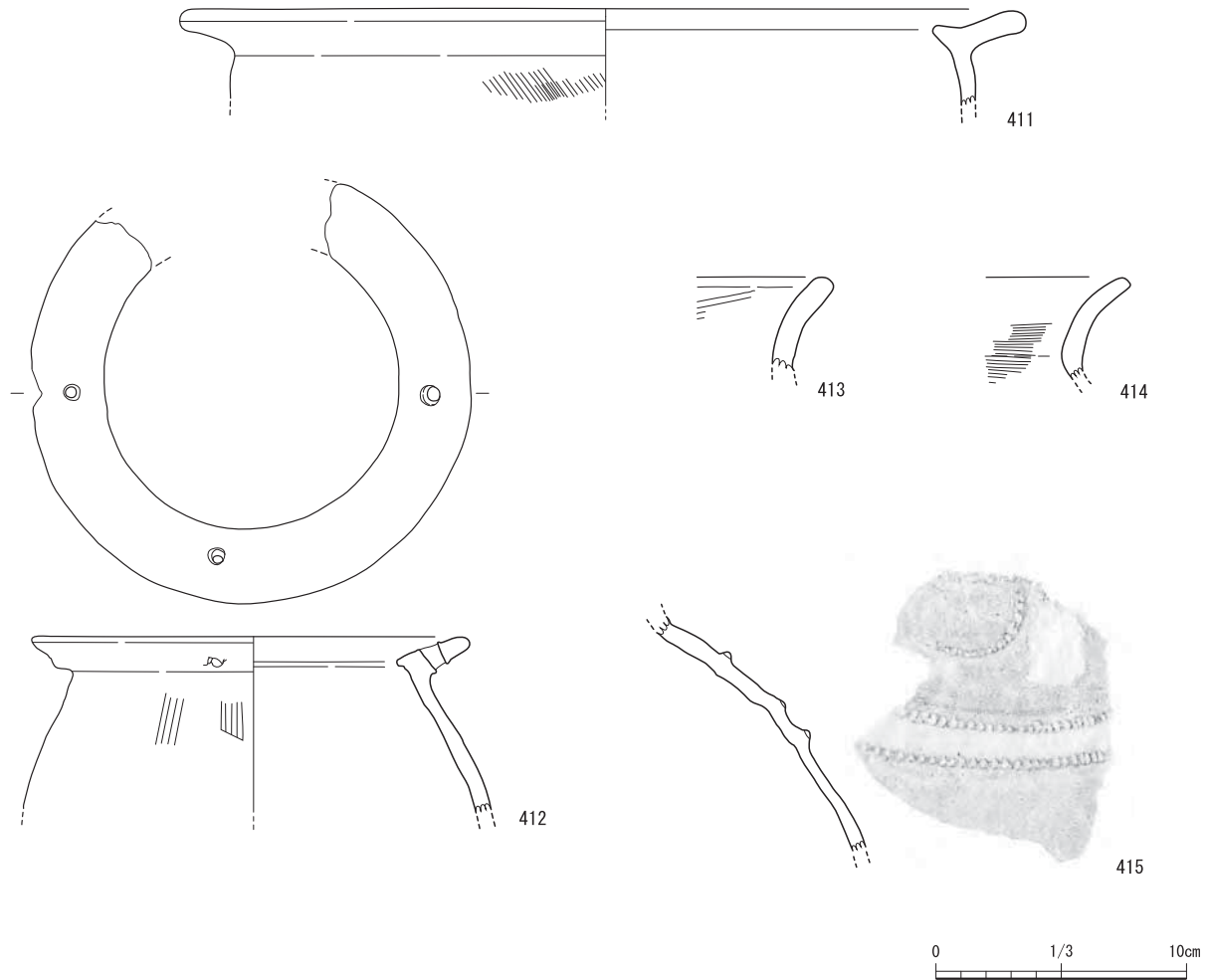


0 1/40 1m

- 1: 暗褐色砂質土(7.5YR3/4) 粘性弱、しまり弱。炭化物・焼土粒を少し含む。
- 2: 褐色砂質土(7.5YR4/6) 粘性弱、しまり弱。9層ブロックを1~2cm含む。
- 3: 明褐色砂質土(7.5YR5/8) 粘性弱、しまり少し有り。9層ブロックを2~4cm含む。
- 4: 暗褐色砂質土(7.5YR3/3) 粘性弱、しまり弱。9層ブロックを0.5~3cm含む。炭化物を少量含む。
- 5: 黒褐色砂質土(7.5YR2/2) 粘性弱、しまり弱。9層ブロックを0.5~5cm含む。炭化物を少量含む。
- 6: 黒褐色砂質土(7.5YR3/1) 粘性弱、しまり弱。炭化物ブロックを含む。9層ブロック、赤褐色砂質土を少量含む。



第71図 6号土坑(S8)及び出土遺物実測図(1)



第72図 6号土坑出土遺物実測図(2)

## 土坑

6号土坑【S8】(第71・72図、図版13・14・32)

I-119・120グリッドで確認された土坑である。規模は長軸2.0m、短軸1.6m、深さ1.3mである。検出当初のプランは、方形で堅穴建物を想定していたが土層断面の検討および掘り下げを行った結果、遺構の中央部が大きく掘りこまれた状態になることがわかった。また、埋土中層に数個の大きな礫を含み、最下層では甕が割れた状態で出土した。これらのことと遺構の形状を基に甕棺墓と想定して調査した。しかし、出土したのは最下層で一個体にも満たない土器片のみであった。埋土の状況は、下層に行くほど堆積が厚く下から中層までは一挙に埋められた可能性がある。

出土遺物408・415は最下層からの出土で、408は甕の口縁部、415は甕の胴部だが鉤状浮文が施されている。404～407、409～414は上層から出土した甕や壺の口縁部である。いずれも弥生時代中期の土器である。

7号土坑【S36】(第73・75図、図版14・32)

G-127グリッドで確認された土坑である。規模は長軸1.6m、短軸1.1m、深さ0.25mである。周囲には大小の樹痕が著しくみられたが、やや強めの暗色の埋土であったので遺構と判断した。

出土遺物416～418は弥生時代中期の甕の口縁部、419は甕の胴部である。

8号土坑【S39】(第73・75図、図版14・32)

F-123・124グリッドで確認した土坑である。規模は長軸1.3m、短軸1.2m、深さは0.3mできれいな円状である。

出土遺物420は把手が剥がれた甕の頸部～底部である。

9号土坑【S17】(第73・75図、図版14・32)

G-119グリッドで確認された土坑である。規模は長軸1.5m、短軸1.2m、深さは0.76mで他の土坑に比べるとやや深めの土坑である。18号竪穴建物(S1)を切る。層の中程で甕の口縁部が伏せたような形で出土した。

出土遺物は弥生時代のもので、421・422は甕の口縁部、423は甕の脚部である。

10号土坑【S19】(第73・75図、図版14・32)

I-120グリッドで確認された土坑である。規模は長軸1.28m、短軸0.9m、深さ0.9mである。埋土は6層である。39号竪穴建物(S12)と3号甕棺墓(S13)を切る。西側はやや高くステップ状になり東側に落ちる。土層断面で埋土を確認したが、東側は上から掘り込まれたように入り、西側は東に向かって緩やかに落ちてくる。

出土遺物424は弥生時代の甕の口縁部で、最下層からの出土である。

11号土坑【S37】(第74図、図版14)

F・G-126グリッドで確認された土坑である。規模は長軸1.5m、短軸0.8m、深さ0.2mである。樹痕等により南側はカクランを受ける。

12号土坑【S38】(第74図、図版14)

F-127グリッドで確認された土坑である。規模は長軸1.1m、短軸0.8m、深さは0.35mでこの調査区ではやや小型の土坑である。樹痕等のカクランを受け残りは悪いが四角いプランのようである。この小さな土坑からは、30～50cm大の石が2つ底からやや浮いた状態で出土した。

13号土坑【S41】(第74・75図、図版15・32)

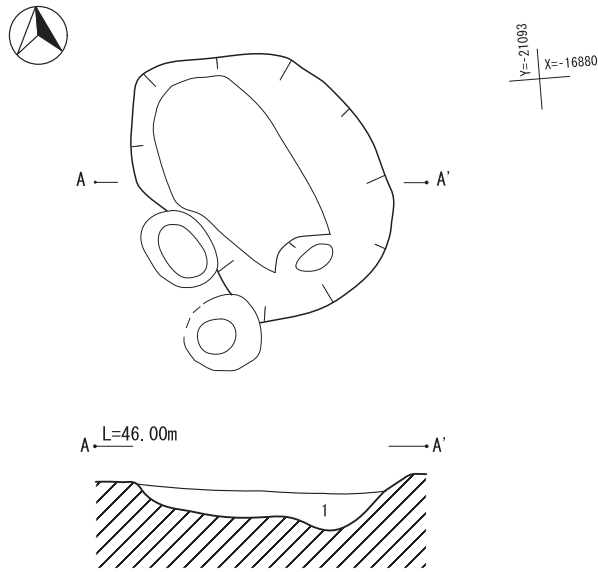
E・F-124グリッドで確認された土坑である。規模は長軸3.6m、短軸2.8m、深さ0.3mである。この遺構からも多くのピットが検出され、小さめの竪穴建物の可能性もあったが、位置や周囲との状況から柱穴にするには疑問が残るものがほとんどで、おそらくこれらは遺構に伴うものではないと思われる。以上のことより、竪穴建物ではなく、大型の土坑と判断した。

出土遺物425～427は、弥生時代の甕の口縁部である。

14号土坑【S30】(第76図、図版15)

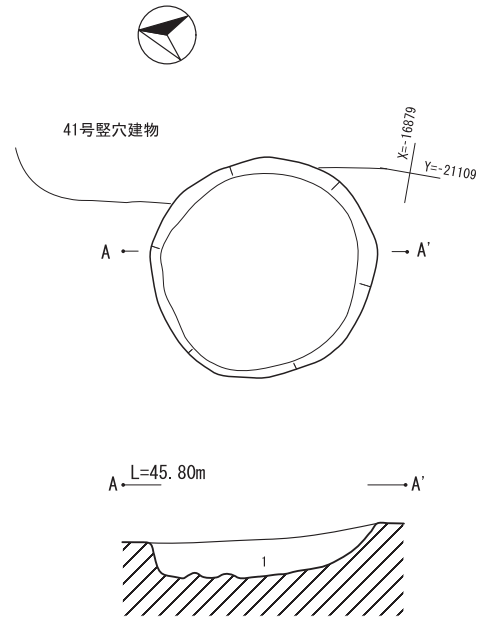
H-124・125、G-124グリッドで確認された土坑である。規模は長軸1.8m、検出できた短軸1.5m以上、深さ0.17mである。19号竪穴建物に切られる。丸い底部で、東側はわずかに一段低くなる。

7号土坑 (S36)



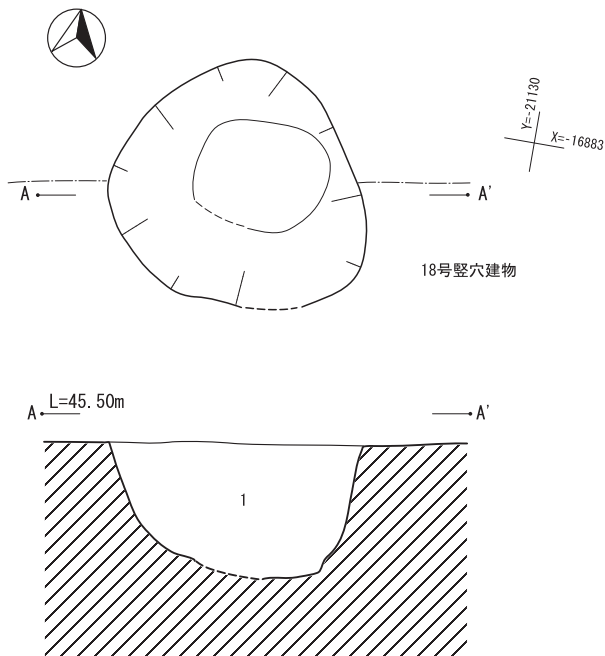
1: 黒褐色砂質土 (2.5Y3/1) 極細砂質シルト。黄灰 (2.5Y4/1) 極細砂質シルトと9層が混じる部分が根あと状に付らなる。

8号土坑 (S39)



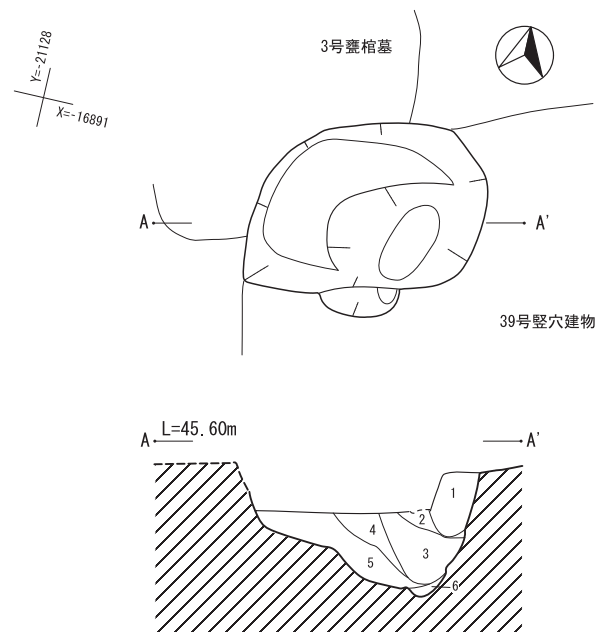
1: 黒褐色砂質土 (7.5YR3/2) 9層ブロック1~3cm大を少量含む。炭化物粒・焼土粒を含む。

9号土坑 (S17)

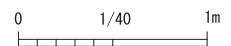


1: 暗褐色砂質土 (7.5YR3/4) 粘性弱、しまり弱。9層ブロック0.5~2cm含む。炭化物・焼土粒少し含む。

10号土坑 (S19)

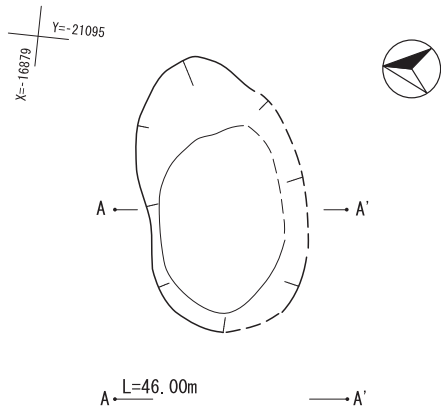


1: 褐色砂質土 (7.5YR4/4) 粘性弱、しまり弱。9層ブロック0.5~1cm大を含む。炭化物を少量含む。  
 2: 褐色砂質土 (7.5YR4/3) 粘性弱、しまり弱。9層ブロックを含まない。  
 3: 暗褐色砂質土 (7.5YR3/4) 粘性弱、しまり弱。9層ブロックを多く含む。1~5cm大を含む。炭化物粒を少量含む。  
 4: 暗褐色砂質土 (7.5YR3/3) 粘性弱、しまり弱。9層ブロックを含まない。炭化物粒を少量含む。  
 5: 褐色砂質土 (7.5YR4/3) 粘性弱、しまり弱。9層ブロックを少量含む。1~5cm大を含む。赤色粒を少量含む。  
 6: 暗褐色砂質土 (7.5YR3/4) 粘性弱、しまり弱。9層ブロックを含まない。

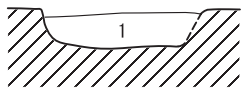


第73図 7・8・9・10号土坑 (S36・39・17・19) 実測図

11号土坑 (S37)

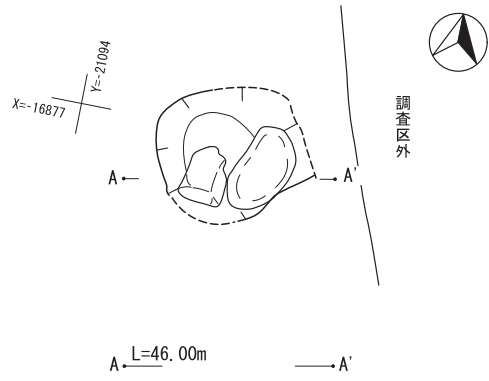


L=46.00m

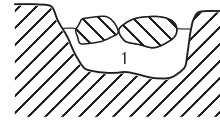


1: 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2~4/2) 極細砂質シルト。  
9層が暗くなったような所が多い。

12号土坑 (S38)

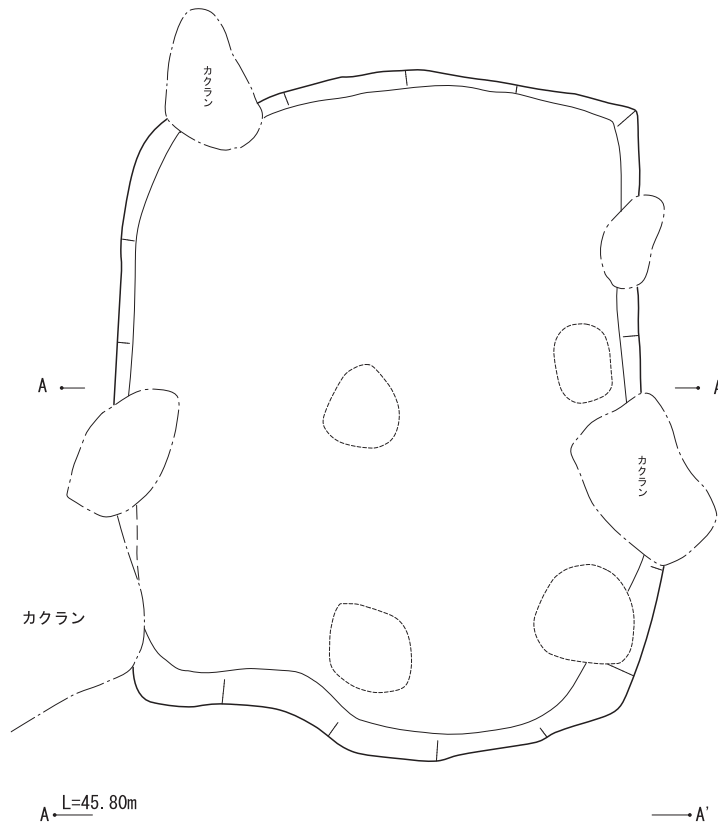


L=46.00m

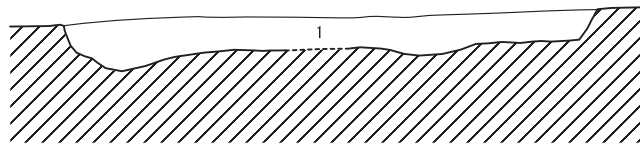


1: 黄灰色砂質土 (2.5Y4/1) 極細砂質シルト、色調薄めで  
9層がくすんだような所がある。

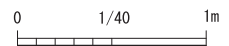
13号土坑 (S41)



L=45.80m

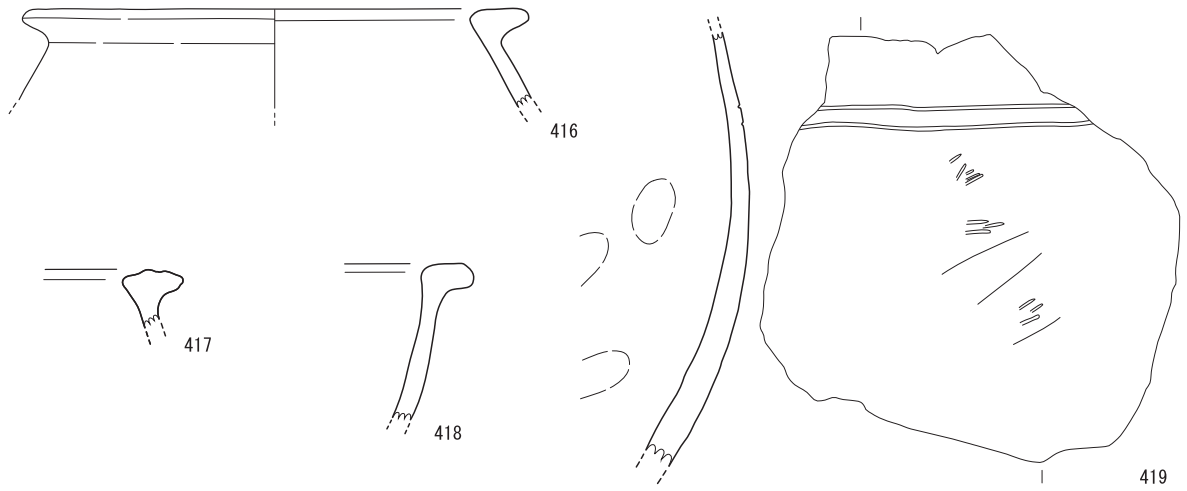


1: 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/1~4/2) 極細砂質シルト。粗く、9層大小のブロックを多く含み、炭化物が非常に多い。

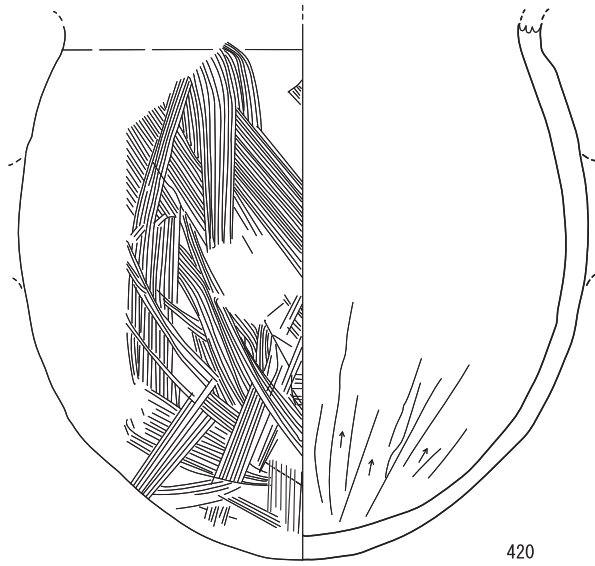


第74図 11・12・13号土坑 (S37・38・41) 実測図

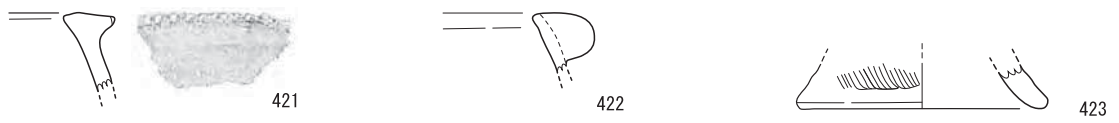
【7号土坑】



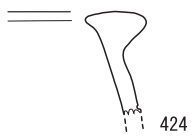
【8号土坑】



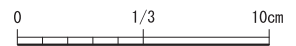
【9号土坑】



【10号土坑】

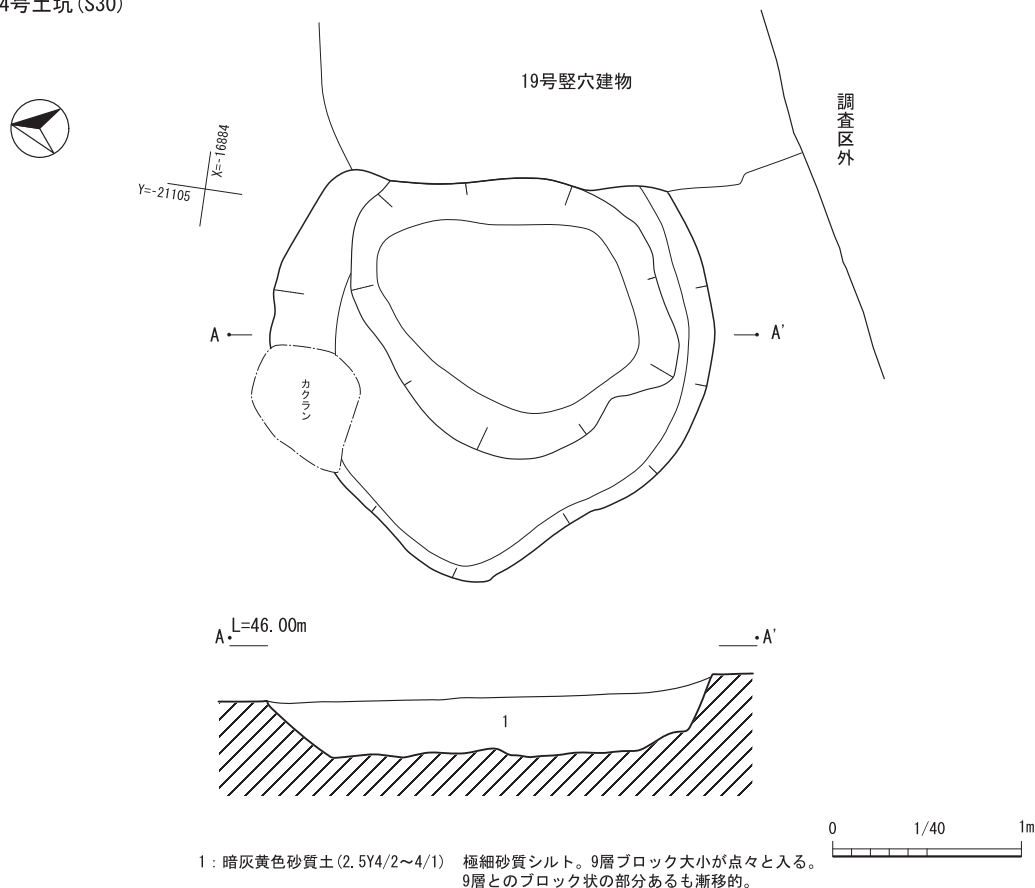


【13号土坑】



第75図 7・8・9・10・13号土坑出土遺物実測図

14号土坑 (S30)



第76図 14号土坑 (S30) 実測図

溝跡

2号溝【S4】(第77図、図版15・32・33)

調査区の西側 E~J-116・117 グリッドで確認された。規模は長さ 26.8m 以上、幅 0.7m、深さは 0.3m で調査区を南北に切る溝である。調査区壁までは南北ともに到達していないが他の遺構との切り合いもあるのでまだのびる可能性もある。出土した遺物は多時代にわたり近世の溝と想定する。白川に向かって僅かに幅を増し傾斜しているため、流路としても使用していた可能性がある。1区1号溝、3区3号溝と比べると断面形態、深さなどは類似するが、幅は倍近くあり広い。ただ、2号溝の中央付近の幅の狭くなる場所は、1号・3号溝とほぼ同じ幅になる。同じような性格の遺構であり、関係があるのかもしれない。

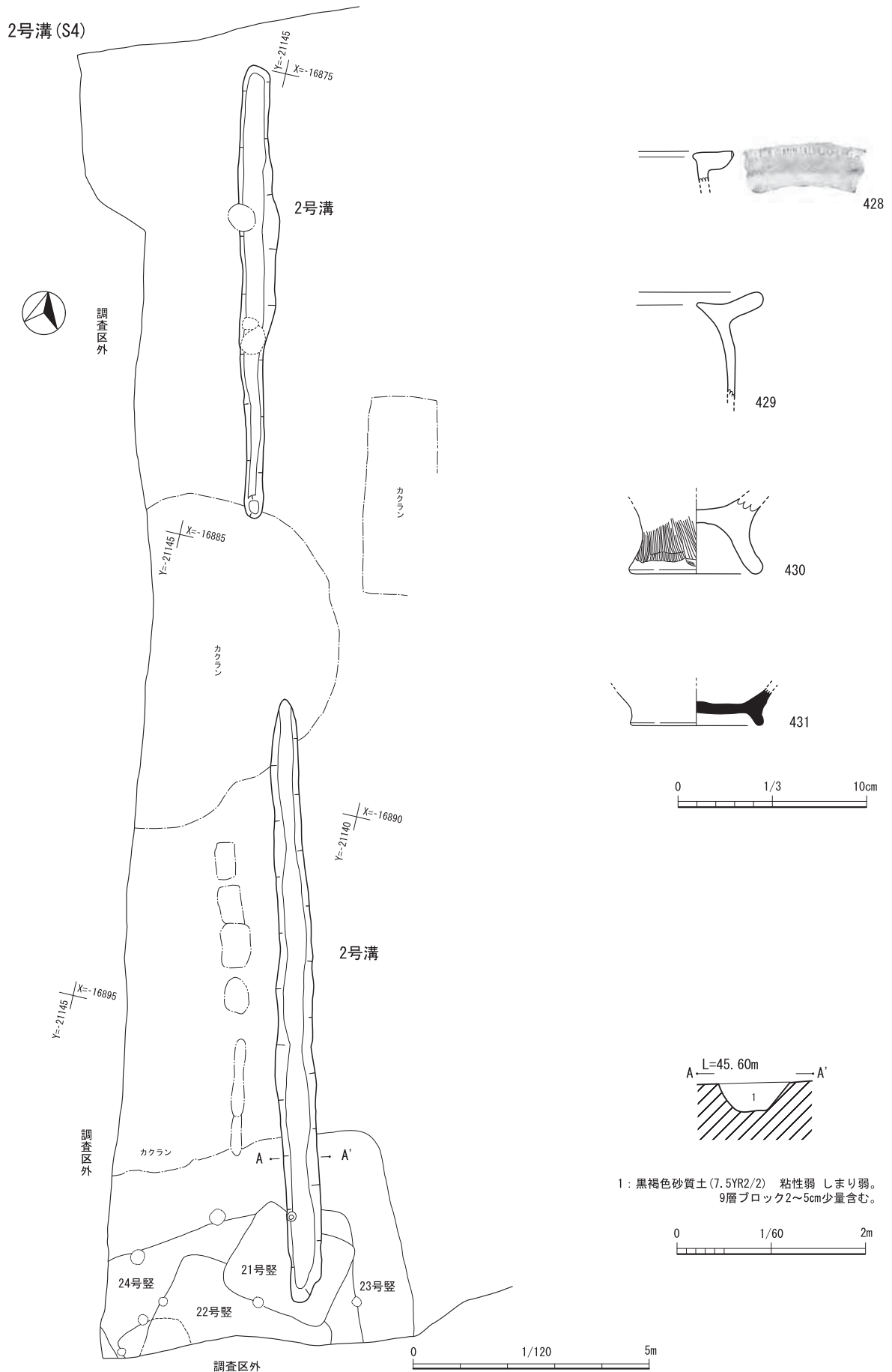
出土遺物 428・429 は甕の口縁部、430 は甕の脚部で、いずれも弥生時代の土器である。431 は須恵器の高台付碗の底部である。他に、青磁と染付けの破片も写真図版のみで掲載している。

グリッド出土遺物(第78~85図、図版15・33・34・35)

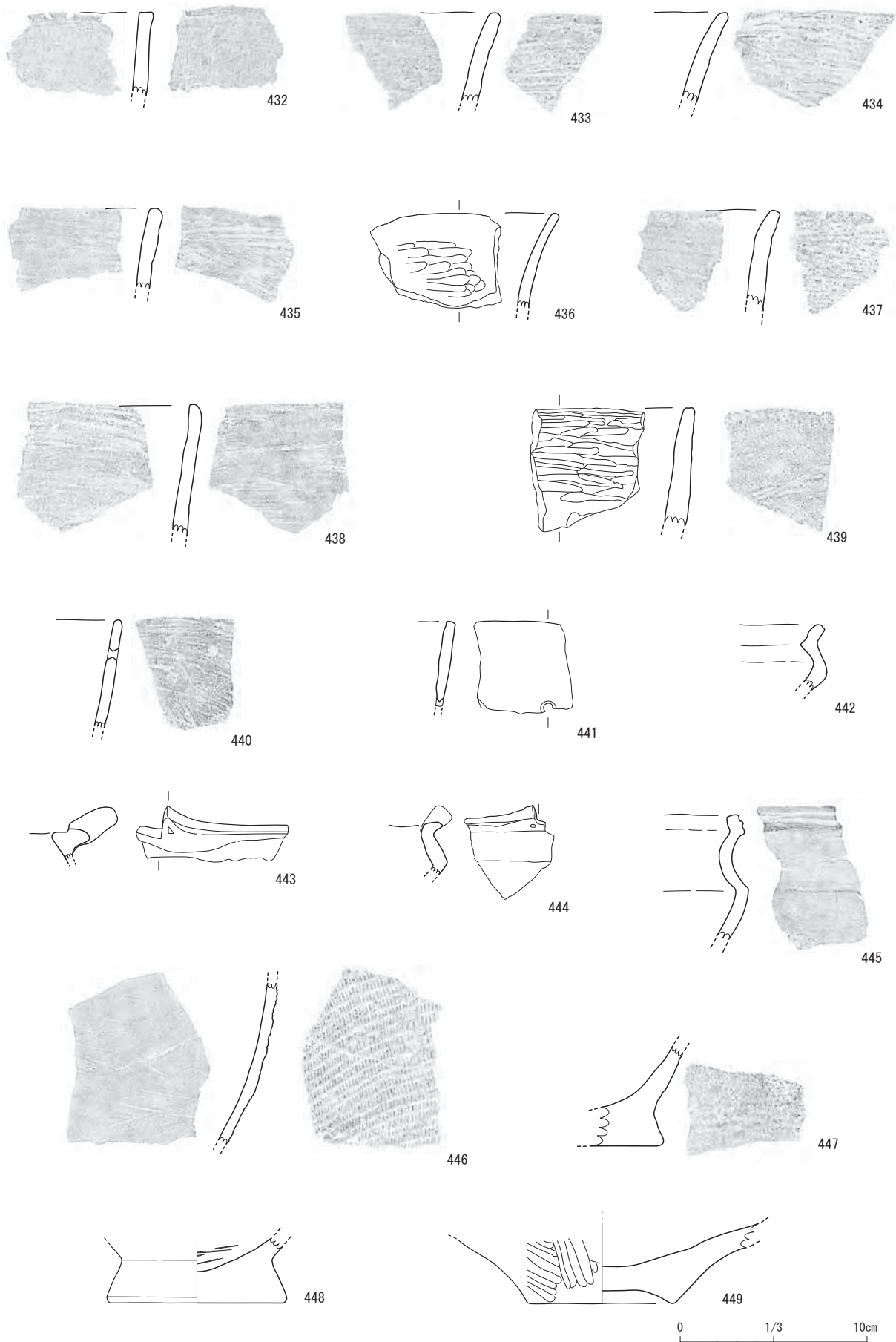
2区では、縄文土器から弥生土器、土師器など幅広く遺物が出土している。各遺構からも、掲載した遺物以外に多くの口縁部や底部・脚部片が出土していたが、ほんの一部のみしか載せる事ができなかった。

432~441 は縄文時代の深鉢の口縁部である。432~435、438・440 には条痕文が、439 の刺突文が施されている。また、440 と 441 には穿孔がある。442~445 は浅鉢である。特に 443・444 はリボン状突起を持つ。また 446 は組織痕文を持つ深鉢の胴部である。447~449 は深鉢の底部である。450~488 は弥生土器である。

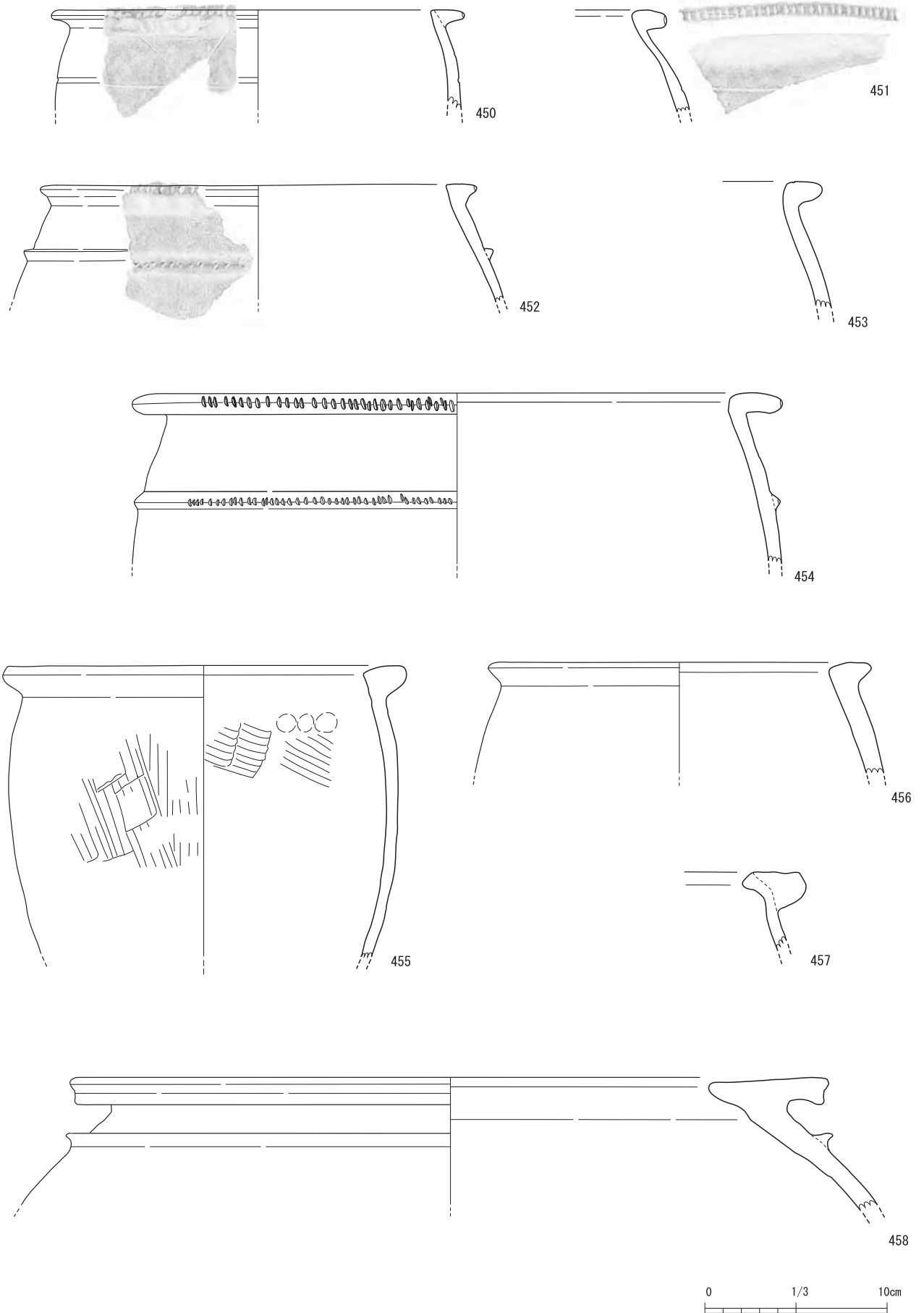




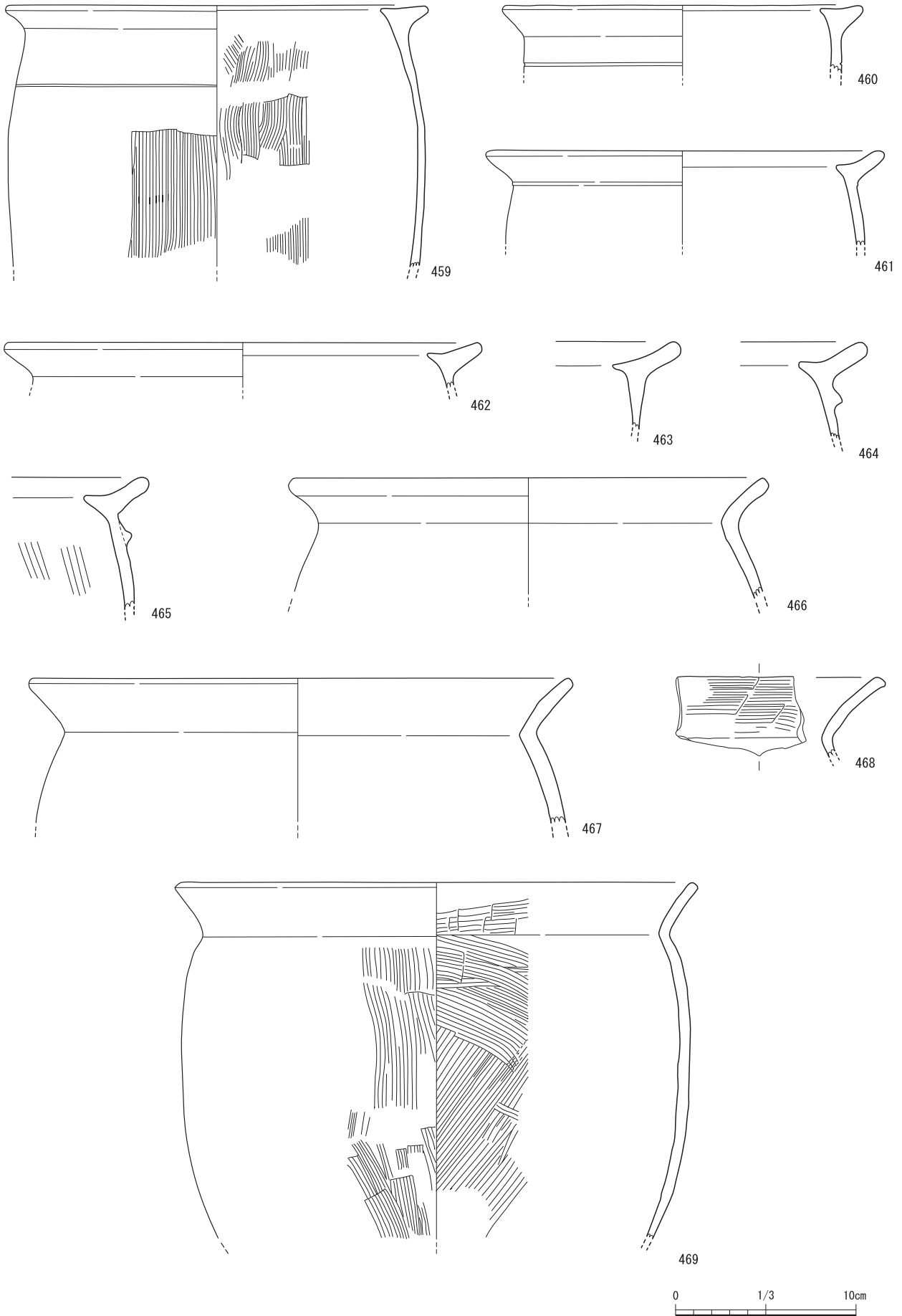
第77図 2号溝 (S4) 及び出土遺物実測図



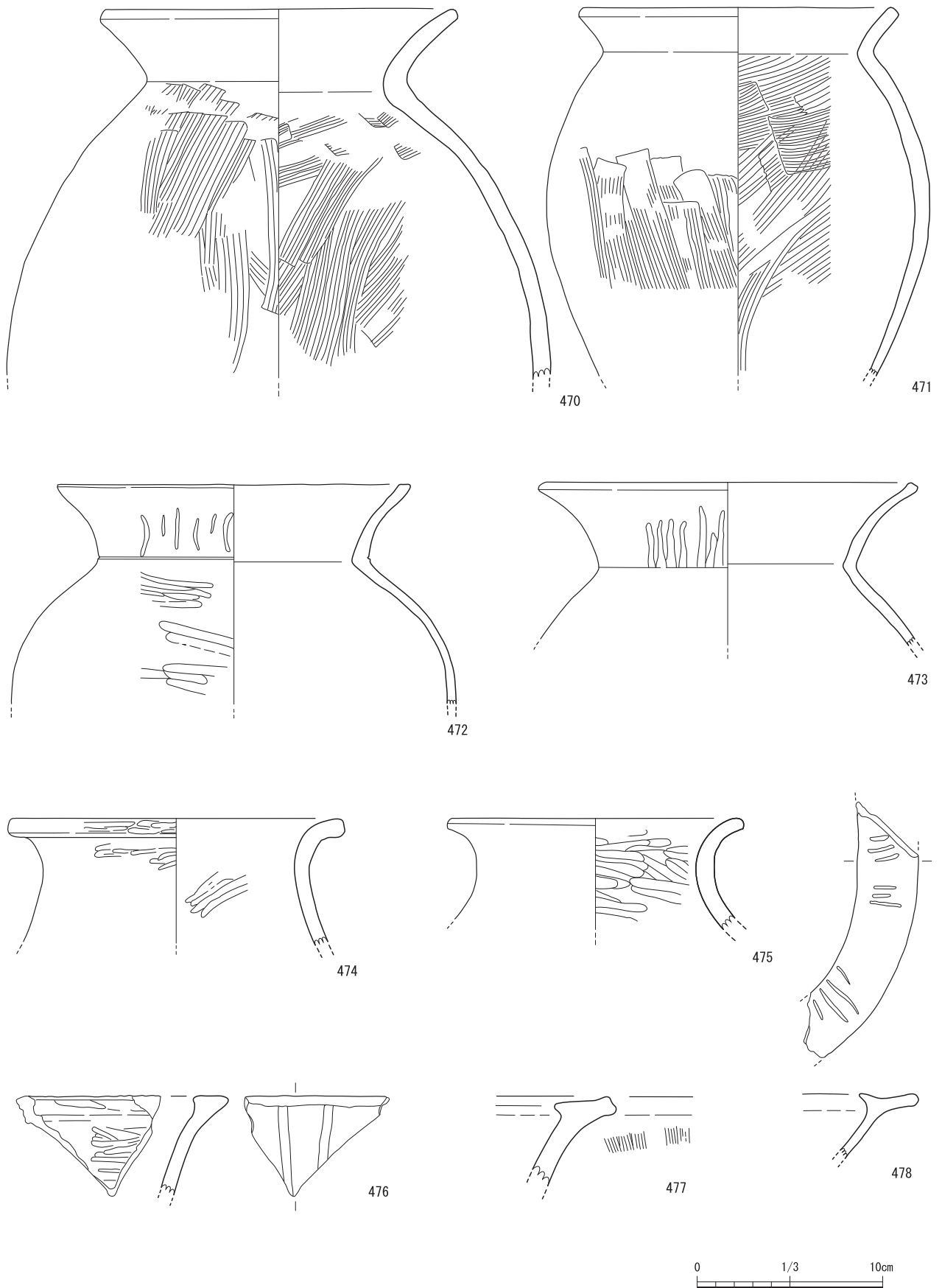
第78図 2区グリッド出土遺物実測図(1)



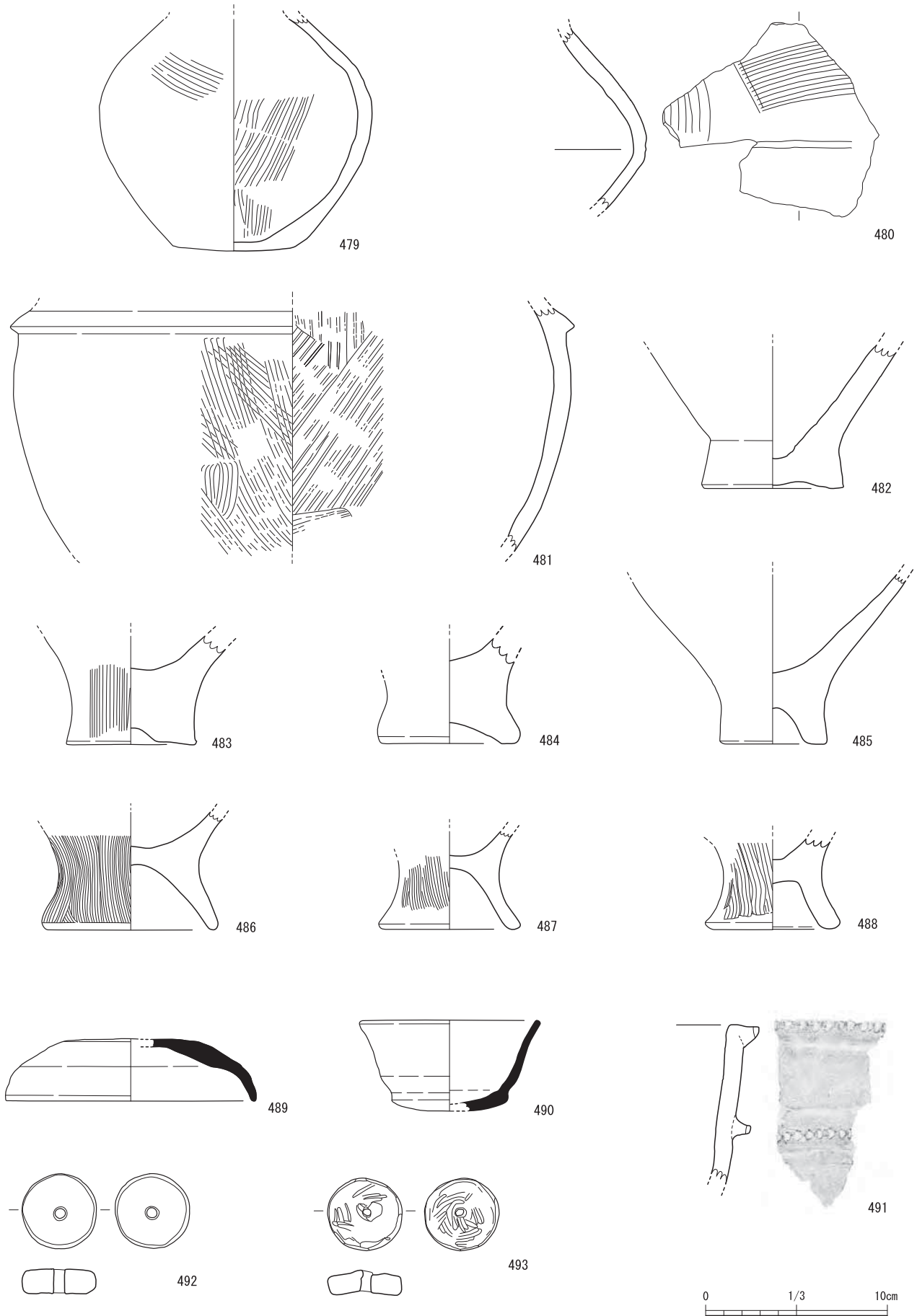
第79図 2区グリッド出土遺物実測図(2)



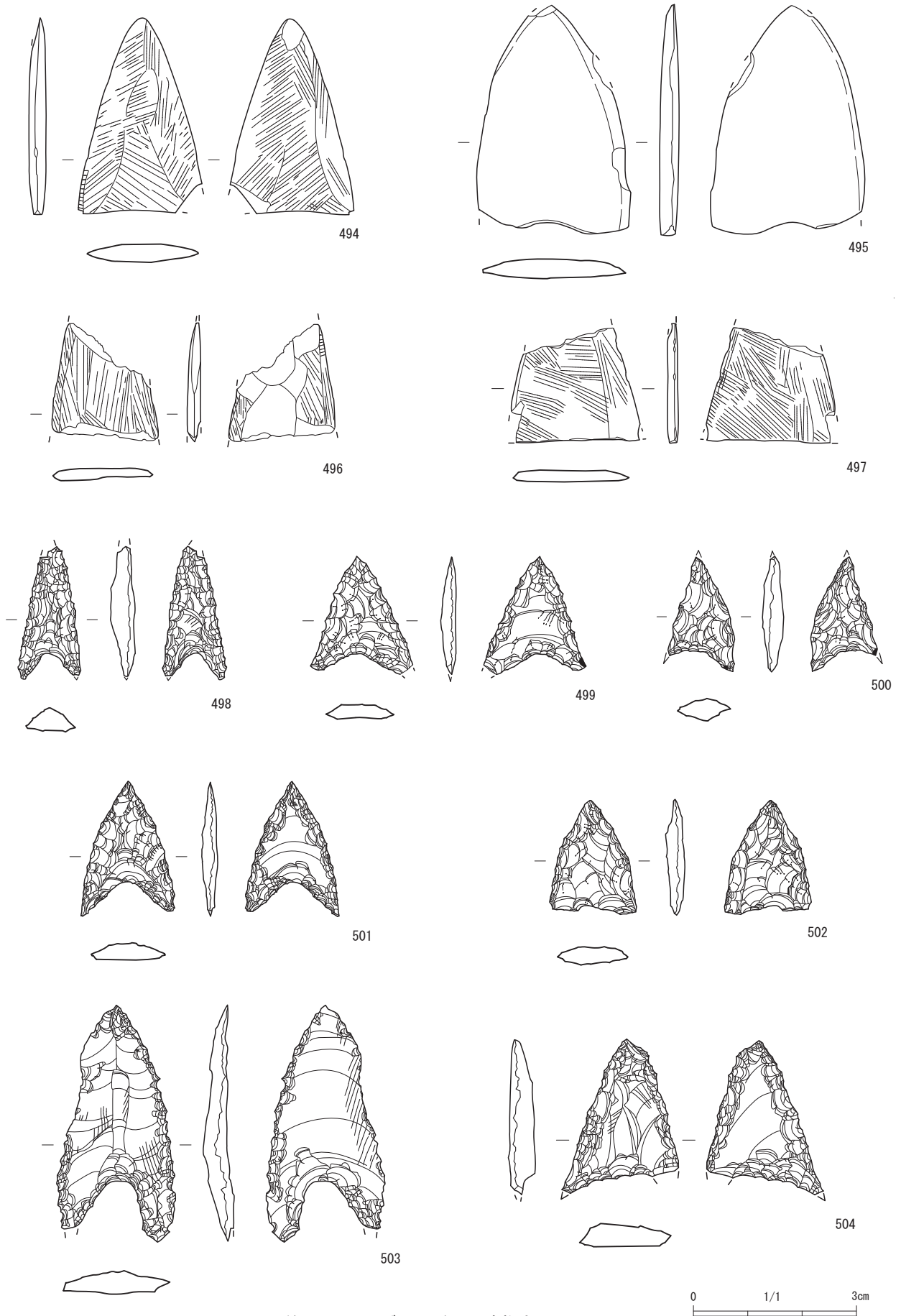
第80図 2区グリッド出土遺物実測図 (3)



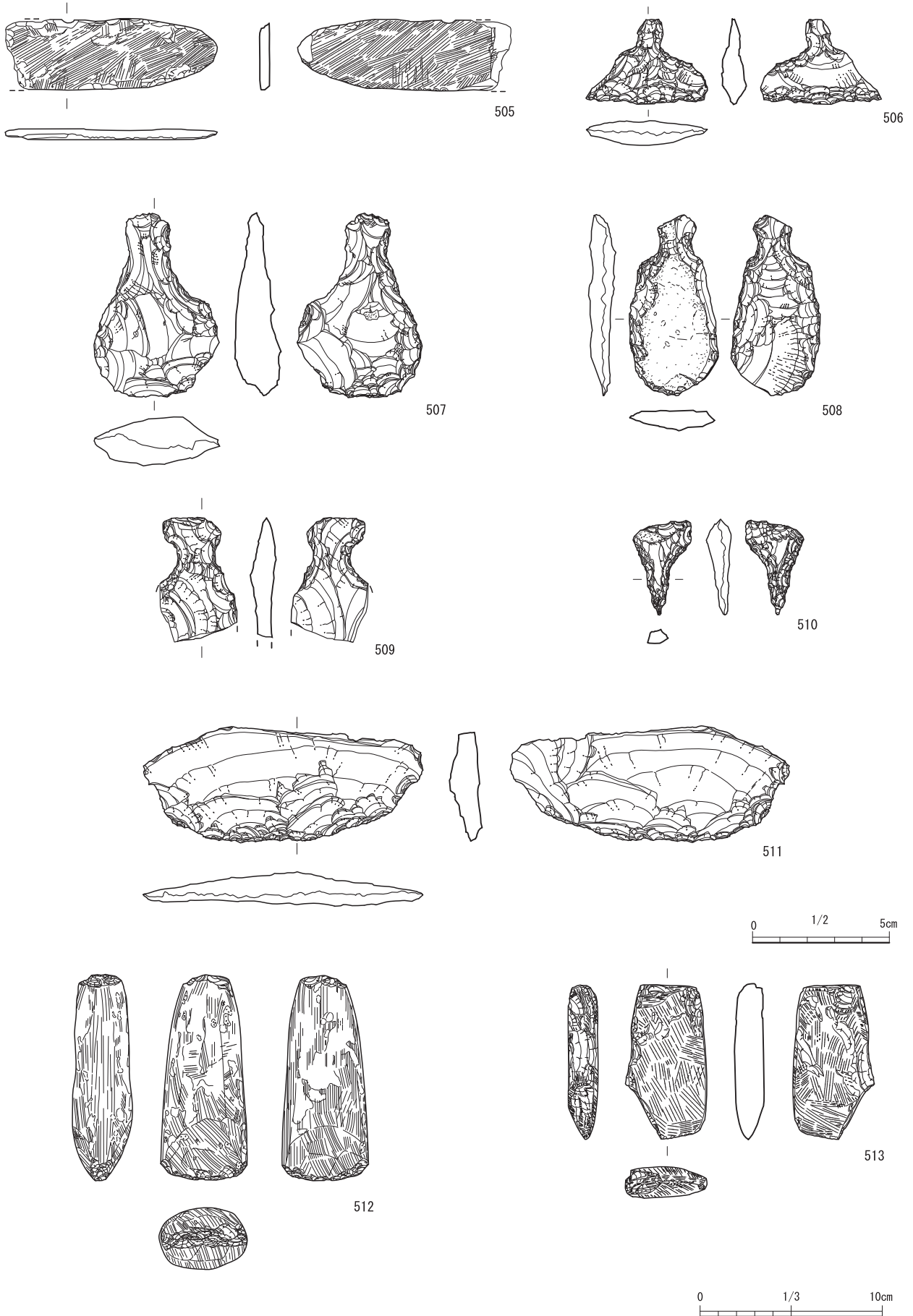
第81図 2区グリッド出土遺物実測図 (4)



第82図 2区グリッド出土遺物実測図 (5)

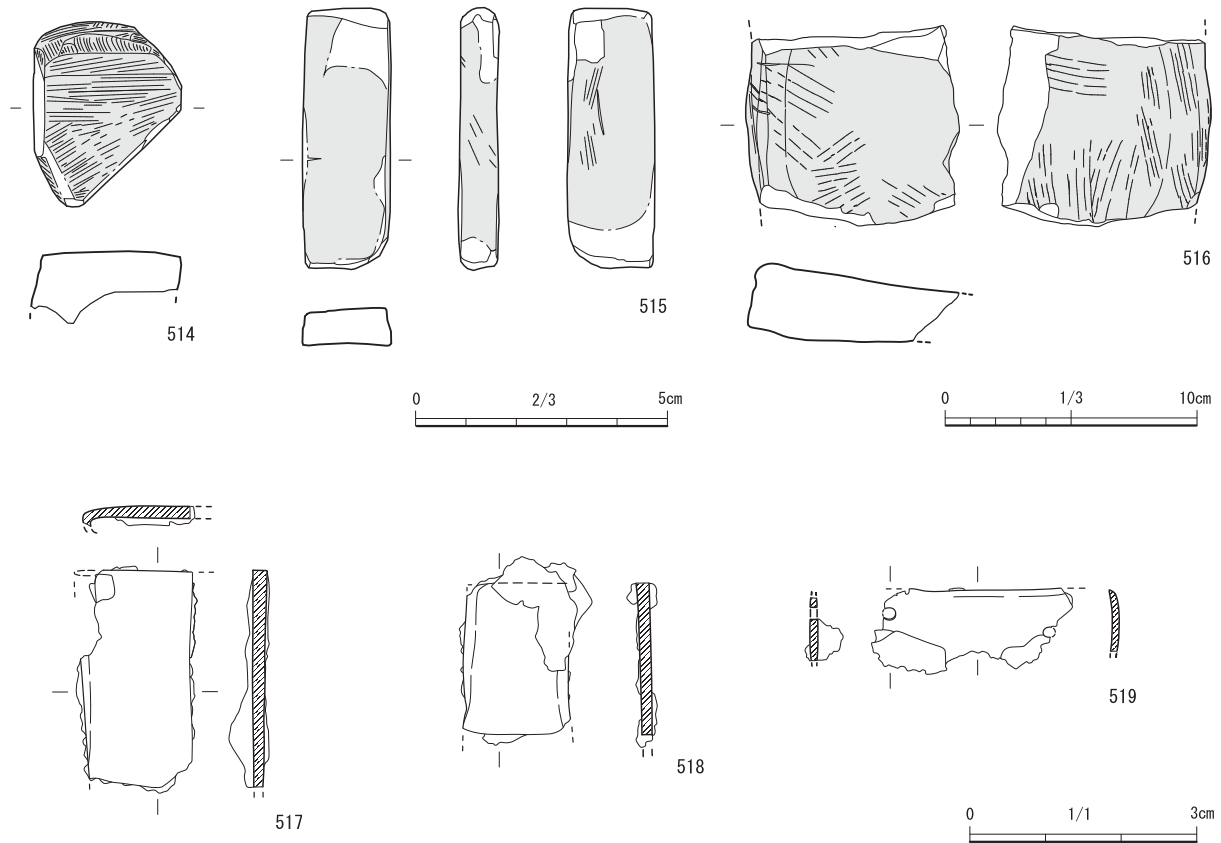


第83図 2区グリッド出土遺物実測図 (6)



第84図 2区グリッド出土遺物実測図(7)





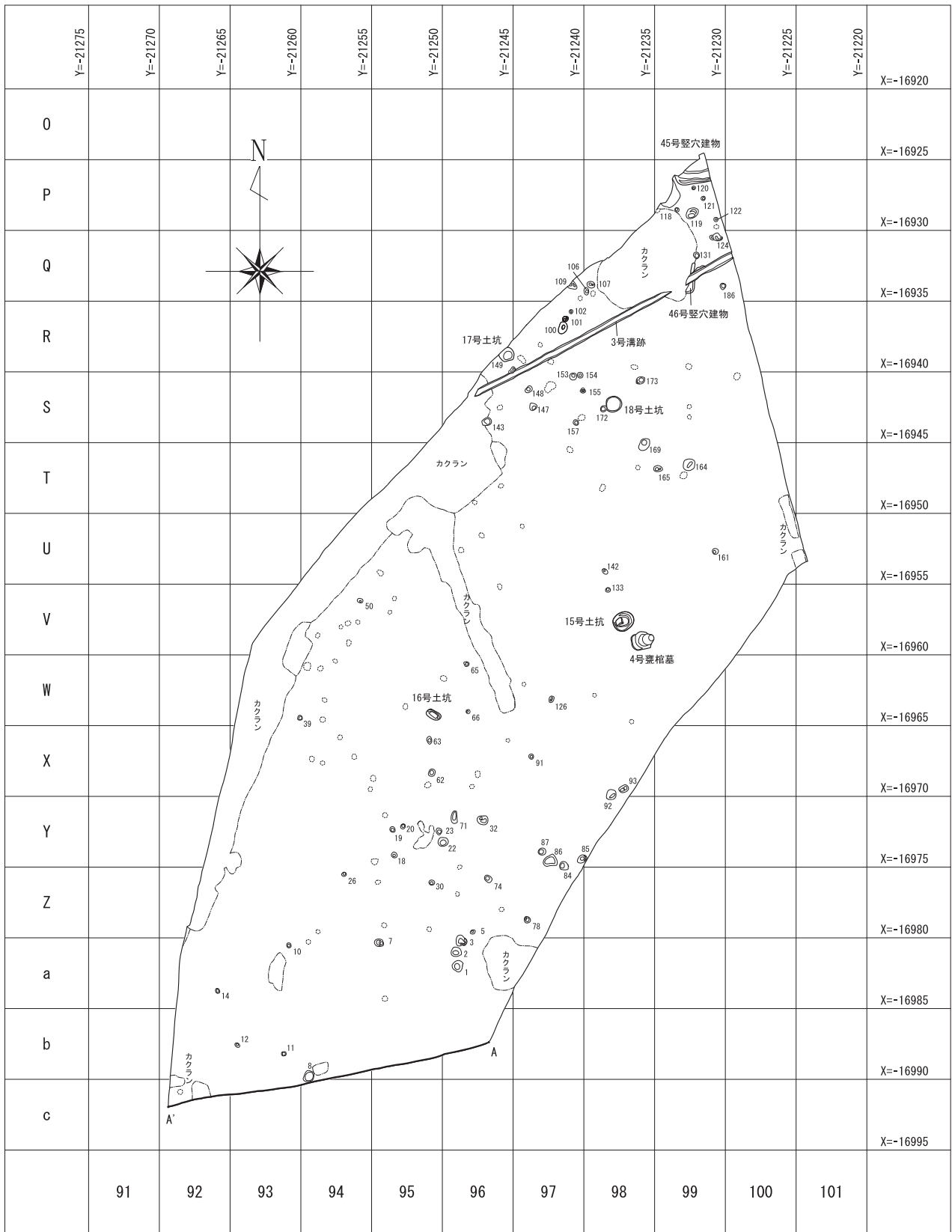
第85図 2区グリッド出土遺物実測図(8)

450~467・469・471は甕の口縁部または口縁~胴部である。吉原遺跡では450~452・454のように突帯や口縁部に刻み目を持つ土器が多く出土している。458は口縁の形や大きさから甕棺の口縁部の可能性がある。468・470・472~477は壺の口縁部または口縁~胴部、478は高坏の口縁部、479~481は壺の胴部である。472・473・476には暗文が施され、482~488は甕の脚部である。489・490は須恵器の坏蓋と坏である。491は瓦質土器の火鉢の一部で口縁部と突帯には刻み目がある。492・493は2点とも土製の紡錘車で丁寧に磨かれていた。

また、石器も多く出土しているが、一部のみの掲載である。494~497は粘板岩製の磨製石鎌で、498はチャート製、499・500・502は安山岩製、501・503・504は黒曜石製の打製石鎌である。505は粘板岩製の石包丁で半分ほど残存する。506~509はいずれも安山岩製の石匙で509以外は完形である。510のような黒曜石製の石錐も出土している。511は安山岩製の打製石鎌、512は蛇紋岩製、513は頁岩製の磨製石斧である。514・515は頁岩製と砂岩製の砥石だが、大きさと形状より携帯用ではないかと思われる。516は砂岩製の砥石である。

鉄器は、3点出土しているが、種別は明確には言い難い。517は板状鉄斧の基部、518も鉄斧の基部の可能性ある。519は穿孔が2ヶ所あるが詳細は不明である。

その他に、縄文土器片、器種不明の鉄製品、打製石鎌、砥石、石匙、粘土塊等を写真図版のみで掲載している。



第86図 吉原遺跡3区遺構配置図 (S=1/400)

第5節 3区の調査成果 (第86図、図版16)

3区は、調査区全体の一番南側にある調査区である。総面積は約1553㎡で南北に長い形になる。調査区の北側は多くをカクランで壊されている。確認できた遺構数は今回の3調査区の中で一番少なく、甕棺墓1基、竪穴建物2軒、土坑4基、溝1条であった。これらの遺構は調査区の東側に偏り、特に北東側に多くみられた。

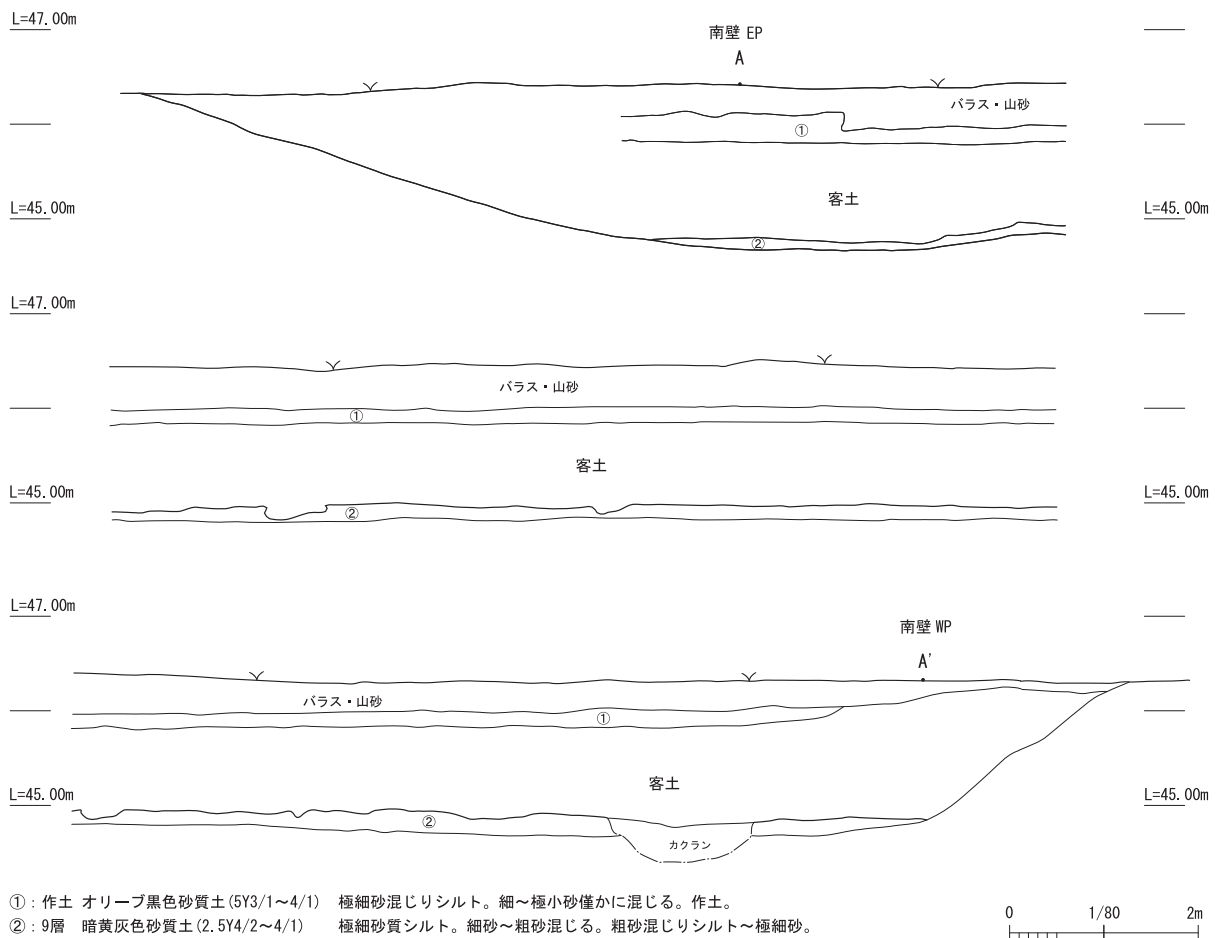
本調査区の南壁土層断面図を第87図に記載している。

甕棺墓

4号甕棺墓【S6】(第88・89図、図版16・35)

V-98グリッドで確認された甕棺墓である。規模は長軸2.49m、短軸1.64m、深さ1.12mである。甕棺は、掘り方東側に斜めに埋納され、埋設方位はN-63°-Wで、埋納角度は43度である。この甕棺墓は上蓋が二重の3連になっていた。甕×鉢×甕の組み合わせで、上甕、中甕、下甕の口縁部の一部に目張りと思われる粘土が残っていた。

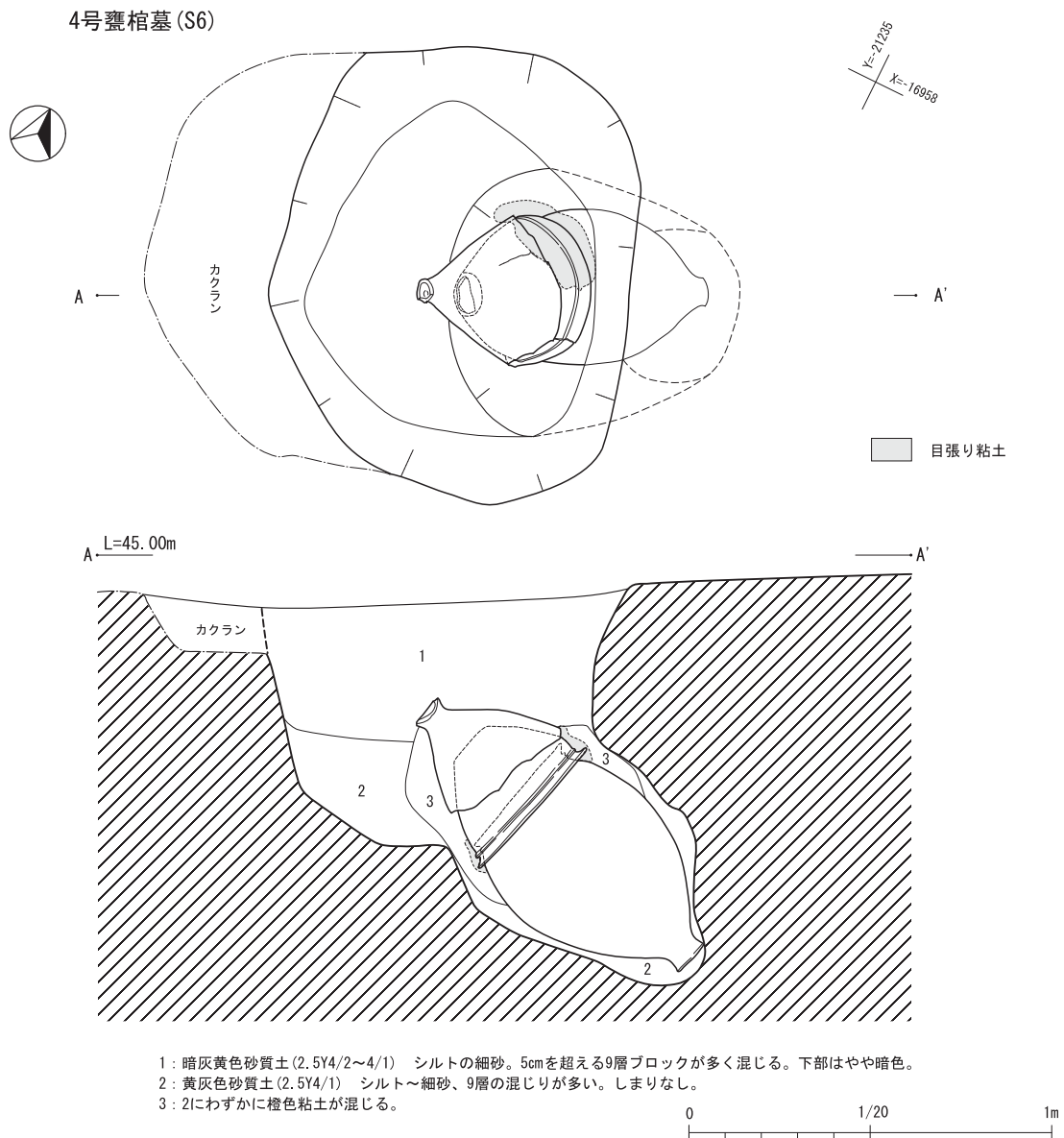
520は上甕で、口縁部が欠けていて全体形は不明であるが、脚部が522の下甕と類似していることから同時期の甕の可能性はある。内面と外面はハケ目が施されている。底径8.0cm、器高32.4cmを測る。521は中甕で、



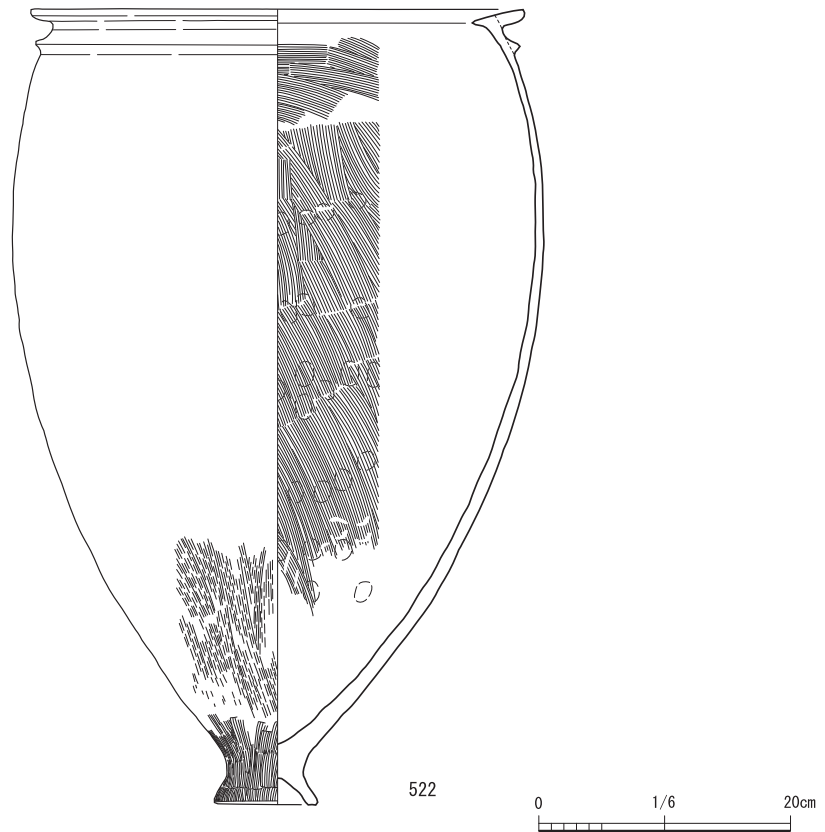
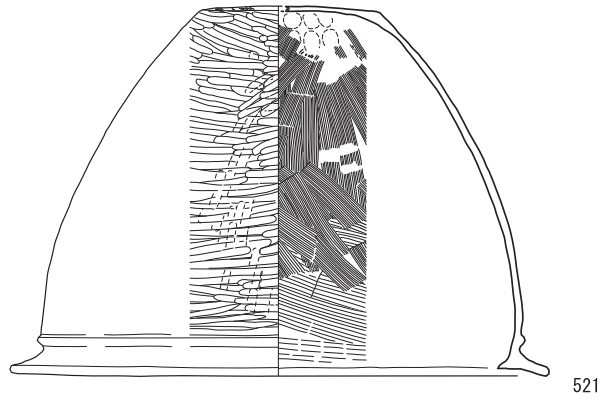
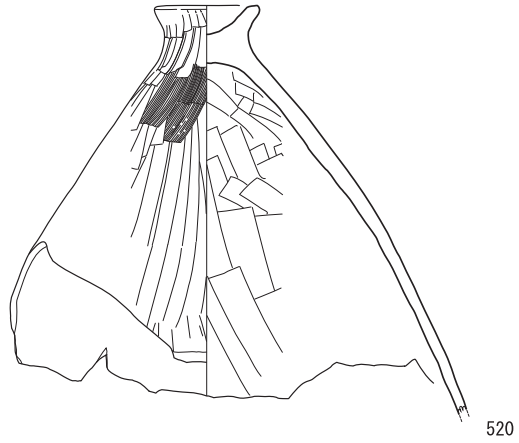
第87図 吉原3区南壁土層断面図

口径 42.2 cm、底径 13.8 cm、器高 28.2 cmである。底部には直径 10 cm程度の穿孔があった。中甕は非常に薄いつくりで、口縁は内外ともに発達し、内側へと傾斜する。口縁下には1条の突帯がめぐる。内面にはハケ目、外面にはミガキできれいに仕上げられている。522の下甕は、口径 38.9 cm、底径 8.0 cm、器高 63.1 cm、口縁部に一条の三角突帯をめぐらす。胴部最大径は 42.2 cmで胴部上部にはかる。下甕の口縁は内外ともに発達し、内側へと傾斜する。脚部は上げ底となり、内外ともにハケ目がきれいに施されている。以上の特徴からいずれも弥生時代中期後半の甕棺と考えられる。

中甕の欠片が下甕の中から数点出土しているので、人為的に開けられた穴ではなく、埋葬時に欠けたものと思われる。それゆえ上甕を重ねたのではないだろうか。下甕の中に土は堆積しておらず、掘削の時、上から落ちた土を取ると掘り上がる状態であった。しかし、その土をふるいにかけては歯と骨片数点が出土した(第VI章第3節「熊本市吉原遺跡1区・3区出土の弥生人骨」参照)。上下の目張り粘土は橙色で粘土混じりの土であった。さらにその上にも僅かに橙色を帯びた粘土の混じる土があった。掘り方埋土からは、凶化していないが弥生時代の甕片も数点出土している。



第88図 4号甕棺墓 (S6) 実測図



第89図 4号甕棺墓(S6)甕棺実測図

## 竪穴建物

### 45号竪穴建物【S2】(第90図、図版17・36)

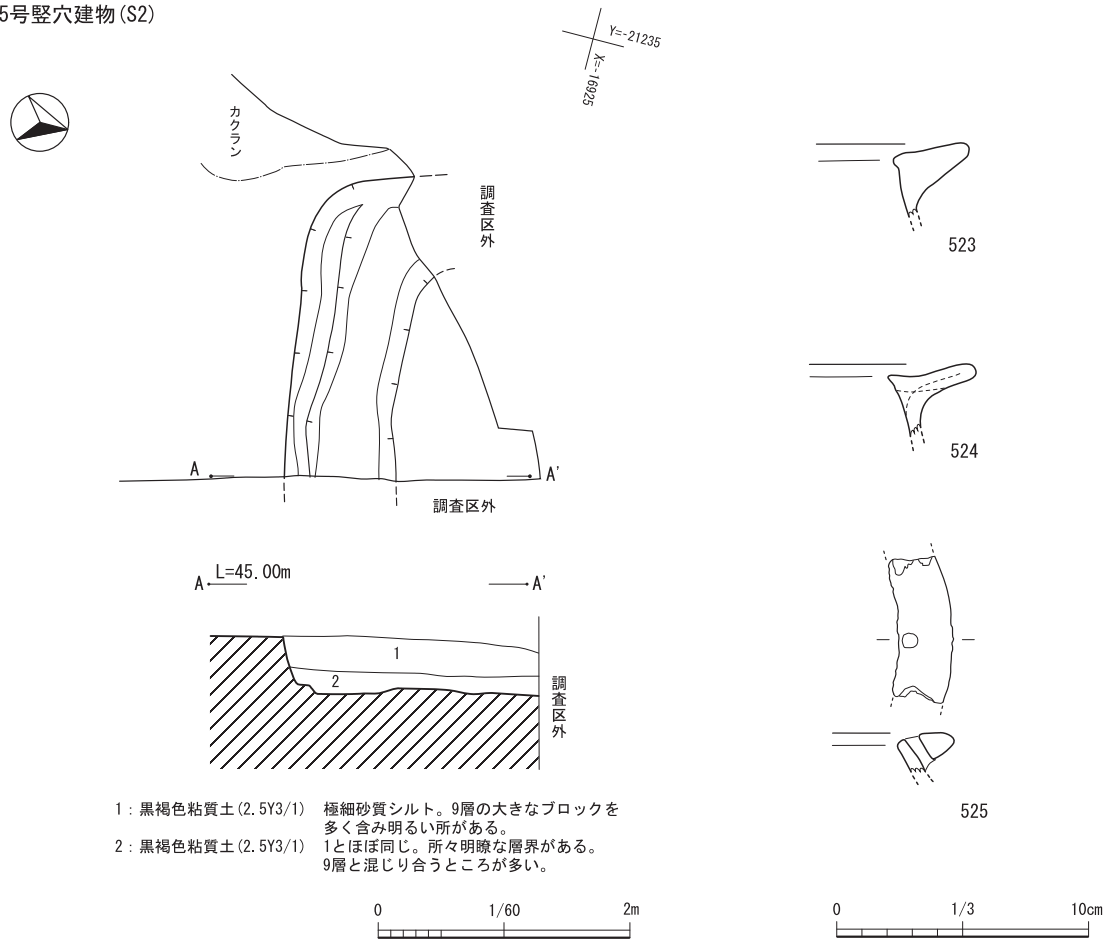
P-99グリッド、調査区の北端で確認された遺構で、竪穴建物のコーナーの1部を確認できた状態だと思われる。規模は、長軸 2.43m以上、短軸 2.05m以上、深さ 0.39mで、遺構の南壁に沿って浅い溝状の落ちがある。

出土遺物 523・524 は甕の口縁部、525 は穿孔のある壺の口縁部で、いずれも弥生時代のものと思われる。

### 46号竪穴建物【S7】(第91図)

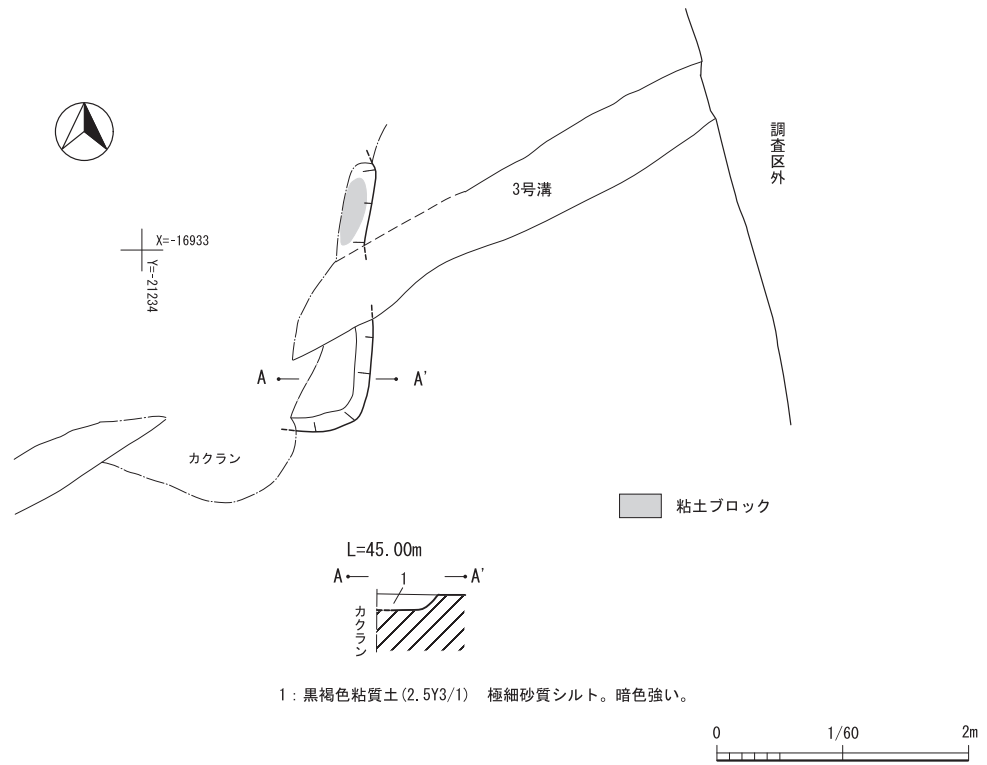
Q-99グリッドで確認された遺構で、竪穴建物のコーナーを1つだけ確認できた状態である。規模は長軸 1.14m以上、短軸 0.6m以上、深さ 1.37mでほとんどの部分をカクランと3号溝(S3)に切られているため残りは非常に悪い。しかし、遺構の規模や形状、北側にカマドの粘土ブロックが散乱していたため、古墳時代の竪穴建物の可能性がある。

### 45号竪穴建物(S2)



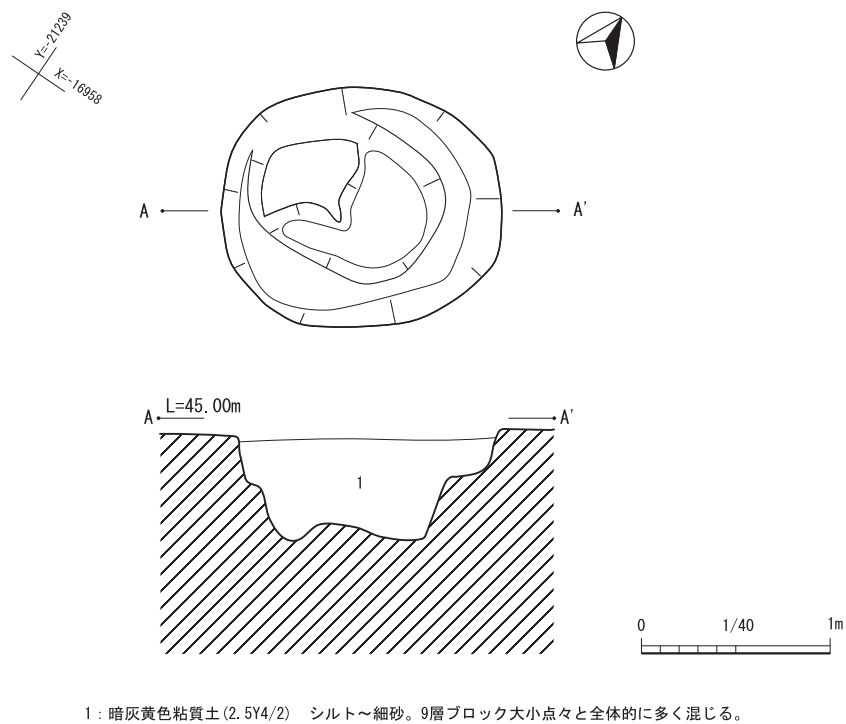
第90図 45号竪穴建物(S2)及び出土遺物実測図

46号竪穴建物(S7)



第91図 46号竪穴建物(S7)実測図

15号土坑(S5)



第92図 15号土坑(S5)実測図

## 土坑

### 15号土坑【S5】(第92図、図版16)

V-98グリッドで確認された土坑である。規模は長軸1.47m、短軸1.26m、深さ0.6mである。大きく2段の掘りこみがある。上段は楕円形で丸みのある掘り方、下の段は長方形で底は所々深い平坦な面が2つある。すぐ南東に4号甕棺(S6)があることや形状、方向などから土壙墓と思われたが根拠に乏しく土坑とした。

### 16号土坑【S1】(第93図、図版17)

W-95グリッドで確認された土坑である。規模は長軸1.06m、短軸0.58m、深さ0.33mで楕円形プランとなっていた。底部は平たい部分もあるものでこぼこした感もある。

出土遺物は図化していないが、弥生時代の甕片がわずかに出土している。

### 17号土坑【S4】(第93図、図版17・36)

R-96グリッドで確認された土坑である。規模は長軸1.01m、短軸0.92m、深さ0.55mで、調査区外北西方向にのびる。円形プランの土坑で播鉢状の掘りこみである。

出土遺物526は弥生時代中期の甕の口縁部である。

### 18号土坑【S8】(第93図、図版17・36)

S-98グリッドで確認された土坑である。規模は長軸0.58m、短軸0.56m、深さ0.16mできれいな円形プランである。

出土遺物527は胴部に突帯を持つ壺の一部で、弥生時代中期のものと思われる。

## 溝跡

### 3号溝【S3】(第94図)

R・S-96・97、Q・R-98～100グリッドで確認された溝状遺構である。調査区北壁から東壁へと抜けていく。この調査区で確認できた規模は長さ19.62m以上、幅0.51m、深さ0.41mである。46号堅穴建物を切る。方向や形状から1区の1号溝(S1)の続きと考えられる。

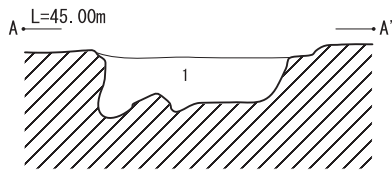
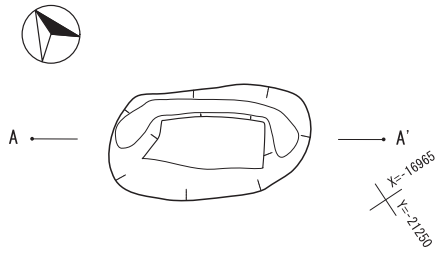
### グリッド出土遺物(第95図、図版36)

調査区全体からも1区・2区から比べると出土遺物は極めて少ない。528・529は縄文時代の鉢の口縁部である。他は弥生時代中期の土器で、530～536は甕の口縁部、537は鉢の口縁部、538は暗文のある壺の口縁部である。なかでも533は大きさ、形状から甕棺の口縁部ではないかと考えられる。539～543は甕の底部である。また石器の出土も1区・2区に比べると少ない。544・545の砂岩製の砥石である。

その他に、器種不明の鉄製品を写真図版のみで掲載している。

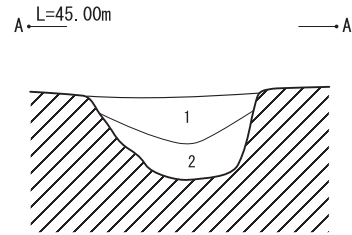
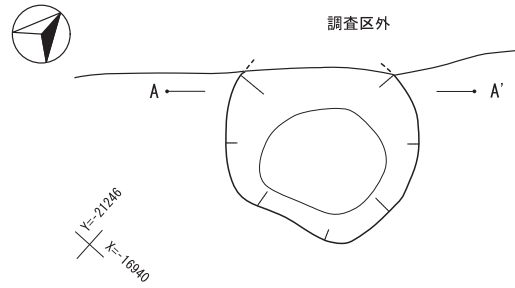


16号土坑 (S1)



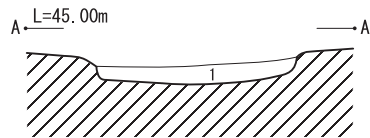
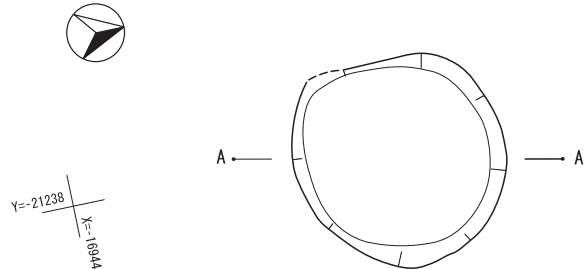
1: 黒褐色粘質土(2.5Y3/1~4/1) シルト~細砂。  
0.5~3cmの9層ブロックを多く含む。  
様相は上から下まで同じ。

17号土坑 (S4)

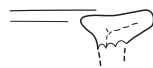
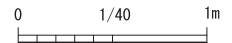


1: 黒褐色粘質土(2.5Y3/1) 極細砂質シルト。9層の大小の  
ブロック多く入る。暗色強い。  
2: 黒褐色粘質土(2.5Y3/1~4/1) 極細砂質シルト、細砂混じる。  
9層の大小のブロックが混じる。

18号土坑 (S8)



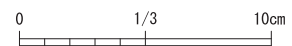
1: 黒褐色粘質土(2.5Y3/1) 極細砂質シルト、細砂混じる。  
9層ブロック少なく、混じりも少ない。



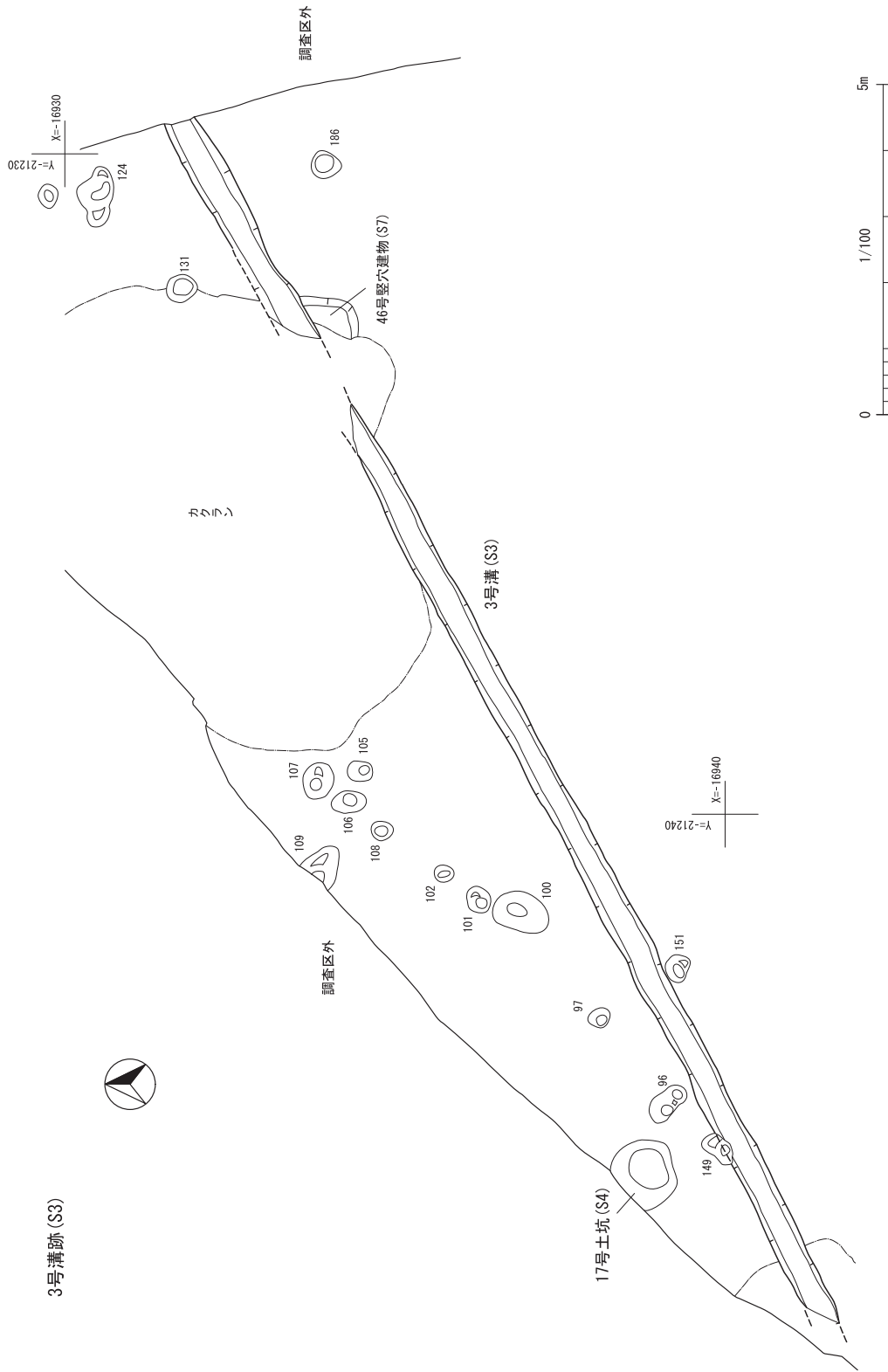
526 (17号)



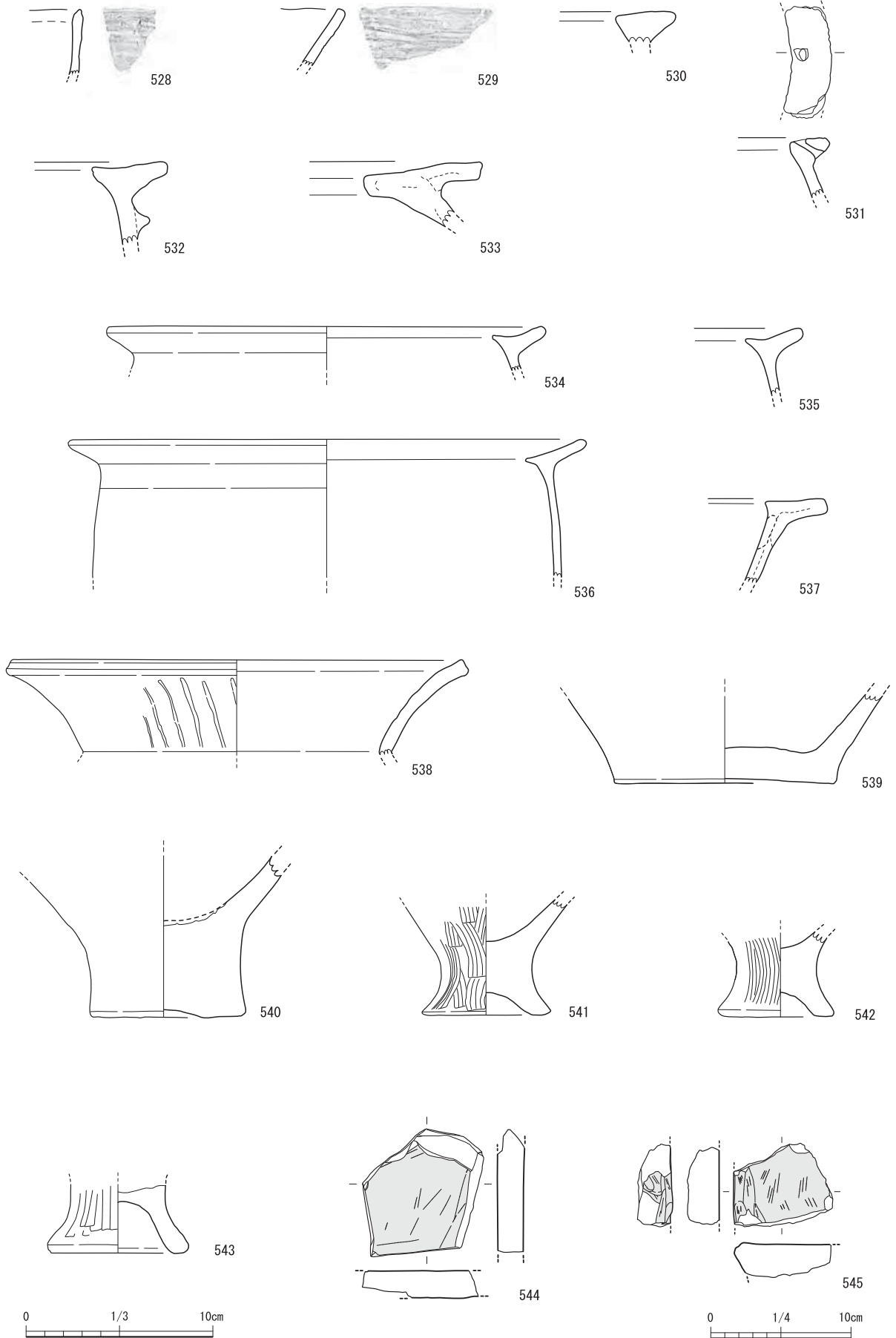
527 (18号)



第93図 16・17・18号土坑(S1・4・8)及び出土遺物実測図



第94図 3号溝 (S3) 実測図



第95図 グリッド出土遺物実測図

## 第6節 まとめ

吉原遺跡で確認した遺構は、弥生時代中期、古墳時代後期～終末期（6世紀後半～7世紀前半）及び近世以降の遺構であった。しかし、遺構の残存状況は決して良好とは言えず、辛うじて確認できたものが多かった。竪穴建物46軒（カマドを有するもの6軒、時期不明4軒）、甕棺墓4基、土壙墓2基、柵列2基、土坑18基、溝3条であった。すべての遺構の時期を断定することはできなかったが、弥生時代中期の遺構が大半を占め、次いで古墳時代後期～終末期、近世以降という順であった。また、出土した遺物の中には、縄文時代後期～晩期の土器や石器が多く含まれていた。ローリングを受けた形跡がないことから周辺に当該期の集落が存在していた可能性が高い。

ここでは、この遺跡の特徴を示す弥生時代中期と古墳時代後期～終末期（6世紀後半～7世紀前半）の遺構と遺物について、私見を述べて本報告のまとめとしたい。

### 1 遺構について

#### (1) 弥生時代

竪穴建物は、35軒を確認した。一辺3～5mの方形プランが多い。その中で柱穴、硬化面、炉穴を確認できたものはわずかであった。柱穴ははっきり確認できたものは少なかったが、2穴が5軒、4穴が4軒であった。その他は明確な配置ではなかった。硬化面は4軒で確認し、炉を確認できたのは2軒であった。ベッド状の高まりがある建物は1軒のみであった。竪穴建物同士の切り合いが激しい上に、カクランを受けているため確認が困難であった。全ての炉や硬化面が確認できなかった理由としては、遺構を確認した時点ですでに使用時の面ではなく掘り方の面を確認していたのだと思われる。また、竪穴建物の切り合いは、横に並んで切りあう場合と、縦に並んで切りあう場合とがあった。その際に、横の切り合いの場合には竪穴建物の大きさにあまり差は見られない。しかし、縦の切り合いの場合には差があり、下の竪穴建物は大きく、上の竪穴建物は小さい。建て替えられた竪穴建物の規模が小さくなっていく傾向が見られた。竪穴建物は、2区で多くが確認され、1区、3区とその数が減る。現在の地表面の標高、9層の大まかな標高からみても3区から2区に向かって高くなっている。川岸のやや高い位置に竪穴建物群があったと推測される。今回の白川に面した調査区（特に2区）の南側にはまだ竪穴建物が眠っているかもしれない。また、建物の切り合いが多いのは、建物の埋土の堆積状況から推測すると洪水を頻繁に受けた後に何度も作り直していたからと考えられる。

甕棺墓は4基確認できた。掘り方は二段掘りで、まず方形に掘削し、次に斜めに甕棺がちょうど入る大きさで掘り込まれ埋納されていた。3号甕棺墓をのぞく3基の甕棺墓には、保存状態はあまり良好なものではなかったが、幼児骨や歯が残っていた（第VI章第3節「熊本市吉原遺跡1区・3区出土の弥生人骨」を参照）。副葬品は全くなかった。4基の甕棺墓ともに小児用甕棺と思われる。どの甕棺もハケ目やミガキが施されている。口縁部や底部等の特徴より在地系の甕棺で、時期は中期後半と考えられる。竪穴建物群の時期とほぼ同じである。上下の組み合わせは、1号甕棺墓は甕×甕、2号・3号甕棺墓は鉢×甕である。注目すべきは4号甕棺墓で、甕×鉢×甕の3連になっていた。中甕の鉢の底部には穴が開いていた。この穴は故意に開けられたものではなく偶発的にあき、その穴を急遽埋めるために使用中に破損したと思われる甕の胴部から脚部をかぶせ3連になったと考える。現に中甕の鉢の底部は非常に薄く、よくここまで残ることができたと思うぐらい華奢である。

3連の甕棺墓については、九州内での出土例は多くは無いが、福岡県、長崎県、佐賀県で確認されている。上下の甕の間に欠けた甕を意図的に挟むような形態や4号甕棺墓と同じように偶発的に破損してしまい急遽3連とした形態が報告されている。小児用とは限らず、成人用の3連甕棺墓も存在する。

明確な居住域と墓域の区別がなく、居住域の中に墓域が存在する形態である。甕棺墓の確認された位置は、3号甕棺墓は竪穴建物との切り合いが確認できるぐらい竪穴建物群の中に位置する。しかし、1・2号、4号甕棺墓については竪穴建物からやや離れた位置で確認している。さらに1・2号、4号甕棺墓の周りには土壙墓と考えられる遺構（可能性も含む）が伴っている。1・2号甕棺墓に対して1・2号土壙墓、4号甕棺墓に対しては15号土坑である。3号甕棺墓についても南東側に10号土坑があるが、規模がやや小さく、3号甕棺墓と切りあう。そのため、他の土壙墓及び土坑とはやや様相が異なるかと思われる。

1・2号甕棺墓と1号土壙墓、2号土壙墓は、それぞれの切り合いもなく配置され（第6図を参照）、少人数で墓域が形成されている。このことから4人は短期間のうちに埋葬されたと考えることができる。また、土壙墓の大きさから土壙墓には成人が埋葬されていたと考えるならば、なんらかの原因で短期間の間に亡くなった4人の家族の墓である可能性も考えられなくもない。ここに白川中流域における弥生時代の埋葬の一つの特性があるのかもしれない。

今回、確認された弥生時代の遺構群は、明確な居住域と墓域の区別がなく、居住域の墓域が存在する形態である。墓域は集団墓ではなく、少人数の単位での埋葬形態であることが一つの特性である。この様な調査成果の積み重ねにより、白川流域に点在する同時期の遺跡を解明する一つの手がかりになりえると思う。

## （2）古墳時代後期～終末期（6世紀後半～7世紀前半）

古墳時代の可能性も含めて7軒の竪穴建物を確認した。そのうち6軒は造り付けのカマドで、残りは全体的に良い。時期は、出土遺物から古墳時代後期～終末期と判断した。白川右岸側にほぼ同時代の弓削小坂横穴群がある。さらに下流には左岸の新南部遺跡にほぼ同時代の遺構があり、右岸にはつつじヶ丘横穴群がある。この分布から白川右岸側にほぼ同時代の横穴が点在しており、左岸側を中心に集落が形成されている。白川を介して、居住域と墓域が対岸に形成されていることがわかる。この分布は当時の白川流域における居住域と墓域の営みの特性を示す可能性が考えられる。

## 2 出土遺物について

### （1）弥生時代

#### （ア）土器

出土した土器は弥生時代中期初頭～後半期の時期で把握できると判断した。甕の口縁部の形態を中心に分類してみるといくつかのタイプが見られる。①口縁断面が三角形で口唇部に刻み目が入るもの、また胴部上半部に刻み目の突帯を持つもの、②外側に短く部厚い形態のもの、③内側へ突起・外面に外反し、中くぼみがあるものである。時期は①は中期初頭から前葉、②は中期前葉から中葉頃、③は内側への突起が少なく、中くぼみが顕著でないものを中期中葉、内側へ突起・外面の外反や中くぼみが顕著なものを後葉と考えたい。また、甕の脚部も多く出土している。脚部は、平らなもの、ややくぼむもの、上げ底となるものが見られた。

壺については、2種類の形がみられた。一つはやや内側にわずかに伸び、外側へは大きく伸びる。さらに内向するタイプで、いわゆる鋤形口縁のものである。もうひとつは口縁部がくの字型に開くタイプで口縁部が短い、いわゆる朝顔形口縁のものである。頸部より上方に暗文を施したものが多くみられた。壺についても時期は中期後半のものが中心であった。

また、わずかではあるが、前期に遡る壺の破片と考えられる遺物も出土しており、周辺に前期の遺跡が存在した可能性も考えられる。

(イ) 石器

出土した石器は、磨製石鏃、石包丁、大陸系磨製石器（挟入柱状片刃石斧）、打製石鏃、石斧、砥石等であった。朝鮮半島に起源を持つ大陸系磨製石器や石包丁などは、稲作に関連した石器群である。一方、縄文時代からの伝統である打製石鏃も弥生時代中期まで残存することがわかる。砥石は、石器や鉄器の研磨のために使用した物であろう。

(ロ) 鉄器

出土数は少ないが、袋状鉄斧、鉄鏃が出土している。この遺跡でも確実に鉄器が使用された証拠である。袋状鉄斧は木材などの加工具、鉄鏃は武器や狩猟具としての機能が考えられる。

(2) 古墳時代

(7) 土師器・須恵器

土師器は口縁部がくの字型に開く甕の出土が多く、胴部内面にケズリがみられ器壁を薄くしたものである。

出土点数は少ないが須恵器も出土している。凶化した遺物（86・87・378）は、坏身である。いずれも形態から後期～終末期（6世紀後半～7世紀前半）の範疇で把握が可能と考えられる。

表3 甕棺墓及び甕棺一覧表

挿図番号	調査区	遺構名	規模	埋設方位	埋納角度	挿図番号	報番	器形	法量(cm)				
									口径	最大径	底径	高さ	
7	1区	1号甕棺墓 S15	小型	N-63° -W	49°	8	1	甕	上甕	29.2	27.8	7.0	43.7
							2	甕	下甕	30.2	41.4	8.0	45.7
9	1区	2号甕棺墓 S16	小型	N-85° -E	32°	10	3	鉢	上甕	36.9	-	12.9	18.6
							4	甕	下甕	34.5	60.1	6.7	83.5
41	2区	3号甕棺墓 S13	小型	N-75° -E	34°	42	175	鉢	上甕	37	-	11.7	28.6
							176	甕	下甕	33.9	52.3	8.3	75.4
88	3区	4号甕棺墓 S6	小型	N-63° -W	43°	89	520	甕	上甕	-	-	8.0	32.4
							521	鉢	中甕	42.2	-	13.8	28.2
							522	甕	下甕	38.9	42.2	8.0	63.1

《引用・参考文献》

新熊本市史編纂委員会 1993 『新熊本市史 第1巻 自然・原始・古代』 弥生時代  
 熊本県教育委員会 2001 『梅ノ木遺跡Ⅱ上・下』 熊本県文化財調査報告書第199集  
 橋口達也 2005 『甕棺と弥生時代年代論』 雄山閣  
 西健一郎 1982 「熊本県における弥生中期甕棺編年の予察」 『森貞次郎博士古希記念古文化論集』  
 森貞次郎博士古希記念論文集刊行会  
 西健一郎 1983 「黒髪式土器の基礎的研究」 『古文化談叢第12集別刷 九州古文化研究会』  
 武松純一・石川日出志 2002 『考古資料大観』 第1巻弥生・古墳時代土器Ⅰ 小学館  
 小郡市教育委員会 1983 『津古・東宮原遺跡』 小郡市文化財調査報告書第18集  
 鳥栖市教育委員会 1983 『安永田遺跡』 鳥栖市文化財調査報告書第16集  
 鳥栖市教育委員会 2003 『フケ遺跡・神山遺跡・内畑遺跡』 鳥栖市文化財調査報告書第70集  
 長崎県教育委員会 2002 『原の辻遺跡』 原の辻遺跡調査事務所調査報告書第25集  
 熊本市教育委員会 昭和56・57年度 『吉原遺跡発掘調査報告書』  
 熊本市教育委員会 1971 『弓削小坂横穴群』  
 熊本市教育委員会 2002 『つつじヶ丘横穴群』  
 熊本県教育委員会 2015 『新南部遺跡3』 熊本県文化財調査報告書第311集

表4 吉原遺跡1区 出土土器観察表(1)

挿図 番号	報番	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)			色 調		調 整		焼成	胎土	備考
		報告	調査時						口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
11	5	2号土壙墓	S6	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	1.5+	-	橙(7.5YR/6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナ	ナ	良	石英、輝石、砂粒	
11	6	2号土壙墓	S6	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	(24.0)	2.8+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナ	ナ	良	角閃石、砂粒	
12	7	1号竪穴建物	S14	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.2+	-	明黄褐(10YR6/6)	明黄褐(10YR6/6)	ナ	ナ	良	長石、雲母、砂粒	
12	8	1号竪穴建物	S14	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.3+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナ	ナ	良	雲母、砂粒	
12	9	1号竪穴建物	S14	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.4+	-	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	ナ	ナ	良	石英、角閃石、雲母	
12	10	1号竪穴建物	S14	埋2	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.6+	-	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナ	ナ	良	長石、雲母	
12	11	1号竪穴建物	S14	埋2	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	1.9+	-	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	ナ	ナ	良	雲母、砂粒	スス付着
12	12	1号竪穴建物	S14	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.0+	-	灰黄褐(10YR5/2)	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナ	ナ	良	石英、長石、雲母	
12	13	1号竪穴建物	S14	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.4+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナ	ナ	良	白色砂粒、黑色砂粒、雲母	
12	14	1号竪穴建物	S14	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.0+	-	にぶい橙(7.5YR7/3)	にぶい褐(7.5YR5/3)	ナ	ナ	良	黑色砂粒、石英、角閃石	
12	15	1号竪穴建物	S14	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.2+	-	橙(5YR7/6)	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナ	ナ	良	黑色粒、石英、雲母	東西ト東
12	16	1号竪穴建物	S14	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.1+	-	橙(7.5YR7/6)	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナ	ナ	良	長石、角閃石、白色砂粒	
12	17	1号竪穴建物	S14	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.5+	-	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	ナ	ナ	良	石英、角閃石、白色粒、褐色粒	
12	18	1号竪穴建物	S14	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.5+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナ	ナ	良	石英、長石、角閃石、褐色粒	
12	19	1号竪穴建物	S14	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.8+	-	明黄褐(10YR7/6)	橙(7.5YR6/6)	ナ	ナ	良	黑色粒、角閃石	
12	20	1号竪穴建物	S14	埋土	No.1.8	弥生土器	甕	口縁～胴部	22.2	15.6+	-	にぶい黄褐(10YR5/3)	明赤褐(5YR5/6)	ナ	ナ	良	長石、砂粒	
13	21	1号竪穴建物	S14	埋土	No.1	弥生土器	甕	口縁～胴部	(25.2)	10.6+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	ナ	ナ、ハケ	良	角閃石	
13	22	1号竪穴建物	S14	埋1	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	4.8+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナ	ナ	良	角閃石、輝石	
13	23	1号竪穴建物	S14	埋土	-	弥生土器	甕	脚部	-	6.2+	7.2	にぶい黄橙(10YR7/4)	灰黄褐(10YR5/2)	ナ	ナ	良好	角閃石、黑色粒、長石、3mm大の石	
15	29	2号竪穴建物	S22	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.0+	-	浅黄橙(10YR8/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	ナ	ナ	良好	長石、黑色粒、雲母	
15	30	2号竪穴建物	S22	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	6.8+	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナ	ナ	良	雲母、角閃石	
15	31	2号竪穴建物	S22	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.3+	-	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	ナ	ナ	良	石英、白色粒、金雲母、角閃石	
15	32	2号竪穴建物	S22 トナフ	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.5+	-	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄(2.5Y8/3)	ナ	ナ	良好	長石、雲母	甕柄か？
15	33	2号竪穴建物	S22	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.6+	-	灰黄褐(10YR5/2)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナ	ナ	良	雲母、角閃石	
15	34	2号竪穴建物	S22	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.8+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナ	ナ	良	黑色砂粒、白色砂粒、石英、雲母	
15	35	2号竪穴建物	S22	埋1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.8+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	ナ	ナ	良	石英、白色粒、金雲母、粒子	
15	37	3号竪穴建物	S23	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.7+	-	灰黄褐(10YR5/2)	灰黄褐(10YR6/2)	ナ	ナ	良	石英、白色粒、金雲母、黑色粒	

表5 吉原遺跡1区 出土土器観察表(2)

挿図 番号	報告 番号	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)			色 調		調 整		焼成	胎土	備考
		報告	調査時						口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
15	38	3号竪穴建物	S23	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.7+	-	浅黄(2.5Y7/3)	ナナ、刻目突帯	ナナ	良好	赤褐色粒、輝石、角閃石、雲母		
16	40	4号竪穴建物	S20	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	5.1+	-	明黄褐(10YR7/6)	ナナ	ナナ、ハナメ	良	褐灰色粒、角閃石、石英		
16	41	5号竪穴建物	S24	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	1.7+	-	浅黄橙(10YR8/4)	ナナ、刻目突帯	ナナ	良	白色粒、黑色粒、茶色粒	口縁一部にスス付着	
17	42	6号竪穴建物	S25 トシナ	埋土	-	弥生土器	甕	口縁～胴部	(18.8)	10.0+	-	灰(5Y6/1)	ナナ	ナナ	良好	3mm大の石英		
17	43	6号竪穴建物	S25	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.2+	-	明赤褐(2.5YR5/6)	ナナ、突帯	ナナ	良	長石、石英、雲母		
17	44	6号竪穴建物	S25	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.6+	-	明黄褐(10YR7/6)	ナナ	ナナ	良	石英、長石、白・黒色砂粒		
18	47	7号竪穴建物	S28	埋土	-	弥生土器	鉢	口縁一部	-	5.0+	-	橙(7.5YR7/6)	ナナ、突帯	ナナ	良	灰色粒、茶色粒、石英、雲母、角閃石		
20	48	8号竪穴建物	S8	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.7+	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナナ	ナナ	良	黒色粒、砂粒、角閃石		
20	49	8号竪穴建物	S8	埋土	No.2	土師器	甕	口縁一部	-	4.2+	-	にぶい橙(7.5YR7/4)	ナナ	ナナ、ナズリ	良	白色粒、黒色粒		
20	50	8号竪穴建物	S8	上層	-	土師器	甕	口縁3/4	17.7	12.9+	-	橙(7.5YR7/6)	ナナ、ハナメ	ナナ、ナズリ	良	白色粒、褐色粒		
20	51	8号竪穴建物	S8	埋土	-	土師器	甕	口縁～胴部	(19.6)	11.8+	-	明黄褐(10YR6/6)	ナナ、ハナメ	ナナ、ナズリ	良	褐色粒、黒色粒、1cm大の石		
20	52	8号竪穴建物	S8	埋土	No.3	土師器	甕	口縁～胴部	(19.0)	8.2+	-	橙(7.5YR6/5)	ナナ、ハナメ、圧痕	ナナ、ナズリ	良	白・黒色砂粒を含む		
20	53	8号竪穴建物	S8	埋土	-	土師器	甕	口縁1/3	(19.8)	9.1+	-	にぶい橙(7.5YR6/6)	ナナ、ハナメ	ナナ、ナズリ	良好	赤褐色粒		
20	54	8号竪穴建物	S8	埋土	-	土師器	坏	ほぼ完形	13.6	5.8	5.0	浅黄(2.5Y7/4)	ナナ、回転ナナ、ミカキ	ナナ	良	赤褐色粒、褐色粒、白色粒、角閃石		
20	55	8号竪穴建物	S8	上層	-	弥生土器	鉢	底部1/4	-	2.6+	(7.8)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナナ、ハナメ、ナナ	ナナ	良	黒色砂粒、石英、雲母、角閃石		
20	56	8号竪穴建物	S8	埋土	No.4	土師器	坏	口縁～底部	-	3.2+	-	橙(7.5YR6/6)	ナナ、回転ナナ、ハナメ	ナナ、回転ナナ	良	石英、白色粒、褐色粒		
20	57	8号竪穴建物	S8 トシナ	上層	-	須恵器	甕	口縁～胴部	(12.4)	10.4+	-	浅黄(2.5Y7/2)	回転ナナ、格子状	回転ナナ、青海	良好	砂粒		
21	58	9号竪穴建物	S9	下層	-	弥生土器	壺	底部一部	-	7.0+	(12.0)	褐灰(10YR5/4)	ミカキ、ナナ	不明	良好	白色粒、長石、雲母		
21	59	9号竪穴建物	S9	埋土	-	土師器	鉢	口縁～底部	(27.9)	12.4	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナナ、ハナメ	ナナ、ナズリ	良	長石、石英、角閃石		
21	60	9号竪穴建物	S9	埋土	No.6	土師器	高坏	4/5	13.9	11.9	8.6	にぶい黄橙(10YR6/4)	ナナ、ナズリ後ナナ	ナナ、ミカキ、ナズリ	良	白色粒、褐色粒	赤色顔料付着	
21	61	9号竪穴建物	S9	埋土	-	土師器	甕	口縁～胴部	-	12.5+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナナ、ハナメ	ナナ、ハナメ	良	白色砂粒		
21	62	9号竪穴建物	S9	埋土	-	土師器	甕	口縁～胴部	(15.6)	8.0+	-	にぶい褐(7.5YR5/4)	ナナ、ハナメ	ナナ、ナズリ	良	白色粒、砂粒、5mm大の石		
21	63	9号竪穴建物	S9	上層	No.6	土師器	甕	3/4	(12.0)	13.7	-	にぶい黄橙(7.5YR7/4)	ナナ、ハナメ	ナナ、ハナメ	良好	1～3mm大の長石	胴径:14.0cm	
21	64	10号竪穴建物	S10	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.2+	-	浅黄(2.5Y7/3)	ナナ	ナナ	良好	砂粒、長石、雲母		
21	65	10号竪穴建物	S10	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.4+	-	暗灰黄(2.5Y7/3)	ナナ	ナナ	良好	角閃石、雲母		
21	66	10号竪穴建物	S10	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.3+	-	にぶい赤褐(5YR5/4)	ナナ	ナナ	良	黒色粒、赤色粒、角閃石、砂粒		



表6 吉原遺跡1区 出土土器観察表(3)

挿図 番号	報番	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)			色 調		調 整		焼成	胎土	備考
		報告	調査時						口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
23	67	11号竪穴建物	S13	埋2	No.21	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.2+	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナデ	ナデ	良好	長石、雲母		
23	68	11号竪穴建物	S13	埋1	-	土師器	甕	口縁一部	-	5.1+	-	明赤褐(5YR5/6)	ハケム、ナデ	ナデ	良	長石、砂粒		
23	69	11号竪穴建物	S13	埋1	-	土師器	甕	口縁一部	-	7.2+	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナデ、ハケム	ナデ	良好	砂粒		
23	70	11号竪穴建物	S13	埋土	-	土師器	高坏	口縁一部	-	3.9+	-	明黄褐(10YR7/6)	ナデ、ケスリ	ナデ	良	白色砂粒、黑色砂粒		
23	71	11号竪穴建物	S13	埋土	-	土師器	甕	口縁一部	-	2.8+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナデ	ナデ	良	白色砂粒、黑色砂粒		
23	72	11号竪穴建物	S13	埋土	No.8	土師器	甕	口縁～胴部	18.9	8.9+	-	橙(7.5YR6/6)	ハケム、ナデ	ナデ	良好	白色粒、赤褐色粒		
23	73	11号竪穴建物	S13	埋土	-	土師器	甕	口縁一部	-	6.7+	-	橙(5YR6/6)	ナデ、ハケム	ナデ	良	黒、白色砂粒		
23	74	11号竪穴建物	S13 M-102	7.8層 8層	-	土師器	甕	口縁～胴部	(19.6)	8.8+	-	橙(5YR6/6)	ナデ、ハケム	ナデ	良	長石		
23	75	11号竪穴建物	S13	埋土	-	土師器	甕	口縁一部	(13.2)	6.0+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	ハケム、ナデ	ナデ	良好	赤褐色粒		
23	76	11号竪穴建物	S13	上層	-	土師器	甕	口縁～底部	16.8	22.7	-	灰褐(7.5YR5/2)	ナデ、ハケム	ナデ	良	黒色粒、赤褐色粒	胴径:20.2cm	
23	77	11号竪穴建物	S13 M-102	8層 8-2層	-	土師器	壺	1/4	(12.8)	14.6+	-	にぶい橙(7.5YR6/6)	ハケム、ナデ	ナデ	良	白色粒、褐色粒、砂粒		
24	78	11号竪穴建物	S13 M-103	8-3層 P-416	-	土師器	甕	口縁～胴部	-	10.7+	-	橙(7.5YR6/6)	ナデ、ハケム	ナデ	良	赤褐色粒、白色砂粒、黒色粒		
24	79	11号竪穴建物	S13 K・L・ M・N・ 102.103	埋1 8-3層 8-2層 8層	No.36 7.10	土師器	甕	1/2	(20.2)	14.9	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	ハケム、ナデ	ナデ	良好	赤褐色粒、長石、石	黒斑あり 胴径:18.8cm	
24	80	11号竪穴建物	S13	埋1	No.4	土師器	甕	口縁～胴部	(19.5)	10.2+	-	にぶい橙(5YR6/4)	ハケム、ナデ	ナデ	良好	1mm大の長石		
24	81	11号竪穴建物	S13	埋土	-	土師器	甕	口縁一部	-	9.1+	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	ハケム、ナデ	ナデ	良	白色粒		
24	82	11号竪穴建物	S13 L-103 M-103	埋1 8-2層 1層	-	土師器	甕	胴部一部	-	12.7+	-	にぶい褐(7.5YR5/4)	ハケム、工具ナデ	ナデ	良	黒色粒、赤褐色粒、白色粒		
24	83	11号竪穴建物	S13	埋土	-	土師器	甕	把手	-	5.9+	-	にぶい橙(5YR7/4)	指頭圧痕	ナデ	良好	長石、雲母		
25	84	11号竪穴建物	S13	埋土	No.9	須恵器	坏蓋	ほぼ完形	14.3	4.0+	-	灰(7.5Y6/1)	ナデ	ナデ	良	白色粒		
25	85	11号竪穴建物	S13	埋土	-	須恵器	甕	口縁一部	-	3.7+	-	灰黄(2.5Y7/3)	ナデ	ナデ	良	長石、輝石		
25	86	11号竪穴建物	S13	上層	-	須恵器	坏身	3/4	11.8	4.2	6.6	灰白(2.5Y7/1)	ナデ	ナデ	良	長石、小石		
25	87	11号竪穴建物	S13	埋土	No.18	須恵器	坏身	5/6	12.8	4.2	4.7	灰白(10YR8/2)	ナデ	ナデ	良	1~3mm大の黒色粒、白色粒		
26	94	12号竪穴建物	S31	上層	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.4+	-	黒褐(10YR3/1)	ナデ	ナデ	良	黒色粒、角閃石、砂粒	穿孔あり	
26	95	12号竪穴建物	S31	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	(22.1)	4.1+	-	浅黄橙(10YR8/3)	ナデ	ナデ	良好	石英、長石		
27	96	14号竪穴建物	S12	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.5+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ	ナデ	良	石英、長石		
27	97	14号竪穴建物	S12	埋土	-	弥生土器	鉢	口縁一部	-	2.5+	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナデ	ナデ	良	石英、角閃石		

表7 吉原遺跡1区 出土土器観察表(4)

挿図 番号	報告 番号	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)			色 調		調 整		焼成	胎土	備考
		報告	調査時						口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
27	100	不明遺構	S17	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.2+	-	橙(7.5YR6/6)	明黄褐(10YR6/6)	ナ+	ナ+	良	長石、石英、白色粒、黒色粒	
27	101	不明遺構	S17	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.1+	-	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	ナ+	ナ+	良	石英、長石、角閃石	
27	102	不明遺構	S17	埋土	-	弥生土器	甕	脚部	-	5.0+	(7.8)	にふい黄橙(10YR6/4)	浅黄(2.5Y7/4)	ナ+	ナ+	良好	石英、雲母、角閃石	
31	104	2号土坑	S26	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.9+	-	浅黄橙(10YR8/4)	にふい黄橙(10YR7/4)	ナ+	ナ+	良	黒色粒、角閃石	
31	105	2号土坑	S26	埋土	-	弥生土器	鉢	底部1/2	-	3.7+	(9.9)	灰黄(2.5Y6/2)	にふい黄橙(10YR7/3)	ナ+	ナ+	良好	0.5mm大の角閃石	
32	106	3号土坑	S19	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.6+	-	黒(10YR2/1)	にふい黄褐(10YR5/3)	ナ+	ナ+	良	角閃石、茶色粒、長石、砂粒	刻目
33	107	5号土坑	S29	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.7+	-	灰白(10YR8/2)	浅黄(2.5Y7/3)	ナ+	ナ+	良好	砂粒、長石、雲母	
33	108	5号土坑	S29	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	1.5+	-	褐灰(10YR4/1)	灰黄(2.5Y6/2)	ナ+	ナ+	良好	角閃石、雲母	
34	109	J-106~108			-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	5.7+	-	にふい黄橙(10YR7/4)	浅黄(2.5Y7/3)	ナ+	ナ+	良好	角閃石	
34	110	L-107 埋7層			-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	6.0+	-	黄褐(2.5Y5/4)	明黄褐(10YR6/6)	ナ+	ナ+	良	石英、角閃石	
34	111	L-108 埋1			-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	8.5+	-	暗灰黄(2.5Y4/2)	オリープ黒(5Y3/1)	ナ+	ナ+	良好	角閃石、雲母	線刻あり
34	112	排土			-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	5.6+	-	オリープ黒(5Y3/2)	にふい黄(2.5Y6/3)	ナ+	ナ+	良好	雲母?	
34	113	北側 8-3層			-	縄文土器	鉢	口縁一部	-	4.2+	-	黒(10YR2/1)	にふい黄褐(10YR5/4)	ナ+	ナ+	良	砂粒、角閃石	黒色磨研土器
34	114	K-104 K-L-105 8-3層			-	縄文土器	浅鉢	口縁一部	-	3.9+	-	黒(10YR2/1)	褐灰(10YR4/1)	ナ+	ナ+	良	白色粒	黒色磨研土器
34	115	1区			-	縄文土器	鉢	口縁一部	-	9.9+	-	黒褐(2.5Y3/1)	黄褐(2.5Y5/3)	ナ+	ナ+	良好	精良	黒色磨研土器
34	116	P-475 北東部 8-3層			-	縄文土器	浅鉢	口縁一部	(21.4)	4.3+	-	黒(2.5Y2/1)	黒(2.5Y2/1)	ナ+	ナ+	良	角閃石	黒色磨研土器
34	117	J-K-106,107 8-3層			-	縄文土器	浅鉢	口縁一部	-	7.6+	-	黒(10YR2/1)	黒褐(10YR3/1)	ナ+	ナ+	良	砂粒	黒色磨研土器
34	118	P-128			-	縄文土器	浅鉢	口縁一部	-	9.6+	-	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	ナ+	ナ+	良好	雲母	リボン状突起 黒色磨研土器
34	119	北東			-	縄文土器	浅鉢	口縁一部	-	4.4+	-	にふい黄(2.5Y6/4)	にふい黄橙(10YR6/4)	ナ+	ナ+	良好	精良	黒色磨研土器
34	120	G-H-I-109~112			-	縄文土器	浅鉢	口縁一部	-	5.3+	-	黒(10YR2/1)	黒(10YR2/1)	ナ+	ナ+	良	白色砂粒	黒色磨研土器
34	121	S-104			-	縄文土器	深鉢	底部	-	3.5+	(4.8)	にふい黄橙(10YR6/4)	にふい黄橙(10YR6/3)	ナ+	ナ+	良	角閃石、黒色粒	
34	122	J-106~108			-	縄文土器	深鉢	脚部~底部	-	9.1+	4.2	にふい黄橙(10YR6/4)	浅黄(2.5Y7/4)	ナ+	ナ+	良好	3mmの黒色粒、赤褐色粒、白色粒、角閃石	
35	123	M-103			-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.8+	-	にふい黄橙(10YR7/4)	にふい黄橙(10YR7/4)	ナ+	ナ+	良好	黒色粒、赤褐色粒	
35	124	I-109 I-J-108			-	弥生土器	甕	口縁一部	(17.8)	6.5+	-	浅黄橙(7.5YR8/6)	にふい黄橙(10YR7/4)	ナ+	ナ+	良好	黒色粒、茶色粒	
35	125	I-J-110,111			-	弥生土器	甕	口縁一部	(27.2)	6.2+	-	にふい黄橙(10YR7/2)	にふい黄橙(10YR7/2)	ナ+	ナ+	良	長石、輝石、砂粒	
35	126	N-108			-	弥生土器	甕	口縁一部	-	1.5+	-	橙(2.5YR7/6)	にふい黄橙(10YR7/4)	ナ+	ナ+	良	石英、雲母、長石、輝石、角閃石	
35	127	K-103,104 L-104,105			-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.6+	-	灰(5Y4/1)	浅黄(2.5Y7/3)	ナ+	ナ+	良好	石英、雲母、褐色粒	外面口唇部にスス付着
35	128	H-I-J-109,110 8-3層			-	弥生土器	甕	口縁一部	(23.6)	4.4+	-	にふい黄褐(10YR5/4)	浅黄(2.5Y7/3)	ナ+	ナ+	良	石英、白色粒、金雲母	外部一部にスス付着

表8 吉原遺跡1区 出土土器観察表(5)

挿図 番号	報番	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)			色 調		調 整		焼成	胎土	備考
		報告	調査時						口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
35	129		M-103		-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.0+	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい黄(2.5Y6/4)	ナテ	ナテ	良好	石英、長石、雲母	外面磨減
35	130		表土		-	弥生土器	甕	口縁一部	(31.1)	3.8+	-	明黄褐(10YR7/6)	浅黄(2.5YR7/3)	ナテ	ナテ	良	長石、石英、角閃石	
35	131		北東		-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.8+	-	灰黄褐(10YR8/2)	浅黄橙(10YR8/3)	ナテ	ナテ	良好	石英	
35	132		南壁		-	弥生土器	甕	口縁一部	(23.0)	4.3+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄(2.5Y6/3)	ナテ	ナテ	良	石英、長石、雲母	
35	133		N-101,102	8層	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.5+	-	淺黄(2.5Y7/3)	にぶい黄(2.5Y6/3)	ナテ	ナテ	良好	砂粒、雲母	
35	134		K-103,104L-104,105	8-3層	-	弥生土器	甕	口縁一部	(25.0)	5.1+	-	明黄褐(10YR7/4)	明黄褐(10YR7/6)	ナテ	ナテ	良好	石英、角閃石	外面にスス附着
35	135		I-J-113,114		-	弥生土器	甕	口縁一部	-	1.7+	-	橙(7.5YR7/6)	橙(2.5Y7/4)	ナテ	ナテ	良	長石、石英、雲母	
35	136		K-103,104L-104,105	8-3層	-	弥生土器	甕	口縁一部	(23.4)	8.2+	-	灰黄褐(10YR4/2)	淺黄(2.5Y7/4)	ナテ	ナテ	良好	長石、雲母	
35	137		M-N-109,110		-	弥生土器	甕	口縁一部	-	10.4+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	ナテ	ナテ、ハケメ	良	黒色粒、白色粒、石英、雲母、角閃石	
35	138		I-114 壁 1・2層		-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.3+	-	にぶい黄褐(10YR5/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	ナテ	ナテ	良	黒色砂粒、角閃石、雲母	
36	139		G-H-112,113,114		-	弥生土器	甕	口縁一部	(32.0)	4.9+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナテ	ナテ	良	石英、白色粒、黒色粒、金雲母、角閃石	
36	140		J-105 J・K・L-106		-	弥生土器	壺	口縁一部	-	5.4+	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	橙(7.5YR6/6)	ナテ	ナテ	良	角閃石、黒色粒、白色粒	
36	141		南壁際		-	弥生土器	壺	口縁一部	-	4.8+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	明黄褐(10YR6/6)	ハケメ、ナテ	ハケメ	良	雲母、長石、砂粒	
36	142		K-108 8-3層		-	弥生土器	壺	口縁一部	-	3.4+	-	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/8)	ナテ	ナテ	良	角閃石、砂粒	
36	143		G-H-112,113,114		-	弥生土器	甕	脚部	-	6.5+	(8.0)	にぶい黄橙(10YR7/4)	褐灰(10YR4/1)	ナテ	ナテ	良好	白色粒、雲母	
36	144		M-103		-	弥生土器	甕	脚部	-	5.2+	5.4	黒(2.5Y2/1)	にぶい黄(2.5Y6/3)	おさえ後ナテ	おさえ後ナテ	良	輝石、雲母、砂粒	
36	145		Q-103		-	弥生土器	甕	脚部	-	4.9+	(5.6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	黒褐(10YR3/1)	工具ナテ?、ナテ	指頭圧痕、ナテ	良	石英、白色粒	
36	146		P-106 カガン		-	弥生土器	甕	脚部	-	5.1+	7.8	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	ナテ	ナテ	良好	黒色粒、角閃石、雲母	
36	147		H-1-110,111	8-3層	-	弥生土器	高坏	口縁一部	-	4.4+	-	橙(5YR7/6)	にぶい橙(5YR6/4)	ナテ	ナテ	良	黒色粒、角閃石	
36	148		N-102 8層		-	土師器	甕	口縁~胴部	(15.8)	9.0+	-	にぶい橙(7.5YR6/6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナテ	ナテ	良	褐色粒、砂粒、角閃石	
36	149		P-209		-	土師器	甕	把手	-	6.0+	-	淺黄橙(10YR8/3)	-	ナテ	-	良好	1mm大の長石	
36	150		K・L・M-102,103L-103,M-103	3層、2層	-	土師器	甕	底部一部	-	15.5+	(21.8)	橙(5YR6/6)	にぶい橙(5YR6/4)	ナテ	ナテ	良	白色粒、赤褐色粒	

※カクコ書きは復元値、数値の後に+が付くものは残存値

表9 吉原遺跡1区 出土石器観察表(1)

挿図 番号	報番	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	法量(cm)			石材	備考
		報告	調査時				長さ	幅	厚さ		
13	24	1号竪穴建物	S14	-	-	磨石	10.20	10.20	5.60	安山岩	完形
13	25	1号竪穴建物	S14	-	-	磨製石斧	13.40	6.10	3.40	砂岩	1/2以上
13	26	1号竪穴建物	S14	-	-	砥石	16.00+	8.40	3.70	砂岩	
15	39	3号竪穴建物	S23	-	-	砥石	12.30	12.00	4.70	砂岩	1/2以上
17	45	6号竪穴建物	S25	-	-	二次加工剥片	3.65	1.50	0.70	黒曜石	完形
17	46	6号竪穴建物	S25	-	-	楔形石器	2.50	2.15	0.80	黒曜石	完形
25	88	11号竪穴建物	S13	-	-	石錐	3.75	1.45	1.00	安山岩	完形
25	89	11号竪穴建物	S13	-	-	打製石鏃	3.00+	1.45	0.40	安山岩	
25	90	11号竪穴建物	S13	-	-	スクレイパー	2.40	4.25+	0.95	頁岩	
25	91	11号竪穴建物	S13	-	-	砥石	15.00	4.50	6.20	砂岩	
25	92	11号竪穴建物	S13	埋下層	-	砥石	11.40+	11.70+	5.90	砂岩	
27	98	14号竪穴建物	S12	埋中層	-	打製石鏃	2.30+	1.50	0.35	黒曜石	
31	103	1号土坑	S18	埋土	-	打製石鏃	2.30+	2.05	0.30	黒曜石	
37	151		I-114 壁		-	磨製石鏃	5.20	2.10	0.20	頁岩?	完形
37	152		Pt 224(M-101)		-	磨製石鏃	3.35	1.35	0.20	流紋岩?	
37	153		M-101 8-3層		-	打製石鏃	3.15+	1.05	0.40	安山岩	
37	154		I-114 壁 1,2層		-	打製石鏃	1.90+	2.05	0.45	安山岩	
37	155		R-104 カタン		-	打製石鏃	1.90	0.90	0.25	チャート	
37	156		西壁 7,8層		-	打製石鏃	3.00+	1.95	0.55	安山岩	
37	157		H-110 カタン		-	二次加工剥片	3.30+	1.65+	0.70	黒曜石	縦型
37	158		L-105 8層下部		-	石包丁	4.80	5.50+	0.70	粘板岩	1/2以下
37	159		南壁		-	石匙	5.85	3.70	1.55	安山岩	完形
37	160		P-104		-	打製石鏃	4.40	9.40	1.70	輝石安山岩	
37	161		I-J-108,J-109 8-3層		-	打製石鏃	5.80	10.30	2.25	輝石安山岩	
37	162		J-K-106,107		-	打製石鏃	5.50	8.50	1.95	安山岩	

表10 吉原遺跡1区 出土石器観察表(2)

挿図 番号	報 告	出土地点		出土 層位	取上 番号	器 種	法量(cm)			石材	備考
		報告	調査時				長さ	幅	厚さ		
38	163	J-108	トレンチ	-	打製石斧	9.45+	7.20+	2.80	170.90	流紋岩質安山岩	
38	164	J-106,107,108		-	打製石斧	8.95+	4.55	1.90	73.80	安山岩	
38	165	M-113~115	南壁	-	打製石斧	6.20+	5.15+	1.70	71.40	安山岩	
38	166	J-108	8-3層	-	快入柱状片刃石斧	7.10+	3.40	3.40	184.40	安山岩	1/2
38	167	I・J-110,111		-	砥石	5.10+	2.90+	2.50	61.50	砂岩	1/2以下携帯用?
38	168	Pit 281		-	砥石	3.70	2.50	0.80	13.20	砂岩	1/2以下携帯用?
38	169	L-102 M-102,103	N-102	-	砥石	13.00+	8.30	7.30	970.10	砂岩	1/2以下
38	170	O-106		-	砥石	9.20+	5.60+	1.20	126.8	砂岩	1/2以下

※カッコ書きは復元値、数値の後に+が付くものは残存値

表11 吉原遺跡1区 出土鉄器観察表

挿図 番号	報 告	出土地点		出土 層位	取上 番号	器 種	法量(cm)			備考	
		報告	調査時				長さ	幅	厚さ		
13	27	1号竪穴建物	S14	埋1	-	鉄鏃	5.40+	2.20	0.60	15.60	穿孔あり。
13	28	1号竪穴建物	S14	-	-	袋状鉄斧	3.60+	5.00	1.00	46.10	
15	36	2号竪穴建物	S22上 カクソ	-	-	鉄鏃	4.20+	2.10	0.40	8.20	
25	93	11号竪穴建物	S13	北西部	-	鉄鏃	4.90	2.45	0.20	6.20	穿孔(2個)あり。
27	99	14号竪穴建物	S12	-	-	袋状鉄斧	2.70+	4.20	1.30	27.00	
38	171		K-105		-	鉄鏃	3.25+	3.30	0.80	13.50	
38	172		N-104		-	袋状鉄斧?	3.60+	4.80	0.50	33.60	
38	173		L-102 8層		-	鉄鏃	3.20+	0.65	0.60	2.20	清掃時

※カッコ書きは復元値、数値の後に+が付くものは残存値

表12 吉原遺跡2区 出土土器観察表(1)

挿図 番号	報告 出土地点	調査時 出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)		色 調		調 整		焼成	胎土	備考
							口径	器高	底径	内面	外面	内面			
43	17号竪穴建物	S2	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	1.5+	-	浅黄(2.5Y7/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ	良好	長石	外面スス付着
43	17号竪穴建物	S2	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.3+	-	明赤褐(5YR5/6)	浅黄(2.5Y7/4)	ナデ	良好	長石	
43	17号竪穴建物	S2	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.4+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	灰黄褐(10YR5/2)	ナデ	良好	角閃石、白色粒子、5mm程の礫	
43	17号竪穴建物	S2	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.0+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ	良好	石英、輝石、角閃石	
43	17号竪穴建物	S2	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.0+	-	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	ナデ	良好	石英、輝石	
43	17号竪穴建物	S2	-	弥生土器	甕	口縁一部	(23.6)	3.5+	-	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	ナデ、ハケム	良	角閃石、褐色粒、砂粒	
43	17号竪穴建物	S2	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.8+	-	灰白(2.5Y8/2)	暗灰黄(2.5Y5/2)	ナデ、突帯	良好	長石、角閃石	外面スス付着か？
43	17号竪穴建物	S2	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	3.3+	-	浅黄(2.5Y7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナデ	良好	長石、黑色粒子	
43	17号竪穴建物	S2	-	弥生土器	甕	脚部	-	3.0+	(5.7)	橙(2.5YR6/8)	-	ハケム、ナデ、 指押さえ後ナデ	良好	長石を多く含む、石英、雲母	
43	17号竪穴建物	S2	-	弥生土器	甕	脚部	-	4.9+	7.6	灰黄褐(10YR6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	ナデ、ハケム	良	石英、黑色粒、白色粒、褐色粒、角閃石	土坑
43	17号竪穴建物	S2	-	弥生土器	甕	脚部	-	7.6+	9.0	明黄褐(10YR7/6)	灰オリーブ(5Y5/2)	ハケム、ナデ、 指頭圧痕	良好	長石、雲母、角閃石	土坑
44	18号竪穴建物	S1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.3+	-	橙(7.5YR7/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	ナデ	良	石英、褐色粒	
44	18号竪穴建物	S1	-	弥生土器	甕	口縁一部	(26.4)	2.7+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄(2.5Y6/3)	ナデ	良好	角閃石、黑色粒	
44	18号竪穴建物	S1	-	弥生土器	甕	口縁一部	(25.5)	4.2+	-	浅黄橙(10YR8/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ	良好	小石、長石、角閃石	
44	18号竪穴建物	S1	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.0+	-	浅黄(2.5Y7/4)	橙(5YR6/6)	ナデ	良好	長石、石英	
44	18号竪穴建物	S1	-	弥生土器	甕	口縁一部	(22.0)	3.9+	-	浅黄橙(10YR8/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナデ	良	角閃石、黑色粒	
44	18号竪穴建物	S1	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	4.6+	-	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	ナデ、ハケム	良	黑色粒、白色粒、角閃石	外面に暗文
44	18号竪穴建物	S1	-	土師器	甕	口縁一部	-	5.5+	-	橙(7.5YR4/3)	にぶい橙(7.5YR5/4)	ナデ、ナズリ	良	角閃石	
46	20号竪穴建物	S29	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.6+	-	浅黄(2.5Y7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ、突帯	良	石英、長石、角閃石、雲母、褐色粒、白色粒	
46	20号竪穴建物	S29	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.5+	-	にぶい黄(2.5Y6/3)	にぶい黄(2.5Y6/4)	ナデ	良	雲母	
46	20号竪穴建物	S29	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.2+	-	にぶい黄褐(10YR5/3)	灰黄褐(10YR5/2)	ナデ	良	砂粒	
46	20号竪穴建物	S29	-	弥生土器	甕	脚部~胴部	-	9.7+	5.3	にぶい黄褐(10YR5/3)	黒褐(10YR3/1)	ハケム、ナデ	良	石英、長石、角閃石、砂粒	
47	21号竪穴建物	S5	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.9+	-	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	ナデ	良	角閃石、黑色粒、長石	
48	22号竪穴建物	S6	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.1+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ、ナズリ	良好	長石、石英	外面スス付着
48	22号竪穴建物	S6	-	弥生土器	甕?	口縁一部	-	1.8+	-	赤褐(5YR4/6)	赤褐(5YR4/6)	ナデ	良	白色砂粒、2mm大の白色石、石英、雲母	
48	22号竪穴建物	S6	-	弥生土器	甕?	口縁一部	-	2.2+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	ナデ	良	白色砂粒、黑色砂粒	外面黒斑あり
48	22号竪穴建物	S6	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.3+	-	にぶい黄橙(10YR7/2)	にぶい橙(7.5YR7/4)	ナデ	良好	角閃石、石英、赤褐色粒	
48	22号竪穴建物	S6	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.4+	-	灰黄褐(10YR4/2)	灰黄褐(10YR4/2)	ナデ	良	白色砂粒、雲母、角閃石	
48	22号竪穴建物	S6	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.1+	-	黒褐(10YR3/1)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ	良好	長石	スス付着

表13 吉原遺跡2区 出土土器観察表(2)

挿図 番号	報番	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	量(㎝)			色調		調整		焼成	胎土	備考
		報告	調査時						口径	器高	底径	内面	外面	内面				
48	209	22号竪穴建物	S6	埋1	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	4.0+	-	楳(7.5YR6/4)	にぶい楳(7.5YR6/6)	ナナ	ナナ、幼キ	良好	角閃石、雲母	暗文
48	210	22号竪穴建物	S6	埋2	No.1	弥生土器	甕	脚部	-	2.8+	6.0	にぶい黄楳(10YR6/4)	ナナ	ナナ	-	良好	角閃石、長石	
48	211	22号竪穴建物	S6	下層	-	弥生土器	甕	脚部一部	-	3.2+	(8.3)	にぶい黄楳(10YR7/4)	にぶい黄楳(10YR7/4) ナナ、ナナ、 指押さえ後ナナ	ナナ	-	良好	雲母	
48	212	23号竪穴建物	S7	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.3+	-	にぶい黄楳(10YR6/3) 明赤褐(5YR5/6)	にぶい黄楳(10YR6/4)	ナナ	ナナ	良	長石、角閃石	
48	213	23号竪穴建物	S7	上層	-	弥生土器	甕	口縁一部	(29.0)	5.0+	-	にぶい黄(2.5Y6/3)	にぶい黄(2.5Y6/3)	ナナ	ナナ	良好	長石、角閃石	外面スス付着
48	214	23号竪穴建物	S7	埋土	-	弥生土器	甕	脚部1/2	-	5.0+	(7.6)	にぶい黄楳(10YR6/4)	にぶい黄楳(10YR7/3) ナナ、ナナ	ナナ	ナナ	良	長石、角閃石、黒褐色粒	
48	215	23号竪穴建物	S7	埋土	-	弥生土器	壺	頸部~肩部	-	6.8+	-	にぶい黄楳(10YR7/4)	にぶい黄楳(10YR6/4) ナナ、刻目突帯	ナナ、ナナ	ナナ	良好	黒色粒、角閃石、石英	J字突帯 暗文
48	217	24号竪穴建物	S18	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.0+	-	にぶい黄楳(10YR6/3)	にぶい黄楳(10YR6/3) ナナ	ナナ	ナナ	良好	角閃石、石英	
48	218	24号竪穴建物	S18	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.0+	-	黒褐(7.5YR3/1)	にぶい楳(7.5YR7/4)	ナナ	ナナ	良好	角閃石、石英、白色粒	
48	219	24号竪穴建物	S18	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.1+	-	にぶい黄楳(10YR6/4)	にぶい黄楳(10YR6/4) ナナ	ナナ	ナナ	良	石英、角閃石	
48	220	24号竪穴建物	S18	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.6+	-	にぶい黄楳(10YR7/3)	にぶい楳(7.5YR7/3) ナナ	ナナ	ナナ	良	茶色砂粒、石英、角閃石	
48	221	24号竪穴建物	S18	下層	-	弥生土器	甕	口縁一部	(29.8)	2.8+	-	にぶい黄(2.5Y6/3)	浅黄楳(10YR8/4)	ナナ	ナナ	良好	長石	
48	222	24号竪穴建物	S18	下層	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.7+	-	にぶい楳(7.5YR6/4)	にぶい黄楳(10YR7/4) ナナ	ナナ、ナナ	ナナ	良好	角閃石、白色粒、黒色粒	
48	223	24号竪穴建物	S18	下層	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	5.2+	-	にぶい楳(7.5YR7/4)	楳(7.5YR6/6)	ナナ、刻目突帯、ミ 加キ	ナナ	良好	白色粒、黒色粒、石英	暗文
48	224	24号竪穴建物	S18	下層	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	2.8+	-	にぶい黄楳(10YR7/4)	にぶい黄楳(10YR7/4) ナナ	ナナ	ナナ	良	長石、黒色粒、砂粒	
48	225	24号竪穴建物	S18	埋土	-	弥生土器	甕	脚部一部	-	3.5+	-	にぶい黄楳(10YR6/3)	にぶい黄楳(10YR6/3) ナナ、ナナ	-	ナナ	良	黒色粒、砂粒	
51	231	25号竪穴建物	S10	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.1+	-	にぶい黄楳(10YR7/3)	楳(5YR6/8)	ナナ、ナナ	ナナ	良	石英、長石、角閃石	
51	232	25号竪穴建物	S10	下層	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.9+	-	灰白(10YR8/2)	浅黄(2.5Y7/3)	ナナ	ナナ	良	石英、長石、角閃石	
51	233	25号竪穴建物	S10	下層	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.0+	-	にぶい黄楳(10YR6/3)	にぶい黄楳(10YR7/4) ナナ	ナナ、ナナ後ナナ	ナナ	良	金雲母、角閃石	甕棺の破片か?
51	234	25号竪穴建物	S10	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.3+	-	灰黄褐(10YR6/2)	にぶい黄楳(10YR7/4) ナナ?	ナナ?	ナナ?	良	石英、角閃石	
51	235	25号竪穴建物	S10	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.6+	-	にぶい楳(5YR7/4)	にぶい黄楳(10YR7/4) ナナ	ナナ	ナナ	やや 不良	3mm次の白色粒、石英、雲 母	胎土がかなり粗い
51	236	25号竪穴建物	S10	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.8+	-	にぶい黄楳(10YR7/3)	にぶい黄楳(10YR7/3) ナナ	ナナ	ナナ	良	黒色砂粒、茶色砂粒、石 英、角閃石	
51	237	25号竪穴建物	S10	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.9+	-	浅黄楳(10YR8/4)	浅黄楳(10YR8/4) ナナ	ナナ	ナナ	良	白色粒、黒色粒、石英	
51	238	25号竪穴建物	S10	埋1	-	弥生土器	壺	口縁一部	(18.5)	4.0+	-	楳(5YR7/8)	灰黄褐(10YR5/2)	ナナ	ナナ、幼キ	良	白色粒、黒色粒、角閃石	暗文
51	239	25号竪穴建物	S10	埋1	-	弥生土器	甕	脚部	-	5.1+	6.8	にぶい黄楳(10YR6/3)	褐灰(10YR4/1)	ナナ、 指押さえ後ナナ	指押さえ後ナナ	良	長石、角閃石、白色粒、 黒曜石	
51	243	26号竪穴建物	S14	埋土	No.5	弥生土器	甕	口縁一部	(28.7)	5.6+	-	楳(7.5YR7/6)	にぶい黄楳(10YR7/4) ナナ	ナナ、ナナ	ナナ	良好	石英、長石、角閃石	
51	244	26号竪穴建物	S14	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.9+	-	にぶい楳(7.5YR7/4)	にぶい黄楳(10YR7/4) ナナ	ナナ、ナナ	ナナ	良好	角閃石、石英、長石	
51	245	26号竪穴建物	S14	埋土	No.2	弥生土器	甕	口縁一部	(30.8)	4.6+	-	楳(7.5YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	ナナ	ナナ	良好	長石、石英、雲母	
51	246	26号竪穴建物	S14	埋土	No.7	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.3+	-	浅黄楳(7.5YR8/4)	にぶい楳(7.5YR7/4) ナナ	ナナ	ナナ	良好	1~2mm次の長石、石英	
52	250	27号竪穴建物	S15	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	1.7+	-	浅黄楳(10YR8/3)	にぶい楳(7.5YR7/4) ナナ	ナナ、刻目	ナナ	良好	長石、雲母	

表14 吉原遺跡2区 出土土器観察表(3)

挿図 番号	報告	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)		色 調		調 整		焼成	胎土	備考	
		報告	調査時						口径	器高	底径	内面	外面	内面				
52	252	28号竪穴建物	S16	下層	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	2.0+	-	にふい黄橙(10YR6/4)	ナデ	にふい黄橙(10YR6/4)	ナデ	角閃石、砂粒		
52	253	28号竪穴建物	S16	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	1.8+	-	灰黄褐(10YR4/2)	ナデ	にふい黄橙(10YR6/4)	ナデ	砂粒		
52	254	28号竪穴建物	S16	埋土	-	縄文土器	鉢	口縁一部	-	6.0+	-	にふい橙(7.5YR6/4)	ナデ、線刻	にふい橙(7.5YR6/4)	ナデ	黒色砂粒、白色砂粒、石英、角閃石		
52	255	28号竪穴建物	S16	上層	(206)	弥生土器	壺	口縁1/3	-	5.5+	-	にふい黄橙(10YR7/4)	ナデ	にふい黄橙(10YR7/4)	ナデ	良好 長石、雲母	暗文	
54	257	29号竪穴建物	S23	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	2.3+	-	明黄褐(10YR7/6)	ナデ	明黄褐(10YR7/6)	ナデ	刻目、ナデ	黒色粒、砂粒	
54	258	29号竪穴建物	S23	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	2.4+	-	灰黄(2.5Y6/2)	ナデ	灰黄(2.5Y6/2)	ナデ	良好 雲母		
54	259	29号竪穴建物	S23	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	2.3+	-	にふい黄(2.5Y6/3)	ナデ	黄褐(2.5Y5/3)	ナデ	良好 輝石、石英		
54	260	29号竪穴建物	S23	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	2.9+	-	にふい黄(2.5Y6/3)	ナデ	にふい黄(2.5Y6/3)	ナデ	良好 角閃石、雲母	スス付着か?	
54	261	29号竪穴建物	S23	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	2.5+	-	にふい黄橙(10YR7/3)	ナデ	にふい黄橙(10YR7/3)	ナデ	良好 石英、角閃石、白色粒		
54	262	29号竪穴建物	S23	埋土	(258)	弥生土器	鉢	口縁~底部	(10.0)	16.0+	-	にふい褐(7.5YR5/4)	ナデ	にふい黄橙(10YR7/4)	ナデ	長石、角閃石、雲母、輝石		
54	263	29号竪穴建物	S23	埋土	31.6	弥生土器	壺	口縁~胴部	31.6	16.1+	-	にふい黄橙(10YR6/6)	ナデ、ナデ?	にふい黄橙(10YR6/4)	ナデ、ナデ?	良好 褐色粒、角閃石、石英	胴径(32.8)mm	
54	264	29号竪穴建物	S23	埋土	(26.0)	弥生土器	壺	口縁~胴部	(26.0)	17.5+	-	浅黄橙(10YR8/4)	ナデ、ナデ	にふい黄(2.5Y6/3)	ナデ、ナデ	良好 長石、雲母、角閃石	暗文	
55	265	29号竪穴建物	S23	埋土	(25.0)	弥生土器	壺	口縁一部	(25.0)	5.1+	-	にふい黄橙(10YR7/4)	ナデ	にふい黄橙(10YR6/3)	ナデ	良好 黒色粒、白色粒、角閃石		
55	266	29号竪穴建物	S23	埋土	(23.8)	弥生土器	高坏	坏部1/4	(23.8)	9.5+	-	にふい黄橙(10YR7/6)	ナデ	にふい黄橙(10YR6/3)	ナデ	良好 黒色粒、角閃石、雲母	暗文	
55	267	29号竪穴建物	S23	埋土	-	弥生土器	壺	胴部	-	5.7+	8.1	にふい黄橙(10YR6/3)	ナデ	にふい黄橙(10YR6/3)	ナデ	良好 黒色粒、角閃石		
55	268	29号竪穴建物	S23	埋土	-	弥生土器	壺	脚部1/2	(7.6)	4.2+	-	明黄褐(10YR7/6)	ナデ	明黄褐(10YR7/6)	ナデ	良好 黒色粒、砂粒		
55	269	30号竪穴建物	S25	埋土	(25.6)	弥生土器	壺	口縁一部	(25.6)	3.5+	-	にふい橙(5YR6/4)	ナデ	にふい黄橙(10YR7/4)	ナデ	良好 2mm大の砂粒		
55	270	30号竪穴建物	S25	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	3.1+	-	橙(7.5YR6/6)	ナデ	橙(7.5YR7/6)	ナデ	良好 石英、1mm大の白色粒		
55	271	30号竪穴建物	S25	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	2.7+	-	にふい黄橙(10YR6/3)	ナデ	にふい黄橙(10YR6/3)	ナデ	良好 長石、雲母		
55	272	30号竪穴建物	S25	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	4.0+	-	浅黄橙(10YR8/3)	ナデ	灰黄(2.5Y7/2)	ナデ	良好 長石、雲母		
55	273	30号竪穴建物	S25	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	5.2+	-	橙(5YR7/6)	ナデ	橙(5YR7/6)	ナデ	良好 褐色粒、角閃石、石英、白色粒	暗文	
55	274	30号竪穴建物	S25	埋土	(5.6)	弥生土器	壺	脚部	(5.6)	4.9+	-	にふい黄橙(10YR6/4)	ナデ	浅黄(2.5Y7/3)	ナデ	良好 長石、雲母、角閃石	内面スス付着	
56	277	31号竪穴建物	S34	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	2.9+	-	浅黄(2.5Y7/4)	ナデ	灰黄(2.5Y7/2)	ナデ	良好 長石、角閃石、雲母		
56	278	31号竪穴建物	S34	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	1.4+	-	褐灰(10YR4/1)	ナデ	にふい黄橙(10YR7/4)	ナデ	良好 角閃石、石英、白色粒		
56	279	31号竪穴建物	S34	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	1.6+	-	にふい橙(7.5YR7/4)	ナデ	橙(7.5YR7/6)	ナデ	良好 角閃石、石英		
56	280	31号竪穴建物	S34	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	2.8+	-	にふい黄橙(10YR7/3)	ナデ	にふい黄橙(10YR7/3)	ナデ	良好 長石、角閃石、雲母、赤褐色粒	暗文	
56	282	32号竪穴建物	S35	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	2.9+	-	にふい黄橙(10YR7/3)	ナデ	にふい橙(7.5YR7/4)	ナデ	良好 長石、金雲母、角閃石、石英		
56	283	32号竪穴建物	S35	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	2.4+	-	淡黄(2.5Y8/3)	ナデ	淡黄(2.5Y8/3)	ナデ	良好 石英、長石、角閃石	墓棺の可能性あり	
56	284	32号竪穴建物	S35	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	1.7+	-	にふい黄橙(10YR7/4)	ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	ナデ	良好 長石、石英、雲母		
56	285	32号竪穴建物	S35	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	3.0+	-	橙(7.5YR7/6)	ナデ	にふい黄(2.5Y6/4)	ナデ	良好 長石、石英、角閃石、雲母		



表15 吉原遺跡2区 出土土器観察表(4)

挿図 番号	報告	出土地点 調査時	出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	量(㎝)			色調		調整		焼成	胎土	備考
								口径	器高	底径	内面	外面	内面				
56	286	32号竪穴建物	S35	埋2	-	甕	口縁一部	-	3.9+	-	にぶい黄橙(10YR6/3)	ナテ	ナテ	良	長石、石英、燧石、雲母	土坑	
56	287	32号竪穴建物	S35	埋1	-	甕	口縁一部	-	1.8+	-	明黄褐(10YR7/6)	ナテ	ナテ	良	長石、石英、燧石、雲母、角閃石		
56	288	32号竪穴建物	S35	埋土	-	甕	口縁一部	-	2.1+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナテ	ナテ	良	石英、長石、雲母	スズ附着 P2	
56	289	32号竪穴建物	S35	埋2	-	壺	口縁一部	-	1.8+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	ナテ	ナテ	良	雲母、赤褐色粒		
56	290	32号竪穴建物	S35	埋2	-	甕	胴部~底部	(11.0)	1.8+	-	橙(5YR6/6)	ミカキ、ナテ	ナテ	良	角閃石、雲母、長石	外面にキミ減で不明瞭	
56	291	32号竪穴建物	S35	埋1	-	甕	脚部	6.0	4.7+	-	褐灰(10YR4/1)	ナテ	ナテ	良	長石、石英、角閃石	内面スズ附着	
56	292	32号竪穴建物	S35	埋2	-	甕	脚部	6.2	3.8+	-	明黄褐(10YR7/6)	ナテ	ナテ	良	石英、長石、角閃石、雲母	内面スズ附着 土坑	
56	294	33号竪穴建物	S27	埋土	-	甕	口縁一部	-	3.0+	-	暗灰黄(2.5Y6/2)	ナテ	ナテ	良	雲母、砂粒		
56	295	33号竪穴建物	S27	埋2	-	甕	口縁一部	-	2.2+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナテ	ナテ	良	雲母、砂粒		
56	296	33号竪穴建物	S27	埋土	-	甕	口縁一部	-	1.6+	-	明黄褐(10YR7/6)	ナテ	ナテ	良好	長石、石英、角閃石		
56	297	33号竪穴建物	S27	埋土	-	甕	口縁一部	-	2.4+	-	にぶい黄橙(10YR6/3)	ナテ	ナテ	良好	角閃石、長石、雲母		
57	298	33号竪穴建物	S27	埋1	-	甕	口縁一部	(28.4)	3.4+	-	灰白(10YR8/2)	ナテ	ナテ	良好	角閃石、長石、赤褐色粒		
57	299	33号竪穴建物	S27	埋土	-	甕	口縁一部	-	2.3+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナテ	ナテ	良	雲母、砂粒		
57	300	33号竪穴建物	S27	埋1	-	甕	口縁一部	-	2.7+	-	浅黄(2.5Y8/4)	ナテ	ナテ	良好	角閃石、雲母、長石	外面スズ附着	
57	301	33号竪穴建物	S27	埋1	-	甕	口縁一部	(25.0)	4.6+	-	にぶい黄(2.5Y6/3)	ナテ	ナテ	良好	雲母、角閃石		
57	302	33号竪穴建物	S27	埋2	-	甕	口縁一部	-	2.4+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナテ	ナテ	良好	角閃石、燧石		
57	303	33号竪穴建物	S27	埋土	-	甕	口縁一部	-	2.7+	-	にぶい黄橙(10YR6/3)	ナテ	ナテ	良好	角閃石		
57	304	33号竪穴建物	S27	埋1	-	甕	口縁一部	-	5.6+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナテ	ナテ	良	角閃石、砂粒	内面に工具痕あり	
57	305	33号竪穴建物	S27	埋土	-	甕	脚部	(6.3)	4.0+	-	にぶい橙(5YR6/4)	ナテ	ナテ	良	長石、砂粒		
57	306	33号竪穴建物	S27	埋2	-	甕	脚部	5.9	4.6+	-	黒(10YR2/1)	ナテ	ナテ	良好	長石	内面スズ附着	
59	307	34号竪穴建物	S22	埋土	-	甕	口縁~胴部	(20.5)	7.5+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	ナテ	ナテ	良好	長石、燧石、角閃石、赤褐色粒子		
59	308	34号竪穴建物	S22	埋2	-	甕	口縁一部	-	4.8+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナテ	ナテ	良	雲母		
59	309	34号竪穴建物	S22	埋1	-	甕	口縁一部	-	1.5+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナテ	ナテ	良好	石英、角閃石		
59	310	34号竪穴建物	S22	埋2	-	甕	口縁一部	-	4.6+	-	明黄褐(10YR7/6)	ナテ	ナテ	良	石英、角閃石	甕柄か?	
59	311	34号竪穴建物	S22	埋2	-	壺	口縁一部	-	2.1+	-	黄灰(2.5Y4/1)	ナテ	ナテ	良	長石、角閃石		
59	312	34号竪穴建物	S22	埋2	-	甕	脚部1/2	(7.0)	4.0+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナテ	ナテ	良好	長石、石英、金雲母、小石、角閃石	胎土がやや赤い	
59	315	35号竪穴建物	S24	下層	-	甕	口縁一部	-	3.9+	-	にぶい黄橙(10YR6/3)	ナテ	ナテ	良	石英、長石、角閃石、黒色粒、白色粒、褐色粒		
59	316	35号竪穴建物	S24	下層	-	甕	口縁一部	-	3.9+	-	にぶい黄(2.5Y6/3)	ナテ	ナテ	良	石英、長石、黒曜石、角閃石		
59	317	35号竪穴建物	S24	下層	-	甕	口縁一部	-	2.1+	-	暗灰黄(2.5Y4/2)	ナテ	ナテ	良好	雲母、1mm次の白色粒		

表16 吉原遺跡2区 出土土器観察表(5)

挿図 番号	報告 出土地点	調査時 報告	出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)		色 調		調 整		焼成	胎土	備考
								口径	器高	底径	内面	外面	内面			
59	318	35号竪穴建物	S24	焼土	-	彌生土器	口縁一部	-	2.2+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	動かキ	動かキ	良	白色粒、黒色粒	
59	319	35号竪穴建物	S24	カマノ下層	-	彌生土器	口縁一部	-	3.1+	-	浅黄橙(10YR8/4)	ナナ	ナナ	良	白色粒、黒色粒	甕棺の可能性あり
59	320	35号竪穴建物	S24	焼土	-	彌生土器	口縁一部	-	4.4+	-	灰黄(2.5Y7/2)	ナナ	ナナ	良好	石英、1~3mm大の長石、赤褐色粒	
59	321	35号竪穴建物	S24	カマノ上層	-	彌生土器	口縁一部	(25.4)	2.6+	-	浅黄橙(10YR8/3)	ナナ	ナナ	良好	長石	
59	322	35号竪穴建物	S24	カマノ下層	-	彌生土器	口縁一部	-	2.2+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナナ	ナナ	良	長石、雲母、砂粒	
59	323	35号竪穴建物	S24	カマノ下層	-	彌生土器	口縁一部	(25.0)	5.4+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナナ	ナナ、ハケメ	良	白色粒、黒色粒、石英	
59	324	35号竪穴建物	S24	カマノ下層	No.1	彌生土器	脚部	6.3	6.2+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	ハケメ、ナナ、指押さえ後ナナ	指押さえ後ナナ	良好	長石、石英、赤褐色粒	
60	325	36号竪穴建物	S26	埋土	-	彌生土器	口縁一部	-	2.6+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナナ	ナナ	良好	長石、角閃石	
60	326	36号竪穴建物	S26	埋土	-	彌生土器	口縁一部	-	2.7+	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナナ	ナナ、ハケメ	良	石英、長石、角閃石、黒色粒、白色粒、褐色粒	
60	327	36号竪穴建物	S26	埋土	-	彌生土器	口縁一部	-	3.2+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナナ	ナナ	良好	角閃石、雲母	
60	328	36号竪穴建物	S26	埋土	-	彌生土器	口縁一部	-	2.7+	-	灰黄褐(10YR4/2)	ナナ	ナナ	良好	長石、角閃石	
60	329	36号竪穴建物	S26	下層	No.15	彌生土器	口縁一部	-	2.2+	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナナ	ナナ	良	雲母、砂粒	
60	330	36号竪穴建物	S26	埋土	-	彌生土器	口縁一部	(26.2)	4.5+	-	橙(7.5YR6/6)	ナナ	ナナ	良好	長石、石英、輝石、角閃石	
60	331	36号竪穴建物	S26	下層	No.6	彌生土器	口縁一部	-	2.2+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナナ	ナナ	良好	石英、長石、角閃石、赤褐色粒	
60	332	36号竪穴建物	S26	埋土	-	彌生土器	口縁一部	-	3.2+	-	浅黄橙(7.5YR8/6)	ナナ	ナナ	良	雲母、砂粒、角閃石	
60	333	36号竪穴建物	S26	埋土	-	彌生土器	口縁一部	(15.4)	4.5+	-	灰黄(2.5Y7/2)	刻目、ナナ	ナナ	良好	長石、輝石	
60	334	36号竪穴建物	S26	下層	No.9	彌生土器	口縁一部	-	3.3+	-	にぶい橙(7.5YR7/4)	ナナ	ナナ	良	石英、長石、角閃石、黒色粒、白色粒	断面部が赤い
60	335	36号竪穴建物	S26	下層	-	彌生土器	口縁一部	(23.6)	2.3+	-	明黄褐(10YR6/6)	ナナ	ナナ、暗文	良	白色砂粒、黒色砂粒、角閃石	
60	336	36号竪穴建物	S26	埋土	-	彌生土器	脚部	(8.2)	4.6+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	剥離の為不明	剥離の為不明	良好	角閃石、輝石	
60	337	36号竪穴建物	S26	下層	No.7	彌生土器	脚部	6.8	4.4+	-	橙(7.5YR6/6)	ハケメ、ナナ	ナナ	良	長石、砂粒	
60	341	37号竪穴建物	S45	上層	-	彌生土器	口縁一部	-	4.1+	-	にぶい橙(7.5YR7/4)	ナナ	ナナ、動かキ後ナナ	良	輝石、長石、雲母	暗文
61	342	38号竪穴建物	S9	カマノ下層	-	彌生土器	口縁一部	-	2.2+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナナ	ナナ	良	輝石、長石	外面黒斑あり
61	343	38号竪穴建物	S9	埋土	-	彌生土器	口縁一部	-	2.5+	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナナ	ナナ	良	輝石、長石	暗文
61	344	38号竪穴建物	S9	埋土	No.4	彌生土器	脚部	9.7	7.7+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	ハケメ、ナナ	ハケメ	良好	2mm大の長石	
62	346	39号竪穴建物	S12	埋土	-	彌生土器	口縁~胴部	(26.6)	12.8+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナナ、沈線、ハケメ	ナナ	良	石英、長石、輝石、雲母	胴径:(28.3)cm
63	351	40号竪穴建物	S42	カマノ埋1	No.3	土師器	口縁~胴部	17.0	23.1+	-	橙(5YR7/6)	ナナ、ハケメ	ナナ、ハケメ	良	石英、長石、雲母	
63	352	40号竪穴建物	S42	埋土	No.5	彌生土器	口縁一部	(8.3)	5.9+	-	にぶい橙(5YR6/4)	ナナ、指頭圧痕	ナナ、指頭圧痕	良好	2mm大の長石	胴径:10.8cm
63	353	40号竪穴建物	S42	埋土	No.4	彌生土器	鉢	2/3	8.7	-	にぶい橙(5YR7/4)	ハケメ、ナナ	ナナ、動かキ後ナナ	良好	長石	底部穿孔あり
64	354	40号竪穴建物	S42	埋土	-	彌生土器	口縁~胴部	(15.3)	6.3+	-	灰褐(7.5YR5/2)	刻目、ナナ	ハケメ後ナナ、指頭圧痕	良好	長石	胴径:16.8cm

表17 吉原遺跡2区 出土土器観察表(6)

挿図 番号	報告	出土地点	出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	量量(cm)		色 調		調 整		焼成	胎土	備考
								口径	器高	底径	内面	外面	内面			
64	355	40号竪穴建物	S42	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	(23.2)	-	浅黄橙(7.5YR8/4)	刻目、ナテ	ナテ	良好	長石	
64	356	40号竪穴建物	S42	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	(23.9)	-	黒褐(2.5Y3/1)	刻目、ナテ	ナテ	良好	角閃石	
64	357	40号竪穴建物	S42	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	-	浅黄橙(10YR8/4)	ナテ、刻目	ナテ	良	長石、石英、輝石、金雲母	
64	358	40号竪穴建物	S42	上層	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	-	浅黄(2.5Y7/3)	ナテ	ナテ	良	長石、輝石、角閃石、雲母	
64	359	40号竪穴建物	S42	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	-	にふい黄(2.5Y6/3)	ナテ	ナテ	良	長石、角閃石、雲母	
64	360	40号竪穴建物	S42	上層	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	-	にふい黄橙(10YR7/3)	ナテ	ナテ	良	石英、長石、角閃石、黒色粒、褐色粒	穿孔あり
64	361	40号竪穴建物	S42	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	-	橙(5YR7/6)	ナテ	ナテ	良	角閃石、長石、小石	暗文
64	362	40号竪穴建物	S42	埋土	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	-	にふい黄橙(10YR7/4)	ナテ	ナテ	良	長石、雲母	暗文
64	363	40号竪穴建物	S42	上層	-	弥生土器	高坏	坏部1/4	(22.0)	-	橙(2.5YR6/8)	ナテ、ナテ	ナテ	良	長石、輝石、角閃石、石英	暗文
64	364	40号竪穴建物	S42	埋土	-	弥生土器	甕	口縁部	18.8	-	にふい橙(7.5YR6/4)	ナテ	ナテ	良好	赤褐色粒	
64	365	40号竪穴建物	S42	埋土	-	弥生土器	甕	底部1/4	(10.0)	-	にふい橙(7.5YR7/4)	ナテ	ナテ	良好	長石、石英	
64	366	40号竪穴建物	S42	8層上	-	弥生土器	甕	脚部一部	(9.0)	-	にふい橙(7.5YR7/4)	ナテ	ナテ	良好	長石	
64	367	40号竪穴建物	S42	埋土	-	弥生土器	甕	脚部1/2	(6.6)	-	にふい褐(7.5YR5/4)	ナテ	ナテ	良好	角閃石、雲母、長石	
64	368	40号竪穴建物	S42	埋土	-	土師器	壺	口縁一部	-	-	橙(5YR6/6)	ナテ	ナテ	良好	赤褐色粒、角閃石、雲母	
64	369	40号竪穴建物	S42	埋土	-	土師器	坏身	1/3	(12.9)	6.2	にふい橙(5YR6/4)	ナテ	ナテ	良	白色砂粒、黒色砂粒、角閃石	磨滅で不明瞭
64	370	40号竪穴建物	S42	埋土	-	土師器	坏蓋	ほぼ完形	14.5	-	にふい橙(7.5YR6/4)	ナテ	ナテ	良	長石、角閃石、黒色粒、褐色粒	磨滅で不明瞭
66	373	41号竪穴建物	S20	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	-	橙(7.5YR7/6)	ナテ	ナテ	良	石英、長石、角閃石	
66	374	41号竪穴建物	S20	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	-	橙(7.5YR7/6)	ナテ	ナテ	良	石英、長石、角閃石	
66	375	41号竪穴建物	S20	埋土	-	弥生土器	甕	口縁~胴部	(25.0)	-	黄褐(2.5Y5/3)	ナテ、ナテ	ナテ	良好	赤褐色粒、雲母	
66	376	41号竪穴建物	S20	加ナ	No.1	土師器	高坏	口縁一部	(20.9)	-	にふい橙(7.5YR7/6)	ナテ、ナテ	ナテ	良好	長石、角閃石、白色粒	
66	377	41号竪穴建物	S20	加ナ	-	土師器	甕	口縁一部	-	-	橙(7.5YR6/6)	ナテ	ナテ	良	褐色粒、砂粒	
66	378	41号竪穴建物	S20	埋土	-	須恵器	坏身	口縁一部	-	-	暗灰黄(2.5Y4/2)	ナテ、回転ナテ	ナテ	良	石英、長石、白色粒、黒色粒	
67	379	43号竪穴建物	S32	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	-	にふい黄橙(10YR7/3)	ナテ	ナテ	良	雲母、砂粒	
68	380	42号竪穴建物	S31	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	-	にふい黄橙(10YR6/3)	刻目、ナテ	ナテ	良	石英、長石、角閃石、金雲母、褐色粒	
68	381	42号竪穴建物	S31	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	-	黄褐(2.5YR5/3)	刻目、ナテ	ナテ	良	長石、雲母、砂粒	
68	382	42号竪穴建物	S31	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	-	にふい黄(2.5YR6/3)	ナテ	ナテ	良好	角閃石、長石	
68	383	42号竪穴建物	S31	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	-	にふい黄橙(10YR7/3)	ナテ	ナテ	良	1~2mm大の白・黒・茶色粒、輝石	刻目
68	384	42号竪穴建物	S31	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	-	浅黄橙(10YR8/4)	ナテ	ナテ	良好	角閃石、雲母、石英、白色粒	
68	385	42号竪穴建物	S31	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	(25.4)	-	にふい黄橙(7.5YR7/2)	ナテ	ナテ	良	石英、長石、角閃石、雲母	

表18 吉原遺跡2区 出土土器観察表(7)

挿図 番号	報告 出土地点	調査時 出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)		色 調		調 整		焼成	胎土	備考
							口径	器高	底径	内面	外面	内面			
68	42号竪穴建物	S31	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.4+	-	浅黄(5Y7/3)	にぶい黄橙(10YR6/4)	ナ	良好	長石、雲母	
68	42号竪穴建物	S31	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.1+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	橙(7.5YR7/6)	ナ	良好	雲母、角閃石、石英、長石	
68	42号竪穴建物	S31	No.2	弥生土器	甕	口縁～胴部	(21.5)	9.8+	-	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	ナ	良	白色粒、黒褐色粒、角閃石	
68	42号竪穴建物	S31	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.1+	-	明黄褐(10YR7/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナ	良好	角閃石、赤褐色粒、石英	
68	42号竪穴建物	S31	-	弥生土器	甕	口縁～胴部	(32.4)	8.7+	-	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	ナ	良	長石、角閃石、石英、雲母、輝石	
68	42号竪穴建物	S31	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.1+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	灰黄褐(10YR4/2)	ナ	良好	赤褐色粒、角閃石、雲母	
68	42号竪穴建物	S31	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	1.7+	-	浅黄橙(10YR8/4)	灰白(10YR8/2)	ナ	良好	雲母、角閃石	
68	42号竪穴建物	S31	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	2.8+	-	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	ナ	良好	角閃石、赤褐色粒	
68	42号竪穴建物	S31	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	3.7+	-	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	ナ	良好	赤褐色粒、角閃石、雲母	
68	42号竪穴建物	S31	-	弥生土器	鉢	口縁～底部	(13.6)	4.9	(3.4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	淡黄(2.5Y6/3)	ナ	良	黒色粒、角閃石、石英	穿孔あり
68	42号竪穴建物	S31	No.4	弥生土器	甕	胴部	-	7.2+	6.5	にぶい黄(2.5Y6/3)	黒褐(2.5Y3/1)	ナ	良好	角閃石、長石、雲母	内面スス付着
68	42号竪穴建物	S31	-	弥生土器	甕	胴部	-	5.4+	(7.0)	にぶい黄橙(10YR7/4)	黒(10YR2/1)	ナ	良好	輝石、長石、赤褐色粒	内面スス付着
68	42号竪穴建物	S31	-	土器	甕	口縁一部	-	4.5+	-	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナ	良	砂粒、雲母	
70	44号竪穴建物	S21	-	弥生土器	甕	胴部一部	-	-	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	刻目突帯、ナ	ナ	良	石英、長石、黒曜石	
71	6号土坑	S8	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.2+	-	黒褐(2.5Y3/1)	にぶい黄(2.5Y6/4)	ナ	良好	雲母、石英	
71	6号土坑	S8	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.2+	-	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	ナ	良	長石、雲母	甕柄か？
71	6号土坑	S8	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.7+	-	赤褐(5YR4/6)	赤褐(5YR4/6)	ナ	良	白色砂粒、石英、雲母	
71	6号土坑	S8	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.3+	-	浅黄橙(10YR8/4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナ	良好	石英、長石	
71	6号土坑	S8	No.3	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.3+	-	橙(5YR6/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	ナ	良	長石、雲母	
71	6号土坑	S8	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.5+	-	にぶい橙(7.5YR7/4)	浅黄(2.5YR7/3)	ナ	良	白色粒、黒色粒	
71	6号土坑	S8	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.4+	-	灰黄褐(10YR5/2)	明黄褐(10YR7/6)	ナ	良好	角閃石、石英、長石	
72	6号土坑	S8	-	弥生土器	甕	口縁一部	(33.0)	3.8+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	明黄褐(10YR7/6)	ナ	良	白色粒、黒色粒、角閃石、4mmの長石	
72	6号土坑	S8	-	弥生土器	甕	口縁一部	17.6	7.0+	-	橙(7.5YR6/6)	明黄褐(10YR6/6)	ナ	良好	角閃石、石英、赤褐色粒	
72	6号土坑	S8	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	3.8+	-	橙(7.5YR6/6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナ	良	石英、角閃石	
72	6号土坑	S8	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	3.3+	-	明黄褐(10YR7/6)	にぶい黄(2.5Y6/4)	ナ	良好	黒色粒	
72	6号土坑	S8	No.3	弥生土器	甕	胴部一部	-	9.2+	-	橙(7.5YR7/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	ナ	良好	石英、雲母、角閃石	鈎状浮文あり
75	7号土坑	S36	-	弥生土器	甕	口縁一部	(19.6)	3.6+	-	黒褐(2.5Y3/1)	黄灰(2.5Y4/1)	ナ	良	白色砂粒、黒色砂粒、角閃石	口縁一部に石の圧痕
75	7号土坑	S36	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.2+	-	浅黄橙(7.5YR8/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	ナ	良好	角閃石、白色粒	
75	7号土坑	S36	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	6.2+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄褐(10YR5/3)	ナ	良	長石、角閃石、褐色粒	
75	7号土坑	S36	-	弥生土器	甕	胴部一部	-	17.0+	-	灰黄褐(10YR6/2)	褐灰(10YR4/1)	ナ	良好	長石、角閃石	
75	8号土坑	S39	-	弥生土器	甕	頸部～底部	-	21.0+	-	橙(5YR6/6)	にぶい橙(7.5YR5/4)	ナ	良	長石、褐色粒、白色粒	胴径(22.0)mm把手あり

表19 吉原遺跡2区 出土土器観察表(8)

挿図 番号	報告	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	量(㎝)		色調		調整		焼成	胎土	備考	
		調査時	報告						口径	器高	底径	内面	外面	内面				
75	421	9号土坑	S17	上層	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.1+	-	明黄褐(10YR7/6)	にぶい黄橙(10YR6/3)	ナテ	ナテ	良	白色粒、黑色粒、石英	
75	422	9号土坑	S17	上層	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.4+	-	灰黄褐(10YR5/2)	にぶい黄橙(10YR7/3)	ナテ	ナテ	良好	石英、雲母、長石	
75	423	9号土坑	S17	埋土	-	弥生土器	甕	胴部一部	-	1.8+	(9.7)	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/8)	ハケム、ナテ	ナテ	良	白色粒、黑色粒、角閃石	
75	424	10号土坑	S19	埋5	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.1+	-	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナテ、沈線?	ナテ	良	2mm程度の白色粒、石英、雲母	
75	425	13号土坑	S41	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	1.6+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄橙(10YR8/3)	ナテ、刻目	ナテ	良好	角閃石、黑色粒、褐色粒	外面スス付着
75	426	13号土坑	S41	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.3+	-	にぶい黄橙(10YR6/3)	浅黄(2.5Y7/4)	ナテ	ナテ	良好	雲母、角閃石、長石	外面スス付着
75	427	13号土坑	S41	埋土	-	弥生土器	甕?	口縁一部	-	2.4+	-	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/6)	ナテ	ナテ	良好	1~3mm程度の長石、石英	外面黒斑あり
77	428	2号溝	S4	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	1.7+	-	灰黄褐(10YR4/2)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナテ、刻目	ナテ	良	石英、角閃石、黒曜石	
77	429	2号溝	S4	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.7+	-	浅黄(2.5Y7/4)	明黄褐(10YR7/6)	ナテ	ナテ	良好	長石、雲母	
77	430	2号溝	S4	埋土	-	弥生土器	甕	胴部一部	-	4.0+	6.7	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ハケム、ナテ	ナテ	良	石英、長石、角閃石、雲母、黑色粒	
77	431	2号溝	S4	埋土	-	須恵器	高台付 碗	底部	-	2.0+	6.7	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	回転ナテ、ナテ、指 押さえ	回転ナテ	良好	石英、角閃石	
78	432	D-123	8-3層	-	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	4.5+	-	黄褐(2.5Y5/3)	黒褐(2.5Y3/2)	条痕文	ナテ	良	白色粒、角閃石	
78	433	F-117	8-3層	-	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	4.7+	-	灰黄褐(10YR6/2)	灰オリーブ(5Y4/2)	条痕文	条痕文	良好	赤褐色粒、輝石、石英	
78	434	E-117,118	8-3層	-	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	4.9+	-	黒褐(2.5Y3/2)	にぶい黄褐(10YR5/4)	条痕文	ナテ	良好	長石、角閃石	
78	435	D-E-123	8-3層下	-	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	4.3+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	暗灰黄(2.5Y5/2)	条痕文	条痕文	良好	赤褐色粒、角閃石、長石、雲母	
78	436	D-122	8-3層下	-	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	5.1+	-	黄灰(2.5Y4/1)	黄灰(2.5Y4/1)	ナテ	ナテ、ハテシキ	良好	長石、角閃石	
78	437	E-117,118	8-3層	-	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	5.4+	-	オリーブ黒(5Y3/1)	黄褐(2.5Y5/3)	文様	ナテ	良好	白色粒、輝石、雲母	
78	438	D-118	8-3層	-	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	7.0+	-	にぶい黄(2.5Y6/3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	条痕文	条痕文	良好	白色粒、角閃石、雲母	
78	439	E-117	8-3層	-	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	6.3+	-	黒褐(2.5Y3/1)	暗灰黄(2.5Y5/2)	刺突文、ナテ	シガキ	良好	角閃石、長石、黑色粒	
78	440	E-117,118	8-3層	-	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	5.8+	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	条痕文	ナテ	良	角閃石	穿孔あり
78	441	E-117,118	8-3層	-	-	縄文土器	深鉢	口縁一部	-	4.4+	-	にぶい黄(2.5Y6/4)	黒褐(2.5Y3/2)	ナテ	ナテ	良	角閃石、白色粒、7mm程度の 長石	穿孔あり
78	442	F-116	8層下	-	-	縄文土器	浅鉢	口縁一部	-	3.5+	-	にぶい黄褐(10YR5/4)	灰黄褐(10YR5/2)	シガキ	シガキ	良	角閃石、砂粒	
78	443	E-120	8-3層下	-	-	縄文土器	浅鉢	口縁一部	-	3.0+	-	オリーブ黒(5Y3/1)	オリーブ黒(5Y3/1)	ハテシキ	ナテ	良好	長石	リボン状突起
78	444	F-118	8-2層下	-	-	縄文土器	浅鉢	口縁一部	-	4.7+	-	にぶい赤褐(5YR5/4)	にぶい黄褐(10YR5/4)	シガキ	シガキ	良	白色粒、黑色粒、褐色 粒、角閃石	リボン状突起 調整不明瞭
78	445	D-E-121	-	-	-	縄文土器	浅鉢	口縁~胴部	-	6.4+	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	シガキ	シガキ	良	長石、雲母	磨滅の為不明瞭
78	446	D-E-120	8-3層上	-	-	縄文土器	深鉢	胴部一部	-	6.7+	-	黒褐(2.5Y3/2)	黒(2.5Y2/1)	細織痕文	シガキ	良	長石、雲母、角閃石	
78	447	D-E-120	8-3層上	-	-	縄文土器	深鉢	底部一部	-	5.4+	-	明黄褐(10YR7/6)	暗灰黄(2.5Y5/2)	文様、ナテ	ナテ	良好	砂粒、輝石、雲母	
78	448	E-117,118	8-3層	-	-	縄文土器	深鉢	底部	-	3.5+	(9.2)	にぶい黄橙(10YR6/4)	暗灰黄(2.5Y5/2)	ハケム	ハケム	良	白色粒、角閃石	成形、調整粗い
78	449	D-E-119	8-3層	-	-	縄文土器	深鉢	底部	-	4.4+	7.6	橙(7.5YR6/6)	褐灰(7.5YR4/1)	ハテシキ	ハテシキ	良	白色粒、石英、角閃石	
79	450	D-124	8-3層下	-	-	弥生土器	甕	口縁一部	(20.8)	5.5+	-	橙(5YR6/6)	にぶい褐(7.5YR5/4)	刻目、ナテ	ナテ	良好	黑色粒、砂粒	沈線

表20 吉原遺跡2区 出土土器観察表(9)

挿図 番号	報告	出土地点		取上 層位 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)		色 調		調 整		焼成	胎土	備考
		報告	調査時					口径	器高	底径	内面	外面	内面			
79	451	D-E-123	8-3層下	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.6+	-	橙(5YR6/6)	ナリ	ナリ	良好	褐色粒、角閃石	
79	452	F-117	8-3層	-	弥生土器	甕	口縁~胴部	(22.2)	6.9+	-	にふい黄橙(10YR7/4)	ナリ	ナリ	良好	白色砂粒、黒色砂粒、角閃石	
79	453	D-122	8-3層	8-3層上	弥生土器	甕	口縁一部	-	7.2+	-	にふい黄橙(10YR7/4)	ナリ	ナリ	良好	角閃石、石英	口縁部、胴部に沈線?
79	454	E-120	8-3層下	-	弥生土器	甕	口縁一部	(32.6)	9.4+	-	浅黄橙(7.5YR8/4)	ナリ	ナリ	良好	石英、長石	
79	455	E-F-122	8-3層上	-	弥生土器	甕	口縁~胴部	21.5	15.7+	-	灰黄褐(10YR4/2)	ナリ、ハナメ	ナリ	良好	雲母	磨滅の為調整不明瞭 胴径:21.3cm
79	456	D-E-123	8-3層下	-	弥生土器	甕	口縁一部	(20.4)	6.1+	-	にふい黄橙(10YR7/4)	ナリ	ナリ	良好	長石、雲母	
79	457		調査区内	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.3+	-	橙(5YR7/6)	ナリ	ナリ	良好	長石、石英、角閃石、雲母、輝石、砂粒	
79	458		南	-	弥生土器	甕	口縁1/4	(41.0)	7.3+	-	橙(7.5YR6/6)	ナリ	ナリ	良好	長石、雲母、赤褐色粒	甕棺の可能性が高い
80	459	F-117	8-3層	-	弥生土器	甕	口縁~胴部	(22.8)	14.5+	-	にふい黄橙(10YR7/4)	ナリ、沈線、ハナメ	ナリ、ハナメ	良好	石英、長石、雲母、角閃石	
80	460	F-119	8-2層	-	弥生土器	甕	口縁一部	(19.6)	3.8+	-	明黄褐(2.5Y7/6)	ナリ、条痕文	ナリ、ナシ	良好	白色砂粒、黒色砂粒、長石	
80	461	E-116	8-3層	-	弥生土器	甕	口縁一部	(21.6)	5.2+	-	にふい黄橙(10YR7/3)	ナリ	ナリ	良好	黒色粒、茶色粒、角閃石	
80	462	包含層 G-H-123,124 H-I-122 1層		-	弥生土器	甕	口縁一部	(26.0)	2.5+	-	橙(7.5YR6/6)	ナリ	ナリ	良好	長石、石英、角閃石、黒雲母	
80	463	F-118,119	8-3層	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.1+	-	にふい黄橙(10YR5/4)	ナリ	ナリ	良好	角閃石、黒色粒、長石	
80	464	北西	8-3層	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	5.4+	-	明黄褐(2.5Y7/6)	ナリ	ナリ	良好	角閃石、砂粒	
80	465		調査区内	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	7.3+	-	にふい黄橙(10YR6/4)	ナリ	ナリ、ハナメ	良好	黒色粒、白色粒	
80	466	F-117 E-F-118	8-2層	-	弥生土器	甕	口縁一部	(26.0)	6.7+	-	明黄褐(10YR6/6)	ナリ	ナリ	良好	長石、石英、角閃石	
80	467		南側中央部	-	弥生土器	甕	口縁一部	(29.5)	8.0+	-	にふい黄橙(10YR7/4)	ナリ	ナリ、ハナメ後ナリ	良好	長石、角閃石、雲母	
80	468	F-116,117	8-2層	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	4.4+	-	にふい黄橙(10YR7/4)	ナリ	ハナメ、ナリ	良好	黒色粒、茶色粒、雲母	
80	469	E-121,122 G-H-125		-	弥生土器	甕	口縁~胴部	(28.3)	19.7+	-	灰黄褐(10YR4/2)	ナリ、ハナメ	ナリ、ハナメ	良好	長石、角閃石	胴径:(28.2)cm
81	470	E-122,123		-	弥生土器	壺	口縁~胴部	18.6	20.0+	-	にふい黄褐(10YR5/4)	ナリ、ハナメ	ナリ、ハナメ	良好	白色粒、石英、角閃石、雲母	胴径:(29.2)cm
81	471	F-125		-	弥生土器	甕	口縁~胴部	(16.4)	19.9+	-	にふい黄橙(10YR6/4)	ナリ、ハナメ	ナリ、ハナメ	良好	黒色粒、角閃石	胴径:(20.6)cm
81	472	F-117,118		-	弥生土器	壺	口縁~胴部	(19.0)	19.8+	-	明褐(7.5YR5/6)	ナリ、ナシ	ナリ	良好	白色粒、黒色粒、角閃石	暗文 胴径:(23.8)cm
81	473	E-F-117	8-3層	-	弥生土器	壺	口縁1/4	(19.6)	8.8+	-	にふい橙(7.5YR7/4)	ナリ	ナリ	良好	黒色粒、角閃石、砂粒	暗文
81	474	F-116,117	埋下層	8-3層	弥生土器	壺	口縁1/4	(17.6)	6.7+	-	にふい黄橙(10YR6/4)	ハナシ	ナリ	良好	黒色粒、3mm大の白色粒、角閃石	
81	475	E-118		-	弥生土器	壺	口縁一部	(15.4)	5.4+	-	橙(7.5YR6/5)	ナリ	ナシ	良好	白色砂粒、黒色砂粒、長石、雲母、角閃石	
81	476	F-118	8-2層下	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	5.4+	-	明赤褐(2.5YR5/6)	ナリ	ハナシ	良好	灰色粒、白色粒	暗文
81	477	P283		-	弥生土器	壺	口縁一部	-	4.4+	-	にふい黄橙(10YR6/3)	ナリ、ハナメ	ナリ	良好	角閃石、雲母	
81	478		東	-	弥生土器	高坏	口縁一部	-	3.5+	-	にふい赤褐(5YR5/4)	ナリ	ナリ	良好	茶色粒、黒色粒	暗文
82	479	E-F-117,118,119	8-2層	8-3層下	弥生土器	壺	底部~胴部	-	12.8+	6.7	にふい黄橙(10YR6/3)	ハナメ	ハナメ	良好	長石、角閃石	

表21 吉原遺跡2区 出土土器観察表(10)

補図 番号	報番	出土地点		取上 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)			色 調			調 整		焼成	胎土	備考
		報告	調査時						口径	器高	底径	内面	外面	内面	外面	内面			
82	480	E-122	8-3層下	-	-	弥生土器	壺	胴部一部	-	10.0+	-	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	ミカキ、ナデ、 線刻	ハケム、ナデ	良	長石、石英、雲母、角閃石	先田式土器	
82	481	E-122,123		-	-	弥生土器	壺	口縁~胴部	-	13.8+	-	にふい黄橙(10YR7/3)	にふい黄橙(10YR7/4)	ナデ、洗線、ハケム	ナデ、ハケム	良	石英、長石、雲母、角閃石	胴径(30.6)mm	
82	482	F-119	下層	-	-	弥生土器	甕	胴部~底部	-	7.9+	7.5	にふい黄橙(10YR7/4)	黒褐(2.5Y3/1)	ナデ	ナデ、指頭圧痕	良	石英、長石、白色粒、黒色粒、金雲母		
82	483	D-124	8-3層下	-	-	弥生土器	甕	底部	-	6.0+	7.0	にふい黄橙(10YR6/4)	にふい黄褐(10YR5/3)	ハケム、ナデ	ケスリ、ナデ	良	長石		
82	484	D-124	8-3層下	-	-	弥生土器	甕	底部	-	5.7+	7.2	浅黄(2.5Y7/4)	褐灰(10YR5/1)	ナデ	ナデ	良好	長石、雲母	外面は磨滅で不明瞭	
82	485	D-E-123	E-118 8-3層下	-	-	弥生土器	甕	胴部~底部	-	9.3+	5.3	橙(5YR6/6)	明黄褐(10YR7/6)	ナデ	ナデ	良	2mm次の長石、白色粒、雲母		
82	486	E-118	8-2層	-	-	弥生土器	甕	底部	-	6.5+	9.2	橙(5YR6/6)	にふい黄褐(10YR5/4)	ハケム、ナデ	ナデ	良	角閃石、長石、砂粒		
82	487	E-117,118	8-3層	-	-	弥生土器	甕	底部	-	5.4+	7.0	浅黄橙(10YR8/4)	暗灰黄(2.5Y5/2)	ハケム、ナデ	ナデ	良	石英、長石、角閃石		
82	488	調査区内		-	-	弥生土器	甕	底部	-	5.0+	6.4	にふい黄橙(10YR6/4)	褐灰(10YR4/1)	ハケム、ナデ	ナデ	良	角閃石、石英		
82	489	南		-	-	須恵器	蓋	1/5	(136)	3.4+	-	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y6/2)	ハラヌ <sup>1)</sup> 後回転ナ 具ナデ	回転ナデ、ナデ	良	白色粒	天井部に砂付着	
82	490	F-117,118		-	-	須恵器	坏	1/4	(96)	5.0+	-	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	回転ナデ、ナデ、工 具ナデ	回転ナデ、ナデ	良	蜜、白色粒、石英、角閃石	底部に横方向の工具ナデ	
82	491	D-121,120E-120	8-2~3層8-3層下層	-	-	瓦質土器	火鉢	口縁~胴部	-	8.8+	-	黒褐(10YR3/1)	にふい橙(7.5YR6/4)	刻目、ナデ	ナデ	良	白色粒、石英、黒色粒、角閃石	刻目2ヶ所あり	

※カッコ書きは復元値、数値の後に+が付くものは残存値

表22 吉原遺跡2区 出土土器観察表(1)

挿図 番号	報番	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	備考
		報告	調査時				長さ	幅	厚さ			
41	174	3号	覆棺墓	埋土	-	打製石鏃	2.10	1.05	0.45	0.50	黒曜石	完形
43	188	17号	竪穴建物	埋土	-	石匙	5.10	4.90+	1.05	19.80	安山岩	1/2上
45	196	19号	竪穴建物	埋土	-	打製石斧	10.70	5.80	2.05	129.50	輝石安山岩	1/2上
47	202	21号	竪穴建物	埋土	-	打製石鏃	1.95+	1.95	0.40	0.80	安山岩	完形
48	216	23号	竪穴建物	埋土	-	打製石鏃	2.20	1.10+	0.35	0.60	黒曜石	1/2上
49	226	24号	竪穴建物	上層	-	打製石鏃	1.30+	1.50	0.30	0.20	安山岩	完形
49	227	24号	竪穴建物	埋土	-	打製石鏃	1.75+	1.45	0.55	1.10	安山岩	1/2上
49	228	24号	竪穴建物	埋土	-	打製石鏃	1.25+	1.65	0.40	0.70	黒曜石	1/2上
49	229	24号	竪穴建物	埋土	-	打製石鏃	2.75	1.55	0.45	1.10	黒曜石	完形 針尾産
49	230	24号	竪穴建物	埋土	-	打製石鏃	2.10+	1.85	0.40	1.20	安山岩	完形
51	240	25号	竪穴建物	埋土	-	打製石鏃	2.15+	1.10	0.25	0.20	安山岩	完形
51	241	25号	竪穴建物	埋土	-	打製石鏃	2.60+	1.60	0.45	1.60	安山岩	1/2上
51	242	25号	竪穴建物	埋土	-	打製石鏃	3.95+	5.65	1.00	18.80	安山岩	1/2下 阿蘇周辺産
52	247	26号	竪穴建物	下層	-	磨製石鏃	2.60+	2.90	0.30	2.00	粘板岩	1/2上
52	248	26号	竪穴建物	下層	-	砥石	10.00+	7.40	3.10	419.50	砂岩	1/2下

表23 吉原遺跡2区 出土石器観察表(2)

挿入 番号	報番	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	法量(cm)			材質	備考
		報告	調査時				長さ	幅	厚さ		
52	249	26号竪穴建物	S14	下層	-	砥石	19.40+	18.00+	5.80	2509.90	1/2上 砂岩
52	251	27号竪穴建物	S15	埋土	-	打製石鏃	3.15	1.85	0.55	2.70	完形 安山岩
52	256	28号竪穴建物	S16	埋土	-	砥石	11.00	8.40	1.60	184.30	1/2下 砂岩
55	275	30号竪穴建物	S25	上層	-	打製石鏃	1.80+	1.05	0.20	0.20	完形 黒曜石
55	276	30号竪穴建物	S25	埋土	-	打製石鏃	1.85	1.35	0.30	0.60	完形 安山岩
56	281	31号竪穴建物	S34	埋土	-	打製石鏃	2.95+	1.50	0.30	1.00	完形 安山岩
56	293	32号竪穴建物	S35	埋土	-	打製石斧	13.35	6.50	1.30	94.30	1/2上 輝石安山岩
59	313	34号竪穴建物	S22	埋土	-	磨製石鏃	2.75	1.90	0.30	1.60	完形 粘板岩
59	314	34号竪穴建物	S22	埋2	-	打製石鏃	2.35+	1.75	0.35	1.00	完形 安山岩
60	338	36号竪穴建物	S26	上層	-	打製石鏃	1.95+	1.25	0.35	0.70	完形 黒曜石
60	339	36号竪穴建物	S26	埋土	-	打製石鏃	1.20	1.15	0.40	0.30	完形 黒曜石
60	340	36号竪穴建物	S26	埋土	-	快入柱状片刃石斧	11.30	3.20	3.80	254.90	完形 安山岩
62	347	39号竪穴建物	S12	埋土	-	磨製石鏃	2.20	1.50	0.25	0.80	1/2上 粘板岩
62	348	39号竪穴建物	S12	埋土	-	打製石鏃	2.10+	1.40	0.40	1.20	1/2上 安山岩
62	349	39号竪穴建物	S12	埋土	-	砥石	28.50	24.50	6.10	5126.90	完形 砂岩
63	350	40号竪穴建物	S42	埋土	-	支脚	20.50	10.30	5.50	1790.40	完形 チャート
64	371	40号竪穴建物	S42	埋土	-	石匙	3.70	3.55	0.55	5.00	1/2上 安山岩
64	372	40号竪穴建物	S42	埋土	-	勾玉	2.15	1.10	0.40	1.10	完形 輝緑凝灰岩
69	399	42号竪穴建物	S31	上層	-	打製石鏃	2.35+	1.05	0.30	0.70	完形 黒曜石
69	400	42号竪穴建物	S31	埋土	-	打製石鏃	6.20	12.10	1.55	135.10	完形 砂岩
69	401	42号竪穴建物	S31	埋土	-	砥石	17.00	11.00	6.40	1785.70	1/2下 砂岩
69	402	42号竪穴建物	S31	埋土	-	砥石	14.70	10.20	5.00	966.80	1/2下 砂岩
83	494		Pit147		-	磨製石鏃	3.60	2.30	0.30	2.40	1/2上 粘板岩
83	495		G・H-125		-	磨製石鏃	4.20	2.85	0.35	4.90	1/2上 粘板岩
83	496		I-122 南西		-	磨製石鏃	2.20+	2.00	0.20	0.90	1/2下 粘板岩
83	497		F-118 8-2,3層		-	磨製石鏃	2.10+	2.40	0.20	1.40	1/2上 粘板岩
83	498		Pit69		-	打製石鏃	2.45+	1.15	0.45	1.10	1/2上 チャート
83	499		E・F-126		-	打製石鏃	2.20	1.90	0.30	0.90	1/2上 安山岩
83	500		I-120		-	打製石鏃	2.15	1.25	0.40	0.70	完形 安山岩
83	501		南西部		-	打製石鏃	2.45	1.75	0.30	1.00	完形 黒曜石
83	502		東側		-	打製石鏃	2.15	1.60	0.35	1.10	完形 安山岩
83	503		E-117 8-3層		-	打製石鏃	4.40	2.15	0.60	3.10	完形 黒曜石
83	504		I-120		-	打製石鏃	2.85+	2.15	0.50	2.20	完形 黒曜石



表24 吉原遺跡2区 出土石器観察表(3)

挿図 番号	報番	出土地点		出土 層位	取上 番号	器種	法量(cm)			(g)		材質	備考
		報告	調査時				長さ	幅	厚さ	長さ	重量		
84	505		H-119 8層下		-	石包丁	2.70	7.70	0.40	13.80		1/2下	
84	506		E-F-125,126		-	石匙	3.10	4.45	0.90	8.60		安山岩	完形
84	507		E-122 8-3層		-	石匙	6.70	4.65	1.80	40.40		安山岩	完形
84	508		G-126		-	石匙	6.60	3.25	1.00	18.60		安山岩	完形
84	509		P-335		-	石匙	4.50+	2.80	1.00	11.10		安山岩	1/2上
84	510		東半		-	石鏃	3.45	2.15	0.90	4.30		黒曜石	
84	511		北西 8-3層		-	打製石鏃	4.25	10.30	1.20	46.70		安山岩	
84	512		Pt219		-	磨製石斧	16.20	4.80	3.40	279.70		蛇紋岩?	1/2上
84	513		E-118 8-3層		-	磨製石斧	8.40	4.50	1.70	98.40		頁岩	
85	514		D-123 8層上		-	砥石	3.70	2.90	1.40	17.10		頁岩	
85	515		E-F-122 8-3層		-	砥石	5.52	1.80	0.85	13.00		砂岩	完形(携帯用)
85	516		P-291		-	砥石	8.00	8.40+	3.10	314.50		砂岩	1/2下

※カッコ書きは復元値、数値の後に+が付くものは残存値

表25 吉原遺跡2区 出土土製品観察表

挿図 番号	報番	出土地点		取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)			(g)		色調	焼成	胎土	備考
		報告	調査時					長さ	幅	孔径	長さ	幅				
82	492		南中央	-	弥生土器	紡錘車	完形	2.2	2.0	0.6	-	-	橙(7.5YR6/6)	良好	砂粒	
82	493		G・H	-	縄文土器	紡錘車	完形	4.0	4.1	0.4~0.6	-	-	明黄褐(10YR7/6)	良好	雲母をわずかに含む	内外面にミカキ

表26 吉原遺跡2区 出土鉄器観察表

挿図 番号	報番	出土地点		取上 番号	出土 層位	器種	法量(cm)			(g)		備考
		報告	調査時				長さ	幅	厚さ	長さ	重量	
61	345	38号竪穴建物	S9	-	埋土	鉄鏃	3.15+	0.70	0.40	2.20		基部、穿孔あり
85	517		I-120 埋下層	-		板状鉄斧	6.00+	3.20+	0.80	37.80		
85	518		E-F-117	-		鉄斧?	5.00+	3.5	0.40	26.30		端部が厚い
85	519		D-123	-		不明	2.30+	5.30+	0.30	13.40		穿孔2ヶあり

※カッコ書きは復元値、数値の後に+が付くものは残存値

表27 吉原遺跡3区 出土土器観察表

挿図 番号	報告	出土地点	調査時	出土 層位	取上 番号	器種	器形	残存度	法量(cm)		色調		調整		焼成	胎土	備考
									口径	器高	底径	内面	外面	内面			
90	523	45号竪穴建物	S2	埋2	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.9+	にぶい黄(2.5Y6/3)	にぶい黄橙(10YR6/4)	ナデ	ナデ	良好	褐色粒、白色粒、石英、角閃石	一部にスス付着か
90	524	45号竪穴建物	S2	埋2	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	2.9+	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ、ミカキ	ナデ	ナデ	良好	黒色粒	
90	525	45号竪穴建物	S2	埋2	-	弥生土器	壺	口縁一部	-	1.5+	にぶい黄(2.5Y6/3)	浅黄(2.5Y7/3)	ミカキ、ナデ	不明	良	黒色粒、褐色粒、角閃石	穿孔あり
93	526	17号土坑	S4	埋土	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	1.5+	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ	ナデ	良好	石英	
93	527	18号土坑	S8	埋土	-	弥生土器	壺	胴部一部	-	3.6+	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄(2.5Y7/3)	ナデ	ナデ	良好	白粒、石英	外面に赤色顔料
95	528	V-98		-	-	縄文土器	鉢	口縁一部	-	3.8+	にぶい黄(2.5Y6/4)	灰(5Y5/1)	ナデ、ミカキ、条痕?	ナデ、ミカキ	良好	白色粒	
95	529	C-92		-	-	縄文土器	鉢	口縁一部	-	3.0+	黄褐(2.5Y5/3)	にぶい黄橙(10YR6/4)	ナデ、条痕	ナデ	良好	白色粒	外面一部に赤色顔料?
95	530	P-19		-	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	1.5+	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	ナデ	ナデ	良好	石英?	
95	531	T-97		-	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.2+	にぶい黄(7.5YR7/4)	橙(7.5YR7/6)	ナデ	ナデ	良好	石英、褐色粒、角閃石	口唇部に赤色顔料 穿孔あり
95	532	Q-98 8層		-	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	4.4+	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	ナデ	ナデ	良好	石英	
95	533	P-Q-99 8層		-	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.5+	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ	ナデ	良好	石英、角閃石、白色粒	蓋棺の可能性あり
95	534	P-1		-	-	弥生土器	甕	口縁一部	(22.8)	2.3+	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ	ナデ	良好	石英、角閃石、褐色粒	
95	535	P-181, R-98		-	-	弥生土器	甕	口縁一部	-	3.2+	にぶい黄(2.5Y6/3)	浅黄(2.5Y7/4)	ナデ	ナデ	良好	石英	
95	536	P-161		-	-	弥生土器	甕	口縁~胴部	(27.0)	12.4+	浅黄(2.5Y7/3)	にぶい黄(2.5Y6/3)	ナデ	ナデ	良好	石英、角閃石	
95	537	Q-97 8層		-	-	弥生土器	鉢	口縁一部	-	4.5+	浅黄(2.5Y7/3)	浅黄(2.5Y7/4)	ナデ	ナデ	良好	角閃石、褐色粒	
95	538	P-Q-99 8層		-	-	弥生土器	壺	口縁~頸部	(24.0)	5.2+	橙(7.5YR7/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	ナデ、暗文、沈線?	ナデ、ミカキ?	良好	石英、角閃石、黒色粒	
95	539	P-Q-99 北壁 8層		-	-	弥生土器	甕	胴部~底部	-	4.7+	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ、後ナデ、ナデ、ナデ、ナデ?	不明	良好	灰色粒、石英、角閃石	器面の一部黒い
95	540			-	-	弥生土器	甕	脚部	-	8.7+	黄褐(2.5Y5/3)	黄褐(2.5Y5/3)	ナデ	ナデ	良好	雲母、長石、角閃石、石	
95	541	P-144		-	-	弥生土器	甕	脚部	-	5.8+	浅黄(2.5Y7/4)	黄褐(2.5Y5/3)	ナデ	ナデ	良好	石英、角閃石	
95	542	P-97,98 8-3層		-	-	弥生土器	甕	脚部	-	4.5+	にぶい黄(2.5Y6/4)	オリーブ黒(5Y3/1)	ナデ	不明	良	石英	
95	543	P-99 8層		-	-	弥生土器	甕	脚部一部	-	3.7+	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR6/4)	ナデ	-	良好	石英、黒曜石	

※カッコ書きは復元値、数値の後に+が付くものは残存値

表28 吉原遺跡3区 出土土器観察表

挿図 番号	報告	出土地点	調査時	出土 層位	取上 番号	器種	法量(cm)			材質	備考
							長さ	幅	厚さ		
95	544		X-98-Y-97,98	-	-	砥石	9.20+	8.70+	1.9	218.90	砂岩
95	545		P-Q-99 8層	-	-	砥石	6.00+	7.10	2.50	127.10	砂岩

※カッコ書きは復元値、数値の後に+が付くものは残存値

## 第VI章 自然科学分析

### 第1節 新南部遺跡群(11次)に係る地中レーダー探査

一般財団法人 熊本工学会

#### 1. はじめに

本報告書は、新南部遺跡群(11次)において実施した「地中レーダー探査」の解析結果をとりまとめたものである。以下、調査の概要を示す。

- 【調査件名】 新南部遺跡群(11次)に係る地中レーダー探査業務
- 【調査地】 熊本県熊本市東区新南部1丁目(Fig.1 参照)
- 【委託期間】 平成26年(2014年)10月27日～平成27年(2015年)3月27日
- 【調査目的】 発掘調査が終了した新南部遺跡群(11次)の遺跡保存の決定に伴い、未発掘部に存在が推測される遺物の分布状況を地中レーダー探査によって推定することを目的とする。
- 【調査内容】 地中レーダー探査(解析、報告書作成)  
探査装置 : SIR-3000(Geophysical Survey Systems 社製) / 本体  
Model-5103A (Geophysical Survey Systems 社製) / 400MHz アンテナ  
Model-5106A (Geophysical Survey Systems 社製) / 200MHz アンテナ
- 【調査担当】 一般財団法人 熊本工学会  
〒860-0862 熊本県熊本市中央区黒髪2丁目34-8 Tel : 096-342-3819

※ 委託時と、報告時で遺構名に変更があります

- 1号標石甕棺墓 → 1号標石をもつ甕棺
- 2号標石甕棺墓 → 2号標石をもつ甕棺墓
- 1号土墳墓 → 不明遺構
- 2号土坑 → 1号土坑
- 3号土坑 → 2号土坑
- 3号集石遺構 → 3号集石

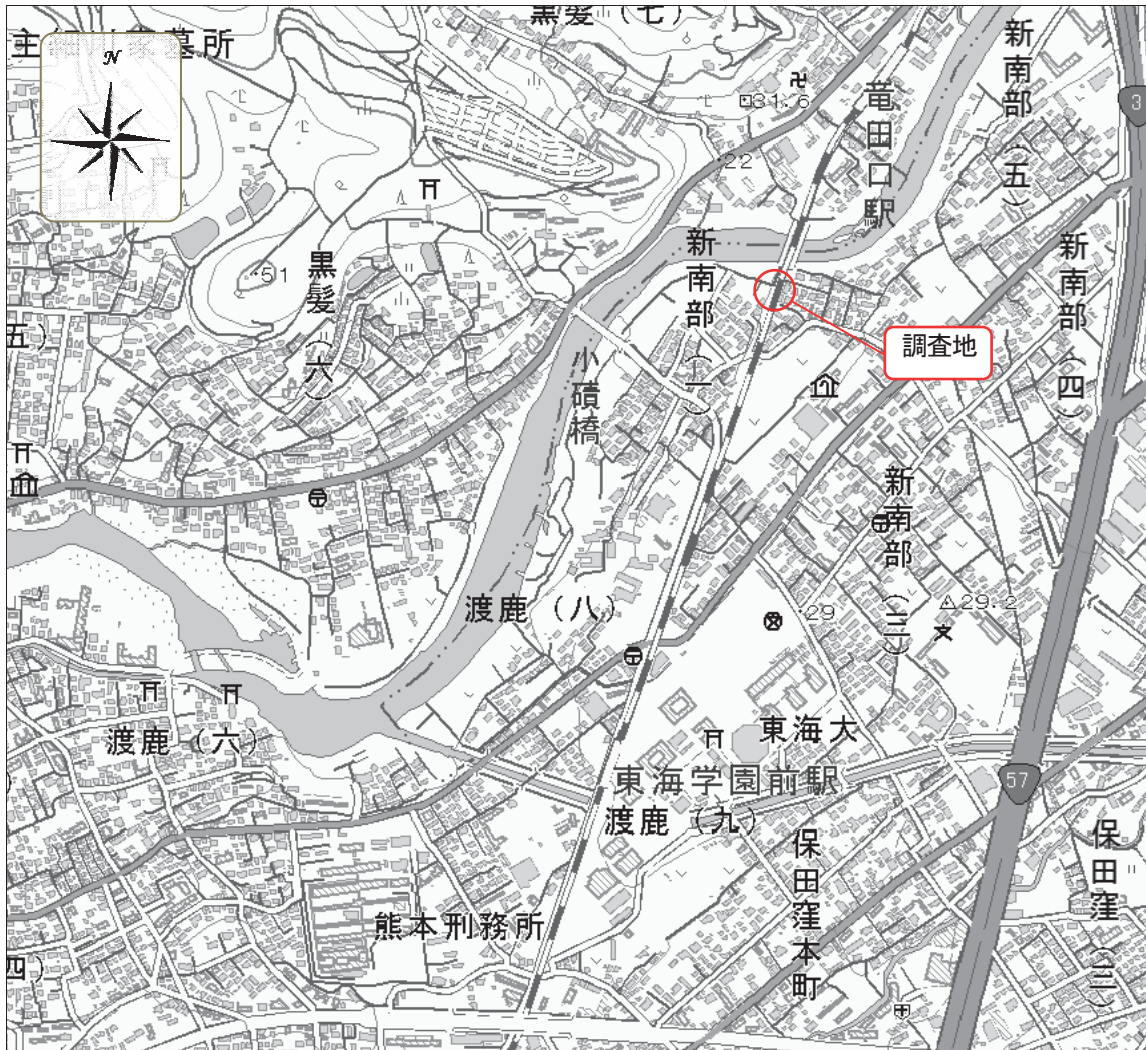


Fig.1 調査位置図

出展: 地理院地図(電子国土Web)

## 2. 地中レーダー探査および解析対象範囲

### 2.1 地中レーダー探査の概要

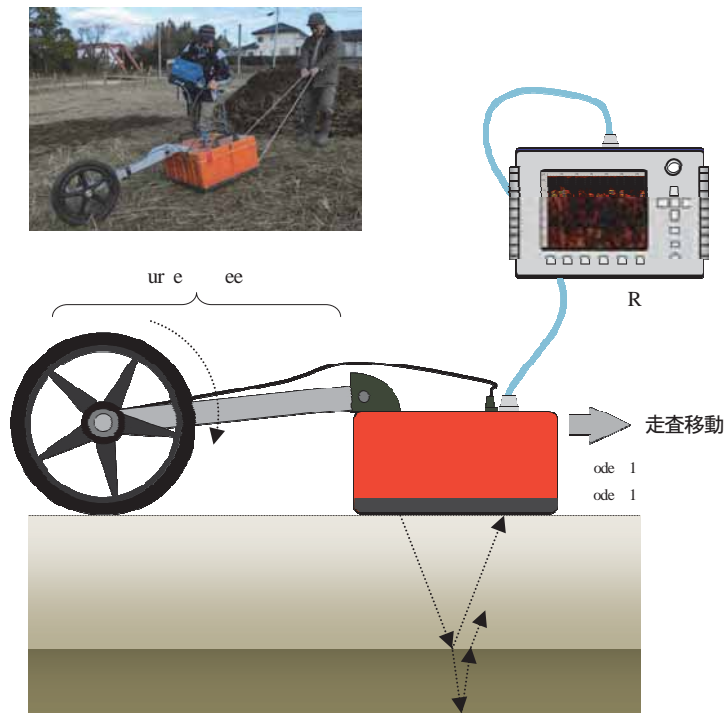
#### (1) 測定システムおよび測定方法

地中レーダー(Ground Penetrating Radar(GPR))は、アンテナから送信される電磁波の波としての性質を利用し、電磁波が地中を伝播する過程において地質の境界や埋設物など、質(電気的、磁氣的性質)の異なる境界面で反射した反射波を受信することで地下をイメージングする物理探査法である。

地中レーダー探査の主な特徴を以下にまとめる。

- ① 測定の対象物に対し非接触、非破壊での計測が可能
- ② 高分解能(送信周波数によるが、数cm程度の分解能でイメージングも可)
- ③ 計測対象は金属、非金属を問わない。また、空気を含む媒質でも計測が可能
- ④ 装置の構成がシンプルかつリアルタイムで走査画像が得られる
- ⑤ 探査深度が他の物理探査法に比べ浅い。特に土壌に含まれる水分の増減はレーダー波の伝播速度に直接影響し、探査深度を大きく変化させる要因の一つになる

本測定で用いた測定システムと測定風景を Fig. に、Geomatica Systems 社(以下、G...社)による送受信アンテナの周波数と探査深度を a.1 に示す。本体の R (G...社製)は、オペレータによって送受信アンテナの制御が行われるほか、モニタ上では受信された反射波形をもとにした断面画像のリアルタイム表示や記録波形の表示、各種波形処理が行える。送受信アンテナは、可探深度の異なる (ode 1 G...社製)、 (ode 1 G...社製)をそれぞれ用いた。また送受信アンテナには、エンコーダによって走査距離の記録が可能なサーベイホイールを装着し、反射波形の記録法を走査移動に同期させて行うディスタンスモードで行なった。測定法は、送信アンテナと受信アンテナが一定の間隔で配置された送受信一体型アンテナを移動させ、鉛直方向からの反射波を記録するプロファイル測定を行なっている。



a.1 送受信アンテナの周波数と探査深度

周波数	探査深度(m)
1. G	.
	1
1	

出典:G...社

表に示す探査深度は、比較的乾燥した条件の良い土地で地中レーダー探査を行った場合のものであり、乾季がなく安定した水分を含む日本の土壌においては、概ね半分の探査深度として参考にされるとよい

Fig. 地中レーダー探査システムとプロファイル測定風景

## (2) 記録波形

プロファイル測定では、記録される反射波形の反射強度(振幅の大小)に対し段階ごとに色を割り当て、False color によってリアルタイムに地下がイメージングされる。Fig. はそのプロセスを示したものである。

記録波形は、アンテナから送信された電磁波が地質の境界などで反射波となり、再びアンテナへ戻る(受信)までに要した時間(往復走時)とその波形(振幅)である。要した時間は地表から反射面までの距離(深度)に相当し、オシログラフ上の縦軸に反射波形が記録される。横軸は走査した距離を表し、測定では単位移動距離における走査線の数がオペレータ側で設定される。

本調査では1 can m の設定で測定を実施している。つまり、1cm 毎に1 can された反射波形が横軸方向に連続して記録されていることになる。また、本報で用いるカラーパターンは Fig. に示すように、記録された地下断面のイメージング画像において反射境界面のみを抽出するために、振幅が小さい透過部から負の振幅側全てを暗色で表現している。

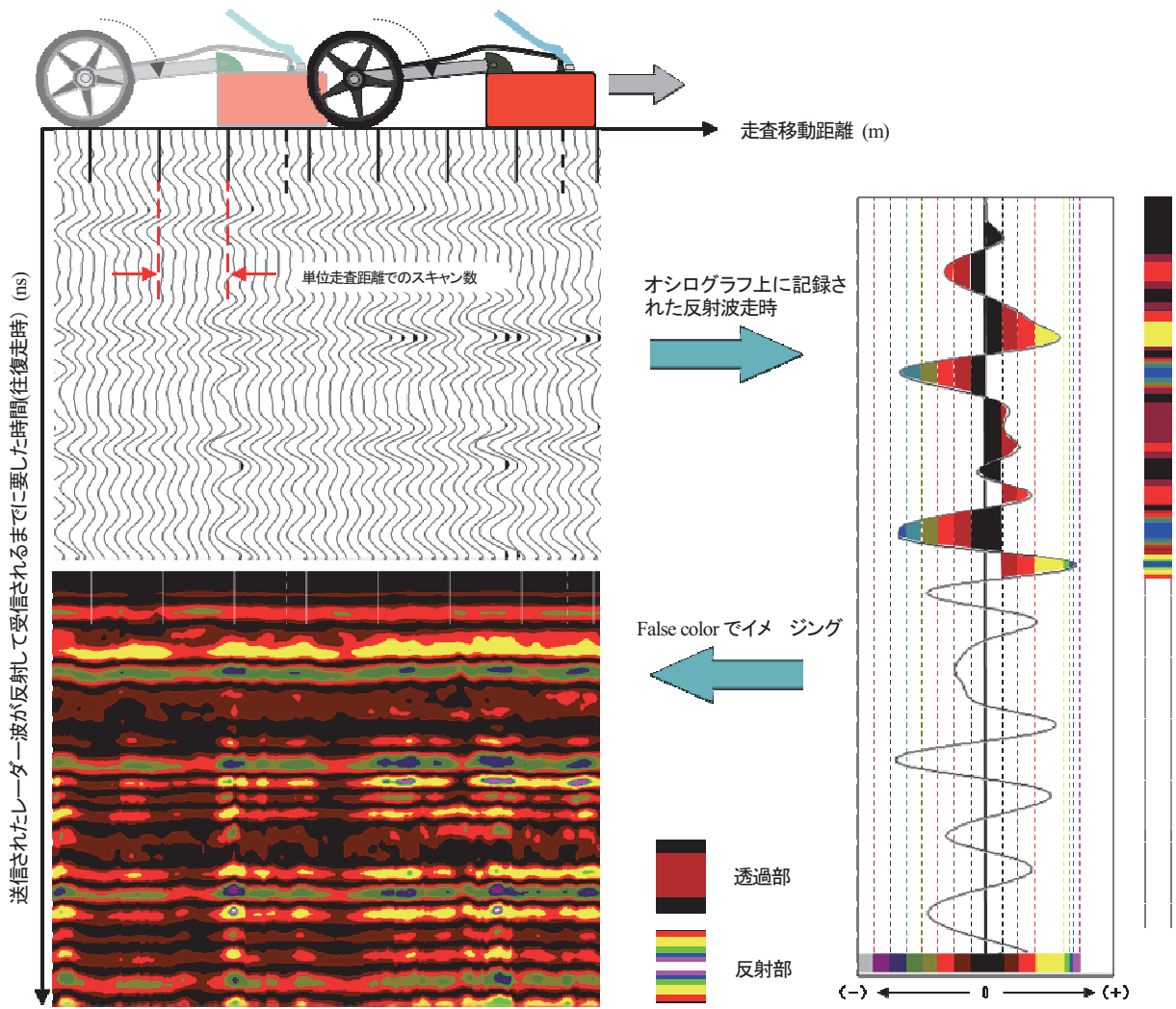


Fig.3 プロファイル測定で記録される反射波形と False Color による地下断面のイメージング例

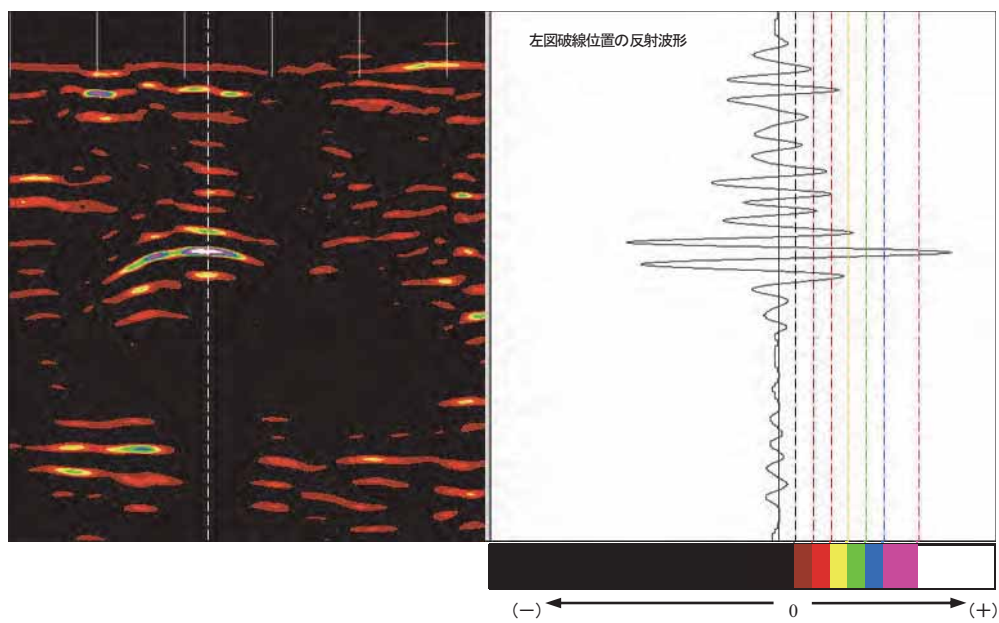


Fig.4 本報で適用したカラ パターン

(3) データ解析

波形処理を含むデータ解析では、波形の反射パターンの明瞭化とその特徴抽出が主たる目的である。具体的には、得られた波形の連続性や強反射波形がある範囲で現れる異常部(アノマリー)の抽出、およびそれらの空間的分布の特徴等である。

プロファイル測定によって得られたデータは、Fig.3のように1次元方向の反射波形が走査移動方向に連続したものであるため、データ解析では、まず、Fig.5に示すように1次元方向の反射波形一つ一つに対し波形処理を行う。図の横軸は往復走時(深度)、縦軸は振幅である。上図では深度が大きくなるにつれ低周波の波の上に高周波ノイズが乗っているのがわかる。この波形にバンドパスフィルタを適用しノイズ除去を行うと下図のようにノイズはなくなる。次に、走査移動方向の連続した波形を複数個利用した2次元的な波形処理を行う。さらに、全ての反射波形データから走査した地下を空間的にイメージングする3次元(3D)構成処理を行う。

[ 主な波形処理 ]

(1 次元波形処理)

- ・ バンドパスフィルタ
- ・ 利得 (ゲイン) 設定
- ・ スタッキング

(2 次元波形処理)

- ・ 2次元平滑化
- ・ マイグレーション
- ・ 背景除去処理

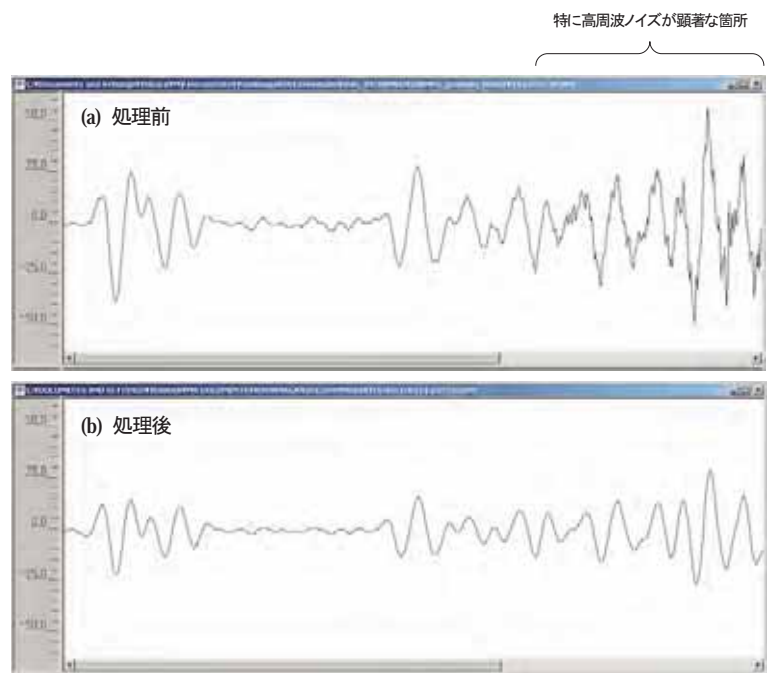


Fig.5 バンドパスフィルタ処理の一例

処理前の波形に含まれる高周波ノイズがバンドパスフィルタ処理で除去されていることがわかる

(4) 深度換算処理

(2)で述べたように、測定で記録される波形はアンテナから送信された電磁波の往復走時(ns)であり、記録波形から深度を求めるには、地中に送信された電磁波の伝播速度  $V(m/s)$  がわかれば良い。そこで本解析では、地表から反射境界面までの深度がわかっているポイントの記録波形(往復走時)から1区では  $6.40 \times 10^7 m/s$  (換算比誘電率: 21.96)、2区では  $4.50 \times 10^7 m/s$  (換算比誘電率: 45.34) をそれぞれ算出し、深度換算に用いた (式(1)、(2))。

$$V = 2D/T \quad (1)$$



$V$ : レーダ伝播速度 (m/s)     $D$ : 反射体までの深度 (m)     $T$ : 往復走時 (ns)

$$\epsilon_r = \frac{c}{(V \cdot \sqrt{\mu_r})^2} \quad (2)$$

$\epsilon_r$ : 比誘電率     $\mu_r = 1$ : 比透磁率     $c = 2.997 \times 10^8 (m/s)$ : 真空中の光速

2.2 測定領域および測線配置

本解析および地中レーダー探査の測定領域を Fig.6 に、1 区および 2 区に設定した測線の配置をそれぞれ Fig.7・8 および Fig.9・10 に示す。測線は 2 種類のアンテナ用に設定され、図中に赤細線で示している。作図に用いた「新南部遺跡群(11 次)遺構・遺物等配置図」は、熊本県教育庁教育総務局文化課より提供頂いた。扇状に発掘された区域は 1 区、私道を挟んだ南側の掘削区域は 2 区とそれぞれ称されるが、本報でも同様の呼称とする。

図中に示す 印は、地中レーダー探査を実施する際に測線設定の基準としたポイントで、印は 1 区、2 区の測定結果に対し 3 次元構成処理を行った際の原点(0 0)を示している。この原点より測線の長い方向を 軸(方向)、短い方向を 軸(方向)と定めた。解析範囲等の詳細を ab.2 にまとめるが、表に記す 200、400 は使用した送受信アンテナの種類のことであり、これ以降も同様の表記とする。

ab.2 解析および測線範囲の詳細

新南部遺跡群 (11 次) 1 区		
	軸 (方向)	軸 (方向)
解析および測定範囲	17.40m	7.20m
測線設定ポイント座標 01 01	20164.976	23881.624
01 02	20169.765	23879.161
01 03	20161.902	23863.703
解析原点 (200 )	01 02 に同じ	01 02 から 0.3m
(400 )	01 02 に同じ	01 02 に同じ
測線間隔 (200 400 )	0.3m	0.3m
測線数 (200 400 )	19	59
新南部遺跡群 (11 次) 2 区		
解析および測定範囲	19.00m	8.90m
測線設定ポイント座標 02 01	20177.556	23890.665
02 02	20181.129	23885.922
02 03	20193.069	23902.282
解析原点 (200 400 )	02 03 に同じ	02 03 から 8.9m
測線間隔 (200 )	測線のみ実施	0.3m
(400 )	測線のみ実施	0.5m
測線数 (200 )		61
(400 )		38

※ 1 区の 軸は北から時計回りに約 333° 回転している

※ 2 区の 軸は北から時計回りに約 307° 回転している





Fig.6 発掘調査区域と測定領域および設定された座標系



Fig.7 200MHzアンテナ用に設定された測線と座標系



Fig.8 400MHzアンテナ用に設定された測線と座標系

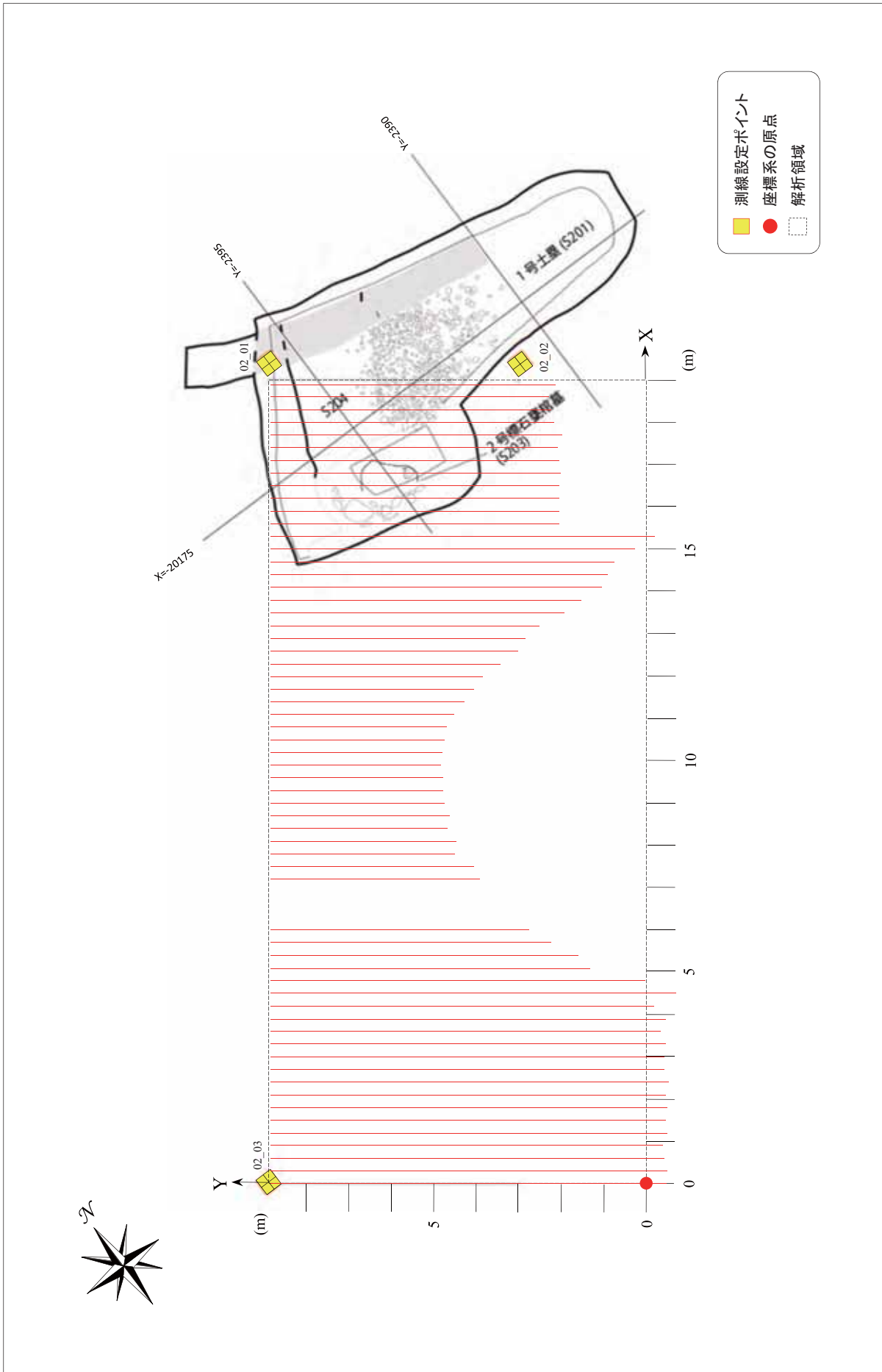


Fig.9 200MHzアンテナ用に設定された測線と座標系

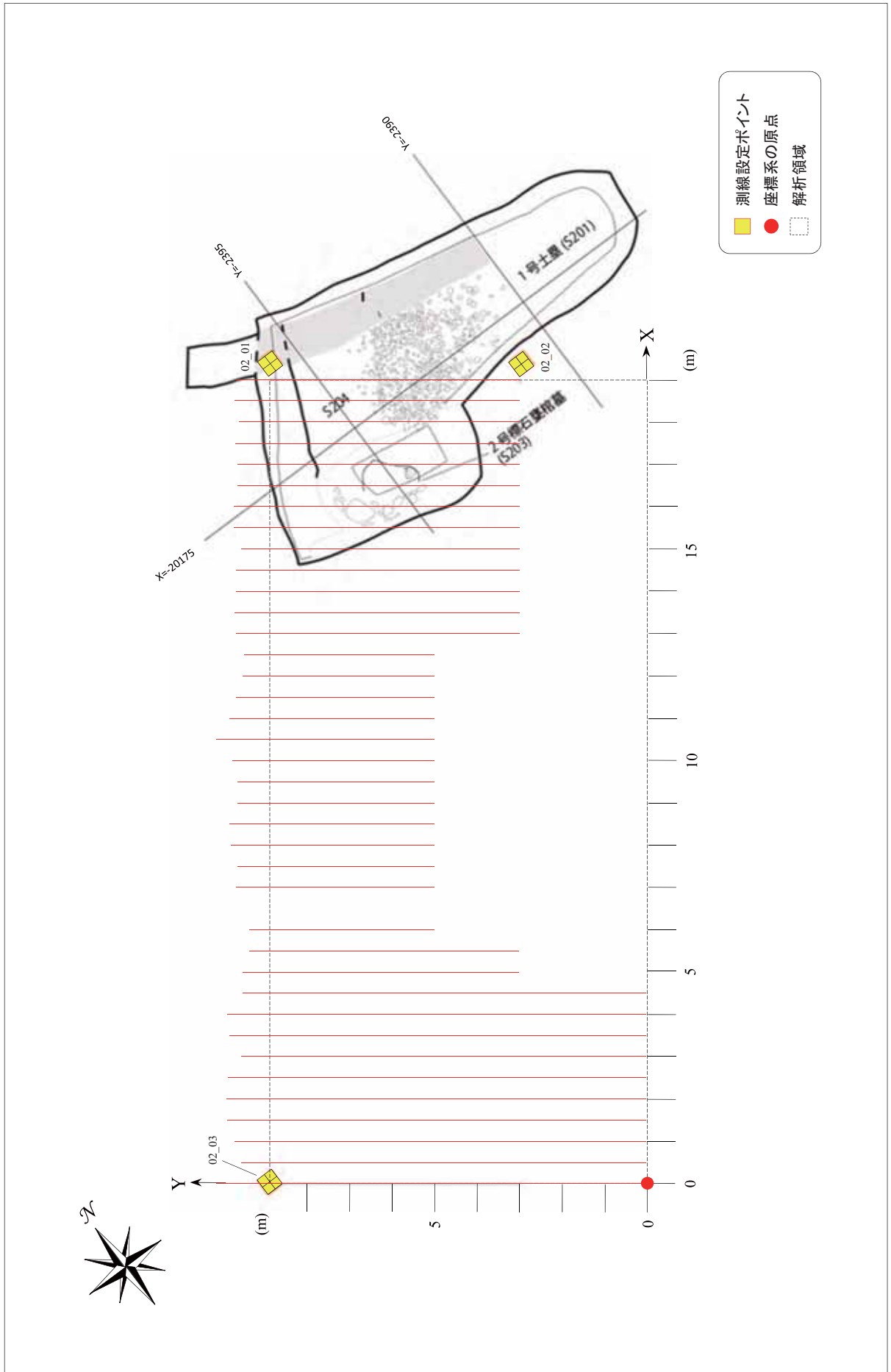


Fig.10 400MHzアンテナ用に設定された測線と座標系

### 3. 解析結果

#### 3.1 測定結果および解析結果の特徴

1区、2区の測定レンジと換算した探査深度を ab.3 に、また解析結果の一例として、1区の同一測線における 200 および 400 の解析結果を Fig.11 に示す。

1区、2区の測定結果には、測定環境(南側に 豊肥線、西側に住宅地、頭上に電線)の影響のためか Fig.5 の例にあるような高周波のノイズ成分を含んでいることが確認され、深度が深くなるに従ってその影響は顕著であった。このため、全測定データにバンドパスフィルタを適用し、それに伴う利得の調整を適宜行った。Fig.11 は波形処理後の 2次元断面画像であるが、400 は探査深度が浅く、かつ深度方向に対する電磁波の減衰が 200 に比較して大きい。このために反射波形の振幅が小さく全体的に反応の薄い断面像になっていることがわかる。ただし、地表面(図中の 0m 位置)下にある発掘調査掘削面と思われる深度からの反射強度や起伏の再現性は 200 に比べると明瞭であるように思われる。これらの特徴は、地中レーダー探査で用いるアンテナの周波数が分解能および電磁波の減衰率と比例関係にあることを良く表している。

本調査の具体的な目的は次の 2点である。

- ① 1区において、甕棺墓の標石とおもわれる 1号集石(110)、2号集石(107)を中心とした地下空間における甕棺墓の存在の有無、およびその分布の推定(対象深度 1.00m 前後)
- ② 2区において、発掘で確認された土塁の未発掘部に対する水平方向の連続性についての把握 (対象深度 0.70m 前後)

この目的に対応した解析結果としては、反射波の減衰や探査深度の観点から 1区、2区ともに 200 の解析結果が妥当であると判断され、本報では 1区で実施した予備測定(400 で実施)の結果を除き、両地区とも 200 の解析結果を用いることにする。

ab.3 各測定地区の測定レンジと探査深度

1区			2区		
使用アンテナ	200	400	使用アンテナ	200	400
往復走時 (ns)	114	57	往復走時 (ns)	113	76
換算深度 (m)	3.6	1.8	換算深度 (m)	2.5	1.7

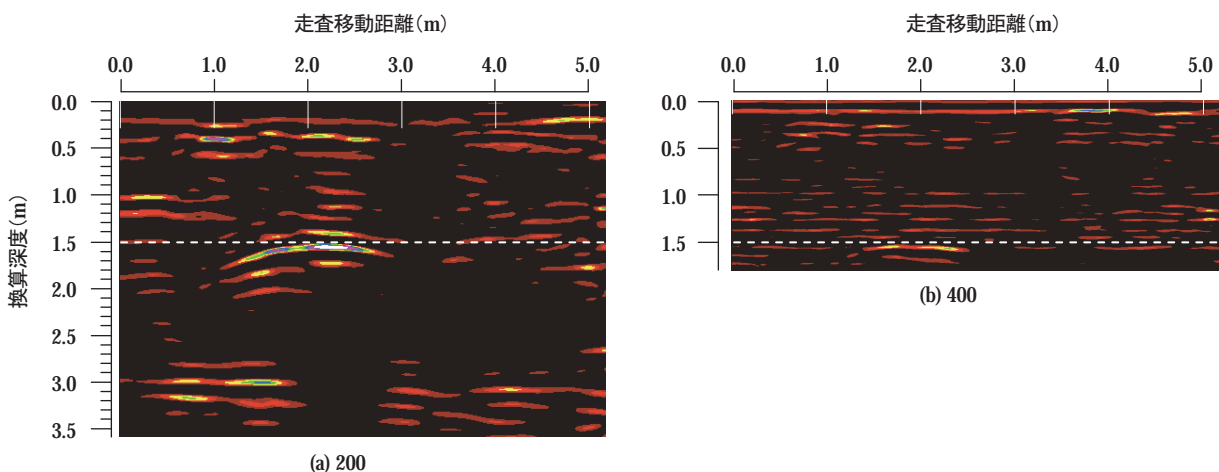


Fig.11 1区の同一測線における 200 アンテナと 400 アンテナの測定(解析)結果

### 3.2 1区解析結果

#### (1) 解析領域の概略

解析領域内の位置を表す表記法は以下の通りとする。表記に用いる  $x$ 、 $y$  は軸を、数字は原点からの距離をそれぞれ表し、単位は(m)である。

(表記例)

- ・ 位置を示す場合 : (13.3)、(0.45)
- ・ ポイントを示す場合 : ( 6.70 2.70)
- ・ ポイント間を示す場合 : ( 2.30 3.10) ( 5.60 2.30)
- ・ 範囲を示す場合 : (1.80 5.20)、(3.70 5.60)
- ・ 深度を示す場合 : ( 1.60)

解析領域の3D画像をFig.12に示す。図に示した青ラインは、 $x$ 断面において比較的反射が強く、解析領域内全体にわたって連続性のある反射境界をトレースして $x$ 軸方向に並べたものである。ここで、Fig.12(a)は地表面(0.00)からの深度を考慮すると発掘調査のための掘削面と推定され、Fig.12(b)は、解析領域内での深部地層境界面である。(17.4)から(0.00)に向かって傾斜した深部地層境界面の地形は起伏に富み、(12.0 17.4)、(0.00 4.50)の範囲では傾斜に沿った強反射面も読み取れ、非常に圧密された地層境界面、もしくは礫の存在が示唆される。なお、(2.00 10.0)、(0.00 4.70)の範囲では(1.50)前後に一部反射面の連続性があるものの、(0.80)以深に明瞭な反射体の存在や反射面の連続性は確認できず、深部地層境界の連続性が途切れることも大きな特徴の一つといえる。

1区の調査目的では標石および集石を中心とした解析が対象なる。発掘された遺物の分布状況を考慮すると深部地層境界面より深い領域は解析対象外と判断でき、 $x$ 軸方向に対する解析の対象を0.00m～2.50mまでとした。 $z = 2.50$ mの面をFig.12( )の白実線で示す。掘削面から2.50mまでの範囲で比較的明瞭な地層の境界と思われる反射面はFig.12(b)、( )の白破線で示した位置に存在し、深度はおおよそ1.30m～1.90mである。

#### (2) 標石および集石を対象とした解析結果

Fig.13は1区の解析領域を示し、Fig.14、Fig.15は、標石および集石の配置をトレースした図と解析で得られた標石または集石からの反射波と思われる深度での2次元水平断面画像とを重ねたものである。白実線で囲まれた範囲が解析の範囲であり、1号標石甕棺墓部を「1区01」、1号および2号集石部を「1区02」と称す。解析範囲は「1区01」が3×3.2(m)、「1区02」は6.5×4.2(m)である。

##### 【1区01】

標石のある「1区01」にはトレンチによって甕棺墓の存在が明らかになっているため、甕棺墓からの反射波を捉えることができれば、反射パターンの特徴を把握することが可能である。解析結果をFig.16(a)に示す。(0.30 2.30)、(1.50)を中心とした位置に長さ約1.8mほどの湾曲した反射パターン(以下、湾曲パターン)が得られた。これは、甕棺墓の形状を反映した反射波のパターンであることが容易に推定できる。

ここで、解析結果の $x$ 断面から反射パターン(反射境界面)の立体的な形状抽出を試みる。Fig.16(b)に示すように、 $x$ 断面を $y$ 軸方向に一定間隔で移動させながら反射パターンの形状をトレースし3次的に描くと反射境界面の空間的な特徴を把握することができる。

Fig.16( )は「1区01」の湾曲パターン形状である。反射境界面の形状は $x$ 軸方向に湾曲し、 $y$ 軸方向にゆるやか

に傾斜していることがわかる。また、軸方向の湾曲パターンの一部には、形状がやや不連続な部分も存在することがわかった。

なお、地中レーダー探査で得られる反射波形から遺物等の埋設方向の推定については、地表から送信されるレーダーの伝播方向や測線方向・測線間隔と地下における遺物等の空間的な配置との関係によって反射波形も様々なパターンを示すことが考えられるため、本報では得られた湾曲パターンから遺物の埋設方向についての推定は行わないものとする。

### 【1区 02】

遺物の存在の可能性が高いと思われる集石が分布する「1区 02」の結果を Fig.17 に示す。「1区 01」と同様に甕棺墓の存在が推測される湾曲パターンが (11.4)、(12.7) の断面に確認できた。深度はそれぞれ約 (1.00)、(0.74) である。この位置は図の上を示す平面図でもわかるように、Fig.17(a) は 2 号集石の直下に、Fig.17(b) は 1 号集石と 2 号集石との間に位置している。次に、1 号集石直下について同様の解析を行った結果を Fig.17( ) に示すが、(13.0 15.0)、(4.00 6.00) の範囲にある円形の集石下に明瞭な湾曲パターンは得られなかった。深度 1.3m 付近にわずかに弧を描く傾斜した反射パターンがあるが、青破線で示すようにコブのような地形の一部とも読み取れるため、この反射パターンから遺物の存在を推定することは難しい。

Fig.17(a) および Fig.17(b) の湾曲パターンの形状を Fig.18 にまとめる。図上の平面図には湾曲パターンの連続性が確認された範囲を示す。Fig.17(a)、Fig.17(b) は軸方向への湾曲が顕著であり、湾曲方向の最長部分はともに 1.3m であった。軸方向への連続性は、Fig.17(a) が 10.8m から 12.0m の範囲でほぼ水平に連続するのに対し、Fig.17(b) は 11.7m から 12.8m の範囲で上向きに傾斜していることがわかった。

なお、「1区 02」では 400 アンテナによる予備調査を行っている。予備調査の解析でも特徴的な湾曲パターンが同じ領域で得られたため解析結果を Fig.19 に示す。図上の平面図に赤実線で測定領域を示す。— 方向を x 軸、— 方向を y 軸とし、広さは  $x=4.00\text{m}$ 、 $y=2.70\text{m}$  である。解析で得られた湾曲パターンは Fig.19(a) および Fig.19(b) のように深度約 1.10m の位置で 90° 向かい合うように位置しており、Fig.19(a) は x 軸方向に湾曲パターンが顕著で y 軸方向へ 1.60m から 2.35m の範囲で湾曲パターンが連続する。Fig.19(b) は y 軸方向に湾曲パターンが顕著で x 軸方向へ 0.70m から 1.10m の範囲で湾曲パターンが連続していることがわかった。

図上の平面図に 200 の解析結果を青破線で、予備調査で行った 400 の解析結果を赤破線で示す。予備調査で得られた結果は Fig.17(a) と平面上の位置や深度がほぼ同じであることから、同じ反射体からの反射波を捉えていると推定できる。200 と 400 の湾曲パターンの違いは、周波数の違いによる分解能の違いと反射体の配置された向きに対する測線の向きが関係していると思われ、当該反射体については Fig.19 の解析結果がより詳細な空間分布の状況を表していると思われる。なお、予備調査の解析結果では Fig.17(b) の位置での湾曲パターンが得られていない。これは、事前調査を行った時期に発掘のための測量杭が Fig.17(b) の位置に存在したことから測線を設けることができなかったためである。

### (3)1区におけるその他の解析結果

Fig.20 Fig.25 は(1)、(2)で着目したもののほど大きくはないが、強い反射を捉えた断面を示した。注目した反射体を破線円で囲む。Fig.20 では (3.00)、(4.60)、(0.92) の位置で見られ、空間的に反射体の少ない周辺状況の中でアノマリーとして捉えることができるが、これは土塁の出土とともに明らかになった古井戸の位置と合致している。その他のものは、地質境界と思われる連続した反射波が得られている場所の一部、または端部であるようにも解釈できるため、遺物の存在と結びつけるには周辺で確認された遺物の分布や遺構の状況などを考慮した解釈が求



められる。

**Fig.25** は約 (15.2 17.2)、(0.30 1.60)、(1.30 1.70)の範囲に分布するアノマリーである。断面ではそれまで連続している深度 1m 前後の反射面がこの範囲で落ち込んでいるようにも判断でき、断面では、断面での落ち込みが湾曲した溝のような構造で、その底部が強反射しているようにも思われる。いずれにしてもこの範囲では、断面、断面で確認できる地質境界からの反射面と思われる連続性が途切れている。

1 区での解析結果のまとめとして、これまで述べた反射体の位置を **Fig.26** に青丸で示す。また、熊本県教育庁教育総務局文化課より提供頂いた空撮写真から 1 区の測定領域をトリミングし、**Fig.26 (a)**と合成したものを **Fig.26 (b)**に示す。

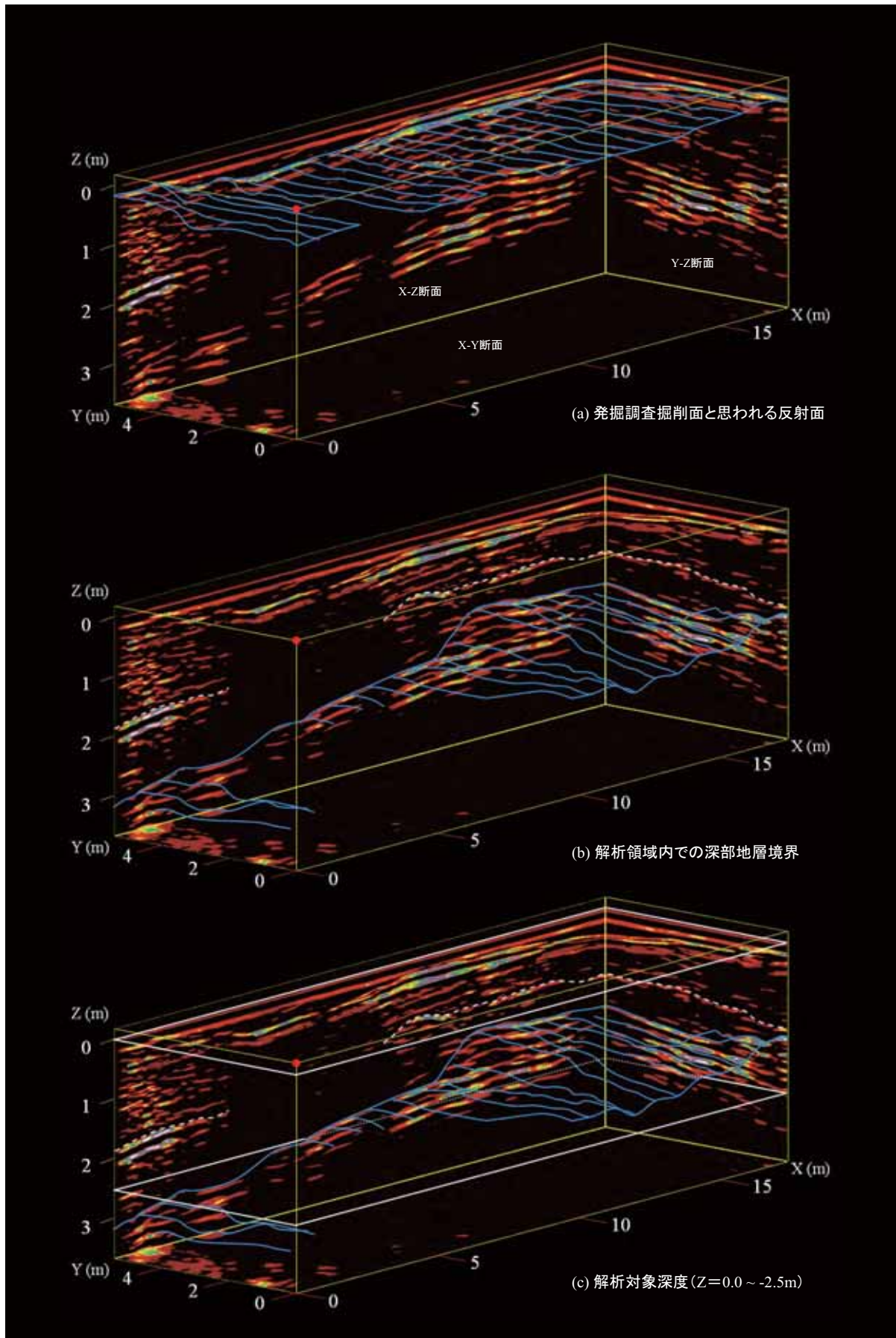


Fig.12 1区解析領域の概略と解析対象深度 (200MHz)

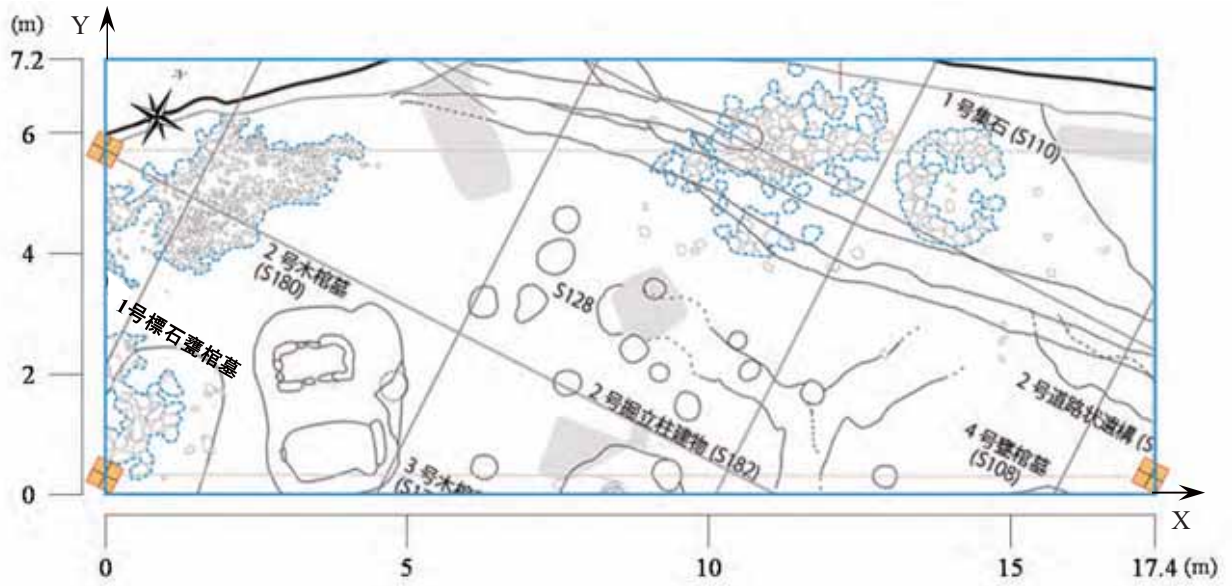


Fig.13 1区地中レーダー測定範囲

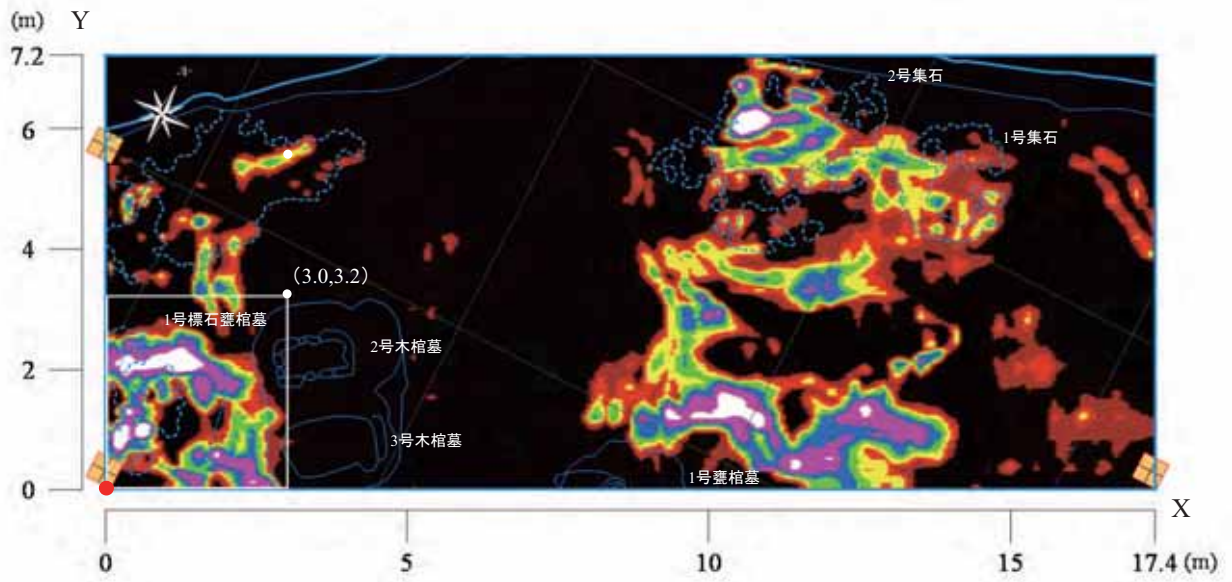


Fig.14 1区\_01解析範囲

2次元水平断面画像は Z=-0.41m のもの

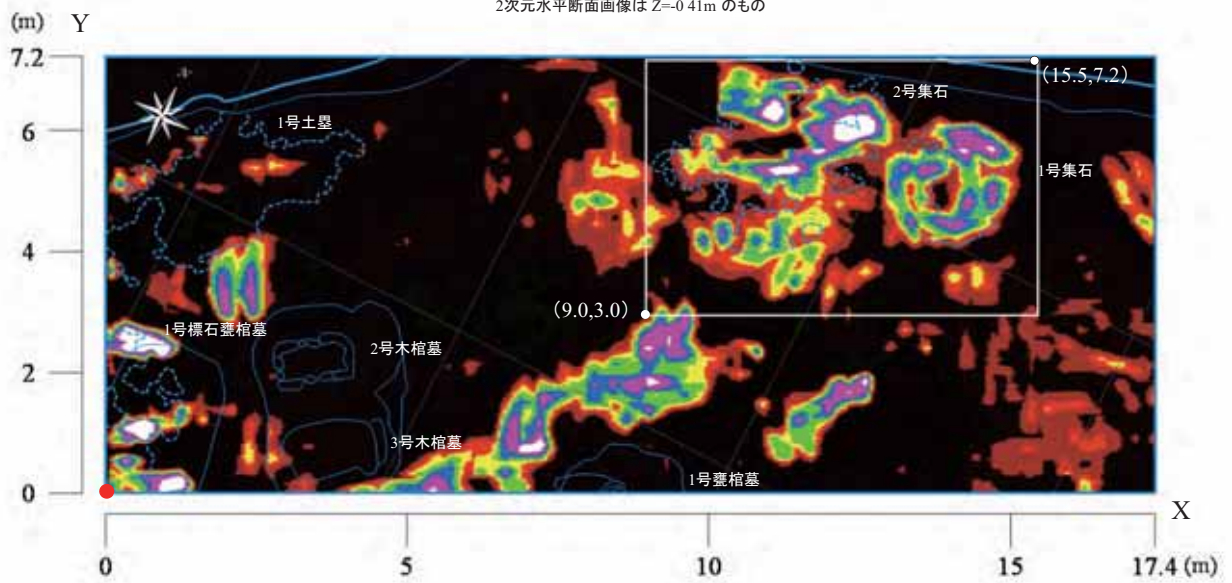
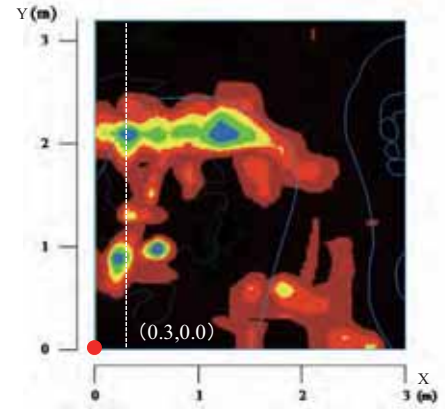
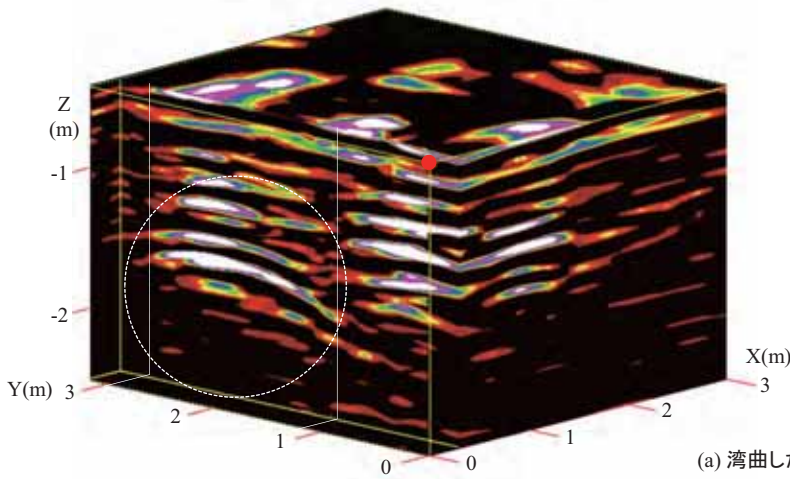
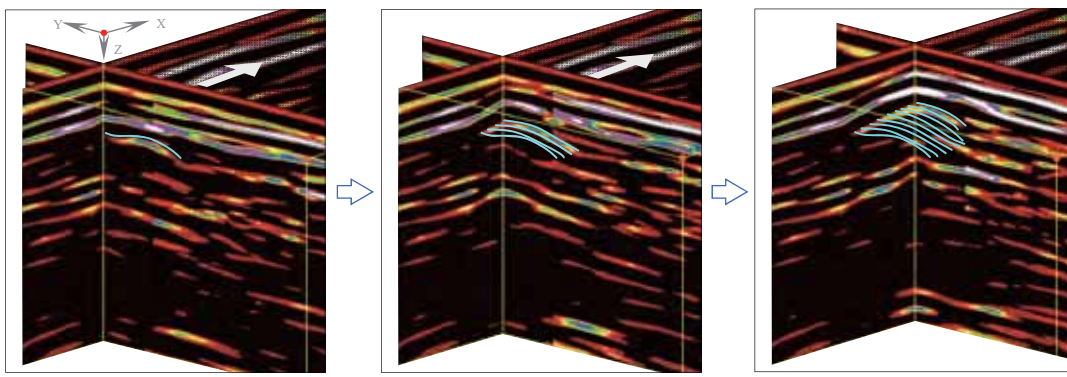


Fig.15 1区\_02解析範囲

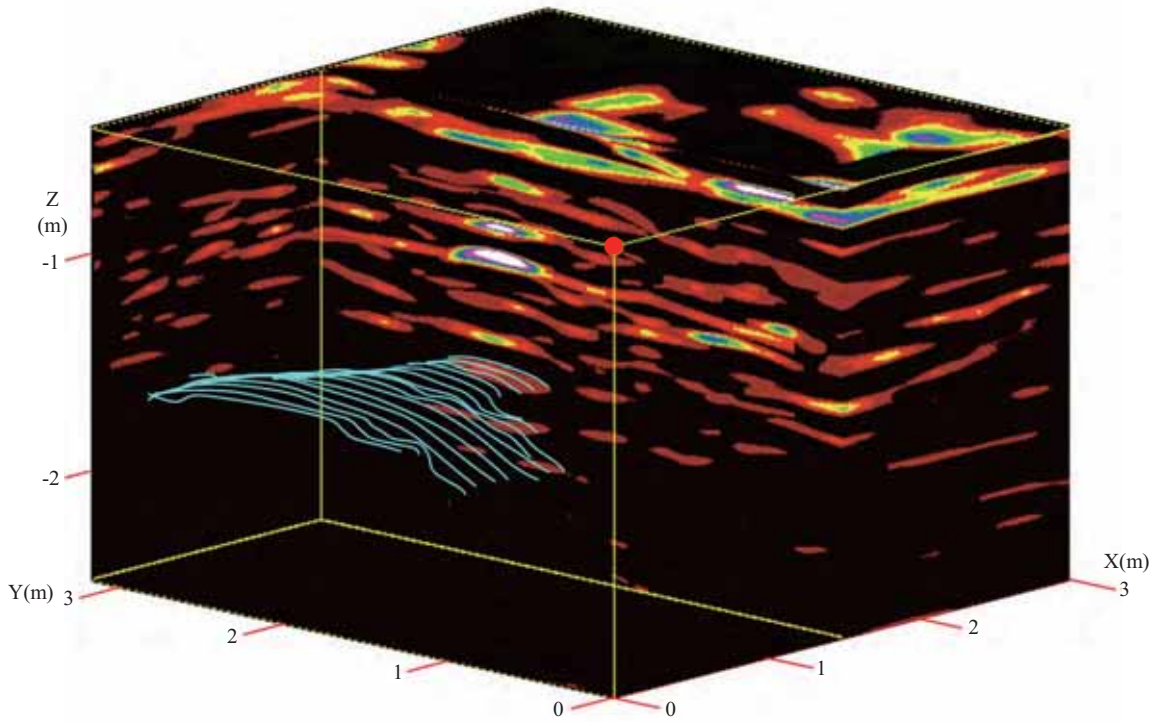
2次元水平断面画像は Z=-0.44m のもの



(a) 湾曲した反射波が確認された $X=0.30\text{m}$ でのY-Z断面画像  
(深度約-1.5m)



(b) 反射パターンの形状抽出例



(c) 「1区\_01」湾曲パターン形状

Fig.16 1区\_01解析結果(200MHz)

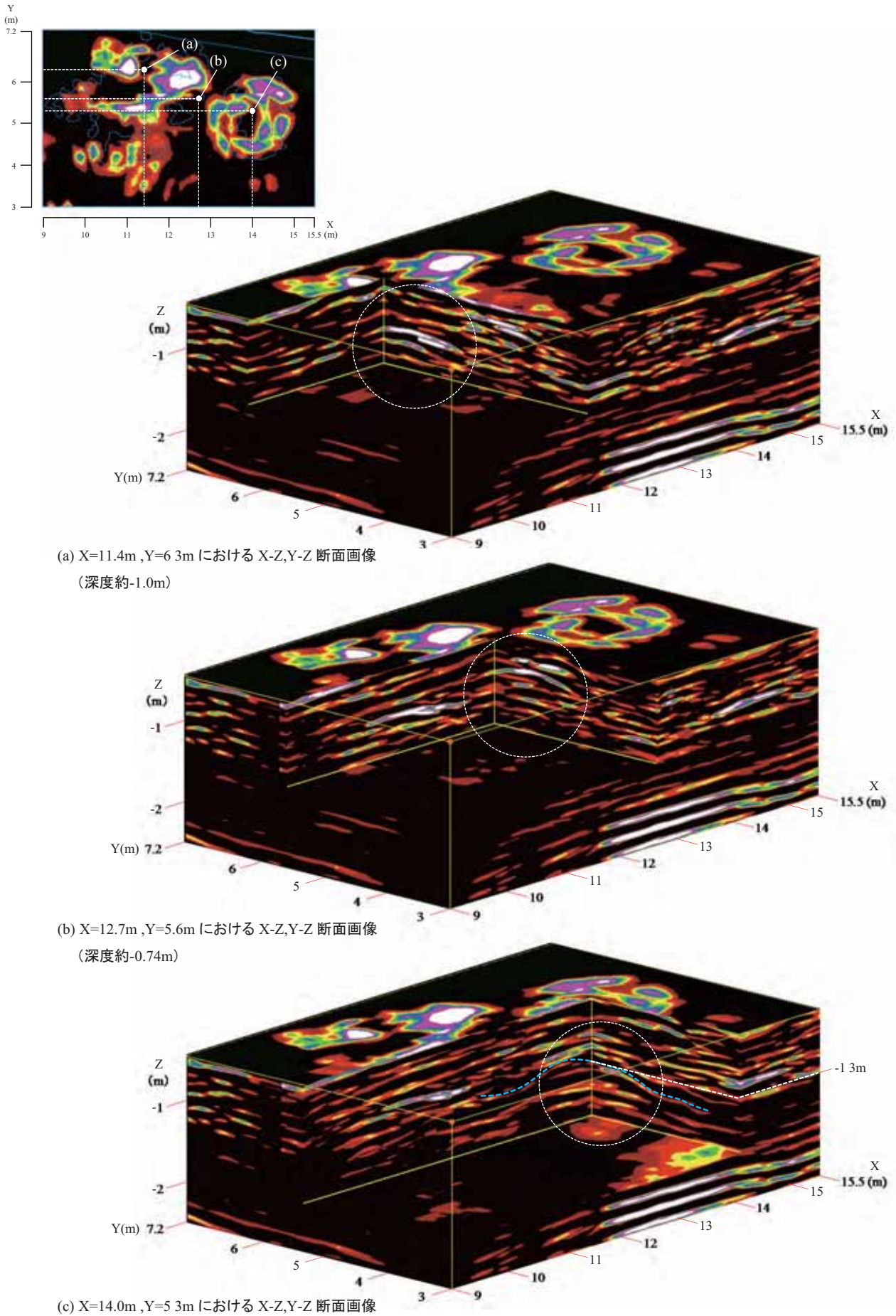


Fig.17 1区\_02解析結果(200MHz)

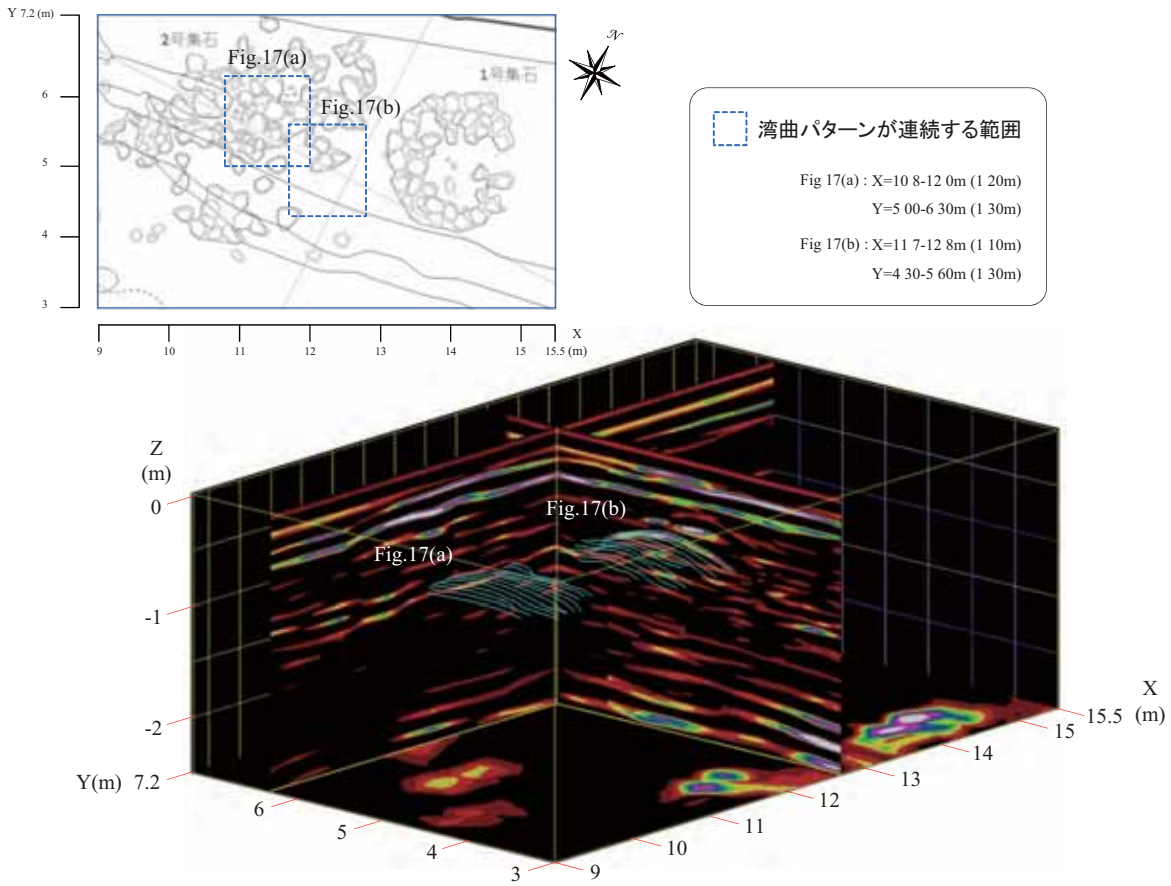


Fig.18 「1区\_02」で確認された湾曲パターンの形状と湾曲パターンが連続する範囲

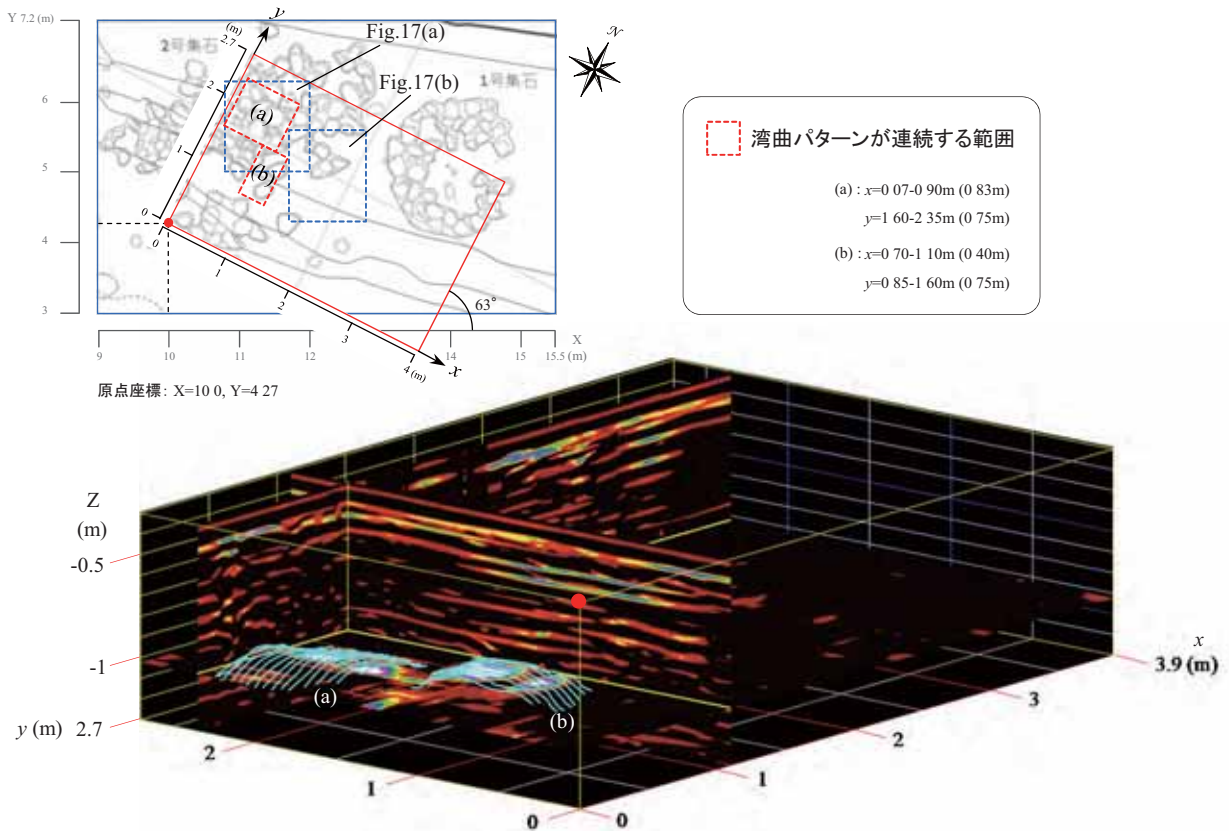


Fig.19 400MHzアンテナを用いた予備調査の解析結果と湾曲パターンが連続する範囲

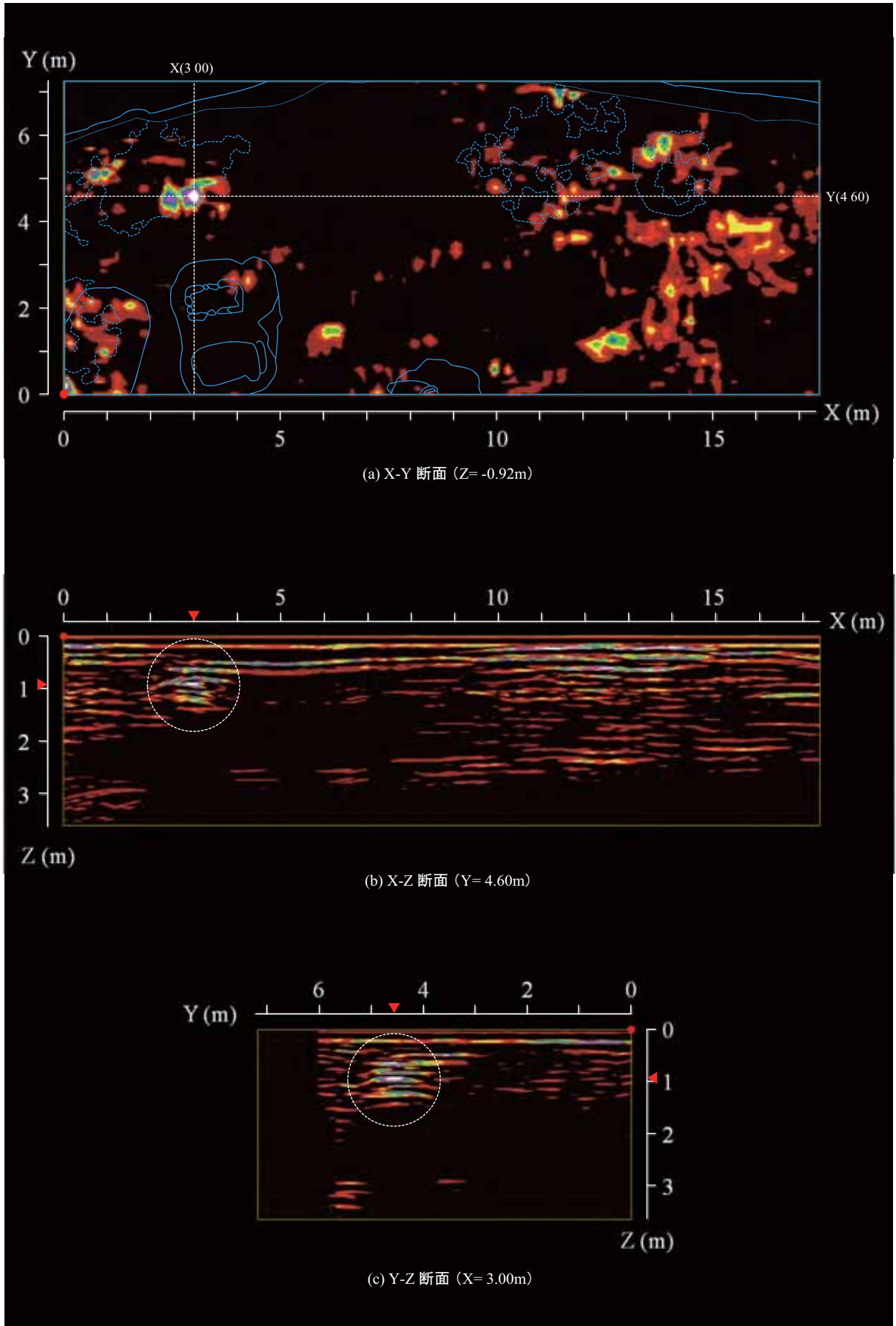


Fig.20 ( X=3.00m, Y=4.60m, Z=-0.92m ) 地点の「X-Y」,「X-Z」,「Y-Z」断面(200MHz)

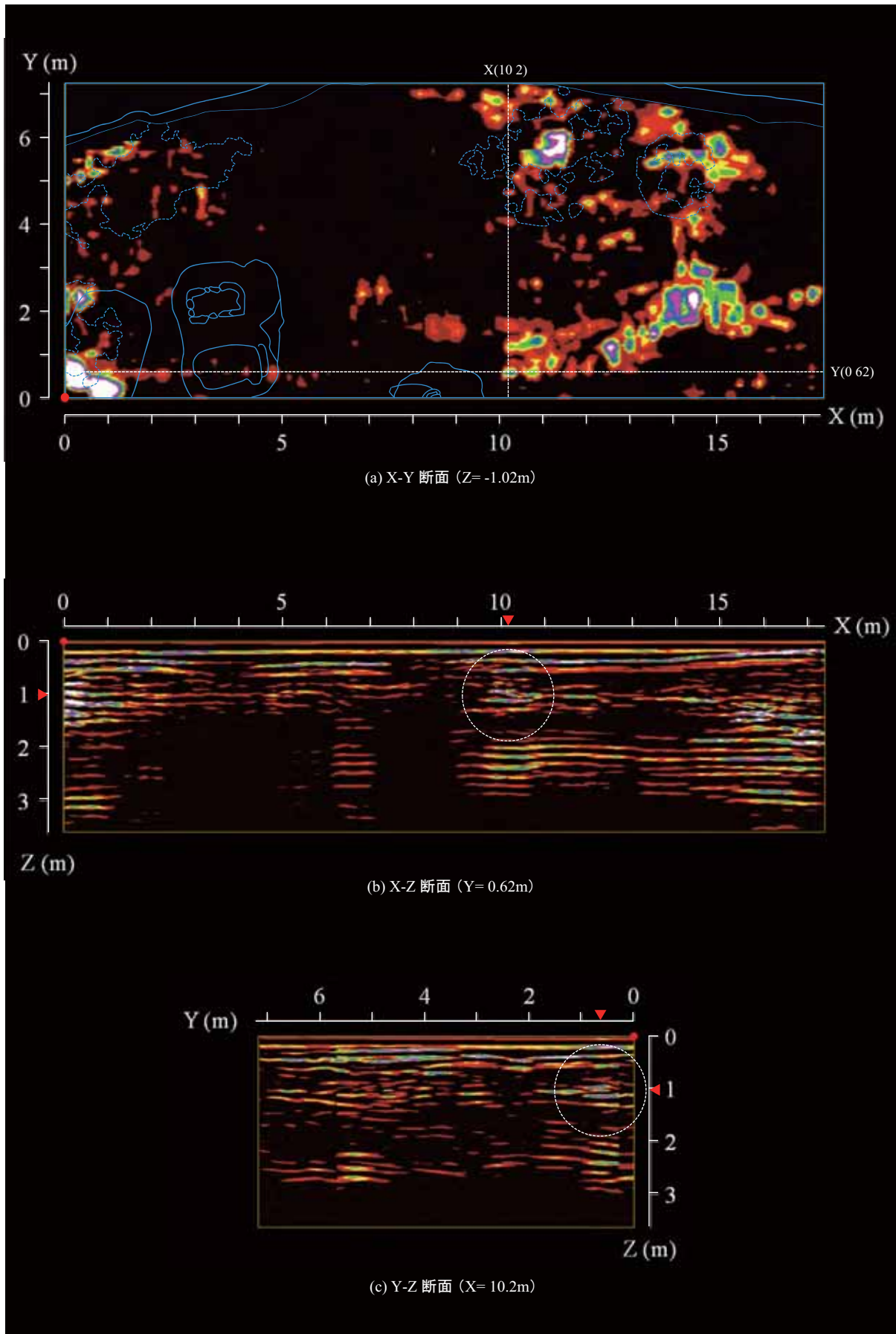


Fig.21 ( X=10.2m, Y=0.62m, Z=-1.02m ) 地点の「X-Y」,「X-Z」,「Y-Z」断面(200MHz)



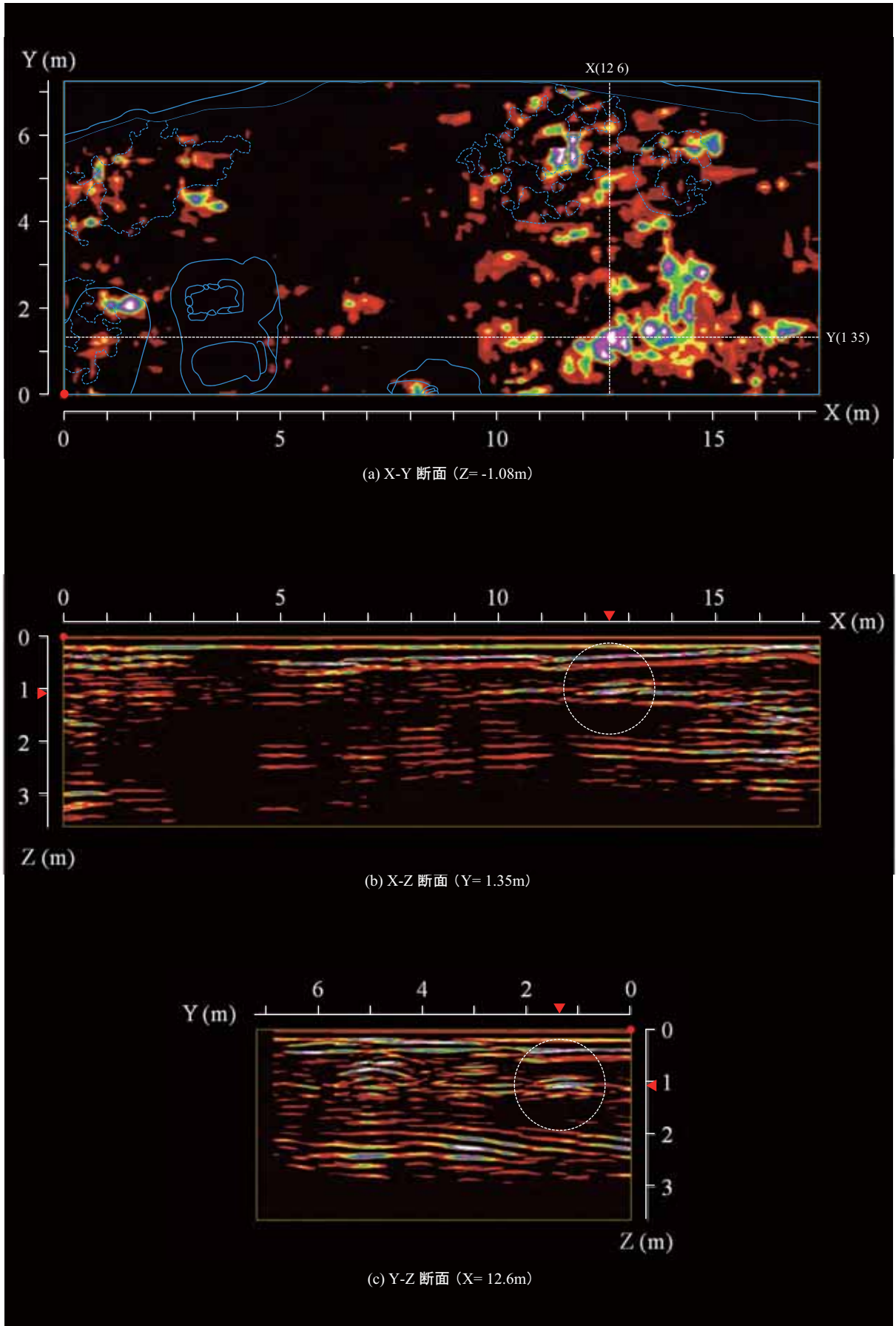


Fig.22 ( X=12.6m, Y=1.35m, Z=-1.08m ) 地点の「X-Y」,「X-Z」,「Y-Z」断面(200MHz)

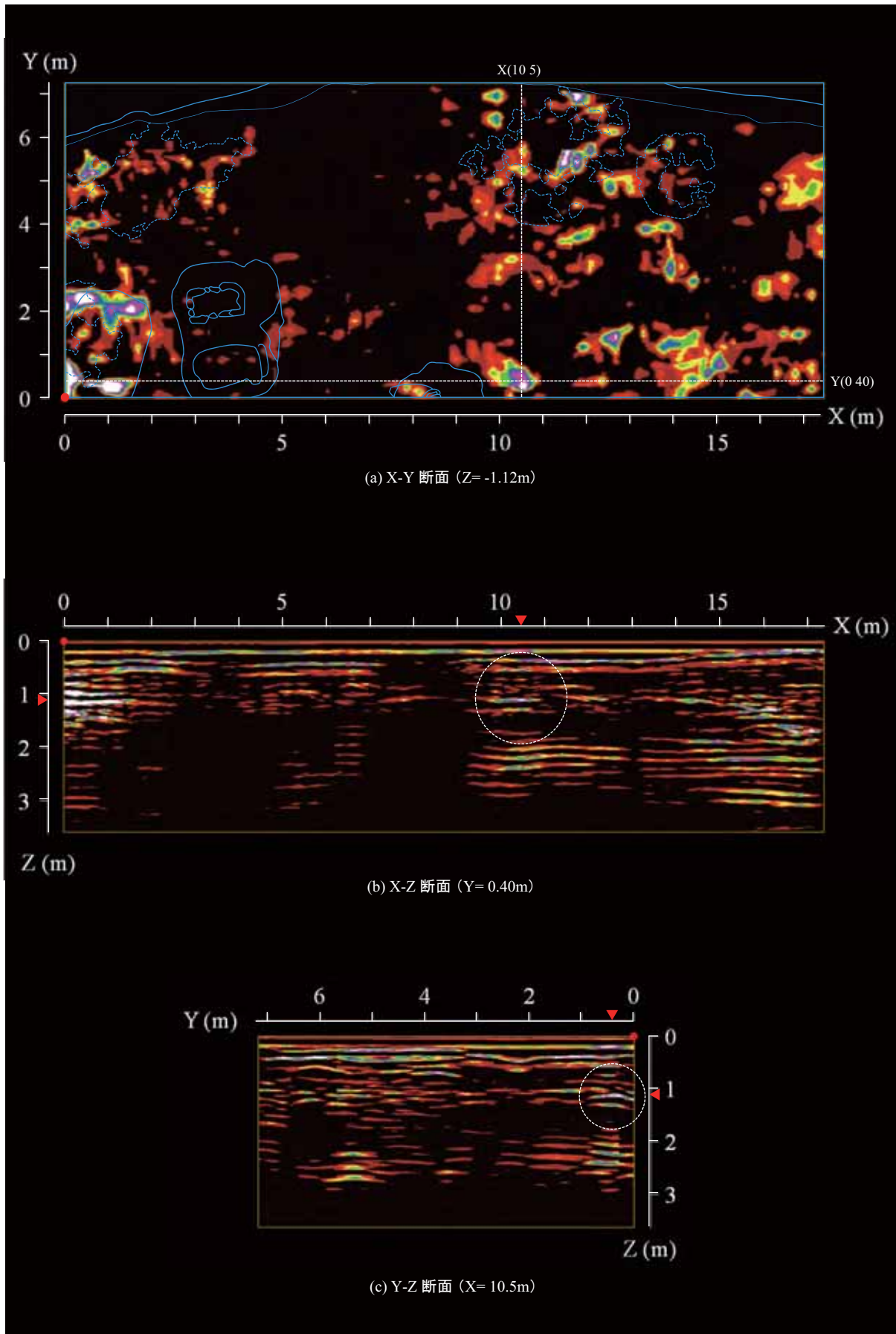


Fig.23 (  $X=10.5\text{m}$ ,  $Y=0.40\text{m}$ ,  $Z=-1.12\text{m}$  ) 地点の「X-Y」,「X-Z」,「Y-Z」断面(200MHz)

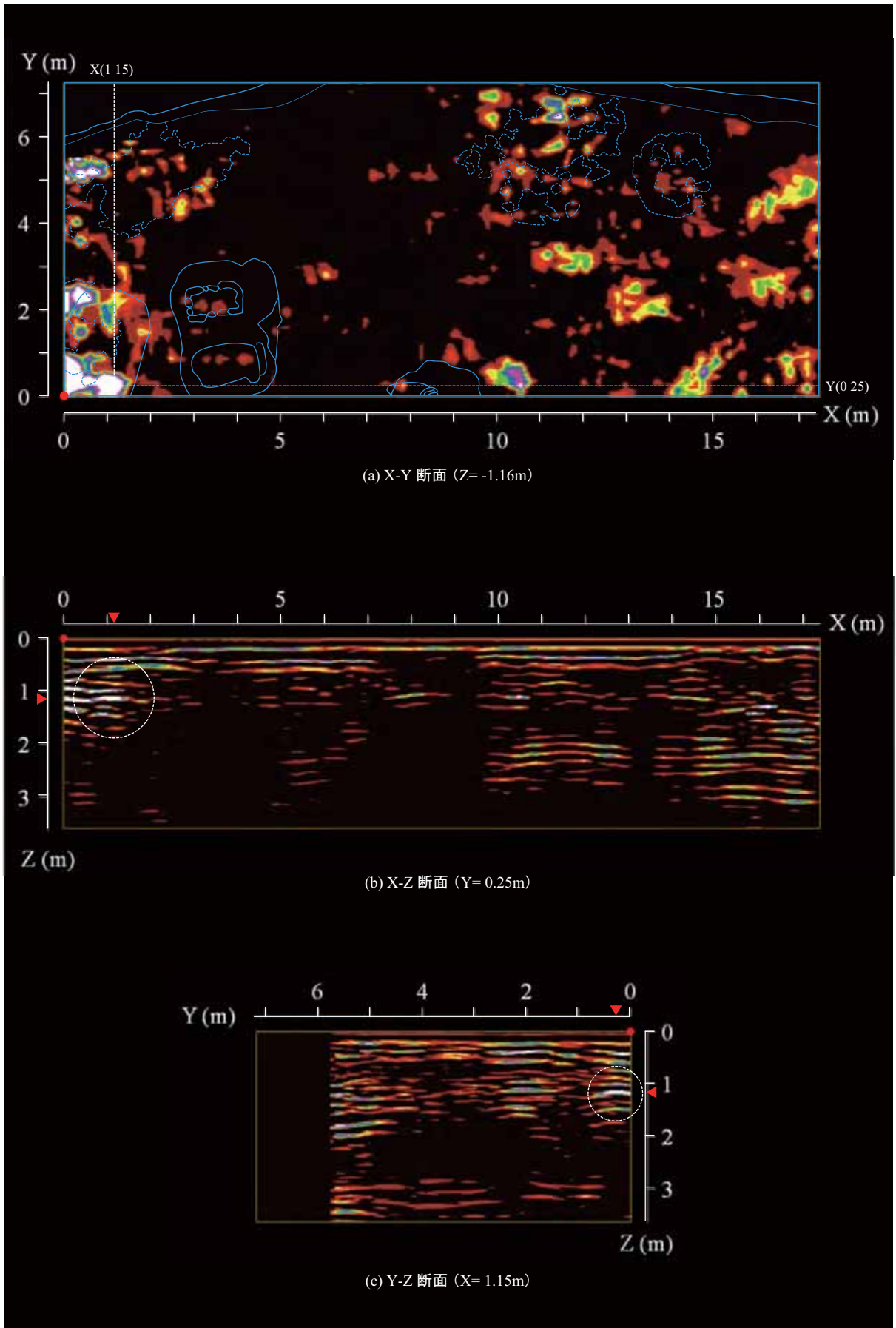


Fig.24 (  $X=1.15\text{m}$ ,  $Y=0.25\text{m}$ ,  $Z=-1.16\text{m}$  ) 地点の「X-Y」、「X-Z」、「Y-Z」断面(200MHz)

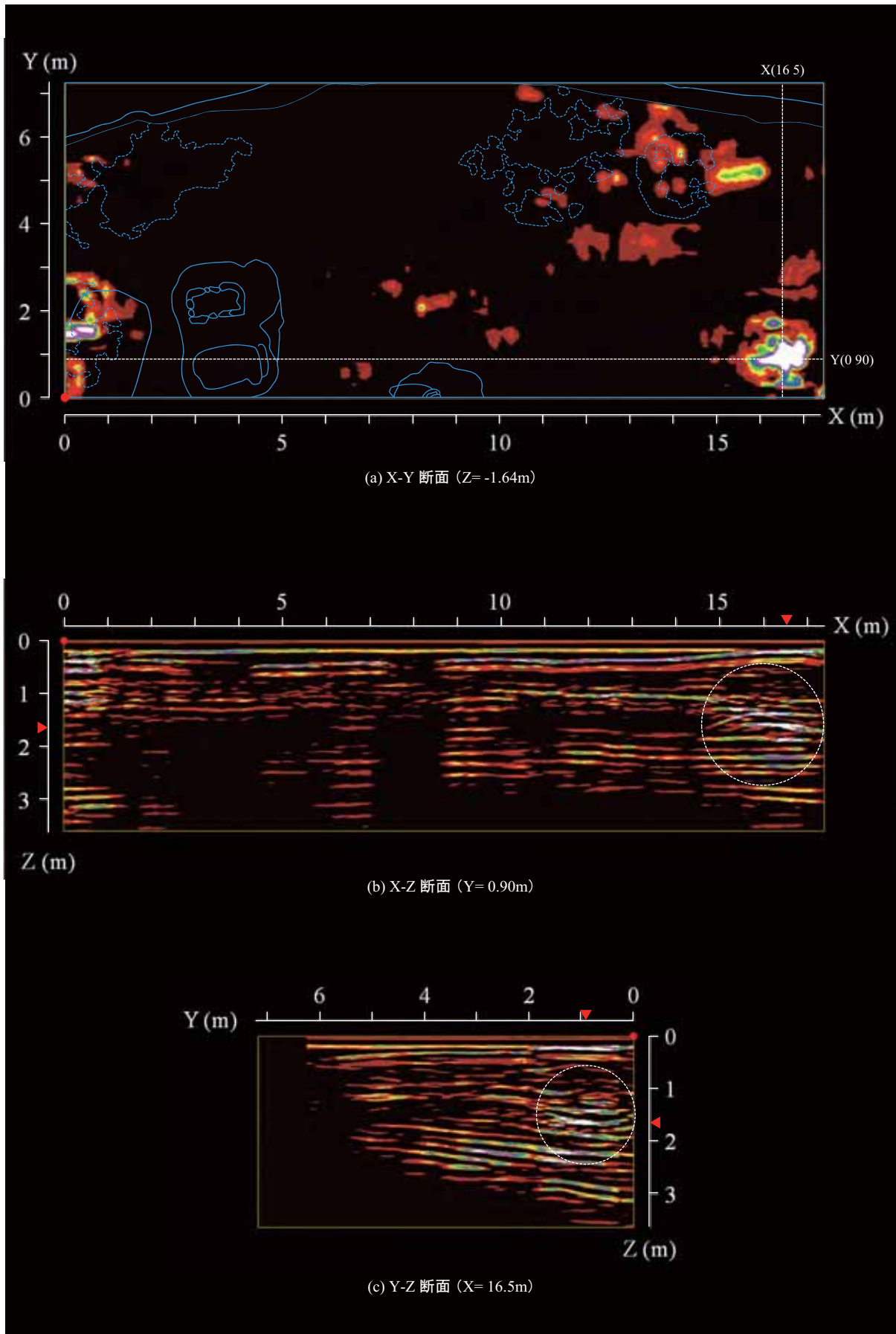
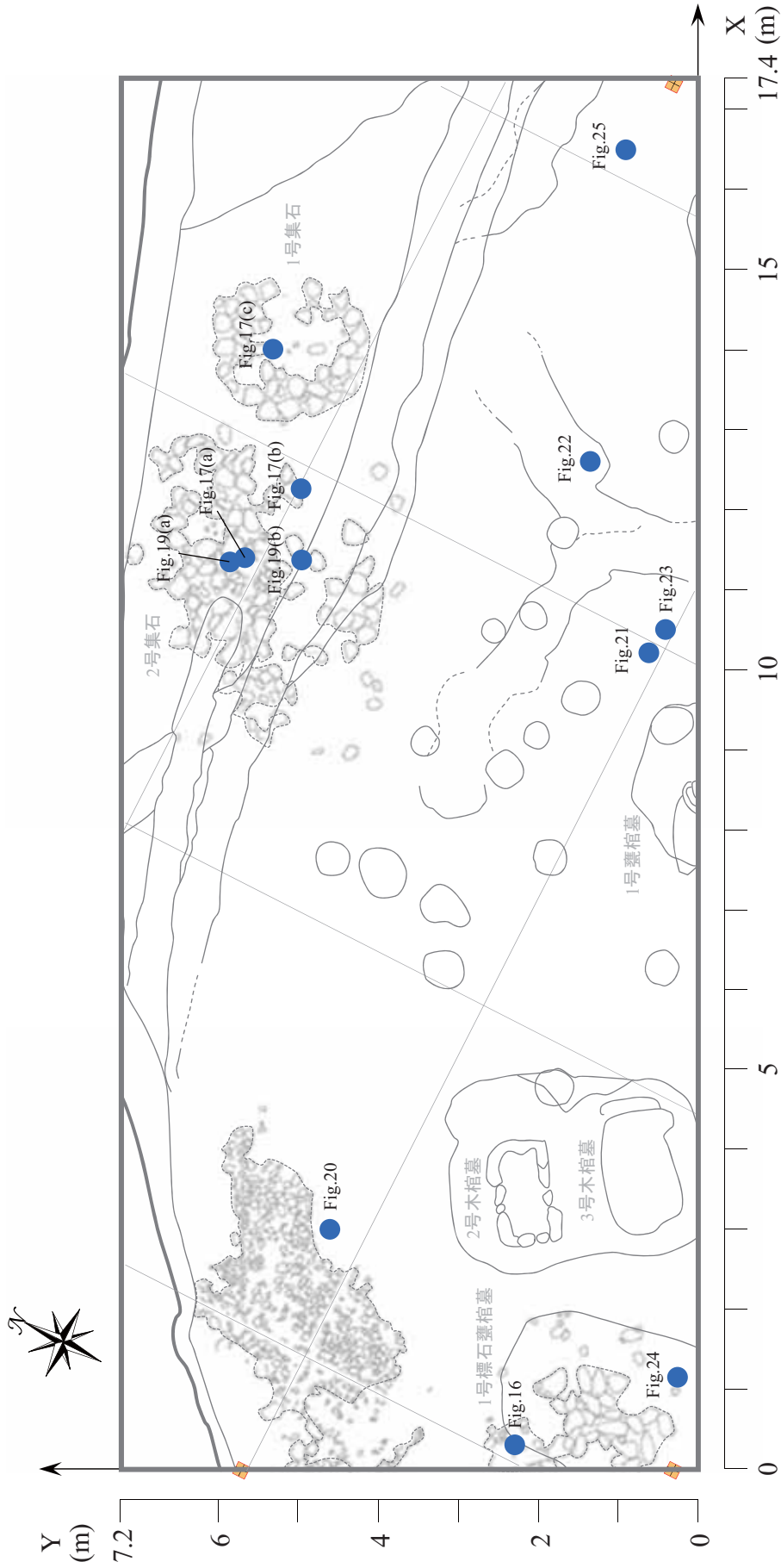


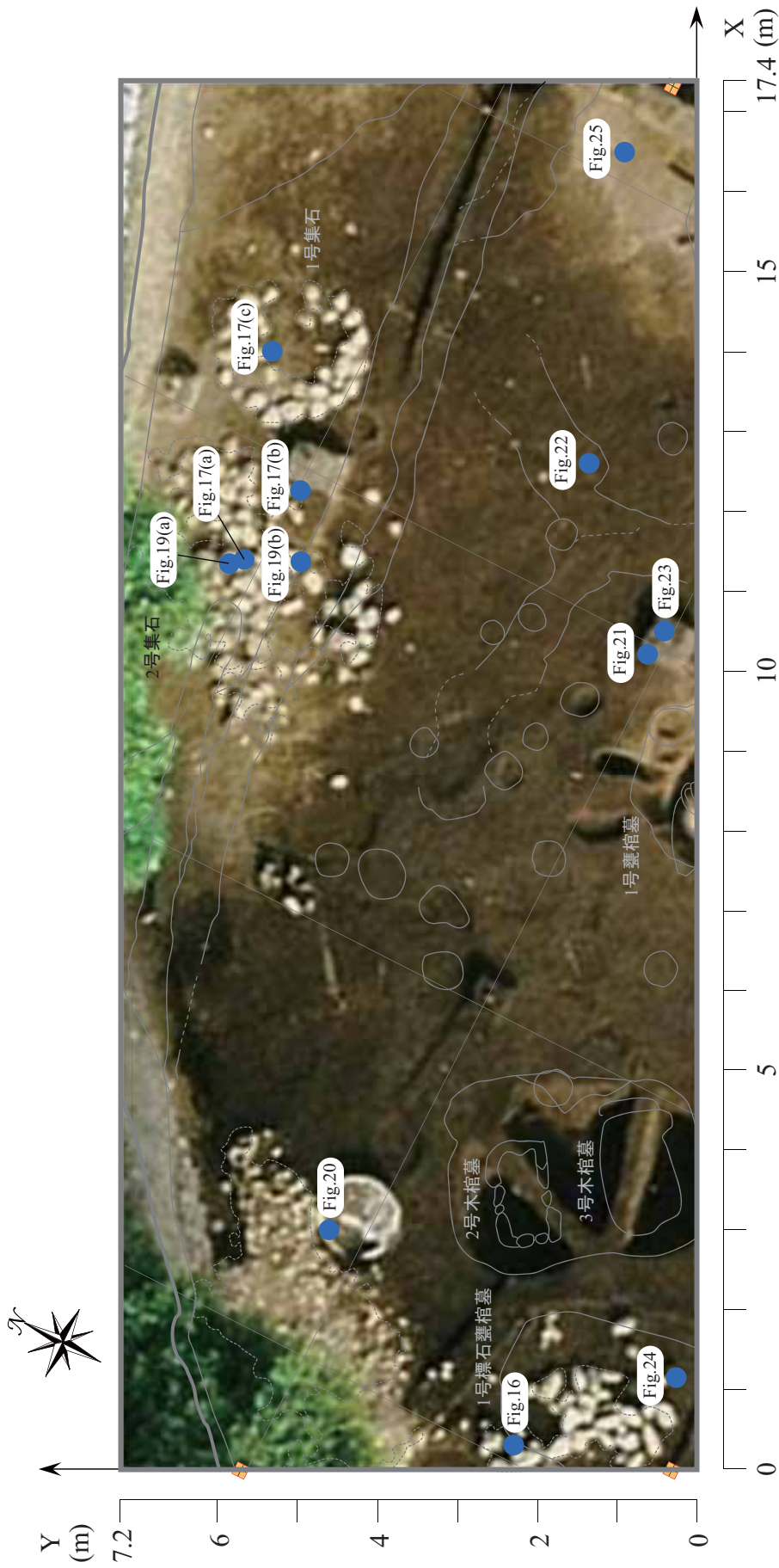
Fig.25 (  $X=1.15\text{m}$ ,  $Y=0.25\text{m}$ ,  $Z=-1.16\text{m}$  ) 地点の「X-Y」,「X-Z」,「Y-Z」断面(200MHz)



- Fig.16 ( X=0.30, Y=2.30, Z=-1.50m )
- Fig.17(a) ( X=11.4, Y=5.65, Z=-1.00m )
- Fig.17(b) ( X=12.3, Y=4.95, Z=-0.74m )
- Fig.17(c) ( X=14.0, Y=5.30, Z=-1.30m )
- Fig.19(a) ( X=11.3, Y=5.84, Z=-0.96m )
- Fig.19(b) ( X=11.4, Y=4.95, Z=-0.96m )
- Fig.20 ( X=0.30, Y=2.30, Z=-1.50m )
- Fig.21 ( X=10.2, Y=0.62, Z=-1.02m )
- Fig.22 ( X=12.6, Y=1.35, Z=-1.08m )
- Fig.23 ( X=10.5, Y=0.40, Z=-1.12m )
- Fig.24 ( X=1.15, Y=0.25, Z=-1.16m )
- Fig.25 ( X=16.5, Y=0.90, Z=-1.64m )

Fig.26 (a) 1区において反射体が確認された位置

予備測定の解析結果であるFig.19(a), Fig.19(b) の座標は200MHzの座標で表記した



- Fig.16 ( X=0.30, Y=2.30, Z=-1.50m )
- Fig.17(a) ( X=11.4, Y=5.65, Z=-1.00m )
- Fig.17(b) ( X=12.3, Y=4.95, Z=-0.74m )
- Fig.17(c) ( X=14.0, Y=5.30, Z=-1.30m )
- Fig.19(a) ( X=11.3, Y=5.84, Z=-0.96m )
- Fig.19(b) ( X=11.4, Y=4.95, Z=-0.96m )
- Fig.20 ( X=0.30, Y=2.30, Z=-1.50m )
- Fig.21 ( X=10.2, Y=0.62, Z=-1.02m )
- Fig.22 ( X=12.6, Y=1.35, Z=-1.08m )
- Fig.23 ( X=10.5, Y=0.40, Z=-1.12m )
- Fig.24 ( X=1.15, Y=0.25, Z=-1.16m )
- Fig.25 ( X=16.5, Y=0.90, Z=-1.64m )

Fig.26 (b) 1区空撮写真とFig.26 (a)との合成

空撮写真は、熊本県教育庁総務局文化課より提供頂いたものを1区測定領域に合わせ加工した

### 3.2 2区解析結果

#### (1) 解析領域の概略

Fig.27(a)に2区の測線配置を示す。図中で測線のない空白部分は廃土や障害物で測定ができなかった箇所である。Fig.27(b)に2区で出土した土塁の範囲を白破線で示す。背景画像は、白破線で示した土塁の範囲と解析で得られた強反射の範囲が一致した深度0.72mでの2次元水平断面画像(以下、断面)である。Fig.27( )は、断面上で土塁の分布と一致した強反射範囲のほぼ中央にあたる=5.50m位置での2次元垂直断面画像(以下、断面)である。本解析領域の特徴は、(0.00)から(7.40)の範囲では深度約1.00m~2.10mの範囲に反射体の存在が殆どなくレーダーがほぼ透過する領域が存在する。逆に(10.50)から(15.3)までは、深度約0.20m~1.00mの範囲に反射体の存在が殆どなくレーダーがほぼ透過する領域が存在するという特徴をもつ。

#### (2) 土塁の水平方向に対する連続性について

Fig.27(b)で示した通り、本解析では断面における強反射の範囲と出土した土塁の範囲が一致する良好な結果が得られているが、構造的に傾斜している土塁の水平方向に対する連続性を解析結果から追跡するには、土塁の方向に対し直交する垂直断面、つまり断面の解析結果を用いたほうが解釈に有利である。

よって本報では、断面を用いて土塁の水平方向に対する連続性について考察する。

Fig.28 上段の測線図に土塁の連続性を追跡するための断面位置を示す。追跡は出土側より行う。断面①から⑨の軸上での位置をab.5にまとめる。

ab.5 解析結果を示す 断面位置

断面番号	断面位置(m)	断面番号	断面位置(m)
①	18.85	⑥	16.20
②	18.30	⑦	15.90
③	17.70	⑧	15.60
④	17.10	⑨	15.30
⑤	16.50		

これから示すFig.28 ①からFig.28 ⑨の断面には、Fig.28 ①における土塁の範囲を白波線で、土塁の形状を青破線で示す。Fig.28 ①で確認できる反射境界(以下、反射面)は、(4.50)、深度約0.7m位置から(8.00)付近までゆるやかに傾斜している。この反射面が確認できる範囲は2区の発掘図(以下、発掘図)と良く一致している。発掘された土塁はFig.28 ③までの範囲であることが発掘図から確認できるが、解析結果でもFig.28 ③まではFig.28 ①土塁の深度と同じ深度に反射面が確認できる。しかしながら、Fig.28 ④以降は土塁の反射面との整合性は見られなかった。この理由は以下のようなものである。

- ① Fig.28 ④およびFig.28 ⑤において、土塁の範囲で見られる反射面がほぼ水平である。これは、当該位置がトレンチ調査のためにフラットな掘削面になっており、この掘削面からの反射波を捉えているものと思われる。このことは発掘図からも推測できる。
- ② Fig.28 ⑥およびFig.28 ⑦では反射面が左(が大きくなる方向)にシフトしており反射面位置が $\geq 5m$ の位置に確認される。これらの反射面は、Fig.28 ⑥およびFig.28 ⑦の断面における掘削面の位置と一致する。

- ③ Fig.28 ⑧および Fig.28 ⑨ではこれまでであった掘削面からの反射波は確認できない。Fig.28 ⑧および Fig.28 ⑨の断面は、この土地本来の地下構造を示していると思われるが、土塁の深度に相当する1m以浅での反射波は、概略で述べたように Fig.28 ⑨以降、(10.50)まで殆ど存在しない。
- ④ 測定で用いた200 および400 アンテナの探査深度は、土塁が存在すると思われる深度に最も適したアンテナであったが、土塁を築いた土と土塁を覆う表土との質の違いによる境界面からの反射波を捉えることができなかった可能性も否定できない。

以上のことから、得られた反射面は発掘面からの反射波であり、土塁の水平方向に対する連続性は確認できないと判断した。

### (3) 2区の地下構造

2区では、1区に見られた遺物等からの反射と思われる限られた範囲からの特徴的な反射パターンを確認することはできなかったが、比較的広範囲にわたる反射波の解析から地下構造を示す特徴的な反射面が得られた。Fig.29 に得られた反射面を深度1.00m以浅と深度1.00m以深にわけて解析領域の3D画像上にまとめる。さらに Fig.30、Fig.31 では、Fig.29 に示す反射面の概略的な範囲を青点線で測線図に示すとともに、代表的な反射形状を断面上に白破線で示した。Fig.30、Fig.31 測線図の赤線は参照する断面の位置である。

主な特徴を以下に記す。

#### 【 深度1.00m以浅の解析結果 】

- ・ Fig.30 ① (0.00 0.90)、(4.00 6.00)の範囲で深度約0.4mの位置にほぼ水平に反射面が存在する。水平に圧密された地盤、またはコンクリートなど緻密な構造物の存在が推測される。
- ・ Fig.30 ② (0.70 4.90)、(3.00 8.90)の比較的広範囲の反射面は、(3.00)の位置で深度約0.25mの浅い位置に存在し、(8.90)へ向かって0.50mほど緩やかに傾斜した地形である。  
(8.00)付近に浅い谷部が存在する。
- ・ Fig.30 ③ (5.00 6.00)、(3.80 8.00)の範囲で深度約0.3mの位置に水平からやや(8.90)方向に傾斜した反射部が存在する。Fig.26 ①と同様に圧密された地盤かコンクリートなどの緻密な構造物の存在が推測される。
- ・ Fig.30 ④ (5.80)、深度約0.70mから(7.40)、深度約0.5mの位置に傾斜する反射面が存在するが、図に示したような反射面は(9.55 10.35)の短い範囲であり、連続性が確認できる(8.35 9.55)の範囲では傾斜が不明瞭になる。反射面の位置は(8.90)方向に1.20mほどずれるが、傾斜の向き、傾斜の角度、深度は Fig.28 ①の土塁の形状に類似している。

#### 【 深度1.00m以深の解析結果 】

- ・ Fig.31 ① (8.85 12.95)、(5.40 8.90)の範囲で深度約1.7mの位置に対称形の弧を描く反射面が存在する。
- ・ Fig.31 ② 01 (13.75 15.45)、(5.20 8.90)の範囲に深度約1.2mから(8.90)方向へ0.3m程傾斜する反射面が確認された。
- ・ Fig.31 ② 02 (14.05 15.55)、(0.53 6.00)、深度約1.8mの位置に Fig.31 ①と類似した対称形の弧を描く反射面が存在している。



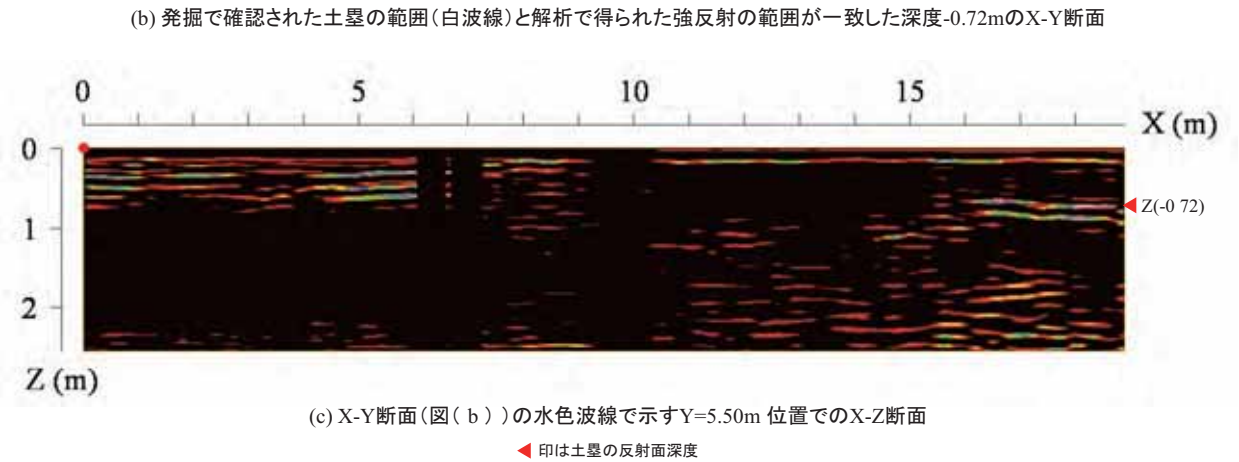
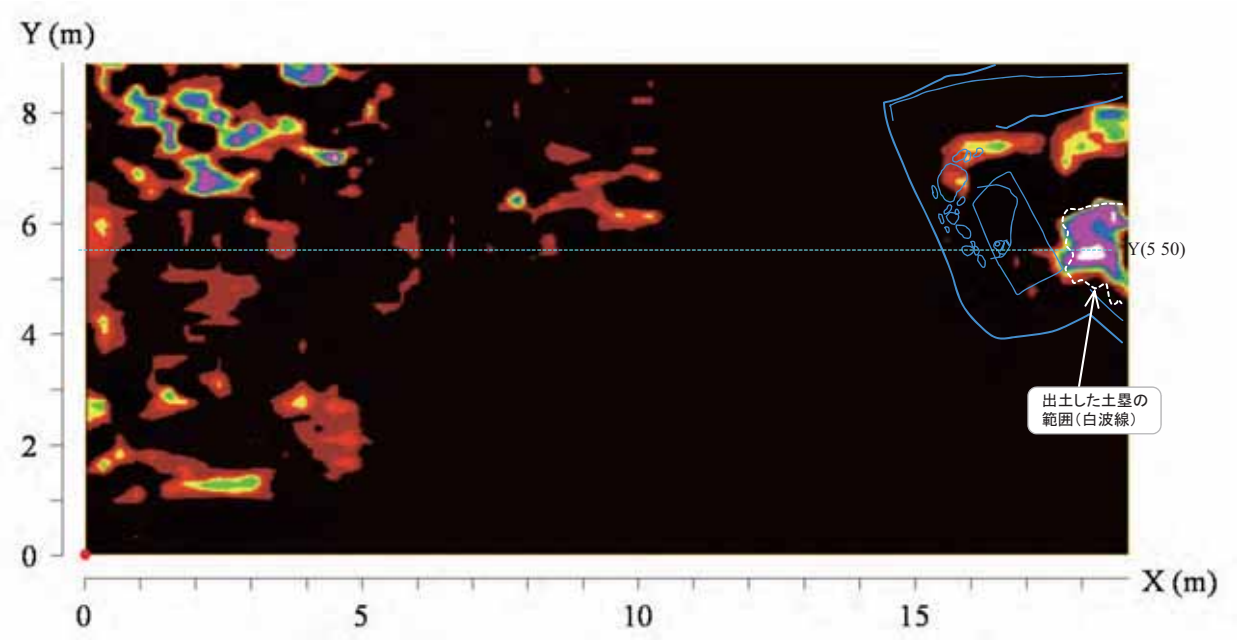
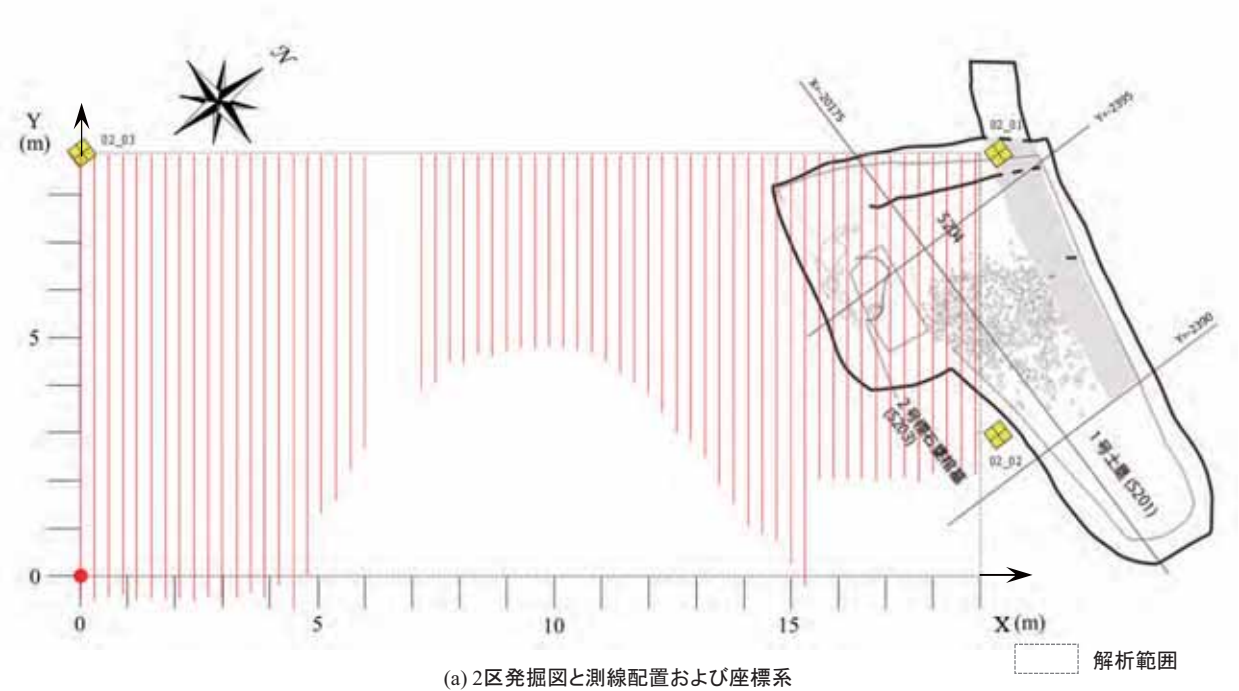
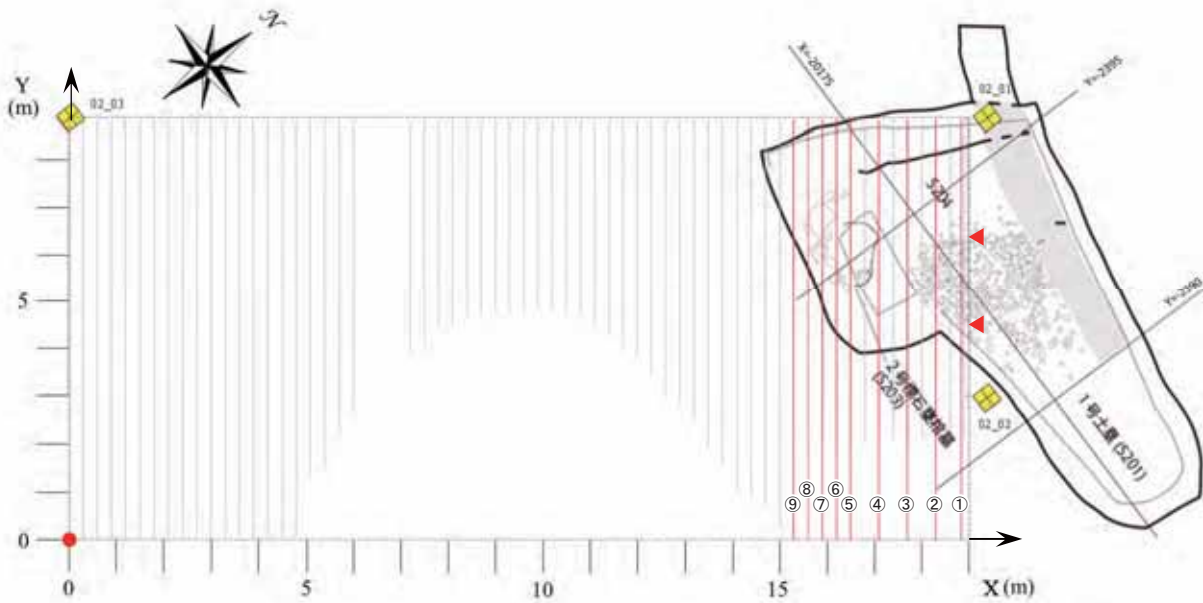


Fig.27 2区解析結果(200MHz)



⑨ 15.30 ⑧ 15.60 ⑦ 15.90 ⑥ 16.20 ⑤ 16.50 ④ 17.10 ③ 17.70 ② 18.30 ① 18.85 (m)

土塁の連続性に関する解析結果を示すY-Z断面位置

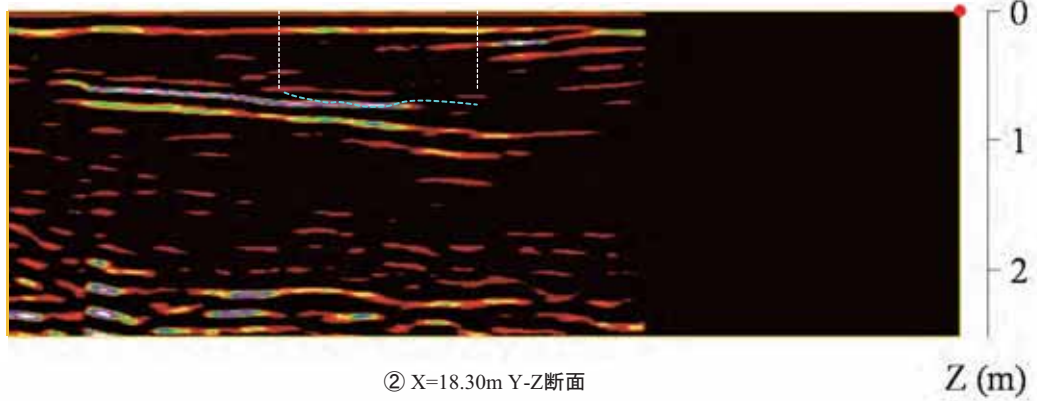
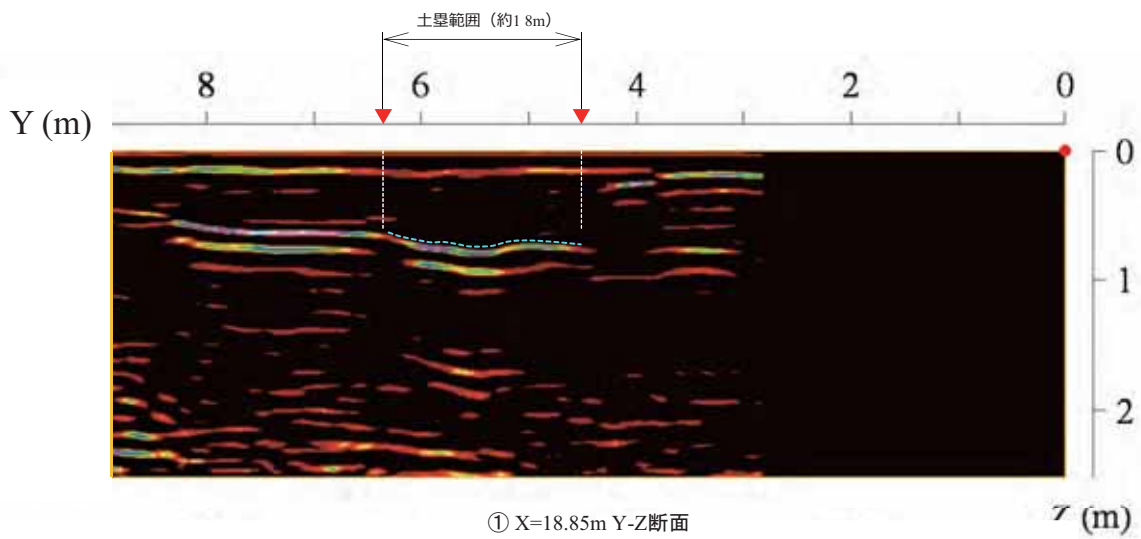


Fig.28 土塁の連続性に関する解析結果

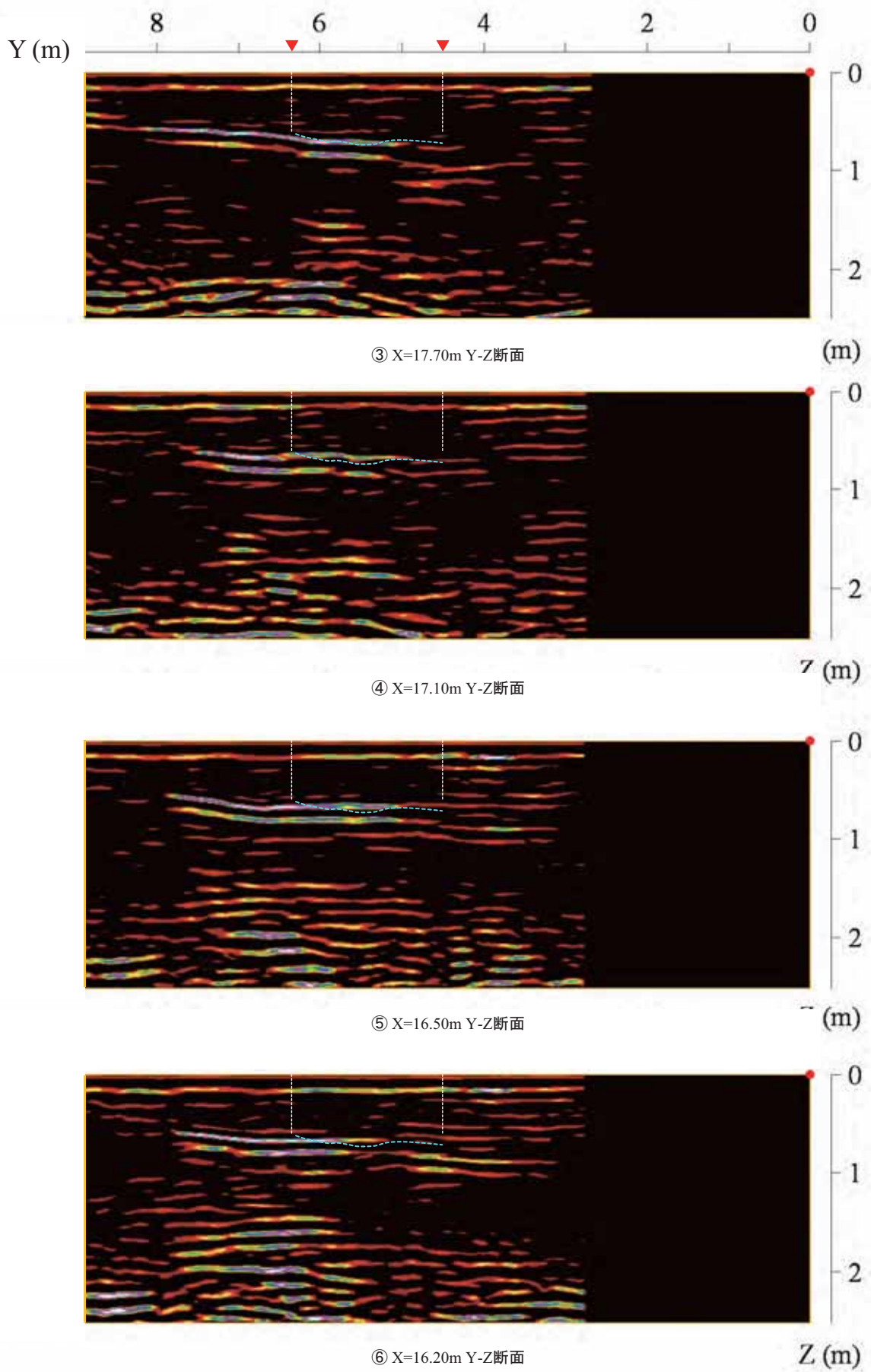


Fig.28 土壘の連続性に関する解析結果

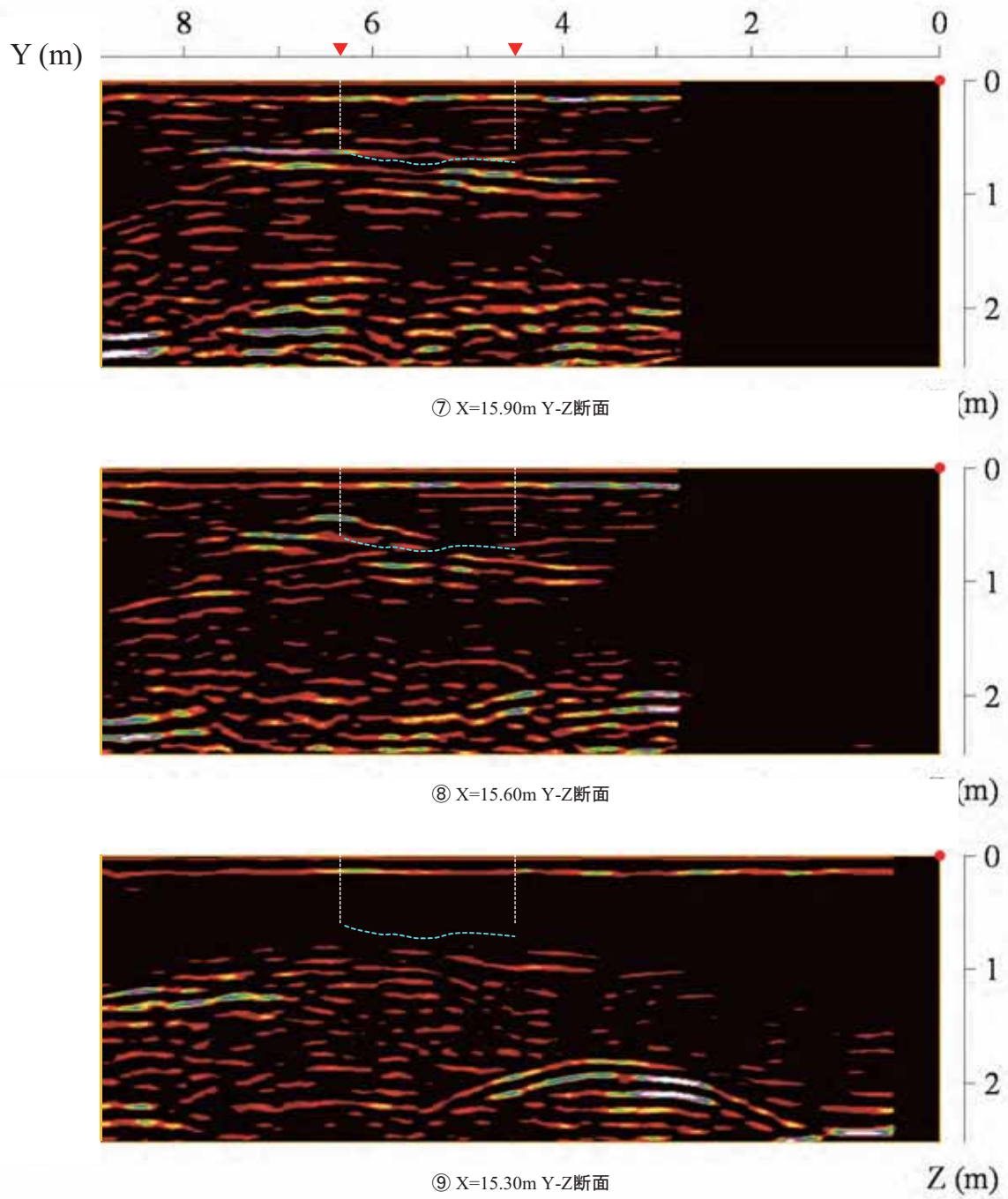


Fig.28 土層の連続性に関する解析結果

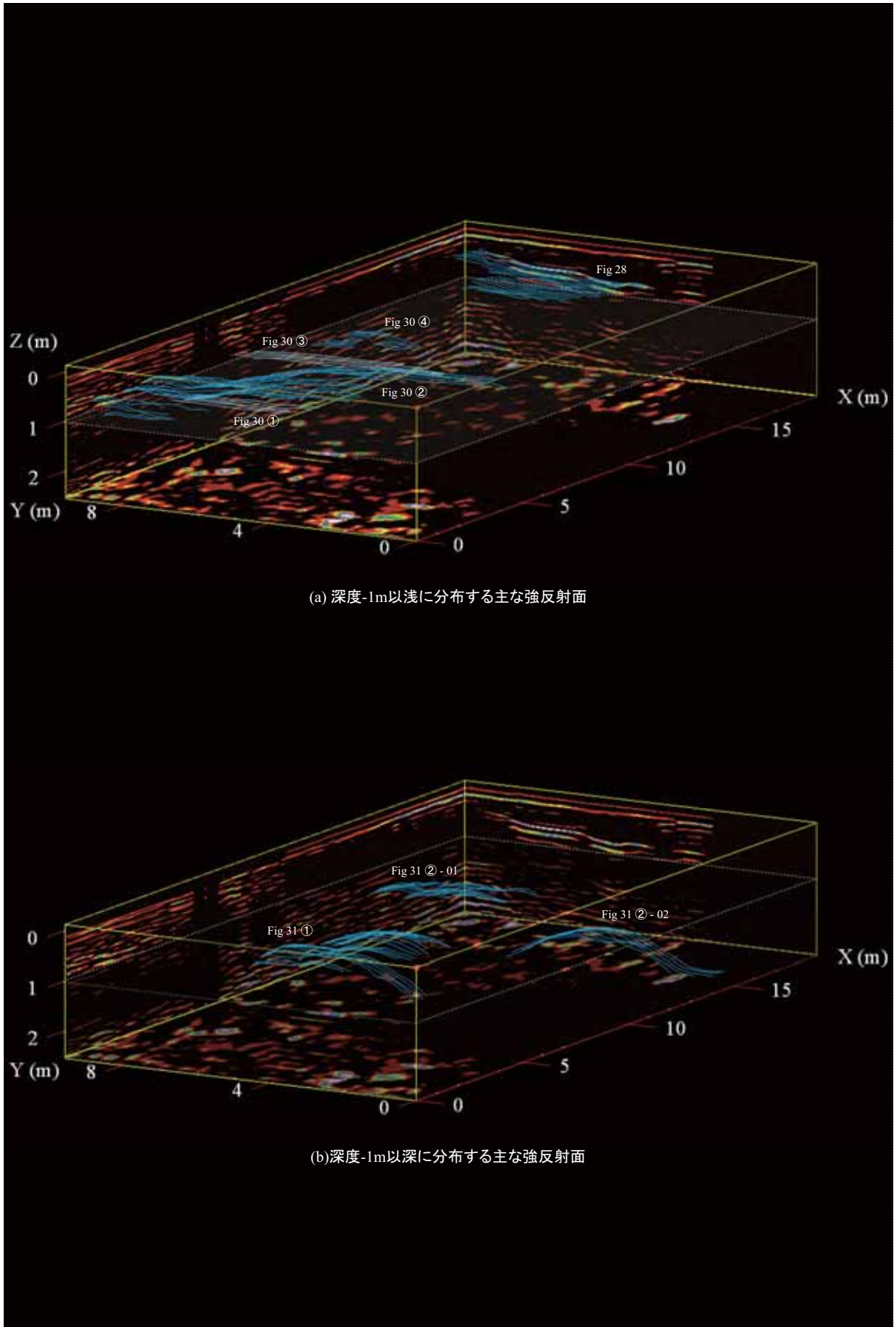
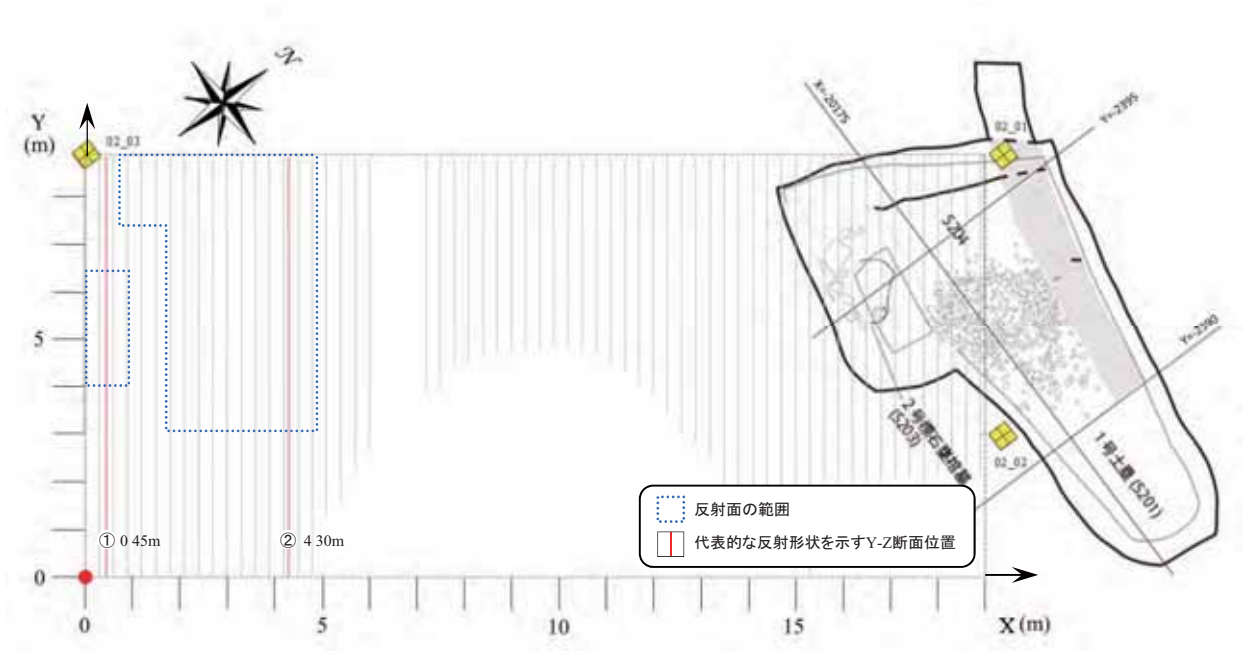


Fig.29 2区における地下構造反射面の分布



反射面の大略的な範囲と代表的な反射形状を示すY-Z断面位置

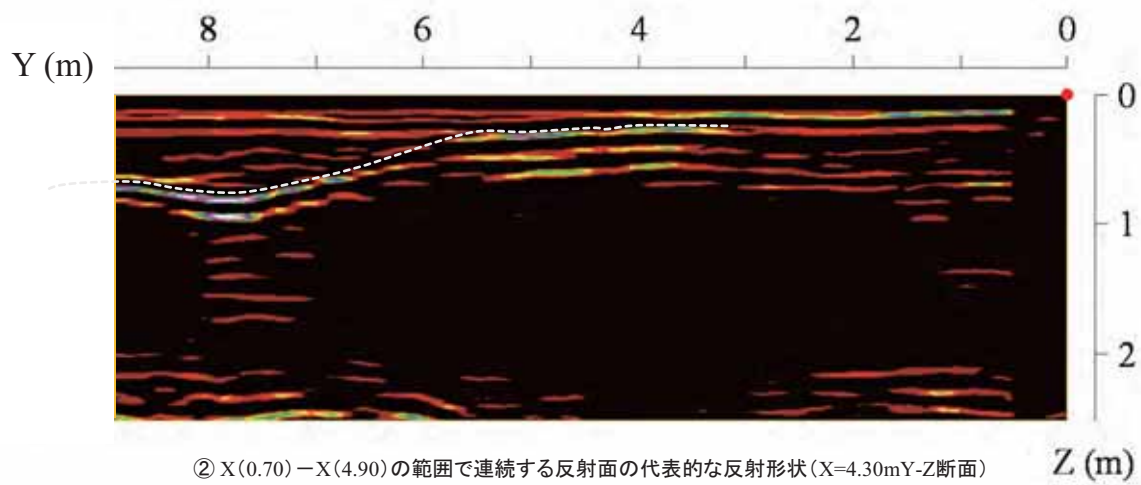
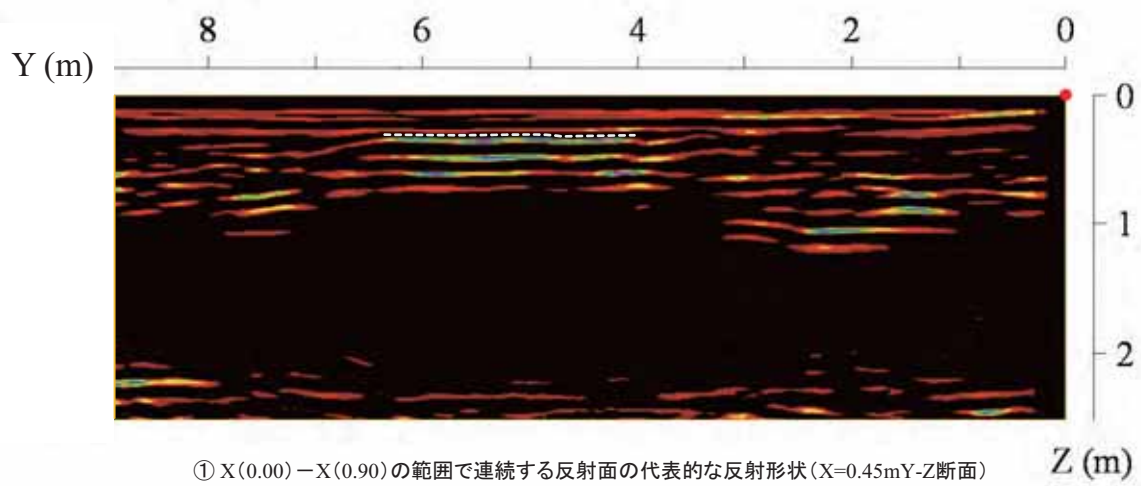
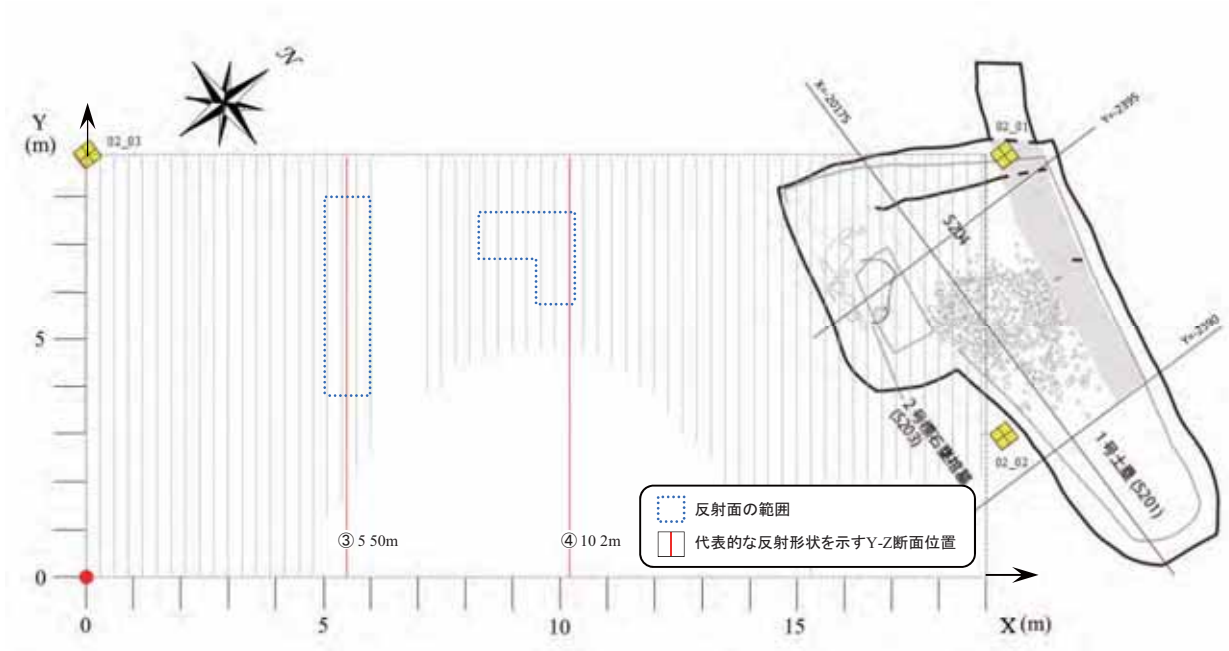


Fig.30 深度-1m以浅に分布する主な強反射面



反射面の大略的な範囲と代表的な反射形状を示すY-Z断面位置

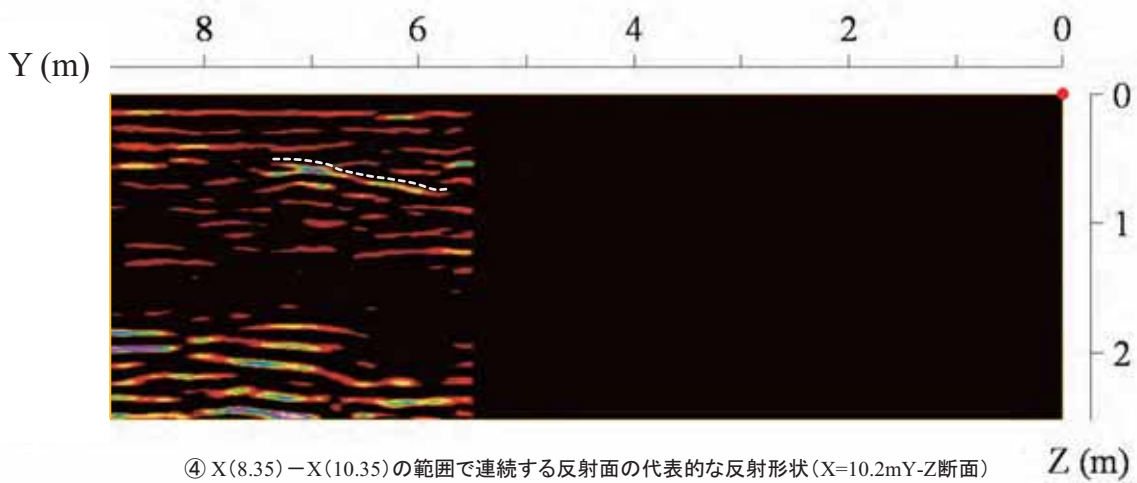
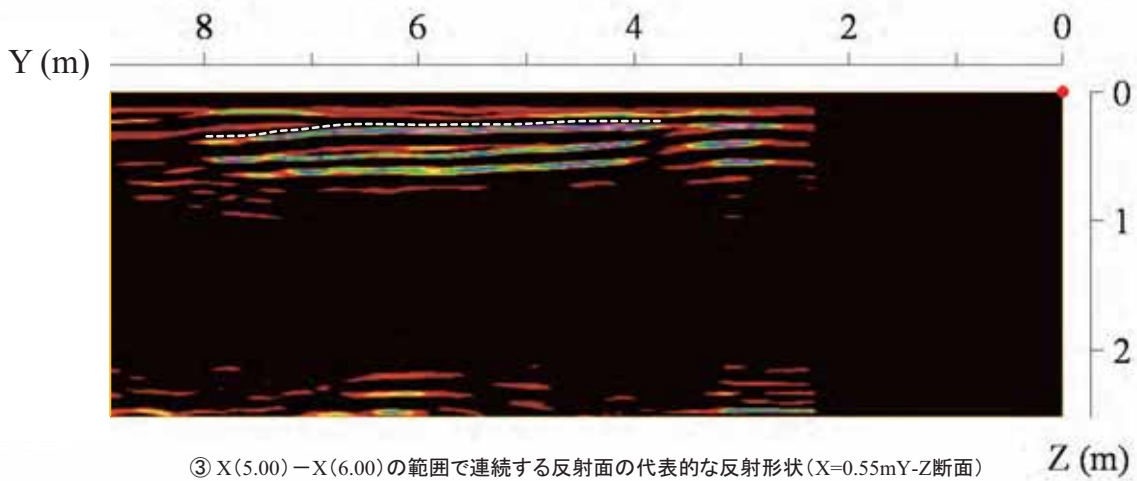
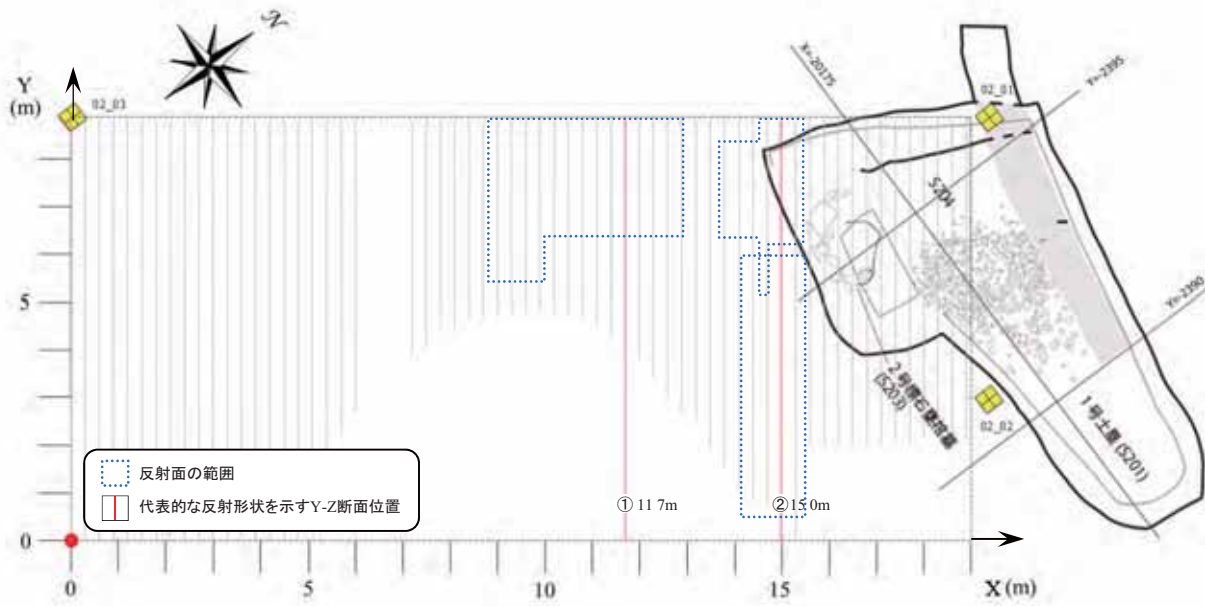
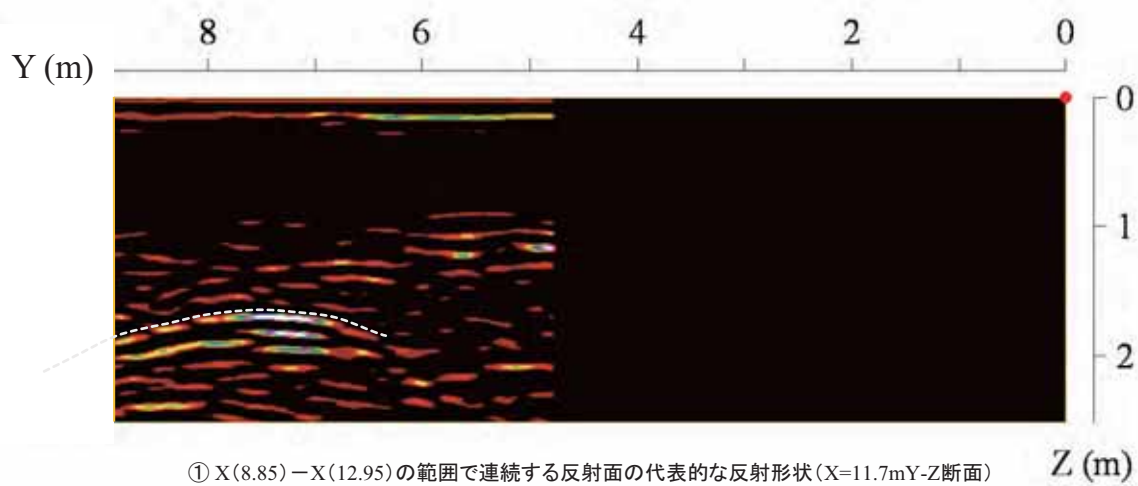


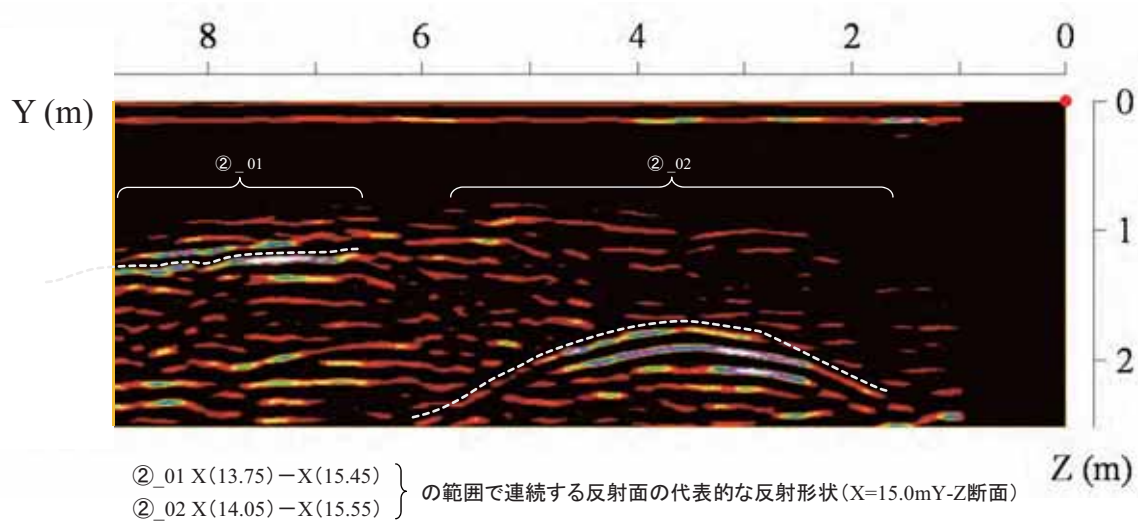
Fig.30 深度-1m以浅に分布する主な強反射面



反射面の大略的な範囲と代表的な反射形状を示すY-Z断面位置



① X(8.85) - X(12.95)の範囲で連続する反射面の代表的な反射形状 (X=11.7m Y-Z断面)



②\_01 X(13.75) - X(15.45) } ②\_02 X(14.05) - X(15.55) の範囲で連続する反射面の代表的な反射形状 (X=15.0m Y-Z断面)

Fig.31 深度-1m以深に分布する主な強反射面



#### 4. まとめ

新南部遺跡群(県第11次)において実施した「地中レーダー探査」の解析結果を以下にまとめる。

- 測定では、200 MHz および 400 MHz アンテナを使用した。解析で求めた探査深度は 1 区で 3.6m (200 MHz) および 1.8m (400 MHz)、2 区で 2.5m (200MHz) および 1.7m (400 MHz) であった。400 MHz は 200MHz に比べ探査深度が浅く、レーダーの減衰も激しかったため深部で明瞭な反射波が得られていない。また、発掘で確認された主な遺物は深度-1.00m以深に分布することからも本報では 1 区の一部に使用した予備調査の解析結果(400MHz)以外は 1 区、2 区ともに 200 MHz の解析結果を用いた。
- 1 区では、遺物が存在する、またはその可能性が高い標石および集石部を中心に解析を行った。

##### 【1区\_01】

「1号標石甕棺墓(S104)」を中心に解析領域を設定した「1区\_01」では、トレンチによって1号標石下に甕棺墓の存在が確認されているため、甕棺墓からの反射波が捉えられるか、また反射パターンはどのような形状で得られるのか、に注目した。解析領域は X(0.00-3.00)、Y(0.00-3.20)である。

結果を以下に記す。

- ① (X0.30,Y2.30)を中心とした Z(-1.50)の位置に長さ約 1.8m の湾曲した反射パターンが Y-Z 断面で得られた。これは、湾曲パターンが得られた位置や深度からも甕棺墓の存在を示す反射波であると推定した。
- ② 解析結果の Y-Z 断面から湾曲パターン(反射境界面)の立体的な形状抽出を行った結果、反射境界面の形状は Y 軸方向に湾曲し、X(0.00)から X(1.30)に向かってゆるやかに傾斜(下降)し、湾曲パターンの形状の一部には不連続な部分も存在することがわかった。

##### 【1区\_02】

未発掘部である 1 号集石(S110)、2 号集石(S107)を中心に解析領域を設定した「1区\_02」では、解析領域内に甕棺墓が存在する可能性の有無、およびその分布の特徴抽出を解析の目的とした。解析領域は X(9.00-15.5)、Y(3.00-7.20)である。結果を以下に記す。

- ① 2 号集石(S107)のほぼ中央である X=11.4m、Y=5.65m、深度約-1.0m の位置に湾曲パターンが確認された。湾曲パターンは Y 軸方向への湾曲が顕著であり、湾曲方向の最長部分は 1.3m であった。X 軸方向への連続性は、10.8m から 12.0m の範囲でほぼ水平に連続することがわかった。
- ② ①の解析結果で明らかになった湾曲パターンの出現範囲には、予備調査で行った 400MHz の解析結果がより詳細な湾曲パターンの分布を示すことがわかった。すなわち、予備調査の解析結果では、湾曲パターンが深度約-1.10m の位置で 90° 向かい合うように位置していることがわかった。詳細については Fig.19 を参照されたい。

③ 1号集石(110)と2号集石(107)の間にあたる  $\approx 12.7\text{m}$ 、 $\approx 5.6\text{m}$  周辺で深度約  $0.74\text{m}$  の位置に湾曲した反射パターンが確認された。湾曲パターンは 軸方向への湾曲が顕著であり、湾曲方向の最長部分は  $1.3\text{m}$  であった。 軸方向への連続性は、 $11.7\text{m}$  から  $12.8\text{m}$  の範囲で上向きに傾斜していることがわかった。

④ 2号集石(107)直下では、①および②、③で確認された明確に湾曲した反射パターンを得ることはできなかった。深度  $1.3\text{m}$  付近にわずかに弧を描く傾斜した反射パターンを確認したが地形の一部とも読み取れるため、この反射パターンから遺物の存在を推定することは難しい。

● 2区では、発掘で確認された土塁の未発掘部に対する水平方向への連続性について解析を行った。

① 土塁の水平方向に対する連続性については、 $\approx 17.7\text{m}$  から  $\approx 18.85\text{m}$  の範囲でのみ確認できた。この範囲の近傍  $\approx 15.3\text{m}$  から  $\approx 17.1\text{m}$  でも土塁の水平方向に対する連続性を追跡したが、 $\approx 15.9\text{m}$  から  $\approx 17.1\text{m}$  の範囲で見られる土塁の深度とほぼ同じ位置に確認できる反射面は、発掘で掘削された掘削面からの反射波であると解釈した。解析領域全体にわたる土塁の連続性については見出すことができなかった。

② 2区では、1区に見られたような遺物等からの反射と思われる限られた範囲からの特徴的な反射パターンは確認されなかったが、比較的広範囲にわたる反射波の解析から地下構造を示す特徴的な反射面が得られた。この中で、 $1\text{m}$  以深に対称形の弧を描く反射面が2箇所を確認された。これは1区では見られなかった特徴である。非常に整った形状であることから人工的に築かれたものではないかと思われる。

《参考文献》

佐藤源之・利岡徹馬(1998):第7章 地中レーダ,物理探査ハンドブック 手法編,物理探査学会 . 401-421.

## 第2節 新南部遺跡群 11 次及び吉原遺跡の胎土分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

熊本市東区新南部に所在する新南部遺跡群では、古墳時代終末期の住居跡が確認されており、砥石、紡錘車ほかの石器や、鉄器、土器などが出土している。また、弥生時代中期の甕棺墓も認められており、ほぼ完全な形を残して複数出土している。甕棺墓の土器型式からは、北部九州から搬入された可能性も指摘されている。

本報告では、新南部遺跡群 11 次より出土した甕棺の土器および目張り粘土について、材質(胎土)に関する岩石学的な分析を行い、その特性を明らかにする。また、熊本市吉原町の吉原遺跡から出土した土器についても同様の分析を行い、既知の地質情報や遺跡間の比較から、その製作や使用に関わる事情を検討する。

### 1. 試料

試料は、新南部遺跡群 11 次出土の甕棺 9 点、目張り粘土 3 点、および吉原遺跡出土の甕 9 点の計 21 点である。土器試料はいずれも弥生時代中期のものであり、上甕、下甕などから採取されている。各資料の調査地区、遺構名、状況等の詳細を表 1 に示す。

さらに今回の分析では、調査区内で採取した甕棺外の土壌 1 点と白川の河川砂 1 点についても比較対照試料として同様の分析を行い、胎土の由来する堆積物の可能性を検討する。

### 2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は切片による薄片作製が主に用いられており、後者では蛍光 X 線分析が最もよく用いられている方法である。前者の方法は、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点があり、

胎土中における砂粒の量や、その粒径組成、砂を構成する鉱物片、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。ただし、胎土中に含まれる砂粒の量自体が少なければ、その情報量も少なくなる。一方、蛍光 X 線分析は、砂分の量や高温による鉱物の変化にあまり影響されることなく、胎土の材質を客観的な数値で示すことができる。今回の分析では基礎資料の作成という目的から、薄片作製観察を行う。以下に分析手順を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

ここでは薄片観察結果を松田ほか(1999)の方法に従って表記する。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて 0.5mm 間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により 200 個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径 0.5mm 以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の 3 次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

表1. 分析試料一覧

サンプル番号	遺跡名	調査地区	遺構名	状況	胎土分類		
					岩石 (推定地域)	粒径	碎屑物
16934-1	新南部11次	1区	S108	下甕	C(八女市周辺域)	2	I
16934-2	新南部11次	1区	S109	上甕	D(玉名市北部・福岡県)	1	I
16934-3	新南部11次	1区	S109	下甕	D(玉名市北部・福岡県)	1	I
16934-4	新南部11次	1区	S174	上甕	B(緑川流域)	2	I
16934-5	新南部11次	1区	S174	下甕	B(緑川流域)	2	I
16934-6	新南部11次	1区	S175	上甕	D(玉名市北部・福岡県)	1	I
16934-7	新南部11次	1区	S175	下甕	D(玉名市北部・福岡県)	1	I
16934-8	新南部11次	1区	S185	上甕	D(玉名市北部・福岡県)	1	I
16934-9	新南部11次	1区	S185	下甕	D(玉名市北部・福岡県)	2	I
16934-10	吉原遺跡	1区	S15	上甕	A(白川流域)	3	I
16934-11	吉原遺跡	1区	S15	下甕	D(玉名市北部・福岡県)	2	I
16934-12	吉原遺跡	1区	S16	上甕	B(緑川流域)	1	I
16934-13	吉原遺跡	1区	S16	下甕	B(緑川流域)	1	II
16934-14	吉原遺跡	2区	S13	上甕	B(緑川流域)	1	I
16934-15	吉原遺跡	2区	S13	下甕	E(玉名市北部・福岡県)	1	I
16934-16	吉原遺跡	3区	S6	上甕 上	E(玉名市北部・福岡県)	1	I
16934-17	吉原遺跡	3区	S6	中甕 中	B(緑川流域)	1	I
16934-18	吉原遺跡	3区	S6	下甕	D(玉名市北部・福岡県)	3	I
16934-19	新南部11次	1区	S109	下甕口縁付近・目張り粘土サンプル	(A(白川流域))	(1)	I
16934-20	新南部11次	1区	S175	目張り粘土	(A(白川流域))	(1)	I
16934-21	新南部11次	1区	S185	目張り粘土・サンプル	(A(白川流域))	(1)	—
—	—	—	—	甕棺外土壌	(A')	4	—
—	—	—	—	白川河川砂(中粒)	(A')	2	—

### 3. 結果

薄片観察結果を表2に示す。この結果に基づく、胎土の各粒度階における鉱物・岩石出現頻度を図1に、碎屑物の粒度組成図2に示す。以下に、鉱物片および岩石片の種類構成、砂分全体の粒度組成、碎屑物・基質・孔隙における碎屑物の割合の順に述べる。なお、以下に記す胎土分類結果は、試料一覧を示した表1にも併記した。

#### 1) 鉱物片および岩石片の種類構成

土器試料18点について、鉱物片、岩片等の種類、量比の傾向から、胎土分類を行った。以下に各グループにおける碎屑片の特徴を示す。

A類：火山ガラスを多く含むが、岩片が少なく、角閃石、単斜輝石を伴う組成である。石英、カリ長石が少なく、清澄な斜長石を多含しており、火山灰質な組成とみることができる。吉原遺跡の試料番号10がこれに分類される。

B類：頁岩、砂岩、凝灰岩、流紋岩・デイサイト、安山岩の岩片を含み、カリ長石をほとんど含まず、輝石類、角閃石を伴う組成である。まれに粘板岩、花崗岩類、ホルンフェルス、火山ガラスを伴うものも存在する。新南部遺跡群11次の試料番号4、5および吉原遺跡の試料番号12、13、14、17がこれに分類される。

C類：雲母片岩を多く含み、安山岩、流紋岩・デイサイト、凝灰岩などを伴う組成である。新南部遺跡群11次の試料番号1がこれに分類される。

D類：火山ガラスを多く含み、多結晶石英、花崗岩を主要な岩片とし、石英、カリ長石、斜長石も多含する組成である。新南部遺跡群11次の試料番号2、3、6、7、8、9および吉原遺跡の試料番号11、18がこれに分類される。

E類：岩片の種類が少なく、花崗岩が卓越する組成である。吉原遺跡の試料番号15、16がこれに分類される。

#### 2) 砂分全体の粒度組成

各試料のモードを示す粒径をみると、試料によって様々な粒径がモードとなっており、細粒側に偏った組成や粗粒側に偏った組成なども認められる。ここでは以下示す傾向から、1類から3類に分類した。

1類：比較的正規分布に近い頻度分布で細粒砂か中粒砂をモードとする組成である。新南部遺跡群11次の試料番号2、3、6、7、8および吉原遺跡の試料番号12、13、14、15、16、17がこれに分類される。

2類：粗粒砂または中粒砂がモードとなり、粗粒側へ偏る粒度分布を示す(歪度が正)となっている組成である。新南部遺跡群11次の試料番号1、4、5、9および吉原遺跡の試料番号11がこれに分類される。

3 類：細粒砂がモードとなり、細粒側へ偏る粒度分布を示す(歪度が負)となっている組成である。吉原遺跡の試料番号 10、18 がこれに分類される。

### 3) 碎屑物・基質・孔隙における碎屑物の割合

多くの試料は、碎屑物の割合が 20%前後の値を示すが、25%を超える試料も少数ではあるが認められる。ここでは、前者をⅠ類とし、後者をⅡ類とする。各分類に相当する試料は以下の通りである。なお、試料番号 21 の目張り粘土については、固結度が低く、孔隙が非常に多いため、分類から除外した。

Ⅰ類：新南部遺跡群 11 次の試料番号 1～9 および吉原遺跡の試料番号 10～12、14～18

Ⅱ類：吉原遺跡の試料番号 13

### 4) 比較対照試料

甕棺外土壌の鉱物・岩石組成は、火山ガラスが多いことや斜長石が多いこと、さらに輝石類や角閃石の鉱物片が含まれることなど、A 類とした組成の特徴とよく類似する。砂全体の粒径組成は極細粒砂をモードとし、中粒砂や細粒砂をモードとする土器胎土に比べるとやや細粒傾向を示す。碎屑物の割合は、土器胎土に比べると少ないが、孔隙の割合も高い。

白川の河川砂では、斜長石と単斜輝石の鉱物片および流紋岩・デイサイトと安山岩の岩石片を主体とする組成が得られた。火山ガラスも含まれるが、その量比は少ない。粒径組成は中粒砂をモードとし、粗粒砂および細粒砂も比較的多い。

## 4. 考察

### (1) 胎土の由来する地質

胎土に認められた鉱物・岩石組成は、胎土の材料となった粘土や砂の採取地背後の地質すなわち後背地の地質分布を反映していると考えられる。したがって、同様の組成を示す土器は、同様の地質学的背景を有する地域で採取された堆積物を材料としていると考えられる。

遺跡の近傍を流れる白川は、阿蘇カルデラを水源としており、流域面積の約 80%がカルデラ内に分布している。カルデラから熊本平野に至る地域にも阿蘇火山の噴出物が広く分布していることから、白川に流れる碎屑物は阿蘇火山の噴出物に由来するものが大部分を占めていると考えられる。阿蘇火山の噴出物は、阿蘇-1～4 テフラの火砕流堆積物が主体となっており、中央火口丘を構成する玄武岩～流紋岩などの溶岩も含まれている。阿蘇-1～4 テフラの火砕流堆積物は、角閃石や輝石を含む安山岩～デイサイト質な溶結凝灰岩、非溶結の火山灰および軽石などから構成されている(星住ほか、2004)。白川中流域においては、後期白亜紀の姫浦層群の礫岩、砂岩、シルト岩や、中期更新世の金峰火山の玄武岩質溶岩・火砕岩などが小規模に分布している。

白川流域の地質を考慮すると、白川流域の堆積物を材料としている胎土は A 類が該当すると考えられる。A 類は火山ガラスを大量に含み、角閃石、単斜輝石の斑晶を含む組成であり、火山灰質な性状を示している。A 類は、吉原遺跡の試料番号 10 の上甕試料 1 点のみであるが、比較試料となっている試料番号 19 の下甕口縁付近・目張り粘土サンプル、試料番号 20、21 の目張り粘土の試料の 3 点も火山ガラスを多く含み、角閃石または輝石類を含む点で、A 類に類似しているといえる。

なお、調査区内で採取された甕棺外土壌の鉱物・岩石組成は、当然のことながら A 類に類似した組成となったが、一方で白川の河川砂の組成は、安山岩の多いことと火山ガラスの少ないことで A 類とは若干異なるものとなった。しかし、これは採取した砂の粒径に起因すると考えられる。すなわち試料とした河川砂は、粒径の細かな火山ガラスは流失してしまった堆積物であり、おそらく安山岩の岩石片の多くが中粒砂程度の粒径となっている場所なのであろう。土器にはより粒径組成の細かい堆積物が使用されたと考えられ、A 類が白川流域の堆積物に由来することを示唆することは変わらない。

表2(1). 薄片観察結果

試料	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計																	
		鉱物片							岩石片							その他																				
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩		多結晶石英	花崗岩類	雲母片岩	粘板岩	ホルンフェルス	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	砂混じり粘土塊	酸化鉄結核	炭質物	植物片	植物片	植物珪酸体		
1	細礫																																	0		
	極粗粒砂																	1	2		2		1											6		
	粗粒砂	2		3													8	3	12	3	1	26	1	3	10	6								78		
	中粒砂	3		3	1												5	3	3	6		15		2	11	4	1							58		
	細粒砂	3		4	1		1													1	1			1										12		
	極細粒砂	3		5															1															10		
	粗粒シルト	2																														1		3		
	中粒シルト																															1		1		
基質																																		624		
孔隙																																			36	
2	細礫																																	0		
	極粗粒砂			1															1	2															4	
	粗粒砂	5	2														1		11	3	1			1		2		1						27		
	中粒砂	7	8	4													1		10					1		4		1						36		
	細粒砂	12	5	17																4						14								53		
	極細粒砂	7	4	10		1	1																			6								30		
	粗粒シルト	5		6																						1						3		15		
	中粒シルト			1																														1		
基質																																		536		
孔隙																																			22	
3	細礫		1																1															2		
	極粗粒砂																		6	2				1											9	
	粗粒砂	6	6	2															15	5				1											35	
	中粒砂	13	14	10															4	3					2	1		3		1				52		
	細粒砂	17	10	14		1																					16								61	
	極細粒砂	11	4	11																															28	
	粗粒シルト	3	2	5																													1		12	
	中粒シルト	1																																	1	
基質																																		813		
孔隙																																			27	
4	細礫																																		0	
	極粗粒砂																							1	1		1								3	
	粗粒砂			1			2					1	1	2	6	3							1			7									25	
	中粒砂	3		9	1	1							1	1	3	2	4									3	2								30	
	細粒砂	2		4	1									1	1	1	1																		12	
	極細粒砂	4		1																															6	
	粗粒シルト	1		2																														1	4	
	中粒シルト																																		0	
基質																																			298	
孔隙																																			22	
5	細礫																																		0	
	極粗粒砂			1																				2												5
	粗粒砂	1		8		2	1																	1		1	6	1								41
	中粒砂			10	2	2																														53
	細粒砂	3		4		1																														9
	極細粒砂	3		2																																5
	粗粒シルト	3		1																															4	
	中粒シルト	1																																	1	
基質																																			420	
孔隙																																			16	
6	細礫																																		0	
	極粗粒砂			1	1																															7
	粗粒砂	3	6	5																					2		5		3							36
	中粒砂	10	1	9	1																															46
	細粒砂	15		14										1	1																					46
	極細粒砂	6	4	11																																37
	粗粒シルト	2	1	5																															10	
	中粒シルト			1																																1
基質																																			707	
孔隙																																				31

表2(2). 薄片観察結果

試料	砂粒区分	砂粒の種類構成																				合計											
		鉱物片										岩石片						その他															
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	雲母片岩		粘板岩	ホルンフェルス	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	砂混じり粘土塊	酸化鉄結核	炭質物	植物片	植物片
7	細礫																																0
	極粗粒砂		2															3	7														12
	粗粒砂	4		3													3	6									2		1				19
	中粒砂	7	4	3													2	1					1			4		2				24	
	細粒砂	17	3	13													2									8						43	
	極細粒砂	5	3	12			2																		9							31	
	粗粒シルト	2		5							1																				1	9	
	中粒シルト																															0	
基質																																692	
孔隙																																35	
8	細礫																															0	
	極粗粒砂																2	3														5	
	粗粒砂	1	4	2													2	7								1		1				18	
	中粒砂	6	4	8														1														19	
	細粒砂	12	2	13																							8					38	
	極細粒砂	10	4	12							1															7						34	
	粗粒シルト	6	1	5																												12	
	中粒シルト	1																														1	
基質																																531	
孔隙																																19	
9	細礫		1																													1	
	極粗粒砂																1															2	
	粗粒砂	4	6	6													6	10								3						35	
	中粒砂	8	8	5													4	5							1	3						36	
	細粒砂	12	2	9																					1	9						34	
	極細粒砂	6		5																						6						17	
	粗粒シルト	3		2			1																							1	7		
	中粒シルト																															0	
基質																																528	
孔隙																																41	
10	細礫																															0	
	極粗粒砂			1			1																									2	
	粗粒砂			13			1										1									1	1					17	
	中粒砂			15		1	1										1								2	6						26	
	細粒砂	1		13		1	1										1								1	12						31	
	極細粒砂			2																							4					7	
	粗粒シルト	2		1																						7				2	13		
	中粒シルト																															0	
基質																																434	
孔隙																																18	
11	細礫																															0	
	極粗粒砂	1																														3	
	粗粒砂	5	2	5													12	6						1		1						32	
	中粒砂	5	1	7													1	3						1	1	3						22	
	細粒砂	13		8													2									2						25	
	極細粒砂	7	1	14			1																									23	
	粗粒シルト	2	1	4																											1	8	
	中粒シルト	1		1																												2	
基質																																399	
孔隙																																11	
12	細礫																															0	
	極粗粒砂	1																														2	
	粗粒砂			5	1												1	1	1	2					2	2	1					17	
	中粒砂	1		6	1	3	2					1			2		4	1	3	2	2				5	1						34	
	細粒砂	6		5		2						1	1				1							2	1	1						20	
	極細粒砂	4		4																												8	
	粗粒シルト	2		3																											1	6	
	中粒シルト	1																														1	
基質																																359	
孔隙																																15	

表2(3). 薄片観察結果

試料	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計																
		鉱物片						岩石片						その他																				
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト		安山岩	多結晶石英	花崗岩類	雲母片岩	粘板岩	ホルンフェルス	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	砂混じり粘土塊	酸化鉄結核	炭質物	植物片	植物片	植物珪酸体
13	細礫																																	0
	極粗粒砂																																	0
	粗粒砂			4	1							1	2		1	5	2	2				3	1	1			4	1					28	
	中粒砂	3		23	4	4	1						2	3	8	4	6	2			4			2	9	5							80	
	細粒砂	4		21	1	9					1	1			1	4		1						2		6							51	
	極細粒砂	5		4																						1							11	
	粗粒シルト	2		1																											1		4	
	中粒シルト																																	0
基質																																	449	
孔隙																																	17	
14	細礫																1																1	
	極粗粒砂	1		1													1								3								6	
	粗粒砂			4		1							1	1	2	5					2		1	6	1		2					26		
	中粒砂	3	1	14	4	5	1						1	7	1	7	2				3		1	11	6		1					68		
	細粒砂	7		10	4	4				1		2		1	1	2	1							1		3						37		
	極細粒砂	2		1	1																					2						6		
	粗粒シルト	1		4																											2	7		
	中粒シルト	1																															1	
基質																																613		
孔隙																																	40	
15	細礫	2	1																														3	
	極粗粒砂	9	1																														13	
	粗粒砂	27	6	7													1	8															49	
	中粒砂	21	13	13		1				1																							52	
	細粒砂	17	3	19						1	1															1							42	
	極細粒砂	10	3	13																													26	
	粗粒シルト	4		3																											1	8		
	中粒シルト																																0	
基質																																632		
孔隙																																	24	
16	細礫																																0	
	極粗粒砂	3	1	1																													7	
	粗粒砂	16	4	6											2	1		1	5							1							36	
	中粒砂	15	15	18														1	2														51	
	細粒砂	15	5	21																													43	
	極細粒砂	9	3	15													1																28	
	粗粒シルト	5		5																												11		
	中粒シルト	2		1																													3	
基質																																678		
孔隙																																	15	
17	細礫																																0	
	極粗粒砂																1									1							2	
	粗粒砂	2		1		1							3		2	1	3		1				2	1	1	1	3	1				23		
	中粒砂	7	1	10	3	2	1				2			2	5	1	3							2	2		3					44		
	細粒砂	7		1		2											1	2								1						14		
	極細粒砂			1														1														3		
	粗粒シルト	3		4																												7		
	中粒シルト	1		1																													2	
基質																																336		
孔隙																																	10	
18	細礫															1																	2	
	極粗粒砂	1	1	1												1																	6	
	粗粒砂	5	2	17																													27	
	中粒砂	4	3	27	1	1	1								1		1	2							1		2					45		
	細粒砂	11	3	23		1																					6						50	
	極細粒砂	4		11																							2						17	
	粗粒シルト	5		11																								1				1	20	
	中粒シルト	1		2																													3	
基質																																584		
孔隙																																	17	





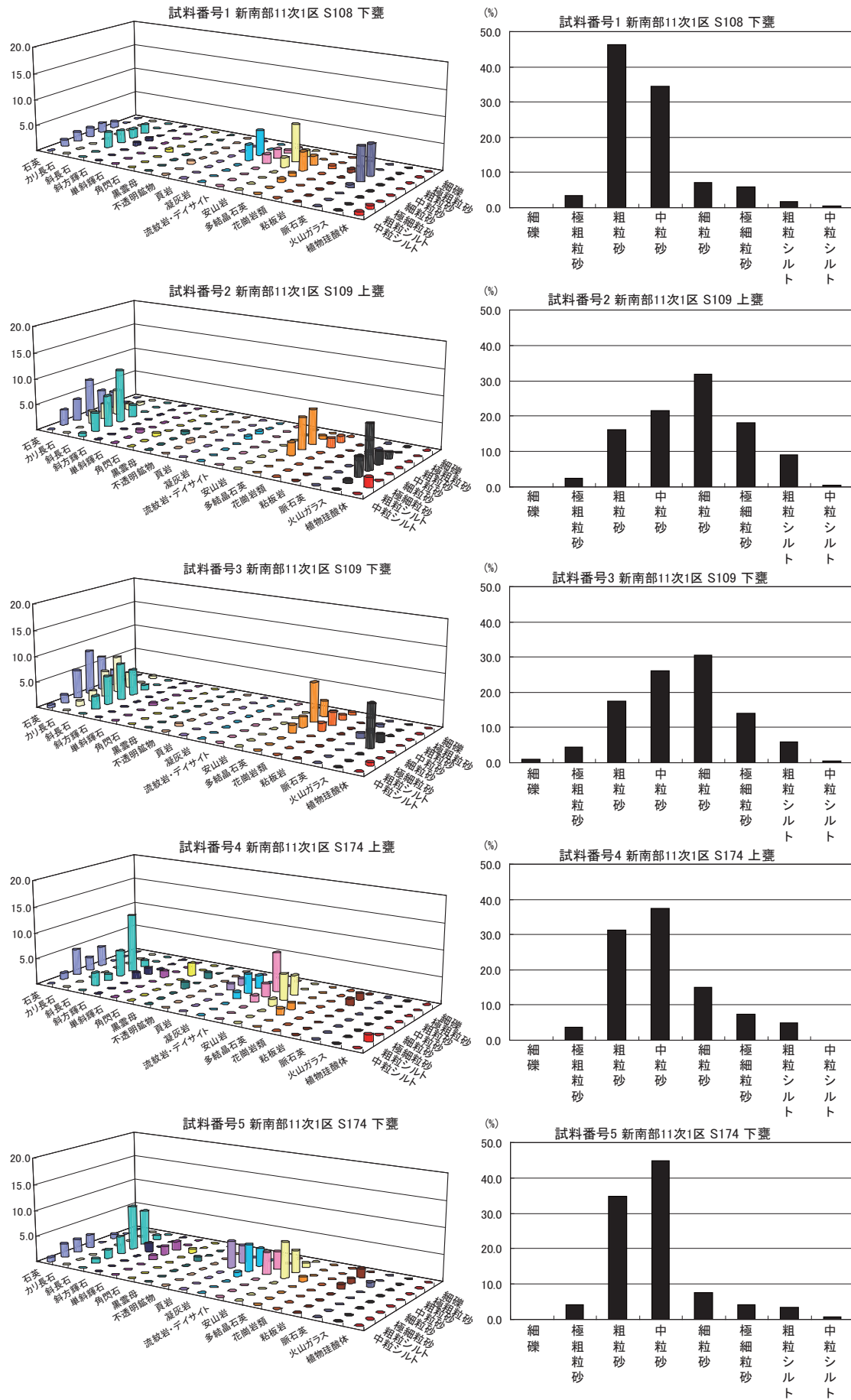


図 1(1). 胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成(その1)

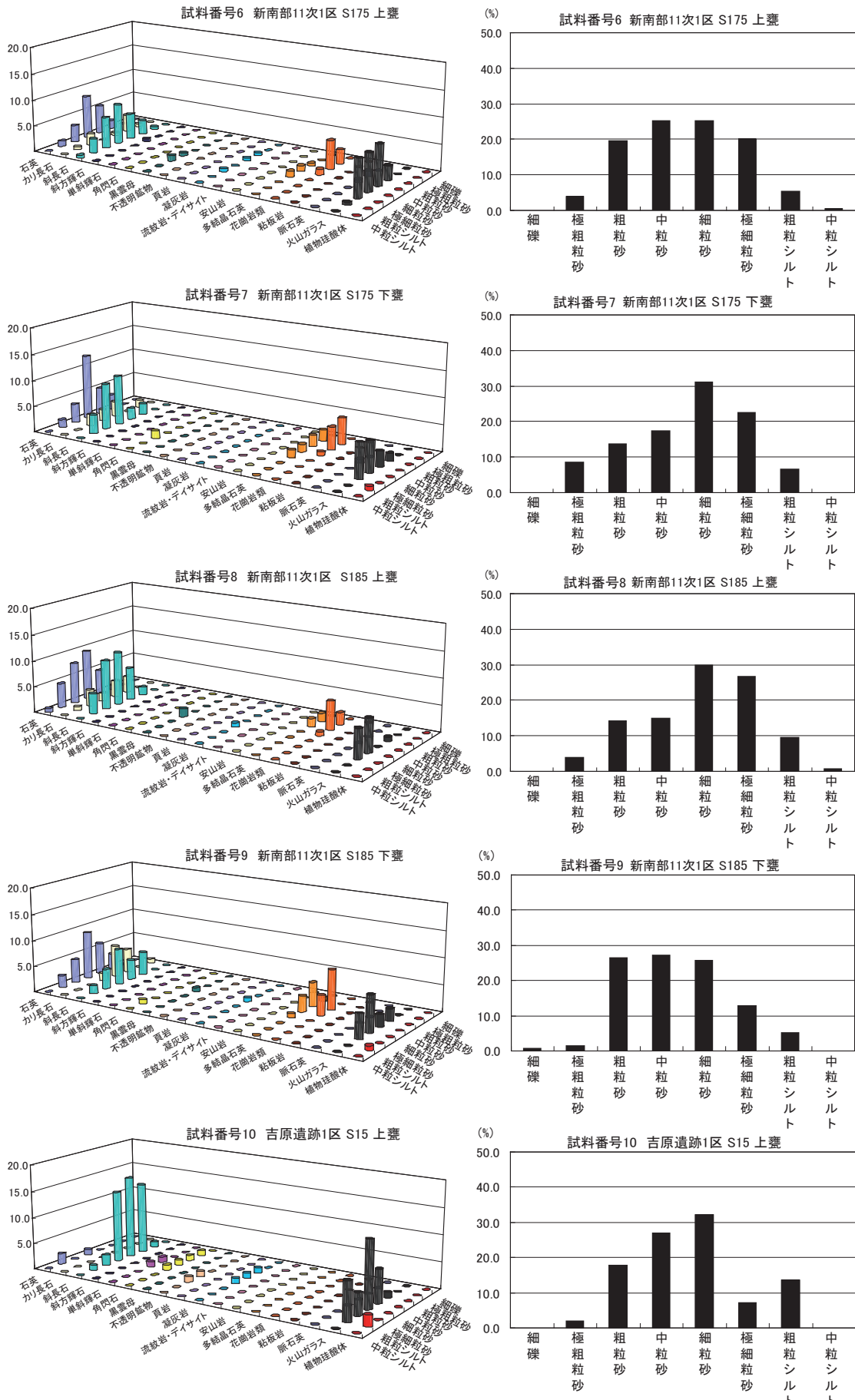


図1(2). 胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成(その2)

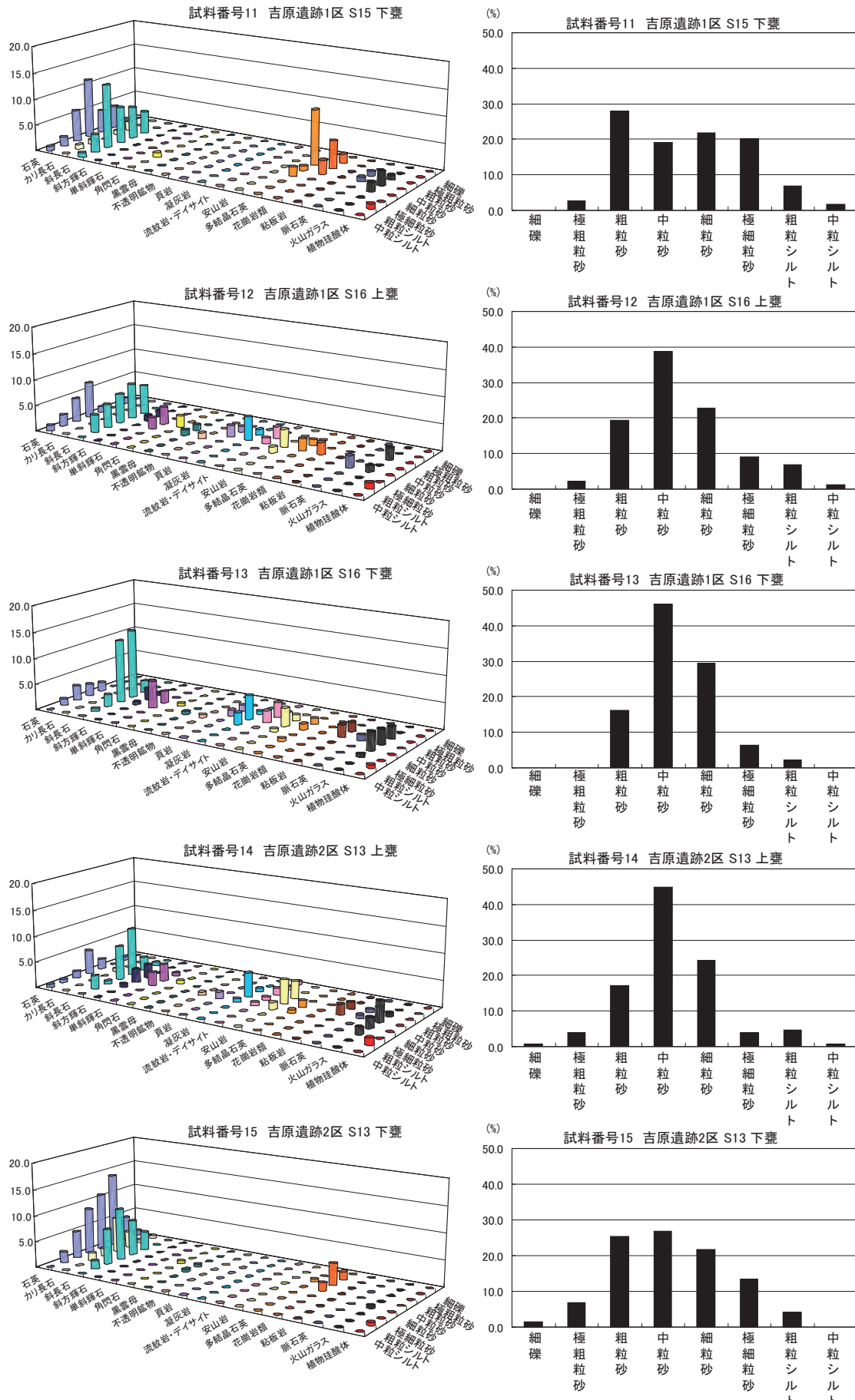


図1(3). 胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成(その3)

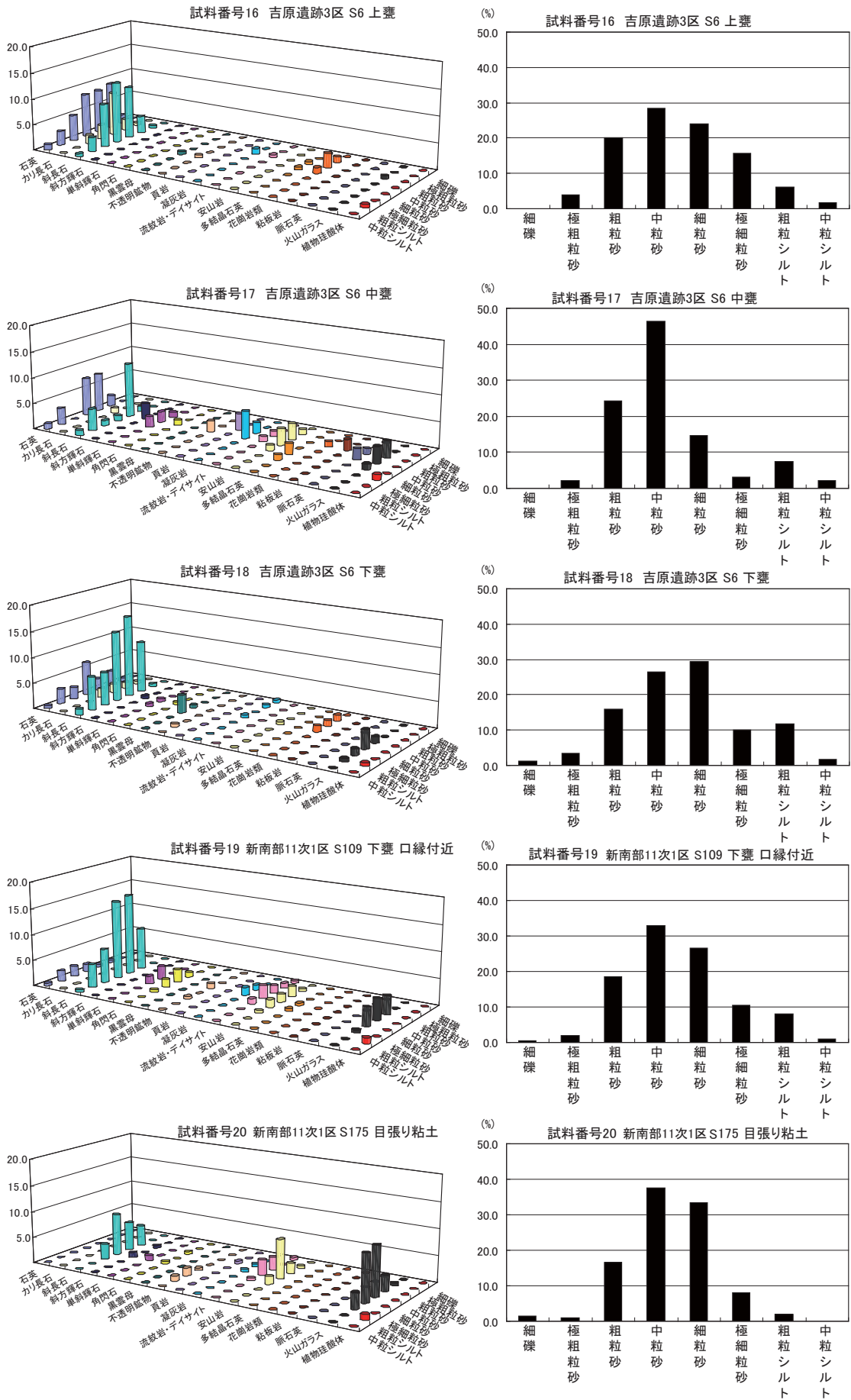


図1(4). 胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成(その4)

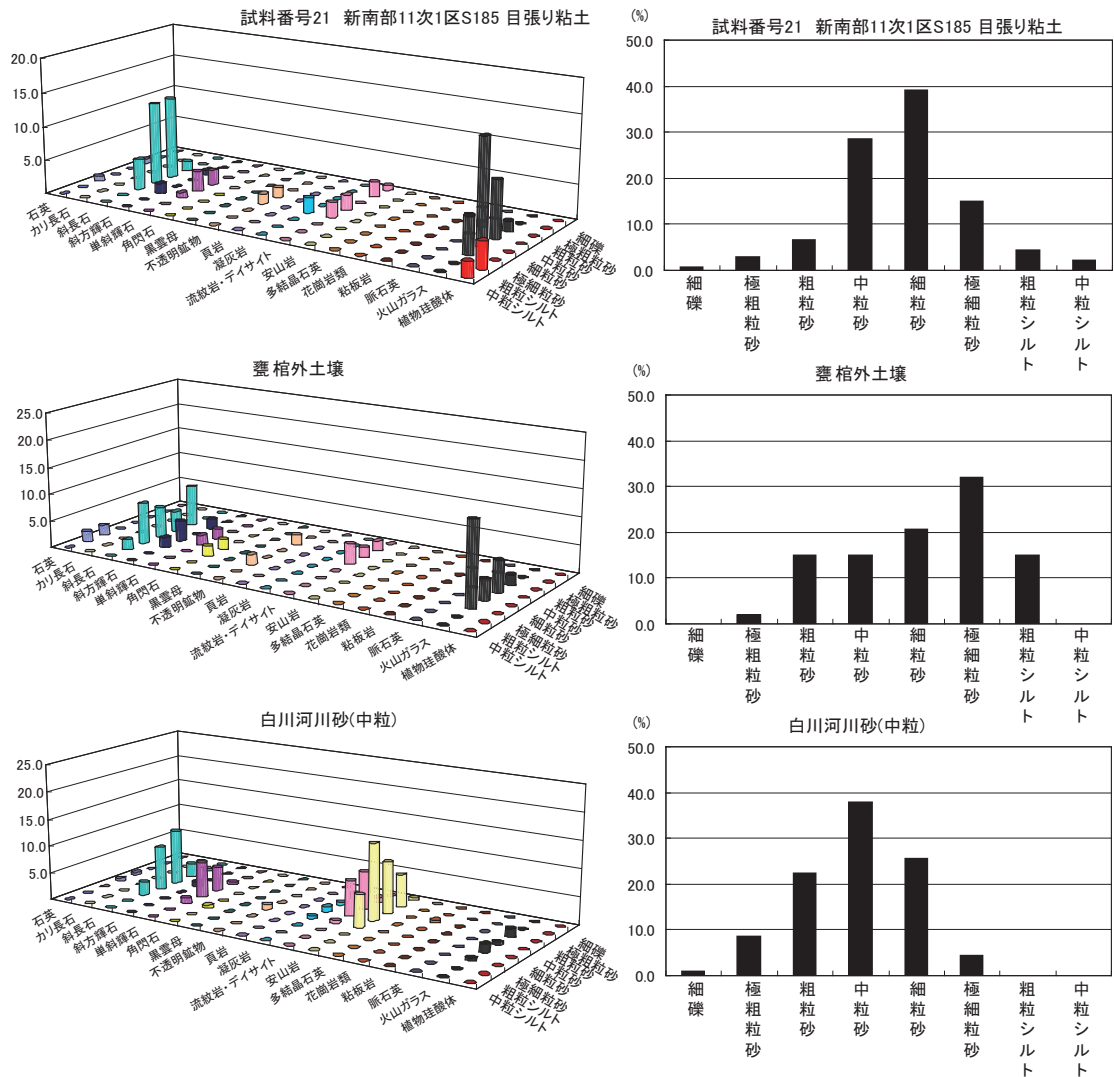


図1(5). 胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成(その5)

ども分布する。これらの先第四系は、流域の各所で阿蘇1~4火砕流堆積物で覆われている。また、緑川支流木山川流域には、中期更新世の安山岩類や、デイサイト溶岩・火砕岩からなる大峰火山なども分布する。堆積岩類、火山岩類のほか、粘板岩、花崗岩類、火山ガラスなどが伴われる組成は、緑川流域の地質と概ね整合していると考えられることから、B類の胎土には緑川流域の沖積層に含まれる粘土などが利用されたと推測することができる。

C類は雲母片岩、安山岩、凝灰岩などを特徴的に含む胎土であり、火山ガラスや堆積岩類は含まれていない。雲母片岩、安山岩などを主体とする碎屑片の組成は、熊本平野では採取できないものと考えられる。県外において採取可能な地域としては、三畳紀~ジュラ紀の筑後変成岩類が分布する福岡県八女市周辺などが候補として挙げられる。八女市を流れる矢部川流域には、筑後変成岩類が中流域に分布し、上流域には鮮新世の安山岩類が広く分布し、デイサイト類も随伴する。矢部川流域は阿蘇火山の火砕流の影響が少ない地域であり、火山ガラスがほとんど含まれないという点も整合しているが、さらに検証するためには矢部川流域の沖積層の堆積物との比較が重要である。なお、菊池川流域の山鹿より南側の地域にも片岩類の分布が知られているが、この地域には阿蘇4火砕流堆積物も広く分布しているため、これらの地質に由来する堆積物は火山ガラスを含まないC類の砂粒組成とは整合しないものと考えられる。

D類は火山ガラス、多結晶石英、花崗岩を主要な碎屑片として含むという、岩片の種類が少ない特殊な組成を示す。

岩片としては、凝灰岩類も僅かに伴うが、火山ガラスに随伴するテフラ由来の岩片とみられる。多結晶石英は雲母鉱物を含むなど、花崗岩由来と考えられることから、花崗岩と起源を同じにする岩片とみることができる。熊本平野周辺における花崗岩類の分布は、北部に限られており、小規模な花崗岩体が点在する。周囲に花崗岩以外の地質がほとんど分布せず、阿蘇火山由来の火砕流が分布する地域としては、玉名市北部周辺に広がる花崗岩地帯が挙げられる。この地域には、前期白亜紀～後期白亜紀の玉名花崗閃緑岩および筒ヶ岳花崗岩が分布する。熊本県下では、このような地域を想定できるが、花崗岩を主体とする地質は福岡県下にも広く分布するため、さらに遠方地域からの由来も考える必要があるだろう。

E類は、花崗岩の岩片が卓越し、花崗岩由来とみられるカリ長石、斜長石を多く含む組成である。D類と比較してテフラ由来の火山ガラスが非常に少なく、ほとんど花崗岩体に取り囲まれた地域の堆積物が使われていると推測される。花崗岩の岩片を比較的多く含むことを踏まえると、D類と同様に花崗岩体が分布する玉名市北部地域の堆積物を使用した可能性が指摘できる。ただし、含まれる火山ガラスは少ないため、阿蘇火山からの火山灰の影響が少ない、福岡県下の花崗岩地帯に由来する可能性も考えられ、検討の余地が残される。

## (2) 上甕、下甕、目張り粘土の比較

中園(2005)によると、北部九州の弥生時代半ばに作られた甕棺墓は、上甕と下甕の胎土が一致することから、2個一組で作製されたと考えられるものがしばしば認められるとしており、一方で、一致しないものが存在することも指摘している。今回分析を行った試料では、表1に示されるように、鉱物片・岩石片の種類では新南部遺跡群11次において、S109、S174、S175、S185の4組の甕棺がすべて一致しているのに対し、吉原遺跡のものはS-16の一組が一致しているのみで、残りの3組は一致しないという結果となっている。鉱物片・岩石片の種類が一致したものは、粒径組成についても、新南部遺跡群11次では3組が一致しており、吉原遺跡の一組が一致している。したがって、胎土分類からは、新南部遺跡群11次の甕棺は上下一組のものが多く使われたのに対し、吉原遺跡では上下一組の使用は少なかったとみることができる。

使用されている胎土の種類は、新南部遺跡群11次の試料はD類が多いのに対し、吉原遺跡の試料ではB類が多いという傾向が認められる。B類は緑川流域の堆積物が推定され、D類は福岡県下の堆積物の可能性はあるものの玉名市北部地域の可能性も推定され、いずれも熊本県下の産地の想定が可能な胎土である。このことから、甕棺の材料としてこれらの堆積物が多用される傾向は産地との関係を考慮すると妥当と思われる。しかしながら、遺跡周辺に分布すると思われる白川流域の堆積物が使われているとみられるA類の胎土は吉原遺跡の試料番号10だけである。甕外の土壌試料である試料番号19も、A類に近い組成を示しているが、これに類似する胎土も今回の分析では確認されていない。したがって、2遺跡の甕棺墓には、白川流域の堆積物はほとんど使われなかったと理解することができる。

目張り粘土の試料である試料番号20、21も、概ねA類に近い組成を示している。これらは、試料番号19の甕外の土壌試料にも類似しているが、試料番号19は石英を多く含むのに対し、目張り粘土の試料は、石英をほとんど含まないという違いがある。目張りに適した粘土を選定採取していた可能性も考えられるが、いずれにしても類似した組成であることから、遺跡近傍の粘土を使用したとみるのが自然である。これを踏まえると、甕棺のほとんどは遠方から運び込まれた後、在地の粘土を使用して目張りを行っていたと考えることが可能である。甕棺がどこから持ち込まれたかについては、現時点ではまだ不鮮明であるが、製作地等についてさらに研究を進めるためには、原産地の粘土との比較が重要であり、各地の粘土に関するデータの蓄積が今後の課題になるとと思われる。

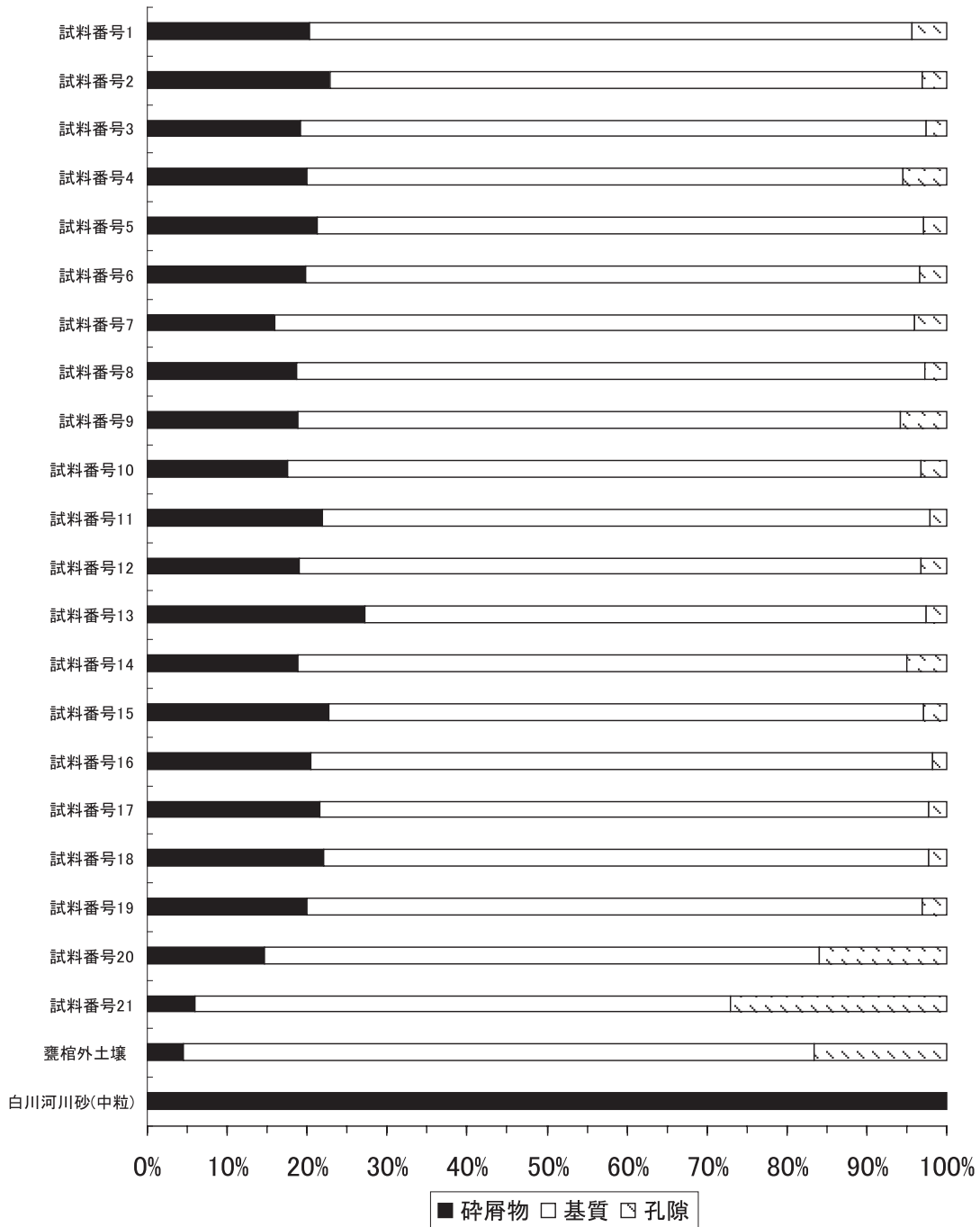


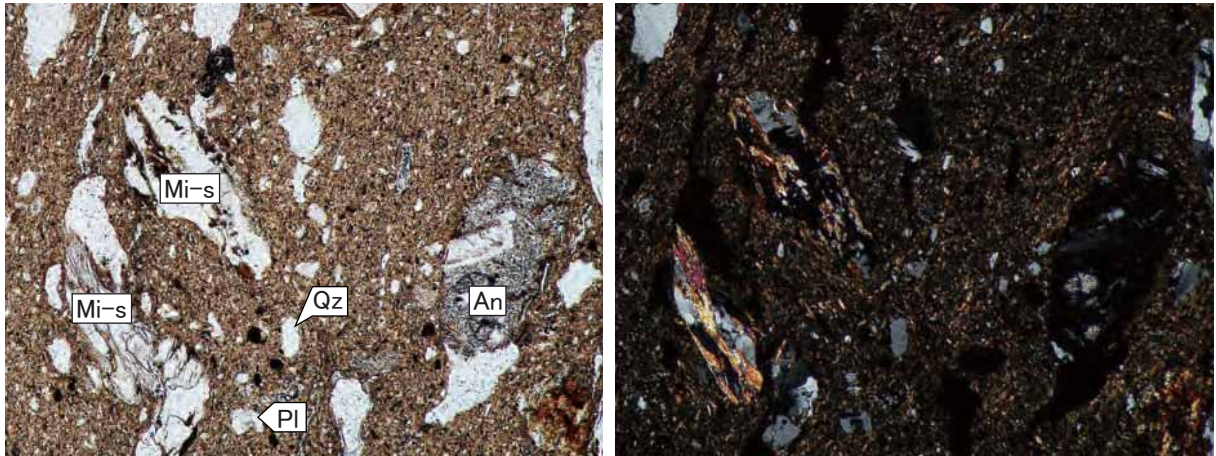
図 2. 碎屑物・基質・孔隙の割合

引用文献

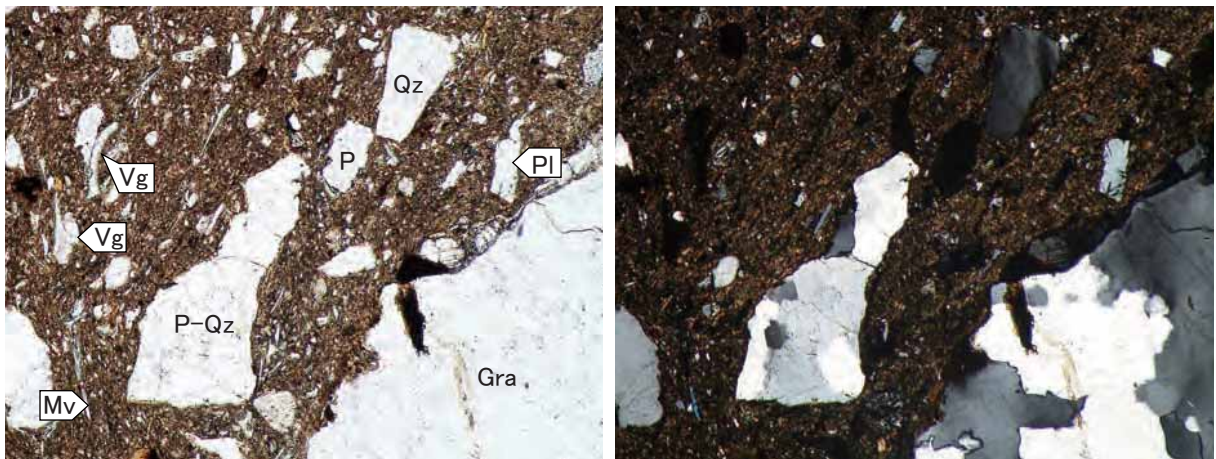
星住英夫・尾崎正紀・宮崎一博・松浦浩久・利光誠一・宇都浩三・内海 茂・駒沢正夫・広島俊男・須藤定久, 2004, 20万分の1地質図幅「熊本」, 産業技術総合研究所地質調査総合センター.  
 鐘ヶ江賢二, 2007, 胎土分析からみた九州弥生土器文化の研究. 九州大学出版会, 239p.  
 中園 聡, 2005, 九州甕棺社会のイデオロギー, 季刊考古学, 92, 35-39.



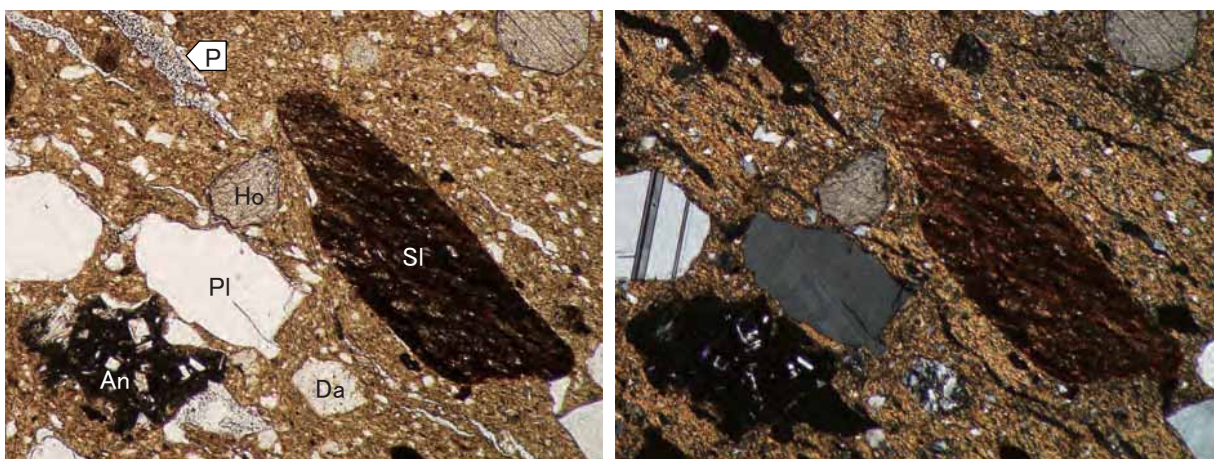
図版1 胎土薄片(1)



1.試料番号1 新南部11次1区S108 下甕



2.試料番号3 新南部11次1区S109 下甕



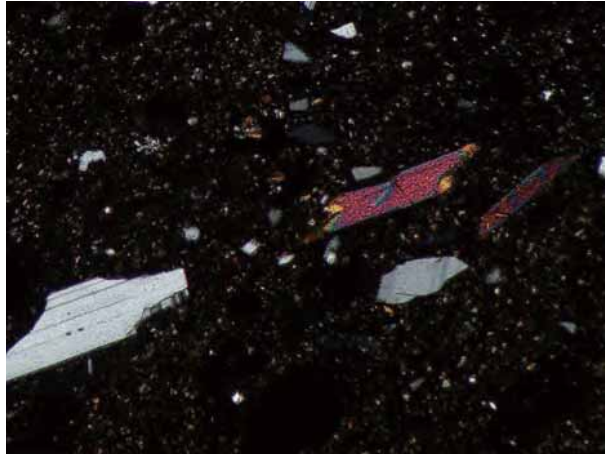
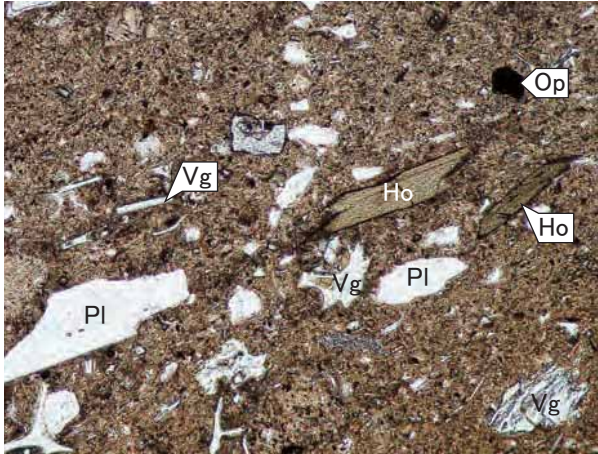
3.試料番号5 新南部11次1区S174 下甕

Qz:石英. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Mv:白雲母. Da:デイサイト. An:安山岩.  
 P-Qz:多結晶石英. Gra:花崗岩. Mi-s:雲母片岩. Sl:粘板岩. Vg:火山ガラス.  
 P:孔隙.

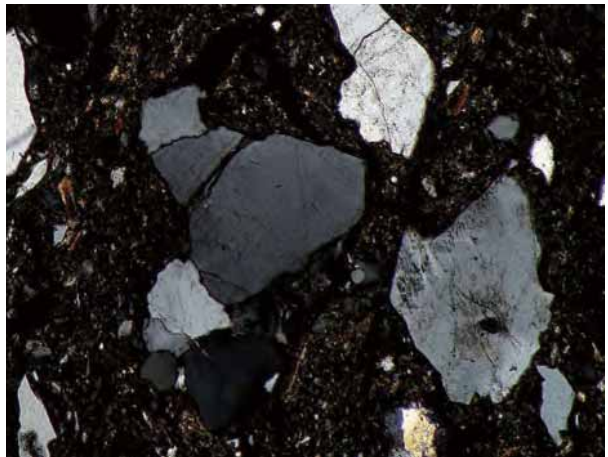
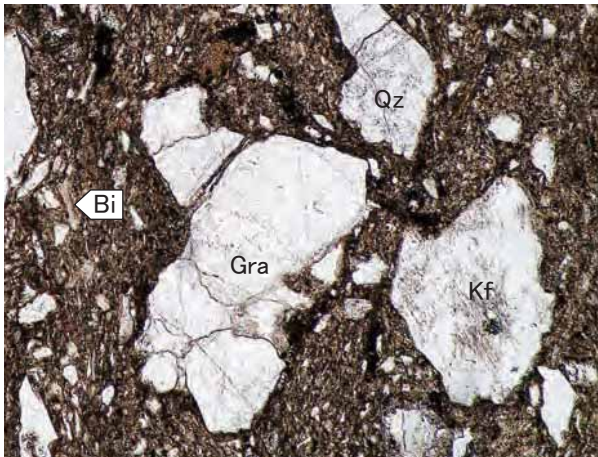
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

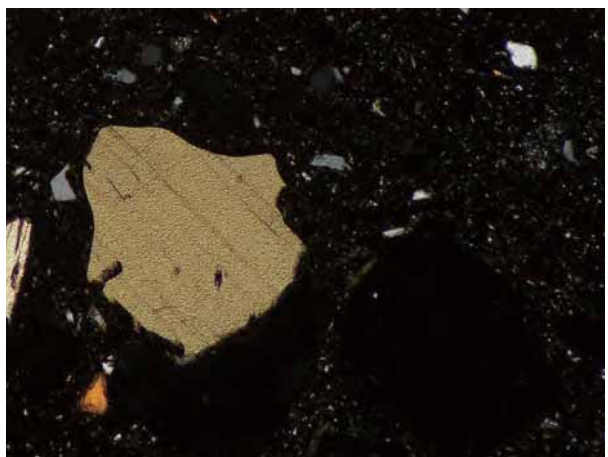
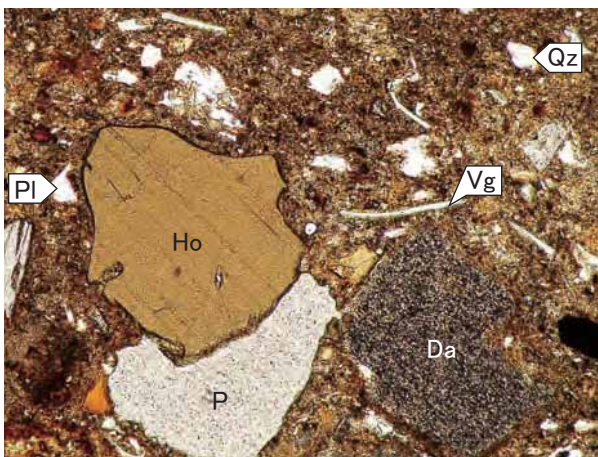
図版2 胎土薄片(2)



4. 試料番号10 吉原遺跡1区S-15 上甕



5. 試料番号15 吉原遺跡2区S-13 下甕



6. 試料番号19 新南部11次1区S109 下甕口縁付近・目張り粘土サンプル

Qz:石英, Kf:カリ長石, Pl:斜長石, Ho:角閃石, Bi:黒雲母, Op:不透明鉱物.

Da:デイサイト, Gra:花崗岩, Vg:火山ガラス, P:孔隙.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

## 第3節 熊本市吉原遺跡1区・3区出土の弥生人骨

松下真実\*・松下孝幸\*\*

【キーワード】：熊本県、弥生人骨、甕棺墓、幼児骨

## はじめに

熊本県熊本市東区吉原町に所在する吉原遺跡<sup>よしわら</sup>の発掘調査が白川の河川改修工事に伴って2013(平成25)年度におこなわれ、1区と3区から人骨が出土した。1区からは弥生時代の甕棺墓2基と土壙墓2基が発見され、2基の甕棺墓から人骨が出土した。3区では弥生時代の甕棺墓1基が、検出され、甕棺墓(S6)には骨片と歯が残存していた。

熊本県から出土した弥生人骨としては、熊本市の葉山遺跡(松下、1991)のほか庵ノ前遺跡(松下、1997)、万楽寺出口遺跡(松下、2000)、長嶺遺跡(松下、2005)、梅ノ木遺跡(松下、2001)、神水遺跡(松下、2004)、八ノ坪遺跡(松下、2005、2006)、上ノ郷遺跡(松下、2007)、大津町の宝満鶴・岩坂葉柳遺跡(松下・他、2013)からの出土例や嘉島町剣原(北条・他、1969)、玉名市立願寺(里・他、1959)の例などがある。

熊本県でも福岡県や佐賀県と同じように弥生時代には甕棺が出土するが、北部九州ほど甕棺が密集することがない。その結果、弥生人骨がある数まとまって出土することがなかったため、熊本地域での弥生人の特徴は明確になっていなかった。その後、体数は少ないが、観察や計測ができる弥生人骨が出土し、葉山遺跡、庵ノ前遺跡、万楽寺出口遺跡、長嶺遺跡、梅ノ木遺跡出土の弥生人の特徴を明らかにすることができた。また、1997(平成9)年から98(平成10)年にかけて、熊本市の南部に位置する白藤遺跡の発掘調査がおこなわれた。この調査によって佐賀県や福岡県でみられるものと同じような大型の成人用甕棺が多数出土した。人骨の保存状態はよくなかったが、現場で観察したところ、高顔・高身長で四肢骨が屈強な形質の特徴が認められ、彼らが佐賀県や福岡県の甕棺から出土する弥生人と同じ形質的特徴を持っていることがわかった。万楽寺出口遺跡の弥生人は北部九州の甕棺弥生人の特徴が濃厚である。長嶺遺跡の甕棺からは保存良好な男女1体ずつ合計2体の弥生人骨が出土したが、2体とも高顔・高身長で、北部九州タイプの弥生人であった(松下、2005)。

今回、1区の甕棺から出土した弥生人骨2体は、両者とも幼児骨で、3区の甕棺墓から検出されたのは幼児骨のわずかな骨片と遊離歯のみで、これらの保存状態はあまり良好なものではないが、残存部位や年齢などの推測結果を報告しておきたい。

## 資料

本遺跡から出土した人骨は表1に示すとおり、合計3体である。1区から検出された2体の人骨は2基の甕棺墓(S15、S16)から出土した。2体とも幼児骨である。3区からは1基の甕棺墓(S6)から1体の人骨が検出された。この甕棺墓は上甕、中甕、下甕の3個の甕から構成された珍しい甕棺墓であり、被葬者は表2に示しているとおり、1.5歳～2歳の幼児であるが、甕棺は幼児を収納するには大きすぎる。

この3体の人骨は、考古学的所見から弥生時代中期に属する人骨である。各骨の残存状態は図2に示すとおりである。また、年齢区分を表2に示した。計測方法は、M i - S (1957)によった。

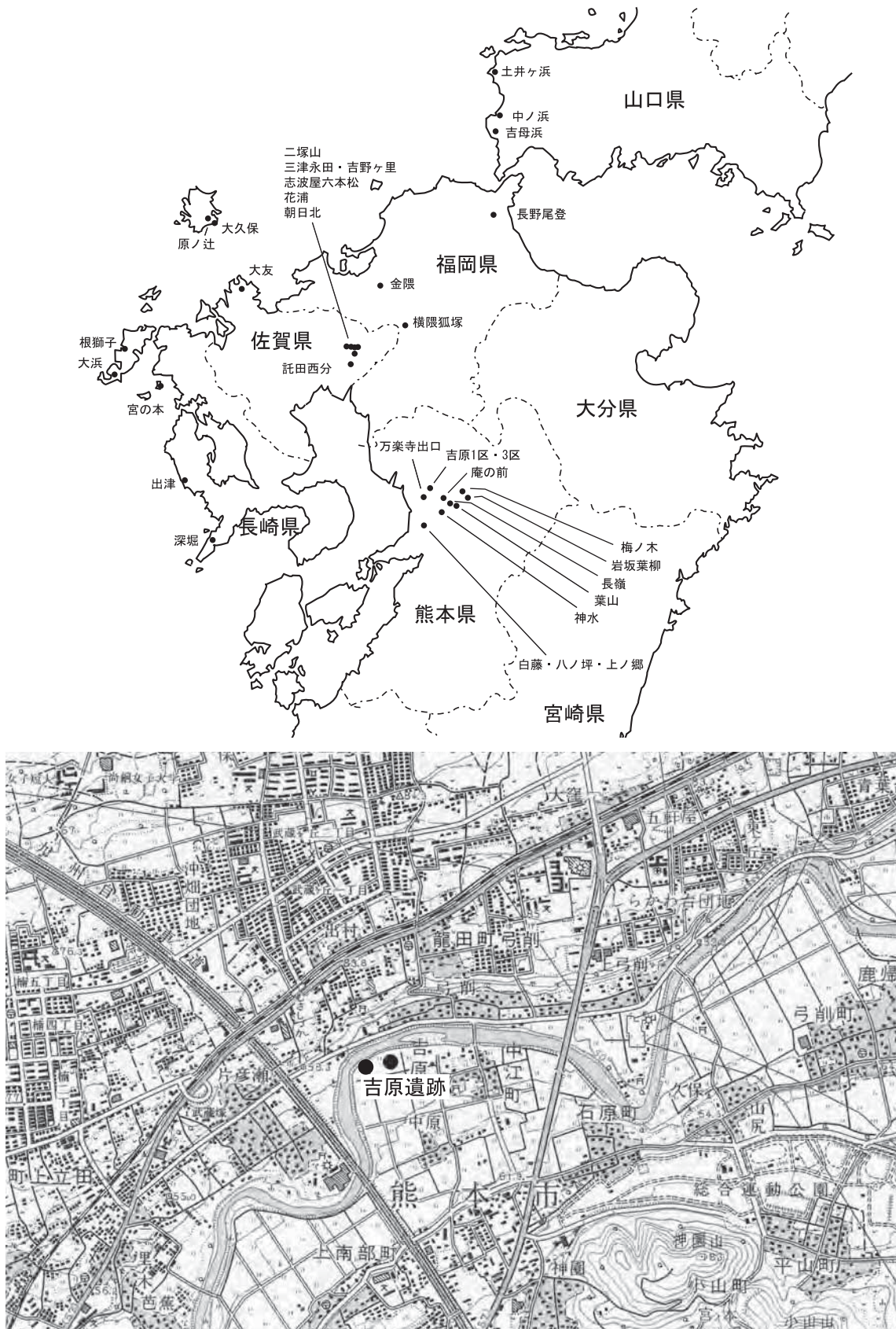


図1. 遺跡の位置(1/25,000)

(Fig.1 Location of the place of section 1・3 of the Yoshiwara site, Kumamoto City, Kumamoto Prefecture)

表1 資料数 ( ab 1. mb ma ia s )

成人			幼児	合計
男性	女性	不明		
0	0	0	3	3

表2 出土人骨一覧 ( ab 2. is s ns )

人骨番号	性別	年齢	年齢区分	埋葬遺構	備考
1号甕棺墓(S15)	不明	5歳	幼児	甕棺	1区出土
2号甕棺墓(S16)	不明	4歳	幼児	甕棺	1区出土
4号甕棺墓(S6)	不明	1.5~2歳	幼児	甕棺	3区出土

表3 年齢区分 ( ab 3.Di isi n ag )

年齢区分		年	年齢
未成人	乳児	1歳未満	
	幼児	1歳~5歳	(第一大乳歯萌出直前まで)
	小児	6歳~15歳	(第一大乳歯萌出から第二大乳歯歯根完成まで)
	成年	16歳~20歳	(蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳~39歳	(40歳未満)
	熟年	40歳~59歳	(60歳未満)
	老年	60歳以上	

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

## 所見

### 1号甕棺墓(S15)(性別不明・5歳)

埋葬施設は甕棺である。保存状態は悪く、左側頭頂骨と前頭骨の一部、左側岩様部、上顎骨、下顎骨、左側上腕骨、左右の大腿骨、脛骨片が残存していた。計測ができたのは下顎骨と上腕骨、大腿骨のみである。

#### 1. 歯

下顎骨と上顎骨には乳歯と永久歯が釘植していた。乳歯の咬耗度は a の2度(咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ)で、乳歯の咬耗はやや進んでいるが、永久歯冠には咬耗はみられない。

残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

(乳歯)

V	IV	III	II	I		I	○	○	IV	V	[○: 歯槽開存 ●: 歯槽閉鎖 /: 不明]
V	IV	○	○	○		I	II	III	IV	V	

(I: 乳中切歯、II: 乳側切歯、III: 乳犬歯、IV: 第一乳臼歯、V: 第二乳臼歯)

(永久歯)

/	7	6	/	/	/	2	1		1	2	3	/	/	6	7	/
/	/	6	/	/	3	/	1		1	/	3	/	/	6	7	/

(1: 中切歯、2: 側切歯、3: 犬歯、4: 第一小臼歯、5: 第二小臼歯、6: 第一大臼歯、7: 第二大臼歯、8: 第三大臼歯)

2. 四肢骨

①上腕骨

左側の骨体が残存していた。

計測値は、中央周が**35mm**(左)、最小周は**33mm**(左)である。中央最大径は**12mm**(左)、中央最小径は**9mm**(左)、中央断面示数は**75.00**(左)で、骨体には扁平性は認められない。

②大腿骨

両側の骨体が残存していた。

計測値は、中央横径が**12mm**(左)、中央矢状径は**14mm**(左)、中央断面示数は**116.67**(左)である。上骨体断面示数は**93.75**(右)、**87.50**(左)、中央周は**43mm**(左)である。

3. 性別・年齢

年齢は、乳歯の歯根と永久歯の歯冠形成程度から、また、第一大臼歯には咬耗が見られないことから5歳と推定した。性別は不明である。

2号甕棺墓(S 16) (性別不明・4歳)

埋葬施設は甕棺である。保存状態は悪く、頭蓋と歯のみが残存していた。頭蓋は、左右の頭頂骨、前頭骨の眼窩上縁が残存していた。頭蓋の骨壁は薄く、保存状態が悪いため、頭蓋内に入った土によって形が保たれている状態である。

1. 歯

歯は、乳歯と永久歯の歯冠が残存していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。乳歯の咬耗度は **a** の1度(咬耗がエナメル質のみ)で、永久歯冠には咬耗はみられない。

(乳歯)

V	IV	○	○	○		○	○	III	○	V	[○: 歯槽開存 ●: 歯槽閉鎖 /: 不明]
V	IV	○	○	○		○	○	○	○	○	

(I: 乳中切歯、II: 乳側切歯、III: 乳犬歯、IV: 第一乳臼歯、V: 第二乳臼歯)

(永久歯)

/	/	6	/	/	/	/	1		1	2	3	/	/	6	/	/
/	/	6	/	/	3	2	/		/	2	/	/	/	6	/	/

(1: 中切歯、2: 側切歯、3: 犬歯、4: 第一小臼歯、5: 第二小臼歯、6: 第一大臼歯、7: 第二大臼歯、8: 第三大臼歯)

2. 性別・年齢

年齢は、乳歯の歯根と永久歯の歯冠形成程度から、**4歳**と推定した。性別は不明である。

4号甕棺墓(S 6) (1.5歳~2歳、幼児)

埋葬施設は甕棺である。残存していたのは骨片と歯冠のみである。骨片は下顎骨の歯槽部分と思われる。歯冠は永久歯(下顎右側第一大臼歯)**3本**と**18本**の乳歯である。これらを歯式で示すと次のとおりである。

(乳歯)

V	IV	III	II	I	/	II	III	IV	V	[○: 歯槽開存 ●: 歯槽閉鎖 /: 不明]
V	IV	III	/	I		I	II	III	IV	V

(I: 乳中切歯、II: 乳側切歯、III: 乳犬歯、IV: 第一乳臼歯、V: 第二乳臼歯)

(永久歯)

/ / 6 / / / / /	/ / / / / 6 / /
/ / 6 / / / / /	/ / / / / / / /

(1: 中切歯、2: 側切歯、3: 犬歯、4: 第一小臼歯、5: 第二小臼歯、6: 第一大臼歯、7: 第二大臼歯、8: 第三大臼歯)

乳中切歯と乳側切歯には弱い咬耗がみられるが、その他の乳歯の歯冠には咬耗がみられない。乳歯冠と永久歯冠(第一大臼歯)の形成程度から、被葬者の年齢を1.5歳~2歳程度と推測した。性別は不明である。

### 要 約

熊本県熊本市東区吉原町に所在する吉原遺跡<sup>よしわら</sup>の2013(平成25)年度の発掘調査で、1区から2体、3区から1体、合計3体の人骨が出土した。残存していた骨の量は少ないが、四肢骨は計測ができるものも存在した。出土人骨の人類学的観察と計測をおこない、以下の結果を得た。

1. 3体の人骨は3体とも甕棺墓から検出された。1区の2基の甕棺墓は合口甕棺(15 16)であるが、3区の甕棺墓(6)は上甕、中甕、下甕の3個の甕から構成された珍しい甕棺墓である。
2. 本人骨は、考古学的所見から、弥生時代中期に属する人骨である。
3. 3体とも幼児骨である。1体(15)は5歳、もう1体(16)は4歳、残りの1体(6)は1.5歳~2歳と推測される。性別は不明である。
4. 5歳(15)の上腕骨の計測値は、中央周35mm(左)、最小周33mm(左)、中央最大径12mm(左)、中央最小径9mm(左)、中央断面示数75.00(左)で、骨体には扁平性は認められない。
5. 5歳(15)の大腿骨の計測値は、中央横径12mm(左)、中央矢状径14mm(左)、中央断面示数116.67(左)で、幼児の大腿骨としては珍しく示数値が大きい。また、上骨体断面示数93.75(右)、87.50(左)、中央周43mm(左)である。
6. 3連の甕から構成される甕棺墓(6)から検出されたのは骨片と歯冠のみである。骨片は下顎骨の歯槽部の一部とみられる。歯冠は形成初期の下顎の第一大臼歯3本と18本の乳歯の歯冠である。
7. 吉原遺跡1区からは弥生時代の墳墓が4基みついている。この墳墓群は成人用とみられる土壇墓2基と幼児を収めた甕棺墓2基から構成されており、吉原遺跡における墳墓構成がうかがえる。1区から検出された墳墓では成人骨は残存していなかったが、甕棺墓には人骨と歯が残存しており、それぞれ年齢を推測することができた。3区から検出された3個の甕から構成された甕棺墓は3歳未満の幼児を収納するには大きすぎる規模である。もし、人骨片や歯冠が残存していなかったら、成人棺とみなされる恐れがあった。甕棺の大きさと被葬者の年齢(体格)が一致しないケースである。
8. なぜ、3個の甕をつかって大きな容器を作り、幼児を埋葬しなくてはならなかったのであろうか。今後とも白川周辺の弥生時代の墳墓構成と被葬者との関連を注視していきたい。
9. 熊本県では保存良好な弥生人骨が発掘されることが少なく、熊本県内の弥生人の全体像が明確になっていないが、近年、熊本平野南部から多数の弥生人骨が出土するようになってきて、形質的特徴が少しずつ明らかになりつつある。本遺跡から出土した幼児人骨は、保存状態が悪く、頭蓋の形質的特徴を知ることはできなかったが、四肢骨の一部は計測ができた。甕棺から出土する幼児骨の保存状態は一般的に悪く、計測ができるものはまれである。本例は計測が可能な貴重な弥生時代の幼児骨であり、弥生人の成長に関する研究の資料となるものである。また、本遺跡では未成人用甕棺のほか土壇墓が隣接して存在することから、葬送形態を考察するうえでも重要な遺跡である。

謝辞

《擧筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育委員会文化課の皆様方に感謝致します。》

《参考文献》

1. a in a , 1957 : b n gi . .1. sa Fis ag, ga : 429 597.
2. 松下孝幸、1991 : 熊本市葉山遺跡出土の弥生時代人骨。交流の考古学(肥後考古学第8号 三島格会長古稀記念) : 287 312.
3. 松下孝幸、1997 : 熊本市庵ノ前遺跡出土の弥生時代人骨。庵ノ前遺跡Ⅲ(熊本県文化財調査報告書第160集) : 142 172.
4. 松下孝幸、2000 : 熊本市万楽寺出口遺跡出土の弥生時代人骨。万楽寺出口遺跡 山海道遺跡(熊本県文化財調査報告第185集) : 147 155.
5. 松下孝幸、2001 : 弥生時代人骨の分析。梅ノ木遺跡Ⅱ下巻—県道益城菊陽線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—(熊本県文化財調査報告書第199集) : 46 54.
6. 松下孝幸、2004 : 熊本市神水遺跡第20・24次調査出土の弥生人骨。神水遺跡Ⅵ—第20次・第28次調査区発掘調査報告書—(都市計画道路船場・神水線建設に伴う埋蔵文化財報告書5) : 106 110.
7. 松下孝幸、2005a : 熊本市八ノ坪遺跡出土の弥生人骨。八ノ坪遺跡Ⅰ本文編—東西屋敷地区経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告1— : 188 213.
8. 松下孝幸、2005b : 熊本市長嶺遺跡群出土の弥生人骨。熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集—平成16年度— : 517 546.
9. 松下孝幸、2006 : 熊本市八ノ坪遺跡出土の弥生人骨(2)。八ノ坪遺跡Ⅱ—東西屋敷地区経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告2— : 128 142.
10. 松下孝幸、2007 : 熊本市上ノ郷遺跡(旧熊本平野条里跡)出土の弥生人骨。上ノ郷遺跡(熊本県文化財調査報告書第239集) : 109 130.
11. 松下孝幸・他、2013 : 熊本県大津町中島宝満鶴・岩坂葉柳遺跡出土の弥生・中世人骨。中島西鶴遺跡・中島宝満鶴遺跡・岩坂葉柳遺跡・岩坂樋ノ口遺跡(迫井手地区経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財調査)(大津町文化財報告第10集) : 291 297.
12. 北条暉幸・他、1969 : 熊本県上益城郡嘉島村剣原出土箱式石棺人骨について。熊本医学会雑誌、43 : 892 894.
13. 里一郎・他、1959 : 熊本県玉名郡立願寺発掘の弥生式時代人骨について。熊本医学会雑誌、33 : 2483 2491.

---

\* asami 、\*\* a a i

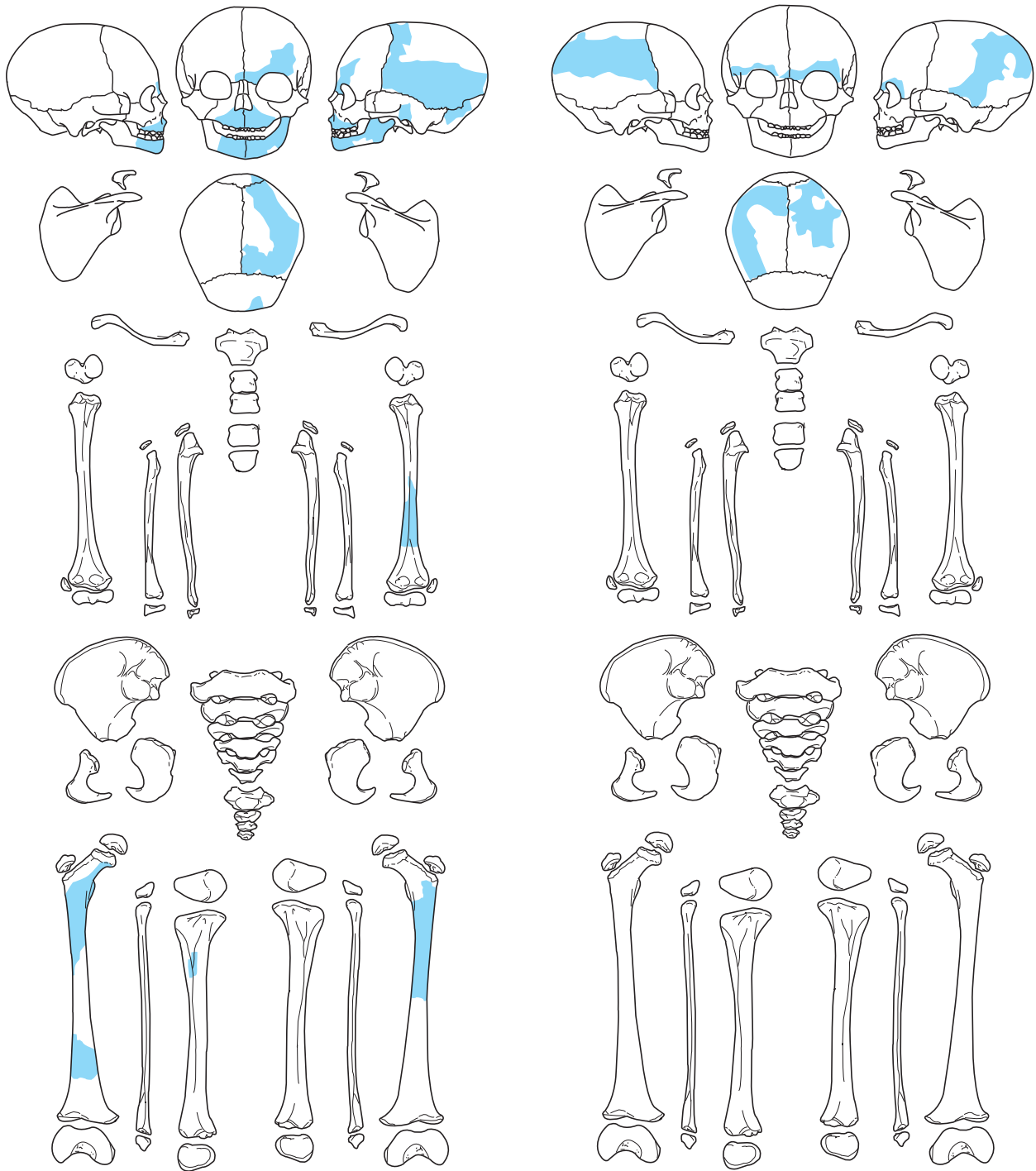


表4 下顎骨(mm、度)(Mandibula)

		吉原1区	
		S15	
		5歳	
65.	下顎関節突起幅	-	
65(1).	下顎筋突起幅	-	
66.	下顎角幅	-	
67.	前下顎幅	-	
68.	下顎長	-	
68(1).	下顎長	-	
69.	オトガイ高	25	
69(1).	下顎体高(右)	-	
	(左)	19	
69(2).	下顎体高(右)	-	
	(左)	-	
70.	枝高(右)	-	
	(左)	-	
70(1).	前枝高(右)	-	
	(左)	31	
70(2).	最小枝高(右)	-	
	(左)	-	
70(3).	下顎切痕高(右)	-	
	(左)	-	
71(1).	下顎切痕幅(右)	-	
	(左)	-	
71.	枝幅(右)	-	
	(左)	36	
71a.	最小枝幅(右)	-	
	(左)	-	
79.	下顎枝角(右)	-	
	(左)	-	
66/65	下顎幅示数	-	
68/65	幅長示数	-	
68(1)/65	幅長示数	-	
69(2)/69	下顎高示数(右)	-	
	(左)	-	
71/70	下顎枝示数(右)	-	
	(左)	-	
71a/70(2)	下顎枝示数(右)	-	
	(左)	-	
70(3)/71(1)	下顎切痕示数(右)	-	
	(左)	-	

表5 四肢骨計測値(mm)(Limb bones)

			吉原1区	
			S15	
			5歳	
			右	左
上腕骨	1.	骨体最大長		
	2.	骨体中央最大径	-	12
	3.	骨体中央最小径	-	9
	4.	骨体中央周	-	35
	5.	骨体上端幅	-	-
	6.	骨体下端幅	-	-
	7.	骨体最小周	-	33
	3/2	骨体中央断面示	-	75.00
	7/1	長厚示数	-	-
大腿骨	1.	骨体最大長	-	-
	2.	骨体中央横径	-	12
	3.	骨体中央矢状径	-	14
	4.	骨体中央周	-	43
	5.	骨体上横径	16	16
	6.	骨体上矢状径	15	14
	7.	骨体上端幅	-	-
	8.	骨体下端幅	-	-
	4/1	長厚示数	-	-
	3/2	骨体中央断面示	-	116.67
	6/5	上骨体断面示数	93.75	87.50



吉原1区・S15(小児・5才)

吉原1区・S16(幼児・4才)

図2 人骨の残存図(アミかけ部分)

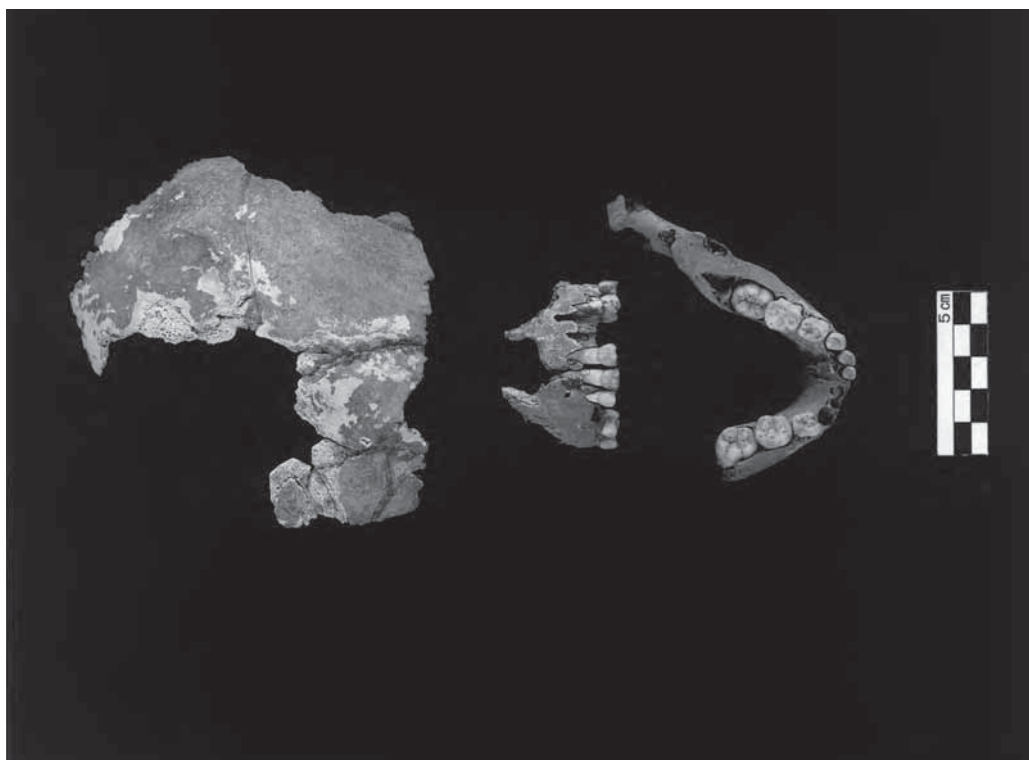
(Fig.2 Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)



四肢骨 (The limb bones)

吉原1区 S15 (幼児5歳・性別不明)

(The skeleton S15 from area 1 of the Yoshiwara site, infant unknown sex)



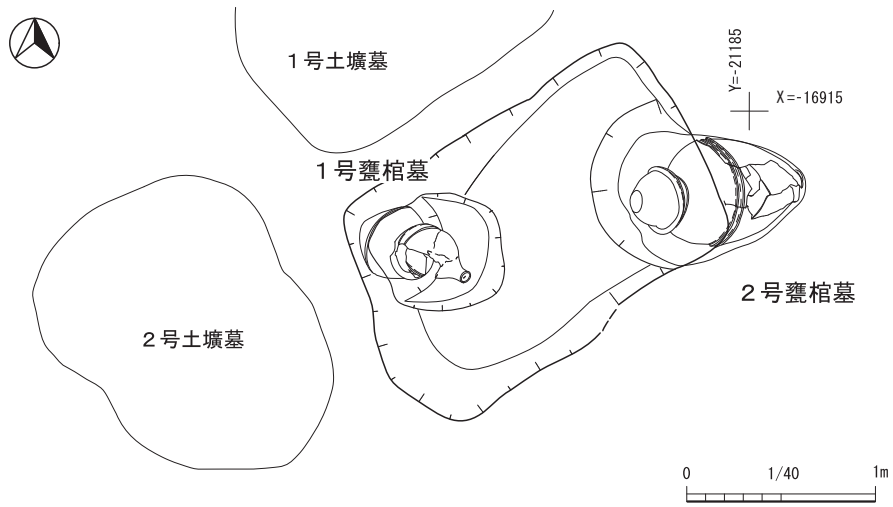
頭蓋 (The skull)



齒 (The milk teeth)

吉原3区 S6 (幼児 1 ~ 2 歳・性別不明)

(The teeth from S6 section 3 of the Yoshiwara site, infant unknown sex)



1・2号甕棺墓(S15・16)配置図

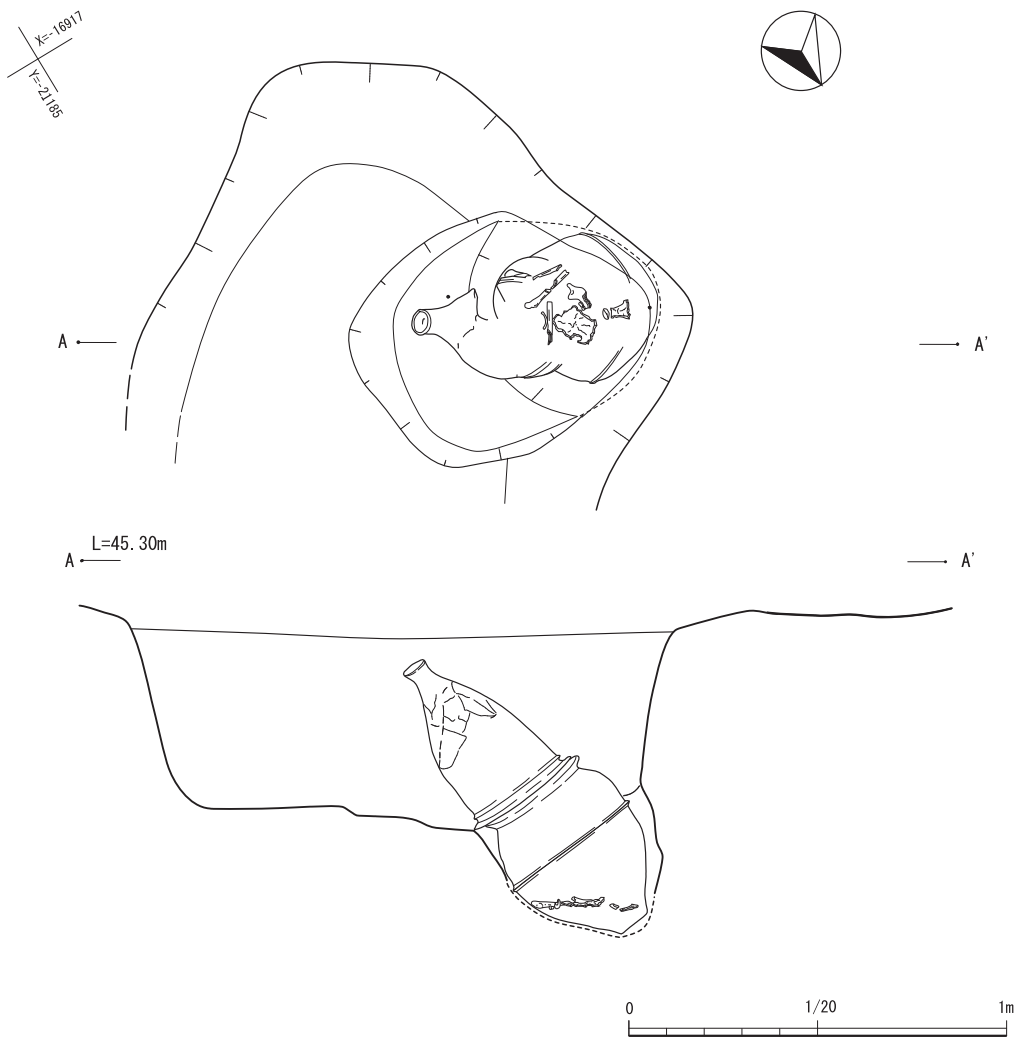


図3 1区1号甕棺墓(S15)人骨出土状況(実測図との合成)

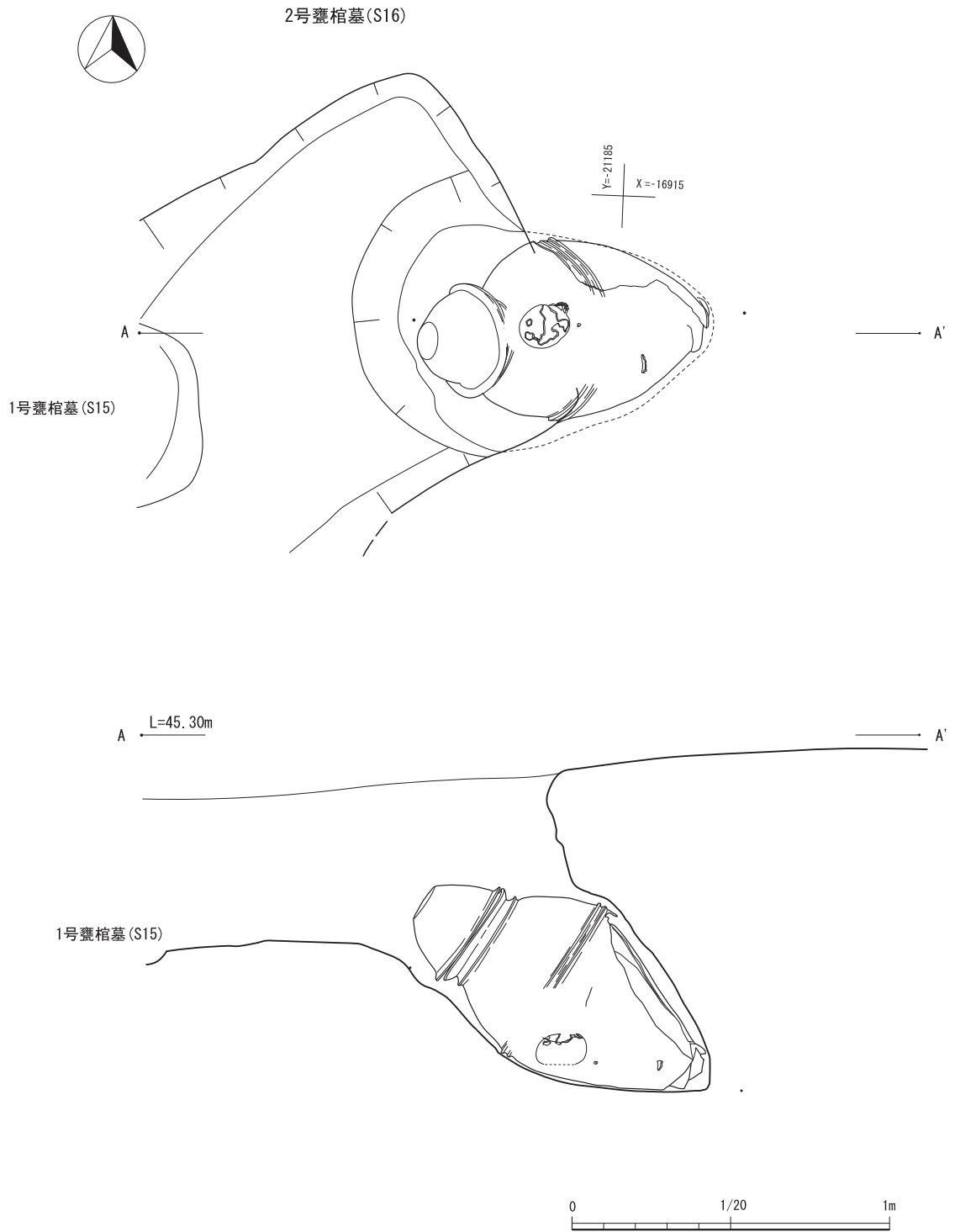


图4 1区2号甕棺墓(S16)人骨出土状况(実測図との合成)

## 第Ⅷ章 各 論

### 北部九州からみた新南部遺跡群(11次)の墓制

常松幹雄

#### Ⅰ. はじめに

新南部遺跡群(11次)において甕棺墓は弥生中期前葉にはじまり、標石をもつ墓群や集石遺構は中期後葉段階に形成された。まず注目されるのは、区画墓やその西側の墓域で出土した甕棺の主だったものが搬入品と考えられることである。

弥生時代の5期区分で中期はⅡ・Ⅲ・Ⅳ期にあたる。副葬品をみるとⅡ期は青銅器の副葬と生産の開始、Ⅲ期は青銅器に加えて鉄器が加わる、Ⅳ期は前漢鏡が副葬されるようになり、鉄器も大型化する傾向がみられる。

新南部遺跡群(11次)の墓域の存続期間は、Ⅱ期後半からⅣ期で、北部九州では吉野ヶ里遺跡の大型墳丘墓の築造時期に相当する。この墓域を形成した人々は、副葬品や装身具を保有していないが、小規模な墳丘をもつ区画墓を築造した。本稿では新南部遺跡群(11次)の墓制を、区画墓としての属性と標石をもつ墓の構造について検討し、北部九州との対比によってその特性を明らかにしたい。

#### Ⅱ. 区画墓の構造

北部九州の集団墓には、溝や土坑、あるいは盛土状の遺構として規格性が看取されるものと、墓群の配置から区画の存在が想定される二者が存在する。可視的な区画と不可視の区画である。溝や土坑として掘削された「土砂＝排土」が、盛土とされた結果「溝＋墳丘」となったものや、他所から運ばれた土砂で盛土が築かれた場合は「墳丘」による区画として捉えることができる。

しかし墳丘は削平をうけて残っていないこともあり周溝状の遺構だけが遺存している場合も少なくない。盛土が確認された吉野ヶ里遺跡北墳丘墓や吉武樋渡遺跡と、盛土は削平されて区画溝だけのがこの三雲南小路遺跡を比べると、両者の築造過程に大きな差異は認められない。ところが墳丘が確認された墓群は「墳丘墓」、盛土が削平され区画溝だけが確認されたものは「周溝墓」とよばれるように、本来同様の築造過程の構造物が異なる用語で表記され混乱をきたすこともある。

このほか溝や墳丘など可視的な標識が存在しない場合でも、墓群の配置から図上で設定される区画がある。墓地の空間分析によって想定される区画である(柳田1986・寺沢1990)。

本稿では墳丘墓や周溝墓を一元化する用語として区画墓という言葉を用いる(溝口1998)。墓群の分類については溝口孝司氏の用例に従う。

「区画墓」 溝や墳丘で区画された墓域を区画墓とする。区画墓には削平によって墳丘の有無が確認できない場合がある。このほか隈・西小田遺跡のように独立丘陵の頂部に方形区画を意識した墓域を地山削り出しによって形成した事例を含む。

「列墓」 墓地における統一的秩序の形成が列形成指向となってあらわれたものが前期段階からみられる。その指向の度合いが徹底されたものが中期前半(Ⅱ期)にかけて盛行した二列埋葬墓である。

「系列墓」 既存の甕棺墓の周囲に新たな甕棺墓を営むことの繰り返しによって形成された墓群およびその集合をさす。いわゆる集塊状を呈する金の隈遺跡のような甕棺墓群は系列墓に分類される。

### Ⅲ. 新南部遺跡群(11次)の様相

新南部遺跡群(11次)では扇形の1区(東西35m南北20m)東側で西側に湾曲する1号溝状遺構が検出された。墓群は南西の2区でも確認されたが、その間で溝状遺構は検出されていない。溝状遺構は、墓域を区画する目的で掘削され、排土は墳丘の盛土とされたと考えられる。

1号溝に西接する2~5号甕棺墓中、2号甕棺墓は大型の甕を接口式に組み合わせたものである。2号甕棺墓の墓壙は広く深く掘りこまれていることから区画墓の中心的な存在であったと推定される。2~5号甕棺墓から西側にかけては緩く70cmほど傾斜がみられる。2~5号甕棺墓の墓壙基底部の標高を低い順に並べると2号→3号→4・5号となる。そして2号甕棺墓の西、約10mに位置する1号甕棺墓と墓壙の基底部の標高を比べると1号甕棺墓のほうが約40cm低い値を示している。

下甕の大きさでは1号甕棺墓のほうが器高は10cmあまり高いとはいえ、2号甕棺墓は上下に大型の甕が使用されている。北部九州の甕棺墓をみると副葬品を保有する確率は「鉢+甕」よりも「甕+甕」の組合せが多いことから、2号甕棺の「甕+甕」は階層として上位にみられるセットといえる。

そして1号甕棺墓の墓壙の基底部が約0.4m低いのは、2号甕棺墓の地山面が1号甕棺墓の地山面に向かって緩く傾斜していることによるものである。2号甕棺墓と3号甕棺墓の墓壙の基底部のレベル差は0.2mで4・5号甕棺墓とは0.7mのレベル差がある。このことから2号甕棺墓と3号甕棺墓の埋葬が完了した時点では墓壙上に土饅頭程度の高まりがみられる状況だった。その段階で1号溝状遺構が掘削され、排土によって墳丘が形成された。4・5号甕棺墓は、区画墓の墳丘上から掘削されたと考えられる。

甕棺墓の埋置方向をみると1号甕棺墓は西方向、2号甕棺墓は東方向に挿入されている。両者の間にとおる1号道路状遺構は1号・2号甕棺墓の埋葬時から機能していたと推定される。

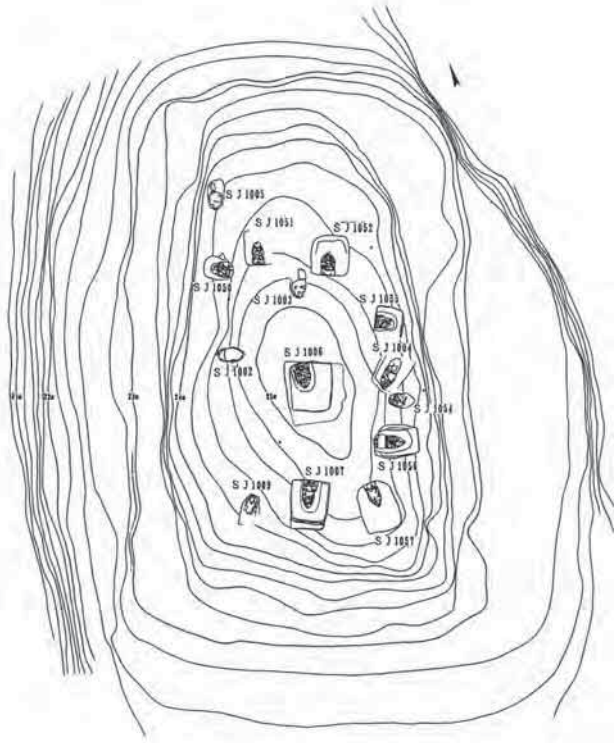
以上から新南部遺跡群(11次)の墓域の形成を以下のように想定する。

- ① 東方向の挿入を意識して2号甕棺墓、西方向の挿入を意識して1号甕棺墓が埋置された。それぞれの墓壙上には土饅頭状の高まりができた。3号甕棺墓の埋葬が完了する。
- ② 緩やかな高まりのF・G-2・3Gに接して1号溝状遺構が掘削され、墳丘をもつ区画墓が築かれる。墳丘の形状は、道路状遺構で囲まれた南北11.5m、東西7mの約80.5㎡の楕円形の範囲と推定される。1号溝状遺構はH-3Gで幅が狭くなることから南北と東西方向に掘削された2基の土坑がつながって逆L字形の平面プランとなった可能性がある。
- ③ 埋葬時、墓域へは1区の南からの導線で入り、区画墓内の4・5号甕棺墓の挿入方向について方位の規制は看取されない。

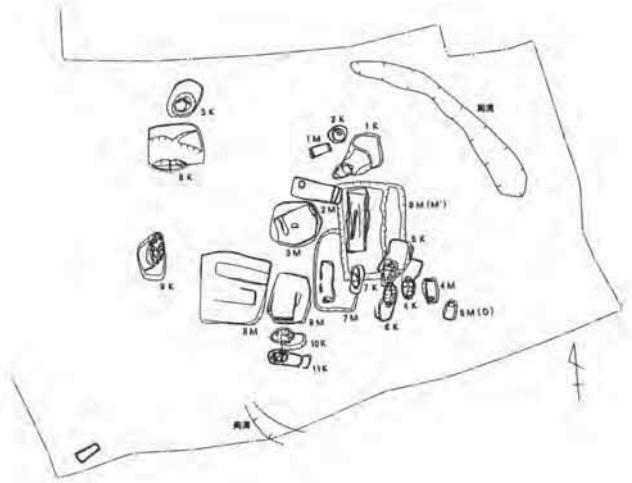
表1 新南部遺跡群(11次)の埋葬施設一覧

遺構名	グリッド	型式(上)	型式(下)	墓壙基底部の標高 集石は最上面の標高
1号甕棺墓	E-3	鉢・汲田式	甕・汲田式	22.7m
2号甕棺墓	G-3	甕・汲田式(新)	甕・汲田式	23.1m
3号甕棺墓	G-2	甕・汲田式(新)	甕・汲田式(新)	23.3m
4号甕棺墓	G-2	鉢・須玖式併行	甕・須玖式併行	23.8m
5号甕棺墓	G-3	壺・須玖式併行	壺・須玖式併行	23.8m
1号木棺墓	E-3・4	—	—	22.6m
2号木棺墓	D-3	—	—	22.4m
3号木棺墓	D-3	—	—	22.0m
1号標石甕棺墓	D-3	—	—	—
2号標石甕棺墓	A・B-6	—	—	22.0m以下
1号集石	F-1	—	—	23.9m
2号集石	E-1・2	—	—	23.9m
3号集石	F-3	—	—	24.3m





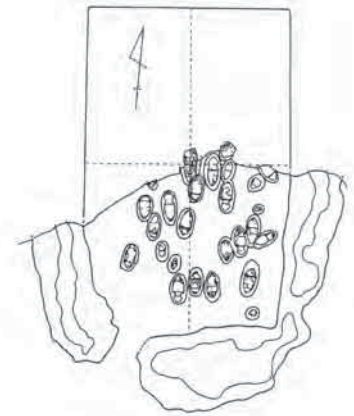
吉野ヶ里遺跡北墳丘墓



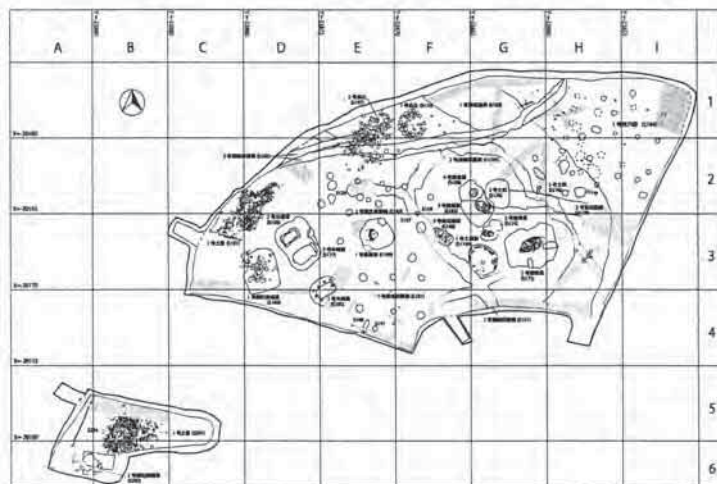
鎌田原遺跡



吉武樋渡遺跡



蒲江遺跡



新南部遺跡群(11次)

図1 北部九州における区画墓の平面プラン (1/500)

一方、1号甕棺墓も1区の南側からの導線で墓域に入り西方向への挿入を意識して埋葬が行われた。1号甕棺墓とその西側に並列する1～3号木棺墓の基底部の高さは、ほぼ同程度である。

Ⅱ期後半からⅢ期にかけて、墓域は①から③の順で変遷し、標石をもつ甕棺墓や集石が築造されたⅣ期の段階は、1号溝状遺構に沿って墳丘をもつ区画墓が存在した。墳丘上に土饅頭状の高まりがあったかどうかは不明である。また墳丘墓の西側に埋置された1号甕棺墓や1～3号木棺墓について墳丘はもたなかったが、各々の土饅頭状の高まりによって墓域としての情報は継承されたと推定される。

Ⅳ期の標石をもつ甕棺墓や集石は、Ⅲ期までの墓群と切り合っていないことから、区画墓をとりまく1・2号道路状遺構はⅡ期後半からⅣ期にかけて機能したとみられる。

### 標石をもつ甕棺墓と集石

新南部遺跡群(11次)ではⅡ期の区画墓および個別の墓は、外標施設の痕跡をとどめていないため、標石の存否については不明である。区画墓の甕棺墓に標石とされる礫は確認されていない。

新南部遺跡群(11次)の標石と集石は下部まで発掘調査がおよんでいないがⅣ期に比定されている。地下探査によって集石の下数ヶ所で空洞の反応が認められていることから、今後集石下で甕棺墓などの存在が明らかになれば、標石となる可能性がある。

## Ⅳ. 北部九州における区画墓との比較 [図1]

北部九州の区画墓には、1. リーダー的人物の埋葬を契機として墳丘の構築がはじまったと考えられるものと2. 区画墓を構築した後に墳丘を掘り込んで埋葬が行われたものとに大別される。

両者の違いは盛土が残っている場合は墓壇の有無によって判別できるが、盛土が削平された場合は墓壇基底部の標高から推測することになる。つまり1の場合は区画内に深く掘りこまれた中心主体が存在し、後出する埋葬施設の墓壇基底部の高さは墳丘から掘削した分だけ浅くなる傾向がある。ここではⅡ期からⅢ期に築造された4例を紹介し、新南部遺跡群(11次)の属性と比較する。

### 1. 鎌田原遺跡 (福岡県嘉麻市大隈町733番地)

鎌田原遺跡は、遠賀川上流域のⅡ～Ⅳ期の区画墓である。甕棺墓や木棺墓からなる墓群は対峙するふたつの弧状の溝によって画された約700㎡の範囲で確認された。辺長24mの隅丸方形、あるいは31m×24mの隅丸長方形の平面プランで、墳丘は削平をうけていたが高さ1～2mの低墳丘があったと推定される(福島1997)。

埋葬施設はすべて地山まで掘り込まれていた。墓壇基底部の標高は甕棺墓では古段階の8号や9号は深く、須玖式になると70cm近く浅くなる。とりわけ8号甕棺墓と同時期の6号木槨墓は基底部が最も低い値を示している。6号木槨墓は墓群形成期の中心主体と考えられることからⅡ期の埋葬が行われた段階で墳丘の築造が始まったと推定される。副葬された銅戈は3点で、いずれも初期の中細形に分類される。このほか銅剣の先端部が2号木棺墓で出土した。

玉類は、3号木棺墓で検出された硬玉の勾玉7点と碧玉の管玉177点がすべてである。磨製の石剣や石鏃は、先端や基部の破片が多く完形品は1点のみであった。

表1 鎌田原遺跡の埋葬施設一覧

遺構名	型式(上)	型式(下)	備考	墓壇基底部の標高
1号甕棺墓	鉢・須玖式	甕・須玖式		90.21m
2号甕棺墓	甕・立岩式	甕・立岩式		90.56m
3号甕棺墓	—	甕・立岩式		90.45m
4号甕棺墓	鉢・須玖式	甕・須玖式		90.90m
5号甕棺墓	鉢・須玖式	甕・須玖式		90.62m
6号甕棺墓	鉢・須玖式	甕・須玖式		90.83m
7号甕棺墓	甕・後期	甕・後期		90.95m
8号甕棺墓	甕・汲田式	甕・汲田式	赤色顔料・銅戈1	89.93m
9号甕棺墓	甕・汲田式	甕・汲田式	赤色顔料・銅戈1	90.21m
10号甕棺墓	鉢・立岩式	甕・立岩式		90.20m
11号甕棺墓	鉢・須玖式	甕・須玖式		90.76m
1号木棺墓	須玖Ⅱ式(古)		赤色顔料	90.82m
2号木棺墓	須玖Ⅰ式		赤色顔料・銅劍先端1	90.86m
3号木棺墓	須玖Ⅱ式(古)		勾玉7・管玉178	90.77m
4号木棺墓	須玖Ⅱ式		赤色顔料	90.81m
5号土壙墓	須玖Ⅱ式		赤色顔料	90.83m
6号木槨墓	須玖Ⅰ式		木槨墓・銅戈1	90.00m
7号木棺墓	須玖Ⅰ式		磨製石鎌・石劍切先	90.61m
8号木棺墓	須玖Ⅰ式		赤色顔料・石劍切先	90.71m
9号木棺墓	須玖Ⅰ式			91.11m

2. 吉野ヶ里遺跡(佐賀県神埼郡吉野ヶ里町と神崎市) [図2]

吉野ヶ里の北墳丘墓は、Ⅱ～Ⅲ期段階の区画墓である。墳丘は長軸40～45m、短軸30m弱、約1、300㎡の隅丸長方形を呈する。数種類の土を版築状に積み上げられており、築造時の墳丘は4.5mほどの盛土であったと推定される(七田1997)。

この区画墓では14基の甕棺墓が調査され、有柄銅劍を含む銅劍8口と青銅製把頭飾2点が出土した。また14基中7基で水銀朱が確認された。

墳頂部の標高は約25mで、墳丘を築造した後に墓壇を掘削して甕棺を埋置している。墓壇は深いもので2m、浅いもので0.8mほどの掘削が観察された。区画墓の中心部に位置するSJ1006は汲田式とよばれるⅡ期の甕棺で、14基中もっとも古い型式に分類される。関まで刃を研ぎ出した銅劍1口が副葬されていた。墓壇基底部の標高でいえばSJ1006の南に位置するSJ1007が約0.2m深く掘られている。区画墓の北西端と南西端に位置するSJ1005とSJ1009で出土した銅劍の研ぎ減りが著しい。SJ1057の銅劍は現存長43cmをはかる大型品である。銅劍だけで構成された青銅武器の様相を示す貴重な資料である。

表2 吉野ヶ里遺跡の埋葬施設一覧

遺構名	型式(上)	型式(下)	備考	墓壇基底部の標高
SJ1002	甕・須玖式(新)	甕・須玖式(新)	有柄銅劍1+ガラス製管玉79 水銀朱	24.0m
SJ1003	甕・須玖式	甕・須玖式		23.1m
SJ1004	甕・須玖式	甕・須玖式	水銀朱	24.0m
SJ1005	—	甕・須玖式	銅劍1 水銀朱	24.2m
SJ1006	甕・汲田式	甕・汲田式	銅劍1 水銀朱	23.3m
SJ1007	甕・須玖式(古)	甕・須玖式(古)	銅劍1+青銅製把頭飾	23.1m
SJ1009	—	甕・須玖式	銅劍1 水銀朱	24.0m
SJ1050	甕・須玖式(新)	甕・須玖式(新)		—
SJ1051	甕・須玖式(新)	甕・須玖式(新)		—

遺構名	型式(上)	型式(下)	備考	墓壇基底部の標高
SJ1052	甕・須玖式(古)	甕・須玖式(古)		—
SJ1054	—	甕・須玖式	銅剣1 水銀朱	—
SJ1055	甕・須玖式	甕・須玖式		—
SJ1056	甕・須玖式	甕・須玖式	銅剣1	—
SJ1057	甕・須玖式	甕・須玖式	銅剣1 + 青銅製把頭飾 水銀朱	—

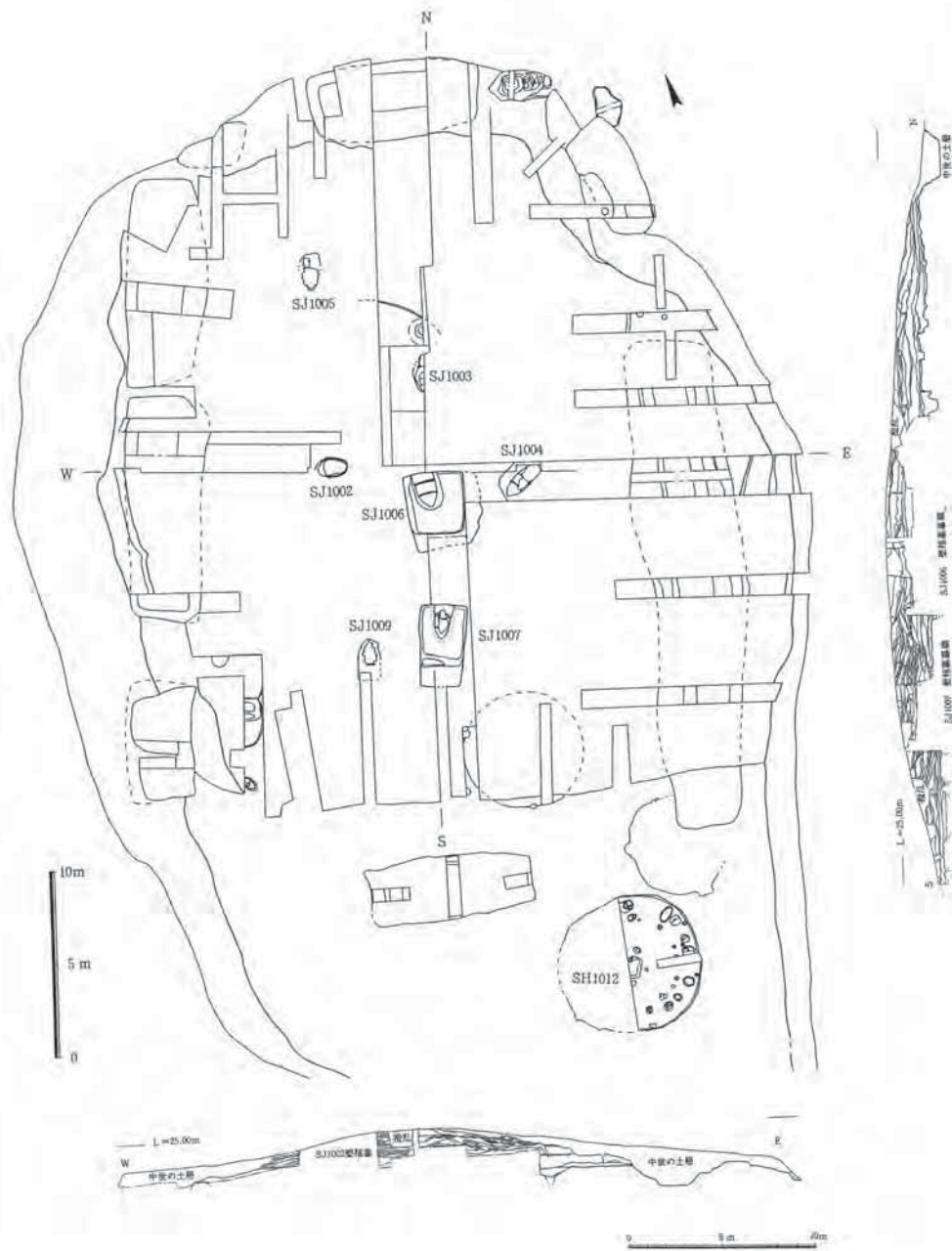


図2 吉野ヶ里遺跡北墳丘墓と墳丘土層の断面 (1/400)

3. 吉武樋渡遺跡 (福岡市西区大字吉武) [図3]

福岡市の西郊、早良平野の内陸部、飯盛山麓に形成された標高 30m から 35m の沖積地に立地する。吉武樋渡遺跡は、Ⅲ期に造営された高さ 2.0m 程度の盛土をもつ区画墓で、墳丘の高まりを利用して帆立貝式古墳が築造されていた。墳丘は、近世墓による攪乱や後世の土採りによって一部削平をうけていたが、甕棺墓 20 基と木棺墓 1 基が検出された(横山・力武 1996)。このうち 6 基の甕棺墓から銅剣や把頭飾、素環頭刀子などの副葬遺物が検出された。墳丘の平面プランについて筆者は、長軸 27m、短軸 20m で約 540 m<sup>2</sup> の規模と推定した(常松 2007)。中細形型式の青銅器から鉄器へ移行する段階の副葬遺物の様相を捉えることができる。62 号甕棺墓では重圏文銘帯鏡 1 面と素環頭大刀 1 が出土した。

墳頂部の標高は約 25.5m で、墳丘築造後に墓壙を掘削して甕棺を埋置するという点で吉野ヶ里の北墳丘墓と同類系の区画墓に分類される。Ⅲ期の銅剣や鉄器を保有する甕棺墓が区画の中心部に位置している。Ⅳ期の鉄器と前漢鏡を保有する 62 号甕棺墓は、約 2m の深さで墓壙は掘削されていた。甕棺のサイズをはじめ厚葬墓として特筆すべき属性はみられない。

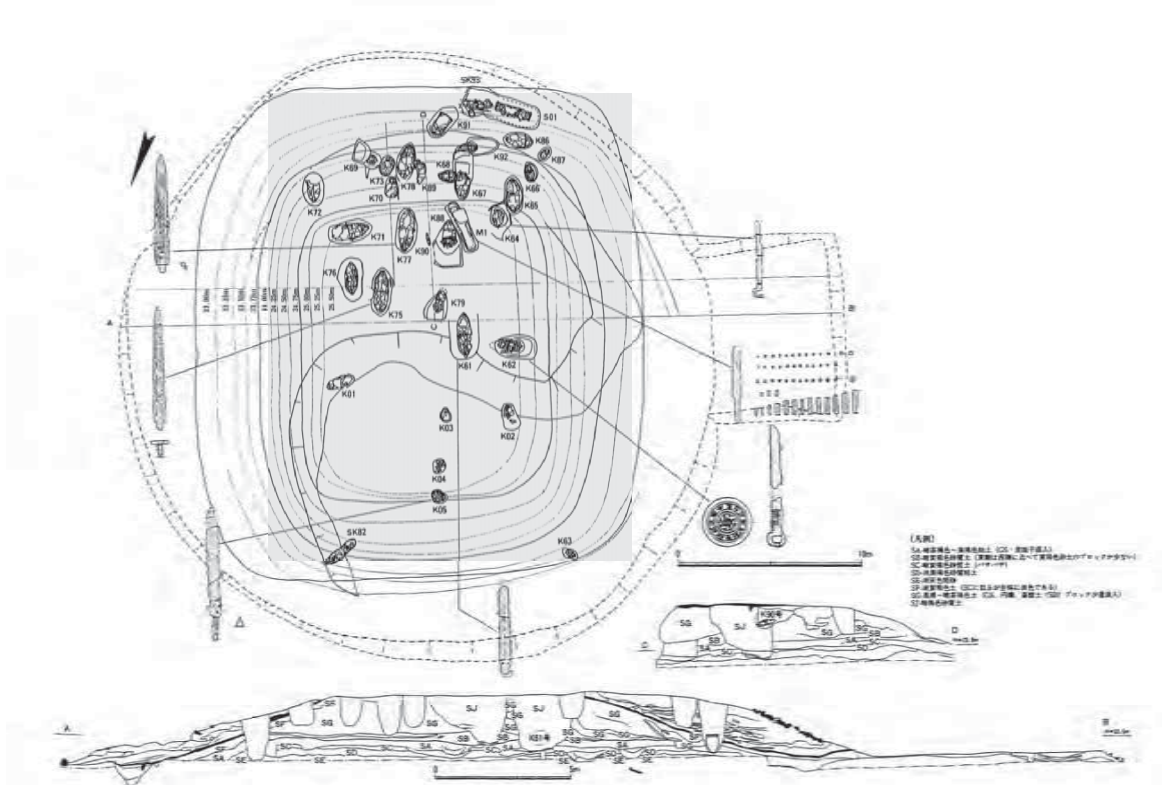


図3 吉武樋渡遺跡と墳丘土層の断面 (1/400・3/800)

表3 吉武樋渡遺跡の埋葬施設一覧

遺構名	型式(上)	型式(下)	備考	墓壙基底部の標高
K1	甕・立岩式(新)	甕・立岩式(新)		23.1m
K2	—	甕・立岩式		23.1m
K3	甕・城ノ越式	鉢・城ノ越式	墳丘築造以前	—
K4	—	甕・立岩式		23.2m
K5	甕・立岩式(新)	甕・立岩式(新)	鉄剣1 + 鉄鏃1	23.2m
K61	甕・須玖式	甕・須玖式	鉄剣1	23.3m
K62	甕・立岩式	甕・立岩式	素環頭刀子1 + 前漢鏡	22.9m
K63	甕・須玖Ⅱ式	甕・須玖Ⅱ式		24.6m
K64	—	甕・立岩式(新)	素環頭刀子1	23.9m

遺構名	型式（上）	型式（下）	備考	墓壇基底部の標高
K65	甕・立岩式	甕・立岩式		23.3m
K66	甕・立岩式	甕・立岩式		23.1m
K67	甕・須玖式	甕・須玖式		23.2m
K68	甕・立岩式	甕・立岩式		23.7m
K69	—	甕・立岩式（新）		23.6m
K70	甕・立岩式	甕・立岩式		23.4m
K71	甕・須玖式	甕・須玖式		23.6m
K72	—	甕・須玖式		23.1m
K73	壺・立岩式	甕・立岩式（新）		23.4m
K75	甕・須玖式	甕・須玖式	銅剣1 + 青銅製把頭飾	23.0m
K76	甕・立岩式	甕・立岩式		23.1m
K77	甕・須玖式	甕・須玖式	銅剣1	23.3m
K78	甕・須玖式	甕・須玖式		23.5m
K79	甕・立岩式（新）	甕・立岩式（新）		23.1m
K86	鉢・立岩式	甕・立岩式		24.0m
K87	甕・須玖式（新）	甕・須玖式（新）		23.2m
K88	甕・須玖式	甕・須玖式		22.8m
K89	鉢・須玖式	甕・須玖式		23.8m
K90	甕・須玖Ⅱ式	甕・須玖Ⅱ式		—
K91	—	甕・立岩式		22.3m
K9	甕・須玖Ⅱ式	甕・須玖Ⅱ式		22.7m
木棺墓	後期		鉄剣 + 管玉・ガラス小玉	—

#### 4. 浦江遺跡（福岡市西区大字金武字大塚）〔図4〕

浦江遺跡の北側は、谷の開析によって崩落がすすんでいたが、甕棺墓群は中心主体である13号甕棺墓の位置から北側に反転すると区画の規模は東西幅13m、南北21mで面積約273㎡に復元することができる。区画南西隅の掘り残しの部分は陸橋となっており、その周囲に甕棺墓の分布がみられないことから埋葬や祭礼の際の空間と考えられる（常松2005）。

最初に埋葬されたのは、区画の中心軸にそって墓壇が最も深く掘りこまれた13号甕棺墓である。大型甕棺を接口式に組合せたのはこの13号甕棺墓だけで、長軸40cmの標石が確認され、下甕から唯一水銀朱が検出された。つづいて埋葬されたのは13号甕棺墓の東に接する11号甕棺墓で、両者は主軸方向を一にし、墓壇基底部は他の甕棺墓より40cm以上深く掘り込まれていた。

以上から浦江遺跡では、11・13号甕棺墓の埋葬が完了した段階では各墓壇上に土饅頭状の高まりがある程度だった。この段階で13号甕棺墓の接口部を基点に墓域が設定され、周囲の土坑が掘削された。

墳丘の痕跡は認められなかったが、表1に示す11・13号とそれ以外の甕棺墓の墓壇基底部の標高差から区画全体におよそ60cmの盛土があったと推定される。

甕棺の型式は、Ⅲ期からⅣ期に相当し、吉武樋渡遺跡の時期と重なっている。同一平野内における区画墓の重層性を示す事例として注目される。区画内の成人用甕棺の挿入方向をみると、南から挿入した甕棺墓12基にたいして北から挿入した甕棺墓が11基でおおよそ半々の割合となっている。

また区画墓の中心から南東30mに幅10mほどの地点で隅丸方形プランの周溝状遺構が検出された。周溝内のやや南寄りでは全長3.2mの長方形の土坑が確認された。土坑の横断面は不整形なU字形で東側にゆるく傾斜している。周溝出土の土器はⅢ期が主体を占めており筒形器台のように区画墓の周辺で検出された土器と共通する器種もみられる。区画墓と周溝状遺構、両者は墓域と祭祀空間として関連づけることが可能である（常松2006）。

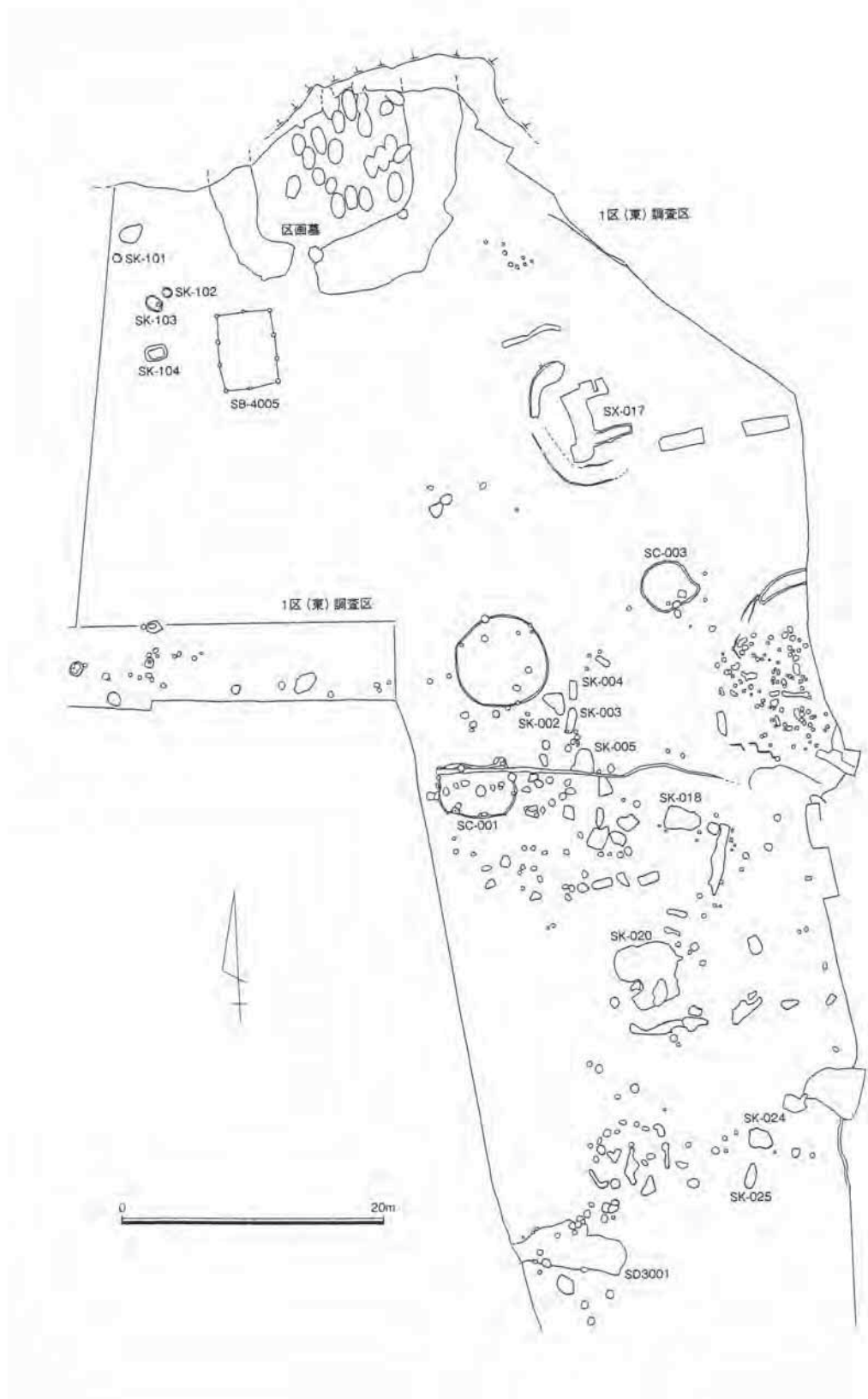


図4 浦江遺跡(5次)区画墓と周溝状遺構の配置(1/500)

表4 浦江遺跡の埋葬施設一覧

遺構名	型式（上）	型式（下）	挿入方向	墓壙基底部の標高	
1号甕棺墓	鉢・須玖式	甕・須玖式	南	40.8m	
2号甕棺墓	壺・須玖式（新）	甕・須玖式	北	41.0m	
3号甕棺墓	鉢・須玖式	甕・須玖式	北	41.0m	
4号甕棺墓	壺・須玖式	甕・須玖式	南	40.9m	
5号甕棺墓	甕・須玖式	甕・須玖式	北	41.0m	
6号甕棺墓	壺・須玖式（新）	甕・須玖式	南	40.8m	
7号甕棺墓	甕・立岩式	甕・立岩式	東	40.9m	
8号甕棺墓	壺・立岩式	樽形土器	—	41.2m	
9号甕棺墓	—	甕・立岩式	北	41.0m	
10号甕棺墓	甕・立岩式	甕・立岩式	北	41.0m	
11号甕棺墓	壺・須玖式	甕・須玖式	北	40.5m	
12号甕棺墓	鉢・須玖式	甕・須玖式	南	40.9m	
13号甕棺墓	甕・須玖式	甕・須玖式	南	40.5m	
14号甕棺墓	—	甕・須玖式	北	40.6m	
15号甕棺墓	鉢・須玖式	甕・須玖式	北	41.1m	
16号甕棺墓	鉢・須玖式	甕・須玖式	南	41.2m	
17号甕棺墓	甕・立岩式	甕・立岩式	南	41.4m	
18号甕棺墓	須玖Ⅱ式（上）	樽形土器（中）	須玖Ⅱ式（下）	北	41.3m
19号甕棺墓	壺・須玖式（新）	甕・須玖式	南	41.1m	
20号甕棺墓	鉢・須玖式	甕・須玖式	北	40.9m	
21号甕棺墓	鉢・須玖式	甕・須玖式	北	41.1m	
22号甕棺墓	鉢・須玖式	甕・須玖式	南	40.9m	
23号甕棺墓	—	壺・須玖Ⅱ式	—	40.9m	
24号甕棺墓	鉢・須玖式	甕・須玖式	南	40.9m	
25号甕棺墓	—	甕・須玖式	南	40.9m	
26号甕棺墓	鉢・須玖式	甕・須玖式	南東	40.8m	

区画墓の属性比較

新南部遺跡群(11次)の区画墓は、長楕円形プランの約80.5㎡の規模で、Ⅱ期に築造されⅢ期まで存続する。北部九州の築造類型では鎌田原遺跡や浦江遺跡と共通する点がある。また時期幅は吉野ヶ里遺跡の北墳丘墓に近い。

新南部遺跡群(11次)で埋葬が行われるようになったⅡ期の墓制は、墳丘を有しない1号甕棺墓と比べると甕棺の2号甕棺墓の「甕+甕」の組合せに区画墓の優位性を見出すことができる。区画墓はⅢ期まで継続し、Ⅳ期は調査区南西で検出された標石をもつ甕棺墓として継続する。また集石下で埋葬遺構の存在が確かになればⅣ期の墓域は北側に拡張したことになる。

北部九州においてⅣ期の標石をもつ埋葬は、須玖岡本D地点の区画墓にともなう大型の標石があるが、同時期の三雲南小路の区画墓では確認されていない(中山1923・岡部2002)。Ⅱ期やⅢ期にみられる小型の標石もⅣ期には衰退するようである(常松2007)。新南部遺跡群(11次)の2号標石甕棺墓の時期はⅣ期となる公算がたかいようだが、甕棺墓が盛行した周縁部における外標施設の継承事例として注目される。

表5 区画墓の属性一覧

遺跡名	面積	盛土の高さ	墓群	墳丘築造の類型	時期
鎌田原遺跡	700㎡	1.0~2.0m	20基	木槨墓の築造を契機に築造	Ⅱ~Ⅳ
吉野ヶ里遺跡	1,300㎡	4.5m	14基	墳丘の築造→埋葬	Ⅱ・Ⅲ
吉武樋渡遺跡	675㎡	2.0m	31基+α	墳丘の築造→埋葬	Ⅲ・Ⅳ
浦江遺跡	273㎡	0.6m	26基	13号甕棺墓の埋葬を契機に築造	Ⅲ・Ⅳ
新南部遺跡群(11次)	80.5㎡	0.5m	4基	2号甕棺墓の埋葬を契機に築造	Ⅱ・Ⅲ



## V. 道路状遺構について

新南部遺跡群(11次)では、南北 11.5m、東西 7mの区画墓の外周にそって道路状遺構 (S151・S1101) が検出された。ここでの道路状遺構とは、墓域を周回するように踏み固めた痕跡で中央部が浅く凹んだ遺構をさしている。I区の南側で十字形に分かれ、その北西部でY字形に分岐して検出された。

弥生時代の二列埋葬墓の間の空間は墓道と考えられている。墓と集落をむすぶ道路状遺構の事例として八ツ並金丸遺跡(佐賀県鳥栖市)で検出された尾根上の二列埋葬墓と斜面をつなぐ全長 40mにわたる溝状遺構が知られている(佐賀県 2003)。この溝状遺構の底面では砂利を敷き詰めた敷石が 17mにわたって確認された。この遺構は、埋土中から検出された土器片によって二列埋葬墓と同時期中期初頭に機能した道路状遺構と考えられている。

## VI. まとめ

新南部遺跡群(11次)は、白川中流域に立地するⅡ期からⅢ期の区画墓と標石をもつ甕棺墓、集石遺構などから構成された集団墓である。中九州における甕棺墓の分布域の南限に位置している。大型甕棺は搬入品と考えられ、産地は特定されていないが、輸送手段に水路を想定すると、有明海沿岸から福岡県南部の筑後方面が候補地となる。

墳丘を築造したのちに甕棺墓を埋置する区画墓としては、遠賀川中流域の鎌田原遺跡や早良平野の浦江遺跡の類型と共通する。区画内の墓制が甕棺墓に限られるという点では浦江遺跡に近い。

青銅器や装身具を保有する墓の中でもその集中度のたかい有力層墓は、Ⅱ期前半の吉武高木遺跡(福岡市)や板付田端遺跡(福岡市)を嚆矢とする。Ⅱ期後半では吉野ヶ里遺跡の墳丘墓や田熊石畑遺跡(宗像市)、Ⅲ期は吉武樋渡遺跡の墳丘墓、Ⅳ期は須玖岡本D地点(春日市)と三雲南小路遺跡(糸島市)、立岩遺跡(飯塚市)などがその代表例としてあげられる。

各時期の有力層墓は「Ⅱ期前半」には博多湾に近い福岡・早良平野から、「Ⅱ期後半」では佐賀・宗像で確認されている。「Ⅲ期」はふたたび早良平野で墳丘墓が築造され、「Ⅳ期」になると福岡・糸島の沿岸部で盟主的な区画墓が築造される。また平野部や盆地部まで首長墓を埋葬した区画墓が分布する。

このように上位の有力層墓は特定の地域に限定して発展的に変遷するのではなく、玄界灘沿岸から有明海、遠賀川中流域まで広域なエリア内で変遷している。その背景には地域間における石材の流通や青銅器生産、対外交渉の主導権など集団のトレンドを決定づける複数の要素が複合したものと推定される。

新南部遺跡群(11次)の集団墓が形成される時期、Ⅱ期後半の佐賀平野では吉野ヶ里遺跡北墳丘墓のような大型区画墓が築造された。区画墓は祖霊祭祀のための装置として創出されたが、葬制の面では青銅器を副葬することで権威を継承するシステムが創出され、Ⅳ期には前漢鏡など漢代の文物を分配することで首長の階層化が推進された(常松 2011)。今回の調査でⅡ期における甕棺墓の受容が墓制を介したネットワーク構築の前提となっていたことがうかがえる。甕棺墓を受容した集団は、2号甕棺墓の被葬者を先がけ(祖霊)とする祭祀スペースの創出を区画墓の形成によって実現をはかったのであろう。

中九州においては副葬品による権威継承のシステムはみられないが、Ⅳ期の標石や集石遺構は、甕棺分布圏の周縁部において醸成された属性として注目される。甕棺墓を受容し区画墓を築造した集団の性格や権威継承の在りかたについての検証が期待される。

【引用・参考文献】

- 青柳種信・鹿島九平太 1976「柳園古器略考・銚之記」（復刻版）文献出版
- 岡部裕俊・牟田華代子 2002「三雲・井原遺跡Ⅱ 一南小路地区編一」『前原市文化財調査報告書』第78集、前原市教育委員会
- 岡崎 敬（編）1977『立岩遺跡』立岩遺跡調査委員会
- 岡崎 敬（編）1982『末盧国』六興出版
- 佐賀県教育委員会 2003「柚比遺跡群3 一鳥栖北部丘陵新都市関係文化財調査報告書4一」『佐賀県文化財調査報告書』第155集
- 佐賀県教育委員会 1992「吉野ヶ里 一神埼工業団地計画に伴う発掘調査概要報告書一」『佐賀県文化財調査報告書』第113集
- 七田忠昭 1997「吉野ヶ里遺跡」『佐賀県文化財調査報告書』第132集、佐賀県教育委員会
- 常松幹雄 2005「浦江遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第863集、福岡市教育委員会
- 常松幹雄 2006「金武3 1.1区（東部）の調査」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第874集、福岡市教育委員会
- 常松幹雄 2007「北部九州における弥生時代の区画墓と標石」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター
- 常松幹雄 2011「甕棺と副葬品の変貌」『弥生時代の考古学』3（株）同成社
- 寺沢 薫 1990「青銅器の副葬と王墓の形成」『古代学研究』121、古代学研究会
- 中山平次郎 1917「銅銚銅劍の新資料」『考古学雑誌』第7巻第7号、考古学会
- 中山平次郎 1922a「明治三十二年に於ける須玖岡本発掘物の出土状態（其一）」『考古学雑誌』第12巻第10号、考古学会
- 中山平次郎 1922b「明治三十二年に於ける須玖岡本発掘物の出土状態（其二）」『考古学雑誌』第12巻第11号、考古学会
- 中山平次郎 1923「三雲南小路に於ける特殊埋蔵物発掘地点」『考古学雑誌』第13巻第9号、考古学会
- 福島日出海 1997「原田・鎌田原遺跡」『嘉穂町文化財調査報告書』第18集、嘉穂町教育委員会
- 溝口孝司 1998「カメ棺墓地の移り変わり」『弥生人のタイムカプセル』福岡市博物館
- 溝口孝司 2008「弥生時代中期北部九州地域の区画墓の性格：浦江遺跡第5次調査区画墓の意義を中心に」『九州と東アジアの考古学：九州大学考古学研究室50周年記念論文集』九州大学考古学研究室
- 柳田康雄（編）1985「三雲遺跡 南小路地区編」『福岡県文化財調査報告書』第69集、福岡県教育委員会
- 柳田康雄 1986「集団墓地と特定集団墓」『図説発掘が語る日本史』第6巻、新人物往来社
- 横山邦継・力武卓治（編）1996「吉武遺跡群Ⅷ」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第437集、福岡市教育委員会
- 横山邦継 1999「吉武遺跡群ⅩⅠ」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第600集、福岡市教育委員会

## 第Ⅷ章 総括

白川河川激甚災害対策緊急事業に伴って平成 25 年度は、新南部遺跡群（10 次・11 次）、吉原遺跡の埋蔵文化財本調査を実施した。調査当初は、掘削による廃土の処理や産廃の処理に時間を有し、予定通り調査が進むのか気をもんだが、熊本県土木事務所の協力のもと年度内に終了することができた。

ここでは、各遺跡の特徴を示す遺構、遺物と課題について総括していく。

### 1. 新南部遺跡群 10 次

新南部遺跡群 10 次は、縄文時代から古墳時代にかけての複合遺跡である。縄文時代の遺構は竪穴建物 11 軒、弥生時代の遺構は竪穴建物 63 軒、古墳時代の遺構は 7 軒が確認された。遺構は、調査区内に時代毎のまとまりとして確認された。白川中流域河岸段丘上での当該集落との関連性について考えてみた。

縄文時代の遺跡は、白川中流域の立田・供合地区の河川段丘上に数多く存在する。特にその中で、後期から晩期にかけての遺跡が目につく。白川右岸の立田地区には六地藏遺跡、竹ノ後・芭蕉遺跡、三の宮（牧鶴宮脇）遺跡、竜田陣内遺跡、竜田口遺跡等が確認され、白川左岸の供合地区には託麻弓削遺跡群、吉原遺跡、王田遺跡、下南部遺跡、新南部遺跡群等の遺跡が知られている。これらの遺跡は、白川中流域の段丘上に位置し、当該調査区も同様、白川流域における縄文時代の集落の一角を示すものと考えられる。

弥生時代の遺跡は、白川中流域の河岸段丘上には数多く存在する。白川右岸の立田地区には黒髪町遺跡群、竜田陣内遺跡、牧鶴遺跡群、竹ノ後・芭蕉遺跡、弓削平ノ下遺跡、弓削前畑遺跡群、法王遺跡、梅ノ木遺跡、六地藏遺跡等の遺跡が知られている。白川左岸の供合地区には、大江白川遺跡、渡鹿遺跡群、辻遺跡、新南部遺跡群、下南部遺跡、王田遺跡、上南部遺跡、吉原遺跡、中江遺跡、託麻弓削遺跡群、鹿埴瀬遺跡等の遺跡が知られている。集落の形成はそれぞれに違いがあるが、弥生時代の中期から後期、終末期にかけての遺跡が集中する。当該遺跡も同時期の集落として白川左岸河岸段丘上に位置している。

古墳時代の遺跡は、白川中流域右岸の菊陽町と熊本市の境から下流にかけて古墳群及び横穴群がある。古墳は、立田山南麓に集中する傾向があり、長薫寺古墳・宇留毛神社古墳等が確認されている。横穴古墳は、菊陽町に今石横穴墓群、弓削小坂横穴墓群、龍田町から黒髪町にかけて女瀬平横穴墓群、長薫寺横穴墓群、つつじ丘横穴墓群、小碩橋際横穴墓群などが確認されており、一大群集地となっている。

白川中流域の古墳時代後期の集落跡は、竜田陣内遺跡、吉原遺跡、新南部遺跡群で確認されている。

### 2. 新南部遺跡群 11 次

新南部遺跡群 11 次は、主に弥生時代の遺跡である。弥生時代の遺構は、甕棺墓 7 基（うち 2 基は標石をもつ甕棺）、集石 3 基（下部構造は甕棺の可能性あり）、木棺墓 3 基、溝状遺構 1 条、道路状遺構 2 条が確認され、この調査区全体が墓域であったと考えられる。

墓域は段階的に広がりを見せたと考え、最初の段階は、1 号甕棺墓（S109）、2 号甕棺墓（S175）、3 号甕棺墓（S185）の甕棺墓を築造し、区画を意識しながら墓域を形成する。その後、2 号甕棺墓（S175）を意識しながら 4 号甕棺墓（S108）と 5 号甕棺墓（S174）を築造する。木棺墓は 4・5 号甕棺と併行か少し遅れる時期に甕棺墓より川側の方向へ築造し、最後の段階として川際に標石をもつ甕棺墓を築造している。また、1 号道路状遺構（S151）、2 号道路状遺構（S107）ともに北西を向くので、当時の集落は南東方向にあったと推測される。1 号集石（S110）、2 号集石（S107）は、地中レーダー探査による結果から、甕棺が存在する可能性が高いと考えられる。

新南部遺跡群 11 次の調査では、熊本広域大水害に伴う埋蔵文化財調査に係る協議会より「大変重要な遺跡」という意見をいただいた。甕棺墓の上部構造である標石から下部構造まで良好に残存しており、木棺墓等とともに墓域が構成されたことがその理由であった。そこで、熊本県土木部河川課との協議の結果、標石をもつ甕棺墓 2 基、集石 3 基等は、掘削を行わず現状保存することとなった。

### 3. 吉原遺跡

吉原遺跡は弥生時代から古墳時代にかけての複合遺跡である。弥生時代の遺構は、竪穴建物 35 軒、甕棺墓 4 基、土壙墓 2 基、古墳時代の遺構は竪穴建物 7 軒、時代不明の竪穴建物 4 軒が確認された。

今回の調査で弥生時代中期の集落の居住域と墓域が検出できた。

居住域の広がり、調査区の白川上流側に位置する 2 区で数多くの建物が重複した状態で確認され、下流の 1 区から 3 区に向かって建物の数が減っていく。現在の標高からみても 3 区から 2 区に向かって徐々に高くなっている。このことから、集落の居住域の中心は白川の河岸段丘上の高まりにあったと推測できたが、調査区の制約があり正確な広がりを確定するまでには至らなかった。

甕棺墓は、1 区（1 号・2 号甕棺墓）、2 区（3 号甕棺墓）、3 区（4 号甕棺墓）の 4 基が確認された。3 号甕棺墓を除く残りの 3 基には幼児骨や歯が残っていた。また、4 号甕棺墓は 3 連の甕棺で検出された。

甕棺墓の広がり、居住域の中に墓域が存在する形態である。墓域は集団墓ではなく、少人数の単位での埋葬形態であることが一つの特徴である

土壙墓は、1 区（1 号土壙墓・2 号土壙墓）の 2 基が確認されており、その中の 2 号土壙墓からは、わずかながら骨片が残っていた。

古墳時代後期から終末期にかけての集落は、弥生時代の居住域の広がりと同じく調査区の 2 区を中心に広がりが抑えられそうである。

この吉原遺跡で確認した弥生時代中期の集落跡と、古墳時代後期から終末期の集落跡は白川河岸段丘上に連続すると思われるが、白川中流域の集落は白川の蛇行によって形成された突出部ごとに 1 つの集落としての単位が考えられる。

### 4. 今後の課題

今回の白川河川激甚災害対策特別事業に伴い実施された埋蔵文化財発掘調査において、新南部遺跡群 10 次から縄文時代後期、弥生時代中期・後期、古墳時代後期の各時代の集落跡が確認された。新南部遺跡群 11 次から弥生時代中期の墓域が確認された。吉原遺跡から弥生時代中期、古墳時代後期～終末期の集落が確認された。これらのことは大きな成果であろう。しかし、白川流域の広域にわたる各時代の集落の広がり、及び墓域と集落との関係などこれから解明すべき課題が残る。

今後、実施される発掘調査結果の蓄積を踏まえながら、白川中流域の歴史解明につながれば幸いである。

# 写真図版





調査区遠景(北から)



1号竪穴建物(S351)完掘状況(西から)



2号竪穴建物(S319)完掘状況(東から)



3号竪穴建物(S320)遺物出土状況(南東から)



3号竪穴建物(S320)完掘状況(北東から)



4号竪穴建物(S379)完掘状況(北から)

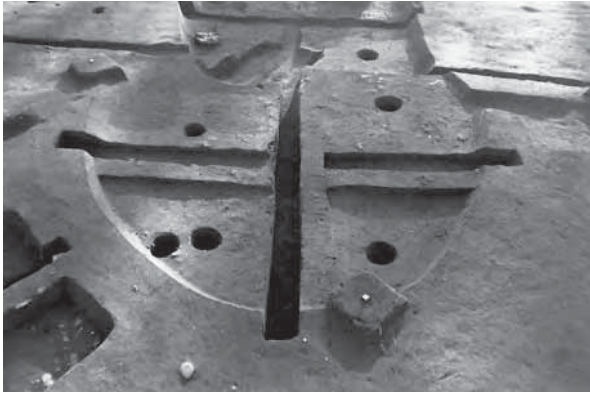


5号竪穴建物(S312)土層断面(東から)

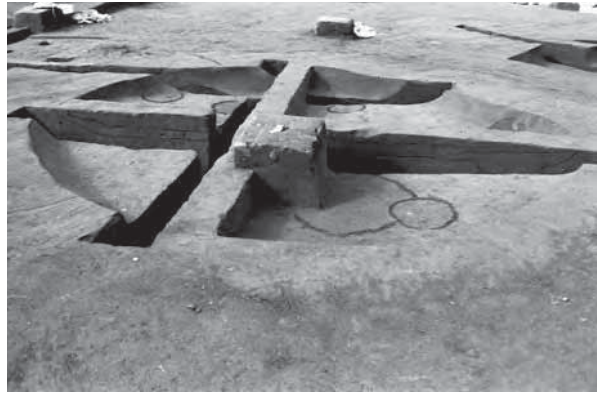


6号竪穴建物(S340)完掘状況(北から)

図版2



7号竪穴建物(S299)完掘状況(北から)



8号竪穴建物(S97)土層断面(東から)



8号竪穴建物(S97)完掘状況(西から)



9号竪穴建物(S98)土層断面(東から)



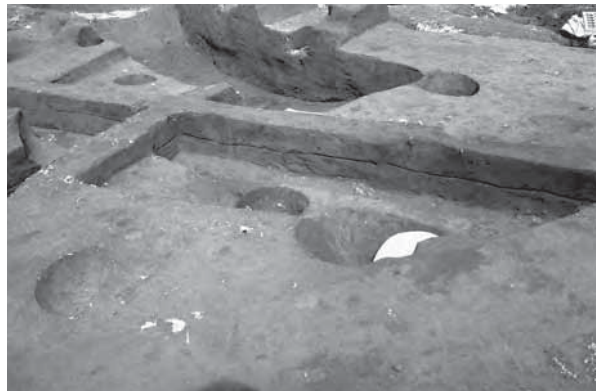
11号竪穴建物(S100)土層断面(南から)



9・10・11号竪穴建物(S98・99・100)完掘状況(北西から)



12号竪穴建物(S322)土層断面(東から)



13号竪穴建物(S350)土層断面(南から)





12・13号竪穴建物(S322・350)完掘状況(北西から)



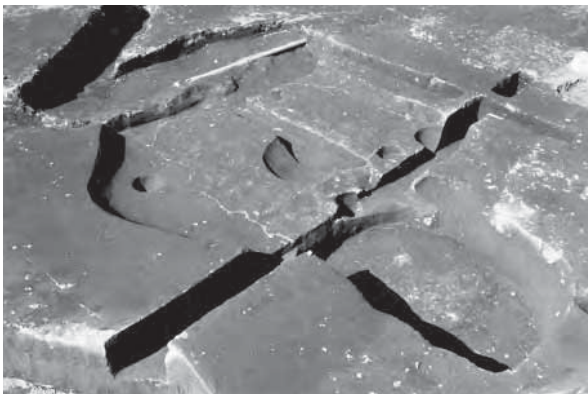
14号竪穴建物(S323)土層断面(北東から)



15号竪穴建物(S324)完掘状況(東から)



16号竪穴建物(S376)遺物出土状況(東から)



16号竪穴建物(S376)完掘状況(南東から)



17号竪穴建物(S377)完掘状況(西から)



18号竪穴建物(S375)完掘状況(北から)



19号竪穴建物(S318)土層断面(東から)

図版4



19号竪穴建物(S318)完掘状況(北から)



20号竪穴建物(S321)遺物出土状況(西から)



20号竪穴建物(S321)完掘状況(南から)



21号竪穴建物(S355)完掘状況(北から)



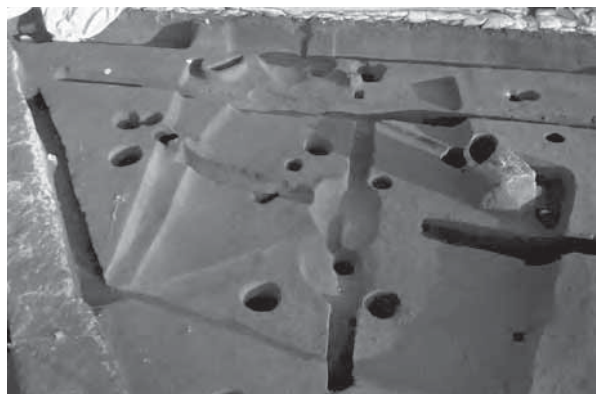
22号竪穴建物(S92)土層断面(南から)



23号竪穴建物(S101)完掘状況(西から)



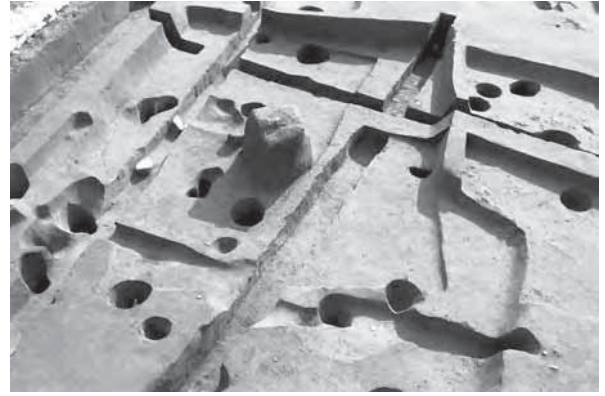
24号竪穴建物(S95)土層断面(西から)



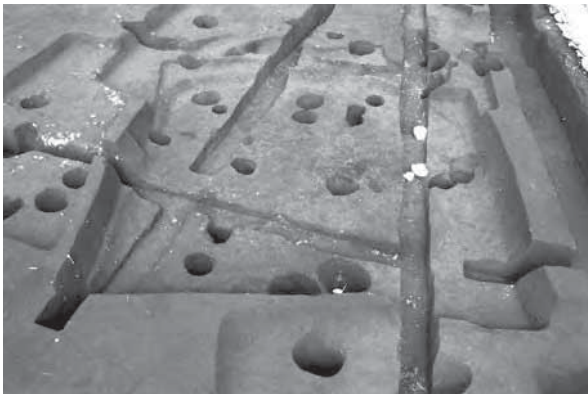
22・24号竪穴建物(S92・95)完掘状況(北から)



22・25・26号竪穴建物(S92・94・93)土層断面(西から)



26号竪穴建物(S93)完掘状況(北から)



27号竪穴建物(S372)完掘状況(南から)



28号竪穴建物(S381)土層断面(南から)



29号竪穴建物(S303)完掘状況(南から)



30号竪穴建物(S325)土層断面(西から)



31号竪穴建物(S304)完掘状況(西から)



32号竪穴建物(S305)土層断面(北から)

図版6



32号竪穴建物(S305)完掘状況(北から)



33号竪穴建物(S374)完掘状況(南から)



34号竪穴建物(S298)土層断面(北から)



34号竪穴建物(S298)完掘状況(北から)



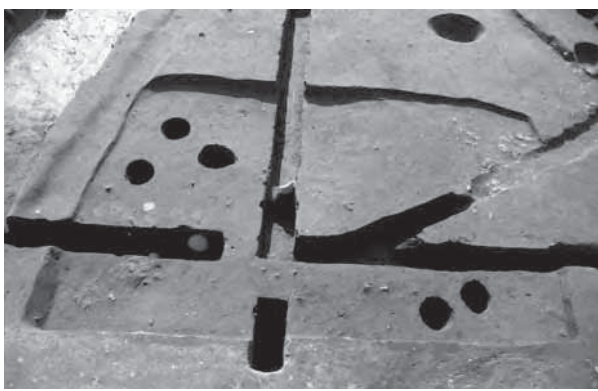
35号竪穴建物(S297)土層断面(東から)



35号竪穴建物(S297)完掘状況(北から)



36号竪穴建物(S105)土層断面(南から)



36号竪穴建物(S105)完掘状況(北から)



37号竪穴建物(S104)土層断面(西から)



37号竪穴建物(S104)完掘状況(南西から)



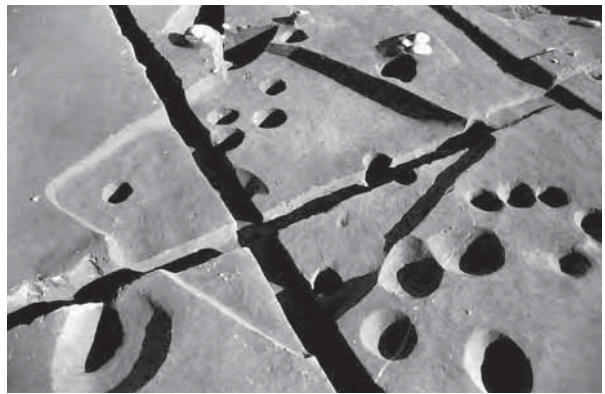
38号竪穴建物(S346)遺物出土状況(西から)



38号竪穴建物(S346)完掘状況(西から)



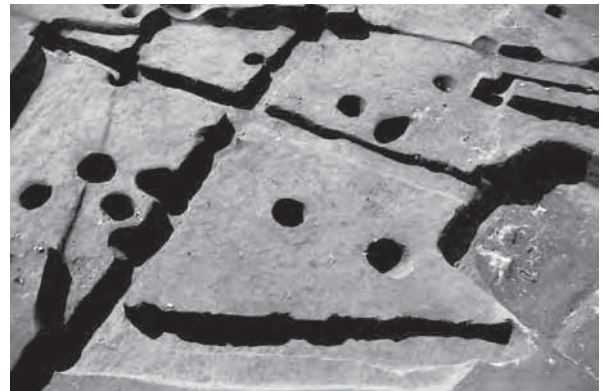
39号竪穴建物(S306)土層断面(西から)



39号竪穴建物(S306)完掘状況(西から)



40号竪穴建物(S307)土層断面(南東から)



40号竪穴建物(S307)完掘状況(東から)

図版8



41号竪穴建物(S347)土層断面(北から)



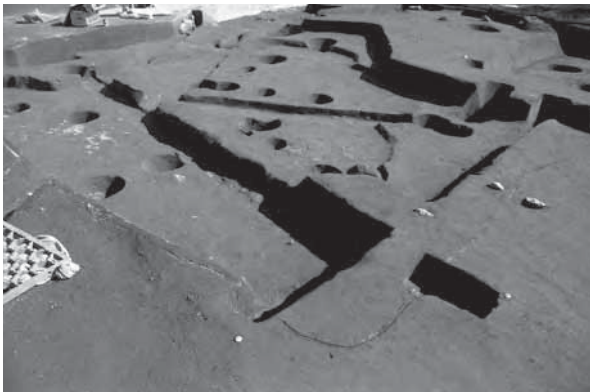
41号竪穴建物(S347)完掘状況(北東から)



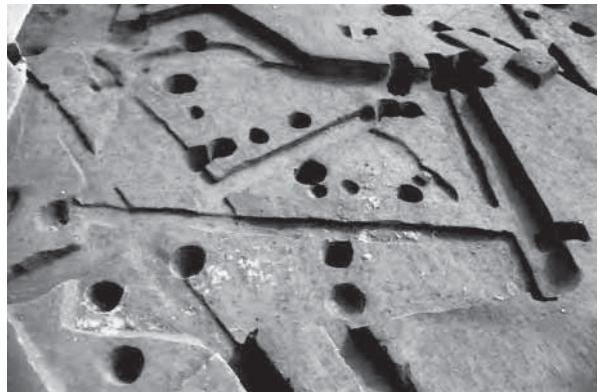
42号竪穴建物(S102)土層断面(南から)



42号竪穴建物(S102)完掘状況(東から)



43号竪穴建物(S228)土層断面(西から)



43号竪穴建物(S228)完掘状況(西から)



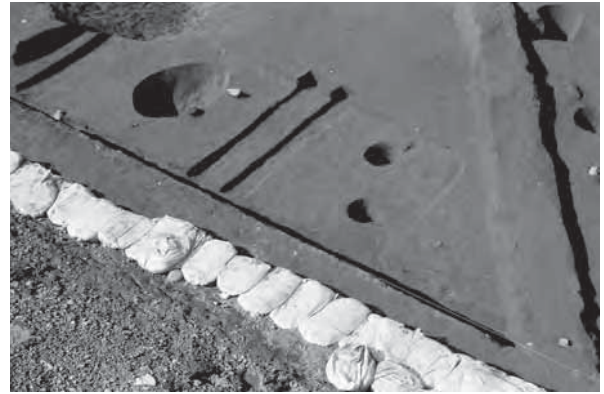
44号竪穴建物(S316)土層断面(北東から)



44号竪穴建物(S316)完掘状況(東から)



45号竪穴建物(S70)土層断面(南から)



45号竪穴建物(S70)完掘状況(東から)



46号竪穴建物(S146)土層断面(南から)



46号竪穴建物(S146)完掘状況(南東から)



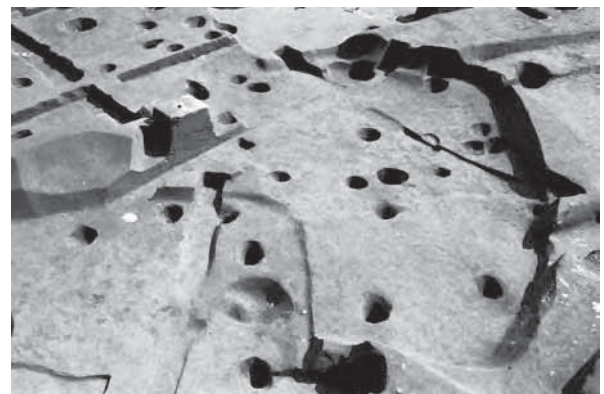
47号竪穴建物(S68)土層断面(北から)



47号竪穴建物(S68)完掘状況(西から)



49号竪穴建物(S341)土層断面(東から)



49号竪穴建物(S341)完掘状況(西から)

図版10



50・51号竪穴建物(S66・67)土層断面(東から)



50号竪穴建物(S66)完掘状況(南から)



51号竪穴建物(S67)炉土層断面(北から)



51号竪穴建物(S67)完掘状況(北から)



52号竪穴建物(S65)完掘状況(西から)



53号竪穴建物(S157)完掘状況(東から)



54号竪穴建物(S203)完掘状況(西から)



55号竪穴建物(S64)土層断面(東から)





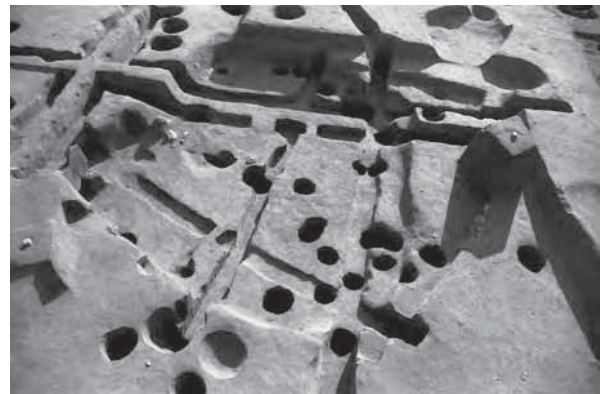
55号竪穴建物(S64)完掘状況(東から)



56号竪穴建物(S63)完掘状況(東から)



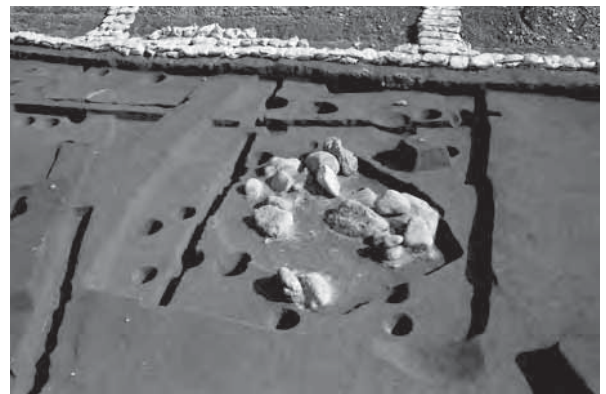
57号竪穴建物(S172)遺物出土状況(西から)



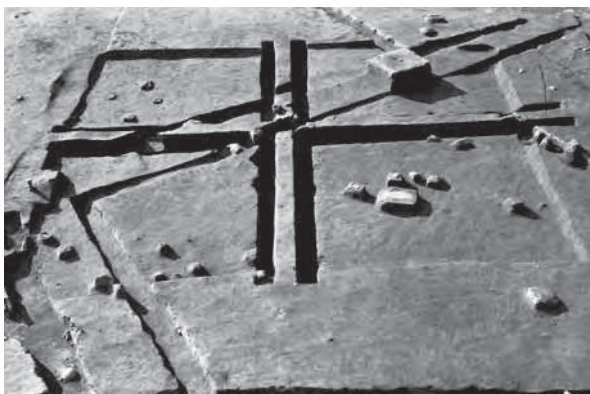
57号竪穴建物(S172)完掘状況(北から)



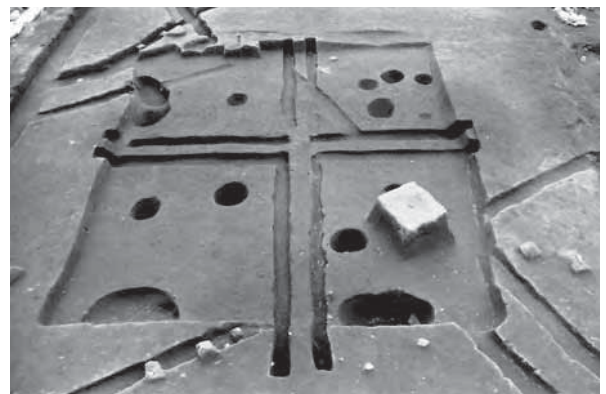
58号竪穴建物(S62)完掘状況(西から)



59号竪穴建物(S61)完掘状況(北から)



60号竪穴建物(S10)検出状況(南東から)



60号竪穴建物(S10)完掘状況(北から)

図版12



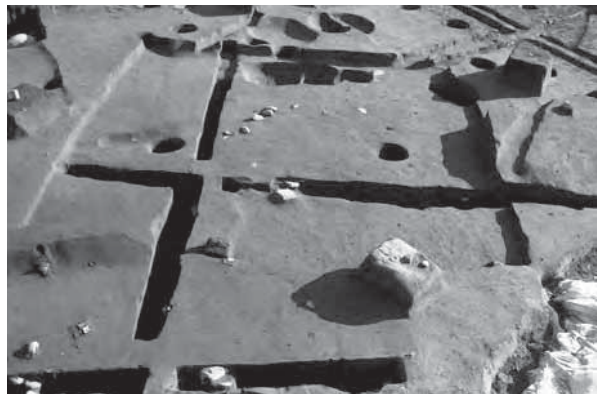
61号竪穴建物(S57)土層断面(東から)



61号竪穴建物(S57)完掘状況(北東から)



62号竪穴建物(S158)遺物出土状況(南から)



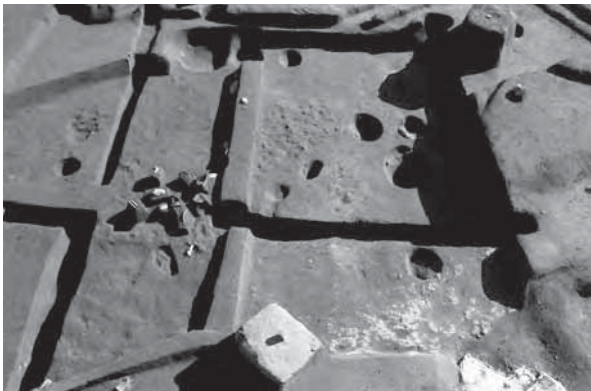
62号竪穴建物(S158)完掘状況(西から)



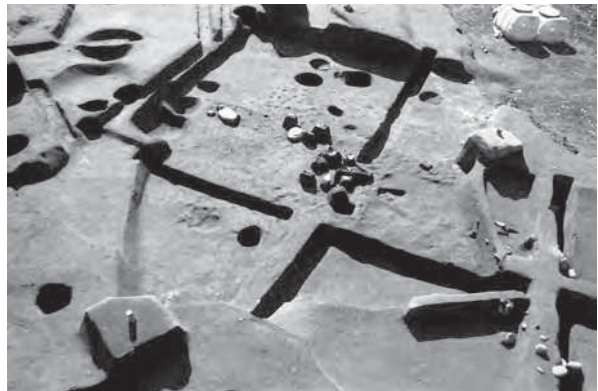
63号竪穴建物(S58)土層断面(北から)



63号竪穴建物(S58)完掘状況(東から)



64号竪穴建物(S183)完掘状況(西から)



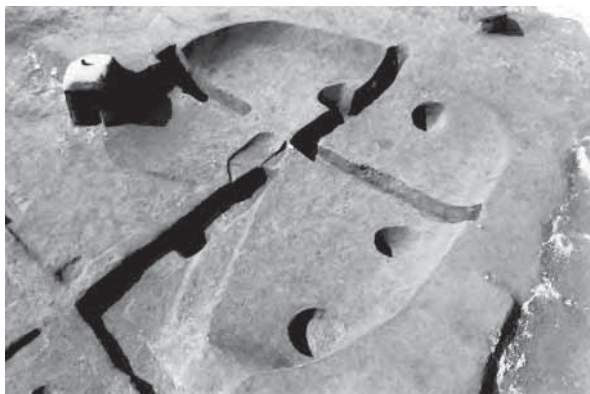
65号竪穴建物(S227)遺物出土状況(北から)



66号竪穴建物(S60)石包丁出土状況(東から)



66号竪穴建物(S60)土層断面(西から)



66号竪穴建物(S60)完掘状況(東から)



67号竪穴建物(S01)検出状況(南西から)



67・68号竪穴建物(S01・02)完掘状況(南西から)



69号竪穴建物(S54)検出状況(北から)



69号竪穴建物(S54)完掘状況(東から)



70号竪穴建物(S55)土層断面(西から)

図版14



71号竪穴建物(S85)完掘状況(北から)



72号竪穴建物(S50)検出状況(西から)



72号竪穴建物(S50)完掘状況(南西から)



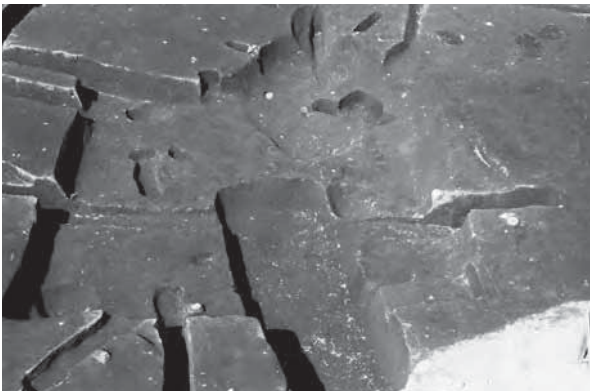
73号竪穴建物(S182)完掘状況(南東から)



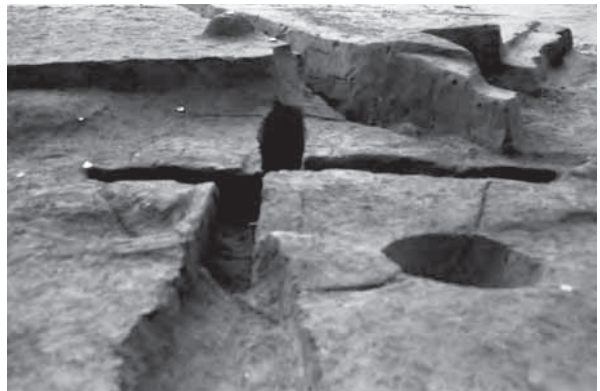
74号竪穴建物(S309)完掘状況(北から)



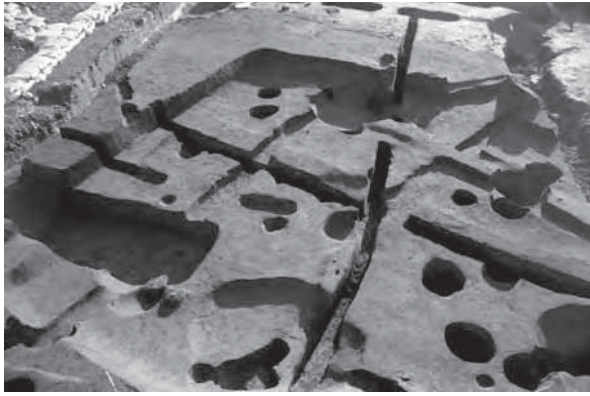
75号竪穴建物(S04)カマド内遺物出土状況(東から)



75号竪穴建物(S04)完掘状況(南東から)



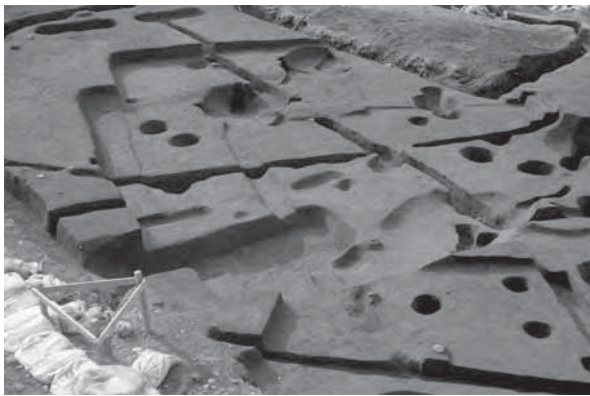
76号竪穴建物(S87)カマド検出状況(北から)



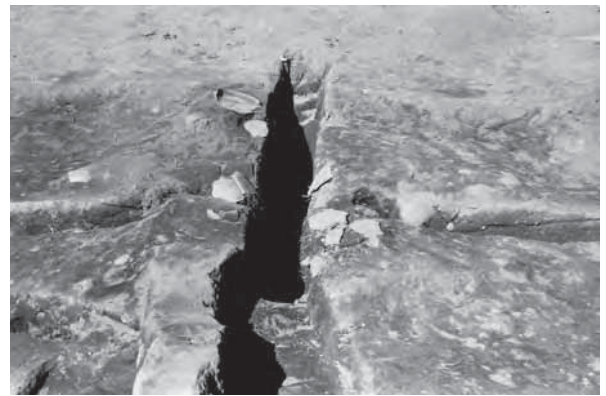
76号竪穴建物(S87)完掘状況(北東から)



77号竪穴建物(S88)土層断面(北西から)



77号竪穴建物(S88)完掘状況(東から)



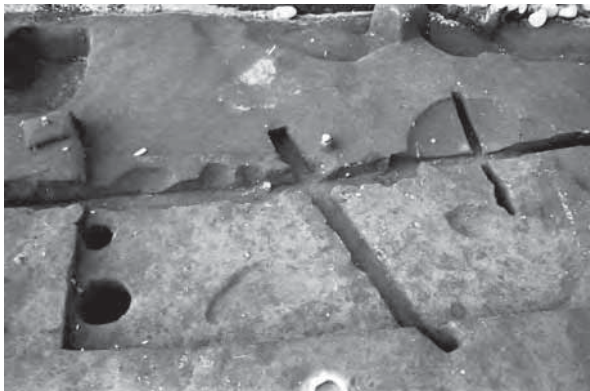
78号竪穴建物(S03)カマド内遺物出土状況(南西から)



78号竪穴建物(S03)検出状況(南から)



78号竪穴建物(S03)完掘状況(南から)



79号竪穴建物(S90)完掘状況(東から)



80号竪穴建物(S156)土層断面(東から)

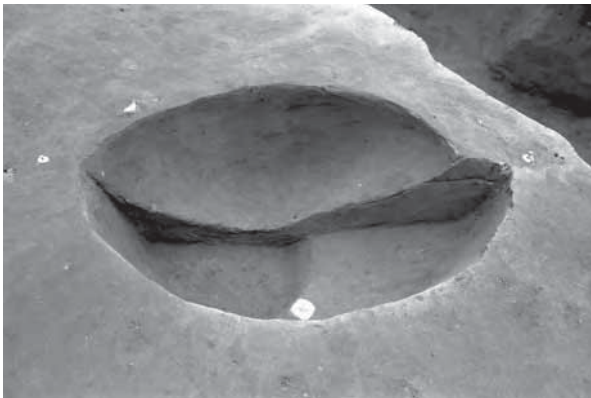
図版16



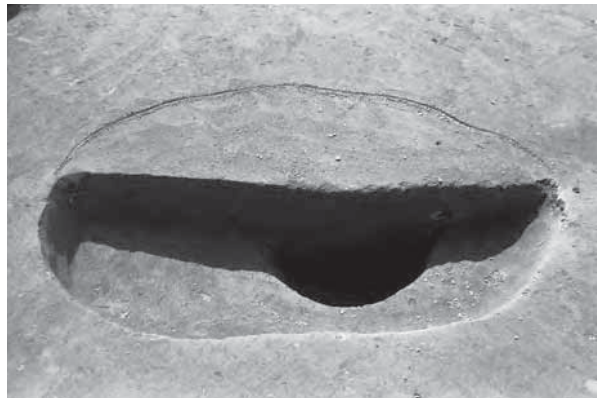
80号竪穴建物(S156)完掘状況(東から)



81号竪穴建物(S47)完掘状況(東から)



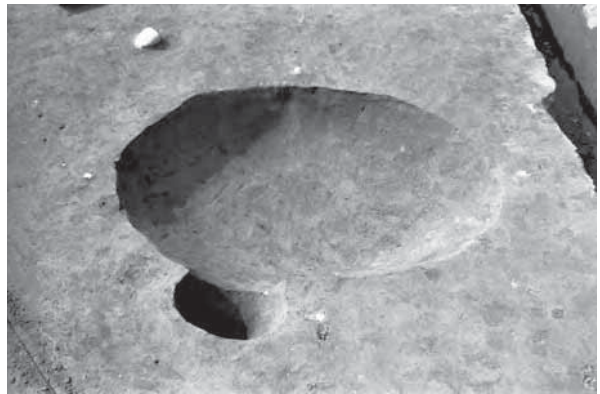
1号土坑(S06)完掘状況(南東から)



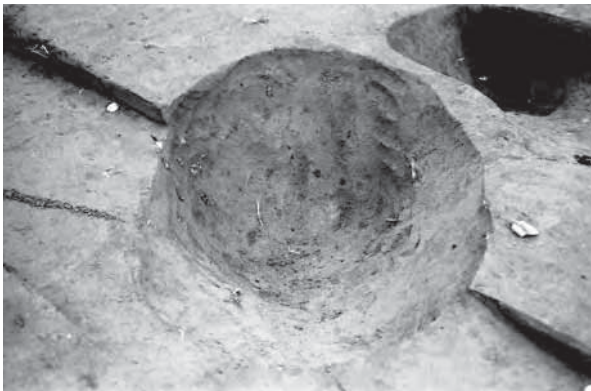
2号土坑(S22)土層断面(北から)



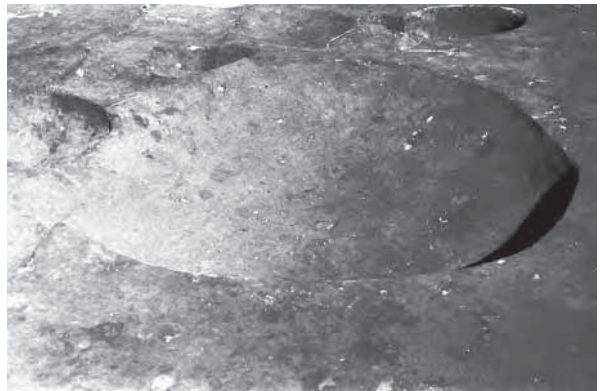
3号土坑(S40)完掘状況(南から)



4号土坑(S42)完掘状況(北から)



5号土坑(S72)完掘状況(東から)



6号土坑(S80)完掘状況(南から)



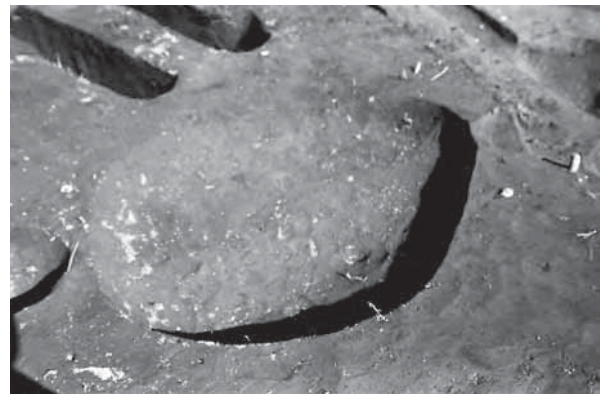
7号土坑(S109)完掘状況(北から)



8号土坑(S127)土層断面(北から)



9号土坑(S175)土層断面(東から)



10号土坑(S200)完掘状況(東から)



11号土坑(S43)完掘状況(東から)



12号土坑(S56)完掘状況(北から)



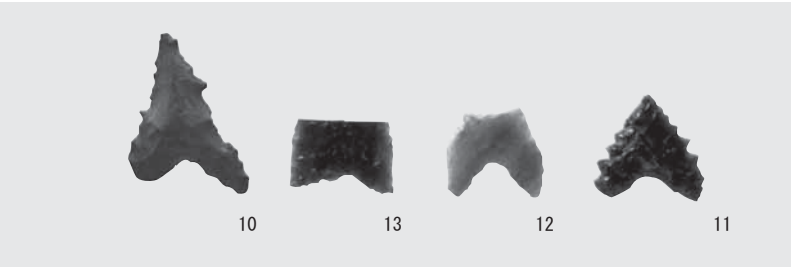
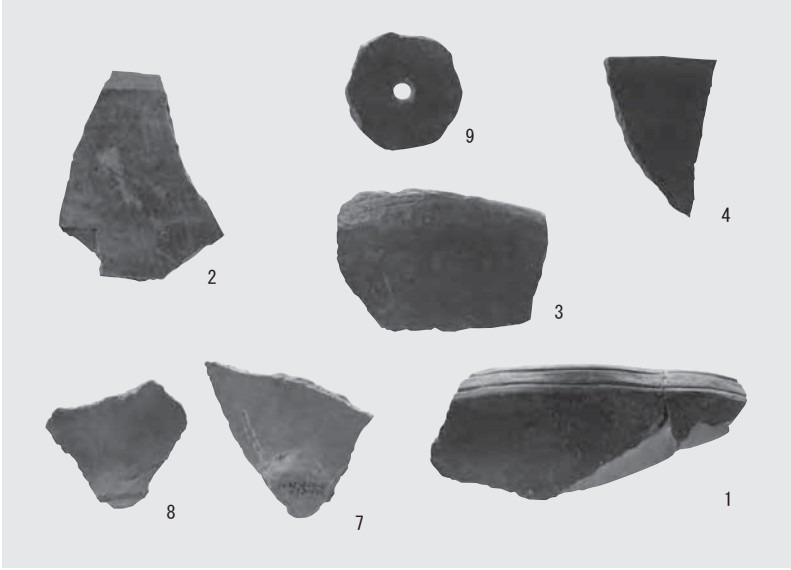
体験学習の様子(西から)



現地説明会の様子(北から)

図版18

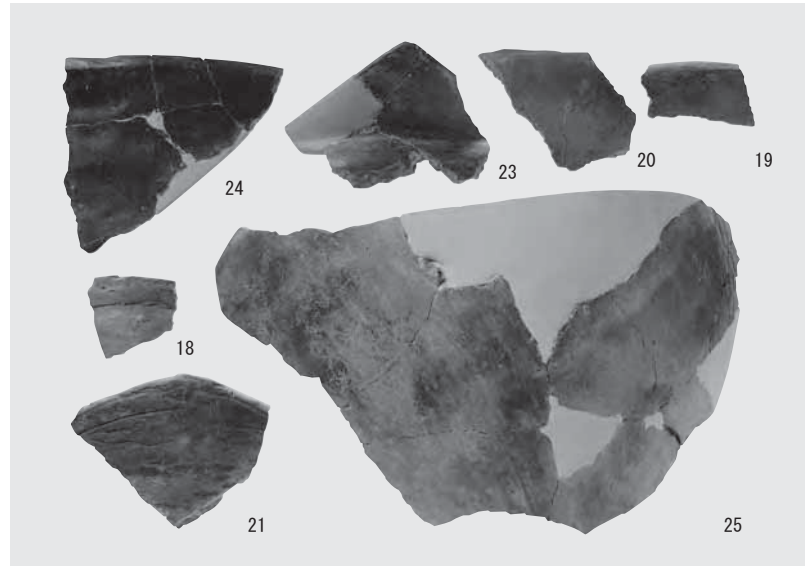
1号竪穴建物(S351)



2号竪穴建物(S319)

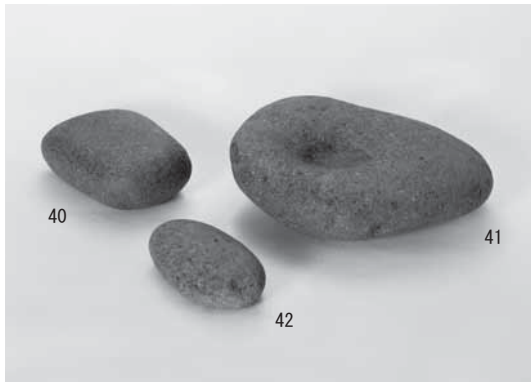
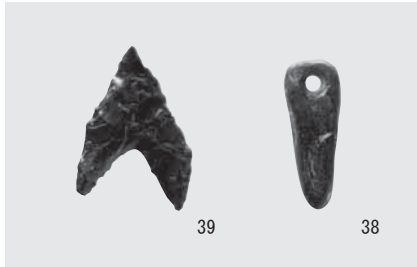
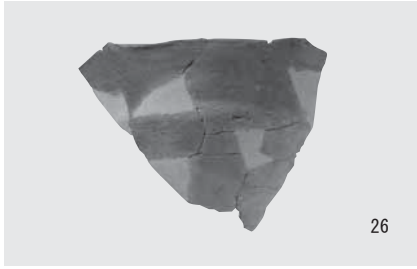


3号竪穴建物(S320)





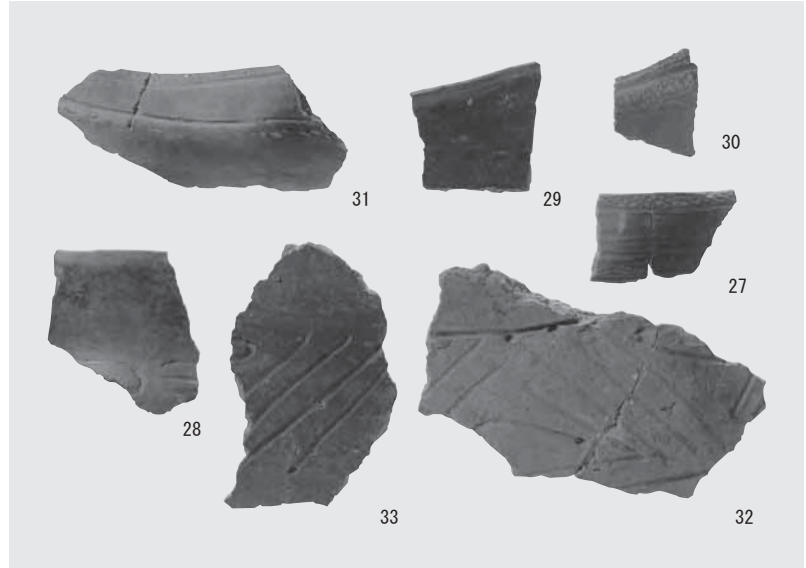
4号竖穴建物 (S379)



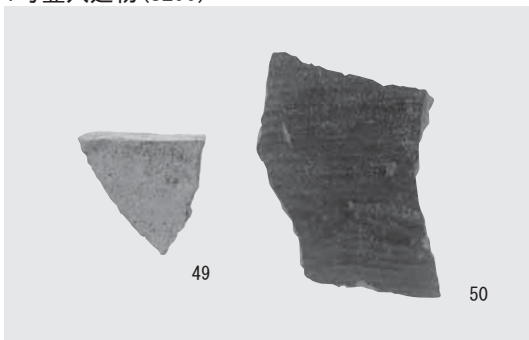
6号竖穴建物 (S340)



5号竖穴建物 (S312)



7号竖穴建物 (S299)



図版20

8号竖穴建物(S97)



51

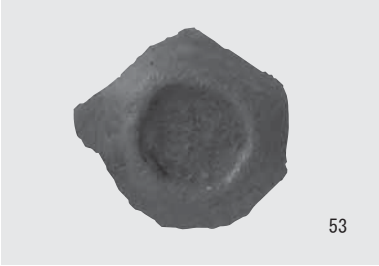


52



(写)

9号竖穴建物(S98)



53

10号竖穴建物(S99)



56

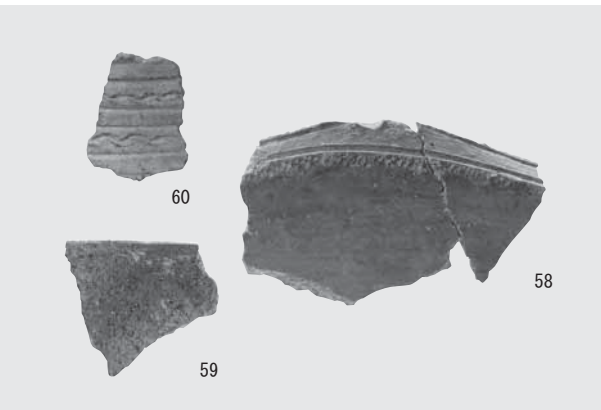
55

54



57

11号竖穴建物(S100)

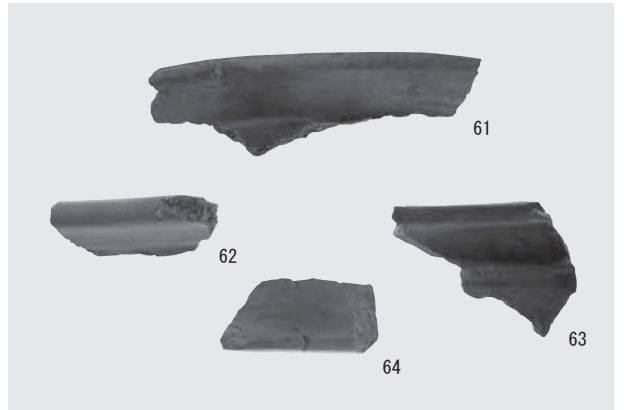


60

58

59

12号竖穴建物(S322)



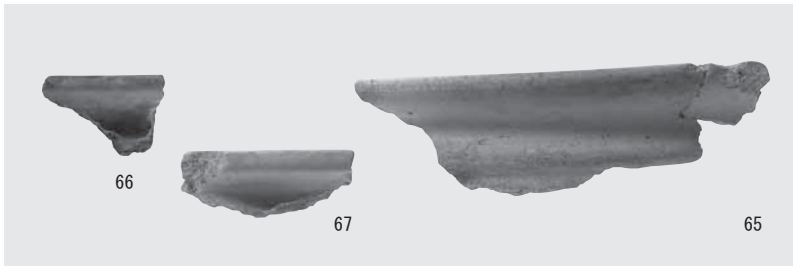
61

62

64

63

13号竖穴建物(S350)



66

67

65



68

14号竖穴建物(S323)



69

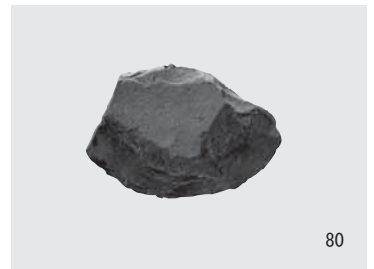
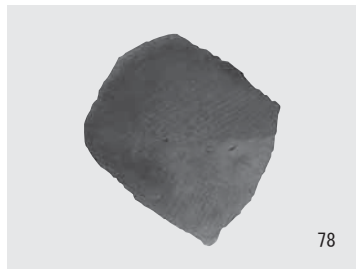
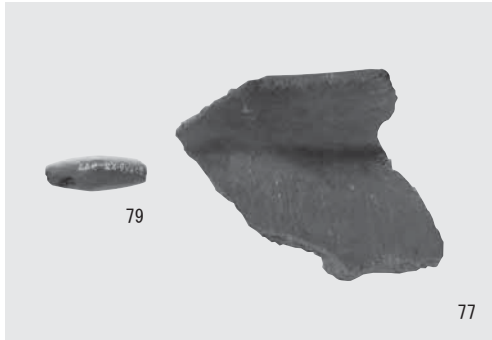


70

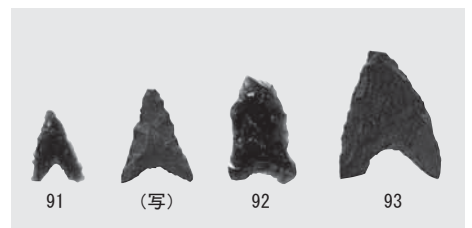
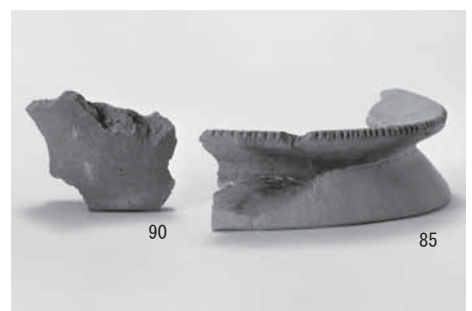
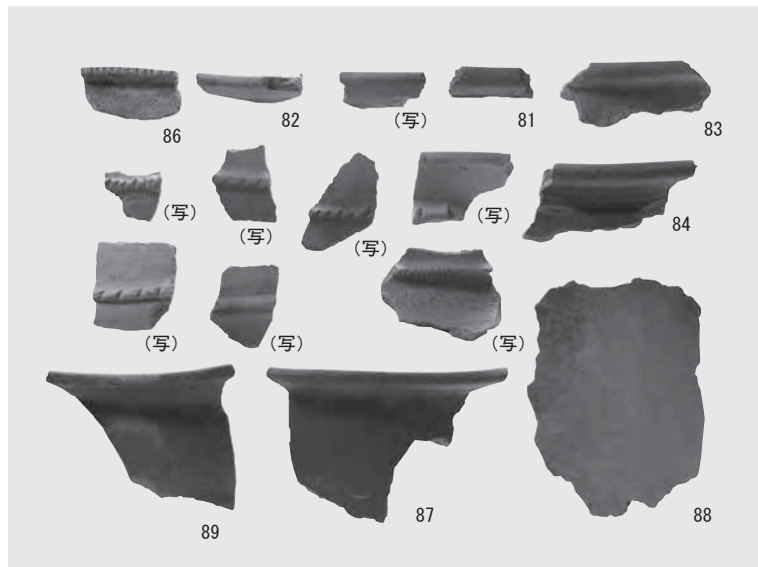
16号竖穴建物 (S376)



17号竖穴建物 (S377)

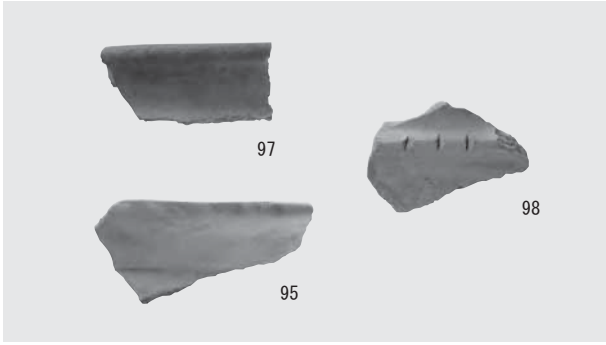


19号竖穴建物 (S318)



図版22

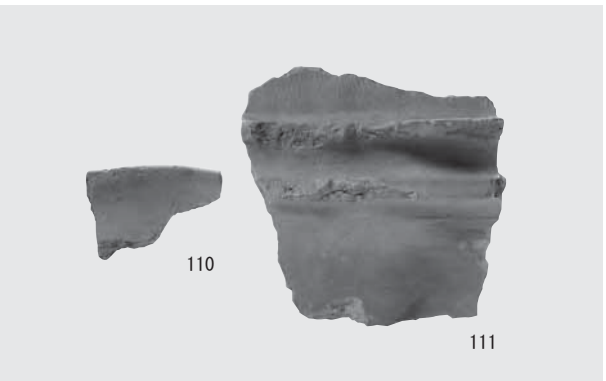
20号竖穴建物(S321)



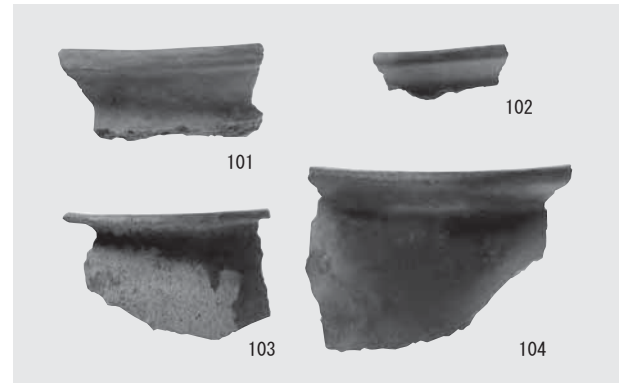
23号竖穴建物(S101)



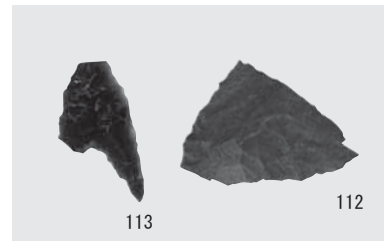
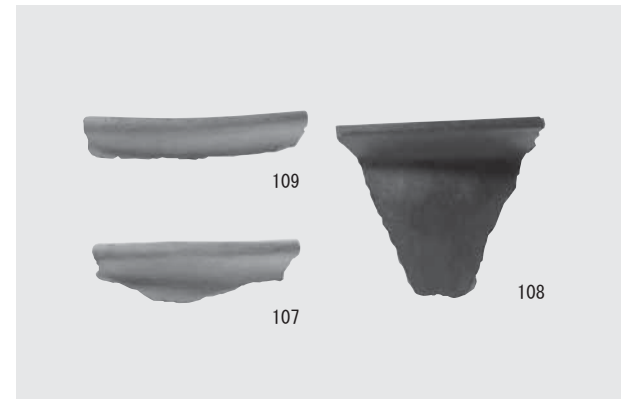
26号竖穴建物(S93)



22号竖穴建物(S92)



25号竖穴建物(S94)



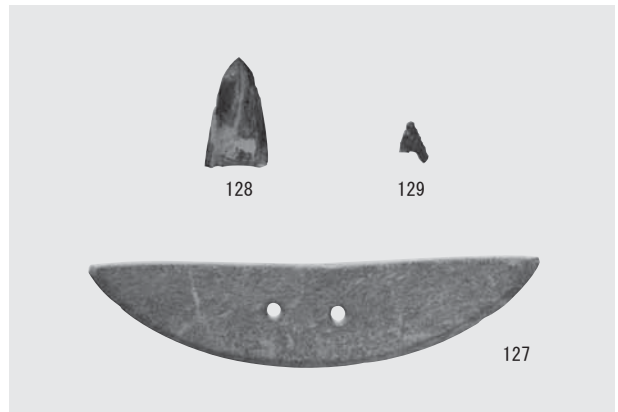
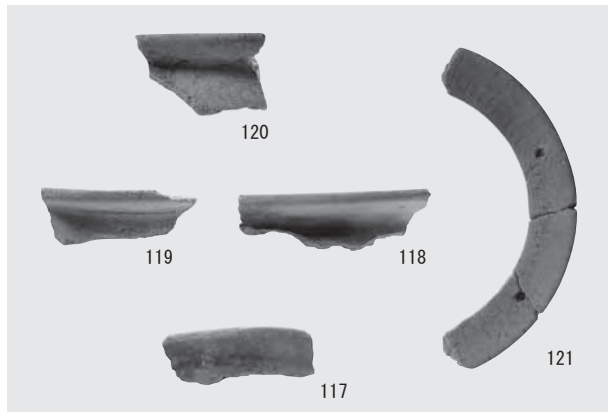
29号竖穴建物 (S303)



34号竖穴建物 (S298)

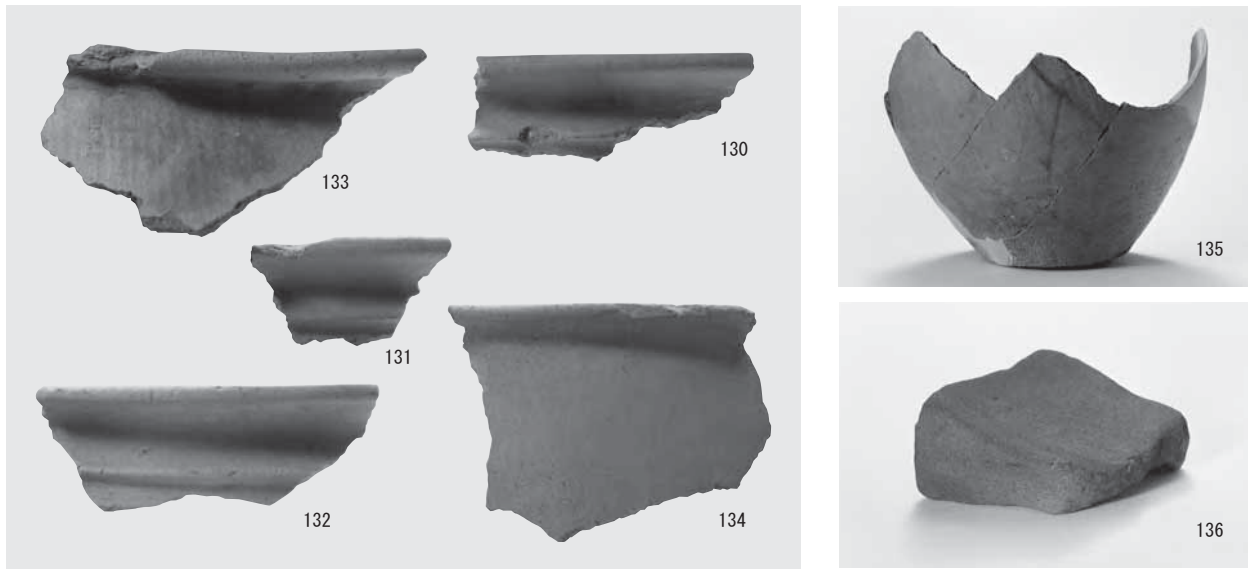


35号竖穴建物 (S297)



図版24

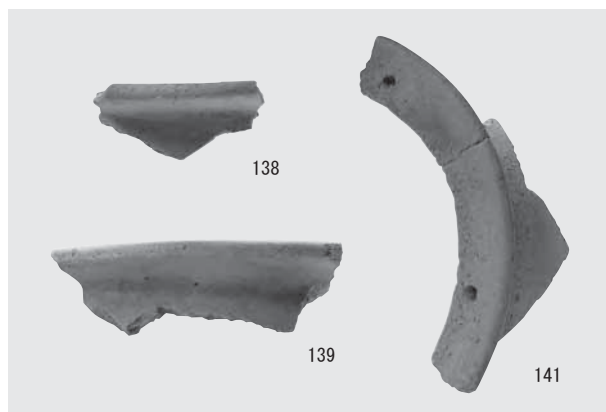
36号竖穴建物 (S105)



37号竖穴建物 (S104)



38号竖穴建物 (S346)



38号竖穴建物 (S346)



148



149

39号竖穴建物 (S306)



150

41号竖穴建物 (S347)



151



152

42号竖穴建物 (S102)



153

44号竖穴建物 (S316)



156

157

155

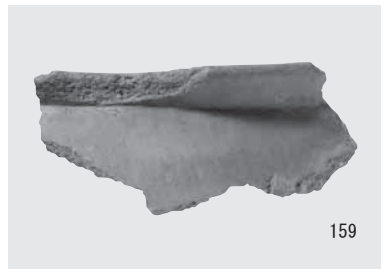


154

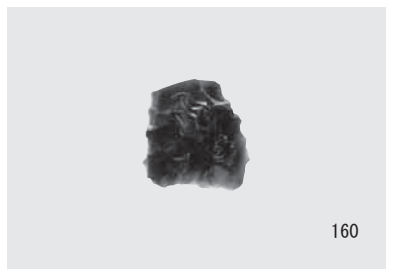
46号竖穴建物 (S146)



158

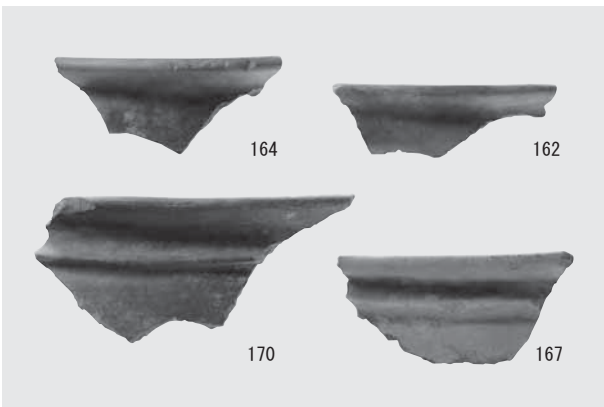


159



160

47号竖穴建物 (S68)

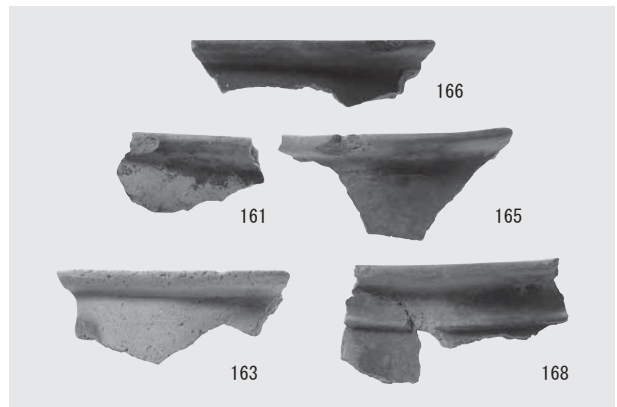


164

162

170

167



166

161

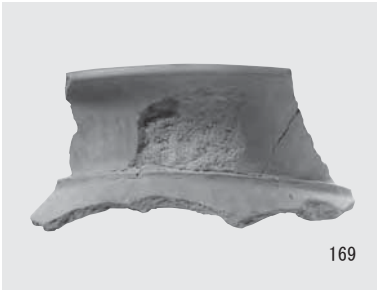
165

163

168

図版26

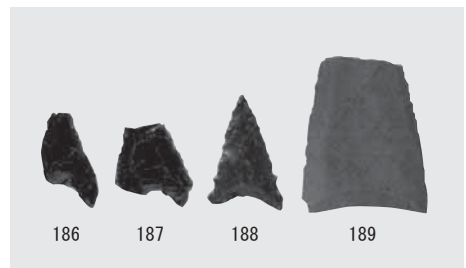
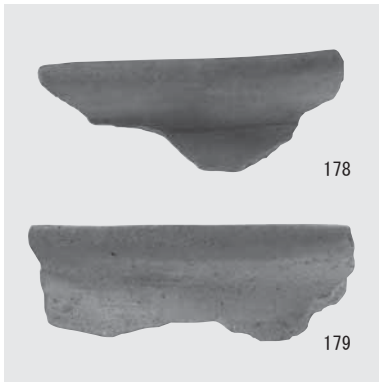
47号竖穴建物(S68)



48号竖穴建物(S315)

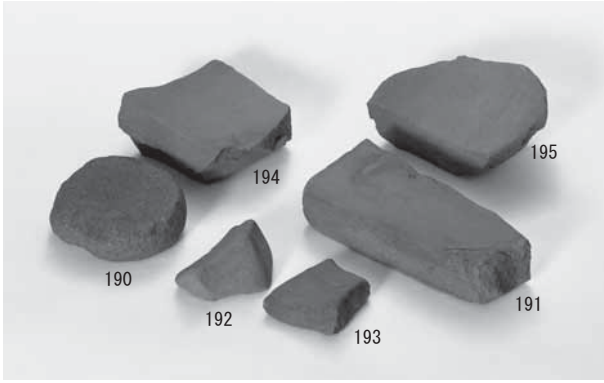


49号竖穴建物(S341)





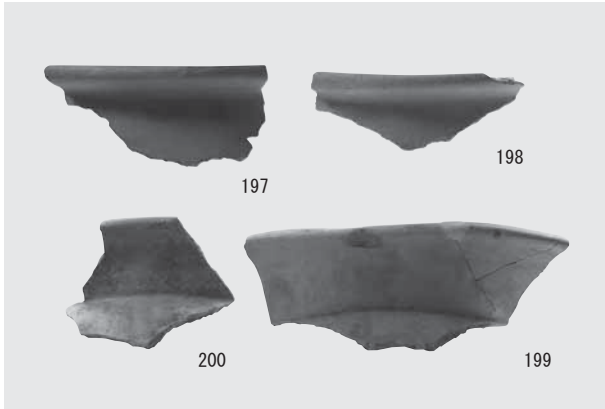
49号竪穴建物(S341)



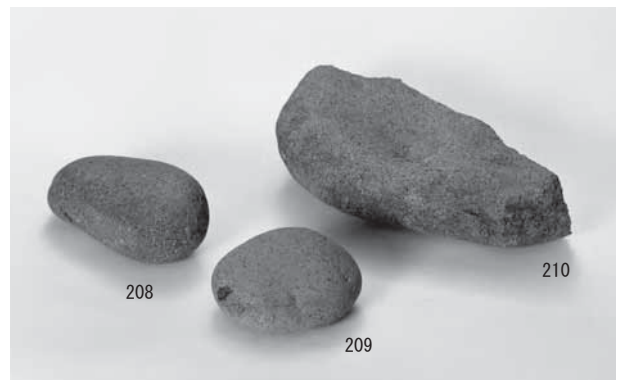
55号竪穴建物(S64)



56号竪穴建物(S63)



57号竪穴建物(S172)



図版28

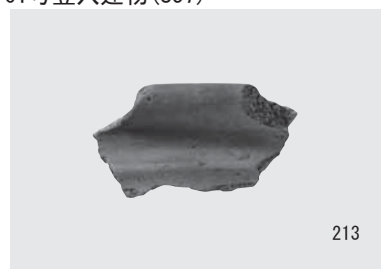
59号竪穴建物(S61)



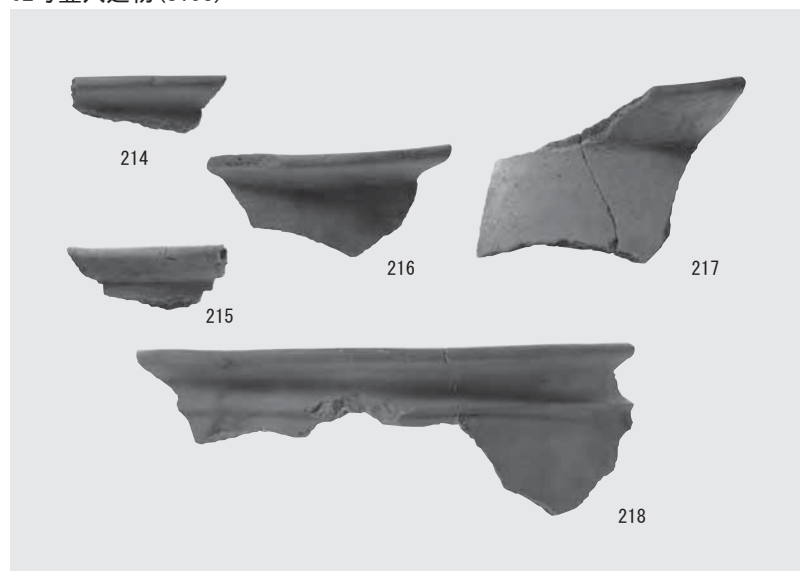
60号竪穴建物(S10)



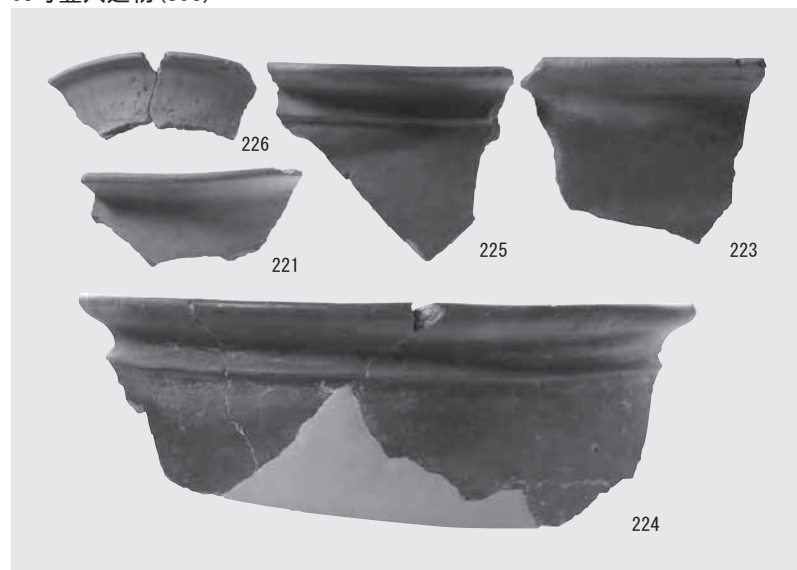
61号竪穴建物(S57)



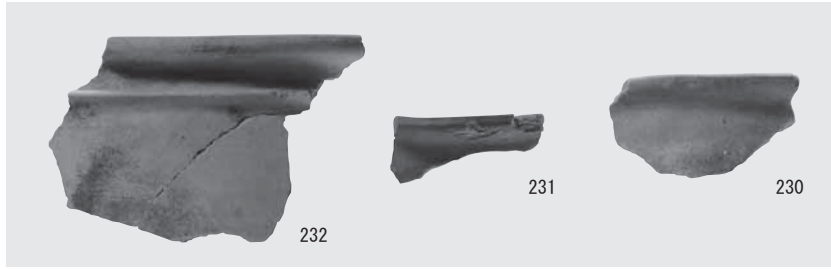
62号竪穴建物(S158)



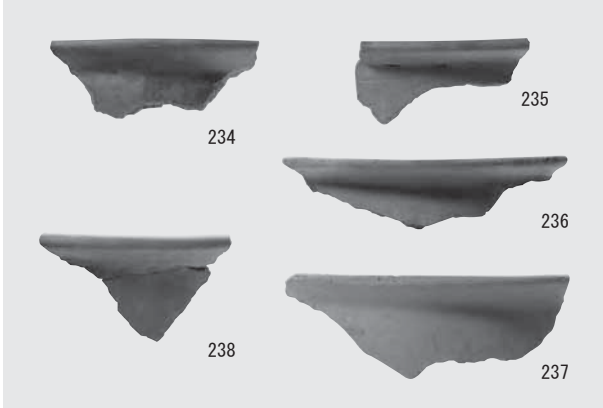
63号竪穴建物(S58)



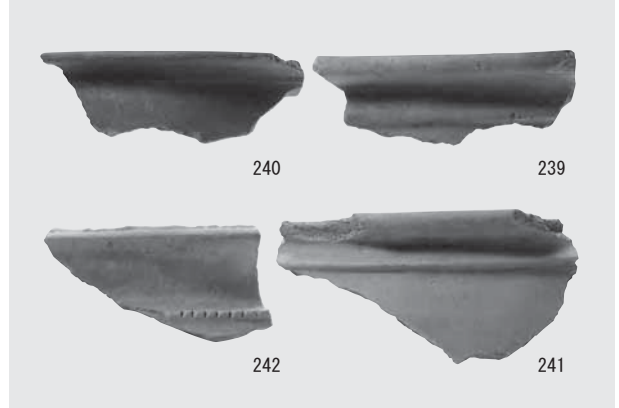
64号竖穴建物 (S183)



65号竖穴建物 (S227)



66号竖穴建物 (S60)



67号竖穴建物 (S01)



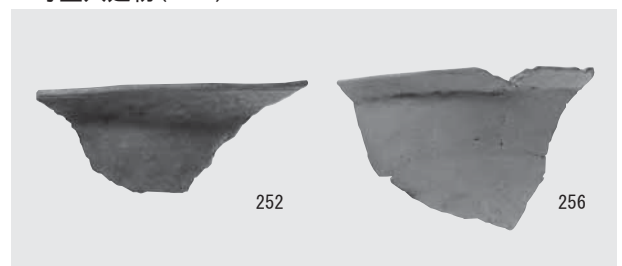
69号竖穴建物 (S54)



73号竖穴建物 (S182)

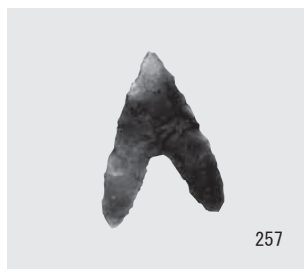
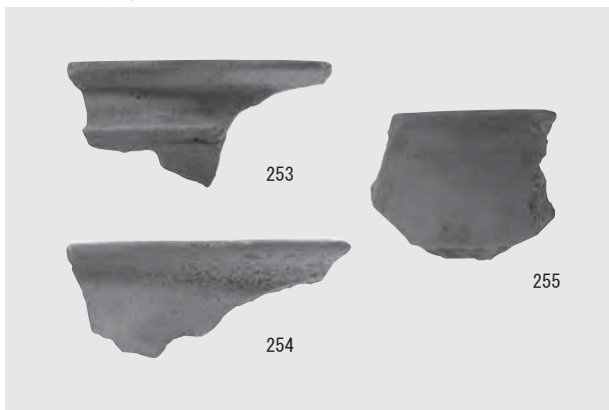


74号竖穴建物 (S309)



図版30

74号竖穴建物 (S309)



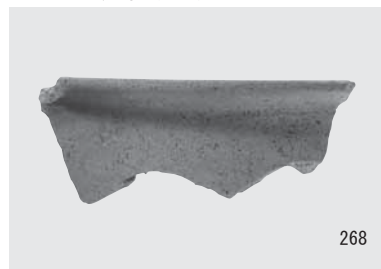
75号竖穴建物 (S04)



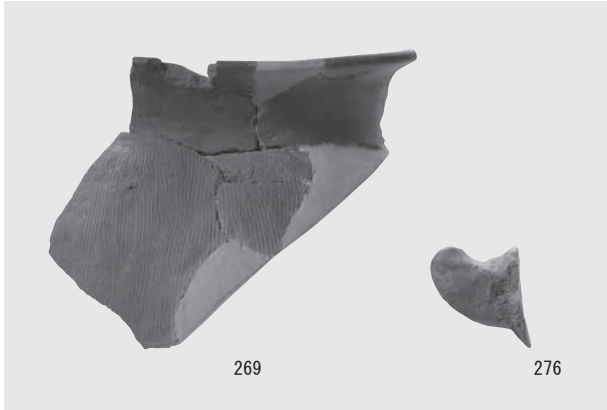
76号竖穴建物 (S87)



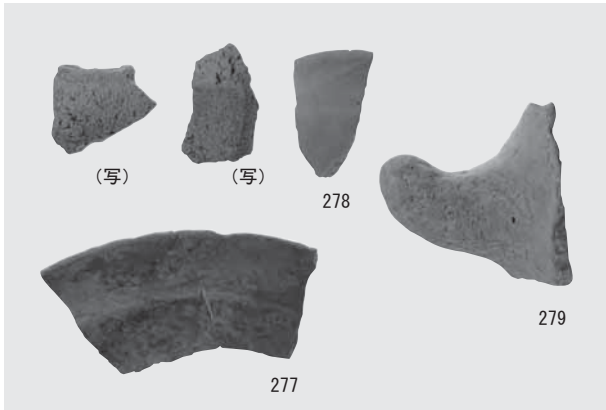
77号竖穴建物 (S88)



78号竖穴建物 (S03)



79号竖穴建物 (S99)



80号竖穴建物 (S156)



81号竖穴建物 (S47)

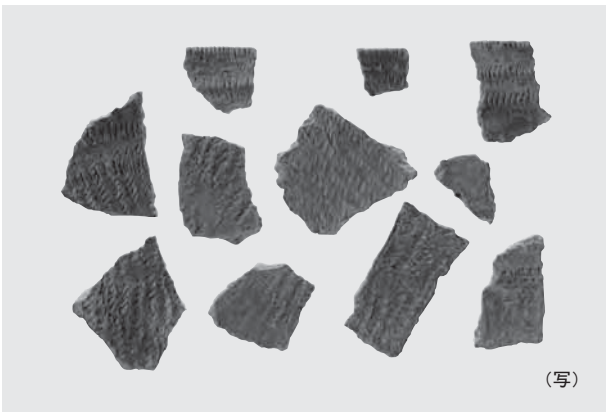
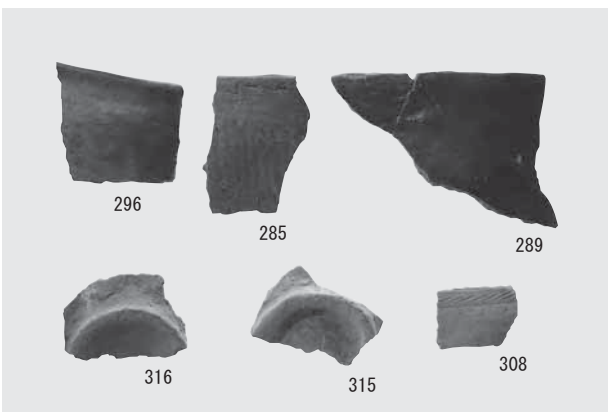
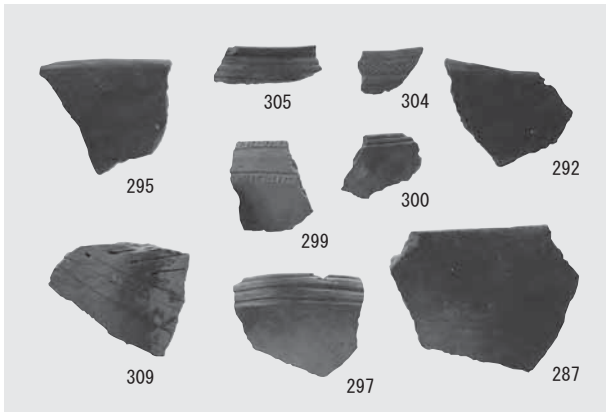
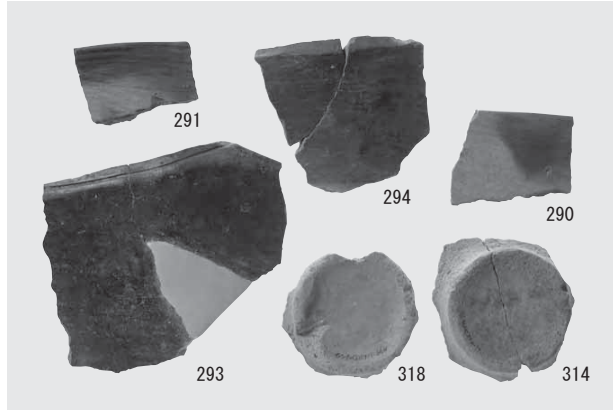
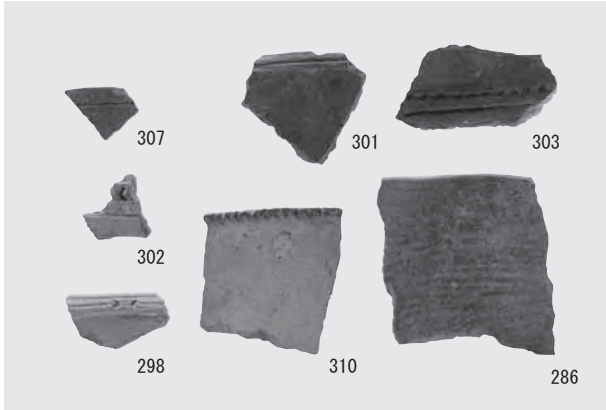


11号土坑 (S43)

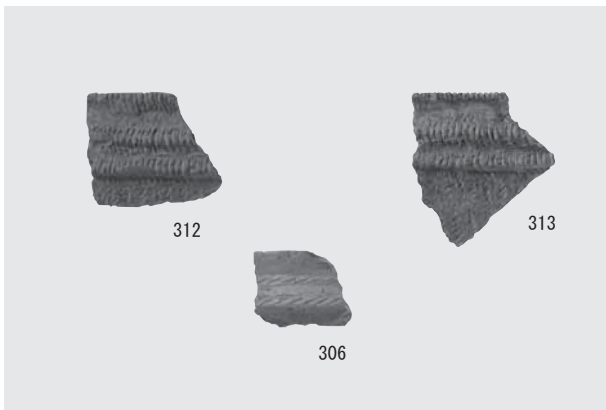
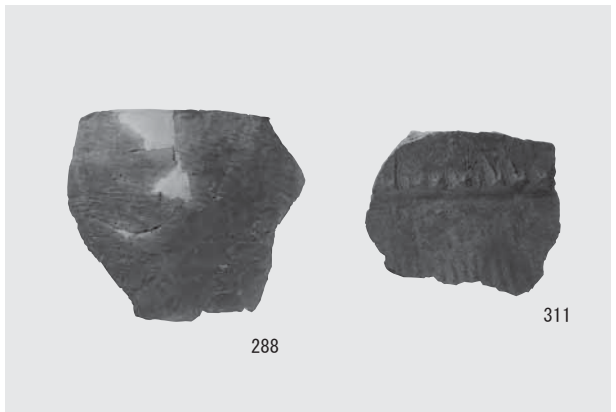


図版32

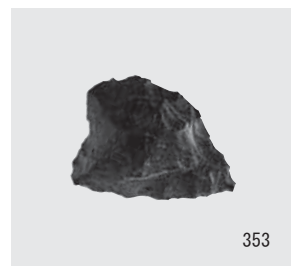
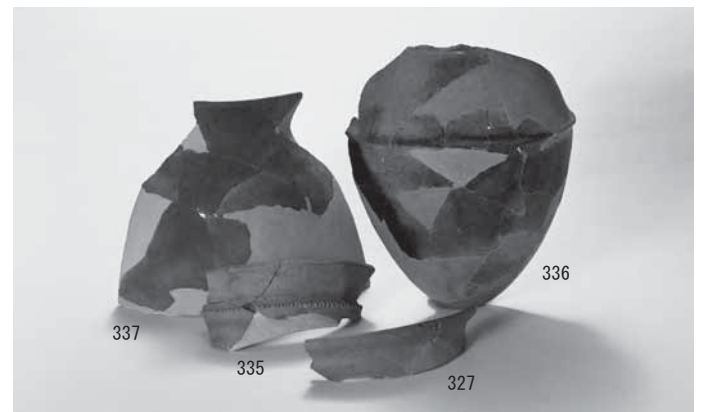
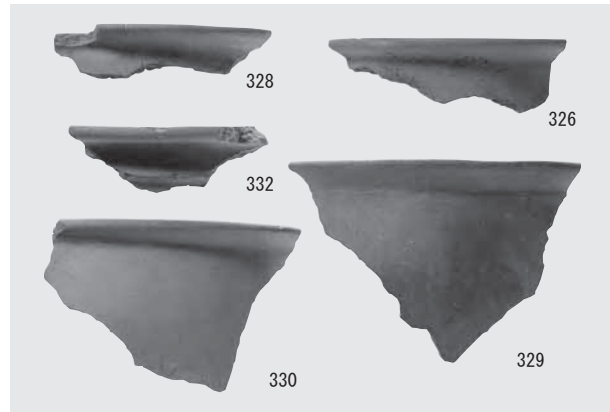
その他の出土遺物(1)



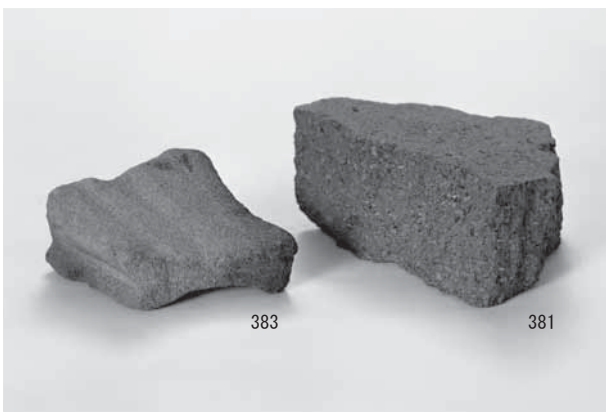
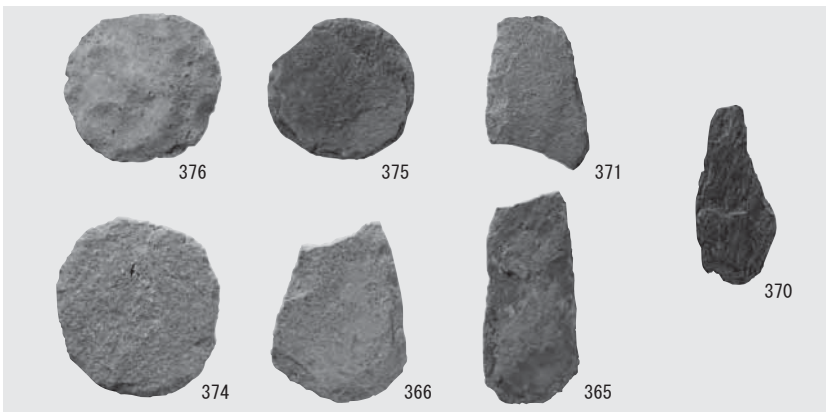
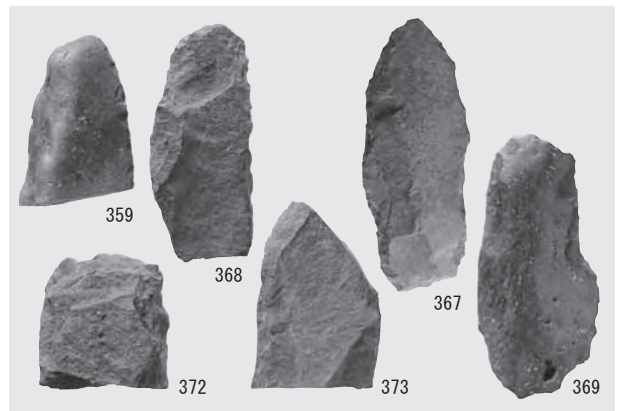
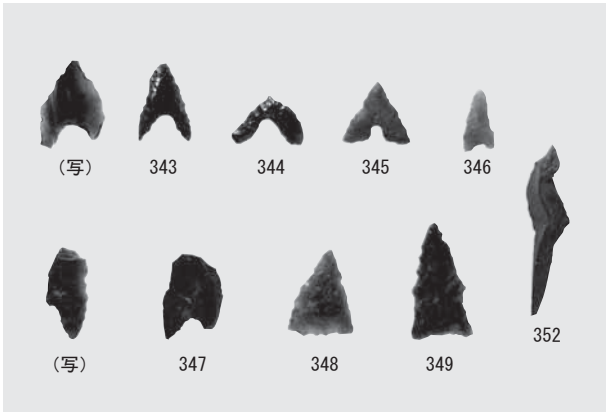
(写)



その他の出土遺物(2)



図版34  
その他の出土遺物(3)







調査区遠景(空撮)



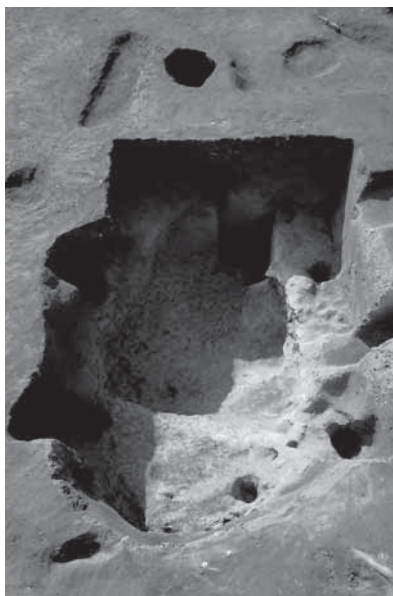
1号甕棺墓(S109)土層断面(北から)



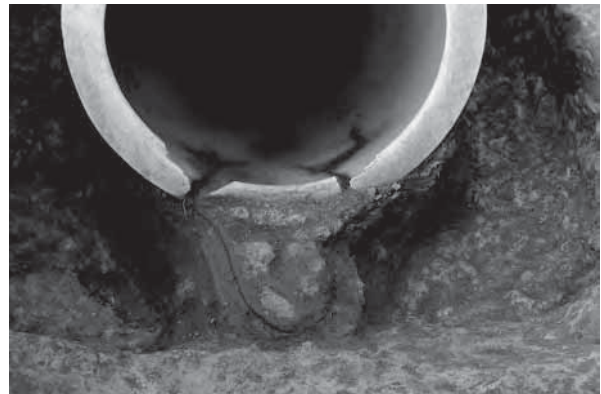
1号甕棺墓(S109)甕棺出土状況(北から)



1号甕棺墓(S109)下甕棺出土状況(北から)



1号甕棺墓(S109)完掘状況(西から)



1号甕棺目張り粘土確認状況(東から)

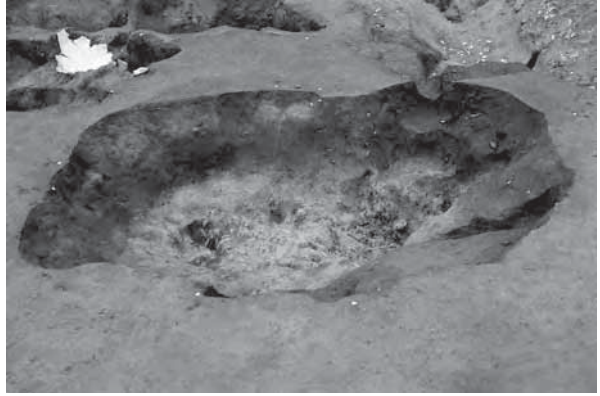


2号甕棺墓(S175)甕棺出土状況(南から)

図版2



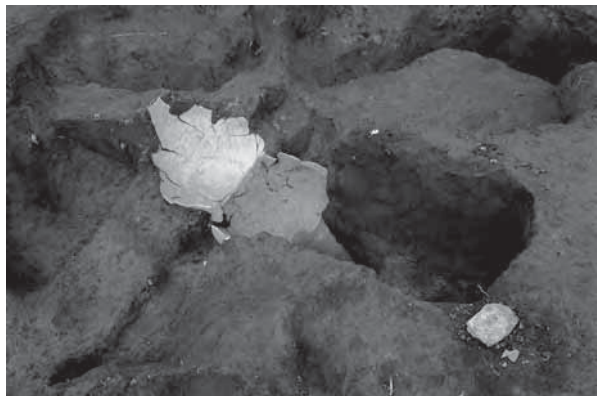
2号甕棺出土状況(南から)



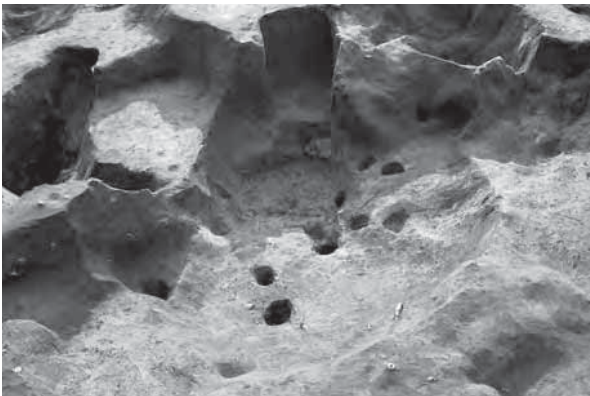
2号甕棺墓(S175)完掘状況(南から)



3号甕棺墓(S185)甕棺出土状況(南から)



3号甕棺墓(S185)土層断面(南から)



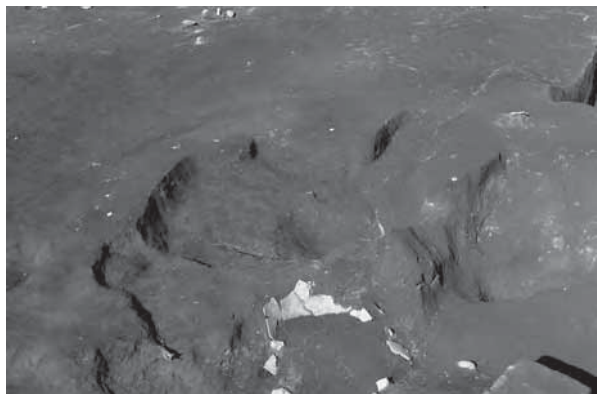
3号甕棺墓(S185)完掘状況(西から)



4号甕棺墓(S108)甕棺検出状況(北から)



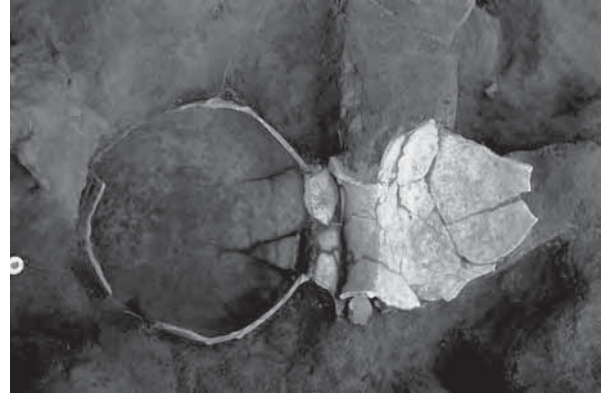
4号甕棺墓(S108)甕棺出土状況(南から)



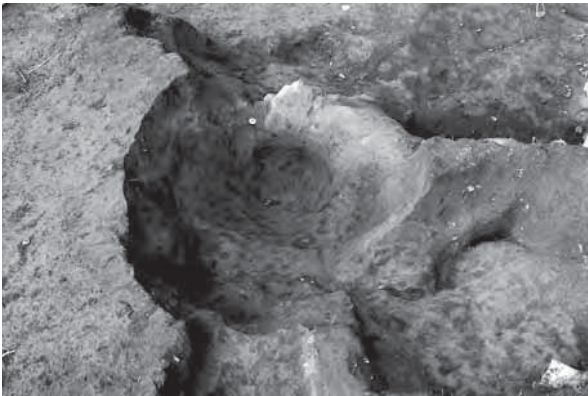
4号甕棺墓(S108)完掘状況(南から)



5号甕棺墓(S174)甕棺出土状況(南から)



5号甕棺半裁状況(南から)



5号甕棺墓(S174)完掘状況(東から)



1号標石をもつ甕棺墓(S104)検出状況(北から)



1号標石甕棺墓(S104)半裁状況(北から)



2区 2号標石をもつ甕棺墓(S203)検出状況(西から)



2区 2号標石をもつ甕棺検出状況(西南から)



1号集石(S110)検出状況(南から)

図版4



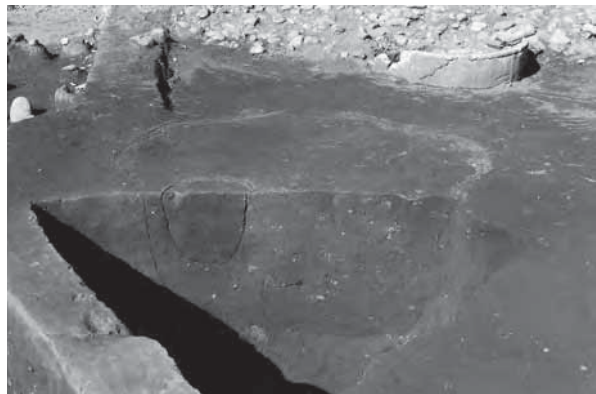
2号集石(S107)検出状況(南から)



3号集石(S106)検出状況(東から)



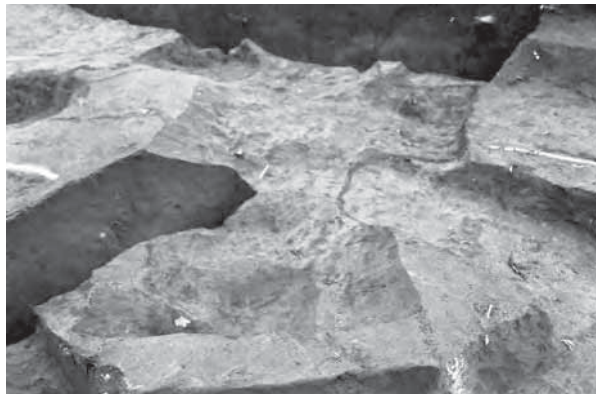
1号木棺墓(S105)土層断面(東から)



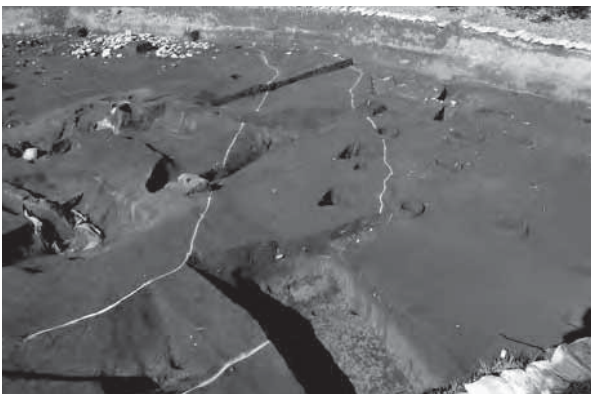
2号木棺墓(S180)土層断面(東から)



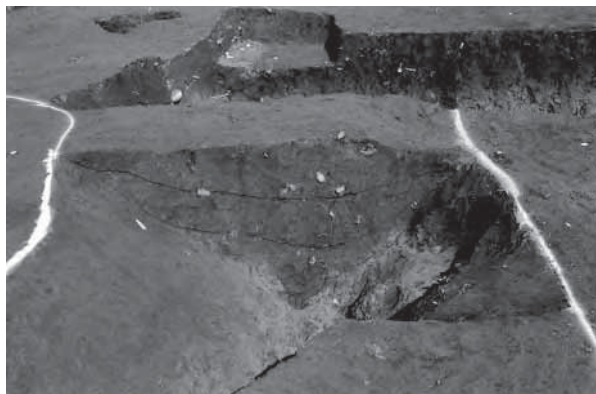
2号・3号木棺墓(S180・177)完掘状況(北東から)



1号道路状遺構(S151)検出状況(北から)



1号溝状遺構(S183)検出状況(東から)



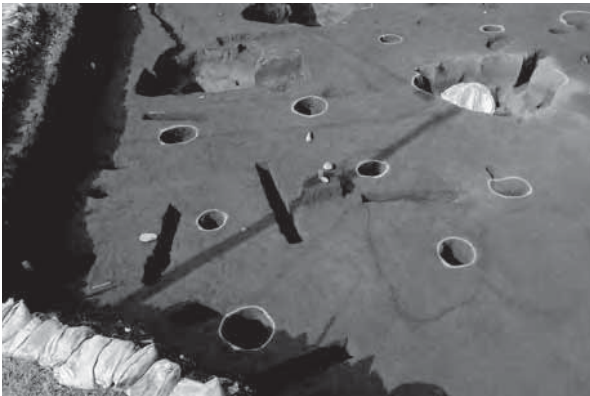
1号溝状遺構(S183)土層断面B-B'(南から)



1号溝状遺構(S183)土層断面A-A'(南から)



不明遺構(S1100)完掘状況(西から)



1号掘立柱建物(S181)完掘状況(東から)



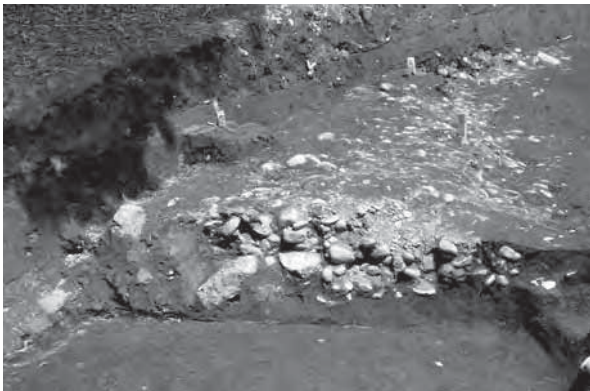
2号掘立柱建物(S182)完掘状況(西から)



1号柱穴群(S184)検出状況(東から)



1号柱穴群(S184)完掘状況(南から)



1号土壘(S101)検出状況(東から)



2区 1号土壘(S201)検出状況(東から)

図版6



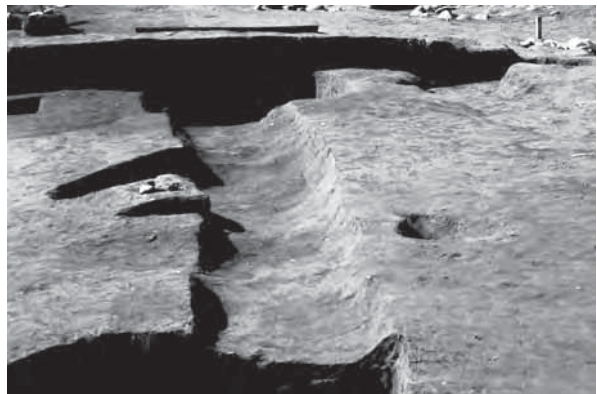
1号土坑(S176)検出状況(南から)



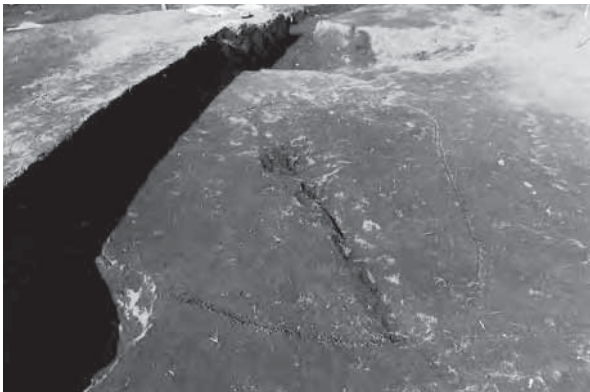
1号土坑(S176)完掘状況(南から)



2号溝状遺構(S179)土層断面(北から)



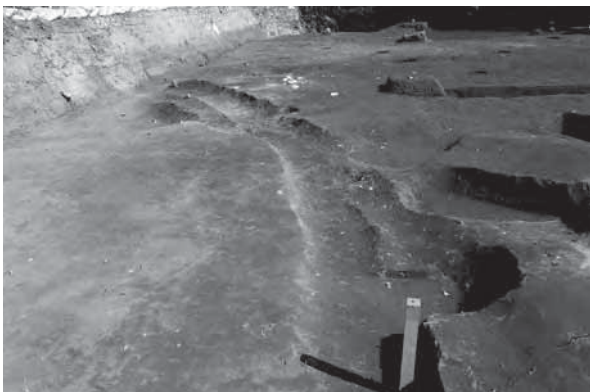
2号溝状遺構(S179)完掘状況(南から)



2号土坑(S178)検出状況(南から)



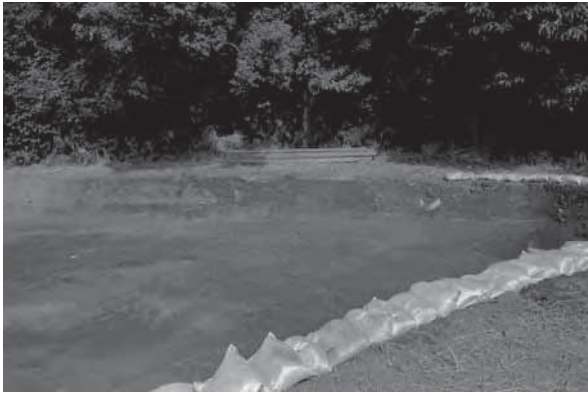
3号道路状遺構(S102)完掘状況(東から)



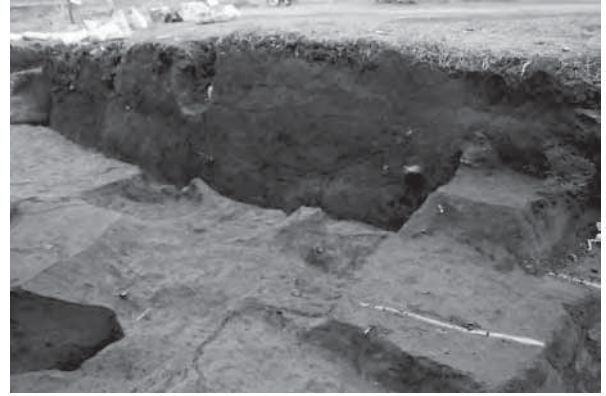
3号道路状遺構(S102)完掘状況(西から)



1区北壁土層断面A側(東から)



1区北壁土層断面B側(南東から)



1区南壁土層断面C-D(北から)



1区南壁土層断面C-D(北東から)



甕棺搬出(日本通運)



地中レーダー探査の様子①



地中レーダー探査の様子②



現地説明会の様子①

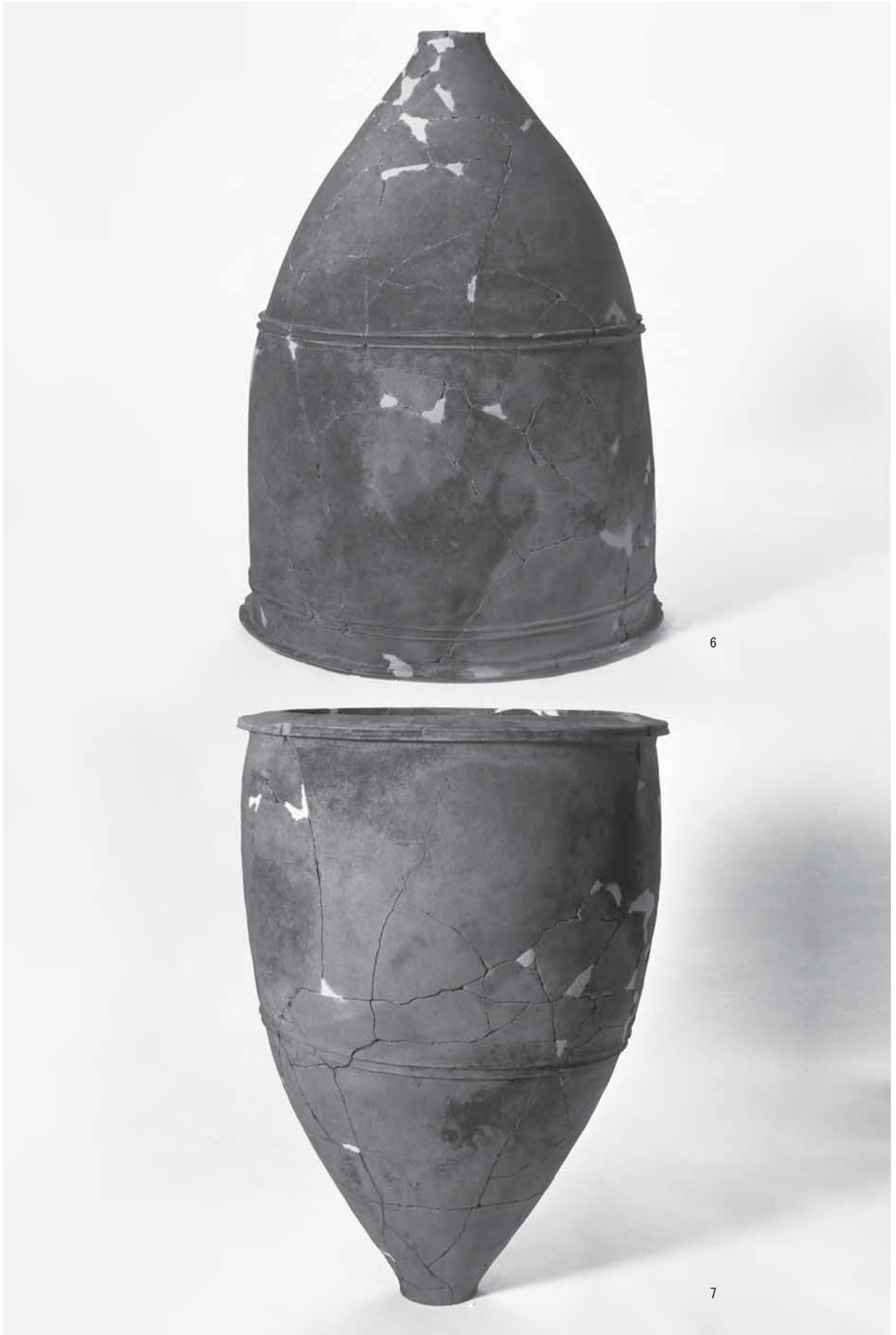


現地説明会の様子②



1号甕棺墓甕棺





2号甕棺墓甕棺

図版10



3号甕棺墓甕棺



13

4号甕棺墓甕棺

图版12



5号甕棺墓甕棺

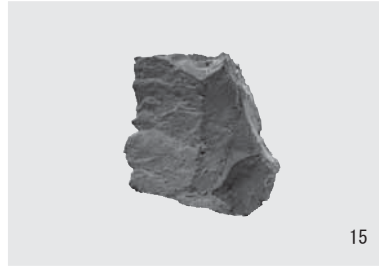
1号甕棺墓



2号甕棺墓



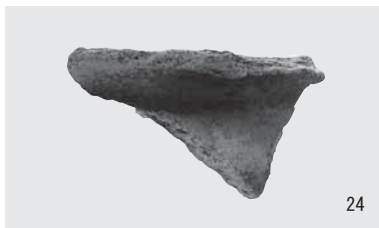
4号甕棺墓



1号標石をもつ甕棺墓



2号標石をもつ甕棺墓



図版14

2号集石



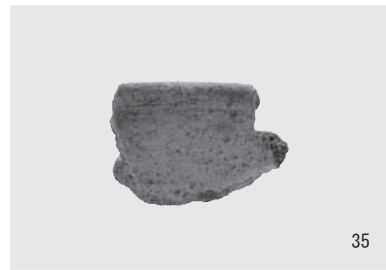
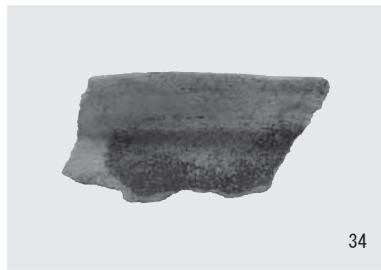
1号木棺墓



2号木棺墓

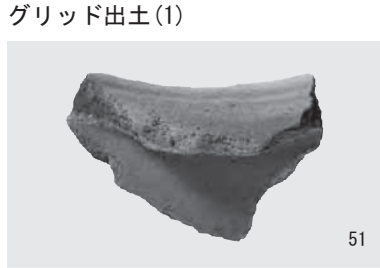
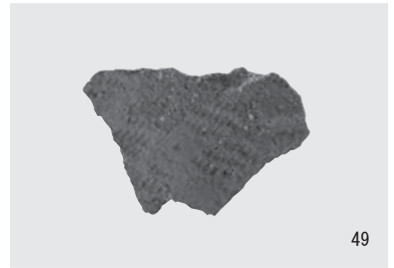


3号木棺墓



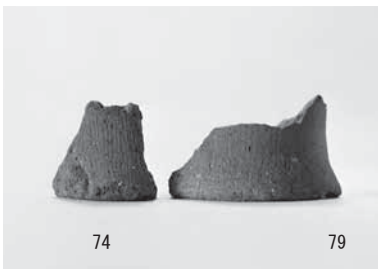
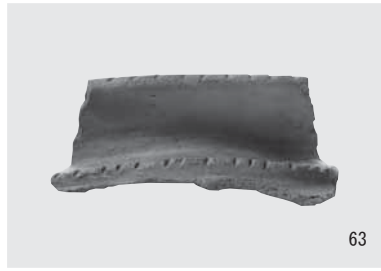
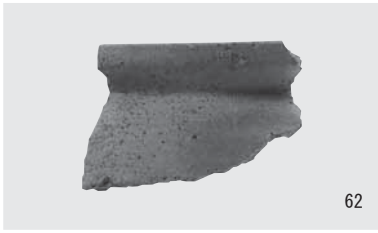
1号溝状遺構





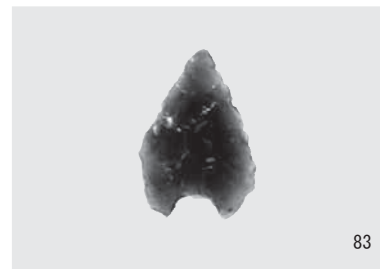
図版16

グリッド出土(2)

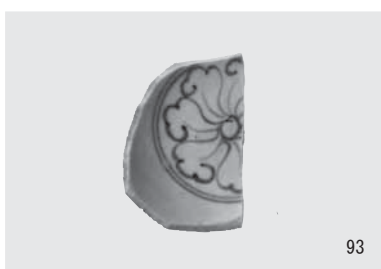
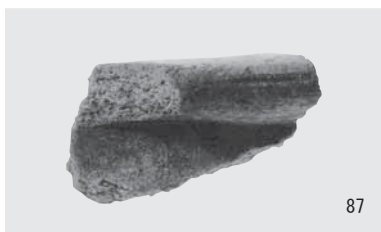




グリッド出土(3)



弥生時代以外の遺構

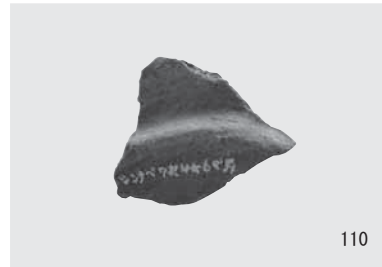
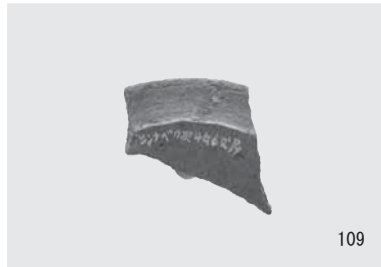
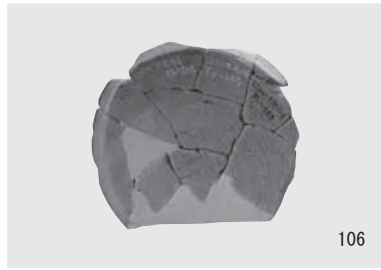
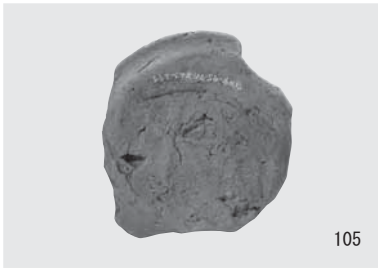


グリッド出土(4)



図版18

グリッド出土(5)

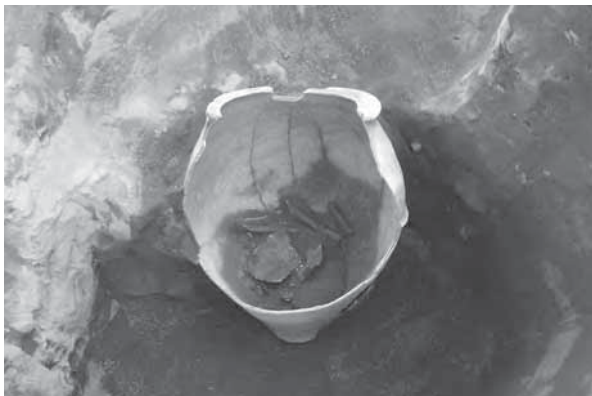




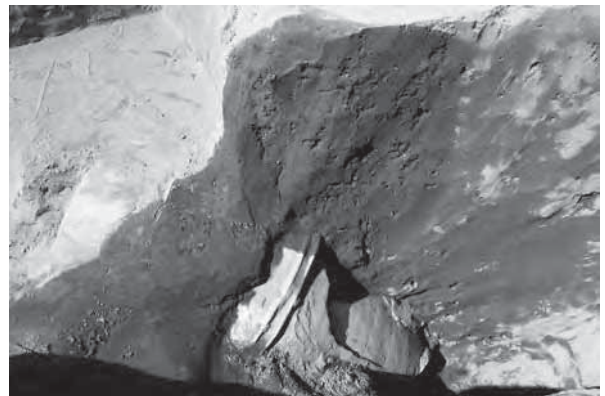
1区 調査区全景(南西から)



1号甕棺墓(S15)出土状況(北東から)



1号甕棺内人骨出土状況(北西から)



2号甕棺墓(S16)検出状況(南から)



2号甕棺出土状況(南から)



1・2号甕棺目張り状況(東から)

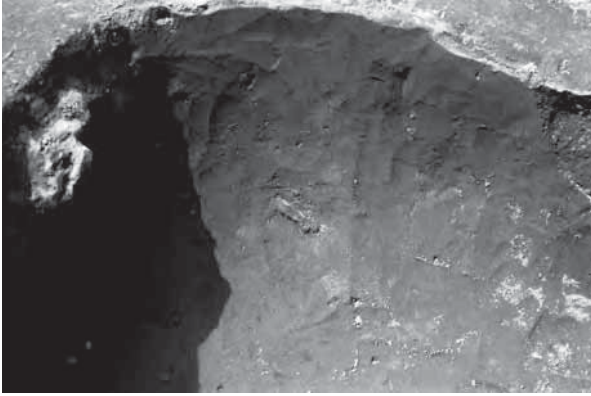


2号甕棺内人骨出土状況(南から)



1・2号甕棺墓(S15・16)完掘状況(北東から)

図版2



1区 2号土壙墓(S6)骨出土状況(南東から)



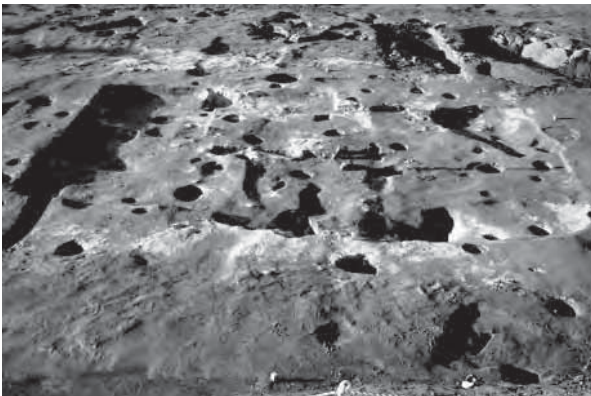
1・2号土壙墓(S4・6)、1・2号甕棺墓完掘状況(東から)



1号竪穴建物(S14)検出状況(南東から)



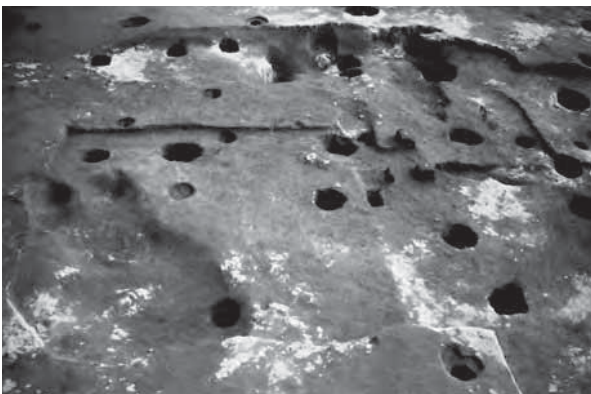
1号竪穴建物(S14)完掘状況(南東から)



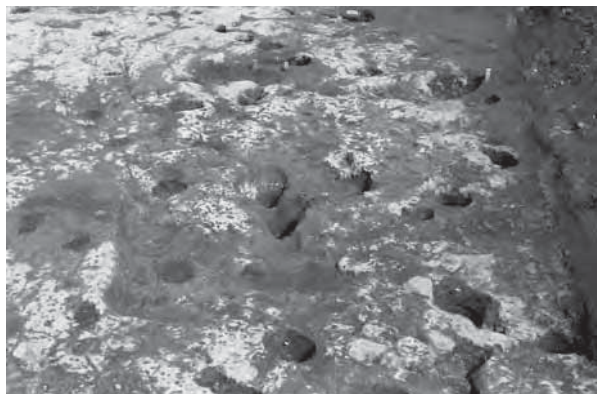
2・3号竪穴建物(S22・23)完掘状況(南から)



3号竪穴建物(S23)土層断面(南東から)



3号竪穴建物(S23)完掘状況(北西から)



4号竪穴建物(S20)完掘状況(西から)



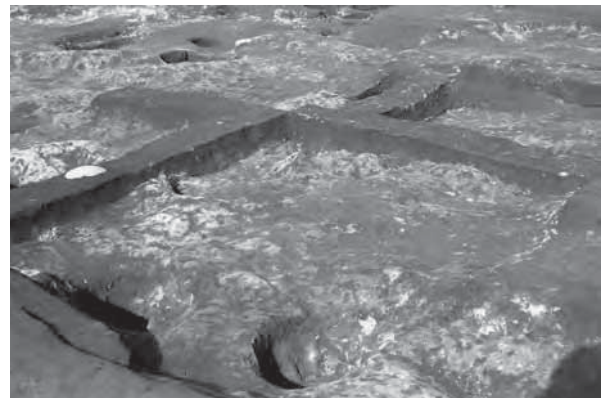
1区 5号竪穴建物(S24)完掘状況(南東から)



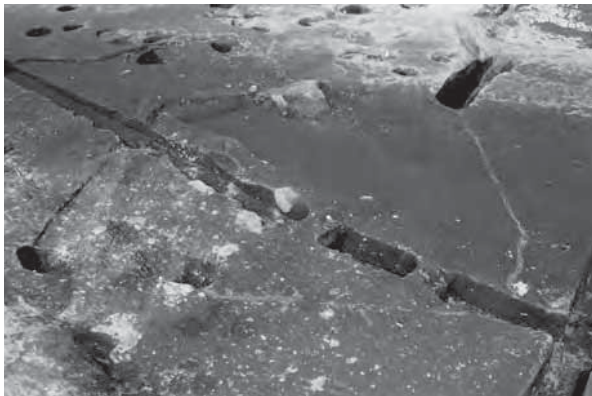
6号竪穴建物(S25)検出状況(西から)



6号竪穴建物(S25)完掘状況(南から)



7号竪穴建物(S28)土層断面(東から)



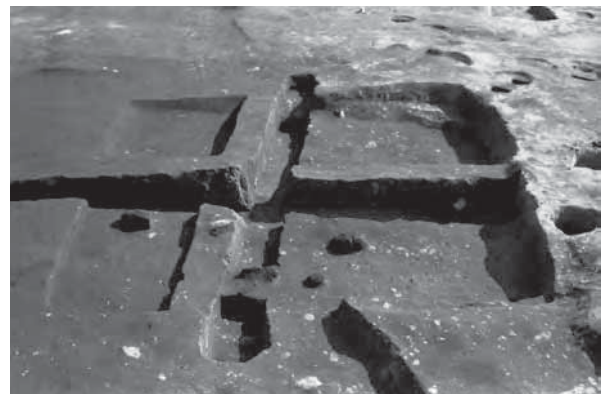
8号竪穴建物(S8)カマド検出状況(南東から)



8号竪穴建物(S8)完掘状況(南から)



9号竪穴建物(S9)完掘状況(西から)



10号竪穴建物(S10)検出状況(西から)

図版4



1区 10号竪穴建物(S10)完掘状況(南西から)



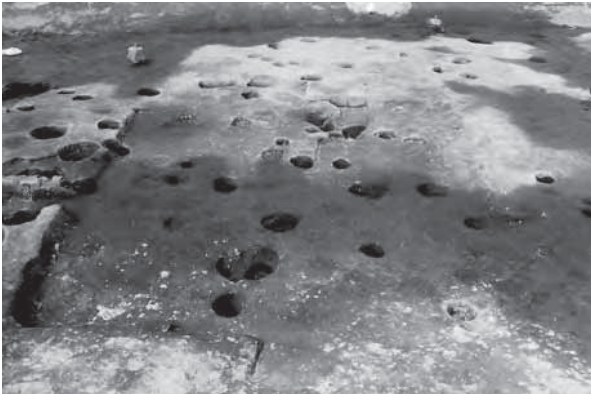
11号竪穴建物(S13)検出状況(南から)



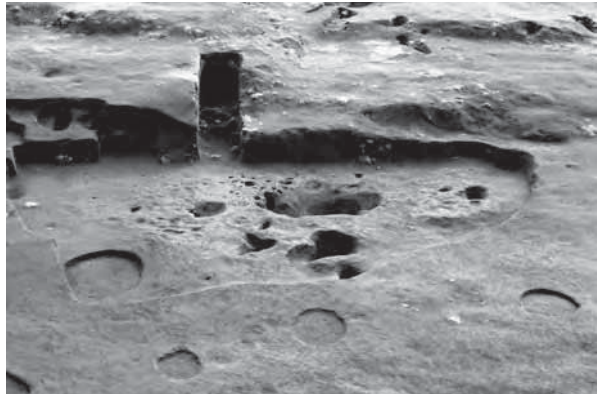
11号竪穴建物(S13)遺物出土状況(北から)



11号竪穴建物(S13)カマド検出状況(南から)



11号竪穴建物(S13)完掘状況(南から)



12号竪穴建物(S31)検出状況(北西から)



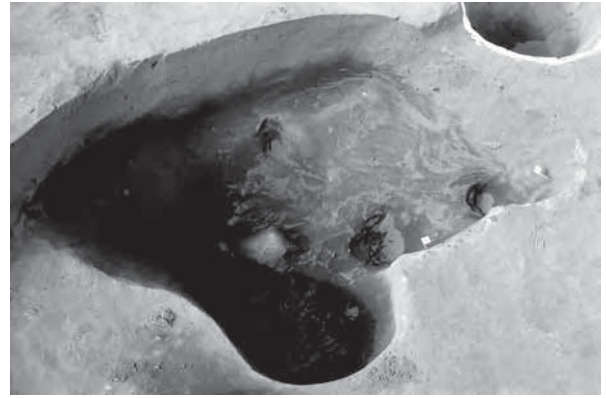
14号竪穴建物(S12)検出状況(南から)



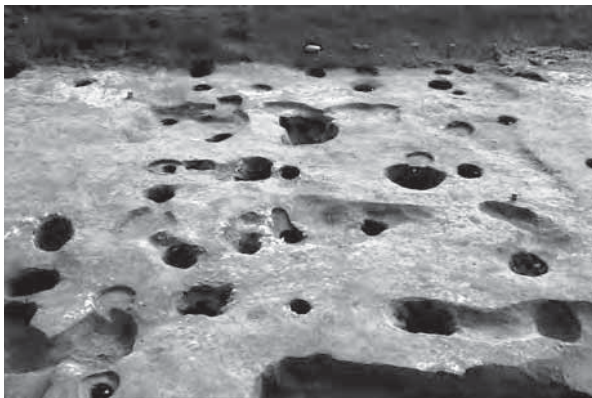
14号竪穴建物(S12)完掘状況(南から)



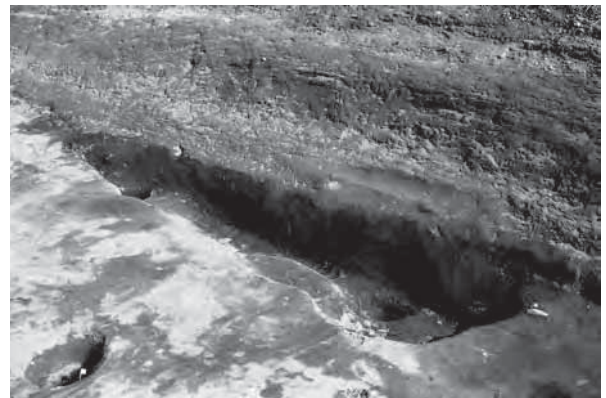
1区 不明遺構(S17)検出状況(北西から)



不明遺構(S17)完掘状況(南から)



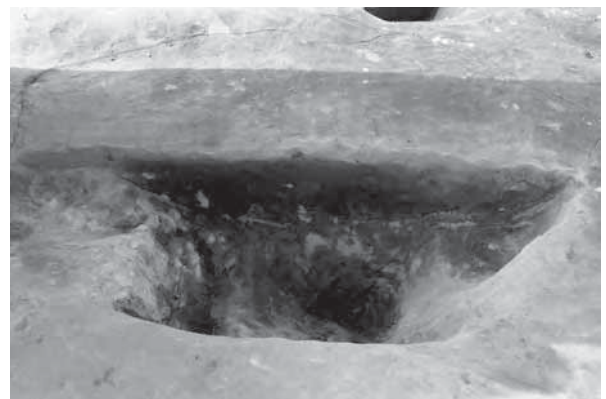
15号竪穴建物(S34)検出状況(北西から)



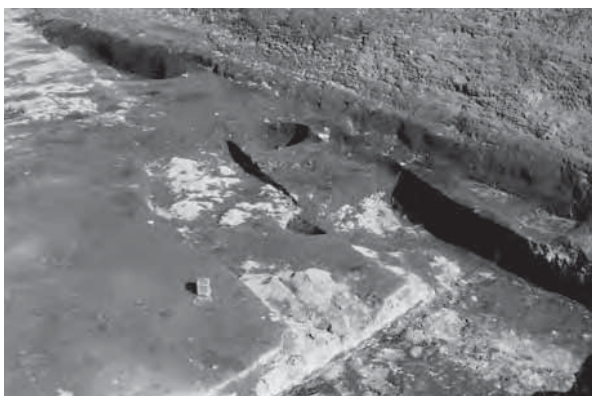
16号竪穴建物(S27)土層断面(西から)



2号柵列(S21)完掘状況(南から)



1号土坑(S18)土層断面(東から)



2号土坑(S26)完掘状況(西から)

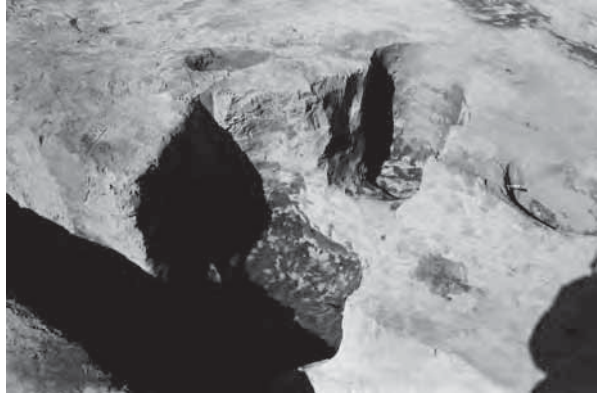


3号土坑(S19)土層断面(西から)

図版6



1区 4号土坑(S11)完掘状況(西から)



5号土坑(S29)完掘状況(南東から)



完掘状況①(北西から)



完掘状況②(北西から)



完掘状況③(東から)



完掘状況④(南から)



完掘状況⑤(東から)



完掘状況⑥(北西から)





2区 調査区全景(北東から)



3号甕棺墓(S13)出土状況(北から)



3号甕棺下甕検出状況①(北から)



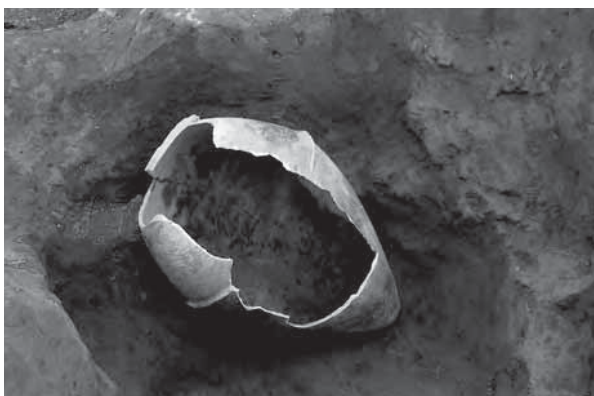
3号甕棺下甕検出状況②(北から)



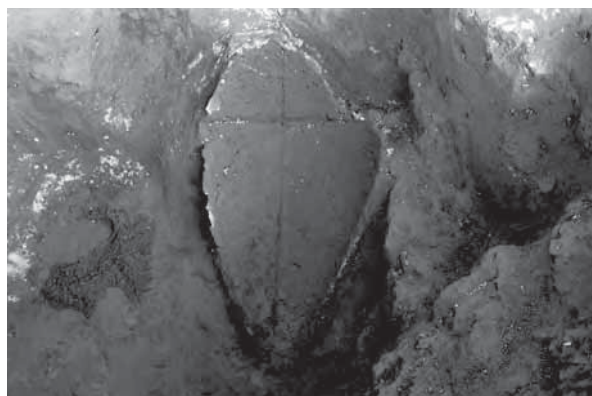
3号甕棺下甕検出状況③(東から)



3号甕棺下甕検出状況④(西から)



3号甕棺下甕断ち割り状況(北から)



3号甕棺完掘状況(西から)

図版8



2区 17号竪穴建物(S2)土層断面(東から)



17号竪穴建物(S2)完掘状況(西から)



18号竪穴建物(S1)土層断面(南東から)



18号竪穴建物(S1)検出状況(南から)



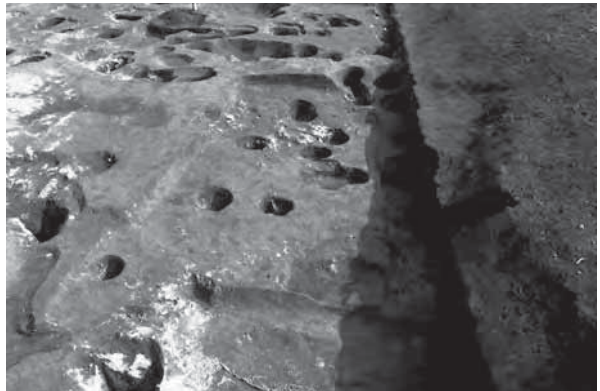
19号竪穴建物(S28)検出状況(北西から)



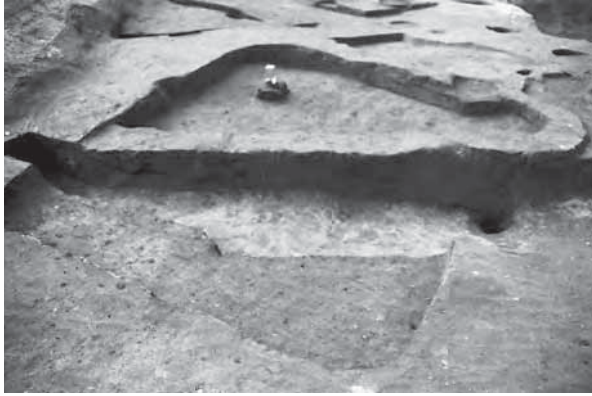
19号竪穴建物(S28)完掘状況(西から)



20号竪穴建物(S29)土層断面(西から)



20号竪穴建物(S29)完掘状況(西から)



2区 21号竪穴建物(S5)土層断面(東から)



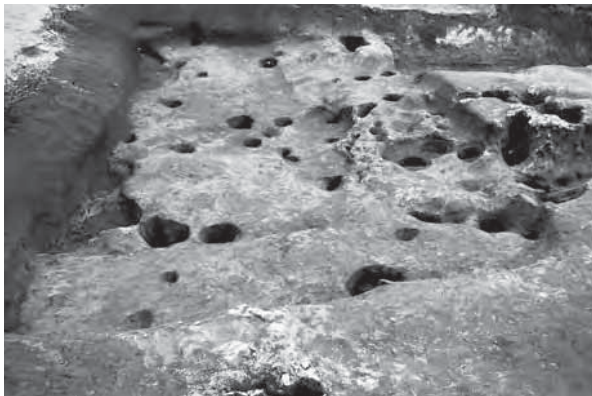
21号竪穴建物(S5)完掘状況(南から)



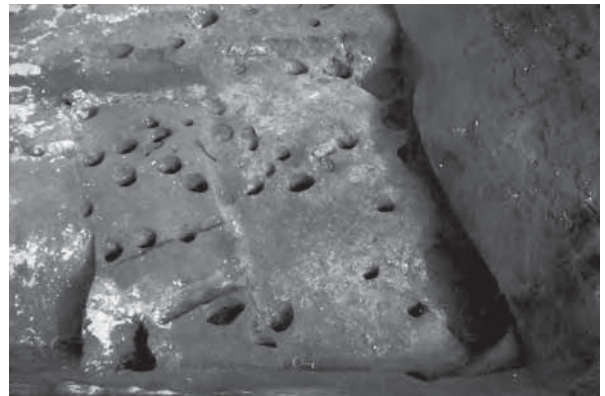
22号竪穴建物(S6)土層断面(東から)



22号竪穴建物(S6)検出状況(南から)



23号竪穴建物(S7)完掘状況(東から)



24号竪穴建物(S18)完掘状況(西から)



25号竪穴建物(S10)土層断面(東から)

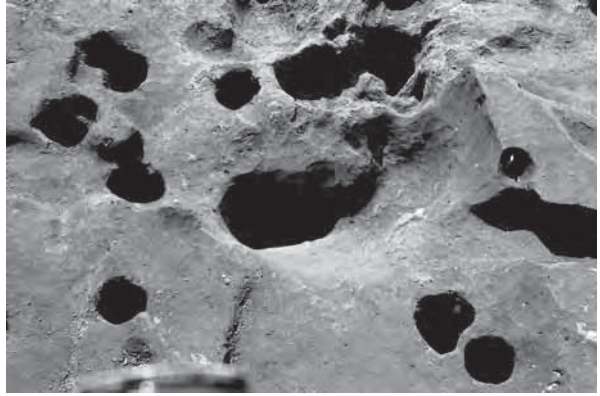


25号竪穴建物(S10)炉跡(北から)

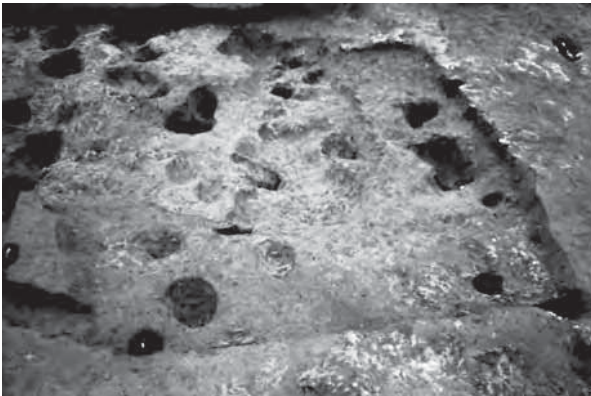
図版10



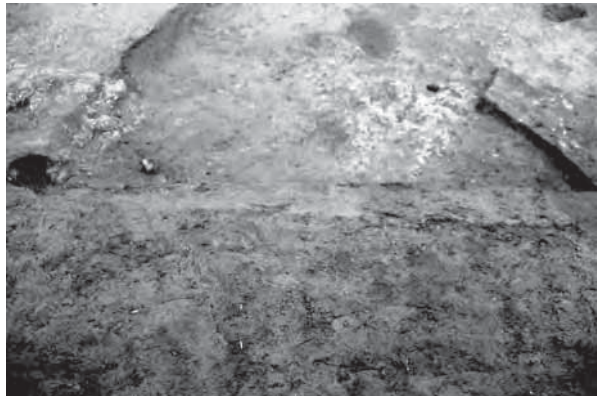
2区 26号竖穴建物(S14)遺物出土状況(南から)



26号竖穴建物(S14)完掘状況(北から)



27号竖穴建物(S15)完掘状況(北から)



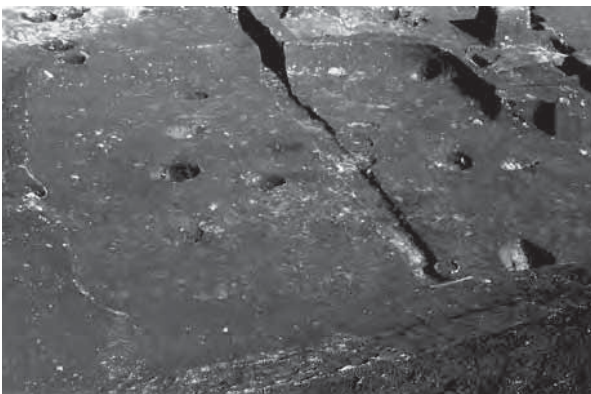
28号竖穴建物(S16)完掘状況(南から)



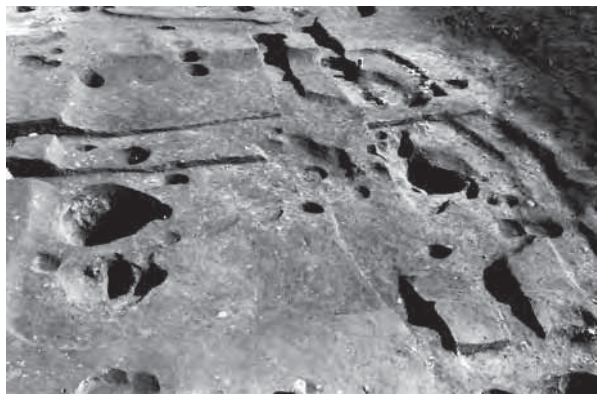
29号竖穴建物(S23)遺物出土状況(西から)



30号竖穴建物(S25)検出状況(南から)



30号竖穴建物(S25)完掘状況(南から)



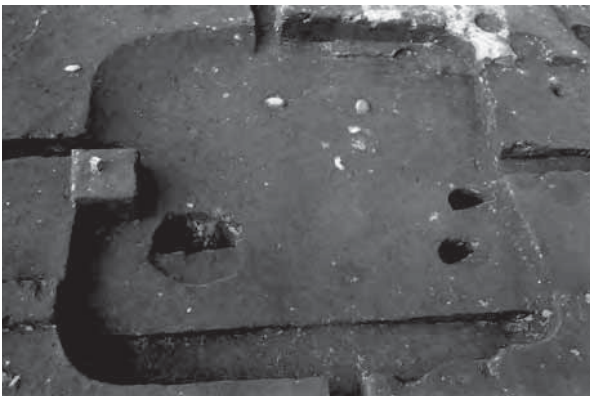
31号竖穴建物(S34)完掘状況(西から)



2区 32号竪穴建物(S35)完掘状況(南から)



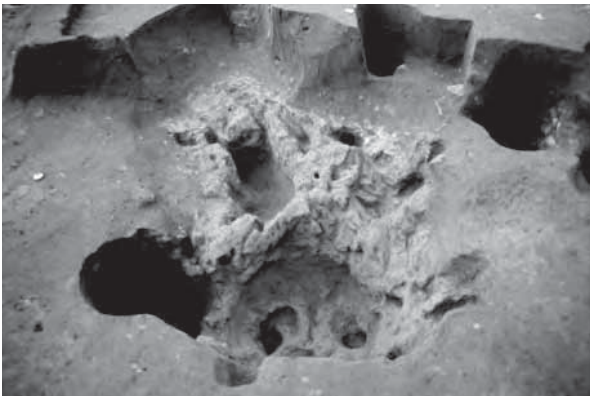
33号竪穴建物(S27)完掘状況(北から)



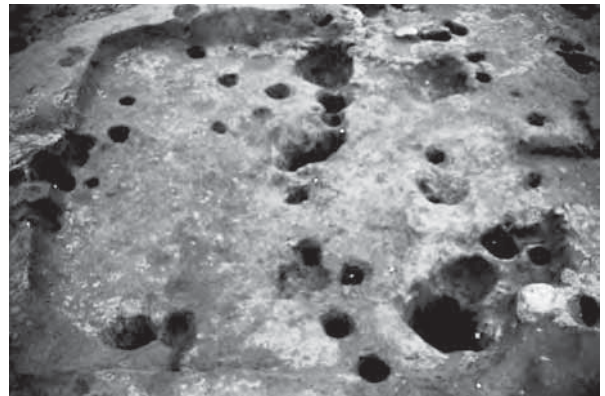
34号竪穴建物(S22)完掘状況(東から)



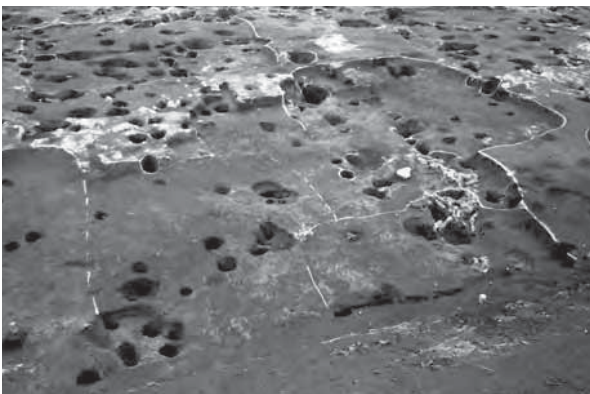
35号竪穴建物(S24)カマド検出状況(南から)



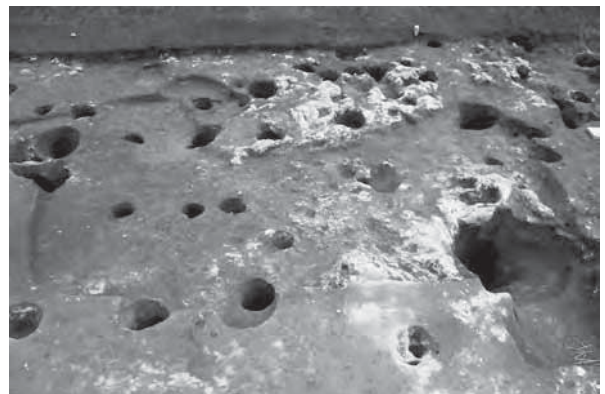
35号竪穴建物(S24)カマド完掘状況(南から)



36号竪穴建物(S26)完掘状況(北から)



30・34・35・36・37号(S45)竪穴建物完掘状況(南から)



38号竪穴建物(S9)土層断面(北から)

図版12



2区 39号竪穴建物(S12)検出状況①(東から)



39号竪穴建物(S12)検出状況②(北から)



40号竪穴建物(S42)検出状況(南から)



40号竪穴建物(S42)カマド検出状況(南から)



40号竪穴建物(S42)遺物出土状況(南から)



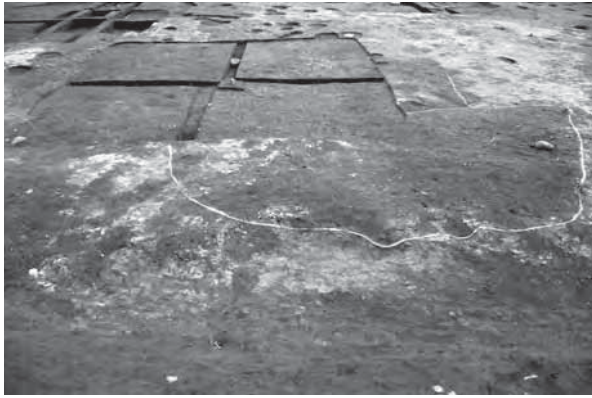
40号竪穴建物(S42)完掘状況(西から)



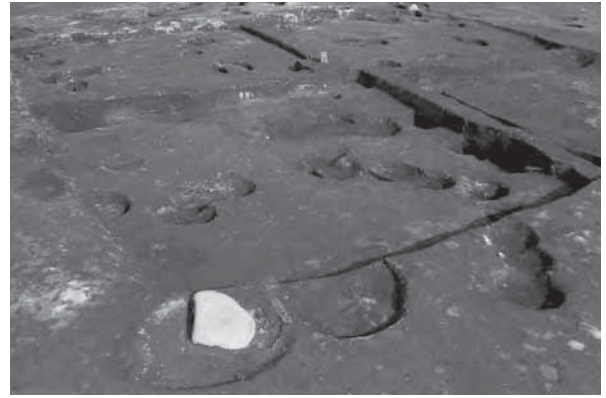
41号竪穴建物(S20)カマド検出状況(南から)



41号竪穴建物(S20)完掘状況(南から)



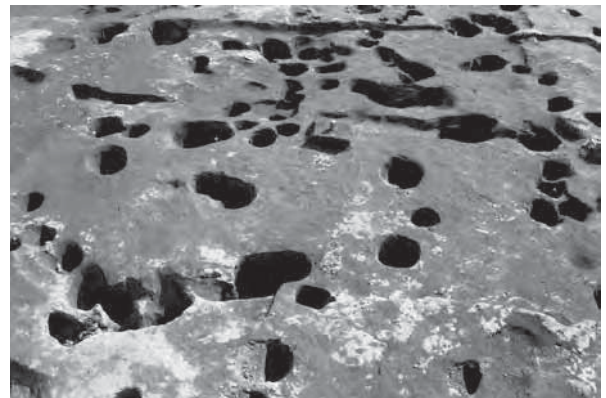
2区 42・43号竪穴建物(S31・32)検出状況(北から)



42号竪穴建物(S31)土層断面(南から)



42号竪穴建物(S31)カマド検出状況(西から)



42号竪穴建物(S31)完掘状況(北から)



43号竪穴建物(S32)完掘状況(北から)



44号竪穴建物(S21)完掘状況(西から)



6号土坑(S8)土層断面(北から)



6号土坑(S8)遺物出土状況(北から)

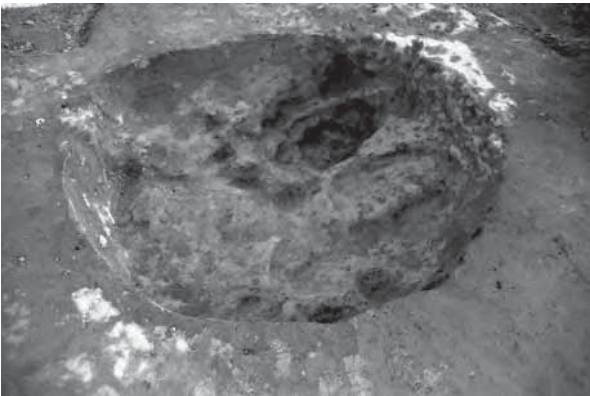
図版14



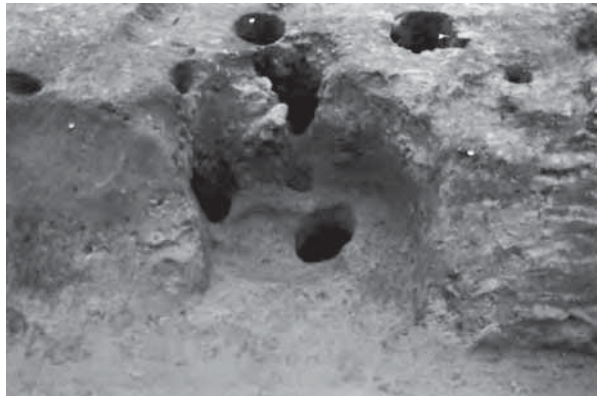
2区 6号土坑(S8)完掘状況(北から)



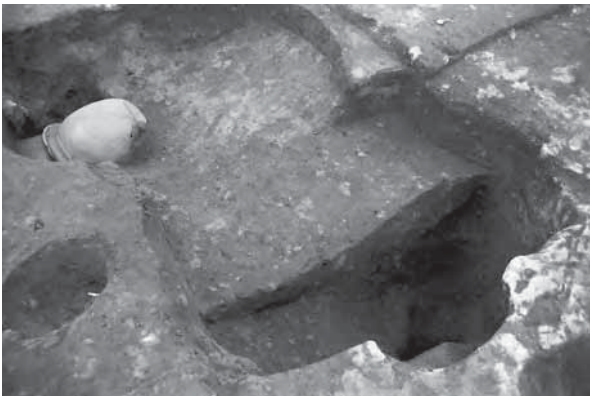
7号土坑(S36)土層断面(南から)



8号土坑(S39)完掘状況(西から)



9号土坑(S17)完掘状況(北から)



10号土坑(S19)土層断面(南から)



11号土坑(S36)土層断面(西から)

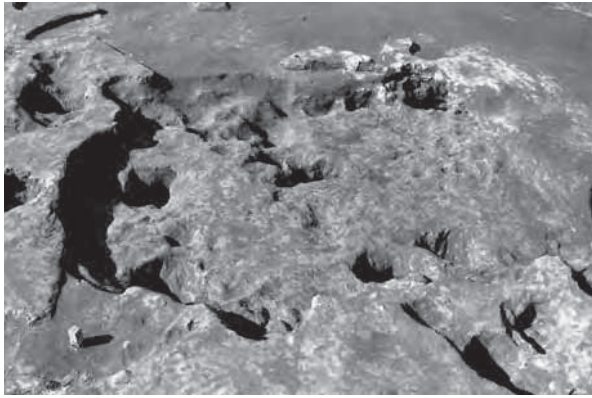


7・11号土坑(S36・37)完掘状況(南東から)



12号土坑(S38)土層断面(南西から)





2区 13号土坑(S41)完掘状況(東から)



14号土坑(S30)完掘状況(東から)



2号溝状遺構(S4)完掘状況(西から)



完掘状況①(西から)



完掘状況②(南東から)



完掘状況③(東から)



完掘状況④(北西から)

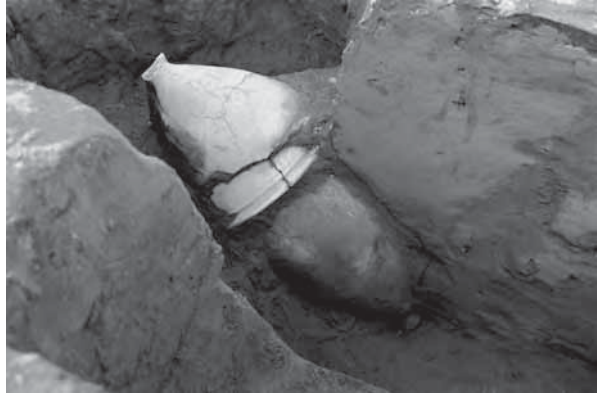


完掘状況⑤(北東から)

図版16



3区 調査区全景(北東から)



4号甕棺墓(S6)断面(南東から)



4号甕棺目張り状況(東から)



4号甕棺上甕重なり状況(南東から)



4号甕棺出土状況(東から)



4号甕棺墓(S6)完掘状況(東から)



15号土坑(S5)断面(東から)



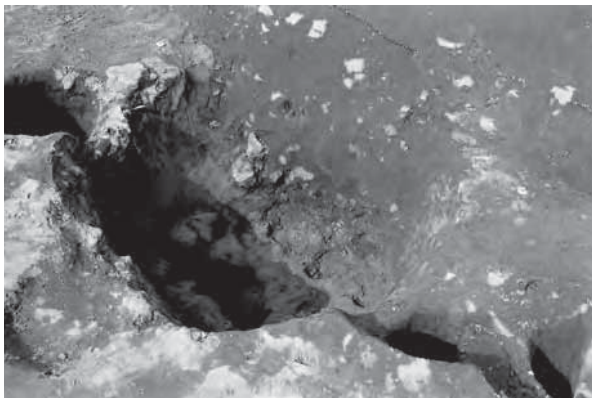
4号甕棺墓(S6)、15号土坑(S5)完掘状況(東から)



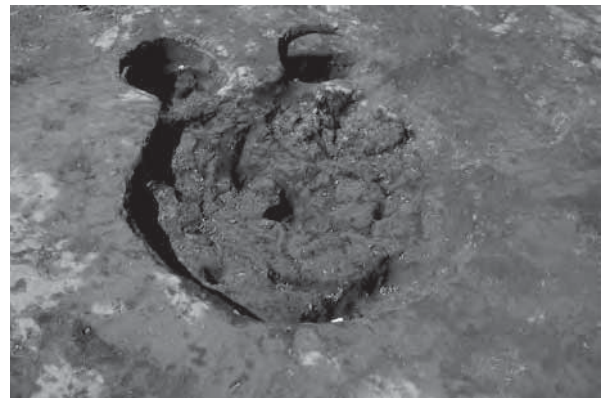
3区 45号竪穴建物(S2)完掘状況(東から)



16号土坑(S1)完掘状況(南東から)



17号土坑(S4)完掘状況(東から)



18号土坑(S8)完掘状況(東から)



調査区全景①(南東から)



調査区全景②(南から)



調査区全景③(北から)



調査区全景④(北東から)

圖版18

試掘



(写)

1・2・3号甕棺



1区 1号甕棺(S15)



1

2号甕棺(S16)



3

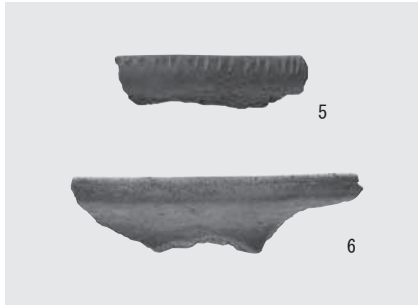


2

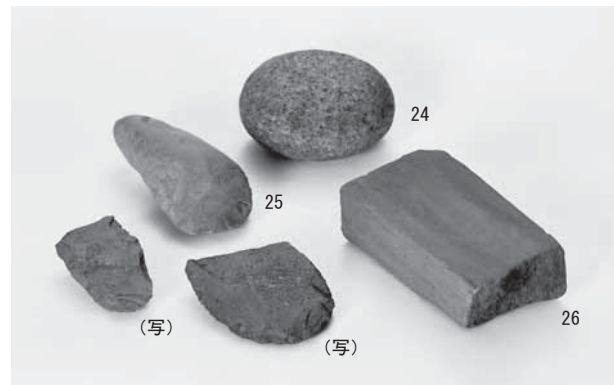
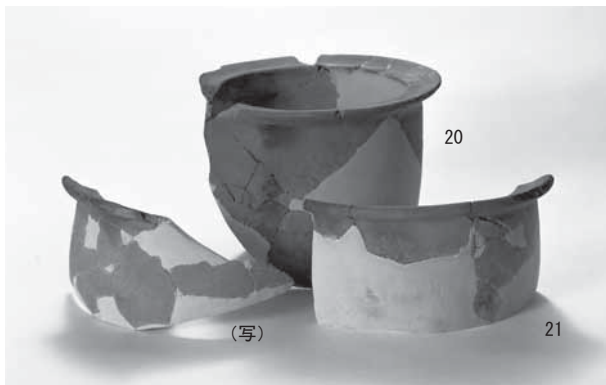
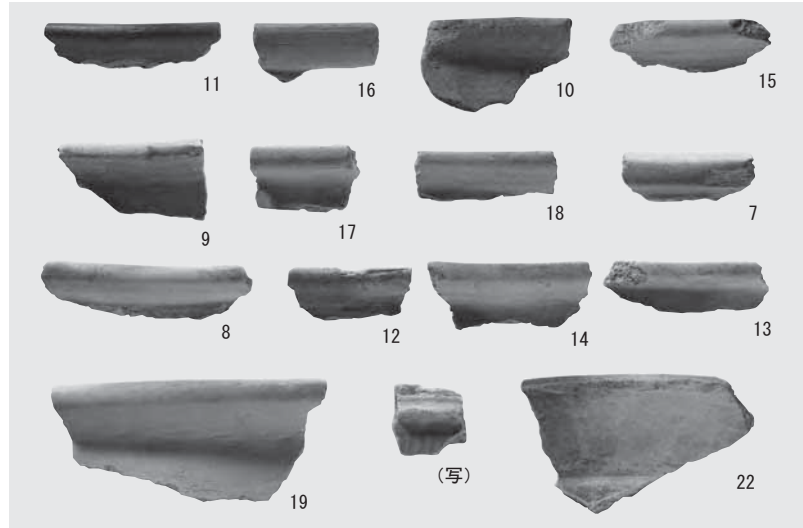


4

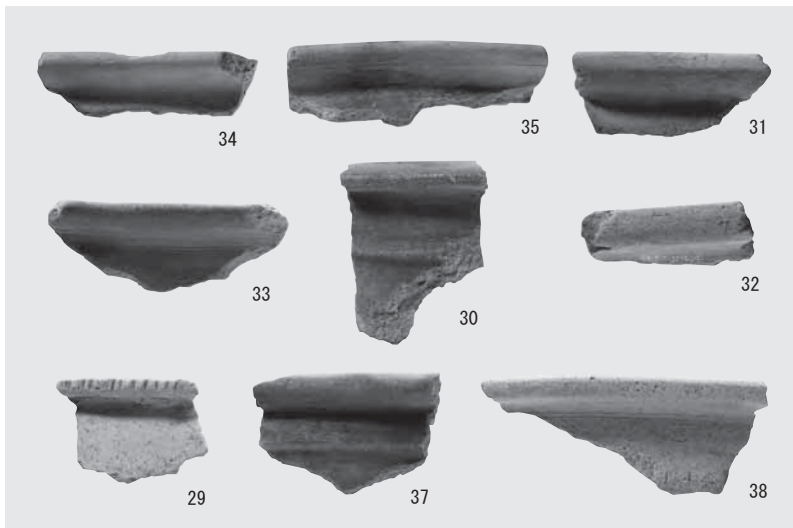
2号土壙墓 (S6)



1号竖穴建物 (S14)



2・3号竖穴建物 (S22・23)

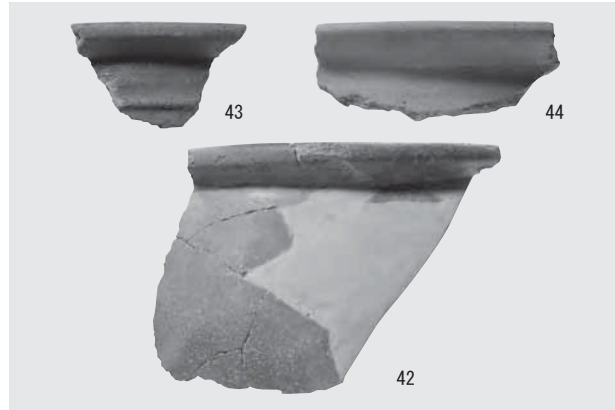


図版20

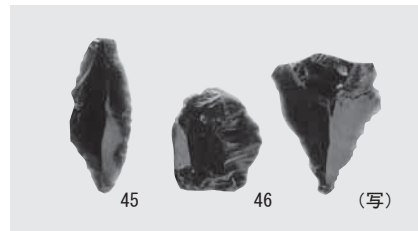
4号竖穴建物(S20)



6号竖穴建物(S25)



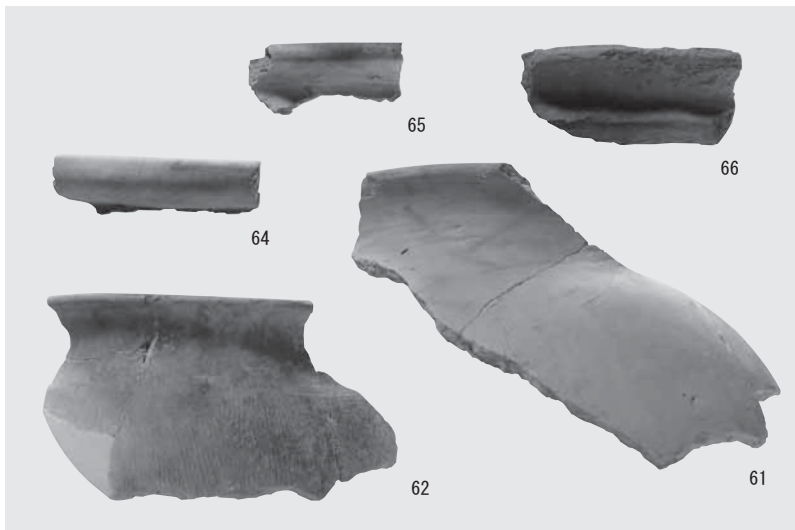
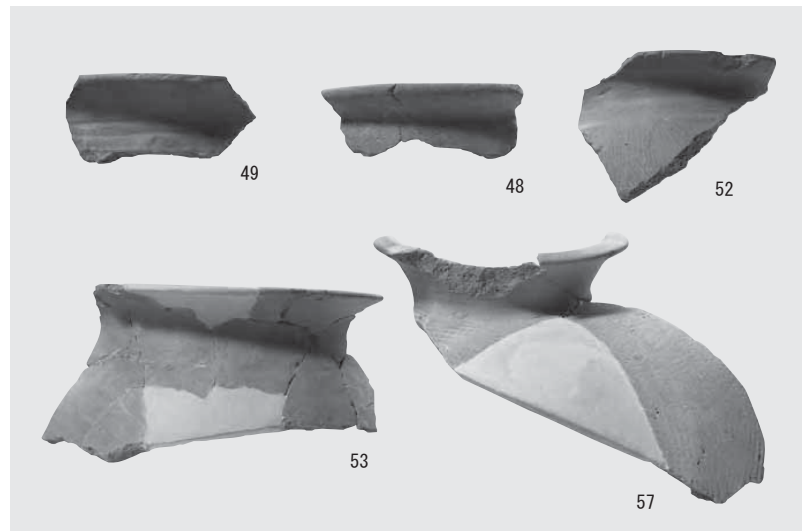
5号竖穴建物(S24)



7号竖穴建物(S28)



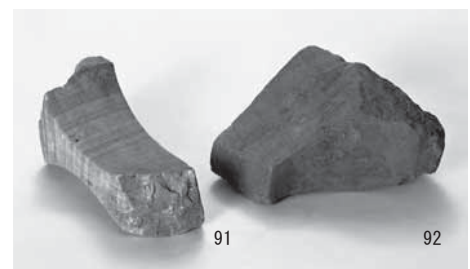
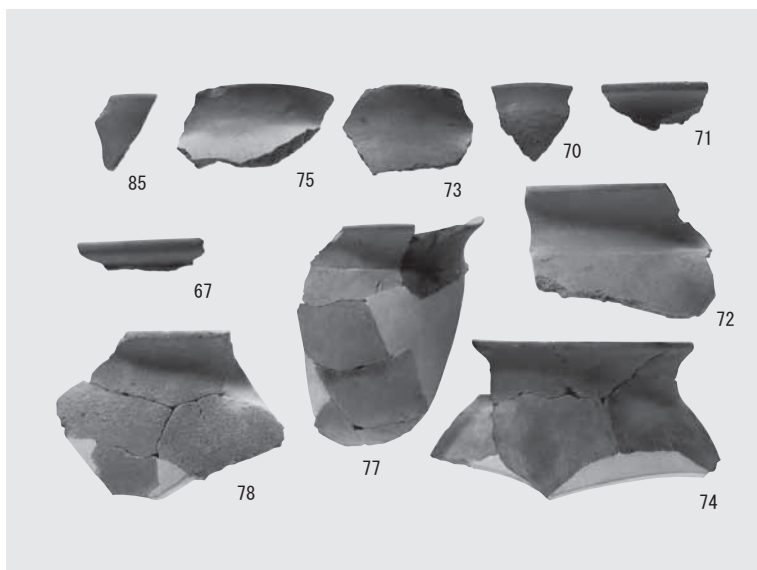
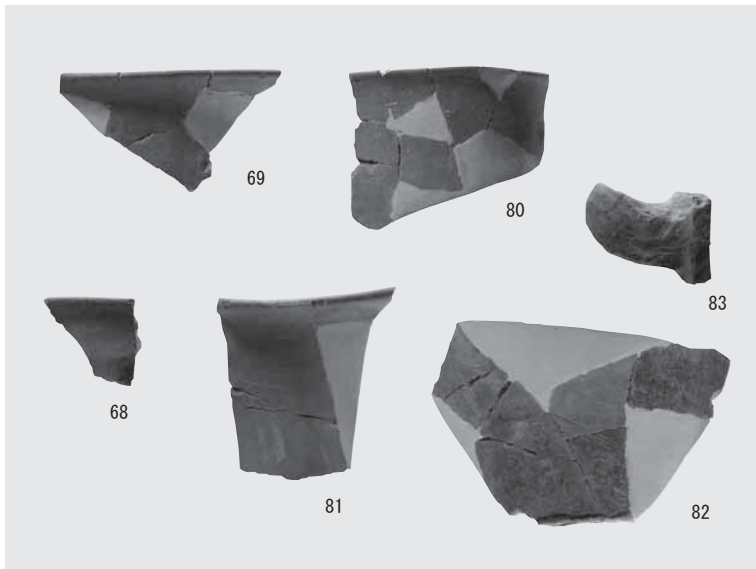
8・9・10号竖穴建物-1(S8・9・10)



8・9号竪穴建物-2 (S8・9)

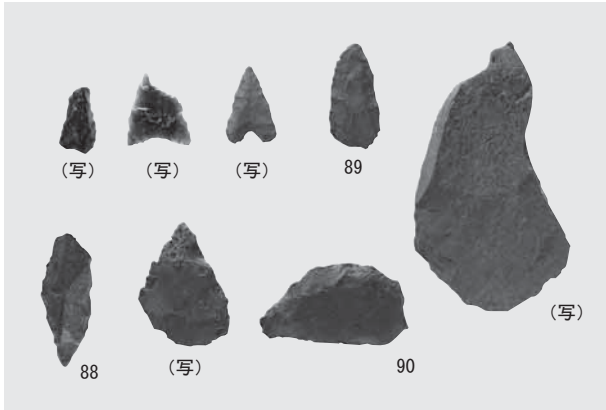


11号竪穴建物-1 (S13)



図版22

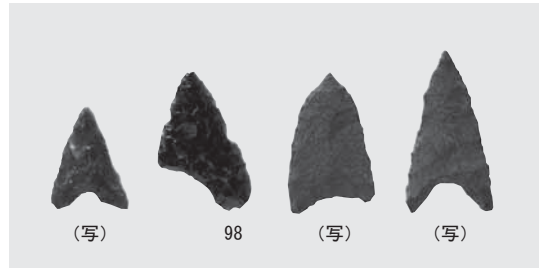
11号竖穴建物-2 (S13)



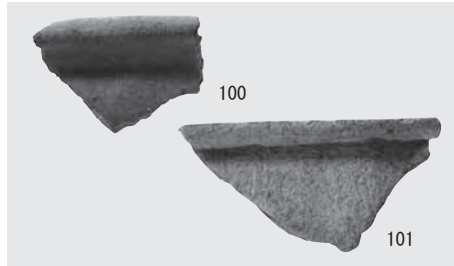
12号竖穴建物 (S31)



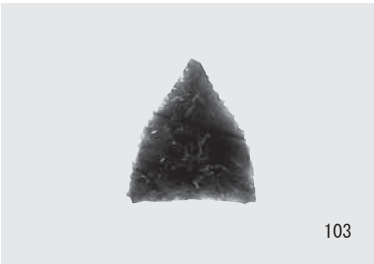
14号竖穴建物 (S12)



不明遺構 (S17)



1号土坑 (S18)



2号土坑 (S26)



3号土坑 (S19)

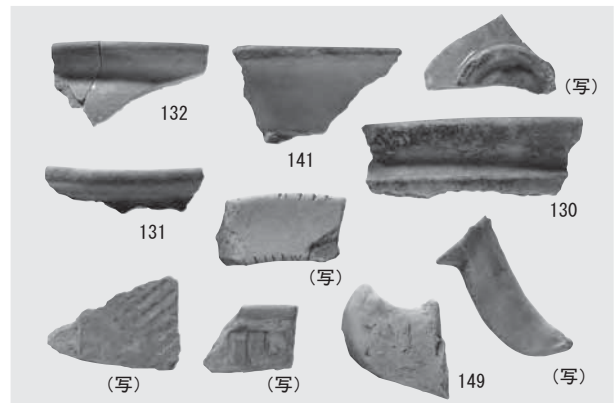
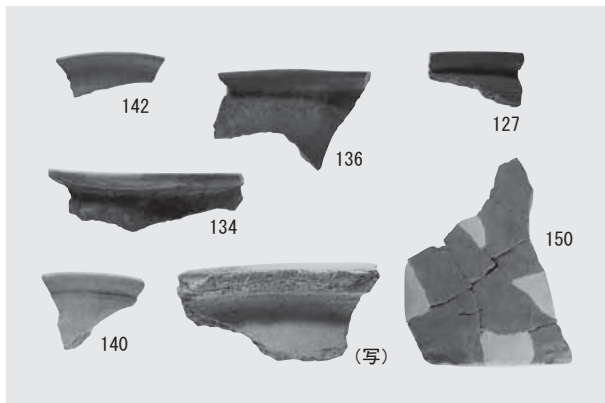
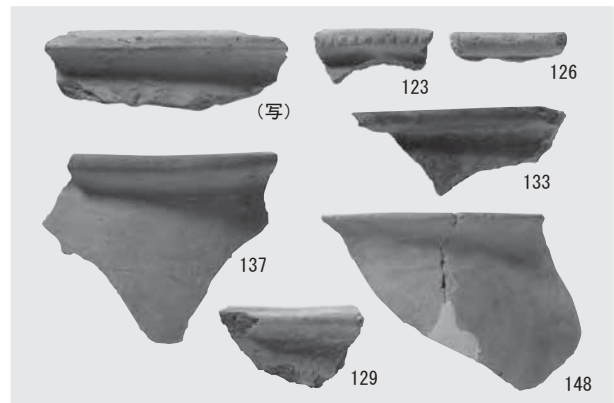
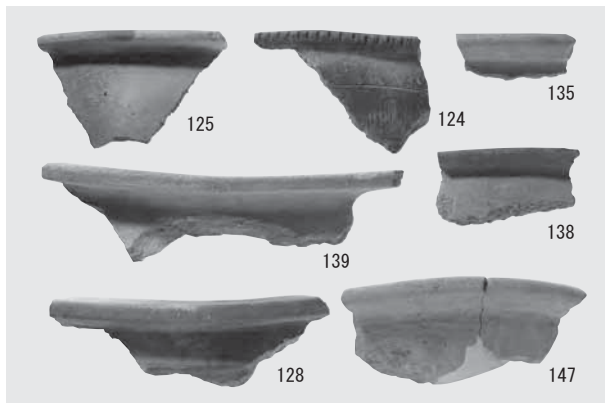
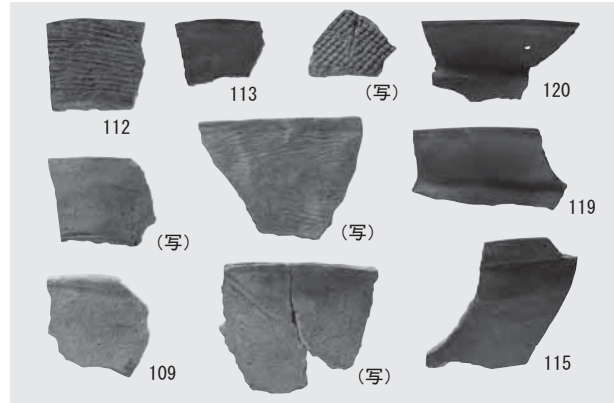
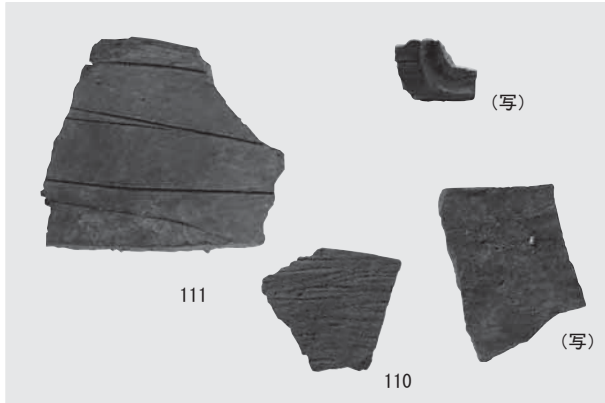


5号土坑 (S29)

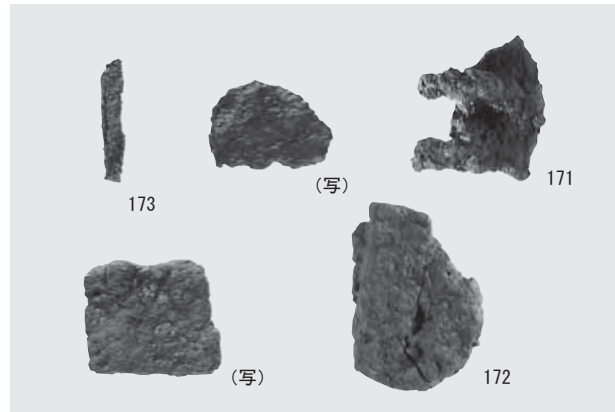
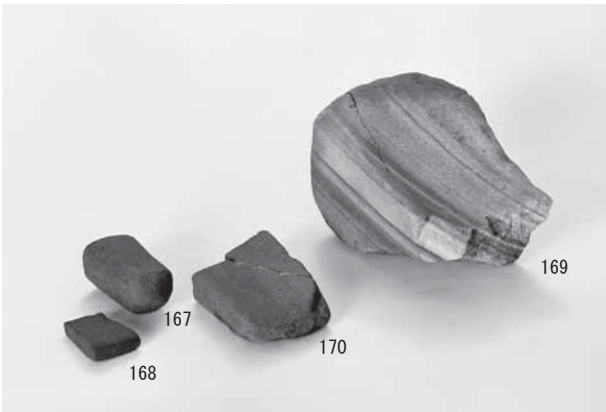
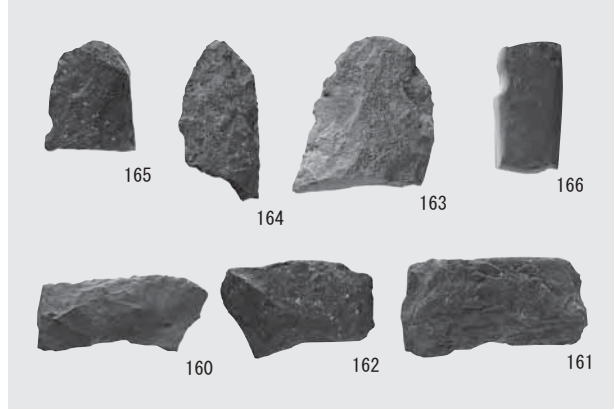
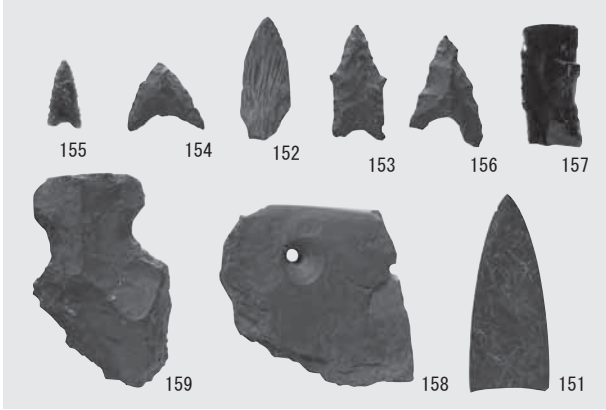




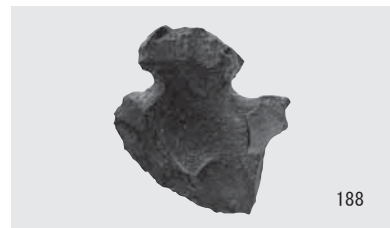
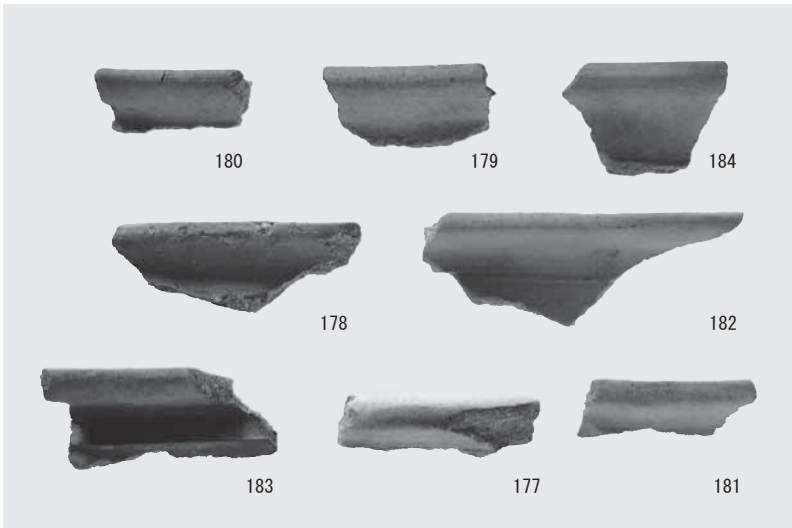
グリッド出土(1)



図版24  
グリッド出土(2)



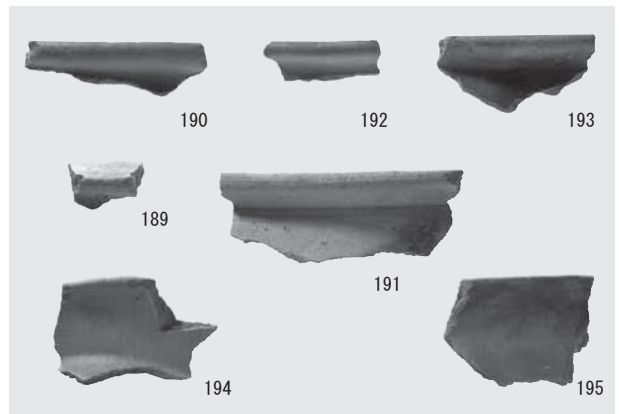
2区 17号竖穴建物(S2)



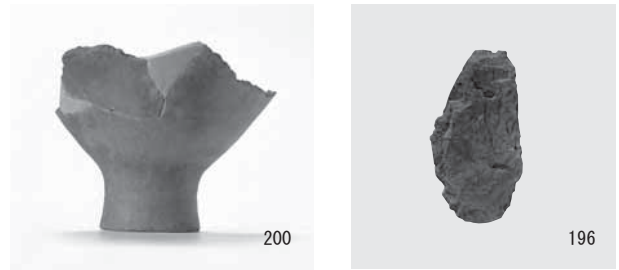
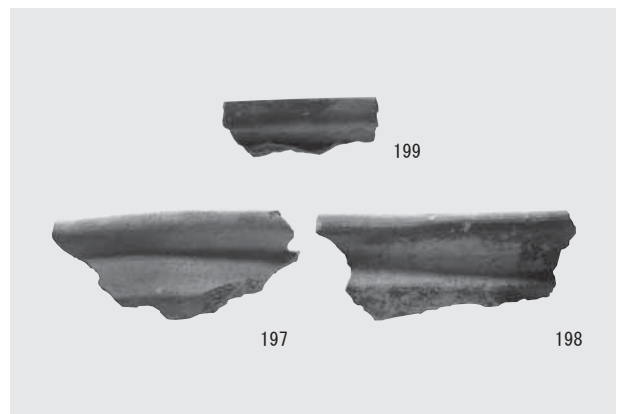
2区3号甕棺(S13)



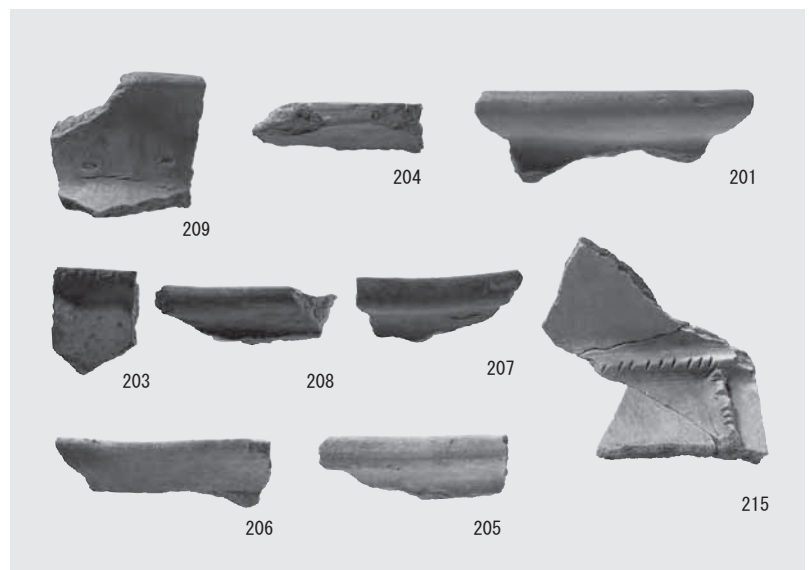
18号竖穴建物(S1)



19・20号竖穴建物(S28・29)

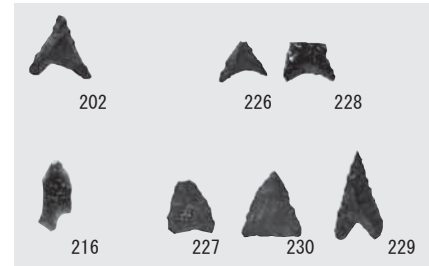
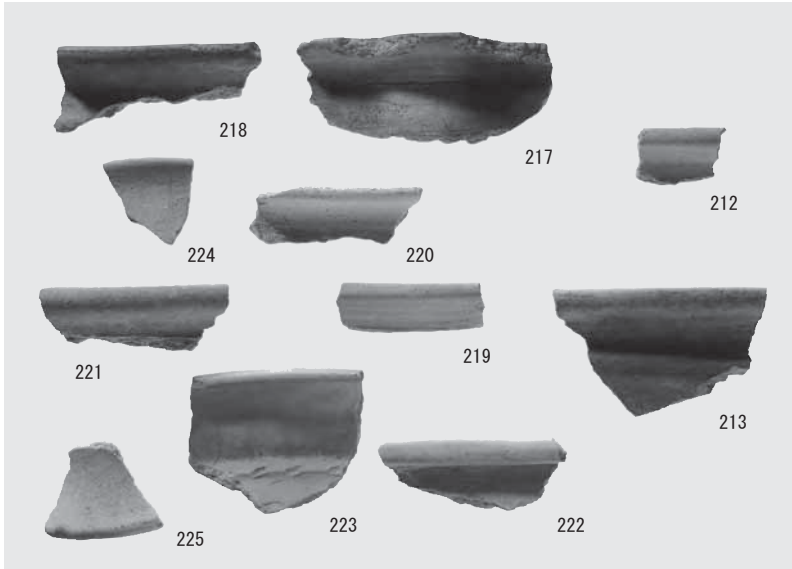


21・22・23号竖穴建物-1(S5・6・7)

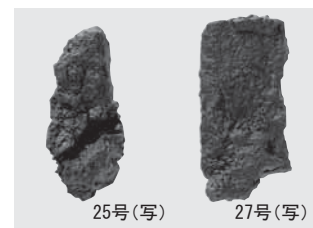
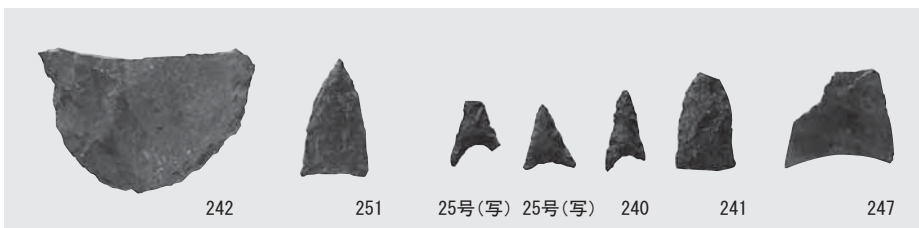
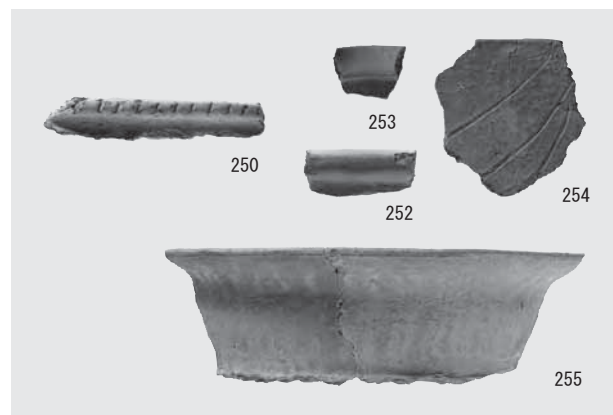
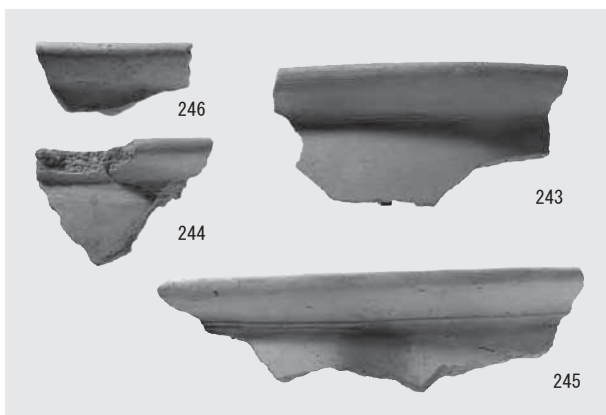
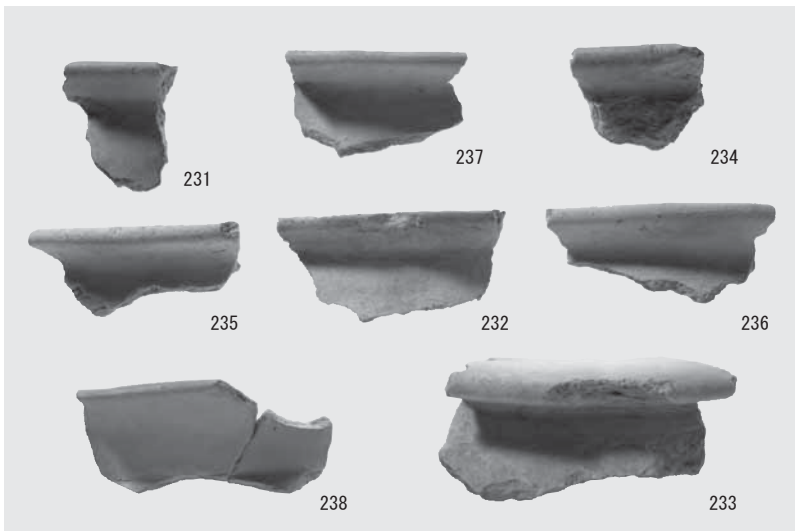


図版26

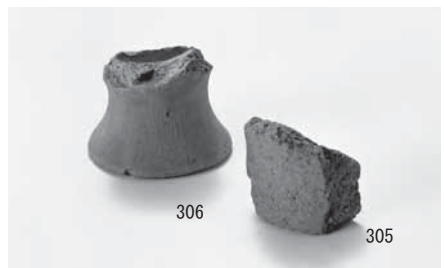
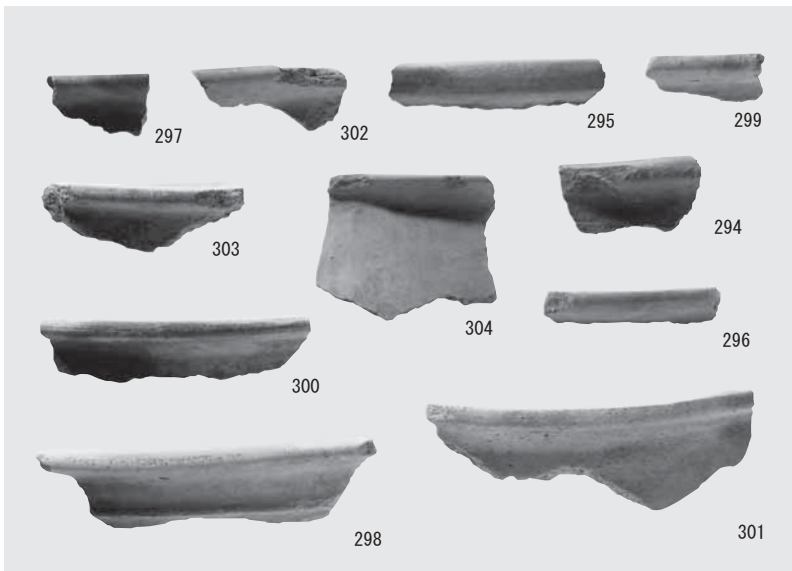
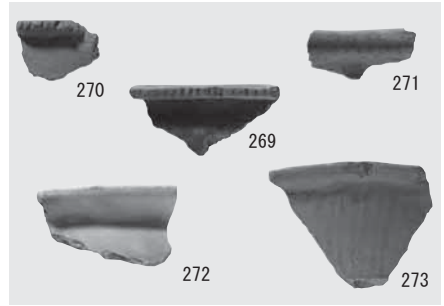
21・22・23・24号竪穴建物-2(S5・6・7・18)



25・26・27・28号竪穴建物(S10・14・15・16)

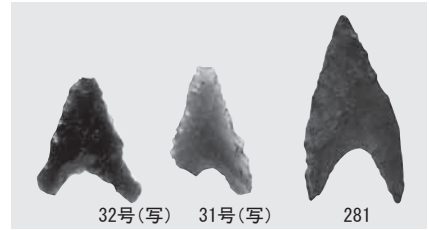
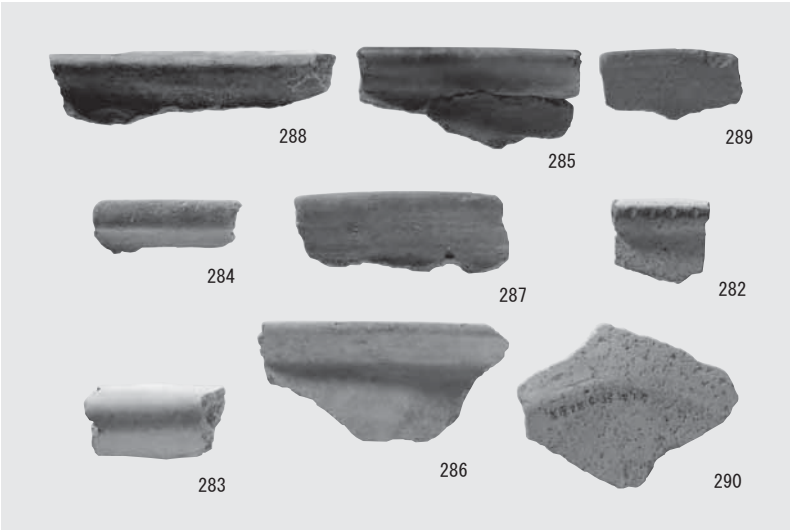


29・30・31・32・33号竪穴建物-1(S23・25・34・35・27)

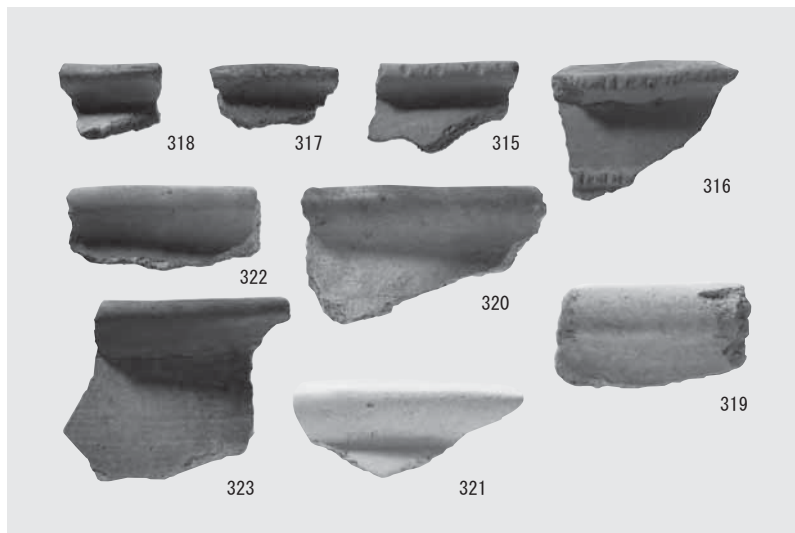
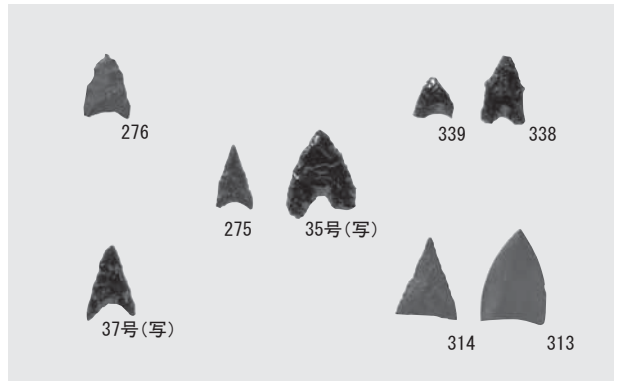
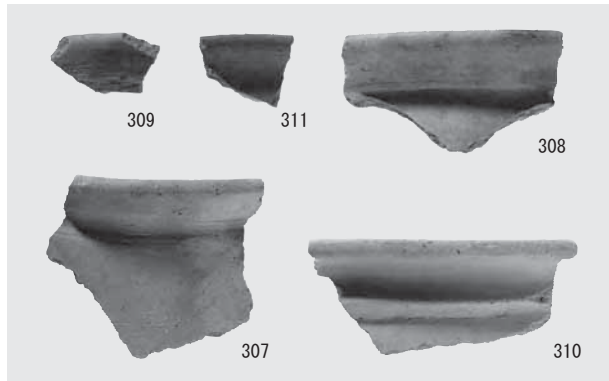


図版28

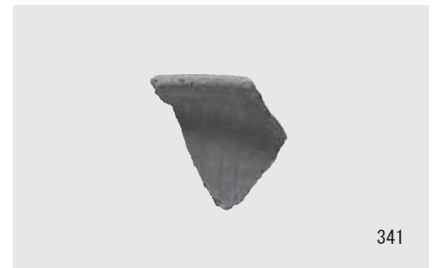
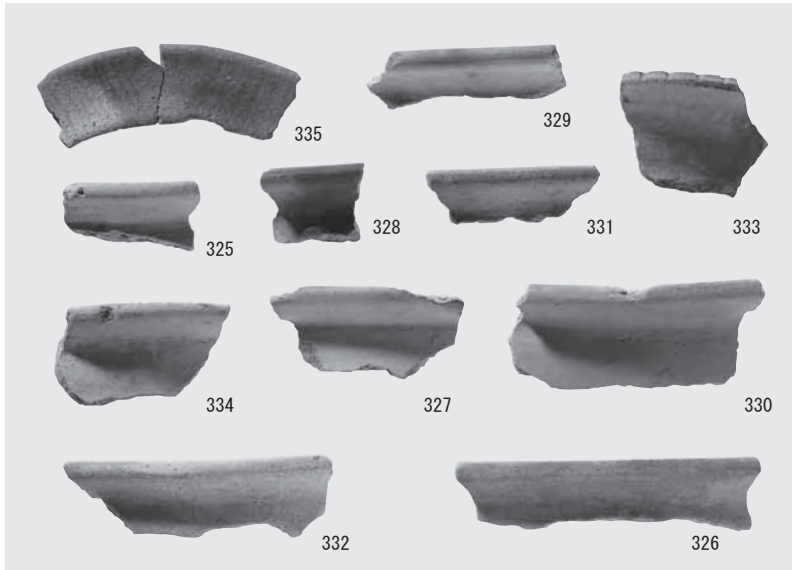
31・32号竪穴建物-2(S34・35)



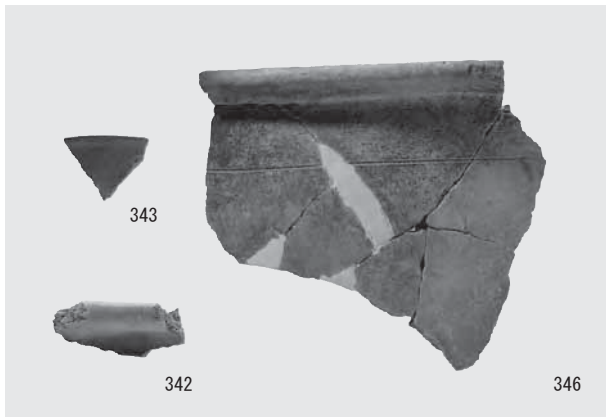
30・34・35・36・37号竪穴建物-1(S25・22・24・26・45)



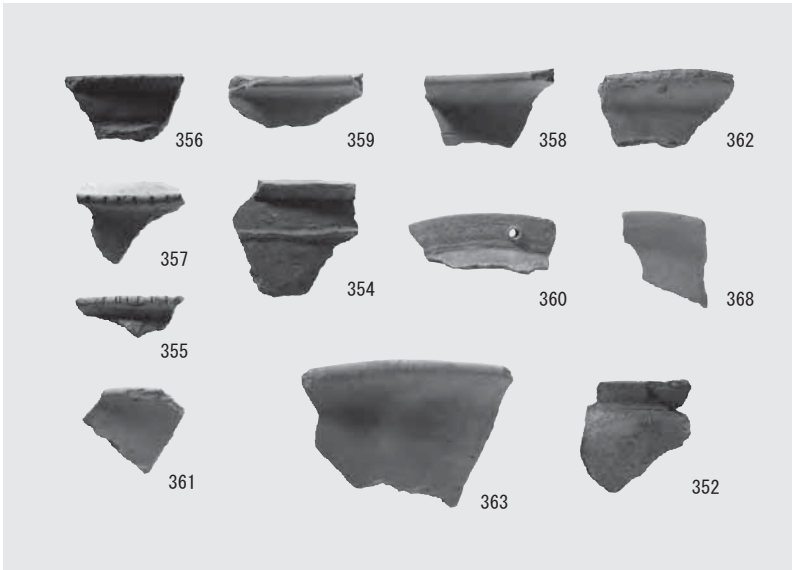
34・35・36・37号竪穴建物-2 (S22・24・26・45)



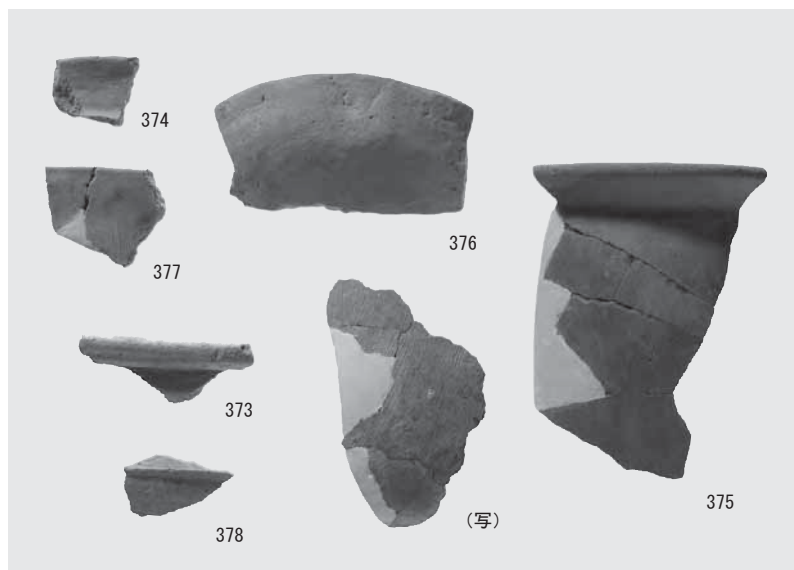
38・39号竪穴建物 (S9・12)



図版30  
40号竪穴建物(S42)

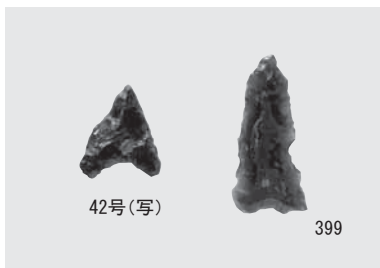
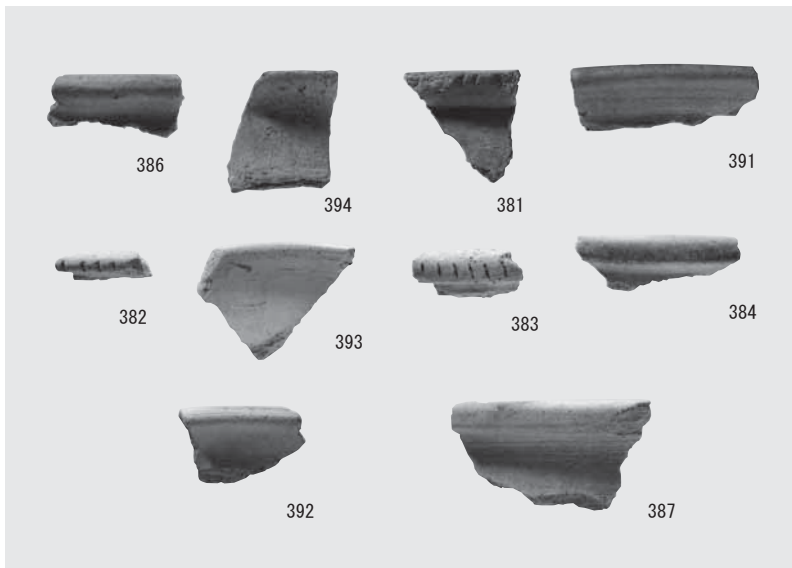
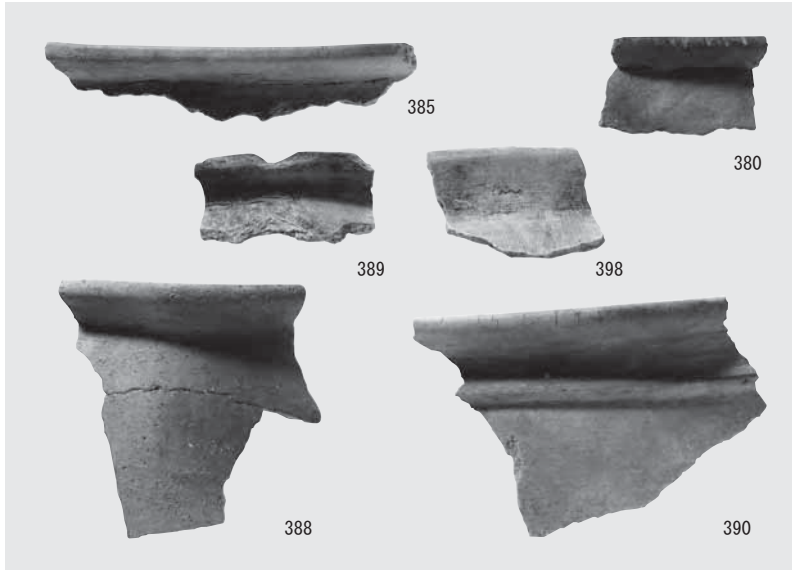


41号竪穴建物(S20)





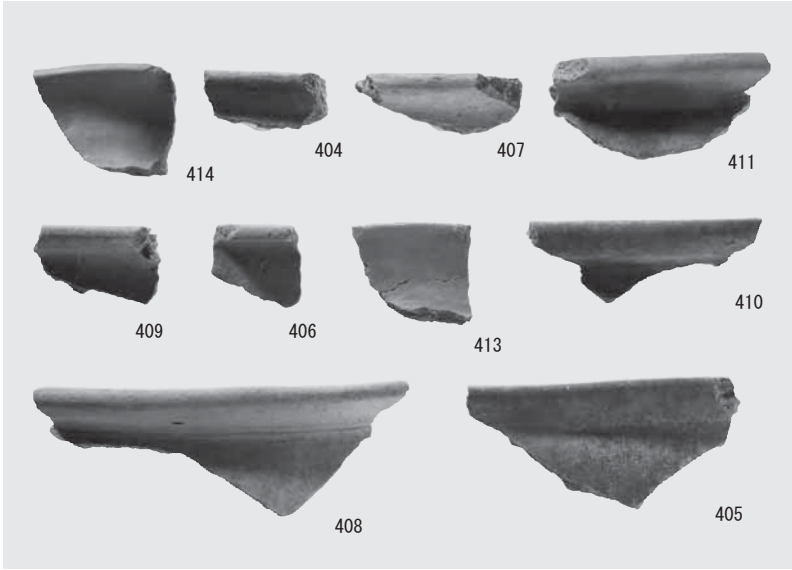
42・43号竪穴建物(S31・32)



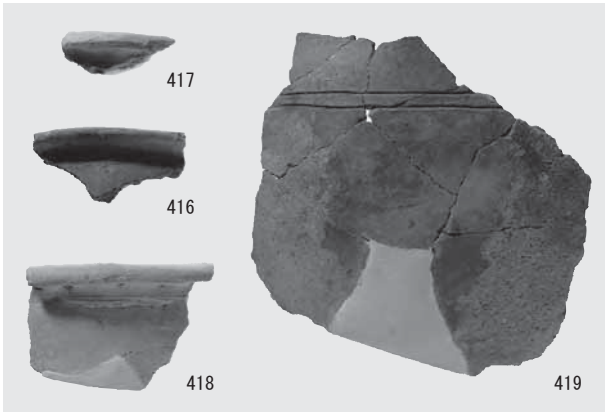
44号竪穴建物(S21)



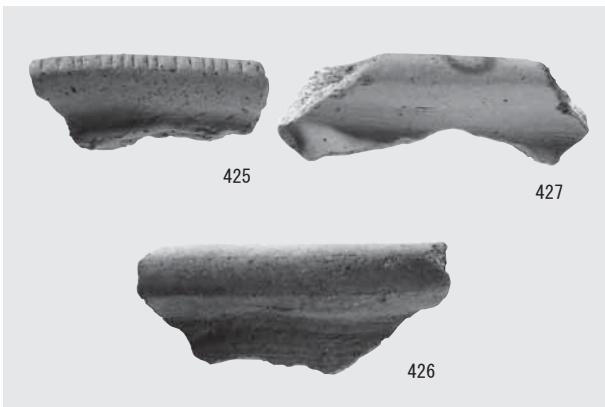
図版32  
6号土坑(S8)



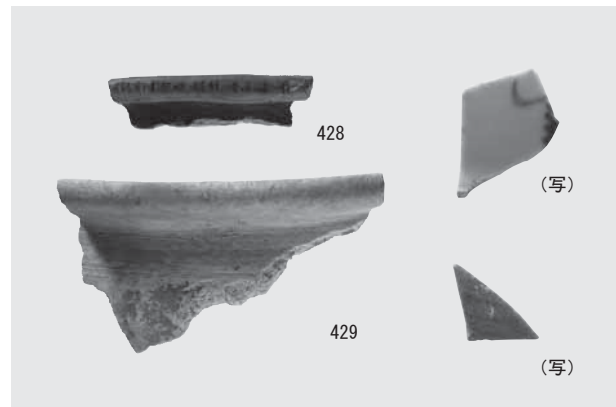
7・8・9・10号土坑(S36・39・17・19)



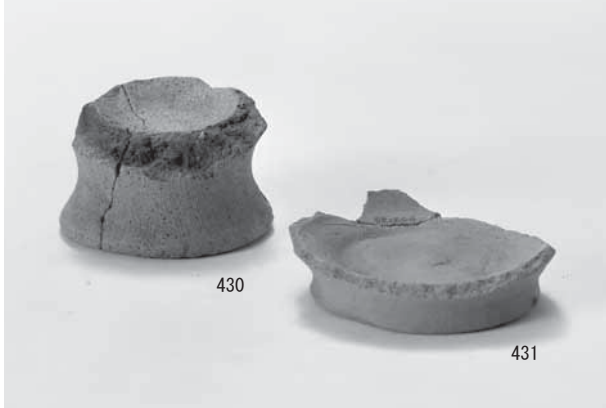
13号土坑(S41)



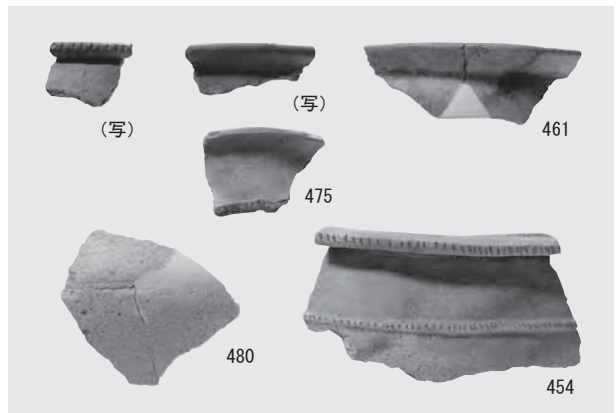
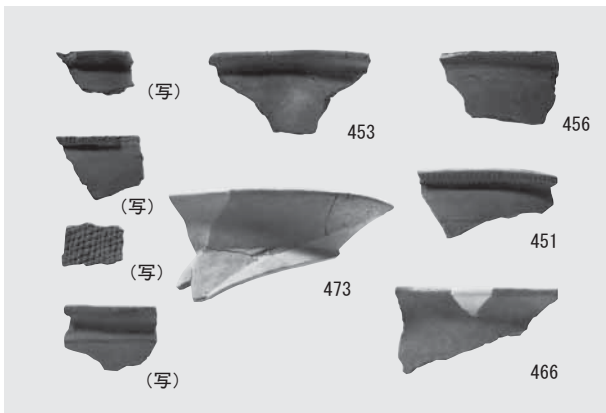
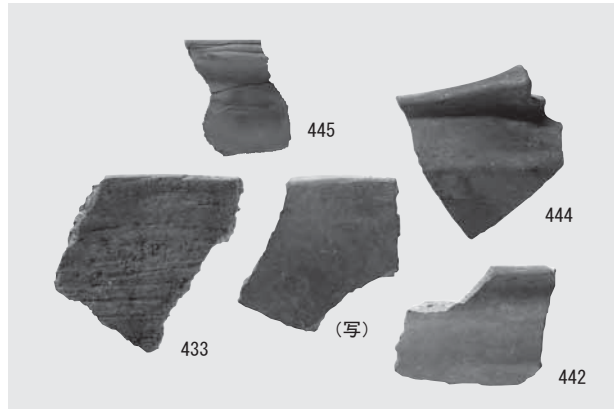
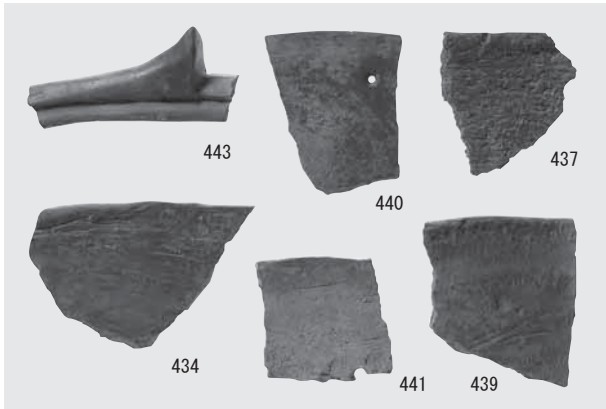
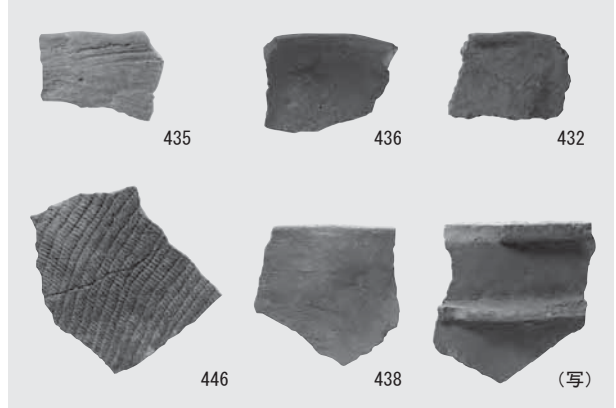
2号溝-1(S4)



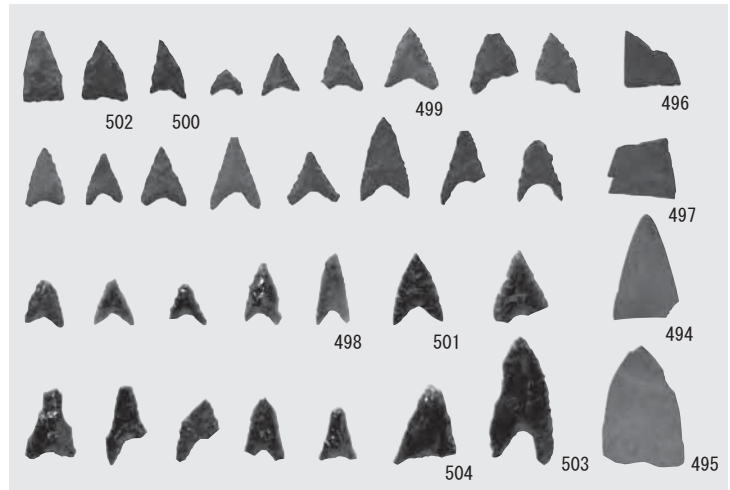
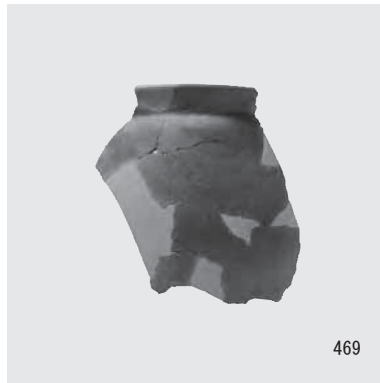
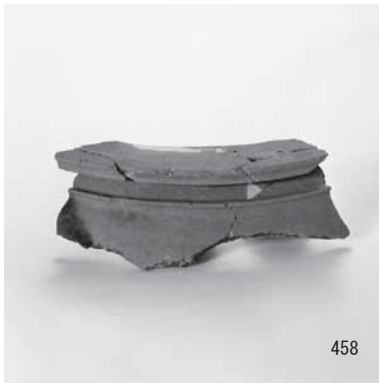
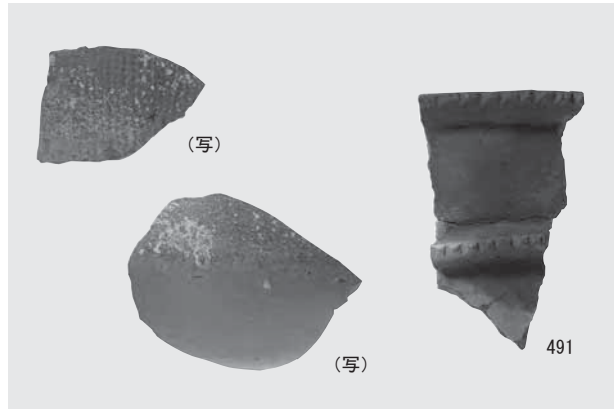
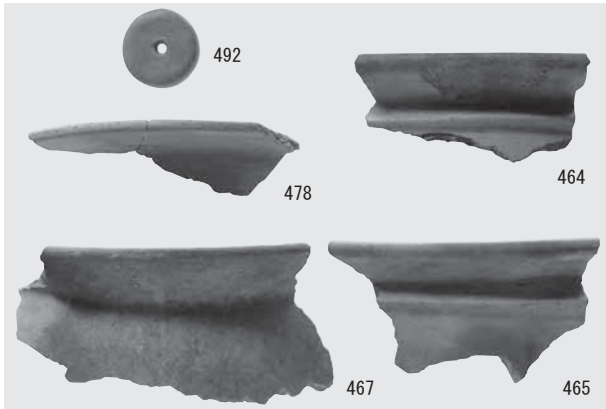
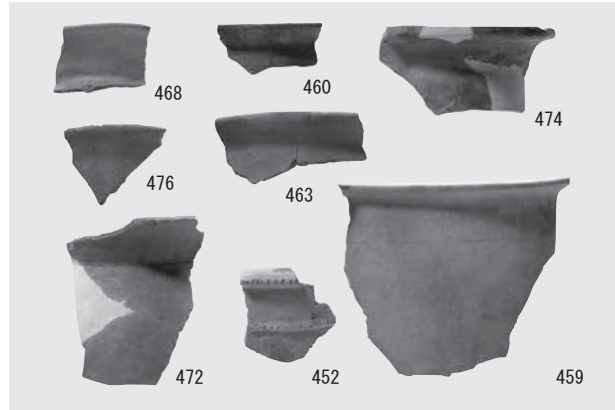
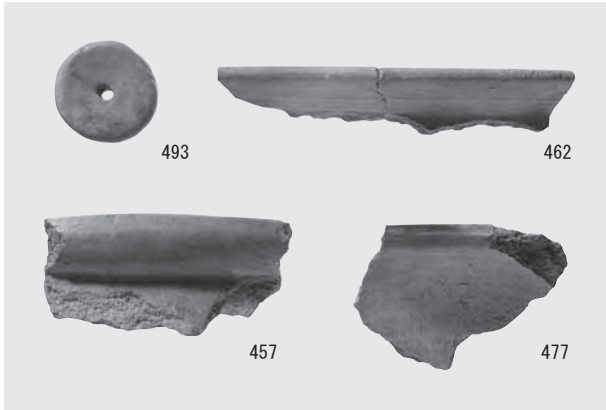
2号溝-2 (S4)



グリッド出土(1)

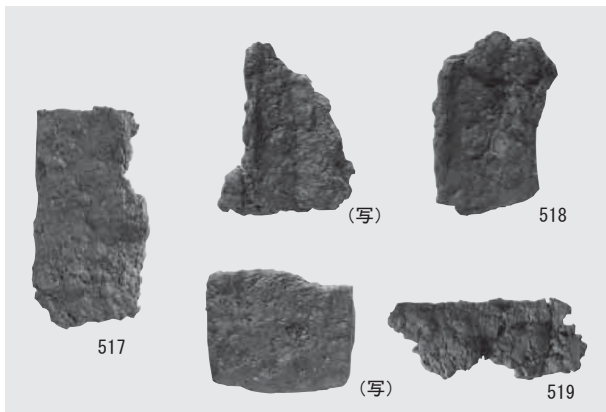
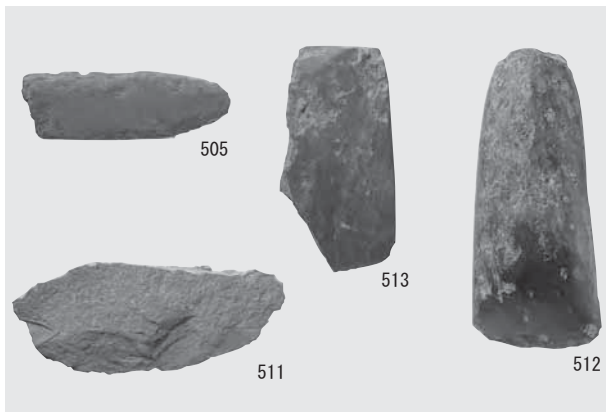
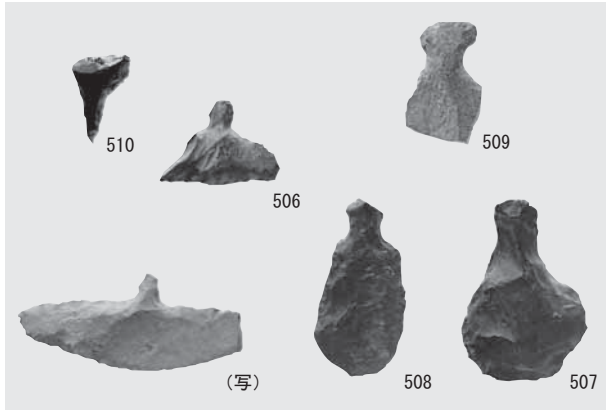


図版34  
グリッド出土(2)



※報番以外は(写)である

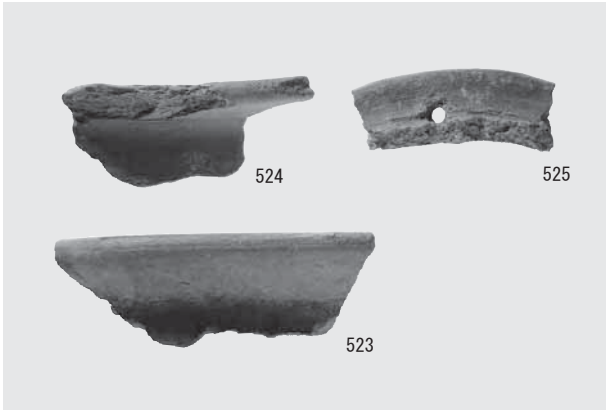
グリッド出土(3)



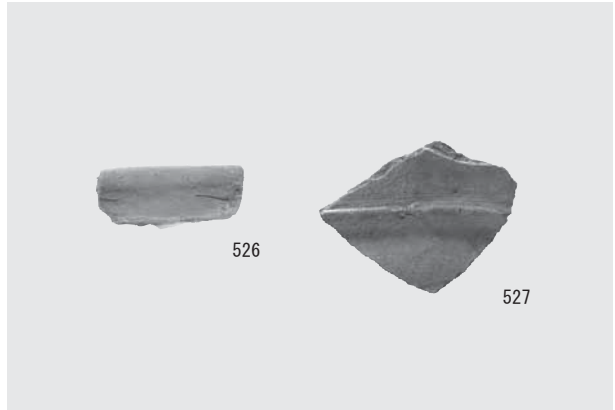
3区 4号甕棺



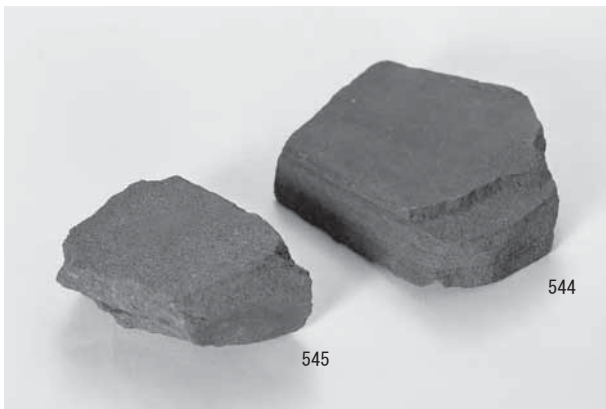
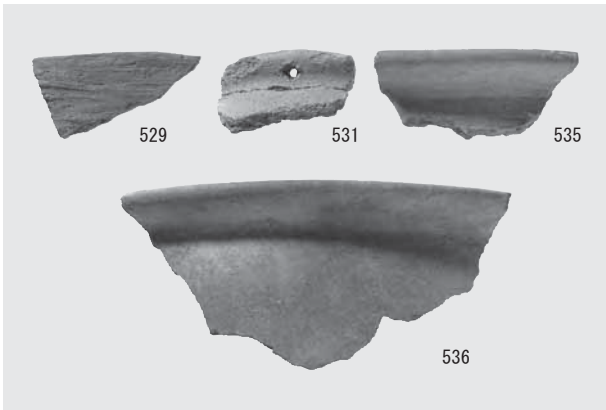
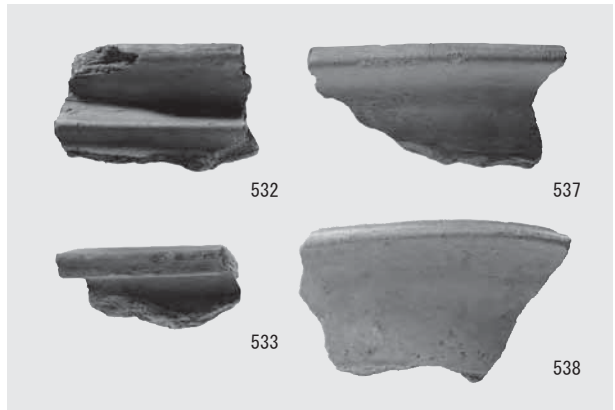
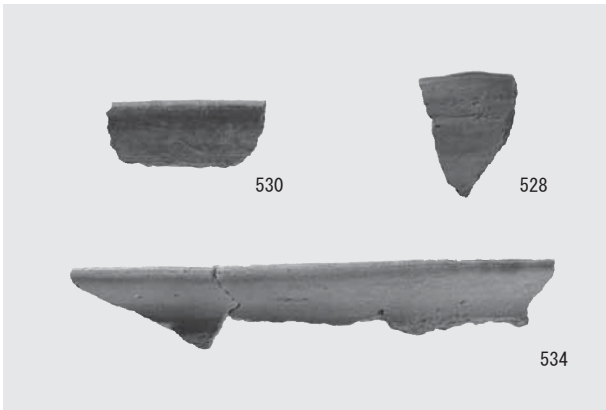
図版36  
45号竪穴建物(S2)



17・18号土坑(S4・8)



グリッド出土



## 附 論

## 熊本県における弥生時代埋葬遺構集成 白川流域編I (第1.1稿)

士野雄貴

## 序

熊本県教育庁教育総務局文化課による調査が実施された新南部遺跡群第11次調査区において、甕棺墓を中心とした弥生時代の埋葬遺構群がきわめて良好な状態で検出された。本稿は、これらの遺構群を県内における他事例、とりわけ白川流域におけるそれと比較するため起こしたものである。

ここでいう「白川流域」とは第1図の通り国土交通省の定める範囲に拠っているが、このうち阿蘇カルデラ内を上流域、外輪山外麓～熊本市中央区新屋敷までを中流域、新屋敷遺跡以下を下流と三分し、本稿では新南部遺跡群を含む中流域についての事例を集成することとした。

(上流域については他日に機会を求めたい。下流については、第1図の通り新屋敷遺跡より下流には流域が存在しておらず、同遺跡以下の白川流路が人為的改変を受けたことを示唆しており、当該時期の流路および流域の復原についてはまた別種の考察が必要であることから、本稿では集成の対象から外した。この点も他日に機会を求めたい。)

今回集成の対象とした遺跡は、第1表中のうち番号と遺跡名の両方にアミカケされた分についてである。(番号のみアミカケは記述のみ) 所収出来なかった事例も多いが、それらについては他日増補していきたい。

## 凡例

- ・遺跡地図は主に、「熊本県・市町村共同行政情報インターネット地図公開システム」の掲載データを一部改変して使用している。
- ・掲載の順番は遺跡ごとに、1) 甕(壺)棺墓、2) 土壙墓、3) 木棺墓、4) 石棺墓、5) 支石墓の順に配した。各遺構の掲載順序は出典資料に準じたが、レイアウトの都合で前後させたものがある。
- ・図版の縮尺は、遺構を1/50、遺物は1/12.5に統一しているが、中島宝満鶴遺跡の石棺墓S001内出土遺物のみ4/5とした。
- ・掲載した図版は、平面図の長軸を横に取り、下に長軸の断面図、右に短軸の断面図を置いた。甕棺墓については、埋置の高い方を上位、低い方を下位とし、上位を左に向けている。これらのことから、図版の方位は必ずしも揃ってはいないので注意されたい。
- ・レイアウトの統一を図るため、断面図の一部は原図を反転表示したものもある。甕棺墓の土層断面図と短軸断面図は割愛しているが、土層断面図しかない図版についてはそれを採用した。
- ・土層断面については註記を割愛した。

## 跋

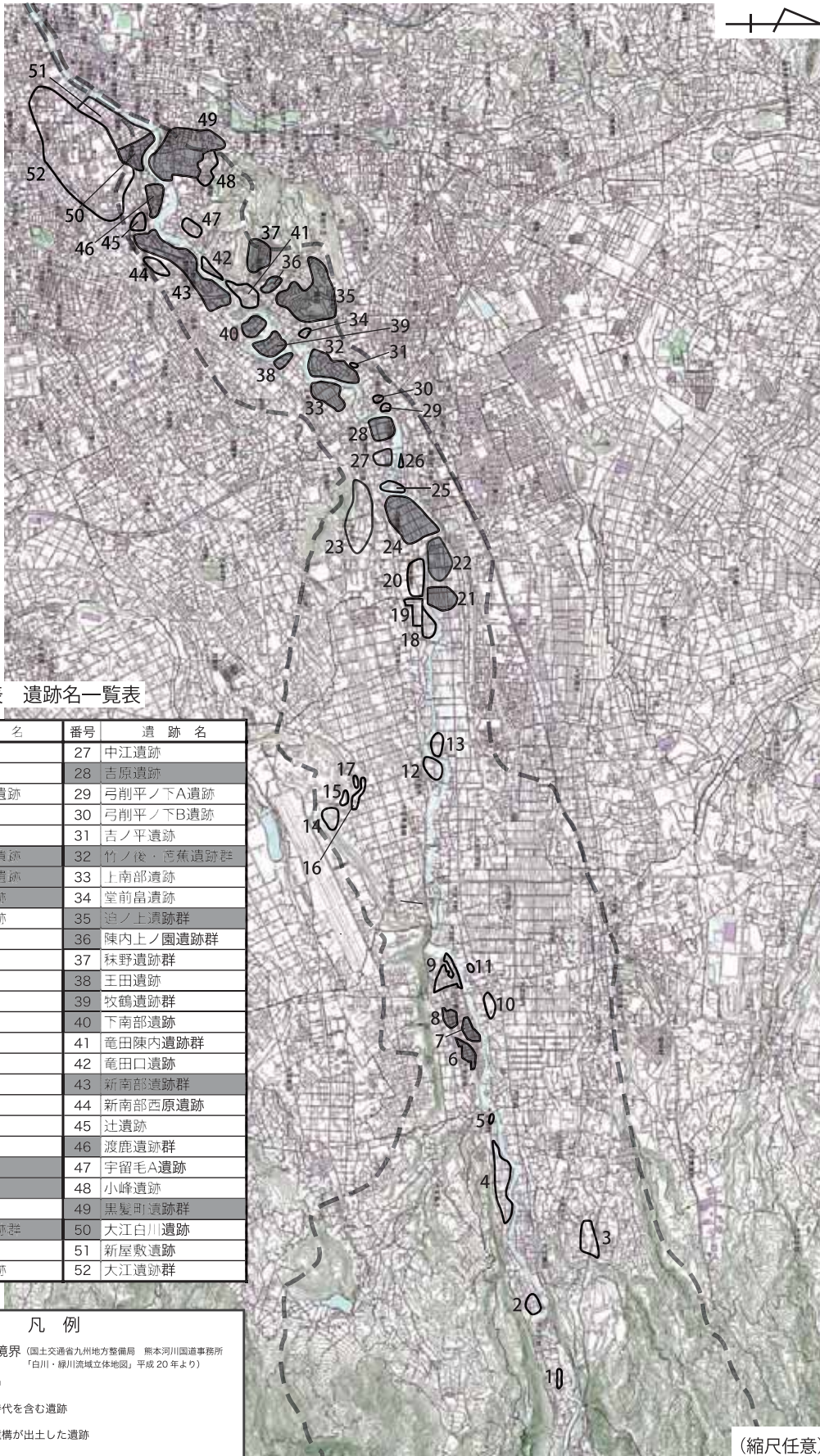
怠惰の故に収録出来なかった資料も多く、特に吉原遺跡・新南部遺跡群第11次調査区については報告書刊行途中のデータを使用させて頂くなど、多大なご厚意を得たにも関わらず集成とはほど遠い内容にしかになっていないが、今後も作業を継続し精度向上に精励することでご容赦願いたい。

なお末尾ながら、本稿執筆にあたってご協力頂きました方々に対し、感謝と共にご芳名を記させていただきます。

大坂亜矢子、尾崎深久、川俣幸次、菰田博隆、佐藤淳子、宮本大、師富成香(敬称略、50音順)

## 参考資料・出典

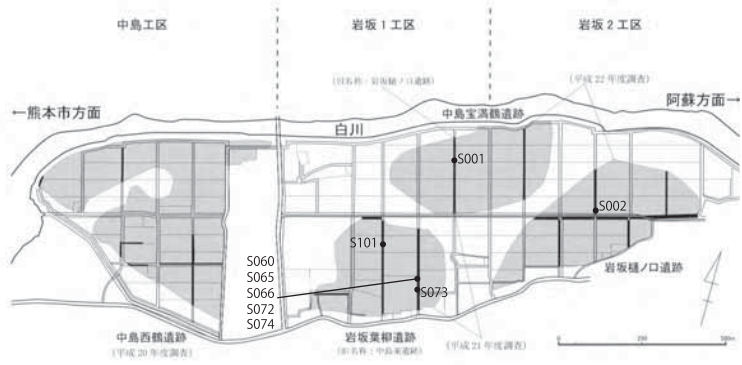
- 1) 大津町文化財調査報告書第10集『迫井手地区経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 中島西鶴遺跡 中島宝満鶴遺跡 岩坂葉柳遺跡 岩坂樋ノ口遺跡』(大津町教育委員会、2013)
- 2) 熊本県文化財調査報告第105集『六地藏遺跡I』(熊本県教育委員会、1989)
- 3) 熊本県文化財調査報告第62集『梅ノ木遺跡 熊本県菊池郡菊陽地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告』(熊本県教育委員会、1983)
- 4) 熊本県文化財調査報告第199集『梅ノ木遺跡IIー県営益城菊陽線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査ー』(熊本県教育委員会、2001)
- 5) 『昭和46年度 熊本市北部地区文化財調査報告書』(熊本市教育委員会、1971)
- 6) 『昭和46年度 熊本市東部地区文化財調査報告書』(熊本市教育委員会、1971)
- 7) 『吉原遺跡発掘調査報告書(昭和56・57年度)』(熊本市教育委員会、1983)
- 8) 『昭和53年度 熊本市内埋蔵文化財調査報告書 上南部遺跡A地点発掘調査』(熊本市教育委員会、1979)
- 9) 『昭和53年度 下南部遺跡調査報告書』(熊本市教育委員会・熊本市住宅協会、1979)
- 10) 熊本大学埋蔵文化財調査報告書第4集『熊本大学構内遺跡発掘調査報告IV(1996・1997年度)』(熊本大学埋蔵文化財調査室、2008)
- 11) 熊本大学埋蔵文化財調査報告書第9集『熊本大学構内遺跡発掘調査報告IX(2003、2006、2011年度)』(熊本大学埋蔵文化財調査センター、2013)
- 12) 『熊本市埋蔵文化財調査年報 第2号ー平成4年度～平成8年度ー』(熊本市教育委員会、1999)
- 13) 『熊本市埋蔵文化財調査年報 第3号 平成9年度～平成10年度』(熊本市教育委員会、2000)
- 14) 『熊本市埋蔵文化財調査年報 第10号ー平成18年度ー』(熊本市教育委員会、2008)
- 15) 『菊陽町遺跡地図』(菊陽町教育委員会、2003)
- 16) 『熊本県遺跡地図』(熊本県教育委員会、1994)
- 17) 『新熊本市史史料編 第一巻考古資料』(熊本市、1996)
- 18) 「熊本市吉原遺跡1区出土の弥生人骨」(松下真美・松下孝幸、2014)
- 19) 「熊本市吉原遺跡3区出土の弥生人骨」(松下真美・松下孝幸、2014)
- 20) 「弥生時代人骨の分析」(松下孝幸、2001)
- 21) 「熊本県大津町中島宝満鶴・岩坂葉柳遺跡出土の弥生・中世人骨」(土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 松下孝幸・松下真美・沖田絵麻、2013)



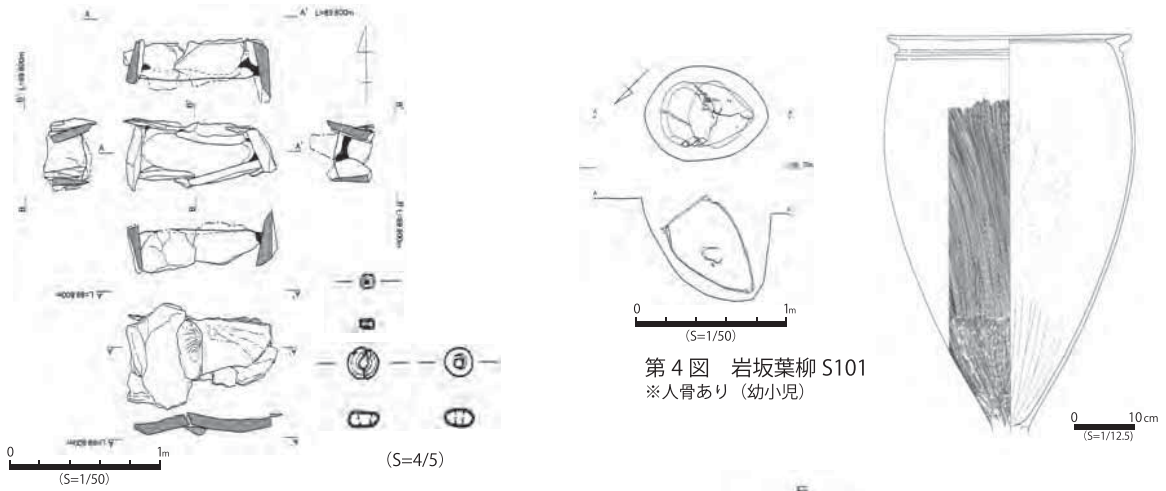
第 1 図 白川中流域弥生時代遺跡分布図



- 6 いわさかひのくち 岩坂樋ノ口遺跡
- 7 なかしまほうまんつる 中島宝満鶴遺跡
- 8 いわさかはやなぎ 岩坂葉柳遺跡



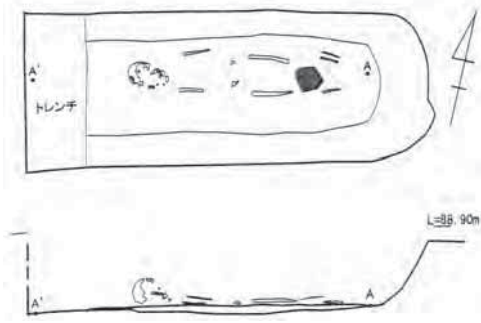
第2図 岩坂樋ノ口遺跡・中島宝満鶴遺跡・岩坂葉柳遺跡遺構位置図



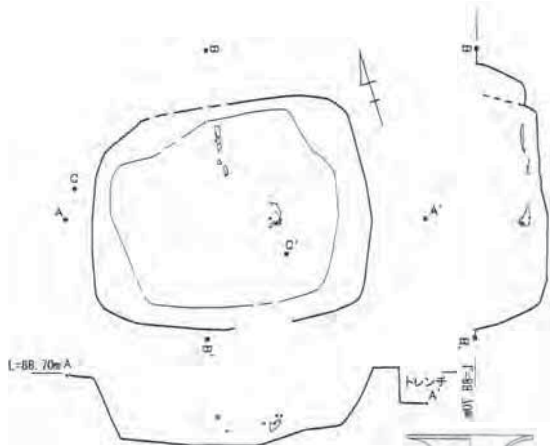
第3図 中島宝満鶴 S001

第5図 岩坂葉柳 S060

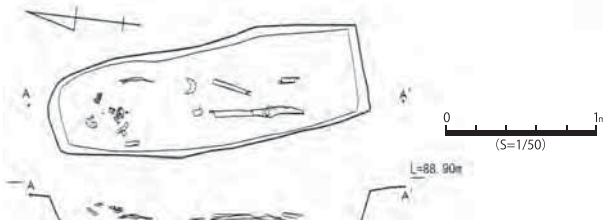
第6図 岩坂葉柳 S065



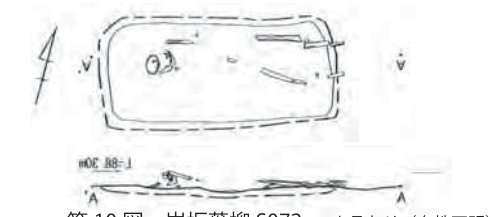
第7図 岩坂葉柳 S066 ※人骨あり (男性不明)



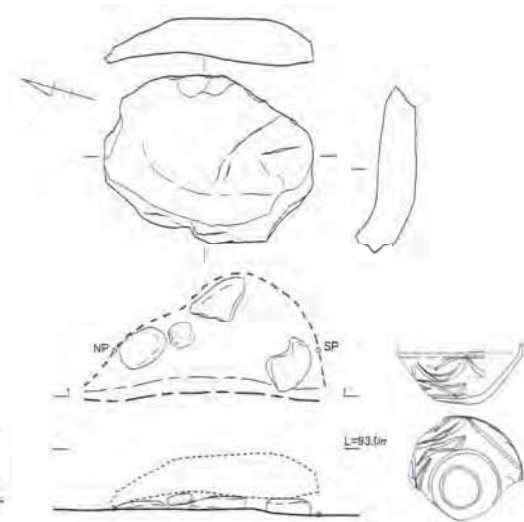
第8図 岩坂葉柳 S073  
※人骨あり (不明)



第9図 岩坂葉柳 S074 ※人骨あり (男性不明)



第10図 岩坂葉柳 S072 ※人骨あり (女性不明)

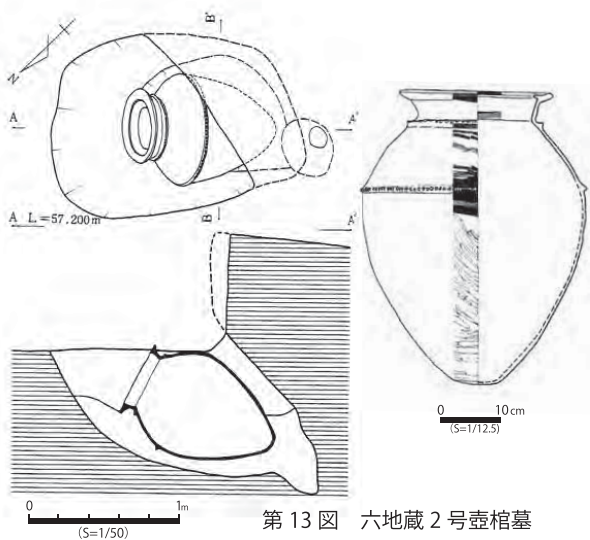


第11図 岩坂樋ノ口 S002

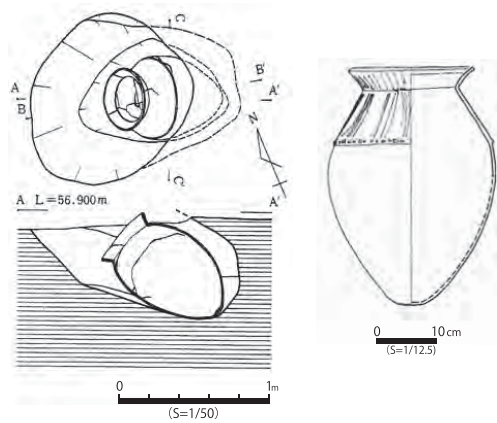
21 ろくじぞう 六地藏遺跡



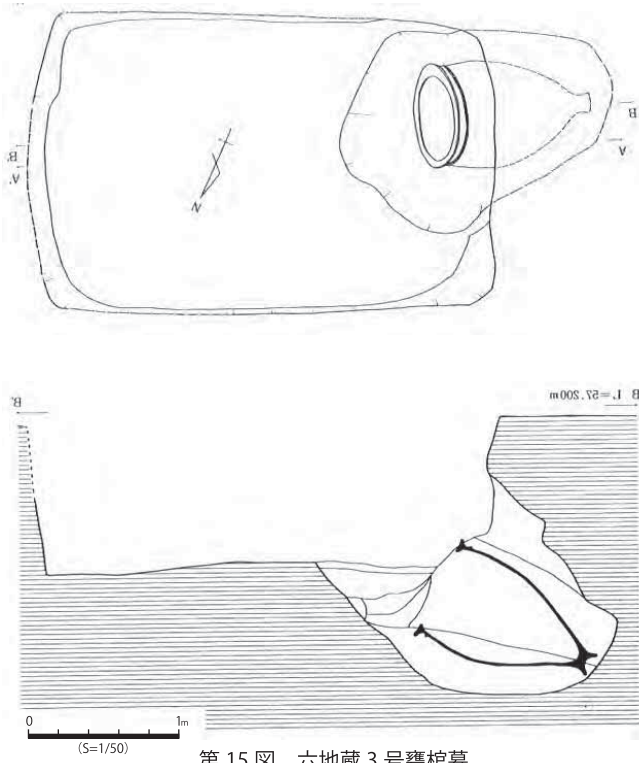
第12図 六地藏遺跡遺構配置図



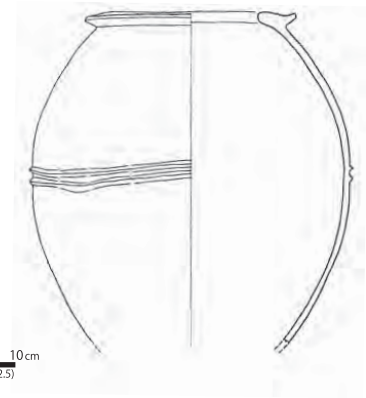
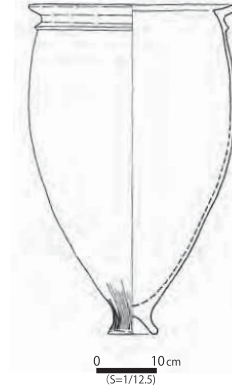
第13図 六地藏2号壺棺墓



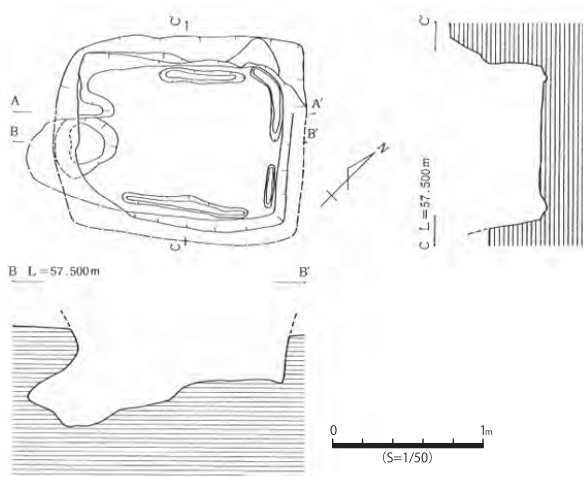
第14図 六地藏1号壺棺墓



第 15 図 六地藏 3 号甕棺墓

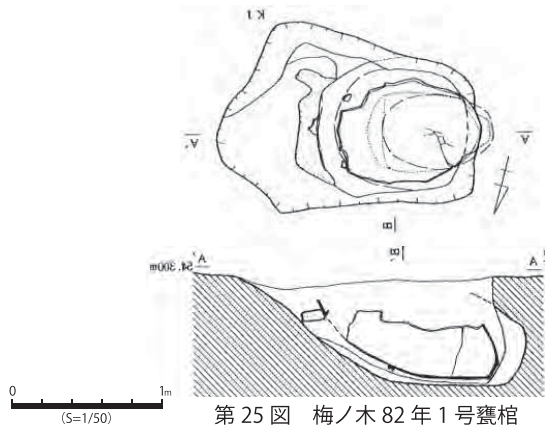


第 16 図 六地藏調査区内出土資料

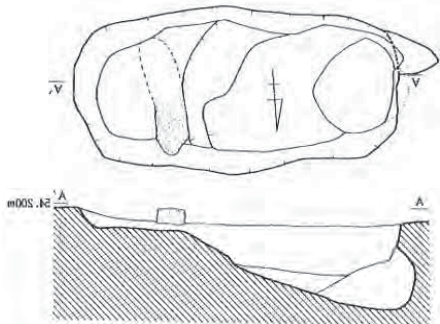


第 17 図 六地藏 4 号木棺墓

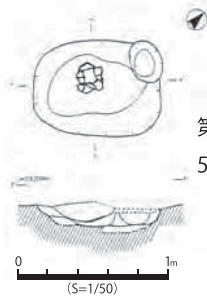




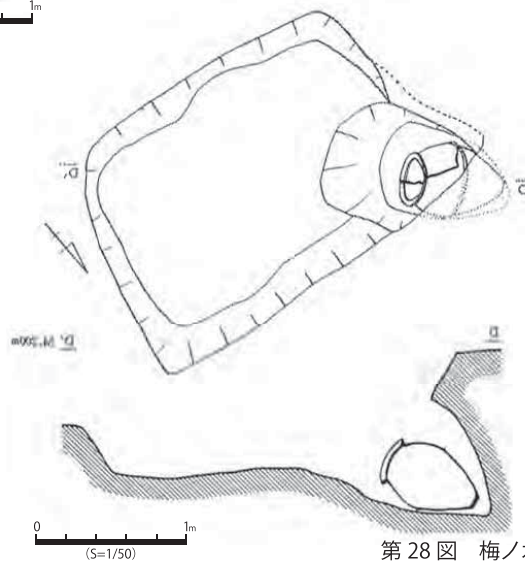
第 25 図 梅ノ木 82 年 1 号甕棺



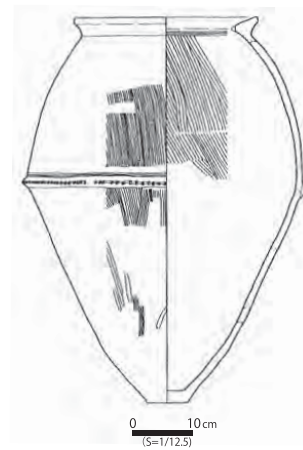
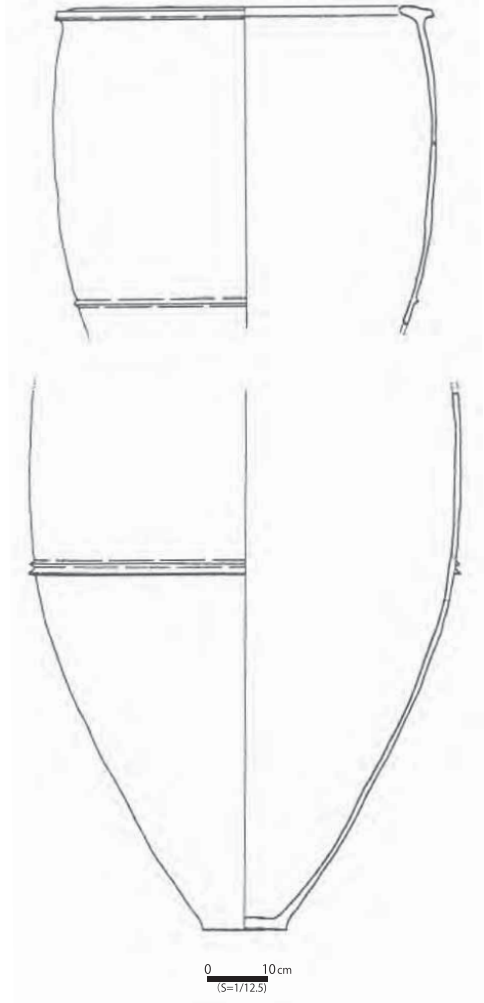
第 26 図 梅ノ木 82 年 3 号甕棺  
※棺身なし

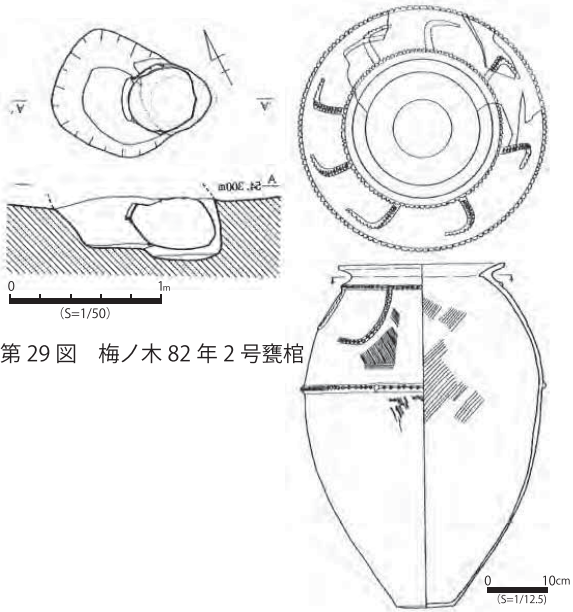


第 27 図 梅ノ木確認調査区 1  
515SX ※棺身図化なし

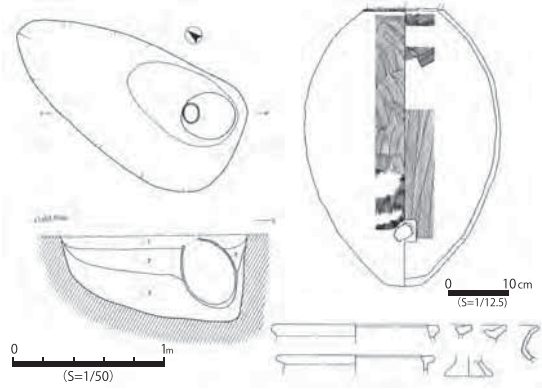


第 28 図 梅ノ木 82 年 4 号甕棺

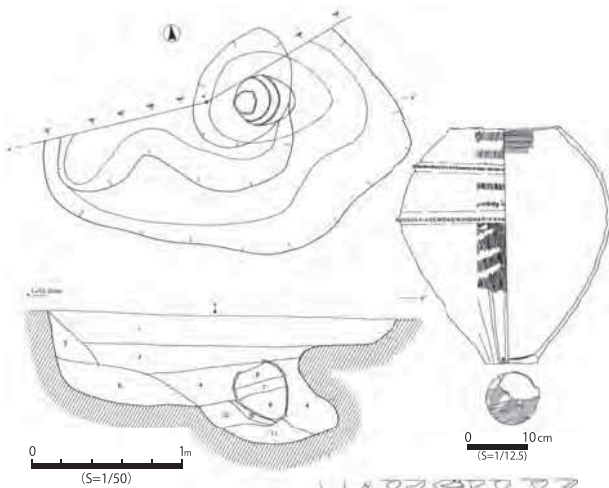




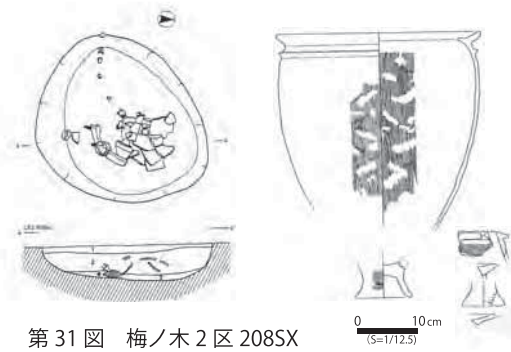
第 29 図 梅ノ木 82 年 2 号 葬 棺



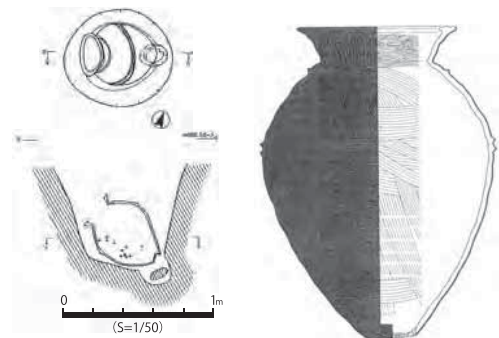
第 30 図 梅ノ木 2 区 230SX ※骨片あり



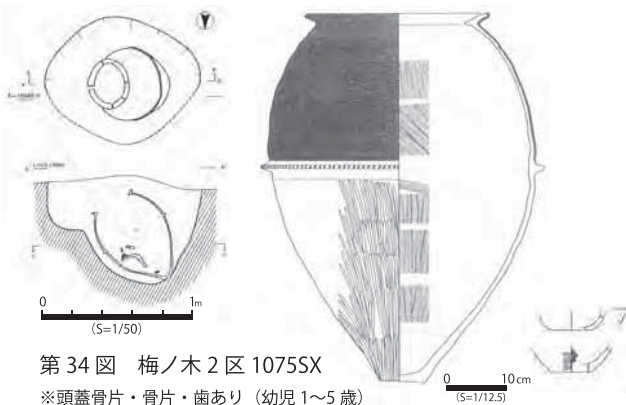
第 32 図 梅ノ木 2 区 229SX



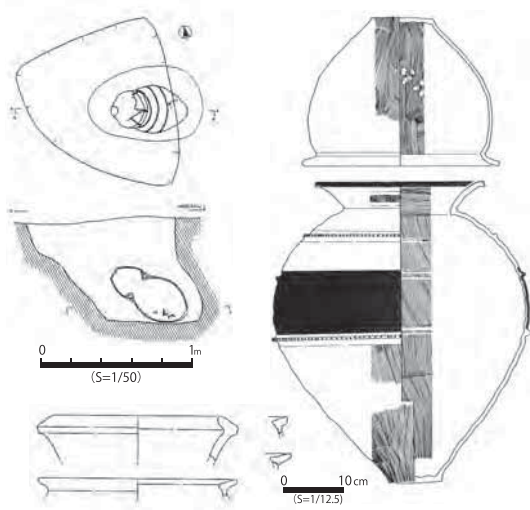
第 31 図 梅ノ木 2 区 208SX



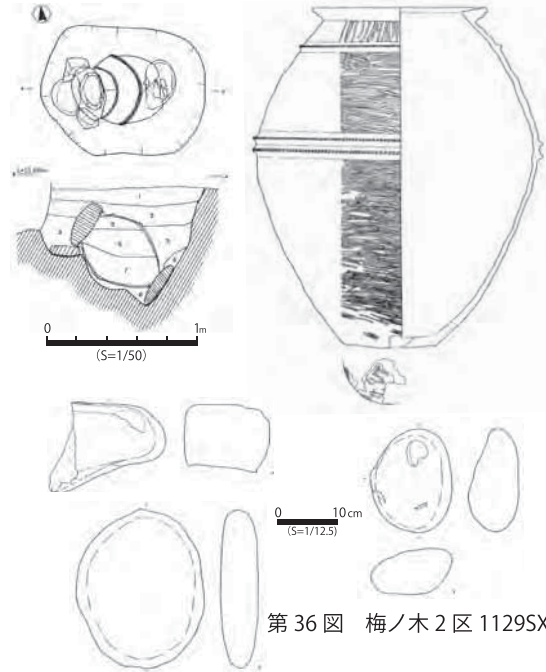
第 33 図 梅ノ木 2 区 1150SX  
※骨片・歯あり (乳児 9 ヶ月)



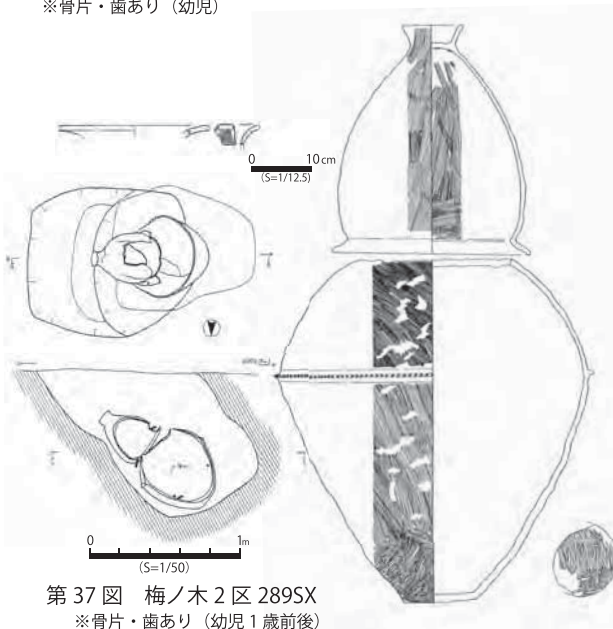
第 34 図 梅ノ木 2 区 1075SX  
※頭蓋骨片・骨片・歯あり (幼児 1~5 歳)



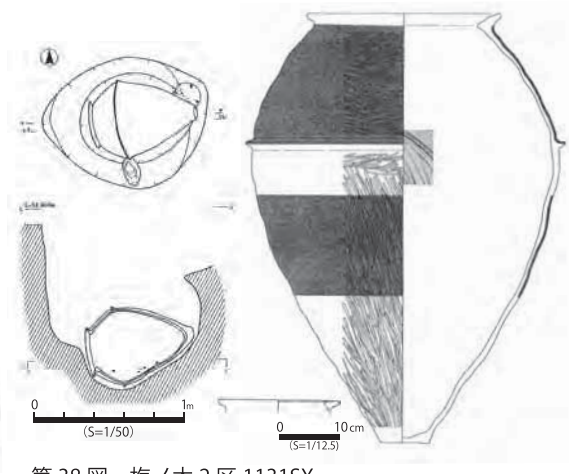
第35図 梅ノ木2区 228SX  
※骨片・歯あり(幼児)



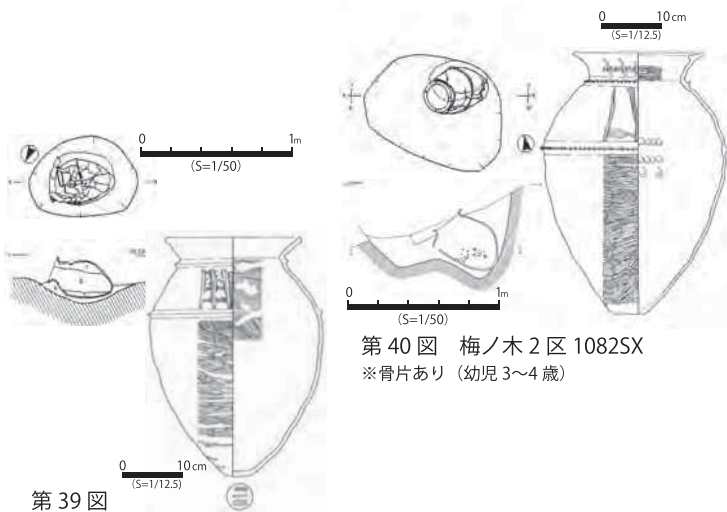
第36図 梅ノ木2区 1129SX



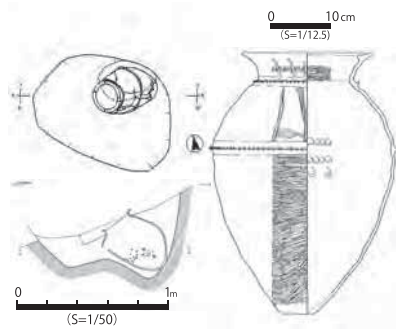
第37図 梅ノ木2区 289SX  
※骨片・歯あり(幼児1歳前後)



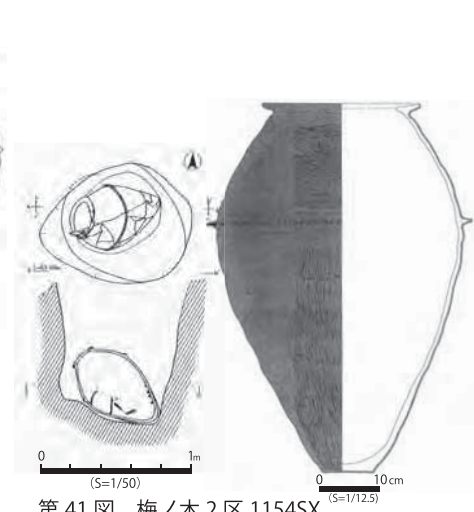
第38図 梅ノ木2区 1131SX  
※骨片・歯あり(乳児3~6か月)



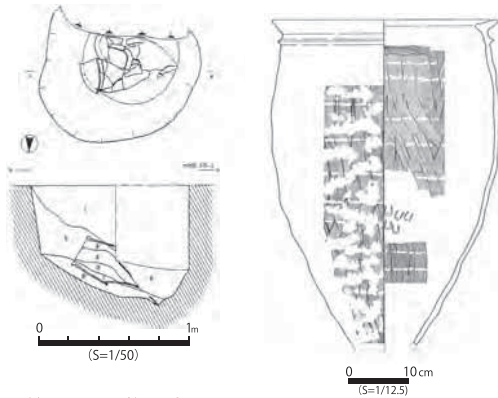
第39図  
梅ノ木2区 1081SX



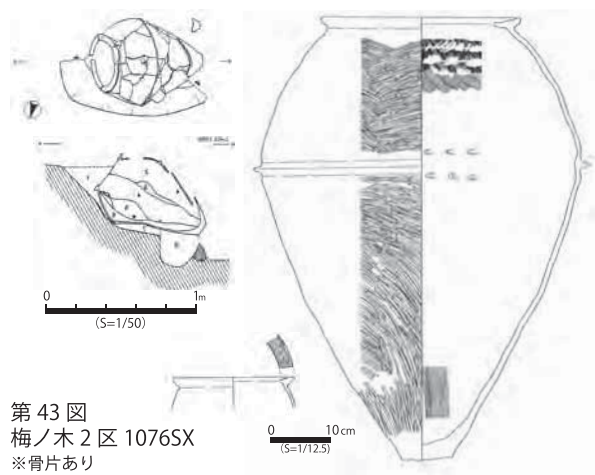
第40図 梅ノ木2区 1082SX  
※骨片あり(幼児3~4歳)



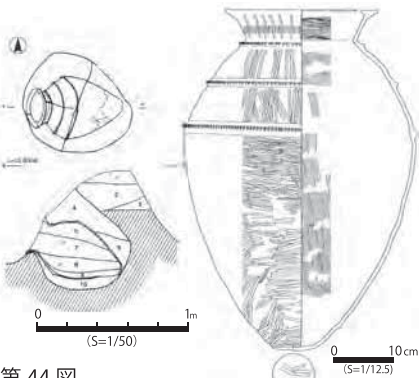
第41図 梅ノ木2区 1154SX  
※頭蓋骨・骨片・歯あり(幼児3~4歳)



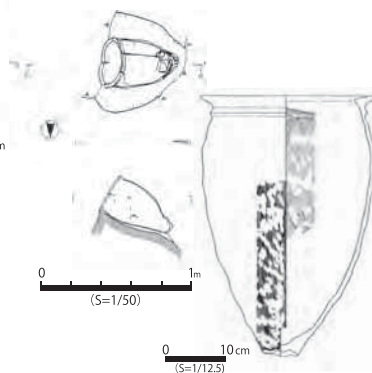
第 42 図 梅ノ木 2 区 1083SX  
※掘り方上部に骨片あり



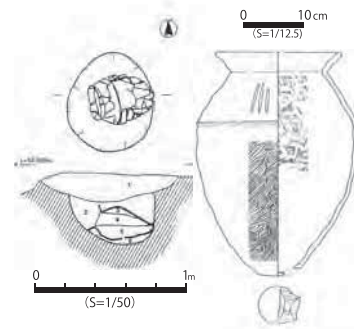
第 43 図  
梅ノ木 2 区 1076SX  
※骨片あり



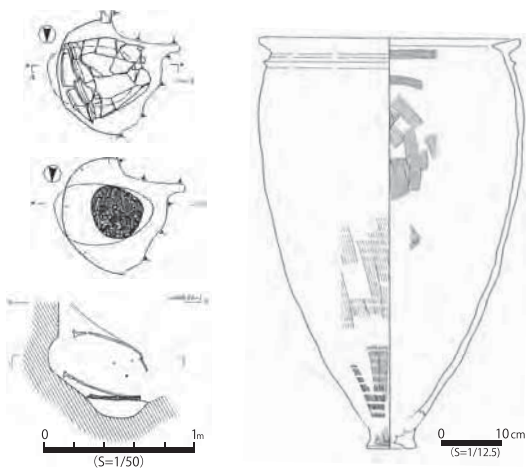
第 44 図  
梅ノ木 2 区 1084SX  
※骨片あり



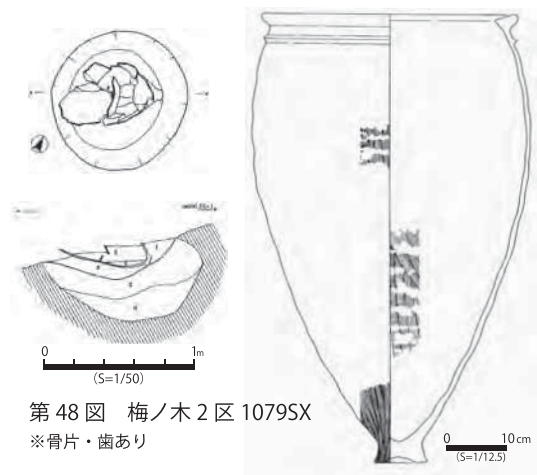
第 45 図 梅ノ木 2 区 1080SX  
※骨片・歯あり



第 46 図 梅ノ木 2 区 1108SX

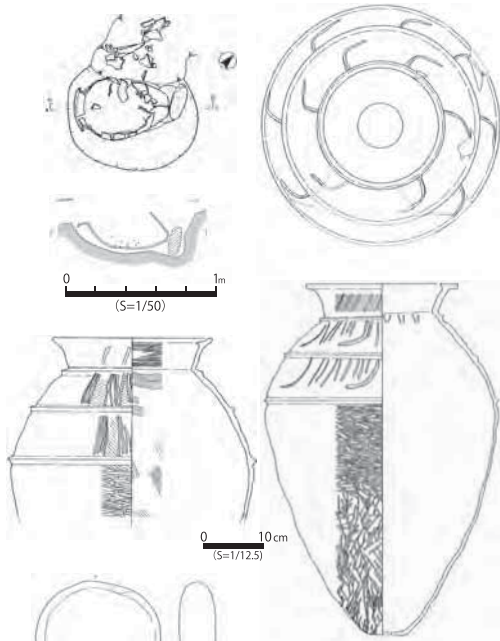


第 47 図 梅ノ木 2 区 1078SX  
※掘り方内に焼土あり  
※骨片・歯あり

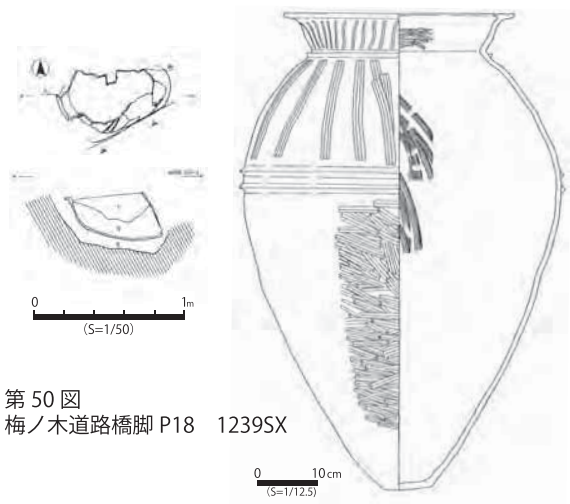


第 48 図 梅ノ木 2 区 1079SX  
※骨片・歯あり



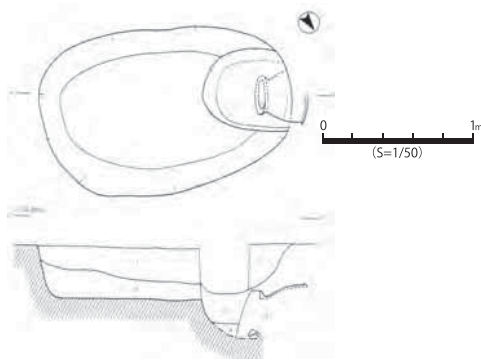


第49図  
梅ノ木2区 1077SX  
※骨片・歯あり (幼児2~3歳)

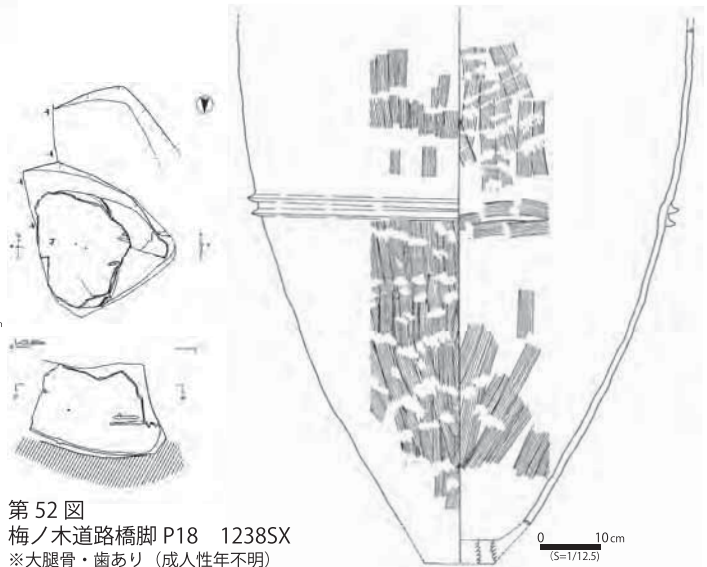


第50図  
梅ノ木道路橋脚 P18 1239SX

0 10cm  
(S=1/12.5)

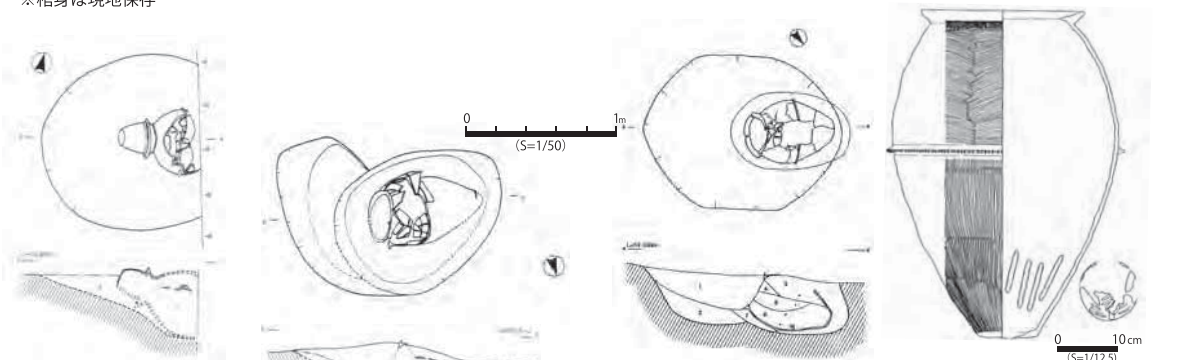


第51図  
梅ノ木確認調査区1 504SX  
※棺身は現地保存

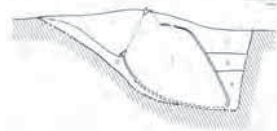


第52図  
梅ノ木道路橋脚 P18 1238SX  
※大腿骨・歯あり (成人性年不明)

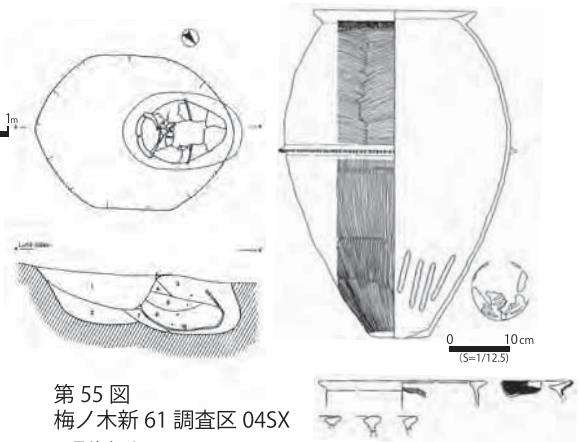
0 10cm  
(S=1/12.5)



第53図  
梅ノ木確認調査区1 505SX  
※棺身は現地保存

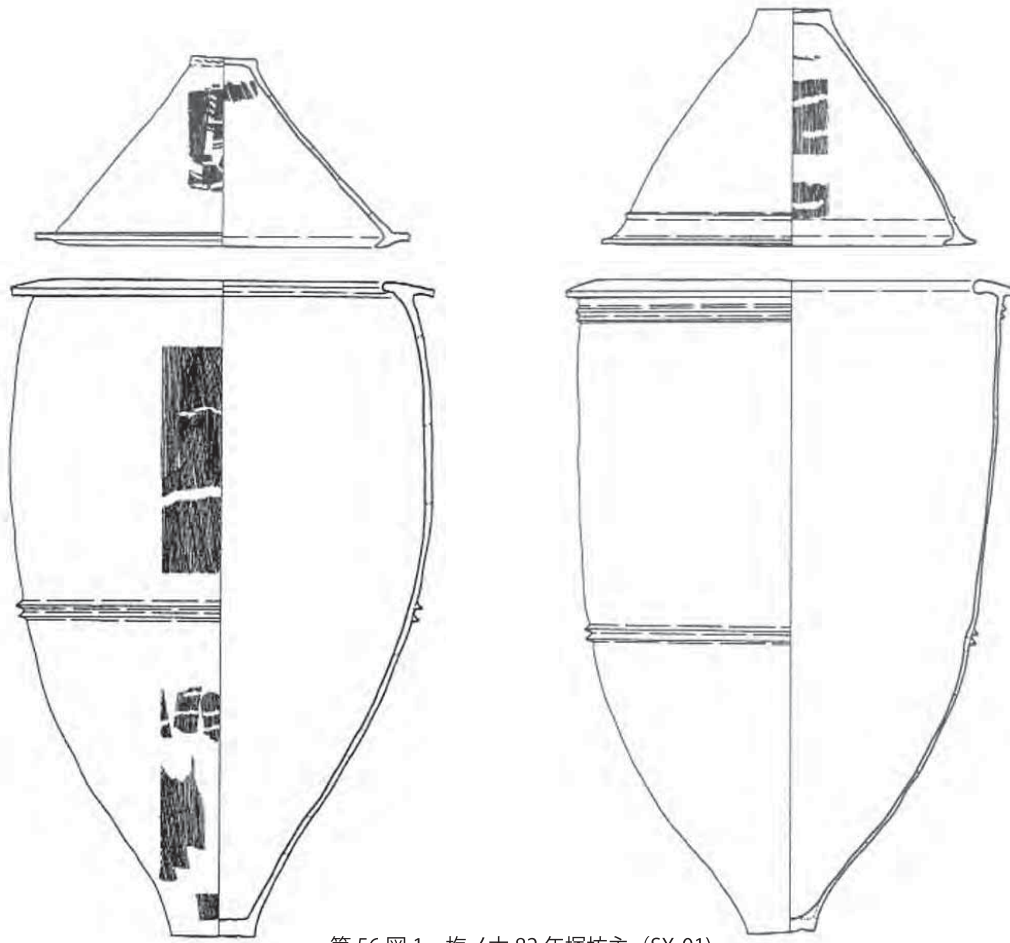


第54図  
梅ノ木確認調査区1 508SX  
※棺身は現地保存



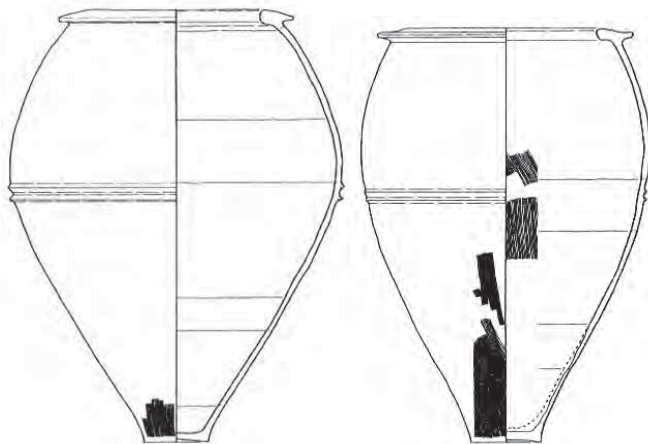
第55図  
梅ノ木新61 調査区04SX  
※骨片あり

0 10cm  
(S=1/12.5)

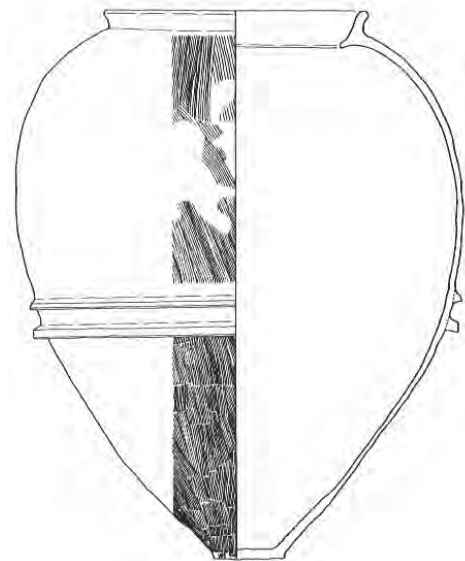


第 56 図 1 梅ノ木 82 年塚坊主 (SX-01)  
※一括出土のため組み合わせ不明

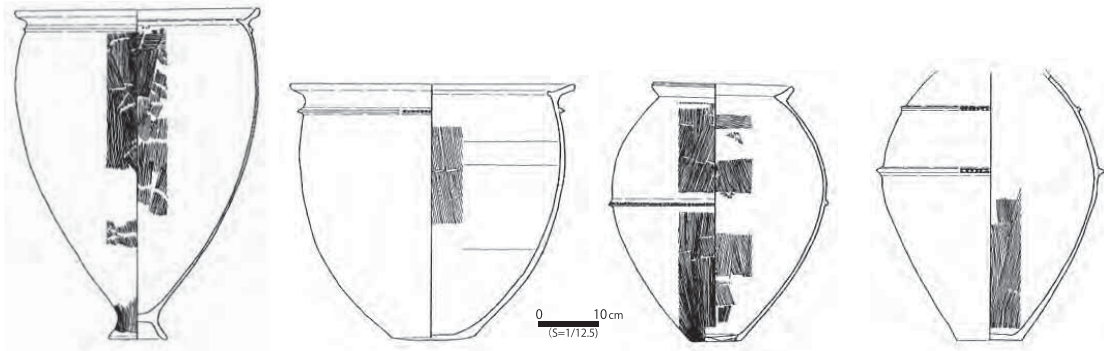
0 10 cm  
(S=1/12.5)



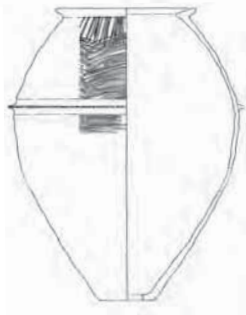
第 56 図 2 梅ノ木 82 年塚坊主 (SX-01)  
※掘り方不明



第 57 図 1 梅ノ木調査区北方一括※掘り方不明



第 57 図 2 梅ノ木調査区北方一括 ※掘り方情報なし



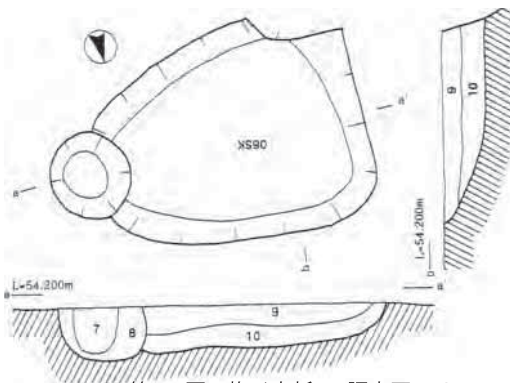
第 59 図 梅ノ木 2 区 1137SX  
※骨片・歯あり (成人不明)



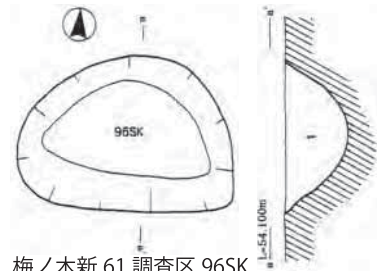
第 60 図 梅ノ木新 61 調査区 085K

※出土地点不明

第 58 図 梅ノ木 1210SX

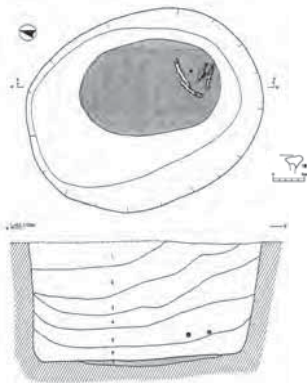
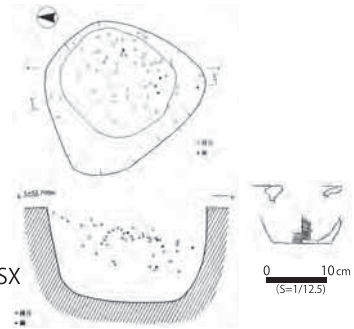


第 62 図 梅ノ木新 61 調査区 065K

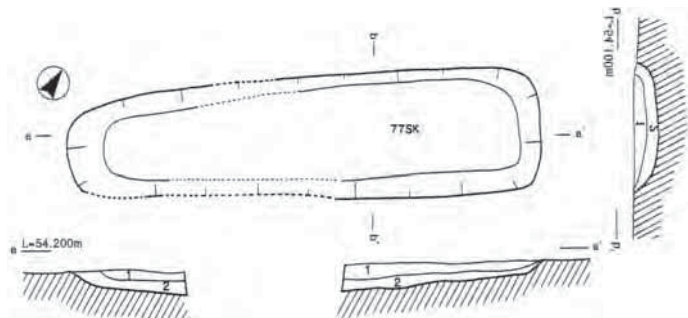


第 61 図 梅ノ木新 61 調査区 965K

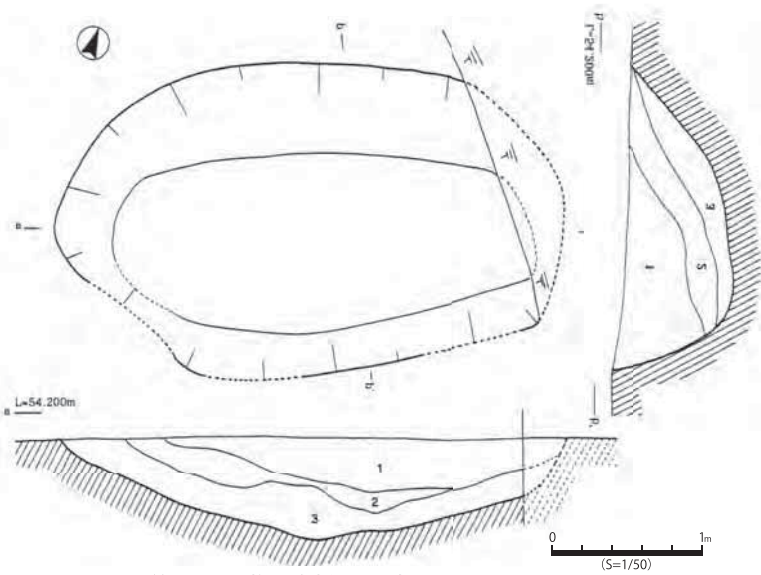
第 63 図 梅ノ木 2 区 1136SX  
※骨片・歯あり



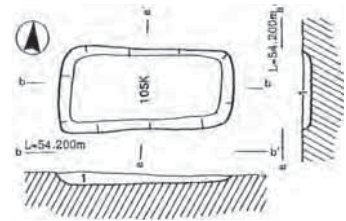
第 64 図 梅ノ木 2 区 1153SX  
※人骨あり (女性)



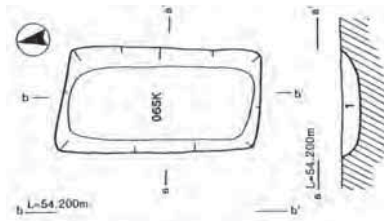
第 65 図 梅ノ木新 61 調査区 775K



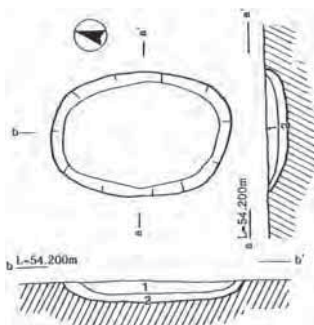
第 66 図 梅ノ木新 61 調査区 84SK



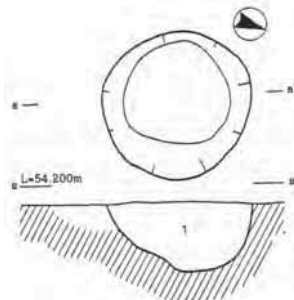
第 67 図 梅ノ木 61 調査区 105K



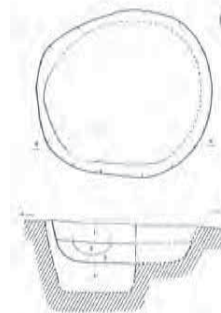
第 68 図 梅ノ木 61 調査区 065K



第 69 図 梅ノ木 61 調査区 055K



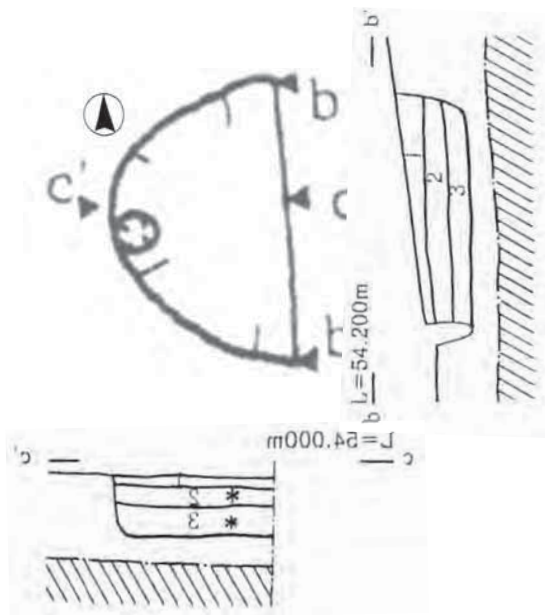
第 70 図 梅ノ木 61 調査区 035K



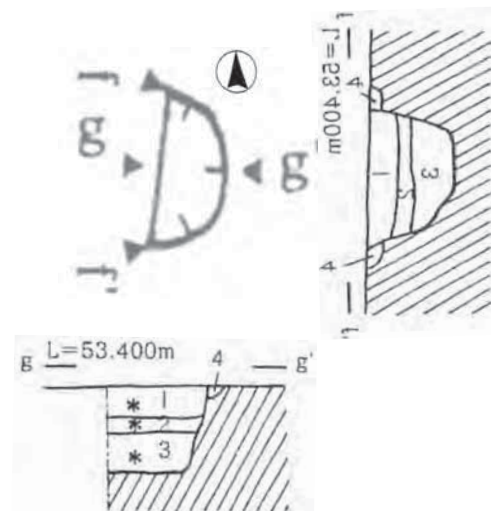
第 71 図 梅ノ木 確認調査区 1 503SX



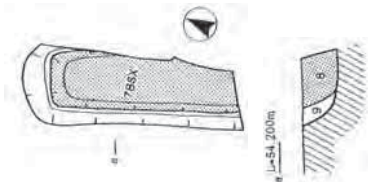
第 72 図 梅ノ木 確認調査区 3 8015K



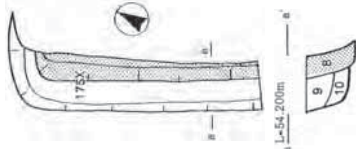
第 73 図 梅ノ木 確認調査区 3 804SK



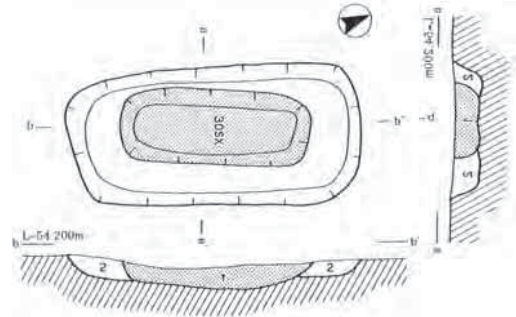
第 74 図 梅ノ木 確認調査区 3 806SK



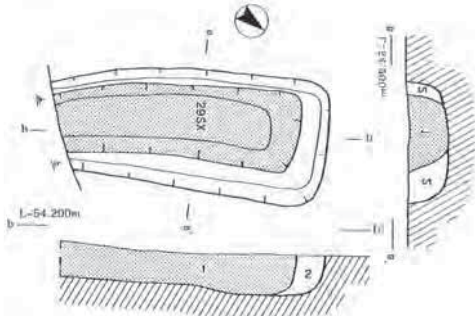
第75図 梅ノ木新61調査区78SX



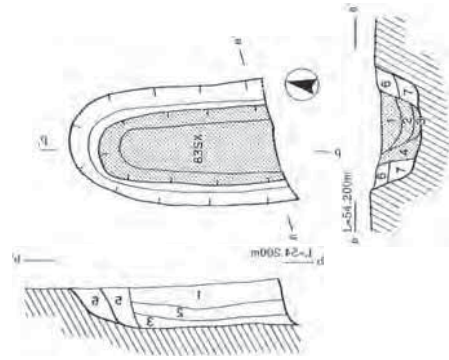
第76図 梅ノ木新61調査区17SX



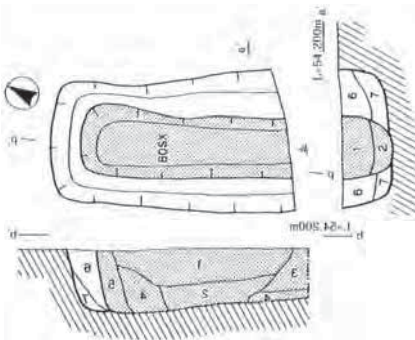
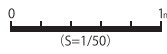
第77図 梅ノ木新61調査区30SX



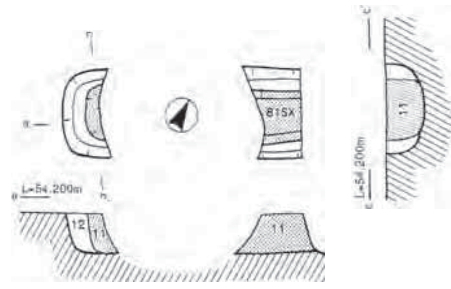
第78図 梅ノ木新61調査区29SX



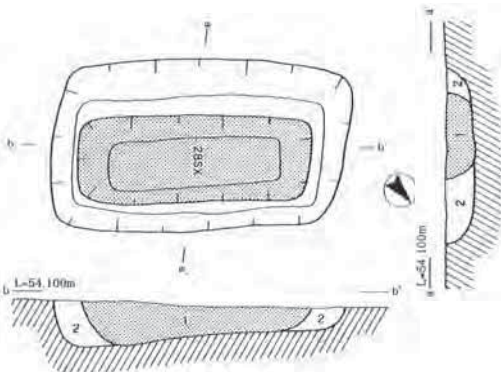
第79図 梅ノ木新61調査区83SX



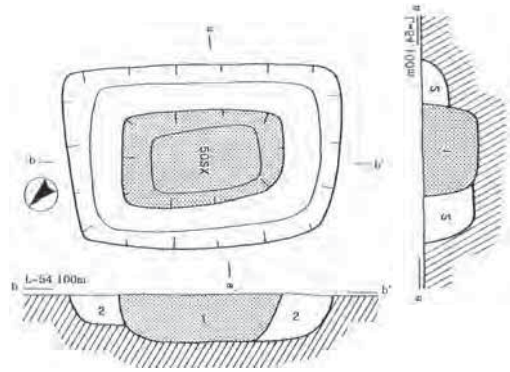
第80図 梅ノ木新61調査区80SX



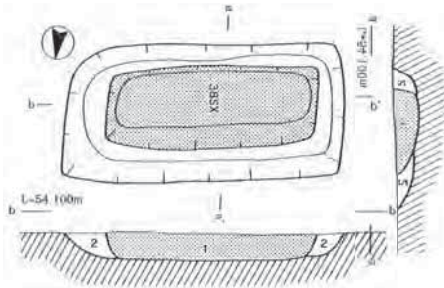
第81図 梅ノ木新61調査区81SX



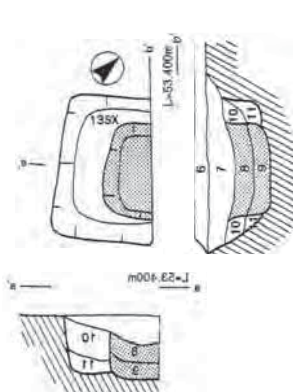
第82図 梅ノ木新61調査区28SX



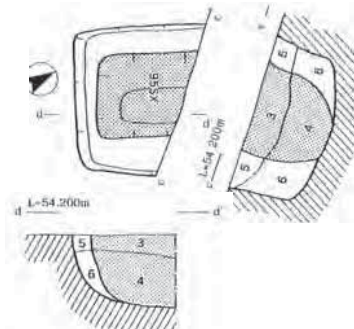
第83図 梅ノ木新61調査区50SX



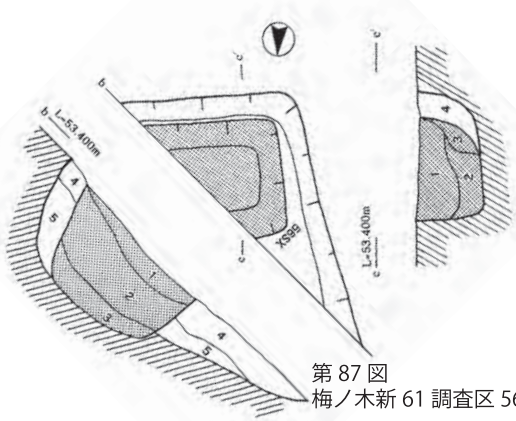
第 84 図 梅ノ木新 61 調査区 38SX



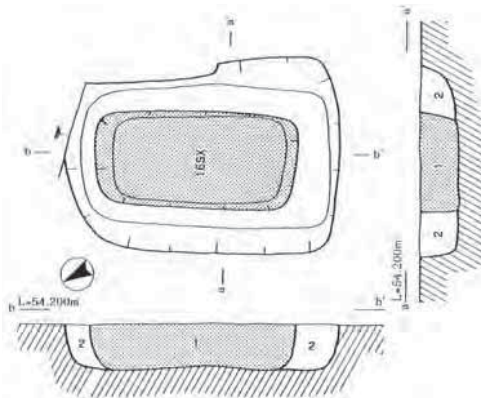
第 85 図 梅ノ木新 61 調査区 13SX



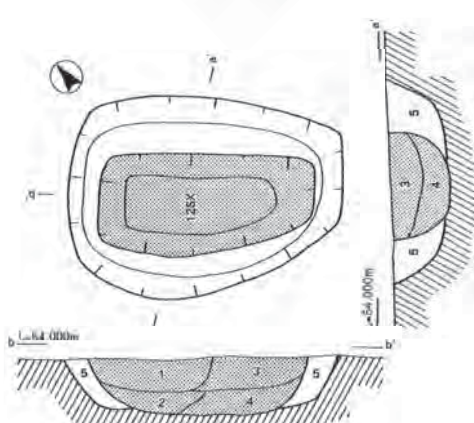
第 86 図 梅ノ木新 61 調査区 95SX



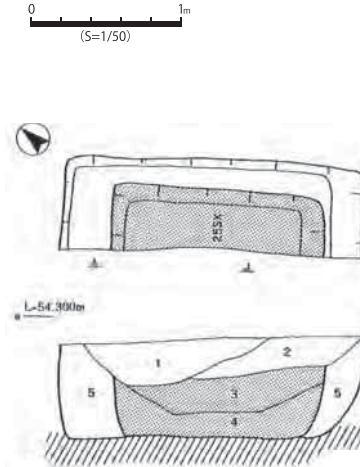
第 87 図  
梅ノ木新 61 調査区 56SX



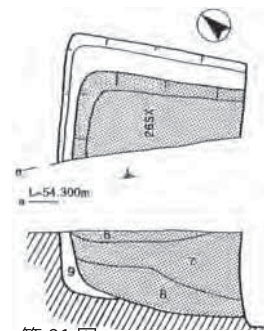
第 88 図 梅ノ木新 61 調査区 16SX



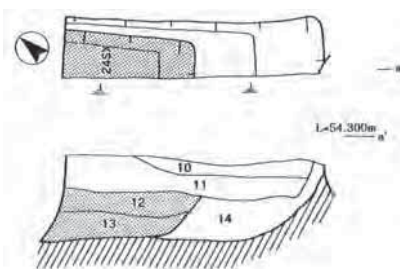
第 89 図 梅ノ木新 61 調査区 12SX



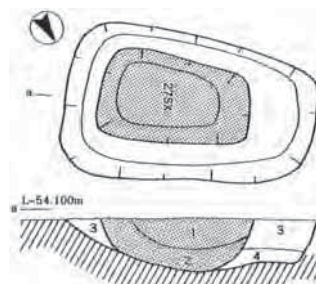
第 90 図 梅ノ木新 61 調査区 25SX



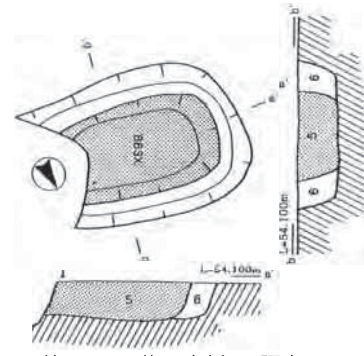
第 91 図  
梅ノ木新 61 調査区 26SX



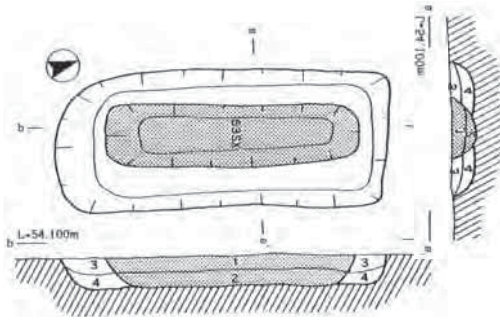
第 92 図 梅ノ木新 61 調査区 24SX



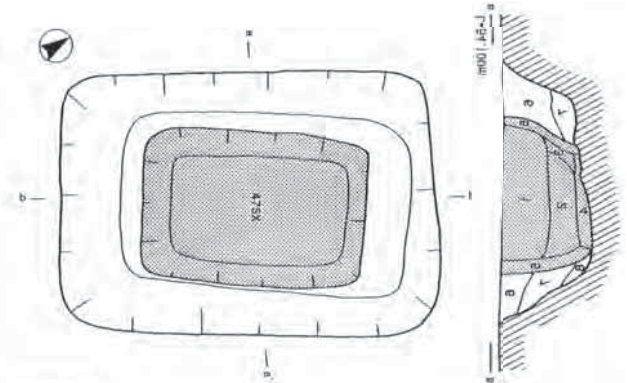
第 93 図 梅ノ木新 61 調査区 27SX



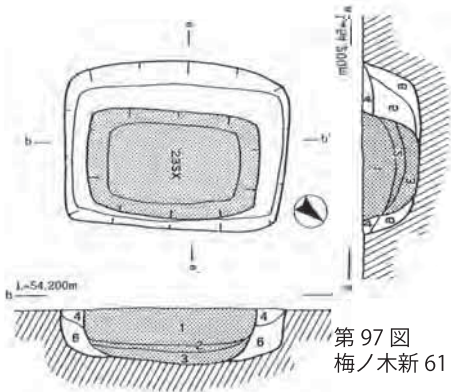
第 94 図 梅ノ木新 61 調査区 88SX



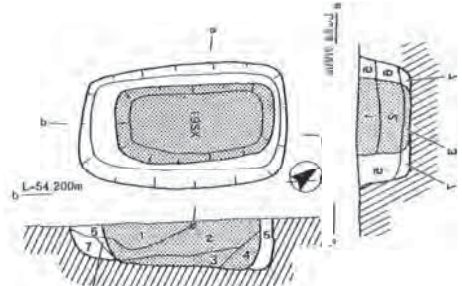
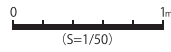
第 95 図 梅ノ木新 61 調査区 63SX



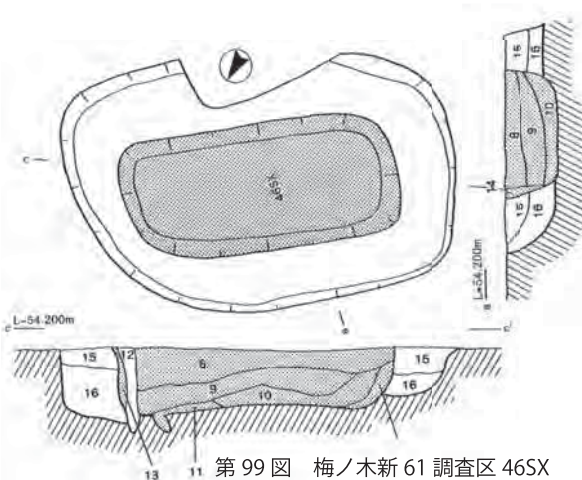
第 96 図 梅ノ木新 61 調査区 47SX



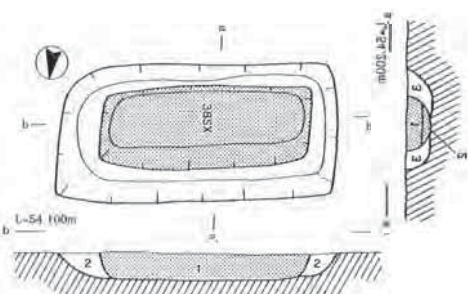
第 97 図  
梅ノ木新 61 調査区 23SX



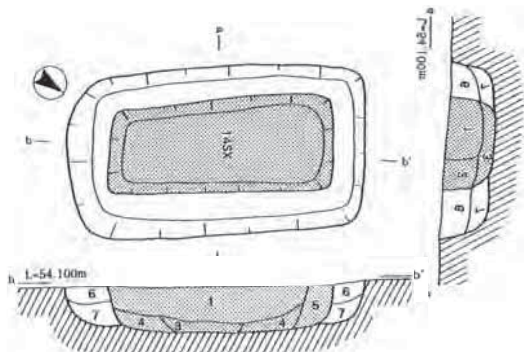
第 98 図 梅ノ木新 61 調査区 19SX



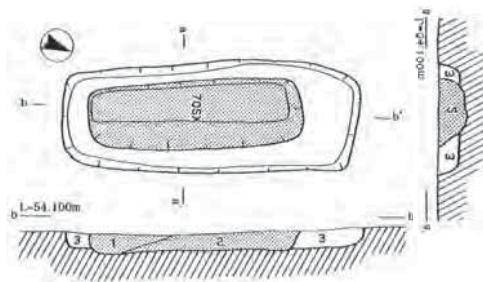
第 99 図 梅ノ木新 61 調査区 46SX



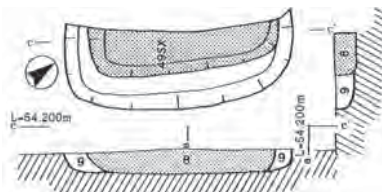
第 100 図 梅ノ木新 61 調査区 36SX



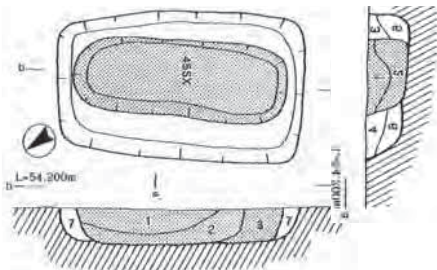
第 101 図 梅ノ木新 61 調査区 14SX



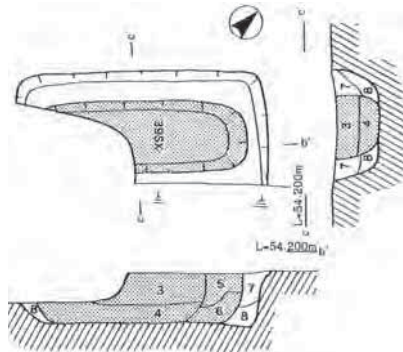
第 102 図 梅ノ木新 61 調査区 70SX



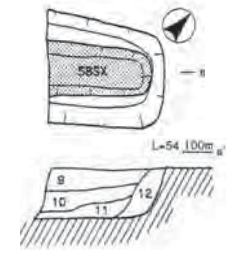
第 103 図 梅ノ木新 61 調査区 49SX



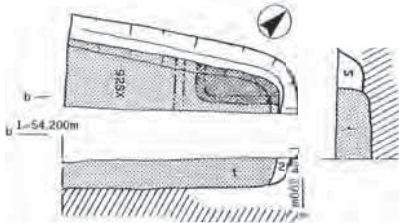
第104図 梅ノ木新61調査区45SX



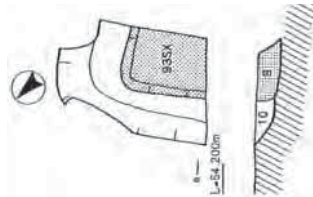
第105図 梅ノ木新61調査区39SX



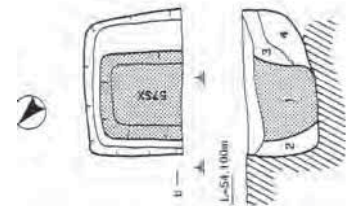
第106図 梅ノ木新61調査区58SX



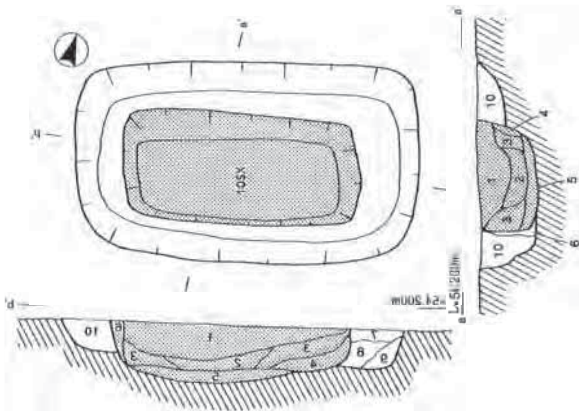
第107図 梅ノ木新61調査区92SX



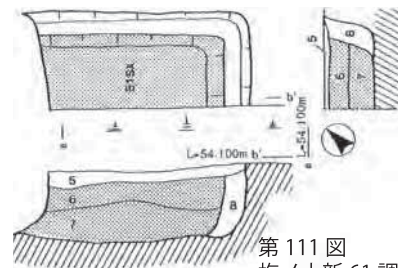
第108図 梅ノ木新61調査区93SX



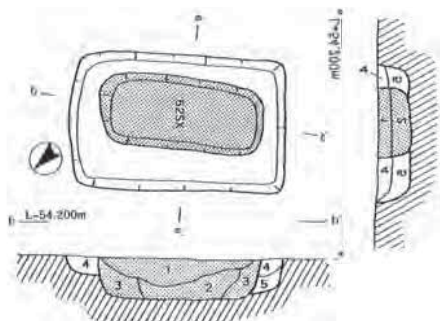
第109図 梅ノ木新61調査区57SX



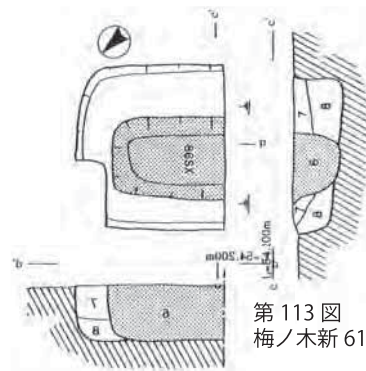
第110図 梅ノ木新61調査区10SX



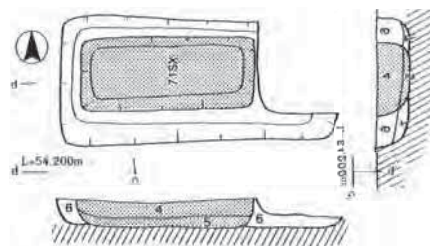
第111図 梅ノ木新61調査区51SX



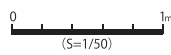
第112図 梅ノ木新61調査区62SX



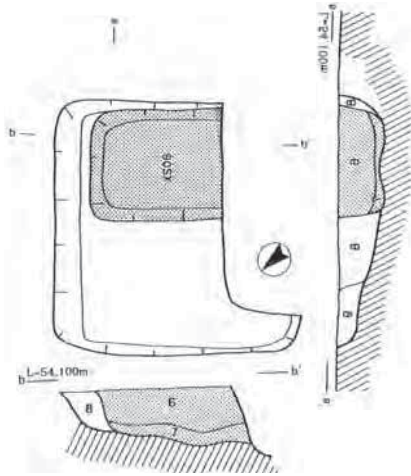
第113図 梅ノ木新61調査区86SX



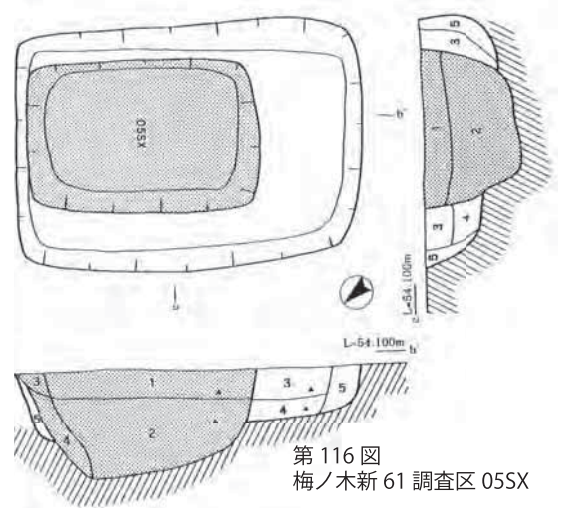
第114図 梅ノ木新61調査区71SX



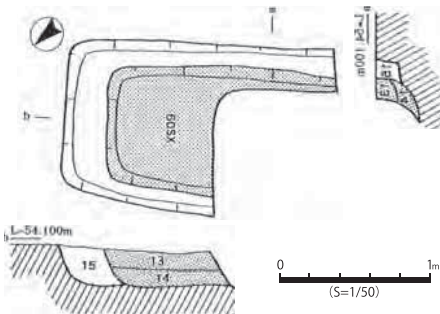




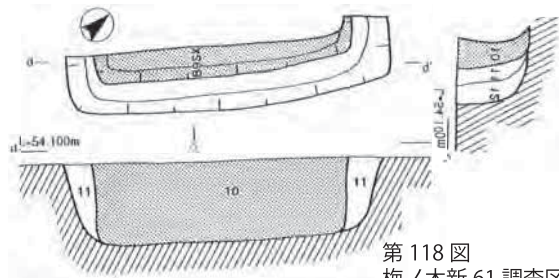
第115図 梅ノ木新61調査区 90SX



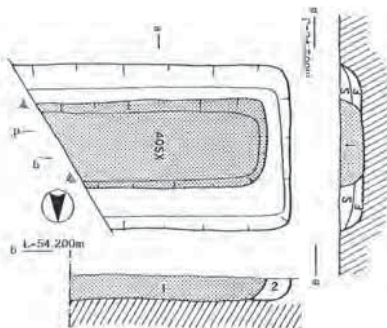
第116図 梅ノ木新61調査区 05SX



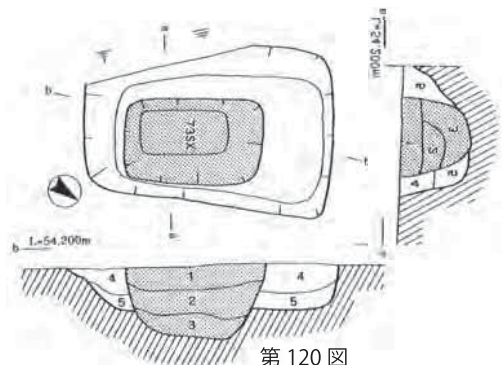
第117図 梅ノ木新61調査区 60SX



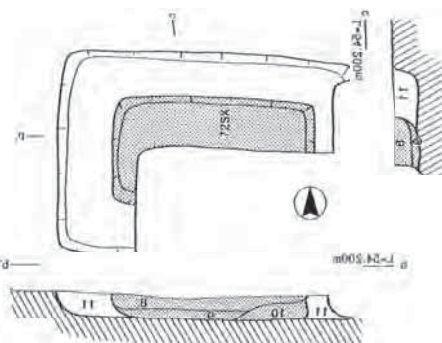
第118図 梅ノ木新61調査区 89SX



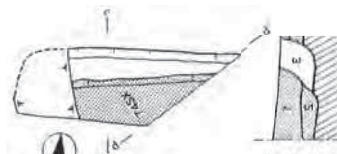
第119図 梅ノ木新61調査区 40SX



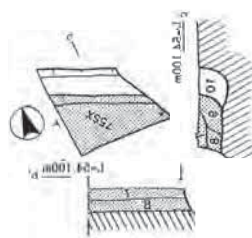
第120図 梅ノ木新61調査区 73SX



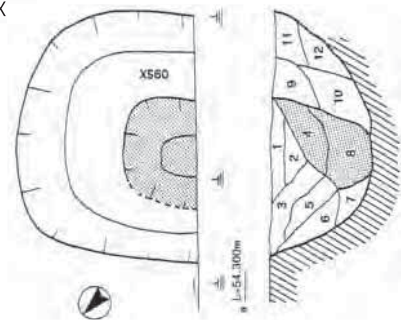
第121図 梅ノ木新61調査区 72SX



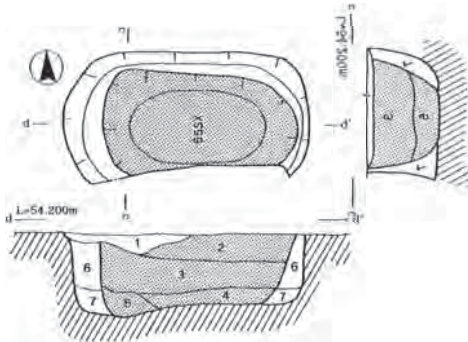
第122図 梅ノ木新61調査区 74SX



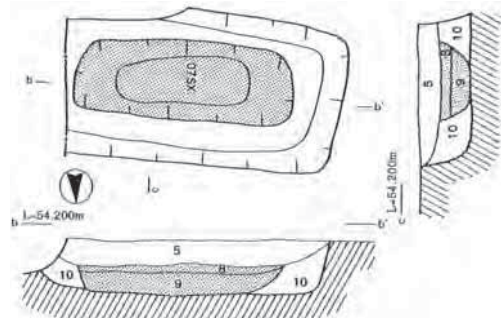
第123図 梅ノ木新61調査区 75SX



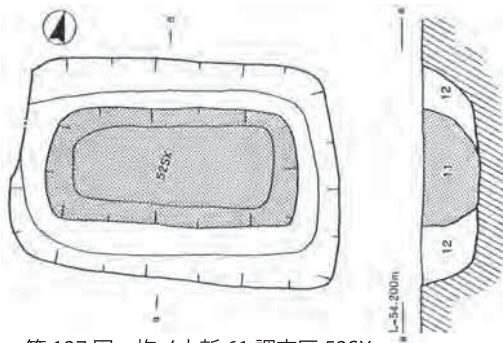
第124図 梅ノ木新61調査区 09SX



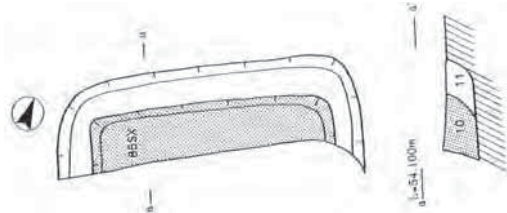
第 125 図 梅ノ木新 61 調査区 55SX



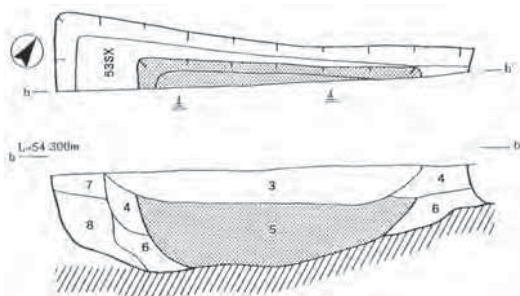
第 126 図 梅ノ木新 61 調査区 07SX



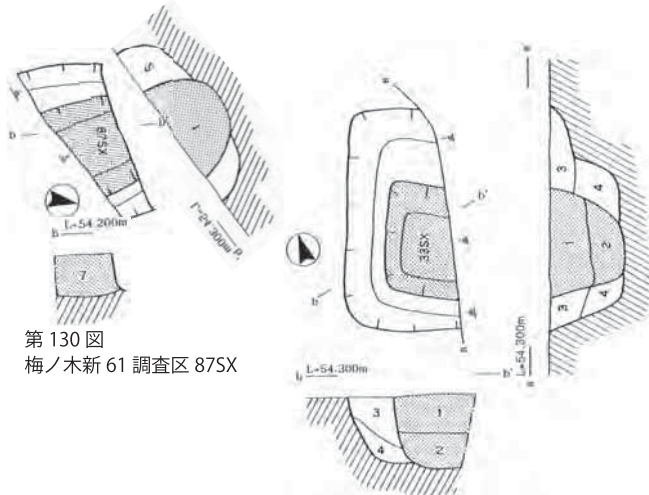
第 127 図 梅ノ木新 61 調査区 52SX



第 128 図 梅ノ木新 61 調査区 85SX

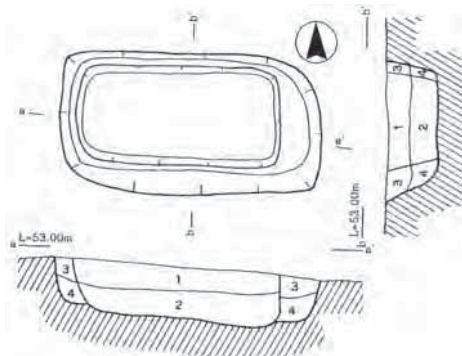


第 129 図 梅ノ木新 61 調査区 53SX

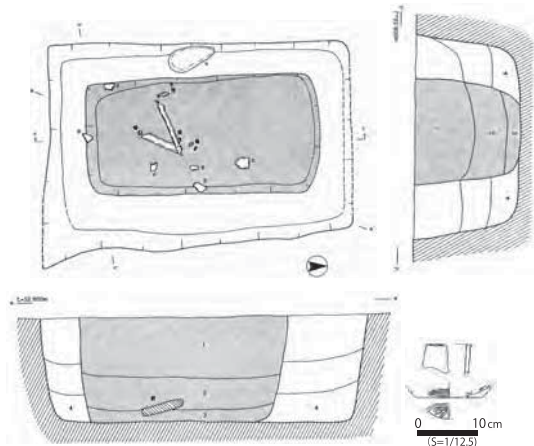


第 130 図  
梅ノ木新 61 調査区 87SX

第 131 図 梅ノ木新 61 調査区 33SX

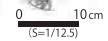
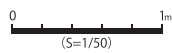


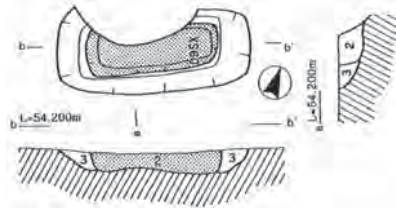
第 132 図 梅ノ木 2 区 287SX



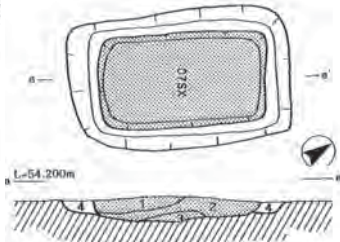
第 133 図 梅ノ木 2 区 1135SX

※人骨あり (男性不明)

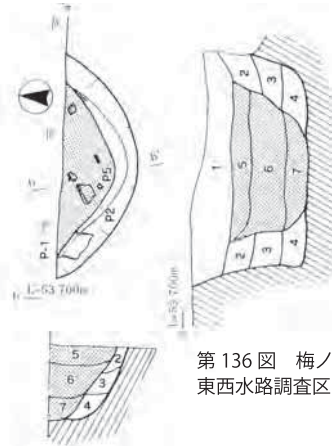




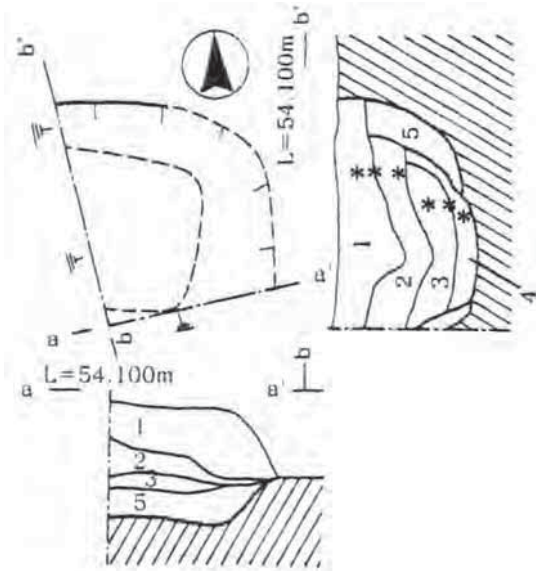
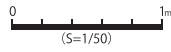
第134図 梅ノ木61調査区09SX



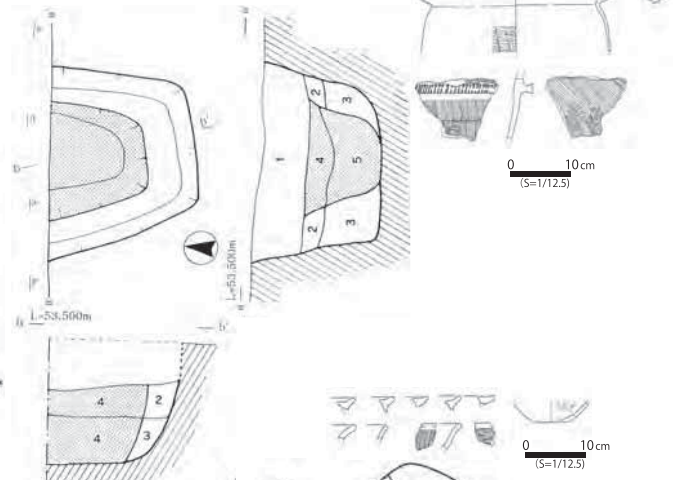
第135図 梅ノ木61調査区07SX



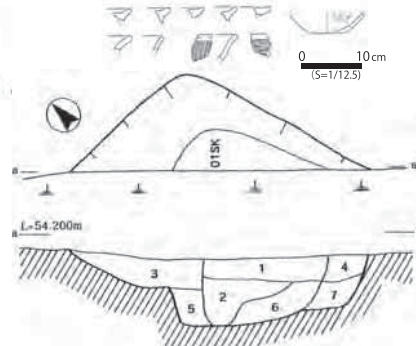
第136図 梅ノ木  
東西水路調査区16SX



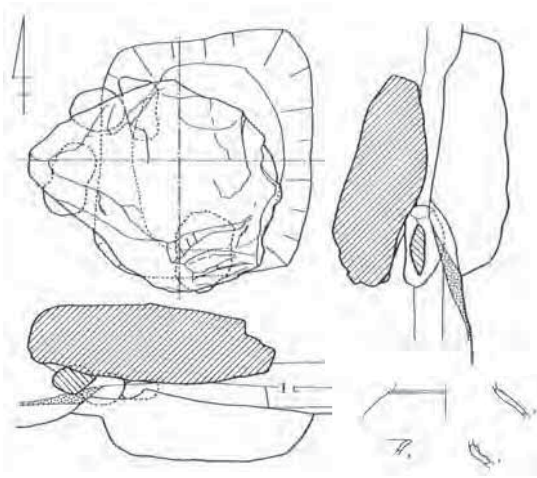
第137図 梅ノ木確認調査区4 SK01



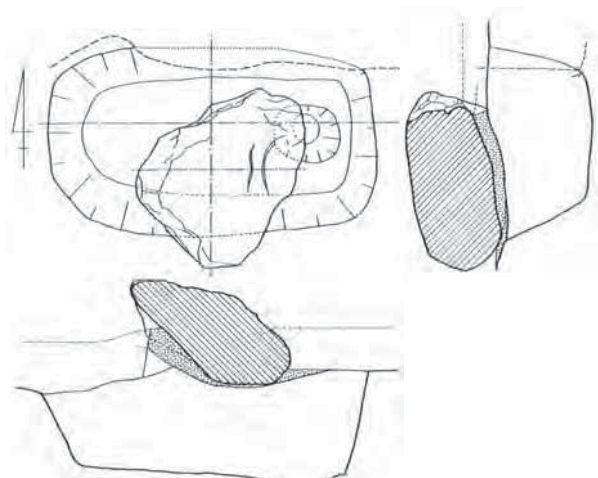
第138図 梅ノ木  
東西水路調査区17SX



第139図 梅ノ木61調査区01SK

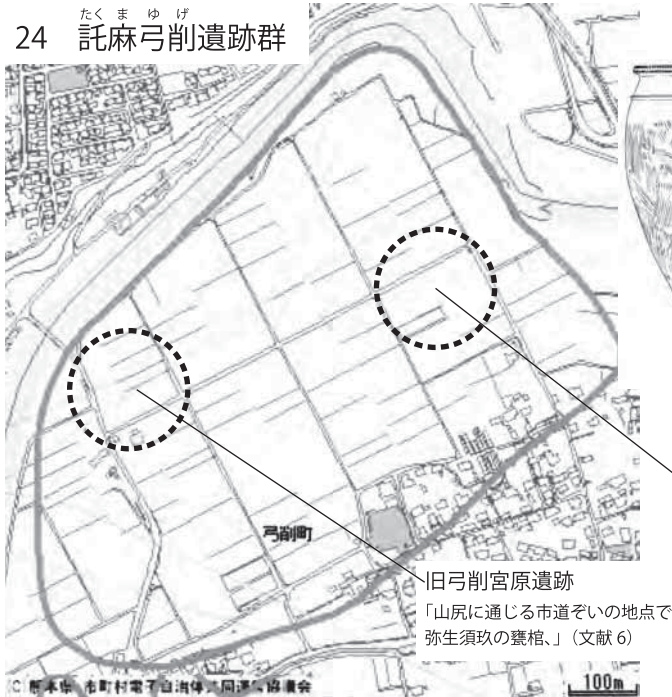


第140図 梅ノ木82年1号支石墓  
※支石・撐石は旧状を留めない

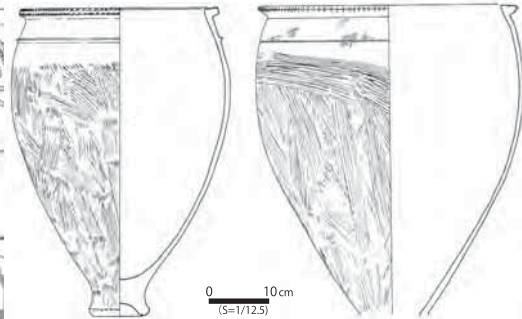


第141図 梅ノ木82年2号支石墓  
※撐石は旧状を留めない

24 たくまゆげ 託麻弓削遺跡群

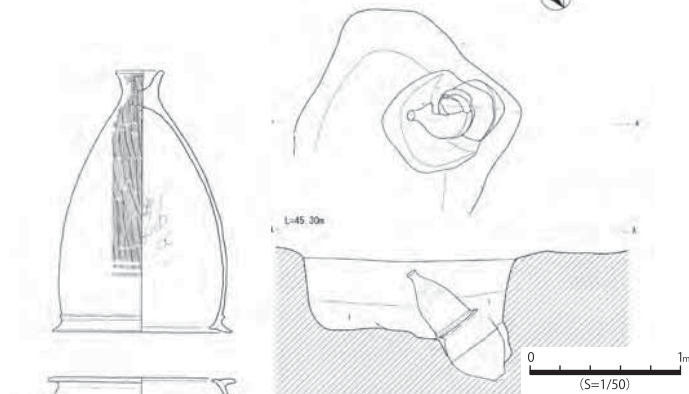


第 142 図 託麻弓削遺跡群遺跡範囲図



第 143 図 旧弓削宮原遺跡出土甕棺  
※出土位置不明

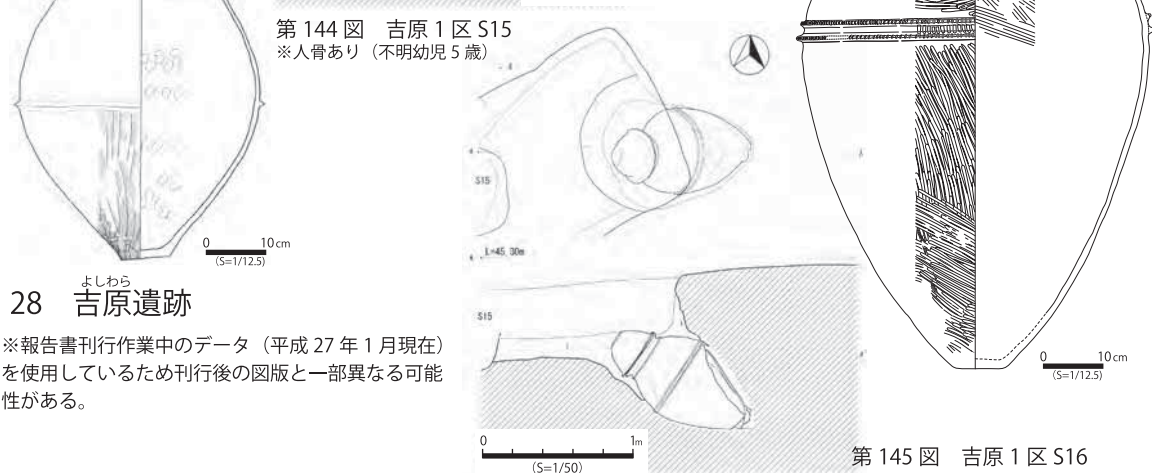
トノノマエ地区（旧弓削上古閑遺跡）  
「弥生城ノ越式の甕数個と黒髪式の土器片とが出土している。埋蔵状況は明らかでないが、完全な形で埋まっていたらしい。なお、その折、人頭大の倍位ある川原石が多数出土していたが土器や遺構に関係あるものと思われる。」（文献6）



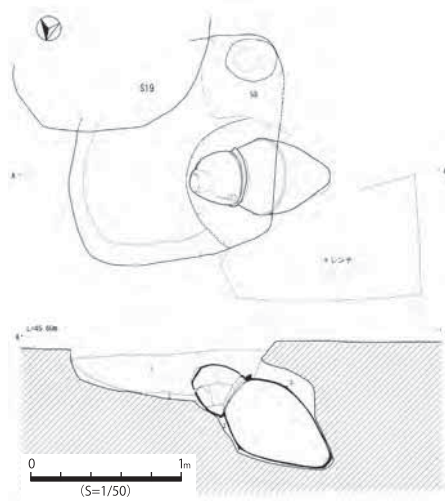
第 144 図 吉原 1 区 S15  
※人骨あり（不明幼児 5 歳）

28 よしわら 吉原遺跡

※報告書刊行作業中のデータ（平成 27 年 1 月現在）を使用しているため刊行後の図版と一部異なる可能性がある。

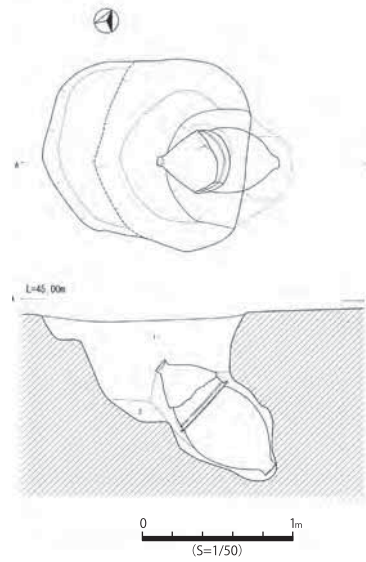
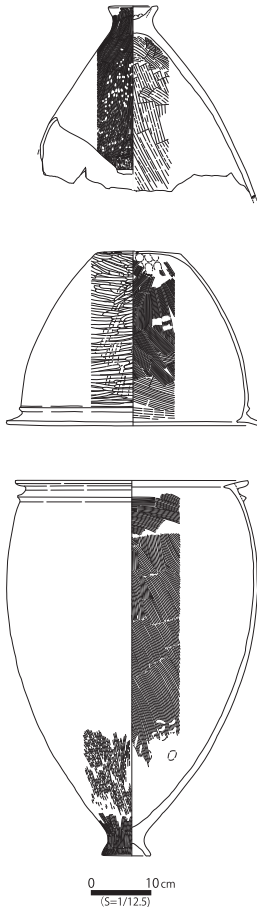
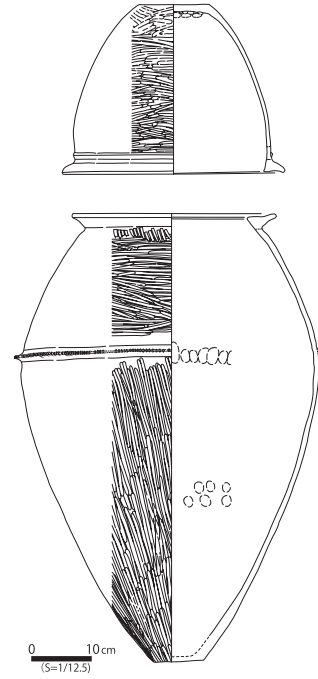


第 145 図 吉原 1 区 S16  
※人骨あり（不明幼児 4 歳）



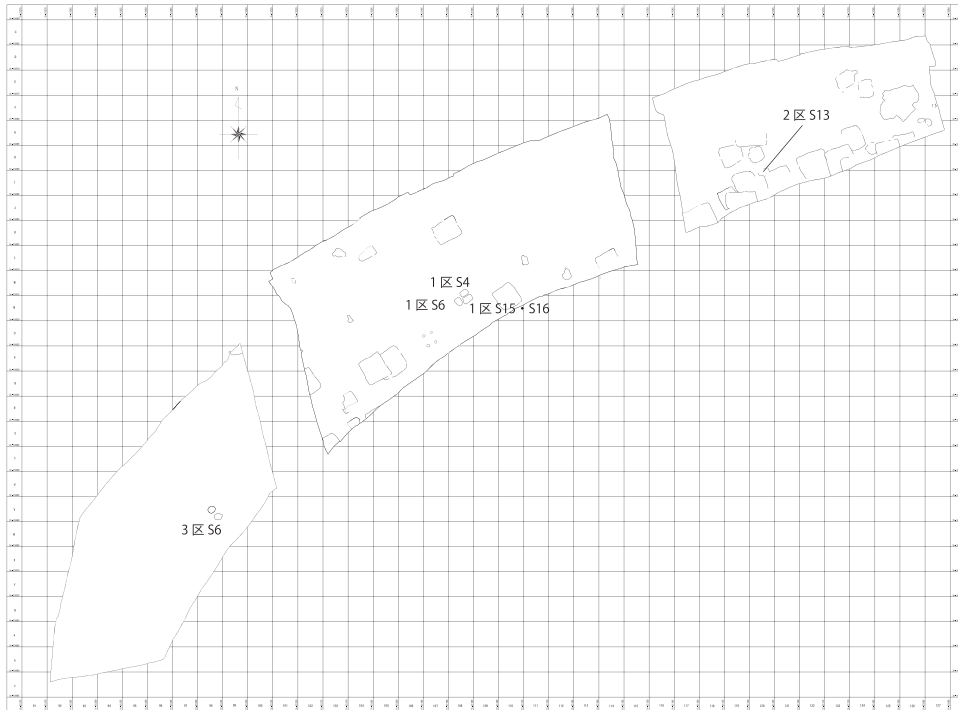
※報告書刊行前のデータ（平成27年2月現在）を使用しているため刊行後の図版と一部異なる場合がある。

第146図 吉原2区S13

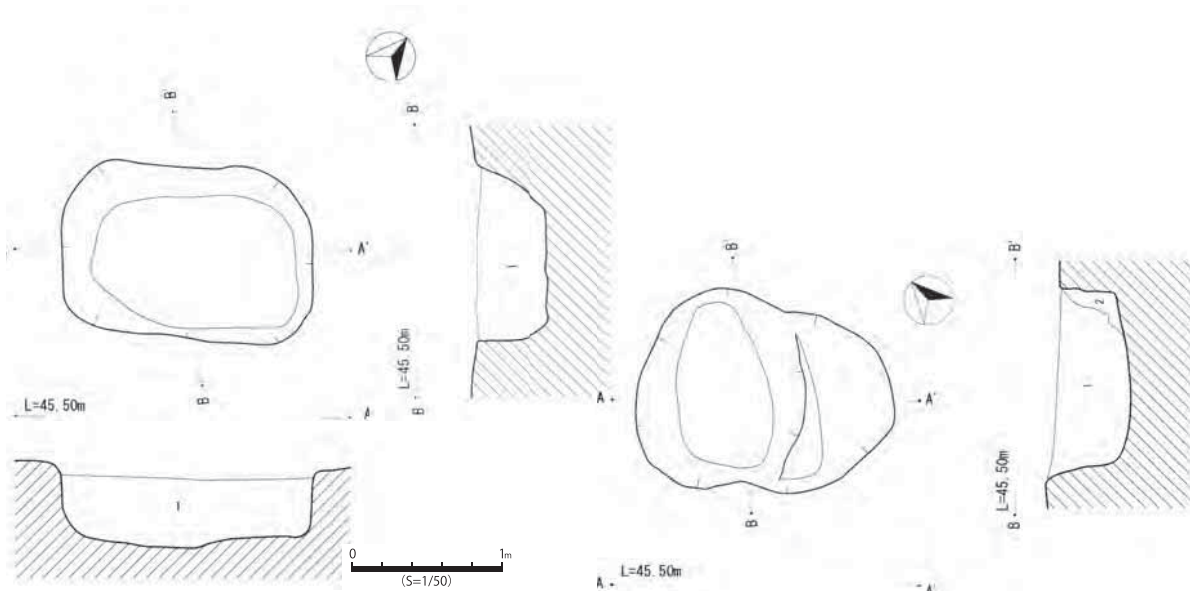


第147図 吉原3区S6  
※骨片・歯あり（幼児1.5～2歳）

※報告書刊行前のデータ（平成27年2月現在）を使用しているため刊行後の図版と一部異なる場合がある。



第 148 図 吉原遺跡弥生時代遺構配置図

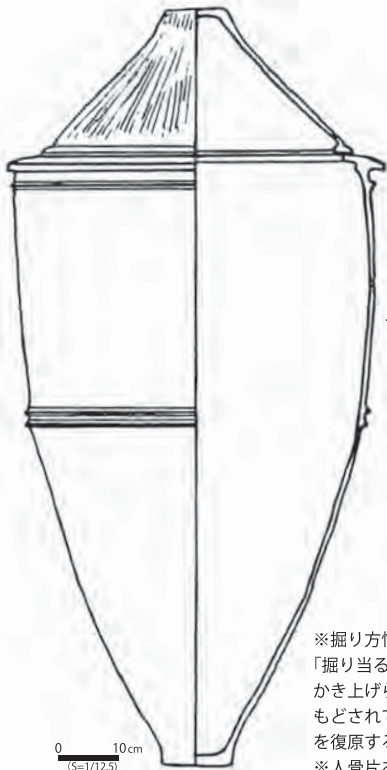


第 149 図 吉原 1 区 S4

第 150 図 吉原 1 区 S6

※報告書刊行作業中のデータ（平成 27 年 2 月現在）を使用しているため刊行後の図版と一部異なる可能性がある。

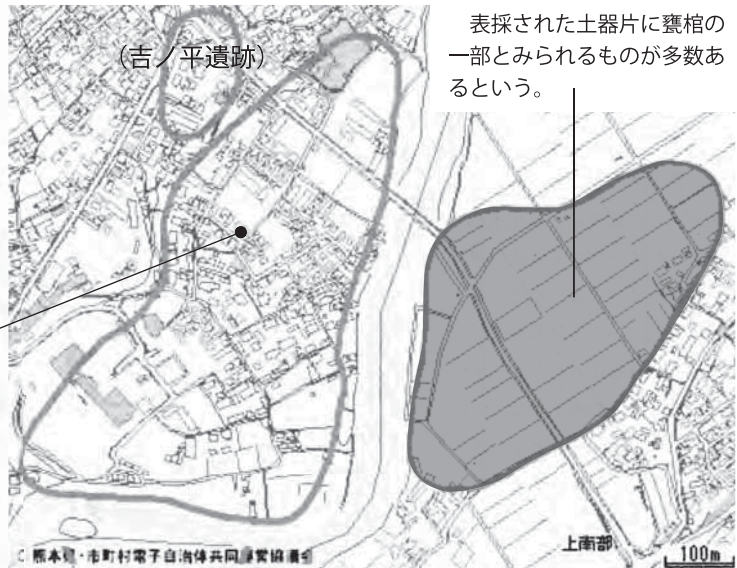
32 たけのしろ ばしろう  
竹ノ後・芭蕉遺跡



第 152 図 竹ノ後・芭蕉遺跡出土甕棺

※掘り方情報なし  
「掘り当ると同時にすべてが完全に  
かき上げられ、あとはすっかり埋め  
もどされてしまったので、出土状態  
を復元することができない。」(文献 5)  
※人骨片あり

33 かん な べ  
上南部遺跡



表採された土器片に甕棺の  
一部とみられるものが多数あ  
るといふ。

第 151 図 竹ノ後・芭蕉遺跡 (左) および上南部遺跡 (右) 範囲図

38 おう だ  
王田遺跡

「昭和 45 年 7 月には…弥生黒髪式の合せ口甕棺が深耕作業に  
よって発見されている。…遺物の包含の範囲は相当広いよう  
である。」(文献 6)

39 まき づ る  
牧鶴遺跡群

※三の宮神社の東で水道管埋設に伴う掘削工事の際、  
前期甕棺墓が数基発見された由 (識者の証言による)

「[6.26] 水害前に甕棺 8 箇が地主によって掘り出されて  
おり、全部白川に投棄されたとのことである。」  
(文献 5)

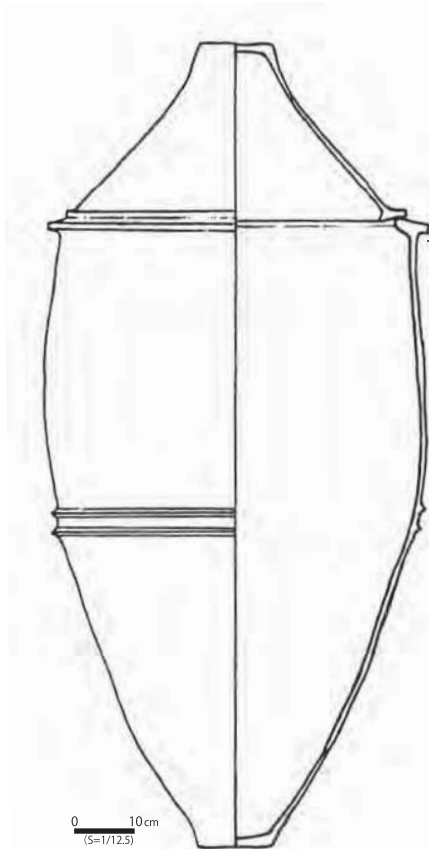
40 し も な べ  
下南部遺跡

「昭和 35 年 9 月以降…遺物が採集された。…甕棺には  
須玖式の大型鉢、突帯 2 条を胴部に有する大甕を組  
合わせた合口式の一類があつたらしく、黒髪式、高三瀧  
式と認められるものもある。これらは開田工事によ  
って破壊されたとのことである。」(文献 6)



第 153 図 王田遺跡・牧鶴遺跡群・下南部遺跡範囲図

35 さこのうえ 迫ノ上遺跡



第 155 図 迫ノ上遺跡出土甕棺

※掘り方情報なし  
〔…馬を使って耕作中、突然畠地が陥没して、馬が穴の中に落ち込んだ。…発見と同時に甕棺の破片、人骨片ともに完全に掘り上げられ、耕作中の危険を防ぐために出土地点は入念に埋められてしまったので…〕（文献 5）

※人骨あり（頭骨、下顎骨、大腿骨、骨盤？）



第 154 図 迫ノ上遺跡内甕棺出土地点および陳内上ノ園遺跡群調査区位置図

36 じんないうえのその 陳内上ノ園遺跡群

甕棺墓 2 基を検出



43 <sup>しん な べ</sup> 新南部遺跡群



第 156 図 新南部遺跡群範囲および過去の調査事例

小関原（下段）遺跡

甕棺墓 4 基

「南北約 6m、東西約 4m の地域でほぼ並列して…いずれもその長軸をほぼ東西方向にとり、上方を西側にしてすべて同程度の傾斜をもって埋置されていた。」

「開田工事により表土が削り取られたので甕棺の上に当初どれだけの覆土があったものか判らないが、1 号棺、2 号棺の上半は欠失し…」

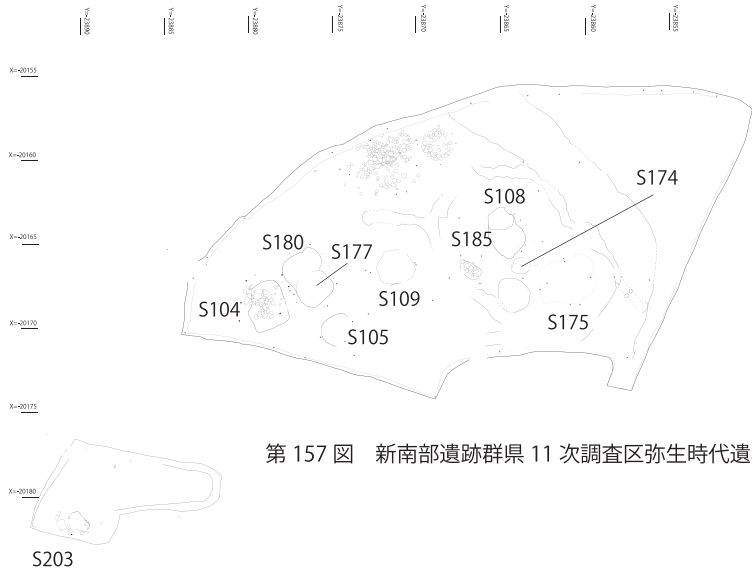
1 号棺は胴部に刻目ある突帯 1 条をもつ甕？壺形である。

2 号は口縁下に突帯 1 条がある黒髪式に類する甕で…

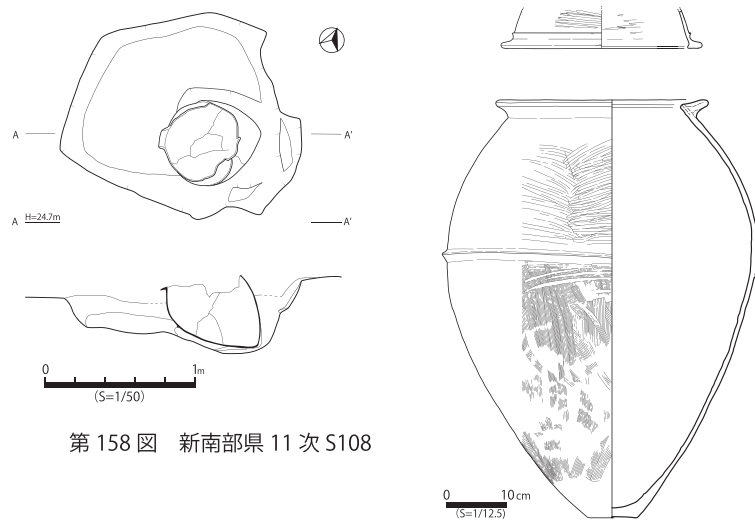
3 号は高三階式の下甕に黒髪式の甕を上にかぶせたもので、下甕内に人骨の小片が遺存していた。…

第 4 号棺は黒髪式の甕を下甕に、小型の鉢を上甕に用いたものであった。」

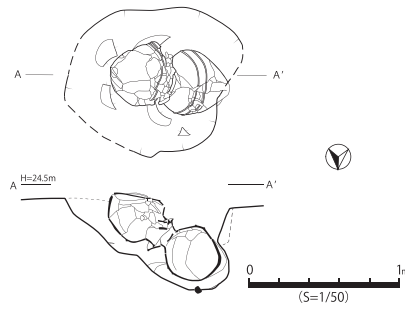
※隣接する小関原（上段）遺跡から「須玖式黒髪式に属する壺、甕類があり、その一部は甕棺らしい。」「おびただしく出土した石塊」（いずれも文献 6）



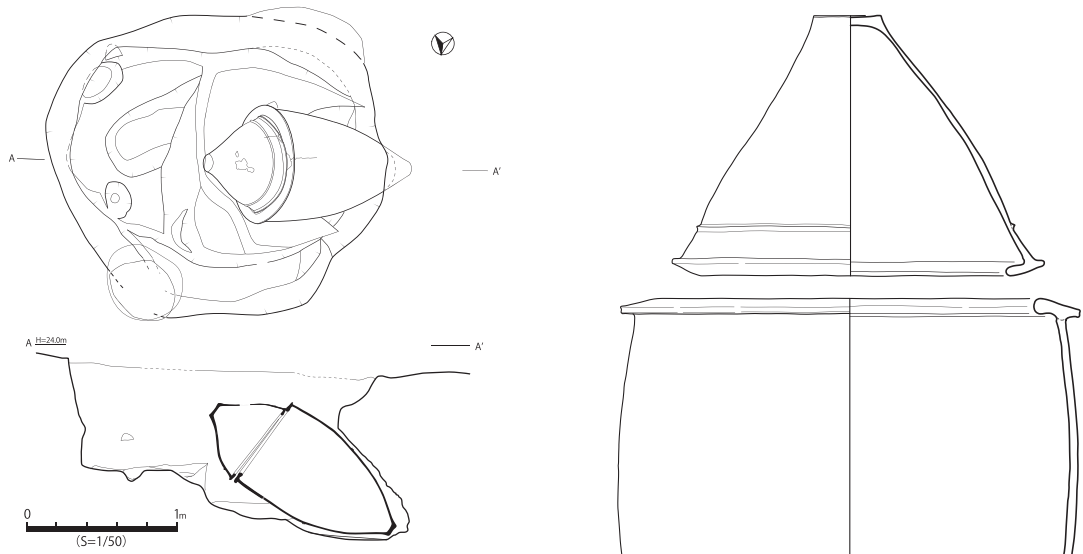
第 157 図 新南部遺跡群 11 次調査区弥生時代遺構配置図



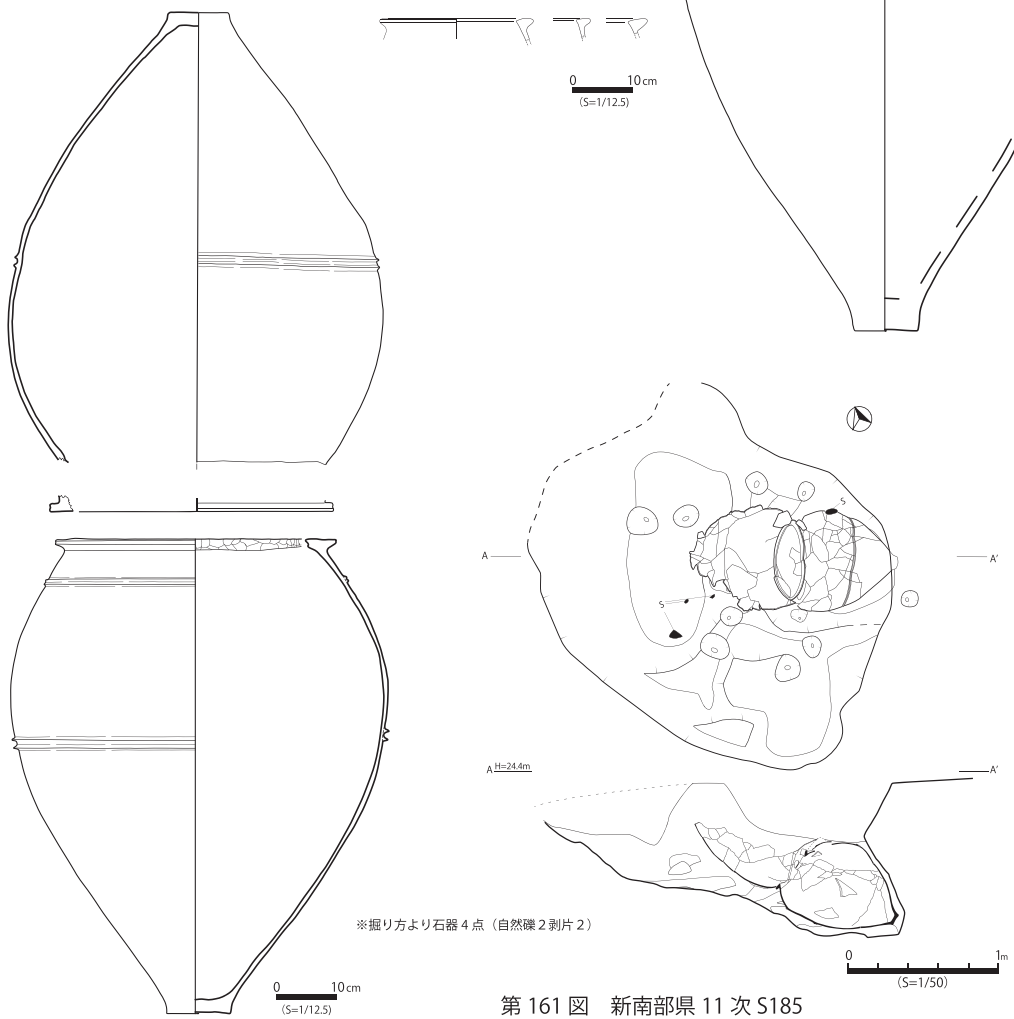
第 158 図 新南部 11 次 S108



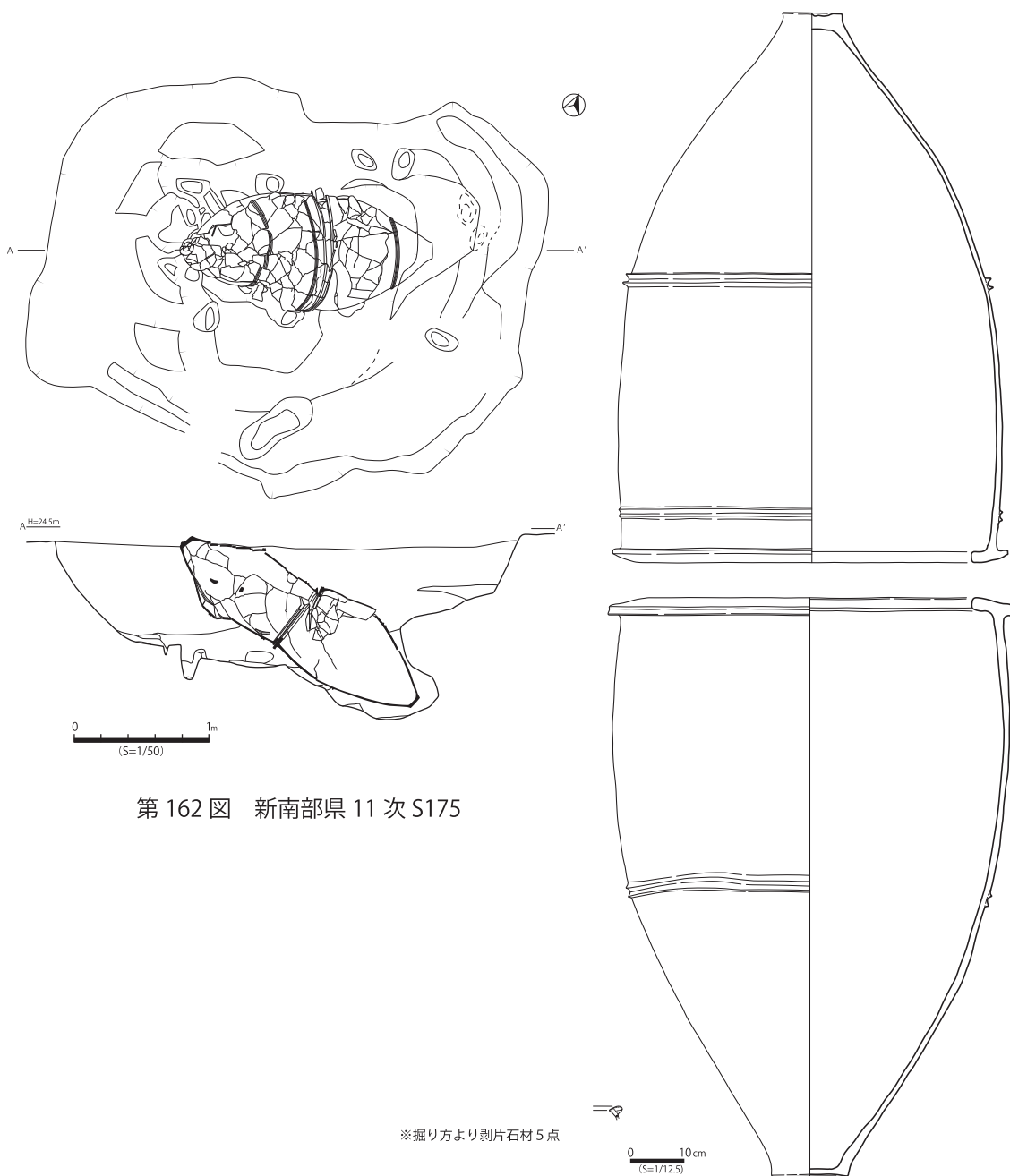
第 159 図 新南部 11 次 S174



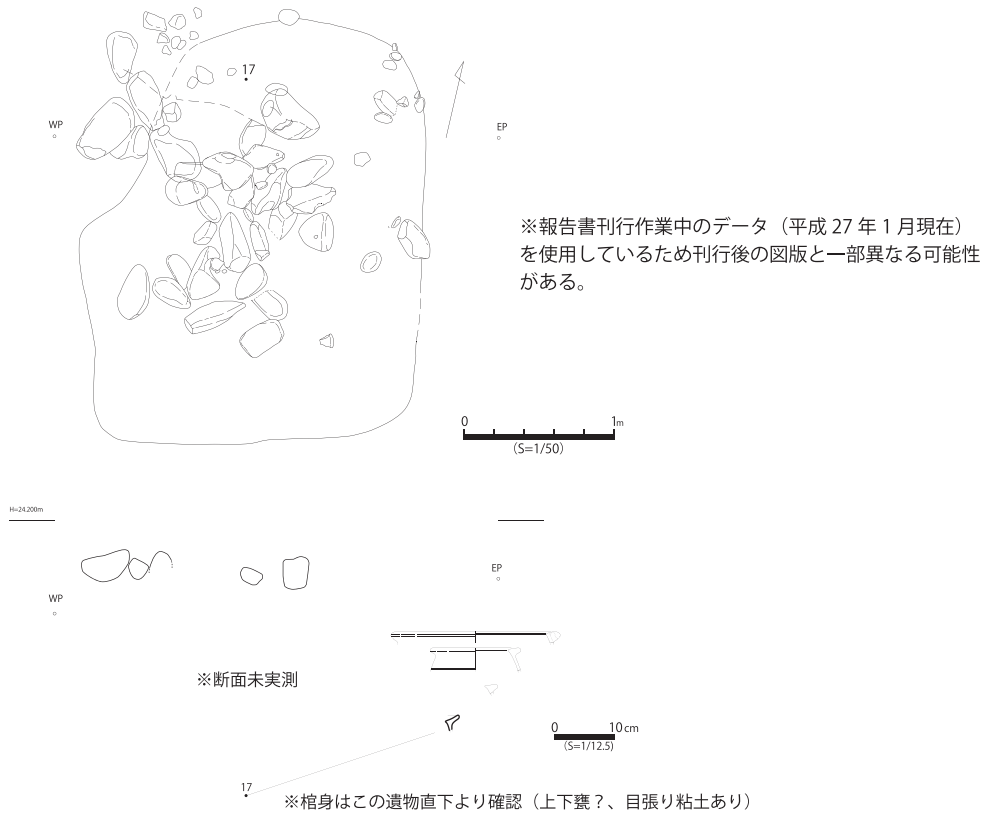
第 160 図 新南部県 11 次 S109



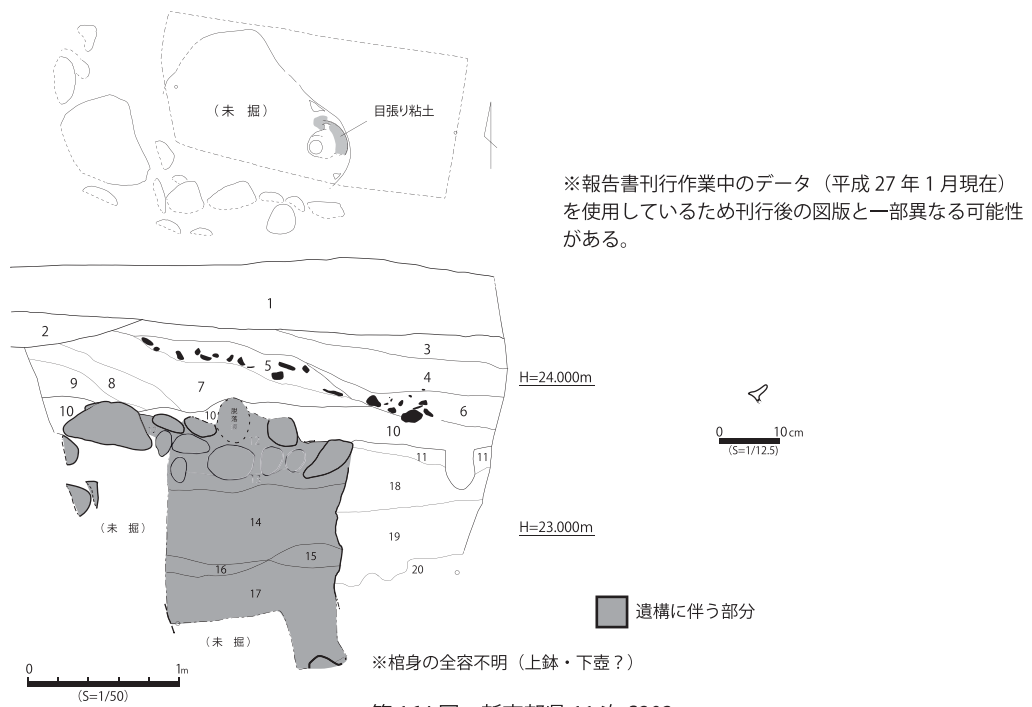
第 161 図 新南部県 11 次 S185



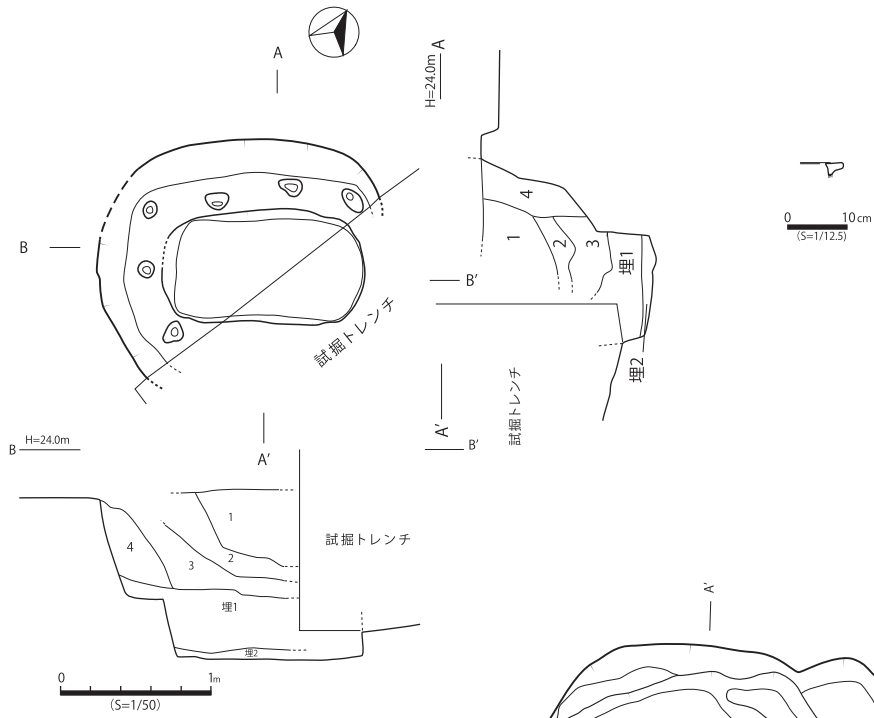
第 162 図 新南部県 11 次 S175



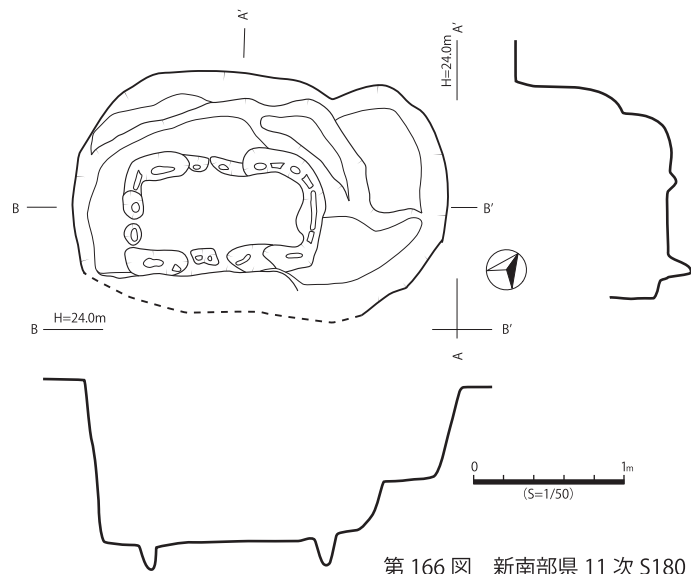
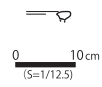
第 163 図 新南部県 11 次 S104



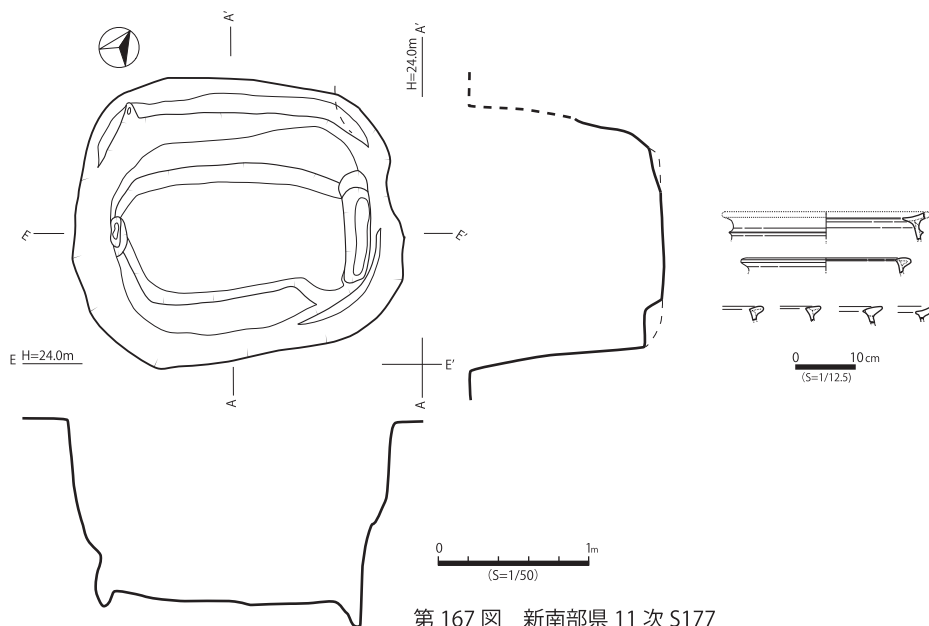
第 164 図 新南部県 11 次 S203



第 165 図 新南部県 11 次 S105



第 166 図 新南部県 11 次 S180



第 167 図 新南部県 11 次 S177

## 46 <sup>とろく</sup> 渡鹿遺跡群

### 北原甕棺（合口土器棺 2 基）

※北接する渡鹿遺跡群第 5 次調査区（熊本市）からは当該時期（中期後半）の大型壺を廃棄したとみられる土坑の検出が報告されている。

#### 北原第 1 号棺

「…地表下約 1m の所から…T 字型の断面をもつ口縁部と、胴部に断面三角形の突帯 2 条を有する大甕で、上甕、下甕とも殆ど同型同大である。その埋置法は長軸をほぼ東西にとり、傾斜は弱くほとんど水平に近い姿勢であった。」（文献 6）

#### 北原第 2 号棺

「高三瀧式の下甕と、黒髪式の上甕によって組んだもので…現地地表下 1m 余の所にあり、…」（文献 6）



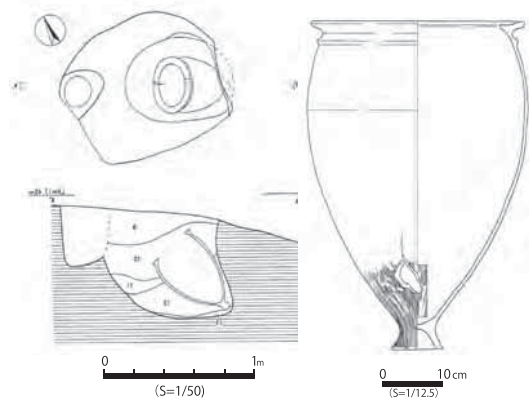
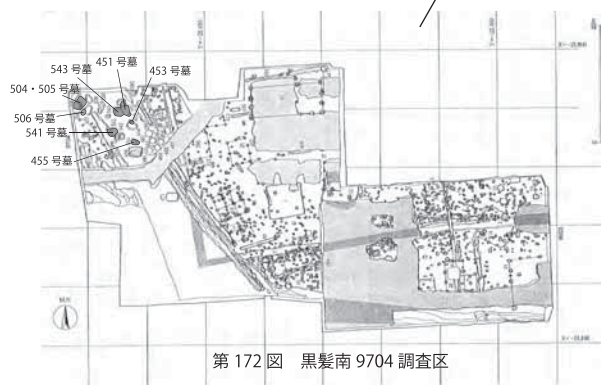
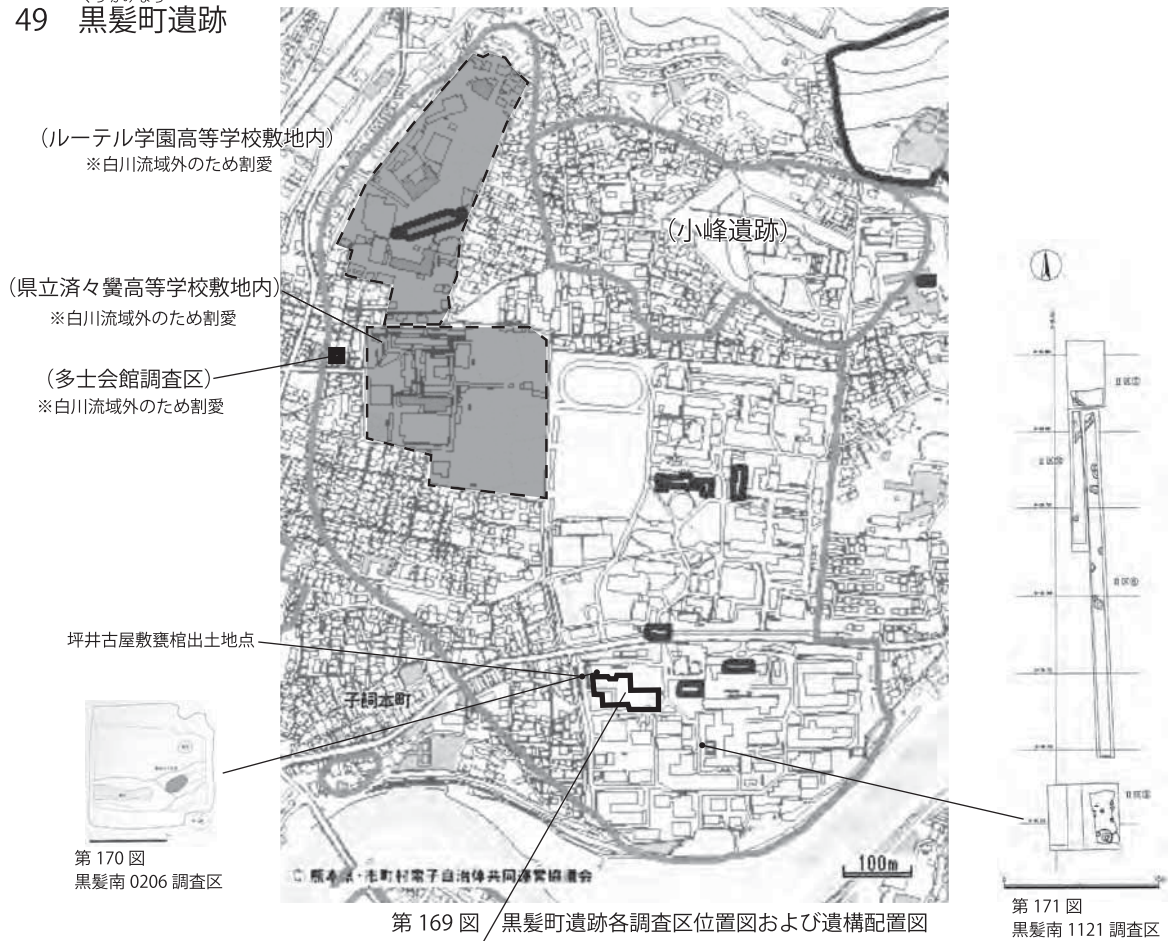
第 168 図 渡鹿遺跡群（右）および大江白川遺跡（左）調査区位置図

## 50 <sup>おお え しらかわ</sup> 大江白川遺跡（第 4 次調査区、熊本市）

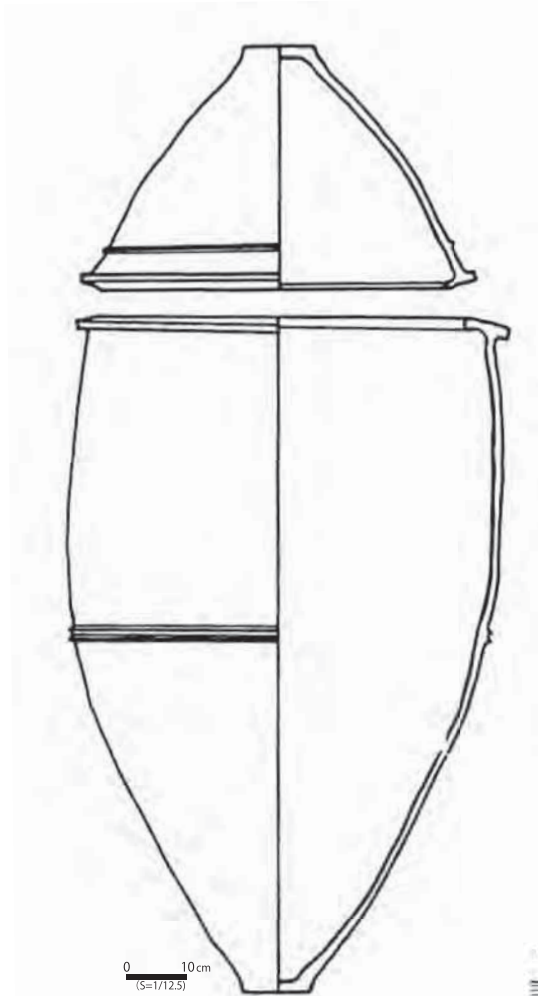
### 甕棺墓 2 基・土坑 1 基

「甕の単棺と、甕に口縁部を欠いた壺を被せ、黄褐色粘土で目貼りを行っていた。後者は小児骨が比較的良好な状態で残存していた。土坑からは黒髪式の壺と甕の口縁部片が出土している。」（文献 12）

49 黒髪町遺跡



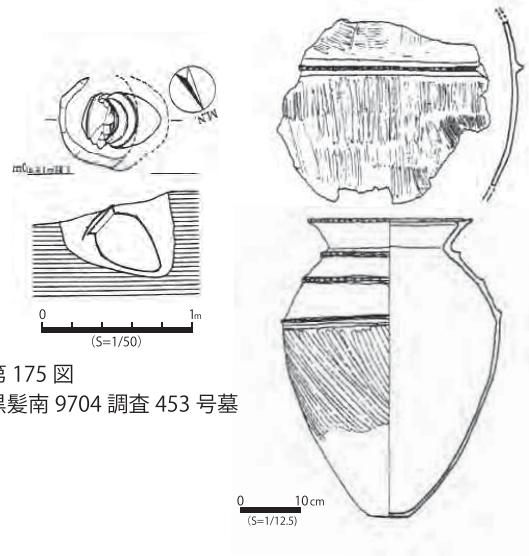




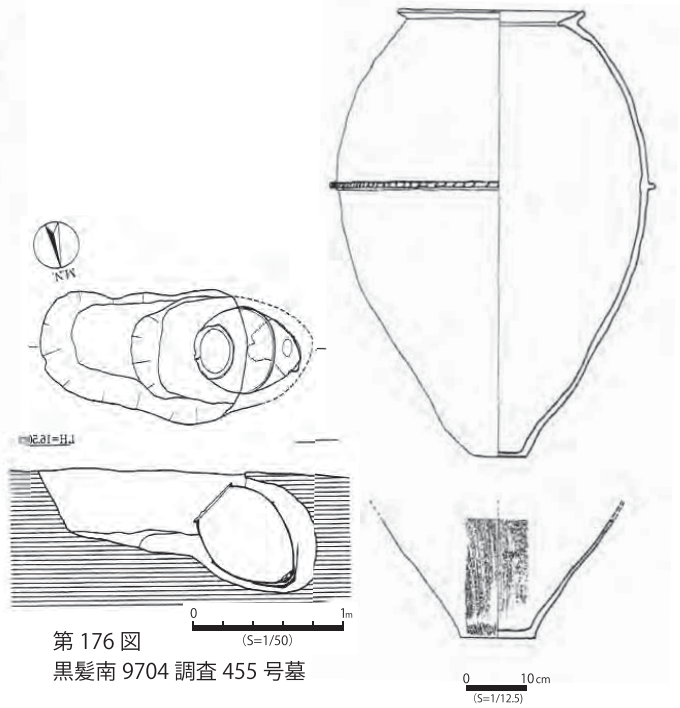
第 174 図 黒髪町坪井古屋敷出土甕棺

※「地表下約 1.5m に、口縁部を西側に向け、約 10 度の傾斜をもって埋設」(文献 5)

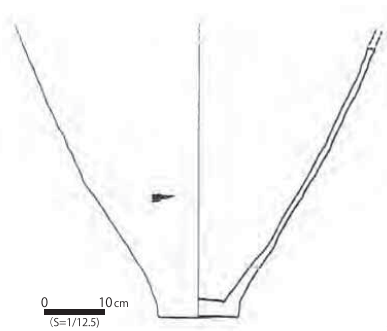
※人骨あり(「成人骨 1 体分をおさめていたが、数本の歯と一部の骨以外は、粉末化し計測にたえるものではなかった。」(文献 5))



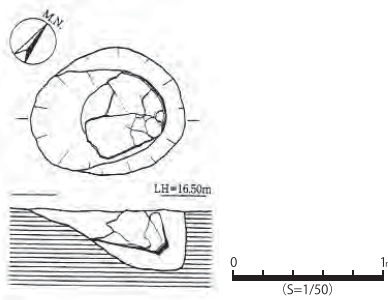
第 175 図  
黒髪南 9704 調査 453 号墓

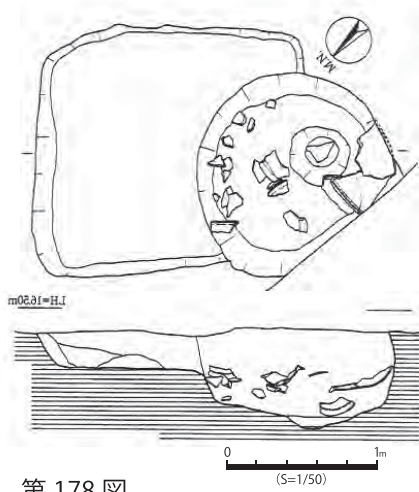


第 176 図  
黒髪南 9704 調査 455 号墓

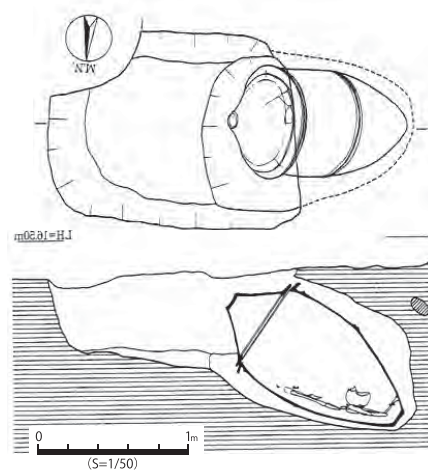
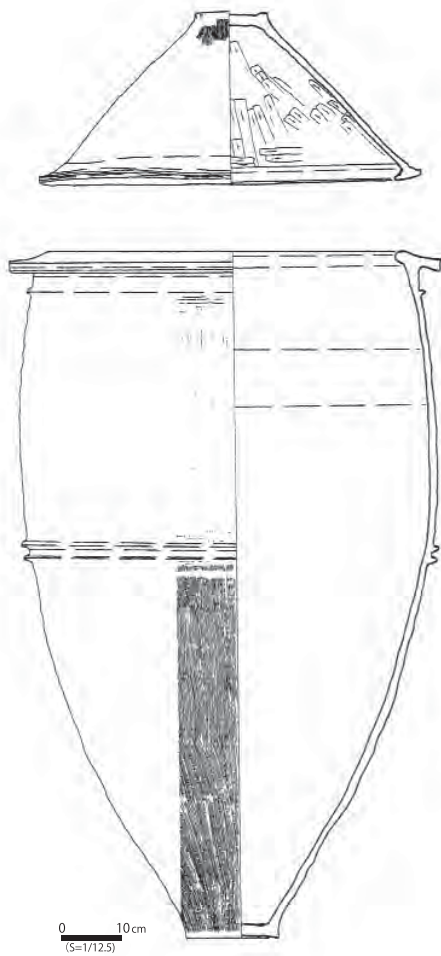
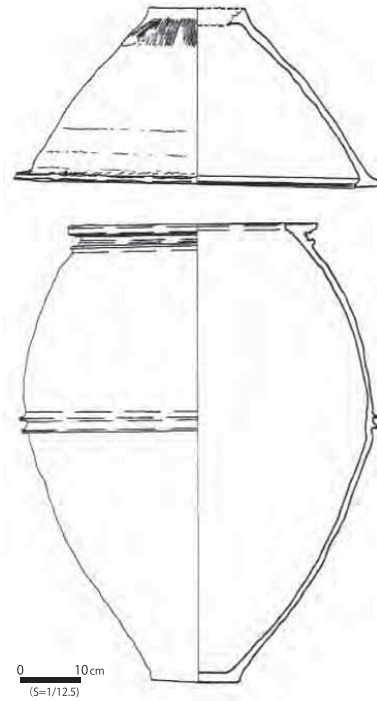


第 177 図 黒髪南 9704 調査 506 号墓

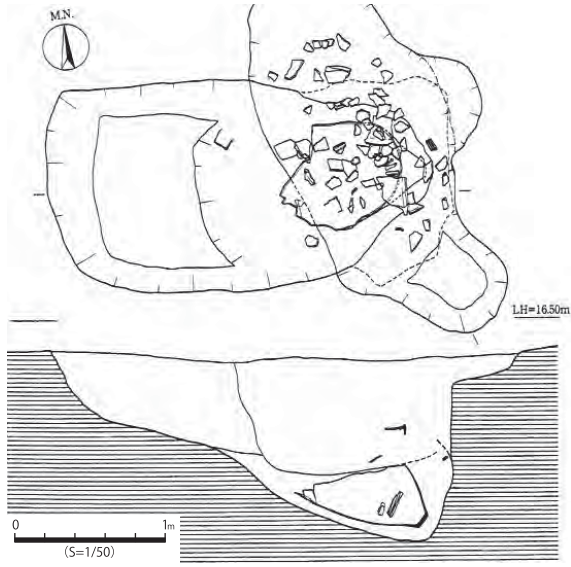




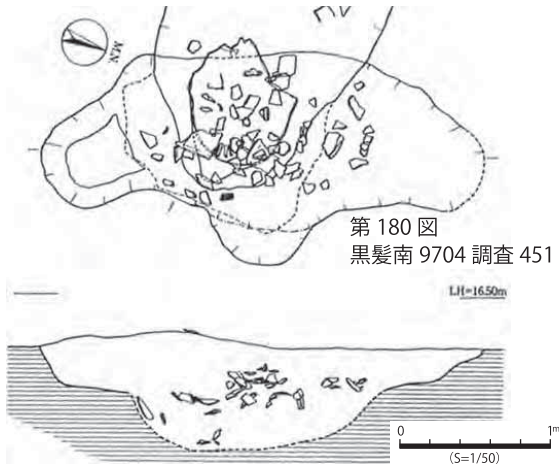
第 178 図  
黒髪南 9704 調査 504・505 号墓



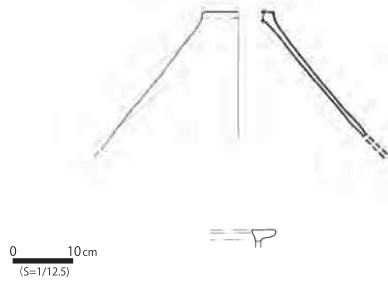
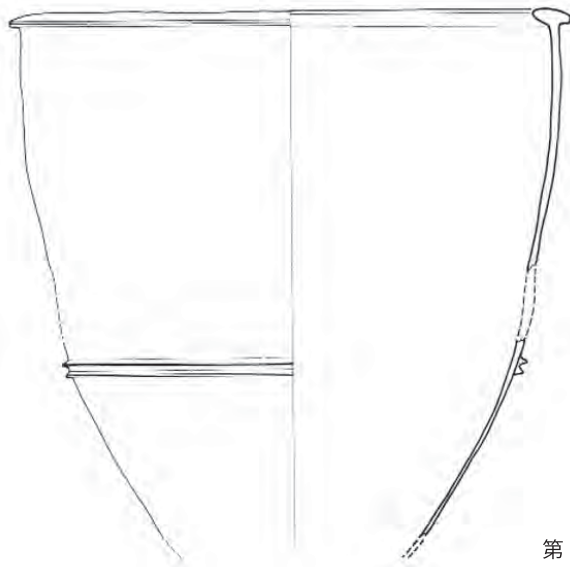
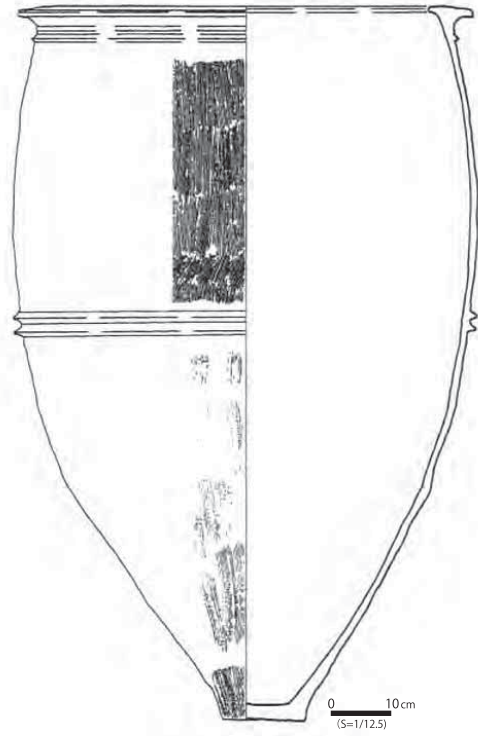
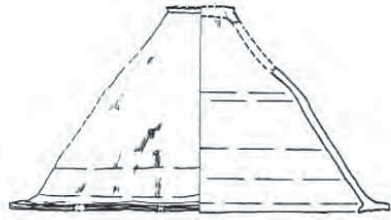
第 179 図 黒髪南 9704 調査 541 号墓



第 181 図 黒髪南 9704 調査 543 号墓



第 180 図  
黒髪南 9704 調査 451 号墓



第 182 図 黒髪南 0206 調査区内出土



## 報告書抄録

ふりがな	しんなべいせきぐん(10じ・11じ) よしわらいせき							
書名	新南部遺跡群(10次・11次) 吉原遺跡							
副書名	白川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財調査報告							
シリーズ名	熊本県文化財調査報告							
シリーズ番号	第320集							
編著者名	廣田静学・宮本 大・尾崎潔久・福田匡朗							
編集機関	熊本県教育委員会							
所在地	〒862 8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号 ☎096 383 1111(代表)							
発行年月日	2016年3月25日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんなべ いせきぐん 新南部遺跡群(10次)	くまもとけん 熊本県 くまもとしひがしく 熊本市東区 しんなべ5ちようめ 新南部5丁目	43201	322	32°	130°	2013. 07. 22	4652㎡	河川改修 工事
				49′	44′	～		
				15. 77″	56. 69″	2014. 03. 17		
しんなべ いせきぐん 新南部遺跡群(11次)	くまもとけん 熊本県 くまもとしひがしく 熊本市東区 しんなべ1ちようめ 新南部1丁目	43201	322	32°	130°	2013. 07. 30	430㎡	河川改修 工事
				49′	44′	～		
				4. 54″	42. 35″	2014. 03. 24	43㎡	
よしわらいせき 吉原遺跡	くまもとけん 熊本県 くまもとしひがしく 熊本市東区 よしわらまちとのだ 吉原町殿田	43201	100	32°	130°	2013. 07. 29	2293㎡	河川改修 工事
				50′	46′	～		
				50. 44″	24. 42″	2014. 03. 25	1553㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
新南部遺跡群(10次)	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代	竪穴建物81軒	土製品 縄文土器、弥生土器 土師器、土製支脚 石製品 石斧、円盤形石斧 砥石、蔽石	縄文時代の竪穴建物11軒 弥生時代の竪穴建物63軒 古墳時代の竪穴建物 7 軒			
新南部遺跡群(11次)	墓域	弥生時代	甕棺墓7基 集石3基 木棺墓3基 溝状遺構1条 道路状遺構2条	土製品 弥生土器、土師器 石製品 石鏃、石匙、砥石	標石をもつ甕棺墓2基			
吉原遺跡	集落跡 墓域	弥生時代 古墳時代	竪穴建物46軒 甕棺墓4基 土壇墓2基	土製品 縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器 石製品 打製石斧、磨製石斧 砥石、石鏃、石匙	弥生時代の竪穴建物35軒 古墳時代の竪穴建物7軒 時期不明の竪穴建物4軒			
要約	新南部遺跡群10次の調査では、縄文時代後期の竪穴建物が11軒、弥生時代中期～後期の竪穴建物が63軒、古墳時代後期の竪穴建物が7軒検出された。それぞれの時代の竪穴建物群は建て替えてを繰り返し集落を形成していたと考えられる。白川中流域の低平地に立地した数少ない集落の事例である。							
	新南部遺跡群11次の弥生時代の遺構は、甕棺墓7基、うち2基は標石をもつ甕棺墓、集石3基(下部構造は甕棺の可能性がある)、木棺墓3基、溝状遺構1条、道路状遺構2条が確認され、この調査区全体が墓域であったと考えられる。							
	吉原遺跡の調査では、弥生時代の竪穴建物35軒、甕棺墓4基、土壇墓2基、古墳時代の竪穴建物7軒、時期不明4軒が検出された。特に甕棺墓からは、子供の人骨の一部が見つかっており、竪穴建物と墓域の関係が分かった事例である。							

熊本県文化財調査報告 第320集

## 新南部遺跡群(10・11次)

### 吉原遺跡

白川河川激甚災害特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

発行年月日	平成28年3月25日
編集・発行	熊本県教育委員会
	〒862 8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号
印刷	株式会社河田印刷
	〒861 4101 熊本市南区近見8丁目5 105



発 行 者：熊本県教育委員会  
所 属：教育庁教育総務局文化課  
発行年度：平成 27 年度



この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第320集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：新南部遺跡群（10次・11次）吉原遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦2017年10月5日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>